

メガネ(兄)

アルピ交通事務局

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲で超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

パスワードはメロンのロックシードで変身する仮面ライダー

前略、前世の母へ。

小説家になろうを勧めてどっぷりとハマらせた私が言うのもなんですが、異世界転生というのは本当にあつたようです。

まあ、異世界と言うよりは二次元です。ワールドトリガーという作品で、色々と転生特典を貰いました。主人公の兄という重大そうな立場に生まれました。

目次

第12話
第11話
第10話
第9話
第8話
第7話
第6話
第5話
第4話
第3話
第2話
第1話

158 140 125 111 91 81 69 54 36 24 10 1

第25話
第24話
第23話
第22話
第21話
第20話
第19話
第18話
第17話
第16話
第15話
第14話
第13話

368 353 340 326 309 289 273 260 242 222 204 189 173

第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話

595 581 554 527 511 495 478 450 435 420 407 395 382

第51話 第50話
(番外編)
第49話 第48話 第47話 第46話 第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話

842 827 809 785 763 742 718 701 677 661 644 625 608

第64話 第63話 第62話 第61話 第60話 第59話 第58話 第57話 第56話 第55話 第54話 第53話 第52話

108910721054103810181003 983 964 940 922 904 885 864

第77話 第76話 第75話 第74話 第73話 7 2話 7 1話 第70話 第69話 第68話 第67話 第66話 第65話

(番外編国語編)
(番外編開校編)

1338132413061289127212491224120411871171115011301108

第90話
第89話
第88話
第87話
第86話
第85話
第84話
第83話
82話
第81話
第80話
第79話
第78話

(番外編数学理科編)

1555154315241510148914731455143614211405138913721355

第103話
第102話
第101話
第100話
第99話
第98話
第97話
第96話
第95話
第94話
第93話
第92話
第91話

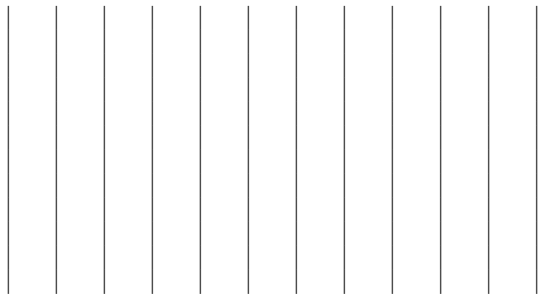
(英語社会編)

(I F 統)

(I F)

1776176217441728171116951677166316411623160715891571

第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第
115 114 113 112 111 110 109 108 107 106 105 104
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



197419581939192319091896187718611838182418081792

第1話

「沢目中学出身、三雲です。よろしくお願いします」

今日から二度目の高校生。

とはいえ、通う高校に知り合いはいない。

家が市と市の境目にあつて小学校は隣の蓮乃辺市、中学校は今いる三門市に通うことになっていたので、中学受験したので蓮乃辺市の中学校に通っていた。

「はい、次」

そして高校は三門市立第一高等学校に、普通校を受験した。

進学校である六穎館高等学校でもよかつたが、受験戦争に参加して常に満点で絵に描いた様に良い人になり良い会社に就職！なんてのをする為に勉強しているんじゃないので三門市立第一高等学校にした。

決して受験戦争に敗北したからワンランク下の高校に行ったとかそういう感じのアレじゃない。人生を楽しみたいんだ、私は。

「三輪秀次です、よろしくお願いします」

自分の自己紹介を終えると、今度は後ろの席の男性が立ち上がり挨拶する。

周りにはあれがあの三輪秀次とかカツコいいとかいう視線を向けているが三輪は気にせず席に座り、次の番号の生徒が挨拶をする。特に変な奴とかDQNはクラスにはおらず、至つて真面目そうなものの集まりだ。

今日は入学式と軽い説明だけで教科書配布とかそういう細々したのは明日から来週から弁当が必要になるなど、何処の高校でもありそうな説明を教師から受け、その日は終わる。

「三雲くん、三輪くん、この後みんなでカラオケに行くけどどうかな？」

「悪いが、この後、防衛任務がある」

「そっかー、三雲くんは？」

「私はカラオケは一人派だから、パスで」

初日なので皆で交流をと陽キャっぽい人が言うが、パスする。

カラオケに行つて、変なバリピのノリに付き合わされるのは嫌だし、一人カラオケの方がいい。ネカフェのカラオケとか良い文明だぞ。

断り方がアレだったのか若干引かれるも無理に誘ってくることはなく、他にも部活動に入る予定の生徒とか五月蠅いの苦手な奴等は断り10名ぐらいのグループでカラオケに向かう。

私も家に帰ろうと自転車置き場に向かおうとするのだが、三輪がテクテクと歩いて帰

ろうとするのを見て、立ち止まる。

「防衛任務があるんじゃないやなかったのか？」

「……カラオケとかああいう雰囲気ของกลุ่มはどうにも苦手なんだ」

「ああ、それはよく分かる。パリピとかタピるとかインスタ蠅とか私もよく分からんし、どうも苦手だ」

「タピる？インスタ蠅？」

「一部のブームのこと、分からないなら忘れていい」

ああいう一過性の周りに迷惑をかける系のブームとか、リズム感だけでネタが面白くないお笑い芸人とかなにが面白いのか楽しいのかよく分からない。枯れてる方なんだろうか？いやでも、ブームは飽きてしまうからブームなんだし、枯れてはいない。

「防衛任務と嘘についてよかったのか？」

「どちらにせよ、今日は本部に行くつもり……初対面の人間になにを言っているんだ、俺は」

「部外者だから、近くないから話せることも世の中には沢山ある。SNSで拡散とかそういうのはしない」

「そうか……じゃあ、また明日」

「ああ、また明日」

なんとも言えない距離感がある私と三輪。

校門前で分けられると自転車に乗って私は家へと帰る。帰って、とつととグータラして
いたい。

「ただいま」

「おかえりなさい。早かったわね」

「何処もそんなものだよ。」

帰る途中も、別の高校の制服を着ている一年達が多かったし……あ、来週からちゃん
とした授業で弁当がはじまるって」

「分かったわ」

家に帰り、無駄に若々しい母に今日あった出来事を簡潔に話す。

友達と遊んでくるとかそういうのをしなさいよと真顔で毒を吐かれるが、カラオケは
基本的に一人で行く。映画も一人で行く。そういう人種なんだよ、母さん。

「そう言えば、部活動はどうするの?」

「入らない……学校の部活動は、色々と面倒。」

部活動を優先して下手に成績を落とすのもアレだし……体育会系の部活動、朝練十週
7日って話らしいし」

「ブラックね。でも、そうでもしないと市立がお金を掛けている全寮制の高校には勝て

ないんじゃないかしら？」

「確かに練習は嘘をつかないって言うけど、効率とかもある。

ただでさえ地球温暖化がどうのこうので毎年暑くなつて熱中症患者が増えてるんだ。ここぞという時に無茶をさせるのも大事だけど、ここぞという時に休ませることも知らない化石的なのはNG」

今の時代、努力するのは当たり前のこと。

才能とかも大事だが、環境とか引き際も大事。猪突猛進よりも程よく引ける人間じゃないといけないと思う。逃げるのはダメとかそういうのを刷り込んだ末に退職代行とか生まれまし。

「あ、兄さんおかえり」

「ただいま、修」

「高校、どうだった？」

「普通、じゃないな。」

ボーダーの隊員、しかも凄い有名な奴が後ろの席だったよ……なんとというか貫禄があった」

二階の自分の部屋に行こうとすると、私が帰って来たことに気づいた今はまだだが色々と凄くなる弟こと修が顔を出す。

ボーダーの隊員がクラスメイトで雰囲気違っていた。言うことはこれぐらいしかないものの、本当に貫禄があるぞ。隈取りがパンダにしか見えなかった。

ボーダーについて言うとなんとも言えない顔をする修。余計な事を言ってしまったなど少し反省し、自分の部屋に戻って、ジャージへと着替えて昼御飯を食べ、花粉症対策にマスクをつけてランニングに出る。

三門市には立ち入り禁止区域があるので、蓮乃辺市方面を5km、往復で10km走り家に帰ると腕立て伏せと腹筋100回、やっていることはワンパンマンのサイタマそのものだが、私は禿げていない。

「残された時間は一年半か」

今更だが私は転生者である。そうでしょうと言われればそうだが、とにかく私も転生者だ。

ワールドトリガーの主人公の一人である三雲修の二つ歳が上の兄に生まれた。そのせいか両親の年齢が十二歳になって四十過ぎているが、見た目は相変わらずなので特に問題ない。強いて言うなら、四十過ぎだろうと言うツツコミで色々と飛んでくるぐらいだ。本当にバイオレンスな母さんであり、正月に悪乗りで若作りの秘訣を聞いた時は死にかけた。

「……………うん、無理だな」

原作開始までは約一年半ある。

原作と深く関わっていく原作前の出来事は来年に起きる。どうにかしよう！なんて思っても、どうせいと言うんだ。

転生特典も基本的に変なものばかりで、一応トリガーということになっている戦う武器も持っている。だが、それだけで凄い発明品作れるとかそんなじゃない。

「余計な事を考えずに、時が来るのを待つか」

今更、なにを考えているんだと頭を振って頭の中から原作について消す。

私というイレギュラーもいる、更にはここは既に物語でなく現実なのに三輪秀次に会ったから余計な事を考えてしまった。

ゲームをやるうとしていたが、余計な事を考えてしまいやる気を無くしてしまったので代わりにスケッチブックを取り出して、漫画を描いていく。

「これこの前の続きじゃないの？」
「!？」

漫画を描くのに夢中で母さんが部屋に入ってきてる事に気付かなかった。

母さんはスケッチブックに描いてある漫画をジッと見つめており、何処か不満そうにしている。って——

「読んだのか？」

「ええ、中々に面白かったわよ。」

体格に力、足の速さと肉体的に恵まれた性格がちよつと酷い主人公が学校と自身の知名度を上げる為に色々なスポーツの大会に出るっていうの。王道的なスポコンとは色々と違つてて読み応えがあつたわ」

「や、やメロおお!!」

なになが悲しくて誰にも見せるつもりが無いスケッチブックの漫画を見られなければならぬんだ!

確かに色々とセコい事をしてきたが、母親に痛い妄想を見られるほどの罰を受けるほどじゃないだろう。私がなにをしたと言うんだ。嫌なことから逃げる努力をしまくつたけども、そこまでのものじゃない。

「大丈夫よ。貴方の漫画、困つたらエッチな描写をするとかそういうの無いじゃない」

「息子の黒歴史を語らないで、お願いだから。そしてなにをしに来たの!」

「そうだったわ……入学したから夕飯なにが良い?なんでも良いはやめて。外食でもなんでも良いわよ?」

言っていることが矛盾している様に見える、矛盾していない母さん。

凄いなーこの人は、眉一つ動かさずに夕飯を普通に聞きながら人のスケッチブックを讀んでる。

ジャンプラブコメみたいにヒロイン増えていったり色々な出来事が起きるけども、主人公は既に彼女持ちで彼女とのみイチャつくキツパリ泥沼ラブコメを描いてるから、読まないでくれないか？

「焼肉で」

「じゃあ、寿寿苑ね。銀行にお金を下ろしに行かないと」

母さんはそう言うのと部屋を出ていった。

私は今夜は焼肉だと喜びたかったが喜べない。あの人、何事もなくスツと人のスケッチブック何冊か持っていた。弟が買ってきた少年漫画を借りるぐらいのノリで持っていた。

スケッチダンスのボツスンとスタンドの事を知ってテンションが上がり上がりまくっている岸辺露伴を足した感じの手先の器用さと文字とか絵を描く速度が速いという地味な転生特典だが物凄く便利だが……黒歴史ができた。

「今度、金庫買おう」

母親に見られたくないものを見られたので、涙が出た。

前世と今生を合わせれば二十歳はとつくの昔に過ぎているおっさんだろう、大人らしくカッコいいところを見せろとか大人らしくしろとか言われても無理。涙しか出なかった。そして直ぐに金庫をノートパソコンでポチって買った。

第2話

「はい、二人一組作って」

「おーい、秀次。一緒に体力測定しようぜ！」

「陽介、話を聞いていたのか？」

高校生になり一週間が経過し、今日から授業がはじまる。

とりあえず、月曜日の一時間目から体育つてもう何かの罰ゲームじゃないのかと私は思う。

昼前後の体育、最後の時間の体育、一時間目からの体育、どれもこれも憂鬱になる時間割。特に昼前は面倒臭い。

「聞いてたよ。今日は50m走とハンドボール投げと握力だろ？」

「そうじゃない。クラスの奴と二人一組のペアだ」

「……居るのか、ペア？」

「三雲、この馬鹿を放ってさっさとやるぞ」

そんなこんなで最初は体力測定。

二人一組のペアを作れという滅びの呪文を担当が放つが、案外あっさりと決まる。席

が前で、ボーダー隊員だからと変に距離感を置いてこない私が三輪とペアを組むことに。

「秀次にボーダー以外で友人が」

「三輪、お前は普段どんなことをしているんだ？」

「ただ普通にしているに決まっているだろう」

「で、お前誰？」

空気を読めないのか、このカチューシャは。

今更な感があることを聞いてきたカチューシャに私は自己紹介をし、秀次をよろしく頼むぜ！と無駄に良い笑顔でサムズアップして自分のクラスに戻っていった。

「あ、ペアにあぶれた」

「ザマーミロ」

そこそこの悪口を言ったせいか、カチューシャもとい米屋はペアにあぶれた。

クラスの男子の数が元々奇数だったから仕方ないが、コミュ力とか高そうな奴がボツチになるとは……いや、ボツチじゃないが。

「そういえば、三輪は運動は出来る方なのか？」

ボーダーのトリガーで変身したら運動能力上がるらしいが、それにかまけたり調子に乗ったりして物凄く太った人が居るとかどうとか噂で聞いたが」

「体の方は、鍛えている。」

ただ変身しても足が早くなるとかそんなので、根本的な動きは生身の肉体で動かないといけない……ただ、長距離走辺りなら、陽介の方が上だ。あいつは運動神経は良い方……運動神経だけは」

「どうした？」

「ボーダーの推薦枠が無かったら、今頃陽介は……」

そういえば、ファンブックかなにかで見たボーダー隊員の成績、あいつは下から数えて直ぐの成績の悪さだったな。

三輪が遠い目をしているのでこれ以上はなにも言わない。聞かないでおこう。

「秀次、50m走で勝負しようぜ！ 負けた方がジューズを奢りで！」

「今、終わったところだ」

「なに!？」

しかし、米屋のテンション高いな。

パリピみたいなウザいノリじゃないからまだ良いんだが、凄くググイつと距離を詰めてくるな。

「今から三雲の番だ」

「そう言うことだ……因みにだが三輪は」

「おっと、そいつは言うな！」

オレが走り終えてから、見せ合わないと面白くねえだろ」

「まあ、そうだな」

「三雲、お前の番だ」

「あ、ちよほどオレの番でもあるじゃん。ついでだから三雲も勝負しようぜ！」

「構わんぞ……ジューズ一本、だったな」

「昼のジューズは貰ったぜ！」

男子高校生らしい会話を繰り広げる私達。

とここで三輪、「おい、俺はするつもりは無い！」とか言わないのか？自信があるのか
乗り気だな。

「勝てば秀次と三雲から、二本貰える……一本は水として」

「位置について、よーい……」

パンつと銃声が鳴ると同時に私達は同時に走り出す。

「貰ったああああ!!」

「と、思っただろ？」

「え、つちよ、マジ!?!」

銃声と共に走り出す私達。

米屋が若干だがフライング気味な気もするのだが、そんな事は直ぐに関係なくなる。

最初にリードしていた米屋を直ぐに私が逆転し、そのまま一気に抜き去っていき私が先に50mを走り抜いた。

「お前、早いっ、て……」

「勝てないと分かっている勝負に挑むほど私は馬鹿じゃない。メロンソーダは貰ったぞ」

「くっそ……秀次、お前は何秒だ!?!」

「7秒ちようどだ」

「よっし!オレの勝ち……?」

三輪には勝ったと喜ぶ米屋だが、測定をしている教師が腕を交差して×を作っている。

フライング気味が原因の様で、若干怪しいのもう一度となり走らされる米屋。二度目の全力疾走と1回目のフライングで怯えたのか出だしが遅くなり、タイムを大幅に落としてしまう。

「因みに私は6, 4秒だ。約束通りジュースを……メロンソーダを奢れ」

「俺はコーヒード」

この学校、自販機にメロンソーダが置いてあるが家の近所のと比べて30円高いか

ら、これは儲けた。

三輪もありがたく頂いたと笑みを浮かべるのだがグヌヌと負けたことが悔しいのか引き下がろうとしない米屋。

「こうなったら、全種目で勝負だ!」

「私は構わないが、三輪はどうする?」

「俺はパスする……陽介、最後の総合で勝負とか駄々を捏ねるなよ」

「オレは小学生か!!」

「似たようなものだ」

三輪の毒舌が、米屋にピンポイントに当たっているな。

しかし、その辺は全くといって気にしない米屋。とりあえずは全種目で勝負することになったが、約束通りメロンソーダは奢って貰う。その辺について言うと分かっているよと普通に頷いてくれた。よかった、このメロンソーダ、30円高いから買うのを躊躇ってしまっただよな。

「よくし、じゃあ全種目の得点で競って……勝ったら賞品なににする?」

「ジュースで良いだろう」

「いやいや、流石に全種目でジュースはショボいだろう。ラーメンとかどうだ?」

「ラーメン……トッピング含めて1500円以内でなら手を打とう」

「おっしーじゃあ、それで決まりだー！」

ジユースに続き、ラーメンを賭けて米屋と勝負することになった。

とはいえ、今日一日で全ての種目をするわけではない。来週の月曜日辺りで決着がつく。特に最後のシャトルランとかやる前に大差をつけなければならぬ。いや、本当にシャトルランキツイ。中学の時も125回越えたら直ぐに足止めてるし。

「せーのっ、つてマジかよ……全敗じゃねえか。」

ハンドボール投げも握力もどっちも自信あつたのによ……つて、握力88つてゴリラかよ!!」

「なにを言いだすかと思えば……ゴリラの握力は500だ」

「ゴリラ、スゲええええ!!」

「陽介、五月蠅い」

「あ、悪い……持久走とシャトルランで巻き返してやる」

「悪いが、全勝させて貰う。そして玉狛のところにあるラーメンを食いに行く」

ネギとチャーシュー追加トッピングの大盛りのチャーシュー麺を米屋に奢らせよう。

「玉狛……」

「ああ、三門市の玉狛にあるラーメン屋。」

家からだど距離がそれなりにあるから、中々に行く機会がなくてな……チャーシュー

麵のチャーシューとネギトッピング、餃子一人前、頼んだぞ」

「おい、それぜってーに1500円を超えてるだろう!!」

「安心しろ……二人で行かないといけないからどちらにせよ、お前も頼まないといけないから1500円を超える」

「あ、それもそうか……ん?」

「三輪、次の授業は……」

「世界史だ。」

とはいえ、最初の時間だから先生の自己紹介と軽い挨拶だろうな」

「そうか……早く教室に戻って着替えるか」

論点をずらしたことに気付いたものの、まだ一時間目が終わっただけで授業は続く。

二時間目は予想通り世界史担当の教師の挨拶と一学期中間は何処までやるかなんかの簡単な説明と簡易的な小テストを受ける。残りの3、4も大体そんな感じの授業で、お昼時がやって来る。

「お〜い、約束の時間だぜ」

「別に放課後でも良いんだが……」

「いや、それが今日は防衛任務があつてさ。こう言うのは早い内にやっておかないと、後々面倒じゃん」

米屋が乗り込んできた。

まあ、休み時間ごとに乗り込んでくるのでまたかこいつはといった顔で周りからは見られている。

米屋は財布を軽く投げてバシツと掴んでカッコをつけるが、こいつは臨時収入があつたとかそういうんじやなくて普通に私に負けたからであり、カッコよくもならない。むしろ自分で挑んでおいて、負けた敗北者である。

しかし、奢る奢らないの金関係の話は早い内に終わらせた方がいいのは事実なので私はメロンソーダが置いてある自販機に足を運ぶ。

「あゝクツソ、中々出ねえな」

「なにやってんだ、お前？」

「ここの自販機、当たりが出るタイプだけど中々出ないんだよ」

「へへ。あ、メロンソーダは売り切れじゃないぞ」

「ストツプだ米屋」

同学年のボーダー隊員こと出水がコーラを買っていて、何事もなく普通に会話する米屋。

財布を開いてお金を入れようとするので、そこで手を止める。当たりつき自販機で普通にお金を入れて購入なんて、勿体ない。

「えつと……」

「こいつ、秀次と同じクラスの三雲。」

一時間目の体育の50m走で秀次と三人で誰が一番早いかつてなつて……やあ、見事に負けたぜ」

「そうか。おれは出水公平だ。三雲、大丈夫だったか？こいつ、いきなり勝負を挑んできただろ？」

「問題ない。今、絶賛勝負中で勝ち越している」

「勝負中つて、更に挑んだのか!？」

「おう！玉狛付近のラーメン屋1500円分の奢りを賭けてな！

早く走るとかは秀次や三雲が上だったけど、長座対前屈とか反復なら絶対に負けないから次は勝ち越す」

「自分でフラグを建てやがつて……三雲、さっきからなにしてるんだ？」

「しいて言うならば、乱数調整だ」

「？」

米屋や出水にお金を入れさせず、自販機のボタンをポチポチと押す。

時折おつりレバーを引いたり、おつりレバーを引きながらボタンを押したりとお金を入れている意味の分からない事を繰り返しており、二人はなにやってるんだこいつ？

とおかしな顔をする。

「これでよし。米屋、メロンソーダ」

「なにがよしなんだ？」

「見ていれば分かる」

さつきまでやっていた事に疑問を持ちながらも、米屋はお金を入れてメロンソーダを購入した。

「おお、当たった！」

「2本目も貰いだ！」

メロンソーダが落ちてくると同時にルーレットがスタート。

7777と4桁の7が並んで大当たりし、米屋がコーヒーを押す前に2本目のメロンソーダを購入した。

「あ、ズリい！」

それで秀次のコーヒーを買おうと考えたのに」

「甘いぞ、米屋。」

私なんのために当たりが出るように調整をしたと思っっているんだ。この2本目のメロンソーダも私のものだ。

この奢りの一本目から生まれた2本目は謂わばおまけ。私がありがたく頂く」

「くっそ……」

「やってること、どっちもケチ臭えな」

なんとも言え。

ともかく、メロンソーダ2本分の代金が浮いたのは良かった。1本目のメロンソーダは勝利して手に入れた物なので、旨い。勝利の美ジューズを嘔み締めながら私達は教室へと戻る。

「すごいや、さっきのボタンとかレバーとか弄くつてたけど当たりと関係があるのか？」
「自販機も何だかんだで機械で出来てるからな。」

確率とかそういうのをボタンを弄ったりして、ちよつと調整をしていたんだ」

「へく……どうやんの？」

「……知らん」

「いやいや、知らないもなにもお前はさっきしてただろ？」

予想通りと言うべきか、自販機で確実に当たりを出す方法を聞いてきた米屋。
やり方について聞かれても知らんとしか私は言えない。

「大丈夫だって、誰にも言わねえからさ！」

「あ、じゃあおれにも教えてくれよ！」

「そういうんじゃない、本当によく分からない。」

自販機の種類とか残っている飲み物とか私が買う前に買った飲み物がなんなのとか、ともかくにも一回ごとにやり方が違うんだ」

今回は比較的早く済んだからよかった。

酷いときだと5分ぐらい時間がかかるときもあるから1分で済ませることが出来てよかった。

「ん、じゃあどうやって分かったんだ？」

「此処の学校のは、珍しいタイプの自販機じゃなくてついさつきオレがコーラを買ってたから分かったんじゃないのか？」

「……秘密だ」

米屋と出水の質問を、私は答えない。

なんでそんな事が出来るかと聞かれれば、答えることは出来る。だが、それを答えれば怪しまれる。サイドエフェクトを私利私欲の為に使っているのだから。

「秘密って、教えてくれよ。唐揚げも奢るからさ」

「お前、それ負ける前提で話してないか？炒飯、奢るからおれも」

「絶対に教えない……言ったところで、信じないだろう」

「……」

因みにだが私のサイドエフェクトはトリコのココノ能力、つまるところ転生特典であ

第3話

『次、130』

米屋との些細な事が切つ掛けによりはじまった体力測定勝負。

長座対前屈も反復横跳びも立ち幅跳びは圧勝で持久走はギリギリの接戦で勝ち抜いて最後はシャトルラン。

流星に持久走からのシャトルランなんて空気読めない事を学校側はしない。

「米屋、とつとと敗北しろ!!成績的には10点満点なんだ!と言うよりは、お前はもう負け確定だろう!」

「まだだ!オレはこんなところで終わる男じゃねえ!」

シャトルランで生き残つたのは私と米屋の二人。

あ、三輪は私がやる前に記録を測つて81回目で終わった。結構悔しがっていたが、反復横跳びとかの時間制限あるやつは米屋より上だからそこまで悔しがることじゃない。

それよりもとつと足を止めろ、米屋。もう敗けは決まっているんだから、最後ぐらい私に花を持たせてくれ。全勝させてくれ。

「オレは皆の、皆の思いを背負っているんだ！」

「なに!？」

「具体的に言えば、小佐野、柚宇さん、光、出水、熊谷の思いをオレは背負っている！」
「無駄にカッコいい事を言つて……」

「どういう風の吹き回しだ。と言うよりは、出水以外は会つたことないボーダー隊員だな。」

「そしてお前は秀次の思いを背負っている！」

「待て、まさか、それは!!」

チラリと三輪を見るとペコリと一礼して申し訳なさそうな顔をする。

「思いを背負つていると言うのは、コイツら人で賭けていたのか？飯を奢るかどうかの些細な事を。」

「今、挙げた人物は出水と三輪以外は顔を知らないぞ！」

「問題ない、全員ボーダー隊員だからな！」

「お前、覚えておけ……あ、ちょうど良い復讐があつたな」

米屋へに効果は抜群の復讐を思い付いた。

「だが、その前に勝たなければならぬ。勝つて最後を綺麗に締めて終わりたい。そして三輪がどうしてそんな賭けに乗つたのか聞いておきたい。」

125回走り終えた時点で足を止めておけばよかったと止めなくてよかったという二つの矛盾した感情が混じり合いながらも米屋との一騎討ちに挑み、178回目、単純計算で3560m走りきったところで勝負がついた。

「諦めるな！お前なら200いける！」

だけど、このバカは別のところでも賭けてやがった。

なんだこいつ。本当になんなんだ、賭けグルイなのか、それとも単純に馬鹿なのか？余りにもムカつくので199回目で歩いてやった。というか、とつくにチャイム鳴ってる。

「……すまない」

「いや、三輪はまだ良い。

出水もまあ、ギリセーフだ……柚宇と小佐野と光と熊谷って誰なんだ？」

「ボーダー隊員だ。

国近柚宇先輩は一学年上で、後は他のクラスの隊員だ……陽介の奴、高校生になったから携帯代金自分で払えとか色々と言われた上に親に財布を管理されているらしくて、色々節約しようと言われようと言われよう……俺は聞かれて、お前が勝つと言っただけなんだ。すまん」

「なんだろう、容易に想像が出来る」

三輪に悪意の様なものは存在していないのは、サイドエフエクトが無くても分かる。とりあえず、米屋には結構ガチ目の復讐をさせてもらう。三輪には悪いが、その罪悪感を利用して貰う。

「いや、負けた負けた。完敗だぜ、まったく」

「割とあつさり負けを認めるんだな」

「まーな。」

約束通り味自慢のラーメンを奢るよ……：ゴールデンウィーク最終日で良いか？」

「いや、普通に昭和の日があるだろうが」

「……：そうだな」

ロクな事を考えていないな、こいつ。

授業はとづくに終わっており、そそくさと急ぎ足で教室へと向かう私達。四時間目の授業でよかったと思いつながら、教室について着替えて即座に弁当を取り出して食べる。因みにだが、弁当は昔懐かしの長方形で厚みのあるドカ弁だ。

「聞いたぞ、お前全勝したみたいだな」

弁当を食べ終え、出すもん出し終えて次の授業は選択科目（二時間連続）

米屋と三輪は習字を取っており、私と出水は芸術を、音楽を取っている知り合いは知らない。米屋は昼休み中に来ないなと思っていたら出水達に敗北した事を報告しに

行っていたようで、出水に会うと早々にその事について言われた。

「出水……は、まだ構わない。」

だが、他の顔も知らない奴等と賭けをするのはやめてくれないか？」

「それに関しては悪かった。」

けどまあ、お前本当にスゴいよな。冷静に考えたら、体力テスト、男子で学年一位じゃないのか？」

「10点満点だが、ハンドボール投げとか立ち幅跳びは野球部とか陸上部に負けた」

「球技系はな……つて、足の早さは勝つてんのかよ！」

「学年一位だが、体育祭のクラス対抗とか学年対抗のリレーには絶対に出ない。」

後、部活動にも入らない。体育会系のノリとかもう本当に勘弁してほしい。私はテストで100点満点を取るんじゃないやなくて90点を満点とし80〜70で細々とするのが好きだから」

「世の中には70点すら取れないかわいそうな頭の人達も居るんだ。謝れ」

割と普通の会話をしているのに何処か遠い目をしだした出水。

ハッキリと米屋と言わないところを見ると、出水の知り合いには頭が残念すぎる人が多いんだろうな。本当に誰とは言わないが。

「アルファベットがさ、D、A、N、G、E、Rつて書いてあったらどう読む？」

「やめろ、それ以上は聞きたくない」

「なんで、なんでダンガーなんだよ……」

「……中間、大丈夫なのか？」

「世界史が怪しい」

「世界史はメソポタミアとかの四大文明の本当に初期中の初期だぞ？」

「どうもそっち系は苦手なんだよ。」

防衛任務とかで授業を休まないといけなから、やり方さえ覚えておけば良い数学と

か理科の方がな……ノート、貸してくれ」

「構わないが、米屋には貸すなよ。」

三輪にもチラツと言ったが、今回の一件の仕返しにノートを貸さないし、テスト対策で泣きついてきても見捨てるようにと言っておいた」

別にガチギレするほどの案件じゃないが、知らないところでそんな事をされていたらそれはそれで腹立つ。

なのでアイツの一番の弱点をつく仕返しをする。罪悪感に苦しむ三輪には申し訳ないと思っはいたんだが、その事について話すと割とあっさり承諾。三輪も三輪で米屋の成績の悪さに関して困っており、高1の一学期の中間の赤点を回避出来るぐらいにはしてほしいと遠い目をしていた。どれだけ頭が悪いのだろうか。

「まあ、ボーダー内でもワースト5だから一度ぐらい痛い目に遭わないと……いや、大丈夫かそれ？」

「出水……口を動かすのは良いが、絵を早く描くんだ。後、ゴールデンウィーク辺りで泣きつくと思うぞ」

お喋りはこれぐらいにしておこう。

喋り過ぎて絵の描く速度が遅くなっている出水。私は先週の一時間目で終わったが、出水というか他はまだ終わっていない。

「お前が、お前が早すぎるんだよ。」

動物の絵を描く授業なのに、なんで25分で終わるんだよ……一発OKで、描いた絵が刺青の雉って」

「雉じゃない、朱雀だ」

動物の絵を四時間フルに使って完成させる予定だが、30分あれば大抵の絵は描ける。

刺青っぽい感じの朱雀を25分で描き終えて提出して終えた。後ろの方にある動物の図鑑とか描き方の本とかを一切使わずに、黙々と描いて終わったから割と暇である。もう一枚描かないかとか、コンクールに出さないかとか言われていたが、出すかそんなものに。漫画はともかく絵の評論家はなんか嫌いなんだ。

「ところで、お前はさっきからなにを描いているんだ？」

「きのこの山代表のキノコちゃんとかけのこの里代表のミСТАКЕНОКОの激闘。

ミСТАКЕНОКОは禁断の兵器、SAORIIYOSHIDAを導入しキノコちゃんを滅ぼそうとする。そんな時、すぎのこ村のスギちゃんが自らを犠牲にして闘いを食い止める。

傷ついたキノコちゃんとミСТАКЕНОКО、失ったものの大きさに気付いて手と手を取り合おうとした瞬間、ブルボン王朝から現れし7人の刺客、ルマンド、ロリータ、エリーゼ、リエール、ロール、ルーベラ、サンドが現れた……とこまでだな」

「とりあえず、ブルボン王朝の王様の名前がアルフォートなのはよくわかった」

流星にそれは誰でも分かるはずだろう。

永遠に終わらない戦争をするんじゃないやねえよと言いたげな顔をするが、ブルボン王朝は平和なんだ。オリジナルアソートという詰め合わせが存在しているから。きのこことたけのこも似たようなのあるが、見なかったことにする。

「ねえ、ちよつといいい？」

最終的にはポテトチップスと税の値上げに潰されるオチにしようかなと考えていると、女子が声を掛けてきた。

顔は知っているが全くといって関わったことのない別のクラスの女子。出水はお！

という顔をしている。

「熊谷じゃん、どうした？」

「先生が三雲くんが暇だから見てもらえって。絵を一つ一つ処理するの大変みたい」

「私は暇じゃない、考えているんだ。」

ブルボン王朝は年々税を上げていき、不必要な新たなものの発明の為に軍備縮小しルマンド達の装備品が少なくなる。

最終的には変わらぬ10円の雑魚どもであつたうまい棒が全てを滅ぼすか、ポテトチップスには勝てなかったおにするか悩んでる」

「どこにツツコミを入れれば良いわけ？」

「大丈夫だ。こいつ、こう言う変なことをサラツと言う変な奴だからさ」

「で、具体的になにをしろと？」

「あ、話はちゃんと聞いてくれるのね」

暇じゃないが決して手が空いていない訳じゃない。

スケッチブックを渡されて修正すれば良いところがあるのか、なにが足りないのかと聞いてきた。熊谷だけに熊の絵を描いたらしいが

「……テディベアにしか見えない」

「うっ、やっぱり？」

「劇画チックじゃないから、毛を少なくする。

目を黒丸だけで終わらせないようにして、若干白目の部分を作る。で、綺麗な丸じゃなくてちよつとボコツとするだけで良い」

描き直しはせずに、別のページでお手本を描く。

後はまあ、熊だけを描かずに森とかを描いて如何にも熊ですよと言うのをアピール。最悪、鮭を出しておけばどうにかなる。

「熊谷だったか？」

「なに？」

「米屋から聞いたんだが、賭けていたな」

「それは……ごめんなさい。なんか巻き込まれたのよ……同学年で落ち着いてるの、進学校組と三輪くんだけで」

「え、おれは含まれてないのか!？」

「あんたはかなりノリノリだったじゃない。」

まあ、結果的に負けてよかったと思うわ……本当にごめんなさいね」

「だったら、米屋への制裁を手伝ってくれ。具体的にはだな……という感じで頼む」

「一番効果ありそうね、それ……ついだから、他の子達にも言うておくわ!」

サムズアップで割とノリノリの熊谷。

徐々に徐々に米屋中間包囲網が作られていくが、巡りめぐって米屋の元に種が戻ってくるだけである。と言うよりは、高校一年の中間テストで赤点を取らないように頑張れば良いだけだ。赤点回避のみに集中して勉強さえすれば、とこてん形式で忘れるように勉強しておけば赤点はちゃんと回避できるぞ。

「ところで、出水」

「どうした？」

「なんか……物凄く面倒な事が起きるぞ」

「もうとつくに起きてるでしょ？」

「いや、そうじゃない。」

来月辺りにすごい面倒なのを押し付けられるぞ、お前」

転生特典ことサイドエフェクトのココの能力。オンオフ効かないのが難点だが、今出水から凄く面倒なオーラが出てる。

出水自体が面倒なことになるのでなく、出水に面倒なことが押し付けられる。まあ、大体なんなのか分かるがそれ以上は言わないでおく。既に余計な事を言っているが、これはこれで私なりのアピール……本当に面倒くさい事をしまくってるな、私。潔く、キツパリと言ったら直ぐに終わることなのに……。

「……まさか、三雲くんって」

「ストップ、熊谷……一応は守秘義務があるし、影浦さんみたいな可能性がある」
「……どうかしたか？」

私の発言を聞いて、サイドエフェクトを持っているんじゃないのかと考える熊谷。

聞こうとするのだがサイドエフェクトはボーダーが世間に公表していない事の一つでもあるので出水は止める。

「いや……具体的ににはなにか起きるんだ？」

「なんか面倒なことを押し付けられる」

「いやだから、その面倒なことってのを知りたいんだよ」

「……いや、そんなもん分かるわけないだろう」

具体的になにか起きるかは知っているが、この能力で分かることは出水に凄く面倒なのを押し付けられる。

私のサイドエフェクトで分かるのはそれだけで、具体的な原因までは分からない。それにココと違って的中率は74%でハズレる時はハズレる。だが米屋が赤点をとる未来は確定している。

第4話

「今日は昼は要らないから」

4月ももうすぐ終わりそうな今日この頃。

もうすぐゴールデンウィークで遊ぶ予定を立てたり、ゴールデンウィーク限定のバイトに募集したりと大忙し（社会人は別である）。

が、ゴールデンウィークばかりに目を向けるのは失礼である。その前にある昭和の日と言う名の休日があり、そこで休むことによりゴールデンウィーク？やることないから寝るぜ！な未来を変える。

「何処かに行くの？」

「玉狛にあるラーメン屋。」

体力測定で勝負だと挑んで来て、勝ったから奢って貰うことになった。

そのままボウリングしようぜってなったから夕飯までには帰るよ」

「そう、遅くなるなら連絡してね。修は？」

「ぼくはゴールデンウィークの宿題を」

「あら、もう出されてるの？」

「昨日、出されたんだ。」

「ゴールデンウィーク明けに提出だから、早い内に終わらせようかなって」

朝食を食べながら今日の予定を母さんに伝える私と修。

「ゴールデンウィークの宿題……米屋の奴はゴールデンウィークの最終日にラーメンを奢ると言ってきたが、絶対に宿題を終わらせるの手伝ってくれとか言ってきたそうだな。夏休み、終わり辺りで宿題やるとか計画立てて満足して実行しないタイプだろうし。」

「そう言えば、体力測定で勝負していたって言うていたけどなにで勝負したの？」

「全種目だ。」

「全部満点で学年一位らしいが、総合じゃない……修の方は？」

「えっと………た、倒れなかったよ」

勉強の方に関しては何にも問題なく、きっかけさえあれば知恵をつける修だが体力は無い。

中学の方でもしている体力測定について聞いてみると凄く気まずそうな顔をする。幼馴染みの千佳よりもスタミナが無いのは、ダメだぞ。

「ふう、少し鍛えないか？……じゃないと、千佳と一緒に逃げられないぞ。」

お前の方が先にバテて、近界民ネイバーに追い詰められて「千佳、ぼくのは良いから逃げ

るんだー!」とか言って、逃げるのが無理だと諦めて自らを犠牲にして千佳を逃がそうとするが、「修くんを見捨てるなんて出来ない!」私を的な自己犠牲合戦がはじまりそう
だ」

「その場合は、兄さんは?」

「修、私がどんな時でも助けられると思わないでくれ。」

「いやまあ、助けられるならば助けて一緒に逃げるが……学校いる時とか無理だから
な」

「……ゴールデンウィーク、頑張つて兄さんみたいに走つてみるよ」

「そうか。部屋にハンドグリッパーと5kgのダンベルあるから使つても良いぞ」

「時間が出来たらやってみるよ……そういうえば、兄さん今日遊ぶ人つて誰なの?」

「ボーダーの隊員兼友人……天地がひっくり返つても言わないぞ」

修、というか家族を含めた極一部のそれこそ10人にも満たない数の人が私がトリ
ガーとサイドエフェクトを持つていることを知っている。

拾ったトリガーをボーダーに提出せずに隠しているとか電磁波とか赤外線が見れる
謎の視力を持つているとかそんな感じのレベル。修は一時期、ボーダーに出した方が良
いんじゃないかと言ってきたが、色々と余計な事を言っておいたので直ぐに言わなく
なっている。

「おせえぞ、三雲」

「あ、もしかして私が遅刻か？」

自転車を使わずに歩きで集合場所に向かうとそこには米屋……出水、三輪がいた。

なんでこんな所に居るんだとなったが、ボウリングをする人数が増えたりしても特別困るわけでもない。

「いや、まだ10分前だ」

「そうか……一応は言つとくが、米屋とラーメン屋からのボウリングだからカラオケとかに変更しないし、時間ギリギリまで投げ続けるからな」

「おお、聞いてる聞いてる。」

ゴールデンウィーク、防衛任務とか色々入れたから昭和の日にパーっと遊ぼうってなったんだ」

「ボーダーも大変だな」

「随時隊員募集中だぜ！」

サムズアアップして良い笑顔になる米屋。

出水が言っている昭和の日にパーっと言うことは本当なのだろう。三輪も気晴らしとか、休みに遊ぶとかそういう感じだが裏がある。私が撒いた種が芽吹いてくれたよ
うだ。

「ラーメン行こうぜ、ラーメン！」

「米屋、そんなにラーメン好きなのか？」

「いや、ラーメンとかカレーを食い終わった後に飲むお冷やが大好きなんだ！」

なんというか、マニアックな物が好きだな。

口の中を全てリセットしたり潤いを取り戻したりする瞬間の一杯は美味くて当然だが、大分マニアックな物が好物だな。

「出水はなにが好物なんだ？」

「おれ？おれはコロツケとエビフライとみかんだな」

「揚げ物とみかんか」

「そういうお前はなにが好きなんだ？」

「肉とメロン。肉ならなんでも良い。メロンは普通にメロンとして食いたい。三輪は？」

「俺は特に………しいて言うなら、焼肉だ」

昼飯食う前に飯の話をする私達。

空腹は最大の調味料なんて言うが、それは正しく私達の食欲は刺激されていく。しかし、この中でラーメンが大好物が居ないのにラーメン屋？という疑問を全員の頭に過るが、ラーメンは基本的に美味しい物なので直ぐに頭から消す。

「いらつしやいませ。何名様で？」

「4名で、テーブル席で」

「はい。4名、入ります！」

そんなこんなで玉狛にある味自慢らーめん三門店ついた。

ピーク過ぎの時間帯を狙ったから混んでるかどうか少し心配だったが、混んでいなくてよかった。

「先にメガネ、外しておくか……なんだ、どうした？」

味噌汁ぐらいならまだしも、今から食うのはラーメン。

メガネは確実に曇ってしまうのでメガネケースに入れるのだが、向かい側の席にいる米屋があらえないと言う顔をしており、右隣にいる出水もマジかよと驚いている。三輪はメニュー表を広げている。

「嘘だろ。てつきり眼鏡を外せばこう……三三三的なのになると思ってた」

「米屋、それはギャグとかSDキャラにのみ許されるものだから」

「にしても、勿体無いな。コンタクトにしないのか？」

「いや、そもそも私は」

「お前等、喋るのは良いが注文は先に済ませろ。俺はもう決まったぞ」

バタッと米屋の前にメニュー表を置く三輪。

昼のピーク過ぎとはいえ客は結構いる。注文しないと店に迷惑だなと出水と米屋はメニュー表に目を向けるが、私はカウンターの席の上に張られているメニューを見る。

「チャーシュー麺のチャーシューとネギトツピングと餃子……餃子頼めば80円越えるな」

「1500円までだぞ。銀行行って、1500円を綺麗に下ろして来たからな」

「大丈夫だ。この後、ボウリングに行くから財布の中に細かいの入れてる。80円は自腹だ」

「クソ、なんかそこまでいくと80円出さない自分がケチ臭くなる……わーった、餃子も出す」

わーい、儲かった。

特に狙ったわけでもなかったが、米屋のサバサバとした性格のお陰か餃子も奢ってもらうことになった。

米屋も出水もなにを食べるのかを決めると注文をする私達。餃子四人前はお時間少々掛かるらしい。

「あ、そう言えばよ……お前が言ってたこと当たってたわ。」

ボーダーの上層部の偉い人にチラッと聞いてみたらさ、割とアツサリとゲロってくれた」

「お前、食事前にゲロつたって言わないでくれ」

「悪い、悪い。」

でも、お前の言った通りマジでかなりの面倒ごとを押し付けられたわ。具体的に言えば、新人を押し付けられた」

「おい、出水」

「いやいや、こいつがなんか不幸な事が起きるって教えてくれたから知れたんだよ」

この前、チラツと言ったことが本当だったと報告する出水。

それは言っただけじゃないことだと三輪は注意をするが、教えた本人だからセーフとする出水。

「三雲、お前ってさ……目の前にいる人の未来を見ることが出来るの?」

「!?!」

そこで米屋が一気にぶちこんできた。

あれだけ派手にアピールをしておけば、未来視のサイドエフェクトを持っていてもおかしくはないと思われて当然だが私は未来視をすることはできない。

三輪は某実力派エリート（自称）と同じサイドエフェクトを持っているかどうかと聞いたこと、ではなく米屋がそのまんま聞いた事に驚いている。

「えっと、米屋大丈夫か?」

確かにボーダーは異世界からやってくる奴等を撃退するっていう如何にも漫画っぽい事をして、お前はそれに所属しているのは知っているが……漫画と現実の区別をつけないと」

「いやでも、お前時折スゴいことするじゃん。」

自販機の当たりを確実に当てたりとか、出水の未来を言ったりさ。もうそれ、未来予知じゃねえか。というか、本当にどうやってんだ？」

「自販機の方に関しては何も教えられない。けど、出水の方に関して言うならば占いだな」
「占い、だと……」

「三輪くん、三輪くん。」

そんなありえないものを見るような目で私を見ないでくれ、睨まないでくれ。これでも的中率53%のオリジナルの占いなんだよ。毎年、御正月に昨年のお年玉の残りを競艇に全賭けして勝利するために覚えた」

「うわ〜動機がスゲー不純」

「だが、毎年勝利している。」

多すぎる金は身を滅ぼすと、親から差し押さえはくらってるけどもテレビのCMで見る車を保険とか税金とか色々を含めて一括払いで買って運転免許を取る為の費用分は当ててる」

「新品の車って、今いくらぐらいだ？」

「俺に聞かれても……」

「多分、100万越えてるぞ」

「三雲、SUGEEEE!」

なんか米屋が何時も以上にバカっぽく見える。

因みにだが100万なんてとつくの昔に突破している。母さんに通帳の差し押さえはくらつてはいるものの、既に8桁は越えている。宝くじを当てたのは大きい。

「目指せ、キャンピングカーでの日本一周の旅」

「おお、そこそこ大きい夢があるんだな」

前世から、それだけは夢見ている。

巨乳美女な嫁さんと一緒に日本の城とか観光地とかテーマパークを巡り、温泉に入つてゆつたりしたい。日本全国津々浦々と旅をしたい。そんな無駄に金の掛かるところこの夢に今生では手が届きそう。このサイドエフェクトで金を増やせば良いところまで来ているんだ。

「そうか、三雲は未来が見えないんだな」

「三輪、それは就職しない人とか将来なにになりたいとか考えてない人に効く言葉だからやめろ。未来は見えないが、私の目は結構変わってるんだぞ」

時々三輪の言葉がグサリと来るのだが、泣かずに話を動かす。

米屋達は私が某字面にすると凄くイタい実力派エリート（自称）と同じサイドエフェクトを持っていると思っているが、持っていない。早い内にそれをそれとなく教えておこう。

「変わってる？普通の目だろ」

「これ」

私の顔をマジマジと見てくる出水。

目からビームでるとかそんなんじゃないし、オッドアイとかいう中二要素はない。私はメガネケースをとりだし出水に渡した。なんで渡したのか直ぐに分かった出水はさつき外した私のメガネをつける。

「おー似合ってる、似合ってる。後で栞に送ろう」

「スゲー雑に扱うな……って、あれ？」

パシャリとメガネ姿の自分をカメラに納める米屋にツツコミを入れてからメガネの異変に気付く出水。

一度メガネを外し、メガネを確認してからもう一度メガネをつける。

「どうしたんだ？」

「それ、普通のメガネじゃない」

出水から渡された私のメガネを受けとる三輪。

出水と違いメガネをつけることなくメガネのレンズを見ると、普通とは違うことに気付く。

「お前、伊達だったのか」

「これは花粉症と視力抑制のメガネだ。」

「なんだかよく分からないんだが、私の視力はおかしいんだ。父親と弟はメガネなのに、私は普通なんだ」

「母親似じゃないのか？」

「母親似だけで簡単に済まないんだ。」

視力がお前と同じならそれで終わるんだが……2 km先のものも見える。両親は日本人で、弟はメガネ。

母親似で母親がアフリカの部族出身とかそういう感じのオチでも、私がアフリカのサバイバルに参加したとかそういうのでもない。蓮乃辺市方面を中心に生活していたんだ。某視力がスゴいで有名なアフリカの部族達は自然豊かな環境だから視力が発達したとかどうとかで……10ぐらいある」

私の話を聞くと固まる三輪達。

言葉にはしないがほんの少し動いたりや目を動かしたりしており、やっぱりと声にせ

ずに会話をしている。

「……三輪、もしかして」

「風間さんのところの菊地原と似たの、だろうな。三雲、何処まで見えるんだ？」

「女性が段々と脱いでいくエロの視力検査表を使った時、5 km先でもハッキリと見え
た」

「エロパワーステージ」

真面目な顔をし出した三輪の横、米屋は物凄くゲラゲラと笑う。

エロパワーはすごいぞ。パソコンが苦手なジジイがアダルトサイトを利用しまくつてたら、物凄い早打ちを出来るようになったとかいう前例があるぐらいだ。

「……なあ、三雲。ボーダーに入らないか？」

「いきなり話題が切り替わったな……」

「いや、その視力を活かした方が良いつて」

「あ、それオレも賛成だ。」

その視力、活かさない手はないぞ。バイトとかしてないだろ？」

「陽介、ボーダーはバイトとは違う、命懸けの仕事だ」

数km先のものを見る私のサイドエフェクト。

本質はそこじゃないが、それでも便利なものは便利だと笑い終えた出水と米屋がスカ

ウトをしてきたが、ボーダーにいる理由が楽しいからとかと違う三輪は止める。

「つーか、お前のところはもう4人だろうが」

「それ言ったら、お前のところは太刀川さんがいるじゃねえか」

「今度から余計なお荷物が増えるんだよ！

真面目な奴なら良かったけど、採用担当の人に聞いたら如何にもって感じで……来馬

さんが奇跡なんだって実感した」

「あの人は、仏かなにかだよ」

「私の知らない人を出さないでくれ。」

ボーダーの隊員、しかもトップクラスの奴からスカウトは嬉しいが入るつもりは全く無いぞ。

というよりはペーパーテストとか体力測定よりも、トリガー使える才能あるかないかで測ってるんだろ？なんで落ちたか理由を知りたい奴が聞いたら、そんな答えが返ってきたと聞いたぞ」

言い争う槍バカと弾バカ。

とりあえず、キツパリと断っておく。

「その辺は問題ない。お前なら普通に通るぞ」

「何故そう言い切れる？」

「……」

「黙りか」

「知りたかったら、ボーダーの隊員になれば教えるよ。守秘義務だ、守秘義務」

サイドエフェクトを持っているならばトリオン能力に優れており、ボーダーに入隊出来るトリオン量を持っている。

そう言えば終わるのだが、言うに言えない三輪。サイドエフェクトもトリオンもボーダー関係じゃないと知らない単語で、入ればと露骨な勧誘を米屋はしてくるが入るつもりはない。

「こういう友達として遊んでるだけの関係だからあんまり言いたくない。戦うだけで運営してる人じゃないし、お前等にも他のクラスのボーダーに入ってる奴等もいるから言いたくはないが……私はボーダーは嫌いだぞ？」

「……そう、なのか」

「あ、勘違いはしないでくれ。」

三輪が大嫌いとかボーダーに所属している、頭おかしいとかそう言うのじゃない。ボーダーという組織が嫌いなんだ」

街の為に色々と頑張っている。失敗もあつたりするが、それでも必死になつて前に進もうとしている。

だがまあ、もっとやらないといけないことはある。県外のスカウトに行く暇あるなら、もつとやらないといけないことをやれ。

「お前、アンチボーダーだったのか？」

「いや、そうじゃない。ボーダーに対して色々と思うところがあつて、好きになれない。それこそお前の言うトリガーを使う才能を滅茶苦茶持っていると言われても嬉しくないし、喜べない」

「大変お待たせしました！

チャーシュー麺の麺大盛りチャーシューとネギのトッピングです」

「あ、こつちです」

段々と重くなっていく空気を壊すように、頼んでいたチャーシュー麺が運ばれてきた。

私のチャーシュー麺だけでなく、出水のあつさり塩ラーメンや、三輪のつけ麺、米屋の豚骨醤油ラーメンが運ばれる。

「ボーダーのどの辺が嫌いなんだよ？」

「おい、掘り下げるなよ」

餃子も一人前ずつ運ばれ、昼をいただくが米屋はさっきの話掘り下げる。

出水はこれ以上はと私の勧誘とかそう言うのを諦めたようで、聞かない様にしてい

る。

「別に色々だ、色々。こういうのはなにも言わないのがお互いの為だ」

「けど、そういう意見を聞くのが大事なんだと思うぞ。」

アンケートとかつて、綺麗に纏めたりするし生の声を聞く機会なんて早々に無いしよ……根付さん、今年のボーダー推薦とかの学校関連で色々と悲鳴あげてたし、戦う以外にもちよつとぐらいいはなんかしねえと」

「陽介……」

「米屋……」

少しでもアンチボーダーというのを減らして、メディア対策室室長の根付の負担を軽減しようと言う純粋な思いがある米屋に珍しく感動している三輪と出水。

「じゃあ、中間テスト頑張つて赤点回避しろ」

感動したが、それはそれこれはこれとバツサリと米屋は切り捨てられる。

アンチボーダーをどうのこうのするのは主にボーダーの顔である嵐山隊やメディア対策室の仕事で、米屋が出来る事は赤点の回避。テストの事を言われた米屋は遠い目をするが既に包囲網は敷かれており、逃げ場は無い。

「でも実際、こいつの言うことは確かだよな。どの辺が嫌なんだ？」

「まあ、色々だ」

「いや、だからその色々がなんだって」

「……お前等が戦ってる近界民、あれは別世界から送られてくる侵略者じゃなくて侵略しようとしたりする奴等が作って送ってくるロボットだろ」

「んぐう!?!」「ぶふう!?!」

「あ……」

最初は聞くのはちよつとと聞かなかつた出水が聞いてくるのでハッキリとストレートに言つてやると、三輪は麺を嘔まずに飲み込んだ。

米屋と出水は口に含んでいた麺を嘔き出し、米屋が嘔いた麺が出水の塩ラーメンに、出水が嘔いた麺が米屋の豚骨醤油ラーメンに入った。

第5話

「ゲホツ、ゲホツ、ゲホ」

「秀次、大丈夫か？」

「だ、大丈夫、だ……大丈夫、なのか？」

「大丈夫じゃねえぞ」

吹き出した米屋と出水はまだしも、三輪は噎せて変なところに入ったのか咳き込む。

米屋が背中をポンポンと叩いて呼吸を出来るように楽にさせて、元に戻すのだが表情は先程とは一転している。能面みたいに笑みを浮かべたりしているのがデフォルトの米屋は表情を曇らせている。

「……お前、人の頭を心配するよりも自分の頭を気にしろよ」

「そうだな」

「……」

「……」

そんなわけないじゃないかー！と米屋は否定するのでこれ以上はこの話をしない。

チャーシューの下に隠れている麺を啜り、スープを蓮華で飲む。まろやかだがコクの

ある豚骨醤油は美味しいな。

「なあ」

「()で」

「？」

「()でその先を聞くのは、やめておいた方がいい。」

それ以上先は肯定をしているも同然だ……まあ、今の時点で肯定しているがな」

出水はどうしてそんな事を言ったのか、聞こうとするが私は先手を打つ。

原作知識ですと言えば、普通に終わるのだがそれ以外にでもそういえる要素は割とある。その要素を使つて、修にトリガーを隠し持っていることを黙らせたりしている。

「……何故そう思う？」

「……記憶、弄くらないか？」

仕事をする人の顔に変わった三輪は私を強く睨む。

この事を上の偉い人達には、特にメディア対策室室長の根付辺りに言えばなんかされる。それだけは絶対に嫌だ。

「……それは俺にも分からない」

「そうか」

「なんでそんな事を言えるっていうか、考えたんだ？」

「何故だと言う疑問、余りにも初歩的なことを考えたからだ」

話す雰囲気になってきたのか、口を閉じていた出水は聞いてきた。

私は胡椒を手に取り、テーブルの真ん中に置いた。つけねえのかと疑問に思う三人だが、この胡椒は意外なキーワードになる。

「そもそもで近界民はなにをしにきている?」

「侵略だ」

「なんの為にだ?」

「そりゃあ、こつちの世界を支配する為にだ」

「だから、なんの為にだ?」

「……悪い。なにが言いたいのか、分からねえ」

三輪と出水になんでなんでと聞く私を見て出水は音を上げた。米屋でなく、出水。ここ、割と重要なところだ。

自分なりに色々と考えては見たものの答えが出ない。

「世界史の授業あるだろ」

「世界四大文明をやってるけど、それが関係あるのか?」

「その辺は全然だ。」

神権政治とか60進法とかオリエントとかそういうのは余り関係ない。これから先、

中世とか近代で起きる出来事が関係している」

「おい、やめろよ。ただでさえ今の時点でギブアップなんだぞ！中世とか言われても、わかんねえよ」

「安心しろ、凄く簡単だ」

学校の勉強関係になると焦りだす米屋。出水も今やつてるところはともかく、中世はと困っているが心配ない。

真ん中に置いた胡椒を手に取り、チャーシュー麺に少しだけ入れて胡椒を真ん中に戻す。

「知っているか、胡椒を巡って戦争が勃発したことがあるのを」

「おいおいおい、幾らなんでもそんなことが……マジで？」

「なんなら紅茶でも争いが起きたこともある。」

今でこそ輸出輸入、大量生産とかが当たり前で簡単に手に入るが、ヨーロッパ方面では貴重な品々だった」

「ふくん、どれくらい？」

「正確なのは分からないが、大きじ一杯でお前が今まで貰ったお年玉合計した分ぐらいはあるんじゃないのか？」

食ってるものが食ってるものだけに、食べながら会話をする私達。

米屋も胡椒をパラパラっと多めに入れていたのだが、胡椒の昔の価値について言えば、胡椒が入っている瓶の手が止まる。胡椒、滅茶苦茶入っていくな。

「マジ？」

「嘘だと思ふのならボーダーに居る大学生や歴史に強い人に胡椒を巡って戦争が起きたのですかと聞いてみる」

「今度、東さんに聞いてみようって、かつら!？」

「誰かは知らないが最悪ネットを使ってくれ」

そしてラーメンが辛いのは、胡椒の入れすぎだ。

胡椒を巡って戦争したという事を知り、一つ賢くなる米屋達。しかし、それがこれとどう関係あるんだと直ぐに？を浮かべる。

「胡椒を巡って、胡椒の産地を侵略する。」

侵略するには色々と理由があるものだ。勿論、世界征服なんてのもあれば豊かな土地が欲しい、そこでしか取れない貴重な資源が存在する、その土地がなにかのゆかりの土地ととにかく色々とあつて、じゃあ近界民はなんの為に此方に侵略する？と考える」

「……世界、征服だ」

三輪の口から、そんな言葉を聞けるとは思いもしなかった。

チャーシューを噛み締めながら、もう隠すのを諦めてくれないかと考える。世界征服

するならば、もつと効率が良いことをするぞ普通は。

「世界征服なんてのは、世界征服しようと世界に喧嘩売る方よりも勝って世界征服を終えた後の方が大変だ。

世界で一番偉い王様になって、一つしかない国を動かさなければならぬ。国同士で読みあいや腹の探りあいをする事はせずに、どうすればより良い国になるのかを考える。株や\$のレートはどうなることか、考えただけでも恐ろしい」

「そうかもしれないが、それでも世界征服じゃないと何故言い切れる」
「こっちの世界がそれを証明してくれているだろう。」

人類の歴史は長いが、その中でも世界征服に成功したという記録は無い。大陸を支配していたぐらいで、なんだかんだで滅ぶし。近界民の世界はどれだけ大きいかは知らないが、きつと、アイツ等はなにかしらの資源を求めにやって来た。そう仮定した方が話が潤滑に進む……そこで色々と停滞はしたがな

資源を求めに来たのなら、侵略行為も納得が行く。

だが、その資源がなにか分からない。原作知識を無しで考えてみると、大抵はそこで詰む。しかし、私は詰まなかった。色々と総当たり戦で考えてみた。修に考えさせてみた。

「私達と同じ人間ならば、こっちの世界の歴史にある侵略戦争と同じ理由だと考えられ

る。

だが、お前達が相手にしている近界民は人間じゃない……だからこそ、答えが導き出すことが出来る。

ボーダー隊員達は普段、近界民と戦っています！とか望遠鏡で警戒区域内を撮ってみたとか色々画像が出回っている……お前達が戦っているのは、どれもこれも似たような見た目のものばかりだ。そこで考えられるのは、三つ。一つ目はああいう感じの人間、分かりやすく言えば宇宙人みたいなもの。二つ目はムカデやナメクジといった人間ではない害虫と認定される生物、三つ目は普段から襲ってくるのはロボットで、向こうの世界から送ってくる人間がいるの三つだ」

「二つ目はともかく……二つ目と三つ目がどうして出る？」

「仮定しただけでハッキリとした理由が分からないからだ。」

別世界から近界民がやって来る？何故？……分かりません。だったら、害虫の様に面倒な存在かもしれない。

向こうはただただ普通にやっているだけで、私達が生きるために駆除している……おい、睨むな」

三輪が近界民に対し、色々憎んでいるのはわかってる。

だが、私は近界民ではない。こつちの世界の人間で、近界民との繋がりがなんてないし

派閥的なのも無い。

「ん？スズメバチみたいなの居るだけでヤバい存在が近界民はまだ分かるけど三つ目はなんで出たんだ？」

「三つ目は色々と考えた答えだ。

ボーダーが普段相手にしている近界民は見た目が同じのばかりだ。

近界民が此方の世界を襲う理由がわからない。そうなると二番目の近界民害虫説が出るが、三門市に大々的に現れたあの日、近界民に殺されたのではなく拐われた人達が多く居る。ただそこにいるだけで迷惑で殺す害虫がなんの為に人を拐う？となり停滞する。

となれば一つ目の近界民はああいう感じの見た目の人間となるが、そうなるとまたなんの為に人を拐うのかが分からなくなる。とにもかくにも、近界民はどうして人を拐う？となった。そこでまた歴史の授業だ」

「またかよ……」

米屋、嫌そうな顔をするんじゃない。

奴隷貿易は普通に授業で習うのだから、今覚えておいて損はない。

「別に難しい話じゃない。

アメリカとかイギリスの植民地がどうのこうの辺りで覚えるところだ。アフリカ大

陸の住人が奴隸として売り飛ばされていたとかそういうの」

「拐われた奴等は奴隸として向こうの世界でコキ使われてるってか？」

「そうだ……だが、ここでまた色々と考えないといけない……出水、近界民は大きいだろ？」

「まあ、普段相手にしてるのおれよりも何倍も大きいな」

「だからまた分からなくなる。」

下衆なこと、あくまでも誘拐だけして何処かに売る誘拐業者、自分達の世界の開拓をさせる労働力を求める国の人間。

奴隸として拐われるのならば、この三つが出てくるが性別や顔を基準にして誘拐されたわけじゃない。しいて言うならば、子供が多く拐われているぐらいだ。だからまた考える。

一つ目の下衆なことに使用している。これはまあ、即座に違うなどなる。そもそもあれに性別ってあるのかとかなる。

二つ目の所謂奴隷業者となれば一応の納得は行くが、買い手も近界民ならばなんで買うんだとなる。

三つ目の自分達の世界を開拓させる奴隷として拐っている……これもこれで、納得は行くには行く。だが、そこで大きな壁が出来る」

「大きな壁って、もう既に答えを出してるじゃねえか。勿体ぶらずに言えよ」
「米屋、近界民は私達よりも遥かに大きいんだ。」

更に言えば家を簡単に壊すことが出来るってつもない力を持っている……人間拐って開拓しなくても良くね?となった。

近界民の世界がどうなっているかは知らないが、それだけのパワーを持っているならば表に姿を現す前にいたボーダーの人達以外拐っても価値はない筈だ……そこでまたお前達が普段から戦ってる近界民が関わる。

お前達が普段から戦ってるのは似たような見た目をしている。近界民害虫説と近界民ああいう感じの人間説の二つを否定+近界民見た目がなんか同じのばかりの二つを足して考えれば、普段から戦っている近界民は量産されたロボットで近界民の世界には普通に人間がいて、そいつ等が拐っていった子供達になにかさせていると考えた」
「……そこまでわかつてるならボーダーに入らねえのか？」

おれ色々と推薦するし、お前をおれが今いる部隊に入れてくれって太刀川さんに、隊長に話をつけるぞ?」

私の説明に納得をしてくれた出水。

そこまで分かっているならとスカウトをしてくれるのだが、私の説明はまだ終わっていない。

「だから、私はボーダーが嫌いと言っているだろう。きっと私の想像よりも遥かにとてつもない事をボーダーは隠している」

「隠している事を何でもかんで正直に話せば良いというわけじゃない」

「三輪、確かにそれはそうなんだが……今でも分かっている事が幾つかあるんだ。

お前達が物凄く否定したり、そう聞かれたらこう答えなさい的な嘘を言ってこないし、運営に携わっていない一隊員に聞くのもあれだが……結局、なんで若すぎる子供を誘拐しているんだ？今の私達の年頃なら労働力として使えるが、小中学生の多くが誘拐されている。イギリス産業革命時の様に炭鉱の労働力として使われている……と考えるが、冷静に考えれば異世界に移動する技術あるのだから、子供サイズのロボット作れるんじゃない？となり誘拐されている理由がわからない……誘拐されている理由はなんだ？」

「それは……」

優れたトリオン能力をもっているから狙われて誘拐される。

そう答えれば良いだけだが、トリオンについて説明をすることは出来ない。私が近界民Ⅱ人間だと考えており、大体が合っている人だとしても三輪は口を開かない。

言うべきかと悩んでいたりが、最終的にはなにも言わないだろう。原作知識があるから、今更教えてもらってもはいそうですかで終わる。問題は……私以外だな。

「……もうこの話はやめよう。飯が不味くなるし、この後のボウリングが楽しくなくなる」

「……お前がそう言うのなら」

「オレ達はなにも聞かなかつた、ボーダー外の友人と楽しく遊んだ……だな」

「いや、違うぞ?」

「なに!?!」

これ以上はと会話を強制終了するが、ここでなにもなかつたと終わらせるほど甘くない。

米屋は分かつたぜと空気を読んだかもしれないが、そんな風に終わらせたらなにも変わらない。

「おれ達にどうしろつていうんだ?」

「第4の選択肢を考えて、それを選んでくれ。私のボーダーに対する疑心暗鬼や不満を解消してくれ」

「第4つて……なにすりゃいいんだよ!?!」

出水はウガーつと出ない第4の選択肢に頭を抱える。

今存在している自分達が忘れるか、私にボーダーに入ってもらおうか、私に忘れさせるかの3つの選択肢がある。

私が今求めているのはこの選択肢以外の第4の選択肢を出してほしい。いや本当にね、他県行ってドヤ顔京都民をスカウトしに行く暇があるならね……うん。

「米屋、出水……いい加減に言わないといけないから言うぞ。」

「お前等が吹き出した麺、互いのどんぶりに交換する様に入っている」

「おまつ、なんでそんな事を今いうんだ!？」

「どれだ、どれが米屋麺だ!!」

「……さつさと食べ、のびるぞ」

「秀次、お前は飛んでねえからって他人事みたいに言いやがって」

「俺のつけ麺じゃなく、お前のラーメン。他人の事だろう?」

これ以上はこの話題を掘り下げないとボーダーに入る入らないの会話は一切しない。

中学の修学旅行は何処に行った、来年の修学旅行はどこだったら良い?や趣味といった極々ありふれた会話をし、ラーメン屋を後にしてボウリングの投げ放題に向かい私と出水はキャンペーン中のキャッシュバックに成功する。

「……三雲、スゲーよな。根付さん達が色々とやってるってのに、ノーヒントでおれ達が普段戦っているのはトリオン兵で、近界民は向こうの世界の人間だつて気付いてる。おれも太刀川さんも聞くまではトリオン兵が近界民だつて思ってたのに」

「オレもそう思ってたよ……どうする、秀次?」

「どうするもなにも、俺達がすることは近界民を排除するだけだ。

一般人に近界民の設定が浸透されている以上は根付さんでもどうすることも出来ないし、誰かがヒントを与えたわけじゃないから記憶を弄つても、その考えにまた辿り着く」

「そう言われればそうだな……あ」

帰り道が違うので、私と別れて帰る三人。

私と別れたことで出せなかつたさつきまでのポーターに関する事で話をするので、米屋はあることに気づく。

「どうした？財布でも忘れたのか？」

「ちげえよ……三雲って、なんでポーター嫌いなんだ？」

「ポーターが情報操作して隠していることが気に入らないからだろう」

「言ってねえぞ、そんなこと。」

情報操作で隠し事をしていることは気に入らないけど、それはそうだがってある程度は受け入れてたじゃねえか。

ある程度は受け入れられる奴が隠し事をしていることを気に入らないっていうのはおかしいだろう？」

私がポーターが嫌いな理由をハッキリと言わなかつたことに、米屋は気付く。

ボーダーが隠し事をしているから嫌いだといい切ったわけではなく、なにが嫌いなのかとハッキリとは言っていない。

「その答えを出すのが、おれ達の仕事じゃねえのか？」

「……かもしれないな」

ハツキリと答えを言っていないが、第4の選択肢が私のボーダー嫌いをどうにかする答えなんだろう。3人はその事に気付いた。

第6話

『近界民襲来、近界民襲来！』

「お、おい………よりによって、このタイミングかよ!？」

「慌てるな。時間帯はともかく予告はされていたんだ」

「三輪、待て………こいつ、多分持つてない」

「お前………」

「ポケットに入れてたら、落としかけたから先生の出席簿とか入ってる籠に置いてるか
ら取ってくる！」

ゴールデンウィークも過ぎ去り、平穩を過ごしている私達。

春分の日からなにか変わったわけでもなく、本当に平穩だ。余りこういうことを言うのは如何なものかと思うが、平穩じゃない方が私としてはありがたい。劇的な変化を向こう側に求める私の性格、本当に面倒くさい。

「これが戦場ならば、今頃は大惨事だ」

「縁起でも無いことを言わないでくれ………避難訓練だぞ」

「避難訓練だからこそだ」

今日は避難訓練の日、別に今日で大規模侵攻から何年目とかそういうあれじゃない。普通の避難訓練。

まあ、三門市の避難訓練は普通の避難訓練じゃない。地震とかそういうのでなく、近界民がやって来たのを想定しての避難訓練であり……。

「私達だけ体操着は、恥ずかしいな」

「諦める……トリガー、起動！」

なんか知らんが、今回の避難訓練はいついつにやるかの正確な時間帯の予告がされていなかった。

まあ、確かに事前に何時間目に避難訓練やりますよと言っていたら臨場感も緊張感もなにもない。基本的に怪我也予想外のアクシデントも無いからぶっちゃけ本番になっても使えない避難訓練。人間、土壇場になると本性を現す。限界ギリギリまで追い詰められると、人はなににするか分からん。

とりあえず、体育の授業は強制終了となり三輪の先導でボーダー隊員の生徒以外は学校の地下にあるシエルターに避難をする。

「体操着で浮いてるなって思ったが、よくよく考えればそこまでのことに気付いた」

外で戦っているボーダー隊員と連絡を取ったり、万が一にと何名かは地下のシエルターにいる。

ジンジャーエール好きのNさんはスーツだが、ボーダーの隊服はジャージとかコスプレ感満載なものが多く、地下居残り組の熊谷は……うん。

「ちよ、ちよつとあんま見ないで」

「デザイン、誰が担当をしているんだ？」

熊谷の隊服が一際浮いており、周りからの視線に耐えられなくなっている。

だが、助け船を出すつもりはないと隊服のデザイン担当について聞いてみる。

「小夜子……うちの部隊のオペレーターがこうしたのよ」

「そうか」

グツジョブ、オペレーター。

主に男性陣からそんな電磁波が出ているのが見えたのだが、言わないのが漢というものの。

「出水も中々に……個性的だな」

「だろう。最初にこれ見たとき、やっべ、マジかけえ！ってなった」

黒の剣士っぽい隊服を身に纏う居残り組の出水。

出水はまだ何処か若々しい青さを感じる。しかし隊長である黒の剣士（ダンガー）

……忘れよう。

「公式グッズとして販売されてるから、今度持ってきてやろうか？」

「実際に戦う際ならまだしも普段着として使うわけ無いだろう。千発百中Tシャツの方がましだ」

「おい、それどういう意味だ!!千発百中の何処が悪い!!」

「いや、命中率1割って公言してるみたいなものでしょ」

「1000撃って、100も命中出来れば充分なんだよ射手は」

「そういうのは甘えだぞ、出水。」

狙撃してる人達は一発一中の一発勝負じゃないか。ミスしたら、弾道で何処から狙ってきた逆算できるから一発勝負だろ。確実に当てる弾を当てないと」

「ポジションがちげえよ」

「結果的に殺るのだから、変わりない」

「あんた、時折とんでもないことをサラツと言うわね」

出水の千発百中のTシャツ問題から色々と発展していき、会話が弾む私達。

ボーダーのグッズとか広報活動とかどうなってるんだと聞いてもよさそうな事を聞き、外で戦っている(ことになっている)三輪達が帰って来て、避難訓練は終わりそのままということとで授業も強制終了。少し早めの昼休みに突入し、ボーダーの隊員達は今回の避難訓練の報告書を書き、5、6美術とその日の授業は終わる……が、しかし、勉強はまだ終わらない。

「一通りの教科は持ってきている。

だが、授業をした日、担当教師、ノートの書き方と色々と異なっているから余り期待しないでくれ」

来週から午前中に帰ることの出来る中間テストというイベントがやって来る。

授業始まる十数分前に頭に叩き込めば平均点以上はとれるので買ったばかりの原付で家に帰っても良いが、出水達の勉強を手伝わなければならない。

「あたしまで参加してよかったの?」

クーラーの効いた図書室で紅一点の熊谷は少し気が引けるのか、そんな事を聞く。

「熊谷一人が増えるぐらいならば構わない。

なんならもう二人増えても1米屋を上回ることは無いはずだ」

「1米屋……槍バカ、遂に単位化か」

「普通に本部に行ったが来週から中間だと理解しているのか?」

米屋、本当に大丈夫なのかという心配はあるものの見捨てる方向は変わらない。

テーブルを囲み、ちゃんと授業を受けている私のノートと自分のノートに違いや書いていない部分はないかと勉強に勤しむ三輪達。私はその間にテストで出そう+配点数が高いところは何処なのだろうかと占ってみる。先生のごこテストに出すぞくや暗記しろと言われた部分は赤ペンで書いてある。その中でも重要そうなのを練習問題とし

て出して暗記させておけば赤点回避はできる。

「本当に今更な疑問をもったがボーダーにそういう感じの担当はいないのか？」

無言で同じ事を延々と繰り返すとストレスしか溜まらない。

「ここぞとばかりに私は疑問に思っていたことを聞いてみる。

「そういう感じって？」

「ボーダーの隊員の半数以上が学生だ。

スカウトされた人たちも学生だ……なにを基準に採用しているかは知らないが、学生が多い。なんらかの事情で学生を雇わないといけないのならば、教育関係の部署の一つや二つ、あってもおかしくはない。だが、存在しない。その辺についてどうなっているんだ？」

「どうもこうも、そんなものは無い。

結局のところは勉強を真面目にしているかどうかで、現にボーダーに初期の頃からい進学校を卒業した人だって居る。

今でこそ色々と隊員が増えたが、俺が入った当時は防衛任務の調整が上手く出来ずに学校を休む機会が多かった。要は自主的に勉強するかどうかだ」

「そうか……」

「だが、陽介や一部の隊員は……そういう問題ではなさそうな気がする。ボーダー推薦

があつて本当によかつた」

「そうね……」

「そうだな……」

「いずれにせよ、学校関係をどうにかしないと親とかPTAとか教育委員会とか労働基準法が黙っていないさそうだな」

多分、それでボーダーをやめさせられたモブとか存在しているのだろうな。

「そういえば、他の学年のボーダー隊員達もテストは大丈夫なのか？」

図書室の他の机で教えあいながら勉強をする生徒がチラホラと増えてきたのだが、見知らぬ生徒ばかり。

家で真面目に勉強をしているのかと考えるのだが、そういうタイプの奴は基本的に進学校に進学している。その辺について聞いてみるとピタリと三人はペンを動かす手を止める。

「おい、どうした？」

「……18歳組は、三年は問題ないわ。色々と濃い人達が多いけれど、良い人達が多くて手遅れな人はいないわ」

18歳組、となると柿崎さん辺りか。

確かに色々な意味で濃い勉強は出来そうなの多いし、赤点常連組とかに入らなさそ

うだ。

「20と19の大学生達は……約、約1名を除けば問題ねえ。」

17歳組、高校2年生は……まあ、ヤバい人は多いけど、その分、しっかりした人も多い。で、今年受験の15歳組も……まあ、なんとかなる。基本的に平和だ」

「おい、16歳組」

その1名が誰とか、ヤバい人が誰とかしつかりとしている人については聞かない。

そして15歳組にはとてつもない悪が入り、理由なき悪意が鈴鳴支部と15歳組を蝕むのと言わない。だが、16歳組については答えてくれ。

逃げようとする出水を強く睨むと俯いて目線を合わせようとしないう。出水だけでなく、三輪と熊谷も目線を合わせずにいる。

「おっす!!ここで勉強しているって聞いたぜ!」

「!!!」

図書室の勉強してますよという空気を壊す様に図書室のドアが開かれた。

ドアを開いたのは黙っていれば美少女（残念）で、ボーダーでオペレーターを務めている仁礼光。同学年だが、関わりらしい関わりは特に無い女子だ。しかし三輪達は違う。ボーダー関係で色々顔と顔を合わせる。今は全力で顔を合わせない様になっているが。

「仁礼、俺達以外にも勉強している奴等が居るんだ」

「おお、悪い悪い……誰だお前？」

「三雲です」

「あんま見ない顔だな、支部所属か？」

「三雲くんはボーダー隊員じゃないわよ」

「そうなのか……ま、ボーダーがどうのこうのでの仲間はずれはよくないもんな！三雲、分かないことあったらじゃんじゃんアタシに聞いてくれ！」

「あ、はい」

多分だけど、この中で一番頭が良いのは私で一番悪いのはお前です。

ハツキリと言えばグーが飛んできそうなのでなにも言わない。来ちゃったよと出水達は俯いている……仁礼光は米屋と同格のバカである（B B F参照）。

「そ……そういえば、仁礼さんはボーダーの人と、それこそ同じ部隊の人と勉強したりしないんですか」

「仁礼さんなんてやめろよ、光でいい。ゾエもカゲもアタシが居ねえとき……油断するとダメになっちまうんだ。なのに、あいつらと来たら、逃げやがって」

それは逆じゃないだろうか？

ダメ男を養っている優等生的なことをいうが、こいつは思ったよりもポンコツで変なところで優秀だ。

「つと、お前等ここにいろつて小佐野にも連絡を」

「待ってくれ」

「別に遠慮すんなつて。ボーダー隊員とかそうじゃないとかさ、関係ない。アタシもお前も同じ高校一年で、それだけだろ？」

「つく、普通に良いことを言っている。」

確かに浮いている感じはするが、そうじゃない。その小佐野という人物を呼べば、ここでの勉強会が終わる。私のサイドエフェクトが、そう言っている。一年一学期の中間テストでなんとも言えない微妙な点数を叩き出してしまふ。ノートを貸したり、一緒に勉強をしている以上はそんなことは許せない。

「大所帯で勉強しても、効率が悪くなるだけだ。」

「こういうのは幾つかのグループかで分かれて勉強した方が効率が良い。と言うよりは、進学校とか女子校に通っている隊員とか居ないのか？」

「ああ、大丈夫、大丈夫。それよりも問題はお前等だろ。」

「人のことを気にするのは良いけど、こっちも頑張つて点を取らないと」

「そうか……ちよつとトイレに行つて一服という名のジュース飲んでくる。ノートは好きに使つてくれ」

「おう、サンキューー！」

私は席を立ち上がり、図書室を出る。

細かいのあるかなと財布の中身を確認し、男子トイレに入ると出水が追いかけてきた。

「……16歳組は、どうなっている？」

「進学校、お嬢様高校組はスゲえ成績良いんだよ。」

けど、普通校組が本当にどうしようもねえ。主に三輪が血反吐を吐く」

「16歳組い！他はどうした、年齢の割には老けているメガネとかいただろう！」

「いや、老け顔具合で言えばお前がぶつちぎりでトップだろう。里見は……まあ、うん。とにかく、三輪がひたすら頑張るしかねえ。おれの成績的に教えてたら下手したら赤点に行く可能性がある。頼んだぞ、三雲！」

「なにちよつと良い感じにまとめて終わらせようとしている……コーラにするか」

トイレで出すものを出したあと、一服する。

今回は米屋を見捨てたが、米屋級の残念な成績の持ち主である仁礼とダンガーよりも成績の悪い小佐野がいる。次の期末には頼られる未来は……米屋だけ、確定している。

「ま、まあ一緒に勉強をするのは今日だけだ。」

土日を挟むし、ノートを写すのがメインだったりするし……頑張れよ」

「頑張ったら負けなんだ」

なにやら不吉なオーラが図書室から出ているが鞆とか教科書とかを置いていつているので帰るに帰れない。

これはもう腹を括るしか無いと覚悟を決めて図書室という名の死地に足を踏み入れた……光が加わった結果は……まあ、なんとかなった。三輪曰く今回勉強したのが自分達でうるさいのが光だけで無言で静かにしてて、相手のノリに付き合うことを全くしないのが勝利の決め手となった。しかし、元素記号を覚えさせるのをすいへいりーべーとかじゃなくて、萌えキャラにしないといけず、1から作ったりしないといけないから疲れた。勉強が脱線しかけたのが辛い。

第7話

「そこまで！出席番号順に回収するから、手を動かすな」

中間テスト最後の科目、化学基礎の終わりを告げるチャイムが鳴り響く。

化学を主に担当している佐衛門三郎先生は出席番号一番から解答用紙を回収している。

「29、30……よし、全員分あるな。今日は特にホームルームとか無いから、これで終わりだ。テストは月曜日に纏めて返却する解散！」

「起立！気をつけ、礼。ありあざっしたあ！」

コンビニのノリで学級委員長が挨拶するとテストを終えたクラスメイト達が順次出ていく。

私は筆箱にペンを仕舞わず化学のノートと教科書を机の上に広げて、問題用紙を見る。化学のテストなので化学用語とか書く問題が多く、思ったよりも早くテストが終わるので自己採点の為に問題用紙に答えを書いておいた。

「三雲、どうだった？」

「今、採点中だ。文章による説明系の問題は正解不正解かは知らないが……まずまずだ」

「その割には全て○だな」

「いや、今間違いがあった。」

一学期の中間だから、それなりに取っておかないと後に響くだろう。説明系の答えで90いくかいかないところか……で、あれどうする?」

「……」

私と三輪しかいない教室を覗くカチューシャもとい米屋。

声をかけたいのだが、どうやって声をかけようかという気まずさと絶望が混じっている電磁波を発している。

向こうが声をかけてくるまで待つておけばと思つたが、三輪も三輪でどうすればいいのか悩んでいる。土日に泣きついてくる米屋を全員で既読スルーしたと言つていたな。

「何時までそうやってしているんだ? 出水も、入つてこい」

「おれ、位置的に見えないところにいたんだけど」

「私の視力を舐めるな。」

ただただ遠くのものを見る以外にも色々目が良いんだ……テスト、どうだった?

「あく……微妙。すいへいりーべーとかの元素記号とかはいけたけど、原子とか怪しい」

「因みに答えはこれだ」

「つげ……陽子と電子の位置間違えた」

「因みに文章問題があつていれば、90越える」

「んだよ、自慢かよ!」

「自慢じゃない。米屋の方はどうだ?」

「オレ……いや、元素記号を覚えるのまではよかつたけどその元素記号がなにを表してるのか分かんかつたぜ!」

「おいおい……で、赤点か?」

「おい!!」

上手く話題に乗ってくれて教室に入ってきた米屋。

私が上手く三輪と米屋の間を取り持つと思つていたかもしれないが、そんなに私は優しくはない。米屋にハッキリと聞くと俯き、段々と膝をついた。

「be動詞つてなんだっけ!」

「おまつ、そのレベルかよ!」

「テストで出るとこだけ、暗記してたからマトモに覚えてねえんだよ!」

まあ、学校の英語なんてそんなもんだからな。

単語とか何処が出るとかを事前に学習して、それがあつてるかどうかの確認テスト。実戦で使えるかどうかとなれば話は色々と別である。

「威張つて言うことか……三輪とか熊谷とかから聞いたぞ。」

ボーダーの中でも下から数えて直ぐの成績だつて……似たの何名かいるのも」

「……中間これだと、期末がやべえ。」

このままだと防衛任務もランク戦もそれぞれどころか給料の差し押さえされて、夏休み補習で遊べねえ」

「陽介……期末、頑張るか?」

余程今回のテストがヤバいと感じたのか、声が震えている。

そんな米屋の前に立ち、三輪が肩を叩いて次から頑張るのかと真剣な顔をする。米屋は頑張るとコクリと頷く。

「三雲、すまないが」

「次は手伝う。米屋、期末で挽回するぞ」

「三雲……」

「だから、今から勉強だ。」

幸い、中間の問題用紙は取っているから先ずはそれで復習を……おい、目線を合わせろ」

今から勉強だと分かると全くといって目線を合わせない米屋。

ここで躓いていたら、期末で赤点回避どころか進級が怪しくなる。心を鬼にして化学のノートを取り出そうとすると三輪が腕を掴んだ。

「……陽介は限界を迎えている」

「オレ、ベンキョウ、ガンバル。メザセ、ナツヤスミ」

何故にカタコト？

三輪が待ったをかけたのと、出水が普段はおれ達が見るからと頭を下げてきたのでこれ以上は勉強はせずに家に帰ると同じく中間テストを終えた修がいた。

「あ、おかえり、兄さん。テスト、どうだった？」

「全教科平均以上だな。」

修の方はどうだ？ 隣児さんの家庭教師、効果はあったか？」

「どうだろう……期末テストを見ないと、分からないかな」

「そうか。もし分からないことがあれば、聞いてくれ。」

もし、千佳に分からないことがあったのならばお前が答えるんだぞ。千佳は中学最初の間テストだからな、ここの成績で勉強に集中するかどうかが決まってしまう」

人に教えることで、見えなかった新しい世界が見えてくる。

修のテストは全科目平均以上だと占いで出ており、ケアレミスもない。修を見てみると、米屋と比較してしまう。

だが米屋には米屋の良さがある。総合的に見れば修の方が何倍も上だが。

「おかえりなさい。お昼はオムライスだから、少し待ってて」

「その間にシャワー浴びてくるよ。」

まだ5月中旬なのに、蒸し暑い。時期とかじゃなくて、状況を見て制服、クールビズにしてほしいぐらいだよ」

「諦めなさい。」

そういうのを決める偉い人は冷房が効いた部屋にいて、現場の声が聞こえないのよ」

母さんの言葉が地味に真理をついている。

修は色々と怖い会話をしているなど冷や汗を垂らしているが、先にシャワーを浴びるのは私だ。

自分の部屋に戻り、制服を脱いで家で着る服を押し入れの収納から取り出していると、大きな金庫が目に入る。

「半年以上、使っていないな」

大きな金庫の中には転生特典と言う名のトリガーが入っている。

しかしまあ、半年以上まともに使っていない。というよりは、一度も使ったことのない物も存在している。次に使うときがあるならば来年のこの時期、戦う相手は……あの人達になる可能性がある。

「兄さん、入るよ……それ」

「中身を確認しているだけだ。」

曲がりなりにも機械で半年も放置していれば、どうなるか分からない。錆びてフレックス感が失くなっていく可能性がある」

余計なことを考えてしまったせいで、つい金庫を開けてしまいトリガーが入っている三つのジュラルミンケースを取り出してしまったのを修に見られた。修はまた使うかと固まるのだが、今は使う理由は何処にもない。

「近界民達がこの街を襲ってくる。それこそトリガーを使う人達を連れてきてだ」

「な!？」

「近い将来だ、近い将来。」

別に驚くことでもないだろう。あの話をお前が納得しているなら、だが」

「……トリガーは元々、近界民の物……」

修には色々と言っている。

三輪達に話した近界民が人間で普段から戦っているのロボット説以外にも、トリガーは元々近界民が開発した物とか近界民の国が複数あるとか向こうの世界に何度か遠征しているとか色々と言っている。

トリガーは元々近界民が開発した物説の説明は近界民が人間と普段から戦っているトリオン兵には自衛隊の武器が全く効かず、トリガーによる攻撃は効果あるという点を逆に考える。

トリガーは近界民を研究して開発された物だと公表されており、普段から戦っている無駄に大きい奴等を研究したとなると、先ず、研究に必要な最初の近界民をどうやって捕まえたかとなる。

そこで近界民間説が正しく近界民の世界にも色々と国があると仮定した後、此方を襲撃してくる国の敵国の住人がトリガーを此方の世界の豊富な資源と引き換えに提供したと考えた。

近界民からトリガーを貰いトリガーと同じ動力源を持つ近界民(ロボット)を倒して、解剖して解析。その説があっているならば、ボーダーは近界の国に行く船なんかも作っている可能性がある。その敵国以外にも複数の国があるならば、トリガーをくれ。代わりに資源やると交渉している可能性は高いと……原作開始前に色々といらん事を言った。隠し持っているトリガーを隠す為にいらん知識を与えた。

「少なくともボーダーという組織が出来てから、近界民に人が拐われましたとは聞いていない。

隠している可能性があるかもしれないが被害があつたという話は聞かない。近界民達はなにを狙っているか知らないが、少なくとも近界民はほぼ毎日来ている。何度も何度も作戦を失敗したら諦めないのかと思えるほどに。まあ、近界民の国が複数あると考えれば、此方の世界を襲撃する国が一つじゃないと考えられる。しかし2年以上も成果

が無いとなれば何れは何かしらの仕掛けをしてくるだろう。何故、人間を拐えなくなつたのか？その原因はなにか？」

「それって、いったい」

「分からない。」

近界民が人間だとするならば、スパイを……コーヒーのCMみたいな事をしていたりするんじゃないのか？」

「……」

「もし、本当に心配ならばボーダーに入れば良い。」

母さんも父さんも確実に反対するだろうが、私はお前の背中を後押しする。これを持っていつでも文句は言わない」

三つあるジュラルミンケースの内の一つを修の前に置いた。

中にはトリガーが入っており、修にも使える物でデメリットはあるがボーダーのトリガーよりも遥かに性能が良い。それを持っていけば、割とどうにでもなる。残りの二つは死んでも貸さないが。

修がどうしようと冷や汗を垂らしているのでこれ以上はとジュラルミンケースを金庫にしまい、シャワーを浴びて家でゴロゴロと過ごそうとするが、ボーダーについて会話をしたのでつついっついボーダーの事を考えてしまう。

「大規模侵攻辺りで確実にバレル。

まあ、逃げたりあの手この手を使うからトリガーを奪われて記憶消去は絶対に無い……トリオン量はどれだけかは知らないが、絶対に入れとか言ってくるんだろ……修達は遠征部隊入りしたら、嫌でも此方が手薄になる。その間に街防衛ぐらいはするとして、ボーダーの規定内のトリガーじゃないと規律とかを乱しそうだし連携が取れない……トリガー構成を……」

凄く痛い妄想をしているなどは感じているが、やめられないとまらない。

その未来は何だかんだで来るだろうなどと自分がボーダー隊員ならどういうトリガー構成にするのかと紙を取り出して、妄想してみる。

「……普通にやったら村上先輩と似たようなトリガー構成になるな」

第8話

「……なんか今日、色々な出会いがありそうだ」

ミンミンミンと外でセミが鳴くこの季節、そう夏休み。

米屋の、の！ここ重要だぞ。光と小佐野は見捨てた。とにかく、勉強を見たけれども期末で一教科（世界史）落としたので補習確定。夏休みに来たくもない制服を着て、米屋は登校し補習を受けてなんとか乗り切りなんだかんだで夏休み折り返し地点ともいうべき山の日。

夏休みの宿題を一週間で終えた私は、市民体育館のジムを2日に1回のペースで通い、もう1日を自堕落に過ごす。米屋にプールに行こうぜと誘われたが、プールなんぞジムので充分だ。

「……あ、面倒なことが起きてる」

今日、外に出ると色々とお会いがあると占いが出た。

だがそれとは別に現在進行形で面倒なことが起きていると一階に降りるとなにかが噴出する音が聞こえ、時期的にあれだなと思いいりビングのドアを開くとナイフが飛んできた。

「危な!？」

「よしっ」

「いや、よしじゃないよ……Gか」

リビングから聞こえた噴出音の正体はゴキジェット音。

この時期はゴキブリが活発になる時期で、母さんはコックローチを退治した……ジェットじゃなくて、対ゴツキー用のナイフを投げて、一刺しで。もう、これ熟練の主婦が成せる技とかそういうのじゃないな。

「ちようどよかったわ。ホイホイが切れたところなのよ」

「そこはジェットの方じゃないの？」

「甘いわね。6世代ぐらい進むだけでゴキブリは進化するのよ。」

「気のせいかな今年のごきぶり、中々にしぶとくて……部屋をどれだけ綺麗にしても、排水溝から来るわ」

「私、無駄に目が良いから見えるから排水溝の話はしないで」

風呂場とか下水道とか見ると、物凄くゴキブリがいるの見えるんだ。

極僅かな電磁波でカメムシとかさういうのがいるのも見えて……マンションのゴキブリの巣が見えたときは引いた。

「で、ホイホイを買いに行くよ……何処が安かったか」

「シヨップिंगモール内のドラッグストアにして。

ちようど割引券もあるし、今夏休みフェアだかなんだかで色々とお安くなっているわ」
「あ、じゃあちよつとシヨップिंगモールでぶらつと遊んでくる。お昼はいらなから」
「いつてらつしやい……あ、ポイントカードと割引券よ」
「いつてきます」

そんなこんなでゴキブリホイホイを買ってきてとおつかいを頼まれた私。

因みに修は美術の夏休みの宿題を終わらせるために美術館に行っている。あんなの、レビューとか見れば色々とお偽造できるのだが、真面目な修は普通に美術館に行った。千佳……と、隣兎さんと。それを聞いて母さんが聞こえるレベルの舌打ちをしたのは今でも覚えてる。

「祝日だから人混んでるな……とりあえず、ゲーセンに行くか」

夏休み＋祝日のコンボは何気に強烈で、人が物凄く多いシヨップिंगモール。

ドラッグストアでゴキブリホイホイを買って飯食つてから家に帰るかとお悩むのだが、今日のはなにか色々とお会いがある。不吉な出会いじゃないらしく、取り敢えずはATMでお金を下ろした後、ゲーセンで遊んでからにしようとお足を運ぶ。

「うがー!!失敗した!!両替お願い!」

「柚字さん、程々にした方が」

「え、もう3000円も注ぎ込んだんだよ？ここで帰れば損。次勝てば、チャラになるから」

「それ、麻雀で負けまくった堤とか諏訪さんが同じこと言っただけで負けるパターンだ」
「……」

H78A84B78C109D85S100でなにかと優遇されまくりなああのポケモンのぬいぐるみが取れるクレーンゲーム前でなんか見たことのある集団がいる。

素敵な出会いってこれなのかと思ったのだが、一人しか顔見知りはいないので見知らぬフリをする。しかしまあ、おバカガールは良いが、アゴヒゲ、不審者感強い。援交してるっぽく見える。

「あ、諭吉しかない」

お菓子を根刮ぎ回収するかと思ったが、財布に諭吉しかないことを気付く。

ついさつき大きいのに変えたんだったと両替機に向かうと出水が千円札を両替し、2000円分の小銭を用意しており100円玉を見て大きなため息を吐いた。

「あれ買った方が絶対に安いって」

「両替終わったら、のいてくれないか？」

「あ、すみません……って、三雲じゃん。久しぶりだな」

「ああ、久しぶりだな。取り敢えず、コイン50枚にするか」

「お前、財布滅茶苦茶分厚いな！」

「預金通帳はある程度は差し押さえられてるが、スクラッチとかで増やした」

両替機に諭吉を入れ、5000円札と1000円玉を50枚に両替をする。

出水はそんな私を見て、こいつも同じ……という哀れな視線を向けて来るが私は勝つ自信があるからこんな浪費を出来るんだ。

「金運半端ねえ……」

「出水、誰かと来ててパシられてたんじゃないのか？」

「パシられてねえよ。でもまあ、そろそろ戻らねえと怒られるわ」

そう言うとうち出水は小銭を持って、さっきのクレイゲームがある場所に向かい、私はそんな出水の後を追いかけて……るには、追いかけるのだが特に声はかけず2つ隣にあるトライポットというルーレットクレイゲームに挑む。

ルーレットクレイゲームとは光のルーレットがくるくる回り、スイッチを押して当たりの部分に止めるゲームで、当たりの部分に止めるとお菓子を支えている部分が無くなりお菓子が落ちてくる。

お菓子以外にもKINGサイズのカップヌードルが山積みになっていたりして、複数の当たりを当てないと取れなかったりするのだが一回か二回で当てると物凄く金を使わずにお菓子を手に入れることが出来る。

ボタンを押すと同時にルーレットも止まるので、運ゲーでなく実力で取れるゲームでシヨップイングモールのゲーセンには10個以上ある。が、ぬいぐるみと玩具系はいらん。転売するのは面倒臭いし使わない。

「最初はじゃがりこ、Lサイズで一回200円か」

持つて帰るのはお菓子だけだと、狙いを定める。

ピラミッドの様に積まれているじゃがりこLサイズ。期間限定品はなく、チーズ、バター、サラダの定番の3つのみしか積まれていない。値段は1回200円で500円を入れても3回にならない糞使用。ルーレットは最速の設定で当たりは7つしかなく、その内の真正面にある当たりはフェイクで残り6つのうち1つでも当てればじゃがりこを手にいれることが出来る。しかし、そこにも問題がある。

「さて、幾つ手に入るか」

200円を入れ、ゲームスタート。

真正面にある当たりを当てても意味がない。かといって、斜め前のところを当てても積まれているじゃがりこが崩壊し、互いに支えあつて元を取れるぐらいに落とすことは出来ない。ただ、積まれたじゃがりこで見えない奥の当たり。そこだけは別で、一番最初にそこを当てると多くのじゃがりこが取れる。

常人やY o u T u b e rならば真正面のじゃがりこを狙いに行くだろうが、生憎なこ

と私は転生者。転生特典を悉く悪用するクソツタレで常人とは程遠い。

最高速度で回るルーレットは目押し出来るのか疑うほどに早いのだが、それは常人のみ。私にはサイドエフェクトが、その気になれば交差する新幹線の何両目の何処に誰が乗っているのか見抜くことを余裕で可能とする動体視力がある。時速100km以上を常時出している新幹線と比べれば断然遅いルーレットなど……止まって見える。

私はなんの迷いもなくボタンを押してルーレットを停止。ルーレットは奥の方に隠れている当なりに止まり、じゃがりこを支えている棒が一つ無くなりじゃがりこタワーが崩壊。雪崩れ込む様にじゃがりこは落ちていく。

「ひーふーみー……13か」

サラダ6チーズ2じゃがバター5とまあ、随分と偏ったじゃがりこ。

2000円でLサイズ13個、コンビニ価格170×13と考えれば2000円以上お得な買い物をした。

「お前、一発で成功したのかよ」

「これぐらいは、余裕で出来る……というか、まだなのか？」

「結構注ぎ込んでるんだけどな」

じゃがりこをゲーセンのビニール袋に入れてみると出水が私に気付き声をかける。

ついさつき別れたばかりなのに一瞬で大儲けしていると目を見開いており、国近先輩

を見る。クレイゲームでXにもYにもなるあのポケモンを取ろうとしているが、取れない。

「む〜!」

「三雲、お前クレイゲームは得意か?」

「転売屋出来るぐらいには得意だぞ」

「柚宇さんの代わりに取ってくんねえ?」

なんか明日には商品変わるらしくて、今日取らねえと二度と手に入らない限定品なんだよ」

「構わないが、先に説明をしておいてくれよ……あのなんか色々不審者っぽい髭とかに」

「あれ、うちの隊長!!」

「よんだか? 出水」

ゲーセンが色々と五月蠅いから余り響かなかったが、出水の声はフルーツグラノーラのドライフルーツだけを食った男、太刀川には聞こえており振り向いた。やばっ!と言っ
う顔をするのだが、直ぐに冷静になり適当な説明をはじめめる。

「いや、ちよつと友達に会ってなんの繋がりがあるかって聞かれたんですよ」

「おお、そうか。俺と出水はボーダーの繋がり、同じ部隊にいるんだ……ところで、お

前は？」

「三雲です。出水とか三輪とか、赤点を取ったカチューシャ馬鹿の友人です」

「なんか勉強見てくれる同級生が居るとかどうとか言ってたな」

「多分それ、私ですね」

「で、こいつクレーンゲームが滅茶苦茶上手いんですよ。」

「このままだと柚宇さん論吉まで使いそうな勢いだから、代わりに取ってくれないかって……いけるか？」

「……アレぐらいならば、簡単に取れる。」

だが、私は他のトライポッドのお菓子を回収しなければならぬから……ワンコイン分、奢れ」

「それぐらいならいいぜ」

「国近、チェンジだ」

交渉はあっさりと成立し、国近先輩と入れ替わる。

最後の1クレジット、無駄に使ったら絶対に許さないとジト目で睨んでくるのだが全く怖くない。ゆるふわアホガールに睨まれても、特になにも思わない。

クレーンゲームの前に立ってアームの位置とアームから発する電磁波、商品の位置と商品の弱点を見抜きボタンを操作し……一発で成功した。

「リザードン、ゲットだぜ！」

「はいはい。もうークレジット残ってますけど取りますか？」

「え、取れるの？」

「余裕で取れます」

リザードンを手に入れることが出来て大喜びの国近先輩。

もう一回でできるので、クレーンを操作して二個目のリザードンをゲットした。

「いや〜ありがとう。このままだったら、これを使わないといけなかったよ」

二体のリザードン（ぬいぐるみ）を握り締める国近先輩。

財布を取り出して諭吉……ではなく、キャッシュカードを取り出した。A級のオペ

レーターだから、さぞや儲かっているのだろうが、大胆だな。

「お礼と言っちゃなんだけど、ジュース奢るよ」

「ジュースの前にお菓子を回収して良いですか？」

チラッと見えたんですけど、コアラのマーチが滅茶苦茶取れるのありまして……」

「トライポッドのやつだね。どうぞどうぞ」

「ということで出水、5000円を出せ」

「100円じゃねえの!?!」

「ワンコインと言ったはずだ」

「確かにそう言ったけども……まあ、臨時収入とかもあつたしいいか」

出水から500円を受け取り、場所を移動する私達。

透明なビニールでバラバラにならないようにギッチギチに固定されたコアラのマーチが骨組みの様に複雑に置かれているトライポッドにつくと、迷いなく500円を導入。

「今だ!」

回りだすルーレットを見て、叫ぶ太刀川……さんは目押ししろとタイミングを言ってくるのだが、全て見事に外している。

「太刀川さん、私はちゃんと見えているんで良いです」

「お、そうか?」

「それ殆ど運ゲーみたいなのだけど大丈夫?」

「大丈夫ですよ……これぐらい、止まって見えますから」

首を傾げて心配している国近先輩だが、本当に問題はない。

なんの迷いもなくボタンを押して6つの当たりすべてを当ててコアラのマーチを42個手に入れた。

「6つ全部、一発で当てやがった」

「何処ぞの千発百中とは格が違う、格が」

「まだそのネタ引き摺るか！……にしても、運じゃなくて、目押しだよな？」

「前に目が良いと言っただろう。単純に遠くの物が見れる以外にも動体視力も良いんだ」

「え、お前メガネなのに目が良いの？」

「目が良すぎるから、メガネをしているんです。」

2、3kmぐらい先の物ならば割と簡単に見ることが出来ます」

メガネな私に驚くアゴヒゲ。

目について説明をするとなにかに気づく。

「……お前、それサイドエフエ」

「太刀川さん、言っちゃダメだって!!」

私に関心するので、色々と教えると口をうっかり滑らせる太刀川。

サイドエフエクトを口外すれば色々ややこしくなるだろうと出水は全力で黙らせ、少しだけ遠くに引つ張っていく。

「いやでも、あるならスカウトした方がいいんじゃないのかね？」

「出来たら、おれがとづくにしますよ。」

唯我の事もあるから、目が良いこいつを入れてって……」

「そういえば、太刀川隊は4人じゃなかったか？なんか前、愚痴ってたのは？」

「暑いから涼しいところで夏休みの課題を終わらせるとかどうとかで、軽井沢の別荘に今居るらしいぞ。まあ、居ても大して変わらんどころか足手まといだから問題ないがな!!」

この髭、堂々と言いやがった。

確かに実力の無い成金野郎で何一つ間違っていないんだが、堂々と言うとは肝が据わっている。

ここで出会ったのものにかの縁だと、残りのお菓子回収も付き添ってくる三人。お菓子以外の物を、たこ焼き機とか最新のイヤホンがほしいと言うので一発で取り、一通り取り尽くす。

「あ、ちよつとトイレ行ってくるわ」

「じゃあ、私達は休憩をしようか。なんでも出すよ」

「ゴチになりまーす」

「えー出水くんは自腹だよ。三雲くん、好きなの選んでね」

「じゃあ、メロンソーダで」

太刀川さんがトイレに行ったので、ちようどいいと国近先輩のご厚意に甘え、メロンソーダを貰い戦利品でパンパンになったお菓子が入った袋を一旦足元に置いて、メロンソーダを飲む。やはりメロンソーダはうまく、太刀川さんがなんかアホな事を言わない

ので落ち着く。

「そーいや、7月なりにしてた？」

「夏休みの宿題を徹夜して一週間で終わらせてから、中学の時の友人と遊びにいったり映画館前で3DS構えてポケモンを手に入れたり」

「いや、最後のダメだろう」

「でも、手に入っちゃうって分かったらついついやっちゃうよねー私も映画見る前についつい取っちゃう」

私は電磁波が見えるので何処に立っておけばポケモンが貰えるとか分かるんだ（悪）

「出水達はなにを？」

「あゝ……ボーダーの合宿だよ、合宿。
ぞ」
なんか補習を終えた馬鹿が遊ぼうぜと誘って来たが、ピンポイントでハブられてたぞ」

「あゝ……ボーダーの合宿だよ、合宿。」

今は何事もないけど何時物凄く強い近界民が襲来してくるか分からねえからな、この夏休みを利用してボーダーでもトップクラスの人達とかと今以上に強くなるために訓練してた」

「と言う名の近界民の世界に遠征してたんだろ？」

「ぶろう!？」

7月辺りになにをしてみたかと聞き返すと、少しだけ間が空いた。

出水から発する電磁波やオーラなどが少しだけ揺れて説明中にも揺れまくるので嘘だと見抜き、なにをしてきたか当てると吹き出した。

「おまつ、おまつ!!」

「なんのことかな〜私達は色々と戦術を覚えたりしてたんだよ?」

「いや、もうそういうの良いですよ。」

近界民の襲来する場所を誘導する装置とかこの前出水に話した事とか倒した近界民回収してたりするのを考えれば、近界民の世界に行く船とかボーダー隠してもおかしくないです。何回かどころか、あのクソデカイ建物が出る前からあるボーダーの頃から近界民の世界に何度も行ったり来たりしてるんですよね?とつともう襲いませんの和平交渉とかしてきてくださいよ」

「……言ったの?」

「こいつ、自力で当てやがったんすよ」

「……」

惚ける国近先輩だが、別に隠しても特に意味は無い。

余りにも知りすぎているので出水がバラしたのかと聞くのだが、出水は無関係。自力で考えて、当てたことを聞けば大きく目を見開いた。

「あれ持っててここまで分かってるなら、スカウトを」

「この前、それやって無理でした。」

三雲、頼むからそういうのをサラッと言うのをやめてくれ。ほんと、心臓に悪い」

「いや、それよりも近界民の世界でドンパチやってる方が心臓に悪いだろう。流血沙汰だろう?」

「だから、なんで分かるんだよ!? お前、人の心でも読めるのか!」

「割と本気を出せばそれとなく読める、占いで未来も見える。なんかこう、出水にはその内、素敵な出会いが待ってる」

「マジで……もしかして、おれにかの——」

「男だ」

「ガツテム!!」

出水に素敵な出会いが待っている。具体的に言えば馬鹿が一人増える。

誰とは言わないが多分あの子だろうなと頭に浮かべるが、彼女のな意味での出会いじゃ無いので全力で落ち込む。少なくとも、後二年は彼女は出来ないぞ。

「じゃあ、私はここで」

「もう行くの?」

「これ以上、話をしていたら出水がなにかやらかしそうなので。」

それに太刀川隊で遊びに来ているんですから、私が居たら邪魔でしょう」

「じゃあ、お前もボーダーに入れよ。太刀川さんに推薦するからさ」

「それは絶対に嫌だ。じゃあ、また新学期に……ここでは楽しく会話をしたと言うことで」

「うーん、それがいいよね。じゃあ、バイバイ」

「あ、もしかしたら夏休みの宿題」

「それは自分で解決しろ」

逃げるようにそそくさとゲームセンターを後にする。

このまま彼処にいると、お互いに余計な事をポロつと言いそうで怖い。後、太刀川さんにボーダー入れとかしつこく言われそうだ。というか、普通にサイドエフェクトと言いかけたからなあの人。

「……まだ、消えてないな」

太刀川隊に夏休みで会っただけでも充分な気がするのだが、まだ私には色々な出会いが待っていると占いに出ている。

なにかまだ出会いがあるのかと考えていると曲がり角で帽子を被った可愛い女の子にぶつかつた。

「あ、ごめんなさい」

ぶつかってバランスを崩し、尻餅をついた女の子は直ぐに私に謝る。

私は女の子とぶつかった際にバランスを崩すどころか一步も動いていないので、逆に心配になり手を差し伸べる。

「大丈夫か？」

「は、はい。すみません、前を見てなくて」

「茜ちゃん、走つちやダメよ……申し訳ありません」

女の子は私の手を掴み、立ち上がると可憐な何処かで見たとある女性が近付いてきて、女の子をメツ！と叱りつけ、私に頭を下げる。

「怪我が無いなら、それでいい。私も前を見ていなかった」

特に怒る理由も無く、騒動を起こしたいわけでもないので穏便に済ませる。

しかしまた、ここで一つ面倒なことが起きてしまう。

「玲、茜、先に行き過ぎよ!!」

「くまちゃん、ごめんね。茜ちゃんを追いかけていたら、つい」

「すみません、熊谷先輩」

手に袋を持った熊谷が二人を追いかけようやとやって来た。

先々進む二人を怒るのだが、謝るのですんなりと許すと視線を私に向ける。

「三雲くん!？」

「熊谷、出水達と同じく部隊で遊びに来たのか？」

「ええ、そうだけど……出水達ってことは太刀川さん達も居るのね」

「ついさつきゲームセンターにいて、景品回収を手伝ったところだ」

「一番大きいサイズの袋、パンパンじゃない！どれだけ使ったの!？」

「1500円」

「や、安い……元どころか利益が取れてる」

目押しをすれば簡単に手に入れることが出来るからな。

「熊谷先輩、この人と知り合いなんですか？」

「ええ、同じ高校で防衛任務で休んだ際にノートとか貸して貰ったりしてるのよ」

「そうなの？くまちゃんは何時もお世話に……同級生？」

「クラスは違うが、同じ学年です」

「……くまちゃんが何時もお世話になっています」

「……正直に、言ってくれ」

「……先生かと思っただわ」

顔が手塚国光なので老けている自覚はある。

「……最近、高校の友人と会っていなかったのでそういう会話をしていないが改めて老け顔なのを思い知らされる。」

「そうか……」

太刀川隊に続き、まさかの熊谷がいる那須隊と出会うとは本当に今日は色々とお会いがあるな。

第9話

「ごめんなさい」

「構わない……この前、通報されかけた時よりはましだ」

先生に見えた発言に若干落ち込む。

老け顔なのは自覚しているが、銃手の一位の方が老けている。ああ、そうだ。そうに決まっている。

某支部の支部長が、何処の中佐に似ているが銃手の一位もそれとなく何処の中佐に似ている。顔が手塚だから老けているのは認めるが、私はナンバー1じゃない。

「あ、あの老けて見えるんじゃないやなくて大人っぽく見えるんです！

三雲さんはクラス男子と違って、何処か落ち着いている雰囲気です大人っぽいんですよ！」

落ち込む私を励ましてくれる女子中学生もとい日浦茜。

素でそう言うことを言うと、色々ややこしくなるぞ。いや、本当にややこしくなるぞ。

「ありがとう……とところで、さっき走っていたが何処に向かうつもりだったんだ？」

「あ、そうでした！本屋に行つて、本を買わないと！」

「だから、走らないの！」

これ以上はと気持ちを切り替え、急いでいた理由を聞けば走り出そうとする日浦。

熊谷が腕を掴んで止めると、可憐な女性こと那須玲がシヨツピングモール最上階にある映画館のチケットの半券を見せる。

「オペレーターの小夜ちゃんが風邪を引いちゃつて……前々から皆で一緒にこの映画を見ようと約束をしていて、三人で見るのは申し訳ないから中止にしようとしたのだけど、小夜ちゃんがそつちの方が悪いつてなつて」

「調べてみたら、この映画、小説化してたんです！折角だから買おうつてなつて」

「まだ夏休みがあるからもう一度……いや、すまない。忘れてくれ」

風邪が治つてから、もう一度見に行けばと言いつつになつたがやめる。

那須隊の隊長である那須玲は病弱（トマホーク）だ。ボーダーでもぶつちぎりの病弱で、トリガーを使ってその病弱な体をどうにか元気にすることが出来るかどうかの実験に付き合っている。

なにかと蒸し暑い今年は雨も多く、油断できない。外を出回れない病弱な那須にとつては天敵な季節で、防衛任務等のボーダー関係の事をしていたり、つい最近まで出水達が近界に遠征していたのを考えれば、A級上位陣が居ないのでシフトの穴埋めに夏休み

の学生が多いB級隊員が多く入れられ、那須の体調が良くて皆で映画を見に行くこと出来る休日、しかも夏休みなので一日あれば良い方なのかもしれない。

「配慮に欠けた事を言ってしまった、すまない」

空気を読まない事を言ってしまった。私は頭を下げて謝ると慌てる三人。

「べ、別にあんたがそこまで謝ることはないわよ」

「そうですよ。今回はダメでしたけど、また次があります」

「今度は四人で来れるように、頑張るから三雲くんが気にしないでいいのよ」

「次、か……」

今回はもう無理とキツパリと諦め、次を見据えている三人。

だが、彼女達の残された時間は本当に極僅かでチャンスも数回しかない……。

「そういうえば、三雲さんは何処に行くつもりだったんですか？」

「ああ、私は……スケッチブックを買いに来たんだ」

「あ、じゃあ行くところは同じですから一緒に行きましょう！」

「おいおい……」

「三雲くん……時期が時期のせいか、油断すると変なのが玲と茜に近付いてくるのよ」

「よし、行くぞ」

男避けに使われる事については、色々と思うところがあるがわざわざ那須達に聞こえ

ない様に言ってきたから熊谷の苦勞が見える。そういう感じのことをこういう風に頼まれれば断りづらい。後、まあ……うん。

とにかくボーダーが三門市にあるのと大規模侵攻の影響かどうかは分からないが、この街はやけにガラが悪い調子に乗ったパリピが多いので使えるのならば使ってくればいい。引き寄せに使うのは嫌だな。

「そういえば、映画はどうだった？」

本屋にまでそこそこ距離があり、無言でいるのも気まずくあれなので、とりあえずは手頃な話題を出す。

「面白かったけど、ネタバレになるから何処がどうかは言えないわ」

「くまちゃん言うとおりね。この映画はちゃんと映画館で見ないと面白くないわ」

「衝撃のラストが、三雲さんを待ち構えています！」

「……私、そういう類の映画の予告は嫌いだ。うん……」

最後の10分、騙されるとか忘れていたあの頃の青春とか予告あるあるは割と嫌いだ。

もう何番煎じか分からないし、大体が予告詐欺だし、地雷臭しか漂わない。

「三雲くんは、映画を余り見ない方なの？」

「そこそこ見る。結婚式前夜の独身パーティではしゃぎ過ぎた末になんかワケわからな

い事になった海外の映画や有名な若手イケメン俳優を使わない内容で勝負している謝罪の映画とかが好きだ」

「コミカルな映画が好きなのね」

「かもしれない」。

最近は映画監督が手を抜いているのか原作者に少しばかりのお金を払えば1から考えずにすむから便利だとやっているのか知らんが、話題性を出す為だけに役と合わない若手イケメン俳優を起用してアクションバトル要素が強い漫画を原作とした実写をバンバンと出したりして面白味が欠ける。この数年、そういう映画やアニメの総集編と言う名の映画や海外の有名な映画会社のシリーズばかりで見に行かずにDVDレンタルで済ませている」

「確かにこの数年、そういう映画ばかりね」。

底無し沼に沈めても猛吹雪で荒れる雪山で気絶させて捨てても危険だからと呼ばないようにしても二人がかりで挑んでも警察の権力で捜査を打ち切ろうとしても犯人に仕立てあげてもなんだかんで謎を解き、キック力を増強する靴とか足代わりのスケボーなんかの凄い道具は一切無しで身一つで行動して細かなトリックで逆に犯人を騙して陥れたりする男性アイドルで有名な事務所が何人も主役を務めた推理物の実写が成功してるけど推理物を見る人を絵や設定で引き付けるんじゃなくて文章にしても内

容が面白いからで成功するのよ。派手なアクションやバトルがメインの漫画の実写はCG混ぜ合わせた際にかんりの違和感があるし、アニメーションの方が迫力があって、コスプレ感が強くて真剣味に欠けるわ」

※個人の感想や意見です。

「あんた、意外とそういうの詳しいのね……」

「熊谷は私をなんだと思ってるんだ？」

「てつきりこう、夏休みを利用して富士山に登頂するとか」

「冗談はよしてくれ。」

初日の出を見に行きたいとか頼まれればするが、登山好きでもなんでもない人間が自発的に行くわけがない」

那須との会話が弾むのだが、熊谷が意外そうな顔をする。

熊谷とは基本的に学校関係でしか絡まないから、お前休日なにやってんの？ぐらいの距離感はあるのは分かるが、私はそういう趣味はない。

「ネットカフェで興味あるけど購入するのを躊躇う程に巻数のある漫画を読んだりしてゴロゴロと過ごす。それが私だ」

「三雲さんって小夜子先輩みたいな感じなんですわね」

この際だとバツサリと言い、引かれると思ったが逆に日浦に親近感を持たれた。

那須も熊谷もそうかとなんか納得し、私がどう見えているんだと思っていると本屋に到着。書籍だけでなく、文房具の類も置いており、私は直ぐに何時も使っているスケッチブックを購入した。

「これよ、これ。さっきあたし達が見てきた映画の小説……買っちゃダメよ」

私がすることを済ませ、次は女性陣の番。

熊谷は見てきた映画の原作を手に取り、教えてくれるが渡してはくれない。映画館で見に行けと遠回しに言う。

この映画、最後の10分、貴方は騙されるとかのどんでん返しを予告するタイプの映画だから正直小説とかネタバレサイトとかで見れば……いや、失礼かそれは？

「……買わないのか？」

シヨップिंगモールの映画館で上映されている映画なので、今話題の！と押されてあつさりで見つけることが出来た小説。お会計を済ませれば良いだけなのだが、那須は何故か同じ小説を数冊手に持っている。

「買うけれど……私も買おうかなって、悩んでて今日、来れなかった小夜ちゃんだけ小説だから私も読んで、それで何処が面白かったか話し合いがしたいの」

那須はなんでこうエモかったりする発言をするのかな！

4人分、全額出してやろうかなと一瞬だけ考え、それをしてしまえば引かれてしまう

と諦める。

こういうすぐく良いのを見れたから、ゴキブリホイホイを買って直ぐに帰ろうとしないで、本当によかった。

「そういえば、茜は？」

「茜ちゃんなら、他の本を見に行くって」

どうしようかと考えている那須をみて、胸キュンしている熊谷。

日浦が居ないことに気付くと那須がなにをしてくれるか教えてくれたのだが――

「一瞬だな」

なんかガラが悪いというか、チャラそうなのに絡まれていた。

占いとか恋愛心理学とか女性に需要がありそうな本が並んでいる列で絡まれている。

あれは明らかに本屋で本を買いに来ている人じゃなくて、本屋で本を買いに来ている人をナンパする目的で来ている馬鹿だな。

「茜ちゃんを助けないと」

「待て待て待て。お前がいけば更にややこしくなる」

「向こうの男性は数人だから、玲も確実に巻き込まれるわ。あたしがバツサリと」

「熊谷、お前も行こうとするな。どっちが行っても、君可愛いねとかそういうの言われて、ナンパされてちよつと揉める未来しか待ち受けてない……こういうのは野郎の仕事

だ」

目を離れた一瞬の隙にナンパされている日浦。

読モと言つても何一つ違和感の無い可愛い女子だが、中学二年の14だぞ。コンプライアンスとか……考えていないだろうな。

那須と熊谷は直ぐに日浦を助けに行こうとするのだが、ナンパをしている男性は数名で熊谷が行こうが那須が行こうが二人も一緒に遊ぼうぜえ的な事を言われるが、嫌ですと断りまくつて逆ギレされるパターンだ。

日浦を助けようと必死になっているが、こういう時の為に私だろうと私が日浦の元に歩く。

「へえく占い好きなんだね。オレも占いが好きでさ、君何型のなに座なの?」

「占いが好きとかそうじゃなくて」

「あ、じゃあ興味を持ったんだね。相性占いとか色々もあるけど、どれをやってみる?」

「日浦、決まったか?」

「あ、三雲さん!」

本棚の一番上に置かれている占いの本を取つてあげて、これ君が読みたかつたやつとか言つてナンパする無駄に用意周到な方法でナンパしているチャラそうな連中。

私が日浦の前に出ると、日浦はよかつたと言う顔をするのだがナンパ連中は野郎がい

るのかと電磁波が若干乱れ苛立っており、品定めをするかの様に私を見る。

「他の皆はお会計を済ませたから、後は日浦だけだ。買いたい本はあったか？」

「……あ、無かったです！」

他の皆が買い終わってるなら、もう行かないと」

私の即興の嘘を見抜き、極々自然とこの場から去ろうとする日浦。

これで決まりだ！と思つたのだが、ナンパ連中は思つたよりもしつこかった。

「ええ、買い終わったのなら良いじゃんか。」

他の人達も連れてさ、占つてみない？誰と誰が相性が良いのかさ」

「案外、俺達と君の相性もいいかもよ！」

なんかこう露骨かつ強引に止めてくる。

あいつらの手中に占いの本はあるから、仮に日浦が教えたとしてオレと君の相性W i

n-Winだねとかそういうの言いそうだ。

「てか、彼氏なの？」

「ち、違います！」

あ、こら、今は嘘つけ。

「だったら、俺達と遊ぼうよ。そんな面白くなさそうなメガネ掛け機の大学生なんか放つてさ」

そうですと頷いておけば楽に話が進めたが、否定した為にややこしくなった。

絡んでくる奴等と私を比べたのか、日浦は嫌そうな顔と嫌悪感をチャライ連中に向けてのだが余り向けすぎると逆ギレされてしまう。この手は余り……いや、本当に使いたくはない。だが、ことがことで私がやると言ったんだから日浦を助けなければならぬ。

メガネ掛け機と言われた事もムカつくので、私はメガネを外してメガネケースに入れて日浦の手を握る。

「いくぞ、茜」

「え、あ……」

「ちよ、ちよつと」

「なんだ？」

「い、いえ……なんでも無いです」

「なら、いかせてもらおう」

日浦を連れていこうとすると、止めてきたが強く睨むとあっさり引いた。

ナンパをするなどは言わないがやり方が強引で、嫌がる相手の手を引かないと煙たがれる……だから、夏休みに野郎だけなんだ（震え声）

「すまん、少々手こずった」

「あ、ううん……私達だともっと時間が掛かっていたわ」

日浦を連れ戻し、那須達の元に戻ってきた。

最終手段を使つたし思いの他、時間がかかってしまったと謝るのだが那須は特に気にしていない。

特になにも煽られずに済んだので私はメガネを取り出す。

「三雲さん、コンタクトにしないんですか？」

「目が悪いからメガネをしているんじゃないかと、目が良すぎるからメガネをしているんだ」

ジッと私の顔を見る日浦。

メガネを外した方がイケメン度が上がり、心理学を学んでるメンタリスト兼マジシャン志望の中学の友人曰く置鮎ボイスと混ざりあつたのかイケメンビームがめっさ出ている。

ザ・メガネな修もコンタクトに変えればイケメンビームが結構出る。修の事をよく知っている女子の前でメガネを外すと、好感度が一瞬にして上がる。修の人の良さ+メガネを外せばイケメンだつと言う驚愕の事実を合わせればフラグが絶対に立つ。修は誰とでも合う。

「ところで、占いの本を買っておくか？」

また戻ればややこしいので私が買った方がいい。

修の事を頭の片隅に置いて、日浦に聞けば首を横に振った。

「あ、大丈夫です。面白いかな？つて見ようとしただけで、そこまでは……」

「そうか。もし買うなら、心理学に基づいた物と占星術の占いがあるから取り敢えずで買わず」

「三雲さん、詳しいんですね！占いとか、出来るんですか？」

「各国の占いをごちゃ混ぜにしたオリジナルの占い出来る……なんか不吉な相が出てくる」

「……え!？」

「ちよ、ちよつとそれどういふことなの!？」

「道具とかが無いから、これ以上は分からないな。」

今年の学園祭でこのオリジナルの占いで一儲けをしてやろうかなと考えているから、来てくれたらちよんとする」

日浦から死相とは関係無いが、不吉な相が出ている。

その不吉な事がやって来るのは今から約一年半後で、不吉な相が具体的になんなのかは知っているが今、これ以上やり過ぎれば某セクハラエリートと同じなんじゃと見られる。炭火焼肉で最高の焼け具合を見抜くぐらいしか使えない。

「不吉な相つてなにが起きるんですか!？」

「安心しろ、交通事故に遭うとか肉体的苦痛じゃなくて一年半ぐらいは不吉な事が起きないのだけは分かる」

「……くまちゃん、三雲くんつてもしかして」

「迅さんとは違うわ。出水達から聞いたけど風間さんの所の菊地原と同じので、三雲くんは目らしいわ」

私の発言を聞いて何処ぞのぼんち揚げと同じサイドエフェクトをもしかしてと考える那須だが、熊谷が違うと否定する。

ボーダーに入るつもりも無い事も言ってくれてこれ以上はサイドエフェクトがどうかは触れず、オペレーターへのお土産である小説を購入し、そろそろゴキブリホイホイを買いに行かなければと那須達と分かれてドラッグストアに向かった。

「何処ぞの実力派エリートと違い、実力派でもエリートでもない私が……未来を変えられれば、いいなあ……」

日浦茜の未来はどうなるのか、私のサイドエフェクトは遠くのものや電磁波が見えたりするだけで未来すら見通すレベルの千里眼じゃないのでどうなるかは分からないが出来れば変わって欲しい。

第10話

那須と太刀川さんと日浦と国近先輩とのエンカウントを除けば、特になにかしたというわけでもない夏休み。

修と千佳に縁日で遊んでらっしやいついでにたこ焼きと焼きとうもろこし買ってきとおつりをお小遣いにしていいと一万円を投資したり、父さんが働いているドイツに行ったり、泣きついてきた米屋を見捨てたりと色々あったがあの日よりも刺激的な事は特になかった。

「あくもうやだ……なんで今日から学校なんだ」

「8月が終わったからだよ、兄さん」

大きなあくびをしながら、自室のドアを開き洗面台に向かうと修が歯磨きをしている。

修も夏休みボケなのか何時も以上に眠そうな顔をしており、非情な一言を私に叩きつける。

「1ヶ月半じゃなくて、一週間をチビチビと……いや、仮に野球部とかが甲子園に出たら学校の生徒は行けとか言う謎のあれがあるな」

「兄さんの行っているところって、スポーツ強かったっけ？」

「そういうのは特に無い。」

運動だけは無駄に出来る奴は多いが、そういうのはボーダー隊員で近界民と戦うのに体の動かし方を覚えてるとか、戦つてたら動きを覚えることが出来たとかそういう感じのやつが多い……恐らく、今日運動は出来るけど勉強が残念な奴が土下座してくる。もうなんかそんな未来が待ち受けてる感じがする。私の占いがそう言っている。というか、昨日一昨日と泣きつかれた。流星にもう高校生なんだからと見捨てたが、二日……無理だな」

米屋が全く宿題を手につけていなかったと三輪が電話してきた。

宿題を丸写しすれば筆跡や文章系の問題の回答で丸写ししたとバレてしまい程よい人数で時折問題を間違わなければバレルとSOSを求めてきたが、見捨てた。米屋以外は勉強できる奴しかいない三輪隊ならばなんとかな……らない可能性が高いな、うん。「修、間違つても宿題を写させてと泣きついてくる同級生に手を貸すな。」

百歩譲つても、夏休みの日記の天気とか美術館に行った際のレポートしか写させるなよ」

「流星にそんな事はしないって！」

「だが、何だかんだで宿題が終わるまでは付き合うだろう？」

「……」

「目線を合わせ……なくても、いいか。そういうところが修の良いところだからな」

今日は私も修も始業式を終えて、家に帰って昼を食べたら夏休みの宿題処理だな。

昨年まで私はそういうのは無かったのだが今年からはそういう未来がやってくる。100%で回避できない未来だ。

口を濯ぎ、顔を洗って意識を無理矢理叩き起こして朝食を頂き原付で学校へと向かうと、原付を止める場所に三輪がスタンバってた。

「……すまない。色々と頑張ったが、間に合わなかった」

「そうか……具体的に？」

夏休みの宿題、やっぱり無理だったか。

「数学はオレが終わらせた。」

日記や副教科なんかは終わっている。残り是世界史と英語と国語と化学で、国語だけは全て陽介に終わらせた。

英語は進学校に通っているうちの隊の奈良坂がやってくれたんだが、途中から英語を筆記体で書いてしまったせいでやり直さなければならぬ。筆記体とはいえ答えを最後まで書いているから、そこは全て陽介にやらせる」

「……読書感想文はどうやった？」

読書感想文は学校側が指定した本を読めというもの。

指定さえされなければハリポタの映画を見るだけでそれっぽく偽装できるが、指定された本にはハリポタが入っていない。芥川賞を受賞したかなんかは知らんが見たいとは思えない小説しか無かったぞ。ぶつちやけ、漫画で読書感想文を書いた方が長文書ける自信がある。

「何処で悪知恵をつけたかは知らないが、オークションで買った」

「通販サイトのレビューと本の巻末の後書きだけで、8割は完成すると教えたのに!」

「夏休みの宿題が思ったよりも売れていた……暇人にはちよつとした小遣い稼ぎになるみたいだ」

「小学校の読書感想文を賢者の石く謎のプリンスで六年間乗り切った私が言える義理じゃないがこういう感じの宿題はもうやりたくない。中学の頃、指定された本を読んだがなにが面白いのか分からないからクソレビュー並にボロクソに書いたときがあった」

「お前、そんな事をしてたのか……」

漫画のなにを好もうが、私の自由じゃないか。

カイジの金は命よりも重い!は深みがあるのに、有害指定扱いたしたのは今でも恨んでいる。諦めなければという希望よりも、堂々とした現実を叩きつけて絶望に叩き落とすのもありだと思う。

「まあ、来年はこうならないように頑張る……カプトボーグの様なことにならない為に
も」

「カプトボーグ？」

「気にするな。と言うよりは見るな。あれはもう製作陣営が狂気を放っているし、真似
をしたらいけない」

夏休みが終わるといふ時の謎のテンションでカプトボーグの様なことをしようとす
るボーダー隊員、何時か現れそうだ。

「うっす」

「出水、おはよ」

原付を止め、下駄箱に行くと出水が挨拶するので返す。

すると出水は私の首をガシツと腕でホルドする。

「お前、夏休みなにしてた」

「家とジムの往復をし、単身赴任の父親の所に家族で行ったり、中学の友人と遊んでた」

「やっぱりか……」

「なにがやっぱりなんだ？」

「こいつ、おれ達とまともに遊んでねえんだよ。」

9日、お前達が防衛任務してる時にショッピングモールで会っただけでそれ以外会っ

てない」

「そういえば、俺も何度か電話したり連絡取ったりしたけど、会うのは久々だな」
「基本的に引きこもっていたからな」

お陰でゲームが捗ったぞ。

龍が如くのサブイベント全て消化できたし、色違いのヒトカゲのXY両方の理想個体を作れた。

しかしサイドエフェクトを使っても、スパロボでの攻撃が当てることは出来なかった。

「引きこもらずに遊べ！」

「熱中症でぶっ倒れるわけにはいかない!!」

「じゃあ、海とかプールとかだ! 四塚マリワールドとかあるだろ!!」

「プールとかでメガネを外すとそこそこ疲れる！」

と言うよりは野郎だけで行って良いのか? 中学生ならまだしももう高校生で浮いた話……まさか、ナンパか? ナンパなのか?! 悪いこととは言わんが、私はそういうのはノーセンキューだ! 巻き込むな!

「わかった。熊谷とか光とか小佐野とか国近先輩とかお前が知ってる人を誘う！」

一回、ボーダーのプールで見たけどスゴかったぞ、熊谷は。競泳水着なのが中々で」

「なんの話をしてるのよ!!」

「どう?」

出水と色々と言い争っていると、熊谷が乱入してきて出水のお尻に蹴りを入れた。蹴り飛ばされた出水は倒れるように下駄箱に額をぶつけて少し涙目になる。

「じ、迅さんは何時もこれを受けてんのか」

「迅さんには今度からグーでいく予定よ。それよりも、なんて話をしてるの」

「こいつと夏休み全然遊んでないってなったんだ。」

現に夏祭りの時、こいつ誘っても普通に来なかっただろ?少しは遊べってなったんだよ」

「そういえば、あたし達も9日にシヨツピングモールでしか会わなかったわね」

全く知らないところで実力派エリート之首が絞まっているが気にしない三人。

夏休みの出来事を思い出してみるが、9日以外はこれといって私との絡みはなかった。

「三門市はそれなりの大きさとはいえ三雲、お前どれだけ遭遇率が低いんだ?」

俺も任務以外では余り外に出なかつたが、用事で出掛けたら誰かに会ったりしたぞ」

「私の主な行動範囲は蓮乃辺市側だ……三門市で遊んだり買い物したりする、していた場所は警戒区域内やボーダーの本部が建っているところだった」

ボーダーが現れて、この街で活動することが決まり一部の地区が閉鎖された。

弓手とかの警戒区域や今のボーダーの本部が建っている場所に住んでいた蓮乃辺市の結構お高目な偏差値の中学に通う友人と遊んでいたが、ボーダーがそこを近界民撃退や本部に使うからと立ち入り禁止区域になった。

そのせいか稀にボーダーの本部を見ると苛立つ。その友人達はボーダーがいるとはいえ危険という考えを持っていて、警戒区域にして申し訳ないや土地を使わせてもらっているの意味合いを込めたお金をボーダーから貰い、別の地方に行つたので関係がリセットされた。割と仲の良い友人だったので結構辛かった。

「っ……近界民」

「いや、近界民と言うよりはボーダーだ。

一部地区を近界民を誘導し撃退する場所にするため立ち入り禁止の閉鎖区域にして、色々やっている癖に……って、話がズレたな。プールはメガネを外さないといけないから嫌だ」

重たい会話になると怒りを露にする三輪。

その友人達は生きているし、新天地でなんやかんや頑張っているっぽいから問題はそこじゃない。

本題からそれてしまったので、とりあえずは断る。

「お前、どんだけメガネを外したくねえんだよ」

「というか、もう時期過ぎてるだろ。」

「国近先輩誘うとか言っているが、来週修学旅行で沖縄に行くから不在じゃないのか？」

「なんかジェットスキーでボート引つ張つてくれるやつとか遊ぶのメインの修学旅行だと言つてたぞ、担任が。」

「そうだった!!」

「2年にはオペレーターも隊長している人が多くいる。」

「3年は進学就職なんかもあるから修学旅行中は俺達1年や大学生組がメインで防衛任務に入らされるから、そう易々と遊べない」

「あく忘れてた……」

色々と遊んでやろうかと考えていた出水。

三輪から今月は特に忙しいので無理だと教えられるとスゴク落ち込んでいる。

「出水、一緒に遊んだり色々と体験したりするのだけが夏休みの醍醐味じゃない」

2学期は学生にとってなにかと大事な時期。

就職組・進学組、修学旅行に学園祭と言った行事予定ととにかく多くて、その皺寄せの防衛任務と色々があると分かれば残念そうな顔をする。夏は終わってしまったが、夏

が終わったから出来る醍醐味とかある。

「夏休みが終わった後、余り遊べなかった友達と思い出話を語ったりするのも楽しいだろう」

「三雲……そうだな！」

互いに会うことが出来ないからこそ、積もる話が出来上がる。

それを語る楽しさがあつたことを出水は思い出してくれたのか携帯を取り出して、夏祭りの思い出なのか白と黒と灰色の極細縦縞浴衣を来た脛毛が見える太刀川さんがグデーと椅子に座っている写真を見せる。

「もうこれ、三十路過ぎのそこそこのおっさんだな」

「まだ二十歳にすらなつてねえんだけどな……で、問題はこの後よ」

「？」

動画じゃないのに写真でこの後？

どういふことなのかと見ていると出水は写真をスライドさせ、如何にも清楚系な浴衣を着た美女と歩いている太刀川さんの写真が出てきた。

「この人は月見蓮さん。」

三輪のところのオペレーターで、太刀川さんの幼馴染みらしいんだけどよ……どう見える？」

「秘密のケンミンショーで見る関西地方に多い美女と野獣カップル。

顔は割と普通だったたりするけど、この人面白いところがあるからそこが好きなのと付き合ってるあれだな」

「ツプ、い、生駒さんと同じ事を言いやがった……」

おかしいな、戦闘に置いては絶対の信頼はあるものの普段はダメな人と出水がはつきりと言いつ切る人だ。

隊長の報告書とか書き忘れてたとか成績悪くて補習で防衛任務出られなくなったとかやらかしたエピソードを色々と聞いているのに、なんかそういう感じの関係に見える。いや、そんな感じだからこそ真面目な人がしつかりしなさいよと来るパターンか？「佐鳥の射的ツインズナイプとか影浦先輩がお好み焼き屋で営業スマイルしてたとか色々面白かったぞ」

「その日、玲の体調もよかったから、チーム全員で浴衣を着て花火を見に行ったわ」
行かなかった、ではなく行けなかった事を少しだけ悔やみながらも出水と熊谷から話を聞く。

転生特典がボッスン並の手先の器用さのせいとか祭りで滅茶苦茶景品集めるし、サイドエフェクトでくじに当たりが一つも入っていないの見抜けるせいとか一部出禁くらったりするんだよな。

「因みにそれがこの時の那須隊の写真だ」

「なんで持つてるの!？」

「槍バカ↓奈良坂↓那須經由で手に入れた、どうだ三雲?」

「あー……うん、似合ってるぞ」

写真を撮っているのは、奈良坂（会ったことない）だと思う。

これが夏休みのお宝だと言わんばかりに那須隊の4人（オペレーターとは顔を合わせたことない）が手を繋いで、これでもかというぐらいに笑っていた。どう言葉にすれば良いのかと考えるも浮かばず、とりあえず、似合っているを言うとならぬ写真は写真をスライドし、那須隊の個人写真を見せてくる。

「どれが一番だ?言ってみろ」

「選ぶに選べないな。」

全員元が良すぎるから似合いまくっていて違和感を感じない。浴衣的な意味でも、浴衣を着ている人的な意味でもな」

「!？」

「お前、熊谷が隣にいるんだぞ?」

素直な感想を述べると顔を一瞬で真っ赤にする熊谷。

御本人が真横にいる+恥ずかしげもなく普通に言ったのを出水は驚くが、恥ずかしい

要素なんて特に無いだろう。

「今更、本人を前にしてそういうの言っても特に問題ないだろ？」

この四人、全員顔面偏差値高いし、それぞれ方向性が違う女性らしさがあるし、熊谷に至っては自慢できるぐらいにスタイルに恵まれているんだ。悪評でもなんでもない好評の事実を述べてなにが悪い？」

「……な、なにを言ってるのよ……っ！」

熊谷は恥ずかしくなったのか、急いで階段をかけ上がった。

だが、上履きに履き替え忘れていたのか直ぐにUターンをし、下駄箱で履き替えてからももう一度階段を駆け上がった。

「そう言うこと、よく素で言えるな」

「熊谷を人として好きという感情を持ち、異性として好きとは見ない。

女性としてとかの感情を0にしていることにより発揮できる。因みに私の弟も似た感じの出来るぞ」

「お前とお前の弟、どうなってんだ!？」

素で女性を褒めたりするぞ。

好きな人だからとかそういう感じのものないし、変な距離感なんかも無い。悪意がなく、善意の塊だが個人的な意思が詰まっている。怒るべきところで怒れるから、本当に

立派で……未だに兄として自分は不出来じゃないかと思う節がある。

「うーすつて、お前等もか！出水はまだしも、秀次と三雲は珍しいな！」

熊谷が去つていき、修についてチラツと語ると汗だくの米屋がやつて来た。

「陽介、三雲と話をつけておいた。昼飯を食い終わつたら図書館に來い！」

気軽に挨拶する米屋に若干キレ気味に午後の事を言う三輪。

なんか言葉に愛があると感じてしまうのは私だけじゃない気がする。

「いや、その前に教室に行かねえと!!後、一分でチャイム鳴るぞ！」

何時も通り三輪をサラツと受け流すのかと思つていると、何時も以上に慌てる米屋。

急いで下駄箱から上履きを出して履き替えて走り出していき、それを見た出水の視界に時計がうつる。

「げ!?何時の間にかこんな時間に!？」

やつべーよ、新学期早々で普通に登校したのに遅刻とか笑い話になんねえ！」

下駄箱前でやつていたぐだぐだな時間は思ったよりも長かつたようで、時計の針がチャイム2分前を指していた。

何時も通りに登校したのに、もうこんな時間になつている事に驚きつつも靴を履き替えていた出水は走り出した。

「……新学期早々に遅刻か」

「三雲、諦めるな」

「私達の教室は一番端で1、2分じゃ……あ、言っている間に鳴った」

あの時計、若干ずれていたのか。

高校一年の2学期初日は、ちゃんと登校したのにも関わらず教室に行くのを遅れてしまい、まさかの遅刻で私と三輪は新学期を迎える。因みに出水もアウトで米屋はスライディングで駆け込み、ギリセーフだったが、夏休みの宿題が出来ていなかったので普通に怒られた。

第11話

「三雲、三雲！」

「どうした？宝くじでも当たったのか？」

「当たってねえよ！てか、当たったら言わねえから」

「300000ぐらいならお世話になってる人に飯おごるぐらいしなないとダメだろう」

初日に遅刻と米屋以外にも何名か宿題を終えていなかった以外は割と平凡な2学期。

2年（原作開始時18歳組）は沖繩へ修学旅行に行っており、美ら海水族館とか楽しんでる一方、家に帰ろうと靴を履き替えようとする私の前にやって来た出水。

こっちはとつと家に戻ってテイルズオブエクシリア2をしたいのにな駄にテンション上がりまくりな出水の足止めをくらう。

「まあ、確かに東さんに飯を奢らないとって思う時もあるけどって違う……良いもん、見せてやるよ」

「？」

出水の言う良いもの、まさか千発百中ならぬ万発千中Tシャツかと一瞬だけ身構える。

しかしそんなもんじゃないと言わなければかりに出水は携帯を取り出し、グループLINEを使いビキニ姿の国近先輩の写真を見せる。

「Sch・n, vor allem die Brust Es ist ein lockerer, flauschiger Körper……ええもん見れた」

「なんかお前、色々とおかしくなってるぞ……当真先輩、素晴らしいものを送ってくれてありがとう。流石はNo.1狙撃手だけ。スナイプが上手い」

今年、割と引きこもっていたのでこういうのを見る機会が無かったMIZUGI。

中々に良いものを見ることが出来たと出水に感謝をしていると、更に追加の写真が送られてきた。

「この人は？」

顔は知っているが、会ったことの無い人の写真が送られてきた。

「今先輩だな。確か今年の1月にスカウトされた人で……」

「大和撫子系か……」

普段関わっているボーダー隊員は野郎ばかり。

それ以外も可憐とか清楚とかと縁遠く、若々しい母はアグレッシブで千佳は修と癒しらしい癒しは……まあ、あるにはあるのだが、それはそれこれはこれでありこういうのは割と癒しになる。

「そういえば、私達修学旅行東京らしいぞ」

「えく……オレ、中学の時、東京で最終日に千葉県で」

「それ以上は言うな！」

修学旅行で思い出した私達の行き先を言うと、嫌そうな顔をする出水。

東京で千葉県で修学旅行と言えば彼処しかない。言えば色々ややこしそうなので、問答無用で黙らせるがそれでも言おうと必死になる。

「2泊3日で初日、新幹線で東京行つて雷門とかの観光、2日目は午前は自由行動からの千秋楽、3日目、TDLだった」

「間に入っている相撲のインパクト大きいな。」

私のところはスキー旅行だったから、行きたくないと言つて行かなかった」

「お前、そういう変なところでゴネるよな」

「いやでも、行かなくてよかったと思うぞ。」

初日、事故のせいで遅れてきたけど十数分だけでも滑るぞと基礎を適当に教え込まれたり、滑れない奴がマジギレしたり、いぎ、お土産を購入といつてもホテルのちやつちい売店で批判だらけで翌年から変わったと聞いた」

「あくそりやちよつと嫌かもな」

小学校の時は普通に京都観光。

しかし私の年だけ何故かトランプもUNOも持ち込むの禁止というふざけたルールで、別のクラスのやつはホテルのテレビをつけたり消したりしてなんか別途で料金がかったとかあったな。

「どうも来年は三泊四日にするらしいぞ」

「え、二泊三日じゃないのか!?!」

「最終日にTDLに行けばナイトパレード見れないとかいう分からないことでもない謎のクレームが入り、三日目、丸一日TDLらしい」

「予算とか……」

「米屋、光、裏金で」

「おい、やめろ」

割と生徒数の多い第一高校。

3泊4日で団体や修学旅行割引があっても、予算がそこそこ思うかもしれないがそこはほら、ボーダー推薦枠というなの恐らく賄賂的な物を渡しているなにかがあるのだろう。

出水が全力で私の発言を止めていると、ピロリロリンとまた写真が送られてきたので会話を強制終了してその写真をみる。

「出水と三雲くん、今帰りなの……なに見てるの?」

「なんか修学旅行最高とかいう写真が、ボーダーの先輩方から」

「国近先輩から?」

「やめろ、見るんじゃない!!」

なんとも言えない写真を見てみると、熊谷がやって来た。

声をかけられた出水がビクツツとしてしまったので、修学旅行関連と上手くフオローを入れるのだがそれが悪手となり熊谷は出水の携帯を覗きこんだ。

「あんたら……」

目が死んでいる今先輩と国近先輩の水着写真という名の比較画像を見られた。

熊谷はなにを見ているんだと物凄く白い目で見られるが、悪いのは私達ではない。

「ボーダーって、顔面偏差値高いけど胸囲の偏差値は低いな」

分かっていった。こんなことを言えばどうなるか分かっていったことだが、私の発言は重く熊谷にグーで殴られた。

避けようと思えば簡単に避けることは出来た。なんならクロスカウンターを叩き込む事も出来たが、避けることも引くことも返すこともなく、一撃を叩き込まれた。

「み、三雲、大丈夫か!?!」

「問題、ない。」

出水、ノブレスオブリージュと言う言葉を知っているか?」

「ノブレスオブ、リージュ？」

「優れた者には優れた者としての義務がある、と言うことだ。」

お前はボーダーではトップクラスかもしれないが学校では中の上……上の中の私が、お前の代わりに犠牲になる義務を、名誉をは、たし……た、ガクリ」

「なに最終回前に見せ場貰って死ぬ名敵キャラみたいなこと言ってるんだ!!」

「そ、そこまで強く殴ってないわよ？」

「だが2メートルは飛んだぞ」

痛みには馴れていないが、気絶するほど痛いとかそんなんじゃないので普通に立ち上がる。

結構痛くて音が響いたが体の何処かに異常があるとかはない。

「帰るか」

色々の良いものを見れたし、最後に面白い事が起きた。今日も一日、楽しかった。

「気のせいか出水達が関わると、三雲くんがおかしくなる気がするわね」

「気のせいじゃなくて、多分あれが素なんだろ。」

こいつテストの点数も成績も良くて授業態度も真面目だけど係とか委員とか絶対にやろうとしないって三輪が言ってたし」

変なところでおかしくなった様に見える私を考察する二人。

どんなに考えても私は土壇場になっても動かなかつたり逃げ出したりする可能性の高いチキンで、本性は割とマダオである。勉強とか真面目にやらないといけないやつはちゃんと真面目にしているだけだ。

下駄箱から靴を取り出して靴を履き替えようとするので出水達も靴を履き替えようと自分の下駄箱の前に行こうとするのだがハリリと私の下駄箱から封筒が落ちる。

「……掃除当番に渡すか」

「待てや、コラ！」

「なんだ、どうした？」

「なにゴミ箱にそれ捨てようとしてんだ!!」

ハリリと落ちた水色の封筒、横に長い長方形で如何にもあれな物。

私には割と不必要な物なので、下駄箱前を掃除している掃除当番についてだからと渡そうと移動しようとするので出水が止めてきた。

「私には不必要な物だ。」

と言うよりは、大きく騒ぐな。下駄箱に入れた子に失礼だろう」

「それをなんの躊躇いもなく捨てようとするお前にだけは言われたくねえよ」

「そうは言っても、何時もこんな感じだぞ?」

「くっそ、お前がボーダー隊員だったらC級落ちるギリギリのところまでポイントぶん

取ってやりてえ」

残念だったな。

私がボーダーに入るとするならば、最短でも某カナダ人（豚）と同じ時期だしなによりも太刀川隊とはやらん。

単位を犠牲にしてまでランクを上げたいとは思わない。やつても一日一試合だけだ。

「とにかくだ、私にとっては不必要な物だ」

「お前、勇気ある告白をスゴくあつさり」と

「差出人は私の知らない相手だ……差出人は私のなにを見ている？ 顔か？ 金か？ 人の良さでないのは確かだ。

モテるだけでもありがたく思いなさいと母親に殴られた私だが、その辺は割とデリケートなんだ。私の一面しか見ずに、別の側面を見てなんか違うと否定されるの怖いんだ」

「変なところでチェリーだな」

「チェリーどころかまだ芽すら出てない奴には言われたくない。とにもかくにも、これは捨てる。一学期もそんな感じで対処してた。すみませくん、これも捨てて貰って良いですか？」

サラリととんでもない事を言いながらも、ゴミ箱に入っているゴミを回収している生

徒の元へと足を運ぶ。

ゴミ袋に入れたらとつと家に帰るか封筒もといラブレターを渡そうと差し出す。

「おお、ちよつと待つてな」

「……」

「あ、そういや今日お前が掃除当番だったな」

差し出したまでは良かったのだが、米屋が掃除当番だった。

それを見て出水は道理で今日は見ねえ筈だと納得するのだが、納得しながらも直ぐに次の行動へと移る。

「ゴミはゴミ箱にだろ？」

カモーンと私の封筒もといラブレターを超越せと手招きする米屋。

爽やかな笑顔で目からキラーンとしたものを出しており、完全に面白いおもちゃを見つけた時の子供の様な顔をしている。

こいつに今、これを渡せば確実に騒ぎが大きくなる。私はポケットに入れて逃げようとするのだが、その前に背後にいた出水に羽織締めされてしまい腕の自由が少しだけ奪われてしまい、その僅かな隙に米屋は私宛のラブレターを奪った。

「三雲のラブレター、とつたどおとおお!!」

「き、貴様ああああ!!」

ハマグチ工理事長の様に高らかに叫ぶ米屋。

私達以外にも多数の生徒が下駄箱にはいるのに、この男は叫んだ。ニヤニヤしながらだ。

私を取り返せばそれだけで済んだのだが、米屋は騒ぎを大きくした事により私の逃げ場を無くす。普段は残念な馬鹿なのに、どうしてこういう時にだけ頭が回るんだこの男は。

「マジか、誰から貰ったんだ!？」

「なんでよりによって光なんだ」

米屋によりぎわつく下駄箱前。

別に私はそこまで有名人じゃないしと思っていると、光が飛び出してきて目を輝かせながらノリノリで聞いてくる。

「出水、てめえ覚えておけよ」

「ラブレターを捨てたり、一学期もこんなだったとか言う自慢したお前が悪い」

「お前もどちらかと言えばモテる方だろう。ボーダー隊員でA級というところでもライクでもラブでも人気の筈だ」

「ボーダーのモチ具合を舐めるんじゃないねえ！」

嵐山さん、京介、奈良坂の三人は圧倒的なまでに不動なんだよ。ライクとしては柿崎

さんが雲の上の人なんだよ。

大体ボーダーの隊員同士で付き合っているとかなんか気まづくなったりややくしくなったりしそうであんま見ねえんだよ」

「見ない、と言うよりは告白する勇気が無いんじゃないんですかあ!？」

ボーダーの女子、顔面偏差値は洒落にならないぐらいに高くて、性格良い子ばかりだろー!」

「おいおい、誉めてもなんも出ねえぞ!」

「胸囲の偏差値は低いかな!」

「三雲、てめえ!!」

光に飛び火しつつも出水に攻撃ならぬ口撃をする。

銀魂っぽくなっているが、知らん。杉田も釘宮もアニメ限定だが坂口もいる。なんだったらメガネが本体と言っても良い主人公もいるんだ。

「あれか、いざ自分で告白するとなれば無理なチエリーか!」

いや、違うな。告白したらしたでごめんさいお友だちで充分ですと言われて、距離を置かれたくないからか。国近先輩に」

「ち、ちっげーよ!!」

同じ部隊のオペレーターと隊員でそんなんじゃないやねえ、し!米屋、中身を朗読しろ!」

「その言葉を待っていたぜ！」

「やめろ!!」

「足止めするぞ、出水!!」

よくよく考えれば私にそこまでダメージは無いんじゃないかと後に気付くのだが今は気付かない。

米屋が更に公開処刑ならぬ口開処刑をしようとするので、全力で止めにくいこうするのが光と出水が邪魔をする。

「お前等、なにをやってるんだ!!」

そして普通に怒られる。

2学期になってからこんな事が多いのか、割と厳しめに先生に怒られた。気が緩み過ぎていると言われた。

「三輪が居てくれれば……」

「秀次、今日は隊長の報告書纏めるとかどうとかでいねえんだ……じゃあ、本部でランク戦してくるわ」

「おれ、そろそろ太刀川さんにレポート出来ないって泣きつかれそうだから家に帰る」

「……アタシんとこ、カゲもゾエも修学旅行で居ないから、家に帰るわ」

30分近く怒られてしまったので、割と心に来てしまった私達。

憂鬱モードとなり、無言に近いまま校舎を出ていく。

「三雲くん」

「熊谷か、どうした？」

「いや、どうしたじゃないわよ。さっきの馬鹿騒ぎが一瞬で広まったのよ」

「そうか」

私も帰ろうとすると、熊谷と鉢合わせした。

もう帰っていると思っていたのだが、あんな馬鹿騒ぎが起きたら誰でもUターンをしたくなるか。

「なんかもう色々噂が飛び回ってたわ。ラブレターを目の前で破り捨てたとかどうとか」

「それは嘘だ……捨てて、最初から見なかった事にしようとはしたが」

「どっちにしろ同じじゃない」

「一学期からずっとそうしているし、中学の時もそんな感じだった」

そしてこれから先も、そんな風に生きていく。それが私である。

それを恥だと悪だと言いたければ好きだけ言えば良い。私はこの行いをやめないぞ。でなければ、酷い未来が……いや、やめておこう。

「え、一学期もこんなことあったの!？」

「あつたぞ。会ったことも関わりもない生徒だったから、普通に見なかつた事にした。

と言うよりは、堂々とそういうの聞きに来るんだな。その辺は一線区切つて大人な対応を見せると思つていたんだが」

「やつぱり、気になるじゃない……その、ね」

きつと普通の人間ならばその、ねの意味は分からない。

普通じゃない私は熊谷がなにを言いたいのか分かつてしまい、どうしたものかと思へてしまう。

「さつきも言つたように見なかつた事にする。

向こうから目の前に現れて一言目に好き（愛してます）！と言つてくるインパクトがあるなら聞くんだ、ラブレターはちよつと」

「普通逆でしょ!？」

「私は普通じゃないということだ。

とにかく、よく分からない人に好意を伝えられてもな……取り敢えず一回、デートしない」と

「はあ!？」

「はあ!?!じゃないぞ、熊谷。

私、この差出人の事をよく知らないんだ。それどころか、中身もまともに見ていない

んだぞ。

相手の良いところ悪いところを見て、受け入れて一緒に歩むことが出来るかどうかを
考えないと……よく、親戚とかが言う彼女の一人や二人とかあるけど、二人いたら問題
だと私は思う」

「論点がズレてるわよ……」

「だろうな……と言うよりは、熊谷はそういうのをしないのか？」

割と気になっていいることを、今ここで聞いておこう。

顔面偏差値はとにかくにも高いボーダー隊員達、熊谷もその一人である。性格も良
くて、スタイルも良い。

男前ヒロインと言えればそれで終わり、那須と日浦という方向性の違う女子がいるから
モテないというわけではないだろう。

「あたしは、その……別に、ね。」

今はボーダーで防衛任務をしたり、上位を目指したり、玲達と遊んだりで充分よ」
割と普通のなんとも言えない答えが返って来た。

「その那須達に彼氏が出来たら？」

「え？」

ので、少しだけ弄くってみよう。

「あの二人、割とモテると米屋から聞いたぞ。」

本人達はツインスナイプで有名なあのイケメソの様にモテたいと思っていないらしいが、かと言つて恋愛をしたくないというわけではないだろう。あの日、あの時、あの場所だとラブストーリーは突然にと言うだろうか？」

「玲と茜に彼氏が……」

私の言葉に割と真剣に悩み、頭を抱える熊谷。

女の絆や友情を崩壊させるとんでもない事を言っている感はあるのだが、やめられない。止まらない。

「私、好きな人が出来たの。と言ってくる親友を受け入れる事が出来るのか？もし自分が逆の立場だった時、それを言うことが出来るのだろうか？米屋の様に言い回すことは無いだろうか……謎のテンションにはなるな」

「……どうしよう、三雲くん。あたし、玲や茜を応援する自分を想像出来ないの!!」

「なんだと!!じゃあ、なにをしている自分を想像出来る?」

「その男の身辺調査をしているわね。」

茜と玲に悪い虫がついたって、疑っちゃう自分がいるのよ」

ヤバイ、面白い。

「なら、ならその男Aを米屋だと仮定する」

「縁起でも無い事を言わないで!!」

お前、ボーダー内かどうか熊谷にどういうジャンルで扱われてるんだ? 色物か? 槍バカか? 第二の太刀川か?

「だが、有り得るぞ。」

米屋くんは手遅れな程に馬鹿だけど明るくて気さくなのとか、意外とデリカシーのある人でカチューシャを外すと物凄くカッコよくなるんです! とか」

「いやあああああ!!」

熊谷には直接的な関係は無いことだ。

だがしかし、米屋がどつちかの彼氏だった場合は色々ダメらしい。手遅れな馬鹿だが、心はイケメンでアウトドアな男なのに……手遅れな馬鹿だけだ。

「……大丈夫か?」

「だ、大丈夫よ」

「すまない、なんか言い過ぎた気がする」

「……うん」

否定しないのか、くまちゃん。

少しおちよくり過ぎたと反省し、謝り色々考える。

「恋愛は、無しだな」

「え、あ、うん……そうよ、ね……」

「じゃあ、また明日」

「ええ、また明日」

最後の最後で、良いものが見れた。

私は原付に乗り、熊谷に癒されながら家へと帰っていった。

「はあ、なにやってんだか……恋愛か。」

玲と茜に彼氏、は出来なさそうよね。強引な人とかチャラそうな人は嫌いだし、それっぽい動きがあれば直ぐにあたしも周りも対処するし。けど、何時かはそういう人が出来るのよね……まずはデート一回……肉うどんが美味しいお店に行こうとか言ったら、引かれたりは……って、違う違う!! 玲も茜もそれに小夜子もそういうの無い! だから、今は上を、A級を目指さないと」

因みにだが私のサイドエフェクトは感情を見ることが出来る。

怯えたり喜んでたり怒ったりしていると心拍数や血圧なんか変動し、発する電磁波やオーラも変化するので割と分かる。影浦先輩並に分かる。鈍感系ではない。そういうことである。

第12話

修学旅行から帰って来た国近先輩。

特に頼んだわけでも無いのだが、沖縄限定のハイチュウを一箱貰えたのは嬉しかった。だが、出水達と一緒にチラツと見た沖縄のアンテナショップで普通に売ってるのを知ったら悲しかった。

沖縄で買ってきた本物の沖縄限定のハイチュウだったのに、喜びが一瞬にして絶望へと切り替わった。

リーゼントパイセンもとい当真先輩はちんこすこう……受け狙いで出水と米屋の為に買ってきており、貰ってた二人は大爆笑。流石にそれは沖縄のアンテナショップで売ってはなく、中身は形が卑猥なちんこすこうで美味しかったらしい。どうしてそこでオペレーターの人に食べさせなかつたんだ？と若干キレ気味にツツコミを入れると中腰になる出水と米屋。

国近先輩と三輪隊のオペ子こと月見さんがちんこすこう食ってるのを見ると、青少年のナニかが爆発する。というか、そういうのやればなんか怒られる気がするらしい。

「はあ……適当な事を言うんじゃないかな」

ラブレターを捨てたりして周りからのリア充くたばれと罵られつつも、時は過ぎる。

中間テストは皆でテスト対策ならぬ米屋対策をしたりし、なんとか乗り切る事は出来て体育祭は北添ことゾエさんが足遅い以外はとんでもない人だと、影先輩と殴りあつて友情を深めた関係なんだと思わせる結果に終わった。

残す行事は百人一首とか期末とかの割と普通の行事ばかりで本日は学園祭初日。私はクラスの出し物、ではなく個人で出店をしている。

「別にタロットカードとか水晶無くても良いんだけどな……」

何処かの実力派エリートとは違い、完全にお節介で言った一言をちゃんと果たすために講堂の一部を借りて占いの館をしている。

三輪に お前、占いが趣味な乙女チックなところあるんだなという顔をされたのがキツかった。出水が割と当たる占いだとフォローをしてくれたけど、三輪の視線は怖かった。

「お前、なんだその格好」

「私の占い師としての格好です」

「胡散臭いアラブ風のとかはよく見るけどよ、全身タイトとターバンって何処の国だ？」
「しいて言うならば、グルメ界です」

机とか道具とか色々準備をしている私の前にやって来た影先輩。トリコのココの

格好だが、問題無い。

ひよんな事から影先輩弱味を握られたのだが、それをネタに脅してくることは特に無い。口とか悪く、荒っぽいところは割と多いのだが悪人ではなく割とイイ人である。サイドエフェクトのせい口より先に手が出るが、影浦先輩でなく影先輩と言つても特に怒らないのでいい人だ。

「なんだグルメ界つて……まあ、いい。」

ちよつと裏で寝るから、起こすんじゃないぞ。ゾエとかヒカリにも言うなよ」

「周つたりしないんですか？」

「俺あ、祭りはそこまで好きじゃねえ。」

家の手伝いならまだしも、こんなただただうるせえ祭りにやる気なんか出すかよ」

「そう言うんだつたら、最初から来なければ良いじゃないですか。防衛任務でも入れれば公欠になりますよ」

「防衛任務入れるつてシフト出してきたけど、上が学生生活楽しめとかで強制的に今日は任務無しになったんだよ！クソが！」

この人のサイドエフェクトは、感情受信体質。

スゴく分かりやすく言えば向けてくる視線をハッキリと感じ取り、その視線にどんな感情が籠っているのか肌で感じる不意討ちや狙撃に対しては物凄く強いのだが、日常生

活に不便で結果的には人の心を読んでみたいなものなので割と苦しくて辛いサイドエフエクト。

人混みの多いところでは物凄く感情を向けられるので、馬鹿騒ぎが出来る場所は好きでもお祭り騒ぎは苦手で実家のお好み焼き屋の手伝いはまだするけど学園祭は無理らしい。

「後で焼き鳥かなんか買ってきてみましょうか？」

「衛生管理の都合上、業務スーパールの冷食チンして焼き直したやつで美味くねえ」

詳しいな、この人。

特に断る必要はなく、やるのが無かった時用の暇潰しで持ってきたミスター味っ子幕末編と信長のシェフと仁を貸すと読みだした。

「おいこれ、ミスター味っ子読んでるの前提じゃねえかあ」

「じゃあ、信長のシェフをどうぞ」

「幕末か戦国時代かの違いだろう。つーかなんで三つともタイムスリップものなんだよ」

「そんな事を言われても、これが程よく暇潰しになるんで。

まあ、明日もありますし鉄鍋のジャンとか持ってききましょうか？」

「それは家にあるし、Rの方はヒカリに貸してるからそっちもいらねえ」

「聖おにいさんは?」

「あくねえから、明日頼むわ」

流石にミスター味っ子全巻持つてくるとなると、結構重い。

仁と信長のシエフが鞆の容量を大きく取っているの、幕末編で勘弁してください。

明日持つてくる漫画とかの準備をすることもでき、そんなこんなで学園祭開始の放送が流れる。

「そういえば、影先輩とこなにするんですか?」

「相席居酒屋」

それただのぼったくりバーじゃないのか?

影先輩がスーツとグラスンつけてたらもうそれにしか見えねえなと視線を影先輩に向けずに、お客を待っていると早速やって来た……物凄く見たことがある餅食ってるアゴヒゲと見たことはないけど、見たくもない死相が浮かび上がっている糸目の男性が。

「タイム、タイム」

「んだよ、出水が面白い事してるからって一発目にやって来たんだぞ」

「いや、太刀川さんではないです。と言うか、餅売ってたんですね」

いきなりの太刀川さん降臨に驚いてしまうが、太刀川さんが来るのは最初から分かっていた。

国近先輩と出水がこの学生で、学生生活を楽しめとシフトを入れられなかったからついでだから行ってこいとか言われて太刀川さんが来てもおかしくもなんともない。

「餅だけに、持ち込んだ物だ」

「それ怒られるやつだからさっさとしまってください」

「任せる！つーことで、堤が先な」

「オレからか……もしかして、オレが一番最初のお客さんかな？」

「はい、そうデス」

「そんな緊張しなくても良いよ。」

太刀川と同じ年齢だけど、気さくにして。ああ、自己紹介がまだだったね。オレは堤大地。よろしく」

「出水達と色々とエンジョイしている三雲です」

「色々と噂を聞いてるよ……おサノからだけど」

糸目の男性もとい堤さんはスゴク気さくに話し掛けてくる。

私がお客第一号に緊張していると思っっているのだが、それは違う。この人、めっさ死相が見える。

横で餅を胃袋にしまおうとしている太刀川さんは上司に怒られる未来が100%で確定しているが、この人からは死相が……いや、これ死相じゃないな。

「当店の占いは占星術の占いです。

極々僅かな情報を元に当てたり思わせたりする心理学ベースのインチキ占いではありません。ここに生年月日と性別、それと名前を書いてください」

「あ、思ったよりも本格的だな」

タロットカードと水晶玉、それとプロフィール記入用紙とペンを差し出す。

オカルト部でもなんでもない私がやっているから手相とかトランプとかかと思ったが割と本格的でワクワクする堤さん。正直に言えばこの小道具、全く関係のない物だ。サイドエフェクトを使用して未来を占っているだけに過ぎず、道具を使つて道具でちゃんと占つていると思わせている為だけに置いてある。

「じゃ、シャッフルしたりしてください」

「オレがするのか?」

「私じゃなく堤さんを占いますから、堤さん成分が必要なんです。

言い忘れましたけど恋愛運とか金運とか占うのではなく、近い将来に起こりそうな事を占う感じですよ。曖昧な感じな占いは、ちよつと苦手です。曖昧な占いをして当たつてると思つた筈の未来が急に変わつて、もう嫌になりました」

「未来が急について」

「おいおい、まさか迅のせいかな?」

多分、何度かあのぼんち揚げのせいで占いで確定していた未来が変わったことがある。

適当にそれっぽい事を言いながらも茶を濁し、堤さんにタロットカードをシャッフルしてもらい、カードの順番を変えてもらい、その上で正位置や逆位置を選ばせる。

「なんか俺の知ってる占いとは違うな」

「未来は何時だって馬鹿みたいにあります。

その中から一つの未来を進む……私が出来るのはその未来を何となくで知らせる事です。」

「ふくん、お前、未来とか見えないんだな」

「私のは普通の千里眼で、遠くの物を見るだけです。魔法使いの千里眼は未来すら見ることが出来るそうですけど」

「魔法使い、ね……」

「はいっ、終わったよ!」

餅食い終わった餅川さんと軽く談笑をし、堤さんからシャッフルし終えたカードを受けとる。

「ほーう……」

「え、見るの?」

ここでタロットカードをピラミッドの様に並べてこのカードのこの位置はと説明をすればボロが出る。

タロットカードがどの様にシャッフルされているのかを確認し、頭に叩き込み人差し指をたてる。

「イ〜テイ〜……堤さんも」

「え、あ……イ〜テイ〜……なにこれ」

堤さんにも人差し指をたたせ、互いの人差し指が水晶玉に触れる。

予想していた占いとは大きく異なっており堤さんは困惑をしているが、私の方も大分困惑している。こんな死相擬きはじめてだ

「これ、私のオリジナルの占いなんですよ。

マハトマ的なものを感じて未来を見ている、太刀川さんそんな残念な人を見る目で見ないでください。残念な人は貴方なんですから」

「誰が残念な人だ」

「ボーダー隊員で一番強い人として紹介されて登場した瞬間、磯辺餅食ってた人は残念な人です」

「あく確かにあれは残念だったね……で、なにか分かったの？」

「わかったと言うか……死相に近いものが見えます」

「え!？」

太刀川さんのせいで若干だがぐだぐだになったが、堤さんの死相に近いものについて教えられる事が出来るところまで来た。

私は何枚かのカードを堤さんの前に出す。

「なんか無駄に色気ある、美貌を持った女性関係で、苦痛を味わう。

女帝の正位置の前と後ろに愚者と月の正位置のカードがあります。これはこの女性が愚かで危険な事を行って失敗する。

塔の正位置もありますね。この危険な事に巻き込まれて、覚悟を決めて挑んで失敗……あ、これ失敗する未来確定ですね。死ぬことは絶対に無いですが、死ぬよりも辛い苦しみを味わいます。死にはしませんが回避でき……う、うん?」

まずい、まずいぞ。

堤さんに浮かんでいるのは死相じゃないけど、死ぬほど辛くて苦しむ未来が待ち構えているのが確定している。

修や千佳も変な電磁波やオーラも出ているが、この人のはいつそ殺して楽にしてやっただ方が良いのでは無いかと思えるぐらいの死なない苦しみが待ち構えている。

「無駄に色気のある、美貌を持った女性……その女性が愚かで危険な行為」

「巻き込まれる、覚悟を決めて挑んで撃沈……死ぬことは無いが、死ぬよりも辛い苦し

み」

「あ、なんか太刀川さんも巻き込まれるっぽいです」

堤さんだけでなく太刀川さんも物凄く心当たりがあるのか、少しづつ少しづつ顔が死んでいく。

原作知識を使わずに、普通に占ったが……この人に待ち構えている未来が原作知識のせいで具体的に見えてしまう。

「お、おいそれって何時ぐらいに来るか分かるか?」

「え〜つとですね、節制の逆位置のカードと出てますね。」

教会とか宗教とか宗派に関係する日……日本人なので、大晦日とか正月の三ヶ日とかじゃ」

「クリスマスだ……」

堤大地は、待ち受ける日がクリスマスだと理解してしまった。

原作知識があるから、堤さんが待ち受ける地獄がなんなのか知っているので心の中で合掌した。安心してください、堤さん。日本人なのでいきなり天の国に行くとかは無く、出雲にある黄泉比良坂を経由して三途の川を渡って、地獄で裁判を受けるだけです。私、経験しているから分かるんです……弥勒菩薩、佐藤似でした。

「なんですか、クリスマスにボーダーの人達とヒヤッハーし過ぎるのですか? 史上最悪

の二日酔いでもするのですか？」

「違う、違うんだ三雲くん……他になにが見える？なにが分かる？」

「……くさや」

「嘘だろ、なんでそんなもん入れんだよ!!え、てか待てよ。俺も巻き込まれる……よなあ……」

「私の占い、80%の確率で当たるんですけどスゴいですね。」

「これもう、確定ですよ。確定ガチャとかいう詐欺と違って正真正銘、くさやを食べさせられる未来が待ち構えています。」

「普通に料理したら美味しいのに冒険したりアレンジしたりしてメシマズになって揉めに揉める世に言うメシマズ系のトラブルに巻き込まれたり挑んだりしますね」

「揉める前にオレ達は死ぬんだ。加古ちゃんの腕で」

「これ以上は色々と恐ろしいので、私は堤さんを占わない。」

「なんか影先輩が後ろで「ファントムばばあ、マジかよ」とドン引きをしているが気にしない。」

「次は太刀川さんですね」

「いや、もういい……近い未来が、見えたんだろ？」

「いやなんか太刀川さん、占いしづらいですよ。」

原因はよく分かりませんが、太刀川さんにとってはとても嬉しい事が起きるっぽいですよ」

「まさか、当たりを引くのか!？」

クリスマス(死)からは逃れることは出来ない。恐らく当たりを引くのは21歳児だ。などと言えば、普通に逃げそうなので余計な事は言わずにさつきと同じくシャッフルしてイクティクをしてサイドエフェクトで未来を占う……のだが、上手く占うことが出来ない。この占いを一瞬にして引っくり返す男がいるせいで、0と100%を交差しまくっている。

「……戦車の逆位置、恋人の逆位置、女帝の逆位置、運命の輪の正位置

暴力、争い、論争等をして敗北し失敗に終わる。そのお陰で問題は解決し、太刀川さんは至福の時がやって来る……なんか心当たりはありますか?」

「ん〜……ねえな」

「そうですか……二人合わせてお会計500円です」

「意外と高い……けど、スゴく当たってるよ君の占いは!」

「中国とかインドとかドイツとかアフリカとかとにかく徹底的に色々な国を混ぜ合わせた占いですからね」

「じゃあ、行くか……クリスマスまでの余生を楽しむために」

「太刀川さん、死にませんよ。死んだ方がましだと思えるぐらいの苦しみを味わうだけですから」

くさやチャーハン、想像するだけでも恐ろしい。

もしかすると醤油とかの代わりにくさや汁で味付けするかもしれない……食中毒で運ばれてくれないだろうか。

クリスマスまでの余生を楽しむために堤さんと太刀川さんは歩いていった。楽しい筈の学園祭が一瞬にして、余生を楽しむ末期患者の様になってしまった……が、私が教えようが教えまいが未来は変わらなかった。

「おめー、未来かなにか見えんのか？」

「見えないですよ。」

ただ色々な国の占いをごちゃ混ぜにして、その人の未来を占ってるだけ……つと、次が来た」

余りにも私の言っていることが的中しているのもしやと疑う影先輩。

今回は基本的にサイドエフェクトオンリーで頑張ってはいるのだが、未来を見ることは出来ないかと否定する。ボーダー隊員だったから色々知っているから余計な事は言ったりしているものの、本当に占いをしているだけで未来なんかは全く見ていない。

「ハイ」で占いを」

「無理です、勘弁してください!!」

私が否定すると信長のシエフの7巻を読み出す影先輩。

この人は自由だなと思っていると、次のお客が来店するのだが直ぐにNGを出す……勘弁してください、S村さん。S田さんとは年内も来年も縁が無いんです。原作知識とサイドエフェクト使って見えるんです。ここは日頃のセクハラの御詫びということ。ぼんち揚げを使って頑張ってください。あの男ならば無数に見える未来から貴女にとって最高の未来に導ける筈です。

第13話

「料金とかそういうのいららないんで、勘弁してください」

「あの、まだなにも言っていないわ。出水くんが物凄く当たると言っていたから来てみただけで、なにかを占ってほしいわけじゃないわよ?」

「いや、私の占いそういう感じではありません。」

私とこの人の相性占つてとか、お金持ちになれるかどうか占つてとかそういうの出来ないのです。

無数に枝分かれしている未来を占いとかでなんとなく見て、教えるぐらいのことしか出来ないですよ……勘弁してください」

米屋や出水に宣伝してと頼んだのはいいが、意外すぎる人物がやって来た。

本部長補佐のS村さん。何故こんなところに居るんだと、一人でなく二人で来ないのかと鼻で笑いたいが笑えない。

この人、確か原作開始時25で、S田さんは三十路過ぎ……よし、考えるのをやめよう。

「待って、無数に枝分かれしている未来を見るのはわかるけどまだなにもしてないわ」

「手相じゃなく、顔で占う方法もあるんです。女難の相がありますとか顔で分かるあれですよあれ。」

勘弁してください、理想の上司と出会ったままではいいですけどそこまです。今年どころか来年いっぱいはいは諦めてください」

「なんですって!?!」

原作知識とか無くても、サイドエフェクトだけで分かる。

S村さんとS田さんの未来は明るい、明るいだけでめでたいとかそういうのは無い。再来年まで進展らしい進展は無い。好感度が急上昇するイベントも特にない。

世の中は諦めることも大事だと来年までは女子力上げるのに頑張ってもらおうとするのだが、焦っているのか本気で怒り胸ぐらを掴まれる。

本当に勘弁してください。私のサイドエフェクト、これ以上はなにも出来ない。不幸な未来を伝えるぐらいなら、出禁にして評判落とした方がましですよ。

「わ、私のなに分かるって言うの!?!」

「影先輩、ちよつと応援をお願いします!!」

「んだよ、るせえな」

触れてはいけない逆鱗に触れてしまった。

このままでは拳が飛んできそうなので影先輩にSOSを求めると信長のシェフに栞

を挟んで起き上がる。

「……なにやってんすか？」

三門市名物のチンピラや柄悪い奴かと思つた影先輩。

S村さんだとわかつた瞬間、キョトンとした顔をする。

「影浦くん、どうしてここに」

「いや、俺はここの生徒つすから……お前、なに言つたんだよ？」

「来年まで理想の上司との関係が進展しない。」

ハッキリと顔に出ている、自分なりのアプローチをしても「気が利く女性だな」だけで終わります」

「……お前、未来かなにか見えてんじやねえのか？」

「だから、未来は見えません！」

「影浦くん、どうして否定をしないの？」

ねえ、お願い。視線を合わせてくれないかしら。苦しいのは分かるけど、10秒ほど、目を合わせるだけで良いのよ」

私が言っていることが余りにも正確過ぎて、益々疑いが強まるがそれよりもS村さんの怒りが強まる。

影先輩は特に否定することを言っていない。影先輩、人の感情になにかと敏感で本部

所属だからか忍田さんがどういう人か理解している。確実にその未来が訪れると思っ
ている。

ハツキリと言えば、S村さんの必殺技であるローキックをくらうことになるので目線
を合わせようとしないのだが殺意が駄々漏れである。

「すみません、どう頑張っても無理っぽいです。」

ついつき来た堤さんレベルで、この未来を回避することは不可能です。潔く諦めて
ください」

「あ、諦められるわけじゃないじゃない!!」

S村さんは、全速力で走っていった。

廊下は走ってはいけないのだが、そんなことを言う間もないぐらいに速く、今すぐ
でも泣きそうな涙目だったが誰も気にしなかった。

「なんか今、沢村さんが走っていかなかったかしら?」

「なにか忘れ物をしたとか、忍田本部長が来ているとか聞いたんじゃないのかな?」

S村さんが出ていくと今度は今先輩と溢れんばかりの凄まじきオーラ（陽）を身に纏
う大学生と溢れんばかりの凄まじきオーラ（陰）を身に纏う中学生と、影先輩の同級生
の村上さんがやって来た。

なんでこうもボーダー隊員しかやって来ないのだろうか……宣伝頼んだの、ボーダー

隊員だからか。

「見ないと思つたら、こんな所に居たのか。ヒカリ達が探してたぞ」

あ!と影先輩のことに気付く村上さん。

ゾエさん達のことを教えてくれる……なにも言わずに来たのか、この人は。

「だつたら、お前等が来いつつとけ。」

それよりも占うのか? なんか、こいつの占い無駄に当たるぞ」

「えつと……確か貴方は三雲くん、だつたわね。占いが出来るの?」

「出来ませんが、さつきから不幸な未来しか見えていません」

「え、もしかしてさつき沢村さんが飛び出したのつて本部長と結婚できないつて言われたからなんですか!」

おい、本物の悪、マジやめろ。

二番目に会いたくなかつた人物と遂に会合してしまふ。はじめて顔を見るが、なんと
いう負のオーラだ。

「北添くん達と会つたら、ここに居ることを伝えておくよ。けどその前に、占つてくれな
いかな?」

「あゝすみません、えつと」

「ぼくは来馬だよ」

「来馬さん、私の占いは相性占いとか金運が良くなるとかそういうタイプの占いではありません」

これ、来る人に毎回毎回言わないといけないのか。

そう思いながらも説明し来馬隊の面々に納得して貰いプロフィール表を書いてもらい、隊長である来馬さんの未来を占うことになった。

「私も中学時代、色々な人を見ましたが来馬さんはスゴい人ですね」

「そうかな？僕よりも鋼の方がスゴいと思うけど」

「確か、ボーダー隊員での繋がりなんですよね？」

来馬さんは太刀川さんの様なスゴさは全くといって皆無ですよ。努力すれば延びますけど、最後に才能とかが物言う世界に辿り着くとかそんなのじゃないです」

「そ、そうなんだ……」

この人は……修に近いオーラを出している。

いや、修よりもトリオン能力は上なので下手をすれば修以上のとてつもないオーラだ。

「来馬さんの強さの根底は力ではなく思いやりや優しさですね。」

強くなればなるほど人間は色々と大事なものを失います。楽しむ心や優しさ、勝利をするために踏み台にした友人と。

来馬さん自身はそこまでですが、代わりに貴方を支える人達が強さを得る。貴方は貴方を支える人の精神的支柱であり、強くなる人の希望……では、占いをしますね」

強さと言う電磁波やオーラは村上さんの方が遥かに上だ。

だが、それ以外の思いやりや優しさ、金運女性運といったものに関してはずつちぎりでトップだ。

来馬さんを弱いと言った瞬間、空気が変わり村上さん達が内心怒っていたので上手くフオローを入れるとその通りとホッコリしてくれる。

「……」

「どういう感じかな？」

来馬さんを上げまくり、タロットカードやイ〜ティ〜も終えた。

残すところは結果発表だけなのだが、太刀川さん、堤さん、S村さんに続き……どうしてこうも不幸続きなのだろうか。

「魔術師の正位置、塔の正位置、悪魔の正位置、死神の正位置、節制の正位置……やべえ、やべえ」

「まさか……来馬先輩の身になにかが起きるんですか!？」

「別役、違う……これ、うん……」

不幸なカードばかりが優先的に来ていることを焦る。

死神とか悪魔とかのカードは悪いことを意味するものだど知ってか知らずか別役は机をバンッと叩いて、真剣な顔になる。

「太一、落ち着きなさい。」

「当たる確率が高くて、占いは占いよ。迅さんのさい……占いでそうなるよと分かっても、変えることは出来るわ」

「そうだ。来馬先輩は俺たちの手で守り抜く。三雲、正直に話してくれ」

占いなんて迷信だと否定せず、真剣に向き合う今先輩、村上さん。

二人の言葉に別役も覚悟を決めた男の顔をするのだが、来馬はそこまで畏まらなくても良いんだよとちよつと困り顔をする。こんな顔をされてしまったら、私は未来を教えるしかない。

「……来馬さんにとつての、大切なもの達の命が奪われます。管理を怠ったのか悪意なき災害に襲われてしまい、破壊される……これしか私にはわかりません」

「大切な者達の命……ぼくにとつて大切なもの達は、鋼や太一、今ちゃん達、鈴鳴支部の皆だ……」

あ、太刀川さんと堤さんが死ぬ未来の真横で元気よく立っている未来も見えた。この人だけピンポイントで当たり引かない未来が100%やって来るぞ。

「大丈夫です……おれは、おれ達来馬隊は絶対に死にません！永遠に不滅です！」

「任せてくださいよ、どんな不幸に見舞われても絶対に生きて帰ってきます！それどころかぶっ倒してやりますよ」

見事なまでに死亡フラグを建てる村上さんと別役。

男前な発言に勇気を与えられたのか、来馬さんは立ち上がりお会計を済ませて別の模擬店へと向かっていった。

「悪意なき災害って、まさか太一を指しているんじゃない」

「太一がなにかしでかすのは今にはじまったことじゃねえだろ」

別役、お前はいつたいどんな評価を受けているんだ。

またなんとも言えない表情の今先輩を見送り、席について一息をつこうとするのだがそんな暇を与えないと言わんばかりに次のお客がやって来た。

「ゲツ、フアントムばばあ」

「あら、影浦くんじゃない。光ちゃん達が探していたわよ？」

「んなもんは来馬さんから聞いている。なにしに来た？」

「三輪くんから、此処でお友達が占いをしているから行って見たらって紹介されたの。」

「ごめんなさい自己紹介がまだだったわね。私はボーダーの加古望よ。よろしくね」

「影先輩、なんでさつきからボーダー関係者しか来ないんですか？」

「お前の知り合いがボーダーしかいねえからだろ」

「中学の友人、誘った筈なんだけどな……レスリングの国体王者になったから、忙しいのか」

次の来客者は無駄に色気溢れる美貌とセレブオーラを纏う一般人、フアントムBB Aもとい加古さん。

来馬さんの時とはまた違った方向性を持つ変なオーラの持ち主なのだが、さっきのくさやが印象付いていくさやばかりが見える。

「実はね、ちよつと占つて欲しいことがあるのよ」

「うちはそういう店じゃねえんだから、帰りやがれ」

「影先輩、何時からうちの従業員になつたんですか？」

「あら、無職なの？」

「誰が無職だ!!」

「落ち着いてください、影先輩」

フアントムBB Aに弄くられ、怒る影先輩。

影先輩がサボってるけど誰も迎えに来ないことに少しだけ影先輩に向けられる周りの優しさを感じ、私の占いについて説明をする。

「実はね、人を探してほしいのよ」

「加古さん、話を聞いてましたか？」

「諦めろ、このばばあはこれが普通なんだ」

さつきまですんなりと話が進んだのに対し、我を通す加古さん。

影先輩はこれ以上は無理だと後ろに行つて信長のシエフの続きを読みはじめの
で、加古さんの視線が影先輩に向かない様に飲み物なんかを置いて、絶妙に見えなくす
る。

「人探しと言われましても、FBIとかCIAの霊能力者がしている千里眼とかは出来
ません。」

ウルトラクイズの○×の答えが分からなくてもどつちが正解か当てるぐらいが限界
です。こう、顔写真を見せられたりしても出来ませんから」

「大丈夫よ、そこまで難しいことじゃないから。」

三輪くんの知り合いと言えば分かると思うのだけれど私もボーダー隊員で、隊の隊長
を勤めているの。けれど、今のところ戦えるのが私だけで隊にメンバーを追加したいの
だけれど、誰かいないかしら？」

「まず、私はボーダー隊員ではありませんので内情は知りませんし、遠回しの勧誘はお断
りです」

NOと言つてもテコでも動かなそうな加古さん。

なにをしに来たのかを聞いてみるのだが、私に聞くのは大きな間違いだ。私はボー

ダー隊員でもなく、加古さんが求める人材でもない。

「勧誘はしていないわ。」

私、^{イニシャル}頭文字Kの人とチームを組もうと思ってるのよ。三雲くんの頭文字はM……そういえば、名前の方は？」

「Tですね。私にどうしろと言うのですか？Kの人と結婚しろと？婿養子はちよつと」「いいえ、違うわ。」

私も色々と探してみたの、頭文字がKで才能のある子を。でも、部隊に入っている子ばかりでね……そこで、三雲くんの出番なのよ」

「また、無茶苦茶な……」

「出来ないことは無いわ。」

貴方の占いが未来の一コマを正確に占うものならば、新しい隊員を見つけることが出来る。君には実績も既にあるのよ」

「実績、ですか？」

「ええ、そうよ。」

つい最近、緑川くんって子がボーダー隊員になったの。

その子は最近、三人目として扱われていて出水くんと米屋くんが貴方の占いが当たってるって大騒ぎしたのよ」

貴方なら出来るわ!とキラーンを出してくる加古さん。

A級3バカが生まれることを随分前に適当に言ったのが巡りめぐって私の元へと戻ってきてしまったようだ。

加古さんは母さんと同じで口喧嘩をすると物凄く面倒な相手だと理解したので、占う……とは言え、既に答えは出ている。

「審判の正位置、女帝の正位置。」

審判は更新する、女帝は満足する。更新したら、満足する……魔術師の正位置のカード。入学や物事のはじまりを意味する。加古さんが満足する者、それを意味するのは才能のある人材だとして、更新と入学、物事のはじまりには心当たりありますか?」

「そうね、ボーダー関係で入学と言えば入隊式。」

ボーダーの入隊式は1月、5月、9月で、私が満足するのを新人が来るってことじゃないかしら?」

「成る程、そうですね。審判の正位置が更新を意味しています。」

学生が多いボーダーは4月に進級や入学等をすると考えれば、一月経った5月と言うのは不自然。年を重ねると言う意味合いで更新する1月に貴女が満足するものがみられる……そんなところですね」

「1月、となると最短で今度の入隊式に面白い子が来るのね」

「私の占いを過信しないでくださいよ。」

確定していた筈の未来が何故かは知らないですけど、急に変えられたりしたのですから」

「へえ……確定していた筈の未来が、変えられたのね」

最後に余計な一言を言うのと、面白いと笑って帰っていった加古さん。

緑川が既に入隊しているならば、黒江は次辺りに入隊をしている筈だから、これ当たったな、うん。

「影先輩、ボーダーの人達ってなんでこうも個性的なんですか？

さつきから変な氣とかセレブオーラとか死相とかを纏っていたりしてる人ばかりなんですけど」

「俺に聞かれても、分かるわけねえだろ」

「ですよね……なんでボーダー関係者しか来ないのだろうか」

影先輩が怖いから、近づくに近づけない

そんな感じか？この人は顔は怖くて、性格ひん曲がってるところはあるが優しく接しておけば特になにもない男気溢れる人なのに。

「おい、ホワホワした視線を向けんじやねえ！体がむず痒い」

「あ、すんません」

ホワホワした視線なのか、私の視線は。

最初に個性豊か過ぎる人達が来たせいかな、その後は特になにもない普通の生徒が大勢とやって来る。

不幸なことが起きた分、それだけ良いことが起きるんだと言わんばかりにやって来て、殆どが良いことが起きると未来を占うことが出来た。

悪い未来があるやつもいたが……学園祭が終わったら告白するんだと死亡フラグを建てているだけで、生命に関わることではないので気にしない。

「来たか……」

お昼時となり体育館で劇やらライブやらのパフォーマンスをし、飲食系の模擬店が賑わう時間帯。

飲食系が無い講堂は静まり返っていたのだが、私は気を緩めることはしない。むしろここからが本番だと目をクワツと見開く。

「あんた、なんなのその格好」

「占い師としての格好だ」

こういう言い方は悪いが、本日のメインディッシュである那須隊がやって来た……例によつてオペレーターはいない。こんな時まで引きこもり？と思わず言いたくなるが、我慢して日浦を見ようとするのだが、熊谷に服装についてツツコミを入れられるので、

私もとりあえずツツコミで返す。

「何故にナース服？」

「コスプレ喫茶なのよ」

私のトリコのココノ格好に対し、熊谷は何故かナース服を着ていた。

相席居酒屋といい、コスプレ喫茶といい、この学校の学園祭は変な出し物が多いな。

第14話

「全員で来る、と思っていたがまたオペレーター不在か」

「ごめんなさい。」

小夜子はこういう場所が苦手で、三雲くんに会いに行くとなると無理だつてなつて……か、勘違いしないで。三雲くんが嫌いかかそういうのじゃなくて、男性が苦手なのよ」

「そう、か……割と真剣な話になるんだがな」

「大丈夫です。タブレットで電話できますから」

オペレーター不在の理由に一応の納得は出来たものの、少し残念がつっているとタブレット端末を取り出す日浦。

オペレーターこと志岐小夜子に電話をいれるのだが、待機画面が何故か本人の白黒写真のせいで遺影に見えてしまう。生きているのは分かっているが、今から葬式ムードになると考えれば笑うに笑えない。

「ここに来たということは、夏に」

「待つて、三雲くん」

一息吐いて、体の力を無理矢理抜いた。

覚悟を決めてさあやろうとしたその時、那須は止めに入る。今更、チキったのか？あの時の事が気になるんじゃないのかと思っていると熊谷を手で指す。

「くまちゃんへの感想は？」

「ちよ、ちよつと玲!？」

「……今、それを聞くのか？」

「逆に聞くわ。今以外に、言う機会があるのかしら？」

物凄く目で訴えてくる。くまちゃんに対しての感想を述べなさいと、なにか上手いことの一つや二つ言えと。

日浦もそういえばなにも言ってますんと気付きキラキラした瞳で私を見てくる。熊谷はなんか恥ずかしそうにしており、包囲網が出来る。後ろにいる影先輩にSOS頼んでも、諦めろの一言で終わる。

四面楚歌なこの状態をどうすれば良いと、ここで使うべきじゃない脳をフル回転させる。

「那須、那須は熊谷をどう見る？」

「それは私も同じだ、なんて上手いことを言うのはダメよ」

天才達の頭脳戦とまでは言うまいが、上手いこと逃れようとするが那須に封じ込めら

れる。

ここで那須が熊谷の感想を述べて、私もそう思うの一言を入れればよかつたのだが先に封じられてしまった。

「待て待て、惚け話をしに来たのではないんだろ」

「でも、楽しまないといけないわ。」

折角、くまちゃんがナース服になってくれているのだから、男の子として感想の一言ぐらい言つてあげないと」

「じゃあ、後ろにいる影先輩で」

「それはダメよ。あの人、口が悪くてツンデレだもの。」

こう言うのは根が真面目な三雲くんが言わないとちゃんとは評価出来ないでしょ？米屋くん達だと確実にバカな事しか言わないし、三輪くんはサラツと流すだけじゃない」

もつともらしいことを言ってくれるじゃないか、那須。

まるであの手この手で逃げようとする私のことを理解しているかのように包囲網を作り出すのだが、この程度の包囲網ならば今まで何度も何度も切り抜けている。

「……」

「う……」

「……」

「ちよ、ちよっと」

「……」

「は、恥ずかしいから見ないで!!」

褒めてと言ってきたのが那須だが、褒めなければならぬのは那須ではなく熊谷だ。

そこを突くしかないと言いでジツと見つめていると熊谷が根を上げた。顔を真っ赤にして、日浦の後ろに隠れる。

「本人がNGを出してしまった、これではもう無理だ」

「そう、らいね……………残念ね」

今、来年と言うつもりだったなこの子。

病弱（トマホーク）女子なのを改めて思い知らされ、えー!と口を3にしている日浦を落ち着かせて真面目な話に入る雰囲気を作り出す。

「ここに来たのは、ただただ普通に占ってもらうため……だったのならば、私は普通に占おう。もし、以前の続きが聞きたいと言うならば以前の続きをする。どっちだ?」

「……………この前の、続きをお願いします」

真面目な雰囲気+メガネキャストオフの私を前にし緊張が走る日浦。

先程まで悪ふざけをしていた那須も恥ずかしがっていた熊谷も真面目な顔をしたので、私の占いのやり方（嘘）を教えて日浦にタロットカードをシャッフルしてもらおう。

「イ〜テイ〜」

水晶玉を間にしてETごっこをする。

本当に今更だが、なんでこんな風の占いにしてしまったんだと少しだけ後悔をするが、後悔していても意味はない。

日浦がシャッフルしたカードを見て、どのカードを出すべきかと真剣に考え、先ずは一枚目を出す。

「一枚目は魔術師の正位置。手腕、外交、巧妙、病、損失、災害、プラスとマイナス両方とも取れる位置だ。」

希望か絶望かは分からないが、なにかしらのアクションが起きるのは確定的で……二枚目が塔の正位置、塔のカードは逆位置だろうが、正位置だろうが負に関する意味合いを持つ。正位置は破壊、不名誉、災難、火事、事故、暴力……この時点でもしかしたらと言う心当たりはあるか？」

「いえ、特には無いです」

「ちよ、ちよつと三雲くん、あくまで占いだからあんまり茜を怖がらせるのは」

「そいつの占い、無駄に当たりやがるぞ」

「影浦先輩……」

不幸なカードしか出ないので、オブライトにと言う熊谷。

さつきからやって来るボーダー隊員のお客が悉く不幸な目に遭うことを当てているのを気にしたのか影先輩は視線や体を此方に向けずに、那須隊に信じろと遠回しに言う。

「続けるぞ。」

3枚目のカードは月の正位置で、恐怖、家庭、家庭の不和、不安な旅立ち、転職、就職、進学。

4枚目のカードは力の逆位置、力あるものに敗北、独裁される、常識や法に負ける……
なにか心当たりは？」

「……特には、ありません。」

私、四大家族で数年前に近界民がやって来た時も、全員死ななくて、お父さんともお母さんとも、お兄ちゃんとも仲が悪いわけでもなんでもないです。むしろ、とつても仲が良いです。お兄ちゃんが、ここに通っているのわたしもここにしようかなって」

「そうか……となれば、鍵を握るのはこれだろうか」

全くといって不幸なことが起きる事が予測できない。家庭内でなにかが起きると言われても、特にピンと来ない。それもその筈で、家庭内でなにかが起きるんじゃない。

家庭外でなにかが起きるから、家庭内が変わる。

「魔術師と塔のカード?」

「物事には起承転結がある。」

恐らくだが、三枚目と四枚目のカードは結のみを意味している。起承転を意味しているのがこの二枚だ。魔術師と塔の正位置、この二枚が合わさっていると考えれば、なにかしらの災害がやって来る」

「家庭が一気に変化する災害……家が火事になる、かしら?」

「那須、今の御時世、色々と保険が効く。」

燃やした奴がいるならば請求なり何なりと出来るし、弁護士を使ったりも出来る。マイホームや遺産相続で相続した家が燃えたのならば、性格が変わるかもしれない……だが、そうなると月の正位置が分からなくなる。火事で家庭が揉めて、DVに走る親か?」

「違います!!そんな親じゃありませんし、万が一の火災保険とかにもしつかりと入っています!!」

「そうなると……アレしかないか」

家庭関係で一番身近な災害、火事を出して否定させることに成功した。

これでもう考えられるのはこれしかないと言う空気を作り出し、言葉を濁して3人に興味を持たせる。

「アレ、って……心当たりが」

「あるにはある……だが、余りにも不謹慎だ。」

「確率だけで言えば、物凄く高くてありえないと否定することも出来ない。日浦は来年15……前見たとき、それが来るのは1年半ぐらい後だと出ていた……言った方が良いのか、これは」

「ここまで来たのなら言うしかない。言う覚悟を決めているのだが、少しだけ迷う。なにせこれは原作知識なんか無くてもサイドエフェクトだけでも見える未来で……どうすれば良いのか、分からない。やれることはやってみせるが、何処ぞの実力派エリートと違って、結果が見えない。」

「教えて、三雲くん。ボーダーなんて関係の無い、茜ちゃんは私達にとって大切な存在なの」

「那須、落ち着け、落ち着くんのだ。」

「……誰にも言わないのなら、教えることは出来る。だが、あくまでも考察に過ぎない……それでも良いか？」

「構わないわ。茜になにかがあるのか、教えて」

「即答か……腹は括れよ」

女同士の友情は、強くて本物だ。

覚悟を決めた顔やオーラを見たので携帯を取り出し、ボーダーの隊員が近界民と戦ってますよといわんばかりの画像を見せる。

「これは……何処の隊ですか？」

「隠し撮りしたのを、ネットに上げられていた。」

隊員が何処かとかそういうのじゃなくて、お前達は何時もこいつらを相手にしている。で間違いはないな？」

「そうだけど……それがどうしたって言うの？」

ちゃんと訓練してるし、緊急脱出も出来るから安全性は保証されているわ。なによりも、これが相手ならあたし一人でも簡単に倒せるわ」

「一度に1000体相手にしてもか？」

「!？」

熊谷は強い、那須も強い、日浦も強い。

個人10000ポイント越え、スゲえ!と思っていたら、太刀川が40000越える色々とツツコミどころ満載な事になっていたもの、とにかく那須隊は強い。が、それとこれは話が別だ。

「後ろにいる影先輩、米屋が言うには滅茶苦茶強い。」

多分、この画像に写っている近界民を数秒で倒せる……一体だけならだ」

「なにが、なにが言いたいのよ?」

「私は数年前のあの日、ボーダーの本部がある場所にいた」

「それって」

「見た、100をも越える近界民をこの両目でだ。」

近界民が2、3人ぐらいならばこの学校にいるボーダー隊員が速やかに対処出来る。

普段の防衛任務で来るのは多くても十数人ぐらいで、3桁越えるレベルは来ない……だが、数年前のあの日は3桁を、100をも越える数の近界民がやって来た。ボーダーが出来て、出水や三輪が入隊してから誘拐された等の話は聞いたことがない。そうなる、人を誘拐することが出来なくなつたと近界民も気付き、あの日の様に沢山で襲撃……少なくとも、私は近い内にまた大規模な襲撃をしてくると考えている」

普段の防衛任務がどうなっているかは知らんが、少なくとも3桁越えは無いと思う。

ラッドみたいなのが3桁越えは分かるが、モールモッド3桁越えは絶対に無い。というか、単純な大ききさだけで警戒区域外に出そうだ。

私の考察(笑)を聞いた3人はありえなくもないと、来るわけないじゃないと否定することは出来なかつた。

「で、でも、あの時と違って今はボーダーがあります。」

わたし達よりも遥かに強いA級の人達だつて沢山いて、誘拐されるなんて」

「そうよ……普段は酷い太刀川さん達は戦いになると頼りになるわ」
「茜ちゃん、くまちゃん、違いわ……拐われるとかは関係無いのよ」

襲われるけど大丈夫と考える二人に対し、別の答えを導き出した那須。

誘拐されることは特に関係の無い……いや、重要性が高い低いで言えば低いだけか。

「どういうこと？」

「くまちゃん達の言うとおり、太刀川さん達が居るわ。」

「ただ、問題はそこじゃない。襲撃した近界民を倒しても、誰一人欠けることなくも……皆の、街の人達の心に傷が残るわ」

「もし3桁越える近界民襲来が現実となれば私の様な一般市民は地下シェルターに避難する。」

ボーダー隊員は一般市民の地下のシェルターに誘導させる手伝いをし、それが終われば近界民の撃退……ボーダーの隊員の大半は学生で構成されていて、自分の娘が危険なところにおいて自分は地下に隠れているとなればどう思うか」

那須と私の言葉が合わさり、なにが言いたいのか理解した日浦と熊谷。

千佳をも越える真つ青な顔で修をも越える冷や汗を流しており、なにか優しい言葉をかけようかと考えていると那須がタロットカードを手に取る。

「つまり、このようにことね。」

何らかの、それこそ暴力で解決しないといけない災害が起きる。その災害は解決するけれども、問題はその後。

そんな災害がまた起きるかもしれない、今度こそと恐怖し、どうすれば良いのかと家族の方が常識的に考えた末に、三門市は危険だから三門市外に引越すと決める。茜ちゃん達はそれについていって、ボーダーをやめて、遠くの学校に……」

「那須、座れ!!」

なにが言いたいのか、占いで出た結果をまとめ、自分なりに考察する那須。

ありえないと否定することの出来ない要素が多々あり、もし一度でも3桁を超える近界民が侵略してきたのならありえるとショックを受けたせいも、元から弱かった電磁波が更に弱まる。

このままだと倒れる可能性がある、椅子に座らせて水を用意して落ち着かせる。

「やだ、やだああああ!!」

那須をどうにかしないかと思っていると、次に日浦が泣き出した。

自分の親ならば絶対になると、それならば有り得ると私の占いを否定することなく受け入れて泣いた。

「どうすれば、どうすればその最悪の未来を回避できるの!!」

「揺らすな、揺らさないでくれ!!」

基本的に未来占うだけで回避したりする方法は、知らん。

旅行したらホテルで名探偵と鉢合わせして、特に見知らぬ犯人に見立て殺人の為だけに殺されると分かったから旅行そのものをキャンセルしろとしか言えないのと同じぐらい、方法が分からない！」

その未来は絶対にやって来る。

熊谷もそう感じたのか私にSOSを求めて肩を揺らすのだが、確実にどうにかする方法なんて知らない。

しかし、ここまで来たのなら、それを回避する方法を占えと無茶を言ってくる。良い方法があるのなら、それとなく、教えてるわ!!

「どうすれば良いんですか、どうすれば良いんですかああああ!!」

「分かった、分かったから落ち着け」

「るせーぞ、静かに静かなるドン読ませろ」

日浦にも泣きつかれるので、もうどうしようもない。

影先輩がいつの間にか静かなるドンを読んでいるが、気にしない方向でいこう。

「どうすればと言われても、正直なところ私も分からない。

親に引越さないでねと何度も何度も釘指すとか、ボーダーは良い組織だよとかそういうアピールをするとか」

「そんなので、いけるの?」

「……怪しいです、はい、すみません」

怖い、那須が物凄く怖い目で見てくるよ。

色白も相まってか市松人形っぽく見えて、なんか呪つてきそうだ。

「もう、ボーダー側からやめなさいと言われるぐらいの人になるしかない、思います」

「……そうなる、A級を指さないといけないわね」

「お、お、お、そうだ。」

幸いにもビジュアルが良いから、第2の嵐山隊を指せ……なんだ、その目は」

A級の隊員がやめるとなれば、ボーダーとしては大問題だ。

太刀川さんの様にぶっ飛んだ強さを持っている人がやめるよりは問題視はされないだろうが、それでも問題になりやめさせないと頭を下げに来るだろう作戦に転換するのだが、日浦は私をジッと見てくる。

「三雲さんって、ボーダー隊員じゃ——」

「却下だ、却下。」

出水達と言うには、トリガーを使う才能があるらしいが私はボーダーは嫌いだ……頑張れ」

「うゝ」

ボーダーに入つて那須隊にとんでもないことを言い出しそうなので、先に断ると物凄く睨む。そんな親の仇を睨むような目で見ないでくれ。

ぶつちやけ、私、ボーダーのトリガー使えば、どれだけ強いのか分からないんだから。サイドエフェクト持つてるからつて、強いとは限らないんだ。サイドエフェクト＝戦闘を有利に進めれるは違う。現に千佳、使いこなせてない。

日浦の視線が地味にキツく、胃が痛いがなんとか我慢して那須隊には帰つて貰つた。「影先輩、帰りに影先輩の店に行つて良いですか？」

「おう、食つて金落としてけ」

「それと、影先輩、その内、キツネぶん殴つて怒られます」

「んだよ、それ」

そんなこんなでこれ以降は特に変な客は……来なかつたとは言い切れない。

堤さん以上の死相と来馬さん以上の仏オーラを纏っている人物は現れず、熊谷がまたやつて来てボーダーに入らないかと誘つてきたので断ると「お願い！そこをなんとか！」と机をバンつと叩いて頭を下げたかと思えば、パンパンになつていたナース服の乳袋が破れて、ポロリがあつて、見ないでと殴られかけたが、避けて全力で逃亡した。

第15話

学園祭はなにかと辛いことが多かったものの、売上の言えば大黒字で終わった。

メガネ（兄）のお茶（自腹）だけで済んでいるので大黒字であり、一部拝借してポケツトマネーにしたとかどうとか。

しかしまあ、そんなことは些細なことで順調と時は過ぎていく。創立記念日が休みでなく校外学習としてスケートとかしに行ったりと、まあ、それなりに楽しく過ぎ……終業式を迎えた。

「三雲、学年一位だ」

「……なにを、なにをやれと言うんだ!!」

「いや、単純に褒めただけだからな」

処刑宣告と言う名の通知簿が渡されるメガネ（兄）。

進学校でも受験戦争がある学校でもない順位を明確にしない普通校なのに、通知簿を渡されて何故か一位と言われたことを疑うメガネ（兄）。

特に深い意味合いは無く、単純におめでとうと言う意味合いで言ったのだが、そう言うときに限って高確率で生徒の代表として挨拶をしなければならない。メガネ（兄）は

身内が関係していないのならば、迷いなく逃げる男であった。

この男、授業態度とかすごく真面目でテストの点数も文句無しなのだが、やる気が無いのである。

「次、三輪」

「はい」

「通帳どころか小遣いまで差し押さえられたらいかな」

通知簿を見て、ホッとするメガネ（兄）

もし酷い成績だと、優しい父はドンマイと言うが、母からなんか飛んでくるのをなんとなく理解している。もしかすると財布の差し押さえをくらうかもしれない。あの母ならば私の弱点をついてくると何故か否定することが出来ない。

これを見せても、なんの反応もしなければどうするかと考えていると通知簿を受け取った三輪が戻ってきた。

「どうだった？」

「三学期のテストを全部休んでも問題ない……俺はだが」

「……悲鳴が聞こえる」

何処かからとは言わない。

隣の教室から物凄く聞き覚えのある声で「ガツテム！」と叫ぶ声が二人の耳に入る。

隣の教室もこのことと同じく通知簿を渡しており、バカが悲鳴を出して泣き叫ぶ。

「米屋がビリか、ヒカリがビリか……三学期は頑張れ」

「三学期の成績は、捨てに行く」

米屋は何度も同じ過ちを繰り返す。

冬休みは特になにもないので、よいお年をと終わりの挨拶をすると帰ろうとするクラス的面々。

メガネ（兄）も帰ろうと鞆を手になると、痩せ細った米屋が教室に入ってきた。

「やべえ……下手したら、今年のお年玉無しかもしれねえ」

「お年玉を家庭教師代に一票」

「三雲、それは無理だ……今更、家庭教師の一人や二人ついたとしても無理だ」

「ああ、そうか」

「お前等、死人に鞭打つんじゃないよ……」

体育しからのついていない通知簿を泣きながら見せる米屋。

三輪達は大きいため息を吐いて、頑張るしかないなと三学期に力を入れると気持ちを少しだけ改める。

「とりあえず、冬休みはどうする？」

確か三輪達は三門市民で、村上さんや国近先輩みたいに帰省はしないんだろ？」

「冬は夏と違つて何処にも遊びに行かぬえよ。

何時も通り防衛任務したりして、年越ししてそのままの初詣からのオールして、お年玉を貰つて額を確認してから一眠りだ」

「お前、そこそこ酷いな」

「で、初詣どうする？」

「1日に家族で行くから、3日辺りが」

「3日はダメだ……東さんの誕生日なんだ」

今じゃなくても別に良いのだが、今だからこそと冬休みの予定を立てていくメガネ（兄）。

年明け前は特に触れず、年明けしてからの予定を立てるのだが三ケ日で躓きそうになる。

「んじや、2日にするか」

「2日か……まあ、変に長引かなければ問題ないか」

「なにかあるのか？」

「特に大したことじゃない……それよりも、教室を出るぞ」

ただ単に家族総出で競艇をするだけであり、そこまで大した用事ではない。

新年の予定を早々に立てて、教室を出ていき下駄箱に向かったメガネ（兄）達。今日

が終業式なので、同じ様に新年の予定を立てたりしている人で賑わっている。

「柚宇さん、諦めるのも大事ですよ」

「そ、そだねー」

賑わっている人の中には出水と国近もいた。

二人の手には通知簿が握られており、国近は焦っていた。思ったよりも、成績が酷く実家に帰省した際に怒られると怯えていた。出水はバツサリと諦めると言った。

「出水、どうだった？」

「まあまあだ……お前は、まあ、うん……お年玉を家庭教師の費用に入れるに一票」

「三雲と同じ事を言うんじゃねえ!!」

通知簿の見せあいをする出水、米屋。

体育以外は残念な通知簿を見て、家庭教師とか塾とかに行かないとやべえんじやと感じ、メガネ（兄）と同じ事を言い出す始末。

「よっしー!」

「国近先輩、ガッツポーズしているところあれですが、貴女も大概です」

「大丈夫だよ、太刀川さんや米屋くん達には勝ったから。」

あ、そうだ。三雲くん、なにかリクエスト無いかな？私、年末年始は実家に帰省するから北海道のお土産買って帰るよ」

上手く誤魔化したな。

出水と三輪はこの手の話題を続けると、最終的に泣かれる未来が待ち受けるのを知っている。

一学期に補習が決まった米屋にあれやこれや言っつて、最終的に米屋が「バーカ！バーカ！」と小学生以下の語彙力になったの今でも覚えているのだから。

上手く話題をそらし、北海道のお土産という心引かれるものを話題に出したので通知簿の話は終わった……が、これもこれで面倒だった。

「じゃ、メロンでお願いします。

築地の初競りの夕張メロンで、一番高いのを速達でお願いしますね」

「え……」

「ああ、大丈夫です。

代金はこちらで持ちますので、購入さえしてくれば……とりあえず、50000円渡しておきますね」

「ちよ、ちよつと」

「余った金でシヨコラテイエのチョコとポテトチップチョコレート、インカのめざめ買ってきてください」

「……結構ガチ目の頼んだね」

白い恋人とか生キャラメルとか牛乳とかを頼まれるかと思つたが、割とガチなのを頼んでポンつと諭吉を出してきた。

よくよく見れば、財布がそこそこ太っているじゃんとメガネ（兄）の財布事情を驚きながらも携帯でメモをする。

「国近先輩、何時頃から帰省するんですか？」

「27日から5日までは実家だよ。」

こつちで今ちゃん達とクリパやったり、向こうで地元の友達と遊んだり色々よね……」

「そうですか……で、野郎共は予定あるのか？」

あえて触れない様にしていたところに突撃してきたメガネ（兄）

賑わっていた下駄箱が本当に一瞬だけシンと静かになる。

「……太刀川さんは、同年代でパーティー。唯我のアホは、学校の友達とパーティー、柚字さんは……」

「出水、泣くな！」

「な、泣いてねえよ！おれはあれだ、京介と一緒に近界民を討伐するんだ！」

「そんなモンハンみたいなのりで言うな、オレも悲しくなるじゃねえか！」

あれ、おれぼつちじゃね？と真理に至った涙目の出水。

米屋が励ますのだが、全くフォローにならずにそれどころか自らもダメージを受けてしまうという始末で、空気が重たくなる。

「最悪、野郎クリパでもしておくんだ。色恋沙汰が薄いボーダー隊員同士でな」

「くそ、旋空弧月で真つ二つにしてやりてえ」

「メテオラぶつぱのゴリ押しでぶつ倒してえ」

そんなことをしたら、ボーダーという組織が潰れるので絶対にやめましょう。

くだらなくない、人として大事な話をして笑いあったり憎みあったりするメガネ（兄）達。クリスマスどころかお正月も予定は無い一部の学生は死ねよと思っていると、熊谷がやって来た。

「三雲くん、来週の火曜日、暇かしら？」

「!」

「!？」

「ほうほう」

「火曜日……」

覚悟を決めた顔をしているくまちゃん。

本日は12月21日の金曜日、火曜日とは4日後に来るもの。21+4=25、即ち12月25日。

Xデーだなんだと言われているが、一番分かりやすい言い方で言えばクリスマス、クリスマスなのである。そんな日が暇かどうかを、話題を広めそうなバカ（米屋）がいるのに聞いてくるということは勇気を振り絞り、決心したのである。

出水、米屋、国近、三輪はなにが言いたいのか察して空気を読もうか、それとも（三輪以外は）煽ろうかと考えていると携帯を取り出したメガネ（兄）。

「3か月前から1万8000ぐらいするバスツアーの予約いれてるから無理。よいお年を」

「え、あ……よいお年を……」

その日は普通に予定が入っていたので却下された。

これ以上は馬鹿騒ぎ出来ないなどメガネ（兄）は普通に帰っていった。

「……生キヤラメル、買ってくるよ」

「おれ、肉うどん、奢るぜ」

「あいつ、ちよつと蹴り飛ばしてくる」

「クリスマスはもうダメだ、だが1月2日なら空いている。その時が狙い目だ」

ラブストーリーは突然に、とは言うもののはじまらなければ意味がない。

デートになったら全力で煽ってやろうと思っていた面々（三輪以外）は熊谷がかわいそうと不憫に思い、励ましを入れる。

「う、ううん……そこまで、大事な用事じゃなかったから。映画を見に行くだけだから、特になにも問題無いわ……」

「那須に蜂の巣にされる未来、確定したかもしれないねえな」

「知らず知らずの内に、あいつがボーダー隊員になったら全力でシバくと恨みを買うメガネ（兄）」

これ以上はここで馬鹿騒ぎも出来ないし各々が学校を出ていき、家へと帰り通知簿を見て怒られたり笑われたり褒められたり、お年玉無しになったり、クリスマスでプレゼント無しになったりと各ご家庭で色々であった。

とまあ、終業式を終えた学生達は決戦に備えたりして土曜日、日曜日と英気を養い、月曜日を迎えたのだが、そこはボーダークオリティ。浮いた話なんぞ特に目立ったことは無いとイブを過ごしクリスマス。

「三雲くん、一日だけでも良いからボーダー隊員になってくれないかしら……」

普通に用事があつてデート失敗とかそんなレベルじゃないミスをしたのを聞いた那須。

くまちゃんよりもバスツアーかと苛立ちながら、蜂の巣に出来ないかと恐ろしい事をボーダー内部の自販機前で考えていた。

「玲、もういいから。」

そりゃあ、行けなかったのは残念だったけど……クリスマスと一緒に映画を見に行くのは、難易度高すぎるわ。もう少し、もう少しこう、段階を踏まない」と

「そうね……プールなんて、どうかしら？」

四塚市のマリソールワールドなら気温を操作することが出来て、年中夏みたいに暑くて遊べるわよ」

「待って、プールはいきなり過ぎるわ！」

「でも来年の夏休み、米屋くん達と海に行くって聞いたわよ？」

「え、そうなの？」

あたし、そんな事を聞いてないんだけど。

お嬢様学校に通う親友が自分よりも自分が通っている普通校の生徒の情報を握っている事に困惑する熊谷。とりあえず、このまま自販機前で話をしては迷惑だと隊室に戻ろうとすると隊室前に玉狛支部の小南が立っていた。

「桐絵ちゃん？」

「くまちゃん……玲ちゃん……」

なんだか泣きそうな顔をしている小南。

ここで泣かれては騒ぎが大きくなると、隊室に入れて何かと話を聞こうとするとジュースが入った袋を出した。

「クリパ……しない？」

「えつと……玉狛の皆としないの？」

「ボーダーで唯一の市民の窓口となっていない玉狛支部。

支部の職員は10にも満たないが、A級、S級とどいつもこいつも曲者で一品物のトリガーを使う猛者ばかり。個性豊かな面々が多い玉狛支部だが、アットホームな職場であり、隊員同士の仲も良い。

しかし、クリパは行われなかった。

「ボスは陽太郎を連れて、町内会のクリスマスパーティー。

とりまるは年末年始の今こそが稼ぎ時なんですつてシフトを滅茶苦茶入れて、防衛任務。

クローニンはエンジニア同士で飲んでて、レイジさんとゆりさんは……とにかく、とにかく、玉狛には誰も居ないのよ！時期が時期だけに、スカウト組は実家に帰省する準備をしてたりするし……その、あ、遊ばない？」

「各々が用事があり、誰一人として遊ばなくて物凄く寂しくなった小南。

頬をちよつと赤く染めており、アホの子騙されガールの彼女をとても可愛く見えた二人は何事もなく受け入れた。

「茜ちゃんと小夜子はどうしたの？」

急遽クリパをすることとなり、パパとお菓子を皿に盛ったりゲームの用意をするのだが何時もの二人が居ないことに気付く。

「小夜子はクリスマスイベントがどうかで、茜は家族と一緒に過ごしてるわ。」

そういうえば、玉狛の皆は無理でも嵐山さんは……無理か、クリスマスとか絶対に忙しいわよね」

「ええ、そうよ。嵐山くんも忙しいわ……」

「沢村さん、何時の間に!?!」

この場にはいない他の面々について話をしていると、幽霊の如く何処からともなく現れたS村さん。

死んだ顔をしており、なんでそんな顔をと熊谷が思っていると小南がなにかに気付く。

「そういえば、忍田さんも広報活動に、准と一緒に、サンタの格好をして……」

尚、佐鳥は真っ赤なお鼻のトナカイさんの格好をしている。

「えっと……」

「まだ、まだよ。響子。」

あんな訳のわからない、全身タイトのターバンの小僧が言っていた占いが当たるわけがないじゃない」

S村さんにどんな言葉をかけてやれば良いのか見つからない小南。

フアイトだよ！と大晦日に頑張るんだとガッツを入れようとするのが、メガネ(兄)の占いはハズレはしない。大晦日に忍田とは良い雰囲気にならない。除夜の鐘とか初詣で二人きりになったとかと思えば、高確率で太刀川が現れて空気がぶち壊される。

「ふう……ごめんなさい。」

実は、今日がシフトだったりする人達を誘ってパーティーでもしないかと思ったの。折角のクリスマススを、仕事で終わらせちゃ、申し訳ないって……今日、ひ……空いている人って誰か他に居ないかしら？」

「ひ……空いている人ですか、ちよつと待つてください」

明らかに暇な人と言おうとしたのだが、触れないS村さんと那須。

携帯を取り出して本日暇だったり手が空いている人は居ないかと確認をする。

先ずは太刀川隊。

隊長である太刀川は同年代の加古を祝いに行き、呪われる。

同学年である出水は現在防衛任務中で、終わったら東さんと焼肉に行つて、ボウリング大会に行く。

誘うつもりはないが一応聞いてみる唯我はお坊ちゃん校のパーティーに参加しており、無理。

明後日から帰省の国近は村上とか生駒とか別役とかの三門市外部スカウト組でクリパをしており、各都道府県のご馳走を持ち寄るなんか秘密のケンミンショーみたいなことをしている。

次に冬島隊。

隊長の冬島も防衛任務中で、それが終わればエンジンアとしての仕事、それが終われば飲み会と大忙し。しかし女性関係は全くない。

No. 1狙撃主の当真も同じく防衛任務中で、それが終われば影浦の家のお好み焼き屋で荒船達や影浦達とともに好み焼きパーティー。

そんな二人のケツを叩いているオペ子こと真木理佐は冬島達がクリスマスだからって浮かれんなよと仕事をサボらない様に尻を蹴り上げており、恐怖で支配していた。

射手の王、二宮はボーダー本部にいれば確実にファントムばばあに捕まると分かっているの、本日お休み。

小型かつ高性能の風間は、加古に呼ばれているのだが、加古に会う前と誕生日を祝った少し後に筋肉のハートキャッチ（物理（笑））の手伝いを自らの体を犠牲にレイガストを作り上げたデブと数少ない喫煙者の隊員である豆腐とともにしなければならず割と忙しいが、それなりに楽しんでる。

古寺、菊地原、歌川は進学先が進学校で、もうすぐ入試なので遊んでる暇なんて無い

と勉強会からのちよつとお高めのバイキングに行く。

堤大地、間もなくフアントムばばあの炒飯により殺される。

来馬辰也、間もなくフアントムばばあからとても美味しい炒飯を振る舞われる。

槍バカと迅バカと三輪は出水と同じく焼肉からのボウリング。

「……結構、予定があるみたいですよ」

約1名、逃げている男はいたもののそれぞれ予定があつた。

それが男女関係的な意味での浮いた話かと聞かれればまた別ではあるが、とにかく皆それなりに予定があることを知ると那須は若干だがイラツとする。具体的に言えばメガネ（兄）に対してである。くまちゃんの誘いを受けていればと怒りを溜める。

割と暇そうな隊員がいないことにショックを受ける四人だったのだがその時作戦室がノックされる。誰だと思つてみると自動ドアが開き、物凄く落ち込んでいる小佐野が入つてきた。

「ど、どうしたの？ 諏訪くんと堤くんが居なくて、寂しかったの？」

どちらかと言えば明るい性格の小佐野が一生に一度見れるか見れないかの落ち込みっぷりで入つてきて焦るS村さん（独身）

中に入れて、小南が持つてきたオレンジジュースを飲んで一服すると、更に表情が暗くなる。

「……つつみんは、加古さんの誕生日祝いに行ってる」

「え、ええ……加古さん、今日が誕生日なのは知ってて太刀川がなんかそれ用の動画を撮ってたわ」

「すわさんはレイジさんの応援をしてる……ひさと、はまだ早いからいいか。」

とにかく、高校生以上で同じ部隊の人達は男がどうか女がどうかかしているのに、しているのには私は今日なにをしているんだらうなあって」

小佐野ってこんなキャラだっけ？と我を忘れる一瞬が生まれる熊谷。

話を聞く限りは小佐野もまた小南と同じクリポツチなのだがどうも小南とは違うように、どちらかと言えばS村さんに近かった。

「もしかして……」

「三ヶ月前から予約してるバスツアーがあるから無理だつて、断られた。」

急に言われても予定たてられないだらうからつて期末テスト終わって直ぐに誘ったんだけど、無理だった」

「断られたの!?!誰よ、誰なの!?!犬飼?それとも柿崎さん?」

ボーダーの中でもモテる人と言えば、嵐山、奈良坂、綾辻、烏丸の四人だ。

小佐野は元読モであり、綾辻の次にモテる。女子としてはN.O. 2のモテる女で、断られたことに小南は驚くのだが、那須と熊谷は断った人物に物凄く心当たりがある。

「あの、もしかしてそれってアレかしら。」

今年の体育祭で何故か部活動対抗リレーに帰宅部として出場して、ボーダー組と陸上部を追い抜いて優勝した……あいつ?」

「うん」

「……意外な強敵登場ね、くまちゃん」

この那須の一言をきっかけに、恋話が始まつたりするのだがその前にと摘まめる物を増やすべく買い物に出掛けることにした。

「そういうえば、迅さんは?」

「なんか朝から、リア充怖いって布団に引きこもってるわ。」

とりまるもレイジさんもボスも触れるなって言ってたし、珍しく元気が無かったから皆でソツとしているの……リア充が怖いって、あいつなにが怖いのかしら? 辻ちゃんと違って、普通に女性と話せるのに……」

実力派エリートこと迅のサイドエフェクトは未来視だ。

確定した未来ならば数年先だろうがハッキリと見えて、不確定なら本当に少し先しか見えない。そして本日はクリスマス、クリスマスとはSOXであり、未来が見える迅には辛かったり辛くなかったりする日である。小南はリア充が怖い意味に気付かないのであったが、気付かなくていいんです。それが彼女のバ可愛いところなのですから。

第16話

「あゝ疲れた」

熊谷達、特に予定が無いガールズがケーキなどを買に行っている頃、出水は防衛任務を終えた。

「クリスマスという色々な意味でめでたく馬鹿騒ぎ出来る日に近界民やってくんじゃねえよ。近界民、クリスマスの概念無いかコンチクショウと愚痴りながらも隊室に戻った出水。

「くっさ!」

普段から汚い太刀川隊の作戦室。

定期的にボーダー職員が入って掃除をしてくれるぐらいに汚いのだが、決して臭くはない。というよりは、クリスマス前に掃除されており、汚くはなかった。

「うゝなに?この匂い。納豆より臭い!」

誰かがなんかやかしたのかと思っていると国近がやって来た。

手には大量の揚げ物が盛られている皿を持っていた。

「なんか入ったら臭かったんすよ。というか、その唐揚げの山は」

「唐揚げじゃなくて、ザンギ。」

「この後、今ちゃんや生駒さん達と御当地名物の食べあうの……味見する？」

「良いんすか!?!ありがとう、ございます!!」

唐揚げとザンギの違いは分からない出水だったが、美味しいものであることは分かっていた。

出来立てのザンギを一つ貰い、頬張ると美味しい美味いと笑みを浮かべる。

「太刀川さん、もう加古さんの所に行ったの？」

「みたいっすね、あ、もう一個貰っても良いすか？」

「いいよ……折角、食堂の厨房を借りて作ったのに、太刀川さん運が悪いな……っていうか、なんでこんなに臭いの？」

この前、掃除したばっかなのに?と首を傾げる国近。

このまま今年一杯臭いまま過ごすのは嫌だとなにか原因は無いかと探していると、テーブルの上にあるパソコンの上に「出水、国近、ついでに唯我へ（唯我いなくても見ても問題ない）」と書かれているDVDが置かれていた。

「なんだこれ？」

「こんなもん、うちの隊室にあつたつけ?と首を傾げる二人。」

唯我は割とどうでも良いと扱っているなら、太刀川が用意したものだど気付き再生を

する。

『太刀川くん、はじまったよ』

「堤さん？」

DVDが再生されるとトリオン体に換装した太刀川が映っているのだが、堤の音が聞こえる。

堤の音が聞こえると同時に若干だが映像がぶれたので、堤がカメラマンだと察して取り敢えずは映像を見ることに。

『これを見ている時、俺はもうこの世に居ないかもしれない』

「なに言い出してんだ、この人!？」

「まあまあ、落ち着きなよ」

置かれていたDVDが遺言状的なものと分かると驚く出水。

死ぬかもしれない危険なことは今までも何度もしてきたが、何故こんなもんをとパソコンに触れようとするのだが国近が宥めて、続きを見る。

『正直、DVDは編集が面倒だから嫌なんだ。

遺言書を書いたのはよかったんだが、堤が字が汚いからダメだと言ってきてこうなった』

『汚い以前に、誤字脱字が酷かったよ』

「なんか軽いね。ちよつと飛ばしてみろ?」

戦いにおいて頼りになる太刀川、でなく普段のマダオとしての太刀川臭が漂うとマウスで映像を飛ばす国近。

軽いのはそれもその筈、今から加古炒飯を食べに行くだけであり死ぬことは無いのだが万が一と残したDVDであり、出水と国近に今までありがとうのお礼の言葉が入っているのだが、内容がそこそこ酷かったりする。

『俺が居なくなったら、出水隊として隊を率いるんだ。』

攻撃手が必要なら……アレだ、あのメガネのサイドエフェクト持ちの、三雲を誘うんだぞ。視覚だから菊地原よりも便利で、お前なりのやり方でA級1位になるんだ。俺からお前達に伝えるメッセージは以上だ……PS、悪いんだけど七輪の網捨てていてくれねえか?』

「七輪の網?」

一気に飛ばしてみると最後に辿り着いた。

無駄にカッコいいことを言っただけだと思っただけで、最後になんかおかしなことを言った。

また勝手に七輪を持ち込んで、餅焼いてなんかやらかしたのかと取り敢えずは七輪を探すと見つかるのだが――

「くつつさ!?!」

「太刀川さん、なに焼いたの!?!」

なんか七輪と七輪の網が尋常じゃなく臭かった。

太刀川隊の隊室がやたら臭かったのはこいつが原因か!とごみ袋を二重にし、七輪と網を入れるのだが臭かった。

「あの人、なに焼いたんだって……ゴミ袋からもしやがる」

「うゝ鼻が、曲がりそう。あの人、なにをした!?!」

謎の臭いに包まれる太刀川隊の隊室。

これ以上は居てたまるかと思臭力を置いて、二人は出ていき、ゴミを捨て、二人はそれぞれクリパに向かった。

「くさやはあつたか?」

「ああ、あつたよ」

一方、その頃の太刀川というと同年代の加古の誕生日を祝うべく加古隊の隊室へとやって来ていた。

友人で同年代でボーダーに入った時期が近い太刀川は唯我には薄情なもの、加古には普通で誕生日を素直に祝う……のだが、逆にこつちが呪われそうな勢いであった。

加古は炒飯作りを趣味としており、五目とか海老とかキムチとかの定番の炒飯だけで

なくチョコミント、プリンアラモード炒飯などというゲテモノまで作る始末。

同じく誕生日を祝いにきた堤は一度も当たりの炒飯を引いたことはないが、太刀川は当たりの美味しい変わり種炒飯を食べたことがあり、絶品といえる味なのだ。

本日誕生日の加古は同期とか周りの人達の奢りで加古の好物であるリングゴを使ったデザートとか高級焼肉とか高級バイキングを奢る……という展開にはならなかった。

主役である加古が自身の誕生日を祝ってくれる人に炒飯を振る舞うという、主役が働かざる誕生日パーティー（狂）が行われる。

「あいつの占い、マジで当たったな」

1ヶ月とちよつと前に、隊の部下が通う高校で占ってもらった。

宗教とかに関係する日（クリスマス）に無駄に色気ある美貌な女性（加古）が危険で愚かな行為（激マズ炒飯作成）をし、巻き込まれて（誕生日を祝う）覚悟を決めて挑んで撃沈（激マズ炒飯を腹くくって食べる）未来を占ってもらった。

ありえないと否定したくても、否定できない堤と太刀川。未来を見れるサイドエフェクトを持つグラサンに頼るうにもクリスマスだけは絶対にみたくないと頼りにならなかった。

占いなんて迷信だ！と全力で否定しては死んでしまう。ここはその占いを信じてみよう、太刀川と堤は未来を変えるべく色々と頑張ってみた。

最初はそもそも加古に炒飯を作らないようにすれば良いんじゃないのかなと思ったのだが、それが出来れば最初から苦しむことはないんだと、炒飯を作らせないという手は取れなかった。

「太刀川くん、堤くん、来馬くん、風間さん、今日はありがとう」

「誕生日、おめでとう。あ、これぼくからのプレゼントだよ」

「あら、これって中華包丁と中華鍋？」

「うん。」

誕生日プレゼントを何にしようかなって考えて、料理が得意な今ちゃんと話したらこれが良いって」

「そうなの、ありがとう。これって、物凄く良いところの中華鍋と包丁よね？今日はこれを使って炒飯を皆に振る舞うわ」

「楽しみにしているぞ、加古」

誰かが犠牲にならないければならない犠牲を強いる加古の誕生日。

隊の三人が国近と同じクリパに出ていて割かし暇な来馬は加古の誕生日プレゼントとして、料理が得意な今が選んだ物凄く良い中華鍋と中華包丁をプレゼント。

これにより加古は益々やる気を出してしまい、炒飯を作るのをやめてくださいと頭を下げたとしても止まらなくなった。後、風間さんがワクワク気分だった。

「そういえば、二宮はどうした？」

「それが、用事があるから来れないって言うのよ。」

「同期の誕生日を無視してまで、いったいなにかあるのかしら」

「なんもん、逃げる為の嘘に決まってるだろう！お前の炒飯が危険だと一番感じてるの
あいつだぞ!!」

とツツコミを入れたい太刀川だが、入れるとややこしくなるので入れない。

代わりに今度、ランク戦を挑んで二宮ボコろうと決意する。

「ああ、二宮くんなんだけどコレを渡してくれて頼まれたよ」

太刀川がこの場にいない二宮に恨みを募らせていると、来馬は忘れていたと箱を取り出す。

「なんの箱？と首を傾げる加古は中に入っているものを確認すると驚く。

「これ、アップルパイじゃない」

「中々の良いとこのアップルパイだな……この辺にこの店はなかったはずだが」

「用事があるから代わりに渡してくれて、四塚市まで買いに行つたみたいだよ」

「そう……」

「この場にいない、総合二位のイケメンこと二宮と加古は犬猿の仲だ。」

殺しあったり、いきなり殴りあう関係でなく性格的な相性が悪かったりする犬猿の仲

であるものの、大嫌いとか死ねとか言う関係ではない。気難しい性格の二宮だが仲間意識を持っており、加古の誕生日を祝うぐらいの気持ちはある。

堤でも太刀川でもなく、鈴鳴支部に所属している来馬を経由してアツプルパイを渡すところを見る限りは、明らかになんで来なかつたと弄られない為の御機嫌取りだが。来馬が間にいるせいで、文句も小言も言えない加古。取り敢えずはアツプルパイを冷蔵庫に入れる。

「よし、じゃあ先ずはゲームでもするか。国近から色々と借りてきたぞで」

「いいね、ゲーム！なににする？」

既に炒飯を食べることは確定しているのだが、やっぱり怖いものは怖い二人。

ここはゲームで時間を稼いでと、スマブラやマリオパーティといった友情破壊ゲーを出すのだが――

「ゲームは後、後。」

ゲームで摘まめる物を食べてお腹をいっぱいにしたら、ダメじゃない」

今はダメだと却下される。

やっぱりダメだったかと堤と太刀川は諦めるのだが、元々このゲーム作戦は無理だと思っていたのでそこまで落胆していない。

「加古、今日はどんな炒飯なんだ？」

この状況下で相変わらずな風間は、振る舞われる炒飯について聞く。

本人は肉系か魚系かそれとも野菜系か、どんな美味しい炒飯を作ってくれるか楽しみで聞いているのだがグッジョブ風間さんと太刀川と堤は心の中でサムズアップ。

「うくん、冷蔵庫と相談かしら？」

風間の質問に主婦みたいな返事をする加古。

それを聞いて二人は心の中で物凄くガッツポーズを取った。今年は生きて帰ることが出来ると大喜びだ。

「そうか、美味しい炒飯を期待しているぞ」

「なにが出てくるのか、楽しみだね。来馬くん」

「加古さんのはなんでも美味しいからね」

来馬は自動的に当たりを引くが、俺達は違うんだと何時もなら叫ぶが今回は違う。

今回は胡散臭い全身タイツ（黒）を着たターバンの青年がくさやを入れると占いで出ており、それを二人は信じた。くさやを入れた炒飯、加古ならばマジでやると謎の確信を持っており、二人はその対策をした。

今までチョコミニント、いくらカスタード、蜂蜜ししやもと言った結構ふざけたラインナップの炒飯を出して自分達を殺してきた加古の炒飯。事前にどんな物かさえ分かっているのならば、馴れておけば良いと感覚が麻痺している二人は加古炒飯対策の為に

さやを食べた。

そもそもくさやというのは物凄く臭いのキツイ魚の干物であり、その匂いを特に気にしない人達にとってはかなりの珍味であり、ドリアンとかと同じく匂いさえ気にしなければ美味しい食材でゲテモノとかまずいものではない。

ならば、くさやをおかずに白米を美味しく頂いて加古炒飯に耐性をつけるんだと頑張り、完璧な耐性はつけられなかったものの、まずいけど食えんことは無いまでのレベルにまでは持つてこれた。

悪いね、出水くんの友達。

お前の占いは、覆させて貰った。

テレパシーでもあんのかと言いたいくらいに息びったしな二人。

でも、世の中そんなに甘くない。彼等の未来は変わらない

「右から、主菜、副菜、ソースよ」

「……え？」

勝ったとドヤ顔をしていた二人の前に、マゼンタ、シアン、イエローの3つのくじ引きとかでよく見る箱が置かれた。

突然の事に固まってしまふ二人。来馬も風間も状況がよく分からないので、取り敢えずどういふことか聞いてみた。

「冷蔵庫に色々と材料を入れているのだけれど、どれを誰に食べてもらうか悩んじゃったの。」

それと今までみたいに複数の試作品を別々に振る舞ったとしても面白くはないわ。だからね、思いきってアドリブで作るのよ」

「そ、それはつまり？」

「マゼンタにチャーシューや鮭なんかのメインの具材が書かれた紙が、シアンにはネギ

とか人参とかピーマンなんかの副菜が書かれた紙が、イエローには豆板醤やトマトケチャップなんかの味付けに必要な紙が入っているの。後は、分かるわよね？」

「一枚ずつ引いて、その三つを組み合わせた炒飯を作るといふことか。面白い」

いや、面白いわけねえだろう!!ふざけんな、この20歳児!!ファントムばばあ!!

本来ならばこんな事を男前な風間に言わないのだが、今日ばかりは違う。

自分達が色々頑張ったのに、そこそこの耐性をつけたのにそれを一瞬にして無にしてきた。くさや炒飯なら頑張れたが、くさや蜂蜜炒飯とか出てきたら死んでしまうと焦る。

「よし、じゃあ先ずは来馬からだ!」

「ぼくからで良いの?風間さんから行った方が」

「クリスマスになにを言っているんだ。今日はそういうのはなしだ」

トップバターは炒飯での死亡経験が無い来馬だ。つーか、来馬が一番最初にいかないと死ぬのである。

つい最近、真の悪にアクアリウムを破壊されても血涙だけで許した仏の様な男である来馬は本当に仏なのか、物凄く運が良く今まで一度もハズレを引いたことはない。それ

どころか「ぼくばつか当たりを引くのは申し訳ないよ」と純然たる善意で堤や太刀川、ここにはいない柿崎（隊でパーティの後に東達と合流しボウリング大会）に試食を譲ったら、その炒飯がハズレだったという幸運児。

こいつはどうあがいてもハズレを引かない星にいるんだと二人は知っており、来馬に当たりを引かせないとハズレが自分達に向かつてくると譲る。

「よし……先ずは、副菜……チーズだね」

イチゴジャムとか生クリームとかの謎の食材を引き当てず、チーズを引き当ててる。

やはりこいつに先に引かせてよかったと、残りの主菜とソースの箱を一気に引かせる。

「味付けはミートソースで、主菜はハンバーグだよ」

それ、炒飯じゃなくてドリア的ななかである。

やはりこの男の運はとてつもなかったが、これでオレ達は生き残る事が出来る（かもしれない）ぜとホツとするのも束の間、風間が主菜を決めるマゼンタの箱に手を差し伸べた。

「え、風間さん？」

「来馬は引き終えた、次は俺の番だ……いや、少し固いな。」

太刀川は副菜を堤はソースを決める同時に引いて、ローテーションで回していくのは

「どうだ？」

今から堤を蹴落としてまで引こうとしていた太刀川は困惑する。

この人はスリルを味わっているとかそんなんじゃないやなくクリパと誕生日会を合わせた感じのノリで言っている。自分が言っている事がどれほどリスクが高いのかと分かっているないと叫びそうになるのだが堤が止めに入る。

「いいですね、それ。三人同時に引きましょう」

「どういうつもりだ!？」

「……風間さんが全て当たりを引いて終わりになって、残り物をどう組み合わせてもゲテモノにしかならない。これはオレ達二人が絶対に避けなければならぬ未来で、そうならない為にはこうするしかない。リスクは余りにも大きい……だけど、運が良ければ風間さんが……くさを引くかもしれない」

人間、誰だって死にたくないものである。

例えば歳も実力もカリスマ性も上な男であろうと蹴落としてまで生き残る。これが人間の本性である。

そんな人間の醜い本性を見せたり見せなかつたりとし、箱の中に手を入れて食材が書かれた紙を掴む三人

「「いっせーのーで!！」」

全員が大学生だが、そんなことは知ったことでないと年甲斐もなく叫ぶ三人。
「ツナか……」

主菜でツナを引き当てた風間は少しだけ残念そうにする。

ハンバーグがあるならば、大好物のカツカレーのカツがあつてもおかしくはないと思っていたが、ツナを引き当てたのでちよつと残念だった。

「どうだった、つつ……真つ白になってやがる」

副菜である自分は危険な目に遭わないとなにを引いたかを確認せず、堤がなにを引いたのかを聞こうとする太刀川だが堤は真つ白に燃え尽きていた……くさや汁と書かれた紙を手にも、真つ白に燃え尽きていた。

「生き残るんだ、絶対に」

くさやならともかく、くさや汁はどうあがいても不味い。

生きることを諦めた漢、堤大地はせめて太刀川だけでも生存してくれと強く祈りを込めたのだ……が、無駄である。

「太刀川くんは、フリスクのブラックミントね」

「なんでそんなものが入ってんだ!？」

なに当てたか教えないので、紙を無理矢理奪い太刀川の引いたものを確認して笑みを浮かべる加古。

100歩譲ってもフリスクは味付け、ソースじゃねえのかと言うのだが、粉末にして味付けに使うのでなく錠剤のまま米と一緒に炒めるので違うと否定する。

「嘘、だろ……」

「次は……豆板醤か」

「……そうだ、魚を引けば良いんだ」

フリスク入りの炒飯なんてどう頑張ってもまずいと絶望の底に落とされる太刀川を横に、豆板醤を引き当ててる風間。太刀川までも散るのかと既に死んだも同然の堤だが、主菜で魚系の食材を引き当てれば擬似的なくさや炒飯になるんじゃないかと、生き残る突破口を見出だす。

「……生ハムを、焼いたら、焼いたらただのハムじゃないか!!」

だが、見つけただけで突破は出来なかった。

続く太刀川はソースを引き、エバラのゴマだれを引き当てて更に死にそうな顔をす
る。

「さあ、驚いても笑ってもこれで最後よ」キラーン

最早、泣くことは許されず死が待ち受けている太刀川と堤。

これ以上、これ以上はなにを恐れるんだと引いていない主菜と副菜に手をつたんで、一気にくじを引いた。そして死んだ。

「太刀川くんはくさやとフリスク（ブラックミント）のゴマだれ炒飯、堤くんは生ハムメロンのくさや汁炒飯、風間さんはツナとうずらの卵の豆板醤炒飯、来馬くんはハンバーグとチーズのミートソース炒飯ね！順番的に風間さんののが一番早く出来るわ」

「そうか……ワガママを言つては悪いんだが、うずらの卵は焼かずにそのままにしてくれないか？カレーの時に使う卵の様に使いたい」

「問題ないわ」

普通に美味しそうな炒飯を引き当てた風間だが、ドライカツカレー的な炒飯が作れなくて残念だったのか自■軒のカレーの様に食べたいと要求した。

「堤」

「なにかな？」

「来年は、柿崎とか弓場とか呼ぼう。それか、国近とか生駒とかの外部組のところでご当地郷土料理炒飯にしようぜ」

「もう、諦めよう。」

外部組は皆、良い子で未成年ばかりなんだ。無理に犠牲を強いるんじゃないやなくて、オレ達が被害拡大を食い止めるんだ」

「ノリで作ったDVD、本当になっちまったな……」

男二人は覚悟を決める。メガネ（兄）のサイドエフェクトが覆せなかったことは一切、

悔やまない。ここまで頑張ったことは決して無駄ではなかったのだからと自分達に言い聞かせる。

「来年は、絶対に絶対に二宮を捕まえてつれてきてやる……」

ただし、二宮テーマは別だ。

おかしな匂いと食感と味と風味がする炒飯に男は挑んだ。けど、やっぱり死んだ。

「ゆりっ、さん、ボウリングでもどうですか？」

「ボウリング、良いわね！最近、体を動かしてなかったし……負けたら、ジュースを奢るのはどう？」

「負けませんよ、絶対！」

「おい、あいつ全ストライクとか出すんじゃねえだろうな？」

「ここはあえてギリギリの接戦からの敗北じゃないと……花を持たせないと、好感度上がらないだろ」

因みにだが玉狛の木崎レイジは林藤ゆりとデート（というなの買い物＋映画＋食事）をしていた。

同年代である諏訪と風間と寺島雷蔵の力を借りて頑張ってデートプランとか用意してみたけど嘸みまくりであり

「あれ、レイジさんじゃないすか！」

最後に向かったボウリングが偶然にも東さんと遊びに来ていた出水達と遭遇し、好感度は上げただけで終わってしまい、諏訪の予想通り、ゆりに花を持たせることなく全てストライクを叩き出したのは全く関係のない話である。

第17話

「待ちなさい、それで行くつもりなの？」

クリスマスはかなり楽しくすごし、大晦日には美味しい年越し蕎麦を頂き、除夜の鐘を鳴らす人を決めるくじを当てたり、親戚に挨拶をしたりと楽しい年末と元旦を過ごした。

今日は1月2日、三ヶ日はまだ終わっておらず終業式に交わした約束を果たすべく早起きしたのだが母さんに止められる。

「やっぱり、白はダメだと思っう？」

「そういう問題じゃないわよ」

「兄さん、流石にそれは……三ヶ日だし、着物はどうか？兄さん、着物が似合うよ」
親類に酔い潰されて眠っている父さんは玄関前にはいない。

父さんの二日酔い対策のなめこの味噌汁を作っていた母さんと、正月だからって怠けない生真面目な修は私の服装を見て、止める。

「着物……着物か……」

これから米屋や三輪達と合流して初詣に行くのだが、誘ってない人達や会ったことの

無い人達（原作キャラ）に会う（確定で）。

別に服装なんてどうでも良い。百鍊自得の極みと書かれたトレーナーを着ていき、米屋に爆笑されようが割とどうでも良いのだが、着物となると少し考える。別に好きでもなんでも無いが、何故かあるんだよな着物。

顔が手塚国光なせいとか、無駄に似合う。しかし、高確率で成人に間違えられる。老け顔よりも童顔の方が良いと思うのは20歳児に失礼かと靴を脱いで着物に……具体的に言えば、グリーティングカード（2019）で手塚国光が着ていた茶色の着物へと着替える。

「あ、これ昨日渡し忘れてたお年玉よ。」

一部は今回の競艇の代金に回しているけど、使いすぎたらダメよ」

「分かってるよ……最悪増やすし」

「兄さん、あんまりやり過ぎると脱税の容疑がかけられるんじゃない……」

「北海道にふるさと納税はしている。問題ない……冗談だ」

「真顔だと、冗談に聞こえないよ！」

「全く、誰に似たのかしら」

そういう意味じゃないんだけどと修は冷や汗を流していたので、気持ちを楽しませるべく冗談だと言ったのに内心ビクビクだ。

修もどちらかと言えば大爆笑して大きく口を開けて笑ったり、物凄くガッツポーズをして叫ぶ米屋や出水の様な騒がしいのが好きなタイプではないのに、どうして冗談を見抜けないのだろうか？

「少なくとも、老け顔は誰の遺伝でも無いのは確かだと思う」

「安心しなさい、最低でも残り20年はその顔よ」

老け顔も考えようによっては若く見せる道具になる。

顔と年齢が最も合わない女性が言うことは深いと感じ、私は家を出て初詣に向かう。因みにだが、既に競艇で賭けといてと今日当たる大穴に○をしている。

「新年、あけましておめでとうございます。本年度も、よろしく願います」

何時もは蓮乃辺方面だが、今年は三門市方面での初詣。

道を間違えないかと少し心配だったものの、迷子になることなく待ち合わせの場所についた。だが、着物に着替えていた時間が思ったよりも長かったようで、米屋と出水は先に来ていた。

遅刻はしていないし、とりあえずは新年の挨拶をするのだが二人は固まっていた。

「……着物、変か？」

「いや、逆だ逆」

着物の私に対して、出水達は私服。

明らかに浮いているのは確かなのだが、そこを気にしていない出水と米屋。

「なんだろ……オレ、今少しだけ嵐山さんの後ろを歩く佐鳥の気持ちがかかる」

「キヤーキヤー言われている嵐山さんの後ろを歩く佐鳥って、こんなに辛かったのか」
絶望にまみれた表情で俯いて何度か私を見る。

普段は老け顔を弄られる私も今日ばかりは話は別で、この老け顔のお陰か着物が人一倍似合っているようだ。そのせいか、この二人は私服で来てるオレ等ってなんだろうと落ち込みまくっている。そして佐鳥は本人が知らないところで物凄く同情をされていた。

「こっちの初詣に来るのは、はじめてだが……最早、祭りだな」

「初詣は祭りだろ？」

神社の境内が大にぎわいをしているのは何処でも見るが、道路を封鎖しないといけないレベルは中々に見ない。

神社の外にある露店を合計した面積の方が神社よりも大きい。私のサイドエフェクトがそう言っている。それと、初詣は祭りではなく参拝する行事の……めでたい日ではあるが。

「ん、あれ影浦さんじゃね？」

「あ、言われてみれば影浦先輩だ」

「ゾエさんとヒカリと……誰かは知らんが、知り合いが居るところを見ると影先輩だな」
「絵馬ユズル、確か影浦さんとこのスナイパーだ」

「出水、その言い方だと、殺し屋に聞こえる」

「三雲、今のお前が言うとお洒落にならないからやめてくれ」

それはどういう意味かと小一時間ほど出水と話し合いをしたいが、我慢我慢。

今は屋台でお好み焼きを焼いている影先輩とヒカリ達を見て心を和ませて熊谷達を待つ。

しかしまあ、タオルで頭を巻いている影先輩、影先輩だと分かり辛いな。ギザギザな歯が無いと気付かない人もいそうだ。

「米屋、クリスマスとか年末どうだった？」

「あくお年玉無しから半額に変えることに成功したわ。」

半分はなんか強制的にお年玉貯金に回されることになっちゃったが、諭吉は手に入れた」

「それを倍以上に増やす方法があつてだな」

「マジ!？」

お正月だから羽目外し過ぎるなって財布差し押さえくらつてんだけど、そんな夢の様な方法が」

「おいやめとけよ。」

おれ、こういう時にロクな事が起きないの知ってたぞ」

「失礼な……競艇に賭けるだけだ」

「まごうことなき、ロクな事じゃねえじゃねえか！」

「いやでも、これが当たるんだ。今日、数百倍のオッズの大穴が当たると出ている」

諭吉は賭けていないものの、それが当たれば数十万が一気に手に入る。

米屋に年始の一回だけの競艇の楽しさとスリリングを教えるのだが、出水はそれはマジでダメな奴だと言って止める。ははーん、さてはお前はカジノ派か。他人に任せるのではなく、自分でしないと気がすまないタイプだな。だが、カジノが出来る様になるのは下手すれば10年以上先だぞ。

「クリスマス、ヤバかったぞ。」

防衛任務の後にボウリング大会があつてよ、そこでデートしてるレイジさんって人に出っただけどパーフェクトを達成したんだ」

「女性に花を持たせろよ……遅いな」

「熊谷達、着物で来るらしいぞ」

クリスマスは年末どうだったの話題は割とあっさりと尽きた。

私がそこまで話していないから、まだまだ話題は残っているのだがそこは割愛。女性

陣が着物で来るし、新年の挨拶回りとかボーダー隊員は忙しそうだ。

「なんか何時の間にか影先輩のところでヒカリが手伝ってるな」

「影浦さん、こういう場所が苦手だから上手く接客できなくてヒカリが「ったく、しかたねえな。カゲはアタシがいないとなんも出来ないんだから」って言つて手伝ってるだけだろ」

いつそのこと影先輩のところに食いに行くかとなり、チラリと見るとなんかヒカリが働いていた。

その状況について米屋が物凄く分かりやすく尚且つ想像しやすいとても丁寧で適切な説明をしてくれた。本当に、分かりやすく秒で想像できる。

「……強面でぶっきらぼう、でも料理の腕は確かな夫とがさつでサバサバしているもの愛想とルックスは良い妻の中々にバランスの取れた夫婦が営んでる」

「やめろ!!新年早々、とんでもない事を言うんじゃない!!若干、想像しちまったじゃねえか!今のところ野郎しかない、おれ達の年始が凄く辛いものじゃねえか!!」

「と、思うじゃん?」

影先輩が尊い存在に見える中、段々と惨めになっていく出水。

確かにキヤツキヤウフフと影先輩とヒカリはお好み焼きを売ったり、接客している。黙っていれば美人のヒカリとワイルド系の男性としてみればクールでカッコいい影先

輩の組み合わせは中々である。

だが、それとこれとは別である。惨めな気持ちになっているのは出水だけで、私と米屋はそこまでであると携帯を取り出す。

「栞經由で何人かと会ってんだよ、オレは」

「私は可愛い年下の女の子（弟の幼馴染み（意味深））がいて近所のイケメンお兄さんだ」
「ざけんなよ……特に三雲！」

お前、頼れる近所のお兄さんポジを持っているのかよ。どう見てもおじさんだろ」

「諦メロン……来たか」

私は千佳の、米屋はいとこ（宇佐美栞）の写真を見せてつけて出水を絶望へと落とすと
主役がやって来た。

着物姿がとても似合い見るものの心を虜にする那須、熊谷、日浦、小佐野……がナンパとかされない為に囲む様に守っている三輪、那須のいところで三輪と同じ部隊のたけのこ王子こと奈良坂、着物姿の太刀川（さんはいらん）、そして無駄に男前で高性能……しかし、身長が160cm以下の男、否、漢の風間さんがいた。

「……あく……」

「風間さんも来たんすか？」

「なにか問題でもあるのか？」

「いや、意外だなんて。」

おれ、太刀川さんが来るのはなんとなく分かってたんですけど、風間さんは諏訪さん辺りと行くんじゃないかと思ってて」

「諏訪なら、昨日一気に羽目を外してて潰れている。新年早々とはいえ、はしやぎ過ぎだ」

なんと言えば良いのか、物凄く凄い絵面になっている。

太刀川でも奈良坂でも三輪でもなく、風間さんが先頭に立って那須達を導いておりどう反応すれば良いのかが分からない。出水や米屋にとつては日常茶飯事の様で、風間さんが来たことに驚いているだけで、来た理由を聞いて。

「お前が三雲か。」

米屋や出水、それに太刀川から色々と聞いている。風間蒼也だ」

「三雲です……」

「そう固くなるな。」

確かに、目上の初対面の相手だがある程度は緩くても構わんぞ」

「あ、はい」

背丈さえあれば完璧な男だ、この人は。

予想外の人物の遭遇した為に固まるのだが、直ぐに冷静になり何時も通りになるのだ

がそういえば今回が初対面な奴はもう一人と奈良坂を見る。

「奈良坂だ……米屋が、なにかとすまない」

「三雲だ……ポーターの偉い人にそういう感じの部署作らないか提案してくれ」

出会って早々に謝られたのは予想外だが、一言だけは言わせてもらおう。

本当にポーターにそういう感じの部署を作っておかなければ何時か大変な事になってしまう。遙か未来は見れないが、少なくともその未来が確定している気がする。

「三輪、太刀川さん、新年あけましておめでとうございます。本年度もよろしくお願いいたします」

「ああ、よろしく」

「お前、貫禄半端ねえな」

初対面の人への挨拶を終えたので、次は顔見知りの野郎に新年の挨拶をする。

何時も通りの私服の三輪は友人としてよろしくと返事してくれるのだが、太刀川さんは私を見て笑う。

「那須、熊谷、日浦、小佐野。」

あけましておめでとうございます。今年もよろしく頼む……それと、似合っているぞ、着物姿」

「三雲くん、皆まとめて褒めるの？」

「どうしろと言うんだ？」

「そこは一人一人褒めないでダメですよ！」

「おい、あいついきなり囲まれたぞ。出水、どうする？ 処す？ 処す？」

「いや、それよりも面白いもんを思い浮かべたぞ」

三輪達への挨拶を終えて、次は女性陣。

しかし、まとめて褒めたので日浦が両頬を膨らませてポンポンと怒ってしまった（可愛い）。これ一人一人、何処がどう似合っているのか言わなければならぬ展開が来ってしまったのかと思ったら出水から救いの手（毒手）が差し伸べられる。

「着物なんて早々に着るもんじゃねえし、何枚か写真に納めようぜ」

「嫌だ、断る。私は写真、絶対に撮られたくない」

ロクでもない事を考えていそうな出水だが、写真を撮るのならば如何なる理由であろうとも断る。

サイドエフェクトが原因とかそういうのじゃなくて、単純にカメラを向けられるのが嫌いだ。フラッシュでチカチカするとか、そういうのはない。トリコのココの能力という名のサイドエフェクトだからか、今さらカメラの発光がキツイとかは無い。

「太刀川さんと一緒に並んで撮ってみろって」

「お前、最初からそれが狙いか」

「視界から風間さんを消しても、違和感……いや、太刀川さんの方が幼く見える」
「そういうのは毎年やっているからもういい!!それよりも、お参りに行くぞー!」

これ以上はこの顔で弄られるのはごめんだ。

若干怒りながらも私は前へと進み、賽銭箱がある場所に向かおうとするのだが風間さんが袖を掴む。

「三雲……それは大人だと周囲から見られているんだ、恥ずかしいことでもコンプレックスでもなんでもない。」

むしろ、若く見られる方がコンプレックスになる時も多い。老け顔はこれから先もその顔で程よくキープ出来て実年齢よりも若いですんで済むが、童顔はそうはいかん」

深い、風間さんが言うことによって深みが増している。

新年早々に初対面の人へフオローを入れられて、なんだか言いようがない気持ちになり今年は何年かなにかかと全員で足並みを揃えて賽銭箱にお金（私は100円）を入れて、お参り。

これから起きる大規模侵攻とかは自力でどうにかしなければならず、学校関連もそれなりに上手く行っている……あれ、なにを願えば良いんだ？強くてニューゲームをしていて、お金には困っていない。背丈とか恋の悩みとかもない。修と千佳が早くイチヤツク関係になれば毎年願っているが、今年はどうあがいても無理っぽいし、なにを願えば

良いんだ？

「三雲、どうしたの？」

「いや、なにを願えば良いのか改めて思い浮かばなくてな……小佐野はなにを願ったんだ？」

「え!?!……そ、そう言うのは言ったら叶わなくなるから教えないよ」

「そうか」

「なんだなんだ、愛しいあの人ののでヴあ!?!」

「太刀川、少し黙れ。」

三雲、大きな願いは自分の力で叶えるものだ。こういう時は細やかな願いを願えばいい」

「そうですか……じゃあ、コンビ二で貰える小さい方のストローにも曲げれる機能をつけてくださいにしておくか」

余計な事を言う太刀川さんに蹴りを入れる風間さんから助言を貰えたので、細やかな願いを願った。

頼むから曲げる機能をつけてください。大きいサイズのやつの曲げる機能は地味に便利で小さいのにも欲しいんだ。

改めて願い事を願い終わると、次はおみくじだとくじを引きに行こうとするのだがな

にかを思い出した太刀川さんに肩を掴まれる。

「生ハムメロンの炒飯くさや汁仕立てとくさやとフリスクの炒飯、ゴマだれ仕立てってどう思う？」

「なに言ってるんだ、あんた？」

「イチゴジャムの焼肉とアーモンド炒飯を今年は食わせたい奴がいるんだ、協力してくれ」

「嫌です」

これもまた面倒な事になると私は回避する。

というよりは、なんだその絶妙なまでに微妙な味になる不味いとハッキリ言えない中途半端な炒飯は。アーモンドとイチゴジャムって、そこそ美味しいぞ。炒飯だと思わずに食えば、案外食べれそうだ（大博打）。

太刀川さんを見無視し、おみくじを引き終えた後、神社を出て影先輩達がいる出店の舞台のエリアに行くこうとするのだが那須が止めてくる。

「この人数で遊んだら混雑するし、皆行きたいものもバラバラよ」

「そうですね！奈良坂先輩の言うとおり、ここはグループ分けしましょう!!」

「日浦、それ次の台詞だ」

「え、あ……すみません」

この人数で一ヶ所に固まっても、周りの迷惑になつたりする。

行きたい店とかそういうのも違うし、最もらしいことなのだが先走った日浦がミスに犯してしまう。

「……玲の言うとおりで。

俺、出水、三輪、米屋、風間さん、太刀川さん、三雲さ……玲、熊谷、小佐野、茜、合計11人だ。

飯に全員が一斉に影浦さんのところでお好み焼きを買った場合だと11枚を一気に焼いてもらわなければならぬ。それだとなにかと時間がかかるから幾つかのグループに分かれよう」

待て、奈良坂。

どうして太刀川さんの次に私の名前を言った際にさんをつけかけた？

「……奈良坂先輩の言うとおりで、ここはグループ分けしましょう!!」

「よし、じゃあ行くか!!」

「え、ちよつとまだグループ分けをしてないわよ!？」

「私達以外、一瞬で走り去つたな……」

日浦のミスを手くフォローすることなく、雑に扱う奈良坂。

空気を読んだのか脅されたのかはわからないが、太刀川さんの一言で私と熊谷と小佐

野以外が一斉に走り出して人混みの中へと消えていった。

「……米屋達、絶対に口裏を合わせてるよね」

「私、聞いてない……」

それはもう見事過ぎるまでの早さで人混みへと消えていった。

何処に居るのか探そうと思えば、探せる。というか、那須は病弱じゃなかったのだろうか？この日の為に生命力を振り絞って来たのだろうか？もしかしてトリオン体……なわけないか。

追いかけたら舌打ちをされる未来が待ち受けていることをなんとなく察している
と、携帯で那須達と連絡を取ろうとしている熊谷が顔を真っ赤にしている。

「私達、三人で行こっか」

「……あれ、なんかおかしいぞ」

良い感じのムードを作つてあげようと熊谷にも私にも小佐野にも迷惑なこの行為。

突然の事にどうしようも無いとバツサリと諦めた小佐野はこの状況を楽しもうとするのだが、おかしい。

「集場所あるから、遊んだらそこに来てつて……追いかける？」

「普通に遊ぶ」

「なにからする？輪投げとか色々あるみたいだから、退屈はしないっほいよ」

三輪がこんな事をするのは予想外だった。だがしかし。してしまったものは仕方あるまいと気持ちを切り替える。

小佐野が着物の袖を掴みクイクイっとして、ここからでも普通に見える輪投げの屋台を指差した。サラッと距離を近づけてくるんだな。

「……熊谷、追いかけるなら位置は教えるが、最終的に集合場所で捕まえる事が出来るんだから無駄な時間を浪費するだけだぞ」

「……」

「……お前達、袖を掴むのはやめてくれないか？」

心拍数が物凄く上昇し、脳波などがとんでもない事になっている熊谷と小佐野。

私の手ではなく着物の袖を握って斜め後ろを歩くのだが、二人とも視線どころか顔も合わせてくれない。

「変に緊張するな。こういう感じの状況は漫画あるある……だが、女性二人と男性一人はおかしいと思うんだ」

「……」

お前は どうして そんな 空気の読めない 事を 言うんだ？

服の袖を放した熊谷と小佐野はそう言わんばかりの絶対零度の眼差しを私に向けてくるが、私は決して悪くない。

小佐野も熊谷もどっちも選んでいないし選ばないし、選ぶわけないし、今年は余りラブをくり広げている暇は無いんだ……大学、何処に行くとかの進路が決まってないんだよ、これが。

「こういう場所はスリが多い、お正月だからといって油断せずに行くぞ」

私のくだらないようにで意外と重要な一言により、ムードなんかはすべて消え去り友人と一緒に遊びに来た感じの雰囲気となり出店は楽しめた。

「えっと、三雲くん……その手にあるのは？」

「型抜きと輪投げと射的の景品……気をつける、那須。」

「ここのおみくじ、ゲームとかの当たりは全くと言って入っていない」

「いや〜スゴかったよ、三雲。」

型抜きで10000円ぐらい成功して、誰も手に入れることが出来ない景品を手に入れた」

久々に転生特典が、ボッスンと岸边露伴を合わせた感じの器用さが発揮されて根刮ぎ景品を頂いた。冬休み明けは影先輩経由でブラックリストに登録された事を教えられた。

第18話

「えーと、ここか」

「あ、三雲くんこっちだよ」

三ヶ日も過ぎ、正月ムードは消えていった冬休みの今日この頃。

北海道に帰省していた国近先輩が三門市に戻ってきたらしく、お土産を受け取りに待ち合わせの喫茶店に向かった。

国近先輩は先に来ており、優雅にコーラフロートを飲んでゲームをしていた。

「すみません、遅れてしまっ」

「いいよ、いいよ。」

待ち時間はゲーム出来るし、色々となにを言おうかなって考えてたし」

「そうですか……あ、すみません。メロンソーダフロートを……出しますよ、この代
金」

「え、いいの？」

「待たせた詫びと、お土産で結構わがまま言ったじゃないですか。お礼ぐらいさせてくださいよ」

「もくお礼なんて……コレに出てくれればいいから」
「なんだこれ？」

謙遜とかそういうのを一切せずにガツツリと要求してきた国近先輩。

チラシをテーブルの上にパンつと置いたのでなんだと見てみると、G B Fと書かれておりふりがなが振られていなかった。

「ガンダムビルドファイターズですか？」

「うーん、ボーダーの技術を全て集めればザク辺りは作れそうだけどそうじゃないよ。」

G B Fはガチンコ、ボーダー、ファイトの略称でボーダーが何時もお世話になっている三門市の人に向けてのお年玉企画だよ」

「もう三ヶ日過ぎましたよ」

「流石に三ヶ日にそういう感じの企画は出来ないよ」

まあ、それもそうか。

ローテーションのシフト制で24時間活動している組織だが、正月にこんな事をさせると嵐山隊とか大変だろうな。

国近先輩から渡されたチラシの裏を見ると、氏名なんかを書く欄がありコレが参加申し込み用紙であることに気付く。

「5人一組のトーナメント形式の団体戦で、優勝者には豪華景品が貰えるの……2学期

の成績がさ、思いの外酷くて怒られて、お正月に買って貰える筈だってゲームが無しになつて……三雲くん、出てくれないかな？」

「特にやることないんで良いですけど、これ団体戦ですよね？私で大丈夫なんですか？窓の外にいる米屋と……米屋!？」

「あ、やつほ〜」

何故私を選んだんだと、こういうのは米屋とかが向いていると隣（窓の外にいる）米屋を指差すと米屋が居ることに気付いて驚く。

国近先輩は特に驚くことなく米屋に手を振ると米屋も手を振って笑い、携帯のカメラで私と国近先輩の写真を撮つてから入店した。

「うーっす！なにしてんだ？」

「今すぐに携帯を壊せ」

「写真を消せだろ、普通……で、なにしてんだ？」

「三雲くんをこれに誘つてたところなんだ」

「で、私よりも米屋の方が向いていると勧めていたところだ」

「ああ、それか」

GBFのチラシを見て、直ぐになにかと理解する米屋。

米屋、こういうのは大好きそうで、太刀川さんとか出水とかのボーダーの人達を誘え

ば人数は満たされるはずだとチラシを渡すと後ろの記入欄に私と国近先輩と自分の名前を……

「おい、私だけ名字か？」

何故私だけ名字しか書いていない？

「お前の名前、なんだっけ？」

「貸せ、私が書くから……それでなんで米屋とか出水じゃないんですか？」

「GBFは5対5の団体戦なんだけど、色々なことで勝負するんだ。」

スポーツチャンバラとかビームピストルの撃ち合いとか、とにかく色々やるんだけど……太刀川さんと米屋くんを誘ったら、クイズとかの頭使う系で詰むからダメ」

「いや、あんたもどっちかと言えばダメだろう」

「一人くらいお馬鹿が居ても大丈夫だよ……三雲くんが全体のフォローをしてくれるから。」

大丈夫、大丈夫。私が欲しいのは新作のゲームとGoogleプレイのカード（50000円）だけだから」

「そうそう、オレも楽しめればそれでいいし欲しいの根付さんプロデュースの大阪旅行With、USJの1dayパスポートだけだから、優勝商品はお前にくれてやるよ」

生々しい景品を言うな。

サラツととんでもない事を要求する二人。お年玉が減らされたりしたのが、そんなにキツかったのかここで断ればメロンとかが一切無くなる……あれ、おかしいな。お土産を渡したぞ。このまま渡さないととなると大損こくどころの騒ぎじゃない。

「この、超豪華優勝商品はなんだ？」

もう出ないというのは無しにして、出る方向で話を進める。

優勝商品は色々あるなど見ていると、一個だけよく分からない商品があったので国近先輩に聞いてみる。

「それね、ボーダーがなんでも一個だけ叶えられる範囲の願いを叶えてくれるんだって。

車が欲しいとか嵐山さんの直筆入り千発百中Tシャツが欲しいとか、出きる範囲ならばなんでも」

「なんでもか……タイプライター欲しいって言えば、貰えますか？」

「多分貰えるけど、チョイスが渋すぎない？」

欲しいのだから、仕方あるまい。

来年はなにかと躍動の年で今年はその躍動の年の準備期間とも言える。転生特典をメモしたりとか、日記を作ったりとか色々としたいからタイプライターが欲しい。パソコンだとデータ消しても復元とかされたりしそうだからタイプライターでないと……既に別の言語にしたりするやり方を覚えたいし。

「オレと先輩と三雲……残り二人はどうする？」

秀次はこういう感じのボーダーの企画には参加しねえし、この前の一件があるから奈良坂には頼めねえぞ?」

「ん〜奈良坂くんがどうしたの?」

「お祭りの景品で当てたアルフォートをあげようとしたら、殺意を向けられた……たけのこ至上主義者め」

「あいつのバレンタインの一部のチョコ、たけのこの里だからなあいつ」

凄く安くつくな、奈良坂は。

一番頼りになりそうな三輪がダメなのは少しキツイ。あいつ、なにかと器用だったりするし普通に頭も良い。この企画に参加すればそこそこ無敵だが、嫌がりそうな顔をする三輪が思い浮かんでしまう。無理に誘うのはよくないと止める。

「いずみんは?」

「……必要ですか?」

「え?」

誘えば即座に首を縦に振ってくれそうな出水を出さないので国近先輩が名前を出すのだが正直誘って良いのか悩みどころだ。

今回は皆でお祭り騒ぎをしに行くのでなく、冗談とかおふぎけとか一切無しで本気で

勝ちに行くメンバー構成でいかなければならない。そう考えると、出水の必要性が皆無だ。

「み、三雲？」

「これはトリガーを使わない、普段からお前達がやっている模擬戦でもなんでもないんだ。

出水はトリガーを使う才能に物凄く恵まれているかもしれないが、あくまでそれだけであり銃を使ったりしていない。なんかこう、サイコロ的なのをぶつけてるんですね？」

「ポジシヨンの言えば射手で、数少ない個人で点を取れる射手だよ。」

そう、そこが問題である。

出水はボーダーでは射手として活躍しており、射手はトリオンキューブを相手にぶつけるポジシヨんだ。銃手と違い、銃の扱いが上手いとかそんなのでもなく、剣が上手いというわけではない。

出水は射手としては絶対のセンスを持っている……だが、今回は生身での対決だ!!

「トリガーで変身したら身体能力は向上するかもしれないが、今回トリガーは使わないだろ。」

4月の体力測定で出水は足が速いわけでもスタミナがあるわけでもパワーがあるわ

けでもなく、平均的で特出したところは無い。進学校に通うレベルの学力を有しているわけじゃない……ハッキリと言おう、足手まといだ」

「うわ、言い切りやがったぞこいつ！」

「なんとでもいえ。」

今の私は理想個体の色違いイーブイパを作ろうと厳選してる廃人と同じなんだ。

色違いでもなんでもない普通の4V個体を出した際に舌打ちして『んだよ、これゴミ個体じゃねえか』と平気で言い切る鬼なんだ。タイプライターの為に心を鬼にする」

「あく私もそういう時、ついつい、言っちゃったり舌打ちしちゃうよ」

どんな願いでも叶えてくれるならば、叶えてもらおうじゃないか。

後、優勝商品の一つであるTDLのペアチケットを父さんと母さんにプレゼントした。勝つためならば、時として仲間を切り捨てる。私はオレに構わずにオレごと撃ち抜くと心の友とかが言うシーンが来たら一切の迷いもなくボーボボの如くRPGを発射する覚悟は数年前から出来ているんだ。

「お前がマジなのは分かった。」

けど、出水がダメなら誰を誘うんだ？熊谷ならスポーツ好きだから出てくれると思うけど」

「運動神経抜群な米屋とゲーム上手な国近先輩がいる。」

私も運動神経は良い方だから運動能力の高い代わりに学力が若干低い熊谷はいらん。むしろ多少運動能力に欠けていても構わないから突出して頭が良い奴が必要だ」

「三雲くんだけで充分じゃないかな〜?」

「いや、万が一の為の一人は必要なんですよ。」

私でフオロー出来る分には限界がありますので、クイズ系が出てもこの人なら安心して任せられるという頭が良い人が必要なんです。そうすればクイズ系を乗り越えられます……頭が良い知り合い、いませんか?」

「ん〜今ちゃん、来馬隊の皆で出るらしいから無理っぽい。米屋くんは?」
「ちよい待っててください。一番頼れそうで頭良い奴に電話しますんで」

最早、出水の事は忘れ去られて勝ちに行くためのメンバーをどうするかと話し合う方向になった。

出水、もし会場で鉢合わせしたら300円あげるから忘れてくれ。

「あ、もしもし葉?」

頭が良い知り合いに電話を掛ける米屋。

電話の相手はいとこの宇佐美葉、会ったことは無いもののどういう性格なのかは知っている。面倒見の良い性格で、こういった感じの企画に乗ってくれそうな人物だ。

電話した理由を説明し、一緒に出てくれないかと話をするとあっさりと承諾してくれ

たのか、サムズアップをする米屋。

「問題は後、一人だね……捨てる大将でも用意する？」

「まあ、それもありといえあればありますね」

勝ち抜き戦でなく先鋒、次鋒、中堅、副将、大将の5人での団体戦。

話を聞く感じではボーダーの隊員達が出てきそうで、特に村上さんはまずい。普通に運動神経良くて頭も良くて、サイドエフェクトの強化睡眠体質とかいう驚異的な学習能力を持っている。

もし仮に来馬隊の面々と戦った場合は別役で一勝、村上さんで一敗を想定したオーダーを取らなければならない。

「え……ああ、うんうん……あく国近先輩はゲームとGoogle□レイカードで、オレはUSJ。」

んで三雲つて奴が、願い叶える権利でタイプライター欲しいんだって……あくどうだろう？ちよつと聞いてみる」

「お、どした？5人目見つかりそうなん？」

「三雲、神戸牛、松阪牛、飛騨牛、仙台牛、佐賀牛の食べ比べセットって欲しいか？」

「あく……ズワイガニと新巻鮭じゃダメか？」

「肉系はNGで海鮮系はOKだって……お、そうか？三雲、5人目が見つかりそうだぜ」

「誰だ？」

「京介だ。優勝商品の食品欲しいらしいぜ」

5人目を誰にするかと考えていたら吉報が舞い降りた。

今の私達と同じく楽しむことなんて一切せずに本気で勝ちに行ってくれそうなら5人目が、電話の向こう側にいてくれた。

京介、と言えばBBFのモテグラフで一番モテているっぽいあの京介なのだろう。あ、国近先輩が「この子がとりまるくんだよ」とモサツとしたイケメンの写真を見せてくれる。

「時と場合によっては捨てる大将として扱う。

出れただけでも、ここまでこられただけでも光栄ですなんて甘えたことを言うやつは
いらぬ。やるからには勝つ、と言うか優勝商品を手に入れる為の覚悟は出来ているか
？」

数合わせの為の仲間ではなく、同じ目的を持った同士が仲間になるのは良いことだ。

しかしギリギリになってくだらない情で動かなくなったりチキったりする奴ならば
逆に迷惑だ。本気かどうか確かめるべく、外道な事を言う。

『構いませんよ……ズワイガニや新巻鮭の為ならば、捨てる大将はいくらでもなります』

「そうか……当日に会おう」

『了解っす』

京介の覚悟は本物だった。

声から捨ての大将になっても構わないという覚悟が伝わってきた……優勝出来るかもしれない。いや、優勝するんだ。

一瞬だけ捨ての大将に出水を導入してみるかと考えていたが、同じ志を持った者がいるならば心強い。

「大変お待たせしました、メロンソーダフロートです」

「あ、こっちはです。ところで国近先輩、私のお土産なんですが」

「どうぞどうぞ」

「いえ、そうじゃありません」

「ん〜なにか買い忘れてた?」

G B Fに出ることと出るメンバーを決め終わり、本来の目的を済ませようと国近先輩からお土産を受けとる。

ポテトチップチョコレートをはじめとする注文したお土産が入っているのだが、一つだけ大事なものを貰っていない。と言うよりは聞きそびれている。

「渡した500000円は何処に?」

全額使い切っても足りなかったとかなら追加渡しますし、余っているならここの代金

にしますので……とりあえずレシートください」

「……三雲くん、こここの代金を持つからそれで良いかな？」

「すみませくん、ステーキ単品にカツ丼にメロンパフェに卵焼きをお願いします。米屋、ついでだからお前も頼め。国近パイセンからの奢りだ」

「国近パイセン、あざーす！」

レシートの貰い忘れにより、いくら使ったか分からなくなった国近パイセン。

奢ると言ってくれたので、私はなんの慈悲も持たずに高そうな物を注文し、米屋に便乗させて食後におつりだよと5000円貰った。

第19話

決戦の日はやって来た。

バクバクと心臓を鳴らしながら、ボーダーのお年玉企画が行われる会場に向けて歩いていく。

今日の為に色々と……頑張っていないな。普通に家で漫画描いたりして、母さんにこの大会に出ると言って、今朝も普通にいつてらっしゃいの一言で終わったな。

「お〜三雲も来てたのか」

「太刀川さんも来ていたんですか？」

「おう、誘われてな」

会場に辿り着き、待ち合わせ場所に向かっていると太刀川さんと鉢合わせする。

誘った覚えは無いから、別のチームに参加をしているのか……何処のチームなんだこの人？

「誰と出るんですか？」

「加古と佐鳥と風間さんと沢村さん」

「どっからツツコミを入れれば良いんですか？」

「いや、オレも出るつもりは無かったんだ。見物客になろうかかって思ってたんだ。

でも、去年、12月のギリギリまでレポート溜め込んだ罰として強制的に出ることになって佐鳥と組まされたと思ったら、レポート手伝ってくれた加古と風間さんが面白いって、出てくれて、そこに優勝商品を知った沢村さんがTDLかUSJのどっちかが欲しいって言ってさ……ま、もし当たったら容赦しないぜ」

聞きたくなかった、そんな理由。

しかし意外な強敵が登場したのかもしれないと考えていると、ふとある疑問が浮かぶ。

「来馬さん達のとこ、5人目は誰なんだ？」

国近先輩曰く来馬隊の面々は出てくる……のだが、来馬隊はオペレーター含めて4人の部隊だ。

この企画は5人でないと出れないもので、その5人組が太刀川さんでないととなると誰になるんだ？生駒さんだろうか？あの人、バラドルとして使える人だから面白いだろうな。

「待ってたよ、君が三雲くんだね。陽介から色々聞いてるよ」

「どうも、烏丸京介っす」

5人目について考えていると待ち合わせ場所に辿り着く。

そこには米屋と国近先輩は居なかったが、代わりにメガネとモサツとしたイケメンが、宇佐美葉と烏丸京介がいた。

「三雲だ。今日はよろしく頼む」

「うんうん、陽介が言った通り中々の伊達だね。あ、私は宇佐美葉、陽介のいとこだよ」
「……何故伊達だど？」

「ボーダーメガネ人間協会名誉会長の私に分らないメガネはないよ！」

なにそれ恐ろしい。

それはもう一種のサイドエフェクトなんかじゃないかと思えるものであり、少しの恐怖が私の背筋を凍らせる。

「米屋と国近先輩は？5人居なければ、参加できないんだが」

「ああ、二人なら——」

「やっべえ、やっべえぞ！」

「うえくん、あんなの無しだよ！」

「敵情視察していて、今、帰ってきました」

「うん、見たら分かる」

物凄く低いテンションでやって来る二人。

これから闘いはじまると言うのに、テンションが低い。なんだかもう負けた感じの

ムードを出している。国近先輩に至ってはもう泣きかけている。

「陽介、敵情視察してきたんじゃないの?」

「葉……お前、今日はなにで来たんだ?」

「え、今日?今日はレイジさんに送ってもらったよ?」

「俺も乗せて貰つ……もしかして」

「ヤバイよ、このチーム」

国近先輩は携帯を取りだしてある写真を見せる。

ボーダーの面子のようで、顔は知っているが一度も会ったことないので反応できないな。

「レイジさん、荒船さん、歌川、柿崎さん、緑川……運動神経抜群な人達つすね」

「レイジさん、出場するの!」

圧倒的なまでの体育会系で構成されているチーム。

頭が残念なのがあるものの全員運動神経抜群で、一番の筋肉である木×レイジの出場を知らなかった宇佐美は驚く。

「この面々は……」

「柿崎さんと緑川くん以外、筋肉と知性を兼ね備えた人達だよ……どうしよう?」

「成る程……まあ、リアルファイトするんじゃないですからそこまで落ち込まないでく

ださい。あくまでも私達はゲームです……捨ての大将もありなんですから」

「そうっすね。5人揃いましたし、参加申し込みに行きましょう」

太刀川さん達よりも強そうな敵が現れたが、そんな事で私達の歩みは止まることは無い。

大会の参加を申し込むべく、真剣な表情に変貌した私と京介を先頭に受付に向かうとボーダーの顔である嵐山隊の優秀なキノコこと時枝が受付をしていた。

「京介、意外な面子だね」

「そうか？」

「玉狛で出るのかと思ったら、さっきレイジさんが荒船先輩達を連れてきたし、太刀川さんも風間さん達と出るから……どういふ面子なの？」

「時枝、決まっているだろ……遊びとかそういうの一切無しで、本気で勝ちに行く為だけのチームだ。レイジさんが居ないのは色々キツイが、三雲さんがフォローを入れてくれる」

「え、私が筋肉担当？」

「いや、違うよ。知性的な筋肉担当だよ」

レイジさんが居ないのはいの外の外、厳しいのは分かるが何故に、私が知性的な筋肉担当なんだろうか？

1000000歩譲っても、今日この場には絶対に来ないと占いで出た実力派エリート担当じゃないんだろうか？

「それに、全員揃っても無駄だ……小南先輩、こういう場所じゃ猫被るから本領発揮出来ない」

「まあ、確かにそうか。」

「これ参加シートで一試合ごとに、先鋒とか次鋒とかを決めるから名前だけで良いよ」
「えつと……三雲さん、下の名前はなんすか？」

「いや、私が書いておく」

小南パイセン、来ないのか。

猫被っている、清楚系くぎゆうが一瞬でも見れると期待していた私は愚か者だったのかと参加メンバーの名前を書いていき、マゼンタ色の箱を取り出す。

「トーナメントなんで、何処と戦うのか決めるくじです。一枚引いてください」

「おっし、ここはオレが」

「米屋、それは私に引かせてくれないか？」

くじ引きだと分かると意気込み、箱に手を入れようとする米屋の腕を掴んで止める。

悪いとは思ってはいる。お前のことだからラッキーを引き当てるかもしれないが、ここは私に任せてほしい。

「わーっただよ……良いの引いてくれよ」

「任せろ」

駄々をこねることなく、あっさり譲ってくれる米屋。

本気を出すべくメガネをメガネケースにしまい、マゼンタ色の箱に腕を入れて腕を凝視する。くじ引きでこのサイトエフェクトを使ったことは何度もあるが、箱の中に入っているのを当てるのははじめてだ。

しかし、なんの変哲もない普通の箱に入っている普通の紙の中に入っている当たりを見抜くのは余裕、余りにも余裕なことだ。

「なんか三雲さん、福本作品に出てくる顔になってませんか？」

「気のせいだよ」

ガサゴソと箱の中を動かし、箱から溢れる電磁波が物凄く揺れる。

とりあえずは箱の中にある一つの紙を挿んでみると、電磁波が固定される。ココ同様、微量の電磁波を独自の感覚で色や形をイメージ出来る私はその電磁波を見て、これは一番の当たりだなと手を引いた。

「Cだ」

「Cですね……来馬隊の人達とバトルします」

「うっそだろ、いきなりかよ!!」

試合もなにもはじまっていないのに、いきなりの来馬隊かよと落ち込む米屋。

だが、私のサイドエフェクトがこれが一番最高の相手であり確実に勝てる相手だと出てる。

「米屋先輩、落ち込むには早すぎますよ」

「いやだって、来馬隊はヤバいだろ。」

来馬さんは頭いいし、今さん華道とか色々出来るし、村上さん運動神経抜群だし、太一いるし」

別役の扱いが雑すぎるだろう。

だが、それで通じるのがボーダークオリティーの様で三人とも納得していた。

とりあえずは村上さんで一敗、太一のところで一勝するのを前提に残りの3試合をどう回すか考えないといけないのだが、国近先輩が挙手する。

「来馬隊は4人だよ、5人目って誰なの？」

「えーつと……弓場さんですね」

「……マジ？」

「はい、何故か弓場さんと一緒でした」

時枝は国近先輩の質問にサラッと答えてくれたが、余りにも意外すぎる人物が5人目になっていた。

弓場、と言えばNo. 1銃手の里見の師匠であり銃手として一対一最強とも名高いインテリヤンキーにしか見えない男。来馬隊といたいどんな繋がりがあつて、一緒になつたのか物凄く気になる。

「弓場さんも居るつてことは、射的とかそういうの絶対に負けるのかよ……三雲お!!」
「五月蠅いぞ、米屋。」

弓場という人がどんな人なのかは知らないが、銃の扱いが上手いと言うならば私が相手をしよう」

いきなりの優勝候補じゃねえかと叫ぶ米屋。

この大会はビームピストルとか使った射撃系の競技もあるらしく、本物の拳銃と違ってビームピストルはボーダーの銃と同じく、向けた銃口通りに対象を撃ち抜くことが出来る。そうなるかとボーダーでもトップレベルの銃の腕を持つ弓場さんは射撃競技に於いては最強に近い。

そうなるかと村上さんとの勝負を捨てて、残りの4試合で確実に勝ちにいく捨ての大将が出来ない。弓場さんがいる為に1試合負けても他が頑張つて逆転するということが出来なくなった。

弓場さんに勝たなければならなくなった。弓場さんを相手に射撃競技で勝負した場合、この面子で勝てるのは私だけだ。

「三雲くん、弓場さんに勝てるの?」

「勝てるのじゃない、勝ちに行くんだ。さあ、お前達油断せずにいくぞ」

弓場との射撃戦は負け試合と言いたげな宇佐美にキメ顔でそう言い、受付を後にし試合開始直前まで待つ。

幸いにも私達の前にレイジさんをはじめとする筋肉男《ますらお》のチームが戦ってくれて、どんな感じで試合が進行するのか、なんとなくの流れが分かった。

『さあ、続きまして第二試合。』

先程と同じく、ボーダー外部非公開の玉狛支部から参戦! 烏丸京介率いるCチーム
!!』

「別に俺が率いているわけじゃないんですけどね」

「絵面的に京介が率いていた方がいいって根付さんが判断して、言わせてんだろ」

自分達の番が来て、入場すると紹介してくれる実況の嵐山さん。

京介が率いているわけでもなんでもない、どちらかと言えば私が率いている形なのだがそつちの方が見映えが良いのか、そういうことにされた。別に誰がリーダーとかそういう感じじゃないから気にはしないが、嵐山さんが少しか申し訳なさそうにして

「誰がチームの柱なのか、リーダーなのかは深く気にするな」

「そうだね……弓場さん、三雲くんをめっちゃ睨んでるよ」

「あ、今ちゃんにあいつ誰なんだって耳打ちしてる」

向かい合う来馬隊＋弓場と私達。

この中で明らかに浮いている私に色々と視線が向きがちで、弓場さんは会ったことのない私のことを知っている知っている今さんに私について聞いている……が、マトモな情報は出てこないだろう。

成績が良くて、サイドエフェクトを持っていて、米屋達と仲が良くて、占いが物凄く当たる。それぐらいの情報しか出てこない。

「お久しぶりですね、来馬さん。覚えてますか？」

「三雲くんだね、ちゃんと覚えてるよ」

向こうが色々やってっている間に私も色々やらせてもらう。

来馬さんの前に出て、お久しぶりですと胡散臭い笑顔を出して挨拶をすると仏の様なスマイルで返事してくれた。余りにも仏の様なスマイルだったので、これからするとに少しでも罪悪感を覚えるのだが、それはそれと割りきった。

「でしたら、私の占いも覚えていますか？その後、当たりましたか？」

「あ……うん、覚えてるよ」

「……当たりましたか？」

「当たっ……たよ」

「そうですか。」

来馬隊の皆さんが御元気でしたので、なにか危険な目にあわなかったのかと思いましたが……今日は珍しく全力を出すのでよろしくお願いしますね」

「うん、こちらこそよろしく」

汚ならしい笑みを浮かべながら、ピユアな来馬さんと握手を交わす。

「米屋先輩、三雲さんは」

「来馬さん揺さぶってんな。」

来馬隊の主柱はあの人だから、少し揺さぶるだけでも効果覷面だって分かかって変なことを言いやがった」

なにを当たり前の事を言っているんだろうか？

試合なんてのは、始まりを告げる合図がなる前から始まっている。こういう場で、相手を煽ってプレッシャーを掛けたりするのは常套句だ。勝つのは氷帝、負けるの青学でお馴染みの氷帝コールもある意味そういうものだ。

「では、此方が今回の5試合です。5分以内に先鋒、次鋒、中堅、副将、大将を決めてください」

軽い紹介等が終わると、時枝からオーダー表を渡される。

オーダー表には名前の記入欄に加えて、競技の名前が書かれていた。

【先鋒 パーフエクトクエスチョン】

「え〜と、これクイズ系だから私が出るね」

パーフェクトクエスチョンは解答者を交互に変えるクイズバトル。

正解した人が相手に出題する問題のジャンルを選択してぶつける、全ての問題を完璧に答えられるかどうかの幅広い知識が必要になるクイズ、出場者は宇佐美。

【次鋒 エンドレスフラッグ】

「なんか先鋒と比べて圧倒的なまでに地味っすね」

「こういうの得意だから私が出るね」

エンドレスフラッグのルールは簡単に言えば旗揚げ。

互いに向かい合ってする旗揚げで、相手が旗を上げるのか下げるのかそのままにするのかを指示し、言われた相手だけが動かすというターン制バトルなのだが、恐ろしく地味な絵面な競技。どの旗を動かすか最初は15秒間で言えるらしく、最終的には5秒以内に指示出さないとダメで、ドボンもあるらしい。

物凄く体を動かす系でなく、ただの旗揚げなので国近先輩が挙手する。

【中堅 ギャング★スター】

「ビームピストルを使った射撃戦か……これは私が出よう」

廃ビル（点検済み）内でチームピストルを使い、戦う至ってシンプルな銃撃戦。

確実に弓場さんが出てくる競技で、私以外が出場したら確実に負けてしまう競技。「なんでよりによって中堅戦が射撃なんだよ。」

弓場さん、近距離に近い中距離での一対一最強で里見ぐらいしかマトモに勝負出来ねえぞ」

「安心しろ……私はどちらかと言えばマトモじゃない人間だ」

「うん、それは知ってる」

「そうか……」

「落ち込んでる暇はありませんよ、三雲さん。」

中堅戦なんで1勝1敗、2勝0敗、0勝2敗のどれかになってると思いますんで、確実に勝ってくださいよ」

米屋の言葉に少しだけショックを受けながらも、中堅までの代表を決めて残りの副将、大将も一気にオーダーを決める。

「これがオーダーです」

「ぼく達の方も決まったよ」

オーダー表を来馬さんと同時に時枝に渡す。

時枝は記入漏れがないか確認した後、実況席にいる嵐山さんへ持っていく、オーダー

が周りの観客に発表する。

『オーダーが決まりました！』

先鋒、パーフェクトクエスチョン！ 今vs宇佐美！次鋒、エンドレスフラッグ！

太一vs国近！中堅、ギャング★スター！ 弓場vs三雲！副将 フラッシュザウルス

！ 村上vs米屋！大将、ロシアンバルーン！ 来馬vs烏丸！』

「まあ……順当なオーダーか」

互いのオーダーを発表し、対戦相手が判明した。

頭を使う系の競技は頭が良い人が、体を使う競技は運動神経抜群な人達が出場している。

「よくし、勝ちにいかうか」

「頼んだぜ、栞！」

先ずは第一試合、パーフェクトクエスチョン。

確実に勝たなければならない場面でなく、勝っておけば心にゆとりを持てる場面。宇佐美に掛かるプレッシャーは割と大きいのだが、本人はそこまで焦ったりしていない。

「今先輩、お願いしますよ！」

「相手は栞……かなり厳しい戦いになるけれど、勝ってみせるわ。太一、あなたも勝って弓場さんに繋げてストレートで終わらせるわよ」

「勿論ですよ！とっておきの作戦で、国近先輩を倒してみせます！」

「エンドレスフラッグって、結局のところ旗揚げなのだけれど……ここで勝たないと」
逆は今先輩は次鋒の太一がなにかやらかさないか、心配で少しだけ焦っていた。

「……第一試合、このあとすぐ」

『生駒、これテレビじゃないからCMを振らなくていいぞ』

どっから出てきた、あの人。

第20話

「よし、オレ達もクイズに挑戦すんぞ」

「おい、やめろ。世間に恥を晒すだけだ」

「米屋先輩、流石に恥は晒しちゃマズイっすよ。これ、広報活動でもあるんですから」

「私、こういう系のゲームは苦手だからパス」

「そこまで言わないくていいだろ!!てか、パスするんすか?」

ボーダーの裏方のスタッフ達が目にも止まらぬ早さで用意していくクイズのセット。

選手用の観客席に移動した私達なのだが米屋が馬鹿な事を言い出したので、京介と一緒に止める。どうあがいてもハズレしか言わない。一昔前に流行ったバカドルの未来しか待ち受けてないと思っただけで止める。

「舐めんよ、確かにこの中じゃオレが一番のピリだ。一番頭が悪い。」

だが、クイズってのはなにも知識だけを試すんじゃねえ。知恵も試す問題もあるんだ」

「なにプロフェッショナルみたいに語っている?」

そんな事を言うやつは、あれだ。三学期のテスト、一切手伝わないぞ?」

「ちよ、おまつ……それは無しだろう」

「自力で赤点回避という選択肢は無いんですね」

「やだなくとりまるくん……そんなことができたなら、私も米屋くんも苦勞はしないよ」

ヤバイ、国近先輩の闇が見える。

テスト関係に話題を切り替えたせいで重苦しい空気になってしまったが、直ぐにその空気は無くなる。ボーダーの裏方のスタツフ達がクイズのセットを用意する……と言つても、よくある四角いテーブルと早押しボタンとクイズのモニターだけだ。

『では、第一試合パーフェクトクエスチョンをはじめたいと思います！時枝、頼んだぞ！』

「了解しました。」

パーフェクトクエスチョンはその名から連想される通りクイズバトルで、解答権交代制のクイズバトルで相手が答えなければならぬ問題を選択することが出来ます。選択されたありとあらゆるジャンルを完璧に答えないとなりません」

『このクイズバトル、頭が良いだけでなく知恵も試される。二人とも頑張れ！』

「まずは第一試合。私が勝つて、後に繋ぎやすくするわ」

「皆、勝つてくるね！」

クイズのルールの大まかな説明と一般客への簡単な挨拶は終わった。

ここからはやらせとかそういうのが一切無い本気のクイズバトルで、空気が変わる。
「最初の二問目は早押しです。」

先に答えた人が先攻となります。この二問目のみ間違えても失格になりません」

「早押しか……」

「問題の内容次第ね……」

宇佐美と今先輩の間に火花が散る。

最初の二問目は外してもそこまで問題無いのだが、やはり先攻は取りたいものらしい。緊張が走る中、問題を述べる時枝の口が開く。

「アマゾー」

「カンディル!!」

いや、百人一首か!

思わずそう言いたくなるほどの早さで答える宇佐美と今先輩。

「え、つちよ、まだ三文字しか言ってるぞ」

「アマゾン関係だと思えますけど……一か八かの勝負に出ましたね」

「けど……今ちゃんの方が早かったよ」

問題の大まかな内容が分かっているのに答える二人。

第一問は早押し、先にボタンを押した方が解答権を得られる……先に押したのは今先

輩で、今先輩のテーブルにあるランプが光っている。

「え、問題は、アマゾン川流域に生息するナマズ型の肉食の魚はなんですかという問題。今先輩、正解です！」

「あく出遅れた……」

「危なかった……実家で百人一首をやつててよかったわ」

『下の句の札を取る早さが、勝負の分かれ目になりましたね。それではジャンルからお選びください』

「そうね……どのレベルのどういった感じのクイズが出るか、まだ分からないわ。国語の問題でお願い」

『決まりました、宇佐美の第一問は国語です！さあ、宇佐美は正解することが出来るのか！』

「いきなりの敗けは陽介達に迷惑を掛ける……来い！」

「これらを組み合わせるとなんの漢字になるでしょうか？」

クイズ番組のノリで思いつきり進んでいく、パーフェクトクエスチョン。

負けてしまった宇佐美の一問目はよくあるパーツを組み合わせて漢字を作る問題で

【一 一 へ 十 へ □ へ 〓 □】と割と簡単な問題だった。

「ええつと……」

「輜だ、輜。□∥□、十とくとなれば簡単に答えは出る」

「いや、出ませんって普通」

「あ、でも普通に答えたよ」

さつきと違つて早押しでなく、時間制限付きだが気楽な問題。

調子が出てきたのか宇佐美はサラサラつとテーブルに用意されたフリップボードで輜の字を書いて、正解した。

「じゃあ、私は英語で！」

「英語ですね……□に入るアルファベットを答えてください」

「英語関係ないね、この問題」

「英文とかにすると、面白味も欠けるんですよ」

どちらかと言えばバラエティのクイズ番組に近いパーフェクトクエスチョン。

【□⇔P

→

←

B⇔D】

という割と簡単な英語の問題を今先輩はあっさりと答える。そして米屋は間違える。

頭を少し捻れば簡単な問題で、これもしかしたら京介でもよかったのかもしれない……なんてことはなかった。

「凸レンズは光を集めるレンズであり、代表的な物と言えば虫眼鏡です。」

凸レンズの光を集める性質を利用すれば、黒い物を光で着火させることが出来ます。では、メガネなどの凹レンズを使い光で着火させるにはどうすれば良いでしょうか？」

「水を使ってメガネのレンズの凹みを埋めて凸レンズにする！」

「正解です！」

割と難しい理系の問題が出たり

「Aが大事にとっておいたケーキを誰かが食べてしまった。B「私は食べていない」C「BもDも食べていない」D「僕も食べていない」E「Dは本当のことを言っている」、この中で1人だけ嘘をついています。さて、ケーキを食べたのは誰でしょう？」

「Aがケーキを食べた犯人で、そもそもAの話自体が嘘よ!!」

と無駄に頭を使う問題が出てきたりと、非常に面倒な問題ばかりが多かった。

私以外に答えているメンバーはこの観客席にはおらず、出水を省いてでも宇佐美を入れて正解だったと改めて思う。しかし、一向に均衡は崩れていかない。宇佐美も先輩も何事もなくポンポンと普通に答えていく。これ、永遠に終わらないんじゃないのかと心配する両チームの控えだったが、終わりは突然やって来る。

「甲子園の決勝戦、優勝した学校の投手であるTさんは前代未聞の記録を成し遂げました。」

なんとTさんは甲子園の決勝戦でボールを投げた球数が考えられ得る最小の球数で完投したのです。さて、Tさんは何球投げたのでしょうか？」

泥沼状態を脱出させるために体育の問題を選択した宇佐美。

この問題も割と楽……じゃない。これ、よくよく見れば引っかけだ!!

「え〜つと、スリーアウトチェンジでスリーストライクの9倍だから」

「 $3 \times 3 \times 9$ で81。でも、打たせて取る方法もあるんで全球打たせるとれば 3×9 で27だよ」

割と簡単な計算なので頭が回る米屋と国近先輩。

そう、それで正解だ。この問題の答えは27であり、決して――

「25球!!」

25球ではない。

しかし、今先輩はその事に気付かずに25球と答えてしまいハズレのブザー音を鳴らした。

「なんで……」

「25球じゃないんですか？」

サヨナラなら、25球で終わるはずですよ？」

「問題文をよく読みなおすんだ。」

甲子園の決勝戦で優勝した学校のTくんで、完投した試合が甲子園の決勝戦だったぞ」

「あ……」

本来ならばサヨナラ負けでの25回で終わる。

だが、問題文に優勝したや決勝戦を付け加える事により、答えを27に変えた。普通の人ならば、それこそ米屋や国近先輩ならばサヨナラ負けだと入れていない27球と答える。

だが、京介や今先輩の様にそこそ頭がキレル人ならば、サヨナラ負けの最も球数が少ない25回と答える。今回はこれを逆手に取り、文章を少し弄くってきた。頭が良すぎるからこそ引つかかる問題だ。

私と同じ事を時枝が今先輩に説明をするとホツとする宇佐美。だがまだ、ホツとするのには早い。次に宇佐美が問題に答えられなければ、宇佐美もドボンで引き分けに終わる。

「狼の前にはゴリラが一匹、ゴリラの前には狼とフクロウが一匹ずつ、フクロウの後ろには狼とゴリラが一匹ずつ、狼の後ろにはフクロウがいます。さて、動物は何匹いますか

？」

「え〜と……4匹！狼、フクロウ、ゴリラ、狼の順で並んでるよ！」

「あゝ国近先輩、フアイト」

「え、違うの？」

最後の最後でかなり難しい問題をぶつけられ、ミスしてしまった宇佐美。

正解のピンポーンでなく、ハズレのブザー音が鳴り響いてなんでと驚くのだが時枝から答えを覚えてもらおうと納得してしまう。

『一回戦、パーフェクトクエスチョン!!両者不正解により、ドボン!!引き分けに終わります!!』

「ごめん!!間違えちゃった!!」

試合が引き分けに終わると慌てて此方にやって来る宇佐美。

申し訳なさそうに謝るのだが、まだ挽回するチャンスは残されている。

「これは5対5の団体戦で、引き分けの場合は次の試合で勝った人がいるチームの勝利とするルールだ。」

国近先輩が別役と旗揚げ勝負で戦って勝ったら第一試合も此方側の勝ちとなるから、まだ落ち込むんじゃない」

「そうそう。次の競技は絶対に勝てるからね〜」

「ごめんね」

若干涙目で国近先輩に謝る宇佐美だが、引き分けに持ち込めただけでも充分だ。

少なくとも他の三人は何度か問題を間違えていたから、ドボンで負けていた。ここは考え方を変え、二勝を一気に手に入れる事が出来るものだと思ます。

「すみません、勝てたのに焦ってしまっ」

「気にしないで、今ちゃん。

ぼくもだけど、ここにいる皆は何問か間違えていたし今ちゃんじゃないと引き分けに持ち込めなかったよ」

「そうっすよ。オレなんて、一発目でポロロッカって間違えたんですから！」

「太一、それもそれであつてるわよ……」

「……とにかく、次だ。

太一が勝利すれば第三試合で弓場さんが勝ってくれて、俺や来馬さんまで繋ぐことな
く終わる。頼んだぞ」

向こうもそんな感じで励ましていた。

「じゃあ、いつてくるね」

「頼みますよ、国近先輩。流石にここで負けたら、後が無いんですから」

「京介、ハードルを上げるな」

「大丈夫、大丈夫。私、ピンチの方が燃えるタイプだから」
そんなこんなで始まる二回戦、エンドレスフラッグ。

基本的に旗揚げと同じルールなのだが、指示を出す人が自分と対戦相手に交互に入れ替わり、言う人は動かさず言われた人のみが旗を動かす物凄く地味な競技。

集中力と何事にも動じない精神力、咄嗟の判断力が試される競技なのだが

「赤、上げずに白あげてから赤上げずに白下げて」

「え、え〜つと？あ、動かさなくて良いのか？」

なにか物凄く心配だ。

試合が開始して直ぐに国近先輩が圧倒的なまでの優位に立つのだが別役はミスをし
ない。

「あいつ、何気に状況判断能力高いな」

「なんだかんだ言って狙撃手ですからね。」

基本的に待ったりすることが大事で、忍耐力とかは既に充分備わっていますよ……
まあ、国近先輩に翻弄されまくりですから、5分持てば良いんじゃないんですか？」

そんな別役を褒める米屋と京介。

国近先輩が翻弄しまくりだからと、後何分かで負けると見ている。私もそう思うのだが、何故か物凄い迄に違和感を感じる。

「白、あげて！青、下げる！」

「おい、あいつどさくさに紛れて全く別の色を言いやがったぞ。ルール違反じゃねえのか？」

「時枝くんがなにも言わないから、セーフだよ」

中々に姑息なフエイントを入れてくる別役。一瞬だけビクリと国近先輩は反応をしたが、それだけで旗は動かしていない……勝てる、このまま続けば勝てる筈なのだが、物凄く嫌な感じがする。

「なあ、なんか国近先輩腕震えてねえか？」

「あ、確かに震えてる……なんでだろ？」

その嫌な感じは直ぐに判明した。

圧倒的なまでに優位に立っている筈の国近先輩は、気付けば劣勢に立っていた。

「確か、別役が言った一番最初の指示って……」

「赤をあげて、だけだった筈ですけど……」

「国近先輩、赤を一度でも下げたか？」

「!？」

国近先輩の赤の旗を持つ腕が震えている。

この旗挙げがはじまり、赤を揚げてから、一度も赤を持つ腕を下げていないから当然

と言えば当然だ。なんだかんだで4分ぐらい経過しているぞ。

「ま、まさか太一の奴……」

京介は別役の狙いに気付き、冷や汗をたらりと流す。そう、別役の狙いは——
「国近先輩に、腕の疲労困憊で赤を降ろさせるつもりだ」

「真の悪にも程があるだろ!!」

別役の狙いは、旗揚げで勝つことじゃない。体力比で勝つことにある。

相手の赤か白のどちらかをずっと上げっぱなしにしておけば、腕が疲れていつて震えていき下ろしたいと言う欲求に駆られる。

国近先輩はボーダーの中でもトップレベルのアホの子でもありスポーツ出来ない女子でもある。10分間腕を上げるなんて筋肉系の男子ぐらいしか出来ないだろう。

「フィジカルで挑むか、普通?」

正々堂々と頭や心理戦で挑まず、フィジカルで勝負してきた別役。

競うところが間違っていると叫びたくなるのだが、叫んだところで別役は何一つルル違反をしていないのでどうすることも出来ない。

「うう……」

「あ、まずいよ!涙目になってる!」

フィジカル勝負になると部が悪い国近先輩。

腕の疲労が限界に達してしまふのだが、必死になって堪えて腕が疲れて痛いのを我慢する。

「まだか……こうなったら、赤下げて！白上げて！」

「え、いいの！やったあ!!」

中々に潰れない国近先輩に痺れを切らしたのか、別の手を興じる別役。

どんなフェイントを入れても国近先輩は対処するから、なにをしても無駄……いや、違う。

「赤上げて！白下げて！」

「腕振らせて疲れさせる作戦に出たな」

「もう旗揚げつつーか、根気比べじゃねえかよ……」

これそういうバトルルじゃないのに、なんでこんな事になったのだろうか？

別役が落ちるか国近先輩が疲労でギブアップするかのどちらかで終わるこの試合、今先輩も別役がなにをしたのか気付き、なんか下衆な物を見る目で別役を見ていた。

「白上げずに白下げずに赤上げて白上げて白上げて白下げて抹茶フラツペ白上げて!! チョコレートクリームチップショットヘーゼルナッツシロップバナシロップキャラメルソース チョコレートソースエクストラホイップエクストラチップ飲みたい!!……ごめんね」

「え、チョコ……なんすかそれ?！」

国近先輩は必死になって頑張ったものの、フィジカルの勝負で勝てるはずもなく赤の旗を持つ腕を下ろしてしまう。最後の悪足掻きなのか、所々おかしなところかスタバのメニューを間に挟み、別役の頭の中をかき混ぜて、両旗を上げなければならぬ別役の腕を止めて……終了のブザーが鳴った。

「え〜と……」

「国近先輩が言った通りに太一は旗を動かさなかった。けど、国近先輩は動かしてはいけない自分の旗を動かしましたね」

これはどういうことかと考えて悩む宇佐美に、結果のみを伝える京介。

カメラ判定……なんてものがあるはず無いな、旗揚げでカメラ判定なんて聞いたこともない。これはどうなる、もしかしてと修以上の冷や汗を垂らしながら審議する嵐山さんと根付さんを見守る。

『審議の結果をお伝えいたします。』

国近の指示通りに動けなかった太一が本来ならば負けなのですが、国近が指示を言い終えた際に自身の旗を下ろしました。

ルール上、指示以外では旗は動かしてはいけない事となっていますのでこの試合は……引き分けとします！』

「嘘だろ、嵐山さん！嘘だって言ってくれよ!!」

運営もとい嵐山さんの引き分けのジャツジを聞いて、焦る米屋。

第一試合の勝敗を決めるものでもある第二試合が引き分けということとは……

『第一試合、第二試合ともに引き分けとなっておりましてので第三試合のギャング★スターで勝利したチームが、第一、第二試合を制した事となります!! 因みにですが、ギャング★スターは機械判定をしますので引き分けはまずありません』

二試合分どころか三試合分の勝敗が中堅戦で決まる。

それを聞いた来馬隊の面々は弓場さんを見つめてガツツポーズを取り、国近先輩は終わったと物凄く落ち込みながら此方に戻ってきた。

「三雲くん……参加賞の、A級の部隊のエンプレムのバッジあげるよ」

「国近先輩、諦めるの早すぎませんか？」

「二対一の銃撃戦で弓場さんが相手だったら誰でもそうなるよ……私が、勝つてたら……」

勝つていれば、こんな苦労にならなかつた。

宇佐美は落ち込んでいる。米屋と京介も諦めムードであり、空気が重たかつた……重い空気だな……。

「これをするのは、疲れるが……」

この重たい空気を変えるには勝つしかない、勝つ以外には生き残る道はない。

米屋達の言うとおり弓場さんは銃の名手なんだろう。生身の肉体で、今の自分が出せる全力で挑まなければならぬ。私はメガネを外し、メガネケースに入れた。

「ギヤング★スターはビームピストルを使います。

ビームピストルのセンサーに反応する衣装を用意していますので、あちらで着替えてください」

「時枝、一応聞くがその衣装はどんな感じだ？」

「ガンマン、白スーツ、嵐山隊の隊服、太刀川隊の隊服、他にも色々とありますよ」

ボーダーのスタッフが機材などの準備をはじめ中、コスチュームチェンジの指示を時枝から受ける。

こちらですよと簡易的な更衣室に案内され、更衣室前には様々な衣装が吊るされたハンガーポールがあった。

「……これは荒野の王子様で着ていた服、これにするか」

割とマジでロクなのが無かった。

ボーダーの隊服は嫌なのでそれ以外は無いかと探していたら面白い物を見つけたので、それにすることにした。

「あ……どうも」

着替え終わり、更衣室を出ると隣の更衣室から白いスーツを着た弓場さんが出てき

た。

「ガンマンか……中々に似合ってるじゃねえか」

「弓場さん、も似合ってますよ。サングラスとかつけたら、もっと漢前になります」

「よせよ、褒めても手は抜かねえぜ」

一切の裏なく弓場さんを褒めると照れる。

冗談とか社交辞令一切抜きでこの人、白いスーツが似合う。グラサンをつければ、実写版白龍と言ってもおかしくないぐらいだ。

「そういえば、弓場さんは来馬隊の人でなく、自身の隊をお持ちの人なんですよね？何故、この企画に参加したんですか？」

これから先、試合がはじまるので聞くならば今しかない。

ずつと気になっていた事を聞いてみるとメガネをキラーンと光らせた後、メガネのブリッジをクイッと中指で動かした。

「三雲、だったか？オレ達ボーダー隊員にとって2月、3月はなにかと忙しい月でな、遊んでる暇はねえ。」

順位を決める隊同士がぶつかり合う模擬戦であるランク戦をしたり志望校に受かるための受験勉強をしたりなにかとゴタゴタが多い時期でな、今年はおレがその受験生だ。ボーダー推薦枠一つ一手もあるが、あれをあんまり使いすぎればお前のところの米

屋や太刀川を量産する可能性がある。特に太刀川は大学生になったと思えば、レポートを溜め込んでで本部長を怒らせる始末、うちはそうじゃねえと証明する為にも自力で合格を目指している」

「それだったら、わざわざこんなところで遊んでなくても……」

「話は最後まで聞け、三雲オ。」

確かにお前の言うとおりで、遊んでる暇はねえ。だが、隊長であるオレが受験の為にランク戦の準備なんかをゴタつかせたりしている。勿論、ランク戦でも手を抜くつもりはねえ。だが、迷惑を掛けた詫びなんかが必要だと思っている。

色々と考えたオレはこの企画の優勝したチームの一人だけ使える、どんな願いでも叶える権利を使って、ランク戦が全て終わり、オレの受験も終わった後の打ち上げのセツティングとその打ち上げ代の支払いを叶えるつもりだ。その為に、一人足りない来馬隊に入れてもらった」

リアル、願いの内容が思いの外、リアル。

「これは隊の誰にも知らせていねえ。

現に隊の奴等は防衛任務中で来馬隊の奴等には口止めしていて、オレは蓮乃辺市の図書館で勉強することになっている……絶対に言うんじゃねえぞ、三雲オ」

「言いませんよ……」

弓場さんは物凄く仲間思いで、ツンの要素が強いインテリヤンキーのようだ。

タイプライターが欲しい為だけに出場している自分と比べればすごく立派だと感じた。

「この試合は私が勝つて、ここで終わりますから最初から言わなくてもなに一つ問題ありません」

「ああ!？」

弓場さんが仲間思いの良いインテリヤンキーで立派だったことと、私が煽るのは別の話だな!!

ほくそ笑む感じで弓場さんを煽ると、沸点が低いのか一瞬にして弓場さんはキレて怒りマークを浮かべ、こいつ競技で全力で潰すと殺意を抱かせた。

第21話

「おお……」

「言いたいことがあるなら言え」

「いや、あるにはあるんだ。」

「けど、弓場さんの見て全部すつ飛んだ……あの人なに組のドンだ？」

「静かなるドンだろう」

ガンマンちつくな衣装に着替えて米屋達の元に戻るとなんととも言えない驚きを見せる米屋。

「言いたいことがあるならばと言ったのだが、私よりも弓場さんのインパクトが強すぎたのか私に対してなにも言えない。」

「なんか弓場さん怒ってるけど、なに言ったの？」

物凄く私を睨んでくる弓場さんにビクツとする国近先輩。

言うなど口止めされているから、ストレートに言っではいけない。

「悪いがオレで勝たせてもらうぞ、三雲オ……的なことを言ってきたので、そう言うことは全て終わってから言ってくださいよ、一人だけ来馬隊じゃない人って言い返した」

「三雲さん、それまじっすよ」

事実とは大分異なるが結果的には煽った事を伝えると、大丈夫かこの人はと哀れむ視線を向ける京介。

「いやでも、ここで私が勝たないとなにもはじまらないんだ。

ハードルを上げるのは余り好きじゃないが、ここで上げとかないと……決勝戦とかで上げたくない」

「変なところでビビリだね……ところで、三雲くんは弓場さん相手に自信は？」

「腕に自信はあるが、対人戦には自信が無い。なんせ、ボーダー隊員じゃないからな」

「え!？」

「いってきます」

私の一言に驚く宇佐美だが、仕方あるまい。まともに人と銃撃戦なんてしたことない。

私はチームの四人を背に時枝の元に向かうと、先についていた弓場さんに物凄くメンチを切られた。

「三雲オ、てめえはオレを相手に勝つつもりか？」

「むしろ負けるつもりで挑んで来て欲しいんですか？」

「ツチ……時枝、銃を貸せ」

「私にも拳銃チヤカを」

「すみません、ビームピストルと言つてください。二人が言うと、本物っぽく聞こえます」

出来るキノコ、お前は本物っぽいどころか本物みたいなやつを、突撃銃を普段から扱っているだろう。

いかつい顔の弓場さんが銃と言つたところを今さら気にしろと言うんだ。

私と弓場さんは拳銃（見た目はリボルバー）を二丁ずつ受け取り、備え付けの銃のホルスターに入れてルールを聞く。

「互いに使用出来る弾は12発のみ、片方に6発ずつ入っています。」

「当たり判定などはこちらがしますので、ブザー音が鳴ったらそこで終了です。質問は？」

「具体的にどの辺に当たればアウトで、セーフな部分とかは？」

「ビームピストルが反応するのは中に着ているシャツに触れた時です。」

なので、手の甲やカッターシャツと密接してない襟足なんかに当たってもセーフな……三雲さんの場合だと、その大きなコートのカッターシャツと密接してない部分に触れてもセーフですね」

「要するに心臓タマを撃ちぶ抜けば良いんだろ？」

「だから、そういう表現はダメです。

フィールドは廃ビルの内部で、表口か裏口か、先に入るか後に入るかコイントスで決めます」

時枝は嵐山隊のマークが書かれた記念コインを取り出す。

本来ならば勝敗的に不利なチームが表か裏かを決めるのだが、二試合とも引き分けなのでここは年功序列だと弓場さんが先にコイントスで出る面を決めることとなり、弓場さんは表を指定。

「では、裏が出ると三雲さんが決める」

「時枝」

「なんですか?」

「私は表でも裏でもないに賭ける」

「コイントスですよ?」

「ああ、分かっている。だから、表でも裏でもないを選んだ……とにかく、やってくれ」

「はあ……」

なに言ってるんだ、この人はと言う顔をするのだがこれで間違いない。

時枝は右手の親指でコインを弾き、クルリクルリと空中で回転させている間に左手の甲を受け皿にする準備をし、右手で空中にあるコインを押さえた……よし。

「!」

「どうした、時枝?」

ポーカーフェイスとも言えるぐらい表情が変化をしていなかった時枝が驚いたかのように目を見開く。

直ぐに何時も通りの表情に戻るのだが、動揺しているのは明らかで、弓場さんは何事かと聞くが時枝は答えない。

「その状態で動かすと言うのならもう一度、やり直しを私は要求する」

なかに動揺をしているのか分かっていて私は時枝を言葉で揺さぶる。

相手は弓場さんだが、こういうところで取り零すとロクな事にならないのは知っている。時枝はどうすることもないと、右手を動かし、左手の手の平に置かれている筈のコインを見せ……れなかった。

「どういふことだ?」

あるべきところに無いコイン。

弓場さんは時枝に詰め寄り説明を求めるとこれですと左手の中指にある、表でも裏でもない立ったコインを見せる。

「手の甲に置くのでなく、手でコインを抑えるのがコイントスだ。」

時枝が手で抑えた時、空中にあるコインは表でも裏でもない縦の面を向いており、そ

のまま抑えた……さて、これはどう取れば良い？」

「……三雲さんが、選んでください」

「裏口の先攻で行かせてもらおう……では、失礼」

「待て、三雲……てめえ、まさか」

「時折、米屋や出水が聞いてきますけど、私は未来なんて視えませんよ……お先に」

「楽に勝てるかと思つたが、一筋縄ではいかねえようだな」

なにをしたかは分からない。

だが、言うだけの事がある奴だと私に対しての評価を改める弓場さん。出来れば、もう少し慢心してくれてほしかったと思いつつも、先にこのゲームの為だけの廃ビルの中へと入った。

「どうするか……」

フィールド内は頭の中に直ぐに入った。サイドエフェクトのお陰か監視カメラの場所もわかる。

廃ビル内には人がいないので、弓場さんの電磁波が近付けば一発で見抜ける。常になが何処に居るのが分かる。だが、それだけだ。弓場さんを相手に自分が絶対に勝つていると言い切れるのはこの目で視るだけでそれ以外は下手をすれば劣っている。

転生特典のボッスンと岸部露伴を足した手先の器用さのお陰か射撃センスに関して

は物凄く、シティーハンターの冴羽？やルパン三世の次元大介、ゴルゴ13のデューク東郷よりは早い。要するにドラえもんものび太くんと一緒に、こち亀の両さんよりは遅い。

「弓場さんと比較して咄嗟の状況判断能力は弓場さんの方が上、純粋な運動能力は私の方が上、戦闘時にちゃんと動けるかと言う点では弓場さんが上……真つ向勝負以外か」
向かい合った状態でよい、ドンで一対一ダイマンがスタートすると最強と噂されている弓場さん。

勝つべきところで確実に勝ち、勝っている数も負けている数も少ない人でなく敗けは多いもののその分、勝っている数も多し多い百戦錬磨の強者、対するは視覚を強化するサイドエフェクトを持っていて射撃のセンスはあるが銃撃戦よりも剣での勝負が好ましい私。

戦うことすら烏滸がましいというレベルではないが、真正面からのバトルは不利。機転を聞かした奇策での勝負を挑んで勝機を見出さなければならぬ。

「はじまったか」

弓場さんも表口からビルに入ったようで、開始のブザー音が鳴り響く。

「ここからは一対一の真剣勝負……」

「逃げるか」

まだなにも浮かばない。

弓場さんに対する奇策は一切浮かんでこない。このままぶらぶらと廃ビルの内部を移動していれば鉢合わせからのクイックドロウで負ける。じゃあ、逃げるしかないかと逃げの一手を選ぶ。

幸いと言えば良いのか、弓場さんから逃げるのは割と簡単で電磁波を見て次に何処に逃げれば良いのか決めるだけであつさりといけた。

「何処だ、何処にいる三雲オ!!」

10分、約10分の間、廃ビル内での鬼ごっこをし続けていると痺れを切らしたのか叫ぶ弓場さん。

どれだけ遅くても、なにかの拍子で鉢合わせをする筈なのに一向に鉢合わせをすることが足跡すら辿れない。その事について少しだけ弓場さんは苛立っている。

声の振動なんかで変化した電磁波には苛立ちの感情が混ざっているが、その感情はとても薄い。

「明らかに誘っているっすね、弓場さん」

「三雲くんが逃げまくるからだよ」

この光景を外で監視カメラ経由で見ている京介も宇佐美もこれが誘いの釣り針だと分かる。

「三雲くんが、なにかしらしてくるんだったら自陣で待つのが一番だよね……奇策って、基本的に返し技みたいなものだし」

「そーなると、いよいよやべえぞ、あいつ」

国近先輩と米屋も釣り針だと気付く。

弓場さんは私が出てくるのを廃ビルにある部屋、ではなく直角の曲がり角がある通路前で待つ。自分から動いても意味は無いと、待ちでいく。

定石を打ってこそ、奇策は奇策になる。いきなりの奇策は奇策にはならないし、使い続けられればそれが定石になる。

つまりのところ定番やお約束の中に、意外性のある作戦を入れることにより奇策は生じる。普通に撃ち合ってる中で、そんなことするか?と予想外の一手を入れれば勝てたりする。

非常に面倒なことにこれは開幕からの奇策でなく後手に回る奇策。奇策は意外性があるから奇策であり、弓場さんは私が奇策をしてくると思っており、自分が一番戦いやすい場所待ち、動かないという手に出ている。

自分からアプローチをかけての、奇策は非常に難しい。奇策にまで誘導するのが特に面倒だ。来るとわかっていれば怖くないのだから。

「やるしかないか……」

我慢比べをしても良いが、それをすれば運営側からなにか言われる。

膠着状態を抜け出す為に私は弓場さんがいる階まで移動し

「あ!!」

大声で叫んでみるも、反応は無し。

かかってこんなかと弓場さんは完全に出待ちをしており、何時でも得物を抜ける様になっている。

「……まだまだ、試合があるんだがな」

この試合が終わったら、次は筋肉チームとのバトル。

ここで無茶はしたくないのにと覚悟を決めて、私は歩く。

『遂に膠着状態を解く、三雲。だが、弓場はボーダーでも屈指の銃手。真正面からの戦闘はおおっと!!』

「真正面から行くしかない!!」

「真つ向からは嫌いじゃねえ。ただ、相手は悪いぞお!!」

弓場さんがいる真正面に姿を現すと、物凄いまでに早く洗練された動きで銃を抜いてきた。

これは今から抜いても間に合わない。確実にこつちが負けると銃を抜く動作は一切せず、倒れこむ様に前に進むと狙いを定めて引き金を引いた弓場さん。

ビームピストルは常人には見えない光線を放つのだが、生憎なことに私にはそれが見える。私のサイドエフェクトは視覚強化。単純に遠くのものが見えるのだが、本質はそこではない。常人には見えない赤外線や紫外線などが見える。

「本物の銃ならば、負けていたがまだだ」

「んだと!？」

空中でクルリと横に二回転とアクシヨン映画を思わせるかの動きをし、一直線に飛んで来るビームピストルの光線を避ける。

見ることに出来ない弾を避けたことを驚いてくれたが、弓場さんは直ぐに引き金をもう一度引こうとするので私は羽織っているコートを脱いで真正面に投げる。

「ツチイ!!」

コートにより視界が狭くなり、私の姿が見えなくなり銃を撃たない弓場さん。

一発目を避けたお陰で弓場さんに三雲は弾を避ける事が出来るという印象をつけることが出来た。ボーダーのトリガーでならば、力技でコートごと撃ち抜くが、ビームピストルではそれが出来ず更には弾数も最初から限られている。

狙うならばここしか無いと銃を抜いて真横に移動した。

「そこかあ!!」

「つちい!!」

考え方を間違えてしまった。

あくまでも弓場さんは見えないから撃たないだけで、見えるのならガンガン撃つ。

弾切れを狙うのでなく、攻めに来ていると分かっているならば何処かで姿を現して攻める。見えて銃が届く範囲は、この人の射程圏。姿を少しでも現せば撃たれるのは当然だ。

「つて、それも避けるのか!？」

弓場さんが撃った弾をマトリックス避けからのロンダートバク中で避ける。

フィジカルの差があるからなんとかいけているがトリオン体ならばもう何度も負けているな、私は。

モニター越しで私の動きを見ている米屋は何時私が撃たれてしまうのか物凄くヒヤヒヤしており、冷や汗を握っている。

「避けることが出来るのはスゴいっすけど、防戦一方ですね……弾切れ狙い、じゃありませんし」

「バツカ、弓場さんがんな初歩的なミスするわけねえだろ……お、動いた」

これ以上弓場さんの前にいれば些細なミスを犯して負ける。

脱ぎ捨てたコートを回収することが出来ず、私は弓場さんの前から姿を消して呼吸を整えようとするのだが、弓場さんの足音が聞こえる。

「考える時間を与えてくれませんかね!!」

「誰がやるかあ、そんなもん!」

防戦一方の私を追いかける弓場さん。少しでも時間を与えればなにかしらしてくると踏んで、時間を与えない。何時でも潰せる様にとしており、私は階段を跳んで下の階に降りて何故か起動しているエレベーターに乗った。

『弓場を振り切った三雲、まさかのエレベーターに搭乗!』

弓場は三雲がエレベーターに乗ったことを確認、さあ、これはどうする?』

「鬼ごっこかくれんぼはおしまいだぜ、三雲オー!」

『おおっと、弓場は三雲と同じく跳んで下の階に移動!』

エレベーターのボタンを押して、待ち伏せ、いや、また下の階に降りていった!!』

エレベーターに入った時点で鬼ごっこかくれんぼは終わった。

弓場さんは下の階で待ち構えている。勝負はエレベーターのドアが開いた瞬間で、その勝負は私の方が少しだけ分がある。サイドエフェクトのお陰で、弓場さんが何処にいるのかが分かる。

「!」

チーンとベルが鳴り、エレベーターのドアが開いた。

ドアの向こうには弓場さんがいない。見えないところに隠れているというわけでも

なく、単純にこの階にいない。

「下の階……これ以上なにかをするのは無駄か」

何故弓場さんがいないのか、直ぐに理解した。

何処かの階で待ち受けていて、それまでに油断を誘うなどの精神を揺さぶる行為。ここでエレベーターを降りて階段を使って下の階に行ったとしても、階段を歩く音で嫌でも気付く。エレベーターは階段の直ぐ側にあり、階段から奇襲をかけたとしても弓場さんが直ぐに対応できる距離だ。

勝負するしか無いと我慢比べや鬼ごっこをすることを止めて、私は閉ボタンを押して下の階に行く。

「あれだね、1、2、3で撃つやつみたいになってるね」

1、3階に弓場さんはいない。

「あれってファストドロウって言うらしいですよ」

2、2階に弓場さんはいない。

「じゃあ、弓場さんはそのファストドロウ最強……」

3、一階に弓場さんはいない。

「終わりだ、三雲オ!!」

「と、思うじゃん?」

狭いエレベーター内ではアクロバティックな動きは出来ない。体の大きな私では身を隠すことが出来ない。

弓場さんはドアが開くと同時に二丁とも残りの弾が一発になるように乱射するのだが、弓場さんの目には私が写らない。

「っ、降りたのか!」

私がエレベーター内部にいないと直ぐ様、階段に振り向く弓場さん。

するとエレベーターの内部からドシンとなにかが落ちる音が響き、ブザー音が鳴り響く。

「……てめえ、エレベーターの上にしたのか?」

「ええ……真正面で待ち構えている弓場さんの死角になるところに隠れていました」

例えるならば、そう。

吉田沙保里のALSOOKのCMの様と天井に腕と足の力だけで張り付いていた。真正面にいる弓場さんが絶対に見えない、弾が当てられない位置にだ。

「つーことは、何階か写し出す液晶パネルがある入口より少し上の壁と、それに近い天井にはりついてたのか」

「一発で見抜きますか……」

百戦錬磨の強者、半端ねえな、おい。

弓場さんの策を奇策で返したから、どうかにかこうにかなったが真正面から真つ向で挑んでいたら負けていた。

嵐山さんの試合終了の放送が入ると私達は廃ビルを出ると、米屋達が待ち構えていた。

「三雲、よくやった!!」

バシバシと私の背中を叩いて褒める米屋。

凄くアレな話だが、私が勝ったから一回戦はもう終わって、こいつの出番が無くなつたぞ。

「勝てて、よかったよ」

これで次に進めると涙する国近先輩。

「京介、どうした?」

宇佐美もやった!と喜んでいる中、京介は無言で私をジツと見つめる。

なにかを言うべきか言わなければならないべきかと悩んでいるので訪ねてみると、口を開く。

「三雲さん、見えていたんですか?」

「なにがだ?」

「弾が何処に飛んで来るか」

「……それはどういう意味でだ?」

「ボーダーの銃でもそうですけど、銃口の向きだけで弾道は大体分かります。実弾の場合だと風速とか気温とか湿度とか衝撃の際にどれだけ手がぶれるなど、色々と考えないといけず、大体で正確な位置は分からないものです……三雲さん、マトリックス避けで弾を避けてましたよね？ビームピストルは音こそしますが、弾は出ませんし、弓場さんの早撃ちだと銃口から何処を狙ってるのか察するのは……」

「京介……出水や米屋が時折ポロつと溢すが、私はサイドなんちゃらがあちらしいぞ」
「！」

「それがなにかは知らないし、なんであろうとボーダーには入らないがな」

「そんだけ動けんのに、勿体ねえな。入れよ、ボーダー」

「いずみんと一緒に太刀川隊の席を用意してあげるよ」

「そうなるかと自爆するしかねえな」

弓場さんの弾を避けたのはサイドエフェクトとフィジカルのお陰。

そういうことだと京介に納得させたのだが、米屋がボーダーに入れとしつこく言ってきた……こいつ、ラーメン屋での一件、忘れてるのか？

弓場さんに勝利したことにより、引き分けの2戦も勝利した扱いとなり一回戦を勝利した。

第22話

「最初はグー!!じゃんけん、ポン!!」

一回戦を勝ち進み、二回戦へと駒を進めた私達。

荒船、木崎、緑川、柿崎、歌川と体育会系の人達により構成されたチームであり私と米屋はじゃんけんをしていた。

「よし、勝った」

「くっそ、負けた!!」

「と言うことで私が先鋒です」

「分かりました」

「こういう感じの企画で体育会系の人達を相手にしなければならぬのは何気にキツイ。

一回戦の弓場さんと比べればフィジカルが強いだけでまだ戦いやすいのだが、戦いやすいだけで余裕で勝てるとは話が別である。

頭使う系の競技やゲーム要素が強い競技ならば勝ち目はあるのだが、体を動かす系の競技は米屋と私以外は どうすることも出来ない……ので、じゃんけんをしてどっちが体

を動かす先鋒戦と副将戦に出るのかを決めた。

紫外線や赤外線が見えるだけでなく、動体視力にも優れている私は米屋とのじゃんけん勝負に負けるはずもなく勝って先鋒戦をとり、時枝に申請する。

『先鋒戦！コートオブザリング、三雲vs柿崎！次鋒戦！ハートガード！烏丸vs歌川！中堅戦！コマンドプラスコマンド 宇佐美vs荒船！副将戦、スターダ奪取！米屋vs緑川！！大将戦、ジャジャーン拳カードバトル！国近vs木崎！』

「緑川が来たのか？読み間違えたなこりゃあ」

「そうなのか？」

第一試合に緑川が来ると予想していた米屋。

来なかったと知ると少しだけ落胆をする。

「柿崎さんはオーダー内でもトリガー使わなかったらトップレベルの運動神経の人だ。

単純に重いものを持ち上げるとか殴りあいならレイジさんが上だけど、スポーツとナリや柿崎さんが上になる。休日に一緒にバスケしたりしてるからよく知ってる」

「成る程な」

「今からでもオーダーを変えられるか聞いてみますか？オレ、捨て駒になりますよ？」

相手が柿崎さんで運動系の競技で戦うとなればと、オーダーの変更を提案する京介。

柿崎さんを相手に捨て駒として挑むのもありと言えばありなのだろうが、私としては

普通に勝つつもりで選んだ。

「この競技なら、私が勝てる」

「三雲くん、めっちゃ強いよ……今年の球技大会で優勝したぐらいだし。テニス」

バスケット……は、もしかするといけるかもしれない。

サッカーや水泳といった競つたり余り手を使わない競技ならば負けていたのだがテニスならば負けはしない。国近先輩に太鼓判を押しして貰い、私はフィールドに……テニスコートに足を踏み入れる。

「確か三雲だったな。熊谷から色々聞いてるよ」

「私も貴方のことはよく知っていますよ、柿崎さん」

「そうか……つつても、今の嵐山隊が出来る前に居た頃の俺だろうな。」

「って、ボーダー隊員にこういう話はダメだな。今日は純粹に楽しむために参加したんだ、俺達は」

「そうですか……因みにですが、私達は宇佐美と米屋以外は景品目当てで来ました。」

もうGoogleプレイカードとか海の幸山の幸詰め合わせとか、黒毛和牛食べ比べセットを躊躇いなく奪いに来て、京介は景品を貰えるならと喜んで捨て駒になつてくれます」

「そ、そうか……」

健全な汗を流しに来た柿崎さんに自分達は不純な存在ですよとアピール。

この大会で失うものなんて最初から無い私は多少の毒を吐き散らすことが出来るので、割と楽しい。

「表ですか、裏ですか？」

時枝は私達にラケットを渡すと、サーブ権を決めるコイントスを始めようとする。

先ほど、私が表でも裏でもないと言った為に先に柿崎さんに聞いている。俺じゃなく三雲に先に聞いてくれという電磁波を出すのだが、グイグイと聞いてくるので表と答える。

時枝の投げるコインは表だと確定しているので、私は諦めモードで適当に裏だと答えると時枝はコイントス。先ほどと違いちゃんとコイントスをし、表を出して柿崎さんがサーブ権を手に入れた。

「じゃあ、リングを用意しますので少々お待ちください」

コートオブザリング

基本的なルールはテニスと一緒だが、少しだけ違う。

ネットの真上にリング（ホログラム）が浮かび上がり、そのリングにボールを通すか触れるかするとリングが消えてボールにポイントが貯まる。そこでポイント（ゲーム）を決めると、貯めたポイントが自分に入り、先に500ポイントを手に入れた方が勝ち。

リングは一つ消えると一つ増える形式でラリーをすることに大きくなっていき、小さいリングに入るとポイントが高くなる。

国近先輩曰くマリオテニス64でなんかこんな感じのやつがあったらしいが、私はマリオテニスを持っていないので知らない。

「1セットマッチ！柿崎、トウサーブ！」

「なんか色々とおかしい気もするが、いくぞ！」

ネットの上にはリングが展開され、試合がはじまる。

柿崎さんは強力なサーブを打ってきたので、ライジングショットで打ち返すと意表を突かれたのか柿崎さんは動けず、リターンエースを決めた。

「8—0！」

「リターンエースだとたった8点か……効率が悪いな」

サーブと打ち返すだけのプレイだと、極々僅かなポイントしか入らない。

多少のラリーが必要になってくるものだと分かれば次のサーブを待ち構える。コートオブザリングでは、タイプブレイクと違い、点を取られた側のサーブになる。

「おらあ！」

「っ！」

さつきと同じくライジングショットで打ち返そうと一歩前が出る。

今だとタイミングを見てからラケットを振ろうとするのだが、ボールが別方向に曲がった。

「キックサーブ、驚いたか？」

ニコつと微笑む柿崎さん。

リターンエースを取られたお返しなのか、サーブエースを決めてきた。

「三雲さん、なにサーブエースを取られてるんですか」

「すまない……だが、サーブエースを取り返す」

「サーブエースってカウントするもので、取り返すとかそういうのじゃなかった様な……」

明らかに油断して取られたサーブエース。

京介は呆れているので、このままだと格好がつかないとサーブエースを予告。宇佐美はテニスってそういうもんだっけ？となるが、これが何時からテニスだと思ったのだろうか？

「リターンエースも貰った!!」

意外と負けず嫌いなのか、柿崎さんはライジングショットでサーブを打ち返そうとする。

タイミングから腕の振り方、次への動作までなにもかもが完璧な動き……打ったサー

ブがバウンドすればの話だが。

「なっ……」

「っ……思ったよりも負担が掛かるな」

ボールはバウンドすることなく、後ろへと後退した。所謂、零式サーブを打つたのだが、思ったよりも腕に負担がかかる。1発、2発ならばどうにでもなるが……これを8回ぐらい使った仁王はなんなんだ、いつたい。

「三雲くん、柿崎さんとのサーブ勝負するのはいいけど、これそういう競技じゃないからね？」

今度は俺がサーブエースを取ってやると意気込む柿崎さんに、挑むところとしていと国近先輩から注意をされる。

今回はテニスでなくコートオブザリング。とにかく、ラリーを続けなければならず、サーブだけだと効率が悪い。ライジングショットでリターンエースを狙いに行かず、柿崎さんが打ち返しやすい様に打ち返しながら回転をかける。

「いや、柿崎さんが相手だから、大丈夫かヒヤヒヤしたけど三雲くん、テニス上手いね」
柿崎さんに勝って、後の人に負担かけずに済みそうですよ」

ラリーを続ける私達を見て、ホッとする宇佐美と京介。

米屋と国近先輩が隣で今だ！左サイドがから空きだよ！と叫んでくるのだが、私は勝

負を決めにいかずラリーを続ける。

「三雲もだけど、やっぱり柿崎さん、つええな。一進一退の攻防ってか、2分ぐらいラリーしてるな」

切っ掛けは米屋のこの一言だった。

ボールに150ポイントほど貯まった辺りに痺れを切らしたのか、そういった。

「2分って何気に長いね。ゲームならこう、必殺技でボンって相手を倒して」

「国近先輩、それテニスですか？」

「マリオテニスだよ。64のはテニスゲームだけどGC以降からはもうテニスってよりもテニヌで、点を取るよりもラケット破壊したり選手ぶっ倒したりした方が早く終わるの」

「……」

スポーツゲームに必殺技（魔法的なの）があつたら終わりなんだな。

京介はそう思いながら間もなく3分目に突入するラリーを見るのだが、向かい側にいる緑川をはじめとする相手チームの控えがなにやらざわついているのに気付く。

なにかおかしいことがあつたのだろうかと試合を見ていると、歌川が立ち上がった。

「柿崎さん、サイドにボールを打ってください!!」

何処にボールを打つのか指示する歌川。

あれはルール違反にならないか？と京介は思うが、米屋達も似たような事をしてるのでジャッジキルをくらわれない。

「サイドか、分かった！」

歌川の狙いがなにかはしらないが、試合は停滞している。延々とラリーを続けているだけで、ポイントをまともに取れていない。

停滞しているラリーをどうにかしたい柿崎さんは歌川が言うように右サイドにボールを打ちこんだ。

「無駄だ！」

「っ！」

右サイドに打ち込んだボールは弾み……引き寄せられるかのように私の手元へと曲がっていく。

既に打つ構えを取っている私はボレーで高く打ち上げ、柿崎さんに移動する僅かな時間を与え、柿崎さんは走ってボールを打ち返す……のだが、そのボールも私の手元へと引き寄せられる。

「三雲のやつ、さつきから一步も動いてないな。」

柿崎さんが左右に走ってばっかなのとラリー長すぎてあんま気にしてなかったけど、真ん中でずっと立ってやがる」

センターマークを中心にし、左右のボールを打ち返す私に気付いたか。

息を荒くし汗を滝の様に流している柿崎さんに対し、呼吸が乱れておらず全くといって汗をかいていない私。

気付けばボールに貯まったポイントは300を越え、予想していた展開と大きく異なるのか観客も運営側も驚きを隠せず、大きくざわめき……柿崎さんが動けなくなり、ラリーは終了し

「悪い……もう、動かねえ」

試合も終了した。

手塚ゾーンの回転を加えた低いボールを打ち続けていた柿崎さんの膝には負担が掛かりまくっていた。

左右を走り回るだけでなく、膝を曲げてボールを打ち返していたので通常の何倍もの負担が掛かっており立ち上がったものの、足がプルプルと震えていた。

サーブを打つことは出来そうだが、打ち返されると走ることの出来ない柿崎さんは時杖を呼んでギブアップをした。

「後は任せただぞ」

私のやるべきことはやった。

後は任せただぞ京介にタッチをすると、そこからは圧倒的な快進撃がはじまる。

京介が勝利し、宇佐美も勝利しストレートで勝利。続く準決勝は2勝2敗の五分で大將戦に移り、生駒さんとの一発芸対決に。

「見せてやろう、究極の一発芸であるドラえもん物真似を」

「どうせ「僕、ドラえもんです!」とか言うんやろ?」

そんなん、森進一の物真似をする時におふくろさん言うんと同じや!」

『おおつと、生駒、三雲のハードルを上げに行つたぞ!!』

「甘いな」

見事なまでのギター演奏を披露してくれた生駒。

会場は大きく盛り上がり、これを破るのは容易ではない……私以外ならばな!!

「あれでもないこれでもない!!」

「え、映画版でパニクって役立たん時のドラえもん!」

何気に一番の強敵だった生駒さんを撃ち破り、そんなこんなで決勝戦。

相手はS村さん達成人組で、ここまでストレートで勝ってきた人達。

「何気に太刀川さん達も勝ち進んでるんですね」

取りあえずのオーダーを決めて、二十歳越え（原作開始時）と向かい合い軽く挑発する。

しかし貫禄なのか太刀川さんは、はっはっはと笑う。

「当然だ、やるからには本気でないと意味がない」

「風間さん、それオレの台詞」

二十歳児の言葉の貫禄、半端ない。

煽り耐性が低いのか、それとも煽り返したのか絶対に負けたくないという意志が伝わる目で私を見つめる風間さん。

「そういや、お前、弓場に勝ったんだってな」

「……嫌です」

「まだなにも言っていないだろ」

「嫌ですよ、ボーダーに入るの」

「安心しろ、三雲。」

弓場に勝てるから、良い銃手になるのはオレが押しやる。うち、お荷物の銃手がいるから使えるの欲しい」

「それ、出水も言っていました。国近先輩も……」

どれだけスカウトされようが、私は蹴る。

観客の中にボーダーの隊員（非番）が多かったりするが、そんな事は知ったことじゃないと先鋒戦の準備をする。

「三雲、絶対に落とすじゃねえぞ!!フリとかそんなじゃなくて、絶対に落とすなよ

!!

「なにをそんなに焦っている?」

激励の言葉をかけてくる米屋は焦った声をだす。

なにをそんなに焦っているのかと思うと、読んだことのない漫画（電子書籍）を見せる。

「こういう団体もののバトルつてさ、主人公以外の主将とか第2のエースキャラなんかの無敗キャラが決勝戦で向こうの主将とかに負ける展開があるだろ? そうなったら、全国最強の学校と当たって先に二敗してからの逆転勝ちの展開が」

「おい、やめろ」

団体物の漫画あるあるを言うな。

手塚国光とか國崎とか主人公以外の負けなしとか最強クラスのキャラが決勝戦で負ける展開はあるあるだ。全国最強の学校と戦って二敗して絶体絶命の展開とかもあるあるだ。

だが、何故そこでそんな事を言う?

「その理論でいけば、今まで負けっぱなしの団体最弱キャラが相手の副部長辺りをジャイアントキリング大物喰いする展開もあるっすね。二敗に留めたとかそういう感じの」

「いや、お前次鋒だろう……」

京介も米屋に便乗し、不吉な事を言い出した。

ここはその主人公枠が私じゃないのかと言いたかったが、顔が手塚なのでそんなことも言えない。

もう相手にしてられるかと先鋒戦に向かい、太刀川さんと勝負し

「勝ったぞ」

秒殺した。

具体的に言えば、開始と同時にスポーツチャンバラで太刀川さんの頭に乗せている紙風船を叩き割って終わらせた。

3勝1敗で決勝戦を終えて、私達は優勝し

「お、珍しい組み合わせじゃん」

帰る際に出水と遭遇して凄く気まずい思いをした。

第23話

最後の最後で出水と鉢合わせしたものの、それなりに楽しめて満足がいったお年玉企画。

厄介なの（実力派エリート（セクハラ魔無職）には目をつけられることはない）と占いに出っていたので、特に何事もなく冬休みを過ごし、三学期が始まった。

とはいえ、1年生である私達には激的な変化は特になく割と普通に過ごしている。忙しいのは3年で、進学就職色々ある。

「今日は特別、スフェファフヘー、一年いふいふおの——」

「珍しいな、お前が歩いて登校だなんて」

明日に学年末のテストを控えた私達1、2年。

国近先輩は今先輩に泣きついているところを昨日見ていたが、来年も見そうな光景だが、そんなことはさておいておこう。2月14日、本日はバレンタインデーである。

今日は原付で登校するよりも歩いて登校した方が吉だと朝と自分の占いで出ているので歩いて登校していると三輪と遭遇する。

「今日は此方の方がなにかと良いと朝の占いに出ていたんだ」

「占い……そういうのを信じているのか？」

「案外、こう言うものはバカにできないぞ。」

大抵は胡散臭い偽物だが、稀に本物がある。その本物は恐ろしい」

本物の霊能力者はもしかするとサイドエフェクトを使用しているかもしれない。

三輪に意外そうな顔をされるが割とそういうのは好きなんだ。神様の存在だって信じている……信仰はしないが。

三輪と一緒に学校へ向かうべく歩いていると、三輪の目には私の鞆……でなく、紙袋に目が入る。

「もうチョコを貰ったのか？」

「いや、私はまだだし学校で誰からも貰うつもりも無い。三輪の方は……貰える相手とかいるのか？」

「オペレーターの人が隊員分を用意していたし、ボーダー関係で色々貰える……奈良坂はたけのこの里に決まっているが」

「それ見方によつては手抜きだぞ」

確かに、確かに、奈良坂ならば喜びそうだ。

私もアルフォートを貰ったら喜ぶからなんとなくその気持ち分かるが、今日は誕生日とかでなくバレンタイン。そこは100歩譲って手作りにはたけのこの里擬きを用

意しないだろうか？

大量購入をしたり、それだけしか渡さなかつたら、体裁を保つ為のチョコかなんかだと思われる。

「その紙袋はいつたい……」

「編み物セットだ」

チョコが貰うつもりがないならばと紙袋を気にする三輪。

中に入っているのは面白くもなんともない毛糸や棒針なんかの極々ありふれた編み物のセットで、チョコのチの字も入っていない。

「お前、編み物が出来るのか……」

「手先が器用だから、こう言うのは得意だ。今、弟と一緒にホワイトデー用のお返しを作っている。」

母さんが「チョコを作ったところでカカオからじゃなくて既製品を溶かして別の形にするだけでしょ？ だったら、編み物にしなさい。編み物に」って、言い出して弟は手袋を、私はセーターを作っている」

「要求してきたのか、お前の母親？」

「いや、弟に今年のホワイトデー、彼女になにを返せば良いのか相談してたらそれが良いわってなった」

「!?」

「あ、弟の方は幼馴染み（意味深）へのホワイトデーのお返しだから勘違いをするな」

「待て、三雲！お前、かの——」

「おいーつす!!」

「よね……どちら様ですか？」

校門が見えた辺りのところで、見知らぬ男子に声をかけられる。

無駄にイケメンだなくでも、私、こんなイケメンと会話したことないからしらないや

（棒読み）

「オレだよ、オレ……槍バカだよ」

「それは私に通用しないからな？」

イケメン（笑）はカチューシャをつけると米屋になった。

日頃からカチューシャ、それこそトリオン体でもカチューシャをつけているのになん

で今日はカチューシャをつけていないと聞こうとすると米屋は先に口を開いた。

「バレンタインだな、今日は。月見さんと葉以外から何個もらえっかな？」

「既に二つ貰える時点でありがたく思えよ……」

「ばっか、ああいうのは日頃のお礼とかのチョコだよ。」

そういう感じのチョコなんて今まで何個も貰ってるから、カウントしねえよ」

「世のために殴られる、槍バカ」

割と綺麗所からチョコを貰ってて、カウントしないのは色々な意味で失礼だ。

今日で全ての決着をつける覚悟を決めて私は登校しているんだぞ。本当なら引きこもってセーターを作りたいのを我慢しているんだ。

「陽介、なんでカチューシャをつけない？」

「バカだな、秀次。」

今日はバレンタインデーだぞ？カチューシャをつけてたら、オレのカッコ良さが半減するって葉が言ってたんだ……外した方が多くチョコを貰えるだろ？」

「三雲、こう言うのは数日前から仕込むものじゃないのか？」

髪をおろした姿を見て、カッコいいは、まだ分かるが、当日におろしたとしても特に効果無いだろ」

「本人、これならイケるとノリノリだから放っておけ。」

米屋、バレンタインデーだからって浮かれるの勝手だが明日からテストだ、大丈夫なのか？」

「……お、出水が居るぜ!!」

このやろう、逃げやがったな。

米屋は下駄箱前の入口を隠れて覗いている出水に向かって走っていった。バレンタ

インデーと明日からテストなせいで、色々と解放してるな米屋。

私と三輪は米屋を追い掛け、ヒソヒソと隠れて下駄箱前にいる出水に声をかける。

「なにをしてる?」

「見て分かんねえのか! 下駄箱前でスタンバってんだよ……」

「朝の5時からスタンバってるらしいぞ」

充血した目で私を睨んでくる出水。

出水の手には紙袋が握られており、中には綺麗にラッピングされたチョコレートが入っていた。

「何個、何個だ? 今までに何個入ってた!」

「……4個だ」

「おお……結構貰ってるじゃねえか」

貰ったチョコレートの数がかなりリアルだな。

朝からスタンバってこいつはなにをしているんだと思いつつながら私は自分の下駄箱に向かうとなんか靴が下駄箱の上に置かれていた。

「靴を上置きばいいか」

「ちよつと待てえい!!」

「なんだ、出水? 5個目のチョコレートを手に入ることが出来たか? 国近先輩のはノー

カンドぞ」

「手にいれてねえし、柚宇さん去年チョコを買ったのは良いけど、ゲームのつまみに使って食っちゃったからそこまでの期待はしてねえよ」

靴を脱ぎ、上履きに履き替えて教室に向かおうとすると出水に捕まる。

出水は額に血管をピクピクと浮かべており、私を強く睨んだ。

「お前、三輪よりもパンパンに入ってたんだろうが！開けろよ、なに素通りしようとしてんだ！」

「いや、例によって最初からガン無視する方向で行こうかなと……翌日まで放置されてたら、諦めてくれるだろう」

好き6、嫌がらせ4の割合でチョコレートが入っている。

これら一つ一つ処理をしていくのは容易でないと、ここはガン無視して二日目になってもこの状態でフラれたと思わせる作戦でいく。これほどまでに楽な作戦は存在しない。

「ラブレターの時もそうだけど、お前のそういうところおかしい」

「バレンタインデーでチョコもらえてヒヤッハーしているお前もだろう。」

友チョコとか体裁を保つ為の義理チョコならばまだしも、ホモチョコと本命のチョコが複数入ってたらどうする？

しかもその本命チヨコがモ□ゾフとかゴデ○バとかの結構ガチ目か、手作りチヨコだけドホワイトチヨコで愛してますと書かれてたら、どうする？」

「つぐ……」

「今は仕事一筋なんですとかいうのか？」

「そんなん言ってるつと確実に行き遅れになるぞ、S村さんみたいに」

「おい、やめろ。ローキックくらつてもしらねえぞ！」

「で、どうするんだ？見た感じ、本命入ってるぞ？」

「悪ふざけをするのはやめて、真剣な顔で出水を詰め寄る。」

その中に義理ではなく本命のチヨコが複数入っている。その中だけじゃない、今日、後何個か本命のチヨコを貰える。○デイバとかモ□ゾフとかの有名な会社にチヨコの本命チヨコ……どうするんだ？

「三輪と米屋は今はボーダー一筋だから無理だと言つても許されるがお前は許されなくて」

「なんの差別!?!」

「三輪を見てみる」

「おれもその手を使いたい。」

その手ならば許されると思つているのだが、お前にその手は似合わない。三輪を見る

と、チヨコレートを女性の先輩（ボーダーと無関係の人）から受け取っているが、三輪は突き返して謝った。

先輩は何処か納得した悲しげな表情で去っていった。

「ついでに米屋もだ」

今度は米屋を見せる。

アイツも告白をされてはいるものの、笑いながら「悪いな、今は恋愛よりもボーダーで色々やりたいんだ。気持ち嬉しいんだけどな。オレよりも良いやつはいっぱいいるから、振ったオレが妬むぐらい幸せになれよ」キラーンと綺麗に断っていた。あいつ、一般教養は手遅れだがこういうことに關してはフオロー上手いな。

「三輪ぐらいに哀愁漂わせるシユールな形か米屋みたいにコミカルを感じさせる爽やかさでいくか、どっちでも良いがどっちかに片寄ってやらんといかんど。ボーダーだからって言って断ってA級で彼女持ちの奴が現れれば言い訳にしかない」

「おまつ、お前なんで今そんなことを言うんだ」

「愚か者が、今だから言うんだ！もう私も君も高校生なんだぞ、その辺を考えないとダメだろう。子孫繁栄とかそういう感じの除いても、考えないと……で、振るの？」

私の言葉にプレッシャーを与えられたのか、何度も何度も視線がチヨコに向いていく
出水。

この中に本命があるのかと慌てており、どうすべきかと三輪と米屋を見て考える。シジュールに、シリアスに断るのか、コミカルに爽やかに断るのかは自由だ。

「まあ、個人の意見としては作った方が良いと思うぞ。

イケメソに彼女が出来て仲睦まじくやってるのは、一人の友人として嬉しいことだから。

ボーダーって出来高で、給料が物凄く良いんだろ？ だったら、A級の出水はデートしておれが出すってカツコつけれるし、そこそ高いいプレゼント出来るから出水の彼女になる人は幸せ者だ」

「やめろ、やめろよお、なんで今そんなことを言うんだよ……」

真の悪よりも時として質の悪い理由なき悪意が出水を襲う。

普段は常識人とバカの境界線にいる癖に、いざ彼氏彼女の関係の話になると此処までチキるのは、この男は。

「さあ、先ずはこれで頑張れ」

チヨコのラッピングに残留する電磁波から見分け、出水が持っている袋から本命のチヨコを取り出す。

これが本命だぞと遠回しに言っているのを理解した出水は滝の様に冷や汗をかいて震えて、胃を苦しめるのだが、なに一つサポートせずに見捨てて教室に向かい、授業の

用意をしていると机の中に幾つかチョコが入っていた。

「あの一件で、好感度が下がったと思ったんだがな……日頃の行いの悪さか？」

「普通は逆じゃないのか？」

「こういうのを日頃の行いの悪さというんだ、三輪。」

残留する電磁波からして、知り合いから貰ったチョコじゃない。

「一つだけ全力の嫌がらせで、後は割と本気のチョコ……前にラブレターを貰った時と同じ人からだ、これ。」

「会うつもりすら無いので誰かは知らない、不必要だと持ってきたビニール袋（近所のスーパーで一番大きいやつ）に入れて雑に封をする。」

「余った毛糸でたわしとか作ったら母さん、喜ぶだろうか？」

「男子高校生が言う台詞じゃないぞ」

「そういうのはやめろ……今日か明日って焼却炉使えるか？」

「あくまでも、見ないつもりなんだな……いや、見たり受け取ったりするのはダメだと思うが」

机の上に置いてあるのは完全に燃やす方向で進めるのだが、納得してくれる三輪。

「頼むから、ベラベラと言うなよ。」

「影先輩しか顔を知らない……米屋とヒカリには死んでも言うなよ。むしろ言うぐら

いならば死ね」

「どれだけあの二人に知られたくないんだ……」

「三輪、目を閉じて考えてみる。」

もしこの事を知ってしまった米屋とヒカリを……出水辺りは写真を見せれば済みそうだけど、米屋は10:0でアウトだ」

「……最速で1時間で、広まってる」

嘘だろ、嘘だと言ってくれ。

私の想像だと最速でも3日で全員が知るのに、付き合いの長い三輪ならば最速で一時間か……知りたくなかった。

これは絶対に知られてはならないなと思い、私は紙袋から針棒と毛糸を取り出して授業が開始するまでセーターを編む。

「確実に毛糸足りなくて、新しい毛糸を買ったら余って、小物作ろうとしたら足りなくて新しい毛糸を買ったらの無限ループ突入か……」

編み込みの量と残りの毛糸からして無限ループに入る。

ボツスン並の手先の器用さがあって、凝ったものを作りたくなるパターンに入る前兆を感じていると教室が少しどよめく。誰か来たのかと思っていると三輪が話し掛けてきた

「三雲、お前に客だ」

「むしろお前から来いと言ってくれ」

「だそうだ……これ以上、俺が面倒を見る義理は無い。後は勝手にやってくれ」

私に客なんてロクなもんじゃない。

雑な対応をするのだが、三輪はこれ以上はごめんだと私を見放していき、自分の席へと戻る。

それと同時に足音が聞こえ、教室が静まり返る。誰かが来たんだなと編み物から入ってきた人に視線を向けると、席の前には小佐野がいた……ので、もう一度、編み物を再開した。

「え、無視とか酷くない？」

「チヨコもらつても、ゴミイヴァコ行きだからな」

私のドライな対応を舐めてもらつては困るぞ、小佐野。

第24話

「悪いな、おれは街を守るのに忙しいんだ……いや、違う。」

おれはボーダー隊員、失格だな……街の人達を守らないといけないのに、お前だけを守りたくなっちゃった……うーん」

時をメガネ（兄）が毛糸を編み編みする少し前に遡る。

メガネ（兄）に煽られ、この中に本命チヨコが入っていると遠回しに知らされた出水はどうすべきかと悩んでいた。

後少しすれば春休みに突入する。ボーダーには綺麗所が多いせいで某ツインスナイプほど飢えてはいないが、それでも彼女となると考える出水。

「出水、なにやってんの？」

「ひいいやああん!？」

「ちよ、ちよつと驚かせないでよ！」

「いや、驚いたのおれ！」

校舎の入口前でぶつぶつと言っている出水に声をかける熊谷。

出水が今まで一度も聞いたことのない声を出したのでビクツとなるのだが、一番驚い

ているのは出水だった。

「目、充血してるけど大丈夫なの？」

「き、気にすんな。」

朝5時から此処にいただけで、別に病気とかそういうあれじゃないから心配すんな」「いや、そつちの方が問題よ。」

部活でもなんでもないので、なんで朝5時から……結構、貰ってるわね」

なにやってんだと出水に呆れる熊谷だが、直ぐに呆れるのをやめる。

手にはチョコレートが入った袋が複数入っており、今日はバレンタインだから貰えたんだとニヤニヤする。

「結構って、別にいい！そんな、貰ってねえよ！

京介とか奈良坂とかめっさ貰ってんじゃん！おれのは、あれだ。友チョコ的なのだ」

「友チョコって、米屋から貰うの？」

「……いらねえ！」

なにが言いたいんだこの男は。

チョコレートを貰いすぎて変なテンションになっている出水に白い目を向けると出水は反撃かと言わんばかりに口を開いた。

「そういうお前はどうかんだよ？」

「どうって……昨日、ちゃんと玲達と作ったわ。」

両親と弟の分に、玲と茜と小夜子の分……なによその顔？」

「いや、そういうのじゃなくて本命はどうした？」

「はあ!？」

チヨコはありますと昨日の出来事を語るのだが、出水はそんなもんを聞いたのではない。

ボーダーの女性陣をチヨコレート売り場で見たといい目撃情報はかなりあり、皆でチヨコを作ったと言っても違和感はない。出水が聞いたのは友チヨコとか買ったとかそんなんでなくちゃんと愛しの彼に渡すかどうかである。

「な、なに言ってるのよ!!」

「おれも、なに言ってるのか若干分からねえ。」

多分、これがバレンタインデーの恐ろしいところだと思……あれ見てみろよ」

顔を真っ赤にして出水に声を荒げる熊谷。

落ち着けよと一息落ち着かせると出水は熊谷の意中の相手、メガネ（兄）の下駄箱を勝手に開けた。

「なに、これ……」

靴が、見えない。

下駄箱の中にはブランド物の超有名なチヨコや手作り感があるラツピングされたチヨコがわんさかとお入っており下駄箱の上にメガネ（兄）の靴が置かれていることに気付く。

「あいつ、あんなんだけどモテるんだ。

本人はコンプレックスな老けた顔も、大人びているって見られてるし、成績も良いし、何だかんだで優しいだろ？」

「まあ、そりゃ……」

顔は良い。自身の勉強を見てくれるぐらい頭は良い。相談とかに乗ってくれる優しさはある。

一部のことに関するやる気とかは最低最悪の部類に入るが、その辺は馴れれば問題無い。基本的になんでもそつなくこなせる器用さも持っている。極々稀に見せるクソ野郎な部分を受け止める器量を女性が持つてさえすれば基本的には良い男だ。

かくいう自分もそんな彼のことかと考えたところで頭を思いつきし左右に振って考え事を頭から消す。

「こん中に入れておくの、やめとけよ。

あいつ、丸々1日放置して回収させるつもりだから」

「受け取らないの？」

「受け取らない……直接チョコを渡すぐらいしねえと、ダメだろう……いや、待つて。チョコを直接つて、それはつまり本命を好きですつて直に告白を……おお……後は頑張れ」

自分が貰っているチョコも本命だったことを思いだし、出水は胃を痛めるので戦線離脱。

熊谷の元から去つていき、男子トイレの中に隠れてチョコレートをどうすべきかと考える。

「直接、直接……これを直接!」

出水が去つた後、そっかー直接渡さないといけないのかと現実逃避をする熊谷。

十数秒で意識は現実へと戻り、鞆に入っているメガネ（兄）のチョコレートを確認する。

昨日、学校終わりに那須隊の面々と共に友チョコを作った。友チョコだけでなく、家族用のチョコも作り……きを利かせたのか、那須と日浦は材料を一人前多く用意しており、熊谷にメガネ（兄）用のチョコを作らせた。

最初は嫌だ嫌だと違う違うと否定していた熊谷だが、那須に論破され日浦に押された為にチョコレートを何だかんだで持つてきてしまい、鞆とか机に入れれば問題ないと考えていたのだが、そんなに甘くは無かった。

折角の手作りを受け取ってもらえないのはショックで、ぶっちゃければ受け取って欲しい。けど、色々と恥ずかしかったり気持ちの整理が付かない。どうしようかと冷や汗を流し始めた時

「よー！」

「ひいいやああん!？」

「うお!？」

アホの子ことヒカリが登校して来て、熊谷の背を叩く。

突然の出来事に先程の出水と同じぐらいの声をあげるのだが、直ぐにヒカリだと分かったので声をあげるだけで終わった。

「んだよ、挨拶しただけだろ？」

「ご、ごめんごめん。色々と考え事をしてて」

「考え事……もしかして、チョコをどうやって渡すかか？」

「え……」

普段は自分の名前を何度も間違える男よりもバカなのに、こういう時だけ察しの良いヒカリ。

違うとも否定せずポーカーフェイスも作らず、固まった熊谷はそうですと答えているも同然でありヒカリにもやけている。

「そつか、好きな人に渡すのって勇気いるもんな。

アタシに任せろ！今からチョコを渡す手本を見せてやるよ」

「……」

まだ特になにも言っていないのに、お節介で動くヒカリ。

よくよく見ればチョコレートが鞆の中にそこそこと入っており、渡す人が居るのかと見ていると動き出す。

1年の下駄箱が密集しているところではなく、2年の下駄箱に……具体的に言えば影浦と北添に会いに行き

「野郎共、お待ちかねのチョコだぞ」

「待つてねえよ」

「いや〜でも貰えるのはゾエさん嬉しいよ」

凄く軽いノリで渡していた。

影浦は仕方ねえなのノリで受け取り、北添もありがとうと微笑みながら受け取っているのだが、違う。友チョコならぬ隊チョコを渡しているヒカリだが、メガネ（兄）に渡すチョコはそういうのじゃないとヒカリから離れて教室に向かおうとするのだが、なやら別のクラスの教室を覗いている男子生徒が多数いた。

「バレンタインデーだから男子もソワソワして当然よね」

ついさつき弾バカが朝5時から学校でスタンバっていた事を思いだし、熊谷はそう眩く。

渡す側は恥ずかしいつちや恥ずかしいが、その分、貰える側はとても嬉しくとても恥ずかしい。これを機会にというのも普通にありえる。

「あれって……小佐野!？」

自分の教室に行こうと早足になった途端、足が止まる。

男子生徒が多数、別のクラスを覗いている。そのクラスの教室には小佐野がいた。元読モで可愛い小佐野はボーダー内でも綾辻の次にモテる女子だ。

小佐野が誰にチョコをあげるか気になる、小佐野に好意を持つ男子達と一部のボーダー隊員ならば思うが、熊谷はその一部に入らなかつた。熊谷は知っている、小佐野の思いい人を。

「三雲、くん……」

近付くな話し掛けるなのATフィールドを出しながら器用に編み物を編むメガネ(兄)。

小佐野をチラリと視界に捉えるが、直ぐに興味を無くしたのか編み物に集中する。相変わらぬの彼らしいが、今はそういう話じゃない。

バレンタインデーに隊員でもなんでもない、同じクラスでもなければ特別に仲が良い

わけでもないメガネ（兄）にチヨコレートを、日中堂々と本人の前で渡すなんて、もう本命という事だ。

「お前もか、熊谷……まあ、ある意味ちようどよかったか」

気付けば足を教室内に運んだ熊谷。

編み物をしているメガネ（兄）の視界に入り、声を掛けられると机の前まで近付いた。

「あの……あ、先に。べ、別に後でもいいから……」

メガネ（兄）に話しかけようと同時に声を出す熊谷と小佐野。

お先にどうぞどうぞと互いに譲り合ってしまった、膠着状態が生まれる。世に言う先に動いた方が敗けの状態を生み出してしまふのだが、メガネ（兄）はとつとと終わらせたので、一気に最後の切り札を見せる。

「チヨコ、いらん」

ボスつとチヨコレートが入ったビニール袋を机の上に乗せ、首を横に振る。

眉毛を眉間に寄せて嫌そうな顔をしているメガネ（兄）は編み物に視線を向けて再開する。

「これ、本命なの？」

膠着状態が崩れ、先に動いたのは小佐野だった。

貰ったチヨコの種類について聞いてみると、コクリと首を縦に振ったのだが本人は然

程といって気にしていない。つい数分前に会った出水は物凄く慌てていたのに対して、メガネ（兄）は全くといって興味を持っていなかった。

そういうことに疎いわけでもないのに、興味が無いにもほどがあると思っていると手招きをされる。

「二人ともだ……ほら、耳を貸せ」

「？」

小佐野だけかと思ったのに、私まで？

どういうことかと一先ずは耳を貸すとメガネ（兄）は物凄く小さい声で呟く。

「正直に言えば教えたくないけど、これを機会に言っとく。私、彼女いるよ？」

「え……」

「今、今、なんて言ったの？」

「もうすぐ授業だから、さっさと教室にいけ。」

私はそういう知り合いだからとかお世話になったとかの礼チヨコはいらん」

今言ったことをもう一度、言ってほしい。

熊谷のそんな思いをはね除け、メガネ（兄）は一時間目の授業に必要なものを取り出していく。

「お前等、終わったのなら早くいけ」

「……」

空気を讀んだのか、メガネ（兄）に彼女が居ることをついさつき知った三輪は小佐野と熊谷を追い出す。

詳しい話を聞かせてと粘る気力すら二人にはなく、教室を閉め出された二人はとぼとぼと同じ道を歩いて教室には戻らず、屋上へと足を運んだ。

「……聞こえた？」

「聞こえたわよ」

屋上の隅っこで膝を抱えて座る二人。

さつきメガネ（兄）が言ったことがちやんと聞こえたのかを確認しあい、間違っていないなかつたと俯く。

「すわさんとつつみんが「オレ達の適当なので良いから、本気出してこい」って後押ししてくれたんだ」

「私は……「くまちゃん、材料が余ったからもう一つ作らない？」って玲達に嵌められた」互いに手作りチョコが入った箱を取り出し、具体的にどういふ感じで渡すことになったのか作ることになったのか話し合う。

同じ気持ちを持つもの同士なのか、割と話しやすく気持ち的にも楽になる二人。

「居る素振り見たことあった？」

「全然……あ、でもクリスマスに断られた。」

今思えば、クリスマスに彼女と一緒にバスツアーで楽しんでたんだと思うわ」

「私も期末終わりに断られたから、多分それだ」

メガネ（兄）に彼女がいたのを知っていたかの確認をとる小佐野。

心当たりはないかと考えた末にクリスマスにそういう感じの素振りを見せており、気付かなかったと落ち込む。

「お正月に色々と気を利かせてくれたのに、無駄になったわね。」

今思えば、三雲くん物凄く嫌そうな顔をしてたり、追跡しようと思えば出来るぞって……」

「脈無しかく………これ」

「あ、うん……こっちの方が良いわね」

心の中で色々モヤモヤが生まれ、気持ちの整理が付かない二人。

取りあえずメガネ（兄）に渡す用のチョココレートを交換して、一緒に食べる。

甘い筈のチョココレートはとても苦い。試食して甘いと感じたチョココレートが、とって苦い。気付けば二人は涙を流していた。大きく声を上げるわけなく、ただただ涙を流す。

「どの辺が好きだった？」

「……私、頭悪いんだ。

ヒカリやよねやんほどじゃないけど、それでも残念な方でさ……勉強見てくれるってなつて知り合つた。

最初、ボーダーの隊員にこんな人いたっけ？つてなつて、直ぐに隊員じゃないつて分かつてさ……なんか、こう普通に接してきたり、何度も勉強を教えてくれたりさ……真摯っていうか、いいなつていうか……なに言つてるんだろ……」

小佐野がメガネ（兄）について語つた時点で二人は涙を流した。

これ以上は傷口を抉るだけで、もうなにも言わないでおこうと泣けるだけ泣いて、一時間目の授業をサボる。これで気持ちの整理がつくかと聞かれればつかない。

「お前達、此処にいたか」

「あ……三雲くん」

一時間目の授業の終わりを告げるチャイムが鳴つて数十秒後、メガネ（兄）が屋上へとやつて来た。

今日はこのままこうしておこうかしら？と考へていた熊谷は光の無い瞳で声をかけるのだが、声は枯れて死んでいる。

「あのさ……何時ぐらいからなの？」

「なにがだ？」

「彼女と付き合いはじめたの」

「約3年半前、近界民が此方の世界に現れて一ヶ月ぐらいたったところだ。」

那須に伝えてくれ。もう余計な気遣いはいらん。いや、最初から必要ないと言うべきか……」

「どんな人？」

死んだ声の小佐野はメガネ（兄）の彼女について聞いてみる。

いったいどんな人が自分の思い人と付き合っているのか、嫉妬心と好奇心が8：2の割合で気になっていた。メガネ（兄）は答えずに背を向ける。今日まで一切教えてくれなかったのに、今聞いても教える筈がない。

どんな人なんだろ？と心にぼっかりと穴が開いた小佐野は考えるが、熊谷は別のことを聞いた。

「もし、もし彼女が居なくて私達二人がコレを、チョコを渡していたらどうするつもりだったの？」

「……どつちとも一回、デートをする。デート代は私持ちで。」

色々と勘違いをされたら困るから……私は薄っぺらいダメ人間なんだ。カッコいいイケメンでも生真面目なメガネニキでもなんでもない。そんなダメな私見てもと言うならば、喜んで手を握る」

たらればの話を、そうなったときの事を教えるとメガネ（兄）は去っていく。
「シヤラララ、素敵なキイス」

物凄く良い声で歌いながら。

第25話

涙しかなかった気もするが、バレンタインデーは過ぎて何事もなく（私は）2年生に進級することが出来た。

1年生としてボーダー隊員の京介、時枝、佐鳥といった匆匆たる面々が入ってきた。と言つても、私のポジシヨンは昨年のノートを取つてあるからボーダーの防衛任務で学校に居ない時にコレつかつて勉強すれば？とノートを貸してくれて勉強を教えるだけのお兄さんである。

ボーダーは嫌いだけど、それはそれコレはコレと一線を敷いているキャラで一応は通つてたりする。このまま何事もなければ良いのにと何度も何度も思う……だが、そうは言つてられない。

「入つてきてください」

お正月に手に入れたタイプライターで資料を作つたりしていると私の部屋のドアの前にある人物が立っている。

ここから先は地獄で、とてつもなく辛い道が待ち受けていると占いに出ているのだがそんなものは今に始まつたことじゃない。覚悟を決めて、ノックされる前に声をかける

とドアが開き修の家庭教師が……修の幼馴染みの千佳の兄である雨取麟児さんが入ってきた。

「俺が来るのを、分かっていたのか？」

「……分かっていた、と言えば違いますね。」

此処にやって来るといふ可能性が高かったというのを知っていた、と言うぐらいです」

「未来予知かなにかか」

「そんな大層な物じゃありませんよ……それで、私になにか御用ですか？」

もしかして修の勉強になにか問題でも？ ワンランク下の高校を目指した方が？」

「いや、修は良くやっているよ。」

真面目すぎて教えている此方が面白味に欠けるぐらいで、本当によく出来る生徒だ。むしろ、もうワンランク上を……六穎館だつて余裕でいける」

「そうですか」

なにをしに来たのか私は知っている。

いきなり本題に入るのは麟児さんでも心苦しいので、一番身近な話題を出してみると良いことを聞いた。修の成績は予想以上によかった。ただまあ、体育は残念なのは相変わらずらしい。稀に一緒に走っているが、一向に体力が増えん。

「逆にお前の方はどうなんだ？」

成績はオール5なんだろう？ 大学は……何科にするんだ？」

「考古学の神話とか伝承とかそつち系を……近界民が出る前と比べれば倍率エグいですけど」

近界民は隣接する世界の住人、要するに異世界の住人である。

サラツと流しているが異世界の存在を証明することに成功しており、異世界に関する学科とか考古学とかがとつともない事になっている。もしかしたら、神話や伝承に出てくる世界も近界民の世界とかそういう感じの線も出ており、考古学とか神智学とかの倍率が凄い事になってる。まあ、案外魔法とかに必要な魔力がトリオンという線もある。

「近界民、か……」

「そろそろ本題を……今日は私になにか御用ですか？」

近界民を出すとなにかを考える隣児さん。

場の空気もある程度暖まってきたので、本題に入ると隣児さんはトリガーを取り出す。

「千佳から色々聞いた。

近界民から狙われない様に人気の無い廃墟に隠れているところを迎えにいつてくれ
た……」

「修と一緒に迎えにいきましたよ……トリガーを使って」

「……」

ハツキリとトリガーと言うと固まる麟児さん。

まだなにも言っていないのに、私から情報を出したので全てお見通しなのかと少しだけ焦っている。私は麟児さんが次になにを言うかを待っており、麟児さんは私からなにも喋らないと分かれればトリガーを懐にしまい、封筒を取り出す。

「これは？」

「子供の頃から使わずじまいのお年玉や、15になってからバイトをしたりして貯めたお金だ。

色々と合わせて合計で100万は越えている……まどろっこしい話は無しにしよう……俺に、そのトリガーを譲ってくれ！」

私より立派な大人である麟児さんは私より目線を低くし、土下座をする。

私が隠し持っているトリガーが欲しいと、何故欲しいかという説明の過程を全てすつ飛ばして頼み込んできた。

「麟児さん、起承転結ですよ。」

トリガー云々は……置いておけませんね。まずはなんで、ボーダーの隊員でもなんでもないのでトリガーを持つているのかを、それを使ってなにをするのかを教えてください

「い」

隣児さんがトリガーを使ってなにをするかは知っている。

隣児さんの妹の千佳が近界民に少しでも狙われない様にする為に近界民の世界に向かう……のだが、ぶつちやければ無理である。近界民の世界とこちらの世界、合わせて二つの世界だけならばその手段もありといえばありだ。

私は隣児さんに頭をあげさせ、トリガーをなにに使うのか、千佳が狙われない様に理由を吐かせる。

「誰から貰ったとは聞きません……もつと良い方法はあるんじゃないんですか？」

千佳が狙われる原因をハッキリと知っているんですか？それをどうにかする道具をボーダーに開発してもらったり、それこそ隣児さんがボーダーの隊員になるとか色々ありますよ。私の友人、ボーダーの隊員なので色々と紹介とかもできますからそっちの方を……」

その理由を聞いた後、私は隣児さんを諦めさせにいく。

ダメだと真つ向から押し付けの否定はせず、妥協案やそれよりも良い方法があるという道を示していく。そうじゃないと、この人は口が上手いので逃れられてしまう。こっちの方が良いかもと思わせないと。

この人のトリオン量が多いか少ないかは分からないが、トリガーを使って向こうの世

界に行くぐらいならば、最低でも米屋ぐらいないとまともに戦えない。

「それじゃあダメだ」

「何故ですか？」

「ボーダーはいつたい何時まで近界民と戦うつもりなんだ？」

百年戦争の様にぐだぐだとやり続けるのか……何処かで「もうこの世界は襲いませんと、仲良くしましょう」と停戦協定を結ばないといけない。

俺は千佳の為に行くが、そういつた事も視野に入れている。もしかすると俺達もボーダーも知らないだけで、この街に第二、第三の千佳がいるかもしれない」

「……」

言っていることは間違っていないと言えば間違っていない。

このまま延々と戦い続けているよりも、もうこの世界は襲いませんと協定を結んだ方がいいに決まっている。

「ボーダーのトリガーは大量生産で、トリガーを使う才能があれば訓練すれば誰でも使いこなせる。それこそ、体育の成績が良くない修でもだ」

「そうですね、病弱の女性でもトリガーを使って変身すれば物凄く走り回れるなんてテレビでもやってたりしましたし」

「お前の持っているトリガーは、違うんだろ？」

大量生産でも誰でも使えるものじゃない代わりにボーダーのトリガーを凌駕する力を秘めている……俺に、譲ってくれ」

「……どうあがいても、行くつもりなんですか？

近界民の世界が、どうなっているのか分かってるんですか？なんで狙うのか狙われるのか、近界民が襲撃する理由を分かっているんですか……なにも分からないまま行って、千佳を泣かせるだけ泣かせるんですか？」

「お前ならどうする？」

「質問を質問で返さないでください」

何がなんでも向こうの世界に行こうとする意志を曲げない麟児さん。

向こうの世界に行けたとしてそこで仲良くしましよの握手に成功しても、他の国が狙う。

近界民の世界でも物凄く大きく物凄く強いアフトラトルが千佳を手に入れば、アフトラトルは今以上の繁栄の道を行く。アフトラトル以外の国が千佳を手に入れば、今のアフトラトル並に繁栄する可能性があり、人知れず気付かず黄金の果実争奪戦は既にはじまっている。

「近界民の世界が、そこそ地球の様に色々と国があったらどうするんですか？」

普段襲ってくる奴等がンプリーヌ・チペペスブ王国で、辿り着いた国、アフガニス

タンは全く関係無かったなんて可能性もありますよ」

「なら、そこを經由してンプリーヌ・チペペスブ王国に向かうまでだ」

「……」

「俺を近界民の世界に行くことを諦めさせるのを諦めろ」

ああ言えばこういい、こう言えばああいう隣児さん。

私が出す、向こうに行くのは危険だ、行つても無駄な可能性がある、こうする方が
良いのではと色々と言えば論破とはいわれないが全て突破される。

「……どんな理由であれ、千佳に嫌われますよ?」

「構わない……妹が無事ならば、兄は喜んで嫌われる。お前もその道を辿った筈だろ?」

「……少なくとも、向こうの世界に行くなんてことはしません」

「それはお前がトリガーを持っているからだろ」

なにがなんでも折れない。

この人を説得するのは無理で、直接ボーダーの隊員に通報……三輪は絶対にダメだ。
三輪は妹の、家族の為だと言えば、心が揺らぐ可能性がある。何処かの支部の窓口に通
報するかと考えていると大きく息を吐く、隣児さん。

「もう、やめにしないか?」

お前が諦めさせようとするのは分かっている。だが、俺は折れない。

俺を止める方法はボーダーに通報をするしかない……それをすれば、俺はお前がトリガーを持つている事を喋る」

「……脅しですか？」

「ああ、脅しだ」

隣児さんは強行手段に出てきた。

脅しかと聞いてみると脅しだとハッキリと認めた。普段はそういうことをするんじゃないのに、脅してきた。妹のためならばとトリガーを盗ってくる人だから、脅しだと認めてもなにもおかしくない……が、眉一つ動かさないのか、この人は。

もう潔く諦めて、トリガーを見せて終わりにした方が良いんじゃないのかと諦めの気持ちが出てきた。

「お前の言っていることは、なにも間違っていない。

俺が協力者と一緒に近界民の世界に行くのは無謀なのかもしれない……だからこそ、行く意味がある。」

例えば、そう。近界民の世界に色々と国があるなら、発展途上国や後進国と色々とあるはずだ。俺が此方の世界の代表だと言い、近界民の世界で一番の発展途上国と何らかの形で協定を結んで帰ってくれば、此方の世界を襲撃しようなんて早々に出来なくなる。その為にはお前の持っているトリガーが必要になる」

諦めの気持ちが出てきた私を麟児さんは説得しようとしてきた。

私のトリガーがなんなのか知らないのに必要だと、確かにあれば生存確率が上がる可能性がある。ボーダーの隊員が日頃使っているトリガーと違って、戦う事以外にも色々出来る。

「千佳の事をボーダーに教える、と言うのはダメですか？」

幸いにも私の友人はボーダー隊員で比較的の話が通じる人達ばかりです。千佳の事を話して、それとなく偶然に気付きましたと言う展開を作ることは、千佳が自分で抱え込むタイプなら、周りが気づいてあげたのなら良いのでは？正直な話、麟児さんが近界民の世界に行っても、生き残れないと思います。麟児さんはそれを使うことが出来るのでなく、それを使いこなせるわけじゃ、ボーダーの訓練を受けたわけでもありませんよね？」

「お前がなにを言おうとも、俺は折れない。お前の言いたいことも気持ちも分かっている……だが、それでもだ。」

ボーダーが千佳の存在に気付いてくれてなにかをしていればこんなことをしていない。千佳を守るとボーダーの隊員になっている。

だが、近界民が此方の世界に大規模な侵略をしてきてから約四年もの月日が経っているのにボーダーは千佳の存在に一向に気付いていない。ボーダーはこの街に近界民を

誘導する門を設置しているにも関わらず、近界民を撃退する以外はシエルターを作るぐらいで他に目立ったことはなにもしていない。それどころか、三門市よりも蓮乃辺市よりも四塚市よりも更に外、北海道や京都なんかの県外に行つてボーダーの隊員になれる人をスカウトしている。お前はその事について怒っているんだろ？」

「その辺に關して思うところはあります……ギブアップです」

色々と、色々と頑張つてみたものの私が折れてしまった。

薄っぺらな人間である私と比べて、絶対に折れない鉄の意志を見せつけた。これ以上はどうすることも出来ないと言われた……が、まだやれることはある。そっちの方を優先するのに切り替える。

「私が渡すのは隣児さんの分だけで、協力者には渡しません」

私の持つているトリガーは使用者を選ぶ類なので、隣児さんが使えるトリガーがあれば渡します……もしかすると無いかもしれませんが、幾つか譲れないトリガーもあり、渡そうが渡すまいが条件を出します。その条件に応じないと、出しません」

「その条件は？」

「今すぐにやれとかそんなのじゃなくて、帰つてきてからやつてほしいことがあります。一つ目の条件は生きて帰つてくることです」

「生きて帰つてくるか……俺も一つだけ、条件を……いや、条件じゃないな。」

これは本当に身勝手な俺からのお願いだ。こんなことを言うぐらいならば、と思うだろう」

「じゃあ、言わないでくださいよ」

「そうはいかない」

メンタリストならば、きつと上手く誘導することが出来ている。

こう言うことは本当に向いていないなと麟児さんを見つめ、数十秒ほど沈黙が走り、口を開いた。

「千佳と修の柱になってくれ」

麟児さんの切実な頼みを聞いて不謹慎だというのに私は少しだけ笑みを浮かべてしまった。

「……………抽象的なので分かりやすく言ってください」

「俺が近界民の世界に行ったら、千佳や修はなにかをする。

一番ありえる可能性は千佳や修がボーダーに入って近界民の世界に行つて俺を探そうとすることだ。それを止めてくれなんて俺には言う権利はない。お前に頼む権利もない。なんだかんだと言っているが、ボーダーに入るのが一番なのは確かだ」

「もつとハッキリと」

「修と千佳に、戦う事は向いていない。」

修と千佳が信頼することが出来て、前に出て戦うことが出来て、前で戦ってくれただけで安心することが出来るのはお前だけだ。

千佳の側において心を支えることは修に出来るが、いざ戦って守るとなるとお前にしか出来ない。近界民と戦う時、絶対に折れない存在、部活動で言えば大将、部長、エース、そんな存在に……二人の柱になってくれ」

絶対に折れない存在、折れてはならない絶対の象徴。

千佳と修限定で良いからオールマイティな存在になってほしいと、麟児さんは言う。私はそれを聞いて、お腹を抑える。

「クッククッククック……フッフッフッフ」

「ど、どうした？」

「はーっはっはっははっは!!」

「なにがおかしいんだ!?俺は真面目に、千佳と修の支えになれと……お前の弟の事でもあるんだぞ!!」

「いや、すみません。まさか、そう言われるとは思いませんでした」

麟児さんが私に頼んだことが、余りにも衝撃的な事だった。

私の見た目が手塚なのも運命だったのかもしれないと笑いが止まらない。麟児さんには申し訳ないが、笑ってしまう。

隣児さんが割と本気で怒るので笑うのをやめ、何時もの表情に戻して私は口を開く。「無理です」

修と千佳の支えに、柱になってくれという隣児さんの頼みを私は直ぐに断った。

面倒だとか痛いのが嫌だとかお前が残れば良いだけの話だろうとか、そういう感じのことじゃない。修と千佳の支えに、柱になるのは私じゃない。私だと余計なことしかせず、修と千佳が本当に成長して一人前にならない。私だとダメだ。

「二人の支えになる人物は、もっと良い奴がいます」

まだ会ったことがないが、私は知っている。

修や千佳にとって戦いでの支えになる絶対的な柱になってくれるそんな人物がいるのを……そこに立つのは、私でなく空閑遊真だ。

第26話

修と千佳の戦いでの精神的支柱になる存在は空閑遊真だけだ。

今の麟児さんが絶対に折れないように、この考えは絶対に折れない。

私は二人の支えにはなるが、柱にはならない。最後と最初の一步を後押しするだけで、導く人にはなれないと断る

「二人を支える人物はきつと現れます。

少なくとも、その未来はもう確定している……話を条件の方に戻しましょう。大丈夫ですよ、その人物ほどとは言いませんが、支えにはなるつもりです」

「……そうか」

これ以上は柱の事を話しても無駄だとわかった麟児さんは条件の方に話を向ける。

沢山の条件を提示すれば確実に色々と言われるので、出来る限り少なく尚且つやつてほしいことを出さなければならぬ。麟児さんを説得する時は頭は全く機能しないのに、こういう時だけは機能する。

「二つ目は帰ってきたら、千佳達にタコ殴りにされてください。

ごめんなさいも言い訳も、お前の事を思つてなんて臭い台詞を一切言わず、千佳やお

ばさんたち、それに修が満足するまでぶん殴られてください」

二つ目の案があつさりとして出てきた。

内容は至つてシンプルで、心配して涙を流した千佳達に殴られる。ただそれだけだ。これに関しては飲んで貰わないと困る。人が散々、行かない方が良いと諦めさせようとしているのにそれでもと行こうとしているのだから青あざが出来るくらいまで殴られる。

自分の命を危険に晒しても守りたい大事な妹を、どんな思いがあつたとしても自らの手で泣かせるのだから一発ぐらいは殴られなければならないと私は思う。ポコられるスナプチンキツネ。

隣児さんは千佳や両親、教え子^修を悲しませるのだから受けなければならない罰だと思ひ、これも即座に飲んでくれた。

「3つ目なんです、これに関しては無理なら無理と言ってください。

隣児さんが此方の世界に帰つて来て色々とボーダーに言われたりして終わったのならば……教師をやってください」

「修の家庭教師のことか？」

生真面目な性格で、普通校に行くつもりだから別に必要以上に勉強しなくても良いが……それでも必要なら、教えられる範囲の事を」

「違います、家庭教師じゃないです。帰って来た人達の教師になってほしいんです」
「帰って来た人達？」

「そう……過去に連れ去られた人達の教師をやってほしい。」

近界民の世界に行つて、色々旅をしている途中に四年前に拐われた沢山の人を見つけることに成功したとします。協力者が何者かは知りませんが、ある程度の良識はあると思いますのでこの人達を今は連れて帰ろうと思ひます」

「確かに、それはありえることだが……それと教師がどういふ関係が？」

「理由はハッキリと分かつているのはボーダーぐらいですが、何故か子供が多く拐われています。」

小学生から中学生まで子供と呼べる人達が割と多く拐われていて……ついさつきも隣児さんが言いましたけど、何だかんだで四年経過してます……隣児さんが最短で一年後に帰ってくるとしても四年前に拐われた人達は十五歳になっています。もし小学3年生の女の子が拐われていたら単純計算で14、中学2年となり……その間に覚える勉強を、それこそ台形の面積の求め方とか、ペリーが何年に何処になににやつて来たという簡単な問題も答えることが出来ません。ぶっちゃけ、ボーダーにその辺を期待するのは無駄なので隣児さんが教師をしてほしいんです」

ずっとずっと原作を読んでいる時もふと疑問に思つていたことがあった。

過去に拐われてしまった人達をこっちの世界に連れ戻したらどうするつもりなのか？と。助かって良かったと言うのはあるのだが、こっちの世界に連れ戻した後はどうなるんだと疑問視していた。

「近界民の世界で数年間暮らしてしまえば、色々と変わります。

日本と海外だけでも文化が大きく異なりますので、異世界となればもつと変わっていきます。

麟児さんは向こうの世界に連れ去られた人を連れ戻した際に、当時小学生、中学生だった人達に勉強を教えて此方の世界で生きれるようにしてください」

子供から大人にかけて、特に学生生活は人生を大きく変える出来事が多い。

そんな中、戦争ばかりの近界民の世界に放り込まればどうなるのか……少なくとも、向こうの世界で育った遊真が此方の世界にやって来たばかりの頃は色々と危うかった。サラツと流されてはいるが、1日に2回も交通事故を巻き起こしている。

米屋という手遅れなバカを知っているが、あくまでも米屋は一般教養的な意味で手遅れでそういう感じの常識的な事はある意味一番しつかりとしている。

もし小学生の頃に拐われて現在、中学生ぐらいの子供を助け出すことが出来たのなら誰かが社会復帰の手伝いをしなければならぬ。その役目を麟児さんにしてほしいと私は思っている。

「それをやれと言われたのならばやる。

だが、此方の世界に帰ってくればどちらにせよボーダーには一度捕まってしまう。出来ないんじゃないのか？」

「ボーダーにその手の事を期待してもダメですよ。

彼処は近界民を撃退したりトリガー作ったりする組織で、そつち系に関してはフォロワーが全くと行って出来てません。

去年、ボーダー隊員で防衛任務があるから休んで授業のノートが取れなかった友人が居ます。私は学校を休まないといけない状況になるぐらいなら、勉強を教える人ぐらいは必要なんじゃないのかと言ってみましたが、特になにか変化はありません……ボーダーは割とバカが多いです」

「随分とハッキリ言うんだな」

「DANGERをダンガーと呼ぶ大学生って、どう思いますか？」

「俺が悪かった、謝る。すまない」

こんな時に役立つ太刀川さんのダンガーは恐ろしい。

しかしまあ、勉強関係を信頼しろというのは本当に無理だ。ボーダー推薦なんて枠を作るぐらいなんだから、それぐらいのアフターケアもしろよと常に思っており、米屋や三輪にハッキリと言っているのに変化しない。

仮に連れ戻す事に成功したとして、いったいその連れ戻した人をどうするのかと言うのを原作でも特に描写をされていない。実際問題、連れ戻すよりも連れ戻した後の方が問題だ。社会復帰させたりするのがどれだけ果てしない道なのか、私には想像も付かない。

「とにかく、帰って来た人達に勉強を教えること自体は問題無い。

だが、そういったことはボーダーがする。今はまだ誰も見つけることが出来ていないが、誰か一人でも見つけて連れ帰ることが出来れば、そういったことをはじめめる。俺が帰る前に見つかる可能性だってあるんだ。どうするつもりだ」

「コレを使います」

隣児さんが持ってきた封筒に入っている札束を取り出す。

入っているのは精々百数万程度、かなりの大金だが稼げない額ではない中途半端な金額だ。コレを使えば、隣児さんを教師にすることが出来る。

「私の友人は、あることを愚痴っています。

A級の部隊に入れるとボーダーが一番のスポンサーの子供が言ってきて、上層部が問答無用で自分が所属する部隊に入れたと……」

「金さえあればある程度の融通はきく、か？」

確かに金の力があれば出来ることだが、その金は100万ちよつとだ。個人としては

大金かもしれないが、企業となればはした金に過ぎない」

「ええ、そうです。」

だから私が増やします。10倍にも20倍にも……何百倍にでも」

帰って来た人が、この世界で暮らせるように、社会復帰するために金は必要だ。道具に勉強を教える場所、人、ともかくにも色々揃えないといけず、金が必要だ。

連れ帰ることが出来たのならボーダーは大々的に報じる。そうなればボーダーに入隊希望の人やスポンサー志望の会社なんかが増える。どれだけくるか正確な数は不明だが、それは確かだ。

そんな中で数億という大金をポンつと渡してくれる人にどれだけの価値があるかは分からないが、百数万でなく数億を利子も利息もなしで隣児さんが教師を勤めるのを条件にボーダーに渡すのは喉から手が出るほど好条件だ。

私のサイドエフェクトは何処その実力派エリートと違って沢山の未来は見えない。どうすればその未来に行けるのかも分からない。だが、金を稼ぐといった事に関しては勝っている自信がある。

「この金はどちらにせよ、お前の物だ。」

どうするのもお前の勝手だ……増やすなら、出来るだけ増やしてくれ。教える側としても金はあるだけほしい」

「母さんに頼んで母さん名義の口座開設しますので売買ゲームで頑張ります。

それと4つ目、4つ目で最後なんですけどこれに関しては帰って来てからお伝えしますのでトリガーを出しますね」

「お前……」

4番目の条件を後に回ししたら、隣児さんは睨む。

最後の条件が帰って来てから決めるというのは、間接的にだけこの人の生殺与奪の権を寄越せと言っているようなもの。最初からコレを狙っていたのかと少しだけ怒りを見せるが、狙ってそんなことが出来るほど私は器用じゃない。元々は隣児さんを諦めさせればと思っていたから、妥協案である。

「睨まないでくださいよ。」

本当なら今ここで貴方を殴り倒してトリガーをぶん取って緊急脱出するだけで貴方の罪を暴けるんですよ……コレぐらいしておかないと、ダメです」

こればかりは譲ることは出来ない。

隣児さんは断るの一言も言わないので私は背を向けて押入れに入れてある金庫のダイヤルを回す。

「分かっているとありますが開けた瞬間、棒かなにかで殴打してトリガーを持ち逃げしないでくださいよ。」

私の持っているトリガーはなにかとややこしいのでちゃんと説明を聞かないと使いこなせない物ばかりで、過去に修が一度だけやらかしましたので本当に説明をちゃんと聞いてください」

四年前に起きたある出来事を思い出す。修と相性が良すぎるせいで、あんなことになるとは思ってもみなかった。冷静に考えれば相性が良いのは当然の事なのに見落としていたので大変な目にあつた。

私は金庫を開き3つあるアタッシュケースの中でも最も薄く、Xとデカデカと書かれているアタッシュケースを出した。

「そっちの二つは？」

「1つは最初に使った私にしか使えません。」

もう1つは……：隣児さんでも使うことが出来るには出来ませんが、多分使いこなせる人物は世界の何処を探しても居ないと思います」

残っているアタッシュケースについて聞いてくるので、答える。

3つ目のアタッシュケースに入っているトリガー、誰にでも使えるが誰もが使いこなせないトリガー（ということになっていく転生特典）で唯一私が一度も使ったことの無いトリガー（ということになっていく転生特典）だ。

「……こんなにも、トリガーがあるのか!？」

アタツシユケースを目の前に置くとかゆったりと開くと麟児さんは声をあげる。

自分が盗ってきたトリガーとは少し異なる形をしているトリガー（という事になっている転生特典）が25個入っており、手を伸ばそうとするので私は腕を掴んだ。

「説明を終えるまで、触れないでください……いや、違うか。」

麟児さん、貴方はどのトリガーに目が向いて触れようと思いましたか？」

修に見せた時も同じだった。私が説明をしようとする前に修と修に適合するトリガーが引き寄せられて特に意識していかないのに触れてしまった。麟児さんもその時の修と同じなのかとどれに触れようとしたのかを聞いた。

「いや、特にコレと言っただけに触れようとは意識をしていない。」

俺が盗ってきたトリガーと違って、お前のはUSBメモリの形をしているから少し触れてみようと思っただけだ。アルファベットのシールが貼られているが、なんの意味があるんだ？」

麟児さんは特にどれかに意識を引き寄せられたわけでもなく普通に気になったただだった。

「……それぞれの頭文字ですよ。」

加速、始祖鳥、疾風、偽物、牙、遺伝子、熱、水河期、切り札、鍵、幻想、金属、ナスカ文明、大洋、人形遣い、女王、ロケット、骸骨、引き金、ユニコーン、暴力、気象、

極限、昨日、地帯。極限以外はそれぞれに関連する英語の頭文字です」

アルファベットについて説明をすると私はJとZとXのシールが貼られたトリガー（という）ことになっている転生特典）をアタッシユケースから抜く。

この3つだけは麟児さんに譲ることが出来ないもので、それ以外で適合するものがあればそれを譲る。

「私の持っているトリガーはテレビゲームに例えればハードとソフトに分かれていて、麟児さんの目の前にあるのはソフトです。この中で適合するものがあれば幾らでも譲りますが、無ければなにも譲りません」

「ボーダーのトリガーは事前に武器を設定しておかなければならない。

対してお前の持っているトリガー相手に合わせて瞬時に武器を入れ換えるシステムで相手に合わせて瞬時に入れ換える。

一見、お前の持っているトリガーの方が効率が悪いがボーダーのトリガーで出来ない様なことを……空を飛んだり、天气を操ったり、凍らせたり、戦う以外にも色々なことが出来るといった感じか」

ざっくりとした説明をするだけで麟児さんは私が持っているトリガーを、大体理解してくれた。

事細かな説明をするのは自分に合うメモリが分かっただけからであり、一先ずはどのトリ

ガーが適合するのかを調べなければならない。

「どうしてEのトリガーが無いんだ？」

トリガーにあるスイッチを押して、音声を鳴らそうとするも音声は鳴らない。

Dのトリガーのスイッチを押すのだが音声は鳴らず、次のトリガーを手に取ろうとするのだがEのトリガーだけが無いことに聞いてくる。

J X Zの3つは渡すことは出来ませんと言ってケースに取り除いているのに対し、Eに関しては最初からなにも言っていない。

「このアタツシケース、1つだけトリガーを入れる部分が開いている。

いったいなにを基準に何処の誰が作っているのかは知らないがAからZまでであるのなら、Eもあるはずだ」

「隣児さんの言うとおり、Eもありますが見せることすらしません。

例え隣児さんと適合するトリガーであったとしても、それだけは渡さない……次を押してください」

絶対に渡さない。出来る出来ないではなく、するしないの話だ。

Eがもし他の誰かに、それこそアフトクラトルにでも渡ってしまい、使いこなせる奴がいたのならその時点でどうすることも出来ない。アフトクラトルは近界を統一するどころか、この世界すらも支配することが出来る。

Eを最初から渡すつもりが無いという意志を見せると隣児さんは特にそれ以上はEについてなにも言わずにF、G、H、I、Kとスイッチを押していくのだが音声は鳴らない。

「これ、本当に音声が鳴るのか？ハードの方に入れないと音声が鳴らないとか、そういうものじゃないのか？」

N、M、L、O、P、Q、Rとスイッチを押すもののどれも音声は鳴らない。1つでも多くの音声が鳴ってほしい隣児さんが押す残りのトリガー（と言うあの転生特典）はSTUVWYの6つだけで、いや、6つしかない。

もしかしたら全て音声が鳴らないんじゃないかと焦りを見せ出した。

「修はJのトリガーで鳴って、Cのトリガーでは鳴りませんでした……Sのトリガーを押してください」

私はなにも嘘をついていない。

次のSのスイッチを押させるが音声は鳴らず、次のTを手に取りとうとする前に私は――

『スカル！』

T2ガイアメモリのスカルメモリの音声を鳴らした。

第27話

麟児さんはあの後トリガーを、T2ガイアメモリを押し続けた。

意識しなくても無意識の内に適合者と引き寄せ合う性質を持つているT2ガイアメモリ。麟児さんは自分が盗ってきたトリガーと大きく異なりUSBメモリに似ているからと気になっただけで手に取るうとした。

コレがトリガーと呟いて無意識の内にジョーカーメモリを手にとった修と大きく違っていたのでその時から直感的に感じていたのだが、適合するT2ガイアメモリは存在しなかった。

麟児さんでも使えてボーダーよりも出力が高いトリガー（と言う名のベルト）は所有しているが、私が麟児さんに渡せるのは適合するT2ガイアメモリとロストドライバーだけ。他は絶対に渡すつもりは無い。

「歯を食いしばれ、馬鹿どもが」

今日は麟児さんが近界民の世界に行く出発日。

麟児さんは鳩原未来をはじめとする協力者達と共に門が開きやすそうな場所に集まっておりますその場には私もいる。

「っが!？」

使えるT2ガイアメモリが無いから使うことの出来る私が来てくれと頼まれたとかそんなのではない。

麟児さんは私に千佳と修の柱になってくれと頼んできて、それを断ったが有事の際には修と千佳は何がなんでも守るつもりだ。行くつもりはない。

もしかすると帰って来れないかもしれない麟児さん達を見送るのと、一発ずつ顔面を殴る為に麟児さん達の元へとやって来た。

最初は絶望させて諦めさせようかの考えがあつたものの、協力者達は麟児さんと同じ電磁波を出していた。絶対に諦めないという強い意志が見れた。

「お前の拳……重いな、重くて痛い」

「泣かないでくださいよ、こんなことで。」

貴方の説得を、諦めさせることが出来なかつた薄い人間の拳なんて軽い。貴方のことが好きで大切な人の拳はもつと重くて痛いんです」

「そうか……いや、そうだな」

私の拳を受けて麟児さんは軽く涙を流すが、泣くな。

見送ろうとしている愚かな男の拳に全くといって痛くないはずだ。もつともつと痛い拳があるのだから。

「お前達もなんの為に近界民の世界に行くかは聞かないが、帰ってきたらぶん殴られる。自分の事を心配してくれた人を、今回のことで責任を取らされる人を……どんな理由があれどもこれは越えてはならない一線だ」

何度も何度も忠告しておかなければならない一線で、協力者達は越えようとしている。帰ってきたのならば、ごめんなさいと謝ることも向こうの世界に行こうとした理由を語ることも許さない。

家族から心配してくれる友人から、責任を取らされてB級に降格させられる二宮隊の面々から最低でも一発はぶん殴られる。

自分達が今からやろうとしていることがどれだけのことか理解しているのか、協力者達は殴られることについては嫌だと言わない。

「修と千佳を頼んだぞ……貴虎」

「下の名前で呼ばないでください、名前負けしてるんで苦手なんです。」

それよりもちゃんと帰って来てくださいよ。こつちもGWが開けたら母さんと一緒に銀行口座開設して、準備しておきますので」

「ああ、お前との約束を絶対に果たす……トリガー、起動!!」

もしかするとこれが最後になるかもしれない会話を終えると、隣児さんはトリガーを使う。

麟児さんだけじゃない、鳩原や他の協力者達もトリガーを使用してトリオン体に換装していくのを見て私は背を向け――

「……この道じゃないな」

家に帰る道とは全く別の道を歩く。来たときと同じ道でもない道を、サイドエフェクトを頼りに歩いていく。

このまま普通に家に帰ってもなにも問題がないのは分かっている。麟児さん達は近界民の世界に行くことが出来る。行つた後、なにをするのかという細かな事は知らないが行くこと自体は出来る。今から行おうとすることは己の私利私欲の為であり麟児さんの為じゃない。

「過去に何度か近界民トリオン兵と戦つたが、対人戦は0。

今から戦う相手はボーダーで上から数えて直ぐに出てくるほどの強さを持つた奴等……そいつ等を倒せなければ、アフトラトルは夢のまた夢」

これから起きる出来事を思い浮かべ、私はT2ガイアメモリ一式に同梱されていた口ストドライバーを取り出す。

思えばこれを使つたのはたった一度だけで、その一度で戦つたのが修というところでもない内容。あの時は本当に心苦しかった。命を奪わないとはいえ、実の弟をぶつ倒さないといけないのは辛い。

『スカル！』

ロストドライバーを装着すると、自分と2番目に相性の良いSスカルのガイアメモリを取り出して音声を鳴らす。

1度も使ったことがなければ、自分と1番相性が良いわけでもないガイアメモリ。本当ならば1番相性の良いEのガイアメモリを使い相手をしたいが、有事の際でも余程の事が無い限りはEのガイアメモリだけは使わないと決めている。それほどまでにEのガイアメモリは恐ろしいからだ。

「変、身！」

『スカル！』

T2スカルメモリをロストドライバーに差し込み、差し込み口を傾けると音声が届き私を包む様に小さな竜巻が巻き起こり、目の前に紫色の雷が落ちる変身する。

「……冷たいな」

変身する事には成功した。

Eのメモリで変身するエターナルと比べれば少しだけ物足りない感じがするものの、それでも強い力を感じる。だが、それと同時に暖かさが感じられなくなった。

Sのガイアメモリに宿る記憶は骸骨WEATHER、引き金の様になんとなくどんな能力なのか連想できるものでなければ気象TRIGGERの様に分かりやすいものでもない物が宿っている。徒

手空拳と射撃だけで戦うから骸骨がどんな能力なのか詳細はハッキリしないが、今の自分は熱を感じられない。

世間は地球温暖化がどうのこうのと言っており、年々暑い時期は増えている。4月末から5月初旬でも下手をすれば夏の温度になるときがある。

今年のGWは雨が降るせい、ムワツとしていて暑い。此処に来るまでに暑かったのに、スカルのガイアメモリを使い変身した途端に蒸し暑さはなくなり冷たくなっていることを感じる。

「……クリスタルでなく、普通のスカル、か」

曲がり角の電柱にあるカーブミラーに写る自分の姿。

仮面ライダースカルそのものであることに少しだけショックを受ける。

「止めようと私なりに頑張ったが……スカルになってしまったか」

スカルメモリを使って変身すれば仮面ライダースカルになるのは当然と言えば当然に見えるが、当然じゃない。

心の方に迷いがあるのなら仮面ライダースカルでなくスカルクリスタルになってしまはずだ。T2ガイアメモリだからスカルになってしまったなんてありえない。

隣児さん達を変身してとめようとせずつ見送ろうとする自分に後ろめたさがあり、止めれない、説得する能力の無い自分が悪いと思っっているのだが、それはそれと思っ

る自分が確かにいる。

心の何処かで最初から麟児さんを止めるなんて無理だと思っており、止められなかった事を悔やんではいるもののそこまでじゃないと何処か一線引いて、これから起きる出来事に覚悟を決めている自分が居た。

その覚悟になんの迷いもない。スカルクリスタルでなくスカルになっちゃった。

「これ絶対におまげか」

何故か被っている白い中折れハット。

仮面ライダースカルにはこれがないといけないのは分かるのだが、この中折れハットは仮面ライダースカルに変身する鳴海荘吉が変身前から身に付けている物で、スカルメモリとは全く関係ない。

私を転生させた私は転生特典に色々と隠し要素があるとか言っていたが、この白い中折れハットもその一つだと納得しているとそろそろ奴等がやって来る事に気付く。

「っ、止まれ！」

奴等が、A級3位の風間隊がやって来た。

正確に言えばトリガーを起動した麟児さんは達を追跡するべく派遣されて、反応のある場所に向かおうとしている通り道に私が居たと言うのが正しい。

名前の通り見た目は骸骨を連想させる姿の仮面ライダーのスカルを見て、風間さんは

足を止めて歌川と菊地原を止める。

「貴様、何者だ？」

「俺か？俺は、仮面……いや、違うな」

名前を訪ねられたので、仮面ライダーと名乗ろうとしたが止める。

今からやろうとしていることは、仮面ライダーWでの仮面ライダーの定義に反する。

仮面ライダーWの世界に置いては仮面ライダーは街を守る正義のヒーロー。

今からやろうとすることは己の私利私欲を満たすためのことで、仮面ライダーと名乗るには相応しくない。

「スカル、見ての通りただの骸骨だ」

「……」

私の事をジッと睨む風間さん。

今日まで戦ってきた近界民とは大きく異なる姿の私を近界民なのか、痛いコスプレをした奴なのかを考える。鳩原達を追跡しようとしたらこんなのが居たのだから、いったいなんなんだと考えるのは自然なことだ。

「菊地原」

「分かりました……!?!」

私があんなのか判断する材料に欠ける風間さんは菊地原の名前を呼ぶ。

菊地原はサイドエフェクト、強化聴覚の持ち主。7〜8倍ぐらい耳が良いという凄いなだか凄くないんだか聞くだけではイマイチ分からないサイドエフェクトだが、心臓の音も聞き分ける事が出来るほどの性能を持っている。

オンオフ出来ない物なので普段は髪で耳を隠して聞こえる音を少しでも減らしている。菊地原は髪を結んで音が聞こえやすくするのだが、驚いた顔をする。

「どうした？」

「……音が、聞こえないです」

「どういうことだ？アレがなんにせよ、なんらかの音は聞こえるはずじゃ」

「聞こえないんだって、心音も呼吸音も、なにもかも」

この姿の私がどんな存在なのか音で聞き分けようとするも、なにも聞こえない。

今の私が暖かさを感じないのと同じで、これが骸骨スカルの力の一端なのかもしれない。

「……お前は何者だ？」

コスプレをした痛い奴ではないと分かったものの、いきなり襲ってくるということはしてこない風間さんは21歳児の貫禄を見せつけるのだが、焦りの電磁波を出している。

鳩原達を追い掛けている途中に私と遭遇してしまい、私は未知の存在。頼みの菊地原で調べてみるも、なにも出てこない。私を見逃すのは危険で倒さなければならぬが、

それに時間を使えば鳩原達を逃してしまう可能性がある。かといって私を無視することも出来ず、増援を呼ぼうにもトリガーを盗んだ奴を追い掛けてたら邪魔が入ったので増援をくださいとは下手に言えない。

『風間さん、そこに誰か居るんですか?』

「……なんの反応もないのか?」

『はい、そこには生体反応やトリガー反応は全くといってありません』

「……」

通信の電波が入ってくるのが見える。

風間さんの言っていることからして、レーダーに写るとか写らない関係の事だ。

『トリガー!』

「今、トリガーと……」

『トトト、トリガー!』

このままぐだぐだやっているとやれば実力派エリートや本部長がやって来る。

待つのでなく攻めに行くとT2トリガーメモリを取り出して何度も何度も鳴らすと

歌川は反応し、菊地原と風間も警戒心を強める。

「1つ……我が身可愛さに、最善で最高の手段を選ばなかった」

確かな方法はあった。

隣児さんを止めて、千佳をどうにかする方法は確かに存在していた。私が思う最高で最善の手段はあった。だが、我が身可愛さに選ばなかった。

隣児さんが家に帰って直ぐに出水や米屋に通報しておけば、今こんな事をしなかった。それをすれば自分のトリガーがバれて下手をすれば取り上げられて記憶消去される可能性があり、自分も街を守るために戦えと言われる。街を守るために戦うのは良いが、大人のくだらない権力や勢力争いに巻き込まれるのはごめんだと我が身可愛さに選ばなかった。

「2つ……越えてはならない一線を越えさせてしまった」

隣児さんがやろうとしていることだけは無駄なことだとハッキリと言える。

ボーダーと深く関わっておらず、千佳の価値をハッキリと理解していないが多少の犠牲を払っても必要な存在なのは分かっている。

拐われてしまった家族を救う為ならばまだ可能性や希望はあるが、隣児さんだけではない。仮にアフトラトルを味方につけることが出来たとしても、他の国家が狙ってくるだけだ。

ボーダーに通報しておけばそれが分かるようになったかもしれないのに、通報しなかったせいで越えてはいけない一線を越えさせた。

「3つ……私利私欲の為だけにお前達を今から完膚なきまでに撃ちのめす」

追っ手である風間隊を倒す。

隣児さんの為でなく、今の自分が実際何処まで戦えるのか知る為に戦う。攻撃手二位で個人総合三位の男が率いる近距離戦ではトップレベルの部隊に余裕で勝つことが出来なければ、これから先なにも出来ない。

修が最初と最後の一步を踏むための後押しを出来るようになるためには、此処で勝てなければ意味がない。風間隊には悪いが倒させてもらう。

「俺は俺が背負わなければならない自分の罪を数え終えたぞ、ボーダー……さあ、お前の、お前達の罪を数えろ」

第28話

「ボーダーの、罪だと？」

Wの決め台詞中の決め台詞を風間隊に言うのと、風間さんは考える。

ボーダーになんの罪があるのかを、私はその事について言いにくたのかと考えるのが考えたところで答えは出ない。

「お前達に言っても無駄だったな」

目の前にいる風間隊は総合三位で攻撃手二位の風間さんが率いている全員が近距離戦闘が可能でカメレオンというオプシヨントリガーを使い透明になり相手に近付いて奇襲をしたり、菊地原の強化聴覚で目以外の五感を使い相手を探知が出来るボーダーでも屈指の実力を持つ部隊。

だが、あくまでも戦闘員に過ぎない。見た目は子供だが年長者としての自覚はあり、上層部の信頼も厚い人物だがそれでもただの1隊員、1戦闘員。

現場での権限はそこそこあっても、それ以外では特にこれと言った凄い権限を持っているわけでもないかとスカルマグナムを取り出し、3人の足元に撃つ。

「胡散臭いコスプレ、じゃなさそうですね」

スカルマグナムで撃つたところには綺麗に穴が開いていた。

トリガーマグナムのコンパチブルかと聞かれればそうで玩具にしか見えないスカルマグナムは正真正銘の銃であると歌川は納得をし、風間さんにどうするかと聞く。

「今は時間を掛けている暇はない。最短で倒す。三上、念のためが上に報告を頼む」
『分かりました』

普段から戦っている近界民トリオン兵と大きく異なり話せる人間だったが、スカルマグナムの弾を撃つたことにより、風間さんは私と戦うことを決め、目の前にいるのが未知のトリガーを使う存在の為に万が一を想定してオペレーターの三上に通信をする。

『風間さん、目の前にいる未知の近界民ですが、此方側のリーダーには一切写って居ませんので注意してください』

「視覚以外での完全なステルスか」

「風間さん、僕だけ先に行っておきますか？」

鳩原さんは狙撃手で人撃てないから近付けば簡単に倒せますし、横領品を持つてる人は素人だからカメレオンの奇襲で僕一人でも全滅させれますよ」

「行かせると思ってるのか？」

時間は既に充分に稼いでいるが、万が一が恐ろしい。

私を無視しようとする菊地原にスカルマグナムを向けて、何時でも撃てるようにす

る。

「……相手は未知のトリガー使い。

事件の鍵を握る可能性が高い。全力で迅速に倒した後に誰か一人が残って、二人で鳩

原達の元へ向かう」

「でしたら、俺が残ります」

「決まりだ、いくぞ」

「随分と待たせてくれたな」

切羽詰まった状況で、下手に人員を増やせないのは分かっているが無駄な会話で撃ち抜く機会は何十にもあつたぞ。

「ああ、だがもう終わりだ」

「地面に剣があるからか？」

スカルマグナムで足元のコンクリートを撃ち抜くと刃の欠片の様な物が飛び散る。

どうするか話し合っている最中に風間さんがスコープオンをもぐら爪で足を刺そうとしていたが、最初からお見通しだ。

「！」

足の裏から刃を出して地面を突き刺すもぐら爪。

来ると分からない限りは、警戒することぐらいしか出来ないものをいとも容易く見抜

きスコープオンを破壊した事に驚く。

「驚いている様だが、この程度では困る。」

お前達は明確に見える悪を倒している組織としてアピールしているが、実際は隣接する世界と戦争をする軍隊だ。

この数年の間でお前達は牙を磨いているかもしれないが、それは此方も同じ。力をつける余裕があるということは相手側にも同じ余裕があるということ。攻める側でなく受け守る側に立っているお前達の手の内は直ぐに分かる」

「既にオレ達の対策済みということか」

「お前ごときに対策らしい対策は必要ない」

余計な事を敢えて教え最後に挑発をいれると苛立つ風間さん、よりも苛立ち怒りを見せる菊地原と歌川。

ごとき発言が思いの外、効いたと見ているとアイコンタクトを取って風間隊の三人はカメレオンで姿を透明にした。

「なにせ、それが俺に対して一番の悪手だからな」

銃を使う骸骨野郎。

今のところ私に対するイメージはそんな感じで、銃で戦うと考えてカメレオンで姿を透明にして奇襲を仕掛けるつもりだろうが、それこそが一番の悪手。

スカルマグナムを3連発し、真つ先に倒さなければならぬ相手を……歌川の足、心臓、頭を撃ち抜いた。

「そいつは便利だが、デメリットがデカ過ぎる。」

奇襲を仕掛けるのは良いが、初見の相手に効かない可能性を考慮していないのは二流。情報が漏れている時点で対策をされている可能性を考慮していないのは三流だ」

「っ、すみません！」

『トリオン供給器官破損、トリオン伝達脳破損、活動限界、緊急脱出』
ベイルアウト

真つ先に倒さなければならぬ歌川は緊急脱出で、ボーダー本部へと強制帰還していった。

私にカメレオンは効かない。サイドエフェクトは視力強化で、遠くの物を見ることもよしも動体視力が強くなり、見える光が増える。光学迷彩に近いカメレオンで姿を消したとしても、私の目にはくつきりと姿が写って見える。

「次は纏めてだ」

単純な個としての実力ならば風間さんの方が危険だが、この人と菊地原はリーチがない（BBFで両者ともに射程1と表記）。

万能手の歌川はメテオラとアステロイドを装備している。スコープイオンの近接戦闘を避けてアステロイドとメテオラ主体で戦い、風間さんと菊地原が距離を詰めてくれば

戦いにいくい。

そんな歌川はもういないとトリオン供給器官を狙いスカルマグナムを撃つのだが、歌川がやられたのを見てカメレオンを解除して姿を現し、シールド（極小二重）を貼って防ぐが物凄くヒビが入る。

4、5発連射すれば壊れそう……：そういえば、私のトリオン量ってどうなっているんだ？何回か近界民に狙われたことあるから、それなりにあるだろうが……。

「余所見をしても、いいのー！」

スカルマグナムを見て、色々と考えていると菊地原がスコープピオンで斬りかかるが避ける。

万能手の歌川は落ちた。菊地原のサイドエフェクトは効かない。三上がオペレーターとしてサポートしようにも既に目の前にいて視界から逃せば何処にいるのかが分からない、レーダーには写らない。

得意の戦法もサイドエフェクトも通じずサポートも受けられないとなると純粋な戦闘力と数で戦わなければならない。

「俺はお前達の天敵の様だな」

私はスコープピオンで斬りかかる二人を避け続けながらそう言った。前々からなんとなく思っていたが、風間隊と私は天敵で、私が勝ちやすい相手だ。

風間隊はボーダー屈指の白兵戦特化の部隊だが、特化し過ぎていてバランスに欠けている。それが悪いと言うわけではないのだが、相性が悪ければ総合的にも個人的にも下の奴に負ける可能性がある。狙撃特化の冬島隊が2位で白兵戦特化の風間隊が3位なのも隊としての相性が関係している可能性が高い。当真を倒せばその時点で敗北確定みたいな部隊だが、その分、見つかったら即座に逃亡出来たり、追い掛けられないように罫を貼ってたりで、近付いての戦闘を前提としている風間隊の面々には相性が悪い。「持つてる武器もの差や俺がどれだけかは知れた、終わりにする」

今の自分が何処まで出来るか大体知ることが出来た。

カメレオン無くても個人として確立された強さを持つ風間さんと強化聴覚を生かすことの出来る菊地原を相手に一撃もくらっていない。

サイドエフェクトとスカルメモリに頼りすぎていると言われればそれまでだが、それでも十分な成果を知ることが出来た。

これ以上チンタラしていると二宮隊や太刀川隊が襲来してくる可能性がある。二ノさんや出水の様に質量のゴリ押し戦法が出来る奴にこの姿は弱い。技術よりも攻撃特化の奴は、メモリどうこうじゃなく、別のベルトを持ってきて変身して戦闘しなければならぬ。

『トリガー、マキシマムドライブ！』

当初の予定ではトリガー持ってますよとアピールする為だけに持ってきたトリガーのガイアメモリをマキシマムスロットに差し込むとトリガーマグナムが左手に出現する。

右手にはスカルマグナム、左手にはトリガーマグナム。この2つにもメモリを差し込めばトリプルマキシマムが出来るが、そんな事をすれば確実に体を痛めるのでしない。今は強者を余裕で喰らう強者でなければならず、多少の無茶をして限界を越える時ではない。

「トリガー……スカル……いや、いらないか」

二つの銃に力が溜まっていくのを感じ、風間さんと菊地原に数発撃ち込みシールドでガードをさせている際に距離を取りながら必殺技名を考えるが必要なかった。

Wが必殺技名を叫ぶのは二人の息を合わせるためであり、ロストドライバーで一人で変身している私には必要の無いことだ。

「こうなったらー！」

「待て、菊地原！」

一撃も攻撃を当てることが出来ず、余裕を見せつける私に苛立ったのか先走った菊地原。

だが、私との距離は5メートル以上は開いており、今までの攻撃やスコープピオンの形

状からして近付くしか選択肢はない……そう思っていたのだが、スコーピオンが延びてきた。

スコーピオンとスコーピオンをくつつけてリーチを倍にし、射程範囲を伸ばし鞭の様に操るマンティスを使ってきた。

「その武器は側面からの攻撃には弱いことには変わりない」

スコーピオンは軽くて切れ味抜群だが、脆い。長くすれば長くするほど脆くなりスコーピオン同士をくつつけ射程範囲を一気に伸ばすマンティスともなれば更に脆くなる。

銃口を少しズラし、側面に向かってスカルマグナムとトリガーマグナムを撃つとマンティスは碎け散る。

「これで決まりだ」

「！」

銃口を向けると風間さんは退避しながら菊地原の前に小さなシールド（二重）を展開する。

苦し紛れか、小さなシールドで攻撃を防ぐ極僅な時間で菊地原は次の手に出ると思っ
ているのかはしらないがこれで決まりだ。

スカルマグナムの引き金を引くと、巨大な頭蓋骨の形をした紫色の弾が発射し、弾は

8等分に分裂し1つ1つが人の頭と同じぐらいのサイズの頭蓋骨の形に変化。頭蓋骨の弾は風間さんが出したシールドに命中する。

トリガーマグナムの引き金を引くと銃口にあったサイズの無数の弾丸が連射され、風間さんが出したシールドに数発しか当たらずに残り全ては菊地原に当たる。

「これは、里見と二宮の!」

大きい数が少ない威力の高い弾、小さい数が多い弾の同時撃ち。

射手と銃手No. 1の男が使うシンプルながらも強烈な戦法を使い、菊地原を蜂の巣にして緊急脱出させた。

「大丈夫か?」

『問題ありません。そいつ里見さんじゃないですよね?』

「そんなわけあるか。三上、増援の方はどうなっている? 攻撃手と奴との相性が悪すぎる。当真や出水といった中遠距離での戦闘が出来る人員が欲しい」

『増援ですが防衛任務中のレイジさんと東さんが今そちらに向かっています。入れ替わりで草壁隊が防衛任務に、トリガーを起動した鳩原さんですが、非番の二宮隊と連絡がつかましたのでランク戦のブースに入り浸っていた太刀川さんと共に向かわせ、その後そちらに向かわせるとのことです』

菊地原がやられ、残りは風間さん一人となった。

風間さんは諦めない目をしているが私を倒そうという気が無くなっている。風間さんは名指しして増援を要請している。それから考えられるのは……足止め、もしくは見失わない為の追跡か。

増援も撃退してやろうかと考えるが、出水と当真さんと風間さんの相手は難しいと左手のトリガーマグナムを消し、トリガーのガイアメモリをマキシマムスロットから抜き差しして今度はIのガイアメモリを出し、スカルマグナムをスライドさせ、スカルマグナムのマキシマムスロットに差し込む。

『アイスエイジ、マキシマムドライブ！』

スカルマグナムをもう一度スライドさせ、元の形に戻し風間さんに銃口を向ける。

風間さんはそれを見て、避けようとするがアイスエイジのマキシマムドライブは避けようと思つて避けられるものじゃない。

「これで決まりだ」

この一撃で勝負は決まる。

スカルマグナムの引き金を引くと弾が放たれ、その弾を風間さんは避けた……が、意味は無かった。避けられた弾は近くの電柱にぶつかるとそこを中心とし瞬く間に凍りだし近くにいた風間さんは氷に閉じ込められ、二階建ての一軒家二軒分の大きさの氷山が出来た。

「!!」

「なにを言っているかは分からないが、3つだけ言うことがある。

1つ、色々勉強になった。俺が何処まで出来るかを知ることが出来た。2つ、彼奴等を捕まえられなかったのは悔やむな。俺が居なくてもお前達は失敗していた」

氷の中でもがくも、動けない風間さんは強く睨む。

通信の電波が何度も何度も波を打っているから急いで来いと言っているんだろう。だが、帰る手段を用意していないほど、私は馬鹿じゃない。

「3つ、また会おう」

『ゾーン、マキシマムドライブ!』

「!」

ゾーンのガイアメモリを使って、瞬間移動で帰る!

座標等がハッキリと分かっているのならば、三門市内の大抵の居場所には一瞬で行くことが出来る。何れはまたこのこの姿で会うことになるかと予告し、瞬間移動で自分の部屋の押入れに帰った。

「ん?」

今日の為に開けておいた押入れに帰ってくる事が出来たのだが、変身が解除された。

体に疲れや違和感は全く無い。マキシマムドライブ3連続で思ったよりもトリオンを使用しすぎたのかとスカルメモリを抜いてロストドライバーを外すと、ロストドライバーに極僅な切れ目が入れられている事に気付く。

「瞬間移動で体が消えるギリギリの直前を狙ってマンティス。」

いや、ギリギリの直前じゃないな。慢心している一番のところを狙い、偶然に当てられた。風間さんを倒すまでにガイアメモリを二つ使用したのなら、スカルメモリが刺さっているロストドライバーは怪しいとなる……はしやぎ過ぎたか……」

最後の最後でやらかし、詰めが甘い自分を私は思い知った。

風間隊相手に勝ったものの、ボーダーのトリガーでないもので勝利したので余り勝つたと喜べない。ベッドに寝転び、弱い自分を反省し、隣兒さんから受け取った札束が入った封筒を見る。今日からこれを何百倍にも増やさなければならぬ。サイドエフェクトを使えば大儲けできるのだが、1つだけ物凄くヤバいことをしなければ。

「母さん、首を縦に振ってくれるだろうか……」

今の私は17歳、新しい銀行口座の開設なんかは出来るがFXとか株になると話は別だ。

二十歳じゃないと出来ないとか出てくる。二十歳以上の誰かの名義を使えば簡単に出来るので……母さんに全ての真実を話さなければならぬ。

第29話

風間隊を撃退した翌日、ゾーンのガイアメモリで逃げたが足がついてしまったかと心配したが、そんな事は無かった。

外が雨で気持ちを切り替える為に出掛けることもできない私はドライバーを片手にロストドライバーのネジを外し、中身を確認する。

「あ〜……」

ロストドライバーの中身を確認しても余りわからない。

単純に理系じゃないからと言われればそこまでだが、一部の配線が切れていて機械部分に目立った損傷は見られない。配線が壊れるとか、家電あるあるだが、地味にこういうのがキツイ。

配線を入れ換えるには一度ロストドライバーを分解して、もう一度組み替えられないといけない。幸いにも、配線から出ている電磁波とかで何の素材で出来ているかが分かるから、ホームセンターとかに行けば買えると思うが……組み立てた際に使えなくなったんかはキツイ。如何にも重要なパーツが壊れましたとかは無いが若干機械部分は損傷している。

「大規模侵攻時は1月20日。」

その日にベルトを学校に持っていくとしても数が多すぎる。1度ゾーンで帰宅する方向だから……配線さえ入れ換えれば何回かは使用できるから、一先ずはそれとして」

「兄さん、大変だ!!」

「!」

ホームセンター辺りに行って配線を買に行こうと考えていると、修がドアをノックせずに入ってきた。

何時もならばノックしてくるのに、せずに入ってきた。心拍数や脳波が大きく乱れていて、慌てている。

「千佳、もしくは隣児さんか?」

「つ……兄さんも聞いたんだね」

自作自演と言われればそこまでだな。

今の滑稽な自分の姿に呆れるしかない私は着替えはじめる。

「修は止めようとしなかったのか?」

「僕は……」

なんだかんだで隣児さんについていこうとした修。

時折、自分の事を省みないところがあるのでその辺について一応聞いてみるも答えら

れない。

「私はトリガーくれと言われた」

「兄さんのトリガーを!？」

「修、何処に隊員がいるかわからない。耳だけを傾けろ」

そそくさと着替えて千佳の元へと向かう私達。

道中に私と麟児さんとの間にあったことを色々と教える。麟児さんが千佳経由で私がトリガーを隠し持っていることを知った。近界民の世界で生き抜くには必要だからと譲ってくれと頼まれた。私の持っているトリガーは使用者を選ぶ物で麟児さんは一つ適合しなかった。

「私は、行ったとしても無駄だと諦めさせようとした。

近界民の世界がアメリカ、ロシア、ドイツの様に沢山の国家で別れている可能性があったらと……とにかく、行くよりもボーダーに助けを求める。千佳が自分からじゃなく、周りから気付いて貰えるようにと色々とってはみたが……あの人の口は上手かった。すまん」

「謝らないでよ……僕だって最初は麟児さんについていこうとした。

兄さんから色々と聞いていたし、ボーダーからトリガーを盗ってきたならボーダーの誰かがトリガーを横流しした。そのボーダーの誰かから色々と聞いて兄さんが出した

説と照らし合わせれば説得させることが出来たかもしれない」

悪いのはお互い様だと自己嫌悪する私達。

本当に謝らなければならぬ人が待つ雨取家に辿り着くと二宮隊の面々がいた。

「おぼさん」

「ああ、貴虎くん！修くん！」

「中に……千佳に会つても構いませんか？」

二宮隊を無視し、今はまずは千佳に会わなければならぬ。

二ノさんが私達を見て何者かと考えるが二宮隊の面々とは親しくもない関係で、特に疑われたり怪しまれたりすることなく雨取家内に入ることが出来、ソファアに座っている千佳の元へと向かった。

「たか、虎さん、おさむ、くん。兄さんが、兄さんが……兄さんが、兄さんが」

「千佳!!」

私達の顔を見た途端、涙を流していく千佳。

隣児さんが居なくなつたと言おうとするが、言うことが出来ず、声が上手く出なくなっている。そんな千佳を前に修は直ぐに手を握った。私はそんな修と千佳を抱き締めた。

「ごめん、ごめん……」

「ごめんね……千佳」

今の私達に出来ることは謝ることだけで、なにも出来ない。

隣児さんをボーダーに通報する時間は、隙は確かにあったのにそれをしなかった。私と修は千佳が泣き止むまで側にいて、ずっとずっと謝った。許して貰えるなんて思っていないが。

千佳が泣き止んだのは十数分後で、心の底から泣いた為に疲れて眠ってしまい、これ以上は此処に居たらいけないと私も修も感じて、後日、改めて千佳の元に行くことを決める。

「修、鳴ってるぞ」

「うん……隣児さんから!」

家に帰る道中、修の携帯のメールの着信音が鳴る。

誰かと確認すると隣児さんからのメールで、落ち込んでいた修の目はクワッと開き素早く指を動かす。

【修、このメールは日時指定で明日つくように送っている。

このメールが届いてるってことは俺が帰らなかつたってことだ。騙してわらかつたな。でもやつぱりお前を連れていけないよ。

お前はマジメで正直すぎる。無理はしなくていい。

千佳のそばにいてやってくれ」

「……」

隣児さんから送られてきたメール。原作通りと言えば原作通りだ。

だが、原作通りであつてはならない。修の隣に居る私は隣児とそれなりに仲良くしており、千佳ともそれなりに仲が良い。頼れるお兄さんポジの筈だ。

「どうして、兄さんについて書いていないの？」

程好い距離感の関係なのに、メールには一切書かれていない事に修は直ぐに気付き隣児さんにトリガーをくれと言われた際になにかを言われ、それを語っていないと考えた。

「……私にはやらないといけないことが出来た。隣児さんが帰ってくる迄にずっとしておかなければならないことが」

「やらないといけないこと、それって」

「GWが開けないと出来ないことだ……お前は どうするんだ？」

隣児さんや千佳の友達、それに今まで拐われていった人達が帰って来た時に此方の世界で生きることが出来る環境を作る為にも金を貯める。

サイドエフェクトを使い、株やFXで出来るだけ金を貯める。宝くじの方がなにかと手っ取り早いが、当てまくなるとなにかがあるか分からないから多少の税金が掛かっても良

いからそつちで稼ぐ。

「僕は……」

携帯をジツと見つめ、これから自分がなにをすべきかと考える修。

「……今更、こんな事を言うのはダメかもしれないが、麟児さんがやったことは無駄でしか無いことだ」

「なっ!?!」

そんな修の最初の一步を踏み出させる為に私は嫌われるの覚悟で爆弾発言をする。

麟児さんがやったことは無駄でしか無い。近界民の世界は無数にあるのだから、当然と言えば当然だ。アフトラトルを味方につけましたーとなっても千佳が襲われる未来は変わらない。

と言うよりは襲われる原因とかを調べようとしなかったのだろうかあの人は。鳩原未来から横流しして貰える関係性ならば、近界民はなにをしにこの世界にやって来るのか聞く機会はあるし、トリガーを使う過程でトリオンの説明は聞くはずだ。

「今、こうやって私達が家に帰っている間にも近界民はやって来ている。」

そしてそれをボーダーが倒す。そんな状況がなんやかんやで三年以上も続いている……ボーダー隊員にカマを掛けて、近界民の世界に行ったことあるかどうか確認するとあっさりとボロを出した。ボーダーは何度か近界民の世界に行ったことがある」

「そんな、じゃあ麟児さんは!!」

「あの人は拐われた誰かを助けに行くんじゃないかと、千佳が襲われない様にいった……けど、今日も何処かから近界民が出て来ているのなら、それは無駄でしかなかった」

そしてそんな無駄な事をしようとしている人を止められたのに、止められなかった私は誰よりも愚か者だ。

これから先、第2の人生が終わるまで延々と背負い続ける罪であり、悲しませた千佳には謝り続けるが許しを乞うつもりはない。

「修、私は越えてはならない一線を越えなければなにも言わない。」

お前がそうしたいと言うならば、したいように母さんの説得も手伝う……だから、自分がなにかしたいかを考えてくれ。

するべきじゃなくて、自分からしたいと思えることを……千佳の事は心配するな。いざと言う時はなんの迷いもなく変身して守る」

だから、本当に自分からしたいと思えることを考えるんだ。

「自分がしたいと思ったこと……」

修の最初の一步を踏み出す為に私は背中を押す言葉を贈る。麟児さんについては会話をせず、居なくなつた今からなにをはじめるのかを考えさせる。

麟児さんは居なくなつた。これは紛れもない事実であり、その事についてああだこうだと言ひ合つても無駄だ。麟児さんはもういない。だから、どうするかを考えなければならぬ。帰つてくるのを待つのか、ボーダーに眞実を話すのか、ボーダーに入るのか、なにをするのか決めるのは修だ。

「はい……はい」

「母さん、ただいま」

「誰と電話してゐるの？」

帰路では答えは出ず、家へと帰ると母さん何処かに電話をしていた。

修は誰に電話をと聞かすが、私には飛んでいる電波から誰と電話をしているのかわかる。雨取家の家電から電話をしている。

「修、貴虎、千佳ちゃんと次は何時会うの？」

「僕は千佳さえ良ければ何時でも会えるよ」

「私の方も、同じだよ……」

「そう……はい、そちらが良ければ何時でも可能です……はい、分かりました」

母さんは電話を切つた。

「……一日あげるわ。だから、それまでに纏めて来なさい」

「母さん、エスパーかなにかなの？」

電話を切り数秒間、私達を見つめた後に時間を与えてくれた。

まだなにも言っていないのに、私達がなにか考えていることを見抜いた。

「何年貴方達の親をやっていると思ってるの？」

家を出る前と出てからの少しの間でそんなに顔が変わったのなら、なにかあるぐらい誰でも気付くわよ」

「……」

修と顔を見合って、表情が変わったのかと確かめ合う。

表情筋が死んでいる母から生まれた私と修。修が大爆笑をしている姿を試しに想像してみるも、冷や汗をかいてメガネをクイッとさせている修の姿が浮かぶ。大爆笑をしている修が全くといって浮かばない。いや、笑っている姿を想像しろと言われれば出来るが米屋や出水みたいな大爆笑をしている姿は浮かばない。馬鹿二人並に爆笑する弟は見たくないから、それはそれで良いんだけども。

「ごめん、兄さん。」

微笑んでいる兄さんなら浮かぶけど、お腹を抱えて表情が変わるほど爆笑している兄

さんは……」

「謝ることはない、私もだ」

「今、暗い状態なのになんで二人揃って笑っている前提なの？……兄弟だからかしら？」

父さんになら勝てそうだが、この人には絶対に敵わないと改めて思い知らされる。

本当にこの母はなんなんだろう……通常攻撃が全体攻撃で二回攻撃で尚且つ攻撃する度に相手のMPを10/1減らし、ランダムで攻撃、特殊攻撃、防御、特殊防御のどれかが5%上がる（強化無効無効で3ターンで解除）お母さん？

「くだらないことを考えている暇があるなら、足を洗いなさい」

何でもかんでもお見通しの母さんにケツを叩かれ、火を付けられた私達。

雨で濡れた足を洗うと自分の部屋に戻り、投資をするのに必要な情報やそれ様の口座を開設するのに良い銀行は無いかと探す。

「最初の種火もとい頭金は1000万。」

過去に芸人とかが300000から数億稼げましたとかいう体験談はあるが、余り信用できない。

失敗談を幾つか揃えてから、成功談を語っておかないと……競艇の実績はあるから、失敗することは無いとして……：……ゴールが見えないな」

元々は母さんを説得しようとする程度は考えていた事で、株やFXなんかで小遣い稼ぎしましょうと言われる時代。

情報はあつさりで見つかるのだが、実際問題何処まで稼げば良いのかが分からない。金はあるに越したことは無いのだが、どれだけとハッキリしていないのはまずい。

勉強する環境を作るのならば、場所と教材と教師になる人が必要になる。場所は一度買えば買い直ししなくても良い。教材は数年に一度のペースで買い換えれば良い。麟児さんを含めた教師には月1で給料を出す。

「いや、()までなるともう国が支援するな」

1から10まで全部自分でやろうとしている事に気付き、これはやりすぎだと手を止める。

なんでもかんでも1人でやるもんじゃない。一部は国やボーダーに任せないといけない。特に勉強をみてくれる教師はボーダーに必要だ。防衛任務で授業に出られないなら、その穴埋めをする人材は居なければならぬ。ボーダーが雇った人に勉強を見て貰える様にすれば良い。汚い話だが金を弾めば喜んでするはずだ。

「兄さん、ちよつと良いかな?」

「……ついさつき、お前のやることを否定しないし頑張れと背中を押すと言ってしまった以上は耳は貸す」

ある程度の情報が纏まり、母さんにどう説明するか文章を作っていると修が相談しに来た。

手にはボーダーに入ろう!と爽やかスマイルの嵐山さんの写真と共に描かれているボーダーPRの用紙が握られていた。なにを言いたいのか分かるのだが、そこは自分で

やるものだとか突っぱねようと思えるが、さつき言ったことを嘘にするわけにはいかなないと耳を貸す。

「僕が、ボーダーに入りたいて言ったら」

「却下、危険すぎる。今になってどうして入りたいて言うの？」

近界民から街や私達を守ろうとしているボーダーは悪い組織ではないけれども、良い組織とも言えないのよ？ 貴虎がトリガーをボーダーに渡さないと聞いた時に色々聞いたでしょ。それがあっているかどうかは別として、貴虎はその事を聞いて納得してボーダーになにも言っていないわよね？ いざという時には貴虎が拾ったトリガーを使うんでしょ？ だったら、わざわざボーダーに入る必要は無いわ……とか、言われるぞ」

「だよ、ね……」

ボーダーに入りたいと決心をした修。

ボーダーに入るには母さんのサインが必要だ。母さんに弱い父さんは母さんの説得に成功すればいけるが、問題は母さんで、母さんは感情論では通じない。○○だからダメとハッキリと言う。

「だが、デメリットはなんにでも付き物だ」

「？」

「例えば父さんがやっている橋建設だってそうだ。」

実際に現場に向いて、ちゃんと作れているのかと作業している危険な所に足を踏み入れる。命綱があるとはいえ、危険な事で下手をすれば死ぬ。他にも球技の中でも絶対に死人が出ないだろうと思える卓球ですら死人が出る」

「た、卓球で!?!」

「そこ驚くのは今じゃないぞ。」

とにかく、どんなものにもメリットとデメリットがある。車だつて油断すれば死に繋がるデメリットがあるが、その代わりにメリットが大きい。だから、皆使う……悪い部分を否定したりせずに認めて受け入れた上で、良い部分を紹介する……母さんを納得させるにはそれが出来ないと思ふだと思ふ」

「悪い部分を認めて、その上で良い部分を……ありがとう、兄さん」

「そうか」

本当に極々普通の事を言っただけだが、これでなにかが変わったのなら良かつたことだ。

修が自分の部屋に戻ると私は自分のすべきことを再開したものの、思ったよりも苦戦してしまい徹夜をしてしまったものの、なんとか開設したい銀行口座の情報等を纏めることが出来た。

「母さん、僕はボーダーに入りたい」

「ダメよ」

まともな睡眠をせず、次の日を迎えた私と違ってぐっすりと眠れた修は先に母さんと話し合い、ボーダーに入りたい意志を見せて試験を受けるのに必要な書類（保護者のサインが必要な所以外は記入済み）を出したが、即座にダメと言われた。

だが、ダメと言われることは最初から分かっていた修は試験を受けるのに必要な書類とは別にノートを取り出した。

第30話

「私は反対よ。」

大体、どうして今頃になって入ろうと言うの？ 貴虎がトリガーを拾って帰った時に、ボーダーに提出しようって貴方は何度も何度も言って、最終的には貴虎の言葉に折れたわよね？ いざという時は、そのトリガーを使って戦って逃げるって言ったわよね？」

昔の発言を掘り下げてきた母さん。

私がトリガーを持っていて、それをボーダーに通報していない。いざというときは自分がそのトリガーを使う。そういう感じに納まった当時のことを出されるとぐうの音も出ない。気が変わったなんて言ったらグーが飛んできそうさ。

「確かに、僕はあの時そう言ったし納得もしたよ。」

だから、兄さんについてはなにも言わないし頼らないつもりだよ」

「そう……それで？」

「それでって」

「貴虎に頼らないつもりなのは分かったわ。」

それは良いことだけれど、それだけよ。ボーダーに入りたい理由を、入ってなにがし

たいか聞いてないわよ？少なくとも、私はボーダーに対して余り良い感情を持ってないわ」

「……母さん、割と」

「お前は黙ってる」

「あ、すみません」

電磁波から見るに修の口から修の意志を聞ければ、首を縦に振るつもり之母さん。わざわざ修に理由を教えてと聞いた。

ちゃんと向かい合って話し合いをすれば割と墮ちるものだなと母さんの修に対するチヨロさを改めて知る。

「千佳ちゃんを守るなら、貴虎でも出来るわ。いえ、むしろ貴虎の方が向いているわ。」

このボーダーの書類、戦う人を採用するかどうかの試験を申し込む書類よね？だったら、尚更反対よ」

「体育の成績が悪い僕が戦うだなんてクラスメートが聞いても笑うだけだ。けど、僕は戦いたいから入りたくないんじゃない。守りたいから入りたくないんだ」

「結果的には戦っているじゃない。」

「どんな言葉で隠していても貴方は戦場に出て戦うことには変わり無いはずよ」

「母さん、名探偵とヒーローって聞いてどう思う？」

「名探偵にヒーロー？」

名探偵とヒーロー……随分と分かりやすい一例を出したな。だけど、修らしいと言え
ばらしい……のか？

「名探偵は殺人事件を推理する、ヒーローは悪い敵をやつつける。」

どっちも凄い存在だと思う……けど、本当はどっちも居ちやいけないんだ。殺人事件
は起きちやいけないし、悪い敵もやつつけるんじやなくて捕まえたり、悪いことをさせ
ないようにしたりしなければならぬ」

「ええ、そうね……」

「僕は兄さんから、色々とボーダーについて不満に思ってることを聞いた。」

それを聞いて成る程と納得出来る自分がある。それはつまり、まだまだボーダーに改
善する余地はある。僕は事件が起きて解決するヒーローじゃなくて、事件を起こさない
人になりたい」

「そう。起きる前に未然に防ぐ、その心意気は立派ね。でも、それが無理な事ぐらい理解
してるわよね？」

こういう比較は良くないことだけれど、ボーダーには貴方より立派な人達が何人もい
るはずよ？それでも今こんな状況なのだから、貴方一人が入ったとしてもなにか変わる
のかしら？なにもしないよりはましなんて曖昧な理由は無いわよね？」

修の言っていることを真っ向から振じ伏せていく母さん。

ぶっちゃければ、修のお陰で大きく変わったりするのだがそれは未来を知っているものの特権なので、それに関してはなにも言えないので言わない。下手な事は言えないし、その事を言う母さんを説得させるのが修がやらないといけないことだ。

「もう一度聞いわ。ボーダーに入って、なにがしたいの？」

「兄さんの持っているトリガーは近界民と戦うことが出来るけれど、近界民から街を守ることは出来ない」

私の持っているトリガーが話題に出ると母さんがチラリと視線を向けてくるので修の様には冷や汗をかく。

飛び火してきた……だが、言っていることは間違いない。私の持つてゐるT2ガイアメモリ以外の戦闘系の転生特典、文字通り戦闘に使うもので他に成り立不出来るかどうかとか聞かれて特にピンと浮かばない。

「ボーダーに入って、千佳を守りたい。麟児さんの行方を知りたい」

「そう……わかったわ」

修の気持ちを理解してくれた母さん。

入隊試験の申し込み表にサインをしてくれれると思ったのだが、サインはしてくれず次に私の方を見る。

「貴虎の番よ」

「私は、銀行口座の開設をしたい……正確に言えば、これを使う母さん名義の銀行口座が欲しい」

サインは後だと次は私の番が来た。

先ずはと銀行口座に振り込む麟児さんから受け取った約100万の札束が入った封筒を差し出すと母さんは中身を確認し、本物かどうか確かめる。

「また勝手に宝くじを買って勝ったの？」

「いや、麟児さんから受け取った」

「なっ!?!……兄さん、それどういふこと!?!」

「母さん……今から言うことを、出来たら内密にして欲しい。」

いずれはバレるのは分かっているけど、それでも出来る限りは誰にも言わないで……」

麟児さんの事を出すと驚く修だが、母さんは余り驚く姿を見せない。

金の出所がなんとなく分かっていた様で、麟児さんが昭和の日に家に修でなく私に用事でやって来た日について大まかに語ると私も修も椅子から立たされて並ばされ

「っー」

強烈なビンタをされた……修だけが。

私は一切の迷いなく頬をグーで殴り飛ばされ、母さんは冷たい目で口を開く。

「この程度の事で痛いなんて言わないわよね？」

もつともつと痛くて苦しい思いをしている子がいて、その子に苦しくて痛い思いをさせているのだから」

「はっ……」

「正座しなさい」

物凄く怒られることをした、殴られて当然で、痛いことはされていない。

自分にそう言い聞かせながら床に正座をし、母さんに見下ろされながらも色々考えるが、この事で修のボーダーの試験に受けるの無しになったかもしれないと少しだけ焦る。

「それで、このお金をどうしたいの？」

長時間の説教をくらうのを覚悟していたら、意外な一言が出てきた。

「話を、聞いてくれるの？」

問答無用でダメかと思つたが、話を聞いてくれる母さん。

本当に怒らないといけない子がいるから、自分がこれ以上は怒るつもりは無い。もし千佳ちゃんが妹だったり、修や貴虎が拐われたのなら自分もそうしたかもしれないから攻めれないともう一発拳骨をくらって隣児さんを見逃したことに關しては納まった。

割と痛かったが、泣くなと怒られる。

「このお金を元に、何十倍にも増やしたい。増やしたお金を過去に連れ去られた人達がこつちの世界で暮らせる復興支援に使いたい」

「……隣児くんのお金でやる必要はあるの？」

「隣児さんが帰って来た時に、隣児さんには復興支援の……連れ去られた子達の勉強を見る教師をしてくれて言つてある。もうそれに関して隣児さんも首を縦に振つた」
「そう……でも、隣児くんを教師に出来る保証はあるのかしら？」

少なくとも、連れ去られた子達の社会復帰の復興支援は国がしてくれると思うわよ？
彼は中学レベルも教えられるけれど、ちゃんとした教師じゃないのは知つてるでしょ？
国の方がベテランのちゃんとした教師なんかを用意する筈よ？」

「なにも隣児さんだけを教師にしろつて言つてるんじゃない。隣児さんも教師にしろつてボーダーに言うつもりなんだ」

「ボーダーに？」

私があくまでも金を出すのはボーダーで、国に直接渡すつもりはない。

こんな御時世に国に金を渡せばワケわからないノーパンしゃぶしゃぶの費用とかに使われる可能性がある。横領だけは絶対にされたくはない。

「国一つ変われば、文化や生活様式が大きく変わるよね？」

「ええ。海外に行くことの多い父あの人さんも何度かそれに驚いているわ」

「それなら世界一つ変われば、文化や生活様式が大きく変わる。」

少なくともボーダーが出来てから誰かが拐われましたなんて私は一度も聞いたことはない。

四年前の侵攻で誰かが近界民の世界に連れ去られた以来、そういつたことは起こってないと思つてる……四年前のあの侵攻で拐われた人達は、色々と変わつてると思う。拐われた人達の割合で言えば小中学生が多い。生きていて順応していたら、色々と変わつてる。それこそ常識も」

「常識が変わつたとして、それを教える人もいるわよ？」

「問題はその常識だよ」

ベテランの教師なんかがやつて来るのは分かっているけれど、常識を教える人に関しては割と来れない。

常識に関してはボーダーは徹底しておかなければならない。アフトラトルに拐われたC級はまだ大丈夫だが、四年前に拐われた人達は別だ。

「近界民の世界と、日本とじゃ大きく常識が異なる。」

それこそ近界民の世界の住人なら誰でも知つてる様な事を、日本の住人じゃ知らないことを」

「それは当然よ。けど、それになんの問題があるの?」

「多分、と言うか確実に拐われた人達を助け出した後の復興支援にボーダーが深く関わってくる。」

ボーダーのB級隊員なら誰でも知ってる事とかと近界民の世界じゃ常識的な事は一致していると思う」

「根拠はあるのかしら?」

「母さん、私の目が良すぎる事を知ってるよね?」

私は間違いなく修の兄で母さんと父さんから生まれた子供だ。それなのに何故かマサイ族並に視力が良い。

マサイ族は自然豊かな生活環境で育っているからあの視力で都会育ちのマサイ族なんかは視力は平均的な物だ。父さんも修もメガネで、母さんの血を濃く継いでいても視力1.0は異常だ。

ボーダーで精鋭のA級の隊に所属している友人にその事について特に気にせず教えたんだけど、その時にサイドエフエクトって溢した。ボーダーは私の視力がどうして異常な迄に良いのかの理由を知っている。それこそ、エンジニアでも医者でもなんでもない隊員の人でも。私はサイドエフエクトとやらがなにかは知らないけど、ボーダー隊員の友人はそれを言っただけじゃないことだと別の友人の口を塞ごうとしていた」

「つまり、ボーダーでは常識な事は近界民の世界でも常識な事……そう言いたいよね？」
「全部が全部じゃないけれど、そうだと思っっている」

トリオンとかサイドエフェクトとか黒トリガーとかはボーダーでも近界民の世界でも常識的な用語だ。

だけど、それは無闇矢鱈に口外してはいけないものだ。トリオンなんて電気に成り変わるエネルギーを悪用したらまずいし、黒トリガーは命を代価に作る物で、作れば良いなレベルの代物。普段から襲ってくる近界民はロボットで、近界民の世界にちゃんと人間がいましたと世間に報じれば確実に大変な事になる。

「口封じの為にも深く関与してくる。」

別にそれ自体がダメだと私は否定するつもりは無い。何でもかんでも喋れば良いものじゃないのは分かっている。

増やしたお金を修を經由してボーダーに渡して、これで復興支援の資金にしてくださいと言つて隣児さんも教師にしてくださいと言つつもりだ。

四年前に拐われた人達をボーダーは入隊させようとする。

勿論、保護者から反対されれば手を引くと思うけれどもその保護者が居なくなっている身寄りの無い奴等は入隊させると思う。向こうの世界の事を知っていて、戦い馴れている。1月、5月、9月、年に三回の入隊をさせるぐらいに人材不足なボーダーにとつ

ては即戦力になる逸材だと思っている。だったら、国に直接渡すんじゃないかと間にボーダーを挟む」

「貴方以外にも数億出す復興支援者は居ないとは言えないのよ？ましては、それに関しては国がなんらかの関与をするわ。」

向こうと此方の事情を知っている麟児くんが教師をすると言うのは良い点だけれど、大分どころかかなり甘い見通しじゃないかしら？」

流石と言うべきか一筋縄ではないかない母さん。

麟児さんが働く利点はあるけれども、それだけで出来るかどうか怪しい。金だけ貰って終了どころか金すら貰わない恐れがある。

「麟児さんには防衛任務で授業に出ることが出来なかつた学生隊員にも勉強を教える役目をして貰うつもりだよ」

本人には特に了承はしていないけれども、手遅れな馬鹿達の勉強を見る役割もしてもらう。

前々から愚痴っているボーダーの隊員が防衛任務で授業を休むので、どう頑張っても普通の生徒と遅れることを説明し、米屋という手遅れな馬鹿を話に出して、国や復興支援団体が用意する教師とは別にボーダー側で教師を雇わなければならぬと思ってしまうことと、その教師も麟児さんにやってもらうことを伝える。

「修、貴虎……貴方達の言いたいこととしたいことは分かったわ。だから、少し待っていなさい」

「？」

「正座を崩したらこの話は無かったことにするわよ」

開設する銀行口座等の説明も一通り終えた。

母さんから出ている脳波や電磁波は修が母さんを説得しようとしていた時と同じで、穏やかな感じでした承してくれたと思うのだが、母さんはまだ修の書類にも私の方にもサインもなにもしないまま家を出た。

「……言えるだけの事は言ったよね？」

「分からない……自分でもなに言ってるんだかわけわからなくなった」

母さんを前にして、圧が掛からない人は草々にいない。

自分でもなに言ってるか分からない。どうしてあの時に変な事を言ってしまったんだと修と反省会を開くのだがものの数分で母さんは帰って来た。

「子供の成長は、早いものね。貴方達は二人でちょうど一人前だったのに、気付けば一人で一人前になろうとしている」

手にビニール袋を持っている母さん。

何処かに買い物に行ってたようで、ビニール袋からはなんの変哲もない極々普通の

オーラが出ているので何処にでもあるものが入っているのだが、夕飯の材料とかそんな感じの物じゃない。

「自分からなにかをやらないけど、それに必要な能力を持っている貴虎、自分からなにかをやるうとするけれども、それに必要な能力を持っていない修。二人でちようど自分からなにかをしようとし、それに必要な能力を持った一人前になる……けど、今はもう違うのね」

「僕も、兄さんもやりたいことが出来たよ」

「修、それがどう言うことか分かっているの？」

私達の成長を感じている筈なのに、修のボーダーの試験を受ける受けないの話の雲行きが怪しくなつていつている。

「コレにサインするには幾つか条件があるわ」

「幾つかの条件……」

ゴクリと息を飲み込む修。

とんでもない無茶を言ってくるんじゃないかと思つたが、そこまでじゃなかった。

ボーダー関係では基本的に私には頼つてはいけなないと、私経由でボーダーの人を紹介してもらうとかそういう感じのやつはダメだと。

やるからにはちゃんと自分の力で人脈を作つたりしろと、私と修はゴールは同じかも

しれないが違う道を歩むのだから今までの様に色々頼るなど、仮に頼るとしてもどうしようもないと思っただけで、私も進んで修にヒントを与えるなど厳しく釘を刺される。

コレに関しては釘を刺されてよかったと思う。修が本当の意味で成長するには答えを知っている私が横からああだこうだと言うのはいけないし、修の人徳なら放置してても知り合いが増えるから、私経由なんてしなくても良い。

「貴虎の話聞く限りだと、真つ昼間から防衛任務もありえるのよね？赤点を取ったらその時点でやめさせるわ」

二つ目も納得のいくものだった。

授業があるけど、防衛任務を理由に早退するのは母さんもあんまり良くないことだと思っており、成績を落とすなどは言わないが、赤点だけはダメとなる。これもボーダー関係なので、遅れた分の勉強を教える事はダメだと母さんに言われる。だが、余り心配することは無い。修は物凄く頭が良いわけではないが普通校基準では高成績で、修自身がテスト前とか関係なく自主的に勉強するタイプなので心配は特にない。

「それとこれが最後の条件……」

スツと私にビニール袋を差し出すので受け取った。

「えっと……!?!」

中身を確認すると膨らませていない紙風船（50個入り）と柔らかい素材で出来ている剣が入っていた。

ボーダーに入るか入らないかの話で、母さんが出す条件、そしてこの二つの品で母さんがなにを言いたいのか直ぐに全てが繋がった。

「貴虎はなにかをするのに必要な能力はあつたけれど、やる気は無かつた。そんな貴虎がやりたいことを見つけた。

なら、それを否定することはしないわ。けど、こう言った差別をするのは苦しいけれど、修は自分がやりたいことを成し遂げるのに必要な能力を持っていない。これから先、貴虎と目指す場所は同じでも歩む道は大きく異なる……だから、自分は一人前だと貴虎に勝つて証明しなさい」

「なっ!?!……僕が、兄さんに……」

最後の条件は、自分は一人前だと証明すること。

私は頭に、修は体の好きなどころに紙風船を付けて柔らかい素材で出来た剣で割るといふ勝負をし、私に勝つ。どれだけ負けても構わない。GW以内に1度でも私に勝利をすれば良いという一見すれば破格の条件かもしれないが、修にとっては一番の難題な条件を突き付けられた。

第31話

ボーダーの入隊試験を受ける為に申込用紙にサインを書いてもらう為に出された3つ目の条件、兄である貴虎に勝つこと。その条件を出された兄弟は家を出て近所の公園へと足を運んだ。

「ふー……修、その」

「メガネを外してよ」

紙風船を膨らませ、浮かない顔をする貴虎。

今から修と紙風船を柔らかい素材で出来た玩具の剣で割りあつて勝負をするのだが、勝負をする前から分かつていた。どう頑張つても勝てないと。

力技や技術、素早さで勝負するのでなく与えられた手札を見て知恵と工夫で戦うタイプの修は地力が低い。対する貴虎は地力が高く考えるタイプで、力によるゴリ押しに弱い。

運動能力が向上しているトリオン体でなく生身の肉体と変形もなにもしない玩具の剣だけでは知恵や工夫を凝らしても限界が直ぐに来る。メガネを付けたままでも勝ると確信しているのだが、修は伊達メガネを外すことを要求してきた。

「僕が自分でしたいとやりたいと思つたことを、ちゃんと成し遂げるには兄さんに勝たないといけない」

「そうか……」

3つ目の条件を言われた当初は戸惑っていたが、これから先は貴虎に頼つてはいけな
いと、頼るばかりじゃダメだと気持ち切り替えた修。貴虎はそんな修を見て成長を感
じたのだが、少しばかり心残りがあり頭に紙風船を乗せた後、剣を握らずに修に近寄る。

「最初はグー!!じゃんけん、ポン!!」

「え、あ?」

「よし、私の勝ちだ」

なんの前触れもなくじゃんけんをする貴虎に咄嗟に反応してしまつた修。

結果は修のパーが貴虎のチョキに負けており、貴虎の勝ちだったが貴虎は手を休めな
い。

「あっち向いて……ホイ!」

そのままあっち向いてホイに移行し、それにも反応した修はあっち向いてホイにも負
けた。

「よし、まずは1／12だ」

「兄さん、なにを」

「はい、じゃんけん、ホイ!!」

あっち向いてホイにも負けたものの、これは母さんから出された条件でもなんでもない。兄さんはなにをしようとしているのか聞こうとするのだが、貴虎は答えない。それどころかまたじゃんけんを始めようとしており、修は渋々承諾。

「じゃんけん、ホイ! あっち向いてホイ!」

幼稚園児ですら知っているじゃんけんとあっち向いてホイ。

特に難しいルールでもなんでもなく、思考を張り巡らせるわけでもなく修は貴虎に付き合うのだが、結果は10戦0勝10負けで、一度のあいこもなかった。

「じゃんけん」

「兄さん、いい加減にしてよ!!」

11戦目に入ろうとした時、修は怒った。

兄を越えなければならぬと気持ちを引き締め、覚悟を決めていたのに気付けば貴虎に振り回されている。

「ああ、そうだな。ちゃんと勝負をしないと」

誰のせいでもない出来なかったと思ってるんだ。

真面目な顔になった貴虎に文句を言おうとするのだが、その前に貴虎は口を開いた。

「61, 917, 364, 224だ」

11桁の数字を言った。

「？」

「じゃんけんしてあいこなしで一発で勝利し、そのままあっち向いてホイをして勝つ確率が1/12だ。そしてついさつき私はそれを10連続、単純計算で12を10乗した。それが61, 917, 364, 224だ」

「なっ!？」

聞いた時はなにを言っているか分からなかったが、意味を知れば驚き冷や汗を流すしかなかった。

偶然、たまたま、そんな事で片付ける事は出来ない。貴虎の事をよく知っている修は、狙って10連勝をしたのだと直ぐに気づき、10連勝の一番の要因はサイドエフェクトで強化された（修本人は何故か無駄に目が良いぐらいの認識）動体視力で自分の手や首を動きを完全に見切ってから動く一種の後出しの権利を使ったことにあると理解する。

「やるぞ」

メガネを外した貴虎は右手で柔らかい素材の剣を持ち、左手を腰の裏に当てた。

「言つとくが、手を抜いているわけじゃないぞ。」

メロンもとい盾を左手に持っているのが私の標準的なスタイルだ。無いからこうしている」

右半身を前に、左半身を後ろにする、ちよつと斜めにそらす風に向きを変える貴虎。

剣道の様に両手で柔らかい素材の剣を持っている自分とは大違いで本気で倒しに来ると感じ、そうなるをついさつき言った、61, 917, 364, 224は自分の凄さを分かりやすく教えるための事で、自分の萎縮を狙っているんじゃないかと考える。

「どうした、掛かってこないのか？」

「……兄さんこそ、掛かってこないの？僕の紙風船は背中にあるよ」

サイドエフェクトのお陰で強化された視力で相手の動きを完全に見切つてから行動することが出来る貴虎を前に運動能力が低い修は真正面から挑まない。

貴虎の売りは目で全てを見切ることと常軌を逸した手先の器用さで、弱点は数による暴力や物凄く早いとかのシンブルな強さ。

全てを見切ることが出来る目があったとしても、出水や二宮の様なトリオン量がトツプクラスの奴等によるアステロイドやハウンドの集中砲火の様に見切れても避けるのは不可能な物には弱い。まあ、そう言うのはそう言うので別の方法で防げば良いと言うのは知っているが。

「まあ、そうなるか」

修は自分の事をよく知っているから、真正面から考えなしに挑まない。

時間制限はあるが無限に近いコンティニューが出来るとはいえ、無闇矢鱈と挑むもの

でないと受けの体勢を貫く。

お前がそのつもりならと我慢比べをしようとするが、我慢比べで修に勝てると思うほど慢心をしていない貴虎は自ら攻めにいく。

「そう言えば1つだけ確認をし忘れたな。」

風船をこの柔らかい素材の剣で割る以外は基本的になんでもありだな！」

「なっ!？」

三度流れる修の冷や汗。

なんとかして背後に回り込む等といった事は一切せずに真正面から突っ込んできて、ルールの確認をする貴虎に驚いたが、それならばと柔らかい素材で出来た剣を振り下ろすのだが、避けられる。

「先ずは体格差を理解しろ。」

私と修の間にある身長差は約10センチ、そこまでじゃない様に見えて割とある。振り下ろすはともかく、突いたり横に風ぎ払うには、どうあがいても上向きになる」

簡単に雑な説明をしながら、更に間合いを詰めた貴虎は修の二の腕を掴んで引つ張り、バランスを崩させた隙を突いて、自分よりちよつと後ろにいる修の背中にある紙風船に一撃を入れて割る。

「ボーダーでは剣を使って戦闘したりするが、ただ単に素手よりも刃物や重火器なんか

が強いだけでこう言うことをしてはいけないうや、する必要が無いなんてことはないぞ」
「剣を使う以外にも、攻める方法……」

壊すのは剣でないとダメだが、それ以外はなにをしても問題ない。

視野が狭まりかけていた修は敗北を糧にし、剣を使って攻める以外の攻め方を考え始め、1つ良い案を浮かべたので紙風船を背中に付けてもう一度挑む。

「紙風船を割って良いのは、玩具の剣だけならそれを使えなくすれば……」

今度は自分から貴虎に突っ込んでいく修。

狙いは貴虎の頭にある紙風船ではなく、右手に持っている玩具の剣であり自分の持っている玩具の剣で叩きに行った。

「本物じゃなくて、柔らかい素材で出来て——」

「とったー！」

本物の剣ならば唾競り合いになるが柔らかい素材で出来ているから、直ぐにへんよつと曲がる。

貴虎の持っている剣も修の剣もへんよつと曲がったのだが修はそれを狙っており、両手で握っていた柔らかい素材の剣を左手でだけで持ち、空いた右手で貴虎の右手の首を掴んだ。

「良い考えだが、地力が違いすぎるぞー！」

「うわあ!?!」

修の背中に紙風船はある。それを割るにはどうやっても背後を突かなければならぬ。
い。

貴虎は両手でなく片手で持っているので右手を抑えて、動きを少し封じている数秒の隙を突こうとしたのだが貴虎は掴まれた右手を引つ張りあげた。

「さっきのよりは悪くはないが、ここう言うのは失敗する可能性が高い。次だ」

引つ張られ、バランスを崩した修の背中の風船を割った。

「まだやるな?」

「まだまだやるよ!」

「そうか。足払いとか足に紙風船をつけるとか自分で紙風船を抱え込むとか、やれることは色々あるぞ」

「!」

まだまだ自分でもやれることを教えられた。

足払いや腕に風船を抱え込む作戦を考えていた修は貴虎にはそれらの対処法を既に
あることが分かる。

「タイム、兄さんタイム」

このまま挑んでも無駄だと修はタイムを取った。貴虎は10分間だけならと許可す

る。

「どうすれば……」

相手の動きを完全に見切る目、見切った動きを回避する身体能力、180cmを越える日本人基準では恵まれた体格、零式サブや手塚ゾーンをも可能とする化物染みた手先の器用さ、敵になつてはじめて分かる兄の恐ろしさ。

攻略しようとする策を巡らせようにも、貴虎は自分が負ける可能性すらも想定しており、どうすればその未来を回避する事が出来るのかも考えている。故に修が紙風船を抱え込んで、自らの肉体を盾にして突撃するという数少ない貴虎に勝てた作戦も対処法が生まれている。

「よお、そのメガネくん」

どうすれば貴虎に勝てるかと悩み、答えが出ないその時、蓮乃辺市に用事で出掛けた出水が通りかかった。

「僕、ですか?」

「そうそう、君だよ君。おれは出水、出水公平。あそこの……あれ?今日はメガネ付けてねえな」

「兄さんの知り合いですか?」

「うっそだろ、メガネくん、アイツの弟なの!」

貴虎も修も周りをみていないのと気にしていないのだが、中学生と高校生（老け顔）が紙風船を体に付けて柔らかい素材で出来た剣でシバきあつてるとなれば、公園もざわつき何事かと野次馬根性を見せてやって来た出水。貴虎と戦っている修が、貴虎の弟だと分かるど驚いて何度も遠くにいる貴虎と見比べる。

「似てな……いや、似てるのか？」

「似てるようで似てない、似てないようで似てる絶妙な距離感だとよく言われます」

「あく確かにそうだな。ところで、さっきからなにやってんだ？」

兄弟だけど見た目がの話はさておいて、なにをやっていいのか聞く出水。

修はボーダーの入隊試験を受ける為に等を濁し、母親からあるサインを貰うための条件として兄と戦っていることを教える。修が若干ボーダーの入隊試験関連を濁しているのだなんのサインなのかは分からないが、大変だなと貴虎を見る。

「……よし、メガネくんに力を貸してやるぜ」

「え!？」

突然の出水の提案に驚く修。

「な〜に、ちよつとアイツに恨みがあつてな」

「恨み？」

「あの野郎、新年早々にあつたイベントにおれを誘いやがらなかつた。」

槍バカとか宇佐美とか誘って、マジで勝てるチーム編成にしたかったみたいだな……」

何時ぞやの事を思い出す出水。

誘われなかった理由が使い物にならないからというシンプルすぎる理由が割と心に傷をつけており、此処等で貴虎に勝ってやると企む。

「ま、待つてください！

協力してくれるのは嬉しいんですが、一対一の勝負で出水さんの力を借りるわけには」

「おれが直接手をくださるのはズルなぐらいは分かってるよ。

おれがメガネくんに貸すのは腕こぶしじゃなくて知恵こころだよ。」

人差し指でこめかみをとんとんと叩く出水。

修の代わりに戦うことは出来なくとも、修の代わりに考えることは出来、ボーダーで培ってきた経験を生かそうとする。

「修、10分たった……それとお前、この辺じやないのに何故いる？」

「用事で蓮乃辺市に行ってたんだよ。それよりも、面白そうな事をしてるじゃねえか」

「……手は出すなよ」

「ああ、手は出さねえよ……つーことで、許可降りたからいつてこい！」

「え、降りたんですか!？」

「普段のアイツなら口出しもするなって言うだろ?」

知恵を授ける前に時間が切れたものの、貴虎から手は出してはいけませんが知恵を授けていいと許可は出た。

一先ずは、なにかやってこいと出水に背中を押された修は先程貴虎に言われた足払いや足に紙風船を付けたり手で抱え込んだりと色々と試してはみるものの、全て瞬く間に対処されてしまう。

「作戦タイム!」

「いや、お前が言うのか?」

「これ以上やってもメガネくんをいじめるだけだろうが! つーことで、ちよつと来てくれ!」

「はい」

戦うのを見て色々と考えてこの手を使えば行けるんじゃないかと思っていた。自分の考えた策と同じことを修がして、勝ったと思えば瞬時に対応していく貴虎を見て、その考えは大きく変わった。

「メガネくん、どうだ?」

「色々と、やってみましたが……それが来るのを分かかって、普通に対処してきました。

多分ですけど、どうすれば自分が負けるかを兄さんは考えていて、その際に負けの原因を理解してそうならないようにするにはどうすれば良いのかと答えを出してるんだと思います」

「嘘だろ、おい」

真逆のどうすれば負けてしまうのか考えている貴虎に出水は驚く。

〇〇をしてくるもしくは得意な相手にどうすれば相手に勝つのか考えるのが普通なのに、真逆の敗ける方法を考えている。一度でも負ければ終わりの貴虎だから負けられない方法を考えているのだが、負けの原因を理解してそうならないようにするのは基本的に負けてからするもので、負ける前にするもんじゃない。

「自分の新しい手がちよつと成長した相手にどうなるのか、相手は自分に対してどう対策してきて更にその対策の対策をしてきていると思つて、更にその対策の対策の対策をするぐらいのことを」

「あいつ、ただだけ慎重なんだよ!?!見た感じ、身体能力のゴリ押しで勝てるだろ!?!」

一度でも負ければ貴虎はその時点で終わりにしても、慎重過ぎる事に叫ぶしかない出水。

自分の頭でなんとなくの理論を浮かべてからの、体に叩き込んだりする理論と感覚が4:6ぐらいの綺麗な割合で分けられているタイプで、慎重さあつての強さだと修に言

われて一先ずは興奮を収める。

「とりあえず、真正面からじゃ絶対に勝てないのは確かだな。あいつ、体育の成績学年一位だし」

「かといつて、小手先の技術も効果は0」

「そうなるよ、フィールドを生かすぐらいだな」

「フィールドを生かす？」

単純な実力差とそれを埋める技術は貴虎の圧勝。

出水は残された手段は1つだけだとフィールドを、公園を見る。貴虎と修が戦っていた場所は公園のなにもない砂の上で、公園には砂場、ブランコ、滑り台、水道、よく分らないパンダやライオンの像、シーソーと色々な遊具がある。

「滑り台に登って高低差を生かす、砂場の様に柔らかく凸凹した場所で歩きにくくする、水道の水を利用して目眩まし、ブランコを漕いで勢いを付けて飛んで力押し、公園ならそう言うことが出来る。幸い、今は人が居ないから色々出来る。あいつの足元を見ろ」

「足元？」

貴虎の足元には綺麗な円線が浮かび上がっていた。

「メガネくんが攻める時は激しく動かずに左足を軸にして右足が動かせる範囲でしか動

いていない。

無駄な動きを、特に移動したりして避けたりせず、最小限の回避をしているのを見るところ、フィールドを生かした戦法を恐れている可能性がある」

「それがなくても勝てるので、しないだけじゃ……」

「その可能性も大きいですが、やらないよりはましだろ。とにかく、やり直しの機会は何度でもあるんだから、やってみな」

「はい」

時間こそ限られてはいるものの、何度でも挑戦することが出来る。

出水の言うフィールドを生かす戦法を試してみようと風船を背中につけて貴虎に挑む。

「出水から色々とお教わったみたいだが、アイツは自分で考えることも出来るであつて自分で考えて指示する側じゃないぞ！」

「来たぞ、メガネくん!!」

攻めてきた貴虎に対して、対処するのでなく完全に身を引いた修。

引いた先にあるのは足場の悪い砂場で、修が入ると貴虎は眉をピクツと動かした。

「……」

「……悪くはないが、そこからどうするつもりだ？」

「え？」

貴虎も足場の悪い砂場に入った。

足場が悪く凸凹している場所で歩きづらいのだが、貴虎は余り気にした素振りを見せない。

「足場の悪い場所で戦うなら、足場の悪さを十二分に理解する。

自分はその足場に馴れているので自由自在に動けたりし、尚且つ足場の良さそうなところに罠を仕掛けたりするのが定石……だと思うぞ」

足場の不安定な場所は付け焼き刃でどうこうなるものじゃない。

走らず歩いて近づこうとする貴虎に対応しようとするが、修も砂場に馴れておらず、力強く地面を踏めば崩れる為に踏ん張りが効かず、あっさりと背後を取られてしまい風船を破壊される。

「一旦、出るぞ」

「うん」

「悪い、メガネくん、おれが余計な事を言ったせいで時間を無駄にさせて」

砂場を出て体に付着した砂を落としていると出水が近付いてきて、修が気付かない腰の辺りに付着した砂を落とし、フィールドを生かす戦法はそのフィールドの特徴を理解し、自分が対応できるかどうかが大前提であり、それらの過程を無視させる要因を作り

上げたのは自分だと謝る。

「いえ、僕が気付かなかっただけで出水さんはなにも悪くありません。

それよりも、フィールドを利用した戦いには効果がありましたからそれを主体に戦ってみようかと」

修は出水に非はないと許し、得たものがあつたと喜びを見せる。

フィールドを生かす戦法をちゃんと理解していない自分に呆れてはいたものの、砂場に入った際にピクリと眉を動かしており、上手く動くことが出来ていなかった。

「確かに効果があつたけど、砂場じゃ勝てないって証明したぞ？」

馴れない不安定な足場では戦えない。貴虎に負けたことにより、これから先、修は砂場で貴虎に勝つことは出来ない。

どうするべきかと服のポケットにまで入っている砂を捨て、他にないか無いのかを考える。

「滑り台……上るのは良いけど、待たれたらダメだ。水道……で、目眩ましは効かなそう。ブランコの勢いは漕ぐまでに時間が掛かるし……」

色々と手を考えるものの、一人で出来そうなフィールドを生かした戦法は無い。

複数人で戦う場合だと使えそうなものはあるが、一対一の勝負。誰もサポートをしてくれない。他の遊具を見て、色々考えるもどれもこれも上手くいけず、最後にジャン

グルジムを見るのだが、170間近の修には生かせない物で、フィールドで生かせそうな物はなかった。

「一か八かで、水道の水で目眩ましを……」

「メガネくん、集中してるところ悪いけど、靴下にも砂がついてるから靴の方にも砂が入ってる。靴を脱いだ方が」

「あ、本当だ」

気を利かした出水は自分だけじゃ落とせない砂を指摘すると、修は靴を脱いで中の砂を捨てる。

思ったよりも砂が入っているなど靴を逆さまにしながら思っていると、靴の先端部分に砂がそこそこ入っている事に気付き、砂を落とそうと靴を傾けて何度も何度も振った。

「あ」

奥の方の砂粒が中々に落ちないと強く振ると靴を飛ばしてしまった。

「メガネくん、焦りすぎだって。」

「ゴールデンウィークが終わるまでにあいつから一本取れば良いんだろ？まだ、3日」

「これだ……」

「ん？」

「これしか、無い！」

「ちよつ、メガネくん！」

飛んでいった靴を見て、策が浮かんだ修。

直ぐに靴を履いて風船を膨らませ、足に……靴につけた。

「ルール違反……いや、どっちだ？」

「靴は足に履く物だからセーフだと思うよ」

「そうか」

修は体の何処でもくつつけて良いルール。

しかし靴の上は体の一部なのだろうかとなるのだが、足の甲だと思えば良いと修が言うので貴虎は首を縦に振った。

「言っておくが、蹴りを入れたらアウトだからな。」

あくまでも、この柔らかい玩具の剣で割らないと勝ったことにはならない」

「うん」

「じゃあ、いくぞ」

何度目か分からない試合がはじまった。

「いきなりそれか！」

はじまると同時に修は貴虎に背を向けて走り出す。

ヒット&アウェイで上手い具合に自分のフィールドに運び込むのではなく、最初からそこに向かって走り出す。多対多の試合ならば、他の人に修を任せるのだが、一対一での試合ならばそれが出来ない。

背を向けた修を追い掛けるのだが、修はジャングルジムについており登りはじめている。

「6段5マス……サイズからして、中は無理か」

修が登ったのを見て、足を止める貴虎。

公園のジャングルジムの形や大きさを見て、次に出る手を考えるのだがジャングルジムの中には入れない事もないが、素早く動けないと中に入ってから登ることをせずに外側から登る。

「メガネくん、あのままじゃ負ける。どうすんだ?」

外からシユールな光景を見ている出水は次の策が気になる。

ジャングルジムは6段5マスなのだが真ん中の部分のみが凸っており、修はそこにいる。下から一步步着実に近付いてくる貴虎の頭上は取っているが、修の紙風船は足にある。ジャングルジムの鉄パイプに足があり、それに手を伸ばそうとする貴虎の方が攻撃しやすい。

「来た……」

凸っていない五段目のジャングルジムに付くと匍匐前進の様に体を倒して近付く貴虎。

まだ、まだギリギリ剣は届かない。まだ届かない、後少し、もう少し――

「今だっ!」

「!」

「靴を捨てた!?!」

チャンスがやって来た。

修は逃げることをせず、紙風船がついている右の靴を脱いで真下に落としていった。

「これで、どうだ!!」

攻撃しなければならぬ場所を無くしほんの一瞬だけ動揺させた、靴が飛んでいくのを、飛んでいった靴を出水が拾ってくれるのを見て思い付いた作戦。これで通用しなければ万策は尽きたと修は貴虎の紙風船を突きにいき

「よっしゃあ!!」

ジャングルジムの狭さと身動きの取れなさを生かし、割られてはいけぬ紙風船を捨てる大胆な行動をとった修はやつとの思いで紙風船を割ることが出来た。

出水は修が貴虎に勝ったことを自分の事の様に喜んでガッツポーズを取った。

「……」

頭につけている紙風船を手取る貴虎。

ルール通り、紙風船を柔らかい素材で出来ている剣で壊すことは成功している……が、問題がある。

「修、体の一部に付けて戦うのがルールだ」

靴も体の一部と認めたから、今更ああだこうだ言わない。

偶然に靴が足から抜けたのなら、その偶然を引き起こした修の勝ちだと修を褒めるのだが修はワザと靴を捨てた。それはルール上、ありなのか無しなのか？ 細かなルールは決まっていないからセーフと言えばセーフで、そんなもの考えなくても分かるだろうと言えばアウトになる。

「体の一部に付けて戦うのがルール……外しちゃいけないルールは無いよ」

「……此処は第3者目線から聞いてみるか。出水、お前の目から見ると今のやり方は○か？ それとも×か？」

言い合いになっても平行線を辿るだけであり、母を挟むのも面倒なので出水に聞く。

出水は自分の答え次第で修が勝利すると修有利に言おうとするのだが、曲がりなりに異世界からやって来る侵略者達をぶっ倒す仕事をしている。下手な事は言えないと、今の戦いを冷静に分析する。

「正直に言えば、○よりの×だな」

「！」

「その理由は？」

「肉を切らせて骨を断つ。」

今のはそんな感じの作戦で、時間制限はあるけど時間内ならやり直しが無限にあるならやって良い作戦だ。

ボーダーのランク戦……隊員同士の模擬戦でも腕一本くれてやる代わりにぶつ倒す奴を見たことあるし、ありっちゃありだな。けど、靴を捨てるのは一回しか出来ない戦法で次は出来なさそうだし、ルール上アウトに近いから×だ」

腕の一本で自分よりも格上の大物を喰えれば充分すぎる。

何度でもやり直しの権利が手に入るボーダーの個人ランク戦なら、足一本を失った修はそこまでの問題はない。対して貴虎は頭がやられており、確実に敗北扱いになる。

一度しか使えない、次にやれば貴虎は確実に対処するのを見越した上での×を出した。

「これがボーダーの個人ランク戦なら、ありっちゃあり。」

部隊でのランク戦でも同等の相手なら勝たないと失格だけど、自分よりも格上の相手なら相討ちでも充分すぎるぐらい……おれ目線だとこんな感じだ」

「そうか……」

目の前にいる高スペックな男から取れただけでも充分で出水基準では○をやりたいが、×に近いことをしている。

ルールの裏をかいたや細かいルールの設定をしていないと言い争うのは此処では違うと厳しめの判定をくだすと貴虎は納得し、修はダメだったかと俯いた。

「修」

×だと分かれれば、次をやるしかないと言わんばかりに紙風船を膨らませて渡してくる貴虎。

フィールドを生かしてルール違反ギリギリの奇策を取ったがダメだったのがショツクだったのか、修は紙風船を手を持ったままで何処にも付けようとしなかった。

「これで、お前の勝ちだ」

「なっ!?!」

修に風船を渡したあと、頭に紙風船をつけた貴虎は修の手を取り柔らかい素材で出来た剣で紙風船を割った。

「な、なにを」

「これでお前が勝ったことになる」

「……兄さん、そう言ったのはいらぬよ!!」

打つ手なしの姿を見て、哀れんだのか破壊したと思ひ怒る修。

そんな修を見て貴虎は微笑んで、肩に手を置いた。

「この勝負で私は負けたことになっているが、本当ならさっきの勝負で負けだ」

「でも」

「修……ボードー基準では勝ちになる」

勝利を認めない修の耳元で貴虎が語りかける。

「！」

ボードーの試験を受ける為に母からサインを貰うために勝負していた貴虎と修。

この勝負基準ではさっきの勝負は貴虎が勝つたのだが、ボードー基準では修が勝つたことになる。ボードーに入ろうとする修が、ボードー基準で勝つことが出来たことを貴虎は素直に喜んでいた。

「この勝負ではお前の反則負けだ。それだけは覆すことの出来ない事実だ。」

そして、ボードー基準では修が勝っていた。これも覆すことの出来ない事実だ……なんの為に戦っていたのかを忘れるな」

ボードーの入隊試験を受けるための戦い。それをしている、ボードー基準で修は貴虎に勝つことが出来た。

だからこそ、貴虎は負けを認めて修が試験を受ける事が出来るようにした。

「私は紙風船のゴミが無いのかを確認してから帰るから、先に帰るんだ」

「うん、わかった……それと、ありがとう」

「私の負けだから、礼は言うな」

「それでもだよ」

修は勝利した事を報告するために、急いで家へ帰っていった。

貴虎は修が曲がり角を完全に曲がるのを見てから、出水の方を振り向いた。

「お前、なんでこんな所にいるんだ？ 後、もう少しぐらい歩いたら蓮乃辺市辺りだぞ」

「用事だよ、用事」

突如として現れた出水。

修の発想の転換のきっかけを掴むことが出来たことは良いのだが、決して貴虎が呼んだわけでもなんでもない。本当に偶然にやって来ただけである。

「……此処で見たことは誰にも言うなよ。特に修の事は何一つだ」

「……メガネくん、ボーダーの試験を受けるのか？」

聞いた当初は言葉を濁されなにするために頑張っているのか分からなかったものの、ついさっきの会話を聞いて出水は修がボーダーの入隊試験を受けようと気付く。

貴虎は首を縦に降って、人差し指を口に近付けて黙っているどジェスチャーする。

「お前は入らないんだな」

「一年ぐらい前に言っただろう、ボーダーは嫌いだと」

「嫌い、なのに弟を行かせるんだな」

「そうだ……結局、答えは出たのか？」

一年前の昭和の日、ボーダーが嫌いな理由を解消する第4の手段を見つけると貴虎は言った。

ボーダー関係の話を余りせず、貴虎自身もそんなにああだこうだ言わずに友人として接していたので、答えについて話さなかったが何だかんだで一年経過しているのを思い出した。

「……出ねえよ。」

あれから一年、物凄い迄にやべえ近界民が来たわけでも、誰かが死んだわけでも、太刀川さんが真面目にレポートしてるわけでもない。一昨年と大して変わらねえ日々が続いている。刺激が欲しいっちゃ欲しいけど、何だかんだで平和が一番だ」

「そうか……」

「にしても、お前の弟、真面目がメガネ掛けてるのかってぐらいメガネだったな」

「色々と言葉がおかしいだろう。お前には兄弟は居ないのか？」

「うちは姉だけだよ」

「……」

「どうした？」

「なんでもない、気にするな」

第4の答えは直ぐ側にある……かもしれない。

貴虎は出水は修がボーダーに受かったとしても、C級の時はなにもするなと釘を差してから帰路についた。

第32話

修がボーダーに入隊した。

正確に言えば落ちたらしく、上層部に直談判してもらおうと本部に忍び込もうとした結果、グラサンを掛けた胡散臭い男と出会い、本当ならば落ちてたが裏口で入隊出来た。某実力派無職エリートのお陰で入ることが出来たらしい。

ただまあ、試験を受けた時期が悪かったのか入隊日は9月らしく、修はそれまで間に成績を落とさない様に勉強に専念する。物凄く真面目なメガネである。

「3000万……」

一方の私だが、修がボーダーに入ることが出来たので通帳を作って貰った。

隣児さんから貰った100万ちよつとを元手に、約2ヶ月頑張った成果が3000万円。一時期、7000万円を越えていて、このままいけば1億いけると調子に乗って確率が低いものを選んで失敗した。

隣児さんが何時ぐらいに此方の世界に戻ってくるか分からないし、下手すれば戻って来ないかもしれないが、少なくとも3000万円じゃ端金も同然だ。

「三雲、ちよつと良いか？」

通帳の数字を眺めながら目標はまだ遠いと学校の教室で考えていると、三輪がやって来た。

なんの用かと聞くまでもない。後少しで期末テストに入るの、その為のノートを借りに来た。

「現代文、数学、英語、化学、世界史、一通りはあるぞ」

机の中からノートを出す。

三輪は自分がやっていない所はどの辺りだろうかとノートをパラ見し、やっていない部分を見つけるとポケットに入れていた付箋を取り出して貼る。

「放課後から夜に掛けて防衛任務なんだ。付箋を貼ってるところだけ、コンビニでコピーして来てくれないか？この釣りはいらさない」

「太っ腹だな」

500円玉を渡してくる三輪。

付箋は10ちよつとだけで、一枚10円のコピーだとすれば物凄く残るぞ。BIGサイズのU・F・O・買えるぐらいには残るぞ。

「お前にはなにかと世話になってる。これぐらいの礼をしないと気が済まない」
「そうか」

「特に陽介のお守りは助かる」

2年では米屋と出水と同じクラスな私は一時のテンションに身を任せてヒヤッとする2人のブレイキ役だ。

元から仲の良い二人で、集まればテンションを上げて騒ぎ出して、止める役の三輪が居ないからと私が止めてる。

「そう言えば、夏休みはどうするつもりなんだ？」

「ゾエさんと合宿免許でバイクの免許を取りに行く予定だ」

「そうか」

もしかするとなにかに誘おうとしたのか？

三輪は夏休みの私の予定を知ると、自分の教室に戻っていった……のだが、今度は熊谷がやって来た。

「今の、三輪くん？」

「防衛任務で休んでだ分のノートのコピーだ。」

熊谷も欲しいのなら、コピーするぞ。コピー代はちゃんと請求するが」

「私は今回は大丈夫よ。それよりもちよつと相談が」

「？、そう言うのは同性にするものだろう」

告白される未来を潰しても特になにかが変わったわけでもない熊谷と私。

一先ずは相談事に耳を傾けると、携帯のスケジュール張機能を使い7月7日を見せ

る。

「確か、当真先輩の誕生日だったな。」

あの人、色々と残念な所は多いけど狙撃手としてはボーダーで一番の腕前らしいな」「いや、違うの。当真さんがN.O. 1狙撃手とか誕生日なのもあってるけど、違うの。実は、この日、茜も誕生日なの」

「かわいいそうな日浦」

「それ、どういう意味?」

「特に深い意味は無い」

女が日浦、男が当真先輩を祝う的なノリだろう。

日浦が誕生日なのは分かったが、それと相談事とはなんだと聞いてみると難しそうな顔をした。

「誕生日プレゼント……なににすれば良いと思う?」

「……いや、那須に聞けばいいだろう」

誕生日プレゼントについて悩んでいるという極々ありふれた悩みを私は切り捨てる。

顔見知り程度の仲だから、日浦の趣味とか趣向とかそういうのは一切知らない。出水なら好物の蜜柑とか数ヶ月待ちのお取り寄せコロッケとか送ればいいが、日浦の事を詳しくは知らない。

「最初は玲に便乗しようかなと思ったのだけれど、「くまちゃん、今年は何を買ったかは内緒にしましょう」ってなって」

「日浦の趣味とか趣向に合わせたものを買えば良いんじゃないのか？」

相談するのは良いことだが、私には御門違いの分野だ。

腕時計の様に当たりでもなければハズレでもない物を日浦にも渡すわけにはいかな
いから、定番中の定番を出してみると少しだけ浮かない顔をする。

「茜の、お兄さんが私と同じクラスで先にプレゼントを……指抜きグローブを買った
の」

日浦の趣味についてツツコミを入れたら……ダメだろうな。那須隊の隊服があんな
んだし、ツツコミを入れるのはダメだ。

「猫カフェの商品券とか、小夜子用意してたし……玲はなにをしてるか分からないし
……」

「他にも聞ける奴、居るだろう」

「1年で聞けそうなのは居ないし、2年は無理っぽいし、3年は個性が強すぎて本人が欲
しい物を主張しそうで」

ああ、確かにそう言われればそうだな。

防衛任務中の小佐野ぐらいしか、聞けそうなのいないな。国近先輩はゲームが欲しい

とか普通に言いそうだし。

「もう面倒だから、七夕だけに短冊を渡してなんでも願いを叶えるで良いんじゃないか？」

「それは本当の最終手段よ」

「お兄ちゃんしか居ないから、1日お姉ちゃんと呼んで良いですかと言われるかもしれないぞ」

「……………他に無いの？」

今、日浦にお姉ちゃんと呼ばれたい熊谷と真剣に選んだプレゼントを渡したい熊谷が戦っていたな。

ぶつちやけ、短冊が一番面白いもとい喜ばれそうな物だが、他に被らずに日浦に向けた洒落た物といえば…………。

「モイストポプリぐらいだな」

「モイス……………なにそれ？」

「ぎつくりと言えば、花びらを塩漬けにした瓶詰めだ。」

約二月ぐらいは匂いのある芳香剤で、匂いが無くなったら風呂に入ればバスソルトになる。誕生日から9月終盤までは暑いから嫌でも汗をかいてしまうから芳香剤で、10月以降は一気に冷え込むから風呂で暖まるのにちょうどいいぞ」

「それよー」

一つだけ思い当たる物を言えば、それにしたと決める熊谷。

早速、携帯を取り出して何処に売っているのかを確認しているとモイストポプリの作り方が目に入り、気になったのか調べる。

「あ、割と簡単に作れるのね」

「花びらと塩を交互に入れて精油ちよつと入れて、二週間ちよつと放置してかき混ぜれば完成だからな」

「……詳しくない？」

「母の日に母さんに毎年送ってるから、熟知してるぞ。なんだったら、手作りも作ってるぞ」

割と凝り性だから、一度作ると止まらなくなる。

花びらの代金が思ったよりも高いが、割と実用性のあるもので母さんからも好評であり、毎年渡して、喜ばれる。

「ん〜……取りあえず、既製品と手作り2つ用意してみるわ。ありがとう」

「手作りするなら7月の花とかアカネとか日を連想させる植物で、果物系はやめておいた方がいいぞ」

アドバイスの礼を言うと熊谷は教室を出ていく。

これで誕生日プレゼントが那須と被っていたら、笑うしかないが、頑張れとしか言えないな。

熊谷も出ていったので小説でも読むかと本屋で売っていたラッココー1号の小説版を取り出すのだが

「三雲さん、ちよつと良いっすか?」

「今度はお前か、京介」

もつさりとしたイケメンこと京介がやって来た。

クラスどころか学年も違う、顔見知りよりちよつと上のレベルの間柄の関係なのに私に会いに来たので、教室が少しだけざわめく。1年で1番のイケメンが来れば、そうなるか。

「ちよつと、頼みたいことがあるんすけどいいですか?」

「ふく……この季節だからなんとなく分かる。」

だからこそ言うが、そういう事は私に頼むんじやなくて頭が良い奴に頼め」

京介がやって来たわけをなんとなくで理解した。

とりあえず、大前提として私にそれを頼むのは大間違いだ。縦の繋がりも横の繋がりも使わずに私の所に来たので、先ずはと年代に頭を下げることを提案する。

「無理っす」

「いや、無理じゃないだろう。」

確か、進学校の六穎館高校も提携校だろう。そっちに任せの方がいいだろう」

いきなり無理だと言うので、頼めそうなところを出す。

ボーダーの提携校は普通校のここと、進学校の六穎館がある。そっちの方に宇佐美は通っており、他にも歌川や菊地原といった京介と同じ一年で、頭の良い組が通っている。「そっちの方は佐鳥に任せてるんで、こっちの方を」

「……改めて聞くが、テスト前の勉強だよな？」

「はい、テスト前の勉強です」

間もなく期末テストがあり、そこで赤点を叩き出した者は夏休み返上の補習だ。

防衛任務で公欠するボーダー隊員だからといって、特別扱いはされず赤点を出すことは許されない。テスト前の勉強を同学年でなく一つ上の学年に頼みに来たのは分かる。

「佐鳥……は、まあ、分かる。」

顔見知り程度の仲だが、成績が悪いのはなんとなく分かるが、その様子だと他にも何名か居るようだな」

「2年程じゃないですけど、成績悪い人と良い人の間が結構酷くて……嵐山隊の綾辻先輩は勉強を見るのはOKと出てまして、宇佐美先輩は怪しいです」

「同年代はダメなのか？と言うよりは、なんで私なんだ？」

「六穎館通つてる組は、ちよつと無理ですね。此処のは……まあ、無理つすね」
「なに、仲が悪いのか？」

「そんな感じつす」

よくよく考えれば、頭良い奴等は城戸派だったな。

「だからつて、私に頼まなくても……あの、アゴヒゲ以外で暇な大学生はいるだろう。」

「というか、それでテストとかで思い出したんだが、ボーダーでそういうのはどうなっているんだ？ フォローの一つも入ってないぞ」

「自主的に勉強すれば進学校のトップだって取れますから、勉強するかしないかの問題だと思えますよ」

「それが出来てないからお前が今こうしてやって来てるんだろう……」

「ぶつちやけ、オレはそこまで悪くない成績なんで、そう言われましても……」

ボーダーの闇はなにかと深い。

とりあえずは伝えるだけ伝えたので、教える余裕があるならば教えてほしいと京介は教室を出ていった。

「アイツ、私に頼む理由を教えなかつたな……」

最後までなんで他の人達を無視して、私に頼むのかが分からなかつた。

戦闘以外はなにかとポンコツでアホの子くぎゆうこと小南とか普通に賢いのに、他に

も色々といえるのに何故私なのかは分からない。

去年のノートは捨てずに取つてあるので、教科書とか教科担当の教師の教え方が極端に変わっていなければどうにかなる。100点を取れと最初から期待せず、50点を取れるように頑張つて貰う。

「……結局、受ける感じで進んでるな」

とりあえず今日は無理だと断ろうと考えていると、昼休み終了のチャイムが鳴った。

トイレから戻ってきた出水と米屋を見て、慌てすぎだと思いつながら大きなあくびをし、5時間目の授業の用意をし、授業を受ける。もうすぐ期末なので、新しいところを教えるのでなく期末に向けての対策勉強で、この辺が出るぞと午後の授業を受け終えて下駄箱前に行くと京介が居た。

「三雲さん」

「今日は無理だから、明日以降にしてくれ。携帯、持つてるか?」

昼休みの返事を聞きに来たので、今日は無理だと断り、明日以降はいけると伝える。

それを聞くと京介は良かったとホツとし、二階から降りてくる佐鳥達に向かつてサムズアツプする。

「よ、良かったああああ!!」

「佐鳥、五月蠅いよ」

「あ、悪い。」

でも、本当によかった。高校の勉強、追い付かなくて危なかったんだよ！三雲さん、ありがとうございます！」

「礼はいらない。と言うよりは、今日はしないで。」

勉強は教えるが、何処で勉めるとかの場所を押さえたりしておいてくれ」

「はいっ！」

勉強を見てくれると分かれると喜ぶ佐鳥。時枝はそんな佐鳥を見て、喜ぶ。

まだテストもなにもしていないのに、この喜び様は大丈夫なのかと見ていると黒い髪の男子生徒が……ポーターで二人しかいないS級隊員の1人、天羽が通り、佐鳥達を見て首を傾げる。

「なに喜んでんの？」

「頭良い先輩にテスト勉強みてくれることになったんだ。」

今までと違って、赤点を取ったら大変だからね……嵐山さん達に迷惑を掛けずにすんだし、夏に遊べる！」

「ふっん……」

喜んでいる理由を聞くと私を見る天羽。

出水や米屋と違って友人というわけでもなければ京介や佐鳥の様に顔見知りの後輩

というわけでもない全くといって関わりの無いボーダー隊員。普通校に通ってない面々で顔見知りじゃないボーダー隊員（原作キャラ）割と居るなと小荒井奥寺コンビの顔を思い浮かべていると天羽が口を開く。

「あんた、本部じゃ見掛けないけど、何処所属だ？ 鈴鳴？ 綿鮎？ 弓手町？ 早沼？ 久摩？ それとも玉狛か？」

「あんたじゃない、三雲さんだ。ある程度はタメだったりしてもいいが、もう少し言葉を選んでくれ」

「三雲さんはボーダー隊員じゃないよ。」

ボーダー隊員と知り合いが多いけれども、それだけだよ」

初対面の相手にぶつ混んできた天羽。あんたとか何処所属だとか割と気にしないが、いきなりそんな事を言ってくるな。

時枝が補足として私はボーダー隊員じゃない事を天羽に教えると天羽は私の事をジッと見てくる。

「言いたいことがあるなら、ハッキリと言ってくれ。白髪でも見えたのか？」

「天羽、なんか見えんの？」

「……色が忍田さん以上だ」

「はあ!？」

詳しい事は分からないが、人のオーラかなにかを見ることが出来るサイドエフェクトを持つている天羽。

私の色について語ると佐鳥が思わず声を上げてしまうので、京介が無理矢理口を塞いだ。

「色がなんなのかは知らないが、私はボーダー隊員じゃなくてボーダーが嫌いだ」

「ふ〜ん」

天羽は私がボーダー隊員じゃないと分かれば興味を無くし、帰っていった。帰り際に三回ぐらい振り向いてたな。

「ええっ、てか、三雲さんボーダー嫌いなんすか!？」

「ボーダーという組織の在り方が嫌いであって、街を守ってくれる事は感謝してる。

ただまあ、何でもかんでも秘密にしてたら大事な事を見落としてることもあると……やろうと思えば出来るのに、やってない事に腹がたつてるだけだ」

「やろうと思えば出来ること……なんですか、それは?」

「その辺は自分で考えてみる」

私がボーダー嫌いなのを知らなかったのか、佐鳥と時枝は何故かと聞いてくるが考えてみる。

ボーダーの人気や知名度はお前達のお陰で維持できているが、それだけで割と見落と

してる所はあるぞ。

「まあ、とにかく勉強は見るから場所の用意はしてくれ。

流石に3人ともなると教えられる範囲に限界があるから、得意科目は自力でどうにか

……どうした？」

「三雲さん、3人じゃないんです」

「は？」

佐鳥と時枝と京介が勉強を見てほしいんじゃないのか？

そう聞こうとした途端、厄災のオーラが此方に向かって近付いてきた。

「おーい、とつきー、佐鳥、京介、どうだった？」

オーラの正体は真の悪こと別役太一。

こいつは確か米屋よりもちよつと、本当にちよつとだけ上の成績だった……要するに

アホだ。

佐鳥達にどうだったかを確かめると問題無いとサムズアップするので、少しだけ頭を

抱えて色々と考える……。

「勉強は教える……ただし、別役、テメーはダメだ」

「え、えええええ!!」

「三雲さん、俺と京介は正直教えて貰わなくても赤点回避は余裕です。

俺達はいいで、佐鳥と太一は見てください……特に太一は中間全部赤点で」

「お願いします。今先輩に怒られたくないんです!!」

別役の参加を拒否すると頭を下げる時枝。自分のことを放置して頼み込む姿勢は良いが、私は別役を見るつもりは無い。

「時枝、なにも私は別役が嫌いだからとかなにかやらかしそうだから嫌いなんじゃない。

別役の場合は赤点を取ってはいけない自分から勉強をしてある程度の成績を出しておかないといけない立場で、人に頼る時点で間違っている」

「？」

「別役、確かお前は外部スカウト組だったな」

「はい！今先輩も村上先輩も外部ですけど」

「だったら、小まめに勉強しろ。」

言っちゃあ悪いが、私は外部スカウトが嫌いだ。外部スカウト組が嫌いなんじゃないぞ、外部スカウトが嫌いだ。

防衛任務の都合上、授業を休まないといけないのにそれを補填するのをボーダー自体が余りやっていない。米屋や仁礼という負債を抱えてるにも関わらずだ」

「……あ」

私が言いたいことを察した京介はついさっきの出来事を思い出す。

「お前はボーダーにスカウトされて、入った。

この街に来たのもボーダー隊員として働くためで、親の転勤とかそういうのじゃないだろう。

お前には悪いが、自力でどうにかしろ。お前の赤点は米屋の赤点とはわけが違う。恨むならば、ボーダーを恨め。外部スカウトを恨め。スカウトされる大半の奴等が学生ならその後のアフターケアをしていないのが悪い。去年、出水と三輪に嫌味に聞こえるかのように何度も言ったのに、特に変化が無い。まあ、自主的に勉強すれば進学校のトップだつて取れるらしいから、勉強するかしないかの問題らしいが」

「……太一、すまん」

さつき言ったことは失策だったと京介は謝るがもう遅い。

私は別役のテスト勉強を見るつもりは無いと、自力でどうにかするか頭が良い先輩にでも頼れと一線を区切り、靴を履き替える。佐鳥が特になにも言っていないのを見る辺り、自主的な勉強は大事なんだと思つているのと余計な事を言えば、確実に自分にまで被害が被ると思つているな。

「場所とかの用意を頼んだぞ」

本気の涙を流している別役を背に、私は三輪に頼まれたコピーをするべくコンビニへと向かった。

第33話

ただし別役、テメーはダメだと拒んだ翌日。

早速、佐鳥が勉強の準備が出来たので図書館に来てくださいと言われた。

「コピー代請求……いや、自分ですと言ったからいいか」

「三雲さん、三雲さん」

「ん？」

図書館に向かいながら数分前の出来事を思い出していると、京介が図書館の入口前の柱に身を隠すように隠れていた。

もう殺意を抱くレベルで熱いものだから、図書館内のクーラーの効いた部屋で涼んでも文句を言わないのに律儀だなど思っていると思招きをしていた。

何かと近付いてみるとマスクとグラスンを装備している佐鳥が京介の影に隠れていた。

「なにをしている？」

「これでも、ボーダーの顔なんで……こういうプライベートな場所でワーキヤ言われてSNSとかに上げられると困るんすよ！」

「アイドル気取りも大概にしろよ、三枚目！そういうのは隊長である嵐山さんの役目でお前は小学生に呼び捨てにされる枠だ！」

「酷いっすよ!?!」

目を閉じて想像してみれば、佐鳥が如何に調子こいてるかが分かる。

プライベートなのにワーキヤ言われてしまう嵐山さん、近所の小学生に呼び捨てにされる佐鳥、なんの違和感も感じられない。

「時枝は？」

「あ、トイレに行ってます」

「じゃあ、先に入って勉強するぞ。この図書館の勉強できるスペース、19時までらしいからチンタラしてられない」

姿が見えない時枝が何処かと分かると中に足を踏み入れようとするのだが、京介と佐鳥が顔を見合わせた。

「なんだと思っていると携帯を取り出してなにかに気づく二人。」

「すみません、連絡するの忘れてました」

「？」

京介が謝ってきたのでなんだと思っていると、マスクをつけた六穎館高校の女子生徒が近付いてきた。

「綾辻さんに頼んだら、割とあっさり承諾してくれたんすよ！」
「……………それ、私要るか？」

六穎館の頭良い奴を呼んでいるのならば、最初から私は必要無かった様な気がする。
目頭を少し抑えてマスクで顔を隠している六穎館の女子生徒もとい綾辻に挨拶をする。

「……………どういう感じで話が伝わっている？」

「勉強を見てくれる人かな？私は……………って、知ってるよね」

「綾辻、だったか？」

「うん。君はボーダー内で色々噂されている三雲くんだね。よろしく」

「……………どういう感じに噂されているんだ……………」

米屋達が裏でチラツツというらんことをボーダー内で語っているのは知っている。

そのせいで時折、ボーダーの人間だと間違われたりすることもあるのだが、私はボーダーは嫌いだ。

「え〜つと」

「京介、答えなくて良い。それやると諸悪の根元を叩かないとどうしようもなくなるから」

「そうすか」

割と長くなりそうなので、京介を黙らせると図書館内に入る私達。

他所の中高大も間もなく試験なのか、テスト前勉強をしており何時もの馬鹿騒ぎしている教室とは真逆でシーンとしていた。それを見て、こういう空気は大事だなと空いている6人座れる長方形の縦長に席に座る。

「じゃあ、勉強を……古文、数学、地理、英語、現文、生物基礎を」

「佐鳥、ほぼ全部はダメだって」

「全部怪しいの！」

「喧しいぞ、佐鳥」

椅子に座って早々に6つの教科を出してくる佐鳥。

6つも怪しいのならば広報活動を多少自粛して、頭良い奴を教師につけろよと思うのだが無理か。

「えっと、じゃあどれから」

「まず、3人ともこれをやれ」

6つも出してくることは予想外だったのか若干だが焦るものの、手をつけようとする綾辻。

その前にとついさつきコンビニで印刷してきた用紙を時枝達に渡した。

「三雲さん、これって……」

用紙に書かれている問題を見て目を見開く時枝。用紙に書かれている問題は期末で出てきそうな問題ばかりだった。

「去年の期末テストを偶然にも見つけたから、文章を少し弄くったり問題を一部変えたりして印刷してきた。」

とりあえずはそれをやってみてノー勉で何処まで取れるのかを確認する。ある程度の点数が取れる教科は後回しで、赤点を取りそうな教科を優先的にして……60点を取れる様に勉強する」

「100点じゃ無いんすか？」

「100点を取る奴は日頃からコツコツと勉強している奴だ。」

テスト前だからと勉強している奴とか成績の残念な奴は出来るだけ上の高得点を目指すのは間違いで、酷すぎないかといって良すぎない程よい点数をゴールとしておく」

「昨年、米屋関係で成績残念な奴をどうにかする方法はなんとなくが分かっている。」

「60点に疑問を持っていた京介が成る程と納得をすると数学から手をだし初めて問題を解答していく。」

「うう……はじまって秒でテストなんて……」

「泣き言を言わないの。遅かれ早かれ、何回かはやるんだから」

トホホと涙目の佐鳥の尻に蹴りを入れる勢いで止めを指しにいく時枝。

「一先ずはこれで時間が潰れるなどドイツ語検定準一級の本を取り出し、自分の勉強をするのだが綾辻視線を向けてくる。」

「えつと……」

「佐鳥達がやっているテストの答え。」

「覚えにくかったり間違いやすい問題は×を、点数が取りやすい問題には○を、点数配分が多いが難しい問題には△を入れている。流石に三人纏めて教えるのは無理で、別々の教科になると手間が掛かるから出来そうなのを頼む」

「う、うん……わかったよ」

（私、この勉強会に必要なかな？）

綾辻は自分が此処に居る意味はあるのかと疑問に思う。

「早速、教えようとしたら去年の期末テストが出て来て、教える立場の人はそれが終わるまで試験勉強かと思えばドイツ語の勉強でなんの力にもなれない。しかしまあ、居て貰わないと困る。どう頑張っても二人までしか教えられず、英語に苦戦している佐鳥には二人分の労力が必要な気がする。」

「三雲さん、ヒアリングの問題が配点高いですよね？」

「そこは禁断の裏技だから、やめておけ」

ヒアリングの問題に目が行った佐鳥。

授業でやっている所が昨年と同じなので、出る問題も殆ど同じだと気付いたのかヒアリング問題を事前に聞いておいて丸暗記してそこで点数を稼ごうとするので止める。今時ならば簡単にテストで使っているヒアリング問題用のCDは手に入るが、それは本当に手を出してはいけない。夏休みの宿題を買うぐらいにダメなことだ。

釘を刺された佐鳥は今年の期末テストを答えていくのだが、英語のテストのせいかな語の意味とかに空欄が多くて50点を越えなさそうな怪しい雰囲気醸し出している。

「くっ」

「翻訳アプリが正しいとも限らないので日本に来た外国人に使ったりする。

体を動かす方を極めたのがプロのスポーツ選手で、それ以外の基準を決めるのに勉強がちょうど良いだけだ」

「まだなにも言ってますんけど!」

「俺、日本人なのになんで英語を勉強してるんだろう。今は翻訳アプリとかあるじゃん。それにどっちかと言えばオレは体育会系だし、高校の勉強と違ってぶっちゃけ社会に出ても学者とかの専門職以外に役立たないじゃん……違うか?」

佐鳥がいらんことを言う前に釘を指す。

米屋と仁礼を経験しておけば、頭悪い組は簡単に封じることが出来る……あの二人より酷いのが……あゝ一人だけ居たな。頑張れ、修。

「佐鳥、こういう時は考え方を変えろ。」

高得点を最初から期待されておらず、60点付近を取りさえすれば良いだけなんだ。100点と言う険しいゴールから一気に下がって60点……進研■ミの私、点数低すぎと違つて喧嘩を売つてないだろう」

「三雲くん、名指しはまずいよ」

「85点で点数低すぎは舐めてる。」

一つの100点よりも多くの85点の方が褒められる……とにかく、ゴールがちゃんと存在していて尚且つ低い位置にあつて、更に言えばゴールのその先は夏休みだ」

「夏休み……そうだ、夏休みだ!!」

「佐鳥、さつきから五月蠅いぞ」

「あ、ごめん」

京介から怒られたので口を塞ぎ、テストに集中する佐鳥。

そういえば、夏休みは何処に行くべきか？冬でも遊べる四塚市のプールは絶対に行かない。夏に行くのは疲れる。

夏休みについて考えは纏まらず、何時も通りで良いかとドイツ語の勉強をし、一通りのテストをやり終えた佐鳥達のテストを確認する。

何処が間違っていたのかをはつきりと指摘するべきなのか、自分で間違いだど気付か

せるべきなのか考える。

「教えるのは、向いていないな」

感覚とか理論とかそれ以前の問題で、私は教えるのが余り向いていない。

どうすべきかと考えていると、時枝の間違いを上手に指摘して自力で答えを出せる様に綾辻が導いていた。上手だな。

とりあえずは手本にして真似て、佐鳥と京介に教えるのだが佐鳥と京介だと地力が違うのか差がハッキリと出る。

「どうしたものか……」

成績は落とすまいと自主的に勉強をしている京介と時枝は70〜80目指そうぜ！と頑張れる。対して佐鳥は米屋や仁礼ほど絶望的でないとはいえ、かなり悪い。

目標を50点に下げて、確実に点を取れるであろう問題だけに絞り込んだ方がいいのかと悩み、一息つくべくメガネを外して、メガネ拭きで拭く。

「……なんだ？」

「三雲さん、マジすか……」

メガネを外した私に有り得ないものを見るような視線を向けてくる佐鳥。

新年のボーダーの広報活動のお年玉企画の時にメガネを何度か外しているのを見たことある筈なのに驚いている。

「なんでコンタクトしないんですか!？」

「私のは伊達で度が入っていない」

「それ絶対に間違ったオシヤレ! メガネ無しの方が3割増しでイケメンですよ!」

人の顔について色々と言ってくるが、とにかく五月蠅い佐鳥。

イケメンが3割増しと言われても顔じゃない系の女性も多数居るんだぞとその一例の綾辻をジツと見つめる。

「……」

「……っ……」

「あ」

無言の私に見つめられるのが恥ずかしくなり、そっぽを向く綾辻。

ほわほわとした雰囲気が一瞬にして醸し出されており、その空気を感じて読み取った京介は気付いてしまうがそれ以上掘り下げるとややこしくなるのでなにも言わない。

「佐鳥、ああだこうだ言っているが点を取れてるな。」

現文に関してはそこまで酷くないからちよつと勉強しなくても、赤点はまずないな「よーっし!!夏休みが近付いてきた!」

模擬テストが終わり、そこそこ勉強するとメキメキと頭角を表す佐鳥。

元が低い分、伸び幅は大きいのだが声の方はもつと大きく時枝に脇腹をつつかれて黙

らされる。

「夏休み、夏休みとテンションを上げまくるのは良いがお前等遊べるのか？」

佐鳥や時枝達は広報活動を一手に引き受けている嵐山隊の一員で、夏休みともなれば物凄く忙しい。

「ああ、大丈夫です。

俺達広報の仕事が多かったりしますけど、その辺の調整はちゃんとしてくれてるので五連休を頂いてます」

素朴な疑問に答えてくれたのは嬉しいが、時枝の言っていることが既に社会人のそれに近い。しかし本人は特に気にしていないのでなにも言えない。

「とつきー、夏休み何処に行く？」

「まだ期末すら受けてないんだから、早すぎるよ」

「いやいやいや、こう言うのは早くしないと。夏休みシーズンは何処もかしこも混むんだからさ」

勉強そつちのけで夏休みの予定を立てる佐鳥。気が早いどころか、遅い。既にUSJとか東京ビックサイト付近のホテルは抑えられている。

注意しようかと思ったが、一休みの為にと声量を小さくしろよと一言だけ入れて続けさせる。

「でも、折角の夏休みだし何処かに遊びに行きたいよね」

「プール、四塚市のマリンスワールドに行きたいっす！」

彼処は室内プールがあるから、雨が降ろうが遊べますし電車で行ける距離でそこまでお金も掛かりません！」

「がつつきすぎだぞ、お前」

割とノリノリの綾辻に食いついた佐鳥は欲望を丸出しにする。京介はそんな佐鳥に呆れる。夏休みにレジャー施設、しかもプールに行くだなんて死に行くようなものだ。彼処は冬の季節が空いていて遊べるんだぞ。

「三雲さんもプール、どうっすか？」

「私は家に引きこもってゴロゴロしてるのが一番だ」

私にも意見やらなんやら求めてくるので、ハッキリと引きこもり宣言を出す。

「えくせつかくの夏休みなんですから、遊びましようよ！」

「言つとくが、お前達と遊ぶ予定が無いだけで色々とやることはあるからな。」

北添さんと一緒にバイクの免許合宿に行ったり、米屋達とリアルプロゴルファー猿選手権したり、バスツアーで信玄餅の詰め放題をしたり、ぶどう狩ったり、割と忙しい「手権したり、リアルプロゴルファー猿選手権が一番忙しい」

特に米屋達とのリアルプロゴルファー猿選手権が一番忙しい。負けたら、食べ放題の焼き肉を奢らなければならぬから変なゴルフクラブを作れない。結構ガチ目なのを

作らなければ負ける。

「引きこもりとか言ってる割には滅茶苦茶外に出てるじゃないですか。バイクって完全にアウトドアでしょ」

「いや、バイクの免許は今後に関わるから本当に取らないとダメなんだ。

盗んだバイクで走り出すリアル15の夜どころか13の夜をやってしまって、本当に必要なんだ」

転生特典の一つ、と言うかベルトの付属品なのかセットでバイク（サクラハリケーン）がついてきている。

はじめて乗った時は近界民が襲撃してきたから仕方なくで乗ったが、無免許で乗ったのは本当にまずい。運転の仕方が分からなくてビビったぞ。

「三雲くん、バイク盗んだの!？」

「四年前に近界民がこっちの世界にやって来た際にちょうど今のボーダー本部がある辺りに出掛けてて、近界民を見て走っても無理だと思ったから乗ってた」

尾崎ゆたかよりも15の夜的なのを過ごしている私に綾辻は驚くのでとりあえずの説明をする。

変身したとかトリガー拾ったとかそんな事は言っていないが、嘘はなに一つ言っていない。あの日以降は一度もバイクには乗ってないのだから。

「……三雲さん、夏休み何処かに行きませんか？」

はじめてバイクに乗った日について教えると静まり返る場。

空気を読んだのか場を和ませようと時枝は遊びの誘いをしてくれるのだが、そんな暇はあつたのだろうかとスケジュール張を取り出してカレンダーの部分を確認する。

「夏休み開始から約二週間は教習所。」

そこからゴルフクラブを作つてリアルプロゴルファー猿選手権で…変なところでもない日があつたりで、三連休が一回だけだな」

「あ、この日、休みですよ」

「……遊びに行くとして、どうするんだ？」

プールとか海とか行つてみる。佐鳥が小中学生に呼び捨てにされる未来しか待つていないぞ」

「あ、それだつたらこう言うのはどうかかな？」

徐々に徐々に詰みに向かっていく私の三連休。

ボーダーの顔と一緒にいるとややこしくなるからパスとするのだが、綾辻が潰した。値段が安くて近くに薬局とコンビニが存在して、料金を追加すればバーベキューとも出来るプライベートビーチ付きの海に近い民宿があると携帯を見せる。

「こう言うのは誰か二十歳越えの引率者が必要になるだろう。」

というよりは、プライベートビーチ……野郎だけで行って楽しいのか？」

「え、私も行くつもりだよ？」

「……むしろダメだろう」

話の流れ的に佐鳥と時枝と京介は普通に來てくれる。そこに引率者（♂）で私を足せば男子5人。

対して女子は綾辻一人になると空気が重い。この面子ならば問題は無さそうだが、なにかしらありそうで怖い。

「まあ、保護者の人が反対しそうですね」

「じゃあ、他の人も誘いましょうよ！熊谷先輩とか国近先輩とか！三雲さんとも仲が良いですし、海で遊ぶとったら水着に……」

そこまでにしておけよ、佐鳥。

明らかに水着を見たい人を見る価値がある人を的確にチョイスし、想像する。今先輩とかをチョイスしないのは絶対にわざとだ。

この後も勉強をそっちのけで海に遊びに行く話は進んでいき、予算や向こうで何をやるのか的確に組み立てていく。

「去年は真っ白だったのに、今年も真っ黒になったな……」

閉館時間になった時にはボーダーの人達と海に遊びに行く予定の8割が完成してい

た。

第34話

ボツスンと岸辺露伴を足した感じの手先の器用さやトリコのココの視力と私の転生特典は色々とある。

転生特典は基本的に世界観を崩さない様に色々と弄くられている。分かりやすく言えばグルメ細胞やグルメ細胞の悪魔のお陰で常人よりも遥かに優れた視力はサイドエフェクトということになっている。

こう言うのを守っておかなければ極稀にゴミみたいな事になる。具体的に言うとな神祕的な物でしか倒せない敵しか登場しない作品に科学兵器だと言う設定の武器とか。

つまるところ、なにが言いたいかと言えばだ

「ドライブドライバーセット一式を貰わなくて、よかつた……」

一年生三人に勉強を教えた甲斐があつてか佐鳥は平均57点で赤点を回避した（別役は知らない）。

佐鳥は晴れて夏休みを満喫することが出来るようになり、私も覚悟を決めて海に行く決意をするのだがその前にバイクの免許優先だとバイクの免許を北添さんと一緒に合宿で取得。

これで無免ライダーから仮面ライダーへとレベルアップすることが出来る……いや、レベルアップしたら無免とか仮面どころかバイクそのものになるか。

ともかく、免許を取ったので母さんが保険とかそう言うのを今のうちにしておきなさいと車検とか事故の時の保険の手続きをついさつきまでしていたのだが、車検が割とあっさりと通ったことに驚いた。

「トライドロロン乗りたくても乗れない、タイヤ交換とタイプトライドロロンでしか使えない子になるところだった」

※仮面ライダードライブに出てくるトライドロロンは改造車で公道を走ることは出来ず、次回予告でトライドロロンの運転は許可を得た私有地で行っていますとテロップが流されます。

「新しいのを買いに行くか。出来れば、全身タイツっぽいのであれば良いんだがな」

これで車の免許をとるときに学科をパスすることが出来る。

トライドロロンを貰ったりしていないので、これ以上は深く考えることはせずにシヨツピングモール内を歩く。

目的は水着を買うこと。遊ぶ用の水着自体は持っているのだがパツチリゴムのもつさりブリーフみたいな感じで固い。こう、ダボダボなアロハ柄のトランクスの様な水着が……もしくは全身タイツの、サーファーが着ている様なのが欲しい。

「……割れないな」

モール内のレジヤーションにたどり着き、真っ先に鏡を見る。

鏡に写る自分は全くといって腹筋が割れていない。佐鳥ですら、いや、佐鳥はちゃんと割れているのに私は割れていない。ワンパンマンのサイタマと同じ事を繰り返しているのだが、割れる傾向は見られない。

ボディビルのような腹筋はいらぬ。右腕だけ鍛えた人みたいな筋肉も必要は無いが割れた腹筋は欲しい。

「ビーチバレーとサンドアートは決まってる。

近くに霊媒師が祓うの無理ですと言った心霊スポットがあるし……どうするか」

自分に合うサイズの好みの色の水着を見つけたのだが、競泳水着とトランクス両方あるのが悩みどころだ。

サーフィンしないしガチ目の泳ぎはしないので、競泳水着を着ていって浮かないだろうかと考えてしまう。

「三雲、三雲」

「ん？」

死角から出水の声が聞こえる。

なんだと振り向くとカモン！と必死になって自分を引き込もうとする出水……とな

にかに警戒したりしている米屋と佐鳥がいた。

「いいからこいつつてんだろ！」

「今、言っただろう」

なにやっているんだと見てたら、出水が出てきて叫んだ。

そんな出水に白い目を向けると此方に来やがれと腕を引つ張られ、女性の水着コーナーに連れていかれる。

「これ、どうですか！」

「いや、どうですかってスク水じゃない」

「違いますよ。スク水型の競泳水着ですよ！」

「スク水、茜ちゃんにはピツタシかもしれないけど熊谷先パイにはちよつといけないな」
「……」

女性様の水着コーナーには水着を買いに来たであろう熊谷と日浦……後、姿は見えないが電磁波とかオーラとかで那須や国近先輩がいるのが分かる。

なんでこんなところにと一瞬だけ考えるのだが、よくよく考えれば今いる面子は遊びに行く面子だと思いい出して水着を新調しに来たのかと答えを出す。ただまあ、取りあえず言えることは

「ビキニよりもこう、ヘソ辺りから紐みたいなのを引つ張って肩に掛ける、ハイグレみた

いな水着とかないのか？」

「ばっか、熊谷はアダルティよりもアグレッツィブ、セクシー系を追求せずに意識せずにセクシーに行くのが良いんだろう」

「出水先輩、無自覚なバリボーを見せつけるって言うのがいいんすよ」

「こいつら、ストーカーじゃないのか？」

「えつと……お前達、自分の水着は？」

「んなもん持つてるに決まってるだろ。去年、プールに行った際の、2回ぐらいしか使っていないのに新しいのは買えねえよ」

「俺達野郎はそこまで水着を気にしませんって」

米屋と佐鳥が清々しい笑顔で答えた。

「荷物持ちで来たのか？」

「いや、水着とかを購入しに行くって言ってたの佐鳥が聞いたからコッソリ来た」

紛うことなきストーカーか。

少しだけ出水に期待をしたものの、無駄だった。

どうしたものかと頭を悩ませるのだが、バレて熊谷から殴られる未来が待ち構えているのが分かったので触れずに自分の買い物を済ませようとその場から離れようとするのだが佐鳥に首筋を掴まれる。

「此処で見てかないで、どうするんですか」

「あの面子の水着は海で見ることが出来るだろうが」

「馬鹿、老け顔馬鹿ダメガネ。そこだと一つしか見れないでしょう」

おい、お前一応私、先輩だからな。私、水着買いに来たからそう言う感じであたんじやないんだ。

「俺は先輩の水着よりも先パイの水着姿をみたいんです。特に女子同士の甘酸っぱい一時の中で」

スケツトダンスのチェリーみたいな事を言うな。

煩惱のままに生きる思春期から抜け出せない佐鳥から逃げようとするのだが思ったよりも力強く米屋と出水が熊谷達に見られてると言いに行かない様にと見張る。これは無理に動くよりも事の展開を見守るしかないと渋々付き合うことに。

「くまちゃん、それはなにかしら？」

「なにつて、競泳水着。最新のモデルで、水の抵抗を極限まで」

「ダメです！なんでそんなの選ぶんですか！

熊谷先輩は国近先輩よりもスタイルが良いんですから、もつと良いのを選ばないと」

水着を手取る熊谷に呆れる那須と日浦。

ビキニでなく上下に分かれているビーチ巴厘選手が着てそうな感じの競泳水着

……似合いそうだな。

「くまちゃんはスタイルが良いんだから、こういうのが似合うわ」

黒一色のビキニを選ぶ那須。

「いや、これ面積が……」

「でもこれぐらいじゃないと三雲くんは振り向いてくれないわよ?」

「だから、バレンタインの時に断られたって言ったじゃない!」

「なんか熊谷と小佐野が授業に出てないと思ったら、そんなことがあったのか。つーか、振ったのか」

「ちよ睨まないでくれ」

思わぬところで飛び火してしまい、白い目を向けてくる米屋

出る杭を打っただけで、そこにはなんの悪意もなかったとだけは言える。

「でも、三雲くん……くまちゃんのおっぱい見たわよね?」

「あれは事故よ、事故!」

「確かに事故ですけど、三雲さんはもろに見てましたよ」

あ、これはダメなやつだ。

文化祭での一件(ナース服の乳袋破裂(ポロリ))を思い出し、顔を真っ赤にする熊谷と私を物凄く睨んでくる佐鳥達。この状況をどうすれば打破できるのかが私には分か

らない。

「なんで、なんでお前だけそういう美味しい展開をいただいてるんだ！」

「ぼ、暴力反対！」

堪忍袋の緒が切れた出水は私の尻を蹴飛ばす。蹴り飛ばされた私は那須達の近くに出てしまい、蹴飛ばした張本人達はそそくさと覗き場を変える。

「あ、三雲さん！お久しぶりです！」

「久しぶりだな、日浦。相変わらず元氣そうだなによりだ」

「はい。あ、熊谷先輩から聞きました！」

私の誕生日プレゼントにモイストポプリを送ったらと勧めたんですね。手作りと

市販の両方とも良い香りで、とってもよかったです」

「そうか。だが、モイストポプリの真骨頂はこれからだ。」

此処数年は地球温暖化だかなんだかで、秋をすつ飛ばして一瞬にして冬の寒さになる。香りが無くなったモイストポプリはバスソルトにも使えるから、体を芯から暖められて新陳代謝なんかも上げられる代物だ。っと、那須隊の面々で買物物の様だな。邪魔しては悪いから、私はここで」

「待ちなさい」

日浦に見つかり、モイストポプリの事を話終えてそそくさと逃げようとする腕を掴

む那須。

昨年到现在今年も踏んだり蹴ったりだと逃げることを諦める。

「くまちゃんには、どっちが似合うと思う？」

「ちよつと、玲、なにを言ってるのよ!？」

「こつ言うのは男の子に聞かないと」

黒一色のビキニとアニオリの水着回で熊谷が着ていた水着を見せる那須。

どちらも大体でセクシーかと言われればセクシーなのだが、どっちが似合うかと聞かれれば悩みどころだ。そして日浦、目を輝かせるな。熊谷はチラチラと見るな。

「どっちが似合うか……どっちも似合うはダメか？」

「ダメよ。これ、今度の海で着る水着なのだから」

ぶつちやけ、どちらを着ても似合う。

熊谷友子という元が余りにも良すぎるのだから、なにを選んだとしても似合う。逆にダサくするのは難しい。どっちにしようかと真剣に悩んでいると、米屋が視界に入った。メモ張をこつちに見せておりメモ張には「試着」と書かれていた。

それを見た私は若干だが口が動いてしまい、メモ張を見て口を動かしたと分かるこそくさと米屋は隠れた。

「熊谷に似合う水着、し……いや、違うな」

試着して貰おうとするのだが、そうしなくても良いやと思える物を発見した。

「熊谷に似合うのはこれだ」

熊谷が一番最初に選んだ上下に分かれている競泳水着。これが一番、熊谷に似合っている。

「あの、三雲くん、この二つのどっちか」

「それも似合うが、何だかんだでこれが一番だ」

選んだ水着がどちらでもない水着で若干焦る那須。なんと言おうと熊谷に似合うのは熊谷が一番最初に選んだ水着で、その二つも似合うとは思うが、それには敵わない。

「三雲さん、コレですよ？」

「日浦、それは熊谷を馬鹿にしてる所があるぞ。」

確かにどちらを着ても似合うには似合うだろうが、今度の海ではビーチバレーとかもやるんだ。変に着飾る事なく自分らしく動き回ってる熊谷が何だかんだで一番綺麗だろう。元が美人なんだから」

こんなことを言えば確実に面倒な団体を敵に回すだろう。しかし私が言ったことは後悔はしない。

眉一つ動かさずに自分の気持ちに正直になって答えると熊谷は俯いて頭から真っ赤な湯気を出しており、日浦は中腰となり熊谷の背中をポンと叩いて微笑む。

「どうしてそこまで言えるのに、断ったの？」

「……左手の薬指」

呆れを通り越した那須は大きく息を吐いて、問い詰めるので左手の薬指のみを突き立てる。

それがなにを意味するのか分かった那須は左手の薬指を掴み、綺麗なビンタを入れた。

「頬はともかく、指はやめてくれ。折れたら遊べなくなるし、本当に少し前にバイクの免許を取ったばかりなんだ」

「ごめんなさい、気付いたら体が動いたの……悪意とか怒りはあったわ。もう一発！」
謝りながらも、もう一発ビンタを入れる。

2発で気が済んだのか、左手の薬指から手を離してくれた。

「……くまちゃんとどつちが」

「もう、やめて!!」

予想以上にグイグイと押してくる那須に熊谷は涙を流す。

悲しさでなく恥ずかしさによる涙で、私が推した競泳水着を手には走っていった。

「……あ、自分の水着を買いに行かないと」

佐鳥達に捕まった為に、当初の目的を忘れかけていた。

水着は見れなかったが良いものは見れたなど微笑んでいる佐鳥達を無視し、女性用の水着コーナーを出て男性用の水着コーナーに戻ると荷物を色々抱えた死相擬きを出している堤さんがいた。

「やあ、三雲くん」

水着を見ていた堤さんは私に気付き、声をかける。

「お久しぶりです、堤さん」

「覚えていてくれたんだね」

「まあ……堤さんはなにかとインパクトの恐ろしいお客でしたので」

ボーダーの人でないので関わりは全くといって無い堤さん。しっかりと覚えてくれた事を喜んでくれるのだが、この人の印象の8割が炒飯で死にかける未来で出来ているとは言えない。

「ハツハツハ……あの後は本当に死んだかと思ったよ。」

昨日食べた高野豆腐とバターピーナツツのチョコレートソースチャーハンも中々だったけど、生ハムメロンのくさや汁チャーハンやくさやとフリスク（ブラックミント）のゴマだれチャーハンは越えないよ」

「もう潔く食べないという方向性は無いんですか？」

「本当に美味しい物は美味しいらしくてね……それを当ててるまでは、やめられないんだよ。分かりやすく言えば、獅子唐で言う辛いのを当てないように食べようとしているけど何時も辛いのを当ててるけど諦めずに普通の食べるまで食べ続ける感じかな？」

ただの賭ケグルイだ、この糸目。

「あ、それはそうと今回引率してくれてありがとうございます」

今回の旅行の引率者になってくれたのを思い出し、頭を下げる。

この人が引率してくれないと旅行に行くことすら出来なかったかもしれないから本当に助かった。

「気にしなくて良いよ。あのままだったら諏訪さんが行って君に詰め寄ろうとしていたからね」

「どういうことですか？」

「小佐野の何処がダメなんだと親馬鹿みたいな感じで君に詰め寄ろうと考えてたんだ。」

小佐野は普通にやめると顔を真っ赤にしている、それでオレに引率してと頼まれたんだ。ああ、別に仕方なくて引率者になろうってわけじゃないよ。ぶっちゃけた話、夏休みの予定が全くとって無くてね……こういうのも悪くは無いつて思ってるから気にせずに楽しんで」

「そうですか……プランとかは既に建ててますし、野郎はともかく女性陣がしつかりし

てますので余り気負いをせずに」

引率者の堤さんが数日で気苦労とか気疲れを起こさない様に一応は意識しておく。

まあ、野郎共もなんだかんだでしつかりしていて、プライベートビーチだから変なナンプは無いらしいし、ボーダー隊員だ！と佐鳥が呼び捨てにされることは無い。特に事件に巻き込まれるとか電車が止まるとかそういうのは無いと占いにしている。

「そうだ！君に頼みたいことがあつたんだ！」

「私に頼みごと、ですか？」

次に食べる加古チャーハンがなにか教えろとか言われても、どうあがいてもハズレ引くから無理だぞ。

「実は君に、この男を追跡して欲しいんだ」

堤さんは荷物を置き、スーツ姿のホストの様なイケメンが、二ノさんが写る写真を見せる。

「……えーつと、そう言うのは探偵とかそう言うのに頼んだ方が」

「ああ、そういう感じのじゃないよ。」

正確に言えば君の占いでクリスマススの日に何処に行けば二宮を捕まえられるかを知りたいんだ」

「……私の占いを未来予知かなにかだと勘違いしてませんか？」

二ノさんを捕まえた理由をクリスマスで察した。

カードで占いをしているという風になつてはいるが私の占いは電磁波とかでやっているもので、会ったことの無い人を追跡するのは無理だ。二ノさんは顔をちよつと見たことのあるものの、電磁波の雰囲気を特に覚えてないのでどうにもならない。

「でも、物凄く当たるのは確かだと知ってるよ。」

加古ちゃんが言つてたよ。三雲くんの占いのお陰で新しい才能のある子を直ぐに見つける事が出来たつて」

「……堤さんの頼みですから、断りはしませんけども会つたことの無い人を特定の日は何処に居るのか当てるのは難しいですよ。それとなく、その二ノさんに会う場を作つて貰わないと」

「それなら大丈夫だよ。二宮は高確率でボーダー隊員御用達の焼肉屋に出没するから、その時に偶然に鉢合わせをした感じの設定でいけば怪しまれない。勿論、その焼肉代はオレが出すよ」

「そんな、奢つて貰うだなんて」

今回のお礼を兼ねて二ノさんを捕まえるのに、それで奢つて貰つたら本末転倒だ。「気にしないでくれ……今年こそは、生き残りたいんだ。」

出会えば口喧嘩ばかりしてる癖に毎年誕生日プレゼントを用意している仲悪いのか

良いのかよく分からない関係の二宮を犠牲にしても確率を上げて、美味しいチャーハンを食べたいんだ」

「分かり、ました」

美味しいチャーハンを食べたい。けれども、ゲテモノチャーハンは食べたくない。一か八かのドキドキ感が好きだが、ハズレだけは絶対に引きたくない。

プラスとマイナス、二つの気持ち之交差する堤さんの魂からの叫びが心に強く響き、涙を流すのだが……まずい。

「また未来が急に変わった？特に大きな事じゃない些細な事とはいえ最近、多いな……二宮さんが遂に加古さんの餌食になる、いや、この場合だと二宮さんもなのか？」

二ノさんや太刀川さんを生け贄に捧げたとしても堤さんがチャーハンを回避する未来は何処にも待ち受けていないことに何処ぞの実力派エリートと私は全く同じタイミングで残酷な現実を視てしまう。

第35話

「眠い……昨日の疲れが取れてない」

筒型の細長い鞆を肩に掛けて駅に向かって歩く。

昨日、米屋達とリアルプロゴルファー猿選手権をしたせいかわたしは物凄く眠い。

「10時に時間設定してて正解だったな」

今日から二泊三日の海への旅行。

一泊二日ではなく二泊三日なので遅めの集合にしてもなに一つ問題無く、この眠気だと下手をすれば遅刻していたかもしれない。

「待ち合わせ場所はこの辺……小佐野？」

「なあ、今から一緒に遊ばね？」

「結構です」

待ち合わせ場所に辿り着き、他に誰か居ないのか探すと柱にもたれかかる小佐野を見つめるのだがナンパされていた。

しかし馴れているのかナンパをしてくる男と目を合わせる事なく携帯を触っており、適当にあしらっている。

「すまない、待たせたな」

あしらわれたが諦めないナンパ師。

若干だが苛立っており、なにかする前にと小佐野の前に出る。

「あく……もう、遅いよ。私の方が先についたじゃんか」

私がないをしに来たのか分かった小佐野は私の側に寄る。

既に居たのかとナンパをしていた男は舌打ちをし、小佐野をじっくりと観察してそんな男よりもオレの方がと言つて来ようとするのでメガネを外し、イケメンビームを浴びせて退散させる。

「大丈夫か？私に来るまで似たような事にはならなかつたか？」

「……本当さ、そういうのダメだと思うよ」

もしかすると今のが第2のナンパかと心配すると重心をずらして肩に持たれかかる小佐野。

「こう、忘れかけた頃にそういう対応をされると本当にキツイ」

「すまない」

何気ない優しさが、小佐野を傷付ける。

距離感は大それたのだと思ひ知り、距離を取ろうと一步引いたのだが小佐野は一步詰め寄る。

「まだ30分前だから一緒に居て」

男避けはまだまだ必要か。

メガネを外したらイケメン度が下がるとメガネをつけることを許されず、10分ほどこの体勢をキープしていると綾辻がやって来る。

「まだ20分前なのに、随分と早いな」

「それを言ったら三雲くんも早いよ。何時から小佐野と、そういうのに？」
「10分ぐらい前にこうなった。」

小佐野を放置しているとナンパされる恐れがあるから……流石、元モデル」
「そうなんだ」

チラリと周りを見ると視線を向けている男達が居る。

物凄くモテる側の住人である綾辻は納得してホッとすると小佐野が持たれ掛かっている左肩に持たれかかる。

「綾辻」

「私にも視線が向いてるの……ダメ、かな？」

「堤さんが来たからダメだ。ほら、離れろ」

「おっ、早いね。まだ15分以上も前だよ！」

甘酸っぱいラブコメの様な雰囲気醸し出していたが、そういう展開に入ることにはな

く、引率者の堤さんが手を振ってやって来る。

「……つつみん、はやくい」

「ええっ！ちよつと寝坊したかもつて焦つて来たんだけど」

「大丈夫ですよ。15分前には来れてますし……なんでしたら、後10分ぐらい遅刻しても問題ありません」

褒めてるんだか貶しているんだかよく分からない事をいう小佐野と綾辻。

堤さんが来たので私は肩を貸すことをやめてコンビニでメロンオレを買い、戻つてくると時枝と京介がいた。

「あ、おはようございます」

「お早いですね」

「まあ、楽しみにしていたからな……中学の時は勉強でノイローゼになりかけてたし、こう言う旅行みたいなのはできなくてな」

「すみません、重すぎます」

ブラックジョークだったので京介に引かれてしまった。

「私達が最後、かしら？」

「いや……佐鳥、米屋、出水、国近先輩がまだだ」

ブラックジョークに引かれて2分もしない内に、那須と熊谷と日浦がやって来た。

オペ子は男性恐怖症で、男女比が程良いこの旅行を全力で断り、最終的には別の日にガールズのみで遊びに行く事になっている。

「遅刻してきたと言われてもおかしくないメンツね」

「そう言えば、昨日出水先輩達とゴルフに行ってたんですけど、どうでした？」

「あゝ……最終的には私の優勝で終わったんだが、三輪が趣旨を間違えてきた」

日浦に昨日の事を聞かれたので携帯を取り出して、昨日のリアルプロゴルフアー猿選手権の終わりにとった集合写真を見せる。

私と出水と米屋は木製のゴルフクラブを持つているのだが、三輪だけ普通のゴルフクラブを持っている。

「自分達で作ったゴルフクラブでゴルフするんだが、三輪が趣旨を間違えてプロゴルフアー猿に出てくるホールを回るものだと思つてて……凄かったぞ、三輪のやつが旗包みを使つて来たんだ。特訓したの無駄にならなくてよかったと言つてた」

前半、木製のゴルフクラブを使いこなせずに普通のゴルフクラブの三輪に圧倒されまくつていたのを思い出す。

最終的には逆転できたが、旗包みを使つてきた瞬間に私達が作ってきたゴルフクラブの価値が一瞬にして消え去った感じがして背筋が凍った。

「ゴルフをするのははじめてだったが、割と楽しかったし思いの外体力を使った。そし

て予想以上に金が掛かる事がわかった」

「なんでそこに行き着くの？」

「帰り際にゴルフレッスンの貼り紙をみて普通に万越えてたのが一番記憶に焼き付いて、黒塗りベンツが駐車場にあった……」

野球とかサッカーとかバスケットみたいに簡単に始めることが出来ないスポーツ、それがゴルフだ。

「す、すみませーん!!」

具体的にどういふ感じの試合内容だったか説明をしていると9：59分となり佐鳥と国近先輩が走ってきた。

「ギリギリ10時前ですから、ああだこうだ言いませんけども……どうしたんですか？」
「昨日、防衛任務の後、全然眠れなくてゲームをしてたら気付いたら寝落ちしてて……本当に、ごめんね!」

「佐鳥は？」

「携帯の充電すんの忘れて、アラームが鳴らなかつたんす!」

「ふく……あの二人はどうだろう」

説明を聞いている内に10時になった。

まだ二人が来ていないので携帯を取り出して電話を取り出す。

「あ、私が出水くん電話するね」

「お願いします」

米屋のやつ、なにやっているんだ？

「もしも」

『やらかしたあああああ!!』

米屋に電話を掛けると一言目が叫び声だった。

「お前、なにをしている？」

『わりい、普通に寝てた!!』

「お前な……わくわくし過ぎたのか？」

『いや、普通に寝れた。ゴルフ疲れもバツチリとれてるし、なんでだ?』

「私に聞くな。とにかく、早く来い。準備は出来てるだろ？」

『おう、寝る前に海パンを着たからバツチリだ!』

小学生か!

出水も同じ感じの理由で寝坊をしており、国近先輩は苦笑いをして早く来てねと電話を切っていた。

「……遅刻したら荷物持ちの罰ゲームだと言ったのに」

20分後、出水と米屋は鞆を手にとって来た。

親に車で送って貰った様で保護者の方にすみませんと謝られていたのはなんとも言えず、事前に言っておいた遅刻した場合の罰として日浦と那須と小佐野と綾辻の荷物を持たせた。国近先輩はやらかしかけたので自分持ちで熊谷は自分で持つと断った。

「今回は新幹線じゃないからよかったが、修学旅行では遅刻しないでくれ」

「いや、本当に悪かったって。ゴルフでビリで、焼肉食ったら財布の論吉が数人一気に消えたのが本当に痛くてさ」

「出水先輩、ゴルフは夜に話しましょうよ。今から海なんですから、そつちに意識を向けな」と

どちらにせよ遅刻すんなど注意を少しだけすると、話題を変えてきた時枝。

海の話になると嬉しそうにするのだが、出水はなにかを思い出す。

「そーいや海に行くってだけで、なにするか聞いてなかったな。堤さん、なにするんだ？」

「ええつと……三雲くん」

「宿に着いたら昼食で、その後の時間は割と好き勝手にして良い。」

普通に海で泳ぐのもよし、近くのコンビニに行つて花火を追加してもよし、肝試しの仕掛けをしてもよし……2日目からが本番だ。午前中にビーチバレーを、午後には砂で造型。審査員は堤さんと宿のオーナーさん」

具体的な内容が伝わっていないなかったので、改めて今回の海でなにをするか説明をする。

三日目は午前中に好き勝手に遊んで、午後には帰ると言う割と行き当たりばったりな感じの緩い旅行プランだ。砂の造形の審査員についてなにも聞いてなかった堤さんだったが直ぐにOKを出してくれるのだが、時枝と佐鳥は青い顔をする。

「国近先輩って、確かスカウト組で北海道出身ですよね？砂の造形とか得意ですか？」

「ごめんね、茜ちゃん。雪の造形なら地元でやったことあるけど、砂は無いよ。雪みたいにくつつけにくいし……」

「この中で一番そういうの得意なのって、三雲くんじゃないかしら？去年、美術の成績は学年一位の筈よ」

「そういうの得意であって、砂の造形はやったことない。そういえば、佐鳥達の美術関係の成績どうなんだ？」

「あ、大丈夫です……佐鳥達は、割と普通です」

「私も大丈夫だよ」

なに作るとか全く考えずにノープランで計画を進めていたから、よかった。

日浦達も美術の成績が残念すぎるとかしたくないとかはなかったのだが、佐鳥と時枝はなにかに……具体的に言えば、綾辻に怯えていた。芸術方面の才能は無いらしいが、

視ただけで発狂する様な物を作るわけがないだろう。精々、絵心無い芸人レベルの筈だ……そうだよな？

「お、全然居ねえな」

四塚市よりも更に遠い海辺の街へと辿り着き、海岸沿いを歩く私達。

米屋は此処から見える砂浜に全くとって人がいない事に圧巻される。一昨日ワイドショーとかニューズで海岸で遊んだりする人達を見たが、居ないとなれば逆に凄いな。

「え〜つと……あ、あれだね」

海岸沿いを更に歩いていき、如何にも民宿っぽい大きな和風の家が見えてくる。

先頭を歩いている堤さんは道に迷わなくてよかったとホツとしており、歩き疲れた一同も喜び疲労が一瞬で飛んでいき、少しだけ早足で歩き、あつという間についた。

「すみませーん、予約してた者ですけど!」

「チェックインとか済ませるから、少し下がっててね」

チャイムかなにかあるかと思つたが、無かつたので扉（スライド式）を開くと誰も居なかつたので声を出す。

「洒落た感じのホテルじゃなくて旅館みたいなザ民宿つて、なんだか落ち着きますね」

「実家の様な安心感があるわね……あ、ここ天然の温泉があるの!」

こういう場所に来るのがはじめてなのかワクワクが止まらない日浦と熊谷。

温泉のご利用時間と書かれた立札を見た米屋達が真剣な目をしているが、気にせず待っている。と初老のお爺さんが……六角中のオジイ激似の爺さんが出てきた。

「うえるかむ……」

口調とか声までそっくりなオジイは私達を歓迎してくれた。出水達はオジイによりしくお願いいたしますと挨拶をすると、オジイはチェックインしたと記入する用紙を渡さん……でなく、私に渡した。

「ちえつくいんの名前、書いてね」

「あの、私じゃ無いです」

「……違うの？」

「あ、自分が引率で予約した堤です」

私が受け取った記入票を取り名前を書き込む堤さん。

そんな堤さんに背を向け、後ろにいる米屋と出水は口とお腹を手で押さえていた。

「私って、そんなに老けて見えるか？ 嵐山さんと比べてどう見える、佐鳥？」

「ええつ、嵐山さんとすか!？」

若干目線を合わせ様としない一同。とりあえず佐鳥を当ててみて、ボーダーの顔（19歳イケメン）と比較してどう見えるか聞いてみると慌てふためくが、救いの手は何処

にもない。

「あの人、今年で19だったな？」

「三雲さんは老けているんじゃないやなくて、大人な顔なだけで」

「それを老けていると言うんだ」

「若いよりはまじだと」

「隣に堤さんがいたのに、オジイは渡してきたんだぞ」

「……とつきーはどう思う？」

「佐鳥と同じかな」

「京介は」

「佐鳥と同じっすね」

「い」

「佐鳥と、同じだっ……っ……」

「お前は絶対に違うだろう」

笑いを堪えるのに必死な出水を見ていると佐鳥に聞くのが段々と馬鹿らしくなってきた。

「……そういう老けているのが好きな人も居るからさ」

オジイが人数確認を済ませると中に入っていくのだが、私の足取りは重かった。そん

な私に同情したのか、小佐野が背中にポンと手を置いて励ましてくれた。割と嬉しい一言で、ありがたうと涙目でお礼を言うと男子用の部屋に着いたので小佐野達と分かれる。

「……修学旅行感があるな」

出水、京介、米屋、佐鳥、堤さん、時枝、私の7人で27畳の和室を使うのだが修学旅行間が凄い。

押入れには7人分の布団が入っているから尚更だ。

「後で写真を撮って良いですか？」

「どうしたんだ急に？」

各々が荷ほどきをする中、一番最初に終わった時枝がデジカメ手に取った。

写真を撮られるのはそんなに好きじゃないが、物凄く嫌がる程でない。この場にいる面々はそういうのを嫌がらないのに改まって聞いてくる。

「旅行の写真を撮って、ボーダーに送ろうかなと」

「思い出の一枚とかなら良いんだが、そう言うのってなんだかんだで変な事に使われるか？」

「多分、根付さんがボーダー隊員はプライベートでも仲良しとかで使うかもしれません」
「じゃあ、無しで」

そういう感じの写真は写りたくない。私が断ると時枝は京介と佐鳥の写真を一枚撮った。

「もう、いつそのこと三雲さんもボーダーに入れば良いのに。絶対に受かりますつて」

「なんだつたら、色々と教えますよ。」

「射手水、攻撃手米屋、万時枝とオレ、狙撃手佐鳥、銃堤さん、全部教えますよ?」

「そんな事を言われても、入らないぞ。なんかパワハラされそうで怖いし、防衛任務を理由に学校を休みたくない」

なんとなくだに分かるんだ。

もし自分がボーダーに入ったら部隊に入らず部隊を作らず個人ランク戦も一日一試合しかせず色々な人とシフトに入る日々を過ごして、なんやかんやで何かがマスタークラスになったりして上層部に目をつけられる未来が。

何処の部隊にも入ってないけど、連携とか作戦がちゃんと出来ているんだから入りなさいと本部長辺りから言われそうな気がする。

別にボーダーに入ったら絶対に部隊を作るか入るかしなければならぬ義務は無いので問題ないですと言いつ返すと強制的に太刀川隊辺りに入れられて、A級のトリガー開発の権限を使い唯我を爆弾に改造するトラップパー兼狙撃手になる未来が。今です自爆しなさいと風間さんを道連れにする未来が見える。そしてなんだかんだでパワハラを

理由に辞表を叩き付ける未来が見える。辞表を叩き付ける決め手は太刀川さんにレポート間に合わないから手伝ってと言われたからだ。

「まあまあ、今日は仕事を忘れないと」

「堤さん、めっちゃ似合うじゃないすか!」

「そうかな?」

オフの日なのに仕事の話はNGと止めた堤さんはアロハシャツに着替えていた。

米屋は堤さんとアロハシャツのフィット感に興奮しているのだが、堤さんが別の人に見える。具体的に言えば、ポケモンのタケシに。糸目で顔の雰囲気は何処となく似ているからか、余計にタケシに見える。

「ふうう……海だああああ!!」

「いやっふうううう!!」

「やくやっつて来ましたね、海!」

「京介、日焼け止め使う?」

「サンキュ」

昼食（とんかつ、豆腐と大根の味噌汁、ひじきの煮物、刺身、白米）を頂くと海に出る。

佐鳥と出水と米屋は事前に海パンを履いてきたのか直ぐに着替えが終わり、米屋、出

水、佐鳥、時枝、京介の順に宿を飛び出していった。

「えくと、ビーチパラソルに折り畳み式のビーチベットにクーラーボックス、ビーチバレー用のボール」

「オレも持とうか？」

「ああ、大丈夫です。堤さんはゆつくりと、何でしたらビーチベットで遊んでる彼奴等を見て微笑んでてくださいよ」

普通に海に遊びにいったのは良いが、海の家とかはこの辺には無いのでビーチパラソルとか色々と持っていないとならない。見た目に反して割と軽い物ばかりなので、堤さんの手を煩わせるわけにはいかないと全部持ってゆつくりと出水達を追い掛けて、手頃な場所にビーチパラソルを設置していく。

「あ、手伝いますよ」

「大丈夫、オレ一人でもなる。それよりも日焼け止めで遊んでる馬鹿達を止めてくれ」

機材を設置していく私に気付いた京介は手伝おうとするが、手伝うならば米屋と出水の日焼け止めを塗るのを手伝ってくれ。悪ふざけしているのか胸辺りにだけ日焼け止めを塗っておらず、変にテンションを上げている。

「何時もこの辺で三輪とかが止めるが、歯止めが聞かなくなってる。」

もうすぐ水着が見れると言ったら、真面目に塗り出すと思うから言ってきてくれ」
「なんか慣れてる感じですね」

「弟と一緒に時は率先してこういうことしてるから。ほら、今回は年下や同年代が多い
だろ?」

「弟が居るんすか?」

「私と違って、立派すぎる弟で……メガネだ」

「メガネですか」

「ああ、THEメガネ」

「宇佐美先輩が喜びそうですね」

「本人もメガネ扱いされるの当然だと思ってる節がある……止めてきてくれ」

京介に米屋達を止めに行かせるのとビーチパラソルを設置していく。

サイドエフェクトがあるから那須の体調不良は一瞬で感知できる。サイドエフェクトで数日間は何事も無いと出ているが、万が一が恐ろしい。私の占いは外すときは外す。この前、1億ぐらいに稼ぐことが出来たから調子に乗ってたら7000万になって身に染みた。

「やって来たぞ」

「何処すか!」

「ほら、彼処に居るだろ？」

自分達の日焼け止めを塗り終えた頃、女性陣がやって来た。

佐鳥は待つてましたと言わんばかりに興奮をするので居場所を教えるのだが眉間にシワを寄せるだけだった。

「佐鳥、本気を出すんだ。」

海外のエロい視力検査表を使えば男性の視力は上がるとされている。お前の煩惱の力を見せつけるんだ。いや、この場合だと見るんだが正しいか。あ、熊谷は黒いぞ」

「マジすか!!」

熊谷が着ている水着の色について教えるとパワーアップする佐鳥は瞳孔が開くんじゃないかと言う勢いで見開く。遠くにいる熊谷達が普通に見える私は美人はなにを着ても似合うなと感心するのだが時枝が驚いた顔をしている。

「三雲さん、見えるんですか？」

「ハッキリと姿が見えるぞ。全員が日焼け止めを塗っているから、室内で先に塗ってみたいだ」

キャツキャフツフの塗りあいっこが見れると思っただが残念だ。

「三雲さん、視力幾つなんですか？」

「10は越えている……お、横一列にならんだぞ」

「10……」

私のサイドエフェクトについて余り知らなかったのか時枝は驚くが、驚いている暇は無い。

国近先輩を筆頭に、熊谷、小佐野、那須、日浦、綾辻と水着姿の絶世の美少女達が目の前にやって来た。

「どうかな、男子諸君？」

ニヤリと笑みを浮かべる国近先輩は白色の鼓月を描く線が3本入った黒色のビキニを着ている。これは良いものを見れたなど出水に声を掛けようとするのだがやめた。

「に、似合ってますよ。なあ、槍バカ」

「そうっすね。国近先輩、綺麗です」

国近先輩の胸囲的な戦闘力を前に、二人はタジタジだった。

時折チラツと国近先輩の先パイを見てしまう哀れなおっぱい星人へと成ってしまった。

「三雲さん、三雲さん、どうですか？」

「似合ってるぞ、日浦」

ワンピーススタイルの水着を着てきた日浦。本人の可愛さを引き立てるのにはちょうどいい感じの水着で、とてもさまになる。

「時枝、とりあえず写真を撮ったらどうだ？」

何枚かの写真を撮っておけばボーダー隊員達はプライベートでも仲良しアピールの写真に使える。

小佐野達の水着にも色々と言いたいことがあるが、その前にやれる面倒ごとは今の内に済ませておくのが一番だ。

「いやあ、本当に今回の旅行は最高つすよ三雲さん!!」

「なんだ今さら？」

「嵐山さんと隣を歩く地獄を味わわなくても良いですし、柿崎さんのリア充オーラを浴びなくても済みますし、小学生にも呼び捨てにされない！今までで一番の旅行です！」

「お前、意外と閨が深いな」

事情を説明すると写真撮影の許可をくれたので、写真（見映えをよくする為に男子NG）撮影を開始する。それを間近で見ている佐鳥は涙を流してよかったと喜んでくれるのだが、閨が深い。

柿崎さんのリア充オーラはスゴいし嵐山さんの隣を歩くのは地獄なのは分らないでもないが、閨が思ったよりも深いぞ。

「なによりも水着美女を間近でこんなにも見れる！」

熊谷先輩が白と青のボーダーラインの水着じゃなくてスポーツ水着なのが残念です

けど、アレはアレで最高です！」

「ああいう感じの素の方が絵になる……どうした？」

急に笑顔を止める熊谷達。

写真撮影はもう終わりかと時枝を見ると、私達に視線を向けてくる。

「……佐鳥くん」

「はい、なんででしょうか？」

「どうしてくまちゃんがボーダーラインの水着を持つてるの？アレって

この前、水着を買いに行った時に買ったもので私達以外は誰も知らない筈よ？」

「なあっ！しまった！どうしよう、三雲さん！」

「どうしようもなにも……お前なんで購入した水着について知ってるんだ？」

気付かぬ内に言っってははならない事を言ってしまった佐鳥。和気藹々とした空気は吹き飛び、段々と冷たい視線が飛び交う空気へと変貌していく。救いの手を求めてくるが、私はボーダーラインの水着を購入したかどうかどうかなんて一切知らない。勧められたが、最終的に今着ている水着に決まったぐらいしか知らない。

「そういえば、先輩達が水着を買いに行った日に居なかつたよね？」

「佐鳥くん、ちよつと……」

時枝の発言により怖い笑顔になる国近先輩。

「はい」

国近先輩に呼び出され、前に進む佐鳥。

美女に円形に囲まれて姿が見えなくなりストーリーキングしていた事がバレてしまい、ごめんなさいと三回ぐらい謝り、悲鳴をあげていたのだが途中から声がしなくなりまさかの暴力かと思っていると解散する美女達。

「タスケテ……」

「あの一瞬で、どうやったんだ……」

美女達が居なくなったそこには佐鳥は砂浜に埋められていた。

寝転ぶ形でなく縦に埋められていて頭だけ出ており、あのほんの一瞬で佐鳥を埋めたことに驚きを隠せない。

「とりあえず、これを佐鳥の一枚にするか」

時枝からカメラを借りて、一枚撮る。

「三雲さん、助けてくださいいっ。さつきから、蚊が近寄ってきて刺しそうで怖いっす！」

「安心しろ……ちゃんと蚊は退治してやる」

「虫除けスプレー、取ってききますね」

「とつきー、助けてよー！」

縦に埋められている佐鳥は中々にシユールな姿だ。

元を正せば水着を買いに行く那須達をコッソリとつけた佐鳥が悪いのだが、砂の中は思ったよりも硬くて一人で必死にもがいても微動だにしない。

「安心しろ、ちゃんと助けてやる」

「三雲さん……」

「時枝、宿のオジイを呼んできてくれ。」

その間に私はお婆さんとその孫とリリエンタールとうちゆうねこを呼んでくる……
ネズミは無理っぽいが」

「大きなかぶ!?!」

「冗談だ」

リリエンタールとうちゆうねこを見つけるには物凄く時間がかかるからしない。
持ってきたスコップを手に佐鳥が自力で抜け出せるように砂を掘り進めていった。

「おくい、こつちも頼む!」

「お前達もか」

佐鳥が自力で抜け出すと、直ぐ近くから同じく縦に埋められている米屋と出水からS
OSを求められる。

二人が埋められている事が分かると佐鳥は猛ダツシユで出水の周りの砂をスコップ
で掘って救出し、私も米屋の周りをスコップで掘って救出した。

「人間やっぱエロい事をするとかバチが当たるもんだな」

「後でちゃんと謝っておけよ」

砂に埋めてある程度はスッキリとしてるっぽいけど、一応は遺恨は残っている。謝れば許してくれるけど謝らないと一生許さないレベルでだ。

「誠心誠意謝りますけど、その前に喉が乾いたから飲み物を飲んで良いですか?」

「ちよつと待つてくれ。明日に使ういわしみずとかあるから」

「え、いわしみずとかあるんですか!?!」

謝る前に喉を潤したい佐鳥を連れて堤さんが休んでいるビーチパラソルへ歩く。

堤さんの直ぐ隣にはクーラーボックスが入っており、中を開くとキンキンに冷えたスポドリやジュース等が入っており、一つしか無いポカリスエットのスクイズボトルが浮いていた。

「三雲くん、ずっと気にはなっていたんだけどそれになに入ってるんだい?」

「明日の罰ゲーム用のいわしみずです。」

ビーチバレーで優勝した奴等は昼のバーベキューで最高級の肉を、負けた人にはこのいわしみずを飲んで貰おうかなと」

「いわしみず……岩清水?……いや、違う」

「三雲さん、スポドリとかだと口の中、甘ったるくなるんで貰って良いですか?」

「飲みたいなら飲めばいいが……それ罰ゲーム用のドリンクだぞ？」
「待つんだ、佐鳥くん!!」

堤さんの制止を聞かず、ポカリスエットのスクイズボトルを手にする佐鳥。

唇につけず少しだけ距離を開いた位置で傾け、強く握ると中身の液体が噴出され佐鳥の口の中へと入った。

「いぎいやあ、ゆううううん!」

いわしみずの味を知った佐鳥は一瞬だけ劇画チックな二枚目フェイスになり、地面をのたうち回る。

「すみませんでした」

「もくそういうのダメだからね。」

私達だからこういう感じで済んだけど、もしののさんとかだったら」

「あつひいいいい!!」

「……ああいう感じに、なったのかな?」

「言ってる場合じゃないですよ!!佐鳥、おい、しつかりしろ、佐鳥!」

「出水、ダメだ。こいつアへってるぞ」

苦しみがきたうち回った末に、海辺にいた国近先輩に謝っていた出水と米屋の元に辿り着く佐鳥。いわしみずの味が抜け、苦しみから解放されたその顔はとても健やかな

表情などというものからは遠い遠いアへ顔だった。

「いわしみずは罰ゲーム用のドリンクだと、忠告したのに……まさかここまでとは」

佐鳥はアへつてるだけで命に別状は無いのを確認し、いわしみずの効力に驚く。

ビーチバレーをするならばこれが一番だと作ってきたのだが、佐鳥を一撃で倒すとは凄まじいものだ。

「お、おい！なんだよ、そのドリンク！」

「明日の罰ゲームに使う用のいわしみずだ」

「岩清水がなんで罰ゲームに……っか、最早罰ゲームじゃなくて罰だろ！」

ゲーム性は何処にもないと主張する出水だが、明日のビーチバレーに負けた奴が飲むからゲーム性はある。

二人がまだ勘違いをしている様なので紙コップを取り出し、中に入っている罌水びんすいを注ぐ。

「いわしみず岩清水とは岩から湧き出る冷たく清らかな水の事だが、これはその岩清水じゃな

い。清らかな清水でなく罌びんの豊富なDHAが入っている絞り汁から作られた飲み物、

いわしみず水だ」

「ちよ、ちよつと近付けないで！」

「柚宇さん、怖いのは分かるけどおれを盾にしないでください！おれも怖いんです！」

「つーか、明日飲まされるのかよ……」

「ビーチバレーで優勝すれば免れて、最高級の松阪牛を優勝ペアのみ食べることが出来る」

「プラスとマイナスの比率がおかしいよ……」

ボーダー隊員との旅行初日。

誰一人怪我することなく溺れることなく海を満喫することは出来たものの、代わりに恐怖に溺れさせる事になってしまった。

「……あ、加古ちゃんのチャーハンよりはましだ」

尚、堤さんは舌がバグっていたのか鰯水をすんなりと飲み干した。

第36話

佐鳥が三途の川を渡りかけたものの女湯を覗くと言ったイベントらしいイベントは特になく、初日が過ぎて二日目のこと。

「第一回、絵的にリア充感満載の男女混合ビーチバレー大会！」

朝食を頂き、二日目の海を楽しむべく一同はビーチバレーのネットを設置した場所付近に集まり、司会の貴虎の元で進行するのだが余り浮かない。

「リーグ形式で勝負し、敗者には罰ゲームを優勝者には商品を与える」

「三雲さん、罰ゲームじゃなくて罰だと思えます！」

貴虎の手にあるカクテルグラスとポカリスエットのスクイズボトルに怯える一同。

佐鳥が三途の川を渡りかけたのはこの場に居る全員が知っており、罰ゲームで済ませる物ではない。日浦は飲むのを嫌がるのだが、食べ物で粗末にするんじゃないやありません！と怒られる。粗末にしているのはお前だろうと米屋はツツコミを入れたかったが、声を抑える。

「まあまあ、オレも飲んでみたけど飲めない事は無いよ？バリウム飲むくらいの感覚だ」
「堤さん、大丈夫だよと言ってますけどバリウムってX線を通しにくい鉱石かなにかで

したよね？なんで魚が鉾石の味をするんですか……」

蜂蜜柳葉魚や生ハムメロンくさや汁チャーハンよりは圧倒的なまでにましな鰯水。感覚が麻痺している堤はバリウム感覚で飲み干せると言うのだが、その時点でおかしいと烏丸は呆れてしまう。

「鰯水が怖いのはなんとなくて分かる。

だがな、飲むのはお前達全員じゃないんだ。お前達の中の敗者だけなんだ」

怯える一同に活を入れ、やる気を出させる様に動き出す貴虎。

持ってきたクーラーボックスを開いてビニール袋を取り出し、中に入っている竹皮の封を解く。

「「おお……」」

中には焼肉用の最高級の松阪牛が入っており、スーパーの肉と品質が一目で分かるほど違う為声あげる。

ビーチバレー後のお昼で食べるバーベキュー用の肉だと分かるとテンションも上げる。

「勝者には飴を、敗者には鞭を与える。

敗者になりたくなければ周りを蹴落としてでも生き残れ！頂点を極めれば、飴は……

「このA5の焼肉は確かに存在するんだ！」

「そうだ……勝てば良いんだよ！」

敗者にならないければ良い。

本家と違いトーナメント形式でなく、リーグ形式で負ければ直ぐに鬮水を飲まされるわけではない。

「そうだね……負けなきゃ良いんだよね！」

「そうですよね！・ビリにならないければアレを飲まずに済みます！・二回目は嫌です」

「……変わっていつてるな」

米屋の勝てば良からう発言を気にやる気を出していく綾辻と佐鳥。

米屋と二人の言葉は似ている様で大きく異なっている。米屋は勝つて肉を手に入れるのに対し、綾辻と佐鳥は負けたくない、ビリにはなつてたまるかという思い。上を見ているのか下を見ているのかの差が大きく出ている。

カイジでもなんか似たような事があつたなど中間管理職の男の顔を思い出している
と宿のオーナーのオジイがやって来る。

「もってきたよ……」

「あ、ありがとうございます。」

「じゃあ、私は行ってくるので楽しんでくれ」

「待てや、いらー！」

何処か行こうとする貴虎の腕を掴む出水。

「三雲くん、何処に行くつもりなの？」

この場から離れようとしたので、逃がすまいと詰め寄る熊谷。

「バーベキューの準備。」

意外と時間がかかるから、先にやつとかないと……誰かこう言うのをやらないといけないだろ？」

バーベキューセット一式を指差す貴虎。

オジイに持ってきて貰ったと言われると若干本当かと怪しむのだが、バーベキューの機材が今から一人で用意すればお昼には間に合い全員でやればもつと早く終わるのだから遊ぶ時間が大きく削られるほどよい量だった。

「こういう役割は、私が引き受けるから……誰か一人が苦勞しないといけないだろう？ 気にせずによつてくれ」

言つてゐることはなにも一つ間違いじゃない。

キャンプとか行けば確実に誰か一人が苦勞をしなければならず、遊びに行くこと決まつた時点でそういうのを何処かでやらないといけないのは分かつていたので引率してくれる堤さんにしてもらうわけにはいかないと引き受けた。

「待つて……三雲が出てくれるならつて思つてたのに」

「小佐野……ぶっちゃけ組むなら熊谷と組みたい」

「え？」

「やるからには優勝を目指さないと。肉、欲しい」

ラブコメ的な展開なんて何処にもない。

目をうるうるさせる小佐野なんて効かないと貴虎はバーベキューの準備をしに行った。

「ペアを決めない」と

名指ししてくれたのはなんだかんで嬉しいが喜ばないくまちゃん。

今はあの恐怖の飲み物をどうにか飲まない様に頑張るしかないが残った男を見る。

組むならば、米屋。

貴虎の次に運動神経抜群な米屋。

ビーチバレー勝負を制するには米屋と組むしかないと思ふのだが待ったが掛かった。

「オレ、審判をやらなさいといけないんだけど」

日浦、国近、綾辻、熊谷、那須、小佐野の女子6名。烏丸、佐鳥、出水、米屋、時枝の5名。

引率者の堤は審判をしなければならず、試合に出ない。貴虎が逃げた為に人数が一人

足りなくなつた。

「じゃあ、わしが」

「「「無理無理無理無理無理!!」「」」」

人が一人足りないと分かり、脱ごうとするオジイ。堤以外の男子は一斉に指をさしてオジイが出るのは無理だろうとツツコミを入れる。

このままだと誰か一人がビーチバレーが出来なくなると時枝は多少お昼が遅れても良いので貴虎に参加をして貰おうとするのだが、貴虎は来なかつた。

「オジイさんの方が強いらしいので、そっちの方がお得だそうです」

「かもーん」

いつの間にかアロハシャツを脱いでいるオジイ。

こうなつたらばと全員が覚悟を決め、ペアを決めるくじを引いた。

「やったああああ!!」

「おいおい、喜びすぎだぞ」

米屋・日浦ペア

「先輩となら、優勝出来そうです」

「まあ、やっぱやるからには勝たないとね」

烏丸・熊谷ペア

「熊谷と米屋が別々のペアでよかったああああ」

「あの二人が一緒だったら、絶対に優勝出来ないもんね」

出水・綾辻ペア

「いや、優勝無理っぽいね」

「国近先輩、諦めるの早すぎますよ！」

佐鳥・国近ペア

「ビリだけは、ビリだけは免れないと」

「落ち着いてください、先輩」

小佐野・時枝ペア

「頑張ろうね」

「任せなさいよお」

那須・オジイペア。

「うくん、変えた方がいいのかな？」

最後のペアだけ明らかに浮いていると言うか優勝出来なさそう。もう一度、くじ引きをした方が良いのかと悩む堤。

30分間のウォーミングアップは開始されており、変更するならば今しか無いのだが、那須・オジイペアがなにも一つ不満を言っていない。周りも鰯水で死にたくないのかなに

も言わない。

「第一試合！出水くん・綾辻ちゃんペアVS烏丸くん・熊谷ちゃんペアの試合！」

サーブは一人ずつローテーションで回していくタイブレーク無しの20点1マッチ形式の試合だ！」

「はい、じゃんけんポーン！」

そんなこんなでウォーミングアップの時間は過ぎ、第一試合がじゃんけん勝利した熊谷からのサーブで行われる。

「油断せずにいきましよう、先輩」

「三雲くんと同じ事を言うのね……」

何処そのメガネと同じく構える烏丸。

熊谷は貴虎と似ていないと思いつつもボールを高く打ち上げて、飛んでサーブをす
る。

「ジャンプサーブって、本気かよ！綾辻！」

「任せて！」

サーブをレシーブしに動き出す綾辻。

運動神経は低い方だが伊達にボウダーのオペレーターをしているわけではないと、熊谷のサーブに慌てずに反応してレシーブの構えを取るのだが、バレーボールが綾辻の元

に向かうよりも先に地面に落ちた。

「嘘……」

タイミングや位置は間違いなく完璧だった。

熊谷が打ったサーブがジャンプフローターサーブでなければ綾辻のレシーブは決まっていた。

「ビーチバレーをするって聞いたから、わざわざ覚えてきたのよ。ビーチバレーでのフローターサーブ」

ニヤリと笑う熊谷。

烏丸はこれで勝てる小さくガッツポーズを取っており、次は出水のサーブなのだが熊谷と烏丸によるクイックのカウンターをくらう。

「やっぱ黒一色とかそういうのより似合うな」

バーベキューの準備をしている貴虎は常人なら肉眼で見えない距離から試合を見る。

熊谷がのびのびと活躍しており、黒のビキニならば胸が揺れて上手く動くことは出来なかつただろう。ああいう頑張ってる姿を見るのは心地好いと手を動かす。

熊谷達も体を動かし、最終的には20―8という大差で勝利を納めて第二試合、米屋・日浦vs小佐野・時枝。サポートの名手である時枝は目立つ派手なプレイは余りしない堅実なプレイで小佐野をサポートして一時は優勢になるのだが、運動神経抜群の米屋の

前には勝つことは出来ず20―14で敗北をする。

「じゃあ、第三試合、オジイ・那須ちゃんペアVS佐鳥・国近ちゃんペアの試合を開始する！」

まだ試合をしていない残った2チーム同士の試合。じゃんけんで勝った佐鳥からのサーブとなるのだが、これでいいのだろうかと思ってしまう。トリガーを使って病弱な子は治るのかと言う実験に付き合っている那須。見た目からして還暦も過ぎてるであろうオジイ。

負ければビリになれば地獄の鰯水が待ち受けている。この二人に飲ませれば下手すればあの世に行くのではという危機感とアレはもう二度と飲みたくないと言う生への執着。生と死が佐鳥を悩ませる。

「佐鳥くん、気にしなくて良いのよ」

そんな佐鳥に微笑む那須。

これはあくまでも遊びで負けても勝っても最後は仲良く握手。負ければ最後のプロの世界とは大きく異なると佐鳥に戦う勇気を与える。

「じゃあ、いきまますよーそれええ！」

とは言え、手を抜いてしまうのが佐鳥の良いところ。

弱めのアンダーサーブを打ってくれる。

「あ、そう言えば」

「どうした？」

「那須先輩、トリガー持つてきてますよ」

素で言い忘れて居たことを思い出す日浦。

マジでと熊谷以外の試合を観戦している面々は思うのだが、時既に遅し。那須の手には防衛任務やランク戦で使うトリガー……でなく、医療研究とかで使っている緊急脱出機能とかは無いトリガーが握られていた。

「トリガー、起動^{オン}」

アンダーサーブがネットを越えると同時にトリガーを起動し、運動用のトリオン体へと換装する那須。とはいえ、服装は全く変わっていない。

「ええっ!？」

突如としてトリオン体へと換装した事に驚く佐鳥。だが、那須は待つてはくれない。綺麗な優しいレシーブをしてボールを中に浮かせ、落下地点にはオジイ。那須はなんの合図も迷いもなく走り出して高く飛び

「アターック!」

「きゃあああ!？」

アタックを決め、国近にビーチバレーを当てる。

「幸いというべきか国近はレシーブの構えをしており胸部装甲も凄まじかったので怪我らしい怪我は全くと言って無かったが、結構痛かった。」

「1—0……」

「ちよ、先輩……トリガーを持ってきてたんですか!」

完全にオフの日なのでこの場に居る面々は那須以外は誰一人として持つてきていない。那須が点を取る冷静になる時間が取れる状況となり、佐鳥はなんでトリガーを持つてきてるのかを聞いた。

「ビーチバレーをすることが分かった時、どうしようとなつて……茜ちゃんが当真さんを経由して冬島さんに」

「ちゃんと許可は頂いてます!」

「あのおっさん……」

狙撃手N.O. 1の男、当真が所属する冬島隊の隊長、冬島。

エンジニアの一面もあり、ボーダーでもそこそこの地位を持つており結構頼れる男なのだが空しい青春時代を過ごしていたのかJKを前にすればどうしようもない。具体的に言えば小佐野が麻雀に参加すればボロ負けするほどに弱い。

ガールズチームで美女しかいない那須隊の面々が許可をくださいと頼み込めば、それはもう断れなかっただろう。つい最近不祥事があつた事も知らないのが良かったのか

割とあっさりとは許可はとれた。女の子が天敵の二宮隊の辻みたいになタジタジな冬島の姿を佐鳥は思い浮かべる。

「さあ、油断せずにくわよ」

トリガーを使うことに關しては誰も文句を言わず、試合は進む。

戦闘で使つてるトリガーと違い、身体能力はぶつ壊れては居なかつたが、それでも柿崎さんレベルの運動能力を有しており佐鳥と国近を圧倒していく。

「那須先輩付近にボールダメっす!!」

「じゃあ、オジイちゃんだね!!」

他人の心配をしている余裕なんて何処にもないと、必死になるも10点リードで未得点の佐鳥達。

トリオン体によりスタミナ切れの概念はなくなった那須にボールは渡せないとな須から遠い所にボールをアタックしていくのだが、一瞬にしてオジイが現れてボールを拾いに行く。

「まだまだだねえ」

佐鳥達を煽るオジイ。

「おい、あのじいさん何時の間にか現れやがったぞ!!」

点を決めるのが那須で余り目立たないものの、動きの一つ一つが洗練されまくつてい

るオジイ。

一步の動き出しも早く、ジジイの特殊メイクをしているんじゃないかと思わず疑うほど。

「相手に気配を悟られず接近する方法でえ、地面を蹴って走るのではなく地球の引力や倒れる力を利用して早く歩く…歩くよりも、跨ぐ感じかなあ」

ふっふっふと笑うオジイ。

自分の動きの秘密を教え、試合を決めた。21—0。佐鳥国近ペアは1点も点を取ることは出来ず、敗北。

「パワーバランスが、一気にひっくり返ったな」

オジイという想定外の人物の参戦により下馬評は大きく覆る。

那須（トリオン体）だけならばまだなんとでもなるが、オジイが加わる事により一番最強じゃないかと烏丸は冷や汗を足らす。

「三雲さんが、頼む時点で疑えばよかった……」

貴虎がこうなることを分かっていた事に気付く佐鳥。佐鳥達の次の相手は米屋達、勝てなさそうだ。

「罰げえむ」

試合が終わったので、コートを出ていく面々。すると、オジイが佐鳥の肩に触れて罰

ゲームを要求する。

「いやいやいや、オジイさん。ビリの人だけが罰ゲームを受けるだけで、まだ誰も」
「罰げえむ……あつた方がおもしろいよ?」

「あの鰯水を越える罰ゲームなんてありませんって!」

佐鳥に罰ゲームを受けさせたいのか割と必死なオジイ。

なにかを思いついているのか那須を手招きし耳元でゴニョゴニョと言うと那須は面白そうだと笑い、国近を手招きする。

「な、なにをするの?」

「柚字さん、生まれたてのウサギみたいに震えてるじゃないですか!」

「出水くん、大丈夫よ。そんな酷いことはしないわ」

微笑む那須は国近をビーチパラソルの下に座らせ、膝を借りる。所謂膝枕だ。

「スポーツドリンクを貰えないかしら?」

「あ、これ?」

どんな罰が待ち構えているのかと思つたが蓋を開ければ罰でもなんでもなかった。

国近はよかつたと安心しながら膝にいる那須の命令を聞き、スポドリを渡す。

「こういう罰ゲームの方が、よかつた。お前もそう思わねえか、さと……」

鰯水と比べるまでもなく優しい罰ゲームだと後ろにいる同じ罰ゲームを受けている

であろう佐鳥に話し掛けようとする出水だが振り向くと同時に声が止まる。

「タスケテ……」

オジイは佐鳥の顔に座っており、文字通り佐鳥はオジイの尻に敷かれていた。

「わしに負けたら、これね」

屈辱！シルバーシート of 的刑！

那須の方はキャツキャウツフフしているのに対し、オジイの方は罰ゲームや罰の要素を超越していた。最早、優勝商品の肉なんてどうでもいい。シルバーシートを受けたくないという生存本能が男達を強くしていく。

しかし、那須オジイペアは圧倒的な強さを誇っており、死にたくない生への欲求でパワーアップした男達を悉く倒していき、優勝を決める最終戦。烏丸・熊谷ペアとの死闘を繰り広げ、19-19という状況へと持ち込む。

「くまちゃん……泣いても笑っても、これで最後よ！」

奥の手とは最後まで使わないから奥の手だ。

サーブ権を有する那須は高く跳ぶ、ジャンプサーブを打つ。

「ここにきてのジャンプサーブ！玲ったら、いじわるね！」

最初のトリガーやオジイでのインパクトが強すぎて、ジャンプサーブ程度では驚かなくなつた熊谷。

ボールの落下点を見極めてレシーブの構えをするのだが、自身の前に烏丸が立つ。

「なにを」

「先輩、これフローターです！」

急に出る前に来て来て何事かと聞こうとすると、ボールは急降下。

熊谷の一步手前で落ちそうになり、一步手前にいた烏丸がボールを高く打ち上げる。

「サンキュー、烏丸くん！」

自分のジャンプフローターサーブの特訓に付き合ったのは那須で、やり方は何度も何度も見ている。

ただのジャンプサーブだと油断していた熊谷はお礼を言い、ゆっくりと落ちてくるボールをトスして打ち上げる。

「アターツック！」

「！」

「と、思いますよね」

「おい、それオレの十八番！」

そのまま綺麗にスパイクと思えば一旦停止する烏丸。

スパイクをすると予測し、ボールが来る方向へと那須は移動したのだがボールは来ない。

シンプルながらも上手い一人時間差攻撃。烏丸は貰ったと那須が移動するまえにいた場所へとボールを叩き込んだ。

「勝った、オレと熊谷先輩の優勝だ！」

「それ、負けフラグだつて!!」

「そんな要素、何処にもない！」

高級和牛が目前と迫り興奮してフラグを建てる烏丸。

ボールは間もなく地面へ着きそうになり、那須は反応する事が出来ずにいる。

「オジイもいない、あいつだけシルバースhirt回避か!？」

出水、佐鳥、米屋、時枝はオジイのシルバースhirtの刑を受けており、屈辱を味わっている。

イケメンに芸人みたいな事はさせるな。そんな天からの声が聞こえた気がする出水は勝ちを確信する。

「はいいいいいい!!」

「なあにいいいいいい!!?」

しかしそれは、天からの声は気のせいだった。

ボールが地面についたと思った瞬間、オジイは砂の中から飛び出す超人的なプレイでボールを打ち上げてそのままネットへと入った。

「と、とんでもないミラクルプレイだ」

ビーチバレーで砂に潜るなんて誰が予測したものか。

20―19で試合は終わり、那須と熊谷は握手を交わすのだが熊谷がちよつと嫌そうな顔をしている。

「どうしてもやらないとダメ?」

「ダメ」

国近、小佐野、綾辻、日浦と膝枕をしてもらった那須だが熊谷だけ別の罰ゲームだった。

具体的に言えば胡座している熊谷の前に那須が座って背もたれにする百合好きならば興奮する馬鹿つプル座りで、熊谷は恥ずかしいのだが敗者には断る権利は無いと罰ゲームを受ける。

「まさかの大穴が優勝するとはな」

「三雲さんが居たら、結果が……いや、どうだろう」

「結果的に那須先輩と組みますから、優勝で終わるんじゃないんですか?」

1位は那須・オジイ 2位は熊谷・烏丸 3位は日浦・米屋 4位は時枝・小佐野と4位までの順位は決まった。

最終戦は綾辻・出水ペアVS国近・佐鳥ペアの試合。その試合で負けた方がビリとな

り罰ゲームを受けなければならぬ。

「佐鳥、お前もう一回飲めよ」

「いやいやいや、もう一回なんて嫌ですよ」

「二回目も大して変わらねえだろ！」

「じゃあ、一回目も変わらないじゃないですか！」

「馬鹿野郎、0と1とじゃ大きく変わるんだよ!!先輩の言うことが聞けねえのか！」

「ボーダーに長い間居るの意味ではオレが先輩です！」

「年功序列ではおれが上だ！」

「それなら国近先輩が一番上です！」

「出水くん、飲んでくれないかな？」

「柚宇さん、それパワハラです！」

「出水くん、それブーマランだよ」

1位はもう望めない両ペア。

鯛水は恐ろしいと押し付け合いながらも、試合は進んでいき出水達が少しだけリードする。

「京介、大丈夫か？」

「大丈夫じゃ、ないです」

バーベキューの準備がある程度出来た貴虎が水分補給に戻ってきた。

オジイに文字通り尻に敷かれている京介を見て心の方が無事か心配するが、割と無事そうだったので写真を一枚撮った。

「おかえりなさい」

「なんか凄い事になってるな」

「撮らないで……」

百合つてる熊谷と那須をみてこれは良いものだとかメラに納める貴虎。

どういう感じの結果に終わったのか那須に聞き、今がピリを決める最終戦だと教えてもらう。

「三雲さあん！ 鱈水を飲まないってのは無しですか！」

「……そうだな」

貴虎の存在に気付いた佐鳥は罰ゲームの廃止を要求する。

土下座しそうな勢いで叫んでおり、このままだと駄々を捏ねるだけなので色々考える。廃止することは一切考えないが。

「じゃあ、アレだ。国近先輩が佐鳥の分も飲むで手を打とう」

「絶対にやあ!! むしろ佐鳥くんが私の分も飲むで！」

「見ろ、日浦。アレが人間の本性だ」

「なにを教えてるのよ!」

生き残りたいが為に押し付け合いと魂の叫びをあげる国近と佐鳥。

「このままだと、このままだと……」

試合に勝つことは出来ない。

心の何処かで勝つことを諦めてしまい、どうにかして飲まない方法は無いかと佐鳥は探す。

「どおらっしやああああ!!」

「ひゃあん!!」

探している間にもどんどんと点差は開く。

出水は全力のスパイクを叩き込み、レシーブしようとした国近はスパイクに耐えきれずに尻餅をついてしまう。

「はー!」

そんな国近の姿を見てこれだと天命を授かる佐鳥。

マッチポイントなのもちょうどいいと直ぐに実行に移る。

「出水くん、頼んだよ!」

「長かった、本当に長かった……」

綾辻がトスで打ち上げたボールに向かって跳ぶ出水は今日の試合を走馬灯の如く思

い出す。

すぐ近くで尻に敷かれていゝる京介同様に出水はオジイの尻に敷かれ、シルバーシートにされている。アレほどまでの屈辱は自分の人生で無かつたと一粒の涙を流す。

「貰つたあ！」

スパイクを待ちわびていたと言わんばかりに跳び上がる佐鳥。

手を伸ばしてスパイクを防ぐ事は一切せず、かといつて出水の動きを全く見ようともしていない。

「佐鳥、もしかして……」

「顔面にボールを当ててもらうつもりだな」

鱒水の本来の製作者である乾と全く同じ事をしようとする佐鳥。

この時点で貴虎は佐鳥に国近の分も飲ませてやろうと決め、周りもそこまでして飲みたくないのかと冷たい目を向ける。

「させないよ!!」

自分だけ鱒水を逃れようとするのを許せない国近。

佐鳥の海パンを掴んで一気に引っ張つた。

「あ……」

「お前は見るな」

「なにがあつたんですか!？」

その結果、海パンが脱げた佐鳥。

こうなることが分かつていた貴虎は佐鳥の汚物を見せるわけにはいかないとい浦の目を隠した。

「お前、そりゃあねえだろう!!」

バシイン!と綺麗な音を鳴り響かせスパイクを決める出水。

ボールは急降下していき佐鳥の顔面でなく、佐鳥の金的へと命中。

「ぬうおおおおおおおん!!」

狼の如く吠える佐鳥はもがき苦しむ。

国近はどうしようかと佐鳥の海パンを見るのだが、なんだかバツチいと感じもがく佐鳥の上へと置いた。

「アレって、そんなに痛いのか？」

「玲は知らなくて良いのよ!!」

3分ほどブレイクダンスの如く震える佐鳥。ついていない那須はどれほどのものかと貴虎に聞くのだが、熊谷に止められる。

「熊谷、お前もだ……無様だな、佐鳥」

「三雲、さん……ぎい!？」

痛みが収まり、苦しみから解放された佐鳥を見下ろす貴虎の手にはポカリスエットのスクイズボトルと鰯が握られていた。

それを見た佐鳥は今から自分がなにをされるのか気付き震える。

「あ、あのお……佐鳥はもう充分に罰を受けたかなって。三雲さんも男なら」

「ああ、分かっている……お前はもう充分な迄に罰を受けた」

必死になって鰯水を回避しようとする佐鳥。

貴虎の言葉を聞いて救われたとホッとす。そう、佐鳥は充分過ぎるまでの罰を受けた。だから、罰は与えない。

「と言うことで今から罰ゲームだ」

「えっ……むごお!」

ポカリスエットのスクイズボトルを口に入れられる佐鳥。

「わざと顔面にぶつかって気絶したフリをしようとした事についての罰は与えない。だが、本来の罰ゲームは飲んでもらう……鰯水だけに」

貴虎は上手いことを言おうとしているのだが、全くと言って上手くない。鰯水と同様

に美味くない。

ムギユウつと強くスクイズボトルを握ると鱈水は流れ出ていき佐鳥の口に入ると再びもがき苦しみ逃げようとするのだが貴虎に押さえ付けられて逃げることは出来ない。「安心しろ、お前が居なくなったら頑張つて私がツインスナイプを会得する。」

なんだつたら全ポジジョンを使いこなして新人育成とかも頑張る。指導する人、少ないらしいじゃないか」

「おい、あいつ死ぬの前提で話してねえか？」

「でも三雲が入るなら……根付さんがちよつと痛いだけで、弓場さんレベルの銃手が佐鳥と入れ換ええなら大分好条件じゃねえの？狙撃手出来るなら太刀川さんに相談して入れて貰おうかな……」

余計な一言を言えば此方にまで被害が被る

米屋と出水は佐鳥が逝つてしまった場合の話を実剣にするのだが、佐鳥を犠牲に貴虎を入れるのは良い買い物だという事に気付く。

「三雲先輩は嵐山隊に入るので、スカウト厳禁です」

「とつ……おお……」

ベストフレンドにも見捨てられる佐鳥の意識はノックアウト。

白目を向いてビクビクと痙攣を起こしており、鱈水をどれだけ入れても溢れるだけ

だった。

「もう無理か」

「三雲くん……」

「空ですから国近先輩の分はありません」

佐鳥が終わったから次は自分だと怯えていた国近。鰯水が無いと分かれればホツとするのだが、もしかすると自分もあなっていたのかという危機感を感じる。

佐鳥はorzの体制を取っており、尻を太陽に向けている。三枚目の佐鳥だから許される事だと尻に鰯が刺さっている佐鳥に合掌をする。

「さて、全員砂を落としてこい。今からバーベキューだぞ」

「お、待ってました！」

ビーチバレー大会。佐鳥が体を張ってくれた為に割と盛り上がりを見せた。

第37話

クトウルフ的なものを綾辻が作るのは予想外で、小佐野が軽く発狂しかけたものの海への旅行は楽しかった。

しかし、それよりも彼女とのデートは楽しい……いや、違うな。旅行の楽しさとツアーデートの楽しさは大きく違うか。

充実した夏休みを過ごし、2学期がはじまり文化祭。去年、実質ワンオペで占い師をしたので休んだり遊んだりする暇はなかったので今年はず……と思つたら、別役が仁礼と当真さんを巻き込み一時のテンションに身を任せて講堂で劇をしようぜとなり、ボーダー隊員の生徒達が日頃授業休んだりして迷惑かけてるからとそれに付き合ひ、何故か小道具を作ることになった。後、S村さんが今年も来たが今年も無理ですと言つたら今にでもローキックしてきそうで怖かった。

「出水と米屋の分のノートはこれで大丈夫か」

本日防衛任務で授業を休んでいる米屋、ボーダーの合宿と言うなの遠征に行つていてである出水。

主に休んでいるボーダー隊員に貸すノートに今日の授業で教わつたことを自分が

使っているノートに写しており、要点だけを纏め終えると一息つく。

「三雲くん、ノート貸してくれる?」

「……」

「どうしたの?」

「気にするな」

原作開始が近付いてきたせいか、街行く人達に死相や不吉な相が出まくっている。

昨日休んでた分のノートを借りに来た熊谷にも物凄く不吉な相が浮かんでおり、回避することは簡単だけど出来ない可能性もある。熊谷は3%ぐらいの確率で災厄に遭うと私のサイドエフェクトが言っている。

「そういうえば、A級にはなれそうか?」

熊谷に世界史のノートを貸し、ふと思いついたので聞いてみる。

日浦が居なくなる未来を回避するにはボーダーの顔的な存在や支柱的な立ち位置になるのが一番手っ取り早いと私は思う。その為にはA級になり、嵐山隊と肩を並べられるぐらいに強くならなければならない。

「B級7位で止まってるわ」

「それはスゴいのか?」

「B級の隊は20以上あって、上から数えて直ぐだから……でも、7位になったのは2月

の時で、ランク上位陣の隊はA級隊員よりも強い人達が多くて、その中には元A級の部隊が……」

「つまり停滞しているんだな」

私の言った事がきつかけで、本来よりも1つだけ順位を上げている那須隊。喜ばしいことだと一瞬だけ思うのだが、それは大きな間違いだと気付く。

今年の6月からか10月からかは知らないがBランク戦に二宮隊は参戦。更に言えば影さんが暴力事件を引き起こして影浦隊もBに来た。

去年の2月に7位になったと言うことは、そこに二宮隊も影浦隊も居ない時点で行った順位で繰り下げれば9位。二つの隊が無し7位は喜ばしいことだろうが、そこから上にいるのは生駒隊の様に一人ぶっ壊れて強い人がいたり、弓場隊の様に型に嵌まれば余裕でA級と渡り合える隊。なんだったら一人ぶっ壊れて強い人が居て連携で大物喰い出来る東隊もいる。その上での影浦隊と二宮隊参戦はかなりの絶望だろう。上位に一度は辿り着きはしたものの、そこから先の一步を踏み出すことは出来ずに壁に阻まれてしまったのを熊谷の表情はそれを物語っており、良い結果じゃないかとは喜べない。

「上の人達はそんなに強いのか？」

「ええ……って、こんな事を三雲くんに話をしてもし方ないわよね」

「関係はあるぞ……なんだかんだで上に行かなければならないと焦らせたのは私だ」

「それなんだけど結局、あれから一年以上も経っててなにもなくて、茜は家族にボーダーは良いところで危険じゃないってアピールもしてて、家族と仲良くしてるし、おかしなことも起きなかったわ。ボーダー推薦で此処に来ようとしたのは怒られたらしいけど」

「それに関してはお前と那須も本気で説教してやれ。ボーダーを理由に学業を疎かにするなら止めさせられる可能性もある」

「確かに、そういう感じでボーダーを止める人も多いからありえそうね……」

「スカウト組の別役が未だになにも言われないのは来馬さんの人徳のお陰だと私は思ってる。あいつ、本当にダメだからな。その辺、上層部とかと話す機会があったら言ってくれ」

別役に恨みは無いのだが、一番成績が悪いので引き合いに出す。

一応、修が入学した時の為にとノートを取っているから日浦も使えるが……自主的に勉強をしないと、割と渡さない事も考えなければならぬ。この前、特に仲良くもない顔見知り程度の三浦が来たときは軽く引いたぞ。

「他人の心配よりも自分の心配をした方がいいか」

熊谷にノートを貸すと家へと帰り、自分の部屋で色々と考えて学校から貰った進路希望調査票を見る。

高校二年で2学期も後半戦どころか11月も終わりまでやって来ている。そうなる

と考えなければならぬのは進路で、私は大学に進学することを希望しているが、そこから先になにをするのかを全く決めていない。隣児さん関係の出資は続けようかなとは決めているが、それだけでそこから先はなにも考えていない。大学に行つてから考えれば良いのかもしれないが、そうやって調子に乗ると痛い目に遭う。

「母さん、これにサイン頂戴……なにしてるの?」

「最近デジタル化した息子の作品を見るわ」

サインの必要な書類に母さんに貰おうとすると母さんはノートパソコンを見ていた。

なにをしているのか気になり聞いてみると、デジタル化した私のストレス発散で描いた漫画を見ていた。

「あの手この手でロックしているのに……指紋認証、どうやって解除したんだ?」

「漫画にシャー芯を使えば浮き出るって描いてあったから、試してみると成功したわ。

この新作、面白いわね」

「はいはい……これにサイン、ください」

「ちよつと待ってて」

母さんを相手に漫画を隠すのはもう無理かもしれない。

進路希望調査の書類にサインをして貰い、母さんから漫画についての感想を聞いてみると電話が掛かってくる。

「あら、修からだわ」

「そういえば、今日はまだ帰ってきていないね」

ランク戦をしてB級を目指しているのか、帰りが遅くなる日が増えてきた修。

夕飯がいらなとかそんな感じの電話なんだろうなと自分が描いた漫画を見る。デジタル化したお陰で絵のリアリティ差が向上し、47ページオールカラーを約二日で出来たのは嬉しい。

「え……そう……わかったわ。……女の子？……ツチ……男の子なのね。分かったわ、夕飯を多く作るわね」

「聞こえるレベルの舌打ちをして、どうしたの？」

「修が会わせたい人が居るらしいの……男の子みたい」

「母さん……女の子は千佳一人で充分だろう!!」

あの手この手とやっても、一切くっつかないけど良い感じの距離感を保っているけど何かの拍子にくっつく!修がモテまくるのは良いけども、最終的には一人を選ばないとダメなんだ!!」

修が男を連れて帰ってくる。友達かなにかだろうと喜ばしいことだが、母さん的には女を連れて帰って来た方が良いみたいなので私は全力で抗議する。修が連れ帰って良い女の子は千佳だけだ。母さんも千佳にお義母さんと言われたいと言ったのに、心が

入れ替わったのか？

「修がお友達を連れ帰るだなんて、珍しい事もあるものね。張り切らないと」

女の子でなく男の子を連れてくると分かったので、喜ぶ母さん。

顔は相変わらずの無表情だが張り切っているのが電磁波から分かり、私もなにか修の友達と暇潰しに遊べるものは無いかと自分の部屋からトランプやオセロを取り出す。

「……修の友達、誰だろう？」

客人を迎える準備を色々とし、修の帰りを待つのだが修が誰を連れて帰るんだと疑問を持つ。

原作でもそうだが修に友人らしい友人が居る描写を見ない。三好くんとか程好い距離感の奴等は居るがハッキリと友人らしい友人は居なさそうだ。

「ただいま」

「おかえり、お……」

「どうも、はじめまして。オサムのお父さん。オサムのクラスメートのくがゆうまです」
玄関のドアが開く音がし、修が友達を連れて帰ってきたと迎えるのだが立ち止まる。

友達を連れて帰って来たのは確かだが、連れて帰って来たのは三三三が似合う小学生ぐらいの男の子、空閑遊真だった。

「兄だ」

「ん？」

「空閑、その人は僕の兄で父さんじゃない」

「もう一度言おう。兄だ」

私を見て行儀よく挨拶をしてくれる遊真に訂正をいれる。

時折と言うか結構間違われるが私は修の兄であって決して父ではない。老けて見えるが修と二歳違うだけだ。

「……む、それは大変しつれいしました」

数秒間疑ったものの、サイドエフェクトが発動せずに本当のことだと信じて謝罪をしてくれる遊真。この感じでいけば恐らくだが

「あら、お帰りなさい」

「早速、父親と間違われた。私ってそんなに老けて見える？」

「25で通用するぐらいには見えるわ」

酷い。

「はじめまして、オサムのおねえさん。くがゆうまです」

「母です」

「え？」

「空閑、そっちは僕の母さんだよ」

「……?!?!」

「気持ちには分らないでもない」

やっぱりと言うべきか今度は母さんを姉と間違える遊真。

普通は逆だろうと言いたいのだが言えばなにかしら飛んできそうなので言わず、一先ずは家が上がって貰うのだが修は深刻そうな顔をしている。

「こんな、騙し討ちの様な形で言うのは悪いことは分かっているんだけど言うね……空閑は近界民なんだ」

「そんなの見ればわかる」

「あら、そうなの?」

修の告白をサラッと受け止める私と母さん。

だからどうしたと言わんばかりに母さんは夕飯の用意をし、私は修がなんで連れ帰ったのか教えてくれるのを待つ。

「……驚かないんだな」

「さつき、言っただろう。近界民は実は人間とか普段から襲ってくるのはロボットとか教えてくれたのは兄さんだって」

「いや、正直に言えば連れ帰った事には驚いているぞ。」

こう言うのは私に頼らずに自分で考えるかボーダーの偉い人と相談するかにしない

とダメだろう」

「分かってる。分かってるんだけど……車に跳ねられるのを見たら、そうは言ってもらえないって」

「……」から説明を頼む」

今日から原作開始だったのかと頭を抱えながらも、此処に来るまでになにがあつたのかの説明を聞く。

遊真が遅刻してきて、色々と目立ったりした。三バカに絡まれているのを見て修が助けに入って逆にボコられる。警戒区域付近でそれらが起きていて近界民襲来。修、トリガー使うが負けかける。遊真が助けるとそこまでは第1話通りの展開。

最初はボーダーの方かと聞けば違うと否定し、自分近界民ですと名乗る……そこまでは良かったが、此処からは私が修に色々と余計な事を教えていたので質問タイム。

近界民は人間なのか？人間だったら普段から襲ってくるのはロボット的なのか？トリガーと近界民は密接な関係なのか？と色々と聞いたりし、遊真はそれにちゃんと答えた。

見た感じ悪くないやつだが、近界民を名乗ってトリガーを持っているからと考えると遊真は今までの話は無しだ忘れてくれと言った。

自分の聞いたこちらの世界と実際のこちらの世界が違っていたり、目立ちたくないか

らと忘れろと言うのだが、聞いた以上は忘れられないと言う修。

だったらと揉め事とか自らで起こすつもりはないけど起きてしまおうし、色々と情報を教えたんだから修もおれに二ホンのことを教えてくれよと言ひ、お前が悪人だったら即座に通報するからな！で幕が引いた……のだが、遊真が赤信号で渡つて事故を起こしたのと金の価値が分かつていないのでヤバいと連れ帰つた。

「頭の痛い話だ……」

連れ帰つて来るのは予想外過ぎたので少し頭を抱える。

確かに目の前で近界民を名乗る幼い少年が交通事故に遭えば約束を破つてでも相談しなければとなる。これに関しては修を責めることは出来ない。なんだかんだで1日2回も交通事故に遭う自称近界民は一人では手に終えないだろう。

「話は大体分かった。確認の為で悪いが、なにか悪い事をしに来たんじゃやないな？」

「おれはどこかの国の人間じゃやないよ。こっちに来たのも個人的なことだ」

「そうか。じゃあ、困つたら修を頼れ」

「ちよ、ちよつと兄さん？」

「……オサムのおにいさん、疑わないんだね。もしかするとおれがどこかの国のスパイかもしれないのに」

「遊真……スパイならもつと上手くやるだろう」

「む?」

「転校初日に近界民でトリガー持っているとバラすやつが何処にいる?」

「たしかに……オサムのおにいさんなら、どうするんだ?」

「如何にして三門市の外に出るかを最優先事項とする」

「まだまだ夕飯の用意に時間が掛かりそうなのでスケッチブックを取り出し、自分が敵ならどうするかの説明をする。」

敵の本部がある街には敵の監視の眼があるので先ずはそこから抜け出す事を最優先事項とする。三門市にはボーダーの施設とか地下道なんかは沢山あるが三門市の外にはなにもない。蓮乃辺と三門の境界線の我が家辺りでトリガー使ったりすればバレるだろうが四塚市辺りで使えば目撃情報さえなければ足はつかない。

三門市と程好い距離感のある場所を拠点にし、着実と情報を集めて準備をして三門市でなく神戸や名古屋といった国の主要都市を同時に破壊すればボーダーどころかこの国は割と簡単に終わる。

要するに風都とか沢芽市でなくヒーローが活動していない場所を集中的に狙えばいい。仮面ライダーフォーゼでも交換編入生としてやってきたメテオと入れ替わりで昴星高校に行つたアリエス・ゾディアーツがあつかりと昴星高校を支配下に置いていたのが良い例だと思う。

「日本を落とすだけなら、意外と簡単に出来る。」

こっちの世界のトリガー以外の兵器は近界民に全くといって通用しなくて自衛隊とかが派遣されても特に意味はないということが分かりさえすれば普段から襲撃してくる奴等10体ぐらいで政令指定都市の住居とか重要な施設破壊をメインとする攻撃を同時に数カ所襲撃しておけばほぼ詰みだ。欲を言えば6ヶ所、最低でも3ヶ所同時にすれば戦力分散も出来るし……シンプルに三門市から遠いから現場に辿り着くまでに時間が掛かる」

仮に博多とか神戸とかに近界民が出現したら一貫の終わりだ。

なにがヤバイかと言えば現場に向かうだけでバカみたい時間が掛かり、現場に辿り着いた時点で全てが終わってる可能性もある。

「兄さん、それ今考えたの?」

「そんなわけないだろう。自分が敵なら、テロるならこうすると漫画のネタを考えてる時に浮かんだんだ」

そっちの方が尚更に質が悪い。

修はそんな事を言いたそうな顔をして居たのだが、それを言わないのが修の良いところだった。

「オサムのおにいさんは、どこかの軍隊の人か?」

「そんなわけないだろう。進路について色々悩んでいる学生だ……これ以上はこの話はやめよう。

遊真は悪い事をしに来たわけじゃない。本気でこっちの世界に潰しに来ているのならばもつと恐ろしい事をしている。なにしに来たかは聞かないが、悪いことじゃないのは確かだ。修を頼ろうとしている。私が言えるのは修を騙していたら本気で潰すのとようこそ此方の世界へ、私は歓迎するだけだ」

小難しい話をこれ以上はするつもりはないと話に幕を引き、手を差しのべる。

遊真はキョトンとした顔をしており、少し驚いてはいたものの私との握手に応じてくれた。修も悪いことをしに来たんじゃないならば、仲良くはしたいと改めてよろしくと遊真と握手を交わした。

第38話

遊真は母さんの料理を気に入ってくれて、母さんも遊真を気に入り、一日目は終わった。

これから先、原作が始まり様々な困難が待ち受けているだろう。だが、修ならば、修達ならばきつとそれを乗り越える事ができる。ランク戦とかは修が成長しなければならぬので手出しはしないから貸せる力は限定されているがそれでも力になるうと思う。明日はイレギュラー門が発生するが、修の訓練用を遊真が借りて倒すから問題ない……ZZZZ……！

「……寝ている場合じゃない!!」

明日から修は大変だろうが頑張れよと他人事の様子に眠りにフケていたのだが、ふとあることを思いだし目覚める。

時計の針を見ると時刻は4時00分。冬場な為、布団から出たくないが出なければまずいと布団から出て着替え、意識を無理矢理叩き起こす。

「視界に感じる違和感の正体はこいつだな」

家を出て数歩先の電柱に隠れているゴキブリに近い姿のトリオン兵ラッド。

分かりやすく言えば偵察ロボで、こつちの世界を偵察しにやって来ているのだが恐ろしく弱い。更に言えば、数が尋常でなく余裕で千を越えており街の至るところにいる。

「弱すぎるな」

見た目がゴキブリですばしっこいものの、武器も備わっていないラッド。

生身の私が素手で持つてもカサカサと手足が動いているだけで、空を飛んだりビームを撃つたり溶解液を吐いたりなどしてこない。電磁波も弱く街中の至るところに居るせいで視界に若干違和感を感じる程度だ。

「電磁波は覚えた……だが、この量はまずいな」

非常に厄介な改造されたラッド。電磁波をしつかりと覚えた。

メガネを外し、電柱を登って出来るだけ遠くを見るのだがバカみたいな量のラッドの電磁波を視認する。私のサイドエフェクトでも正確な数が分からない。

自分で全てどうこうするとは考えていないが、この数には危機感しか感じない。

「中途半端にボケたな、私」

電磁波の中に二つほど恐ろしい物を発しているのが見える。

それがなんなのか分かり、あることを思い出すと私はラッドを原型を留めたまま壊すと修の部屋に向かった。

「修、起きろ!! まずい、まずいぞ!!」

「ん、んう……どうしたの？」

「家の前に近界民がいた!!」

「ああ、そうなんだ……なっ?!」

よし、起きた。

これでもかと言わんばかりにラッドを見せつけると寝惚けていた修の意識は一瞬にして覚醒。メガネを着けてラッドをまじまじと見て、手に取って感触を確かめると不思議な感じの感触で見た目も相まって近界民だと理解する。

「家を出て、直ぐの電柱に近界民がいた」

「待って、兄さん。家は三門市と蓮乃辺市の境界線上にあつて、警戒区域からは遠いんだよ!」

「だが、居たものは仕方あるまい。とりあえず、着替えるんだ!」

拾った場所を教え、有り得ないと言いたいがそんな暇は何処にもない。

1時10分までに残されたタイムリミットは約8時間。この8時間までに色々とやっておかなければ洒落にならない大惨事になる。いや、1時10分過ぎても良い。なんなら3時まででもだ。

「着替えるって、何処に行くつもりなの?」

「三門市麓台町8—6—1だ!」

「そこって、もしかして」

「念のためと遊真に聞いておいた遊真の住所だ」

「もしかして兄さん、空閑が置いていったトリオン兵だと思っているの?」

「いや、遊真の電磁波は残留していない。遊真はまごうことなき白だ。だが、これを見てくれ」

「カメラ?」

ラッドの背中についているカメラの様な部分をトントンと突くと、それがなにか分かってくれたので頷く。

「見た目からして私達を拉致る個体じゃない。」

カメラっぽいのが付いているから、戦闘以外に使用されてるかもしれないから先ずは遊真に聞いてみて、なにか分かれば考えることが出来る……とにかく、行くぞ! 後、提出する時はお前が拾ったことにしてくれ!」

「わ、分かった!」

私に急かされるものの、ちゃんと歯磨きと洗顔を忘れない修。

バイクで向かいたいのだが早起き過ぎたのか眠く、事故りそうだと自転車で遊真が住んでいる家へと向かうと屋根の上で寝転び空を眺めている遊真を発見する。

「く、くが」

「オサムとオサムのおにいさん、どうしたんだ？」

「こ、これ……を……」

「修、自販機が近くにあるから水でも買ってこい……釣りはいる」

全力で飛ばし、遊真の元に辿り着くものの息切れしている修。

体力が無さすぎると思いつつ財布から千円札を取り出して飲み物を買に行かせる。

「家の前で、こんなのを見つけてな」

「む……オサムのおにいさん、疑ってるの？」

「いや、疑っていない。これに遊真が触れた痕跡は残っていない。私はコレについて聞きに来ただけだ」

ラッドを見せると疑うので此処に来た理由を教えたと納得する遊真。

貸してくれとラッドを受け取りまじまじと観察をしていると飲み物を買いにいった

修が戻ってくる。

「兄さん、おつり。空閑の分も買っておいたよ」

「お、サンキュー。ふむ、何時もと同じか？」

「空閑、なにか分かるか？見たところ、カメラみたいのが付いているんだけど……」

コンコンと人差し指を曲げて強度を確かめる遊真。

このトリオン兵がなんなのかが分かっていることが分かった修は聞くのだが、どうす

るべきかと遊真はなにかに悩み、暫くすると遊真の指に嵌めている指輪型の黒トリガーから炊飯器の様な見た目の遊真のお目付け役、レプリカが出てくる。

『はじめまして、オサム、兄殿。私はレプリカ、ユーマのお目付け役とでも思っています。』

「ああ、どうも……出てきたってことは教えてくれるのか?」

『それはユーマの口からで、私はこれについて解析する』

レプリカはそう言う口を開き、チューブの様なものを出してラッドに繋げ解析を始める。

その間、手の空いている遊真はラッドについての説明をしはじめる。

「こいつはラッド、偵察用のトリオン兵でよわっちいけど数が多いんだ。」

オサム達の家の前で見つけたってことはこの街にたくさんラッドがいると思う。

「どうだ、レプリカ?」

『解析完了。このラッドは改造されたラッドで、この街のそこかしこに居る』

「なっ!?!」

『ボーダーが立ち入り禁止にしている区域だけでなく、この近辺にも多数存在している。街全体にレーダーを広げていないが、街の一部だけでも千をも越えた数がある』

「千体以上も……改造されているって通常とどう違うんだ?」

驚き続けた結果か、逆に冷静になってきたな。

『門をその場に発生させることができる』

「なっ!?!」

即落ち2コマ並みの早さで冷静さを失ったか。

遊真とレプリカから改造ラッドについて知らされると修は急いでボーダーの本部に向かわなければと自転車に乗ろうとするのだが、私は止めに入る。

「兄さん、ラッドをボーダーに届けないと」

「待て、折角遊真から色々と聞けたんだ。

届けるのは良いとして、なんの説明もなしに出してしまえば、それこそ近界民の思う壺だ!」

それだけは、ただなんの考えなしに活動させることだけはあつてはならない。

それが一番面倒な原因を作り出すことになるのだから、それを防ぎさえすれば未来は大きく変えることができる。私は修が行かないように必死に止める

「トリオン兵を使つて襲撃、ボーダー隊員撃退。

あの場所にボーダー本部が出来てからそれだったが、ラッドが拉致や破壊でなく偵察用と来れば敵は手の内を変えてきたと考えられる。人を拐うことが出来なくなったり、出る場所が一定の地域に留まったりすればどうしてだと考えて調べに来たんだ」

ラッドを街中に放った理由を語れば足を止めてくれる。

これで少しの間、考えることが出来るとホッとするのもつかの間、修はなにかを閃いたのか遊真を見る。

「空閑、もし空閑がこのラッドを送る側だったらどういった情報が欲しい?」

「おれか? そうだな……やっぱり、ボーダーについて知りたいな。」

こっちの世界って、トリガーを使わない物ばっかでトリガーを使うのはボーダーだけなんだろう?」

「トリガーを色々使ったり作ったりする組織はボーダーだけだな」

「だったら、ボーダーについて知りたいな。」

ボーダーさえどうにか出来ればこの世界を支配できるから、ボーダーのトリガーがどんなのとか一番強い人は誰とか先に知ってしまえば色々対策が出来る」

ボーダーについて知りたい。

それが遊真の出した答えで、その答えを聞いた修はどうすれば良いのかと悩んでしま

う。

「レプリカ、ラッドはどれだけ居るか分かるか?」

『街の一部でこの数とすれば、単純計算で数千体はこの街に潜んでいる』

「数千……」

「オサム、こいつ門を開く装置があるから早いとこ処理しないとやばいぞ」
『とはいえ、これだけの数を我々で処理するには何十日もかかる。

遊真のトリガーを使い続けられ、痕跡が残ってしまった私達の存在が見つかるとの恐れもある。ここはボーダーに提出するのが一番だと私は進言しよう』

「人海戦術というやつですな」

色々と考えた末に出た答えはボーダーに提出し、人海戦術で駆除する。

ラッドを倒す最適解はそれで間違いはないのだろうが、それが一番面倒なことになる。

「どちらにせよリスクを背負ってしまうことになる、修、どうする？」

情報漏洩を防ぐために限られた人数でラッドを駆除すれば、情報は漏れずに市街地や市民に危険が及ぶ恐れがある。

情報漏洩を防がずに市民を優先すればボーダーの情報が大量に漏れてしまい、ラッドを送ってきた国はボーダーの事をよく知った上で襲撃してくる。

「兄さん、ボーダーに提出して、人海戦術で駆除した方が良いと思う。

今もこうして僕達が話し合っている間にもラッドが市街地に門を開こうとしているかもしれない。手遅れになる前に駆除しないと」

どっちにせよ大変なことになるがそれでも街の人達の命は優先しなければならない

と決意する修。

それ以上の案を私は出すことが出来ないので止めることはせずにメモ帳を取り出し、ラッドについての要点を第3者が見ても納得しそうな感じに書き込み修にそれを託す。

「今から本部の偉いさんかエンジンニアの人にラッドを提出するなら、ラッドについて疑問に思ったことと言ってくれ……念のためにもう一度言うが修が拾ったことにしてくれ」

「ラッドを拾ったのは、兄さんだよ」

「すまないがそうしてくれ。とにかく、後は任せたまぞ」

自分の手柄になってしまうことに多少の罪悪感を感じる修の背中を押す。

「といってもトリガーを家に置いてきたので、一度家に帰ってトリガー回収してからボーダー本部に向かわないといけない。」

「悪いな、色々と聞いてばかりで」

「気にしなくて良いよ。こっちの世界が潰れたらやってきた意味ないし」

「そうか……とところで、今日から暫く休みになる可能性があるぞ」

「む……転校2日目にして休みか」

ボーダー隊員が多く居る学校に出てくると思うし、修の通っている中学にも潜んでいる。

改造ラッドが街中に居る。街中の至るところに何時爆発するか分からない爆弾が仕掛けられているも同然だ。だったら、公休にしてもらわなければ困る。

「また修が力を貸してくれと言ってくるかもしれないから、その時は頼んだ。アイツは強いけど弱い人間だから、誰か側に居てやらないとヒヤヒヤする」

「確かに、オサムはよわつちいのに危ない事をするな。まかせろ」

「私はちよつとやることがあるからこれで、また会おう」

遊真に別れを告げて、修が通った道と同じ道を走り抜けて家に帰ると母さんがいて少しだけ怒っていた。

書き置きも残さずに出ていき、帰ってきたと思えば朝食を食べずに修は出ていったことについて色々と聞かれて怒られ、事情を知った母さんは学校を休んで良いと言ってくれた。代わりに修が食べなかった朝食を食べると修の分も食べて、自室に戻る。

「ふう……未来は変えられたか」

机の椅子に腰掛け、今から起きる出来事を想像し少しだけ微笑みタイプライターを取り出して書き込む。

原作では改造されたラッドが修の通っている第三中学にイレギュラー門を発生させ、修がトリガーを起動。トリオン兵を倒すことが出来ずに遊真が修のトリガーを借りて撃退。

その後、嵐山隊の面々がやって来て色々と言ひ、放課後にボーダー本部に來いとなり、本部に向かう道中、またまたイレギュラー門が発生する。イレギュラー門から出てきたトリオン兵を修を迎えに來た嵐山隊の木虎が撃退しようとしたのだが、自爆モードに入りどうすることも出来ず、遊真がそれを助ける。

その後も何だかんだで上手くいき、イレギュラー門の犯人を見つけ、駆除して一件落着……そう思っていたのだが、私は素で忘れていた。

原作でもサラツと語られていて深い言及も追求めなかつたので、本部に向かう途中のイレギュラー門が原因で10人以上の死人が出て、怪我人は100をも越えていることに。

流石にそれはどうにかしないといけないならなとイレギュラー門の原因であるラッドを一体回収し、修に託した。

「ボーダー側がなんかやってくれたら良いが……なにがあるのだろうか？」

遊真が言ったようにラッドを駆除するのには人海戦術が一番だ。だが、それは此方の世界を調べに來ているラッドを送ってきた国、アフトクラトルにボーダーの情報を教えるも同然で漏れる。こう、ラッド自爆スイッチ的なのを鬼怒田さんが作ってくればそれで解決するが、そんなもん作れるなら日頃から出てくる近界民を強制的に自爆させる装置を作っているので無理だろう。

「死人は出ない……俺のサイドエフェクトはそういつているな」

第39話

「トリガー、起動！」

遊真達と分かれ、ボーダー本部へと辿り着いた修。

本部の基地内ではトリガーの使用は許可されているのでトリガーを起動し、荒くなっていた呼吸を整える。

「急いで、ラッドを」

「その君、なにをしている！」

急いでラッドを技術職の人にと開発室に向かおうとする修は職員に、ボーダー本部の本部長の忍田に声をかけられる。

「見たところC級のようなだが、ダメじゃないか。」

早くB級になりたいのは分かるが、それを理由に学校を疎かにしてはダメだ」

お馬鹿隊員のランク戦に入り浸るあるだと勘違いし注意しようとする忍田本部長。修は直ぐに勘違いをしていることに気付き、否定をする。

「違います、ランク戦をしに来たんじゃありません」

「なら、なにを……その手の物は？」

「家の前で拾ったものでもしかしたらと思い、今から開発室に向かうところです」

ラッドに気付いた忍田本部長にぎっくりと説明をすると、驚愕する。

それを見た修は一先ずは開発室に向かわせてくださいと言うと忍田本部長も私も一緒にいこうと開発室に向かった。

「鬼怒田さんは居ないのか……少し、待っていてくれ」

「あ、はい」

開発室室長の鬼怒田さんは開発室にはおらず、居たのは寝落ちしているポツチャリ体型のエンジニア1人。

もしかすると、と考えている忍田本部長は急いで鬼怒田さんを探しに開発室を出ていった。

「どうしよう……」

色々と人が居ると思ったら、1人しか居ない開発室。

ラッドを届けに来た修は寝落ちしているポツチャリ体型の人に託そうと寝ているところで申し訳ないですがと肩を掴んで軽く揺さぶると目覚める。

「ん、んん……誰だよ?」

「寝ているところすみません。ちょっと、お時間よろしいですか?」

「よろしいものにも、こっちは昨日から市街地に門が出て来て大変なんだよ」

ゆつくりと目覚めるポツチャリ体型のエンジニア、このエンジニアの名は寺島雷蔵。レイガスト作ったり、メテオラを色々と改良したりする所謂出来るエンジニアであり戦闘員としても確かな実力がある男だ。

「昨日から、ですか」

「見たところ、C級だな。まだ下には話が伝わってないんだっけ？なにかようか？」

「あ、はい。これを拾ったんですが、近界民っぽいなと」

「トリオン兵？見たことの無いタイプだな。ちよつと解析するからかしてくれ」

意識がゆつくりと覚醒し、相手をしてくれる雷蔵にラッドを託すと解析をはじめ。

ほうほうと最初はラッドについて興味津々で解析していくのだが、段々とラッドの構造や機能が判明していき顔色が悪くなる。

「君、これ何処で拾ったの？」

「家の前の電柱です。僕の家は警戒区域から遠い場所に――」

「それで、そのトリオン兵はどこだ！」

「そこにいる彼が持つてきました」

その時のことについて説明をしようとする、戻ってきた忍田本部長。

狸みたいな中年太りのおっさん開発室室長の鬼怒田を連れており、雷蔵はナイスタイミングだと手を上げる。

「イレギュラー門の原因、見つけました」

「なにい!?! どういうことだ!?!」

「その子が拾って来たコイツが原因ですね」

「お前が? おい、どういうことだ説明しろ!?!」

「あ、はい!?!」

トントンと話が進んでいくことに動揺を感じながらも、修は鬼怒田さんに説明する。

朝起きたら見つけて壊した。触ったりして見た目が近界民っぽいから提出しに来たと経緯をそれとなく説明をし、よくやったと肩を叩かれる。

「えっと、状況が上手く掴めないのですが」

「そうか、君はC級だから話が伝わっていないのか。」

実は昨日から6件ほど市街地にイレギュラーな門が発生している。幸いにもその場に非番の隊員が居て、近界民を撃退したが原因が分かっていたんだ」

「なっ!?!」

既に自分が思ったよりも大事になっていた。

開発室は慌ただしく動いていき、エンジニア達が集いラッドを隅々まで解析していく。

「鬼怒田さん、どうですか?」

「どうもこうもあるか、街の至るところにコイツがおる。軽く見積もって数千は越える」
「数千、ですか……まづいな」

解析がある程度進み、本部のレーダーに写るようになったラッド。

その数は夥しくレーダーの地図を埋め尽くさんと言わんばかりの数でそれを見て忍田本部長は焦る。現在、ボーダーの精鋭中の精鋭であるA級の1、2、3位の隊はいない。勿論、他にも強い部隊はちゃんという。居るには居るのだが、今必要なのは物凄く強い人一人でなく、沢山のそれなりの実力者だ。そのそれなりの実力者はボーダーにそれなりにいるものの、それでも数が足りない。

どの地区に誰を配置すれば良いのかと悩んでいるとラッドにヒビが入っていることに気付く。

「この近界民、君が倒したのか？」

「え、あ、はい。自分が倒しました」

「そうか……そうか！」

倒したのは貴虎だが修ということにしておきたいので自分だと言うと閃く忍田本部長。

「鬼怒田さん」

それが出来るかどうか鬼怒田さんに調べて貰う。

ラッドの数、ラッドの固さ、ラッドには戦う機能があるのかと隅々まで調査してもらい、ラッドには光線を放つといった機能が一切なく訓練用のレイガストで破壊する事が出来るほど耐久力が無いことが判明。

「沢村くん、今すぐに各支部及び提携校に連絡をし召集を。AからB級、だけじゃない。訓練生のC級も、今動けるボーダー隊員総出で駆除を。城戸さんには私から話を通しておく」

「待つてくださいー!」

ラッドをどうにかする方法へ辿り着いた本部長に修は待つたをかけた。

人海戦術、弱いラッドをC級も含めて動ける全隊員で駆除するのは効率が良いがラッドが偵察用だと知り、ついさっき兄と遊真が言ったことが頭に残っている。

「……これって普段ボーダーが相手にしている近界民とは違いますよね?」

修は貴虎から貰ったラッドについての要点を纏めたメモを開く。

「普段から此方の世界を襲撃してくる近界民とは違うが、これも近界民である意味一番危険だ」

「その……手口を変えてきたんじゃないでしょうか?」

「なに?」

「ボーダーがここに出来て、数年の間、三門市の人達を、この世界の人達を守ることは出

来ています。

近界民からすればそれは人を拐う事に失敗していて、どうしてと疑問を持つてコイツを送ってきたのかと……見てください、カメラの様なものが背中についています」

【要点その1背中にカメラっぽいものがついている】

「確かに、カメラの様な物がついてはいるが……」

「これは誰かを拐ったりするわけでも倒したりするんじゃないでしようか？」
集する監視カメラの様な物じゃないでしようか？」

【要点その2見た目からして戦闘及び捕獲用じゃない】

「監視カメラか……鬼怒田さん」

「確かにカメラの様な機能はついておるが、それよりも恐ろしいのは門発生装置だ。

ワシの作った門誘導装置がどれだけ優れていても内側から門を開けられては手の施しようが無い！今まではどうにかなったが早いところどうにかせんと手遅れになるわ
!!」

「そこです！」

「なにがじゃ？」

「もう既に6件もイレギュラー門は発生しています。

でもそれら全て現場近くの非番の隊員が対処して解決することが出来ました。つま

り、普段から襲撃してくる近界民の数と同じだと言うことです。もし奇襲を掛けるのなら、沢山の近界民を送りつければ良いのに現場に居合わせた人達だけで対処することが出来る量、それを1回や2回はともかく6回もは明らかに不自然です。まるでこの街の正確な位置やボーダー隊員達がどうやって動けるかを近界民の親玉が知りたいかと思えます。もしC級も動員すれば、ボーダーがどれだけ居るか、どんな戦い方をするのかを知られるんじゃないかと」

【要点その3 近界民の親玉的な存在が此方の世界の情報を知りたがっている】
「なるほど……」

3つの要点をそれとなく説明をすると召集を中断する本部長。

四年半前に起きた大規模な侵攻レベルの襲来はボーダーが出来てから今まで受けていない。

その間に自分達は強くなり備えていたが逆に言えば相手にも備える期間があったという事になり、このトリオン兵が此方の世界の対策として作られた物だと言われれば妙に納得が行く。

「お前の言いたい事は分かった。

だが、今は一刻を争う。トリガーに備え付けられているレーダーにコイツを写せるようにせなければならんし、なによりも何時イレギュラー門が開くか分からん。AとB級

だけでは時間がかかり、その間にイレギュラー門が開く可能性がある。街には何時爆発するか分からん時限爆弾があるも同然なんだ、多少のリスクを背負うのは覚悟の上だ！」

鬼怒田さんもその事については納得したが、そんな暇はないと一喝。

実際問題、残された時間は本当に極々僅か。1時10分ちよつとに近界民が修の通う三門市立第三中学校にイレギュラー門を発生させ襲撃し、更には夕方以降に市街地にイレギュラー門が発生し、爆撃型トリオン兵を出して10名以上の死者を出す。今すぐにもレクターに写るようにして全隊員で動かなければならない。

しかしそれをすれば修の言ったとおりボーターの情報を知りたがっているトリオン兵を送ってきた国の思う壺で、入念に準備してから大規模な侵攻をしてくる可能性がある。る。

修の言っていることは間違っていない。鬼怒田さんが言っていることも間違いない。どちらの言い分も間違っておらず、どうすれば良いのかと悩んでいるとメディア対策室室長の根付がやってきた。

「鬼怒田さん、聞きましたよ。イレギュラー門の原因が判明したと」

「おお、ちょうど良いところに来てくれた」

イレギュラー門の原因はラッド。

C級を動かそうにも、それが街中にいるのでイレギュラー門も含めてある程度は三門市に公表し三門市に協力を要請しなければならぬ。その辺の仕事を主とする根付さんがやって来てナイスタイミングだと鬼怒田さんはラッドの画像を根付さんに渡す。

「ほう、これが今回のイレギュラー門の原因ですか」

「そうじゃ。コイツが門を内側から開いとるせいで市街地に門が出ておる」

「いやはや、鬼怒田さんの門誘導装置が壊れたかと思いましたがコレが原因ですか」

「当たり前だ！ワシの門誘導装置に問題などなにつない！」

「しかし、誘導装置が作れるならば誘導妨害装置も作れるはず。」

近界民が門誘導装置の存在に気付き門誘導妨害装置を作ってきたら最後、どうにもなりませんのでその辺はお願いしますよ」

「分かっとなるわ、それぐらい」

とんとんと話を進めていく鬼怒田さんと根付さん。

このままいけばC級を含めたボーダー隊員総動員で動くことになり、情報が漏れる。根付さん、少しよろしいでしょうか？」

「なんですか？」

内部の問題処理やメディアに様々な対策をしボーダーの地位向上、アンチボーダー団体を少なくしているのはこの人のお陰であり、もしかすると情報漏洩を防ぐ方法が浮

かばない忍田本部長はメディア対策室長になにかないかと意見を求める。

「なるほど、情報漏洩を防ぐ方法ですか……流石に全ては無理ですね」

「全て、と言うことは一部は可能ですか？」

「ええ。開発室の方々には少々お手数を掛けますが、ある程度の情報操作は可能だと思います」

「なにをしろと言うんじや？」

「全隊員のトリオン体の容姿を改造し大きさ以外は統一、そこにいる彼のようにC級だと見せるのです。駆除の際に使うトリガーも弧月、アステロイド、イーグレットの3つのみで固定。今回はC級を動員するのでプライバシーの都合上と色々理由をつければメディア方面には簡単に対応が出来ます」

「成る程……」

ある程度の情報は漏れるのは仕方ないと見た目と武器を統一することにより漏洩する情報を操作すること方向へと切り替える。漏洩を逆手に取った方法があったかと本部長は納得する。

「嵐山隊はメディアに出るので変更は無しでお願いしますね」

「そうになると、ベースとなるモデルが必要になるな。そのメガネ、ちようどいいからお前がモデルになれ」

「え、僕ですか!？」

話が進んでいき、介入する間もなく見守っていた修。

自分に白羽の矢が立つとは思っておらず慌てるのだが雷蔵に腕を引っ張られ、トリオン体のデータを取られる。

「安心して、そつくりそのままコピーするんじゃないから。君の容姿をベースとしてこつちでちよこつと改造するから」

「雷蔵、どれぐらい掛かる?」

「十数分で……あくでも、色々と出来るな」

母親の遺伝子が強いのか中性的な見た目の修。

ちよこつと弄くれば女にできるんじゃないかと割とノリノリで妄想にフケてしまう雷蔵。なにをしていると鬼怒田さんに叩かれると話に戻り本部長は聞く。

「それらにどれくらい時間が掛かりますか?」

「トリガーのリーダーに写ると、全隊員のトリオン体なんかの変更じゃからざつと4時間ちよつとじやの」

「そんなに直ぐに出来るんですか!？」

「逆だ、馬鹿者! 四時間以内にイレギュラー門が発生する可能性がある、それが何処で発生するかはまだ此方では分からないのだぞ!」

早いように見えるが、逆である。

今ここでこうしている内にもイレギュラー門が発生して多数の死者が出る可能性があり、その対処はまだ出来ていない。この数時間の大量の死人を出す可能性がある。「それについては次に、今日の分の防衛任務を変更してイレギュラー門のみに対応をさせます」

「ならば、決まりですね」

イレギュラー門についてやることは決まったと動き出す。

開発室はラッドをリーダーに写るようにし、修をベースとしたモブっぽい見た目のトリオン体の作成。

メディア対策室はテレビを通じてイレギュラー門の原因を発表、街に避難勧告や学校に休校等を要請、そのまま学校にいる召集可能な全隊員の召集。

本部は集めた隊員達を何処の地区にどういった編成でバラけさせるのか、万が一にイレギュラー門が発生した場合の対処をどうするかといった現場の調整をはじめめる。

「はいはい、お待たせしました実力派エリートの迅です！」

「あの人は……」

ラッドの駆除に向けて準備をしていく内にやってきた胡散臭いグラサン、ボーダーに二人しかいないS級隊員、迅悠一。

試験に落ちた自分を裏で色々として入隊させてくれた人だと少しだけ表情を修は変えるのだが、遅い！と鬼怒田さんに叫ばれる。

「忍田さん、どうしたの？」

「イレギュラー門の原因が判明した」

ポリポリとぼんち揚げを食べる迅。

イレギュラー門の原因はコイツだと忍田本部長がラッドを見せると、ぼんち揚げを食べる手を止める。

「読み逃した？」

「なにか見えたのか？」

「いえ、ちよつと読み逃しただけです」

「？」

迅は未来視のサイドエフェクトを保有している。

顔が見える人の未来をみる事が出来るのだが、迅が見ていた未来とは大きく異なる出来事が起きており驚いている。

「読み逃し、大丈夫なのかそれは？」

「問題ありません。」

オレのサイドエフェクトだと明日に一斉にボーダー総出でこいつの駆除するといっ

てたんですけど、この調子でいけば今日の3時ぐらいから駆除が出来るようになるっばいので」

「1日、早まったということか?」

「まあ、平たく言えばそうですね。ところで、そこにいるC級は?」

「ああ、彼はイレギュラー門の原因を見つけて届けてくれたんだ」

「そう、ですか」

ジツと修を見つめる迅。

見知った人と会話をしている未来が多々あるのだが、その内の1つに自分が所属する支部の烏丸達に色々と教わっている未来が見える。修だけじゃない、顔は見えないが修ダー隊員達の未来がフラッと消えたり確定していた筈の未来が急に変わったたりすることがあり、修にもそれが起きていた。

「全隊員総出でトリオン兵の駆除をするが、それまでにイレギュラー門が発生する恐れがある。

迅、お前はそれまでにイレギュラー門が発生しそうなトリオン兵を見つけて、それらを優先して破壊してくれ」

「了解しました!……つと、今から発生しそうなのは、ここだな」

モニターに写る三門市の地図に迅は今から出てくるのはここだと指をさす。

「ここは、うちの中学!？」

迅が指さしたのはここからそれなりの距離がある三門市立第三中学校。自身の通う中学で、そこには近界民を引き寄せやすい千佳がいる。

更に言えば、そこにはB級以上のボーダー隊員が1人もいない。イレギュラー門が発生すれば最後、現場に居合わせたボーダー隊員が対処と言ったことはまずない。

「お、君の通ってる中学か」

「はい。うちの中学なんですけど、B級以上のボーダー隊員は1人もいません。もし、イレギュラー門が発生したら……」

「まずいな。迅、イレギュラー門が発生する前に直ちに対処にいつてくれ!」

「了解です!」

「お願いします、迅さん!」

今この場で頼れるのは迅ただ1人。思いを託すのだが、迅は笑顔で修の肩に手を置く。

「君も一緒に来るんだよ、メガネくん」

「え?」

メガネくんも連れていきますね!

迅は忍田本部長から修を連れていく許可を貰い、颯爽とボーダー本部を駆け抜けていった。

第40話

「迅さん、僕のことを覚えていてくれたんですか？」

三門市立第三中学へと向かう修は迅へ覚えてくれたか聞く。

「そりゃあ、忘れられないよ。試験の結果が気に食わないから上層部に直談判しようとした子なんて、メガネくんぐらいだ」

「そ、それはそうですが」

「ちゃんと覚えているよ。君は守りたいこととやりたいことがあるからボーダーに入つたのを」

「！」

予期せぬ感動の再会を果たし、喜ぶ修。

思つたよりもロマンチックなところがあるんだなと迅は頬を緩ませるのだが、修からある未来が見えたので直ぐに真面目な顔をする。修が誰かとなにかを話しており、なにか重要な話をしている未来。学校内で話している未来が見える。

「そういえば、学校の方に話は通っているんですか？」

全速力で第三中学に向かうのだが、それだけで特になにもしていない。

学校側の許可を取ったり等を一切していなかったりするし、なんだつたら本日休み扱いにしてもらっている修。このまま向かって良いのかと聞くと迅は黙る。

「大丈夫、メガネくんが居ればなんとかなるから」

それは僕に全てを押し付けるだけでは？

修は行き当たりばったりりな所に少しだけ心配をするが、学校に到着するとある程度の話を通じているのかすんなりと入ることが出来た。

「メガネくん、オレが倒すから校内にいる生徒の避難をお願いね」

「分かりました」

話を通っていたのは受け持つ授業がない校長や教頭だけで、生徒に伝えれば慌ただしくなると伝わっていない。

迅は自身の師の形見である風刃の刃を抜き、修に避難誘導の指示をすると修は警報機を鳴らす。

『門発生!!近界民襲来、近界民襲来!直ちに避難してください!』

近界民用の避難訓練の警報を鳴らせば、生徒は嫌でも動く。

突如と起きる近界民襲来の警報に教室内に居た生徒達もざわめき、なにも知らされていなかった教師陣営も驚く。しかし、そういう時に備えて避難訓練をしていると生徒はテキパキと動き出し、避難経路を歩き地下のシェルターを目指すのだが一人だけ全く別

のルートを通る人を見つける。

「千佳、なにしてるんだ!？」

「修くん!？」

1人、道から外れて避難をしようとしなかったのは千佳だった。

近界民襲来の警報を聞いて、自分が引き付けようと勝手に列から出た。

「早く地下のシエルターに向かうんだ!」

修は近界民が襲来してきたからあえて抜け出した千佳に怒る。

今すぐに列に戻れと指差すのだが、それが原因でクラスメイトや後輩達に姿をハッキリと見られてしまう。

「三雲くん、ボーダー隊員だったの!？」

「三好、詳しい事情は後でボーダーから説明があるから今は地下に向かっていってくれ!そうじゃないと大変な事になる!」

「うっし、分かった!」

運が良かったのか、その中にはボーダー好きで有名なクラスメイトの三好がいた。

修がボーダー隊員だったことに興奮する三好だが、修が焦っていると分かると驚いている他のクラスメイト達を先導し避難していく。

「千佳も早く」

「で、でも」

近界民が直ぐ近くにいるとサイドエフェクトで感じる千佳は修の身を心配する。

「大丈夫だ。頼れる人が一緒に来てくれている」

1人ならば無理だったが、今は頼れるあの人と一緒にだ。

他力本願なもの、迅の存在は修にとっては何よりも心強く言葉に力を与えてくれた。

千佳は修の言葉を信じ、地下のシエルターに向かっていくのだが修はあることに気付く。

「空閑がいらない？」

三好以外にも色々クラスメイトがいた。

その中には空閑が居ない。ラッドの事についてどうだったか報告をしたかったのだが、何処にも居なかった。何故居ないのかと疑問に持ちながらも修は避難誘導し、生徒及び教師一同を地下のシエルターに避難させた。

「迅さん、終わりました！」

「こつちも終わったよ、メガネくん」

「この後は、どうすれば」

「実力派エリートに任せなさい」

互いにすることを終えると避難先の地下のシェルターに向かう。

なんの前触れもなく警報が鳴った為にぎわつており、迅と修が入るとピタリと静まり返る。

「どうも、実力派エリートです。こっちはメガネくんです……ほら、メガネくん、挨拶を」

「あ、はい。どうも、三雲修です」

学校で使っているマイクを借り、気さくに挨拶する迅。修を巻き込み、ボーダー隊員だと言うことをアピールすると真面目な顔をして本題に入る。

「実は今、大変な事が起きているんだ」

「それって、市街地に発生したイレギュラー門のことですか!？」

「おおっと、その君!知ってるのかい?」

「ボーダーの事はなんでも知ってます!」

イレギュラー門について説明をしようとするとボーダー好きの三好は既に情報を手に入れていた様で、静まり返っていた空気は一気にトークライブの様な空気へと早変わり。

迅もこの未来は読み逃していたがラッキーだとこの空気に便乗する。

「そうなんだよ。今、市街地にイレギュラーな門が発生していてね……おっと、騒がない

で。

詳しくは後で放送されるけど、その原因を隣にいるメガネくんが見つけてくれて今ボーダー側が解決しようとしている……だけど、その前にこの学校でイレギュラー門が開きそうだから来たんだ」

「生徒全員を移動させるにはこれしかなかった。驚かせたりして、申し訳ありません！」
イレギュラー門についてぎっくりと説明をすると再びざわつく。

修は驚かせたことについて頭を下げて謝罪をするのだが、怒りの声はなかった。

「ありがとう！」

「イレギュラー門の原因を見つけたって、三雲スゲー！」

「学校に直接門が発生したら避難出来ないでしょ。先に誘導してくれてありがとう」

修の人徳なのか、事件が起きる前に解決してくれた事を感謝の声が響く。

中には修をヒーロー視する声があるのだが、見つけたのは兄でありラッドの情報を教えてくれたのは遊真なので自分の手柄ではない。それを言うわけにはいかないの
で困っていた。

「佐補、副!!無事か!!」

そんな時だった。

三雲スゲーの空気をぶち壊すかの様に嵐山隊のシスコン or ブラコンの嵐山が叫び

ながら入ってきた。何事かと会場は一瞬、静まり返り嵐山隊だと分かるや直ぐにぎわめいたりするのだが、嵐山の弟と妹は顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。

「よかった!! イレギュラー門がこの辺で発生すると聞いて、飛んで駆けつけたんだ!」
「ちよ、恥ずかしいって!!」

「やめて!」

「嵐山、お前防衛任務はどうしたんだ?」

シスコンプラコンを發揮し、弟と妹が無事なことに喜ぶ嵐山。

本日防衛任務の嵐山隊の隊長がこんな所に居て大丈夫なのかと聞くとそうだったと仕事に戻る。

「防衛任務は別の隊に変わって貰った。

俺達嵐山隊はイレギュラー門の原因である近界民の駆除をするまでの間に避難勧告をしてくれと頼まれたんだ」

ピツとレーダーを手元に出現させる嵐山。

学校付近にまだ何体かのラッドの反応を確認すると通信機で佐鳥達に連絡をし、ラッドの駆除に向かわせその間に避難やこれから起きることについて説明をする。

人前でなにかをするということに馴れているのか、テキパキと尚且つ分かりやすく説明をし、質問をした人にも丁寧に答える姿はまさしくボーダーの顔そのものだった。

「貴方の出番は無いわよ」

そんな嵐山を見ているだけだった修は嵐山隊のデコッパチもとい木虎に声をかけられる。

「そうみたいだね。嵐山さんが来てくれて、本当によかったよ」

学校に来てからなにかと目立っている修。

そんな修が気に入くわないのか木虎は嫌味を飛ばしたのだが修は自分がヒーローだと持て囃されたい等と一切思っていないので全くといって通用しない。修は素直に嵐山が来てくれた事に喜ぶ。

「……貴方が拾った近界民、見たところ壊れていたけど基地外でトリガーを使っている規則を知らないのかしら？」

嫌味を飛ばしたのだが通じていないと、別の話題を出す。

木虎はラッドをトリガーで壊したと勘違いをしている。近界民を壊した事について言われるとなにも言えなくなってしまう。なにせ壊したのは自分でなく兄なのだから。

「はあ……イレギュラー門の原因を見つけたからよかつたけど、トリガーの無断使用はダメなことぐらい」

「木虎、今はそれは関係の無いことだよ」

言い返さない修を見てここぞとばかりの反撃をしようとする木虎だったが時枝が間

に入る。

結果的にはイレギュラー門の原因を見つけているし、プライム0どころかプラスだと修の事を誉める。

「そうだ。君にはお礼を言わないと！」

君が見つけてくれなかったら、佐補や副達が襲われていたかもしれない」

「いえ、僕は届けただけで実際は他の人達が色々頑張ってくれたから防げただけです」
「謙遜しなくてもいいよ！君が見つけたから、今こうして皆が動くことが出来たんだから」

露骨な点数稼ぎを！と木虎はキツとするのだが、修はこれが素である。

「そういえば、君の名前を聞いてなかったな」

C級の隊員と迅が現場に向かっている。

そうとだけ話が伝わっており、嵐山は修の名前を聞いていなかったなので改めて修の名前を聞く。

「修、三雲修です」

修もクラスメイト以外からは名前が呼ばれていなかったようなと改めて嵐山に挨拶をする。

「三雲!？」

「あ、はい。漢字の三に雲行きの雲と書いて三雲です……どうかしました？」

名前を聞いてビクツとした佐鳥。

もしかしてと時枝とともに修を見る。

「あの人、弟なんて居たっけ!？」

「知らない。けど、三雲なんてありふれてないそこそ珍しい名字だから」

「そう言われればそうだけど……似てるかな？」

「中学3年であの顔となると、老け具合が似ているんじゃないかな？」

「あの、すみません。丸聞こえです」

よりによつて顔を基準にする佐鳥と時枝。聞こえてしまったからには聞くしかあるまいと聞こうとするのだが、言葉が出ない。

「ええつと、三雲くんは……なんだっけなんだっけ……とつきー、なんだっけ!？」

「えつと……三雲くんってお兄さんは居るの？」

「ズルい!!」

貴虎の名前を出そうとするのだが、下の名前を滅多に名乗らない。仮に名乗ったとしても三雲の方が呼びやすいし覚えやすいとして呼ばれない。

貴虎から名前を一度も聞いたことが無い佐鳥は名前を出すことも出来ず、時枝はダイ

レクトに修に聞いた。

「17歳の兄がいます」

「やたら老けてる?」

「老けてますけど、本人の前で言わないでください。昨日も間違われて、結構落ち込んでました」

「……その、三雲くんのお兄さんには何時もお世話になっていきます!!」

修が貴虎の弟だと分かるや否や、90度直度に腰を曲げて頭を下げる佐鳥。

「や、やめてください!」

「いや、本当に何時も何時もボーダーの皆様がお兄さんにお世話になっていました」

「兄と僕は一切関係ありません!むしろ、そういった行為をしないでくれた方がありがたいです」

貴虎の知り合いにボーダー隊員が出来たのは知ってはいるものの、どういった関係かは知らず佐鳥がヘコヘコと腰を低くして下げるためにどうすればいいのかが分からない。

弟だからと特別視されることを修は嫌がり普通に接してくださいと頼み込み、なんとか頭を上げてもらう。

「他にもイレギュラー門を発生させようとする近界民がいる。急ぐよ、メガネくん」

「はーい」

兄と弟がどうのこうのは一先ず置き、残りのイレギュラー門を発生させようとするラッドの駆除へと向かう修と迅。

三門大橋付近にある複数のラッドを破壊。それにより、本来ならば死ぬはずだった18人以上の死を回避することが出来た。

「ん〜……居ないか」

街にイレギュラー門を発生させようとするラッドを駆除し、被害者を減らすことが出来たのは喜ばしい事だがいくつかの疑問を迅は残していた。

迅のサイドエフェクトではイレギュラー門の犯人を誰かが見つけて、修が届ける未来が見えていた。そしてそれは明日に起きる事だった。だが、それが急変し今日となった。

未来は無数に存在していて、何時だつて急に変わることだつてあることを知っている。でそれについてはそこまで驚きはしないものの、修は誰かと会っている。だがその誰かが分からずにモヤモヤしていた。

学校にいけばその誰かと自分が会う未来があつたのだが、学校にその人物は居なかった。

「メガネくんのお兄さん……じゃあ、ないよな」

その人物が貴虎かと考えるが、それだと中学に居るのはおかしいと首を振る。

迅が見ていた人物は遊真のだが、その遊真は貴虎に休みになると言われたので学校に行かなかつた。

「時折、誰かが未来を変えているけど……いったい誰が？」

直ぐに落ちたものの上位に入った那須隊、くさやを食べていた太刀川と堤、アクアリウムを破壊されてもそこまでの反応だった来馬。時折見えていた未来が急変し、それが人為的だと迅は気付いているのだが誰かは分からなかつた。

未来を変えようとしている人物については一先ず置いておき、イレギュラー門を発生させようとするラッドを駆除するのに集中しようと気持ちを切り替えた。

「三輪7、米屋59、時枝11、京介9、佐鳥48、熊谷72、小佐野22、見知らぬ電話番号から32……どんだだけ暇なんだ」

連日昼夜を問わずラッドの駆除を行われる一方、学校とか市街地に万が一イレギュラー門が発生するとややこしいので学校は一時休校しラッドの駆除に勤しむ修の邪魔をするわけにはいかないと貴虎は遊真と一緒に家に引きこもっていた。

貴虎の携帯にはこれでもかとなり合いのボーダー隊員から電話が入っていたのをみてため息を吐き窓の外を眺める。

「むう……右を見ても左を見てもオサムだらけだ」

「マジでそれ言うのをやめろ」

ボーダーのラッド駆除は嵐山隊を除いたボーダー隊員全てがC級の格好をするだけでなくオサムっぽい見た目をしており、その事に貴虎はお腹を抑えていた。

『確かに武器と見た目を統一すればある程度の情報漏洩は防ぐことが出来て、偽の情報を送ることは可能だが……これは中々にシニールなものだ』

「レプリカ、お前はシニールで済ませる事が出来るが私なんてシニールで済ませられないんだぞ」

右を振り向けば弟のそっくりさん、左を振り向けば弟のそっくりさん。前にも後ろにも弟のそっくりさん。

嵐山ならば喜ぶかもしれないが、貴虎はそこまでのブラコンでもなんでもないので恥ずかしかったりカオスだったりし、なんとも言えない気持ちになっている。

「しかしまあ、こっちの世界に来て数日で、こんな事になるとはドンマイとしか言えないな」

「おれよりも、ボーダーに言った方が良いと思うぞ。

ラッドを使ってきたってことは、トリオン兵だけじゃなくおれみたいにトリガーを使う近界民が来るぞ」

「遊真」

「む？」

「お前は近界から来た人間で、近界民じゃない。」

近界民はこっちの世界を養殖場や搾取する場所としか見ていないやつのことだ」

「そうか……」

意外な一言を貴虎から言われた遊真は嬉しかった。

「修もきつと似たようなことを言うぞ」

連日昼夜を問わずラッドの駆除をした事により、最初の6件を除けば被害は0に抑え込むことに成功。

ラッドを発見し、色々と意見を出した事になって修はこの功績を称えて特別報酬と幾ばくかのポイントを贈呈。それにより修はレイガストポイントが4000点を越えてB級に昇格。

「兄さんが考えたりしたのに、僕の手柄でいいのかな……」

「構わない。私が金を貰ったりスカウトされたりするよりも、修のB級昇格の方が価値がある」

「でも」

「お前はB級に上がれて、私は目立たないWin—Winの関係だ。」

それでも罪悪感があるならば、私には出来ないことをして誰かを助ければ良い。案

外、遊真もお前の力が必要かもしれないぞ」

「空閑が?」

「遊真は何かしらの理由があつてこっちの世界に来たはずだ。」

「ボーダー隊員でない私には相談ぐらいしか出来ないが、ボーダー隊員のお前なら相談以外にも力になれるはずだ」

「その事について修は色々と罪悪感を抱いていたが、貴虎に上手く丸め込まれて終わり、改造されたラッドによるイレギュラー門の一件は終わりを迎えた。」

「……うーん」

かの、様に見えた。

「事件解決後今後このような事が起きてはならないので雷蔵はラッドについて隅々まで調べさせられているのだが、頭を悩ませていた。」

「どうした? なにか見つかったか?」

「いや、このトリオン兵にトリガーを使用した痕跡が無いんですよ」

「なに!?!」

トリガーを使用すれば、ある程度の痕跡を残す。

トリオン兵を倒したとすれば確実に残るはずの痕跡が修の持つてきたラッドにはなかった。

「どういうことだ！」

「いや、オレに聞かれても分かりませんよ」

ラッドを駆除したのは貴虎で生身で無理矢理力業で駆除したので、分からなくて当然だった。

だが、わかりませんで済ませることが出来ない開発室の面々。

「とりあえず、三雲を呼んで問いただしますね」

「そうし、いや、待て」

「？」

原因は分からないからとりあえずは本人に聞こうと通信を入れようとする雷蔵を鬼怒田さんは止める。

鬼怒田さんはパソコンを操作し、ここ最近起きた出来事について纏めたものを読み返しており修がラッドを届ける前日の記録を見て、手を止める。

「このトリオン兵が届けられる前日に警戒区域に勝手に入ったから記憶を弄くった奴が居ただろう」

「あく如何にもな柄の悪い中坊でしたよ」

「そいつら、何処中だ？」

「えーっと、三門市立第三中学ですね」

「……」

修がラッドを届ける前日、バムスターが倒された状態で発見されて正体不明のトリガーの痕跡が見つかった。

その付近に修と同じ中学に通う三バカがいた。

開発室長の権限でボーダーのデータベースにアクセスし、隊員のプロフィールを確認すると修の通う第三中学に居るボーダー隊員は修のみで他にはいない事が判明した。

修が届けたラッドはトリガーを使った痕跡が残っていない。

修が持つてきて、拾ったと言っている。

「雷蔵、今すぐに三輪隊を呼べ!!」

「三雲じゃなくて良いんですか?」

「三雲は呼ばん。代わりに三輪隊を呼べ!!」

おかしな点が幾つも浮かび上がり、点と点を線で繋ぎ合わせた結果答えを導き出した鬼怒田さん。修でなく三輪隊を呼び出す様に雷蔵に指示する鬼怒田さん。

不可解な点と点を繋ぎ合わせた結果、半年程前にトリガーを横領した鳩原を追跡した風間隊の前に現れ瞬く間に倒した謎のトリガー使い、スカルが浮かび上がった。

ラッドを届ける前日に近界民を倒したのはスカル。翌日にラッドを修に渡して色々教えたとすれば、こつちの世界を偵察しに来た等のC級らしからぬ考えにも納得がい

く。

その予測が当たっているかどうかはともかく、修が黒である事は確かだと呼び出して、ハッキリと答えないうと三輪隊を呼び出し、修の調査を命じられた。

第41話

修大量生産とかいう軽い地獄絵図を見たものの、死者を一人も出さずにラッドの駆除に成功。ラッド発見の功績を称えて修はB級に昇格と色々と上手くいつているここ数日。

「お前だけ100件以上、掛けてきているんだが？」

修の事が知られ、馬鹿みたいに掛かってきたのだが学校が再開すれば佐鳥達が弟が居たんすか!?!と色々と詰め寄ってきた。

居るなら教えてくださいいよと言ってきたので教えたら色々と変に世話焼いたり接したりするし、ボーダーに入ることを母はどちらかと言えば嫌がついていた事を教えると直ぐに納まった……納まった筈なのだが、熊谷だけ度々電話を掛けてくる。

『ごめん……』

「謝らなくていい。修関係で色々と面倒な事を言ってきたきそうだと、出なかつたからこうなっただけだ。それよりも学校で会っても話すことが出来ない事があるから何度か掛けてきたんだろ？」

『うん……三雲くんの占い、当たってた』

「そうか」

占い、当たらなかったなと言った翌日に嵐山隊以外トリオン体を修つぽく改造して、C級まで動員しラッド駆除が始まつたりすれば当たつたと感じるだろうな。

『余り、驚かないのね』

「私が此処最近驚いたことは、街中弟のそっくりさんだらけだったことぐらいだ」
母さんなんて笑い転げてもう無理だと暫く蓮乃辺市をメインに出掛けたりしてたからな。

『あのトリ……ガーで換装した時のモデルって三雲くんの弟だったのよね』

「情報漏洩を防ぐためにそう言ったと言っていた。で、私に愚痴りに来たのか？」

少し小話をいれると声が明るくなったので、用件を訪ねる。

『あのね、見た目だけじゃなくて武器まで統一する様に指示されたのよ』

『どういうことだ？』

『今回、一齐に近界民を駆除する際に使用する武器を統一する様に指示されたの。』

弧月っていう日本刀みたいなブレードと、アステロイドっていうトリガーの弾、それとイーグレットっていう狙撃銃。それ以外は絶対に使うなって指示されて、弧月以外にも色々あつてそっちの方が上手く使いこなせる人が居ても弧月にしろって上から指示があつたの。プライバシーの保護の為に見た目を統一はまだ分かるけれど、武器の統

一はおかしい。ボーダーにはどういう感じのトリガーがあるって過去にテレビで紹介されたりしてるのに、今さらで……情報漏洩を防ぐ為って、メディアじゃなくて』

「その内、大規模な侵攻を企む近界民だろうな」

本題に入ると喋る速度が速くなり、声も若干荒くなつていく熊谷。

なにか言いたいのか大体分かったので答えを先に言うと言つとプツンと電話が切れた。

「辛いだろが、来るものは来る。そして来るのは分かっている」

電話を掛け直す事はしない。

私と何処ぞの実力派エリートが手を組んでもアフトラトルの侵攻は止められない。もう襲撃してくる未来そのものは確定していてどうすることもできない。

だが襲撃して来た後の未来は無数にありそれをどうするかが重要である。それについてどう言つた答えを出すのか……分からないな。

「確か、今日12月14日だったな」

携帯の日付を見て、今日が遊真と千佳が出会う日だった事を思い出す。

私が裏で色々と要らんことをしたせいで何処ぞの実力派エリートとも会っておらず、その辺がどう動くのだろうかと考えていると自分の部屋のドアがノックされ、修が入ってきた。

「どうした？」

「空閑に、千佳の事について色々と聞こうと思うんだ。兄さんも一緒につき合ってくれないかな？」

「空閑に？修はもうB級で、エンジンアとか色々な人と知り合いになれたんだろ？そっちに聞いた方が良くないじゃないのか？」

「人によつて知つてることと知つてない事が多かつたりはぐらかしたりする人も居るみたいなんだ。」

エンジンアの雷蔵さんなら色々と知つてるかもしれないけど、どちらにせよボーダーに行かないといけない。千佳にボーダーの支部に来てくれと言つても、きつと首を縦には振つてくれない」

「成る程な」

バタフライエフェクトか歴史の修正力かなんだか知らないが、遊真と千佳が会うことになつた。

千佳のトリオンとかそういうのについて知つておいた方がいいし、やることは特に無いので首を縦に振るとよかつたと嬉しそうな顔をする修。

「行こう兄さん！」

「行くつて何処に？」

「警戒区域がある弓手町付近の橋の下」

「愚か者！」

千佳達の元に向かう事になり、外に出ようとする修。

何処に向かうのかを念のためにと聞いてみるのだが、原作通りの場所だと分かると私
は修からメガネを剥ぎ取る。

「お前は今の今までなにを見ていたり聞いてたりした！」

なんでよりよつて警戒区域付近で千佳と遊真を呼ぶんだ？

ボーダーは三門市に色々としているが蓮乃辺市や四塚市には特になにもなかったりするのを知っている筈だろう。

「警戒区域付近に呼んだら、逆に警戒区域内に隠れるだろう」

「あの辺は人気の無いところだから」

「ダメだ、変更だ」

「貴方達、さつきからなにをしてるのよ？」

修の選んだ場所について怒っていると騒ぎを聞き付け、やって来た母さん。

なにしているのかと何について怒っているのかを説明すると母さんは怒り、修のメガ
ネを剥ぎ取った。

「なんでメガネを……」

「呼ぶなら家と呼びなさい。」

家は警戒区域からかなり遠くて、蓮乃辺と三門市の境界線上にあるから見付かりにくいわ」

「いいの？」

「千佳ちゃんの事なんですよ？だったら、知っておかないと……深い意味は無いわよ」
絶対に嘘だ。

母さんは千佳にお義母さんと呼んで欲しいと寝言で言ってるの聞いたことがあるから、深い意味や裏がある。

そんな事を言えば確実に拳的なものが飛んできそうなのでなにも言わず、携帯を取り出して修は千佳に、私は遊真に電話を掛けて場所を変更した事と謝罪の一言を伝える。

「ケーキでも買って来た方がいいかしら？」

「遊びじゃないんだから、そういうのは無しだよ」

「私の買い置きしてるメロンソーダとこの前貰った芋長の芋羊羹で良いと思う」
ウキウキ気分の母さん。

気持ちが変わらないでもないが余り浮かれていると後々痛い目に遭うので気持ちを落ち着かせて、メモ用紙やボイスレコーダー等の会話の記録をする準備をする。

「修、遊真から色々聞き出せたとしてどうするんだ？」

千佳が狙われる原因が分かったとしても、遊真がそれを解決出来るとは限らない」

「そこから、迅速さんってボーダー隊員に相談をしてみようかと」

「ボーダーにバトンタッチするなら、そこからはなんもしないぞ」

「うん、分かってるよ」

巡り巡って元鞘に納まった。だがまあ、それはそれでよかつたなど二人を待っていると遊真が先にやって来た。

「すまない、急に場所を変更してしまつて」

「別に、予定が急に変わるぐらい問題無い。それよりも、おれになんの用なんだ？」

「ちよつと会つて欲しい人がいて……兄さん、どうしたの？」

遊真を玄関前で謝り歓迎する修。

私も謝っておかなければと思つたのだが固まつてしまう。

「修、遊真、早く中に入れ。三輪と米屋が……ボーダー隊員が家を見張ってる」

「なっ!？」

住宅地で塀とかが邪魔して姿は見えないが塀の向こうに三輪や米屋の電磁波がはつきりと見える。

修もどうして居るのが分からず驚いているのでこれはまずいと私は直ぐに遊真を中心に二階の修の部屋の窓から外を確認し、三輪と米屋を見る。

怪しまれない為に私服を着ていて人に見られれば偶然に通掛かったフリをするつ

もりだが、甘い。米屋の直ぐ側にあるコーヒー缶が二時間以上も前に米屋に飲み干された痕跡がある。真冬の朝から長い時間見張っているとはがんばり屋だな。

「どうして家を」

「オサムがなにか悪いことをしたとか」

「悪いこと……本当は兄さんがラッドを見つけたのに、僕って事になったのが気付かれました？」

「いや、それはないだろう。というか、誰が届けたかなんてボーダー側はそこまで重要じゃない」

「となるとオレか」

遊真との繋がりがなにかを調べるべく、修を監視する。なにもおかしくないのだが、一つおかしいことがある。

修に米屋と三輪の写真を見せるのだがどちらも見たことのない顔だと言っている。原作で修が近界民との繋がりを疑われる要因となったのはバムスター倒したか倒していないか問題で、それらがなければ修と三輪に繋がりは出来ない……はずだ。

「なにか痕跡を残すような事をしたか？」

「がっこうに入る日、2回ほど事故に」

なにかやらかしたかと確かめると痕跡どころの騒ぎじゃない事をしてるな。

だが、それでバレるんだったら住所が割れて遊真に直接会いに行くのでそれじゃない。

『ユーマ、初日のアレでは無いだろうか？』

なにが原因かと考えているとニョコつと指輪から出てきたレプリカ。アレってなんだ？そして初日って、またやらかしたのか。

『転校初日、ユーマはトリガーを使ってトリオン兵を倒した。』

そのトリオン兵はその場所にはおらずボーダーが回収している。トリガーを使用し
てなにかをすれば、痕跡が残る』

「ああ、アレか。確かにそれはありえる。けど、それならオサム以外にもあの3バカも怪
しむんじゃないのか？」

『ボーダーは警戒区域内に無断で侵入した者の記憶を改竄して処理していて、あの3人
は記憶を改竄されている。更に言えば、オサムは学校で唯一のボーダー隊員。真っ先に
疑われる存在だ』

「どうしたものか」

とにもかくにもまずい。

遊真が入るのを見られてしまっているの、下手に修と一緒に出掛けたりすれば確実に
尾行してくる。

「オサムのおにいさん」

「なんだ？」

「その二人ってボーダーの人なんだろう？」

「そうだが、話し合いならばやめておいた方がいい。」

家の近所や他県からスカウトされてきたスカウト組の人ならばまだしも、三輪と米屋は三門市民……その上、三輪は四年前の侵攻で色々とあつて、近界民だと判明すれば話し合いを一切しない。ゴキブリ見たらゴキブリだから殺すと同じぐらいの勢いで殺してくる」

「その例えはちよつと違うような気がする」

それぐらいのレベルだぞ、修。

ゴキブリだから殺す。近界民だからこらす。今の三輪はそういう感じであり、それについてとやかく言う権利は無い。四年前に襲撃した奴等はどうあがいても敵で悪なのだから。

「千佳ちゃんが来たわよ」

「お邪魔します……なにをされているんですか？」

今の段階では人の話を聞くことすらしない三輪。遊真が関係無いと言っても確実にアステロイドをぶっぱしてくるので、どうするかと考えていると千佳が来た。

「取りあえず、千佳の事を優先しよう。会話は盗聴されていないはずだ」

「盗聴?! なにかあったんですか?」

「ええつと……」

「オサム、ちゃんと話してくれ。おれじゃないと分からない事なんだろう?」

盗聴という物騒すぎるワードを出すと過敏になる千佳。

雑に適当に曖昧に自身について色々と言うのはダメだと遊真は覚悟を決めて、今回自分を呼び出した理由を尋ねると修は正直に話そうと一先ずはと千佳の事を先にすることにし、千佳には遊真の、遊真には千佳の事を説明した。

極僅かな話からサイドエフェクトかトリオン器官しか無いとなり修はサイドエフェクトの存在を知り、千佳が近界民の存在に気付くサイドエフェクトを持っていると判明。千佳は遊真が何時も襲ってくる近界民と雰囲気異なることなく、普通に接する。

「地球が舞台のファンタジー物の漫画で自称一般人が主人公ってあるじゃない?」

ああいう漫画って、大抵は主人公の親族は延々となにも知らないかもしくは物語中盤から終盤に掛けて知るののどっちかじゃない?」

「どうしたんだよ、急に」

「早めに色々を知ることが出来てよかったと思っただけよ」

母さんは私に礼を言ってくる。お礼の気持ちは籠っているのだが、それよりも母さんは怒っている。

遊真が語った近界民は優秀なトリオン器官を持った人間を拉致するという極々僅かな情報で色々な事に気付き、その辺に対してなにもしていないボーダーに怒りを向ける。

「とにかく、千佳のトリオン量が分からないとなにもわからん。レプリカなら測定が出来る」

「だったら」

『だが、それをすればトリオン反応を出してしまう。』

ボーダー隊員がこの家を見張っている以上は、極々僅かなトリオン反応で強行して行く恐れがある。我々はボーダーと争うためにこちらの世界に来たわけではない」

「強行ね。いくら地球の為だからって、やっていいことと悪いことがあるわね。監視してるってクレームの1つでもつけてやろうかしら？」

「そこはクレームじゃなくてメディアのマスゴミどもを利用しよう。」

修の個人情報から自宅が何処にあるかを知り、赤の他人であるボーダー隊員に通過。そして監視するという事をしてしていると。向こうは近界民Ⅱ人間だとは言えないから色々火消しに苦勞するはずだ」

千佳のトリオン量がどれぐらいか知るには三輪と米屋が邪魔になる。

母さんは監視していることをクレーム入れてやろうとするのだが、そんな甘やかすやり方じゃダメだ。

サラツと流しているが修が行方不明になったとか怪我したとかでなく疑わしいからコツソリと米屋と三輪に人の住所を教えている。色々とグレーな気がする。ブラック企業よりブラックだが。

「……三輪と米屋以外は居ない。たけのことが何処かで狙撃準備もしていない。先ずはあの二人が身辺調査をしてきて、尻尾を見せれば人数を増やすといった感じか……」
千佳のトリオン量の測定、ついでに私もどれぐらいトリオンをあるのかを確認をした
い。

三輪と米屋をどうにかしないといけない。近界民間連だと引くに引かないだろうし、仮に我が家に窓ガラスを割って侵入して来た日には母さんが私にボーダーを襲撃してこいと言ってくる。そうなった日にはエターナルレクイエムからの26マキシマムドライブをしなければならぬ。

「遊真、私の部屋の窓から修を抱えて飛び降りる事は出来るか？」

「それぐらいならよゆうでできる」

「修、四塚市の人気の無いところまでいくぞ。千佳、まだ時間大丈夫か？」

「はい、大丈夫です」

「そうか。すまないな、色々と巻き込んでしまつて」

「いえ、構いません。遊真くんのお陰で、どうして私が狙われるのかハッキリと分かるんです。狙われる理由が未だに分からなかった時よりも、一步でも前に進んでみないんです」

「千佳……」

麟児さんの事があつたが、一步でも前に進みたいと停滞した今から脱けようとする千佳の意思を見て、顔を向けられない修。

千佳の意思の確認も済んだので三輪と米屋から逃げる作戦を練り上げる。修が監視されているのならば、修が家にいると思わせなければならず、ある程度は三輪と米屋の気を引かなければならない。

「念のため、これを持っていきなさい」

どう動くかを決めた後、母さんは此処までで良いと私にボイスレコーダーを託す。

やつていることがなんだか完全犯罪染みているなどボイスレコーダーを見るのだが、元からそんなものだったと私達は動き出す。

「い、色々とありがとうございました！」

「気にするな。分からないところがあつたら、また何時でも教える……主に修が、色々と

な。色々とな」

修と遊真は私の部屋の窓から脱出。

その間に私は玄関前で千佳と色々と会話をし、千佳を見送り敷地内を出た後、米屋の携帯に掛けると曲がり角の向こう側にいる米屋の携帯が鳴り響く。

「よ、よう」

「ああ」

ヤバイと冷や汗を垂らし、電話に出て姿を見せる米屋。

かいている冷や汗の量はかなりのもので、偶然に電話を掛けたのでなく此処に居るのが分かつているから掛けた事に気付いている。

「警戒区域内で色々とすることについてはなにも言わないが、此処は三門市と蓮乃辺市の境界線上だ。お前達、なにをしに来た？」

お前達と複数形で言い、強く睨むと出てくる三輪。

「お前には悪いが、守秘義務がある」

「三門市から色々と許可されたりしているが、これは行き過ぎている。」

守秘義務があるの一言で終わらせるつもりなら出るところは出るし、今から京介や熊谷達、知り合いの全ボーダー隊員に三輪と米屋が上層部の命令で我が家を監視してるからどうにかできないかとか理由を知らないか聞き回るぞ」

守秘義務の一言で終わらせるならばと米屋との通話を切り、携帯の電話帳を見せる。今まで出来たボーダー隊員との繋がりが意外なところで役立つ日が来た。村上さん、京介、熊谷、カゲさん、宇佐美、他にも色々な繋がりがあり、それらに上層部が三輪と米屋に我が家を監視する様に命じたと聞き回れば、それだけでボーダー内の上層部に對する信頼や信用は無くなる。

「お前自身はボーダーの隊員で幹部でもなんでもない。上に命じられてやっているんだろ？ちゃんと理由を説明しろ」

「……お前の弟に、近界民と接触した容疑がある。悪いが、それ以上は教えられない」
「オレも秀次もそりやねえだろうって言ったんだぜ？」

けど、証拠が色々揃っているから何処かでボコを出すって命じられたんだよ」

「修を呼び出して、質疑応答すれば良いだろう。なんの為に回りくどいことをする」

「近界民と接触しているならば、ちゃんと報告している筈だ。」

今回、トリガーを換装した際に見た目がお前の弟に酷似していたのも大本を辿ればお前の弟が色々と上に言ったからだ。次の事も考えている奴が近界民についてなに一つ報告が無いとすれば」

「匿つていると言いたいのか？」

「俺も陽介もそれはないと上には抗議はした。だが、それでもと命じられた。すまない」

コツソリと監視していた事については詫び、頭を下げる三輪。近界民との繋がり関連はまごうことなき事実なのでなんとも言えない。なにが原因で見つかったのかを聞くにも、近界民について知っていると云っているも同然なので聞くことはできない。

「私は今から出掛ける。帰って来た時に家を監視していたら通報するし京介や宇佐美達にこの事について色々と聞き回る。そうなると話がややこしくなるから、さっさとボーダー本部に行つて、この命令を出した上層部に修を呼び出して聞いた方が良くと上と言つてこい」

米屋と三輪の意識を家でなく私に向けて、上から近界民との繋がり容疑がある修の監視を命じられて我が家を監視していた言質を取り時間も充分に稼ぐことが出来た。

これ以上人の家を監視されるのは本当に困るので二人に釘をさすと苦虫を噛み潰したかの様な表情をする三輪。近界民と友好的な玉狛の二人に話がいけば確実にややこしくなる。

米屋もその事が分かっているのでこれは無理だと家を監視するのを諦めてボーダー本部に戻ることを考え始めた。

第42話

「おお、海だー！」

「遊真くん、海見たこと無いの？」

米屋達の監視から無事脱出した私達。

蓮乃辺市の駅から四塚市の港町に辿り着き、遊真は海を見てテンションを上げるが私は余り上がらない。

「兄弟……兄弟かあ」

「兄さん、もう忘れた方が良いよ」

修がトイレに行つて、千佳と遊真と待っている間に不審者と間違われて警察に職質されたのはキツかった。

親子と間違われることは過去に何度かあったが未だに馴れず、修が戻ってきて兄弟だと認められて納まったのが辛い。

「海は、確か遊べるんだったな」

「この辺の海は遊ぶ海じゃないから遊べない。」

近くに四塚マリソールワールドっていう海つぽいプールがあるからその内遊びに連れ

てってやる」

「海っぽいプール？海じゃないのか」

「その内、海にも連れてってやるよ」

「そういえば兄さん、今年の夏休み海に行ったんだよね？どうだった？」

「……敷いて言うならば、罰ゲームを回避しようとしたら罰ゲーム以上の辛い罰を受けた」

佐鳥の佐鳥を丸出しにするどころか鰯水を飲んで死にかけるといふ事を思い出す。

あの後、女湯を覗けないかと色々とやつたりして最終的には声だけで興奮していた佐鳥達は気持ち悪かった。

「此処まで逃亡もとい離れていれば、バレない」

『私に搭載されているレーダーでも、此処から三門市までは届かない。早速、千佳のトリオン量を測ろう』

海についてはさておいて本題に入る。

レプリカは口からチューブの様なものを出して千佳に握ってくれと言うのだが千佳は大丈夫なのかと若干だが心配しており、安全性を証明するべく修が先に計測すると修がチューブを握る。

修のトリオン量はボーダーの基準に満たない残念な量で物凄く小さくあっさりと計

測が終わり、次は千佳の番になり千佳のトリオン量が物凄く計測に時間が掛かる。

「オサムは千佳とつきあってるの？」

「なっ、なにを言い出すんだ急に！」

「しんみになつてたり周りから大切にされてたりするからさ、違うのか？」

「つきあつてないよ。千佳は僕の家庭教師をしていた麟児さんの妹で」

「あんな事を言っているが、親密度は高い。」

「なにかのきっかけさえあればくつつく。どっちも友達以上の感情はあるはずなんだ」

「ほうほう」

「兄さん!!」

嘘は言っていないぞ。

千佳は保護欲が沸いてくる守ってあげたい系の可愛い女子で、修とお似合いだと……母さんが言っていた。私自身もお似合いだとニヤニヤと心で笑いながら見守っている時が何度もある。

オサチカ談義を色々としたかったが麟児さんの一件とか色々と話し出したので私は余計な事はなにも言わず、ただ傍観していたのだが千佳がモヤモヤしている事に気付く。

「なにかあったのか？」

ついさつきまでは色々と考え事をしていたり、言われた通りに動いていた千佳。

自分からなにかを考え出して、答えが出ずにモヤモヤしたのか答えが出てモヤモヤしたのは分からないので聞いてみるのだが、大丈夫ですの一言で終わらされた。

『計測が終了した。これが千佳のトリオンを可視化したものだ』

「うおおお、でつけー。オサムの何倍だ?」

『1から10段階で評価するならばオサムは2、チカは38だ

過去に色々な人のトリオンを見て来たが、これは今までに前例のないレベルのものだ』

「おい、1から10段階という言葉を知ってて言っているのか?」

ついさつき修のトリオン量を見たので、どれだけ千佳のトリオンが優れているのかがレプリカにより可視化されたトリオンでよく分かり、これならば多少のリスクを背負つても狙って当然だと遊真は納得する。

「ついでだから、私も計測してくれるか?」

『構わない……ふむ、兄殿もトリオンが豊富で計測にやや時間が掛かる』

「そうか」

サイドエフェクト(ということになっている転生特典)があるから、多かつたか。

とはいえ、千佳よりは少ないだろう。カゲさんよりも上くらいはあつてほしいなど

思っているとレプリカを見つめていた千佳が口を開いた。

「遊真くん、それって簡単に作れるの？」

「それってレプリカのことか？レプリカは親父が作ったもので、作るのに物凄く時間がかかったからそう簡単には」

「レプリカじゃないよ。この、トリオンを測定する装置は簡単に作れるのになって」

「トリオンを測定する装置？」

ん〜おれはトリガーを使う側で作る側じゃないから分からん。けどまあ、向こうの世界の何処の国にも絶対にあるものだから作ろうと思えば簡単に作れるものだと思う」

「そう、なんだ」

トリオンを測定する装置について聞くと千佳は落ち込む。

千佳がどうしてそんな質問をしたのかは分からないが、遊真の答えは割と最悪な部類に入るもので分かっていったこととはいえ、少しだけボーダーに苛立つ。

「空閑、トリガーを使う才能って言われたら、なにが浮かぶ」

「おい」

千佳はそれ以上はなにも言わず、自分の中でそれはそれ、これはこれで解決しようとしている。

修はそれを分かっているながら更に一步奥へと触れるのは余り良くない部分に触れる。

「そりゃ、トリオンだな。」

単純なトリオンの弾を撃ってぶつけ合いになった時トリオンが豊富だったら威力が上がるし盾とか物凄く頑丈になる。オサムレベルのトリオン量ならぶっちゃけ戦場に出ても直ぐ死ぬ。技術がどうのこうの以前にトリオンが少な過ぎる」

「トリオン……そんなにトリオンが大事なのか？」

「向こうの世界はでんかせいひんとかいうのは全くなくてでんかせいひんと同じだったり似たような事が出来るけど、トリオンを使わないと動かない物ばっかだからな。トリオンなしで生きてくのは、こつちの世界ででんかせいひん無しで生きろと言ってるみたいなものだ」

「……そうか。向こうの世界の人達にとって、トリオンはそんなに大事なのか……」

遊真の分かりやすい例えでトリオンの重要さがわかるとそれ以上はなにも言わない。

そこから先を言うのはいけないことだと修は感じている。

「なんでこんなこと聞くんだ？」

「それは……」

「ちよつとした淡い期待だ」

遊真の問いかけに答えづらそうな修と千佳。

汚れたり変なことを言う役は私がすると二人の代わりに私が質問をしてきた理由を

答える。

「淡い期待ってどういう意味？」

「ボーダーは未だに千佳を見つける事が出来ていないってことだ」

「貴虎さん!!私は、そんな風に聞いたんじや」

「少しは期待していたんだろ？」

「っ」

他人に迷惑を掛けるぐらいならばと一人になる道を選んでいるが、それでも寂しく辛く苦しい千佳。

心の何処かでもしかしたらの期待を抱いていたから遊真にトリオンを測定する装置について聞いてみた。その結果は割と無情なものだった。

「まあ、チカレベルは普通は無視できないよな」

『あれほどまでのトリオンとなれば、仮に拐われても相当大事にされるはずだ』

ところで、私の測定何時ぐらいに終わるんだ？

「三門市にボーダー本部を建てて門誘導装置を設置し、三門市の一部の地域にのみ近界民が出るようにしている。」

ボーダーは絶対に近界民を三門市の警戒区域の外には出さないと三門市とか国とかの役人に言っているし、世間への印象を良くするために広報活動とか色々としている。

だが、そこで止まっている」

ボーダーの隊員達はトリオン能力がある一定以上の人間、その隊員達の大半は三門市民だ。一定値を満たしていない者の方が多いかもしれないが少なくとも100人以上は一定値を満たしていて、中には一定値の倍以上とかも居るかもしれない。ボーダーはトリオンがどれだけ大事かを知っていて尚且つ近界民がトリオンを持った人間を主な目的としていることを知っている。

「一般の、それこそ遊真や千佳ぐらいの年齢の三門市民のトリオン量の計測をした方が
良い。

そういうことを一切せずにボーダーは県外、四塚市よりも更に遠い場所まで足を運んでトリオンが豊富な人を探してスカウトしている。危険な命懸けの仕事をわざわざしに来てくれている人達には申し訳無いが、先に街にいる人達のトリオン量を念のためと計測してほしいと私は思っている。少なくとも警戒区域から出さないのはこの前のラッドやお前の存在が全くボーダーに見つかってないことから絶対に無理だ」

その内、それをしていたしていなかったで手遅れなことになる。

考え過ぎややりすぎとか言われようが、今日の前にはトリオンが尋常ではない千佳がいる。
いる。

ボーダーには入りたくないと思っている子でももしかすると出水レベルの人が居る

かもしれない。三門市民は28万人程居て、子供の正確な数は知らないが20000は最低でも越えているだろう。

千佳はなんとか守れても第2第3の千佳は存在しているかもしれない。千佳レベルでなくても拐う価値ある人はかなりいるはずだ。

警戒区域内に留めると言っているが、無理だろう。

「学校でやる身体測定のついでにトリオンを測定。狙われて当然だと思われる数値を出したら近界民のリーダーに見つからない装置の1つでも作って渡してほしい」

装置が量産できるなら、装置を持ち出せるなら、学校に持って行って計測ぐらいしてくれ。リーダーの本部が出来てから一度もそういうのはなかったぞ。

「少しだけ、本当に少しだけ千佳と修は期待していた。リーダーが見つ付けてくれることを」

「なるほど……オサム達はリーダーに怒ってるのか？」

「怒ってはいない。リーダーの隊員は必死になって街を守ってくれる。上層部の人達も情報収集に来たのかもって言った時には必死になってどうすべきか対策を考えてくれた。リーダー側も必死になっていることは、分かっているんだ。それ以上の文句は言えない」

「リーダーはなにも悪くないよ。私がちょっとだけ期待しただけだよ」

ボーダーにはなんの罪もないが、色々と心の中にモヤモヤが残る修と千佳。

この話題を続けてしまったのは失敗だと私は話題を変えようとするのだが、その前に私のトリオンの測定が終わった。

『これが兄殿のトリオンを可視化したものだ』

「おお、思ったよりもデカ、ん？」

「僕のよりも物凄く大きい……けど」

「台形？」

修や千佳の時の様にトリオンを可視化し、トリオンキューブを出すのだが形がおかしかった。

通常ならば四角形の立方体が出てくるのだが、私のは何故か台形のトリオンキューブでどうなっているんだと遊真も驚いている。

『どうも兄殿のトリオン器官がおかしい。』

トリオン器官の一部が欠けていて、本来ならば四角形のところが台形になってしまっている。この様な前例は、過去に無い』

「トリオン器官の一部が欠けている……」

レプリカからの説明を受けて、あるものが頭に浮かびあがる。

今までの話からして、トリオン \parallel 力と考えるの間違いない。そうならばアレが出来た

際にトリオン器官の一部が欠けていてもなんにもおかしくはない。

その事について言えば色々ややこしくなるので私は台形のトリオンについては深く語らずに別の話題を出す。

「三輪達なんだが……なにが原因かは分からないが、修が近界民との繋がりを疑われていた」

「なっ!？」

四塚市に逃亡するのに集中していたので三輪達のことを言っていなかったので報告すると驚く修。

どうして今になって話すんだと言われるが千佳を優先していたから仕方ないで報告しなかった一件は終わり、この後どうするのかを考えることに。

「そういえば、遊真くんはどうしてこっちの世界に来たの？」

「親父が死んだら、こっちの世界のボーダーって組織にいるもがみそういちって人を頼れと言われてて」

「もがみそういち?」

遊真のこっちの世界に来た目的を聞く千佳。

最上宗一の名前が出るが千佳はピンと来ず、修を見るのだが修も誰かは知らず私の顔を見る。

「その人は遊真の親の知り合いなんだろう？ だったら、結構な歳いってるおっさんの筈だ。

B級以上の隊員とか重役の名前はボーダーのホームページに名前が出ているから、名前を検索すれば引っ掛かるんじゃないのか？」

「とりあえず、検索を……本部から物凄く電話が掛かってきてる」

「その電話に出るな。出るとしてもこっちの準備が色々と終わってからで、今は電源を切っておけ」

携帯を取り出し、最上宗一の名前を検索しようとするのだが馬鹿みたいに本部から電話が掛かってくる修。その電話に出れば最後、今以上にややこしくなるので携帯の電源を切らせる。

「遊真くんのお父さんの知り合いのもがみさん、名前は載ってないみたい」

色々と検索してみるもののボーダーの公式サイトに最上宗一の名前は存在していなかった。

千佳は自分の携帯を遊真に見せると遊真はジッと携帯を見つめて名前を探すのだが

「字が読めん」

字が読めなかった。

「親父がウソをついたわけじゃないし、そうなるともがみそういち……」

字が読めなかったものの、最上宗一が居ないと分かり何故居ないのか考えて少しだけ

暗くなる遊真。

真つ先に考えられるのは死んでしまったことで、その考えは当たっていた。

「修くん、ボーダーの人に聞いてみる事ってできるかな？」

「ボーダーの人？」

「この前、学校でボーダーの人と色々話をしていたよね？あの人なら、遊真くんを見ても大丈夫じゃないかなって」

「この前ってことは、迅さんのこと？」

「うん」

最上宗一の行方について考えても分からず、ボーダーの人に聞くことを提案する千佳。

修が何処その実力派無職の名を出すとコクリと頷き、あの人ならばと修はその案を採用する。

「じゃあ、電話を」

「修、ストップ」

「まだなにかあるの？」

「今から電話を掛ける相手はボーダーの隊員だろ？なにかしらの権限がある重役じゃないのなら、遊真が悪い存在じゃないとどれだけ分かってもどれだけ証明しても、上の

殺れの一言でひっくり返る。ボーダーの重役達に遊真を敵として排除せよと命令を下げなくする交渉のカードも念のために必要だ」

今から電話する実力派エリートは強くてボーダーの要的存在だが、1隊員に過ぎない。

最終的な決定権を持っているのはヤクザ顔の総司令で、それがダメだと言えばダメになる。その総司令の首を領けさせるものを用意しておいた方が面倒な手順を色々省くことが出来る。

「交渉のカード……って、なにを出せば良いんだ？」

『それならば近界の情報がいいだろう。』

ユーゴが残したものとやユーマと共に今まで見てきたものは、ボーダーにとってかなりの価値になるはずだ」

「じゃあ、それを交渉のカードにするとして……此処からはボーダーが深く関与する事だから私は帰る。帰るぞ千佳」

「え!？」

遊真が狙われない様にするカードは用意したのだから、これ以上はなにもしなくても上手くいく。

此処から先はボーダーが関与するし、なによりも今から何処ぞの実力派エリートが電

話を掛けて呼び出すので避難させてもらう。

この場にはもう用はない千佳を連れて帰ろうとするのだが、千佳は驚いた。

「なにに驚いているんだ？遊真がどうなるかは帰って来た後に修や本人に聞けばいい。

今からはボーダーが深く関与してくる。余りボーダーと関わりたくないなら、迷惑をかけたくないなら今ここで帰るのが一番じゃないのか？」

自分も此処に残って、色々と見届けるつもりだったのかもしれないがここに残れば色々と巻き込まれる未来は確定だ。

それならばさっさと帰るのが一番だ。

「残っても、良いですか？」

「遊真が心配だからか？」

「……はい」

千佳のその返事で遊真の目の色が若干変化した。千佳の返事は嘘だった。

正確に言えば心配な部分もあるのだが、それ以上に色々と知りたいこととか聞いておきたい事があるという感情が電磁波から見られる。

遊真はその言葉を嘘だと分かっている、その事について今はなにも言わずにただ私達を見ている。

「……先に言っておくが、これから先は大変な事しか起きない。

千佳が今見ようとしている道はかなり厳しく色々辛い思いをしたりする未来だ……その先に幸福も待ち構えているが、幸福が待ち構えているかもしれないレベルで基本的に辛いものばかりだ」

「……それでも残ります」

「そうか」

「兄さん、いったいなんの話を」

「修、千佳にも千佳の意思があるからちゃん向き合うんだ。でなければ破局するぞ」

ジツとしていられないという感情は前々からあった。

今回の一件か今まで色々と話した余計な事が要因なのか、千佳は拐われた友達を探したいという気持ちが強くなってきた。それを止めるつもりはないがその道は厳しくて辛いことだけは先に言い、千佳の気持ちと向き合えと修には忠告し帰りの交通費（3人分）を渡して、その場を去ろうとした瞬間、なに言ってるんですか！と顔を真っ赤にした千佳に弁慶の泣き所を蹴られた。

第43話

「とりあえず、僕の携帯で掛けるのは難しいからチカの携帯を貸してくれないか？」
「うん」

貴虎が去って数分後、修は迅に電話をしようとするのだが携帯の電源をつけられ
でもかと言うぐらいに来るので掛けづらいので千佳の携帯を借りた。

「チカ、なんであんなウソをついたんだ？」

修が迅に電話をしようとする合間、千佳のついた嘘について聞く遊真。

「ウソ？」

「おれを心配して残ってくれたの、ウソだろ？」

「そ、そんなことはないよ」

「それは分かってる。けど、それよりも大事なことがあるんだろ？」

「……ごめんね」

詰め寄られ、嘘を認める千佳。

遊真を使ったことを謝るが、そのことはそこまで気にしてはおらず遊真はなにが大事
なのかを訪ねた。

「拐われた人達がどうなっているとか、ボーダーの人達は本当はなにをしているか色々知りたいの。」

貴虎さんは近界民の世界に行ったりして居るかもって色々と言っていたけど、本当の事はよくわからなくて……ただ、ジツとしてるだけなのは、貴虎さんに守ってもらうだけはダメだと思つて」

「そうか」

「遊真くん、拐われた人達はどうなっているのか知ってる?」

「うーん、国によって異なるな」

迅に電話をしようとしている合間、千佳の質問に答える遊真。

「あ、繋がった」

一方、修は千佳から借りた携帯で迅に電話をしたのだが繋がらず3度目の電話で繋がった。

『もしもーし、メガネくん。今何処に居るの?』

「あ、はい。四塚市に……なんで僕だと分かったんですか?」

なんとか繋がって喜ぶも、いきなり名前を呼ばれて困惑する修。

『オレのサイドエフェクトがメガネくんだって言ってたんだ。てか、四塚市にいるの!?!』
未来視のサイドエフェクトで修が電話を掛けてきたのは分かっていたものの、四塚市

に居るのは予想外だったのか叫ぶ迅。

自身のサイドエフェクトは修が誰かと警戒区域内に居てその誰かが三輪と米屋と交戦する未来が待ち構えていることを教えてくれたが、その未来とは大きくかけ離れていた。

未来は無数に存在しているので、読み逃した間違えたで自己完結するのだが、実際のところは貴虎が無理矢理未来を変えた事には気付かない。

「あの、迅さん一つ聞きたいことがあるんですが」

『ん〜実力派エリートに答えれる事ならなんでも答えるよ〜』

「もがみそういち、という人を知っていますか？」

『……どうしてメガネくんがその名を知ってるんだ？』

迅は最上宗一の名を出されると声色が少し変わった。

ボーダー本部が出来る前から、秘密裏に活動していた旧ボーダーの頃から所属している迅はその名を知っており、入ったのがつい最近の修がその名を出したことに動揺する。

「知っているんですね？」

『ああ、知ってるよ』

「お手数をかけますが、一人で四塚市に来てくれませんか？」

『わかった』

「……疑わないんですか？」

『メガネくんがなんで知っているかは分からないけど、そっちに向かった方が良いことになる。オレのサイドエフェクトが、そう言っているんだ』

修は迅に自分達の居る場所を伝えると携帯を切る。

「どうだった？」

「迅さんは、もがみさんについて知ってるみたいで来てくれる。ただ……」

「ただ？」

「どうも迅さんは僕が電話を掛けることを知っていたみたいなんだ。」

僕の携帯じゃなくて千佳の携帯からかけたのに、最初から僕が掛けてきたことが分かっていたみたいなんだ。迅さんはサイドエフェクトがどうの言っていたから」

「サイドエフェクトで分かるのか……どんなサイドエフェクトだ？」

迅を呼び出す事が出来たものの、1つだけ気になる点があるとモヤツとする修。

嘘を見抜いたり視力が良くなったりするぐらいのものでなんで分かったんだろうと考えるも浮かばず、本人に聞けば良いと思うという千佳の一言で一旦終わり、千佳と遊真に万が一と隠れて貰い迅を待つ。

「いや〜ごめんね。色々忙しい実力派エリートなもので、時間が掛かって」

「いえ、そんなに待っていませんよ」

「あ、そう？電話を掛けてから40分程たってるけど」

「僕も家から出てそれぐらいの時間が掛かりましたから」

「そっか。ところで、他の子達は何処かな？」

「!？」

まだなにも言っていない。呼び出したのは修で、他にはなに一つ言っていないのに千佳と遊真を探そうとキョロキョロと首を振る迅。

「なんで……」

「ああ、そういえば言っていなかったな。」

オレは目の前に居る人の少し先の未来を見ることが出来るんだ。メガネくんは今からオレの会ったことの無い誰かを紹介してくれる未来が見えてき……あ、あそこに居るのか。おくい、隠れてないで出てきてくれないか？ぼんち揚げを一緒に食べないか？」
言っていることが若干犯罪者っぽい迅はぼんち揚げを取り出し、千佳と遊真が隠れている所に声を掛ける。

声が聞こえていた遊真は未来視のサイドエフェクトを迅が持っていることを知り、隠れても無駄だと千佳と一緒に迅の前へと姿を現す。

「どうも、ボーダーが誇るS級隊員、実力派エリート of 迅です！」

「どうも、くがゆうまです」

「空閑遊真、空閑ね……成る程、お前は近界民か」

互いに軽く挨拶を済ませて、少し顔を見ると見える幾つもの遊真の未来。

そこから遊真がトリガーを使う未来などが見えた迅はどうして最上宗一の名を出したのか、どうして四塚市まで逃げたのか、どうして三輪と米屋と交戦していたのか、全てを理解した。

「！」

遊真が近界民だと分かり、その事を聞くと身構える遊真。

迅はしまったと慌てて待ったと手を前に出す。

「ああ、待て待て。

オレはお前とは戦わないよ。向こうの世界に何度も行ったことあるし、近界民にも良い奴が居ることも知っている」

「向こうの世界に何度も行ったことが、あるんですか？」

「そうだけどこれは秘密にしてくれよ。ところで君は……」

「雨取千佳です」

「そうか、千佳ちゃんか……成る程、うくん……他に誰かが隠れてる、なんてことはないよね？」

「この場に居るのは僕達だけですけど、どうかしたんですか？」
「万が一、オレ以外が来てたら、大変なことになると思ってます」

千佳、修、遊真。

これから起きることが確定している近界民の大規模な侵攻で大きく活躍をしている未来が見える。それ以外にも色々と明るい未来が多く見えているのだが無数にある未来の中で時折、千佳達に力を貸している顔が見えない謎の人物が居る。それが誰かは分からず、何処かに居るのかと探すのだけが見えない。

「ジンさん、つまらないウソをつくね」

「そんなこと無いって。」

ボーダーには色々と派閥があつて、近界民は絶対に許さない城戸派、近界民はともかく街が第一だとする忍田本部長派、近界民にも良い奴が居るから仲良くしようぜの玉狗支部派の3つがあつて、オレは玉狗支部派。もし城戸派の人と出会ってたら話し合いもなにもなし、それこそゴキブリだから殺すぐらいの勢いで襲ってくる奴も居るんだ」

「む……」

自分以外が来ていたらという言葉には嘘だったが派閥に関することは嘘でなく、貴虎と似たようなことを言っているなと今は派閥について聞いたことと迅が玉狗支部派でよかつたで済ませる遊真。

迅は遊真が近界民だと、遊真は迅が近界民だから敵で倒すといった考えを持っていないことが分かったので本題に入る。

「迅さん、もがみそういちって人を知ってる？」

「ああ、知ってるぞ。最上さんはオレの師匠だった人で——と、ヤバイな」

最上宗一について語ろうとするのだが、その前に携帯が鳴った。

携帯の液晶にはボーダー本部と書かれており、そこから修達を経由して幾つもの未来が見えた。

自分が電話に出なかった未来。何処かの誰かが修と千佳と遊真と誰かと金属バットを片手に城戸、鬼怒田、根付、三輪、米屋を正座させていて、遠征でいない太刀川達ボーダーのトップチームを除くノーマルトリガー最強の忍田本部長を含めたほぼ全ての隊員がボコられて倒される未来。

城戸達がなにかを語ろうとする度に全力のビンタをし、ちゃんと謝るまで許さない90年代の教育的指導(偏見)をされる未来が待ち構えており、その未来が確定するとボーダーに批判が行きまくったりスポンサーが降りたりと下手をすれば三門市から追い出される可能性もあった。

「はい、もしもーし、実力派エリート迅です」

『迅くん、今何処に居るの？』

電話に出ると、S村さんと繋がった。

「なにかあったんですか？」

『本部に今すぐに来てくれる？』

「オレ、今日は非番ですよ？」

『緊急事態よ。』

近界民との繋がりがあつた子がいて、調べている途中にその子の家族の方に気付かれて、本人を直接呼び出すようにも一切連絡がつかなくて……このままだと強行手段を取る可能性があるから、その前に一度、迅くんのサイドエフェクトで見ることで今は留めているわ』

「あく……沢村さん、絶対にさせないでくださいね。もし強行手段に走ったら大変な事になりますんで」

『それってどういう』

「今からそつちに行きますので、待っていてください」

ピツと電話を切る迅。

少しでも遅れたら大変な事になると修達を見て、今からどう動くのかをサイドエフェクトで未来を見ながら色々考える。

近界民との繋がりがあつた子というのは目の前にいる修。調べている途中に気付かれ

たと言うことは米屋と三輪

が調べていた。強行手段に入ると言うことは三輪達が修の家にガサ入れしに行くこと。それをすればボーダーが崩壊する未来が待ち構えている。

「……とりあえず、ボーダーの本部に来てくれないか？」

どうするかとサイドエフェクトで未来を見ながら色々と考えるも、遊真達を連れて来るのが一番だった。

「あの、私も行つて良いですか？」

「勿論、というか千佳ちゃんを含めて誘つたんだ。

オレとしては玉狛支部に来てほしかつただけど、そうは言つてられなくてさ。メガネくんもそれで良いかな？」

「空閑を連れていって大丈夫、でしようか？」

「その辺はこの実力派エリートに任せてくれよ」

最上さんは何処にという話は一旦幕を引き、ボーダーが崩壊しない為にもボーダー本部へと向かう修達。

貴虎は修達にしか電車代を残しておらず迅は自腹で三門市に戻ることとなり、約一時間掛けて三門市へと戻るとボーダー本部へと直行せずにとりガーを取りに自宅へと一度帰ると貴虎が待ち構えており、修にそこそこの大きさの鞆を投げた。

「どうせ泊まり込みとかそういう感じになるだろうと、詰め込んでおいた」
「……なにもかもお見通しなんだね」

準備の良さに少しだけあきれるも、頼りになる貴虎に礼を言う修。

トリガーをポケットに入れ、待つてくれている迅速の元へと帰る
と修のトリ
ガーでボーダー本部へと続く入口を開く。

「へえ、こんな風になってるんだ」

ボーダー本部からはそれなりの位置にある廃墟にトリガーを翳すと入口が開く。

修と迅は何度も見たことがあるがはじめての遊真は少しだけ本部へと続く道をわくわくしながら歩いており、千佳は大丈夫かなとびくびくしなるといふか落ち着きの無い一行。

ボーダー本部の中はこうなっているのかと見ながら本部長達がいる会議室に向かっている。とS村さんが迅が戻ってきたと聞き、迅の元へとやって来た。

「迅くん、随分と待たせてくれたわね」

「四塚市に居たもので、結構時間が掛かりました」

ピクピクと血管を浮かべているS村さん。

迅にセクハラをされた(尻を触られる)時よりは怒ってはいないものの、二時間以上も会議室で迅は何処だとメガネの家に行けなどピリピリとした話を上層部達はしてお

り、その空気はかなり重かった。

迅に連絡を入れて一時間以上も待たされたのでS村さんはそこそこ怒ってはいるものの、なんとか来てくれて良かったとホッとすする。

「つて、四塚市!?!随分と遠くに……その子達は?」

四塚市に居たことに驚くも、遊真達に意識が向くS村さん。

迅は忍田さん達の前で色々と説明しますと会議室に向かい、会議室の自動ドアを開く。

「随分と時間がかかったな……何時もの様に、裏で暗躍か?」

「やだな～人をそんな詐欺師みたいに言わないでくださいよ」

「似たようなもんじゃろうが!!というか、なんでそこにメガネがおる!!」

ピリピリとした会議室に入るとヤクザ顔もとい城戸司令が呼び出してから一時間ほどかけてやって来た迅に嫌味を飛ばす。

それが嫌味だと分かってる迅は特に気にすることなく微笑んだが、鬼怒田さんが修を指差し何故一緒にいるかを問い詰める。迅と一緒に居ると言うことは口クでもないことを裏でしていたんだろうと鬼怒田さんは心の中で決めつけており、大体当たっている。

「迅、どうして呼び出してから一時間以上もかかった?」

ピリピリとしていた空気は迅速が入ってきた事により少し変化する。

鬼怒田さんは怒っていないながらも修達を見ている。忍田本部長は迅に遅れた理由を聞いてくる。玉狛の林藤支部長はなんか面白そうな事をしていいるなど少しだけワクワクしており、タバコを啜える。根付さんは修以外にも人が居るといふことは修が黒だったなど確信する。唐沢さんはそれに加えて、その二人は誰なんだと疑問を持つ。

「電話が来たときは四塚市に居たんで、どう頑張つても一時間以上は掛かりますよ」

「何故そこに居たかはこの際、聞かないでおく。それよりも三雲くんを連れてきたのは分かるが、その子達は？」

迅は忍田本部長からその言葉を聞いた瞬間、心の中で少し微笑む。

迅のサイドエフェクトは未来を見る事が出来るが、必ずしもその未来が訪れると言わうわけではない。不幸な未来が来ると分かっているなら回避できるし、幸運な未来が待ち受けていると分かり怠惰になっていると不幸な未来に行くときもある。

迅が見る幾つもの未来はあり得る可能性の1つで、未来はまだ定まっていないうというタイムトラベル系の物語でよく聞く言葉と同じで変えようと思えば変えられる。

その為に未来を変えるたり決めたりする分岐点ダイニンクポイントとも言うべきところが存在し、忍田本部長の問い掛けが良い方の未来に向かう分岐点だった。

「どうも、はじめまして。もがみそういちさんを訪ねに向かうこの世界から来た、くがゆう

「ます」

その分岐点でどうすれば良いのか分かっていないのは、遊真に自己紹介をさせる。するとタバコを啜っていた林藤支部長はタバコを落とし、城戸司令は眉毛をピクリと動かし、忍田本部長は口を大きく開く。

「「空閑……」」

三人とも同時にその名を呟く。

遊真が自己紹介をすると同時に全てが変わった。迅は未来がこれで確定したと、今まで見えていた複数の未来が消え去り一つの未来に向かっているのを見た。

「親父の名前はくがゆうごです」

「おいおい、マジかよ」

近界民がどうのこうのと色々と疑っていたりした上層部。

遊真の登場と自己紹介により全てが変わったと林藤支部長は直ぐに理解した。

「彼について驚いているところ申し訳ありませんが、その空閑という人と知り合いなのですか？」

最上宗一の名前には驚くものの、イマイチ状況を理解出来ない唐沢さん。

根付さんと鬼怒田さんもコイツが近界民ぐらいの理解で、その空閑がどう関係をしているか聞くと忍田本部長が空閑の父である有吾がボーダー創設時の初期メンバーであ

ることを知らない面々に教えた。

「空閑の知り合いがボーダー隊員じゃなかったのか？」

「おれはそう聞いてただけだ」

親の知り合いがボーダー隊員としか聞いていなかった修。

話が半分違うと聞いてみるが遊真本人もそこまで知らなかったらしく、親から聞いたボーダーと実際のボーダーも半分違う事を言う。

「有吾さんに子供がいたとは……」

「それで肝心の奴は何処に居る？」

「親父ならここにいるよ」

「？」

どんな時も離さずにつけている指輪型のトリガーを見せる遊真。

なにかあった時に此方の世界に行けと言われて知っている修は父親は居なくなつたんじゃないかと困惑するも、指輪型のトリガーがどういう意味なのか分かつた忍田本部長と林藤支部長は少し俯く。

「そうか。奴の最後は、どうだった？」

「なんでか分からないけど笑つてた。それよりも、もがみさんは何処なの？」

「最上さんはここだよ、遊真」

最上宗一の名を出すと、今度は迅が自分の持つトリガーを見せる。

遊真の持つトリガーと迅が使っているトリガーは通常のトリガーとは大きく異なる黒トリガーだ。

トリオンがある程度あれば誰にでも使えるものではなく、一部の人にしか使えないもので通常のトリガーを大きく上回る性能を持ち、使用している間はトリオンが何倍にもなるとてもないものだ。

作り方は至ってシンプルでトリオン能力が優秀な人間が、命と全てのトリオンを注ぎ混むことにより出来るが、100回やって100回連続作れるわけでもなく大半は失敗に終わり、どんな能力を持つかは出来るまで不明なものだ。

「そっか、もがみさんはもういないのか」

最上宗一がこの世にいないとわかり、この世界へとやって来た目的を失った遊真。これからどうすれば良いのかがよくわからず心の中にぼっかりと大きな穴が開いた。

「ところで、オレを呼び出した理由はなんですか？」

「なにを今更なことを、その三雲くんは近界民との繋がりの容疑が掛かっていたから呼び出した。分かっているからわざわざ連れてきたんだろう」

「そうですか」

未来が確定したがここ最近、サイドエフェクトがハズレまくっているので一応の為の

確認を根付さんですると、もう話は終わりへと向かっているのが分かる。

修に掛けられていた近界民との容疑も遊真との繋がりだと判明し、修は黒だったで終わりを迎える……かに思えた。

「約半年前、此方の世界に人型の近界民が現れた。それについてなにか知っているか？」

「半年前？」

「そうだ」

「いや、知らないよ？」

おれがこつちの世界に来たのはつい最近で、半年前だったら向こうの世界の別の国に居たから……別の奴じゃないの？」

「お前を此方の世界に送る手引きした支援者、と言うわけではないのだな？」

「こつちの世界に行くのに色々協力してくれたたりした人は居るけど、多分違うと思う。てか、どんな人なの？」

「スカル、なにか聞き覚えはないか？」

「スカル、スカル……ないよ」

修は黒で遊真と繋がっていた。それで修の一件は終わる。

それならば半年前に現れて何処かに消え去ったスカルは何処に行ったのか？それが分からないままだった。

少なくとも帰った形跡はない。向こうの世界に帰るには門を開かなければならず、スカルが現れた場所付近で門は開くには開いたが、その時スカルは風間隊と交戦中で風間隊が全滅した頃には門は閉じている。

目の前から急に居なくなつたスカルからは門を開いた痕跡は残っておらず、此方の世界にまだ居る以外はなにも分かつていない状況だつた。

今回の一件で修がスカルと繋がっていると説が浮上したが、遊真だつたで終わりを告げてしまい結果的にはふりだしに戻つてしまふ。

まあ、実際のところは修がスカルと繋がっているとすることはなにも間違つてはいない。疑いを持った原因であるラッドを破壊したのも貴虎なのでなにも間違つてはいない。

偶然と偶然が重なつてしまい、ボーダーは違う人物を見つけただけだ。

「本当か？そういつて、本当はなにかを知っているんじゃないだろうな？」

「知らないよ」

スカルについてなにかを知っているか知らないかの話だが、平行線を走つた。

疑う鬼怒田さんは知らないなら知らないということを証明して見せろと言ひ、遊真はそう言うならば繋がっているという証拠を見せろのいたちごっこが続いた。

「じゃあさ、向こうの世界の情報を渡すのはどう？」

この前のラッドは偵察目的でやって来たから、その内大きな襲撃があるはずだよ。おれの持つてる情報があれば、次にどの国が襲ってくるのかが大体絞れる」

「なにそれは本当か!？」

「それを渡す代わりに、おれは敵じゃないから襲わないって誓ってくれよ」

最終的に交渉の切り札を出してしまった遊真。

口約束程度ならばどうとでもなると鬼怒田は頷くが遊真は鬼怒田には聞いておらず、城戸司令を見る。

「キドさんがボーダーで一番えらい人なんですよ？」

それだったら約束してよ。おれはこつちの世界を襲いに来た敵じゃないから襲わないって」

重役の殺れの一言でひっくり返る。貴虎はそういった。

組織というものがどういったものなのかよく知っている遊真は組織のトップに約束をして貰う。例えば鬼怒田さん達が約束してもトップである城戸司令の一言で全てがひっくり返ることをよく知っているから。

「……良いだろう。」

そちらがなにか問題を起こさない限り、ボーダーは君と敵対をしないことを誓おう」

城戸司令はその条件を飲んだ。

「ただし、その黒トリガーはこちらで預からせて貰う。

ボーダー側が約束を守ったとしても、君の方が問題を起こす恐れがある。特に、トリガーを持ったままではだ」

そして更なる要求をした。

遊真の持つている黒トリガーを寄越せと遠回しに要求する。それを聞いて上手いと感ずる鬼怒田さん達城戸派の面々。

既に交渉の実権を握っているのは城戸司令であり、遊真はこれを断れば敵とみなされるので身の安全を求める遊真は嫌でも飲まなければならない。

「じゃあ、いいです」

しかし、遊真はそれを飲むことは無かった。

「これを渡すのは無理だし、渡したとしても誰も使えない」

「それをどうするかは、こちらが決める」

「預かるんじやなかったの？」

スカルについて終わると、今度は遊真の黒トリガーについて言い争いがはじまる。

黒トリガー1つで戦力は大きく傾き、1つあるかないかで大きな差が出る。現在ボーダーにある黒トリガーは2つ、遊真のを合わせれば3つになり、城戸司令はなんとしてでも手に入れたかった。

「城戸さん、そんなに黒トリガーが欲しいのならオレのをやるよ」

再び言い争いがはじまり、また平行線を辿り続けるのかと思つた矢先、迅が自身の黒トリガーを差し出した。

「やるもなにも風刃は元からボーダーのものだ」

「けど、城戸さんが自由に使えるものでもない。」

近い内にやって来る近界民の大規模な襲撃とか色々と備えたいのは分かつてるけど、遊真から奪つても意味はないよ。仮に奪うことに成功しても、遊真の持つてる黒トリガーに適合する人は誰も居ないんだから」

「そこまで見えているのか……」

「城戸さん、考え方を変えようよ。」

遊真の持つてる黒トリガーを手に入れても使える人はいないし、仮に居ても今からじゃ間に合わない。

オレの風刃みたいに性能が極端で銃手の弓場と相性が悪かったりする可能性もあるし、その条件を変えてこつちに居る間はボーダーに協力する方が良いつて」

銃を使えば一対一最強とも言われる弓場が仮に風刃を使った場合、下手すれば銃を使っている時よりも弱い可能性がある。

遊真の持つている黒トリガーについてボーダーはよく知らない。適合する人を見つ

けても、その能力を使いこなせるのか相性が良いのかが分からない。使いこなせて相性が良い人を見つけても、その黒トリガーを使いこなすにはかなりの時間を要するのは確かだ。それならばいつそ仲間に入れれば良い。

使えるかどうかどころか能力がなんなのかすら分かっていない遊真の黒トリガーに對し、能力が分かり近界民は許さないという城戸派の者でも使えることが分かっている風刃。

どちらの方がお得なのかは言うまでもなく、もし問題行動を起こせば適当な理由をこじつけて取り上げれば良い。

城戸派は直ぐにその考えに至る。

「そこまでして、なにが目的だ？」

城戸司令もその考えに至る。

そしてその交渉は余りにも城戸派に有利すぎなもので、迅にとつてのメリットがない。

「深い目的なんてないよ。こうしていた方が、城戸さんも良いって言ってるんだ。

少なくともその内起きる大規模な侵攻をどうにかするには今は一人でも多くの人材が必要だし、肝心のそのスカルについては結局なにも分からずじまいなんでしょ？」

「……良いだろう。」

近界の情報と風刃の提供及びボーダーに協力することで、問題を起こさぬ限りは身の安全は保証しよう」

スカルの事とその内に起きることが確定している大規模な侵攻を出され、そこで妥協する城戸司令。

遊真の身の安全の保証についてはそれで終わり、後日細かな情報の提示をすることで終わらせ遊真関係はそれで終わった。

「ところで君は？」

そして最後に千佳について話が来るが、それは割とあっさり終わる。

ボーダーが表に出る前に過去に何度か近界民に狙われていてその原因が分からないので修が遊真に聞き、千佳が物凄いトリオン器官を持っていることが判明した事を説明し、その間に鬼怒田さんが辛かったねと微笑み終わった。

割とよくある話なのか、トリオン器官について世間に隠していたりしているのかは不明だが千佳に関しては深く話を掘り下げることがなく話し合いは終わった。

「ねえ、迅さん。話を勝手に進めてたけど、おれこっちの世界の守る義理なんてないよ」
遊真や修についてうちで面倒みますわと拳手した林藤支部長の車に乗せられ、玉狛支部を指すのだが遊真は少しだけ不満を言う。

話の腰を折るわけにはいかないし、折ったらややこしくなるのでなにも言わなかった

が遊真はこっちの世界を、ボーダーを手伝う義理は何処にもない。

「まあ、あん時はその場しのぎで言ったからなく」

そのことに対して迅は軽く流す。

嘘を見抜くサイドエフェクトには反応することなく本当にその場しのぎで言っていたように呆れるのだが、そんな遊真の頭に迅は手を置いて微笑み撫でる。

遊真は最上宗一を訪ねに此方の世界にやって来た。

最上宗一に黒トリガーになった父を生き返らせれないかと訪ねようとしたが、最上宗一は既にこの世にはおらず、黒トリガーとなっていた。

最上宗一もいなく、父親もない。やりたいことも特になく、目的も特になく遊真は心の中にぼつかりと穴が開いており、これから先、つまらない時間をただただ過ごして死ぬ。そんな遊真の未来を迅は見た。

そんな遊真の未来はボーダーに入ることと変わる。迅は遊真が楽しくボーダーの隊員達と戦っている未来が見えた。修達と一緒に遠征部隊を目指す未来が見えた。

「これから先、楽しい未来がお前を待ってるよ」

第44話

玉狛支部に連れられた修達は、その日は玉狛支部に宿泊することになった。

運が良いのか悪いのか、玉狛支部には京介達玉狛第一はおらず宇佐美と林藤支部長との関連性が謎のままである陽太郎のみだった。

玉狛支部に辿り着いた修は最上さん達がトリガーってどういうことだとレプリカに訪ね、その間に千佳は宇佐美から遠征について色々と聞いたりした。

そこから修は遊真がどうしてこっちに来たとかの経緯を知った。千佳はボーダーに入って兄や友達を探そうと決意をした。遊真は修に自分と一緒に遠征をと頼まれた。

色々とおつたものの、最終的には三人でチーム組んで遠征を目指すぞと言う原作通りの形には納まった3人。

翌日、防衛任務明けや用事とかで居なかつたモサツ京としたイケメン、ゴリラレイジ、アホガール小(褒め言葉)南が出勤。

この前の大量生産メガネじゃないと色々とおつたが、京介が修を、レイジが千佳を、小南が遊真を鍛えることとなった。

「おぉ〜!!」

「嘘、なにこのトリオン！黒トリガーレベルじゃない!？」

遊真&小南ペアと修&京介ペアは基本的には戦いオンリー。

訓練室で何度も何度も戦いあった。近距離の攻撃手を目指す遊真と射手でレイガストを使う修を鍛えるにはそれが一番となったのだが、千佳は別メニューだ。

千佳は性格等から狙撃手に向いていると判断し、レイジから狙撃手の手解きを受けた。素直な千佳は真面目にコツコツと狙撃銃を手に訓練していたのだが、その時に千佳の異常なトリオンが真価を見せた。

修達がいた訓練ルームは機械とトリガーを繋げて何度負けても何処を切られても直ぐに復元する仮想訓練が出来る場所だったが、千佳が居たのは訓練は出来るものの弾を撃てばトリオンを消費する部屋だった。

大丈夫なのか!?!とレイジは千佳がいる訓練室に入るが千佳は軽く汗をかいているだけだった。朝からぶつ通しで弾を何百発と撃ち続けていることは容易でなく、トリオンが豊富なレイジでもそれは不可能であり、千佳がどれだけトリオンを持つているんだとなり、一旦全員休憩。そのまま千佳のトリオンを測ることとなったのだが、宇佐美と小南は驚く。

数字にして38。ボーダー随一のトリオン能力を持つ二宮を遥かに越えるどころか倍以上のトリオンを持つ千佳。

「あんた、何処にそんなトリオンを持つてるのよ」

ちっこくてどちらかと言えば守られる側で弱いだろうという第一印象がある千佳。

黒トリガー並のトリオンを持っている千佳の頬を小南はむにゅと引つ張る。尚、この場には実力派エリートはいない。長らく黒トリガーの風刃を使っていたのでスコピオンの感覚を取り戻したいと鈴鳴支部と防衛任務中である。

「素質だけならば恐らく、千佳が一番だ。戦い方さえ覚えればエースになれる」

小南から解放され、成果を報告しあう。

遊真はB級の上位陣と大差変わりなく、慣れてボーダーのトリガーで経験を積みめば良い。千佳も狙撃を覚えれば有り余るトリオンのお陰で直ぐに化ける。二人については好評であり問題は修だった。

本当にB級の隊員なのかと疑うレベルの強さだった。実力でB級に上がったのである、ラッドを見つけたという功績で上がっており、下手すりゃ訓練生のもうすぐC級よりも弱い。更に言えば迅が裏で色々やって入隊しており、本来ならばボーダーに入るトリオン量じゃない。鍛えてる側の京介はコメントしづらかった。

けどまあ、やる気はあるし考える頭は持っているのでこれからだと前向きに京介は考えている。

「ところで千佳ちゃん、ボーダーの入隊の書類、千佳ちゃんが書かないといけない分は書

けたかな？」

「あ、はい」

3人の実力や訓練の成果についてはそこで終わり、話は変わる。

既にボーダーに入隊していた修は本部から玉狛支部に移動するだけだ。ボーダーに協力しているということになって遊真は親は既に死んでおり、入隊の書類については本人の意思確認ぐらいで簡単に済む。

しかし千佳だけはそうもいかない。この町在住でこの町育ちで兄である麟児さんは向こうの世界に行ってしまったもののご両親は存命であり

「うん！後は保護者の人のサインだけだね……」

「問題はそこですよ……」

ボーダーに入るには保護者を説得しなければならぬ。

千佳が幼い頃に近界民に襲われたことについてはまだ知らないものの、友達や兄が居なくなつた事についてはざっくりと聞いている宇佐美は困つた顔をする。

千佳はぶつちぎりのトリオンを持っている。質も量もぶつちぎりだ。しかし、それだけであり好戦的な性格ではない。今はまだ人を撃てない。その上、友人と兄が居なくなっている。

そんな千佳がボーダーに入りたいと強い意思を見せても、両親は却下する。どうやっ

て説得するか宇佐美は頭を悩ませる。

「トリオンとか話せそうなの、出来る限り話したら良いんじゃないの？流石にこの量は放置してるのはまずいわよ。」

この前の、あれ、街中にいたよわっちいの。トリオンが多い人のところに集まるように出来ているって聞いたわ。それを出して説得してみたら？」

数分前まで京介の嘘に乗せられていた小南だが、割と凄くまともな意見を出す。

小南は純粹なだけで何処ぞの槍バカやDANGERと違い普通に賢い側の住人であり、ちゃんとした意見を出すときは出す。

「確かにそれは有効かもしれないが、余り言い過ぎるのも良くはない」

トリオン器官はまあ、三門市とか企業の極々一部が知っている。

遠征とか普段襲ってくる奴等がトリオン兵だとかは世間は全く知らず、隠していることの一部を正直に話すことは余り良くない手だと指摘するレイジ。

「宇佐美さん、ボーダーの部隊って4人までですよね？」

「うん。最大で4人までだけど？」

「修くん、貴虎さんも誘えないかな？」

ボーダーは1部隊まで4人まで許される。その確認を取った千佳は貴虎の名を出す。

目の前にいる修や遊真が頼りないからではない。遊真はいい人、修は色々危なっか

しいけども頼れる人と分かっている。一緒になって遠征を目指す仲間だとも思っている。

しかし、それで両親を説得出来るかと言えば無理だ。修だけでなく貴虎が居るならばと両親が納得してくれるのではと一緒に居てくれれば物凄く心強い事を知っているの
で出した。

だが、修はその事について首を横に振る。

「それは出来ない。もし加わってくれて遠征に行くことが仮に出来たとしても、それは多分、間違った方法だと思う。遠征には危険が伴うから僕達がちゃんと戦える様にならないといけない」

貴虎の力を借りることはダメだ。

母との約束以前に、それで遠征に行つたとしても危険が伴うだけだ。兄がどれだけ頼れるかを最も知っているから修は分かる。貴虎がいればあつという間にA級に、遠征に行けると。

だが、それは貴虎自身の力であり自分達が強くなったりして行くわけではない。文字通り自分達が強くないと遠征は危険だと、それで行くのは間違つた方法だと判断をする。

それについては向こうの世界をよく知っている遊真も賛成で、貴虎を誘うことはしな

い。

「てか、貴虎って誰よ？」

話にイマイチついてこれていない小南はそもそも貴虎って誰？と頭に？を浮かべる。

「オサムのおにいさん」

遊真がざつくりと説明すると小南だけでなく下の名前を知らなかった宇佐美達もピンと来る。そして下の名前が貴虎だったのかと今知る。

「あの人か……」

「まあ、確かに入ってくれるなら心強いよね」

「そいつ、強いのか？」

「強い、と思うぞ」

「思うって、曖昧じゃない」

貴虎の事を知ってはいるものの、実際のところはよく分からないレイジ。

正月のお年玉企画での出来事を思い出し、あれだけ動けるならば運動能力が向上しているトリオン体では派手に動けることは確信する。

「小南先輩、分かりやすく言えば三雲さん、修の兄は里見先輩と弓場さんと二宮さんと菊地原を足した感じですよ」

「はあ!?って、流星にそれは騙されないわよ」

ざっくりと噛み砕き貴虎のスペックについて京介は説明するのだが、日頃、騙していたツケが回ってきたのか信じてもらえない。しかし、言っていることは間違っていない。

「二宮さんと弓場ちゃんと里見と菊地原を足したら……変な奴が出来るじゃない！」

「……小南先輩、そう思うじゃないですか意外にも足した感じなんです。」

里見先輩以上に老け顔で二宮さんなみに良い声をしていて弓場さんなみに男前で菊地原と同等の毒を吐きます

そして小南は変な勘違いをする。

京介はそれに気付きなんの迷いもなく貴虎と4名をくつつける。息を吐くかの様に騙す。

「嘘、そんなことって」

「サトミ？って人は誰かは知らないけど、おれ、オサムのおにいさんに会った時にお父さんだと間違えました」

「え、ホントなの!？」

「京介」

話の方向が徐々に徐々に拗れるので止めに入るレイジ。

「すみません、小南先輩」

「え？」

「スペック的な意味で菊地原達を足した感じで、性格的な意味じゃないんです」

「なあ!?!……騙したなあああ!!」

「ちよ、僕じゃなくて烏丸先輩ですよ!?!」

腕で修の首をロックする小南。

実際のところ、性格的なところもそんなに間違っではない。

「てか、スペックがそんなに高いの?」

修で怒りを発散し、話を戻す小南。

ボーダーのお年玉行事で弓場と生身とはいえ互角に渡り合った事や普段から馬鹿達に勉強を教えている事を教えられる。

「視力強化の物凄く戦闘に役立つサイドエフェクトも持つてるから、ボーダーのトリガーを覚えれば一気にマスタークラスまではいけると思うよ」

「ん? オサムのおにいさんは目が悪いからメガネをつけてるんじゃないのか?」

「兄さんは視力が良すぎるからメガネをつけてるんだよ。アレってやっぱりサイドエフェクトだったんですか?」

「種類の言えはCランクの、五感を強化するサイドエフェクトの1つだと思うよ。聴覚が何倍も強化されるサイドエフェクトを持った子がいるから、その子の視力版だね」

改めてサイドエフェクトだと知る修。

視力を強化するということは遠くの物を見る、物凄い動体視力等の色々と思ひ浮かべる小南。

聴覚を強化するサイドエフェクトを持っている菊地原がいる風間隊は菊地原の聴覚を共有し、目だけでなく耳も使い攻撃を感知するという戦闘をし、A級の中でも特に白兵戦に特化した部隊。

もし菊地原の視力版が居るならば、それは自分よりは強くないだろうがまあまあやる奴になるだろうなと思った。

「話を聞く感じ、まあまあやれそうな奴だし、部隊に加えるかはともかくスカウトでもしたら？ サイドエフェクトとか持つてるなら入隊に必要なトリオン量は越えてる筈でしょ？」

それぐらいの奴なら誘ったらと、修云々を置いておいてスカウトを提案するもその話になると目を合わせなくなる。

「あの人、ボーダー嫌いで有名なんですよ」

それはそれ、これはこれとボーダー隊員だからという理由で……差別はした（別役の一件とか）。

しかしまあそれでも一応の一線は引いているもののボーダーは嫌いな事を京介と宇佐美は知っている。と言うよりは、貴虎とそこそこの付き合いがある奴は皆、知って

いる。

「なによ、それ」

ボーダーが嫌いと言われ、余り良い顔をしない小南。

ボーダーが表に出る前から、それこそ迅が入る前から旧ボーダーに所属していた彼女にとつてボーダーはとても大事な存在であり、貴虎がボーダー嫌いというのは余りいい気分ではなく、つい修を睨んでしまう。

「話がズレている。今は千佳の両親の説得だ」

そしてレイジに話を戻される。

千佳のご両親をどうやって説得するか、それについて考えるのだが小南とレイジは今のボーダーになる前から所属しているので、その辺に関しては余り力にはなれない。

京介もその辺には力になれず、ボーダーが嫌いだと言っている兄を持つ修に全員の視線が向くのだが、修も首を横に振る。

「僕の時も親はいい顔をしませんでした。最終的には兄さんを倒したら書類にサインをすると言われました」

「修、よくサインが貰えたな」

修がどうやってサインを得たのかを聞くも、全く参考にはならなかった。

色々考えるも、これなら折れるというのが中々に浮かばない修達。

「迅さんがおれたちが入隊をしてる未来を見たから、なんとかなるんじゃないのか？」

そして遊真の一言で終わった。

書類にサインをして貰えないという壁は高く、千佳に入ってほしいと言うのならサイドエフェクトをとことん利用して千佳が親からボーダーに入隊するサインを貰える様に裏で暗躍をする。

だが、迅は暗躍を一切しておらず、スコープオンを手に現在は防衛任務中だ。千佳がボーダーに入隊出来るように裏で暗躍をしていない。それは千佳は迅が裏で暗躍をしなくても千佳は入隊できるということと考えられる。

迅のサイドエフェクトに関してはボーダーでも絶大なまでに信頼があり、それなら大丈夫と何故かドヤ顔になる小南。

迅が裏でなにもしていないならと逆に安心感を得たのか、千佳のご両親の説得の話は終わり訓練は再開される。

「すみません。ダメでした」

そして、承諾のサインを貰う当日。

いきなり支部長と宇佐美を連れてくれば揉めると思った千佳はサインを貰えないかと必死になって説得をするのだが、両親は首を縦には降らない。

街に被害を出さない守りきるのを条件にボーダーは三門市に近界民を誘導している

のに、大きな襲撃があつたのでもないのに半年前に鱗児は居なくなつたのを出され、戦うということは扱われる可能性がある。

そんな危険な目に遇わせるわけにはいかないと首を振らない

「はじめまして、自分はボーダーの玉狛支部の支部長をしている林藤匠と申します」

無理だつた連絡を受け、雨取家に乗り込む林藤支部長。名刺を渡し、ペコリと一礼をする普段の姿からは余り想像出来ない大人の姿を見せる。

まさか支部長を連れてくるとは思っておらず、千佳の意思が物凄く固かつた事に千佳の両親は驚き、一先ずは耳を傾け、林藤支部長は話せる範囲の出来事を話す。

「娘さんにはとてつもない才能が秘められています」

トリオンについて。

「つまりはトリオンを持つていればいるほど、近界民から狙われます」

「こちらが有名なボーダー隊員のトリオン能力を数字にしたものと千佳ちゃんの能力を数字にしたものです」

トリオン器官が優秀な人間を優先的に扱うことを。

「四年前の様なことがあれば真つ先に狙われる可能性があります。自衛の手段も必要で、ボーダーに入ることとは相対的にも安全で娘さんの訓練に關しても、ボーダーでただ1人しか居ない遠近中全てで戦える我が玉狛支部が誇る木崎隊員が指導しております」

「千佳ちゃんは今現在、狙撃手になるべく訓練をしています。」

狙撃手は最前線で戦う攻撃手、ボーダーで言えば太刀川隊員の様に剣を持って戦わず街中に潜んで戦い、いざというときは走って逃げるといふ訓練もしています」

訓練の方に関してもちゃんと指導し、訓練についても色々やっていると林藤支部長は話す。

宇佐美はその補佐を勤め、御両親が説得に折れてくれる様に色々補足をしたりデータを見せたりとしている。

それにより段々と顔が変わっていく千佳の両親。このままいけば承諾を貰えるぞと心の中で小さくガッツポーズを取り話を進める。

「玉狛支部には娘さんと同世代の人達がいます。」

既にB級に上がっている三雲隊員に、1月に入隊予定の空閑隊員と共に部隊を組んで上を、A級を目指します。A級を目指す方法ですがボーダー内で部隊によるランク戦があります」

「待つてください」

「はい、なにか不明な点でも?」

「三雲隊員、というのは三雲修のことでしょうか?」

「はい。そうです。」

この度は玉狛支部に移動することになりました、娘さんの方も彼と一緒にならばと安心している部分が……どちらに？」

「すみません、数分ほど席を外します」

自衛の為にA級を目指すのはオススメだと、同世代の修や遊真がいると、宇佐美がオペレーターをすると説明していくのだが修を出すと少しだけ千佳母の雰囲気が変わり、席を外した。

「三雲くん、隊員だったのか？」

「うん。少し前から……」

「三雲隊員の方も優秀でして、この前のイレギュラー門も彼が市街地に潜んでいた近界民を見つけてくれたお陰で被害を拡大することなく防ぐことが出来ました」

なにやら不穏な空気が漂いだしており、少しだけ話題が切り替わったのでマイナスな事を言うわけにはいかないと褒める支部長。

遊真の事も出し、どちらも非常に優秀な隊員で千佳の事を思いやれる子なのでなにかチームメイト間でのギクシヤクといった事も少ないでしょうと宇佐美もフォローを入れる。

「申し訳ありませんが、少しだけ待っていただけないでしょうか？」

「娘さんを預けるのは心苦しい事は分かります。入念に何度も何度も相談し、考えて御

返事をお聞かせお願いします」

「あ、いえ、そうではありません」

数分後、戻ってきた千佳母。

考える時間が欲しいという事を聞き、何卒と支部長を頭を下げるのだがそういうことではないと頭をあげさせる。

「ちよつと色々と言きたいことがありますから、少し待っていてください」
「？」

聞きたいことがあると言うのなら、今すぐに聞けばいい。

話せる範囲ならば色々と言つもの林藤支部長は頭に？を浮かべており、少しするとインターホンが鳴り千佳父が応対しにいくのだが、直ぐに戻ってきた。スーツ姿の貴虎と学生服姿の修を連れて。

「支部長!? 宇佐美先輩!？」

「色々とお伺いしたい事があるので、この場に呼びました」

「ああ、そうですか。あ、どうも、はじめまして。自分はボーダーの玉狛支部で支部長を勤めております林藤匠と申します。何時も息子さんにはお世話になっております」

「……」

何故呼んだかは分からないが、結果的には呼んでくれた方が良かったのではと前向き

になる支部長。

御両親の時と同じく名刺を渡しペコリと一礼をするのだが

「兄です」

「え？」

「支部長、その人、修くんのお兄さんだよ」

「その、兄です」

渡した相手は貴虎だったので空気が凍った。

第45話

「……」

「あの、スーツ似合ってます」

「やめてくれ。余計に傷つく」

家でゴロゴロとしてると雨取（母）さんからの電話があり、千佳の事について色々話したいことがあると聞いた。

最初は遂に来たのかその日かと小さくガツツポーズをしていた母さんだったがボーダーの書類にサインをして貰う説得が今日だからその事についてだと修が話すと小さく落ち込んだ。

「修くんは分かるけど、なんで貴虎くんまで？」

「下の名前はやめてくれ、三雲でいい。」

千佳のボーダー入隊とかの事で色々話があると電話が掛かってきて、修が呼び出されてついでだからお前も行けと母さんに尻を蹴られた」

「叩かれたじゃないんだ……」

千佳の事に関しては修だけで良いんじゃないかと色々と言った。

それでも貴方が言った方がもっと良いことになるから、とつとへ行けとスーツに着替えさせられて向かつて……例によって間違えられた。

「私が居ない方が話がスムーズに進むと思うんだが、邪魔なら出るぞ?」

「居てください」

「例によつて余計な事を言うかもしれないぞ?」

「多分、それは言ってくれた方が良いことだと思います」

この場での部外者は言うまでもなく私だ。

おばさん達を説得するには色々と言わないとならない。トリオンとかはボーダーのスポンサーとか三門市の偉いさんとか極々一部のボーダー外の人達も知っている。なんならトリオンに関する研究をしている大学院もある。

ある程度はバラしても問題はないのだろうが千佳は普通のボーダー隊員になるんじゃない。ボーダー側が守らないといけない存在で、遠征を目標そうとしている。そうなるとその辺に關しての説明もある。

「私も同席してよろしいでしょうか?」

「おう、構わねえぞ」

林藤支部長の許可も貰い、この場に相席させて貰う。

既に色々と話したのかは知らないが林藤支部長はあっさり承諾したんだが、どうも

なにか考えている。

「修くん」

「は、はい」

なにを考えているのか分からないが別の事は分かる。

おばさんが物凄くピリピリとしており、怒りの矛先を修や私に向けていることを。怒っている理由は言うまでもない。

「千佳を誑かしたの？」

「え？」

千佳のことである。

「修くんなら安心だと思っていたのに、ボーダーに誘うだなんて……」

「待って、お母さん!! 修くんは」

「千佳、これは修くんの問題なんだ。」

修くん、君がボーダーに入ったことについて私はとやかく言うつもりはない。だが、千佳まで入る必要は無いはずだ。

千佳が近界民に狙われていて、これからも狙われる可能性があるると林藤さんから聞いた……君が千佳を守りきれるのか？」

「なんか話が脱線してる気がするんだが」

「ボス、静かにして。多分、良いところだから」

うちの娘を誑かしてと怒り、修の評価を下げているおばさんとおじさん。

話の方向がなんかズレている事を林藤支部長は感じるのだが宇佐美は良いものが見れると黙らせる。

「千佳は、ボーダーには頼らない。自分で抱え込んでしまっていて、兄の麟児はいない。頼れるのは君だけだ」

「お前、省かれてるぞ」

「あ、そういう感じのじゃなくて私は私で守らないといけない方がいますので自動的に省かれているんです」

話の方向がズレているものの千佳の入隊には反対な二人。

お前も男だったら先に生まれたのならば自らの意思でボーダーに入ったのならばうちの娘を守り抜けと言ってくる。言っていることは特になんの間違いもないのだが言っている人（両親）と言っている場所（千佳の家）だけに別の意味に聞こえており、千佳もそれを感じはじめているのか顔を真っ赤にしている。

「修、これはもう責任を取るしか無いんじゃないのか？」

「な、なにを言うんだよ!?!」

「顔を真っ赤にして慌てるな。千佳、恥ずかしいからって摘まむな」

少しだけ煽ると無言で睨んでくる千佳。

これは弄くりすぎると後に色々と弄くられると真面目に話を進める。

「千佳、お前はなんの為にボーダーに入る？」

「それは……」

「そこをハッキリとこの場で言わないと、ダメだろう。」

宇佐美や支部長を連れてきて説得を手伝って貰うのは悪くはないが、それはお前の本気を見せるものだ。お前の本気はもう見せ終わっているんだから……お前の気持ちを伝えろ」

「……はい」

浮わついた空気をかき消し、緊張が走る静かな空気を作り出すと深呼吸をして気持ち落ち着かせる千佳。

「ボーダーに入って兄さんを、友達を探したい。」

本当に1%でも見つけることが出来るなら、探したい。もう、なにもせずにジツとしていられない」

自衛の為？近界民に立ち向かう為？違う。兄と友達のため。

千佳がボーダーに入りたい理由はそこであり危険を侵してでも隣児さんを見つけ出したいと意思を見せた。それを見て二人は無言となり、色々と考える。

隣児さんの一件もあるのでやっぱり反対だという親としての感情はとても大きく、これから先、近界民に狙われる可能性があるならばと色々と考えていて悩みに悩んでいる。

私のサイドエフェクトでは本当にやめてほしいと心から心配して渋々の妥協に近い形で最終的に折れると言っている。原作でも何だかんだで入っていたしその未来は確定だろう。

「隣児さんと友達を探す、ね」

「修くんと遊真くんと一緒に、遠征を目指します」

「そうか……それ確実に言っではいけないことだ」

「え……あ!？」

さも当たり前のように遠征について語る千佳。

色々と事情を知ってる私だからかすんなりと話してしまっているのだが、遠征はボーダーの極秘情報で喋っではいけない。

いずれは千佳も遠征に行くし修も行くのなら、親とかに言うことになるし私もなんやかんやで知ることになるのだろうが、少なくとも今は言っではいけない。

「遠征? どういう事ですか?」

「えーこれは極秘情報なので内密にお願いしたいのですが、ボーダーは近界民の世界に行く

方法を模索しており、この数年で段々と近界民の世界に行く目処がですね」

「おっさん、そういう感じで惚けたいんなら惚けても良いが……最終的にはちゃんと正直に話してくれるんだろうな？」

近界民の世界に行ける方法を模索していると嘘をつくので先に潰す。

今回は嘘だということを通してやるが後々正直に話せと遠回しにいうと黙ってしま
う支部長。宇佐美はそれを見て修の顔を見るのだが修は首を横に振った。

「兄さんは、ノーヒントで誰かに教えて貰わなくて気付いています」

「と言うよりは、こんな時期に出水や当真先輩が居ないのがおかしいだろう。」

この前の近界民と言う名のロボットの大量駆除、下手をしたら死者が出るのを分かっ
ていてリスクを承知の上でああいう事をしたのにも関わらず出水達は居なかった」

「……お前、何処まで知っているんだ？」

「知ってるんじゃないかって、考えているんです。」

メディアに色々と情報操作をしますが学校という最前線に居ますので、誤魔化すこ
とが出来ない事実を色々と見ることが出来るんで」

原作知識こそあれども、それ以外でも出水達が遠征に行ってるんじゃないのか？そう
思える所はある。

この前のラッドの一件なんて特にそれである。アレだけの騒ぎだというのに上位陣

を全くといって見ていない。学校に居なければそれは分からないことだ。

ある意味最前線にいるんだと説明をすると林藤支部長の電磁波に乱れを感じる。私の言っている事にそこそこ動揺しているが、納得をしている。

「じゃあ、何処まで考えてるんだ？」

「今は千佳の説得の話ですから、言う義理は無いです。」

こういうのは何処かで誰かが汚れ役をしないとイケないから私が汚れ役をするが、覚悟は出来ているのか？」

話題が大きく変わろうとしたので、話を元に戻す。

遠征の事が話題に出たのでさっきまでは折れかかった雨取両親はやっぱりボーダーにはと躊躇いを持っており、私は修正と汚れ役を買ってでる。

「向こうの世界に行つて、兄さん達を探します。」

見つかからない可能性が大きくても、危険な事だと分かっているとしても、それでも1%でも見つかる可能性があるなら行きたいです」

「それは分かっている」

「え？」

「私が聞いたのは、見つけたとしてもその手を伸ばしても掴んで貰えない可能性は覚悟してるか？」

「掴んで貰えない?」

かつて麟児さんにも言った事を言う。

既に大人だった麟児さんとはともかく拐われ友達は今生きているのならば、千佳と同年代であるボーダーが表に出る前に拐われている。

単純計算で最低でも5年以上は向こうの世界で過ごしていて、なにもかも、それこそ価値観の1つも変わっているかもしれない。日本の自分の家で過ごすべき時間を過ごしていない。変わってしまった友達を受け入れる覚悟があるのか? 友達を助けようと必死になって伸ばした手を掴んで貰うどころか拒まれる可能性だってある。

国が一つ違えば価値観は大きく変わる。日本で犬や兎と言われれば大抵は愛玩動物と考えるが、国によっては兎や犬は食材、食べるものとする国がある。虫を食べる国だってある。

「四年前に拐われた人達もそうだ。

見つけ出すことが出来ても、変わり果ててしまっていたのならば受け入れられるのか? 向こうの世界が危険で、拐われた人間同士が殺しあいをしていて、人を殺したとしてもなんとも思わなかったり、人殺しの自分はもう帰らないとと言う可能性だってあるぞ」
頑張って探そうと危険なのは分かっているけど一筋の希望に向かって必死になっている千佳に絶望を全力で与える。

向こうの世界にいつて友達を見つけると前向きで過去に拐われた人が見つかった前例が無い為にそう言うこともあると言われているのかその事を想像し徐々に徐々に顔色を悪くする千佳。

「その辺についてはどうするつもりなんですか？」

ボーダー側としても向こうの世界がどんな感じなのか世間にゲロられると困るだろうし、最初の内は管理下に置いたりしますよね？」

「どうだろうな？そういうのはオレの担当じゃないから分からない」

あくまでも支部長でありメディア対策とか営業とかとは違う林藤支部長。嘘の答えは出すことができず、分からないの曖昧な事を言うのと千佳は俯いてしまう。

「三雲くん、千佳ちゃんには必死になって探そうと頑張ろうとしているのに、なんで」

「だからに決まっているだろう」

今こうして誰かが先にこういったことを言っておかないといけない。

宇佐美は私の事を批難するが、私はそういうことを思われたり言われたりするのを覚悟の上でそういつている。

「必死になって伸ばした手を拒まれれば最後、千佳は立ち直れないかもしれない。

変わり果てた姿を見て、変わらせた原因が分かかって受け入れることが出来ずに自分のせいであまったと自分を攻め続ける」

「……………」

「千佳!？」

拒まれた自分を想像し、罪悪感に耐えきれなくなったのかお腹と口を抑える千佳。

そのまま立ち上がりトイレへと駆け込んでいき千佳は嘔吐し、宇佐美はそんな千佳に声をかける。

「千佳ちゃん、大丈夫!？」

「大、丈夫です」

「何処が?顔、真っ青だよ!」

吐き出すものを一気に吐き出し、もう吐くものが無いのかふらふらとしながらも立ち上がる千佳。

戻ろうとするのだが、顔色は真っ青で宇佐美は駆け寄り行かなくて良いと言おうとするのだが千佳は宇佐美の手を拒んだ。

「いか、ないと」

「行かなくて良いよ。」

千佳ちゃんの気持ちはご両親にも伝わっているし、支部長も私も、それに修くんだけ
て」

「千佳……………まだまだ辛いかもしれないが、最後まで居れるか?」

「修くん!」

行こうとする千佳を宇佐美は止めようとするも立ち止まらない。それどころか修が手を貸して千佳を歩きやすくして戻ろうとする。

「ダメだよ。戻ったら、三雲くんが」

「言いますよ、きつと」

「だったら」

「見ないと、ダメなんです……」

私が色々と余計な事を言う。

それを見るのを耐えれない宇佐美は止めるが修も千佳もそんな事は百も承知だった。

「貴虎さんが言ってることは、間違っではないんです」

「正しい間違いの問題じゃないんだよ!」

「でも、事実が変わりません。私、なんとなく分かる、いえ、もう知ってるんだと思います」

「知っている?なにを知ってるの?」

少し前、と言うよりは遊真と出会った日の、近界民と言われたり自身が狙われる原因が分かったりボーダーが遠征だなんだとあった物凄いまでに濃い一日。その中でも物凄く薄く本当に些細な事があった。

四塚市に逃亡するべく公共交通機関を使い逃亡した際にお金を使った。電車の切符の買い方を遊真は知らず、それを修が教えており、10000円で切符を買った時に小銭と千円札のお釣りが出てきて増えたと喜ぶ。

増えたんじゃないんだよと説明をした。そうなのかと分かってても増えたと思っっているのか喜んでる遊真の姿は微笑ましかつたのだが、ついさっきの言葉で絶望に切り替わる。

日本語が読めなかったりするものの決してバカではない。遊真はちゃんとしつかりとしている。それでも小銭についてよく分かっていなかった。紙幣についても価値についてもイマイチだった。

海外から来た人と深く交流があるわけではないものの、それは異質である。千佳は別にそれを理由に差別だどうのこうのとはしないが異質であることはわかっていた。

「宇佐美先輩、実は……」

遊真が学校にやって来た日、今は一歩ずつ此方の世界に馴れようとはしているがその時は今までの環境基準でやっていた。やられたら倍返しでやり返したりとか、信号は赤ならば渡つてはいけないとか、何処かが自分達とズレていた。

「でも、遊真くんは近界の世界に居たからで、遊真くんはこつちの世界に馴れようとしてるよ。だったら、変わるよ。」

「……できない可能性だって、あります」

ブルブルと震えながらも前に進むとうとする千佳の手を掴んで止める宇佐美。

止められた千佳は少し深呼吸をするが震えは止まらない。だが、それでも前に進むとうと昔を話し始める。

「小学生の頃、トリオン兵に追いかけられた事があって、その時はまだボーダーがいなくて、周りも……お父さんもお母さんも信じてくれなかった」

「千佳ちゃん？」

「でも、一人だけ青葉ちゃんって子が信じてくれて……青葉ちゃんは行方不明になりました」

「それって」

「多分、近界民です……私と居たから、青葉ちゃんは拐われたんです」

「違うよ。それは違う。今でこそ鬼怒田さんが開発してくれた門誘導装置で門を誘導しているけど、四年前のあの日よりも前の日に拐われたのは誰かが悪いなんてない。もし悪いのが居るなら、こっちの世界に侵略してくる近界民だよ！」

「私が、原因なんです。」

拐われて、青葉ちゃんが居なくなつて周りの人達が信じ始めて、ボーダーが出て来て、今までののが少しだけ分かつて、青葉ちゃんが拐われたのは私が原因だって……近界民の

世界の遠征は何処に行けるか分かりません。やつとの思いで青葉ちゃんや兄さんが見つかって、変わっていたら、お前のせいで拐われたって言われたら……貴虎さんの言葉でその事が頭に過りました。そしてたら気持ち悪くなって、吐いたんです」

「千佳ちゃん、それは普通のことだよ！誰だって責められれば怖いし、変わってしまった友達を見るのは辛いことだよ！私だって辛い！」

「違うんです……」

「なにが違うの？」

「私、兄さんと青葉ちゃんがどれだけ変わっても兄さんと青葉ちゃんだって言い切れるんです。」

私の事を信じてくれた青葉ちゃんもずっと私の事を思ってくれた兄さんも、どんなに変わってても手を伸ばしたい。でも、お前のせいでこうなつたと言われたくない。その2つが混ざりあつて、足が震えるんです。責められたくない責めないでって私、自分の事しか考えてないんです」

自分の昔の事を語り、変わってしまった兄や友達に手を伸ばす覚悟こそあれども変わってしまった兄達にお前のせいだと責められたくない、誰かを傷つけた事を責められることが怖い。

それは当たり前前の感情である。

「千佳ちゃんは自責の念が強すぎるよ！」

そんなに自分を悪者にしなくていい。千佳ちゃんが悪いのなら殆どの人が悪——」

「本当なら、青葉ちゃんは私と同じクラスで一緒になって勉強をしていたかもしれない。本当なら、青葉ちゃんはボーダー隊員になってたかもしれない。本当なら、兄さんは大に通いながら修くんの家庭教師をしていたかもしれない。本当なら、兄さんもこの場に居たかもしれない。私が二人の時間を奪ったことには変わらないんです。二人の時間が失われたことには変わりないんです」

「っ……」

目から徐々に気がなくなっていく千佳に、そうじゃないと言葉を掛け続けたがどうすることも出来ない宇佐美。

修を頼ろうと顔を見るのだが、修は千佳の顔を見ているだけでそうじゃないという言葉はかけない。

「此処で逃げれば、隣児さん達を見れなくなる。隣児さんだけじゃない。過去に拐われた人達も見れなくなる」

「……うん」

「どうしても、行くんだね？」

「今、此処で逃げたら私、これから先、一生逃げ続けるだけになると思います」

まだなにもはじまっていない。これから先、辛いことが待ち受けている。

何処その実力派エリートは未来は明るいと言っているが私はその真逆であり未来は暗くて絶望的だと教えた。

「でも、なんで今言うんだろう……千佳ちゃんはボーダーに入りたいつて言う話なのに、三雲くんは千佳ちゃんをボーダーに入る事は反対なの？」

「違うと思います」

「どういふこと？」

意味が分からない宇佐美は部屋に戻らず、修達と一緒に部屋前で聞き耳を立てることに。

「お前さ、未来に向かって走ろうとしてる奴等を追い込むか？」

一方、その頃私は林藤支部長に物凄く睨まれている。

後もう少しで両親に許可を貰えたのに貰えなくなったからというわけではなく、大人として私に怒っている。

希望を持ち前に進むもうとしている千佳を叩き折りに来たことは許されぬことだろう。

「その未来が絶望だったら話にならない」

「0だとも言えないだろ」

「きつと宇佐美はなんであんな事を言っていたんだと激怒する。嫌われて当然の最低な事を言ってますし、もしその未来が来なくて恨まれても憎まれても当然の事をした自覚はありますよ。出来れば嫌われる未来が来て欲しい……聞くなら今しか無いだろうから聞きますが、ボーダーが千佳を見つけたんですか？修がボーダーに千佳を連れてきたんですか？」

憎まれる事を覚悟していると言った後、確かめたい事があるので聞いた。

「どつちも同じ意味……じゃ、ないよな」

「修がボーダーに連れていったとボーダーが千佳を見つけた。連れていったと見つけたじゃ全然意味が違います。意味を理解していて、即答しないのは修が千佳をボーダーに連れていったのと捉えますね。」

修は既にボーダー隊員。ボーダー隊員の修が千佳を見つけたのもあながち間違いではない。だが、そうは聞いていない。

京介が佐鳥が村上さんが見つけたのか、既に知っていた修が連れて来たのでは大きく変わる。

「千佳は、ボーダーが表に出る前から近界民に襲われました。」

その時にどうして助けてくれなかったなんて言いません。それを言うのは千佳だけで、他は誰も言えません。

ただ、今回の一件、その事について知っている修がボーダーに連れてきたのとその事について知ったボーダー隊員がボーダーに連れていったのでは話が変わります。

千佳が近界民に狙われる原因を知っていて、それが放置出来ないことで、宇佐美の様にオペレーターをしている、言い方はアレですが平隊員でなく、支部長がわざわざご両親にボーダーに来てくださいと頭を下げに来ています。

林藤支部長、ボーダーにはスカウト組と呼ばれる人達が居ますよね？村上さんや別役、国近先輩。スカウトされている人達には本当に申し訳ないんですが、それよりもこの街に居る近界民に狙われる原因を持った人達をどうかしようとしてボーダー側はなにもしないんですか？

私は中学は蓮乃辺市の中学を受験していましたから、ちゃんと見てはいないですが、あの大きな本部が出来て、ボーダー隊員が段々と増えている今も近界民に狙われる原因を持つ子供を探そうとしてみせん。

この前の修擬きがそこかしこにいた近界民の一斉駆除、聞けば修と千佳の通っているボーダー隊員が一人もいない中学にもいて危うくイレギュラーな門が開きそうになったらしいじゃないですか。もしかすると千佳を狙って開こうとしたんじゃないんですか？イレギュラー門が開く前になんとか出来ましたが、ボーダー側はその辺の調査を怠っています。その辺についてはなにか話し合ってるんですか？」

これから先、ボーダーの偉い人と何度も会う機会がある。

今こうして色々と言えるのはきつとこれが最初で最後で、ガキみたいな考えだと言われようが言い切り返事を聞こうとするも答えない支部長。私は預金通帳を取り出して支部長の前に置いた。

「おいおい、なんだこりゃあ?」

通帳の中身を見て驚く支部長。

10桁にこそ届きはしなかったが9桁の額が入っているもので、どうして私がこの額を持っているのか聞いてきた。

「ある人から、火種を貰ったんです。」

それを元手に株とかFXとか色々やっつて、なんとかそこまで漕ぎ着けた。今、貴方が即座にボーダー側は調べようとしているのを見て、一応見せておこうかなと……返してください」

「ん? 出資するんじゃないのか?」

話の流れ的に出資するから調査しろと言うものだと思っていた支部長。

後もうちよつと頑張れば9じゃなくて10桁になると私のサイドエフェクトが言っているのまだ出さない。それにこれはそういうお金じゃない。

「これは第二、第三の千佳を見つけ出してなんらかのフォローをする為にも、千佳や修達

が連れて帰る過去に拐われた人達が、こつちの世界で生きることが出来る様にする為のお金なんですよ。これだけじゃ足りない。あのタヌキみたいな開発室長のおっさんになんてしなかつたとか言えば、材料とか資金が無いんだ！と言われそうだから10桁まで貯める」

「……色々と、考えてるんだなお前」

「こういうことしかしてないだけですよ。」

その内、それこそ修達が向こうの世界に行く事が決まったりしたら出しますので、その時はなにかと条件を付けて出資します。拐われてしまった人達の勉強を教える教師をこの人にして欲しいとか言ったり……とにかく、その調査とかに關しては上の人とかキツネとタヌキのおっさんに言つてくださいますよ。調査とかに資金が必要なら今の時点だと3億ぐらいまでなら出せますので」

私に感心をしてる暇があるならば、調査について進言しろ。里見と並べても見た目が変わらないどころか兄弟に……いや、やっぱ里見の方が老けて見えるな。このおっさん、三十路過ぎてるし。

「……千佳、入るなら戻るなら早くしてくれ」

私が言いたいことと聞きたいことと色々と分かった。

少し前から千佳や修がコッソリとこちらを覗いたり聞き耳を立てたりしているの

バトンタッチだと呼び出すと入ってくる千佳達。

「貴虎さん、教師にしたい人って、火種をくれた人って」

「それを知りたいのなら、本人に聞けばいい」

火種となる金を渡したのは、教師にしたい人を頭に浮かべる千佳。

千佳の元に向かった時には私に対して怒りを向けていた宇佐美は誰なんだとこの状況はと少し困惑をしていた。

「三雲くん、狙ってた？」

「いや……そもそも此処に来る予定は無かったから、狙うものにもない」

千佳に覚悟を決めさせる。第二、第三の千佳を見つけ出すようにする。千佳の友達を見つけて帰れる場所にする。直接的な手は貸さないが千佳の力になることを遠回しにしている。

宇佐美はそれを狙って、そうなると思ったてそれを伝えるべくこの場にやって来たのかを聞くのだが、それはない。少し前までなんやかんやで上手く行くのは知ってるだろうし、行かなくても良いと思つたのだから。母さんが行ってこいと言われて行かなければこの場には居なかつた。こんな事になると母さんが考えていたから、行かせた……あの人が、サイドエフェクトかなんか持つてるのだろうか？

母さんの掌の上で踊らされると感じながらも、千佳の説得を見届ける。千佳は責

められる事を想像し怖がっているがそれでも入りたいと言う。そんな千佳の姿を見て折れる雨取両親。

「それで、お前、ボーダーに入らないか？」

その後、林藤支部長からスカウトっぽいのがあった。

「私の通っている高校はボーダー提携の三門第一です。」

出水、熊谷、三輪の様にこの町出身もいれば国近先輩や別役の様に外部からのスカウト組も居ます……最初の調査はそれ以外の生徒でと言うことでどうですか？」

なので、スカウトする場所を作れと言った。

「抜け目ねえな、お前。迅みたいなことをしてよ」

そこそこ傷つくことを言わないでくれ。

スカウトを断ると支部長はあっさりと手を引いて宇佐美と修と千佳と一緒に玉狛支部へと向かった。私は家に帰った。

「今年、やることはもう終わったな」

千佳はサインを貰えた。遊真はボーダーに入った、修はB級へと昇格した。

あとは正式入隊日待つかまで特訓あるのみとなり、私が出れることはなにもない。

「あ……帰ってきたのか」

クリスマスは遊ばなければと考えていると、携帯がなった。電話の相手は太刀川さ

ん。

遠征に行っていてそろそろ帰ってくるのは知っていたが今日だったのかと電話に出る。

「もしもし?」

『三雲、お前の占い半分だけ当たって半分だけはずれた!』

「……覚えてたんですね」

太刀川さんの元気な声を聞いてもう1つ、仕事があつた。堤さんには悪いことをしたが、死ぬほど苦しいだけで死ぬことはない。さらば、太刀川さん、堤さん、二ノさん。

第46話

クリスマス。

それはリア充がリア充をする日。迅のサイドエフェクトはオンオフが効くものでなく、問答無用で未来が見える。その為に毎年苦しい思いをしている迅。しかし今年は違うと少しだけ迅は喜ぶ。

「すみません。23、24、25日にアルバイトを入れています」

京介、アルバイトが解禁された歳なので迷いなくアルバイト！

「悪いが、防衛任務だ」

レイジ、防衛任務！からの一緒に防衛任務入っている諏訪や風間と飲み会

「小佐野達と女子だけで集まってクリパが……沢村さんも来るわ」

小南、ガールズパーティー！（一名はガールじゃない！）

とまあ、馬鹿野郎と言いたくなるなんとも調和を取れていない玉狛第一。

しかし今年は違うと迅はテンションを上げる。リア充がリア充しまくるキャツキヤしている姿を見れないからではなく、自分も楽しむ事が出来る日になったから。今年はメガネくんが、遊真が、千佳ちゃんが居ると喜ぶ迅。

「あ、迅さん！」

「おはよう、宇佐美」

「おはようって、もう皆朝ごはん食べちゃったよ？」

「いやほら、朝早く起きてテレビでニュースを見てるボス達と遭遇するとき……画面越しのインタビュ―受ける人の未来が見えるからさ」

純粹に寝坊しただけであり、上手いことを言つて宇佐美にカッコつけようとする迅。

レイジが残していった朝御飯を温めなおして遅めの朝ごはんを食べるのだが、支部がやけに静かなことに気付く。

「陽太郎は？」

「支部長と一緒に買い物」

「そつかく……くん？」

「どうしたの？」

「おかしいな……サイドエフェクトがバグったのか、メガネくん達が今日来る未来が何処にもない」

「あれ、迅さん聞いてないの？」

「？」

「修くん達は旅行だよ」

「え!？」

「日帰りのイルミネーションツアー、三雲くんが、あ、修くんのお兄さんね。」

三雲くんが家族へのクリスマスプレゼントとして用意してたんだけど、色々あつていけなくなつて最終的にはキャンセル料が勿体ないから千佳ちゃんと遊真ちゃんと修ちゃんと修くんのお母さんと一緒に行くことになったんだつて」

実際のところはなんやかんやという所は嘘であり、遊真へのクリスマスプレゼントとして悪意もなにもない食べ放題ツアーをプレゼントとした貴虎。

「嘘、だろ……」

本当に純粋な善意であり、特に悪意の無いものだった。

しかしクリスマスを楽しむにしていた迅を絶望へ突き落とすには最強の悪意であり、迅は落ち込む。楽しい楽しいクリスマスパーティーは存在しないのだと。

「あ、因みに私も今日は家でクリスマスを祝います」

「ぐふっ!」

とどめの一撃をさされた迅は横たわる。

宇佐美はごめんねと謝り去っていき、玉狛支部には陽太郎の相棒であるカピバラ、雷神丸(♀)だけが残っており

「クリスマスなのに、甘くない……しょっぱい」

涙を流している迅の上へと乗り掛かる。

今年もまた、彼はクリぼっちの守護神として君臨する。尚、クリスマス誘うの失敗した人の頂点にはS村さんがいる。

「イルミネーション……電灯を見に行くだけでお金を取るのか」

「そういうのつて、見れば意外と心を踊らせるものが多い」

一方、その頃貴虎はイルミネーションツアーの見送りにいつていた。

「貴虎さん、ありがとうございます！」

「気にしないでくれ、この前の事もあるし……クリスマスにイルミネーションは良いぞ」
「兄さん、本当に良いの？」

「構わない。私の方も私の方で予定があるし、思う存分に楽しんでこい。お土産はいらない」

「ありがとう、兄さん」

遊真、千佳、修がバスへと乗り込む。

楽しそうに笑う弟や弟の友、未来の義妹を見て心を和ませる貴虎はプレゼントをしてよかつたと微笑む。

「表情筋、全然動いてないわね」

「あんたの遺伝だよ……まあ、母さんも楽しみなよ」

「ええ、楽しませて貰うわ。」

「この日の為に貴方が誕生日にくれた最新のカメラも使い方を覚えたわ」

「上手く千佳と修のツーショットが撮れば良いが」

「大丈夫よ、レプリカも協力してくれるから」

「そっか……!?!」

千佳と修のイチャイチャ写真が欲しい母からなにやらとてつもない言葉が出てきた。

「これはツツコミをいれるべきなのだろうかと考えたのだがその前に母はバスに乗り込み出発をしていった。」

「もうあの人に關してはツツコミを入れるのはやめるべきだな」

『そうしておいた方が良い。香澄殿は遙か彼方を見ている』

「うおっ……って、なんだレプリカか」

『私には驚いていても、私のこの姿には驚かないのか?』

「お前はトリオン兵だからそれぐらい出来ると思うから驚かない」

何時の間にか自分の隣にいた小さなレプリカ、通称ちびレプリカ。

「万が一になにかあった時の為にと母に頼まれてうみだした個体であり貴虎は知っていたのでそこまで驚かずにいる。」

『兄殿、香澄殿から言伝を預かっているが……』

「一応、聞いておく」

『ゴムをしなくても良いのよ？とのこと……ゴムとはいったい』

「知らんで良い！そしてなに言ってるんだあのババア！」

まだ40過ぎなのに、本当の意味でババアになるつもりか！つーか、相手私とタメだから出来ちゃったはダメだろうー！」

『最近授かり婚と言うのよ、とも預かっている。それでゴムとはいったい』

「レプリカ、それはインターネットとリンクさせて自分で学習してくれ」

疲れた貴虎は目頭を押さえながらバスターミナルを後にする。

『兄殿、何故今日は残ったのだ？』

「私、夜に彼女とお笑いのライブを見に行く予定がある。

その前に色々とする予定があつてボーダーの隊員と会うから隠れていてくれ。後、言うなよ」

彼女の事については言うなと釘を刺すものの、修經由で遊真は知ることになると貴虎は知らない。

貴虎はレプリカを上着のポケットにしまうと家へは帰らずハンバーガー屋に向かうと太刀川と堤がいた。

「すみません、待ちましたか？」

「いや、全然待つてないよ」

「それよりもちゃんと準備は出来ているんだろうな?」

「ええ、例の物です」

何時になく真剣な顔の二人は今日この後、ファントムばばあもとい加古の誕生日を祝うことになっており、その祝う生贄を増やす。

「焼肉を平らげた私が言うのもなんですが、すみません」

「気にすることないよ。むしろ、こつちが君の時間を潰したかもしれないんだから」

「いや、そうじゃなくて」

「二宮の事は気にすんなよ……一応は、一応は誘ったんだぞ?」

ある方法を使い、太刀川達は今から二宮をボーダー本部へと連れていく。

その事とは別の事に罪悪感を抱いているのだがそんな事を気付くはずもなく目が血走る太刀川は二宮の事を思い出す。

二宮を生け贄にする気満々で誘ったのだが、あっさりと断った。その癖、誕生日プレゼントだけはちゃんと用意している。自分だけ安全圏内にいるんじゃないやねえよと憎悪の炎を燃やす。

「……まあ、そのクリスマスプレゼントです」

「お、サンキュー……なんて書いてるんだこれ?ただなんとかまる?」

「正露丸ぐらい読めるようになってください。胃薬です」

「三雲くん、縁起でもない事はやめなにか!」

「無理です。二人から、死相が出てます!」

「お前、迅みたいの色々とやって未来を変えれないのか!」

「私ボーダー隊員じゃないですし仮にボーダー隊員でも相手、加古さんですよ?」

「太刀川、落ち着くんだ……加古ちゃんは絶対に人の話を聞かないし言うことを聞かない」

正露丸をプレゼントしたことにより一悶着するものの、直ぐに落ち着く三人。

これはお守りがわりにしておく懐に堤が入れる。

「胃が痛む」

自身の中の罪悪感が増す貴虎。

この場には呼んではないが柿崎と来馬も呼ばれている。尚、風間は今年は思い人がいないレイジを優先しており参加はしない。その事を伝えられると更に罪悪感が増していき早いところやることを終わらせて逃げなければとメガネを外す。

「来ましたよ」

「来たか」

今日、二宮が何処でなにをするのか当てる。

事前にクリスマスプレゼントを来馬に渡している二宮を当日に捕まえる方法が無く、クリぼっちの守護神である迅はこの時期はくそのやくにもたたず、貴虎に頼る太刀川達。

早いところこの場から去りたいと滅多なことでは出さない全力を出して二宮が何処にいるのか、何処を歩くのかを占いで叩き出した。

「でかした……後は任せろ」

貴虎は持ってきた水筒に入っている飲み物を近くのコンビニで購入した紙コップに2つ注ぐ。

1つは太刀川が、1つは堤が持ち二宮から見て2人が仲良く談笑している立ち位置を再現。

「お前ら、なにをしている?」

今日は加古の誕生日で、巻き込まれたくないが為に逃げている二宮。

これから死ぬより辛い運命が待ち受けているのに嬉々としている二人を見て疑問に思い声をかける。

「確定だ」

声をかけなければ二宮は死ぬ未来には辿り着くことはなかった。

だが、二宮は声をかけてしまった。好奇心は猫をも殺すというが、二宮は自らの手で

首を絞めた。

「二宮、ちようど良いところに」

「どうした？」

「今、太刀川が色々な人にシンジャエールを配ってるんだ。二宮もどう？」

「シンジャエールか」

「唯我のやつが試供品だかなんだかで持ってきたんだけど、ぶつちやけシンジャエールそんなに飲まねえんだ。

コーラとかお茶とかなら飲むけど……ほら、ドリンクバーでもシンジャエールはあつてもミックスに使つたりするぐらいで、そのまま飲まないだろ？流石に今日に出すのも悪いしさ」

「ふん、オレはドリンクバーでもストレートで飲む」

「そうか？まあ、とにかくシンジャエールを味見してくれよ。バカみたいに余ってるから、美味かつたらやるよ」

上手く二宮の意識を飲み物へと誘導する太刀川達。

紙コップを取り出して水筒に入っているシンジャエールを入れると泡がたち、太刀川はそれを二宮へと渡す。

二宮はシンジャエールをまじまじと見て色鮮やかだなと金の力でA級に入った男が

持つてきただけのこととはあると感想を述べ、口にする。

「……………つ、てめえ……………」

「悪いな、今日は一人でも欲しいんだ」

何処そのキングと声は同じだが、飲んだまま立つたまま意識を失い君臨をするわけでもなく倒れた。

味に気付き意識を失うまで少しだけ間があるのは見事なものだったが、それだけであり太刀川はゲスな笑みを浮かびあげる。

「これで、本当によかったんだろうか」

「分からねえ……………それより、これ本当に飲んで大丈夫なのか？」

「太刀川、やめるんだ。加古ちゃん炒飯を食べる前にそれを飲むんじゃない！」

「あの、急いで車に乗せて連れていかなくて良いんですか？」

「おう、そうだな。頼んだぞ、堤」

気絶した二宮を太刀川が背負いすぐ近くに止めてある車に向かう一向。

レッカーされることもなく普通に止まっていた車に二宮を太刀川が乗せるという色々とヤバイ絵になっているが緊迫した空気の中では誰かがツツコミを入れることなく、二宮にシートベルトをする。

「私に出来ることはここまでです……………どうか、閻魔大王の元に行かないように」

「ああ、逝つてくるよ」

二宮を乗せた車は走り出す。

加古の誕生日を祝うべく、加古の誕生日に呪われるべく男達はボーダー本部へと向かった。

『兄殿、あれは拉致ではないのか？』

「それを言ったらおしまいだ。」

さて、正露丸を読めない大学生も行ったし、遊びにいかなければ」

やるべき事はやったと、既にやらかしているとボーダー本部に背を向ける貴虎。

自分の使命は果たしたのだとそれ以上は深くは関与せず彼女の元へと向かいお笑いのライブを見に他県まで向かう。

「……………は」

「おはようございます。二宮さん」

「お前は……黒江か」

それから少し時間が経過し、数時間後。

意識を失っていた二宮は目覚めると見知らぬ部屋にあり、今年入った隊員で最も優秀と言える最年少のA級黒江双葉に声をかけられて状況を理解する。

「太刀川と堤は何処だ？ いや、それよりもオレのトリガーは何処だ？」

そして殺意を抱く。

例えポイントを奪われようともこの二人は殺ると持っていた筈のトリガーが無いことに気付いた二宮は双葉に聞くのだが双葉はその質問には答えなかった。

「皆さんはあそこで話し合っています」

「……ツチ……」

トリガーの場所を絶対に教えることはない。

そう悟った二宮は文句の一つでも言つてやろうと立ち上がるのだが足枷がつけられていることに気付く。

「おい、なんだこれは？」

「……皆さんから聞きましたよ？」

毎年加古さんの誕生日にプレゼントを直接渡さずにいるのを。一度ぐらいはちゃんと渡すつもりはないんですか？」

キツと13歳児に睨まれる二宮。臆することも心が傷付くこともないのだが、それに関しては二宮が悪い。

鍵は持っているが逃げられると困るからと鉄枷をつけた状態で動けと言われ、渋々そのまま遊んでいる太刀川の元に向かう。

「お、起きたか」

「起きたじやない……貴様、なんのつもりだ！」

「はっはっはーなんのつもりって、お前そりやあ決まってる……死にたくねえんだよ!!」
「君は毎回逃げている……一度ぐらいは痛い目に遇っても良いじやないか!!」

心からの叫びをあげる太刀川と堤。

なんの迷いもなく生け贄にする言葉は二宮をより苛立たせて思わず手が出るのだが
来馬と柿崎に止められる。

「まあまあ、落ち着いて。」

二宮くん、無理矢理連れてきたことは悪いけど……折角だから加古ちゃんの誕生日を
祝おうよ」

「太刀川さん、堤さん、大人げないですよ。そんなに怖いんですか?」

(二宮が) ギスギスとした空気が流れている。

これは別の意味でまずいのでは?と双葉は遠目で見てみると、本日の主役(魔王)で
ある加古が5人の前に立つ。

「あら、目覚めたのね」

「いいや、まだ目は覚めない。お前が居るのは悪夢だ」

「だったら、年柄年中悪夢を見ているのね。精神安定剤でも常備したら?」

向かい合って早々に毒を吐きあう加古と二宮。

双葉はどちらかと言えば嫌いな木虎と自分もこういう感じかとなるが、自身が一方的だなど直ぐに違うと首を振る。

「とにかくこれを外せ」

「え、外したら逃げるでしょ?」

「当たり前だ。こんな所に居ていられない」

「酷いわね、同期の誕生日を祝おうと言う優しさは無いの? そんなんだから、勘違いをされたり周りから堅いとか天然とか言われるのよ」

「オレは堅くも天然でも勘違いでもない。」

「そんなに誕生日を祝ってほしかつたら、今すぐに焼肉を奢って厄落としをしてやる」

「私は疫病神? 捨てる神あれば拾う神もいるのよ?」

「ああ言えばこういいこういえばああいう二人。」

柿崎と来馬はあたふたするのだが二人はそういう感じの関係性なのを知っているの
で太刀川達は特になにも言わない。敷いて言うならば、二宮、焼肉屋に連行しろと思っ
ているぐらいだ。

「焼肉も良いけど、もう今日は決まっているわ。」

「数日前から仕込みや準備をしているのだから、今さら変更なんて無理」

「数日前、だと……」

決して自分は料理上手ではないし普段から料理をするタイプでもない。しかし炒飯ぐらいならば簡単に作れる。

それはこの場にいる柿崎や堤も同じで、炒飯なんてパパッと出来るもの。変わり種のチャーハンなら数時間は掛かるかもしれないが、数日前からの仕込みとなるとおかし。いったいこれから自分はなにを食わされるのかと少し引いてしまふ二宮に柿崎は肩に手を置いた。

「美味しい炒飯は、美味しいらしいですよ」

そう語る彼の目は死んでいた。

加古の誕生日を祝う純粋な気持ちはあるのだが、これから起きる出来事を想像し覚悟を決めた。19歳組随一の苦労人である彼は自分がハズレを引くものだと何処か決めてつけていた。

「あ、そうそう。引く順番はローテーションじゃなくて来馬↓柿崎↓俺↓堤↓二宮だからな」

「待て、引く順番?」

昨年の悪夢を反省したのか、箱を引く順番を二宮が寝ている間に勝手に決めていた太刀川。

どうということだと説明を聞くと二宮は殺気を太刀川に向けるのだが、そんなものより

も炒飯が怖いので怯えずにいる。

「あの今回はそんな物を使いませんよ？」

「なん、だと……」

二宮を犠牲にしても生き残ろうとする男達の計画は双葉の一言により消え去る。

先程から一切見えないがなにかをしている加古。そしてなにも知らない双葉。それはつまり

「もう作るメニューが決まっているのだと……」

くじもなにもなし。運要素しかないDEAD OR ALIVE GAMEのはじまりである。

「は〜い、お待ちせ」

いったいどんな物を食べさせられるのかと怯えていると大皿を両手に持った加古がやって来る。

まさか、複数の炒飯を作って全てを混ぜ混んだミックスチャーハンなのか!?

当たりすらもハズレにする最終兵器を作ってきたぞこの女!と叫びたくなる(来馬以外)の다가それを抑えて先ずは具材だと皿を見る一同。

「これは……」

「皆さん、今年は炒飯じゃなくてコロッケですよ？」

皿の上には色とりどりのカオスな炒飯、ではなく三角形の綺麗な揚げ物が、コロツケが沢山乗っていた。

「今年は炒飯じゃないだね」

「ええ、今年はちよつと別な風にしてみようと思ったの。」

それにこの人数だと一人一人に振る舞うと確実に誰かが食べれない時間が出来て苦しいでしょ？」

※空腹の苦しみが幸福な時があります

炒飯が来る、炒飯が来てしまうと怯えていた一部の男はまさかのコロツケが登場するとは思ってもおらず呆気に取られてしまった。

「そうか。コロツケだから数日前に仕込んだのか」

呆気に取りられてしまったが直ぐに意識を現実に戻す太刀川は好物のコロツケが出てきたのかよつしやとテンションを少しだけ上げた太刀川は加古特性のコロツケを手にする。

コロツケは結構手間の掛かる料理。蒸かしたり茹でたりしたジャガイモを潰して味付けしながら炒めた玉ねぎと挽き肉を混ぜてコロツケの型にして冷やす。その冷やすをしないと揚げた際にコロツケが崩れてしまう。

肉じゃがコロツケやカレーコロツケ等の変わり種のコロツケは更に仕込みに手間が

掛かると太刀川は納得してコロツケを口にしようとするのだが手が止まる。何故か止まってしまう。

なんで、コロツケなのに綺麗な三角なんだ？

コロツケ好きで色々なコロツケを食べてきた太刀川は疑問を持つ。コロツケといえ
ばこう、小判みたいな平べったい楕円形なのが定番で、メンチカツみたいに分厚い円形
もあるのを知っているが三角なのはおかしい。

ちよつと作るのに失敗して変な形になったわけじゃない。加古は明らかに狙って三
角形のコロツケにした。何故わざわざそんな事をするんだ？

太刀川は今まで食べてきたコロツケを思い出す。

かぼちやコロツケ、さつまいもコロツケ、肉じゃがコロツケ、カニクリームコロツケ、
焼きそばコロツケ、チーズコロツケ、牛肉コロツケ、すき焼きコロツケ、他にもご当地
や良いところのコロツケなど数々のコロツケが頭に浮かび

「まずい、全員口をつけるな！」

答えを導き出した。

「……」

「手遅れだったか……」

だが、既に時遅し。

柿崎はコロツケを口にしており白目を向いていた。

「実は、少し前に炒飯作りに息詰まっていたの。」

美味しい炒飯を作ろうにもワンパターン化してきてしまつてこのままだとまずいと思つて相談にいつたの」

「そ、相談つて誰に相談を？」

「出水くんのお友達の三雲くんよ。」

去年、双葉が1月に入隊する事を占いで当てたからどうかしてスランプを抜け出せないのか聞きに行ったの。」

相談相手の名前を聞いて、堤は一瞬で理解できた。

少し前まで一緒にいた男がどうして申し訳なさそうな顔をしていたのか、どうしてクリスマスプレゼントとして正露丸をプレゼントしたのかを。

「そ、それでどうなつたんだ？」

なんとなく察している太刀川は恐る恐る続きを聞く。

「そういう占いは出来ないって言われたのよ。」

あくまでも未来を占うだけで、どうすればそうなるかなんて分からないし、そもそも今年を占いをしていないって。

けど、それでもどうにかならないか聞いたらその時に彼が読んでいる本を渡してくれ

たのよ」

加古はその時、貴虎が読んでいた本を……クッキングパパの11巻を取り出す。

「この本に乗ってる料理でも作ってみればと言われてね……」

クッキングパパは料理漫画。家庭でも出来る料理漫画で毎話ごとに料理のレシピが載っている料理のレシピ本としても使えなくはない一粒で二度美味しい漫画。

加古はページを捲り続けて、ある話のレシピが載っているところで手を止める。

「この巻におにぎりコロツケって料理のレシピが載ってたの

これを見てピンと来たのよ……ただただ、炒飯を作るんじゃないで炒飯を作り、それをライスコロツケにしてみようって」

どうかしら？と微笑む加古に戦慄する太刀川、堤。

どうして貴虎が申し訳なさそうにしているのか、それは加古が炒飯でなくライスコロツケを作ってくるのを知っていたから。具材とかそういうのが既に決まっただけで且つ何が入っているのか見た目で見抜くことが出来ないライスコロツケを作れば良いんじゃないかとアドバイスをしてしまったからだと分かる。

「沢山、用意したから食べてね」

その日、来馬と双葉と遅れてきた加古隊の喜多川と小早川以外は死んだ。

第47話

クリスマススの悲劇から一週間後。

太刀川さんから鬼のように着信があつたものの、全て見なかつた事にして年末を楽しく過ごして何事もなくとは言えないが五体満足で年を越せた。

彼女から今年の初日の出は富士山で迎えたいとの要望があつた。今年は大規模侵攻や遠征やら色々を懸けなければならぬ事が多いので極限まで甘やかせるところを甘やかそうと私は一緒に富士山で初日の出を迎え、その帰りに遊真と遭遇。そのまま家に連れ帰ると千佳が新年の挨拶に来ており、ついだから初詣に行きましようと思ふに強制的に連行された。

「オサム、これはなんの祭りなんだ？」

初詣にはじめてやって来た遊真は余りの人混みに驚いた。

「祭りと言うよりは、1年の感謝とか平穩を祈りに来る行事で一番奥にある賽銭箱にお金を入れて合掌して一札をしてから今年1年を祈るんだ」

「その割には、遊んでる人が多いな」

「まあ、どちらかと言えば遊ぶ行事に変わつてるから」

この中でまともなお祈りをしているのは誰だろうか？ そう考えながら歩いていると母さんと遊真以外の携帯が鳴る。

なんだろうと携帯を取り出し確認する私と修と千佳。

「誰からのの？」

「知り合いのボーダー隊員から初詣に行こうぜと」

「私も、玉狛の先輩から」

「あ、僕も同じだ」

差出人こそ違えど、メールの内容は似たり寄ったりで見せ合う私達。

既に初詣に出発していると所在地を教えると今からそちらに行くのと三人とも同じメールが帰ってくる。

「千佳ちゃん、その支部の先輩って貴虎の知り合いかしら？」

「確か……殆どの人が貴虎さんを知ってました」

「殆ど、ということとは知らない人もいるのね」

「こなみセンパイがおサムのおにいさんの事を知らなかったよ」

「そう……貴虎」

「いやだ」

これから会う玉狛の面々の情報を得る母さんは良からぬ事を企む。

それがなにかと私は直ぐに分かったので断るのだが母さんは無言で私を見つめる。

「どう考えても母さんの方が有利。私が先でも母さんが先でも母さんが圧倒的に有利だ」

「別にいいじゃない。減るものでもないし、仮に減つても明日には数千倍に増やすですよ？正月なんだから、親孝行や弟やお友だちにカツコいいところを見せなさいよ」

「……」

私の弱点を的確についてくる母さん。そう言われると私も下手な事は言えず、一先ずは御詣りを済ませる。

これからなにか起きるかを想像すると少しだけ嫌な気分になるのだが見た目が手塚国光になった以上はこの呪いからは抜けられない。と言うよりはむしろ手塚でよかつたんじゃないかと思う。真田とかだと余計におっさんに見える。テニヌプレイヤーは二十歳以下とか絶対詐欺だ。

「確か、この辺に」

「何時もと違う格好をしてるけど、あそこにいるのはこなみセンパイじゃないのか？」
待ち合わせ場所に来るも見当たらない玉狛の面々。

何処だと修が探すも見つからず、代わりに遊真が着物姿の小南や何時も通りの格好のレイジさん、京介、宇佐美を見つめる。支部長と何処ぞのグラサンはそこにはいないの

で私は少しだけホツとし、修が手をあげて此処だとアピールをしながら歩くと四人は修の存在に気付き宇佐美が手をあげる。

「あけましておめでどう、皆！」

「あけましておめでどうございませす、宇佐美先輩」

「今年もよろしくお願ひします」

宇佐美の挨拶によりはじまる玉狛の面々との会合。

修と千佳が挨拶したので私も挨拶をしようとするのだが先に京介が口を開く。

「あけましておめでどう。修、千佳、遊真」

え、私だけピンポイントで無視？

京介が挨拶をするのだが、私の名前だけ呼んでおらずピンポイントで無視をしており視線が少しだけ合うのだが気にせずにいる。

ここ最近、なにか嫌われることでもしたっけ？と最近の出来事を必死になって思い出そうとするのだが特に心当たりはない。じゃあなんでも思っていると京介の視線は小南に向いていた。

「はじめまして。私は小南桐絵と申します。何時もお宅の修くんには御世話になっております」

「ブッ!!」

くぎゅうボイスをここぞとまで發揮し、お嬢様声として綺麗な挨拶をする小南に私は吹いてしまう。

どちらかと言えばアホの子の筈なのにとてつもなく上品に振る舞おうとしており、小南の普段を知っているので衝撃的だった。

「あ、そうだ。修くん、千佳ちゃん、遊真くん、ちよつと」

物凄く猫を被り猫などで声で吹いた私を気にせず修達を呼ぶ小南……否、小南パイセン。

思い出した。この女は学校とかではオペレーターやつてる機械苦手系お嬢様女子高生として通じているのを。

「こ、小南先輩、今のは」

「いいから、変な素振りを見せないで。私、一応ボーダー以外にはオペレーターをやってるって事にしてるんだから」

「なんでそんな事をするんだ？」

「そりゃあ……まあ、アレよ。アレ」

※修の首に腕を掛けてボロを出すなど命令をするのだが、割と聞こえる声量で言っているの丸聞こえであり京介とレイジさんと宇佐美は生暖かい眼で見守る。

「……………どうかしたのかしら？」

口裏を合わせるべく色々と話し合っているのだが丸聞こえで、大体合わせ終わると母さんは声をかける。

しまった！と小南パイセンは修のアームロックを解除して修達を返して綺麗な笑顔を見せる。

「すみません。実は昨日、玉狛支部に訪れた際に忘れ物がありましてそれについて色々」と

小南パイセン、何処まで白を切るつもりなのだろうか。

「なにを忘れたのかしら？」

「え、ええつと……メガネです！修くんったら、メガネをお忘れになつて」

「それだと修はスペアのメガネをしていた筈よね？それにメガネを忘れたのならば千佳ちゃん達は関係無いわよ？」

「う……」

「ちよつとあの人、なんかポンコツ臭がスゴいんだが」

「それもそうです。あの人こそ、ボーダーが誇るポンコツガール、小南パイセンです」

「誰がポンコツよ!!……あ……」

母さんによつて徐々に徐々に小南パイセンのポンコツ具合を見せられ、京介に紹介されるとツツコミを入れて素を出す小南パイセン。

徐々に徐々に顔を真っ赤にしていきレイジさんが肩に手を置いた。

「修達と口裏を合わせる会話、丸聞こえだったぞ」

「なあっ!?!」

「ドンマイです、小南先輩」

真実を伝えられ物凄く落ち込み顔を真っ赤にする小南。

「も、申し訳ありません！お姉さまの様なお綺麗な方を前に機が動転してしまい」

「母です」

「え?」

恥の上塗りを繰り返そうとする小南パイセンの姿は割と見苦しかった。

そして予想通りと言うべきか母さんを姉だと間違えたので私達3人は何時もの事を行うと固まる。

「え、お母さん?」

「はい」

「……嘘、私と2歳ぐらいの歳の差があるかないかの見た目じゃない!?!」

「あら、お上手」

「こなみセンパイ、ウソみたいな話だけどこれが本当でおれも一回、間違えた」

ありえないものを見る眼で母さんを見る小南。

後、数年もすれば小南は母さんよりも老けて見えると予想すれば母さんの若さは異常であり、レイジさんや京介も表情こそ変えてはいないものの驚いている。宇佐美は表情を変えている。

「こんなんでもお前の一回り以上、上だ」

「あら、手が滑ったわ」

例によつて余計な一言を言うと財布で頭をシバかれた。

「まあ、熟年のカップルなんですわ」

そんな光景を見て勘違いをして微笑む小南。これにより私のゲームオーバーが決まった。

「小南先輩、兄です」

「え？」

「小南ちゃん、息子です」

「え？」

「小南、メガネの兄、略してメガネニキです」

「ええ!?!」

こいつ、ボーダー隊員じゃなくてリアクション芸人じゃないのか？

私を父親だと勘違いをしていた小南に3連続で兄だというと見比べる小南。パイセン。

「失礼ですよ小南先輩。三雲さんは小南先輩と同じ年なんですよ」

「この展開を望んで敢えて私を省いて挨拶したお前にだけは言われたくない……と言うことで兄だ。」

しかしまあ、そのなんだ……猫被るのはいいんだが事前に口裏合わせしてないしボロが出まくるし、リアクション芸人みたいだな、小南」

改めての自己紹介をすると俯いた小南。

顔を真っ赤にしプルプルと震えている姿から発する電磁波は羞恥心と怒りが半々で混ざり合っており、間もなくそれが爆発する。

「だました、なああああああ!!」

「だ、騙したもなにも小南先輩が勝手に勘違いを」

「うがああああ!!」

「いや〜新年早々に面白いものを見た……」

けど、喜べない。

「貴虎」

修にアームロックをかけて噛みつく小南。パイセンを尻目に私に声をかける母さん。

寄越せと右手を差し出しており私の敗けだと財布を取り出して諭吉を一枚取り出して母さんに差し出す。

「遊真くん、千佳ちゃん、それに貴女達も甘酒でもどうかしら?」

「良いんですか?」

「ええ。その小南ちゃんが見事に貴虎を勘違いしてくれたお陰で私の勝ちで、貴虎の奢りになったわ」

「三雲さん、ゴチです」

小南パイセンが私を兄と母さんを母と当てなければこの近隣の出店の飲食代を奢る。

ついさつき母さんと交わした賭けは私の負けだったので私の奢りになり京介達に甘酒を奢ることになるのだが、やはり私の方が分が悪い。

私が負ける条件が小南パイセンが私を父親と勘違いし、母さんを姉と勘違いする。対して母さんが勝つ条件が自身を姉だと勘違いさせて私を父親だと勘違いさせる。

どちらにせよ勘違いをされる顔で母さんに声をかければ姉と間違えてしまい、じゃあ隣に居る若い男は兄でなく父親という先入観を抱く。私を父として間違えたら隣に居るのは姉だなと母さんを姉だと思ふ。と言うよりは思うざる得ない見た目だ。

「そ、そういうえば、迅さんは?」

「ああ、ボスと一緒に挨拶回りでもうすぐ来るわ」

甘酒を飲み甘酒が売っている屋台に向かう最中、グラスがないことを聞く修。

小南パイセンになんとか解放されており若干だが首が痛そうなのだが小南パイセン

はそんなに気にせずにもうすぐグラサンがやって来ることを教えると嬉しそうな顔をする……セクハラ無職が。

若干だがグラサンセクハラ魔に嫉妬をしてしまうのだが、直ぐにその感情を押し殺す。このままでとお尻大魔人が来るのは確定で今会うのは非常にまずい。多分だが、私のはあの男がサイドエフェクトで視ている未来をねじ曲げまくって、ボーダーからも頼りにされている未来視を力技以外で破れる奴が居たなんて今分かれば面倒だ。

「みい〜く〜もお〜」

「ぬうお!?!」

どうやってこの場を逃げるのか考え周りに意識を向けなくて居ると聞き覚えのあるアゴヒゲの声やし頭を鷲掴みにされる。

もしやと後ろを振り向いてみると鬼のような形相のダンガー太刀川（着物）と堤さんと加古さんと最年少A級の双葉がいた。

「太刀川さん、着物姿似合ってますよ。何時もより大人らしく見える」

「そうかそうか……それで済むと思ってるのか?」

「いや〜なんのことでしようか? 私、この一週間貴方とは顔を」

「ライスコロツケ、そう言えば分かるよね、三雲くん」

糸目の笑顔の堤は物凄く優しく怒りを見せる。

今年の文化祭でクッキングパパの1巻を炒飯スランプ中の加古さんに貸したから、今年には炒飯でなくライスコロツケだったことを知らなかったようでそれを伝えなかつた事を、炒飯からライスコロツケに変えたことを怒っている。

「ホームランバットのココアライスコロツケはダメだ」

「ええ、思ったよりもパツとしない味だったわ」

「あ、すみません。三雲のおねえさん、ちよつと三雲くんを借りていきますね」

「どうぞどうぞ」

「この場に私の人権は存在しないらしく、首根つこを掴まれて連れていかれる私。

「あいつ、太刀川達とも知り合いなのね」

「今の人は？」

「あのアゴヒゲは太刀川。」

「個人でも総合でも部隊でも一位を取っている……まあ、私の次にやるまあまあなやつ
」よ」

「まあまあ、ですか」

「そんな私を見て連れていった男は誰かと疑問を持つ修に答える小南なのだがいらん
プライドが発揮。」

「個人でも総合でも部隊でも一位ならば文字通りの一番じゃないのかと言いたいのだ

が、それを言い出せば駄々を捏ねそうになるのでそれ以上はなにも言わず、甘酒の出店に辿り着くと実力派エリートがいた。

「やあやあ、待つてたよメガネ君！千佳ちゃん！遊真！

新年あけましておめでどう！今年もよろしくお願いします！ということこれ、お年玉」

「おお……ぼんち揚げか」

新年早々にもぼんち揚げをつまみに甘酒を飲む。

お年玉と称して修達にもぼんち揚げを一袋を渡し、新年の挨拶をする。因みにだが私はぼんち揚げよりコンビニ限定の粉増量のハッピーターンが好きだ。

「貴方が迅くんね」

「ああ、どうもどうも！メガネくんのお姉さん！

「母です」

「え!？」

そして奴もまた間違えた。

「で、私をわざわざ引つ張ってきたのは？後、一人見たことの無い子が居るんですが」

「幸か不幸か、実力派エリートに会わなくて済んだ私は太刀川さん達に人気の無い場所に連れていかれた。」

「黒江双葉です……子供扱いしないでください」

「それは悪かった。ところで私になにか用ですか？」

私にありのままの怒りをぶつけるのならばとつくにぶつけている太刀川さん。

それをするにはせずつに加古さんや黒江を連れて人気の無い場所に連れてきたということは暴力を振るう為ではないだろうと理由を訪ねると笑顔になる。

「お年玉くれ！」

おいこら、ダンガー。お年玉を金玉だと女子高生（斧）に教えたダンガー。

もうすぐ成人式を迎えるというのに三つ下の男からお年玉を要求しないでくれ。

「お年玉もなにも今は手持ちが」

「ああ、そうじゃないよ。お金とかそういうのじゃなくて、占いをしてほしいんだ」

「占い、ですか」

「ええ、そうよ。」

ぶっちゃけ、ここのおみくじのよく分からない内容よりも貴方の占いの方が分かりやすいのよ」

「と言うことで俺達全員を占ってくれ」

「占ってくれ、ね……」

実力派エリートはこの近くに居る。ボードアの新年の挨拶をしているならば、この

面々とも顔合わせをしている。と言うよりは普通は出会うはずだ。この四人はあの実力派エリートと顔見知りだ。

私の占いはあの男と違いビジョンがハッキリとは見えない。おみくじ感覚でするならばちよいどいいかもしれないと思っっているが私の占いの成功率は既に9割を越えているんだぞ。

「じゃ、まあクリスマスの事とかもありませんしお年玉と言うことで」

この前の一件の詫びと今後の為の仕込みとして準備すべくメガネを外す。

今回を逃せば次に会うのは病院のベッドの上になりそうなのでここは真剣にならないければと気持ちを切り替えると肌で伝わったのかビクリとする黒江。

「ところでカードを使わなくて良いのかしら？」

「ちよつと黙ってください。今、本気でやりますから」

加古さんは普段はカードを使っているが今回は使用しないのかと疑問を持つがカードは占いをちやんと占いらしくする為の道具で、占いのする為の道具じゃない。

加古さん達の顔を見て真剣に占い、どう答えるべきかと考えるのだが非常に面倒な事になっている。試しに関係の無い人の電磁波を見るのだが、それもまた非常に面倒な事になっている。

「……一応手相も占うので、お願いします」

気持ちの整理をしようと時間を作るべく占いつぼいことをする。

太刀川さん達の手相を見て真剣に占つてますよ感を出しながらどう答えるべきかと考える。

「なにか分かったんですか？」

「……逆だな、これは。分からないことがわかった」

黒江の小さな手を最後に見終えると、黒江から結果を訪ねられたので曖昧な返事をする。

難しく言っているが結果的には分からないと言っているので黒江に睨まれるのだが気にせず続ける。

「やっぱ、商売道具が無いと無理なのか？神社だし、水晶とか探せばあるし何処かから借りてくつか」

「借りなくていいです。分からないことがわかっただけで、なにも分からないとは言つてませんよ」

「どういう意味だい？」

「1月20日午後からの未来がプツンと消えている。」

太刀川さん、堤さん、黒江、加古さんだけじゃない。ついさつきまでいた私の弟や友人、それにその辺を歩く初詣にやって来た三門市の人達全員の未来が1月20日午後以

降の未来が占えない」

「やけに具体的だね」

流石にその日を過ぎれば色々とバレルだろうから、多少隠さなくても問題はない。

「1月20日の午後以降の未来が占えないって、どういうことだ？」

「さあ、私に聞かれてもよく分からないです。」

ただ太刀川さんの未来を占えないとか加古さんの未来を占えないとか個人に特定して未来を占うことが出来ないとかじゃなくて、その辺を歩いている初詣に来た三門市在住の方々も占えないとなれば……」

大規模な災害としか考えられない。

敢えてその事を言わずに無言を貫くとさつきまで浮かれていた表情だった面々は少しだけ真面目な顔をする。

1月20日の午後から近界民の世界で一二を争うほどの大きい国であるアフトクラトルからの大規模な侵攻があるのでその結果次第で未来が大きく変わる。

アフトクラトルの大規模な侵攻が私がどう動くか、今もこうしている間に実力派エンジニアが裏でいらんことをしてたり色々未来が変動しまくってるせいも1%の可能性も一瞬にして30%の可能性に変動したりして正確に占えない。

「なにがあるんですか？」

「分からないと言っている。

だが、少なくとも1月の20日になにかがある。もし気になるのならば、その日を待てばいい。もしその日がなにか分かれれば備えれば良い。もしその日が怖いのであれば逃げれば良い。私に分かるのはこれだけでそれ以外はさっぱりだ」

「……」

「睨まないでくれ」

「睨んでません」

「1月20日の午後か……ほうほう」

ニヤリと笑みを浮かべるダンガー太刀川。

「できれば周りに言いふらさないでくださいよ」

「ええ、分かったわ」

占いを終え、念のためと釘を刺すと加古さん達と別れる。

20日にある大規模侵攻、そこに加古さんの姿はいない。正確に言えば物凄く遅れてやって来る。ドライブに行つてて参戦出来なかったという割と些細な理由で、到着した頃には敵が残したトリオン兵を倒すだけとなっていた。これで少しは未来が変えることが出来た、と願いたい。

「1月20日の午後になにかが起きるって言っていましたけど、それってやっぱり」

「今、上とか周りで噂をされてる大規模な侵攻よ」

「……あの人、その事について知ってるんですか？」

「いや、三雲くんはボーダー隊員じゃないよ。」

弟の方がボーダーにいたるとは聞いていたけれど、つい最近までC級でそこまで目立った隊員じゃないし……占いで当ててるんだと思う。彼の占い、やたらと当たるんだ」

「ハズレる時はハズレるけどな……1月20日になにが起きるかは分からない。三門市を巻き込む地震が起きるかもって」

「太刀川くん、そういうのは良くないわよ。けど、面白い事を聞けたわね。その日は出掛けないで本部で待機してみようかしら？」

その事を言い触らさず、その日が来るのを若干だが待ち遠しい太刀川さんと加古さん。

何故に笑っているんだろうと疑問を堤さんは持つのだが、私が言っていることが実際のところなんなのかは分からないのでなにも言えずにそんな二人を見るだけだった。

「あら、お帰りなさい」

「ただいま、つて修達は？」

一方、私は母さんの元へと戻るのだが母さんしかいない。

「遊真くんが屋台をコンプリートしてくると言って一緒に行つたわ。」

あの子、見た目に対して千佳ちゃんよりも多く食べるものだからビックリしたわ」

トリオン体で食事しているんだから、そりゃ無尽蔵だろう。

京介達もボーダーの人達が初詣に来ていると知り、会いに行ったらしく修がお腹いっぱいフラフラになって帰って来るのを待っているらしくその話を聞いて何処ぞの実力派エリートがこの場には居ないと知って少しホツとする。

「はい、これ甘酒とステーキ串」

「チョイス的に間違いないじゃないけど、同時に食うものじゃない……」

少しだけ文句を言いながらもステーキ串をつまみに甘酒を飲む。

いいところのお肉を使って焼いているのかステーキは美味く、甘酒も美味しいのだが同時に食うもんじやないかと先にステーキ串の方を優先して食べる。

「それで、どうなの?」

「どうって、なにが?」

「最近、金庫を開けてる回数が増えているじゃない。」

「この前のトリオン兵?の一斉駆除で皆、修っぽくしていたのはなにかあつて裏で貴方も準備をしているんでしょ?」

「……本当になんで分かるんだ?」

「母だから、これ以上の理由が必要かしら?」

「いりません」

最強の言葉を使わないでください。お願いします。

「どうにかなりそうなの？」

「なると言えばなるし、ならないと言えばならない」

「どっちかハッキリしなさいよ」

「そう……じゃあ、ハッキリ言うけど修に死相が見えるよ」

「！」

クリスマス開けてから、修から微弱だが死相が見えるようになってきた。

目を跨ぐ度にその死相は段々と強くなっていき、遂には今日ハッキリと修に死相が浮かんで見えた。100%死ぬという死相でなくもしかしたら死ぬかもしれないという死相で回避することが出来る。

「なにで死ぬの？」

「外的要因、第三者による暴力での死。

なにをして殺すのかは知らないけれども、それが起きる可能性は低いが確かに存在している……だから、私は色々とするよ」

「お兄ちゃんだから？」

「それもあるし、それだけじゃない」

修が死ぬという事には流石に動揺したが、私が動いていると分かれば安心してくれる母さん。

兄だから助けるのもあるが、それだけじゃない。やりたいことを見つけてやろうとしている奴の邪魔はさせられない。きつと隣児さんを見つけた後も修達は近界とこの世界の架け橋になろうとする。その邪魔はさせない。

「と言うことで以後今まで以上に迷惑を掛けます」

「なにを改まって言ってるの。それが貴方がやりたい事なんですよ？ 迷惑でもなんでもないわ」

「……本当に、勝てないな……」

母さんの言葉の一つ一つが深くて重い。なんだか涙が出てきたと思っているとハンカチを取り出して拭いてくれる母さん。

「三雲、くん？」

優しさに包まれていると着物姿の熊谷に声をかけられた。あ、これダメなやつだ。

第48話

母と二人きりで母に涙をハンカチで拭いて貰うという一種の羞恥プレイを熊谷に見られた。

「三雲くん、その人って……」

プルプルと震えた声で母さんを指差す熊谷。

修は母さん似だからよく姉弟と間違われるが私と母さんは余り似ておらず、どちらかと言えば父方の祖父に似ている。そのせいか色々と勘違いをされる。

「貴虎、知り合いなのか？」

「たか、とら？」

「私の名前……一度、名乗ったはずだぞ？」

誰のことと首を傾げる熊谷。

名前では呼ばれることを好かないが覚えてくれないのもそれはそれで傷付き、落ち込む。

「そう……だったわ、ね……御幸せにつ!!」

「待て、熊谷! お前、確実になにか勘違いをしてる!」

急降下、物凄いまでの急降下!!

熊谷は声と自身の感情を押し殺し、頬に一筋の涙を流すとその場から走り去って行く。

「はあ、なにをやってるの?」

「本当になにやっているといるんだらう、私は!」

このまま勘違いをされたままだと困る。

私はメガネを外して遠ざかる熊谷の電磁波を視認し捉え、どうすれば良いのかどの道を歩めば良いのかを割り出して人混みを駆け抜ける。

「っ、追い付けない!」

着物を着て歩きづらい熊谷と普段着の私。

素の足の速さでも私の方が上だが人混みの中を追い掛けるのは如何に最適なルートを出しても難しく、距離が縮まらない。

「熊谷、話を聞いてくれ!」

声をかけて止めるも、むしろ速度を上げる熊谷。

多少のゴリ押し覚悟で突っ走るしかないのかと思っていると、速度を上げたせいか熊谷はバランスを崩してコケてしまう。

「っ!」

「着物は走るのには向いていない、大丈夫か？」

大きな怪我は無いものの、足を挫いている。

立てるかと手を差し伸べるのだがその手を弾かれて拒まれる。

「優しくしないでよっ……」

「泣いているのか？」

「泣きたくもなるわよ……あんな、あんな光景を見れば。」

見せられれば分かるわ。親密度、全然違うわよね。私は、ううん、周りの人達も三雲なのに、あの人だけは貴虎って」

諦めようとして、それよりも他の事を見ないといけないと気持ちを切り替えようとしていた。

だが、ついさっきの光景を見て辛い現実を目の当たりにしてしまい、切り替えようとした気持ちが大きく揺らいでしまい、耐えきれずに涙を流す。

目の前にいる男の名前をまともに呼んだことはない。それどころか覚えてすらいない。対してあの人は何事もなく普通に呼んでおり、それどころか滅多に見せないであろう涙を拭いていた。格の差を見せつけられ、心を碎かれそうになる。

「いや、他にも貴虎と呼んでる人はいるからな」

「それって家族でしょ……違うわね、三雲くんの事だからあの人も家族って言いそう

ね」

「あの人は母さんだから!!」

「あんな若い人がお母さんなわけないでしょ!

言い訳なんて、しなくていいから。米屋みたいに周りに言い触らすとかそういうの、しない、からっ!」

必死になつて未練を断ち切ろうとすればするほど涙は溢れて止まらなくなる。

目の前にいる男はそれだけ良い男であり、そういう関係になれないと分かつた後でも変わりなく接してくれる。私の言葉に耳を傾けない。耳を塞いで話を聞こうとしてくれない。

「分かつてる、教えてくれたから知つてるの……スウ……」

「これ、母さんの写真」

「……え?」

「父さんが現在海外で働いているので、その前にと撮つた家族の写真」

受け入れたくない見たくない現実だと震える熊谷を正す。というか、訂正する。

父さんが海外に行く前に家族で撮つた写真を見せるとキョトンとして固まる熊谷。携帯を渡すとスライドして母さんと修と一緒に写っている写真やこの前のイルミネーションツアードで撮つた写真等を見ていく。

「本当に、本当に母親なの？」

「あれでも……よし、いないな。四十過ぎている」

また財布か棒が飛んでこないか確認した後、母さんについて伝えると段々と顔を真っ赤にする熊谷。

涙はいつのまにか無くなっており、代わりに間違えてしまった恥ずかしいと羞恥心に包まれており顔を手で覆う。

「……貴虎くん、見なかったことにしてくれる？」

「私が見なかったことにしても、母さんはハッキリと覚えているぞ」

後、サラツと名前呼びになったな。

「それでも、お願い」

「別に頼まれなくても忘れるさ……ところで今後は大丈夫なのか？」

「今後？」

「日浦」

日浦について訪ねるとなんとも言えない熊谷。

まだその日が来てはおらず、イレギュラー門の一件では出来る限りの被害は減らしておいた。怪我人は出ただろうが、死人は一人も出しておらず一番とは言わないがそれな

りに良い結果になったはずだ。

それでもなんとも言えない熊谷。やっぱりイレギュラー門を出した時点でボーダーはダメだとか、隊員の見た目をプライバシーどうのこうのと言って修擬きにしたのがま
ずかったのか？

「受験する高校は三門第一にしてるんだけど、怪しいわ……茜、思ったよりも成績が悪く
て」

「そつちでか？」

「ボーダーで必死に頑張るのは良いけど、この成績はちよつとつて二学期の成績表を見
て言われたらしいの。」

うちは進学校じゃないからテストが難しいとかはないけど、かといって、防衛任務の
穴埋め補習とかは無いしこのままだと学校の方を疎かにして補習組の仲間入りをしそ
うで……」

熊谷よりもちよつと下ぐらいの成績の日浦。

高校に入れば勉強も更に難しくなり、ボーダーはその辺のフォローは余りしない。そ
うなるとそれらを理由にちよつと良いからやめさせようとする。

それに関しては自主的に勉強する様にしてほしいのでなにも言わず、この前の電話を
ガチャ切りにした事について聞いたのだが、俯く。

「ボーダーで、その噂は持ちきりよ。

誰かがそれは違うとか否定したり実際のところはって上書きしたりする様な話をしていないし、大丈夫よね？茜が近界民に拐われるなんて事になったら、私は」

どう責任を取れば良いのかが分からない。

日浦を那須隊に誘ったのは熊谷で、那須隊として活動していたから拐われてしまったとなれば熊谷に掛かる罪悪感はとてつもなく重い。

才能の有無は別として前向きで頑張ろうと努力している熊谷にとってその罪の重さは背負い切れないもので、そうなってしまうたら確実に今日の前で必死になっている熊谷とは別人に変わり果てる。

本当ならば色々と厳しい事を言っておかないといけないが今それを言えばさつき勘違いをした時よりも泣いて走り去るのは分かるし、何よりも自分で蒔いた火種だと熊谷の背中を押す。

「そこから先は言うな……なんとかなるし、なんとかする」

「どうしてそう言い切れるの？貴虎くんは、ボーダー隊員でもなんでもないんでしょ？」

「そうだ。だが、ボーダー隊員でなくてもやれることは沢山ある。

一先ずは前に進むことだけを考えろ……此処を乗り越えたとしてもA級に上がれな

いままだと、なに言われるかわからないぞ」

前に向かつて頑張ろうとしている人の邪魔とか障害とかになるものならば神であろうとも滅ぼす。まだまだどうすれば良いのか作戦が浮かんでいないアフトクラトルの対処法。死ぬ気で頑張らなければと気を引き締め直すと勇気を貰ったのか熊谷は立ち上がった。

「ありがとう、貴虎くん」

「礼を言うのは早すぎる……なんも考えていないからな」

「それでも、その言葉が力になったわ。じゃあね」

熊谷は勇気を得たのか元気になり人混みの中へと消えていく。

「さて、戻るか」

誤解を解いて、正すという当初の目的は終わったので帰る。

来た道に戻り母さんが何処に居るのかと電磁波を逆算して探していると三輪の電磁波が視界に入った。

「三輪！」

「っ！」

「あけまして、おめで……逃げられたか」

「ここで会えたのもなんだと新年の挨拶をしようと声をかけると逃げ出す三輪。

追いかけてようと一瞬だけ考えるのだが三輪から私と会いたくないという感情とどうすれば良いのかが分からないという迷いがぶつかり合っているのを見て、それに私が直接触れる事はいけないとサイドエフェクトが言っているので諦める。

「よー」

「三雲、あけおめ、ことよろ〜!」

三輪を追い掛けるのを諦め、母さんを探そうとすると背後から出水と米屋が首に腕をかける。

「あけましておめでとう!今年もよろしくお願いします……と、三輪にも伝えておいてくれ」

「ん?秀次に会ったのか?」

「会ったけど逃げられた」

「あ〜……」

出水、言いづらそうならばなにも言わなくて良いぞ。

「なあ、三雲……お前の弟のメガネボーイの友達が近界民なの知ってるだろう?」

「知ってるぞ」

三輪に会った事を教えるどうすべきかと悩んでいた出水だったが米屋が爆弾を落としました。

米屋はなんの前触れも前振りも心理戦もせずにストリートに聞いてきたので私もストリートに答え、出水は慌ててきつきまで熊谷と一緒に居た場所に連れてくる。

「なんだ？ボーダーに連れて行って記憶抹消するのか？それなら出る場所は出るぞ」「ちげえよ!!……そうじゃなくて、だな……」

三輪についてなにかを言いたそうだが言えない出水。米屋の方にチラツと視線を向けると代わりに教えてくれた。

「秀次の奴、ワケわからなくなってるんだよ。」

ボーダー嫌いのお前は近界民が嫌いだと思ってたし、上層部は近界民を入れるし、一部を除いてもその事について抗議とかそういうのしないしき」

私はボーダーが嫌いである。理由は千佳を見つけれなかったり、別役の様に補習常連組を生み出したりしているのが主な理由でボーダーの本部付近が色々と遊んでる場所だったとかボーダーが本部を建てたり、誘導装置を使うからと警戒区域を作ったりして街の一部を閉鎖したり土地開発を中断したので急遽仕事を無くし一家離散したりしたのを見たので余り好きになれない。けど、ボーダーが頑張ってるのは知っている。そんな私のボーダー嫌いも大元を辿れば近界民がこちらの世界を襲って来なければよかつたと三輪は思っている。確かに近界民が襲って来なければ本部を建てる必要も無いし、警戒区域も出来なかつた。

「あん時、秀次はそんな筈がないってメガネボーイを白だと思ってた。

けど、蓋を開けてみればメガネボーイは真つ黒で近界民と一緒にいる。それどころか近界民はボーダーに入った。

近界民が憎い奴等も多く所属していて一番偉い人も排除する考えなのに、近界民を入れてその上、お前は知ってるんじゃないかとなつて、最近じゃ防衛任務でもまともに動けないんだよ」

「割と大変な事になつているのか」

「他人事じゃねえよ、バカ」

「まあ、そうだな……正直に近界民だと知っていると云つた方がいいのか？」

この場合の対応がどうすれば良いのかが分からない。

三輪に正直に近界民だという事を知っていると伝えても睨まれるだけで終わる。大嫌いな玉狛の面々と同じ感じの扱いになるぐらいで終わるのがオチだ。

それはそれこれはこれと割り切っている事を伝えたとしてもお前は近界民の恐ろしさを知らないから、なにも失っていないからそんな事が言えるとキレられるだけだ。

「おれに言われてもな……それこそ、四年半前に家族を失くしても前に進もうとしてる人を紹介するぐらいいしないと。そんな人、多分探しても居ないだろうけど」

すみません、その人物に物凄く心当たりがあります。

良かれと思つて一つの未来を回避させたのだが、それが悪手だったと今頃になつて気付いてしまふ。

「三輪をどうにかしないと割と大変な事になる。修羅の道を歩みそうだ」

「修羅の道？」

もし三輪の意識を今のままにしておいたら、近界民だから悪とかそういう感じの考えを持つたままだとまずい。

今度の大規模な侵攻、それとガロプラの強襲。他にもこれから先あるであろうトリガーを使う近界民の襲来と色々とやって来るのだが、その考えを持ったままだと先ず間違ひなく殺す。トリオン体をぶつた切つた後の生身の肉体をバツサリと斬る。

「三輪、と言うよりはボーダーにいる近界民を恨んでる奴等全員に言えることだが怒りの矛先が見えないままだと大変な事になる。

普段、この世界を襲つてくる奴等も悪いが最も悪いのが何処かと聞かれれば、先ず間違ひなく四年半前に襲つて来た近界民だ。そいつを斬らずに、そいつとは別の奴を斬れば今以上に三輪の憎悪は増えるだけだなにも変わらない」

もしなにかの拍子で四年半前とは別の近界民の親玉的なのをぶつた斬つて殺せば最後、復讐に成功したと少しだけ思つて、まだまだ殺さないといけないと修羅の道を歩む。

その道が間違ひかと言われれば間違ひとは言えない。少なくとも普段から襲つてき

ている奴等は排除しなければならぬ考えは間違いないのだから。話し合いの場を設けることをすつ飛ばしていきなりの武力行使をしてくる奴等を善とは言えない。そういう奴等が争つて争つて争つた末に出した結果がこの世界の今なんだから更に言えない。結局のところ生存の為の争いなのでなにが悪いかなにが正しいかなんて分からない。

三輪にかける言葉を考えてみるもの今の私にはそんなものはないと頭を悩ませる。

「あいつは、三雲は……」

一方、私から逃げた三輪は私のことを色々と考えており、頭を悩ませている。

私の口からは近界民は嫌いだと消さなければならぬとは聞いたことはない。だが、ボーダーは嫌いだとハッキリと聞いている。それならボーダーが出来る原因となつた近界民は憎いはず、そう思っていたが違った。

何時の間にか入隊していた弟が近界民との繋がりがあつた。それは違うと友人の弟を守ろうとしたが上からの命令で渋々と動いた。友人からいい加減にしろとキレられた。回りくどい事をせずにハッキリとすれば良いとハッキリとした結果、黒だった。

「よお、秀次！あけましておめでどう！ぼんち揚げ、食うかい？」

「……なんの用だ？」

何故、なんでそんな事をと頭を悩ませていると迅が声をかける。

頭を悩ませているタイミングで近界民と仲良くしようぜと考える玉狛支部の人間と出会ったために苛立つ三輪。

「そう嫌そうな顔をするな。今日はお前にお年玉を持って来たんだ」

「いらん!!」

嫌悪感剥き出しの三輪に笑顔で接する迅はお年玉を入れたポチ袋を握らせる。

修達に渡したぼんち揚げでなくポチ袋。お金を入れているのだろうと捨てようとするのだが手を止める。中に入っているのがお金でない事に気付く。

折り畳んだお金ではない。分厚く固く細長い金属の棒の様な物、三輪はそれに心当たりがあり中身を取り出すと目を見開く。

「風刃、だと……」

中に入っていたのはボーダーに2つしかない黒トリガーの一つで、迅の師匠である最上宗一の命で出来た風刃だった。

「なんのつもりだ!」

風刃は弧月と似た見た目のブレードで斬撃を伝播させる能力を持っており、弧月以上の切れ味とスコープオン以上の軽さを持っているボーダーの誇る黒トリガー。

以前までは迅が使っていたが遊真の入隊にと城戸司令に差し出したもので、今は誰かの物でもなんでもない。勿論、三輪のものでもなく、三輪は風刃の適合者であるだけだ。

数多くいる風刃の適合者、中には銃手の弓場や射手の加古の様に剣を握って戦わない人もいるがそれでも剣を握って戦闘する物は多くいる。

例えばボーダー随一の旋空使い生駒さん。三輪と一対一で剣で勝負すれば三輪は一矢報いる事ぐらいは可能だが十中八九負ける剣の達人だ。だが、生駒は風刃と合わない。生駒の売りはボーダー随一の旋空であり旋空が出来ない風刃とはある意味相性が悪い。

例えばボーダーで唯一レイガストで10000ポイントを越える一条雪丸。彼もまた風刃とは相性が悪い。使っている武器が形状の似ている弧月でなくレイガストでありレイガストのオプションであるスラスターを改造していて風刃を使った戦闘とは大きく異なる戦闘をしている。

単純に風刃の性能と相性が悪い人間は居るものの、それ以外にも三輪よりも強くて風刃を使いこなせそうな適合者はいる。

例えば風間さん。目の前にいる迅を除けば風刃の適合者で最も強い隊員で、戦闘経験も遠征経験も豊富。使っている武器がスコープピオンから弧月に近い形状の風刃になっても使いこなせる技量を持つ。

例えば村上さん。弧月で10000ポイントを越える攻撃手4位の確かな実力を持つ。その上、強化睡眠記憶というサイドエフェクトを有しており、風刃の使い方を適合

者の中でも最も早く覚えて生かすことが出来る。

三輪は強い。嘗てA級1位の部隊に所属していたこともあるほどで、その実力は確かだ。しかし上には上がいる。風刃の適合者ではあるが、自身よりも風刃を使いこなせる人や向いている人が要るのを知っている。

「くだらない同情か！俺はお前の施しは受けない!!」

姉を殺され、同じ思想を持っている上層部は近界民の入隊を認め、友人には裏切られた。

最近色々と動揺していて不調していることについては自覚しており、それを見かねての風刃かと迅に風刃を投げつける。

「違う違う。風刃の次の使用者はお前になりそうだから渡しに来たんだ」

「どういふことだ!？」

実力的にも派閥的にも風間さんが持つのが相応しい。

「最初は風間さんが次の風刃の使用者になってなったけど、風間さんは断った。

今の部隊でやった方が良いし自分の身に余るものだからって。んで、メディアの仕事があるからと嵐山と木虎は無し。雪丸、片桐、佐伯は県外のスカウトに行つてて此処には居ない。加古さんは剣を使えなくはないけど本職は弾だから後回し。弓場も同じで後回し。んで、お前に回つてきた」

「……村上さんや生駒さんがいるだろう」

使用を辞退、適合しても向いていないので後回しに現在本人が三門市不在と色々な理由でたらい回しされる風刃。

自分よりも強い適合者を上げるのだが、その二人は首を縦に振ることはない。来馬の元から離れるのは絶対に嫌だ、隊長をやめたくないと辞退する。

「あの二人は即座に断る、オレのサイドエフエクトがそう言っている。今いる人だと残りはお前になるからオレが届けに来たわけだ」

消去法で三輪が選ばれた。そこには迅の暗躍や裏工作は一切ない。

三門市には居ない雪丸達、風間さんが辞退、加古さん達攻撃手以外のポジは後回し。どれもこれも一応の納得は行く話で突き返された風刃を澁々と三輪は受け取る。

「……なにを企んでいる?」

だが、それで終わるほど三輪は迅という男を信じていない。

今の話は納得が行く。自分に風刃が回ってもおかしくはないのだが、わざわざそれを届けに来る必要は何処にもない。もうすぐ大規模な侵攻があるとされていて時間が無いとはいえ、迅がそれを届けに来るのはおかしい。司令が適合者一同を呼び出せば良いだけの話である。

「ん〜……ぶっちゃけると企めなくなってるんだよな」

「なに?」

「その内起きる大規模な侵攻の被害を出来るだけ最小限で食い止めないといけない。」

その為にお前以外にもこれから裏で色々とするけど、一番重要なのがおかしくて見えない」

「?」

言っていることがよく分からない三輪。

迅のことは嫌いだが、迅の強さや恐ろしさはハッキリと分かっており、未来視のサイドエフェクトの凄まじさも知っている。それなのに迅は少しだけ焦っている素振りを見せている。

「メガネくんと今度入る玉狛の新人の二人、その三人が侵攻の鍵を握る筈なんだけど、どうもオレのサイドエフェクトがここ最近ハズレまくってて読み逃しが多い。」

ついさっきも加古さんに会ったんだけど年末に会った時と未来が大きく変わってさ……幸い、つて言うのもただだけどメガネくん達が相手に狙われたりして危険な目に遭うのだけは確かなのが分かってるから、今の時点で手が開いたフリーなお前に助けてって頼みに来たんだ」

「ふざけるな! お前が引き入れたのなら、お前が守れ! 何故玉狛の、それも近界民に手を貸す必要がある!」

「オレもそうしたいんだけど、結構な確率でその時に居ないんだ。

未来は決まっていけないし無限にあるのは分かっているけど、その侵攻だけはどうも不安定過ぎる」

言うまでもないが、原因は私である。

迅は私の顔を知らない。名前を知ってるぐらいのレベルであり交友もなにもない。そのせいか私がサイドエフェクトで見える未来に入っておらずにおかしなことになってしまっている。

「お前はメガネくん達に力を貸す未来がやって来るよ……多分」

余りにも不安定な未来で、迅はそれを確信することが出来なかった。

分かっているのは修達が危険な目に遭い、大怪我どころか死んだり拐われたりする未来が存在していることぐらい。

「そんな未来は、こなっ……!?!」

三輪は利用されるのは御免だと再び風刃を突き返そうとするのだが迅の手は震えていた。

大事な後輩達が危険な目に遭うことだけは分かっている。ならば、最初から遭わない様にすれば良いだけだ。

目の前にいる男ならばそれは容易い事だがそれを一切しようとしな。ボーダーの

隊員になったからには尽くせ！という軍隊の鬼教官の様な考えを持っているからではない。それしかないからだ。

その気になれば修達が危険な目に遭わないようにすることぐらいは迅にとつては朝飯前だ。手っ取り早い方法として侵攻があるかもしれない期間、三門市から追い出せば良い。それだけで危険な目に遭わないようになる。

だが、そういったことを一切していない。裏でこそこそと暗躍をしようとしている。迅。

そうしなければ、修達が犠牲にならなければより一層大きな被害が生まれる未来を視ている事に三輪は気付く。

10の内の1を切り捨て9を選ぶ、9を切り捨て1を選ぶ。

迅にはどちらの様々な結果が見えている。

「頼んだぞ、秀次」

迅はそう言うかと消えていった。

「くそ……くそお！」

居なくなつた迅を思い出し、三輪は叫ぶ。

大切な者を失つた苦しみを三輪は知っている。だが、これから先、大切な者が苦しみ死んでしまうのを視ることしか出来ない苦しみを知らない。迅はそれを今現在味わつ

ている。

手を伸ばせば救うことが出来る。だが、救えば最後大勢の誰かが犠牲になる。それを迅はハッキリと見えており、大切な後輩と大勢の誰かを天秤に架けて、大勢の誰かを選んだ。

朝、テレビをつけて名前を知ってるし聞いたこともあるが行ったことのない遠い土地で事件や事故が起きて、誰かが死んだとニュースが報じられれば被害者可哀想だなど加害者馬鹿野郎だなど大抵の視聴者は他人事である。視聴者にとっては他人事、それは仕方ないと言えば仕方ない。自分が行ったこともない土地で馬鹿が馬鹿をやらかしたので全く無関係なのだから。だが、当事者達にとっては被害者や加害者と親しい関係の人達ほど他人事ではならなくなる。

被害者と親しい人達は悲しみの涙を流し、加害者を憎む。加害者に親しい人達は加害者に失望し、加害者を怒る。全く無関係で極々一部の情報だけを知った視聴者は他人事である。

つまるところ、なにが良かったかといえば迅にとって見知らぬ一般の誰かよりも修や千佳、遊真の方が大事な存在だ。

三人が大成功を納めれば見知らぬ誰かが大成功をした時よりも喜ぶし、三人が傷つけば見知らぬ誰かが傷ついた時よりも悲しみ怒る。

迅にとって修達が大事な存在だと少しの会話や風刃を城戸派に差し出したのを見れば分かる。

それでも、知らない誰かの為に修達を犠牲にする道を選んだ。

「ふざけるな……ふざけるな、迅……」

大切な人を失う（かもしれない）道を選んだ迅に今にでも朽ち果てそうな声を出す。回避できるのに手を伸ばせば届くのに選んではいけないと迅は我慢をしている。

姉の命を奪った近界民を憎んでいる。自身と似たような境遇の人が居て近界民を憎んでいる人達は多く居る。近界民と仲良くしようとする玉狛は愚かだと思っている。

持っている憎悪は本物なのに、誰だつて憎んでいるのに、迅が我慢をしているのを見て、迅が自分よりも辛い道を自らの意思で選んでいるのを見て、比較をしてしまう。まるで自分が癩癩を起こしている子供だと思ってしまう。どうして風刃を返すことが出来なかつたのだと手が震えていき段々と弱っていく。

「あの、大丈夫ですか？」

そんな三輪に声をかける修。

「三雲、修っ!!」

近界民と親しくしている玉狛派の人間!と修に声をかけられた事により弱っていく自分を制御する。

胸の中がモヤモヤしてどうすれば良いのかが分からないがこいつには頼るつもりは無いと意識をしつかりと保つ。

「え……貴方は、確か」

「オサム、どうかしたか？」

「っ、ねい、ばあ……」

「む……」

そんな修とセットでやって来た遊真。

三輪は城戸司令から事前に話を聞いており、遊真も私から顔写真を見ており互いに顔

だけは知っている関係で三輪はボーダーのトップが認めた事だからと今にでもぶつけ
そんな様々な感情を抑える。

「あのさ、おれのことを知ってるんだろ？ だったらさ、手伝おうか？」

「手伝、う？」

「この街の人達が憎んでる近界民。」

おれの持つてる情報とかレプリカ能力があれば、何処の国が何時襲ってきたとか何
時ならば襲えたとかがある程度は割り出すことが出来ると思うよ」

「……あ……」

「っ、大丈夫ですか!!」

城戸派の多くは近界民を憎んでいる人達で構成されており、その怒りや憎しみは当然
だと思っている遊真。

四年半前に襲ってきた近界民は何処なのか割り当てようかと聞いたのだが、それを聞
いた為に三輪の糸は切れて意識を失った

第49話

「……………は？」

目を覚ますと神社とは全く別の所において意識が混乱をしている三輪。

「秀次、大丈夫か！」

「陽介……………そうか、俺は倒れて……………」

「ここは本部の医務室だ。」

救急車を呼ぼうにも時間が掛かるって言ってたし、掛かり付けの病院も遠いからこつちに運んだ」

周りを見回し、見知った顔が自分が寝ているベッドの隣にいるのを見てながあつたかを思い出し、倒れている間にながあつてどうして此処に居るのが分かる。

「あん時は驚いたぞ。」

メガネボーイが全然秀次を背負えなくて白チビの近界民が持ち上げて、何処か寝転べる所はないか必死に探しててよ。三雲がその事を気付いて駆け付けて……………」

「三雲っ!!」

「……………ちよつとなんか飲み物買ってくるわ」

「米屋、三輪は起きたか？ポカリ買ってきたけど」

「起きてない。起きてないから来るんじゃないねえ」

「陽介……」

普段は読まないが気を使ったのか空気を読んでくれて退室してくれる米屋。

飲み物を買ってきた出水の声が聞こえてしまい心配を掛けたと三輪は自分の気持ちを整理しようと風刃と自身のトリガーを見る。

「俺は……俺はっ……」

今のボーダーが出来て直ぐに三輪は入隊した。

その為に色々と知っている。ボーダーが今まで何度も何度も近界民の世界に遠征していることも知っている。そして何処の国が四年半前に襲撃してきたかは知らない。

何度も遠征しているものの全くといって分かっておらず、自分が最も憎まなければいけないのだが何処の国の誰だか分からない。

そんな中で何処の国が襲ってきたのかを割り出そうとしてくれるのは救いの手だが、それをしようとしているのが近界民なので受け取りたくない。

「失礼します」

「お前は……」

「スウー……お互いに知っていますますが向き合うのははじめてですよ。はじめまして、

三雲修です。何時も兄がお世話になっていきます」

どうすべきかと答えが出ないそんな時、修がやって来た。

どちらも情報だけ知っている間柄で面と向かい合って話すのははじめてな二人の間にはなんとも言えない緊張感が生まれており、三輪はどうすれば良いのかが分からない。迅と接する時と同じ対応をしない。

「申し訳ありませんでした」

先に動いたのは修だった。

「空閑は、三輪先輩が四年半前にどんな目に遭ったのかは詳しくは知りませんが近界民を憎んでいる事は知っていました。純粋な善意で、四年半前に襲ってきた国を特定しようとしたのにそのせいで三輪先輩を傷付ける事になって本当に申し訳」

「やめろ!!それ以上は言うな!!」

目の前にいる男に、謝られる理由なんて何処にもない。

我が事のように申し訳ないと頭を下げて謝る修の姿勢に益々と三輪は混乱をしていく。

「三輪先輩……」

「くそっ……どうしろと、言うんだ……俺が、姉さんの仇を取るのとは間違いだつて言うのか!」

近界民と仲良くする奴。近界民は排除しなければならない思想を持っていたが近界

民の入隊を認めたトップ。入隊してくる近界民。危険な目に遭うのを見過ごす男。

ボーダーは近界民と仲良くしようとする組織か？ボーダーは近界民の侵略からこの世界を守る組織か？ボーダーは近界民を滅ぼす組織か？、三輪はなにも分からずに叫ぶ。

「……おい」

「あ、はい」

「三雲は……お前の兄は知っているのか？」

腹の底から叫んだのか、少しだけ気持ちが落ち着いた。

自分の憎しみと現実とどうしたいのか向き合う為に修に貴虎の事を問い掛けるのだが、答えるのを躊躇う修。

「知ってるよ。オサムのお兄さんは、おれのこと」

「空閑!？」

そんな修に代わり、外で聞き耳を立てていた遊真が答える。

「三輪先輩、その」

「大方、言うなと口止めされていたんだろ」

修が説明をしようとする前に大体を察した。今まで誰かがその事について聞いてこなかったが言うなと釘は刺されている。

「あの人は、おれの事を歓迎するって言ってくれた。

向こうの世界からやって来た人間であつて近界民じゃないって」

「……」

遊真の口から語られる貴虎を聞いて、不思議と動揺しない三輪。

そうだと思える要素が余りにも多く更には誰かに教えて貰ったわけでもないのに、近界民の詳しい事情を当てた。知っていたとしてもおかしくはない。

その事について上に伝えれば記憶を弄くるだろうが、近界民の遊真に出会う前に自力で答えを導き出したので今と大差変わらないだろうと報告する気が起きない。

「失礼」

「城戸司令……」

「君が倒れたと聞いてな」

やつと気持ちが悪く落ち着いたと思つた途端にやつて来た城戸司令。

さつきの話は聞かれていなくなつた様で見舞い品であるゼリーを置いて椅子に座る。

「……すまなかつた」

緊迫した空気を壊した城戸司令は頭を下げ、三輪に謝つた。

「……それは、なにについての謝罪なんですか？」

分かつている。それはなんの謝罪なのか、なんの為に頭を下げるのかを。

「ボーダーには、近界民に対して恨みを持つ者が多くいる。君もまたその内の1人。

そして私もまたその内の1人であり君の憎しみが痛い程に分かる……そう思い込んでいた」

旧ボーダーの方針とは異なる方針を取り、大きくしていった。

根付、唐沢、鬼怒田の三人をスカウトし今まで出来なかつた事をした。失わない為に守るためにとやっていた。復讐目的で入っていることを知っている。その思いは憎しみは本物である。それなのに近界民を入隊させた。

組織として大人としてそれはそれ、これはこれと割り切つたが三輪に、近界民に恨みを抱いている人物にいきなりそうしろと言うのは余りにも酷である。

「君の……君達の気持ちを考えてしなかつた事を謝りたい」

これが三輪でなく香取でも同じ事になつていたかもしれない。

近界民に恨みを持つ人達を考慮しなかつた事を、悩ませ苦しませたことを三輪に謝る。

「謝らないでください」

「……そうか」

「謝るぐらいなら、俺にチャンスをご覧ください」

「チャンス？」

「俺に、そいつと戦わせてください」
「なっ!?!」

三輪は城戸司令の謝罪を受け取らなかつた。代わりに遊真と戦う権利を求めた。

如何なる理由があろうともボーダーではランク戦以外の私闘を禁じられている。ボーダーに入った遊真とボーダー隊員の三輪にもそれは適用されているので戦うことは許されない。だから、三輪はその権利を求めた。

「一度で良いんです。戦わせてください。もし俺に対して本当に申し訳ないと思ってるのなら、俺に近界民と戦う許可をください」

「……その一度で、つくのかね？」

「分かりません。」

でも、此処で戦わないとこのまま永遠とこのままなのは確かです」

自分の中の気持ちの整理をつけるチャンスを求めた。

「……彼はそう言っている。君は応じてくれるか？」

「良いけど……こつちのトリガーを使えば負けるよ」

「いや、君の持つトリガーで戦ってくれ。一切の手加減をせずにだ」

「……分かったよ」

「少し、待ちたまえ。準備をしてくる」

たった一度のチャンスを与えるべく城戸司令は医務室を後にする。

「お前達も出ていけ」

それにつき追い出される遊真と修。

「どうして、空閑と三輪先輩が戦わないといけないんだ？」

『自分の中の落とし処を見つuckerためだ、オサム』

「落とし処を？」

『近界民に憎しみを持つ者達が怒りを向けなければならぬ相手は四年半前に襲った国だ。』

だが、それとは無関係なユーマに対して意識をしている。もしこれから先、何処かの国の近界民を斬ってしまえば最後、怒りの矛先を何処に向ければ良いか分からなくなり、止めれなくなる。例え復讐すべき相手を見つけて倒したとしても、そこから更には怒りをぶつけ続ける。近界民だから殺すといった風に成り変わる。そうすれば最後、襲った国よりも下等になってしまう』

「だから、空閑と？」

「オサム、なんでって分からないかもしれないけどそれはみわ先輩もだと思う。」

どうすれば良いのかが分からないから今の自分の全力をぶつける。そうしたらなにかが変わるって、自分が見ないといけないものが見えるようになるって気づいているん

だ」

だから、全力で叩きのめす。

遊真はこの世界で作られたトリガーじゃない。父親の命で生まれた能力をコピーする黒トリガーで戦うと普段のトリオン体でなく戦闘用のトリオン体へと換装した。

「これで良かった、のか？」

「いや、やっぱあの野郎、一発ぐらいはぶん殴った方がよかつたかもしんねえ」

立ち会うのは城戸司令のみとなり誰もみれないと三輪を見送った米屋と出水は自分なりの答えを出そうとしている姿を見て喜べば良いのかが分からずに、そもそもでそうなった原因の一人である貴虎にその内、なんらかの事をしてやろうと考えた。

『君にとつて戦いやすいフィールド、では君は納得しないだろう。警戒区域を再現した』
「ありがとうございます」

腹に見舞いのゼリーを詰め込み、気持ちを整えた三輪はトリガーを起動。

三輪にとつて有利なフィールドでなくランク戦で使うフィールドに、ボーダーが警戒区域としている弓手町付近を再現した場所に転送された。そうでなければ意味がない。お膳立てされたフィールドで勝つても意味はない

「……………つちか」

「備え付けのリーダーで遊真の位置を特定し、歩きだす三輪。」

「幸か不幸か、遊真がいた場所は本来ならばそこで戦う筈だった、迅のサイドエフェクトで戦う未来が見えた場所である弓手町の駅だった。」

「……俺はここに来るまでにバックワームを使わなかった。ふざけているのか?」

「ふざけてなんか居ないよ……ただ、おれは全力で叩きのめす。」

不意打ちとかでも倒せるけど、おれの全力は不意打ちじゃない。真正面からみわせ」

遊真の元に向かう道中、遊真はなにもしなかった。罾を仕掛けることも、遠距離からの狙撃もなにもしなかった。ただ真正面から三輪を倒すためにしなかった。そう言うおうとした途端、三輪は拳銃を構えてアステロイドを3発撃った。

「起きろ、近界民。お前が黒トリガーなのは既に分かっている……本気の殺し合いだ」

遊真を敵と捉えて弧月を抜いた三輪は敵意を向ける。

敵と話し合うつもりなど何処にもないと仰け反る遊真にアステロイドを更に3発撃ち込んだのだが、ガキンという音が鳴る。アステロイドが肉体を構成するトリオン体に当たってもそんな音はしない。

「ほうほう、そういう感じの弾があるのか」

『いや、これは少し違う。オサムの使う弾を銃弾にして撃っているだけで、ただのアステロイドだ』

ケロっと起き上がる遊真の目の前には盾と字が書かれた盾が展開されており、アステ

ロイドを防いでいた。

それを見て、特に驚かずに遊真の戦闘方法や黒トリガーについて考える三輪。遊真の持つトリガーは黒トリガーだと知ってはいるが、その能力は分からない。

風刃の様に武器らしい武器を持っていないが盾を作り出したとなれば、様々な能力を行使するものだと思ひ一步前へと踏み込み弧月を振る。

「フリストトリプル
強印三重！」

「っ！」

それに対して遊真は自身の力を強化する強の印を出し、弧月の側面を殴打。

レイガストほど頑丈ではないがスコープオンよりは脆くはない弧月の刃は一瞬にして砕け散り、持っていた三輪の左腕は明らかに折れていると思える方向に曲がるのだが、今の三輪の肉体はトリオン体。掠り傷程度ならば修復され、真つ二つにされたり何かの供給器官を破壊されたわけでもない三輪の腕は治ったのだが

「なんのつもりだ、近界民！」

遊真はその間、攻撃をしてこなかった。

腕が治るまでに少しの隙があった。太刀川なら二宮なら風間ならばその隙に自身を倒せる。遊真もその少しの隙で倒せるのにしなかつた事を苛立ち怒りを向ける。

「……言っただろう。あんたを全力で潰すって。」

ボーダーのトリガーには緊急脱出の機能がついてるから、普通に倒したとしても次があるで終わる。だから、その次を考えさせない様にする。それがおれの全力で潰すだ」三輪に残っているトリオン全てを強印に使い思いつきりぶん殴るだけで遊真は勝てるがそうしない。

ボーダーの中でもベテランの隊員でA級で確かな実力を持ち、自身のスタイルを完成させている三輪。今のところ使っているのはアステロイド（拳銃）と弧月のみで、技らしい技もなにも使っていない。まだまだ使っていない手は幾らでもある。

遊真はその使っていない手を全て使わせた上で、三輪を倒す。

今の三輪が出来ることを全て防ぎ、三輪の全てに打ち勝ち、完膚なきまでに打ちのめす。

負けた時、あの時ああすればこうすれば勝てたと言う考えを一切抱かせない。ああしてもこうしても勝てないと感じさせる。

「ふざけるなあああああ!!」

勝とうと思えば勝てるのに、倒そうと思えば倒せるのにそうしない遊真の行動は三輪の逆鱗に触れた。

何処まで自分を馬鹿にすれば良いのかと拳銃をスライドさせて5発の弾を撃ち、マガジンを抜いて別のマガジンへと変える三輪。

「怒ってて、いいっと、曲がる弾か！」

銃口から弾がどう飛んでくるか予測した遊真は盾印を展開するのだが、弾はシールドに当たるとはなかった。

三輪はスライドを引いた際に弾をアステロイドからバイパーへと切り替えており、遊真のシールドにぶつかることなく弾道が曲がり遊真に命中した。

「まだだー！」

油断をしてバイパーに命中したものの、アステロイドと比べれば威力の低いバイパー。

こんなもので倒せるわけがないとスライドを引いて銃の引き金を引くと、黒い弾が撃たれ、遊真に命中をすると遊真のトリオン体から六角形の重石が出現した。

「重くなる弾か……まずいな」

殺傷能力は無いものの、相手に何百キロの重石を付加する鉛弾。

遊真のトリガーの能力はまだイマイチだが戦闘スタイルはなんとなく分かってきた。勝負を決めにいくのはまだだが、鉛弾は効果はあり困っている。

「俺を馬鹿にした、お前の自業自得だ」

重石をつけている以上はグラスホッパーを使ったとしても素早くは動けない。

弧月の刃を作り出し斬りかかる三輪に遊真は鉛弾の重石を盾に使い、切り落として重

さを軽減しようとするのだが、切り落とした重石は極僅かで体は軽くはならない。

「……レプリカ」

『印は射ホルトアンカーと錨アンカーにしてある』

「みわ先輩、おれが悪かった……調子に乗ってすみません」

黒トリガーだったら迅以外の誰が来ても勝てる。そう思っていて、三輪1人ならば余裕の考えを改める遊真。

「後悔してももう遅い！」

遊真の戦法はもう見切った。

鉛弾で大きく動きの鈍った遊真ならば斬り殺せると踏み込み、弧月で攻撃しようとする

る三輪

「射印ホルト十錨アンカー印、クアドラ四重」

その前に遊真が仕掛けた。

射の文字を中心とした四重丸の右斜め下に六角形に囲まれた錨の文字。

「……いつは……」

黒トリガーの使っていない能力を使ったと判断し、思考を加速させる三輪は遊真が何をしようか僅かな情報を元に考えた。

今の遊真にスピードある戦いはできない。拳で殴るよりも足で蹴るよりも先に自身

の弧月が届く。強固なシールドを貼るのも手だが、シールドを出している時と出ている文字が違う。

動いて殴打する斬ることは不可能。盾とは違う文字を出している。出ている文字が漢字の射と錨に似ている。

「弾だ!!」

この場で出来る自身の対処法は弾だけだ。

三輪はシールドを展開して遊真が撃とうとする弾を防ごうとするのだが、防ぐことは出来なかった。

「っー」

遊真の射った黒い弾は三輪のシールドを透過。そのまま三輪にぶつかると三輪の体から鉛弾の重石がはえた。

「これは、俺のよりも」

突如として鉛弾の重石がつけられ驚き、重さに耐えきれずに倒れる三輪。

何故どうして近界民の黒トリガーが鉛弾をとおえるよりも先に自分の使っている鉛弾よりも重石が遥かに重い事に気付く。

「今更だけど、おれの黒トリガーについて教えるよ。おれの黒トリガーは能力をコピーすることが出来るんだ」

「…」

能力について説明を受け驚愕する三輪。コピーをすると言っているが、そんな生易しい者じゃない。

三輪が使っている鉛弾が1つ100キロの重石だとすれば遊真が使ったのは1つ200キロの重石。本来ならば重くなる重石の能力にトリオンを多く注いで弾速が落ちたり射程が短くなるのに弾速も三輪の鉛弾の弾よりも早く射程も遠かった。

黒トリガーが自身の使っているトリガーの性能を上げていた。

「くっそ……」

まだ動くことが出来る遊真に対し、身動きの取れない三輪。

気付けば遊真の黒トリガーに入っていたレプリカが遊真の重石を取り外しており、遊真は自分になにもさせないと両手を蹴りあげて拳銃と弧月を遥か遠くに飛ばす。

「強印四重」

姉の仇をと近界民を憎み、同年代の中でいち早くボーダーに入り戦い方を学び強くなり、部隊を率いるようになったのに、文字通り立ち上がれなくなる自分の不甲斐なさに苛立つ三輪。

そんな三輪にとどめの一撃だと遊真は三輪の胴体に強化した拳を叩き込み大破させる。

『トリオン供給器官、破損』

「……」

胴体の殆どが吹き飛び、まともに銃も剣も握れない体となる三輪。

前までならばそれでも睨み殺そうとするのだが、そんな気が起きなかった。

頭の中に一瞬だけ米屋や奈良坂、古寺の自分の隊員が浮かぶ。四人でなら、オペレーターの見さんも一緒なら勝てたのかと考えるが、そうじゃないとなる。東と加古と二宮の顔が浮かぶがそれも違うとなる。

なにを考えているんだと三輪は慌てるが段々となにを考えてきているのかが分かってきた。目の前にいるのは大嫌いな近界民だ……だが、四年半前に姉の命を奪った仇じゃない。近界民が憎くて仕方ない。これから先、仲良くなるなんてことは不可能だ。

だが、目の前に居るのは怒りを向ける相手ではない。本当に向けなければならぬ相手がいる。自分の中で落とし処を段々と分かかっていく三輪。

そいつを倒すことが出来るのか？

もし四年半前に襲ってきた国を特定すれば奈良坂も古寺も米屋も……近界民に恨みを持つ者達は協力をする。

友好な関係になりましたと色々と好条件を提示して来ても突っぱねて斬る。だが、そいつらと共に戦って勝てるのだろうか？黒トリガーを使う自分よりも歳下の子供に舐められて、本気を出させたら負けてしまった。

黒トリガーのスゴさは知っている。だからと言ってそれで負けを認めてしまうのは別だ。今ここで、目の前にいる黒トリガーを使う近界民1人を斬ることさえ出来なければ、姉の仇を取るなんて夢のまた夢だ。

「トリガー、オフ」

「!？」

後は緊急脱出をするだけで終わりだ……だが、まだその場に自分はいる。

ボーダーのトリガーで一番優れている機能、それは緊急脱出。その機能があるから負けても絶対に帰還することが出来る。緊急脱出があるからボーダーの隊員は安心して戦える……だが、三輪はトリガーを解除し生身の肉体に戻った。

「明日は出来ない！今欲しいのは、お前を倒す一手だ！」

今ここで勝たなければ、本当の明日なんてやって来ない。何時までも明日^前を見ることが出来ない。

「風刃、起動!!」

三輪は明日を掴むべく風刃を起動した。

第50話（番外編）

某月某日

「どうしたものか……」

ボーダーのメディア対策室に緊迫した空気が流れていた。

近界民の国の中でも特に大きな国、アフトクラトルからの大規模侵攻の被害を最小限に防ぎ記者会見であんな事があって以降、ボーダーの株は上がり続けている。

印象操作をしなくてもボーダーは良い組織だと見られ、スポンサーになりたい企業は前年度と比べて5倍にも増えて、更には個人で出資しようとする者（メガネ（兄））が出たりと良いことづくめだ。

まあ、その分厄介な人物（メガネの母）に目を付けられたり、ボーダーの管轄外のトリガーを持っている人物がいて取り上げる事が出来なかつたりと色々とあつたが結果的にはプラスである。

「このままでは嵐山隊が過労死してしまう」

そんなボーダーの株は上がりまくりな一方、困ったこともある。

1月5月9月の年三回だったボーダーの入隊日が月一回へと切り替わり、入隊式なり

なんなりとやっている嵐山隊は大忙し。メディアへの出演依頼も増えてきており、色々と頑張ってみたものの限界が来ており、このままだとみのさんとタモさんと嵐を足した感じの忙しさになってしまふことを危惧する。

「東くん……いや、彼にばかり負担を抱えさせるのはよろしくない」

入隊式をやって新人に色々と説明をしたり色々と教えたりする役割を別のベテランの隊員にするかと考える。

何だかんだで面倒見の良い諏訪、そういうことならばと引き受けてくれる風間、ポーター隊員から絶大な信頼がある東と色々と居るのだが負担を与えるだけ。特に東は今の時点で狙撃手達に色々と教えてたりするのに、新人を育成してたりするのに更に新入隊者の指導をさせるわけにはいかない。

まあ、そもそもで入隊式の担当云々以前に新しく入った人達に皆さんには今から殺し合いをして貰いますと殺し合いをさせて、その中でも優秀な者を正隊員にすると言う蠱毒形式のやり方であり知りたいことがあれば自分で調べろと言う放任主義にも程があり、マニュアルの一つも存在していない。

色々と理論を組み立てたり戦術について知っていたりする人はポーターに多く居るものの、訪ねられれば教えるというぐらいだ。

その事について知っているメガネ（兄）はポーターへの嫌がらせとして新人にも分か

りやすく教えれる教科書の様なものを勝手に作っている。

「茶野隊はどうですか？」

何処そのジャンプの編集者にそっくりな服部 ジャンルバティスト 哲は第二の嵐山隊枠としている茶野隊を出すのが首を横に振る。

実力的にもメディア慣れの意味でも茶野隊はまだまだボーダーの顔になることは出来ない。

「太刀川、那須、三雲、メディアによく知られている人達を今以上に出すのは？」

ならば、既に知名度のある隊員を出せばとなるのだがそれも渋る。

太刀川は言うまでもなく馬鹿だ。秘密をバラすと言ったことはないが馬鹿だ。那須はメディア受けも良く賢いが体が弱い。修は賢いしメディア受けもそれなりに良いのだが、爆弾発言が恐ろしい。

出ればそれ相応の期待はあるだろうが、それでも出して良いのかと悩んでしまう。

「じゃあ、いつそのことこういうのはどうですか？」

服部ジャンルバティスト哲は面白い案を浮かべた。

「あれ、メガネくんも呼び出されたの？」

「出水先輩？」

その二日後、修達玉狛第二（カナダ人と宇佐美以外）は急遽本部へと呼び出された。

何故なんの為にと言う連絡を一切教えてもらわず取りあえずは指定の場所へと向かうと太刀川隊がいた。

「やあ、三雲くん!!君も呼び出されていたのか!」

「あ、はい。いったいなにがなにやら」

「それが俺達にも伝わってないんだよ」

「くれぐれも僕達太刀川隊の足を引つ張らないでくれたまえ!」

「お前が言うんじゃねえ!」

太刀川隊が参戦する任務に呼び出された修達。

ヒュースが居ないなら完全な玉狛第二にならずに足を引つ張るんじゃないかと思つていと

「修くん?」

「那須先輩も呼び出されたんですか?」

後ろから那須がやって来て声を掛けられる。

振り向けば那須隊の面々が立っており、珍しく引き籠つている小夜子もいた。

「なす隊にたちかわ隊……おれ達、なんで呼ばれたんだ?」

「なにか特別な防衛任務なのかな?」

遠征までは日がある。なら、防衛任務?と首を傾げるが良く分からない面子が揃つて

いる。

数名の射手に数名の攻撃手に狙撃手に銃手と統一性がなく、分からない面々。

「お前達、遅いぞ」

指定の場所へ着くとその場には風間隊（オペ不在）、嵐山隊（オペ不在）、東、二宮、加古、三輪とボーダーの中でもトップの面々がいた。

「風間さん、これなんの集まり？」

「お前も聞いてないのか？」

何故呼び出されたのか先に来ていた人達も伝わっていなかった。

これにはどうしてと疑問を持つ。なにかしらの防衛任務かとなるのだがこの人数でなれば事前に情報が伝えられる筈だ。それなのに東にすら伝わっていない。なにか裏があると同の頭には某実力派エリートが浮かんだ。

こういう時に裏でなにかしらの事をしているのは迅しか居ない。そう思っていると入ってきた入口のドアが開く。

「なんつつ、だ、この濃いメンツは!？」

入ってきたのは実力派エリートこと迅、ではなくボーダーの年長者の1人である諏訪だった。

本人も話を全く聞いていないのか驚いている。

「諏訪、日佐人と堤はどうした？」

「いや、オレだけ来いって根付さんが……そういや、暇な隊員はブースに来たら面白い事があるってさつき連絡があつたが……何処だ迅は？」

「迅くんは此処には来ませんよ」

隊を率いていたり、元部隊だつたりする中で唯一一人の諏訪を見て怪しむも真つ白。

何事なんだと諏訪は迅を探そうとするのだがこの場所には居ないと全員を呼び出した根付さんが登場する。

「根付さん、これはいったいなんの集まりなんでしょうか？」

「なに、ちよつとした催し物をね」

何事かと代表で嵐山が聞くとニヤリと笑う根付さん。指パッチンをすると周りが光り出す。

その光りはトリガーの光。修達が今いる場所は市街地なんかを再現するトリガーが設置されている部屋で、最初は驚くもののトリガーでフィールドを作っているんだと理解し、トリガーを起動させトリオン体へと換装。

なにが来ると全員待ち構え、フィールドがセットされるのを待つのだが何時もランク戦で使っている市街地とは大きく異なるフィールドが……

「いや、格付けチェックじゃねえか!!」

某格付けチエツクのセットが用意された。

年始の特番とかで見たことがあり思わずツツコミを入れてしまう諏訪にナイスとサムズアツプをする根付。

「根付さん、いったいこれはなんの冗談なんだ？」

「冗談ではないよ、太刀川くん。私は本気なんだ」

今からやることを察して呆れる太刀川。

面白そうだがあくまでも自分達はボーダー隊員。そういうことはちよつと何名かのボーダー隊員はやりたくない意思を見せるのだが根付さんの目は非常に真剣だった。

「この前の一件及び今までの行為のお陰でボーダーの株は大幅に上昇した。」

その為に入隊を希望する者は増加、スポンサーは増加、ボーダー隊員達に勉強を教える教養指導課の設立で新規の雇用枠も増加としている」

「それは良いことなのでは？」

企業目線と言えば黒字である。

ボーダーにとって不利益なこととは何一つもなく良いことだらけではと疑問を風間は投げ掛けるのだが、そんなに世の中は甘くはない。

「いや、なにも良いことだけではないのだよ。風間くん。」

それ以外にもメディアへの、特にテレビへの出演依頼も増えてきて……このまま

では嵐山隊が良くて過労死する恐れがある!!」

「うっそお!! 確かに、最近、仕事が多いなって増えたなって感じるけどそんなになの!!」
「残念ながらこのままではそうなってしまふのだよ」

増えて増えて増えまくる仕事に部署に隊員とそろそろ嵐山隊や東さんで捌けなくなるボーダー。

組織が大きくなるとそんなもんであり、根本とか中間が腐っていきその中間がトップの地位になる頃には汚職にまみれているとか言っちゃダメだからな。

このままでは過労死とか休みなしとかになり、ただでさえ労働基準法に引つ掛かるブラック企業も真つ青な組織になってしまふ……メガネ（兄）からすれば元からであるが。「そこでまずは仕事の振り分けをしようと思つて、先ずはメディアへの露出をする隊員を見繕う事にしたわけだ」

「成る程、そこで不様な醜態を世間に晒さない為に真の一流ボーダー隊員を今ここで決めると言うわけですか」

「いや、普通にボーダー隊員出演しないかのオフアアがあつたから格付けチェックを事前に行しようと思つただけだよ?」

「ぶっ!」

大体わかつたと察して語つたが語るに落ちる二宮。

決して真の一流ボーダー隊員を見繕うとかそんなのではない。単純に出演しませんかのオファーがあった為であり、そんなのではない。語るに落ちた二宮を加古はお腹を抑えて手で口を隠し爆笑をし、空気が重くなる。

「つまり、ボーダーの誰が格付けチェックに出るかの予選会をすると言うことなんでしょうか？」

「平たく言えばそうなる。

だが、格付けチェックだけでなくバラエティーやメディア方面への出演を多く依頼する事になる……もし、嫌ならば先に断つても構わないよ。特に那須くんは体調の事もあ

る」

ざっくりと呼び出しされた理由を語り、大体理解する一同。

ボーダーの顔こと嵐山隊、嘗てのA級一位、現在のA級一位、トリガーでの医療の実験に付き合う那須率いる那須隊、記者会見でやらかした修率いる玉狛第二、メディア受け良さそうな風間隊と一応、外に出しても問題なさそうな面々。

「あの、すみません……ギブです」

今でも物凄くキツイ小夜子はギブアップをした。

根付さんはそれを攻めることなく、撮影だけでも見ていきなと参加することを強要する事なく席を外す。

「くだらん。オレも降りる」

それに続き降りようとする二宮。

「あら、撮す価値なしになるから逃げるの？」

それに対し、やる気満々の加古。

降りようとする二宮を挑発するのだが、全くといって二宮は気にしない。

「そういうのは嵐山隊の」

「その嵐山隊が大変なのだからこうしてるのよ。」

新人の指導もまともに出来ないのだから、こういうところでフォローをしてあげないと」

「新人の指導ぐらい、出来る」

「いきなりトリオンにものを言わせて、トリガーを1つしかセットできないC級にフルアタックすることを指導と言うの？ いじめよ？」

「調子に乗らせない為だ。少なくとも、オレの時はそうだった」

「落ち着け、二人とも」

飛び火したのでフォローへと入る東さん。

なんとか宥め、格付けチェックにだけ出演するということで話を納めることに成功し、なんとか二宮の退席を防ぐ。

「ところでずつと気になっていたが、諏訪はなんの為に呼ばれたんだ？」

唯一メディア受けも余り良くなさそうな諏訪に風間は疑問を持つ。

「ああ、彼は司会進行役だよ」

根付の答えを聞いて納得する一同。

諏訪は浜田梓がかなり似合う。司会者の棒的なのを持つていても違和感がない。

「つたく、仕方ねえな……っーか、根付さん。これギャラ出るんすよね!!」

なんだかんだ言いながらも、司会者の立ち位置につく諏訪。

汚い金の話をする姿に大御所芸能人っぽい雰囲気醸し出しており、違和感が全くないって仕事をしない。

「勿論、通常の報酬に加えて更に特別報酬を入れる」

その辺に関してははっきりしている根付さん。

格付けチェックの司会進行役が所属している芸能事務所の様なギャラ割はしない。かなりちゃんとした報酬を支払い、その上で特別報酬を、モチベーションを上げる餌を用意している。

「特別報酬、ですか？」

「ええ……私の持てる権限や能力全てを使い、出たいテレビ番組に出演できるようにしてみせます」

ケーブルだろうがアベマだろうが生放送だろうか地方のマイナーな番組だろうが、好きなテレビ番組に出演できるようにする。それが特別報酬だ。

「じゃ、じゃあ天才志村動物■に出て！にやんこと触れ合うことが出来るんですか!？」
「勿論」

にやんこ好きの茜は動物番組

「板ザンとかのプロゲーマーと共演からの勝負も!」

「御本家の格付けチェックで良い成果を出せば」

ゲーマーの国近はeスポーツ番組

「……寺門ジモンの肉専門チャンネル」

二宮は肉番組。

「お前達、得意なスポーツはなんだ?」

「えー、炎の体育会系TVですか?僕、それよりも」

風間隊は炎の体育会系TVに（菊地原は出たくない）

「えつと、えつと……」

特になにか出たい番組が浮かばない三雲隊!!

「馬鹿ね、三雲くん。」

そういう時は手強いF1層から数字を取ることの出来るゴールドデンを言えば良いの

……私はVS嵐が良いです」

欲望が漏れまくる木虎。

根付の言った特別報酬により、やる気が高まっていくボーダー隊員達。これで今から行う格付けチェックを憂いなく行うことが出来るようになった。

「ところで、オサム。格付けチェックってなんだ？」

「出演者が高級品と安物を見分ける問題に挑戦し、正解数に応じて番組内独自のランク付けを行うテレビ番組だよ……大丈夫かな」

大御所の芸人が、毎年消えていく姿を見ている修。

嵐山隊の負担を少しでも軽減する事が出来るのならと頑張る意思はあるのだが、やりきれぬ自信が無い。こういう時、頼れる兄や迅が居てくれればとなるのだが、その二人はこの場には居ない。

「根付さーん」

筈、なのに迅の声がスタジオ（仮）に響く。

「割と直ぐ近くから声がしたよ」

何事かと一瞬だけ驚くも、菊地原の一言で迅の声だと分かった。

もしかしてと迅が居るのかと辺りを探すのだが何処にもいない。スタジオのセットに隠れてもおらず、何処だとなつてみると、格付けチェック中の芸人を見るモニターに

電源が入った。

『スイッチを入れる』

「兄さん!？」

電源のついたモニター画面に写ったのは兄である貴虎（アルフォートカウンター4）と迅（ぼんち揚げカウンター6）。

迅が声を出したことに呆れながらアルフォートを食べており、なんだかやたら豪勢な部屋に二人は待機していた。

『根付さん、まだ?』

「迅くん、もう少し待ってくれ。」

今、大体の説明を終えたからこれから綾辻&三上のオペレーターチームに二名、視聴してくれているオペレーターの誰を追加するか抽選を行うから」

「いや、ちよつと待て!!」

オペレーターが見当たらないと思っただらそんな事になってたのかとか、これ生放送なのかよとか、女子アナは居ないのかよとか、色々ツツコミを入れたい諏訪は叫んだ。

大きく叫びタバコの吸いすぎか、息が荒くなり呼吸を整えるのに時間を使う諏訪。

「なんでお前達が解答者側なんだよ！普通は結果発表側だろう」

格付けの帝王である男と一緒の部屋だとその時点で正解だと分かり安心するのでと

作られた格付けの帝王専用の部屋にいる迅と貴虎。

迅は未来を視ることが出来る。自分が食べたもののどっちが高級か普通なのか分からなくても、未来視のサイドエフェクトで結果だけを先取りにすれば良い。貴虎もサイドエフェクトを使えば、どちらの部屋が正解かどうか見分ける事が出来る。

「落ち着きたまえ、諏訪くん」

「いや、落ち着くもなにも無理あるだろうが!!」

「これは万が一の時の為なんだ……此処にいるボーダー隊員が、全員写す価値なしになった場合、それは本家の方に出演して写す価値無しになってしまう可能性もあるということなんだ。そうなれば最後、ボーダーの株を落としてしまう……彼等は万が一の為のとおきなのだよ」

真剣な目でボーダーの為だと語っているが、まごうことなきヤラセであった。

第51話

「大丈夫でしょうか？」

「それはどつちに言つてんだ？」

誰も戦いを観戦する事は出来ないと待つ修は心配をするのだが、どちらに言っているのかと米屋は問いかける。

自身と仲の良い近界民がボコボコにされているが心配なのか気持ちの整理をするべく怒りのままに暴れまわる三輪の心配なのかと。

「両方です、空閑も心配ですが三輪先輩も心配です」

「両方ね……」

どちらも心配する心は美しいが、今はそんな美しさは必要ではない。

いぎ遊真を近界民だから殺すとなった時、修は躊躇いなく遊真の肩を持つ。出会って間もなく少ししか会話していない米屋は修をお人好し過ぎるメガネボーイだと感じ、貴虎とは少し違ふと感じる。

「一回だけの勝負だつてんだから決着は直ぐにつく。」

ただまあ、それが本当の意味で決着がつくかどうかはおれにもわからない……あいつ

がボーダー隊員だったらな」

ただただ見守るだけでなにもすることが出来ない出水達。

諸悪の根元とは言わないが、三輪の不調の大きな要因である貴虎はこの場には居ない。ボーダー隊員ではないからいない。

本当ならば此処にいて一番悩んだりするのは貴虎だと出水は考える。

「なあ、メガネくん。あのちっこいのが近界民なのをアイツは知ってんだろ？」

自力で近界民がどうのこうのを当てたから記憶操作しても無駄なのは分かってるし、上に伝えて良いか？」

この場に居てはいけないうる居なければならぬ。

理論にはダメで感情論ではこの場にいらぬと思ひ、貴虎のことを通報してやろうかと修に許可を取ろうとする出水。

「余計な事はするな、出水」

「どうもどうも」

その時、汚れた私服姿の三輪と頭が爆発してパンチパーマになつてゐる遊真が戻つてきた。

一緒に歩きたくないのか、人2個分の距離を開けており修は遊真に、出水と米屋は三輪の側による。

「どうだったんだ？」

「ふむ……」

「秀次、大丈夫か？」

「問題はない……とは言い難い」

「服、汚れてるけどなにがあつたんだ？トリガー使つたんじやねえのか？」

「……負けた」

二人の口から語られた結果、それはどちらも同じだった。

「引き分けてることか？」

どちらも負けなければ引き分けた。

それなのにそう言わない三輪と遊真。米屋が引き分けかと訪ねれば違うと両者、首を横に振った。

「あれは俺の負けだ」

「いや、おれの負けだよ」

自身が負けたと変わった事で譲り合わない二人。

「風刃を使つてもお前を倒すことは出来なかつた」

風刃を起動し、奇襲を仕掛けるも完全に倒すことは出来ず遊真の腕を切り落とし、傷を残すのが限界で攻撃に特化しすぎており、その能力を迅以上に使いこなせるものはお

らずはじめて使った三輪は使いこなすことは出来なかった。

最後の最後に偶然に閃いた緊急脱出の直前にトリガーを解除しての風刃を起動という初見のみ通用する奇策はもう二度と使えない。これは勝ったことにはならない。

「ボーダーは一人じゃなくてチームで動くんだろ？」

対する遊真は序盤に調子に乗っており、最後の最後に三輪が緊急脱出前にトリガーを解除し風刃を起動させた奇襲で腕を持っていかれた。トリオンが空にはなっていないものの、三輪が遊真につけた傷は大きく米屋や奈良坂が居た場合は負けていた可能性が大きい。

何年も黒トリガーを使っている自分と攻撃に性能が片寄りすぎていて尚且つ今回、風刃を使うのがはじめての三輪。勝つのは言うまでもなく自分だろうが、辛勝でなく快勝でなければならぬ。

勝負には遊真が勝った。だが、これが試合ならば遊真の負けだ。

勝負に三輪は負けた。だが、これが部隊を率いての戦闘ならば三輪は勝っていた。

勝負に負けて試合に勝つという、試合に負けて勝負に勝つという何とも言えない結果で幕が引いてしまった。

「そこまでにして貰おうか」

どういったことなのか細かな詳細を聞こうとすると城戸司令が止めに入る。

「今回の一件は、特例中の特例だ」

如何なる理由があろうとも私闘は出来ない。しかし、今回は特例中の特例としてやらせた。

もしこの噂が広まればややこしくなったり自分も戦わせろと言う人（太刀川）も出てきそうこれ以上、この件に関して根掘り葉掘りすれば大事になる。

「分かりました」

「……君の中で、どうすれば良いのか決まったようだな」

根掘り葉掘り聞くなと言われてあっさり和三輪に手を引いた。

三輪は数日前と、いや、今までと比べて落ち着いた雰囲気になっており自分の中の迷いや怒りの矛先の向けかたを整理する事が出来た。

「俺は近界民と仲良くすることなんて一生出来ません」

近界民と仲良くすることなんて、一生出来ない。例えそれが友好的な近界民であろうともだ。

玉狛の考えとは一生相容れない。それが三輪の出した答えで

「俺は姉さんの仇を取るために四年半前に襲ってきたトリオン兵を送って来た国を滅ぼします」

割り切ることとは出来た。

三輪は遊真達とは仲良くするつもりは無いとバツサリと一線を敷いた。そしてそこから本当に見ないといなければならぬものを見ようとする決意をし、本当に倒さなければならぬ敵を意識する。

「城戸司令、その近界民は色々な情報を持っています。

ボーダーの持つている情報と合わせれば、四年半前に襲ってきた国を割り出すことが出来る筈です……だから、約束してください。どんな事であろうとも、その国には今回の、こいつの様な特例を一切作らないでください」

その国が和平しようとどれだけの好条件を出そうとも、その国の黒トリガーを献上しようとも滅ぼす。滅ぼすチャンスは貰わず自力で掴むつもりだ。城戸司令はこれから先、大人の判断や決断をする時が沢山やって来る。だが、それをその国にだけはしないでくれと願う。

「近界民は全て排除する。私の考えはただそれだけだ」

「……は、い」

ハッキリとした答えを言わなかったものの、それだけはしない意思を城戸司令は背中で見せて去っていった。

「で、どうする？今の内に、何処の国が襲ってきたのか割り出す？」

「今はその時じゃない。お前達も聞いている、いや、お前達が言い出したことだがもうす

ぐ大規模な侵攻がある。割り出すのはそれら全てが終わってからだ。遠征に行く権利すら無い今のままだと、絵に描いた餅だ」

「絵に描いた餅?……」

「実現することができないことだよ……」

三輪隊は遠征部隊に選ばれていない。何処の国か知って復讐の炎を燃やし続けても、無駄である。その期間、怒るのでなく刃で相手を斬れるように極限までに研ぎ澄ませる。

「陽介、出水、すまなかつたな」

これからの目標や生き方が見えたが、それまでに迷惑をかけた二人に謝る三輪。

二人は三輪に未来が見えたことが何よりで大喜びをするのだが、修はあることに疑問を持つ。

「あの、三輪先輩が風刃を使うということはS級になるんですか?」

「あ、そうだった。どうすんだ? オレはお前がS級になるのは反対しねえけど、奈良坂と古寺とオレだけじゃA級はやってけねえから解散するぞ」

このままS級になって戦うかどうか。チームメイトである米屋は反対こそしないが、そうなれば三輪隊を解散しなければならぬ。B級ならまだしもエリート揃いのA級、三輪の抜けた三輪隊はA級最弱の部隊になってしまう。三人だけで上手く回せないの

で、それならば今の迅の様にフリーになる道を選ぶ。

「風刃は迅以外に使いこなせる隊員は居ない。こいつと戦ってそれがハッキリと分かった。」

後で城戸司令に俺がS級になって使うのは無理だと返すつもりだ……これはムカつくが迅にしか使いこなせない」

遠隔斬撃と斬撃を時間差で放つと色々と頭を使う能力の風刃。

迅は未来視で未来を見て、どうするかどう戦うか展開を組み立てて風刃の能力をフルに使う。三輪も考えて戦うことは出来るのだが、迅の未来視を使った展開の組み立てと比較すれば劣っている。その辺のトリオン兵ならまだしも、これを使ってくれと頼まれた時は大規模な侵攻がある時だ。今までとは段違いな相手がやって来るのは明白だ。

「そうか……よかったああああ、隊を解散させなくて」

「お前、フリーになつたら何処かに飛ばされそうでもないな」

三輪がS級にならないと分かり安堵する米屋。解散したら確実にフリーな部隊に入られる。

「そうなった時は、もしこれを返しても使えと言われてS級になるなら俺の代わりを用意する」

「お前の代わりって、迅さん？」

既に方が一も考えている。

A級のフリーで部隊を率いて即戦力になりそうな人物、つい最近A級になった迅。彼ならば太刀川や風間とも渡り合えて戦術も考えることも出来るし判断能力やらなんやらとあり、三輪の代わりをが務まる。

「あいつの力は借りん」

だが、三輪は借りない。

それはそれこれはこれと割りきることはなんとか出来たが迅が嫌いなのには変わりはない。じゃあ、誰が居るんだと考える出水。

ポーターにA級隊員並の実力を持つB級は何処かの部隊に所属している。支部に所属している学業優先でランク戦をしない奴の知り合いはいないし、フリーで強いのは迅ぐらい。

他に誰か居たかと色々と強い自身と親交が深い隊員を浮かべるのだが、何処かに所属している。

「いい加減に、決着をつける」

三輪は携帯を取り出し

『はい、もしもし』

貴虎に電話を掛けた。

「三雲」

『……自分の中での落とし処を見つけたのか？』

「謝るつもりはないのか？」

『お前を苦しめた事については罪悪感はある。』

だが、やったことに関してはなんの後悔もしていない……俺はお前と同じ憎しみを抱いたりしていない』

「そうか」

騒動を起こさない為にやったことが結果的には裏目に出た。

その事についての罪悪感はある。だが、遊真を通報しなかった事などは一切の罪悪感を抱いていない。

『出せたのか、お前なりの答えを』

「ああ、出すことは出来た……三雲」

『なんだ？』

「俺に対して、本当に申し訳ないと思っているのか？」

『ああ、思っている』

「そうか……だったら、俺に力を貸せ」

『？』

「ボーダーに入れ、三雲」

三輪がもしS級になった時、その代わりとなる人物、それは貴虎だった。

「今までの事も考慮して言おう、ボーダーに入って俺に力を貸せ」

『力をね、エンジニアになって凄いいトリガーでも開発すれば良いのか?』

「違う。隊員になって、戦え。」

お前はボーダーに入る条件をとこの昔に満たしている。理由は知らないがお前がボーダーが嫌いなのは知っている。お前の弟がボーダーにいるのも知っている。なら、お前も戦え。師匠が必要ならば、幾らでも用意する。射手になるなら出水が、攻撃手になるなら陽介がいる」

自分は憎しみと向き合う事をした。ならば次はお前の番だ。

今まで色々見逃したりしたもの、今回は違うと全力でスカウトをする。

サイドエフェクトが発現しており、視力を強化するもので遠くのものを見れたり動体視力に優れたり、どのポジションでも生かすことの出来る優れたサイドエフェクトだ。感覚と理論、両方を両立する非常に珍しいタイプで自主的に勉強するタイプだ。身のスペックは目の前にいる米屋よりも上で隊員となれば直ぐに頭角を現す。そして生身のスペックが高くて何れは限界が来る。だが、17歳組最古参の三輪には沢山の脈がある。もし射手になるならば目の前にいる出水や二宮を紹介できる。攻撃手な

らば風間や米屋を紹介できる。狙撃手になるならば奈良坂や古寺を紹介できる。戦術を覚えたいのならば東を紹介できる。なんならば貴虎が今まで作ってきた人脈を使えばもつともつと指導してくれる人の幅が広がる。

一流から教われれば直ぐに自分の代わりを務まる。いや、トリオン能力やサイドエフエクトを考慮すれば自分以上になる。

『隊員になって戦えか……少し待ってくれ』

「ダメだ。今ここで待てば、次は5月になる。5月だと遅すぎる。今ここで無理矢理振じ込ませる。俺ならばそれが出来る」

新入隊員に振じ込む。

遊真が近界民なのを知っていることや裏で色々といらんことをしていることを城戸司令に言えば、振じ込める。一週間後に入隊式があるのだから、今ここで振じ込まなければならぬ。

『悪いが、1ヶ月後じゃないとお前の力になることは出来ない』

通常の方法でボーダーの入隊をするならば貴虎は5月入隊になる。

貴虎のスペックならばちよつと叩けば、いや、叩かなくても化ける。来年は高校三年生、進路の年。そんな時期に入隊になると学業を疎かにしてボーダーに尽くしてくれとは言えない。ボーダーと学業の両立や、ボーダー隊員としての生活を馴れさせる為にも

入れるには今しかない。

「つ……まさか、お前?!」

やるならば即座にやらないといけない。

貴虎はそんな事が分からない馬鹿じゃない。自身に対して罪の意識があるのに、1ヶ月待てと言う。

今から1ヶ月以内にある出来事、三輪が知る限りは新隊員の入隊ぐらいだが、一つだけ時期は不確かだかそれが起きると言う事が確かに分かっていることがあった。

『三輪……何故、修が近界民を見つけられたのか?』

遊真が見つけたと大半は思っている

『何故、修がトリオン兵を持ってきたのか?』

その時、遊真が近界民だと知られれば確実にややこしくなるから修が持っていたと思っていた

『何故、修がラッドは此方の世界に偵察に来たとボーダーに言ったのか?』

遊真がラッドについて知っており、通常とは異なる改造をしているのを見て考察したと思っている

「兄さん、それは!」

『三輪、その答えは、ただ一つ……全て私が裏で手引きしたからだ!!』

三輪は貴虎が遊真について知っている、知識とほんの少しの知恵があるとの認識だった。

だが、実際は違う。ここ最近、起きた大きな出来事全てに貴虎が大きく関与している。トリオン兵を見つけたのも、壊したのも、偵察に来たという考えに辿り着いたのも全て貴虎だ。

「マジかよ……今までの、メガネボーイの手柄じゃねえのか!？」

この場にいる米屋や出水にも話が聞こえ、修に視線が向く。

「はい……今までののは、全部兄さんがしたことです。」

あの日、ラッドを見つけたのも破壊したのもボーダーの偵察をしに来たと考察したのも全て兄さんです」

今まで言うなど言われたが、本人が言った。

修は隠す必要は無いとラッドの一件は自分でなく、全て兄と遊真の手柄で届けたただだと告白をする。

「僕は、兄さんに手柄を渡されただけで、本当なら」

「見つけた功績がお前に行ったことはそこまで重要じゃない」

衝撃の事実を知るも、ラッドの一件については既に終わっている。

今更それをどうのこうの言ったとしても、修が届けて根付達に偵察に来たかもしれないな

いと伝えた事実は変わりない。

「もう、オレ、本部長とか司令とかに言ってくる！」

「おれも付き合う」

今までの出来事の裏に貴虎が居た。

ボーダーの真実について知っているだけならばまだ良かったが、裏で色々と手引きしたことは米屋や出水は見過ごせず、本部にいる忍田本部長や城戸司令にその事について報告して引つ張り出そうとする。

「待ってください」

そんな二人を止めに入る修

「メガネボーイ、どうしてかって細かな理由は知らねえけど、あいつがボーダーが嫌いなのは知ってる。

ボーダーが色々と隠してたりダメだったりする部分も知ってる。あいつが嫌いだから好きになつてくれなんてオレは言わねえ。けど、これとそれは別だ」

「裏で色々と手引きしていた事に関しては、まあ、色々と言われるけどおれ達もその辺のフオローをするし、今の時点で悪い事はしていない。メガネくん、退いてくれ」

「……分かっていきます。」

兄さんがどれだけボーダーに迷惑を掛けているのかを、三輪先輩を追い詰めたのも

……それでも、1ヶ月待つてください！兄さんの言う1ヶ月だけ待つてください！」
修は頭を下げ、通報するのを1ヶ月だけ待つてほしいと頼み込む。

既に兄が、兄と自分がしでかしたことがどれだけの事かを知っている。だが、それも1ヶ月が欲しい。

「1ヶ月……1ヶ月あれば良いのか？」

「おい、秀次見逃すのか!？」

「少し黙つてろ。もう一度聞く、1ヶ月の期間があれば良いのか？」

『1ヶ月あれば、なんとか……まあ、その時まで生きてたらなんだが』

修と三輪はどうして貴虎が1ヶ月待つてほしいと言うのか分かった。

この1ヶ月の間に大規模な侵攻が起きる。修は貴虎が大規模な侵攻の際に戦うことを知っている。今もしボーダーに見つかるとややこしくなる。

「そうか……そういうことだったのか……」

三輪はついさつきあつた事を思い出す。

風刃を託そうとする迅、何時もの様に暗躍かと思つたがそれが出来なくなつていつと何時もの様にヘラヘラしていたが本気で困っていた。

迅の暗躍は未来視のサイドエフェクトで成り立っている。視た未来の中でも良い未来に辿り着くようにしたり辿り着かないようにしたり色々としている。迅が未来を視

るにはまず顔を見なければならぬ。

その内襲撃してくる近界民達の顔を迅は当然知らない。だが、その近界民達と戦うボーダー隊員の顔は知り尽くしている。近界民達と戦う隊員を経由し逆説して未来を視て暗躍……しようとしていたようだが、肝心な部分が不安定だと言っていた。ここ最近、自身のサイドエフェクトがハズレていると読み逃しが多いと言っていた。

「お前だったのか」

迅が未来がうまく見えないのは、サイドエフェクトがハズレているのは貴虎が原因だ。

三輪はその事に気付いた。

貴虎は現在三門第一（普通校）に通っている多くのボーダー隊員と顔見知りだが、迅と面識は無い。迅のサイドエフェクトは顔を見なければならぬのだが、迅は貴虎の顔を一度も見ることがない。見る機会がないし、わざわざ見る理由も無い。

だから、貴虎が深く関与する未来がよく見えない。

「……一っただけ聞かせてくれ」

『なんだ？』

「お前の名前だ」

『お前一年の時、私の後ろの席だった筈だが』

「……全員が三雲と呼んで、忘れた。多分、殆どの人が忘れてる」

『そうか……私は、下の名前で呼ばれるの好きじゃないから名字呼びのままでもいい』

「……」

『貴虎、三雲貴虎だ……』

貴虎は名前を告げると電話を切った。

三輪は数秒間無言で携帯を見つめたが電話を掛け直す事はせずにポケットにしまう。

「三雲、アイツは俺達にまだなにかを隠しているな?」

「……はい」

「そうか……いくぞ、陽介、出水」

まだなにかを隠し事があるのを確認した後、三輪は修達に背を向けて出水と米屋は追い掛ける。

「報告しねえの?」

貴虎の事を報告するならば、今歩く道とは真逆の道を歩かないといけない。

だが、三輪は報告する道を歩かない。

「陽介、アイツは1ヶ月待てと言った。1ヶ月を過ぎれば、問答無用で城戸司令や根付さ

ん達に伝えて鎖で縛ってでも本部へと連行をする」

「おいおい、物騒だな」

貴虎の言うとおり、1ヶ月待つ。だが、それを過ぎれば強行手段を取る。

「……お前達こそ、通報しないのか？」

三輪はそう選んだが、それを選べとは強要をしていない。

さつきまで通報する気満々な出水と米屋は自身を追い掛けており、司令の元にも本部長の元にも行こうとしない。

「通報しなきゃならねえのは分かってるよ。けど、今通報しても大して意味もねえって気付いたんだよ」

此処で米屋が司令に言えば、連れてこいと指示が来る。そして1ヶ月待てと言っただろうと貴虎はキレて、絶対に来ない。

「強行手段を取って連れてきても、城戸司令が直接会っても大して変わらねえ」

遊真が近界民だと言うことはボーダーの重要機密の1つであり、それを知られるのはボーダーの威厳とかに関わる。

貴虎がボーダーに入れば済む話となるが、貴虎は1ヶ月の猶予が欲しいと言っていたのでそこで断る。そうなれば記憶を操作するのだが、遊真が近界民以外は記憶を操作しても無駄なことだ。

まあ、実際のところは記憶を操作しても私の記憶が操作されているという事実には気がき、なにかやかしたんだなとメモとか記録を見たりして補填して無駄になる。

「1ヶ月待てば協力してくれるんだし、今ここで無理矢理動けばメガネボーイも知る隠している事が分かんねえ……それに」

「なんだ？」

「秀次が我慢してんだ、オレ達も我慢しねえと」

米屋は城戸派の人間だが近界民に対して恨みはない。

出水も米屋も命令だから従っているところが、ちゃんと話し合いをすれば通じる相手ならば話し合いをしたりするし、良いやつならば友好的な関係になろうとする。

今、通報しなければならぬのは分かっている。そして誰よりも通報しなければならぬのが三輪なのも分かっている。その三輪が通報をせずに待とうとしているのだから自分達も待たなければならぬ。

「お前が言わないならおれ達も言わない。

あ、でもコレが原因で降格処分をくらったらそんな時は三雲に責任を取って貰おうぜ。

おれ達四人で部隊を組んでよ」

三輪秀次が言うまではおれ達オレは待つ。

「……ありがとう、陽介、出水」

そんな二人の気持ちに三輪は感謝をする。

「え、え？なんて？秀次、今なんて言ったんだ？蟻が十？」

「大声で頼む!!もう一回、あ、出来れば保存用と観賞用と布教用と生で聞きたいから4回頼むわ!!」

滅多な事じゃ聞けない三輪の心からの感謝の言葉。

出水と米屋は興奮をし、携帯を取り出して馬鹿騒ぎをしたのでさつき言ったことを撤回してやろうかと、二度と礼は言わないと自らで墓穴を掘る三輪だった。

「オサム」

「どうした？」

そんな三輪達の割と直ぐ後ろにいる修と遊真。同じく帰ろうとしているのだから、同じ道を通るのは当然である。

「オサムのおにいさんはなにを隠しているんだ？」

近界民や自身の事から何時の間にもやら貴虎の話題になり、取りあえずと無言で聞いていた。

その結果、自分も知らない隠し事があると判明した。

「一ヶ月待つてくれないか？」

「むう、オサムもそれか」

「隠している事はとんでもない事なので口止めされてるし、ボーダーが今、それを知った
ら揉める」

ボーダーに入り、自分の目で色々と見たり確かめたりしてハッキリと分かった。貴虎
の持つトリガーはボーダーの物とは明らかに違う。

転生特典だから仕方ないといえれば仕方ないのだが、それが今から色々とややこしくな
ろうとする時期に知られれば、大変な事になる。だから、待つてほしい。

新年早々に重たい事があったものの、その後は楽しく三ヶ日を過ごしていく修達。4
日からは通常運転と正月ボケや正月太りなんて事にはならず、玉狛支部へと足を運び続
け1月8日、入隊式を迎えた。

第52話

1月8日、入隊日当日。めでたく正式な入隊をした遊真と千佳。

旧ボーダー隊員を除けば踏んだ場数も経験も圧倒的な遊真はトリオン兵を倒す訓練で歴代最速の記録を叩き出し、狙撃手の千佳は何処ぞのグラサンが敢えてトリオンに關する情報を送っていないなかったのでその事を知らなかった佐鳥がトリオンが豊富であればあるほど威力の増す狙撃銃、アイビスで試し撃ちをさせてしまい本部の壁に穴を開けるといふ惨事を起こし、現時の人になりかけている。因みにだが、貴虎はアイビスで穴を開ける光景を撮りに本部が撮れる場所でカメラを手にスタンバっていた。

『伝達系切斷、三雲ダウン』

その一方、修は風間に勝負を挑まれた。

A級3位の部隊を率いる隊長で、ボーダーが出来て直ぐに入隊し、暴力でポイント剥奪された1万越えの影浦やつい最近ランク戦に復帰した迅を含めて5本の指に入る攻撃手で個人総合3位の風間。

入隊式の進行役である嵐山は修に戦うべきではないと言うのだが、修が目指すのは遠征。

元から実力がある遊真と、トリオンはボーダーの中でもどこか近界民の世界でも見たことの無いほどにぶつちぎりな千佳。その二人と組み、遠征を目指すのだが少しだけ置いていかれる危機を感じている。

風間は何れは越えなければならぬ壁だと修は挑んだ……その結果は言うまでもない。

「んだよ、20戦20敗じゃねえか！」

一対一の模擬戦を行うものの、良いところは全くなく惨敗する修。

模擬戦を行う仮想訓練室の機械を操作し、見物をしていた諏訪はつまらなさそうな顔をする。

修達が戦っている仮想訓練室は機械とトリガーを繋げてトリオンを機械で再現し、トリオンを擬似的とはいえ無限に使える。

風間はサブトリガーであるカメレオンを使い透明になり、修に接近。カメレオンを解除し、スコープオンで斬る。

それを20回も繰り返すだけを見ていれば誰だって飽きる。珍しく風間がB級に絡んでその結果がいじめに近い姿ならば尚更だ。

「あのトリオン兵を見つけただけで成り上がったから経験少ねえのか？」

「多分、それもあると思いますよ」

諏訪の横で同じく模擬戦を観戦している堤も少しだけ飽きていた。

修の兄である貴虎がやたらスペックが高く、修も時の人となったのだからと少しだけ思っていたが、蓋を開ければこの様。風間が物凄く強いから、というのもあるがそれ以前に修が弱すぎた。

「……もういい」

20戦以上も戦ったが、自身に掠り傷の1つもつけることが出来ない修を見て風間は落胆した。

近界民と聞かされていた遊真は凄かった。だが、修は物凄く弱かった。アステロイドの大きさは今まで見たことのない小ささで威力は低く速度は遅い。自分から攻めようとする姿勢はあるもののレイガストはシールドモードで防御から攻撃に転じるまで隙が大きすぎる。

特徴もない。B級下位の中でも酷すぎる弱さ。迅がわざわざ玉狛に入れた理由がよく分からず、少しだけ期待した。

「なぜ、アイツじゃない、なぜお前なんだ」

「！」

貴虎の弟だからと期待した。

風間は貴虎と親しく親交が有るか無いかといえどもそこまでなもの、あることだけは

ハッキリと覚えている。昨年のもう一人のボーダーのお年玉企画で、凄まじいスペックを發揮した貴虎。生身の肉体で香港のスタントマン無しの大スターの様な動きをし、弓場並の銃の腕を持っている。

進学校組なので詳しくは知らないが、成績優秀で防衛任務で休む隊員の為にノートを用意している米屋や別役のような悲劇を起こす事のないフォローも出来る人間で、それをよく知る出水はあいつ来ねえかなと愚痴っているのを何度か見たことがある。

「アイツはなにをしているんだ」

目の前にいる修は明らかに戦いに向いている人間じゃない。

この場に弟は居るのに兄は居ないことを疑問に持ち、どうしてこいつなんだと比較する風間。

「……分かってますよ、そんな事ぐらい」

その言葉が聞こえた修は自分の弱さを悔やみ、怒りを表す。

「すまない。今のは失言だった」

兄弟だからと比較するのは良くない。

自分がつい呟いた事を詫げるのだが、もう止まらない。

「そう思うのなら、とことん付き合ってください」

貴虎と修は仲が良い。貴虎は修の事が大好きで、自慢の弟だと思っている。修も貴虎

の事が大好きで、自慢の兄だと思っている。だからと言って、なにも思っていないわけではない。

修には修の良さがある。母である香澄も、千佳も遊真も貴虎の良さと修の良さの違いをちゃんと分かっている。だが、それでも差はある。蓮乃辺市で一番の中学校を塾にも通わずに合格した兄。対して家庭教師を雇っても、成績トップに立っていない修。学校の成績だけが全てでないのは分かっているが、それでも思うことが、無いわけではない。「いいだろう」

なんとしても倒す。

今の自分ではこんなものかと諦める気持ちを切り替える。

『伝達系切断、三雲ダウン』

だが、気持ちの強さと実力はそこまで繋がらない。そんなものは全くといって関係の無いことだ。

「貴方ね、いい加減に諦めなさいよー」

更に5敗し、停滞し続けていると木虎が入り修に諦めることを進言する。

「それは出来ないことだ」

「気付いていないの？ さつきから風間さんは貴方を斬るときに同じところを斬ってるのよーこれ以上、醜態を晒して惨めな思いをする前に今は諦めて」

「惨めな思いなら、とっくの昔からしてるよ!!」

「なっ……!?!」

余りにも惨めな姿に、木虎なりの救いの手を伸ばすが修は拒む。

修を詳しくは知らないがどちらかといえば大人しく礼儀正しい性格な印象を持っていた木虎や時枝はその姿を見て驚く。風間は自分の失言を後悔する。

「木虎、出よう」

「時枝先輩、でも」

「良いから、出るんだよ……ごめんね、木虎がなにも考え無しに言っつて」

「構いません……事実ですし」

「こう言うのは本当にダメなのは分かっているけど、木虎の言っている事は間違いじゃないよ……今の君じゃ勝てない」

そんな修の姿を見て、なにが原因かを察する時枝は木虎を回収。

時枝は頭を下げて詫び、1つだけアドバイスをして去っていきその光景を見て少しだけ頭が冷える修。冷静になり、どうやって風間に勝つのかを考える。

修のトリガーはメインがレイガスト、スラスター、サブがアステロイド、シールド、バックワームの計5つ。カメレオンをどうにかするにはアステロイドを物凄く細かくし、訓練室に超低速散布すれば良いとなりそうしようとするのだが、止める。

『伝達系切断、三雲ダウン』

「違う、そうじゃない」

「……まだか」

その方法でなら、風間のカメレオンをどうにかすることが出来る。だが、それじゃダメだ。

自身のトリオンが絶望的なのは知っている。その戦法は本番では使えない。訓練室でのみ使える戦法は出来ない。

もつと別の方法がある筈だと必死になって考える修を見て、なにかをしてこようと試行錯誤を繰返しはじめた。

「木虎、後で謝りなよ」

試行錯誤を繰返す修を見て、さっきの一件について叱る時枝

「……分かっていきますよ」

修があんな風に言ってくることを思っていなかった木虎。悪いことをしたと反省をしている。

「なにで謝るか分かってるの?」

「貴方では無理と言ったことです」

「違うよ」

「どういうことですか？」

「……色々と勝手に思い込んでたりしたオレ達も悪いんだろうな」

「そうだな」

やたらと優秀で一部の隊員には人の良い貴虎。

修が弟だと知れば、やたらと期待したり出来るイメージを持ったりとした。弟さん、居るなら紹介してくださいよ！と佐鳥は堂々と言った。貴虎は言うことややこしくなるからと言わなかったのがなんとなく分かる。

「程好い距離感って、大事だぞ。時枝」

「大丈夫、物凄く知ってるから」

「どうしたんだ？」

成績優秀、ボーダーの顔、イケメン、非の打ち所が無い男、嵐山准。

シスコン or ブラコンなのを時枝というか嵐山をよく知る人達は知っており、弟と妹がとも良い子なのは知っている。しかし、それが逆にコンプレックスになったりするのを知っている。嵐山隊の時枝は嫌でも知っている。変に期待したりした事を申し訳ないと思う。

「僕じゃ……」

20戦以上も負け続ければ、今の自分では勝負すら出来ないとなり考える修。

フィールドを生かす戦法……は、出来ない。訓練室はなにもない。ここでは純粹な実力でどうこうしないといけない。相手は手心を加えることも油断も絶対にしない隙を見せない風間。

「……………」

ならば、今の自分以外の誰かの動きをすれば良い。

弧月で強い人は、師匠である烏丸だ。スコープオンで強い人は遊真だ。修の使っているのはレイガストで、レイガストで強い人物はレイジなのだがその戦い方を知らない。というか、レイジはレイガスト二刀流だ。

色々と考えて考えて、なにかないかと模索していき一人だけ居た。盾を使った強い人物を。

「……………確か、大きさは」

その人物の動きや思考を真似ることを少しだけ躊躇うが、直ぐに躊躇いを投げ捨てる。修はレイガストの盾モードを何処まで弄くれるのかを確認する。

「風間さんは……スコープオンを使っている。スコープオンを持って使っている」

そして考える。

その人物ならばやりそうなことと、今まで負け続けたことにより得た経験値で風間の攻略を。

一矢報いるもなにも自分のスペックと風間のスペックは大違いで、一個も勝るものはないと改めて自分を見直すのだが、あるものだけは同じじやないのかと気付く。それと同時に今まで風間は自分をどうやって倒したかを思い出す。

今の自分に出来ること、今の自分のトリガー構成や今の状態でも出来ることを考えた。

今まで負けて覚えたこと、二十数戦も戦って一矢報いることすら出来なかったがそれでも得たものはあった。

これから出来るようにならなければならぬこと、今の自分がまともに出来ていないが出来るようにならなければならないことは分かっている。

お手本となる動き、修と似た感じのトリガー構成はいない。まずはレイガスト一本、自分が思う最もレイガストを使いこなせそうな人物を想像し、その人の思考を読み模倣する。

「なにかを考えた、レイガストの盾を動かしたりしてますがアレはいつたい？」

「俺にもよく分からない。ただ、なにかをしようとするための確認をしている」

なにかをやろうとし、雰囲気が変わる修に気付く見学者一同。

『模擬戦、開始！』

これでダメならば、もう修はなにも出来ない。

最後の戦いはじまると風間はカメレオンを使い姿を消し、修は待っていたと言わんばかりにアステロイドを出して4×4×4に分割をした

「アステロイド！」

「あくあく、なにやってんの？あんなのが風間さんに通じるわけないでしょ。学習能力が無いの、あいつ？」

カメレオンは無敵ではないとアステロイドを撃った。しかし、避けられ奇襲を受けた。

20戦の敗けの中でそれが数回あり、上から見物をしていた菊地原は修を見下して呆れる。その手はもう通用はしない。

「なにをやってるのよ……」

修の撃ったアステロイドは風間にも壁にも当たることはなかった。

「手を変えてきたな、オサム」

「流石に二十数回もやれば誰でも覚えれるが、違うようだな」

その事に呆れる木虎に対し、遊真と鳥丸は関心をしていた。

「さつきとアステロイドの種類が違うね」

「時枝先輩、どういふことですか？」

「アステロイドの分割とか威力、速度、射程の振り分け方を変えてるんだよ」

「三雲くんのサイズなら、大して変わらないのでは？」

「アレは倒すためのアステロイドじゃない…….と思う」

修が撃った今までのアステロイドは、風間に当たることなく訓練室の壁に当たった。

今回のアステロイドは違う。風間が模擬戦開始時に立っている場所で消えた。風間と自身との距離を覚え、自身のアステロイドで飛ばせる射程を見極めて余計な距離まで飛ばさずにし、今まで使っていた余計な距離の分を速度に回すことにした。

「射程を見極めたようだが、ある程度の射手なら誰でも出来ることだ」

その事については一応の関心はするが、そこまで驚かずにレイガストを構える修の背後へと回り込んだ風間。

なにかをやるかと思っていたが、変わりはない。コレが終わればカメレオンを使わずにスコープオン一本で倒して修の心を折って諦めさせる事を考える。

「シールド!!」

スコープオンの刃を振るう余裕の風間に反応をした修。

「無駄だ！お前のトリオンではっ、な!?!」

修の撃ったアステロイドからトリオンが低いことは見抜いている。

物凄くトリオンが多いわけではないが、それでも修の貧弱なトリオンでのシールドを斬ることは出来るとそのまま斬ろうとするのだが、斬ることは出来なかった。

「はあ!?!なんだそりやあ!?!」

ソレを見ていた諏訪は驚いた。

「成る程、その手があつたか!」

ソレを見て嵐山が自分じや思い付かないなど首を縦に動かし関心をする。

「風間さんが動揺をしている、今だ!」

ソレを見て、今しかないと烏丸は叫ぶ。

修の出したシールドは風間の手首ほどのとても小さなシールドだった。

シールドは大きさにより強度が変わるもので修の少ないトリオンでもある程度の強
度を得ることが出来たが、それでも風間のスコープピオンの斬れ味の方が上だった。

「シールドで動きを、アレならトリオンが少なくても可能だ!」

修が出したシールドは風間のスコープピオンを防ぐものではなく、スコープピオンを持つ
風間の動きを妨げるものだった。

どんなに凄い威力を秘めている銃でも引き金を引かなければ意味がない。どんなに
凄いい切れ味を秘めている刃でも振り切れなければ意味はない。

「オサムは先のことを考えて経験を積んでみたいですね、キトラさん」

修は何度も何度も風間のスコープピオンに斬られ、風間がスコープピオンを使って自身を
倒す際にはスコープピオンを握って斬ってくる事が分かった。スコープピオンは体の何処

からでも出すことが出来るが、そうせずに握って斬ってくる。なら、次も握って斬ってくる。と読んだ。負け続けた事により風間を認識して捉えるところまでは出来た。

負けから得たものを生かした修に笑い、負ける姿を見せる修を止めさせるべきだと烏丸に言った木虎にどやる遊真。

剣や刀で相手を斬るには先ず大前提として腕を振らないといけない。

太刀川も村上も遊真も生駒も烏丸も全員、体を動かして刃を当てている。勿論、風間もだ。ならば、やることはただ一つ。風間の手元付近にシールドを出して、動きの邪魔をする。

スコープピオンの刃なら修のシールドを斬ることは出来る。だが、風間の腕ではシールドを叩き割ることはできない。

「でも、風間さんはスコープピオンを二本持っているよ」

風間の腕付近にシールドを出して攻撃の動作を強制的に止めた。だが、それは片腕だけだった。

もう片方の手は空いており、その手にはスコープピオンが握られている。片方はあらぬ方向に折れているが、もう片方は健在の腕。

修の予想外の一手に動揺したものの、直ぐに冷静になった風間はもう片方のスコープピオンで斬ろうとするのだが、それよりも先に修が動いていた。

「この一瞬が、欲しかったんです！」

「う!?!」

修はレイガストを持っていない、なにも持っていない右手で風間の顔を殴る。

予想外の一手から更に予想外の一手を繋ぎ、風間の隙を大きく作った修。これ以上はもうない。この瞬間を逃すわけにはいかないと盾モードのレイガストの形状を先端部分が尖っている様に……兄である貴虎が使うメロンの盾と上下が真逆の形状に変えた。

「スラスター、ON!!」

トリオンを噴出し、推進力を増すレイガスト専用のオプショントリガーを起動。

スラスターの推進力に身を任せ、鋭くしたレイガストの盾の先端部分で風間刺してレイガストを手放し、そのまま風間は大きく後退をした。

「どう……だ……」

やれることはやった。

先端部分を鋭利にした盾は確かに風間を刺した。だが、貫くことは出来なかった。

『トリオン漏出過多、風間ダウン』

相手を斬った感覚はない。完璧に貫くことは出来なかった。だが、勝利をした。腹から煙を出している風間は負けた。

「勝った、のか?」

「ああ、お前の勝ちだ」

勝つための奇策をした為か、イマイチ実感が持つことは出来ない。

修は勝った風間は負けた。この事実は変わりなく、風間は負けを認めた。

「出るぞで」

「はい」

勝利をした修は全てを出し尽くしており、もうないと感じた風間は修と共に出る。

「やったな、オサム！」

「……」

「勝った実感がないのか？」

「アレは、勝ちじゃないよ」

頭が冷えて一矢報いることはできて冷静になった修はあの勝利は勝利じゃないと喜ばない。

「勝ちを勝ちだろう？」

「三雲、最後のは中々だったぞ」

修の言うことがイマイチ分からず、かといって嘘を言っているわけでもない。

どういふことだと疑問を持っていると風間が声をかける。

「確かお前は玉狛の所属だったな。レイジから教わったのか？」

「教わった？」

「レイガストのスラスターを利用したパンチだ……違うのか？」

「修は俺の弟子です」

隊長だしレイガストだし、玉狛だしと推測するの風間だが違う。

木崎レイジは千佳の師匠であり修の師匠は烏丸であり、少しだけ驚いたものの納得をする。

「そうか……お前の弟子か。最後のアレらはお前の入れ知恵か？」

「いえ、教えたのはトリオン分割とかの基礎中の基礎だけです。後は全部、アイツのアイデアで」

「違います」

烏丸が教えたのは本当に基礎中の基礎だけで、本当にこれといった戦術は教えていない。というよりは、烏丸は弧月と銃を使う万能手、教えられることに限界がある。だから、全て修が考えた。そう思っているが違う。

「レイジからパンチを教わったのか？」

「いえ、教わってません……ただ、真似をしてみようと思っただけです」

「真似だと？」

3つの攻撃手トリガーで最も不人気なレイガスト。

強い使い手は居るものの、制作者の考えとは全く違うやり方でしていたり改造していたりと参考にならなかつたりする。ボーダーが出来て直ぐに入隊した風間は色々な隊員の顔を知っているがあんな感じの戦い方をする隊員に心当たりは全くない。

「風間さんに勝てなくて、最初はアステロイドの弾速を落として散弾にしようと思いましたが、僕のトリオン量だと実戦では使えなさそうな方法だったので止めて、どうすればと色々と冷静に考えました。今の自分に出来ることを、今までの敗けで分かったことを、これから出来ないといけないことを」

「それがアレか？」

「いえ、それだと中途半端でした。」

風間さんはとても強く、1つ1つ比較して何処か隙がないか、対等に渡り合えるかと色々と考えて全てに置いて出来ないと思っていたんですが、1つだけ使えそうなものがありました」

「それがシールドか」

「少し、違います。シールド、と言うよりはシールドを出したりする速度とかが同じじゃないかと思っただんです」

修と千佳と遊真。

三人がアステロイド（拳銃）を撃てば威力は大きく変わる。三人が弧月を持てば斬れ

味も変わる。三人がシールドを出せば、シールドの強度も変わる。トリオン量によって同じトリガーでも出せる出力は変わる。遊真からそう教わった。それは間違いないのだが、あることに疑問を持った。出したりする速度は同じなのだろうか？

三人同時にトリガーを起動すれば、トリオン豊富な千佳が一瞬で換装し最もトリオンが乏しい修が数十秒掛かるなんてことはない。修はシールドを出したりする速度は同じじゃないかと目をつけた……のだが

「そしてそこで終わっただけです。僕の考えだと、僕のやり方だと」
速度は同じじゃないかと思っただがそこで終わる。

結局のところはシールドはシールドだとそれを攻めにする方法が浮かばなかった。

「次に、今の僕だと風間さんに一矢報いることが出来ないと分かっていました。だから、今の僕じゃないのを別の誰かの動きを真似てみようと思っただけですが……兄さんが浮かびました」

「待て、お前の兄はボーダーの隊員でもなんでもないはずだ」

「それでもです。兄さんならどうするか色々と考えました。」

兄さんならシールドで相手の攻撃を防ぐのではなく、攻撃を妨害する事に使ったり、空中に浮かせて踏み台にしたり、階段みたいに使ったりと色々とするなど、空いている右手を使って殴るなど……レイガストの斬れ味は弧月とスコープオンと比べても悪く

て重いので、斬る武器じゃなくて殴打する武器として、鋭利にして使いそうだなと」

「……それを考える時点でお前の考えじゃないのか？」

「兄さんと同じことをやっても直ぐに差が生まれます。考えたのは兄さんが使つて100%の力を出せませす。」

シールドで腕を動けなくする技は初見なものもありましたし、仮想訓練室で二十回以上も斬られたから風間さんのはなんとか出来ました。これがあると知つたので次はないです」

兄ならばそうするというのがよく分かるから出来ただけなので、あくまでもそれっぽくしただけだ。

兄ならばレイガストを殴打する武器として使う。先端部分が鋭利な盾を使っているところをみたことがある。盾で殴っているのをみたことがある。あくまでも兄がやっていることを模倣しただけだ。

「兄さんと比べられて、怒ってしまつて、頭を冷やして自分じゃない兄さんの動きを選んで勝つたのならばそれはもう僕の勝ちじゃないです。兄さんの勝ちです」

今の自分じゃない別の誰かで勝つてもそれは勝利じゃないと修は自分の力で勝てなかつた事を強く悔やむ。

兄の代わりにボーダーに入ったんじゃない。自分の意思で入つた。自分がしたいと

すべきことだからと入った。

「これからは、僕のやり方で強くならないと」

兄の動きじゃないと発想じゃないと勝てない自分は未熟だと改めて遠征までの道のりを遠く感じた。

「……お前は自分の弱さを知っている。トリオンも身体能力も低く素質もないことを「え？」

「だから、なにが出来て出来ないのかがよく分かっている。

発想と相手がなにをやるか考える頭を持っている……知恵と工夫を使う戦い方は嫌いじゃない」

そんな修の姿勢を見て、風間は修の強さを認めた。

「すまなかつた、オレの発言はお前を傷付けた」

そしてもう一度、改まって貴虎じゃないことを残念がった事を謝る。

「いえ、僕の方こそカツとなつてしまつて……僕自身、焦つてたんだと思います」
修はそれはもう終わったことだと水に流す。

トリオン怪獣の千佳、既に物凄く強い遊真、トリガーを隠し持っている貴虎と修の周りには物凄いのが多すぎて焦つていたと風間との戦いで何処かスッキリした様な顔になつていた。

第53話

——ジリリリリ

1月20日、新しい朝が来た。希望と絶望の朝が来た。

今日は何時よりも早く5:30にセットした目覚ましで目を覚まし布団から無理矢理出て寒さで意識を叩き起こす。

「あゝ……絶望の朝だな」

なんでこんなことをしなければならんだ。

低血圧で気だるく愚痴を言いながらも体を起こしてメガネをつけようとするのだが、手を止める。

「地獄絵図……いやいやいや、違う違う違う」

窓の外（三門市側）から見える不吉な相。

発生源は言うまでもなくボーダー基地を中心とした警戒区域で、住居崩壊は勿論のことと負傷者、死者が出ると私のサイドエフェクトが言っている。

その光景を見て、胃が痛くなるのだが何処その実力派エリートは、これから起きるか

もしれない出来事を未来視で見ている。最終的に一つしか起きないが、実力派エリートは無数の起きる事を見ている。

あんな日頃がダメな奴がそれでも耐えていたりどうかしようとしているのだから、私も胃を痛めたり泣き言を言ったりすることなんて出来ない。

「あら、早いよね」

洗面所に向かうと母さんがタオルで顔を拭いていた。

何時もは後一時間ぐらいは寝ているのだが、今日は物凄く早く起きている私を見て驚くのだが、母さんがこの時間帯に起きることの方が驚きだ。

「朝シャンしよう」

何時も通りの母さんを見て、なんか力が抜けてしまった。

相も変わらずマイペースだからか、母さんだからか気を引き締めても無駄だなと顔を洗うのを中止にして朝シャンにし、体全体を洗う。だが、直ぐに思う。真冬に朝シャンは逆に体を冷やすなど。これはあれだ、風呂沸かした方がいいと風呂を洗い、沸かす方向へと切り替えて、風呂を沸かしてゆっくりと浸かる。

「珍しいわね、夏ならまだしも冬に朝からお風呂だなんて。なにかあったの？」

「なにかあった、と言うよりはこれからあるんだよ」

気付けば一時間ほど経過しており、何時も目が覚める時間になっていた。

何時もと違うことをしている私を見て母さんはなにかあることに気付き嘘をついたところで特に意味は無いので、正直に言う。

「母さん、今日の一時まで時間空いてる？」

「開いてないわ。」

午前中は家の掃除に洗濯物、後、夕飯の献立を考えるのに忙しいわ」

「じゃあ、午後からはちゃんと時間が取れる？」

「そうね、夕飯の献立さえ決まれば後はスーパーに買い物に行けば良いから午後からならいけるわ」

ダメだ。今から起きる出来事について説明をしたとしてもこの人、一切気にせずに家で家事してるイメージがある。

「じゃあ、午後に病院に……いや、違うか。」

多分、昼過ぎに一度家に帰ってくると思うから帰るまで家に居てくれないかな？」

病院に先回りして欲しいが最後にちゃんと会っておかないと気が済まない。

「……なにをするかは聞かないわ。」

けれど、するならしつかりとやりなさいよ。貴方が、そうすべきだと思ったのなら病院という不吉なワードを出して、少しだけ動揺するも母さんはなにも言わない。

放任主義、とかでなく自分でやりたいと思ったのならばすれば良いと背中を押してく

れた。それを聞き、心の中で少しだけホツとすると朝食を頂く。朝から色々元気が出なかつたものの、母さんが背中を押してくれたので食欲が湧き、何時もより美味しく食べることが出来た。

「時間が無いから和んでる暇はない」

母さんの朝御飯に満足をして浮かれてはいけない。

自分の部屋に戻り押入れに隠している金庫を出して、ロックを解除する。

「え〜と、必要なのは」

三つあるアタッシュケースの内、Xと大きく書かれたケースを取り出して中に入っている必要なT2ガイアメモリを取り出す。

本音を言えば、全て（ケースに入っている分）のT2ガイアメモリを持っていきたいが、それは出来ない。今から学校に行くのだから25本もUSBメモリを持っていくとか怪しまれるし、なによりも適合者がいればメモリと引き合う可能性がある。なんらかの拍子でドーパントになったら一大事だ。

「S、Z、A、Dを持っていくとして……こいつはどうするか」

唯一まともに使うことの出来ない黒のJのT2ガイアメモリ、ジョーカーメモリ。

使用すれば使用者のスペックを極限まで上げ、使用者の心に反応して限界以上のパワーを出すことの出来る切り札の記憶が宿るガイアメモリ……という名前のトリガー。

ポチりとボタンを押してみるも一切、音声は鳴ることなくロストドライバーに差し込んでも全くの無反応。私が唯一使うことが出来ない物だが、私以外に使えぬ人物がいる。弟の修だ。

蓮乃辺市の山奥でコッソリと見せた時にジョーカーメモリと引き合っただのか無意識の内に手に取り、ドーパント化した。

「兄さん、おはよう」

その時に修は暴走をしていた。

その時にエターナルに変身して、修をボコった。元に戻った修はなにも覚えておらず、幸いにもガイアメモリの毒にやられていなかった。変身したのがエターナルだったから、相手がドーパントだったから相性が良かったが物凄いままでに強かったジョーカードーパント（修）。

「修、これを持っていけ」

私は起きて挨拶をする修にT2ジョーカーメモリを渡す。

「なっ……!?兄さん、これは」

T2ジョーカーメモリを手渡された修は意識が一瞬にして目覚めて慌てる。

過去に一度、やらかしてしまい今の今まで嚴重に保管していた物をなんの迷いもなく渡したのだから慌てるの無理はない。

「押してみろ」

「でも」

「良いから、押してくれ」

「……」

『ジョーカー!!』

ジョーカーメモリを返そうとする修を押しきり、ボタンを押させるとマダオボイスが流れ、私が何度押しても鳴らなかつたジョーカーとハッキリと響かせる。

「今日一日だけ貸すから、ちゃんと返してくれ」

「今日一日って、もしかして……」

京介から聞いた話では風間さんに私を使いそうな私のスタイルで勝利をもぎ取った。米屋から聞いた話だと、緑川にボコボコにされて手も足も出ずにいたら遊真がマジギレしてたと聞いている。

ボーダーで起きた出来事は一応は秘密なので基本的には言つてこない修。もうすぐ、大規模な侵攻があることを特に言つてこなかつた。

「昼飯はちゃんと食べるんだ。そうじゃないと、元気が出ない」

「兄さん、これは僕には」

「持つておけ。文字通り、それがお前の切り札なんだ」

修からハッキリと死相が見える。

それを回避する方法は幾つか存在し、最もリスクを生じないのが今ここで修を気絶させて四塚市に連れていく。だがそれは出来ない。そうしたらより大変な事になるし、修は怒る。例えば死ぬかもしれないと分かっているとしても、修は前に進もうとする。それならば、前に進む為の後押しをすれば良い。

「ベルトを介さずに使えば暴走する。だから、ベルトを届けるまでは絶対に使うな」
「……届けに来るんだね」

ベルトを届けに来ると言うことがどういう意味なのか分かっている修はモヤモヤする。

私に来ることは良いことなのか悪いことなのかと。ボーダーのトリガーと色々と違うので出来れば危険だから来ないで欲しいと思っている。修には言っていないが、洒落にならないほどに危険だろう。

「コレが危険なものも、コレをちゃんと使った戦闘もダメなものも分かっている。だが、それでも渡すべきだと判断をしたから渡した」

実力派エリートの上なら大丈夫かもしれないが、それを脱線させて最高最善の未来に辿り着くにはきつとコレが必要な場面がやって来る。

「ボーダーのトリガーと違って、剣も銃も弾も盾も出すことが出来ず緊急脱出も出来な

い。

徒手空拳で戦う事になり、リスクが一気に高くなるが……それを気にしないほどの力をコイツは秘めている」

「文字通り切り札ジョーカーになるトリガー……」

「ベルトを届けた後、色々とやってみて、もうどうすることも出来ない時に使うんだ」

修にガイアメモリを使った戦闘は向いていないだろう。

それでもそれが切り札になると持っていて欲しいと頼み修は了承し、ズボンのポケットに入れる。

今、修に出来ることはこれだけだ。此処から先は色々頑張らなければと何時もよりも早く家を出て原付を使わずに歩いて向かった。

「里見と雪丸は不在……冷静に考えれば、なにやってんだ？」

登校し、午前の授業の用意をしながら三門市に居ない部隊について頭に？を浮かべる。

10000超えの攻撃手と銃手一位の男は今現在、県外のボーダー隊員スカウトに行っている。それについては……まあ、色々と思うところはあがるがそれは置いて、近界民の大規模な侵攻があることが分かっているのならば、もう少しどうにかならぬだろうか？

近界民が何時襲来か何処そのグラサンは分からない。襲来してくるといふことは分かり、その時に誰がどうなるかというのが大体で分かっている。

それならば、その未来を少し弄くれば良い。例えば、京介が近界民が襲来した瞬間、何処に何年何月何日何時何分にいるか書かかれたプラカードの重要な事が起きる度に上げる様にしておく。

迅の未来視が主観か客観視点なのかは知らないが、それをしておけばある程度の正確な日時を割り出すことが出来る筈……京介がプラカード的なものを上げている未来が数パターン見えたら、逆に混乱を招くか？

「た……三雲」

「三輪、随分と早いな」

どうすれば未来を視えると色々と考えていると、三輪がやって来た。そして下の名前前で呼ぼうとしたのだが、ちよつと恥ずかしくなつてやめた。

それなりの緊張の糸を張っており、何時もよりも早く登校をしてきたのだがここに来る理由が見当たらない。

元旦にあんな事があつたものの、1ヶ月は待つてくれる。出水と米屋も本当ならば言わないといけない事が分かっているが、一番言いたくて私をぶん殴りたい奴が我慢をしているのだから今まで通りにも変わらずに居る。

「約束の日まで、残り十日だ。

お前がなにをしようとするかは俺には分からない。俺は今まで通りにするだけだ……お前を信じている。だから、コレを書いてくれ」

「お前、言い方を選んでくれ！」

うっほ、良い男！

色々アレな言い方をし、ボーダーの入隊試験を受けるのに必要な書類を出してきた三輪。私とお前は友達であり、ホモ達じゃない。

「なにを言っている？」

「……いや、もう良いです」

三輪が女性だったらヤンクーツンのトリプルデレ美女になるのだろうか？

渡された書類を受け取り、記入する。修が出したものと同じなので、何処になにを書けば良いのが分かるのだが、手を止める。

「三輪……私、なに入隊になるんだ？」

これを書かされているということは正式な手続きを踏んで、正式な方法での入隊をしようとしているということだがそれをすれば5月入隊に、いや、修のお陰で2月になるが大分後になるぞ？

「簡単な筆記と運動能力を測る試験だが、その実態はトリガーを使えるか使えないかの

才能を測るものだ。

一先ずはお前が何処まで出来るのかを知らないと話にならない。お前が強く、考えることが出来る人間なのは知っていて、サイドエフェクトも強力なものだが、実際の細かいところが分かっていない」

「随分と買ってくれているな」

「お前について、なにも言わなかった事について上に知られば降格処分も有り得る。

そうになったらお前が俺と陽介と出水を率いてA級まで戻して貰う。その為にはお前がなに出来るかを知っておかなければならないんだ」

ベテランの万能手に、マスタークラスの攻撃手に、マスタークラスどころか10000を超えてそんな弾バカ。

わざわざそれらをB級に降格させればA級に行こうと必死こいてる奴等の邪魔ではないぞ。

東隊の様にメンバーが違ってたらともかく不祥事で降格してメンバー変わらない影浦隊とか一人減ったが、主力が居なくなったわけじゃない二宮隊の元A級の部隊とか既になにかと面倒なの居るのに、ゲームバランスを崩壊させて楽しいのだろうか？ A級を不祥事でB級に降格させるのは、色々と面倒だぞ。

「そうになったら責任は取るがたけのことかはどうするんだ？」

「奈良坂達は太刀川さんの所に行かせる。」

幸いと言えば良いのか太刀川さんの所には狙撃手がないから狙撃手を二人追加し、中距離でサポートを行う奴や狙撃手をメインとして倒して、太刀川さんが近距離で戦う攻撃手を倒すスタイルにすれば良い……親の七光りは知らん」

たけのこ達についてもどうするか考えているのか。

三輪達をA級に戻すのは良いとして、ぶつちやけ修達と戦う場合は八百長をしてしまう自信があるぞ。そして唯我には爆弾でもつけて、爆発させるか攻撃系のトリガーを全て取り外してエスクードとかグラスホッパーとかスパイダーとかの補助に使いそうなトリガーに極振りした方が良いぞ。

「トリガーを使う才能と、どのポジションが合うのかの適性を調べるのには正規の手順を踏んだ方がいい。」

だからといって、筆記試験と体力測定の手は抜かないでくれ。一応、そこでそれなりの成績を出していると入隊時に貰える若干とはいえポイントは多くなる……犯罪歴がないとかそういうのも調べられたりするが普通に試験を受ければいい」

「私、盗んだバイクで無免許で走ったぞ」

「……前科持ちなのか!?!」

「安心しろ……バレてはいないし、やったのは一回だけだ。」

「というか、犯罪歴で言ったらボーダーの方が怪しいだろう。表に出てくる前のボーダー、兵器の所持とかそつち系の法に触れてるだろう」

表に出たのが、あんな感じだったし、今でこそ政府公認の組織とかそういう感じになつてつけど、色々と法律に触れてるはずだからな。動力源がトリオンだから核でも危険物でもなんでもないとさえ言えなくもないが、多分なにかの法律には触れてるはずだ。

「貴虎くん、世界史のノートを持つてる？」

ある程度、書いていると登校してきた熊谷が世界史のノートを借りに来た。

防衛任務で休んだ分を埋めるべく仮に来たのだろうが、タイミングが悪かった。

「あ、三輪くんもノートを……!?!」

三輪が居たので、自分と同じく防衛任務で休んだ分のノートを借りに来たと同じ視線を向ける熊谷。

そこにあつたのは休んだ分の授業を纏めたノート、ではなく熊谷もよく知るボーダー入隊試験を受ける書類で固まり、直ぐに驚くが声を殺す。

「熊谷、世界史は何時間目だ？」

「五時間目よ……それよりもそれって」

「今は気にするな」

「気にするわよ！」

貴虎くん、ボーダーが嫌いだと、今入隊試験を受ければ5月入隊で受験とかと被るし、いったいなんで……」

今までの事とか修は修、私は私と線引きをしたりと一線は引いている。

仲の良いボーダー隊員ともボーダー隊員だからとかそういうの勉強関係以外では言っておらず、熊谷は驚いている。私が言えるのは、今は気にするなの一言だけで、それ以上はなにも言えない。

「私は自分で蒔いた種を自分の手で回収しているだけだ」

「熊谷、2月まで待て」

なんでと細かな詳細は語らず、アバウトな説明で終わらせてなんで入るかを聞かせない様にする。

2月まで待てば良いと、その事については語らない姿勢を貫くときっぱりと諦めて聞かないが、何処かホツとしている。

「……まあ、入れたらの話なんだがな」

「大丈夫よ。私でも入れたんだから。それよりも世界史のノートを貸してくれない？」

「……いや、貸さない」

「え!? あ、今日世界史だったっけ?」

さっぱりと熊谷はこの話を終えて、本題に移るのだが渡すことは出来ない。

この後、世界史の授業だったかと掲示されている時間割を見るのだが、世界史は今日ではなくて慌てる熊谷。

「その、もしかして……ノート、借りすぎた?」

困ったら隊員じゃない私にノートを借りに来る。三輪、小佐野、熊谷、米屋、出水、隠岐と色々借りに来る。

それについて嫌気が差したと思ひ顔を青ざめるのだが、そんな気持ちになるなら一年生の頃になっている。自分が提出するノートとは別に各教科一冊ずつノートをとっていない。

「そうじゃない。五時間目に授業があるということは、昼休みに写したりするんだろ?」
「そうだけど、なにか問題でも?お昼を食べ終えても充分に時間が余ってるし、貴虎さんのノートは写しやすいから直ぐに終わるわ」

「なら、その時間を勉強に回さずに休む時間に回せ……ノートを写すだけなら、私がどうにかする」

そんなことに無駄な時間を割くわけにはいかない。

熊谷にノートを持って来させると私は本気を出し、一瞬で世界史のノートを写す。スタンドの事を知って、テンションを上げまくる岸辺露伴並の絵や文字を書く速度の私ならば無駄な時間を作らせない。

こういうのは自力でやらないと頭に入らないのは分かっている。熊谷の為にならないのも分かっているが、今回ばかりは休むのに時間を優先させる。

何時もとは違う私を見て熊谷はなにも言えず、出水や米屋が登校して来て段々と教室内の人数が増えていき、三輪は去り、授業の開始を告げるチャイムが鳴ろうとするので熊谷も教室に戻り、授業が開始。

「さーっ、昼飯、昼飯」

「お、今日はパンなのか？」

そして昼休みを迎える。

出水は弁当を、米屋はパンと紙パックの飲料を取り出して昼食を取ろうとする。

「無性にカレーパンが食いたくてよ。三雲、一緒に食おうぜ……つと、どうした？」

「出水、米屋……何分で食い終わる？」

「ん……まあ、喋らずに食うのにだけ集中したら10分ぐらいで終わるぞ」

「甘いな、オレは5分で食い終わる！」

「いや、お前パンだからだろう！」

おれ、弁当でお米だから！パンは一つで終わるけど、お米だとおかずとの配分を考えて食わないと後がめんどろに」

「お前ら、そういうの今は良いからさっさと食え」

「さっさとつて、お前が言い出しただろう……眼鏡どうした？」

悪ふざけをしている暇なんて、何処にも存在しない。

私は昼食を食べることなくメガネを外して窓の外を……方向で言えば、ボーダー本部がある方を見てカウントをはじめめる。

「888、887、886、885、884、883」

「なんで888からのカウントをしてるんだよ？」

「882、881、880、879、878、877、876、875、874」

【飯を食うなら早くしろ。諦めるならば、さっさとトリガーを起動したりオペレーターの誰かを呼んだりしとけ】

「ぶっおおう!」

突如としてカウントをはじめ、疑問に持つがカウントに口を使っているの、ノートに文字を書いて米屋に答える。

トリガーの起動の文字を見てクワッと目を見開き、飲んでいる飲み物を米屋は吹き出して私にぶっかけるのだが気にせずカウントを取り、米屋達と筆談をする。

「870、869、868、867、866、865、864、863」

【さっさと選べ】

「いや、ちよっと待て!!お前、なにしようとしてるんだ!」

メガネくんから色々と聞いてたとしても、おかしいだろうが！まさか……迅さん!?」
「853、852、851、850、849、848、847」

【俺のサイドエフェクトで来る時間を割り当ててるだけだ】

急な事に慌てるものの、私の頭がおかしいと疑ったりはせずになにを言っているのか理解して信じる出水。

この段階で俺が出来るのは数えるだけなのと、飯を食うのか食わないのかを決めさせるだけだ。

「ちよつと待て、お前のサイドエフェクトって視力を強化するもんじゃねえのか？未来は見えねえって、言ってただろう」

【その辺について今は説明をしている暇はない。

それよりも今はどうするかをさっさと決めろ。雲行きが一気に怪しくなったりしている】

「何処がだよ」

【信じないなら信じなくて良いぞ】

窓の外は一面の青空で、雲こそあれども普通の真っ白な雲。

黒く淀んだ雨を降らせる雨雲の様なものは何処にもない……と、米屋と出水は見えるのだが私には見えない。ボーダーを中心とし、別空間からの干渉を徐々に徐々に受けて

いて気流の流れや雲の動き、雲や地球が発する電磁波が乱れていく。

「777、776、775、774、773、772、771、770、769、768、767、766」

【開きそうな門の数からして普段からお前達が相手にしている数の十数倍もしくは一体体が物凄く強い近界民が来る。門誘導装置の誘導無効化装置を使って来た場合はその時点で相手の勝利で終わりだが、そんな事をするぐらいならば神戸なんかの人が多い地域を狙う。なので、それは無しと仮定してボーダーを中心とした警戒区域に何時もの十数倍の近界民が出現。今現在、防衛任務中の隊員が何時も通りのシフトで回している場合、太刀川さんみたいに強い人ならまだしも普通の隊員は】

「もういい!!」

「お前、これで嘘だったらおれ達に焼肉を奢れよ!トリガー、起動!!」

カウントを絶対に止めず、ずっと窓の外を見ている私を見て飯を食っている暇は何処にもないと米屋と出水は判断をし、トリガーを起動。私は未来を少しづつ変えていく。

第54話

「……」

米屋と出水がトリガーを起動する少し前。

三門市を一望するのにちょうどいい鉄塔にいた迅は驚いた。

「おいおい、またかよー」

未来が切り替わった。と言うよりは、ハッキリと見えるようになった。

今から数分後に近界民が襲来するのを、今までと……それこそ四年半前の大規模な侵攻を上回るほどの大群で押し寄せてくる未来が見えた。

本当に数分前までは何時来るかどうかすらも分からなかったのに、それが急に切り替わった。

「原因は……米屋と出水だけど、コイツが犯人か」

未来が変わった原因を今見えている未来から推測する迅。

トリガーを起動した米屋と出水が学校に居るボーダー隊員達になにをやってるんだと言われるが、逆にトリガーを起動するんだと言いつつ返す。トリガーを起動しろと言う二人の言葉は、未来が見えない者からすれば馬鹿なんじゃないかと思えることだ。例

え、本部から大規模な侵攻があるとある程度の情報が通達されていようがだ。

意地でもトリガーを使えと言ったり、放送室を借りようと無茶をしようとする二人の背後に常に顔の见えない誰かがいる。

あくまでも視るだけなので詳しい会話の内容は一切聞こえない。だが、幸か不幸か、その人物は言葉でなく文字で米屋達と会話をしており、その文字を見て迅は気付く。今の今まで未来がずれたりしたのはコイツだと。

『迅、緊急事態だ！米屋と出水がトリガーを起動し、暴れている！』

B級以上は基地の外でもトリガーを起動して良い。だが、勝手にはダメだ。

迅の目で見る今は、なんの変哲も異変もない三門市で警戒区域ならまだしも学校内でトリガーを起動した出水と米屋は異常であり本部で近界民襲来に備えて警戒をしている。た忍田本部長は迅に連絡を入れる。

「忍田さん、二人はなにか言ってるの？」

『それが、10分もしない内に馬鹿みたいな数の近界民がやって来ると言っていて……今のところ、こちらに異常はない』

「それ合ってますよ」

『な!?!』

「たった今、見えました。後数分で近界民がやって来ます。」

だから、二人を止めようとトリガーを起動する隊員に、戦わずにそのまま学校の生徒の避難誘導とかをするように指令をお願いします」

『分かった……迅、これはお前が仕組んだのか？三輪がそう言ったのだが』

「来る日が正確に分かっているんですしたら、シフトの調整をして全員が戦えるようにしていますよ。これ、オレじゃないです。二人の近くにいるオレの知らない誰かがサポートをしています！そいつに色々と聞いた方が良さよつと、オレも少し動きますので忍田さんも動いてください！」

『二人の近くにか、了解した』

色々と気になることは多い。特に未来を変えている人物は色々と気になるが、そちらに意識を持っていけば多くの人達が傷つく。

迅は自分が何処に行けば良いのか分かり、急いで自分がすべき事をする。と天羽がこれから向かう北西の警戒区域に先回りをする。

「うっし、さっさと警戒区域に」

【待て、（；—ω—）ノ。お前達が行ったところで焼け石に水だ！

「言ってくれんじやねえの。オレ達、一応はA級だぞ？」

【槍が西！弾が東！開いている北と南の地区は誰がやるんだ！】

そして時が少しだけ遡り、トリガーを起動した米屋と出水は急いで警戒区域に向かお

うとするのだが貴虎に止められる。

二人が行つてもそんなに意味はないと言い、舐めんなよと逆にやる気を出すのだが、もうこれはそういう感じの話じゃない。やつてることは戦争となんら変わりない。というか戦争である。一瞬にして二人を黙らせて、足を止める。

『こちら、本部・トリガーを起動したようだがなにながあつた？』

冷静になり足を止めると本部からの通信が入る。非常事態なのでまさかと緊迫した空気を纏った声の忍田本部長は起動した理由を聞いた。

「つと……」

「721、720、719、718、717、716、715、714」

「10分もしない内に近界民がバカみたいにやって来ますんで、トリガーを起動しました!!」

手で○を作り、なにかやれと言う文字での指示を一切せずに窓の外を見ながらカウントをする貴虎。

これは言うしかないと本当に色々と噛み砕いて状況を説明すると教室は一瞬でざわめく。

「陽介、出水！何故勝手にトリガーを起動している!!」

そして隣のクラスから騒ぎを聞き付けて、飛び込んでくる三輪。

「秀次、アレ、アレ！」

「698、697、696、695、694、693」

【尺が無い、時間が無いのを信じろ】

米屋は慌てることなく、私を指差す。

『こちらのレーダーにはなにも写っていないが？今は非常警戒中だ、トリガーを』

「つ……！迅がそう言っていました!!」

なにをカウントしているのか、なんの時間がないのか、なんでトリガーを起動したのか三輪は気付いてくれる。

そしてこの場を切り抜けるのに物凄くまでに効果のある実力派エリートが言っていましたと言う今までも使いたくない嘘をつき、自身もトリガーを取り出し、窓から飛び降りながらの起動をしようとするのだが米屋に止められる。

「なにをしている！急いで、警戒区域に行くぞ！」

「オレ達3人だけじゃ東西南北すら守れねえ！」

「643、642、641……」

米屋達がトリガーを起動し、軽い騒ぎになり何事かと集まる野次馬達。

それを見て此処等が潮時だとカウントをするのをやめた貴虎はノートを閉じてカウントをやめた。

「……出水」

「なんだ？」

「ちよつと、乱暴な事をするがそれらの責任をボーダーに押し付けるぞ」

これ以上、ここで騒ぎを大きくしても野次馬が集まったりするだけだ。

騒ぎを大きくして周りの視線や意識を集めることには成功をしていると貴虎は罪を全てボーダーに擦り付ける気満々で人混みを無理矢理と駆け抜けていった。

「おい、ちよつと待て！」

そしてそんな貴虎を追いかける米屋。

カウントをやめ、ボーダーに押し付けると言われてもピンと来ない。ただ、よからぬ事をしようとしている事だけは分かると追いかけていくと、放送室に辿り着く。

幸いと言えば良いのか、お昼の校内放送で使われていたのでドアに鍵が掛かっているということではなくスナリとドアは開いた。

「そうか、放送室を使えば学校全体に！」

どの隊員が何処にいるのか正確な位置を割り出すことが出来ない。

貴虎がその気になれば見つけることは一応は容易なのだが残された時間は5分ちよつと。その時間を思いっきり有効に使うには、此処しかない。

「え、ちよ、今、お昼の放送だぞ!？」

「すみません、ちよつと借ります!!」

突如として米屋と貴虎に驚く放送部員。

一言謝り米屋は放送機材と放送時間を借りるのだが、目の前にある放送機材をどう使えばいいのかよく分からない。だが、貴虎はどうすれば良いのか、サイドエフエクトで機材から出ている電磁波を見てはじめて使う機材の何処に触れれば良いのかが分かり

『近界民襲来!・近界民襲来!』

近界民が襲来した時を想定した避難訓練で使う警報を鳴らした。

「ちよ、ちよつとなにを」

「後、数分で近界民が来るって情報があるんすよ! さつさと地下のシエルターに避難してください!」

突如として鳴らされる警報に驚き、イタズラだとしてもそれはやりすぎだと止めようとする放送部員。

今から本当に近界民が来ると正隊員でトリガーを起動している米屋が言うことにより、信憑性が少しだけ増していき顔を青ざめ、米屋が追い出した。

「ほら、いったいた!」

放送室の外は突如として鳴らされた警報により、慌ただしくなっている。

今、鳴っているのは本当に近界民が襲来した時と違う避難訓練用の警報だ。学校の避

避難訓練は基本的に何時やるか予告している。しかし、今鳴っている警報は予告されたものでなく、突如として鳴り響いたもので、死人が出る前に防ぐことができたイレギュラー門の一件もあつてか、もしかしたらと騒ぐ生徒が続出していた。

「やばいぞ！先生達が」

「出水、米屋！開けなさい!!」

外には急に避難訓練用の警報が鳴つたと、放送室でなにかあつたに違いないと教師達が入ろうとするが出水が割り込んで乱入。すかさず、鍵を閉めて開けられない状態にする。

「来る途中、熊谷達が質問攻めにあつてた！

このままだとおれ達がやつてることが全部、水の泡になっちゃう！なんかねえのか!?!」

突如として鳴り響いた避難訓練用の警報。避難訓練でもなんでもないので鳴り響き、ボーダー隊員ならなにか知っているのではないのかとなり質問攻めにあっているのを見掛けたというか自分もあつた出水。

このままだと避難するとなり、数分の遅れが発生する。たった数分、されども数分。A級隊員として最前線で活躍している二人にとって、その数分がどれだけの価値があるのか誰かに聞くまでもない。

「こうなったら……教室に置きっぱなしだった!!」

仮面ライダードライブでやったあの手を使い、近界民が本当に襲来してきたと思わせる。

懐に手を入れてロストドライバーを取り出そうとするのだが、懐にはなにもないことに気付く。貴虎が着ているのはブレザータイプではなく学ランタイプの制服で、裏ポケットとかそんなもんは存在しない。なので懐には入れられない。トリガーと違いコンパクトではない。

「なあ、弾バカ」

「んだよ、こんな時に!」

「今日、当真さんって休みだっけ?」

「太刀川さんと同じで本部待機だった筈だぞ!」

「あいつの声、使えんじゃね?」

どうしようも秘密道具を出して慌てふためく映画版のドラえもんの様な姿を見せる貴虎。

そんな貴虎の姿を……声を聞いて一つの妙案が米屋に浮かぶ。

「声……そういえば、当真さんが似てるつってたな……おいおい、ちよつと待て!」

声の感じは似てるけど、三雲は会ったことないんだぞ。三雲がモノマネとか滅茶苦茶

うまいの知ってるけど、会ったことないモノマネは無理だろう!」

「今はそれに賭けるしかねえ!一か八かに賭ける!三雲!」

「なにをすれば良いんだ!」

「冬島さんのモノマネをしてくれ!!」

貴虎の声は、その見た目が青学の部長もあつてか置鮎さんだ。

同じく中の人的な意味で一緒なボーダー隊員が一人いる。A級二位の隊長で現場(前線)で働くボーダー隊員の中でも最年長で5人いるエンジニアチーフの一人、冬島慎次。貴虎と同じく中の人が置鮎さんだ。

「なにすれば良いのかなんとなく分かるが、大丈夫なのか!」

貴虎と冬島は声が同じだ。

顔が見えない声だけの校内放送でモノマネをし、トリガーを起動する様に言う。

A級二位の隊長でエンジニアチーフの1人がトリガーを起動する様に指示し、避難させてくれと頼み込む。

「安心しろ、当真さんは本部待機、小佐野は諏訪隊が防衛任務中だ!」

冬島隊に所属するN.O. 1狙撃手の当真は貴虎と冬島の声が物凄く似てる事を知っている。一緒に麻雀をするぐらいの関係の小佐野も貴虎と冬島の声を聞き分けることぐらいは出来る。

その二人が学校に居ないのは幸運だが、それでもリスクが大きい。

「開けなさい!!」

扉の向こうには先生達が居る。

鍵を閉めているが、何時予備の鍵とかで開けられるかわからない。

「出水、お前がなんか土台を作ってくれ!いきなりの冬島さんだと信憑性が薄い!」

目の前にはTV局やラジオ局レベルの放送機材はない。校内放送用の何処にでもある機材だ。

ちゃんとしている機材で急場凌ぎのモノマネを流せば分かる人に分かるし、外には教師陣がいて貴虎が中にいると言いつらせば終わる。高確率でバレる。

だが、数分間稼ぐことが出来る。後、数分で近界民がやって来るのはもう分かっている。欲しいのは数分間だけだ。

「米屋、数分間だけ扉を防げ!」

「あいよお!!」

右手で鍵を左手でトアノブを掴んで絶対に開けない様に固定。

数分間だけ絶対にドアが開かなくなったのを確認した後、米屋を背に出水と貴虎は動く。

「土台って、なにすりゃ良いんだよ!?!」

「適当な理由を作ればいい！なんでこんなことをしてるとか、連絡があつたとか！ボーダー隊員だけが知ってることとか、言葉を濁して、アレとかソレとかコレとか具体的な事を言わなくて良い！」

「アレとかソレとかコレとか……三雲！」

ボーダー隊員だけが知ること、アレとかソレとかコレとか言つて言葉を濁す。具体的な事を言わなくて良く、最終的には貴虎に繋げる。貴虎がいきなり出れば、嘘だと分かる。冬島のモノマネをする貴虎が極々自然に出てこれるように土台が必要になる。出水がその土台となる言葉を考えると、貴虎は放送を入れる。

「ボーダー隊員に告ぐ、ボーダー隊員に告ぐ！当真さんが本部待機の為に此処との連絡が取れないので、同じく本部待機の太刀川さんを経由しおれこと出水に伝わった！ざつくりと言えば例のアレで、トリガー起動して全員と通信を一斉に繋げたりする時間すら無い！悪いが、おれの通信を経由して冬島さんの言葉を聞いてくれ！」

伊達にボーダーのトップの部隊に所属し、過酷な遠征を経験はしていない。

近々、大規模な侵攻があるという事はボーダーで通達があり、戦闘が出来ないC級隊員も万が一の時はトリガーを起動して避難誘導をしてくれと言う指示が来ている。その事について外部は知らされていない。しかし、ボーダー隊員は知っており、その事についてハッキリと言わずに例のアレと言葉を濁す。

その上に今日学校に来ていない当真を出してからのこの学校にはもう通つてはいないが、ボーダー隊員なら知つていて当然の太刀川の名を出して、学校内にいるボーダー隊員の意識を向けさせた。

「時間が無いから、手短に言うぞ！一度しか言わないから聞いてくれ！」

上から色々と連絡があつたアレがもうすぐ起きる！総員、トリガーを起動して準備に入つてくれ！

A B問わずオペレーターは本部各支部に急行で三門第一高校に自身の隊の隊員全員が揃つている場合は現場に急行！

そうでないものは六穎館や三門大学、三門中学に通う自身の隊の隊員に連絡！手の空いている戦闘員はボーダー隊員以外の生徒及び教職員を1クラス3人ぐらいの割合で避難誘導を！

避難誘導が終わつたら各々動き出して欲しいが、相手の底が見えない。だから、A B共に単独での行動は禁止。B級隊員は合流地点を決めて部隊を集結してからの出撃！

A級隊員は部隊での合流が無理ならば同じA級隊員と共に混合部隊を、最低でも2名以上、最大で4名まで！合流及び混合部隊が不可能な位置にいる隊員及び部隊を組んでいない隊員は警戒区域付近の市街地に向かい、一般市民の避難誘導！近界民が侵入した場合、侵入した近界民を倒すのに集中してくれ！」

後は数分間だけ、嘘を信じさせれば良い。

「つて、おい！お前、なに指示してんだよ!？」

近界民が襲来してくると分かったから、トリガーを起動して避難誘導してくれ。

それだけで良いのだが、それ以外の事について貴虎は言った。もう本部からの指示かと思うぐらいにコレでもかと思した。

「色々と考えた結果、そうなたただけだ。ぶっちゃけ似たような指示は来る。米屋、リーダー」

言ったことについて反省しない。と言うよりは、言った方が良い。

そう判断した貴虎は米屋にボーダーのトリガーに備え付けられているリーダーの機能を使わせる。

リーダーはそこかしこにトリオン体の反応があると映し出しており、今の放送を聞いてトリガーを起動した他学年の隊員達がトリガーを起動したのが分かる。

「避難訓練をした際に移動と人数確認の点呼だけで十数分掛かる。

移動時間の短縮及び避難誘導するやつとしないやつを分ける。合流可能かどうか確認……十数分の価値はある」

なにもしなかった場合に辿り着く未来にはもう向かわず、最善の未来へと着実に向かう為の時計の針を少し進めた。

本来よりも数分早く、本来よりも二十数分の時間を得ることに成功したと感ずる。

「お前達、どうする?」

良い感じの未来に向かうべく二十数分のアドバンテージを得ただけで、まだまだ油断は出来ない。

一先ずは目の前にいる頼りになる個人としても確かな実力のある二人は次にどう動くかを聞いてみる。

「槍バカと一緒にトリオン兵をぶつ倒す」

「オレと一緒に?」

「太刀川さんは今、本部にいるから合流できなくもないけど、太刀川さんは何処かの手薄だったり危険などに行かされると思う。穴埋め要因で欲しいのは近距離で戦える攻撃手だ。おれは一定の距離を開けての戦闘をしないといけねえから、太刀川さんと合流して穴埋め要因になっても戦力過多になる」

「米屋は?」

「じゃあまあ、こいつと一緒にトリオン兵を倒してくる。」

秀次と一緒に奈良坂達と合流して部隊での行動が良いかもしれないねえけど、下手したら合流すら出来ねえし、あつちいつてこつちいつてになると思うから奈良坂達が生かせない場所に行かされるかもしれないねえ」

「そうか」

貴虎は一応の為にと、この後どうするのかを聞いて安心する。

奈良坂達や太刀川達と合流しても戦力過多になる可能性が高く、別々での行動が最善手だ。もし行こうとするなら、なにか言っておくべきかと思っていたが、自分達がやるべき最善手があるのかを分かっている。

「あ、やべえー！」

特にどうしろと言わない貴虎を見て、気を引き締めようとする米屋だが手に違和感を感じた。

ドアの向こうにいる教師がドアの鍵を必死になって開けようとしており、米屋はそうはさせまいと掴む。

「もういい、一分切ってる！」

「ばっ、お前それ先に言えよ！」

色々とやっている内に残された時間は数十秒となった。

数十秒しかないのならばもう鍵を握っている必要はないと米屋はドアノブと鍵から手を離れた。

「お前達、なにを勝手なことをしているんだ!!」

その瞬間、開かれる放送室のドア。

開くと同時に貴虎達の担任が怒りながら大声で叫びながら入ってきた。

「米屋、出水！幸いにも1クラスに1人か2人は隊員はいる！」

避難誘導は1クラスにつき2、3人の割合と言ったが、お前達みたいな実力派エリートは避難誘導させるよりも現場に行け！！B組の避難誘導ぐらい、私がする！」

1人でもいい。1分1秒でも早く優秀なボーダー隊員達を戦闘体制を整えさせる。

貴虎は二人を取り押さえようとする担任の壁となり、米屋達に後押しをする。

「サンキュー！！」

入ってきた担任の動きを貴虎が抑えている隙に米屋と出水は放送室を抜け出して直ぐにある廊下の窓から飛び降りる。

「おいおい、マジかよ」

「今日一日は快晴だって、お天気お姉さん言ってたぞ」

米屋と出水は目の前の光景を見て冷や汗を掻いた。

自分達がお昼を食べようとしたその時までには雲こそあれども快晴と呼ぶに相応しい天気だった。傘を持ってきている生徒なんて全くといっておらず、この後雨が降るとも曇りともニュースではいっていない洗濯物日和だった。

今、目の前に広がる光景はどうだ？雲の数が段違いに増えて太陽の光を遮って今にでも雨が降りそうな雰囲気醸し出しており、コレが本当に数分前に見た外の景色なのか

と思う変化を遂げていた。

「弾バカ！弾の貯蔵は充分だよな！」

「そつちこそ、槍は刃こぼれしてねえよな！」

もうコレは何時もと比較することすら烏滸がましい量が来ると感じた二人は颯爽と学校を飛び出し

『門発生！門発生！大規模な門の発生が確認されました！』

警戒区域付近の皆様は直ちに避難してください！繰り返します、大規模な――』
警報が鳴り響いた。

第55話

「はあ、疲れた」

更に時を遡り、場面は修が通う三門市立第三中学に変わる。

ボーダー公式ホームページが更新され、修の名前が載った。修が通う第三中学には修しか正隊員がいないのと、ラッドの一件で町中修擬きにした為に修は一躍ヒーローになった……のだが、凄く肩が重い。

「人に囲まれるのは疲れる」

「オサム、しよっちゆう囲まれてるじゃん」

ヒーローだとボーダーだとわっちやわっちやされ、馴れない経験をして疲労困憊の修。

遊真は見知らぬ奴を不良から助けたり上層部に睨まれてるのになにを今更な事を言っていると皮肉を言い、弁当を開こうとすると千佳と見慣れない女子がやって来た。

「修くん」

「おーさむさむさむ」

「おーチカ」

「そつちの子は？」

「一緒に狙撃手になった、出穂ちゃん」

「どうも夏目出穂っす」

千佳と一緒に来たのは千佳と同じく入隊し狙撃手を志望した夏目出穂。

入隊日に千佳がアイビスで本部に大穴を開けたのをきっかけに仲良くなった千佳と同学年の子。千佳の友人で、同じ隊員と分かると修達は軽く挨拶をする。

「あのさ、修」

「なんだ？」

「この際だから、聞くけどスカルってオサムのおにいさん？」

「むっ!？」

お昼御飯を食べる修達。

聞くならば今しかないと言っていると遊真は今まで触れていなかった事を聞き、突如として聞いてきた事に修は喉を詰まらせる。

「オサム、少しは冷静にした方がいいぞ」

露骨な反応を見せた。

それはもう合っていると云っているも同然で、少しぐらいは隠す素振りを見せない。遠征先で大変な目に遭うと遊真は呆れ、修はお茶を飲んで詰まっていたものを流し込ん

だ。

「……なんで、分かったんだ？」

嘘を見抜くサイドエフェクトを持っている遊真に下手な誤魔化しは通じない。

何故兄がスカルなのかと、ボーダー本部が色々と手を焼いている中で分かったのかを聞いてみた。

「ん〜まあ、トリオンがあんなにあつて物凄く強そうなのつてオサムのおにいさんぐらいいじゃん。」

近界民についても誰かが教えたわけじゃなくて自力で考えたらしいし、大規模な侵攻に備える為に1ヶ月待つてつて言つたんだろ？」

「……よく、わかつたな」

『殆どは私が考えたことだ。』

兄殿はなにかを隠している、そのナニかをスカルと当て嵌めた。

奇跡的、と言えば良いのだろうか？ 兄殿と関わりのあるボーダー隊員はそれなりにいるが色々兄殿について知っていたりする情報がバラバラだ』

既に貴虎と関わりのあるボーダー隊員の大半はスカルについて知らない。

スカルについて知っている風間隊は風間と少し関わりがあるぐらいで二宮隊は皆無。レイジも顔見知り程度で、東とは会ったこともない。太刀川と親交はそれなりにあるが

太刀川はスカルを見ておらず、人型の近界民に逃げられてしまった程度のことしか聞いていない。

出水と米屋はスカルについては知らないが、遊真が近界民だということを貴虎が知っていることを知っていて、裏で色々としていることを知っている。

もしその2つの情報が混ざれば、捜査線上に貴虎が浮上するのだが本当に奇跡的なのか、情報が統一されていない。

「兄さんがスカルだよ……」

「そうか……」

レプリカの推測に遊真のサイドエフェクト。

修は正直に答えると遊真は弁当を食べるのだが、それ以上は深く聞いてこない。

「聞かないのか?」

スカルがなんなのか、それについてポーターは必死になっている。

遊真も聞いてくるものだと思っただが、遊真はその確認をただけでなにも聞いてこない。

「おれがオサムのおにいさんに言うことは精々、オサムのおにいさんのせいで変な疑いをかけられた事だけだ。

オサムのおにいさんが起こした事とかそういうのに関してオサムは色々知って

るっばいし……なによりも、1ヶ月待てば良いんだろ？」

1ヶ月待てば良い。

貴虎は1ヶ月待てば三輪達に力を貸す。ボードーに入ることになっている。

遊真の事を知っているとかあのトリオン量ならば入隊までの過程を問答無用ですっ飛ばせる。なら、強行手段を取らなくて良い。遊真はそう判断をした。

「それに、上のえらい人達、おれにだけ聞いてきてオサムになにも聞かなかつたんだからな」

「言うな……」

スカルどうのこうので質問攻めにあつたのは遊真で、修は一切眼中に無かつた。

聞けば案外、ポロつと溢すのに聞かなかつた奴が悪いと変な理論を翳す遊真。確かにそうかもしれないけれどと言わなかつた自分に対して罪悪感が込み上げてくる。

「そういうえば、大規模な侵攻があるのをC級にも伝わっているのか？」

「一応来てたよ。おれらC級は戦えないけど、避難とか救助なんかのサポートでトリガーを使って良いって……この前のラッドが門発生させる機能がついてたから万が一の有事を想定してルールが変わつたと、オサム達がボードーのルールを変えたな」

「持ち上げるのはやめろ」

結局、持っていっただけで特になにもしていない。

本当に褒められるべきは自分でなく兄だと思ってるので褒められることは全くといって嬉しくない。というか、お前全て知ってるだろうと少しだけ遊真を睨むのだが、直ぐに学校に行く前の事を思い出してポケットに手を入れて、兄から受け取ったものを出す。

「それは確か、ゆーえすびーメモリとかいうやつだっけ？」

「違うよ、これはトリガーだ」

一見すれば、ちよつと変わった装飾が施されているUSBメモリに見えるが違う。

『コレが兄殿のトリガーなのか』

見た目こそUSBメモリだがトリガーだと教えるのだが、遊真達は特に驚かない。

トリガーを使う奴をぶつ倒すにはどう頑張ってもトリガーを使わなければならない。

この世界でトリガーについて色々と研究していたりするのはボードーだが、そのボードーは5年以上前までは政府非公認の秘密の組織で極秘でトリガーを開発してたりした。だったら、他にそういうのがいても別におかしくはない。

「オサムのおにいさんって向こうの世界に行ったことあるの？」

「行ったことはない。」

と言うよりは、これは偶然に兄さんが拾って、そのまま兄さんの物になっただけなんだ」

「トリガーを拾うって……確かに、小さいけど」

自身の持つ指輪型の黒トリガーと違い、ボーダーの棒の様なトリガーに近い形状のガイアメモリ。

落とすことはありそうだが、拾ったとはまたなんとも胡散臭い話だ。拾ったならば、制作者が必死になって探しているだろう。

「なんでオサムが持つてるんだ？」

それを貴虎が使うのならばまだしも修に渡した意味が分からない。

「このトリガー、僕しか起動できないんだ」

「……それって黒トリガーじゃん」

修にしか起動することが出来ない。それはつまり適合する特定の人物にしか起動することが出来ない黒トリガーだと目を見開く遊真。

「これと似たようなものを兄さんは20以上も持つてる」

「!？」

更に衝撃的な事実を修から言われ、言葉がでない。

どちらかと言えば遊真が修を驚かせることが多いのだが、今回は真逆。修が遊真を驚かせ続ける。

「多分だけど、黒トリガーじゃない」

黒トリガーは人の命で成り立つ代物。

近界民の国でも黒トリガーを持っているところは少なく、持っている数が多い国でも15個。ボーダーも2個しか持っていない。だから、修はこれが黒トリガーとは思えない。

「でも、特定の人物にしか使えないんだろ？」

「そう言われると、そうなんだけど……」

『いつそのこと解析を試してみるのはどうだろうか？』

「大丈夫なのか？前に勝手に起動して、暴走したことがあるんだ」

『勝手に起動……ますます興味深い』

何処産だろうがトリガーを起動する時は起動すると明確な意思を示さなければならぬ。

勝手に起動してというのもレプリカも知らないことであり、解析しようと遊真の指輪から黒いコードを伸ばしてジョーカーメモリの端子部分にくっつけて解析をはじめめる。

「どう、だ？」

詳しいことを全く聞かされていない修。使えば基礎能力が大きく向上するぐらいしか聞いておらず、結局どう言うものなのかなんでなどという理由を貴虎からは聞いていない。

まあ、転生特典なのだから仕方ないと言えば仕方ないのだが、貴虎自身もガイアメモリがなんなのかと他の2つと比べても上手く説明することが出来ない。

『これは……』

「なにか分かったのか？」

『解析にかなりの……途方も無い時間が掛かる』

ジョーカーメモリの解析をはじめたレプリカだったが、直ぐに断念をした。

「昼休み中には無理なのか？」

最初はかなりと言っていたが途方も無いと訂正したレプリカ。

レプリカの優秀さは遊真が誰よりも知っており、近界民の技術ならばもの数秒で解析してハッキングが出来、こちらの世界の道具でも数分あればハッキングが出来る。そんなレプリカがボーダーのトリガーと同じぐらいの大きさのUSBメモリの形をしたトリガーの解析を諦めた。

余程の情報量なんだとどれくらいで解析が可能なかを修は聞き

『分からない』

レプリカから返ってきた答えは分からないだった。

「分からないって、どういうことだよ？」

『このトリガーを瞬時に解析する事が出来なかった。』

ボーダーのトリガーならばどんなに時間が掛かっても数分で可能なのだが、これはそんな生易しいレベルじゃない。

私は遊真の相棒兼お目付け役として様々な機能がある。仮に解析に特化して作られたとしても、それこそこの学校程の大ききで作られたとしても、底が見えない』

「えつと……」

『要するに、このトリガーを解析するには10分15分といった時間では足りない。

1日、1週間、1ヶ月、もしかすると1年以上も解析するのに時間が掛かる可能性がある』

「これにそんなデータが!？」

レプリカのスペックを、レプリカ以上のスペックを持つとしても解析するだけでどれくらいの時間が掛かるのかが不明。

しかし当然と言えば当然なのかもしれない。修の持つそれはガイアメモリ。地球に記憶されている現象や事象等を再現するプログラムが組み込まれており、地球の記憶の一部が組み込まれている。

この星に記されている切り札の記憶が入っているものはそれこそ学校程度の大ききスーパーコンピュータがあつたとしても解析するのに何年も掛かるだろう。

『本当に欠片しか解析しなかったが、切り札というワードに関するデータが入っている』

「切り札？なんだそれ？」

もつとこう、物凄い武器とか能力とかを期待してたのか少し残念そうにする遊真。

残念ながらジョーカーメモリにそんなものは一切無い。あるのはただの切り札の記憶だけであり、使用者のスペックを上げる力だけだ。そしてその辺も理解しきれてないのか余りピンと来ない修。

「それ、今までずっと持ってたのか？」

「……今日、渡された」

ジョーカーメモリを何時から持っていたか聞くと、言いにくそうに今日、渡された事を言う。

修はそれ以上は言わず、遊真もお弁当のおかずを頬張り無言の状態に入ろうとするのだが

『それはつまり』

レプリカがそれを渡そうとし

「！」

「チカ子？」

千佳が異変に気付き立ち上がった。

出穂と物凄く仲良く談笑していたのに、一瞬にして、そして一瞬だけ雰囲気が変わり

学校の外を見つめ、修と遊真も後に続き見る。

「な、なんスカあの量?！」

最後に見た出穂は叫ぶ。

ここからははつきりと見えないものの位置や距離からしてボーダー本部を中心にこれでもかと言うほどに門が開いている。

「……」

「オサム、鳴ってるぞ」

「あ、うん」

ジョーカーメモリを見て、意識を別のところに持つていった修は遊真に指摘され緊急呼び出しに気付き、内容を確認の後、お弁当をしまう。

『門発生! 門発生! 大規模な門の発生が確認されました!』

警戒区域付近の皆様は直ちに避難してください! 繰り返し、大規模な――』

「先生!」

「三雲くん!」

真つ先に向かうは自分の教室。

異変に気付きざわめくクラスメイト達は修に視線が向いて、どういふことかと聞きたそうな顔をするので修は呼び出しがあったので向かう事を伝え、もしかすると警戒区域

を出て行ってしまいかもしれないと基地から出来るだけ遠くに避難するよう頼んだ。

「千佳、お前は皆と一緒に避難を。」

この学校にボーダー隊員は僕達しか居ないから、なにかあれば直ぐにトリガーを使うんだ」

「うん」

「夏目さん、千佳と一緒に避難誘導を。出来る限り、警戒区域本部付近には近付けさせないように」

「了解つす、メガネ先輩」

「空閑」

「ほいよ」

「一緒に来てくれ。トリオン兵を食い止めるぞ」

「そう来なくっちゃ」

千佳と夏目は避難誘導をさせ、戦い馴れている遊真は避難誘導するよりもトリオン兵を倒した方がいい。

最年長の修が今できる最適な指示を出し、各々がなにをすれば良いか理解する。

「チカにもちびレプリカを渡しとくよ」

「え、なんすかコレ!?!」

『携帯電話の様な物だ、気にしないでくれ』

「喋った!？」

「出穂ちゃん、避難が出来たら説明するよ」

この場で色々と事情を知らない出穂はとにかくリアクションが大きいのが、対応している暇はない。

後でちゃんと説明してよ!で今を終わらせる出穂は中々に大物かもしれないと遊真は思った。

「危ない時はよんでくれ……おれか、オサムか……それともあの人が来るかもしれない」
「うん!!」

ちびレプリカを託し、学校から走り去りながらトリガーを起動する遊真と修。

「チカは、なんの疑いもしてなかったな」

「来るって信じてるんだ。」

兄さんは、本当にどうしようもない時にやって来るって」

千佳が誰と捉えたかは知らないが、遊真が言ったあの人は貴虎だ。

レイジさんともとりまる先輩ともこなみ先輩ともジンさんとも言っていない。あの人とあえて言ったのだが、千佳は迷いなく首を縦に降った。本気で隠れている自分を意図も容易く見つけることの出来る貴虎ならば来ると知っているから。

「オサムのおにいさんはこうなるって分かってたみたいだけど、なんで？」

貴虎はジョーカーメモリを修に今日、渡した。

今の今まで修が隠していたのでなく、貴虎が隠していたものを今日渡した。渡す機会ならばごまんとある。なんなら、明日にもあった。だが、今日、渡した。

それは偶然でもなんでもなく狙って渡している。今日、大規模な侵攻があるということを見抜いていたからだ、それがどうしてわかったのかよく分からない。

ボーダーの技術とレプリカのデータ等を使って、近界民の国のうち、アフトラトルかキオンが10日間の何処かでこっちの世界にやって来るぐらいしか分からず、未来を視ることの出来る迅ですら正確な時間が分かっていたいなかった。

「多分、占いだよ」

「占い？」

迅ですら正確な時が分かっていたいなかったのに、貴虎は当てた。

サイドエフェクトかとなるが、貴虎が視覚強化のサイドエフェクトを持っていて未来視のサイドエフェクトを持っていないという話はチラホラと聞いており、どんな原理か聞けば物凄く胡散臭い答えが出てきた。

「僕も詳しいことはよく分からないんだけど、兄さんのサイドエフェクトの本質は色々見ることが出来るんだ」

「色々って、遠くのものを見るとか物凄く早いものを見るとかじゃないのか？」

「確かにそれも当て嵌まるけど、その辺は道具の力を借りればどうにでもなるんだ」

遠くのものを見たければ、双眼鏡なり望遠鏡なり用意すればいい。

物凄く早い動きを見極めたいのならば、カメラにでも録画してコマ送りにでもすればいい。

色の違いを見分けるのならばスキャンする道具かなにか使えばいい。

真つ暗な場所でも暗視スコープを使えば、ちゃんと見える。

貴虎のサイドエフェクトは割と現代の文明の利器で再現できたりする。

「兄さんは人間が見えない電磁波も見える

僕も空閑も電磁波を見ることが出来るけど、それは可視光線の範囲内。

普通の人は約380nmから約750nmまでしか見ることが出来ないけれど、兄さんの目はそれ以上の波長もそれ以下の波長も見ることが出来る。兄さんは物体から発する電磁波を見て占いに応用していて、的中率が90%を越えるんだ」

「……そうか」

『ユーマ、簡単に言えば兄殿は電波等の機械では分かるが、目では見えないものが見えていて、世界を移動する際にはどの世界でも門を開き、その過程で空間が歪んだり磁場が狂ったりする。兄殿はそれらを見切り予測しているということだ』

「おおつ、成る程！」

よく分からない説明をされちんぷんかんぷんになる遊真。

レプリカからの説明を聞いて表面上だけ納得するのだが、あることに疑問を持つ。しかし、修がその事についてなにも言わず、貴虎もその辺を気にしてる素振りを余り見せないで、聞こうとはしなかった。

「レプリカ、まだ小さいのを出せるか？」

代わりに修がレプリカにちびレプリカを出せるか聞いた。この場にはない貴虎と情報共有や動向を知るべく、通信をしたい。

『可能だが、兄殿の学校まで距離がある』

ちびレプリカをもう一つどころかかなりの数を出せるが、別の問題がある。

ちびレプリカを貴虎の元に届けるまでそこそこの時間か掛かる。そもそもで貴虎に辿り着けるかどうか怪しい。

「いや、学校には行かなくていい」

現在地から三門第一高校までは距離がある。

それまでに貴虎が大人しく待機しているとは思えない修は貴虎が絶対に向かう場所を思い浮かべた。

「僕の家に行ってくれないか？」

『家にて?』

「兄さんは一度、家に帰るはずだ」

何処にあるかは知らないが、貴虎は自分と最も相性の良いトリガー(ガイアメモリ)を何処かに隠している。

余りにも危険すぎるからと意図的に隠しているトリガー(ガイアメモリ)を使わない可能性はある。ならば、自分が知る限り最も使用しているトリガーを使う。ボードアのトリガーと違い持ち運びには不便で、一度家に帰るはずだ。

「だから、一度家に向かつてくれないか?」

もし、兄さんが居なかったら母さんの安否も知りたい」

万が一、億が一が目の前に迫ってきている。

あの母ならばまあ、問題ないだろうがなんとも言えない嫌な予感がする。

『了解した』

レプリカはちびレプリカを作り、修達が来た道を逆走。三雲家に向かつて飛んでいった。

第56話

大規模な侵攻があり、警報が発令。

私は警報が鳴る時間を当て、米屋達と共に未来を変える。修も私が動き出すことを知り、ちびレプリカを自宅に向かわせた。一方、その頃、ボーダー本部の管制室は慌ただしかった。

『諏訪隊、現着した！近界民を排除する！』

『鈴鳴第一、現着！戦闘開始！』

『東隊、現着。これより攻撃を開始する』

近界民（トリオン兵）の数は尋常でなく、西、北西、東、南西、南と五ヶ所から市街地に向かおうとしていた。

西と北西を迅と天羽に任せるように本部長は指示し、本日防衛任務中だった部隊を残りの東、南西、南に向かえと指示。その間に移動するトリオン兵を事前に仕掛けていた罠を起動させて足止め。その間に三部隊が到着し、戦闘を開始。

「嵐山隊、風間隊、柿崎隊、茶野隊、荒船隊、香取隊もトリオン兵を倒しつつポイントに向かっています。

現在県外スカウトで他の隊員達が不在の草壁隊の緑川隊員は同校に居る加古隊の黒江隊員と共に行動、加古隊に合流した後、米屋隊員と出水隊員の元に向かうそうです」

「あんの、バカども！ さっさと言わんか！ 冬島の奴は知らんと言つとるぞー！」

他の隊の動向等についてS村さんが本部長に報告すると鬼怒田さんは青筋を浮かべる。

他よりも10分だけ行動が早かった三門市立第一高校に通うボーダー隊員達。

オペレーター以外が固まっている香取隊は即座に動くことができ、現場に向かうことが出来る様になっていたのだが嘘だとバレた。

「校内放送が流れた時、冬島は仕事をしておった。

学校の校内放送は独立した機械でハッキングなんぞすることはできん！ 犯人が居るはずだ!!」

私がした雑な説明は割とあっさり嘘だと見抜かれる。

六穎館にも、三門大学にもボーダー隊員の学生や生徒は多数居るのに、それらを無視して最も生徒数の多い三門市立第一高校にだけ連絡をするわけない。なんだつたら普通に警報すれば良い。

情報操作やメディアに強い男こと根付がいるのだから、ほんの一ミリでも違和感やズレがあれば一瞬でバレる。

「沢村くん、二人は？」

「協力してくれた人が居ると、それ以上はなにも」

最初は迅と言ったが、迅は嘘だと否定している。何時来るか分かってるなら、スカウトで県外に居る草壁隊を呼び戻したりする。

じゃあ誰がとなつてると偽冬島（私の登場）。喋り方に違和感があったものの、声は瓜二つで冬島と親しい当真や小佐野には一瞬でバレるが、そこまで親しい関係じゃない声を聞いたことある程度の人間ならば騙された。

そして騙した奴は誰かと二人に問いたですが、協力者が居るとだけで終わらせてそれ以上は答ええない。出水と米屋はなんとなくて分かった。まだ、私が隠していることがあることを。

1ヶ月待てと言ったのが大規模な侵攻に備えてなのだと分かったが、それだったらボーダーに居た方がいい。正確な日付どころか時間すら分かっているのならば、言った方がよい。なのにそうしなかった。それはそうしたらダメなんじゃないのかと、そうすることによりそのなにかが出来ないんじゃないのかと考えてクビを覚悟に言わなかった。

「避難場所にいる隊員達が今、犯人探しをしています。心当たりがある隊員が多く、向かってるとのこと」

「そうか……」

本部長は直ぐに見つかつてくれと願う。

勝手な指示を出したことについての怒りはあるが、出した指示は悪くなかつた。

ノーマルトリガー最強と言われる本部長は近界民の世界の戦争を経験しており、今回の一件は4年半前の大規模侵攻よりも酷いと感じている。

今のボーダーが出来て4年間、本部長としてやれることはやつた。弟子の太刀川はボーダー隊員で1番強い。最初の狙撃手の東は戦術に優れている。弓場は銃の扱いに長けている。二宮はシンプルなトリオン攻撃の揺さぶりが強力だ。

本部所属のボーダー隊員達は強い……のだが、それは本当に一部だけ。ランク戦という明確なランク付けをしていて、B級の隊員の強さのピンキリが激しいのを知っている。その上、A級の草壁隊（緑川を除く）と片桐隊不在という状況。

人型の近界民がやって来る可能性もあり、ラッドが偵察目的で来たという話も知っているので一ミリの油断も出来ず、1つでも悪手を取つてはいけない。そんな中で、ボーダー隊員達が騙された嘘の指示は正しかつた。

相手の底が見えないので単独行動禁止、部隊として合流できるか、出来るならば合流地点を決める。出来ないならばA級は2名以上の4名以下のA級混成部隊で出撃、それが無理な隊員は警戒区域付近の市街地に行き、警戒区域付近で一般市民の避難誘導を

し、警戒区域を出ようとするトリオン兵排除を指示。

全員が揃っていて十二分に力を発揮できる部隊が警戒区域内でトリオン兵を排除し、取り零したのを合流できない複数の正隊員が倒す。無難な作戦で、相手の底も見えないので正しい指示だった。

「すんませーん、呼ばれて来たんすけど」

誰が指示を出したかは知らないが、少なくとも間違っていない。

今は起きている事に対応しなければと気を引き締めていると気が緩んだリーゼント、ボーダーのNo. 1狙撃手の当真勇がオペレーターである真木理佐に叩き起こされて、本部長達の元へと向かわされた。

「遅いー!」

「警報とか色々あったみたいですけど、寝てました」

「結構な大音量なんだがね……」

割と結構な大音量の警報の中、アイマスクをつけて寝ていた当真に呆れる根付。今度から、警報を変えるべきではと考える。

「で、なんで隊長じゃなくて俺なんすか?」

冬島隊の隊長こと冬島は三十路手前のおっさんであり、ジョシコーサーが天敵なもの、の人生経験豊富な大人でエンジンニアチーフの一人。管制室に呼び出されるのは普通は

冬島なんじゃないかと、狙撃手としての仕事が出来たのかと思うが入った途端に違うなど感じた。

「当真隊員、冬島隊長と同じ声をしているものを知ってるか？」

「城戸司令、いきなりどうしたんですか？」

突然の質問に当真は少し引いてしまう。

当真と小佐野がいればバレていたであろう校内放送。

明らかに狙って出水と米屋が第三者を連れてやった。その第三者を割り当てなければならず、それが誰かと分かるのは最も冬島の声を聞いて第一高校に通っているのは小佐野と当真だけが今現在、諏訪隊オペ中の小佐野も聞けばわかるのだろうが席を外させるわけにはいかないと彼が呼ばれた。

「知っているのか、知っていないのかでいい。時間がない」

「うちの隊長と声が似てるってなら——」

『忍田さん、こちら東！』

新型トリオン兵と遭遇したサイズは三メートル級で二足歩行の人型に近い姿をしていて——』

『こちら鈴鳴第一！未知のトリオン兵と遭遇！』

村上隊員が戦っていますがバムスターやモールモッドとは段違いの強さで——』

『こちら諏訪隊！』

大型のトリオン兵を討伐しましたがけど、中から小柄の人に近い形のトリオン兵が出てき——』

当真が答えようとしたその瞬間、真っ先に現場に駆けつけた三部隊から殆ど同時に通信が入った。

三部隊共に状況が似ていて、話を纏めると大型のトリオン兵の中から小型の未知のトリオン兵が出て来たらしく、ボーダーの中でも指折りの攻撃手である村上が手を焼く強さで、市街地に向かおうとするトリオン兵と違ってボーダー隊員を狙って隊員を捕らえようとしている。

「……分かった。増援がつくまで上手くしのいでくれ」

そのトリオン兵の名はラービット。捕獲用のトリオン兵であり、同じく捕獲用のトリオン兵であるバムスターと違うところが1つある。普通の人ではなくトリガーを使う人を捕獲するのを目的として作られており、戦闘用のトリオン兵と比べても段違いに強く作られている。その為にA級でも油断すれば捕まる可能性のある代物で、その事を即座に全隊員に通達。するとレプリカからトリオン兵の名前などが伝えられ、当真以外の面々は感じる。

まるでこうなると分かかっていて迅の様に暗躍をして誘導をされていると。A級でも

混成部隊で行けとの指示はこの為にあつたのではないかと感じる。

しかしその感覚について議論する余裕は何処にもない。東隊の隊員の小荒井が緊急脱出、諏訪隊の隊長である諏訪が捕らえられる事態が発生。生半可な、それこそランク戦下位で停滞している部隊を下手に送ることは出来ず、かといってA級を送れば何処かが手薄になるという厄介な事態になっていた。

「それで、誰が冬島の名を語つた!」

「2年の三雲つて奴が声そっくりで……確か、玉豹の三雲の兄貴つすよ!」

「三雲関係で何回騒ぎを起さなければ気がすむんだ!?!」

ラッドに遊真に千佳の大穴に遊真が緑川ボコつたりと、騒ぎがあれば修あり。主人公だもん、仕方ない。

「とにかく、そいつを捕まえさせろ!!」

『……どうやら限界の様だ』

これ以上、事態の混乱を招くわけにはいかないと部隊が揃っていない隊員に私を捕まえる指示を出したのを見て、レプリカはもう無理だなと感じた。

「美味い」

一方の私は避難場所でお昼を楽しむ。

米屋達を向かわせるのに多少の労力を使うどころかお昼抜きだったので腹が空いて

いるのでお弁当をいただく。

「米屋達には申し訳無い……いや、焼肉があつたな」

米屋と出水を無理矢理動かしたので、あの二人も昼抜き。

申し訳ない気持ちになるのだが、あいつらは後で焼肉を奢つたりしてもらうのでそこまで同情する余地は無かつた。

「いた！」

弁当を食べ終え、一息つくくと熊谷がやつて来た。

「なんで居るんだ？」

一応の指示は出した。合流しろとか無理とか色々と言つていたのに、何故か避難場所にいる熊谷。取りあえずはなんで居るか聞いてみると物凄くしょんぼりとした。

「私達の隊、結構厄介なのよ。茜は中学、玲は星倫女学院、私と小夜子は三門第一で合流が……」

「多少の時間を掛ければ合流は可能はずだが？」

少なくとも二時間ぐらひは戦い続けるんだ。合流は出来るはずだろう。

というよりは京介を迎えに来たレイジさんの車に乗せて貰えば自動的に星倫女学院に行けたんじゃないのか？

「茜が通つてるとこ、ボーダー隊員が少ないのよ。」

一応居るには居るけど、柿崎隊は今日は防衛任務で居ないから避難誘導とかを優先的にして……玲のところも。

もし万が一、玲がやられて緊急脱出して本部に直行して、本部が襲撃されたら、玲は逃げ切れない。そう判断したし、桐絵ちゃんも安心して戦える様について警戒区域から西方面に出ていこうとするやつを限定してるの」

「熊谷は避難場所方面か？」

答える前に答えを言うのと頷き悔しがる熊谷。

今すぐにでも飛び出して行きたそうだが、それは悪手。警戒区域にはラービットが居るので、いけば最後捕まる。だから、万が一に避難場所が襲撃された時の為の警備をして居る……。

「それで私になにか用か？」

「冬島さんの声を出してたのって、貴虎くんでしょ？」

「そうだが、どうした？」

「なんでわかったの？」

「サイドエフェクトの応用で未来を予測した」

「!？」

意外な言葉が出てきたので物凄く驚く熊谷。

お前も時折ポロっとサイドエフェクトと溢しているのを忘れたのかとツツコミたくなるのだが、ツツコミをせずにどう来るか待つのだが、特になにも言っていない。相手が来るまで待機状態なのか言わないのだろうか？

「見つけたぞ、三雲!!」

「ここに居たんだね。やゝ探したよ」

「え〜つと」

「やっぱ大勢で来たら驚くやんな」

待ちの姿勢でいると色々とやって来た。

「影さん、北添さんと隠岐と……え〜つと」

「はじめましてと言った方が良いのかな？タイガース」

「え、それ私なの？」

初対面と言えば少し違う、なんとも言い難い関係の男、王子一彰。

人のことを初っぱなからあだ名呼びするのだが、タイガースはマジでやめてくれ。

「すみません、OG3。タトバでお願いします」

「タトバ？どうしてかな？」

「鷹、虎、飛蝗でタトバです」

「成る程。じゃあ、タトバと呼ばせて貰おう」

「三雲、このくだり必要なん？」

「隠岐、顔見知りじゃない奴等が居るし、やたらと多いから困ってるんだ……ええつと、お前は確か……」

「外岡つス」

あくはいいはい、思い出した。弓場さんとこの狙撃手だ。

突然の押し掛けに若干どころか結構な驚きをするが直ぐに冷静になる。

「私になんの様だ？」

「用件もなにも、冬島さんの名を語った奴を捕まえてこいつって言われてるんスよ」

「私がやったが、なにか文句あるか？」

「文句らしい文句は無いよ。」

名前を勝手に使うのは良くない事だが、結果的には他よりも早く行動することが出来た……僕達以外はね」

ここに居る面々は、熊谷以外はB級の上位に定着している部隊の隊員。

実力的にも行つてこいよと思う人（特に影さん）がいるのだが、行っていない。

「熊谷は理由は聞いたが、他は……合流出来ないのか？」

今日の前に居るのは部隊の合流するのが一手間掛かる部隊……の、筈だ。

「隊長のイコさんだけが結構遠いところにおるんや」

隊員の隠岐、南沢、水上、細井は三門第一高校だが、隊長の生駒だけが大学生の生駒隊。

「僕のところは全員がバラバラなんだ」

六穎館中学、六穎館高校、三門第一に大学生と全員バラバラな王子隊。

「こつちもそんな感じっス」

大学生二人、高校生一人、中学生一人と王子隊程ではないがややこしい弓場隊

「ゾエさんのところも、大体そんな感じだよ」

中学生のユズルと合流出来ない影浦隊

「オメーがあんな指示出さなきや、今頃は暴れられたのによ」

っけ！とこの場で待ち受ける事に苛立つ影さん。

「……他は、他には似た感じの状況のところはあるのか？」

私が先に動きを封じたもののラービットに諏訪さんが捕まり諏訪トリオンキューブ訪になつたらB級

は部隊が揃うまで動くなと言う命令が本部長からくる。

ざつと見た感じ動くことが出来ないのは王子隊、那須隊、影浦隊、弓場隊で……恐らくだが、二宮隊も動けない。高確率で二ノさん不在が原因で動けないだろう。

他に動けない奴等はいないか聞いてみるものの、残りは六穎館に通っている組らしく（ここには居ないとのこと）。

「……里見とか雪丸とかが居てくれれば楽だが無い物ねだりは無理か」

「二人とも県外にスカウトにいつてるから、無理よ」

「とりあえず、本部に報告していいかい？」

「……通信機貸してください」

私が言ったということがバレている。その事で本部がなにかと慌ただしいのならば、此処等が潮時だ。

王子さんが通信で使っている通信機を借り、本部と通信を取って貰うのだが

『君が』

「あ、すみません、レプリカでお願いします」

本部長と会話をするつもりは特には無い。

私と会話をして居る暇があるならば、指揮を取って最高の未来を勝ち取れる様にしてくれ。

『通信を少し切り替えた……兄殿、申し訳無いが兄殿が私やユーマについて知っている事を伝えさせて貰った』

レプリカに通信が変わると、謝られた。

「構わない」

もうバレて良いところまで来ている。

むしろ、面倒な話を省いてくれたからありがたい。残された時間は後僅かなので説明に時間を使いたくない。

『色々と話はレプリカから』

「本部長さんは極力意識を私に向けずに指揮に集中して、今の状況では余り仕事が無さそうな外務とか営業とかメディア方面担当の人に話した方が効率が良いです」

『わ、私かね?!』

「あんだこの状況じゃ一番暇だろう」

指揮取ってる本部長を補佐するS村さん。色々な機械を作動させている鬼怒田さん。最終的な決定権を持つ司令。そしてメディア対策室室長の根付さん……どう見ても後処理担当で現場を担当しないのあんただけだ。

『根付メディア対策室長は戦いが終わった後に活動をする。言いたいことがあるならば、私が聞こう』

根付さんを働かせようとしたが予想外の人物が出てきた。

城戸司令がわざわざ耳を傾けてくれるとは嬉しい限りだ。

「先に言っておくが、勝手に動かしただけのことについては反省していないぞ」

何時もなら警報鳴ってから避難して点呼取って全員の安否確認に十数分以上掛かる。

それが鳴ってから2分半で終わり、各部隊がどうすればいいのか即座に動き出せる様

にしたのだから反省も後悔もしていない。

『何故、近界民が襲来することが分かった?』

その件についてああだこうだ言わない城戸司令。

優先順位が分かっているのか、どうして迅速ですら分からなかった近界民の襲来が分かったかを聞いてきた。

「サイドエフェクト」

後、知識として知っていた。

サイドエフェクトが今日来るって言ってたのに加えて原作知識です。

「因みにだが太刀川さん、出水、当真さん、里見、佐鳥、時枝、綾辻、三輪、米屋、雪丸、京介、宇佐美、影浦さん、北添さん、隠岐、村上さん、別役、堤さん、小佐野、日佐人、熊谷、日浦、那須……後、誰だっけな……まあ、とにかく今、言った人達は最低でも一回は私にサイドエフェクトとポロつと呟いてたぞ」

『オールスターじゃないか!?!』

視力の話をすれば本当に面白いぐらいにポロつと溢してくれる。

溢さなかったのは風間さんぐらいじゃないか? A級は加古隊と風間隊以外は誰かが一度はポロってるな。

「まあ、とにかく出水や修達の不祥事については目を瞑っててください。

私がサイドエフェクトを持つてることを風間さんと加古さんも知ってますし……裁くとなるとA Bオールスターになりますよ」

そうなると殆どがB級降格とか色々ややこしいことになる。

通信機越しで頭を抱えている根付さんの声が聞こえるので、この件に関してはもう触れない様になっている。

「不祥事案件はもう流して……なんかご用ですか？」

『今は襲撃の対応をする……君のサイドエフェクトではなにが見える？』

「なにも見えないけど？」

『どういうことだ？』

「出水とか米屋も言ってたが、私は未来を視るなんて器用な真似は出来ない。やってるのは予測だ」

あくまでも占いという名の予測をしているだけだ。グラサンと違ってハズレるときはハズレるんだ。

『ならば、君はどう予測する？』

「私に聞いてどうすんだ？そこを頑張るのがあんた達の役目だろう。」

今、前線で戦ってる佐鳥達よりも段違いに強いのに椅子に座っているのは楽しみたいのか？違うだろう。ボーダー隊員の殆どが二十歳未満なんだぞ、頑張れよ……負ける条件

と勝つ条件を、ありとあらゆる事を考えて今の状況から察するに非常に面倒だ」

私のサイドエフェクトを迅と同じものだと思つたようだが、それは違う。

城戸司令にそう否定したものの、なにか無いかと意見を求めてくる。敵かどうかすら分からないが、使えるかもしれない駒は使おうとする即決の判断は凄いが、それを聞いたらなんの為に椅子に座っているんだか分からなくなる。現場に出て戦えと言いたい。しかしまあ、四の五の言つてられないので言うべき事をとつとと言う。

「相手がなにをしに来たかが問題だ。

何時もならば出水のところ、熊谷のところ、村上さんのところ、小佐野のところ、里見のところと約5部隊を3交代制で回して仕事してる。

それだけで余裕で倒せる量しか来ないが、今回は違う。今回は全員、それこそ県外スカウトに行っている里見達が今すぐに来ることが出来るなら来て欲しいと思うレベルの案件で……まあ、とにかくヤバいな」

『それはこちらの方でも理解している』

「取りあえず自分達が負ける条件とかこうなつたら危険だと言う状況を幾つか想定して現状と照らし合わせる……本部に影浦さんとか向かわせるのが良いんじゃないんでしょうか?」

「なんでオレなんだよ?」

「影さんが手の空いてる人で一番強いからに決まってるでしょう。司令さん、近界民がなにしに来たか分からないので、色々と考えました。」

例によって人を拐う為に来たりしたのならば、ただの数の暴力で終わるだけ。トリオン兵を倒せる隊員が多く居るから、無駄だとなにかしてくると仮説をたてます。で……アレだ。相手にとって利益になるのを幾つか思い浮かべた。その仮説の大半が本部に侵入しないといけない」

普段はこんな事には使わない頭を使い、必死になって説明をする。

「近界民が人間を一人一人拉致するぐらいなら、植民地の1つでも作って養殖したりした方が効率が良い。」

武力による戦争は大将の首を取れば終わるらしいので、司令をはじめとする上層部を皆殺しにすればいいとし、その為には本部襲撃が必須、先ずは戦力を分散させてから超強力な駒を出して本部を襲撃……とところでそっちは大丈夫なのか？」

『こちらの心配は無用だ。続けたまえ』

「二つ目に特定の人物を誘拐。」

近界民にとって価値のある人物を誘拐する……つまり鬼怒田さんが誘拐される可能性がある」

『わ、ワシ!?!』

別に驚くことでもなんでもない事だ。

根付さんはこの世界だから必要な存在で、唐沢さんは……まあ、微妙なところ。本部長は強くて指揮能力も高いが、近界民の世界に探せば何人か同じぐらいの人は見つかる。

だが、鬼怒田さんは別だ！

「鬼怒田さんが拐われれば、緊急脱出機能に門誘導装置、他にもボーダーの訓練装置とかの細かな情報が近界民に知られる。そうなると緊急脱出不可装置とか門誘導無効装置とかそういうのを作られて……ボーダーがある三門市をガン無視して神戸とか横浜とかの人口密度の高い政令指定都市に襲撃して……そこを拠点に日本を植民地にするかも」

「いやいやいや、考えすぎやろ」

ボーダーで一番なくてはならない人は同率一位で二人居る。一人は迅、もう一人は鬼怒田さんだ。

鬼怒田さんと迅の二人がいなければボーダーという組織は上手く回らなかつただろう。

「他にも緊急脱出した後の生身を狙えば良からうなのだからありますが、聞きますか？」
『もういい。本部が狙われる可能性が大きいのは分かった』

私の言っていることは一応はありえることで、ボーダーに大打撃になることだ。

迅というチートが居るので、その未来があるかないかはある程度は分かるのだがどれもこれもそれは無いと否定しきる事は出来ない。

「今すぐにも本部内で一人でも中近距離で戦える人を用意してスタンバってないと死人が出る」

本部には司令や本部長、太刀川さんが居るものの、その人達が即座に戦えるかと言われれば怪しい。

本部長と司令は戦えるが指揮の方を優先しなければならず、太刀川さんは何処かのフオローに向かわされる。

「戦う用じゃなくて良いからトリガーを起動して変身して襲撃して来た相手の攻撃とか瓦礫を一回受けられる準備と周りを気にせずに暴れ回れる場所を選出。そこまでのルートを用意……えくと、後なんだ？」

『本部内防衛隊員の選出、近界民と戦闘場所を決めて誘導するルートの確保、エンジニアやフリーのオペレーターは護身用のトリガーを起動、護身用のトリガーを持っていない者は訓練用のトリガーを代用させる』

指揮とか指示はやったことない。

そのせいか色々なボロが段々と出てきたのだが、それを城戸司令は埋めてくれた。

近界民と戦闘する場所についてはなにも問題なく、訓練用や護身用のトリガーは直ぐに行き届くらしく残す問題は一つ。

「カゲが行くなら、ゾエさんも行こうか？」

誰が本部内防衛をするかだ。

『……本部内の防衛には弓場隊員にしてもらう』

「ああ!!なんでオレじゃねえんだ!!」

本部内の防衛をする隊員を選出した司令。選出された隊員はこの場には居ない弓場さんである影さんは自分でないことにキレル。

「なんで?」

影浦さんは近・中距離の戦闘が可能で桁違いに強く、機動力も高い。サイドエフェクトで混戦にも強く初見殺しも中々に出来ない。

『本部内に入り込んでくる敵がモールモツドの様な日頃ボーダー隊員が相手になっているトリオン兵ならば基地周辺の罨や本部待機の隊員だけで対処は可能だ。』

現在、新型のトリオン兵が出現した。風間隊や複数の部隊が応戦中だが、装甲が厚く剣による一撃で切り崩す事は出来ない。本部に襲撃してくる敵は新型のトリオン兵以上と仮定し、現在部隊で交戦していない隊員で本部内の戦闘に最も適しているのは弓場隊員だ。

ボーダー本部で戦闘をしても問題の無い場所に誘導しながら戦わなければならず、付かず離れずの一定の距離を保ち威力の高い弾で戦う弓場隊員ならばそれが可能だ。更
に言えば本部内は一本道の様な狭い単調な道があり、影浦隊員の型に填まらない機動力
を生かせず、彼の戦いだと言導に向いていない』

影さんがダメで弓場さんが選ばれる理由を聞いて、なにか反論をしようとするのだが
浮かばない。

弓場さんが一定の距離を保ち、高威力の弾丸を撃ち込む。それで倒せればよし倒せな
ければ距離を保ち、誘導。問題ないどころか、良いとこづくめだ。

『君には色々としつくりと聞きたい事がある。この侵攻の後始末を終えた後に本部へと
来て貰う』

特になにも言わないでいると爆音が通信機越しに響き、通信が切れる。

「人を利用するだけ利用して用済みになればぶちぎりやがって……」
優秀なボーダーの大人がいるから素人は不必要なのか通信を切った。

まあ、これ以上の知恵を素人の私にあだこうだ言われて動いたりすることはしない
だろうがムカつく。私は通信機を王子さんに返し――

「そろそろ動くか」

『スカル！』

スカルのガイアメモリとロストドライバーを取り出した。

第57話

「なんだそのUSBメモリは？」

鞆から出したスカルメモリを鳴らすと待機状態に苛立っていた影さんは意識を私に向ける。

「地獄への片道切符だ」

「また随分と詩的な答えだね」

ダブルドライバーが悪魔（フィリップ）と相乗りする道具ならば、ロストドライバーは地獄（仮面ライダー）として戦う日々）への片道切符。

私の答えになにか意味があるのかと王子さんは興味津々で、ロストドライバーを腰に当てると自動的に巻かれるのを見て驚いた。

「ベルトを自動的に巻くとか、随分と未来的やな」

「隠岐、それは言ったらダメなやつだ」

主に平成二期以降のライダーにあるベルトを腰に当てただけで紐が自動的につけられるシステムに感心する隠岐。

そのシステムに関して基本的な気にしていたら負けであり、もっと言えば体内から

ベルト出すタイプのライダーはどうやってとか、手動で腰に巻く系のライダーは器用に巻き付けてるとかそういう感じのを気にしてはいけない。

『スカル』

「変身」

ロストドライバーにスカルのガイアメモリを挿し込み、ベルトを傾ける。

射し込んだスカルのガイアメモリに宿る骸骨の記憶のせいとか、段々と血の温度を感じなくなり、若干だが視線が高くなった……スーツアクターとか中の人の都合的に仮面ライダーに変身すれば体格が嫌でも大きくなるのはわかるが、そこまで再現しなくても良いのにな……。

「たか」

変身した俺に驚き、名を呼ぼうとする熊谷。

その前に動いたのは影さんだった。

「ちよ、タイムタイム!!」

影さんは驚いたものの、一瞬で動いた。

俺の背後に周り腕を掴んで背中を押さえ付ける、ドラマとかで警察が腕を背中に引張って逮捕する感じの事をした。

「てめえ、何モンだ!!」

「いやいやいや、俺ですってばー！」

突如として変身した俺を敵として認識した影さん。

骸骨男になればそりやそう思うよなと慌てながらも説明をしようとするのだが、北添さんが突撃銃を構え超至近距離で向けてくる。

「熊谷ちゃん、離れてて。なにしてくるか分かんないよ」

「え？」

「トリガーを使う人型の近界民だね。外岡くん、隠岐くん、王子、ちよつと周りを誤魔化せる？」

「了解っス！」

「ちよ、三雲を探してきます！」

「本部に連絡を入れておくよ」

部隊というわけではないが、連携が取れてるぞ。

「熊谷、ヘルプ」

「あ、あの」

「騙されんな、こいつは三雲じゃねえ」

熊谷に助けを求めてみるも、影さんが問答無用で黙らせる。

結構キツ目の殺気を俺に向けており、どうやって話し合いをしようかと考える。

「なんで俺が三雲じゃないって言うんですか？俺、正真正銘の三雲ですよ」
「ぎけんな。いくらなんでもアイツがトリガーを持つてる分けねえだろう」

「嘘をつくならもう少しまともな嘘をついた方がいいよ」

「影浦さん、大変つすわ！何処にも三雲がいないんです！」

「んだと!!おい、てめえ、三雲を何処にやった……まさか！」

「だから、俺がその本人だつってんだろ!!」

隠岐が避難場所を探し回るも、ここにいるので見つかるわけもなく、影さんは既に扱われたのではと想像するが此処にいる。

「残念だったな。三雲は自分の事を俺なんて言わねえんだよ」

信じてくれと叫ぶものの、影さんは信じてはくれない。

それどころかスコーピオンを首元に置いて何時でも殺すことは出来るとする。

「三雲の奴はチクチクする不快な視線は稀に送るが、それでも普段は普通の視線だ。

それがどうだ？てめえがその変なトリガーを起動した途端に、オレはなにも感じなくなつた。今こうしている時もよ！」

俺に対して物凄くメンチを切る影さん。

スカルのメモリを使っている間は死んでも同然の状態で、人から向けられる感情を受信する感情受信体質という影さんのサイドエフェクトと色々と愛称悪い、骸の骨であ

る骸骨スケルと向かい合ったところで感情を受信することが出来ない。

「つ、貴虎くんは何処なの!!」

影さんのサイドエフェクトになにもないと分かるや否や最初は心配をしてくれていた熊谷も疑い、弧月を鞘から抜く。

「何度でも言うが、俺が三雲貴虎だからな」

「明らかに体格とか違うし、ボーダーのトリガーならまだしも見たことの無いトリガーを使ってる奴が三雲くんって言われても信用出来ないよ」

「……影さんの実家はお好み焼き屋で、店名がひらがなでかげうら。」

のれんは右からお、好、み、焼の文字が書かれていて、村上さんとかちよくちよく食べに行ってる」

「……」

疑心暗鬼な三人に信じて貰うべく、影さんの実家であるお好み焼き屋を出す。

影浦さんと親交のあるボーダー隊員の中では割と有名であり、店の特徴について語ると驚いて抑えている力が緩む。

「待って。確かイレギュラー門を発生させたトリオン兵は此方の世界を調査しにきたって」

「今年の俺の誕生日に影さんが奢ってやるよと言って、影さんとこのお好み焼きを」

そうになった。

その日は出水が朝から昼過ぎまで防衛任務で、遅れてやってきて、貰った誕生日プレゼントが千発百中Tシャツで影さんは結構ガチ目のトーンで在庫処分の為にゴミを押し付けるんじゃないかと言え、出水がこれ意外と売り上げが良いんですよと言いつ返し返した！」

影さんの店名は調べようと思えば簡単に調べる事が出来ると北添さんが言うので俺達ぐらいしか知らなさそうな情報を上げてみるとまさかと言った驚いた顔をし、力が緩んだのでゆっくりと立ち上がる。

「本当に三雲くんなの!？」

「トリガーを使ってこんな感じになりましたけど、三雲ですよ」

「トリガーを使って、そいつは明らかにボーダーのトリガーじゃねえだろう」

「色々あるんですよ、色々」と

「もしかして貴虎くん……」

「熊谷、俺は地球生まれの三門市と蓮乃辺市育ちだ……とにかく、隠岐とか呼んできてくれ」

俺がトリガーを使っていると言われてもイマイチピンと来ない。

ボーダーから横領したトリガーならまだ分かるも、ボーダーとは明らかに違う。自身

の中にあるトリガーイメージとは圧倒的に異なる姿の俺を信じきれない三人。

周りに対して上手く誤魔化したり本部に通信したりしていた外岡、王子さんが戻って来た。

「適当に誤魔化しましたけど……なんで解放してるんスか？」

「人型近界民じゃなくて、俺が三雲本人だからよ……」

「ダメだ。タトバの事を本部に報告しようにも、通信が繋がらない」

二人の近況報告を聞き、やつと話せると大きくため息を吐いた。

本部に通信が繋がらないのは爆撃用のトリオン兵のイルガーに爆発させられたとかそんな感じだろうな。

「さっき言ったみたいに本部が襲撃されたりしてるんですよ。俺の方もちんたらしてられませんので本題に入って良いですか？」

「本題って、なんかするん？」

「動けないお前達を動かす」

警報を鳴らし、十数分の時間を稼いで米屋達を先に行かせた後に向かおうと思えば直ぐに修達の元へと向かえた。

向かえることならば今すぐにでも向かいたいが、それをやったとしても大して意味が無い。米屋や出水に言った様に、守りきれない。俺が修の所に向かったところで、他の

地域に影さんの様に強い隊員がないのがどうにかなるわけでもない。

『ゾーン！』

トリガー使い捕獲用トリオン兵、ラービットの登場により順調にトリオン兵を倒していたボーダーの形勢は悪化。

B級は絶対に部隊として合流するまで戦闘に参加するなどの指示がくだり、B級上位陣や個人として下手なA級よりも強い人が動くことも出来ず、尚且つその場に居る面々での混成部隊なんかも出来なかった……と言うのが原作だ。

俺が裏で色々としてはいるものの、放送室でどうすれば良いのかと言わなくても影さん達は戦闘禁止だっただろう。

「動かせない駒を動かす」

ゾーンメモリとスカルマグナムを取り出し、俺は残っている面々を見る。

俺が修達の元に向かわなかったのは本当ならばこの大規模侵攻に参加する事が出来ない隊員を参加させる為だ。そして予想通りか、物凄く強いのに合流していないから動けない部隊が残っている。

『ゾーン、マキシマムドライブ！』

「さて、先ずは論より証拠だ」

スカルマグナムにゾーンメモリをセット。

影さん、北添さん、王子さん、外岡、隠岐、熊谷と扇風機的首振りの様に誰にしようかなと銃口を向ける。

「ちよ、なにをするんですか?」

「論より証拠だと言っただろう」

口で説明するのは面倒だし、なによりも出来るかどうかすら若干だが怪しい。

外岡はイーグレットを取り出すのだが、そんな物騒なものはとつとしまつてほしい。

「それを撃つなら僕に撃つてくれないか?」

誰に撃とうかと決めかねていると、王子さんが挙手してきた。

「良いんですか?」

「なにかあるんだよね? だったら、それを見せてくれ」

「そうですか」

この場で俺がなにかをしようとしてると考えた王子さんは胡散臭さMAXなこの状況で俺を信じてくれた。

もしかすると普通の攻撃なのかもしれないのに、銃口を向けているのに特に怯えずにくらおうとしている姿を見て、この人は戦闘力よりも心と頭が強いなと感じ、安心して撃つことが出来た。

「……あれ？」

覚悟してゾーンのマキシマムドライブをくらった王子さん。

くらえばなにかあると思っていたのだが、特にこれと言ったことはなかった。

トリオン体は破壊されていない、セツトしているトリガーが使えない、全く見知らぬトリガーをセツトしているなんてこともなく極々普通で違和感を感じる事も無い。

「お前、テレポーター入れてたっけ？」

王子さんの身に特にこれといった変化は0……意外と重要だが、見方によれば本当に些細な事が一つあった。

さつきまで俺の真正面180度を扇状に囲む形で真正面に影さん、影さんの右に北添さん、北添さんの右に外岡、影さんの左に熊谷、熊谷の隣に隠岐、隠岐の隣に王子さんが居た。しかし、銃を撃った後、王子さんは何時の間にか影さんと向かい合っていた。

影さんは視界から数十メートル内を瞬間移動できるトリガー、テレポーターを王子さんが使ったのかと思っただが違うと首を振る。

「もしかして……」

北添さんはタラリと一滴の冷や汗を流す。

「座標とか場所の画像とかを見せてくれれば、三門市の何処でも飛ばせる」

座標ゾーンのガイアメモリを使えばワープすることが出来る。

なら、それを弾にして撃てばどうなるのか？その答えは2つ。撃った攻撃の弾が途中でワープして撃った方向とは異なる方向から弾が飛んでくる攻撃バージョンと撃たれた対象を何処か任意の場所か適当なところに飛ばすことが出来るサポートバージョンの2つがあった。

後はもうどうすれば良いのか決まっている。

「ヒカリ、今ユズル何処だ!!」

「イコさん、今何処すか!!」

集まることの出来ない隊を、影さん達をユズルの元へと飛ばせる。隠岐達を生駒さんのところへ飛ばせる。

そうすることにより本来ならば戦えない戦うことが出来ない部隊を侵攻に参戦させる事が出来る。

既に動いている部隊にあだこうだ指示だしたところで素人の俺だと色々と限界がある。本部長にやらせた方がいい。俺がやるのは動くことが出来ない人達を動かすことだ。

「……僕は弓場さんのところに飛ばしてほしい」

後一人いれば揃うリーチ状態の影浦隊と生駒隊。

早速通信を入れるのだが本部の方で色々とゴタゴタ（イルガー襲来とか）があり、通

信が完全に復旧しない中、王子さんはチームメイトの元でなく弓場さんの元に行きたいと言いつ出した。

「いや、そういうワガママは」

「ワガママじゃないよ、タトバ。」

今から本部内部の防衛に向かわないといけないけど、その道中で必ず近界民との戦闘が発生する。無駄な時間を使う暇は何処にも無いんだ。だったら、僕はそいつを相手にしようと思う。トノは？」

「多分、それが一番だと思えますよ。」

内部で戦闘になったら狙撃手は使い物にならないんで、道を作るのに集中した方が早く辿り着ける」

弓場さんの強さがどれぐらいなのか実際この目で見たわけじゃないが物凄く強いとサイドエフェクトが言っている。

だからまあ、ラービットとも勝負出来るだろうが、その時間はハッキリと言えば無駄だ。

「熊谷はどうする？」

二人の意見を聞き、弓場さんの元に飛ばすことを決めたあと、最後に熊谷を訪ねる。

日浦の元に飛ばすか、那須の元に飛ばすか、どちらにせよ危険度は高めだが帰ってき

たのはこの場に残る第3の答えだった。

「この場に残るわよ」

「……そうか」

第3の答え。この場に残る。

外は物凄く危険で本部すらも襲撃されるので、その選択も間違いじゃない。

「勘違いしないで、行つたところで足手まといとか焼け石に水とかそういうのじゃなくて、誰かが此処に残らないとダメだからよ。規模からして警戒区域から出る可能性があるわ。そうなつたら人が多く集まる避難場所は近界民にとって一番の穴場よ」

此処にいるのは主にボーダー隊員じゃない三門市の住民で割合で言えば学生がそこそこ。

この中に気付いていないだけでボーダーに入れるぐらいのトリオン能力を持った奴がいる……かもしれない。それに気づいた近界民が襲ってくるかもしれない……ぶつちやければ、此処に襲ってくる状況になった時点でボーダーは負けたも同然なんだが、誰かが残っていないと大変な事になる可能性も無いとは言えない。

本部との連絡がつくと、俺の事を報告せずに各々のオペレーターに直接通信してこの場には居ない隊員や隊長の居場所を聞き、場所を割り出すとボーダーから支給される端末で住所を入力、どの辺りなのかを画像で見せてくれる。

「先ずは影浦隊から……出来れば、南と東の地区で戦ってください」
『ゾーン！マキシナムドライブ！』

影さんと北添さんに弾を撃ち、ユズルの元へと飛ばす。

「……成功みたいよ」

この場から消えた影さんと北添さん。

ちゃんとユズルの元へと飛ばされたか確認をとり熊谷は笑う。今は一人でも多く、強い奴等が現場に駆け付けなければ大変な事になる。

「連れてきたで!!」

「ちよ、近界民!?!」

「隠岐さん、事情の説明を!」

「向こうに行つてからや。頼んだで」

「任せろ」

隠岐と隠岐が引つ張つてきた水上さん、南沢を生駒さんの元へと飛ばす。

「最後は二人だな」

「君は、どうするつもりなんだい?」

王子さんと外岡を弓場さんの元に飛ばす。

その為に銃口を向けると、それが終わった後の事を王子さんは聞いてきた。

「……どうしてほしい？」

あえて俺はその質問を答えずに質問で返す。

この後にするにはもう決まっている。だからこそ、聞き返してみる。

「そうだね……それ、銃に挿し込んで、腰の横にも挿し込めるところがあるよね？」

今は他人に使っているけど、君自身もワープが出来る筈だ。なら、強くて尚且つ一ヶ所に固まっている部隊を……県外スカウトに行っている片桐隊と草壁隊を今すぐ此方に連れてきてほしいな」

「悪いが、そんな事をしている暇は無いんだ」

この場にはいないA級を連れていくのは名案だが、もう時間が無いも同然だ。

俺の答えを聞いた王子さんはだよねと納得をしており、外岡と共に撃たれて弓場さんの元へと飛んでいった。

「弟さんのところに向かうのね」

全員を飛ばし終え、今度は自分の番だとスカルマグナムからゾーンメモリを引き抜くと察した顔をした熊谷が声を掛けた。

「県外スカウト中の片桐隊と草壁隊が居てくれれば心強い。」

でも、その為には先ずは貴虎くん自身が県外に出て片桐隊と草壁隊に直接会って、またさつきみたいに飛ばさないといけない……このワープにどれぐらいのトリオンを

使っているかは知らないけれど、きっとかなりのトリオンを消費する」

「ボーダーは、四年半前に表に出てきたボーダーは好き勝手にしたんだ。

表に出てきた後も表に出てくる前も好き勝手にしている……だったら、俺も好き勝手にさせてもらう」

これが最善かと言われれば違うだろう。

王子さんの言うとおり、熊谷の言うとおり県外スカウトに行っているA級の草壁隊と片桐隊を呼べば、この侵攻で少しだけ有利になる。だが、それをしない。

「好きにすれば良いんじゃないの?」

堂々と好きにすると宣言した俺に熊谷はそれで良いと頷いてくれる。

「割とあっさりとしているな」

もうちよつとなにか言ってくるものだと思ったのだが、なにも言わない。

「私も弟が居るの。もし、赤の他人二人と弟の命のどちらかを選べと言われればきつと弟を選ぶわ」

「今、そういう重い話は嫌なんだがな……」

サラッとそういうことを平気で言える熊谷は凄いなー。まあ、俺も言えるには言えるんだが。

「別に重い話じゃないわよ。」

嵐山さんと柿崎さんが入隊して間もない頃に、中学生の隊員が出来たって報じて、その時に市民と家族のどちらを優先するかで家族ってなんの迷いもなく答えた話を話したかっただけよ」

「勘弁してくれ、俺はあんな人になれないしなりたくない」

「あつそ……ボーダーのトリガーと違って、緊急脱出出来ないんだから、絶対に負けるな！」

「まあ、やれるだけのことはやってみる」

『ゾーン！マキシマムドライブ！』

バシンと熊谷に背中を押され、マキシマムスロットにゾーンのガイアメモリを挿し込む。

嵐山さんの家族を優先する発言を熊谷に出されるとは思っていなかった。周りがある程度だ言ってきたのならば、それを理由にして指示に従わずに修や千佳に色々しようと考えてたが……まあ、やれるだけのことはやってみる。

「……っ!!」

ゾーンのメモリを使いワープした俺を見送った熊谷は地面を強く殴った。

「なんで、なんで私はここにいるの!!」

俺が居なくなった後、此処に残ろうと決めた熊谷は地面を殴る。

那須が緊急脱出したらや日浦の事を考えたり、万が一に備えてこの場に残った。残らないといけないから残り、そうしなければならぬと熊谷は自分の中でも一応の納得はしているのだが、怒り、苦しんでいる。

「こうなることが分かってたのに……」

誰よりも何処よりも早く大規模侵攻があると間接的だが伝えられていた那須隊。

その為ではないが強くなるうと上を目指そうとしたが、結果はB級7位と上位止まり。しかもそれは今とは違い影浦隊や二宮隊が居ない時で、今は益々と上の壁の厚みが酷くなっている。

後から入ってきた緑川や黒江といったボーダー的な意味でも年齢的な意味でも年下の隊員は既にA級で、実力は自分よりも遥かに上回っている。

こうなることが分かってたのに、それが来ても良いようにと必死になって努力したが、それでもまだまだ弱い。

「私が強くないと、いけないのに……強くないから停滞しているのに」

自分がこうして残っているのも、B級上位で安定することも出来ずに中位で停滞するのも、全て自分が弱いからだ。

弱いから此処に残ったのではないが、それでも自分の弱さに怒る熊谷は右手の甲を見る。右手の甲には7849と数字が浮かんでおり、その数字は熊谷が使う弧月に与えら

れたポイント。自身が弱いという証明になる証だった。

『こちら本部！爆撃に遭い、通信が乱れたわ。』

冬島隊員の名を騙った三雲（兄）の身柄はどうなったの？こっちのレーダーに、貴女しか写っていないのだけけれど』

「……実はですね」

泣いている暇は何処にもない。

今は自分の悔しさや怒りを押さえ込み、自分に出来ることをしようと熊谷は前を向いて、俺についての説明をはじめた。

第58話

「思ったよりも、やるようだな」

三門市を絶賛襲撃中の近界民の国の一つ、アフトクラトル。

そのアフトクラトルの面々が別の近界や此方の世界に来る為の船の会議室のようなもので戦況を眺める。

近年、玄界（地球）でトリガー使いが現れ組織を立ち上げ人を拐うことが出来なくなるところか同じ場所にしか出なくなつたとの情報を得て、玄界について調査をすべく、あわよくば人を拐うべくラッドを放つた。

大事になるかと少しだけ期待はしたもの、結果的には5回にも満たない回数しか門は開かない。それどころか、よく分からないトリガーを使つてないメガネの成人男性（貴虎）に物理的に破壊され、幼そうなメガネに相手の基地に持ち出され、あつという間に解析し駆除。

駆除の際にボーダーの隊員が総動員で動いた為、情報を得ることが出来ると思つたのも束の間、右見ても左見てもメガネ、メガネ、メガネで三種類の武器しか使っていない。ラッドは他国でも使われる偵察をする為のトリオン兵。玄界もその事に気付き、トリ

オン体を弄くり武器を統一した。その為か、あまり情報を得ることが出来なかった……あまりだ。

「全て統一されていない色とりどりの服。

最大で4名で固まって動いているのを見る限りは、少数の部隊で回しているか」

アフトラトルの今回の襲撃した近界民の隊長である黒い角のはえた男、ハイレインはじつくりと品定めをする。

モールモツドのように量産され何処の国でも使っている特に変哲の無いトリオン兵はあつさりどと撃破。イルガーの様に爆撃型のトリオン兵も一度は本部を攻撃するもその後は真つ二つに切断。玄界の成長も中々だと思いい、次に打つ手を考える。

尚、モールモツドを簡単に倒したボーダー隊員も普通のラービットには苦戦をしておりボーダー隊員を1名、捕獲に成功している。

「なにを今さら情報を集めてんだよ。

玄界の兵なんぞオレ様一人で充分なんだから、チマチマしたことしてんじゃねえよ、隊長さんよ！」

ハイレインと同じく黒い角がはえたオカツパ+ロン毛みたいな髪型の男、エネドラは暴れたくてウズウズしていた。

ボーダー隊員の強さが分かり、有象無象の雑魚も同然だと見下しており悲しい話、そ

れは事実であり暴れて全員をぶつ倒せば良いだけだとハイレインに出撃命令を出せと言う。

「口を慎め、エネドラ。上官に対して失礼だぞ」

「あ、テメーこそ誰に向かつて口を聞いてるんだ？雑魚が！」

アフトラトル側で最年少の黒くない角つきの男、ヒュースは注意をするもにらみあう。

一触即発のギスギスとした空気となる中、最年長であり角が生えておらずこの中で最も危険な老人、ヴィザが杖をコツンと鳴らすとその空気は消える。

「いけませんよ、この様な狭い場所で、ましては船の中での戦闘は」

「……つち」

「申し訳ありません」

余りにも酷すぎると私が動く。

遠回しにそう伝えるとにらみ合いが納まり、話が戻る。

「皆殺しはともかく。オレもそろそろ動きたい。船は窮屈で、このままでは腕が鈍ってしまう」

黒くない角をはやした大柄の男性、ランバネインも出たいと言う。

「まあ、待て。お前達の出番はもうすぐ来る……どうだ？」

「メガネ、ではありませんが白色の服を纏った玄界の兵達は戦闘以外の、街の住民の避難等を優先しています」

後少し、後少しで動くとも我慢させ唯一の女性であり黒い角をはやした女性、ミラに調べて貰った事を聞いた。

「メガネの方はどうだ？」

「幼い方のメガネは現在、戦闘中です。」

ですが特に目立った強さは持っておらず、アフトラトルの角なしの子供よりもトリオンが低く、その直ぐ近くにいる玄界の方がトリオンが含め全てのレベルが高いです」

「大人の方のメガネはどうだ？」

「未だに行方が分かりません」

「そうか……」

門を発生させる機能を備えたラッドを放ったアフトラトル。

ボーダーはラッドの存在に全くといって気付いておらず、門を発生させる機能とあいまって、効果は絶大……だった。

普段とは違うところに門が発生した為に全くといって備えが出来ておらず、非番のボーダー隊員が出動するというアフトラトルに圧倒的に有利になっていたのだが、二人のメガネにより情報を得られなかった。

「大人の方のメガネはマークしておけ。やつは危険な存在だ」

「おいおい、たかがラッドを見つけただけだろう？ そんなもん、ガキでも出来ることだ」

ハイレインは大人のメガネ（貴虎）を危険な存在だと認識していた。

「確かにラッドは子供でも見つけることは出来る……情報があればだ」

門を発生させる機能を備えたラッドを町中に放った。

その事を偶然、誰かが見つけてラッドの駆除がはじまった……と言うことならば話は分かる。だが、そうでない。

「あの大人のメガネは、ラッドがあることを見抜いていた」

イレギュラー門が幾つも発生しており、世間にも色々と知られているのならまだしも数回しか門は開いておらず、更に言えば二人のメガネが住んでいる家付近では門は一切開いていない。それなのに大人のメガネはラッドがイレギュラー門の原因だと分かっているかの様に見出ししており、玄界のトリガーを使う組織に渡るようにした。

実際のところは貴虎が死人が出たことを思い出したので、さつさと片付けようとしただけであり、それが裏目に出てハイレインに目をつけられていた。

「それでどうするんだ、隊長殿？」

様子見をするのはまだ良いが、この後にどうするのかを聞くランバネイン。

襲撃する側のアフトラトルと防衛する側のボーダー、圧倒的なまでにアフトラト

ルの方が有利であり、基本的になにをしても有利に事が進む。

「脱出機能を作ったエンジンニア、玄界の長の首、もしかするとあるかもしれない黒トリガー、雛鳥、どれも捨てがたい」

現在、ボーダーの戦力を拡散させることに成功している。

襲撃してきたアフトラトルの目的はボーダーを殲滅するにあらず、優秀なトリオン能力を持った人間を拐うこと。しかし、それ以外の事も今後の事を考えればしたいところ。

拡散した戦力の大半は並のボーダー隊員でラービットを相手にするのは難しく、A級（唯我を除く）が相手にしなければならず、ラービットよりも強いトリガーを使う人間である自分達が出向いて倒す。

ボーダーのトリガーに緊急脱出機能があるのは分かっている。脱出先がバカデカイ基地なのも見抜いている。並の兵をラービットが、強い奴を自分達が倒して捕獲または緊急脱出、その後に本部を襲撃すればトリガーを使用する事が出来ないボーダー隊員を楽々と捕まえることが可能だ。

「奴等の底がまだ見えない以上、まだまだ。

現に玄界の基地から北西の方に放ったトリオン兵が一扫された。今は、白色の隊服のものも拐うのを優先する」

まだ底を見せていない。

ハイレインはもう少しと様子見をすることを決めた。

「おく……まいったいら。根付さん唐沢さんがまた大変な事になるな」

実力派エリートこと迅は北西の地区……だった場所に辿り着いた。

北西の地区は隕石でも落ちたのか核兵器でも使用したんじゃないかと疑う程の更地で、そこにポツーンと一人の男が、ボーダーに今、一人しかいないS級隊員の天羽がいた。

「これもうちよつとどうにかならなかったか？」

「迅さん」

土地を使わせてもらっているのに、更地にしてしまった天羽。

こりやまた胃を痛めるなどサイドエフェクトで根付が天羽のやった更地の事で苦しんでる未来を見てしまう。天羽の黒トリガーの都合上、こうなるのは分かるがもう少し優しめにと訴えるのだが面倒そうにする。

「やだよ、どいつもこいつもつままない色を出してて雑魚ばつかでやる気なんて起きな

いよ」

「おお、遅しいな。そんな遅しい天羽に一つ頼みたい事があるんだけど、良いか？」

「なに？」

「オレの担当の西側もしてくんない?」

「ええ……なんで?」

迅は西を、天羽は北西に向かうトリオン兵を倒せと命じられた。

その命をちゃんと遂行しており、雑魚退治を面倒そうにする天羽。迅はぼんち揚げを取り出して天羽に渡す。

「敵さんが本格的に動きはじめるから、オレも動いた方が良いみたいで……?」

「どうしたの?」

天羽に渡したぼんち揚げを1つ食べようとしながら、自分の出番だと説明しようとした時だった。天羽から1つ、不思議、と言って良いのかは分からないなんとも言えない不思議で不確定だが向かおうと思えば向かえる未来が見える。

それは誰かに勉強を教えて貰っている未来。天羽はS級で、下手すれば風刃を握った自分よりも強い。しかし、京介同様に高校一年生であり、成績は中の下でなんとも言えない成績。高校1年には別役太一、高校2年には仁礼光、米屋陽介、高校3年には当真勇、そして大学には太刀川と成績が残念すぎる面々が居るので、勉強をしておかないと色々と五月蝋い。

今日は1月20日で三学期のテストまではまだ時間があり勉強をするのは普通のこと……なのだが、問題は場所と教えてる人物である。

その未来では天羽がボーダー本部の休憩スペースでテスト対策の勉強を教わっているのだが、その教えてくれる相手が誰なのか分からなかった。目ぼしいボーダー隊員の顔は知っているボーダー内限定では超有名な人の迅が知らない人物。

「……天羽さ、テスト前に勉強を教わったりする?」

「教えてくれる人は居るよ。」

俺、真ん中ぐらいの成績だから別に教わることなんてないし別役を教えた方が良くないじゃないかって言ったら、あいつは知らん、お前は危険な事をしてるんだからせめて良い成績をとって親を安心させた方がいいって言ってきたよ」

「……そいつ、誰だ?」

「迅さん、なにが見えたの?」

「ここ最近、オレのサイドエフェクトが上手く当たらないんだ。」

その原因が米屋と出水の知り合いみたいんだけど、オレが知らない人物なんだ」

割とボーダー隊員の直ぐ近くに居る未来が多々見えるのに、その人物だけは見えな
い。

その人物に会おうとしても会える未来が存在せず、逆探知しようにも出来ない。まるでいつも未来を見ているかのようだ。

「ああ、確か二人と同じクラスだったよ……三雲さんは」

「……………え？」

「あの人、ボーダーの隊員じゃないのにとんでもない色を出してる。多分、忍田さんより強いよ」

天羽から聞けた意外すぎる人物と余りにも意外すぎる情報。

迅は修に兄がいるのを、貴虎の事を一応名前は知っている。京介達が防衛任務で授業を受けれていないので勉強を教えたり、米屋達にノートを貸したりしており、視力を強化するサイドエフェクトを持っているボーダーという組織は嫌いだが、そこで働いているボーダー隊員は別と一線を敷いている。

そんな人物が1位の太刀川の師匠で太刀川よりも強い忍田本部長よりも強いと言う。

「ボーダー隊員でもないのに、忍田さんよりも強い……………いや、待てよ」

ボーダー隊員ならまだしも、一般人（笑）の男が忍田本部長よりも強い筈がない。

そう否定をしようとするのだが、あることが思い出す。スカルのことではない、それよりも遙か昔、そう、ボーダーが表に出た大規模な侵攻があったあの日のことで、自分が出る最善のことをやろうと必死になってトリオン兵を退治していた時を思い出した。

「あいつ、まさかメロン剣士か!」

天羽に自分の地区を頼みに行ったら予想外にも程がある情報を得た迅。

暗躍どころの騒ぎでない時、ボーダー本部は爆撃型のトリオン兵、イルガーの襲撃にあつた。

数体のイルガーの内の一体が今です自爆しなさいの勢いで自爆をして本部の基地を攻撃するのだが、幸いというべきか少し前に千佳がアイビスで大穴を開けた為に本部の壁は補強されており、破壊されずにいた。

しかし後、何回か爆発されれば流石に本部も壊れる。イルガーがどんなトリオン兵なのかレプリカから伝えられると本部に居た太刀川が残っていたイルガーを全て真つ二つ。

「通信が完全に復旧しました」

爆撃により通信が乱れてしまった。しかし、復旧はした。

乱れる直前に通信を取ろうとしていた嵐山隊に忍田本部長は通信を入れ、乱れたことを詫び本部の無事を伝えて指示をしようとした時だった。

『影浦隊到着!!近界民をぶつ潰しまわる!!』

「え!？」

『生駒隊、現着しました!今から、バツサバツサと倒しますわ!』

「ど、どういふこと!？」

影浦隊の隊長である影浦と生駒隊の隊長である生駒から通信が入った。

現場に到着したのでトリオン兵を駆除するという通信。元A級にB級上位の部隊が揃い来てくれることはとても良いことなのだが、S村さんは驚いていた。

「どうして貴方達がそこにいるの、ついさつきまで避難場所に居たわよね!？」

影浦、北添、水上、南沢、隠岐。

この5人は部隊で揃いそうに無いので避難場所を襲撃されない様にと色々としていて、ついさつきまで三雲貴虎の身柄を確保する様に命じられていた。

モニターに映る三門市の地図を見るS村さん。ついさつきいた避難場所と今いる場所を確認し、距離がどれぐらいかとざっと簡単に計算し、その上で叫ぶ。

「建物を跳んでいっても間に合わないわよ!？」

マリオの如く立体的に建物から建物へと移動したとしても、今いる場所に向かうことが出来ない。

機動力に優れた隊員ならばもしかしたらとなるが、影浦隊には機動力が無い(足遅い)北添がいる。爆撃を受けて、通信が乱れている間になにがあったのか、生駒に問い質し

てみた。

『それがなんか急に現れたんです』

「どういうことだ!?!お前達、なにをしたんだ!?!」

生駒から出た答えは生駒自身も全くといってわかっていないということ。

落ち着きを少しずつ取り戻した本部は生駒隊と影浦隊に意識を向け、どうやって現場に向かったのかを鬼怒田さんが聞いた。

『オレが聞きてえぐらいだ!!熊谷に聞いてくれ!!』

『取りあえず、ワープできるらしいからワープして貰いました』

「なに!?!」

言っていることから何となくだが話の流れを掴む鬼怒田さん。

モニターを確認すれば避難場所に熊谷だけ残っており、王子と外岡は本部に向かっている弓場の直ぐ側に居ることが判明した。

「こちら本部!爆撃に遭い、通信が乱れたわ。」

冬島隊員の名を騙った三雲(兄)の身柄はどうなったの?こっちのレーダーに、貴女しか写っていないのだけけれど』

急に現れた。

生駒もユズルも弓場も似たような事を言い、ワープした者達もワープしてくれるから

ワープしてもらったと述べる。

そうなれば矛盾は当然、熊谷に向く。忍田本部長は避難場所ではいつたいなにかあったのか、残っている熊谷に聞いた。

『実はですね、本部が貴虎くんと通信を切り、通信が乱れている少しの間にですね、その……トリガーを起動しました』

『どういう意味？』

『USBメモリの様なトリガーを貴虎くんが取り出しまして……確か、スカルと音声が届いていました』

『なんじゃと!?!』

今日いったい、何度言うんだと言わんばかりに叫びまくる鬼怒田さん。

『まずいですよ。避難場所に近界民が紛れ込んでいたとなると』

避難場所に何時の間にもやら近界民が紛れ込んでいた。

そうなるのと今やっている事がなにかもが無駄になると根付さんは顔を青ざめるのだが、それよりも恐ろしい事を報告する。

『影浦さんが近界民だと思い取り抑えました。』

トリガーを起動したから貴虎くんじゃないと一早く動いて動きを抑えたのですが……貴虎くんでした』

スカルが貴虎に成り済まして現れたと思つたら、貴虎だった。

「どういふことだ？」

それには黙つていられなかつた城戸司令も口を開く。

『最初は貴虎くんは何処に行つたかを聞いたんですが、自分が貴虎だと言って、影浦さんの家がお好み焼き屋をやっていることや出水の千発百中Tシャツの様な、近界民が知つていたらおかしそうな事を普通に言っていました。その後、ワープが出来ることを教えられて、ワープをして貰いました』

スカルについて色々と情報を集めるも、全くといって無い。

残留しているトリオンを調べること出来ず、かといって何処かで門が開き、そのまま帰つた痕跡もなく、近界民が逃げ込んだと大々的に報じることも出来ず、野放しになつていた。

「……根底から間違つていたのか」

必死になつて探すも見つからない。半年以上も此方の世界にいるならば、なにかしらのボロは出す。

もしかすると遊真を此方の世界に連れてきた人物かもしれないという線もあり、他にも色々と考えられる事があつたのだがボロらしいボロは何処にも出ていない。三門市に在住の身長約2メートルの男性を色々調べてみるも、トリオン豊富でも弓場並の銃

の腕を持つ該当者は何処にもいない。

城戸司令はそこでやつと気づく。そもその根底の部分が大きくズレていた事を。

風間隊を襲撃したスカルはトリガーを使う近界民ではなく、トリガーを持つている此方の世界の住人だと気づく。捜査する上で街に紛れ込んだ近界民を捜査しており、出生の記録や学校に通っている記録のある住人は自動的に省かれており、探しても探しても見つかるはずが無い。

「何故、今の今まで報告しなかった!」

『真つ先に報告しようとしたのですが通信が乱れていて出来ませんでした』

割と重要な事を報告しなかった事に怒る鬼怒田さん。

しかし、熊谷を攻めることは出来ない。数分ほど前に何度か影浦や王子達からの通信をした記録が残っており、爆撃を受けて本部側の通信が乱れてしまったのだから熊谷達に非はそこまでない。

「スカルはその場にいるのか?」

『この場には居ません』

「行き先は……三雲隊員と繋げてくれ」

行方知らずのスカルの行き先を考えるが、それよりも最終的に何処に辿り着くか考えた城戸司令。

今の今まで黙りこんでいた存在が今になって動き出した。それにはなにかしらの訳があり、その訳となれば真つ先に浮かぶのは家族。弟が危険な事をしているとなれば、なにもしない兄は早々に居ない。

「三雲君！お前、どれだけ騒ぎを起こせば気が済む!!」

『え!?!』

修に通信を入れると真つ先にキレて叫んだ鬼怒田さん。

血圧が上がりすぎて血管が切れるんじゃないかと思えるぐらいの勢いで叫んでおり、修がスカルについて黙っていたことに怒る。

『どういうことですか?』

「惚けるな！お前の兄が、スカルだったぞ!!」

『そうですか……』

「驚かない、と言うことは君は兄がスカルだという事を知っていたのかね？」

『……大体は知っています』

「そうか」

修はスカルについてなにも知らないだろうなと勝手に思い込んで遊真にだけスカルについて知っているのか聞いていたので、勝手な先入観に囚われて修を省いたのが悪い。言わなかったことが最も悪いのだが、今ここでその事について攻めている時間は

無い。

「君の兄がどうしてトリガーを持つているか、色々と聞きたいことがある。

だが、今はそれをしてる暇はない。聞こう、君の兄はなにをしようとしている？」
修を裁いたり、貴虎を捕まえたりと本当ならば色々したい。

そんな暇は何処にもなく、この世界を襲撃してくる近界民にいつばいいいどころか人手が足りない。だから聞いた。なにをしようとしているのかを。

最初に現れた時は風間隊の敵として現れたが、今度は動けない影浦隊や生駒隊の手助けをしており、なにがしたいのかが読みきれない。

『分かりません』

なにをするのかがよく分からないので、修ならばなにかを知っているかもしれない。そう思い聞いてみるものの、今の修もなにをしようとしているか分かってはいない。

『兄さんは僕と違って何手先でも見るのが出来るので意味の無いことはしません』

今現在、あちこちが大変な事になっており誰かの手を借りたい状況で、修も誰かの手を借りたい。

C級は一般市民の避難を、S級は一つの地区を担当、A級や部隊が揃ったB級はラービットを含めたトリオン兵と戦っている。それぞれがそれぞれの役割を果たしている。

今日来る事が分かっていたのならば、学校を休むという選択肢も存在していた。成績

の良い兄は一日二日休んだところでも問題はない。だが、それでも学校に行った。

『兄さんが、なにかをしたのならそれは意味のあることです。信じてください』

「……ならば、もう一つだけ聞こう。君の兄は味方かね？」

『兄さんは僕と千佳の味方です』

「そうか……」

ついさつき本当に少しだけ会話をしたがボーダーに対して嫌悪感を剥き出ししていた。

修は味方ですと言わずに自分と千佳の味方だと言った。その事でどうすべきかと考えるのにも時間は足りない。今は戦力をどう分散させるか、誰を何処に配置し向かわせるかが重要で、何処にいるのか一切分からない男の足取りを探す時ではない。

少なくとも動くことが出来ない影浦隊や生駒隊を揃え、此方に向かおうとする弓場の元に外岡と王子を飛ばしたのを見て、今は敵ではないと考える。

『本部長、避難が進んでいる地区のC級の援護に向かわせてください!!そこには、その地区には僕達のチームメイトがいます』

避難進んでいない地区を優先し、一ヶ所ずつトリオン兵を倒す方針に決まったが千佳が心配な修。

避難が進んでいる地区にも戦力は必要で、本部長はそれを許可しようとするのだが城戸司令はそれを許可はしなかった。正確に言えば、修が向かうことは良いが、自身の黒

トリガーを起動した遊真は市街地には向かつてはいけなさと、レーザービットを倒せる黒トリガーを持って余す余裕がなく一人で向かうように言うのだが

「私が三雲くんに同行します！」

修と遊真の直ぐ側にいた嵐山隊の木虎が自分も向かうことを言う。

本部長からの信頼も厚い嵐山隊。あつさりと認可され、千佳達の所に向かうことに。

「ありがとう、木虎」

自分一人ではトリオン兵が倒せる自信がなく心細かった修。嵐山隊の木虎が来てくれるなら安心だとホッとする。

「勘違いしないで。B級の貴方が行くよりも私が行った方が効率が良いのよ。貴方が言わなければ、私が言っていたわ。ついてくるなら、勝手にしなさい」

修のお礼を素直に受け取れない木虎。

言っていることが若干正論なので言い返すことも出来ず、千佳達がいる地区へと向かった。

「ただいま」

その頃の貴虎はというと、家に帰っていた。

第59話

『これは驚いた。何処からともなく、兄殿が現れるとは』

ゾーンのメモリで家に帰ると、家にはちびレプリカがいた。

何処からともなく現れて普通に家に入ってきたことに驚いており一瞬だけ戦闘体勢に入るのだが直ぐに俺だと分かり何時も通りにする。

「この姿を見て、なにも驚かないと言うことは修がなにか言ったのか？」

スカルの俺を見て、驚いたが直ぐに俺だと分かったレプリカ。

体格や声、他にも色々異なる部分が多く影さんのサイドエフェクトを無効化するこの姿を初見で俺だと見抜ける奴はおらず、ほんの数分前まで影さん達に敵だと思われていたぐらいだ。

『私達から兄殿が半年ほど前に現れた近界民、スカルではないかと聞いた』

「……」

『幸い、と言うべきか奇跡的と言うべきかボーダーの隊員によって知っていることと知らないことの差が激しい。』

とりまは兄殿はボーダーを嫌いサイドエフェクトを持っていることを知っている

が、ユーマが近界民だということを兄殿が知っていることを知らない。恐らくすべての情報を』

「もういい。どうせついさつきボーダー隊員の前で変身したから構わないし、大体分かった」

要するにボーダー隊員の情報が一人一人バラバラで、統率すれば捜査線上に俺が出る。

ある意味一番多く情報を持っており変な先入観を持っていないレプリカと遊真は一度ぐらいは捜査線上に浮かぶものの、直ぐに違うなど否定することをせずにした。そんな感じか。

『オサムも兄殿が渡したトリガーを使えば兄殿の様になるのか?』

「いや、修に渡したのと今使っている物とは大きく異なる。多分、俺はリーダーにも写っていないんじゃないか?」

『確かに私のリーダーには写ってはいないが、これはいったい……』

『スカル!』

「こいつは、スカルは直訳すれば頭蓋骨だが、これは骸骨を意味している……骸骨を漢字で書いてみれば分かる」

骸の骨と書いて、骸骨。

生体反応とか生きているものに対して有効とかそういうのは一切通用しないのがこの姿だと変身を解除するとジャンプを片手に持つ母さんがトイレから出てきた。

「あら、お帰りなさい。思ったよりも遅かったわね」

「大変だったよ。敵と間違われ、攻撃されかけて……幸い知り合いだったから、暴露ネタを言えば納得してくれて」

「今までそれを隠し持っていたんだから仕方ないわ。」

それよりも、お昼はちゃんと食べたの？おにぎりぐらいならつくってあげるわよ」

「避難場所で弁当を食べたか……あ、やべ」

「忘れたのね？」

「す、すみませんでした」

何事もなく普通に帰宅したが、弁当箱を避難場所に忘れてきた事を思い出すと怒る母さん。

土下座をして許しを乞うのだが大きなため息を吐かれて呆れられてしまう。本当に面目ない。

『カスミ殿も兄殿も緊張感が欠けているが、大丈夫なのか？』

「そうかしら？これでも結構、焦ってたりするのよ」

「我が家はこれが平常運転みたいなものだから気にしたら敗けだ」

緊張感に欠ける会話をしている俺達だか、割とこれが普通である。

ただ平常運転だからといって、物凄く気が緩んでいるとかそういう感じではなく緊張の糸は緩んでいない。

「レプリカ、ちよつと後ろを振り向いている」

『私はその気になれば、それぐらいは簡単に開けることが可能だが?』

「一応の為だ。中に入っているものを勝手に解析するなよ。大変なことに、人類滅亡へのカウントダウンがはじまるから」

帰って来たのでそろそろかとお出かける用意を始める母さんを他所に自分の部屋に戻り、ベルトを入れてある金庫を開ける。一応のプライバシーというものがあるので、一瞬で開けようが開けれまいが見られたくはない。

『これが兄殿の持つトリガーか』

デカデカとアルファベットのXが書かれたアタッシュケースを取り出し、開く。

中にはEとJとSとZとDとA以外のガイアメモリが入っており、そこにZとDのガイアメモリを入れ、別のガイアメモリを取り出し金庫に戻す。

『あのUSBメモリ型のトリガーは使わないのか?』

「あの中には俺に最も適合する物が、100%の出力で出せるものがない。

さつき家に帰って来たあの姿でも100%の出力は出せないしなによりもこれは能

力の一点特化で凄いい剣とかそういう感じのはない。組み合わせ次第では、そういう感じのは出来るがメモリによって出力が変わるから安定しないんだ」

『となると、残る二つの内のどちらかを使うのか』

金庫に入っている2つのアタツシユケースを見るレプリカ。

俺はY G G D R A S I L Lと緑色で書かれ、Aの部分に巨大な木が描かれている最も分厚いアタツシユケースを取り出す。

「つと、しまった」

『どうした?』

「着替えるのを忘れてた」

着替えることを忘れていた。

学生服を脱ぎ捨てると母さんに色々と言われるので、ゆつくりと脱いで急いでスーツに……メロンニキと同じ格好になる。

『わざわざ着替える必要があるのだろうか?』

「ボーダーのトリガーと違って、俺のはコンパクトじゃないんだ」

ハンドグリップぐらいのサイズのボーダーのトリガーと違って、この転生特典はコンパクトじゃないしトリガーオンと言っても反応しない。音声認識の機能はなく、手動で変身しないといけない。

というかどのベルトも一度腰に巻かないといけない。

「このスーツは特注品でな、裏側にベルトを入れるポケットがある」

ロストドライバーとガイアメモリはコンパクトだが、他のベルトはコンパクトではなくフォームチェンジに色々と必要だったりややこしく、それ用のスーツを用意した。何処そのホスト部隊と違って、ちゃんとした理由で着ている。

『あれは持っていないのか?』

二つ目のアタッシュケースの中に入っている物を全て取り出し、準備万端な俺にレプリカは3つ目のアタッシュケースを見る。

その中にもトリガーが入っており、俺の持っているどのトリガーよりも強いのだが、どのトリガーよりも危険で、現時点ではまともに使うことは出来ない物。

解析しようにも物が物だけに解析するのは困難で、仮にレプリカが解析しようとすれば大変な事になる未来が待ち受けている。

「それだけは絶対に使わないし、使えないし、使いたくない。」

なんか良い感じの処分方法は無いかと稀に思うぐらいに危険で神掛かった代物で……もしボーダーがなんらかの理由をつけて回収するならば、ボーダーを滅ぼさないといけない」

ガイアメモリはまだ研究して良い。

だがしかし、ユグドラシルとアレはダメだ。

歴代の仮面ライダーの中でも色々ややこしい設定を持つてるベルトで、研究なんかしてもロクな未来は待ち受けない。

「準備出来た？」

レプリカに絶対に見るなど何度も何度も釘を指してちびレプリカをコツソリと作っていないかを確認の後、部屋に入ってきた母さん。

出掛ける格好をしているのだが、ジャンプの最後らへんを読むのに集中している。打ちきり作品にロマンを感じるのか、母よ。

「準備完了……母さんの方は？」

「さあ、どうかしら？ 財布とか保険証の貴重品は色々と用意したけど、やらなきゃいけない事が多すぎるから準備なんてどれだけでも足りないわ」

「……ごめんささい」

「貴方が気にすることじゃないわ。」

「こうなることが分かってたし、こういうことぐらい親がしてあげないと……やるからにはちゃんとしなさいよ」

「これから起きる出来事や母さんに掛かる負担について謝るのだが、全くといって気にしていない。」

この人には一生かかっても届かない。器の大き過ぎる母だと何度でも重い知らされ
てしまう。

『カスミ殿はなにをするつもりなのだ？』

「このゴタゴタが終わったら、私がこの子の持っているトリガーとか説明をするの」
『このトリガーは兄殿の物では？』

「正確に言えば、拾った物なのよ。」

拾って、それを警察に届ける過程で未成年のこの子だとなにかとややこしくなりそう
だから……名義とかを私にしてあるのよ」

ボーダー関係者がみれば色々とツツコミたいことだらけだが、気にしない俺達。

母さんが家の鍵を閉めたのを確認するとトリガー（と言うことになっている転生特
典）を……ゲネシスドライバーを取り出し、腰に当てると自動的に巻かれる。

「じゃあ、行ってくるわね」

ベルトを巻かれたのを確認すると病院に向かっていった。

『兄殿、カスミ殿はいったい何処に？』

「病院……色々と考えた結果、負傷する」

母さんが病院に向かったのは俺が頼んだから。

色々と考えた。サイドエフェクトを使って必死になって考えたが、どう頑張っても負

傷する。修も俺も無傷での生還は不可能だ。

『トリオン体は生身の肉体ではなく、ボーダーのトリガーには緊急脱出機能がついているが』

「……バカを言え。」

緊急脱出した先を狙えば良いんだ。京介とかレイジさんとか遊真が物凄く強くても、生身じゃどうにもならない。

ある程度の戦力を分散させ、ボーダー隊員の实力を測ってからその隊員を余裕で倒せたり捕獲出来るトリオン兵を出撃。

頭幾つも抜けて物凄く強いわけでもない並のボーダー隊員、捕獲 or 戦闘不能。戦闘不能になったら緊急脱出で本部や支部に帰還、暫くの間、トリガー使用不可。

そしてそのトリオン兵、市街地に行こうとする。レイジさんや京介の様に強いボーダー隊員、倒しに行く。本部手薄になる。トリガーを使う近界民、本部襲撃。トリガーを使えばある程度、戦えたかもしれないボーダー隊員達トリガー使えないので捕獲される的な展開もありえる。襲撃してくる敵は基本、なにやっても得になるからな」

優秀なトリガー使いをぶつ殺すことが出来れば、次の襲撃が楽になる。

優秀なエンジニアを捕らえる事に成功すれば、ボーダーで使っている技術を得ることが出来る。

遊真のを除いた黒トリガーを破壊すれば次の襲撃が楽になる。千佳や出水の様なトリオン豊富な人材を捕獲できれば、大儲け。もしかするとこの街にまだ居るかもしれない出水レベルのトリオン能力を持った一般人を捕獲できれば大儲け。ラッド一体でも三門市の外に逃がして、名古屋や神戸、横浜と言ったボーダーから遥かに遠い大きな街で門を発生させる事が出来れば大儲け。

本拠地を、地球を守らないといけないボーダーは犠牲者や市街地への被害を0にしなければならぬのでそれら全てを防がないといけない。

「それで、今現在の状況は？ボーダー本部及び各地の状況は？」
『ラービットというトリガー使いを捕獲するトリオン兵が出現。』

B級のスワという人物が捕獲されたが、カザマ隊が救出。実力のあるボーダー隊員も苦戦しており、生半可な隊員ではラービットを倒せない。実力のあるものがラービットを、そうでないものがモールモッドの様な日頃相手をしているトリオン兵をとったが、今日、学校があった為か幾つか集合が不可な部隊がある。それでB級は基本的に部隊として行動しろと指示が出ており、このままでは市街地へ出る。

本部長は避難がスムーズに進んでいないところを優先し、一ヶ所ずつ的確に撃破する様に指示。チカが居る南部付近はスムーズに避難が進んでいる為か、後回しになりオサムがA級のキトラと共に向かっている。』

「なんで木虎？」

『貴方が行くよりも私が行った方が効率が良い。ついてくるなら勝手にしなさいのと』

ツンデレかよ。

レプリカからの報告を聞き、どうしたものかと色々と考える。

「俺にどうしてほしい？」

『なにをするのか決めるのは君の意思だ……私が君になにかを言ったところで、君はチカやオサムの元に向かう』

なにかしてくれと言う命令的な指示は無いかの確認をとるが、最終的に断ることを分かっているレプリカ。

千佳と修の元に向かうから修達の情報だけをピックアップした事を教えられると、どうしたものかと考えてしまう。

『相手はラービットで未だにトリガー使いが見られない。兄殿の考えが当たる可能性もある。早く、二人の元に……兄殿？』

「ボードー本部、今言った指示以外でなにか特別な事を言っていたか？」

『もしもの時は本部長が出るそうだ……気になることでも？』

「相手がしてきた手を対処する防戦一方続きだから、じり貧だ」

『防衛戦と言うものは、そういうものだ。』

ましてはトリガーが当たり前な向こうの世界と違い、トリガーを使えるのはボーダーぐらい……君は例外中の例外だ』

防衛戦だから防戦一方なのは当たり前だし、ボーダーしかトリガーを持ってないから仕方のないこと。

そう言われればそうなのかもしれないのだが、ボーダーめ、もう少し大規模な襲撃に對しての對抗策とかを考えろよ。

「レプリカ、その小さい状態で出来ることは」

『本体の私と変わらな……なにかあるのか?』

「今必死になって考え中……本部は俺についてなんか言ってるか?」

『兄殿がスカルと鳴るトリガーを起動し、何名かの隊員をワープさせて戦闘可能とした。』

その為、兄殿がスカルと判明しボーダー本部は少し慌ただしくオサムに連絡が行ったのだが、今は信じろとだけ言って終わらせた。ボーダー本部は動けない状態だった部隊を2つ動かせる様にしたのを見て、スカルを今だけは味方と判断。終わり次第、何がなんでも兄殿を連れてこさせるそうだ……本部と連絡をするか?』

「俺はボーダーの上とか嫌いだからいらん。仮に通信できても言うことは聞かない」
レプリカからの報告で大体の状況は分かった。

影さんとか隠岐とか移動させたりして未来を変えてみたものの、その効果はまだ発揮したかどうか分かりづらく、殆どが原作通り。

ここから色々重要となってくるのは分かっているが、そっちの方はもう余り気にしないでおう。

「それと、今から成るのはスカルじゃない」

『メロンエナジー!』

メロンっぽいデザインが施されている南京錠、メロンエナジーロックシードを取り出す。

『待て』

「なんだ?」

『ここでそれを起動するのはまずい。』

スカルと違うのならば、ボーター本部のレーダーに反応するかもしれない。この場所での反応はまずい』

変身しようとする俺を止めるレプリカ。

我が家は蓮乃辺市と三門市の境界線上に存在しており、この場でトリオン反応を示すのは色々とまずい。レプリカが俺がトリガー使ったと流せば良いかもしれないが、トリオンを探知してトリオン兵が押し寄せてくるかもしれない。

三門市どころか蓮乃辺市にまで被害を出してしまえばボーダーという組織は解体しろとか政府の役人が喧しくなる。

「仕方ない」

変身するのを一旦、取り止めて代わりにロックビークルの1つでプライベートでも使用しているサクラハリケーン（ホンダCRF250L）を出す。

「こいつはガソリンで動いているから、反応はしない……筈だ」

『この様な物まで持っているとは……』

伊達に仮面ライダーではない。

変身してないのでヘルメットをシートの下から取り出し、被る。

「レプリカー！……いや、これ言つて良いのか……まあいいか。ひとつ走り付き合えよ！

『承知した！』

この辺、普通に公道で、今は変身をしていないから法定速度を越えると色々ややこしい。こんな状態だから、警察は機能していないだろうけども。サクラハリケーンで法定速度を守りながら駆けていった。

「……いったようね」

今の時点で出せる速度で千佳の元へと向かう俺が自宅から去ると母さんが戻つて来た。

「レプリカから聞いたけど、ボーダーはいったいなにをしているのかしら？」

手薄になって市街地に被害を出してしまいそうになるなんて、抑止力的な存在にもまともになれてないじゃない」

母さんも余り口にはしないけれど、ボーダーは嫌いな方だ。

色々と大人であり嫌いだというならば自分で変えてみせるタイプなので、胸の内にし
まうだけで留めている。だが、今回の一件に関してはそれなりに怒っており、最近起き
た事に対する鬱憤をも晴らすかの様に愚痴る。

「そっういえば、何時からだったかしら？」

貴虎が書いている漫画やジャンプに興味を持ちはじめたのは」

母さんは俺の部屋に向かい、嚴重にロックしているはずの金庫を開き、アタツシユ
ケースを取り出す。

XともYGGDRASILとも書かれていない3つ目の最も小さいアタツシユ
ケース。

GENM

CORP

と書かれたアタツシユケースを開いた。

「これを使うのは本当に、いざというときね」

第60話

「貴方のお兄さん、いったいなにをしたの？」

避難が進んでいる区域に向かう木虎はついさっきの出来事を聞いた。

修にだけ通信が入っており、なにを会話しているか知らないのだが修の口から兄さんとして出ていた。なんの会話をしているかは分からないのだが、なにかがあった。大規模な侵攻が起きている中で、ボーダーでもなんでもない貴虎が話題に出た。

「……君には関係の無いことだよ」

「関係の無いって、貴方のお兄さんがなにかしでかしたのでしょ!」

兄のことをすんなりと言うわけにはいかないと強目に反発する修にムツとする。

しかし言うわけにはいかない。兄が隠していることを全ては知っていないが、それでもボーダーに知られると厄介な事になるのでなにも言わない。

「さつき、本部にも言ったけど兄さんは無駄なことほししない。だから、信じるしかないんだ」

兄がしでかした事についてはよく分かっているが、きつとなにかをする筈だと信じている。

それ以上は深くは語らず鬱憤と怒りが木虎に溜まるのだが、そんな時にヒュンと修についてきたちびレプリカが出てくる。

『このままではまずい』

「っ、あなたは？」

『私はレプリカ。ユーマのお目付け役だ』

「そう……空閑関連ね」

遊真が近界民だと知らされている木虎はすんなりと納得した。

「なにがまずいんだ？まさか、千佳達か！」

『いや、そうではない。』

時間が経てばチカ達も危機に晒されるが、このペースで行けば間に合う。だが、この

ままだとまずい』

「だから、どういう意味よ？」

ちびレプリカが言っているまずいがよく分からない木虎と修。

今のペースで行けば十分に避難の進んでいる区域に辿り着けるのならば良いことで、まずいことはない。今のところ、トリオン兵がC級と交戦中の悲報も入ってきていない。

『現在、ボーダーは……いや、こちらの世界は近界民からの襲撃を受けている。戦場と

なっているのはこちらの世界の三門市で、防衛戦だ』

「確かにそうだけど、それになにか問題があるの?」

『ラービットに使われるトリオンは並のトリオン兵、モールモッドや先程、本部を襲撃したイルガーよりも遥かに多い。ラービットを解析したがかなりの量だった。一体だけでもかなりのトリオンが必要なラービットが何体も出てくる。他にも多数のトリオン兵がいるのを見て、かなりのコストがかかっている。』

まだ確信を得られたわけではないが、これだけのトリオン兵を送れる国は1つしか無いのだが……それでもこれだけのトリオン兵を防衛にでなく、侵攻で使うとなると本国が手薄になる。本国を手薄にするほどの戦力を分散し、各部隊を分散した』

「分散された隊員を新型のトリオン兵が捕獲するのは分かっているわ。即戦力となる存在が欲しいのでしょうか?」

『ああ、恐らくその考えは間違っではない。そしてこのままだと非常にまずい』
「レプリカ、なにが言いたいんだ?」

『まだ、トリガー使いが何処にも現れていない』

レプリカからのそう言われると一瞬だけピタリと足を止める二人。

周りが色々と騒ぎになっているが、まだ何処にもトリガー使いが現れてない。

近界民達にはトリオン兵という使い捨てで人が死なずある程度の量産と改良が可能

な便利すぎる兵器があり、トリガー使いが出なくても良いように思えるが、それでもトリガー使いの方が強い。

『この戦力からして相当な手練れのトリガー使いがいる筈だ。

ラービットよりも遙かに凌駕するトリガーの使い手が。そうすると、今のままではまずい。

如何に優れたトリガー使いと言えどもトリガーを起動することは出来ない。ラッドの一件から考えるに、緊急脱出をすれば本部や支部に飛ばされる事は解析済みだ』

「まさか、緊急脱出をした後を……ポーターがトリオン兵を倒すのに集中して疲弊したところを人型の近界民が現れるって言うの!？」

『それも大いにありえることだ。

こちらは防衛する側、対して向こうは襲撃する側で向こうの目的が、やり方が分からない以上はなにをするか分からず、全てにおいて守りきらなければならない』

継戦を重視し作られているポーターのトリガー、地の利や連携を重視したりして戦っているポーター隊員。

自陣での戦闘で有利なのはポーターだが、それが一時間二時間では終わらず、一日、2日と戦うとなれば話は別である。近界民はトリオン兵を出撃させ、のんびりとしている時間を作れるがポーター隊員は常に戦闘を続けなければならない。ポーターはコスパ

的なことも考えてトリオン兵を持っておらず、トリオン兵同士で争わせるといった手段が使えず、下手をすれば飲まず食わず寝ずで、近界民の国の1つと此方の世界が離れるまでの10日間戦わないといけない。

『なにか、逆転となる切り札が必要だ』

相手の大将を倒す、相手の一番の狙いを見つける。

なんでも良いから1つだけ、この不利な状況をどうにかすることが出来る一発逆転の切り札をレプリカは考えるのだが思い浮かばない。

「考えている暇は無いわ。」

今の私達に出来ることはC級の援護と相手を倒すことだけよ……南西地区が突破されたわ」

『南西には千佳達がいる』

「急ごう、木虎！」

「足を引つ張らないでよね！」

南西地区は突破されてしまい、トリオン兵がやって来たことを知らされた。

修達は加速し、現場に全速力で向かう。

『オサム、こちらも全速力で向かっている』

貴虎も全速力（法廷速度ギリギリ）で向かっていることを修は知る。

「あそこか!!」

南西地区に辿り着くと、ビームらしきもので発光している場所を発見。

木虎と修は向かいながら準備をする。木虎は拳銃とスコープオン（改）を出し、修も起動していないレイガストを握り

「アステロイド!」

ラービットの周り目掛け、アステロイドを放つ。

自身のトリオン量では倒す威力を出せないと修は分かっている。足止めとしてラービットの周りを狙う。トリオン兵は機械、プログラミングされた通りに動く。ならば、一歩でも動けば攻撃が当たる状況を作り、攻撃に当たりに行かない様にする。

「修くん!」

「メガネ先輩!」

「千佳、夏目さん、無事か!!」

修の助けが来たことにより安心する千佳と夏目をはじめとするC級達。

しかし居るのは嵐山隊の木虎と修だけで、安心するにはまだ早く、ラービット以外にもモールモッドもおり近くの住居を破壊しながら此方にやって来ている。

「私はこの新型を、モールモッドは貴方に任せるわ」

「大丈夫なのか?」

手分けしてやらないといけないのは分かるが、相手は新型。

木虎が優れた隊員だろうが、未知の相手だなにをしてくるか分からず油断すれば捕獲してくる。モールモッドを先に倒して、連携した方が良いのではと修は考えるが

「それはこっちの台詞よ」

木虎は他人よりも自分の心配をしろと言っている。

「捕まった諏訪さんはB級、私はA級……周りはマスコット部隊なんだの言っているけれど、A級は精鋭部隊なのよ」

キツとC級隊員を睨み付ける木虎。

そのC級隊員は新3バカと遊真に呼ばれているイキっている勘違い野郎で、入隊前にそこそこ良い成績や才能を見せており、多くポイントを貰っている修より才能はあり、進学校に通っている一周回ってバカである。

ボーダーの一部では嵐山隊はメディア向けに顔で選ばれたマスコット部隊と言われしており、3バカもそう思っている。実際のところは全員が確かな実力を持っている連携重視の部隊である。

選りすぐりの実力派エリートがなれるA級で最年少でないが数少ない中学生、エリート中のエリート。なのにC級から見下されており、自分よりも遥かに劣っている筈の修が来たことに一部が喜んでいる。

それが木虎を苛立たせており、元からあった慢心や傲慢さを加速させる。先輩には舐められたくない、同年代には負けたくない、後輩には慕わりたい、どちらかと言えばモテてチャホヤされたいと結構欲望にまみれている。

「貴方達も市民の避難が済み次第、逃げなさい！」

しかし、強い。

木虎は拳銃を取り出し、ラービットの周りに撃った。拳銃に設定されているのはアステロイド、でなくスパイダーと呼ばれるワイヤーを設置するトリガーで、ラービットの周りにはワイヤー陣が作られる。

「東さんのアイビスが利かなくなると、私のアステロイドは決め手にならない。風間隊は全員がスコープオンを使う、白兵戦特化の部隊……」

威力に特化した狙撃銃アイビスの弾丸を自分よりもトリオン豊富な男が撃つたものの、ラービットに簡単に弾かれた。

ラービットを倒したと風間隊から報告を受けており、風間隊は全員がスコープオンを装備している近距離超特化の部隊。

この二つの情報が木虎の耳に届いており、その二つの情報を纏めて動き出そうとすると先に動き出すラービット。

「何処を狙っているの！」

自分が眼中になく、ワイヤー陣を突破しようとするラービット。

ラービットもまた捕獲用のトリオン兵。トリオン能力に優れた人物を捕獲するべくプログラミングされており、この近隣で最もトリオン能力に優れた人物は言うまでもない、千佳だ。

ワイヤー陣を抜ければそこには戦えないC級が沢山おり、突破させるわけにはいかなと木虎はアステロイドを撃つとラービットの標的は千佳から木虎へと変更。

殴り掛かってくるラービットの動きを見極め、木虎はワイヤーからワイヤーへと跳び移りアステロイドを撃っていく。

「頭から腕にかけて色がある部分の装甲は思っていたより堅いわね……」

何時も相手にしているトリオン兵は大体これで終わるのだが、ラービットには凹み傷ぐらいしかつかない。

東さんのアイビスで倒せなかったと報告を受けている木虎は元から倒せると思っておらず、どの部分の装甲が弱いのかを見極める為にとアステロイドを連発しており、腕が最も装甲が分厚く、そこを崩して倒すのは不可だと判断。

自身のトリガー構成からして倒せるのはスコピオンで、切り崩すには大抵のトリオン兵の弱点である目元や、装甲の薄いお腹辺りだと少しずつラービットを分析していった。

「おお、すー！」

そんな木虎を見て、開いた口が塞がらない夏目。

夏目は狙撃手志望の隊員で、攻撃手や射手の戦闘を見る機会は基本的でない。ポーターの精鋭中の精鋭であるA級がどれだけスゴいか知らず、目の当たりにして興奮する。

「夏目ちゃん、この辺りの避難を終えたから私達も逃げないと」

「いやでも、もう終わりそうだってば」

木虎がラービットを圧倒している。

まだ訓練生であるC級にとつてその光景はとても喜ばしく、逃げることを忘れさせた。そして、それがダメだった。

『まずい。ラービットは、飛べる！』

千佳の側にいるちびレプリカは危険を真っ先に察知した。

木虎はワイヤー陣を敷いて、それを跳び移りアステロイドの弾幕をはるスピードとテクニックに加えて自分に有利な戦いをしている。その戦い方は非常に合理的で木虎に合ったスタイルだがラービットはそれを一瞬で逆転をする手を、レイガストのオプシオントリガー、スラストアーの様に背中への噴出口からトリオンを噴出。木虎のワイヤー陣よりも遙か高く飛んだ。

「上をとられた!？」

有利に進んで、もうすぐ倒せると思った途端に形勢逆転。

ラービットは目元にトリオンを集め、砲撃を木虎……でなく、市街地に向けて発射をした。

「……いつ……」

『待つんだ……兄殿が信号に引っ掛かった!!』

一瞬にしての形勢逆転に加えて自身を無視し、市街地に向かつての砲撃をし木虎の心にゆとりが一瞬にして無くなった。

自身はこの場にいる唯一のA級で増援も直ぐには来ない。自身を無視し市街地に攻撃したので、今すぐにも倒さなければならない。木虎の焦りは動きや判断を制限しており、この場をどうにか出来そうな貴虎はここからバイクを使って数分ぐらいの場所におり、信号に引っ掛かっていた。

バイクを乗り捨て、トリガーを起動してこっちに来ることは出来ないのかと貴虎の側にいるちびレプリカは聞くのだが、バイクを乗り捨てることは出来ないかと信号を待つ。ちびレプリカは仕方なしに信号をハッキングした。

「お前の相手は私よー」

空にいるラービットを撃墜すべく、飛んだ木虎。

冷静になれていたのならば、心にゆとりがあり慢心や雑念等がなければ割と簡単に考える事が出来たのに、木虎は考えれていなかった。

ラービットはトリオンをロケットのように噴出して飛んでいる。対して木虎はワイヤーや壁を蹴って跳んでいる。

「!?」

上に向かわなければならぬ木虎に対し、ラービットは空中で自在に動くことが出来る状態だ。

向かってくる木虎を待っていましたと言わんばかりにラービットは向きを変え、レイガストのスラスタ―使用したかのように突撃した。

「木虎!!」

モールモッドを倒し終え、木虎のサポートを出来ず見るだけだった修は叫ぶ。

突撃された木虎はスコープピオン（改）で攻撃を受けるのだが受け太刀に向いていない脆いスコープピオンは砕け落ち、木虎は足を掴まれる。

「失敗……そんな、そんな!!」

ラービットの目元にはトリオンが集束されていき、危険だと感じるのだがパニックになり冷静な判断を取れなくなる木虎は……ラービットの砲撃に貫かれた。

『トリオン伝達脳及びトリオン供給器官破損、緊急脱出』

そして本部へと緊急脱出をした。

「う、嘘だろ?! 嵐山隊がやられた!」

その様子を見て、一人のC級隊員が絶望をする。

救援が来た、それもボーダーの顔と言われる嵐山隊の木虎で序盤はラービット相手に有利だったが、最後はあっさり倒されてしまった。

「え、A級が倒された!! 逃げるぞおおおお!!」

木虎の敗北はC級を大きく動揺させ、ともかくにも逃げなければと必死に走り出すC級隊員達。

「くそっ!」

『待て、修!!』

ラービットの速さを知らないが逃げたところで追い付かれる。

一分一秒でも時間を自分が稼ごうとレイガストを修は握るのだが、隣にいるレプリカから兄の声がする。

『くそっ、忘れた頃にツケが返ってきたか!』

計算上では木虎がトリオンキューブになるかならないかぐらいの時間に辿り着くと見ていた貴虎だが、裏でやった余計な事が巡りめぐって帰ってきた。

レプリカが信号機をハッキングしてくれたことにより、最速で進むことが出来ている

がそれでも一分以上は掛かる。その時間があればラービットは千佳を拐える。

「メガネ先輩、こうなったらやるしかないっすよ!!」

「夏目さん、ダメだ!」

木虎でも倒せなかったラービットを自分達が倒すことは出来ない。

逃げてでも無駄だと分かったアイビスを持った夏目を修が止めようとするのだが、その前に貴虎が動いた。

『……千佳のトリオンを使い』

「千佳のトリオンを……」

ボーダーのトリガーは緊急時に他人のトリオンを使ったり、他人がセットしているトリガーを使うことが出来る。

千佳のトリオン量は規格外でアイビスを使えば本部の基地に穴が開くほどで、そのトリオンを夏目と修が使いラービットを倒す。

「あ……あ……う」

『お前、なんの為にそこにいる?』

それしか道は無いのだが、その道は出来れば選びたくは無かった。

貴虎は苦渋の決断をして千佳のトリオンを使うように言い、木虎が緊急脱出をするのを見て怯えた千佳に喝をいれる。

『逃げたいのならば、そこで待っている。俺が逃がしてやる。別に逃げることは恥ずかしいことでもなんでもない』

「逃げ、る……」

仮にラービットに捕まったとしてもトリオンキューブにされるだけで間に合う。

だからその場で待っている、逃げたいのならば逃がしてやると言い千佳は考える。この場で逃がしてくれる貴虎の言葉は魅力的だ。誰だってあんなものを見れば逃げたいと強く思う。現にC級は怯えて逃げている。

ここで逃げても問題ない。もうすぐトリガーを持っている戦えて頼りになる強い人が来る。

それは甘い誘惑だった。

逃げるなどと言う厳しい言葉でなく、逃げて良いという優しい甘い誘惑。襲われるのは誰だって怖い、友人や兄が居なくなり近界民に何度も狙われた千佳ならば尚更だ。

「チカ子、トリオンを貸して!!」

「出穂、ちゃん？」

「千佳のトリオンを使えば、ラービットを倒せる!!」

「修、くん……」

逃げてても良いという優しい甘い誘惑に身を委ねようとした時、夏目と修が千佳の元に駆け寄った。

千佳のトリオンを使えばラービットを倒すことが出来る。イルガーの爆撃をも耐えたボーダー本部に穴を開けたのだから、ラービットは倒せるという確信を二人は持っていた。そして千佳は気付く、自身をあえて精神的に追い詰めた貴虎は今度は自分で前に進ませる様に、甘い誘惑をした。

「使って、私のトリオンを……皆を助けることができるなら、思う存分に」

『『トリガー臨時接続』』

守られるんじゃない、逃げるんじゃない。立ち向かうんだ。

私はもう一人じゃない。自分を信じてくれる頼ってくれる友達が、仲間がいる。

千佳は出穂と修の手を掴み、トリガーを繋げた。

「メガネ先輩、先にやらせてもらいますー！」

トリガーが繋がるのを感じると夏目はアイピスを片手で持ち上げ銃口を向ける。

至近距離にいて、撃つのは自身の弾でなく千佳の弾。正確に狙わなくて良いとアイピ

スの引き金を引くとボーダー入隊初日に見た千佳が使った時と全く同じ威力が出て、ラービットの右半身をかき消す。

「後は任せてくれ、アステロイド!」

右半身は消えたが油断は出来ない。

修は千佳のトリオンを使い超特大のアステロイドを出し、威力に振って左半身と東部に当ててラービットを撃退した。

「よっしゃあ!見たか、あたし達の力!!主にチカ子の力だけ!!」

「出穂ちゃん、修くん……!」

「千佳?」

ラービットを倒したことにより、一先ずはこれでこの辺りはどうにかなった。

修は本部へと連絡を取ろうとするのだが、その瞬間、千佳がなにかに反応して段々と顔を青ざめていく。

「あ、ああ……」

「ウソお!?アレって確か」

その感覚がなにか直ぐに分かり、千佳は青ざめる。

それがなんなのか夏日が見ると顔を青ざめていく。

「ラッド……」

修はその名前を小さく呟いた。

一月以上前、立ち入り禁止区域外に発生したイレギュラー門を発生させた原因である門を開く装置が備え付けられた特殊なラッド。

全てを駆除したはずなのに何故ここにと焦るが冷静に考えればなにもおかしくはない。今、襲撃してきている国がラッドを街中に放った国だ。目の前にいるラッドは修が倒したモールモッドの中におり、それが目の前に現れたただけだ。

「全員、逃げるんだ!!門が、開く!!」

ラービットが倒された事により、周りのC級は喜び安堵するが絶望に叩き落とされた。

改造ラッドが門を開き、さつき倒したラービットとは色が違うラービットが3体出てきたのだから。

「メガネ先輩、お願いします!!」

新たなるラービットの出現には驚き軽く絶望する夏目だが、直ぐに戦う気持ちを取り戻して修に頼む。

ラービットは三体で自分がアイビスを撃つよりも修がアステロイドを撃つの方が倒せると感じた。

「アステロイド!!」

ふたたび千佳のトリオンでアステロイドを撃つ修……しかし

「避けられた!」

ただ早くて真つ直ぐ飛んでくる弾は新たなラービットの驚異ではない。背中の噴出口を使い、飛んで避けた。

「一体しか倒せないけど、やるっきゃ」

「ダメ、そつちには民家があるよ!」

「うぐつ……」

一体だけでも倒してやるとアイビスを使おうとするも、止められる。

余りにも威力が強すぎる千佳アイビス。最初に撃つた時は真正面にラービットしかおらず、撃てたが今は違う。ラービットの背後には民家があり、下手にラービットを撃てば民家ごと貫き、何処まで弾が飛んでいくかが分からない。

『こちら、本部!』

緊急脱出をした木虎隊員の報告を受けた!後少しだけ凌いでくれ!今、ボーダー最強の部隊を向かわせた!』

「いや、少しも凌がなくてもいい」

南西地区に既に手を回しボーダー最強の部隊を向かわせていることを伝えたが

「ヒーローは遅れてやってくる、なんて言葉があるが遅れてやって来たらダメだな……」

にしても、負けるなよA級」

「さつきから、このちっこい通信機から来る声の奴！」

それよりも早く、三門市で最強の男がやって来た。

第61話

「なんとという一撃……白色は玄界の訓練兵ではなかったのか」

千佳のトリオンを使い、ラービットをトリオンに物を言わせ破壊した事に圧倒されるハイレイン。

「いやはや、恐ろしい威力ですね……これで戦い方を覚えれば私なんて足元にも及ばなくなるでしょう」

ヴィザもその威力に感心をするのだが、直ぐに宝の持ち腐れだと気付く。

ラービットを倒した一撃は見事だが、実際のところは二撃。夏目のアイビスと修のアステロイドで、夏目が外して半身のみ破壊したのを見て、素人だと瞬時に見抜く。

「玄界の、それも雛鳥だから下手な期待をしていなかったが……これは金の雛鳥だな！」
「隊長、どうしますか？近くにラッドが居ますので、今すぐにも現場に迎えますが」

「おいこら、ヒュース！なに勝手に自分が出ること前提で言つてやがる！」

「メガネと玄界の兵が増援としてやって来て、女の方がラービットに倒されたことから、ラービットを倒せる増援が来るはずだ。貴様の黒トリガーはヴィザ殿よりも攻撃力はなく、応用能力も欠けている」

「あ？」

自分達（黒トリガー未使用時）よりも遥かに優れたトリオン能力を持った逸材が居ることを知り、喜ぶアフトクラトルの近界民達。そろそろ仕掛けたいとランバネインはウズウズしていたりするのだが、まだである。

「ミラ、金の雛鳥はどれだ？」

物凄いトリオン砲を見れたが、修と夏目の二人が撃った。

メガネの方のトリオン量はなんでこんなのをと思うほどに低いのは分かっており、そうなると女の子の方が優れたトリオン能力の持ち主となるのだが、それならば何故メガネがアレほどのトリオンをとる。

ハイレインはミラに自分達のお目当てである金の雛鳥が誰か聞くと、トリオン兵越しで見っていた現場の映像を巻き戻して夏目がアイビスを撃とうとする少し前に戻した。

「金の雛鳥は撃った女でもメガネでもなく、この二人と手を繋いでいる子供です。」

現在、辺りの雛鳥達のトリオンを計測しているのですがこの子供のトリオンのみ測定が不能です」

修と夏目が千佳と手を繋いでいるシーンで一時停止。

手を繋いでトリガーを接続した事もミラは報告をする。

「測定が不能、というのは装置の故障というわけではないのだな？」

「はい。測定できる数値の上回るトリオンを持っています」

「なんと?! ノーマルの角付きならば普通に測れる物だぞ」

「どうやら、黒トリガー並のトリオンを持つているようですね……訓練兵で拙く幼い、文字通り金の雛鳥とは」

「隊長殿、オレに行かせてくれ!! 是非ともあの砲撃を撃ち破り、金の雛鳥を連れ帰る!」

千佳の存在に気付き、千佳を捕らえようとする方向に話は代わりランバネインは目を輝かせて出撃要請をする。

あの砲撃を真つ向で勝負をし打ち勝ちたいと男のロマンに走っており、ヴィザはダメですよと止めるのだが笑っており、アレと戦ってみたいという気持ちが分かり、もしアレが歴戦の勇士だったならばという思いが混じっている。

「拐うだけならば私が最適かと思いますが、どうしますか?」

「そうだな……」

自身の国であるアフトラトルを形成するマザートリガーに捧げる供物に、神に成りうる存在は早々に居ない。思わぬところでの金の雛鳥は喜ばしいことだ。

千佳だけを拐って、そのまま全速力で逃亡するという手段は無くもないのだが、もしかするとと最悪なパターンを幾つも想定。現状ではこちらの有利で、色々と出来る。

「金の雛鳥が居る地点に向かってきている増援はいるか?」

「二ヶ所から増援が来ています。」

片方は複数乗れる乗り物に乗っていますが、少し時間が掛かります。

その間に色付きのラービットがその前に金の雛鳥を捕獲出来るかと思われませんが、これはい!？」

「なにがあつた」

「もう片方から、例のメガネが……現場に到着しました」

俺の登場により、ハイレインは舌打ちをする。

「少々勿体ないが、色付きにメガネを狙わせろ!」

この場での登場は増援だ。

ラービットを倒せるほどの隊員となれば、少しでも情報を収集しておきたい。

ハイレインは千佳達の前に出現した色付きのラービットに千佳達を狙わずに俺を狙うように指示をした。

「間に合つたようで間に合わなかつたな」

別の場所でなにが起きているか知らず、なんとか辿り着いた千佳達がいる南西地区。

今までの暗躍のツケか、木虎がやられてしまい千佳が襲われそうになつてしまつた……非常にまずい。

千佳がトリオンを使うことにより襲撃してきたアフトラトルに千佳に意識が向い

てしまい、千佳と修のデッドヒートレースがはじまる。

木虎がやられるかやられないぐらいには、普通のラービットを倒して直ぐぐらいに辿り着く筈だったが木虎がやられ、千佳のトリオンを使いその場を凌いだだが、これでアフトクラトルのトリガー使いの誰かが来ることが確定した。

「修、状況は？」

「兄さん……」

「情報は!!」

俺が来たことに安堵しているが安心して暇はない。大声で叫び、修をしつかりとさせる。

来るまでに色々と情報を聞いていたが、現在どうなっているかが分からない。

「あ、嵐山隊の人が倒されたっす!」

「一般市民の被害は？」

「今のところ0な筈っす!」

修が答えようとする前にC級の女の子、夏目出穂が答える。

木虎がやられただけで誰かが拐われた、死人が出たという大きく目立った被害は0

……

「周りはC級で、京介達の到着に数分……まさか、あいつらも信号に引っ掛かってるん

じゃ」

「声の人、危ない!!」

この場を切り抜けることは容易いが、その後は被害なしで切り抜くのは無理だ。

京介達が後どれぐらいでたどり着くかサイドエフェクトで占っていると一体の色付きのラービットが殴りかかって来て夏目は叫ぶのだが、攻撃することは分かっている。

俺の顔以外が眩く光り出し、ゲネステイツクライドウェアを纏い攻撃を受け止めてサクラハリケーンから降りてロックビークルに戻す。

「千佳、お前の返事はなんだ?」

ここに来る前にちびレプリカを経由し、通信をした。

その際に逃がしてやると言った。喝を入れるために言ったのだが、今ここで逃げたとしても俺は文句を言わない。

「本当なら、ここに立つべきなのは俺じゃない。あの人だ。だが、あの人はいない……俺はあの人の代わりに守るがどうする?」

「……守らないでください」

千佳を守ろうとする意思を見せたのだが、千佳の方から拒んできた。

「千佳、なにを」

「貴虎さん、守らないでください。」

私はもう、守られるだけは逃げるだけは嫌なんです!!」

「じゃあ、どうしてほしい?」

「……私や修くん、出穂ちゃんやここにいる皆と一緒に、戦ってください!!」

自分も戦うのだと銃を持つ千佳。

守らないでほしいが助けてほしい……一人で出来ないから、一緒に戦ってほしいか。

「そういう感じの展開、好きだぞ」

『メロンエナジー!!』

千佳の成長を大きく感じ、メロンエナジーロックシードを取り出して、解錠。

「また、門がってメロン!?!」

俺の頭上に門、でなくジツパーの様なものが出現し、開くと大きなメロンが出現。

『ロック、オン!!』

メロンエナジーロックシードを、ゲネシスドライバーのゲネシスコアに装填。

頭上にあるメロンは俺の頭に被さると頭部が光り出しマスクを装着

「変身」

『ソーダー……メロンエナジーアームズ!!』

ゲネシスドライバーのレバー、シーボルコンプレッサーを引き、仮面ライダー斬月・真に変身した。

変身するのは久々だが、スカルよりもじっくりと来る。変身音もなにかを言ったりするものでもなく、平成二期以降はなにかとやかましい変身音だから、シンプルなしつくりと来る。

「メロン纏った!?!」

中々に良いリアクションだぞ、夏目。鎧武系はフルーツ鎧武者オンパレードで、はじめて見る人にはインパクトが強い。

「終わらせるぞ」

ソニックアローを右手で握り攻撃しているラービットに振る。

その際にソニックアローの刃、アークリムを緑色に光らせて切れ味を上げておきラービットの腕を切り落とし、横に風ぎ払い真つ二つにする。

「残りは」

到着した際にいた三体のラービット。

修達が相手にしていたラービットとは異なり、襲撃してきたアフトクラトルのトリガーの能力を限定的だが使うことが出来る。

最初に殴つて来たのは砲撃での高火力な攻撃が武器のラービットで、砲撃と拳による攻撃を気付けておけば良いだけだが、残っている2体が面倒だ。

一体は性状を変える能力を備えており斬撃系の攻撃は効きづらく核となる部分を破

壊しないと面倒だ。もう一体は物凄く磁力を纏っており、腹の内側に砂鉄のようなものを隠している。

「小手先の技術よりも、火力で倒すか」

倒すことが出来ない相手ではない。

『メロンエナジースカッシュー!』

ゲネシスドライバーのシーボルコンプレッサーを一度引き、必殺技の準備に入る。

ソニックアローの弦を引くとトリオンがソニックアローに送られ、ソニックアローの両端が延びて複数の弦が出現（仮面ライダーデュークの必殺技のような状態）

「終わりだ」

弦を放すと、矢は発射。

性状を変えるラービットの核となる部分を貫いた。

「兄さん、まだ一体が!」

メロンエナジールックシールドを装填したソニックアローで横一線。

ソニックアローの斬撃は延びて磁力を纏ったラービットを破壊した。

「終わったぞ」

「A級の嵐山隊がやられて、チカ子の力を借りてやっと倒したのを……メロンさん、何者なんですか!?!」

三体のラービットを倒し、少しばかりの余裕が生まれた。

なにも知らないC級で一番近くにいた夏目は俺の元に近付き目を輝かせるのだが、相手をしている暇はない。

「出穂ちゃん、その人は修くんのお兄さんだよ」

「このメロンさん、メガネ先輩のお兄さんなんすか!？」

「メロンさん……どうしたものか」

後少しすれば人型近界民が襲来する。

その未来を変えることはもう出来ず、やって来る奴を倒すことは出来なくもないが、全てを倒しきる自信は無い。

幸いにも誰が危険なのか、誰を倒したら良い未来に辿り着くというのは分かっているのだが、色々と裏で余計なことをしていた為に想定外の事も起きるのを考えなければならぬ。

『兄殿、兄殿がボーダー嫌いなのは知っている。しかし、今の状況からしてボーダー本部と連携を取るしかあるまい……そうしなければ、修が大変だ』

「そのですね……」

本部から通信が来ているのか、物凄く焦っている修。

説明をして良いかと顔で訪ねるので少しだけ待てとロストドライバーを修に投げる。

「使用出来る回数は決まっていらないが、油断すると破損して変身出来なくなる…それが切り札にならないことを祈る…：レプリカ、凄くざっくりと、具体的に言えば俺がやって来てラービット倒したとか簡潔にボーダーに説明を…：今の姿ならば、アーマードライダー 鎧武者斬月・真ならばリーダーに写っている筈だ」

『了解した。必要な事のみボーダー本部と説明をしよう』

修に助け船を出し、次の手を考える。

修から不吉な相が減ったものの代わりに千佳から物凄く不吉な相が出ており、千佳がアフトラトルに狙われるのは確定した…。

「千佳、万が一の時はこのロックシードを使い。施錠して握っていれば呼び出されたやつがお前の代わりに戦ってくれるはずだ」

なにがあるか分からない以上はなんでも出来るとっておきのロックシードを千佳に持たせる。

実際にやったことはないが、一応ロックシードなのでインベスゲームの要領で呼び出すことが出来る…：筈だ。

「メロンさん、この後どうすれば良いですか？」

「なぜ俺に聞く？」

「メガネ先輩が忙しそうですし、私達上からの指示が聞けないんですよ」

「なに？C級は通信機能無いのか？」

「無いですね」

緊急脱出機能はともかく、通信機能が無いのは意外だ。

しかし、通信機能があったら原作の方で修が最初にトリガー使った時とかイレギュラー門が学校に開いた時とかで色々あるよな。

「レプリカ、状況は？」

『現在、C級が避難誘導をしている辺りにトリオン兵がラッドを経由して出てきた。』

幸い、その近辺にB級の部隊が居てラービットを倒せる実力を持っているのだが、動けるB級に対して戦えないC級の数が多し。このまま行けばC級隊員が拐われる可能性があり、何名かトリオンキューブにされたとのことだ』

「狙いはC級か……街中修は無駄だったのか」

『いや、ボーダーは大規模な侵攻があることが分かっていた。』

その為の対策としてトリオン体の見た目を修にする機会があったので、これは我々が情報を与えたに近い』

右見ても左見ても修で武器統一の作戦は割と悪くはない。

偽の情報だとわかる情報や不確かな情報は使うことは出来ないが、その情報で考察することはできて元に戻した為に訓練生と正隊員の違いがあつさりと分かったりしたな。

「千佳、離れてなさい！」

「つと、さつきと似たような展開か」

色々と頑張ったものの、その分、別のところがダメになった。

その事に落ち込んでいると京介達玉狛第一が辿り着くのだが、京介とレイジさんが銃を向けており、小南が跳んできた。

これは明らかに話が届いていなかったりするパターンだとハンドアックスな双月で攻撃してくるのでソニックアローで受け止める。

「出水の私服は千発百中Tシャツ！」

「知ってるわよ、それぐらい……あれ？」

二度目となると手馴れたものである。

出水の残念な部分を言うと、それがどうしたとなるのだが直ぐに違和感に気付く。

「なんでそんな事を知ってるのよ？」

「本部にでも通信を取るなりなんなりすれば良いだろう」

この辺りについてからトリガーを起動したのか、上手く情報が伝わっていない小南。

説明している義理は無いし、説明をすると面倒臭くなるので本部に丸投げをするのが夏目が口を開いてしまう。

「そのメロンさん、メガネ先輩のお兄さんです」

「はあ!?嘘でしょ?いくらなんでもトリガーを持つているわけは」

「小南先輩、どうやら本当みたいですよ」

「はい、分かりました」

俺の事を告げられると信じれない小南。

それは当然の反応なのだが京介とレイジさんは通信が入った様で銃を構えるのを止めて此方に近付いてきた。

「色々と聞きたいことがある」

「今、聞かないといけない事以外は答えるつもりは無い。

お前達が色々と三門市で好き勝手した結果、こんなものを招き入れたのだから、俺も俺で好き勝手にさせてもらう」

「ちよつと生意気よ、あんた!」

「小南先輩、落ち着いてください」

俺のボーダー嫌いをよく知る京介は小南を落ち着かせる。

その間、レイジさんは俺の事をジツと見ておりなについて質問をするかを考えている。

「お前は俺達の味方、と見て良いんだな?」

余計なことを聞けば揉める。

そう判断したのか敵対の意思があるかないかの確認を取ったのだが、敵対の意思は無いだろうと余り警戒をしていない。

「ダメです」

「なに？」

ボーダー嫌いだ、街にまで被害が及んでいる。このままだと自分の身が危なかったりするから出てきた……と思っていたのか、俺の返事を意外そうにする。

「俺は修と千佳と遊真の味方で、ボーダーの味方になった覚えはない。」

何処のどいつかは知らないし、探すつもりもないし会いたくもないが修と千佳をあえて危険な目に遭わせようとする馬鹿野郎が居るからこうしてやってきたんだ」

修や千佳が無傷とかそういう感じだったら普通に避難所で飯を食っている。

一番は自分と自分の大事な者の為であり、不特定の顔の見えない知らない人の味方や手助けをしている余裕なんて何処にもない。

「ちよつと待て、どうして修や千佳をあえて危険な目に遭わせようとする馬鹿野郎が居ると分かるんだ？」

その馬鹿野郎に心当たりがあるレイジさんは話に食いついた。

その馬鹿野郎とどんな会話をしていたのかはなんとなく分かるが、なにか気になる事があるのかなんとしても聞きたいと言った顔をしている。

「サイドエフエクト」

ざっくりと答えるとレイジさんだけでなく京介も顔に出してはいないが驚いた。

あのグラサンと俺のサイドエフエクトが反発しあつて未来が不安定になつていたのか。

「お前には、なにが見える？」

何故どうしてトリガーをと言う話を聞かないでくれるレイジさん。

これからの事を本部に聞くよりも先に俺を頼ってくれるのはありがたいのだが、残念ながら俺の方にも余裕は無い。そしてレイジさん達の方も直ぐに余裕が無くなる。

「セカンドステージといった感じだ」

なにせ周りに門を開く機能がつけられたラッドがウジャウジャといるのだから。

ソニックアローの矢で倒せるが、全てを破壊することは不可能で出てくるのを待つしかなく、5体のラービットと人型近界民が二人出てきた。

第62話

「新手、人型か」

「そういうことだ」

セカンドステージの意味を理解してくれ、直ぐに警戒を強める玉狛第一。

今の今まではトリオン兵ばかりでなんとか倒せていたところがあるが、此処からは段違い。トリガーを使う近界民が相手となり、自分達よりも数段上なトリガーを使ってくる。

トリオン兵はロボットであり、倒すパターンを見つけたりすれば簡単に倒せるが人型の近界民は別である。初見殺しとか未知の相手とかそういうので、予期せぬ結果になる可能性が大きい。

『あの、角……間違いない。今、襲撃している国はアフトラトルだ』

「そんなのは何処だつて良い……敵は敵だ」

「待て、三雲！」

待つつもりはない。

ソニックアローの弦を引き、力を蓄えると出てきた老人（ヴィザ）と角持ちの男

(ヒュース) ……ではなく、頭上に矢を放つ。すると、巨大なメロンが出現した。

「はああああ!!臨!兵!闘!者!皆!陣!列!在!ゼー!ー!ー!!」

メロンが出現したと同時に大声で叫び、片手で印を結ぶ。

ナルトの序盤の方で見た技術でアフトクラトルの二人はなにかを仕掛けてくると攻め込まずに様子見をし、何時でもカウンターが出来るように警戒心を強めている……もつとだ、もつと強める。

「ブンシン!!ジツ!!」

印を結び終え、大声で叫ぶと横一列に鎧武者 斬月・真が5人並んだ。

「これはこれは、中々に面白いトリガーですね」

ブンシンノジツを見て、驚かないヴィザ。

サイドエフェクトから焦りらしい焦りは見えず、大人の余裕というよりは何時でも倒せるという余裕が見える。悔しいが、その余裕は慢心でもなんでもなく正しい。

電磁波が今までで見た中でも段違いだ。隣にいるヒュースがいるせいで余計に分かる。

黒子のバスケで例えると、アレックスがあいつは中々にやるぞと全国区の選手を見て言った後に緑間を見て、こんなの有りなのかよと引いてしまってるシーンと同じ感じだ。

「三雲、お前がボーダー嫌いなのは知っている。

だが、それを今ここで出さないでくれ。あいつらは、さつきまでとは違う」

「見れば分かる……だから、仕掛けているんだ」

「周りにはまだC級がいる。

C級の退却を優先的に、倒すんじゃなく足止めを優先的にだ」

「分かっている」

レイジさんの言いたいことは分かるし、確かだ。

C級が狙われていると判明した以上はC級の活動を終えて本部へと帰還させるべきで、目の前に居るのは未知の人型近界民。後先考えずに戦うのは愚策で倒さない足止めをメインとして戦闘をするのが正しい。

だから、そこに更なる一手を俺は加える。真ん中の斬月・真以外が一步前に出て、真ん中の斬月・真はレイジさんの右隣に立つ。

「小南、あのトリオン兵を倒せ！」

「なんであんたが命令するのよ!!」

「指示をするのは視野が広いからで、お前に頼むのはお前が一番強くて頼りになるからだ!!」

その間、指示を出す。

小南はだからなんでお前がとなるのだが、一番強くて頼りになると煽てるとニヤリと笑う。

「あんた、分かってるじゃない！レイジさん、良いでしょ！」

「構わない。元からそうするつもりだ」

各々に指示を出し、次にやることをすべき事を考えるのだがレイジさんの視線が揺らぐ。

「レイジさん、平静を保ってください」

「お前……いや、そうだな」

俺の異変に気付いたレイジさん。

今、必要なのは時間を稼ぐ事で倒すことじゃないのは分かっている。だから、時間を稼ぐ方向に切り替える。

「修、千佳を優先的に守れ。理由は言わなくても良いよな？」

「……千佳が狙われるんだね？」

「……そうなってしまったからな」

俺の指示でアフトラトルの目的が分かった修は千佳の側に寄ると修から出てくる死相が強まり、死ぬ可能性が高まった。

「夏目、この辺のC級の中に弾を撃てる奴が居るか確認しろ。」

爆発する弾以外の弾を撃てる奴等がいれば千佳の周りに、千佳のトリオンで戦えるようにしておけ！爆発する弾で千佳のトリオンは絶対に使うな！千佳のトリオンでやれば爆発に巻き込まれて全員お陀仏だ！」

「了解っす！」

「京介はある程度の余裕出来れば修と一緒にC級を連れて、退避！」

爆撃を受けたことから本部が襲撃される可能性もある、退避場所を本部含めて数パターンを用意しろ！」

「三雲さん、大丈夫なんですか？」

「小南とレイジさんの代わりは難しいがお前の代わりならば割と大丈夫だ。」

レプリカはレイジさんと小南と京介の分を、通信機能以外の余計な機能を取り除いておけ。トリオンが不足しているならば千佳から貰え」

『……ユーマへの連絡は？』

「何処かで合流できるようにしておいてくれ」

流星、レプリカ大先生。

この場に居ない遊真をカウントしてくれている……いや、違うか。カウントしてくれているんじゃないか、カウントをしないといけないと考えているか。

木虎というA級隊員がラービットに倒された事により、A級でも倒されるかもしれな

いでなくA級でも倒されるが証明された。

目の前に居るのはそんなラービットの量産を可能とする国の戦士で、ラービットよりも遙かに強いと考えるのが当然で、そんなのを相手にするには黒トリガーを持つ遊真の力が必要だ。

何処の国でも絶対に狙うであろうトリオンを持つている千佳を狙うならば尚更だ。

「いけ、分身達！」

俺の指示とともに四人の分身が走り出す。

それと同時に各々が動き出す。小南は少し離れた所にいるラービットを倒すべく移動、レイジさんは機関砲を、京介は突撃銃を取り出し、修達はC級隊員をかき集める。

「ヴィザ翁、ここは自分が……援護とあのメロンとメガネメロンに注意をしてください」
「ええ、お願いします。ですが、貴方の方もくれぐれと気を付けてください。」

金の雛鳥だけあってトリオンはとてつもなく、何時でも砲撃出来る準備に入ろうとしていきます」

「問題ありません。砲撃の弱点は既に見抜いています」

千佳と手を繋がなければトリオンを借りれない。

ヒュースは弱点を見抜いており、黒い破片のような物を出現させて左腕に纏うとレールガンのような形の銃になった。

「先ずはお前からだ」

「つ、三雲さん！」

「問題ない」

自身に突撃する斬月・真に黒い欠片をレールガンの腕の銃で撃つヒュース。

「それは偽者だ」

「これは、ホログラム立体映像！」

ヒュースが撃ち抜いた斬月・真は何故か備え付けられている立体映像投影機能で出現させたもの。

「もつと周りをドライに見てみる……何故、一体だけ残っていると思う？」

「貴様が本体か!!」

「いけません、ヒュース殿！」

戦局を握られている事に気付くヴィザだが、もう遅い。

レイジさんの隣にいた斬月・真はソニックアローの弦を引いた

「遅い！」

「俺達を忘れてないか？」

矢を撃つよりも先にレールガンを撃つたものの、地面から壁が、エスクードが生えた。黙っていた京介がエスクードを出すと、突撃銃の引き金を引いてヒュースとヴィザを

撃つのだが黒い欠片が集約して京介の撃ったアステロイドを防いだ。

「三雲、全て分身だな？」

「全て分身ですよ」

走っていった斬月・真は全員、分身だ。

その事が分かるとレイジさんも機関砲を迷いなく撃ち分身を貫いて狙うのだが、防御体制に入っているヒュースを崩すのは難しく、機関砲のアステロイドは黒い欠片を貫くことはなかった。

「弾けろ」

それを見て、頃合いだと思った俺は指を鳴らすと空中にあったメロンが弾け、ヒュースとヴィザ目掛けてトリオンの矢となり、降り注ぎ、何発かは当たらず地面に激突。その衝撃で土砂が舞う。

「黒い欠片を動かしてるから、煙が不規則な動きをしている」

「三雲さんなら透視出来るんじゃないんですか？」

「残念ながら、あの男見辛いから難しい」

黒い欠片が不規則な動きをしている為か、土砂が舞って発生した土煙がおかしな動きをしている。

京介とレイジさんはそのおかしな動きを何発か撃つのだが、弾かれる音が聞こえて手

応えは一つも無い。

「スゴい……」

その光景を見ていた修は圧倒される。

顔見知り程度のレイジさんと色々と知っている京介と息ピッタリとは言わないものの、連携が取れている事に驚いている。

「メガネ先輩、そろそろ離れた方が」

『いや、まだ離れることができない』

「なんでですか？」

『コナミがまだラービット全てを倒していない。』

コナミの実力ならばラービットは倒せるが、1体ずつ倒そうとすれば残っているラービットが我々に向かう。程良く5体同時に相手をしていて多少の時間が掛かっている。足止めの誘導も出来ていないこの場を離れば、相手も玉狛第一を無視してこちらを攻撃する』

付かず離れず程よい距離で均衡を保っているが、何処かでバランスを崩せば多くのC級が狙われる。

逃げ出せる準備は着々と出来ているのだが、逃げ出すチャンスが中々にやってこない。

「くぐりー」

「三雲さ……?!」

土煙が晴れていき、段々とヒュース達の顔が京介達でも見えるかなといった瞬間、レイジさんの横にいる斬月・真は走り出す。

京介はまだ気付いていなさそうなので、種明かしをする。

「お前は後!!」

ヒュースは後回し。後回しにしておくと危険だとしても、それでも後回し。

防御に身を固めているヒュースを100m6、1秒のトリオン体基準では早いんだか遅いんだかイマイチよく分からない速度で走り、後ろにいるヴィザに突撃。ヴィザは持っていた杖の刃を抜いて、ソニックアローで斬ろうとする俺に応戦してくるのだが、その俺が消える。

「さあ、どれが本物だ!!」

斬月・真は四方八方と分身を作り、ヴィザを囲んでソニックアローで斬りかかる

「最近、歳のせいかわい頃と比べれば視力が落ちていましてね、どれが本物なのかさっぱりです。まあ、トリオン体になれば視力や体力なんてものは全て無関係になります」
前に全てがヴィザに斬られた。

杖で真正面にいる斬月・真を、杖以外の刃で他の方向から攻めている斬月・真を斬った。

「全て立体映像でしたか」

斬られた斬月・真も全てが立体映像だった事に少しだけ驚くヴィザ

原作知識で事前の情報があるのはアドバンテージだが、あくまでも知識に過ぎない。

C級を逃がすためにも足止めや時間稼ぎをしなければならぬのが分かっていたので、攻めるつもりなんて俺には無かった。

「……最初から全てフェイクだったのですね」

情報収集と本物はどれ程なのかと確かめるべく、派手な動きをして分身を出すと同時に俺は光学迷彩で透明化。

以降はレイジさんの左隣に立って、色々と指示。

出来るだけ大声で叫び派手な動きで目立つ事により、声の位置がおかしい事に気付かせない様にしたが、隣にいるレイジさんは流石に気付いた。気付いていない京介は慌てたので、肩を掴んで飛び出したのが全て偽者だと教えた。

聴覚を強化するサイドエフェクトを持つ菊地原やそれを連携に使う風間隊には効果はないが、この二人は聴覚を強化するサイドエフェクトを持っていないので通じた。

「情報収集完了」

タネや仕掛けが割れかけているので種明かしを、京介の肩を掴んでいる俺は姿を現す。

「カメレオンみたいなことも出来るんですね」

「使えるものはなんでも使う。勝ったものが勝ちだ……取りあえず情報収集は出来た」
「そうか。なにが見えた？」

「角付きのは黒い欠片を磁力で操っていてヤバイ。」

腕銃はレールガンみたいなもので、集約して盾に使ったり反射板にしたり、何個か地面に突き刺さっている欠片から磁力が出ていて応用方法は多数あり。使用者が如何に優れているかで化けるタイプで時間をかけずに一撃必殺で倒すのが吉。

ジジイの方はざっくりと言えば京介とか太刀川さんが使っている剣みtainのを複数出現させて広範囲で360度、どの方向からでも超高速で動かせることが出来る戦闘向けで応用が余り出来ないが、単純な剣の切れ味や速度が半端じゃないので防御できない。加えて使用者がジジイということなので恐ろしく実戦経験豊富で戦いたくない。

パワーアップして戦うより相手を弱体化する系で攻めた方が吉、複数名のレイジさんレベルが腕、足と倒す部位を決めての自爆特攻とかもありと言えばあり」

相手の情報を求めてきたので教えると悩むレイジさん。

相手は自分達よりも遥かに優れたトリガーを使うことは分かっていたが、どんなのかと聞き聞いてみれば自身よりも経験豊富で戦闘に特化した単純だが強いトリガー使い、もう片方は戦う以外にも色々出来る応用性に優れたトリガー使いで両方とも危険

だった。

磁力とそれで操る黒い欠片は応用性が高く、戦闘以外にも色々使えるのでなにかをしてくる前に高火力で一撃で倒す。応用性が高く時間をかければ相手が自身を100%から70%の力しか出せないようにすることが出来るので、後先考えずに120%の力を出してさっさと倒す。

広範囲で高速で動かせる複数の刃は攻撃に特化しており、攻撃の際には回避しか選択肢はなく戦闘以外の戦い方で時間をかけて少しずつ弱体化させて予想外の一手で倒す。火力勝負で挑めば基本的に負けるので自分が得意で有利な戦いをして120%の力を出すよりも、相手を70%に弱体化するのが良い。

ヒュースとヴィザ。

倒す際の方法が真逆といっても良い二人。京介もレイジさんも底を見せていないが、底を見せても二人同時では勝てない。

「私達のトリガーの情報と時間稼ぎ……ハイレイン殿が危険視するだけはありませんね」

「ヴィザ翁、奴は自分が——」

「いけません、ヒュース殿。我々はなによりも金の雛鳥を最優先で、殲滅や拠点の破壊は必要ではありません」

ヒュースは俺を倒す事に集中しようとするのだが、ヴィザに止められる。

この二人がここにいるということは現在、他の地区にもアフトラトルの兵が出てきている。そいつらの事細かな目的は分からないが、少なくともこの二人は千佳を連れ去る事を優先しなければならぬ。下手に俺を相手にする事は出来ない。

「私の星の杖オルガノンやヒュース殿の蝶の楯の仕組みを見抜いた彼は持つていきますね。目に関するサイドエフェクトを」

わかっていたことだが、ジジイ、マジで鬼門だ。

威力や速度なんかの単純な強さと経験による老練された強さの二つを持ち合わせている。

このジジイを相手にする時にはカブトアームズのクロックアップで倒してやると最初に考えたのだが、クロックアップ勝利じゃない事に気付いて中止にした。

主に仮面ライダーカブト本編以外で見るのだが、クロックアップをクロックアップや高速移動以外の力で破られてる。というかカブトの第1話で天道総司がクロックアップしてくるワーム相手にクロックアップで対抗せずに弾幕を張って倒すとかいうクロックアップせずとも倒せますけどなにか？的な事もしている。

あのジジイがどれだけ刃を出せるかは知らないが、広範囲で360度、あらゆる角度方向から出して高速で動かせることから剣の弾幕が出来ると思うからクロックアツプで倒せるぞという慢心は持てない。

「星の杖を見切る目を持つメロンの相手をすれば確実に時間を食われます、私達でなくラービットに任せましょう」

ヴィザがそういうとメキリとなにかにヒビが入る音が聞こえた。

何事かと音がする方向を見ると俺達とのちょうど間にある民家が崩壊し1体のラービットが出現、直ぐに俺には殴り掛かって来るのだが、ソニックアローで右腕を切断。

「ごめん、流れたわ」

小南が巨大な斧で、コネクター接続機で繋げた双月で胴体を切り裂いた。

「他は？」

「市街地に逃げようとしたりしたけど、全部倒したわよ」

流石、ボーダー最強の女子高生（斧）だ

「なんと色つきの新型をもう撃退したのですか……：玄界の進歩も目覚ましいですね」

ラービットで俺を撃退しようとしていたのか、小南が全て倒したことによりそれはできな

状況だけを見ればこつちが有利なのだが、ヒュースとヴィザ、どちらも一瞬で逆転す

る事が出来る。

「三雲、まだなにが出来る？」

「超高速で動いたり宇宙まで飛んだり、炎や風を操ったり時間止める以外なら大抵の事は出来ますよ。後、3年ほど時間を与えてくれるなら時間を止めれる様になります」

「最早なんでもありだがそんな時間は無い。お前が思う、一番有効なのを使い」

「どうするんですか？」

「全員でジリジリと退くことが出来ない以上、俺と小南が足止めをする。

向こうも足止めをする事を想定しているからお前は足止め出来る切っ掛けを作ってくれ。切っ掛けを作った後はお前も京介と一緒にC級を……修と千佳を守れ」

「……負けるぞ？」

「俺が負けたとしても、ボーダーは負けたことにはならない」

ヴィザの音声を拾ったちびレプリカ経由でヴィザが黒トリガー使いと判明。

こことは別の場所で戦っている風間さんが撃沈した連絡は届いており、逃がすことも考えればこの二人を同時に相手にして勝利する事は出来ないと判断したレイジさんは自身が倒されると見ている。

「武器を変えるから……で、時間を作れ」

レイジさんの指示に従い切っ掛けを作らなければならぬのだが、メロンエナジー

アームズでこの二人を相手にするのは難しい。別のフォームになるために京介に時間を作る方法を教えた。

「マジすか……そんな風に普通は使いませんよ」

「使い方が悪いんだ。向ける方向を変えれば、距離を取れるぞ。ぶっつけ本番だ、やれ！」

「修が言った事を、本当にしそうだ、この人」

『フォーゼ！』

メロンエナジーロックシードをゲネシスコアから外し、メロンエナジーアームズを解除。

なにも纏っていないプラंक状態になるとフォーゼロックシードを解錠し、フォーゼアームズが出現した。

「新しい武器！」

門のようなものを開き、出てきたのはわけのわからないものとなれば潰そうとするヒュース。

銃をフォーゼアームズに向けるのだが、遅い。

「エスカード!!」

「な!?!」

『ロック、オン!』

レールガンを撃つよりも先に京介がエスクードをヒュースの足元に出現させ、カタパルトの様に空中に飛ばす。

ヒュースが飛ばされたことにより、ヒュースの黒い欠片を盾にしていたヴィザはから空きとなりレイジさんと京介が銃を乱射するがヴィザは星の杖の刃を扇状に並べて盾として使い防いだ。

『リキッド!』

その間にフォーゼロックシードをゲネシスコアに装填。レバーを引いた。

『フォーゼアームズ!青春、スイッチ、オン!!』

「宇宙、き——たとても言っておいてやるか」

「いや、宇宙に行つてないでしょアンタ……」

鎧武者 斬月・真 フォーゼアームズへと変身に成功。この姿ならば、ヒュースは倒せる……筈だ。

第63話

「あんたのトリガー、大分変わってるわね。」

私も全部知ってる訳じゃないけど、トリガーは普通、事前に設定しておくものよ」

「ベルトと錠前の関係性をもう見抜いたか」

「テレビゲームの本体と、ゲームソフトみたいなものでしょ？」

小南の視線はロックシードホルダーに向いている。

ボーダーのトリガーは事前トリガーチップをセットすることにより、最大で8つのトリガーを使える。

それに対し俺のベルトは相手を見てから変えることができるスーパー戦隊のガオキング以降から出てくるマルチ合体のシステムに近い。

「カメラ、オン！」

この姿は仮面ライダーフォーゼの力を使うことができる。

仮面ライダーフォーゼは右腕に10、右足に10、左腕に10、左足10で合計は40種類武器が存在し、フォーゼはそれらを組み合わせて戦う。

俺は左腕のカメラ（No.6）を起動し、ヴィザを撮影。空中で浮いているヒュース

は磁力の影響か、撮影が出来ない。

「レプリカ、本部にカメラのデータを送れるか？」

『数秒ほど待て』

なにかに役立つかもしれないと顔のデータをレプリカに送ってもらおう。

「マジックハンド！」

情報を送り終えると、直ぐに次の行動に入る。

右手とマジックハンド（No. 5）を装備し、ヴィザ目掛けて伸ばすのだが、杖の刃で斬られる。

『兄殿、星の杖の使い手はその気になれば何時でも我々を全滅できる。』

チカを捕まえるために本気にならないようにしているが、無闇に攻めすぎれば本気で戦い全滅させる恐れがある。気を付けろ』

「……京介、あの爺さんから杖を盗んで全力疾走で逃亡とか出来ないか？」

レプリカから忠告を受けたので手を変える。

漢字で書けば星の杖と書くだけあり、杖になにかと機能がついている。

万が一風刃を持った迅を相手にした際には風刃のブレードを盗めば良いと考えてたことがあり、それは星の杖でも使える戦法だと思いい聞いてみる。

「出来ませすけど、あの杖もトリガーの一部なのでトリガーを解除して再起動すれば手元

に戻りますよ」

「生身の老人を殴るのは心苦しいが、やるしかないのか」

「無理ですつて。あいつ、めっちゃ見てきてるんですから」

トリガーを起動する前にぶん殴るお約束を破れば勝てるが、それは一対一での話。

エスクードで飛ばしたヒュースが空中にいるままなので生身のヴィザを殴りにいこうとすれば確実に邪魔をしてくる。こちらも色々とあるにはあるのだが、千日手に近い状態だな。

「レプリカ、黒トリガー使いの老人は、本気で攻めてこないんだな？」

『攻めてこない。もし本気で攻めていけば、我々は既に敗北している。』

おそらくは本気で攻めてこないのではなく、攻めれない。星の杖と角の男のトリガーが兄殿の解析通りならば、星の杖は攻撃に特化し過ぎていて。相手を殲滅するならまだしも、捕らえることは向いていない。二人の狙いは千佳で、生身でなくトリオン体の状態で捕まえるつもりだ』

「なら、決まりだ。小南、お前はあの老人を頼んだ。無理に勝とうとするな、足止めでいい」

「OK！」

「三雲は角付きに集中してくれ。俺と京介は随時両方のサポートをする」

レイジさんはヴィザが戦いたくても戦えない状態を利用し、標的を絞りヴィザに向けて機関砲を乱射。

星の杖の刃を扇状に並べ防がせている間に小南はヴィザとの距離を詰める。

「バリズンソード………ん？」

小南達から死相は見えない。

レイジさんの指示に従い、修達をヒュースから逃げ出す為にバリズンソードを出そうとするのだが………出なかった。

「バリズンソード！バリズンソード………40番！コズミックスイッチ………出ない」

何度も何度もバリズンソードを出そうとするのだが、出てこない。

出し方が悪いのか、別の呼び方をするのだが全くといって無反応だった。

「つち！動くことが出来ないが、マグネットキャノン！」

バリズンソードが出ないなら出ないで、諦める。

派手な動きが出来なくなってくるがヒュースと同じく磁力を使って戦うことが出来るマグネットキャノンを出そうとするのだが

「これもなのか!？」

それも出なかった。

「三雲!!」

「があっ!!」

頼みのバリズンソードもNSマグネットキャノンも出てこず、集中力が途切れ意識が揺らぐ。

その隙を逃すほどヒュースは甘くはなくレイジさんに狙われている事を言われても避ける事が出来ず、黒い欠片がフォーゼアームズ（上半身）に突き刺さる。

「待っていたぞ、この時を」

「ぐっー!」

胴体部分に突き刺さった黒い欠片が普通の人の目にも見える電磁を出すと、俺の体が重くなる。

磁力で俺を押さえつけており、俺はまともに動くことが出来なくなる。

「動くことが出来なくても……!」

アストロスイッチの起動は、モジュールの発動は出来る。

モジュールの発動は出来るのだが、ここで俺はなにを出せば良いのか考える。頼みのバリズンソードとNSマグネットキャノンは出てこない。仮面ライダーファイファイも言わず、それどころかNSマグネットキャノンも出てこない。

「随分と我々の邪魔をしたが、これで終わりだ」

ヒュースは黒い欠片を集めて車輪のようなものを複数形成し、飛ばしてくる。

これはまずい。速度からしてレイジさんも京介も間に合わない。

「スーパー!!」

磁力で動かしているのか、黒い欠片車輪がどこに向かうのかがハッキリと見える。

俺自身は全く動くことは出来ないが、無理矢理動く方法があると右腕と左腕をロケットモジュールに変えるロケットステイツに変身するロケットスイッチスーパールの力を使い、両腕をロケットに変更。

「蝶の楯の拘束から抜け出し……無理矢理動いただど!」

ロケットステイツはその気になれば大気圏を突破する事の出来るフォーム。

両腕のロケットモジュールの加速や力は宇宙に行くことの出来るものでヒュースの蝶の楯の拘束受けたままでも力付くことで動くこと可能とした……が、ヤバイ。

「無事か?」

「無事だけど、無事じゃない……予想外な事が起きてばかりだ」

「さつきマグネットとか言っていましたけど、同じことが出来るんですか?」

「全て同じとは言わないが、相殺することは出来る……けど、何故かでないんだ」

京介とレイジさんのアステロイドで黒い欠片車輪を解除し、攻撃から防御へと移る。

ジジイのトリガーも恐ろしいが、ヒュースのトリガーの万能性が半端じゃなく、この

ままなのはまずいのだが一向に頼みの道具が出ない。

「俺達が仕掛けて時間を作る、他になにかないかを詮索してみてください。京介、奴は俺達が真っ直ぐしかないと思っている」

銃でのアステロイドを撃ち続けるレイジさんと京介。

ヒュースは黒い欠片を傾けたりして反射するのだが、最終的には自分達の立っている位置に帰ってくる事が分かっているので、タイミングを見て、反射されたアステロイドを避ける。

「バイパーっすね」

アステロイドを避けて、もう一度銃を向ける京介は手に持つ突撃銃のつまみのようなものを引いて弾を撃つ。

今まで真っ直ぐに飛んでいた弾は急に弾道が変わり、真正面で攻撃を防ぎ反射していたヒュースは驚くが学習して竜巻の様に黒い欠片を回転させたのだがそうすると読んでいたレイジさん。

「スラスター、オン」

レイガストを出して、ナイフぐらいの大きさのブレードモードにして黒い欠片の竜巻の隙間に投げ入れる。

気を緩めていないものの銃での戦いが続いていた為に意外な一手で攻めこまれたと

一瞬だけ驚きで固まったヒューズの肩にレイガストが刺さった。

「見事……って、違う」

俺は俺の出来ることをしなければならぬ。

C級を逃がすためにも逃走と足止めのチャンスを作らなければならず、その切っ掛けをフォーゼアームズならば可能だとなった。他のアームズにチェンジしている余裕は無い。

ヒューズは磁力を操っているなら、近くにある金属にビリーザロッドを出して電撃を叩き付けて強力な磁石を作って投げつける……いや、スパーを解除できないから無理だ。

なにかないかとアストロスイッチの歌を歌ってみると、ふと気付く。NSマグネットキャノンは出ないのでなく、出せないんじゃないかと。

「Nマグネット!!……嘘だろ、このタイプか!？」

試しにロケットを消してNマグネットを出してみるとNマグネットが出た。NSマグネットキャノンでなくNマグネットのみ。

頭部や肩になんの変化もなかったただ右腕に尋常でない程の磁力を持つN極の磁石が出て来て、俺の体を縛る磁力をかき消すのだが、次の瞬間に悲劇が起きる。

「なに!？」

ヒューズが使っている黒い欠片の半分が俺に向かって来た。

車輪の形になって飛んでくるのでなく、欠片が右腕のNマグネットを中心に引き寄せられていく。

「三雲、無事か!!」

黒い欠片が磁石にくつつく砂鉄の様に身体中にくつついた俺を心配するレイジさん。

俺自身は身動きがうまくとれないだけでダメージは特には無いのだが、ここから更にはややくしくなっていく。

「この音は、!?!」

ギギギとなにかを引きずる音が聞こえ、音が発生した場所を見てレイジさんは驚く。

ラービットによって破壊された民家の扉（ドアノブ金属）等が俺に向かってゆつくりと近付いていくのだから。

「Nマグネット解除!!」

マグネットステイツの様にならない理由はよく分からないものの、マグネットが出せることがわかった。

このままでは身動きが取れないと俺はNマグネットを消すとくつついていた黒い欠片はヒューズの元へと戻る。

「レイジさん、出ましたよ。あいつに対抗出来る物が」

「あいつの黒い欠片をも引き寄せる強力な磁石か……もう一度、出すことは出来るか？ お前が黒い欠片を引き寄せている間にレイガストでもう一撃入れる」

一方向に固めない防御ならば突破できることは分かったので、もう一度黒い欠片を集める様に頼むレイジさん。

「いや、ダメっぽい。あいつ、見抜きやがった」

その作戦を取られない様にか、それともさっきの引き寄せで気付いたのかヒュースが磁力の調整をし、Nマグネットと反発出来る様にしはじめている。

「……千佳達の準備はもう万全か」

ヒュースは今ここどこにかしななければならない相手だ。

黒い欠片と磁力を巧みに操り、黒い欠片で攻撃、刺してマーキング、刺した相手を引き寄せ拘束、他にもこっちの世界にある磁力を利用した道具のような使い方が出来る。

原作では千佳に黒い欠片が刺さってしまい、常に千佳の居場所が割れたり、千佳との距離がそんなになければ磁力で引き寄せたりとヴィザとは別方向で苦しめられ、最終的には迅が倒すことをせずにサイドエフェクトをバンバン使い、足止めをすることに集中してどうにかしたのだが、野放しになっていたら本当にまずい。

「俺に死相は出ている……だが、今は死なない」

「三雲さん？」

「あいつと俺とでデッドヒートといくしかない!!」

「待て、なにをするつもりだ!」

レイジさんの制止を振り切り、左足のホイールを起動。

ヒュースに向かって走り出し、両肘を曲げて垂直に伸ばし叫ぶ。

「Nマグネット!!Sマグネット!!」

ヒュースよりも強力だが、コントロールの効かないNマグネットを右腕に、Sマグネットを装備。

「来た!!」

その瞬間、磁力の調整をしていた黒い欠片がヒュースごと飛んできた。

耐えるのはほんの少しで良い。くつつこうとするNマグネットとSマグネットをくつつけない様にほんの一瞬だけ耐えると磁力に引っ張られたヒュースが俺の胸に飛び込んで来たので腕の力を抜いてNマグネットとSマグネットを×の字になるようにくつつける。

「捕まえたぞ……」

「貴様、なんの真似だ!」

「聞こえなかったのか?捕まえたんだよ!」

「お前も身動きがとれないだ……まさか!!」

「そのまさかだ!!」

必死にもがき暴れるが全くといって動けないヒュース。

黒い欠片を消しさえすれば動くことは可能となるが拘束する俺の腕から抜け出すことは出来ず、拘束する腕をどうにかするには黒い欠片を使わなければならず、黒い欠片を使えば2つのマグネットの磁力に引き寄せられて使えなくなる。

俺がマグネットを消さない限りはヒュースはどうすることもできず、俺の方もヒュースが腕から出ていかない様に押さえつけなければならず、マグネットだけでなく身体中に黒い欠片がくっついてるので足のモジュールを使うことが出来ない。

「修!!」

だから、千佳のトリオンを撃ってもらおう。

千佳の周りにはメテオラ以外の弾を使うC級や修がいるようにしているから、ここしかない。と修達が居るであろう方向を向く。

「俺ごと撃って、こいつを倒すんだ!!」

「なっ!!?」

「こいつを、今ここで野放しにすることは出来ない!!小南が相手をしているジジイは戦闘能力が脅威だが、こいつは戦闘以外が脅威なんだ!!」

「俺達の役目は足止めだ!倒すことじゃない!」

「レイジさん、無理だ！それとすまない!!」

NSマグネットキャノンもバリズンソードのどっちかが出ていけば足止めは出来たが、どちらも出ないのなら、この状態でヒュースを倒してもらおう。

レイジさんは足止めだけで良いのだが、こいつもこいつで倒しておかなければ大変なことになる

「こいつのトリガーは危険だ！」

リニアモーターカー、レールガン、レーダー、他にも色々と応用が出来る！レイジさん達が足止めに成功したとして、リニアモーターカーのような高速移動で追い付かれる!!」

原作ではレイジさん達が足止めをして、この場から逃げ出すことに成功する。

その後、レイジさんは一人で二人を足止めにするもヴィザが少し本気を出して負けてしまい、ヴィザとヒュースは蝶の楯で自分達を弾のように射出して飛んでいき警戒区域手前にまで逃げた修達のところに一瞬でやって来た。

「こいつを倒すことが出来るのは、修、千佳、お前達だけだ!!」

黒い欠片はレイジさんや京介のアステロイドを簡単に弾く。

並大抵の弾ではヒュースは倒せないが並大抵でない千佳のトリオンを使って射程を短くし威力に振ったアステロイドならばヒュースを倒せる。

「早くしろ!!何時までもつか分らない!!」

ヒュースを押さえ付けけるのに俺は集中しなければならない。

「メガネ先輩、チャンスつすよ!もう一回チカ子の力で」

「ダメ!!」

「チカ子?」

俺の言うとおりに動かない千佳。

修にトリオンを貸すことせず、修も千佳からトリオンを貰おうとはせずに撃つことを躊躇っている。

「兄さんのはボーダーのトリガーと違って、緊急脱出機能がついていない。

千佳のトリオンを借りたアステロイドで人型近界民を倒すことが出来たとしても、兄さんも一緒になって倒すことになる。この辺りにトリオン兵はもう居ないけど、生身になつたらトリガーは……」

後の事を考えてしまい撃つことを躊躇う修。

今をどうにかすることが出来てもそれはその場凌ぎであり、この大規模な侵攻をどうにかすることが出来るわけではない。あくまでも人型を自身と共に撃墜させる事が出来るだけ。

ここに来るまでにボーダー側がやや不利な状況になっているのをレプリカが教えて

おり、一発逆転がなにもないので最悪を考えてしまう。

「千佳、俺はお前にとつて憎むべき存在だ！」

「貴虎、さん？」

撃つことを躊躇っているならば、撃てるようにしてやる。

「俺は我が身かわいさに、あの人を止めなかった。

あの人を止めることが出来たのに、あの人が行つても無駄だと知っていたのに、止めなかった！」

今ここで言うべきことじゃないのは分かっているが、心を揺さぶり撃てるようにする。

「お前を泣かせたのは、苦しませたのは、他でもない俺だ!!なんの迷いもなく撃てー」

「千佳、違う!お前を泣かせたのは、苦しませたのは、兄さんじゃない!一番最初に話を聞いたのは僕なんだ!」

千佳の心を揺さぶり、撃てるようにしようとするのだが肝心の撃つ奴が修なので撃つてこない。

メンタルに関しては常軌を逸脱している男であり、隣児さんの事を出したとしても特に揺れずに居て、それどころか自分が悪いと自分に罪を被せる。

「お前達は、なんの為にボーダーに入ったんだ!!」

「なんの、為に……」

「兄さんの言葉に耳を傾けるんじゃない！」

撃てるようにする為にはあらゆる手段を使う。

「お前達は、あの人を探すんだろ!! だったら、俺の屍を越えていけ!!」

俺はお前達と共に歩む道を選ばなかった嫌な事から逃げ出す道を選んだダメな奴だ！それでも、そんな奴でもお前達を阻む壁を越える為の踏み台になることはできる。信じれる友と共に歩むことも誰かの見本となることも選ばなかった俺の……だ!!」

「……修くん」

『トリガー臨時接続』

「千佳……」

「撃たれたって、平気だ！俺は隣児さんの分も背負っているつもりだ！お前達、二人の力を受け止めてみせる!! 俺を、信じて、誰でもないお前達の手で未来を掴み取れ!!」

「!」

最高最善最大の未来は何処ぞのグラサンに用意してもらおうんじゃない、自身の手で掴み取るものだ。

千佳は俺の屍を越える覚悟が出来て修の手を握り、少しだけ躊躇いを持っている修に最後の一押しをすると修は覚悟を決めた。

「アステロイド！」

狭めた射程を威力に振ったアステロイドを放ち、黒い欠片を纏うヒュースを貫き「がああああ!？」

アステロイドは俺にも命中、貫かれなかったものの吹き飛ばされて変身は強制的に解除。

フォーゼロックシードはスイカロックシードがエネルギー切れの時のように灰色に染まり、ゲネシスドライバーのゲネシスコアと共に外れた。

「分かっていた事だが、デメリットが大きい」
物凄く体が痛い。

第64話

「バカな……」

ヒュースは今の自分の状況に驚くしかなかった。

トリオン受容体をつける改造手術を受けており、優れたトリオン能力を得たヒュースは磁力を操り攻守ともに優れた蝶の楯を手にし、様々な戦場で戦った謂わばアフクトクルトルの実力派エリート。

蝶の楯は戦闘以外でも活躍する優れたトリガーで使いこなしているにも関わらず、ヒュースは千佳と修のアステロイドによりトリオン体を破壊されて生身の肉体に戻ってしまった。

「っ、隊長殿！作戦——」

「させるか！」

「ぐっ!？」

貴虎の考えは正しかった。

戦闘という点ではヴィザが危険だが戦闘以外ではヒュースが危険で、そのヒュースがなにかをする前に倒すことに成功したのはとても大きく、ヒュース自身も自分の撃墜が

どれだけ重いのかを理解していた。

直ぐに隊長であるハイレインに連絡をしようとするのだが、レイジさんがその前に顎を殴る。勿論、骨を砕かない様に細心の注意を払い、脳震盪か起こり気絶するぐらいの的確な一撃を決めた。

「レプリカ、こいつの通信機を探してくれ」

やられた時の為に通信機を持っているのは定番だとちびレプリカに探させ、辺りを見回すレイジさん。

「三雲が居ない？」

ヒュースと共に撃たれた筈の貴虎が見当たらない。

撃たれたのならばトリオン体から生身の肉体に戻っている筈なのに、何処にもいなかった。

「緊急脱出……じゃなさそうですね」

落ちているゲネシスドライバーと外れたゲネシスコアと灰色になったフォーゼロツクシードを拾う京介。

貴虎が何処かと探すも見当たらず、緊急脱出をしたのかと考えるのだがそれはないと否定する

『脱出機能があるのならば、人を撃つことの出来るオサムが躊躇うことは無い』

それがあつたらば修は迷ふことなく撃てる。それが無いから修と千佳を揺さぶる発言をした。

もし仮に修達が知らないだけで、貴虎が知っているのならばあると言えはいいのだが言つていない。

『……こちら、本、部……こちら本部、応答を頼む！』

居なくなつた貴虎に悲しむ間は無いと告げるかの様に入る本部からの通信。

「こちらレイジ、どうぞ」

『現場の状況を、レプリカを経由して一方的に聞いていたがどうなつてゐる？』

「……雨取隊員と三雲隊員が人型近界民を抑える三雲隊員の兄ごと倒しました」

『そう、か……』

驚くことだらけが続き、休む暇なく稼働中の本部陣営。

貴虎が一方的に通信を拒んだものの、それではまずいと考えたレプリカが音声を拾つており、一応の状況は理解している。

敵の狙いは一般市民でなく戦うことも緊急脱出も出来ないC級、運が良ければB、Aを拐おうとしており、そんな状況で玉狛第一が向かう前に新型を撃退。人型の情報を収集し、黒トリガー使いを撮影し、データを送つた。

その後は貴虎の強力な磁石の磁力で若干通信が乱れたものの、貴虎が我が身を犠牲に

しようとしていることは伝わり、両者撃墜で終わったことをレイジさんから伝えられた。

近界民とは仲良くしようと近界民は排除するの中間に近い街を第一にする考えを持つ忍田本部長。危険極まりない人型を倒したことは喜ぶことだが、倒したのがボーダー隊員でもない人物で、我が身を犠牲にしようとしており、その人物は自分達を毛嫌いしているので喜ぶに喜べない。

「今からC級隊員を烏丸隊員の先導の元、本部へと送還します」

『ああ、頼んだ』

「あの、残ります！私、ここに残ります！」

「ここからのことを通信し、本部へと帰ることが決まりそうなその時、千佳が動かない。チカ子、なに言ってるの!？」

「私が残れば、出穂ちゃんや修くん、それにC級隊員達は狙われないです」

「ここに残ればあの危険な老人も本気を出すことは出来ない。ここにいれば他のところで暴れている人型近界民がやって来る。今ここで逃げずにいれば周りに迷惑を掛けず、周りを助けることが出来る。」

「私は」

「お前も行くんだ」

千佳の言っていることも一理ある。

ヴィザが本気を出せば殆どのボーダー隊員を秒殺にすることが出来る。

三輪の鉛弾の様に弱体化させる系の攻撃を何手も使い、その上で更に予想外の一手を加えるぐらいのことをしなければ倒せない。何時、本気を出すかわからないヴィザ。千佳が居れば本気を出すことは出来ない。千佳を盾にして戦えば、幾ばくかは有利だ。

「嫌です……私は、私達は貴虎さんを」

犠牲にしてしまった！そう言おうとするのだが、修に口を抑えられる。

「行こう、千佳」

兄さんは、こうなると、死ぬかもしれないのを分かっているやっ来て来た。

今朝方にジョーカーメモリを渡したのも自分が危険な目に遭うから渡してくれた。兄さんは、自分の屍を越えていけと言いき、撃たれた。僕は撃った。

ならば、もう後戻りは出来ない。

貴虎を撃つたことに苦しむ気持ちを抑え、貴虎を踏み台にして前に進もうとする修。

ここで無茶をしまくり、失敗をすればそれこそ全てが無駄になる。

「千佳、先ずは自分の身を守れ。自分の身を心配しろ。」

周りを気遣うことは良いが、お前自身のことをどうにかしないといけない。お前はお前の身を心配するんだ」

誰よりも狙われている千佳は誰よりも逃げなければならぬ。自分を犠牲にしようとしてはいけない。

動こうとしない千佳の前に修が立ち、腕を引つ張る。動こうとしない千佳の後ろにレイジさんが立って背中を押す。

二人に引つ張られた押された千佳は立ち上がり、京介先導の元にボーダー基地の本部を指す。

『レイジ殿、C級についていかなかったのか？』

「できればついていきたいが、あの老人が黒トリガーと分かった以上はそれは出来ない。幸いにも三雲がメテオラ以外の弾を千佳のトリオンで使える様になっているから、新型が襲ってきても問題ない。なにより京介が側にいる」

『しかし……レイジ殿では勝てない可能性が高い。』

レイジ殿のトリガー構成を私は知らないが、兄殿の解析が確かならば星の杖を使う老人との相性が悪すぎる』

星の杖はざっくりと言えば弧月よりも切れ味があり、レイガストよりも頑丈で、スコーピオンよりも早くて軽い、弧月ぐらいの大きさの刃を広範囲に360度、何処から

でもなんで斬られたか分からない速度で複数に動かすことの出来る能力を持っている。全距離からの戦闘が可能で多数の武器を扱うレイジさんは強いのだが、相手はそれをも上回る強さを持っている。トリオン量、攻撃力、防御力、ほぼすべてにおいてヴィザが勝っている。

純粹に早い、固い、鋭い、多い、強いオンパレードだ。

「俺の仕事は足止めと相手に本気を出させることだ。

一手、二手で倒さないならば三手、四手と何手でも上乘せする」

『自身を捨て駒にするのは分かったが、あの老人はアフトラトル側の切り札に近い。

先程の角持ちのアフトラトルのトリガー使いよりも遥かに上回る実力を持っている。レイジ殿がやられた場合は殆どのボーダーの隊員では勝てなくなる可能性がある』
「問題ない」

レイジさんは一人で一部隊として数えられる程の実力者で、ボーダーが出来る前から旧ボーダーの一人。

実戦経験も豊富で精神面も大人だが、ヴィザが積み上げてきた経験の方が遥かに凌駕している。レイジさんはそのことや自身が倒された場合のことについて分かっていたがなんの心配も無かった。

「三雲の登場は俺にとっては予想外だったが、一人だけ登場すると知っていた奴がいる。

登場したのが三雲だとは知らなかったが、今はもう知ることが出来る。だったら、見えるはずだ」

最高最善最大の未来が。

この場に居ない実力派エリートのことを信じて、レイジさんは小南の元へと向かった……。

『……兄殿はいつたい』

レイジさんの覚悟が伝わったレプリカはそれ以上はなにも言わないが、貴虎に関して少し疑問を持っていた。

千佳が規格外のトリオン能力を有しているだけで、レイジさんもまたトリオン豊富で、今は突撃銃のアステロイドに切り替えたが先程までは機関砲のアステロイドを使い、突撃銃を使う京介と連携をしていた。

相手のヒュースは黒い欠片を盾として反射板として巧みに扱い、何度撃つても黒い欠片を破ることは出来なかった。そんな黒い欠片を破ったのは千佳のトリオン。

黒トリガー並のトリオンでのアステロイドは黒い欠片の盾を貫いてヒュースを倒すことに成功した……のならば、何故貴虎がこの場に居ないのかが気になって仕方なかった。

『逃げてくれたのだろうか？』

ヒュースはアステロイドに貫かれ、倒された。死んだのでなく、倒された。

トリオンで出来た肉体が維持出来なくなるほどに破壊されただけで生身の肉体は全くの無傷であり、先程レイジさんが殴るまで生身の肉体はピンピンしていた。

それならば後ろでヒュースを押さえつけていた貴虎も生身の肉体に戻っている筈で、修達を心配しているのなら直ぐに駆けつけるはずだし、無事なことも伝えるはずだ。

あのアステロイドを受けて無事はない、トリオン体は損傷した、この場には危険な黒トリガー使いがいる、警戒区域の外にトリオン兵が出ようとしている。

4つの点から、貴虎は心配させまいと逃げたのだと考察するレプリカ。

『これは!!』

急いで、レイジさんのサポートに向かおうとするのだがあるものが目に入り立ち止まってしまった。

「今のところは無事か」

レイジさんと分かれ、本部を目指す京介達。

貴虎の言ったことや本部が爆撃を受けた事から本部が無事かどうかの確認をしており、今のところは無事だった。

「修、絶対に落とすなよ」

「はい……」

あの場に放置しているとややこしくなると連れてきたヒュース（気絶中）

顔をその辺に落ちていたチラシで隠し、修が担いでいるのだが一向に目覚めず、修の方も浮かぬ顔をする。状況が状況で仕方ないとはいえ実の兄を撃ち抜いたのだから、気分は余りよろしくないのは当然だ。

「修、三雲さんは凄いい人だ」

そんな修を京介は励ます。

「あの人はボーダーの事を嫌っている。けど、線引きはしている。ハッキリと嫌いと言っているが、それですごく差別をするわけでもない……」

一瞬だけ別役を思い浮かべるが、あれはどちらかと言えば別役の自業自得である。

「何人か、三雲さんがボーダーに対して色々と不満や文句を持っているなら、自分でどうにかすればと何度か思った事がある……三雲さんは本当に自分でどうにかしようとした」

自分から開かないが、開いてしまえば文句を垂れ流す貴虎。

貴虎だけじゃないがボーダーに対して文句を言う人はそこそこいて、それならばお前がやれと思うボーダー隊員は何名も居る。文句があるならば自分で解決しろと思うのは当然で、それを言われる奴等は大抵は自分でしない。

だが、貴虎はやった。ボーダーの代わりに戦おうとした。我が身を盾にして、危険な

トリガー使いを撃破した。

「兄さんは自分がすべき事をしただけです」

「そう思うが、普通は出来ないものだ」

自分がすべき事だと分かっているとしても、最初の一步を踏み込む勇氣がいる。

その一步を躊躇いなく踏み出した。下手をすれば死ぬかもしれないというのに、それを覚悟の上で歩み始めた。それは凄いいことだ。実際のところは死ぬよりも修にとつて恥ずかしい兄である事の方が嫌だと思っているだけだが。

京介の貴虎への称賛は修を励ます言葉になり、沈んだ気持ちの修は前を向いた。

「兄さんの分まで、頑張らないと」

トリオン体を破壊されたら再構成にまで時間がかかる。

どれだけの時間がかかるかは知らないが数時間は活動できないのでここからは兄の力は借りれない。

貴虎は実力者達を各地へと飛ばし、人型を一人撃退した。貴虎がなにもしなかった未来は分からないが、貴虎がしたことは大きい。なんとかして千佳やC級を拐われない様にしようと思意した。

「っ、修くん!!」

決意を決めた矢先、千佳はなにかに反応して危険を察知した。

「なっ!?!」

千佳が察知したものは門。

自分達の前方と後方から門が開き、そこから2体のラービットが現れる。

「ちよ、なんでこんなピンポイントなんすか!?!」

「分からない。千佳」

「うん!」

ラッドは何処にも居ないのにラービットが現れた理由はわからない。

だが、そうなった時の対策は既に済ませていると修と千佳は手を繋いで後方のラービットを見る。

「アステロイド!!」

さっきのトリガー使いと比べれば、怖くもなんともない。千佳のトリオンを借りてアステロイドを撃とうとするのだが

「メガネ先輩、出てないですよ!!」

「なっ!?!」

千佳のアステロイドは出てこない。

それどころか千佳のトリガーを使う際の臨時接続の音声も鳴らず、修のトリオンのアステロイドも出てこない。

ボーダーのトリガーは基本的に自分のセットしたトリガーで戦う様にしてあり、万が一の時は緊急脱出出来るようにしている。

他人からトリオンを借りたり他人がセットしたトリガーを使うことは基本的にせず、ボーダー側も緊急時に一応の為に使えるようにはしてあるのだが、普通に戦闘でバンバンと使うものではない。

何度も何度も臨時接続して大量のトリオンを使ったので修のトリオンを接続する部分等の一部が故障してしまい、アステロイドを撃てなくなってしまった。

「まずいー」

修がアステロイドで倒すと思い、前方のラービットに集中していた京介。

弾を撃てるC級に千佳のトリオンを使って貰う暇はなく、自身も目の前のラービットを相手にしなければならぬ。修の助けに行くことは出来ず、さつき貴虎にやれと言われたカタパルトエスクードで一か八か、ラービットを飛ばすしかない。ラービットを観察しようとするのだが、目の前のラービットが手強くそんな隙は無い。

『メロンスカッシュー!』

ラービットが修目掛けて突撃して万事休すなその時、何処かからなにかを斬る音が聞こえ、メロン模様の盾が飛んできて、盾の先端の鋭利な部分がラービットに突き刺さる。

「メロンデイフエンダー!?!」

飛んできたメロン模様の盾の名を叫ぶ修。

この盾の持ち主を知っており、まさかと思つた矢先、自分の目の前に現れてラービツトの目を切り裂いた。

「はあはあ……間に合つた」

「兄さん、無事だつたんだね!!」

目の前に現れたのは、先程の姿とは若干だか異なるメロンの鎧とメロンの盾と剣を装備した貴虎だつた。

生存確認が出来ずに心配していた修は現れた貴虎に喜ぶのだが、まだ早い。前方のラービツトを倒さなければならず、貴虎はイチゴのロックシードを取り出し、持つている剣に、無双セイバーにセツトする。

『ロック、オン！一、十、百！』

「京介、退いている」

ラービツトの前にいる京介に退いて貰い、無双セイバーを振つた。無双セイバーから斬撃が飛ぶ、といったことは起きなかつたのだが、ラービツトの周りから沢山のイチゴクナイが出現し、ラービツトに雲丹を思わせるかのように突き刺さり、倒した。

「三雲さん、助かりました」

「礼はいらない。むしろ、C級をお前一人に纏めさせた俺が悪い」

「そんな……そいつを倒せてなかった方がヤバイです」
ヒュースをジツと見る京介。

もし倒せていなければ、今頃は目の前にヴィザと共にやって来ていた可能性がある。
「にしても、別にトリガーを持ってたんですね」

さつきと似ているが、少し異なった姿になっている貴虎。

錠前をつけているベルトの部分が大きく変わっており、自身が拾ったのがジューサーをモチーフにしているのなら、今現在貴虎がつけているベルトはフルーツを切っている果物ナイフをモチーフにしている。

「戦極ドライバーを念のためと持ってきていて正解だったが……こつちの方が出力とか下がっているから変に期待はするな」

「新型を倒している時点で、充分すぎますよ」

「そうか……ベルト一式返してくれ」

そのままボーダーに盗まれたら困る。

手を差し出すと京介は拾ったゲネシスドライバーとフォーゼロックシードとゲネシスコアを返す。

「さつきの攻撃で、壊れたっぽいです」

「いや、これは取り外し出来る……とは言え、フォーゼは使えないか」

灰色になったフォーゼロックシード

トリオン体を再構築する間、トリガーが使えないのと同じで千佳と修のアステロイドでフォーゼアームズが破壊されたので、再構築かなにかをしているなど諦めて、ホルダーにつける。

『兄殿、無事でなによりだ』

「そこそこ吹き飛ばされたが、なんとか無事だ」

『……そうか。我々は本部へと目指している。』

本部側も我々を受け入れる体勢で、各地にいる隊員達は応援には来れないが、此方側が向かえばサポートをしてくれる』

ついさつき、レイジさんの方にある子機からあるもののデータが届いた。

それが正しければと、今この状況で貴虎本人に聞くべきかと悩むレプリカ。その事に気付いているのは自分だけで、言えば此処にいる面々を混乱させるだけだと現状を報告だけに留める。

「……このままじゃまずいな」

色々をやったお陰で手薄な所に人を送り、万能な人型近界民を一人撃退するのに成功した。

良い感じになっていってるのは分かるのだが、まだまだ足りない。ヴィザが本気を出

せば、後先考えずに殲滅にだけ集中すれば詰む。

このまま逃げたところで本部を襲撃されるのは分かりきったことで、最終的には修が大怪我をする未来が待ち受けているだけだ。下手したら死ぬかもしれないので、もう一手欲しい。

「三雲さん、考えるのは構いませんが気を付けてください。」

門を開くトリオン兵とか色々と居ますので、何処からやって来るか分かりません」

「ああ……いや、ちよつと待て？」

周りにも意識を向けてくれと頼まれ、考えるのを中断しようとしたその時、貴虎はなにかを思い出す。

京介が言ったのは何気無い一言だ。此処にいるのが小南でも米屋でも太刀川でも同じ事を言った、本当に何気無い一言だ。そしてその何気無い一言が大事だ。

万有引力もダイナマイトも電子レンジもポテトチップスもペニリンもペースメーカーも偶然からうまれたもので、京介の何気無い一言は貴虎に閃きを与える。

「そっ……そっ……そっ……」

この大規模侵攻、原作では最終的に修の活躍により幕を引くのだが、修がアフトクラトル側のボス的な存在であるハイレインや最年長で最強のヴィザを倒したわけではない。ヴィザは遊真が、ハイレインは三輪が黒トリガーで撃退をする。

相手を撃退する以外での部分で修が活躍したのだが、それは迅の未来視から外れる行為であり、修が大怪我を負う原因にもなることなので貴虎はそうならないようにとしていたが、今それを頭に浮かべた貴虎。次に意識を失っているヒュースを見る。

「確か……」

ついさっきの出来事も思い出す。

木虎がやられるという予想外のアクシデントが起きたものの、修達がやられる前に到着してラービットを秒殺。その後、レイジさん達に敵と間違われたものの、直ぐに自分だと信じさせた。色々な説明をしている暇はなく、数体のラービットとヒュースとヴィザが現れる……。

どうやってヒュースとヴィザは現れた？

「……なんで、こんな初歩的なことに俺は気付かなかつたんだろうな」

それは余りにも初歩的なことだった。転生者であり原作知識のある貴虎が一番最初に辿り着ける簡単な答えだったのに、ずっとずっと見落としていた。答えは最初から存在していた。

「入口の反対は出口、出口の反対は入口……鍵はコイツか」

貴虎は最高で最低、最善で最悪の未来への道を見つけた貴虎はロックビークルを手にした。

第65話

「来ませんね……」

アフトラトルのヴィザは足止めをくらっていた。

いや、正確には足止めされているのを理解しておりそれを軽々しく受け入れており、今の状況を見て、少しだけ落胆していた。

自身の足止めをしようとしているのが、たった一人。一人で一部隊と数えられる強さを持つレイジさんだけなことを。

最初は小南が足止めをしており、京介達と離れる様に戦っていたのだが、その結果、ヴィザがトリオン兵と合流し、トリオン兵に街を破壊させるということをさせ、ヴィザに集中しなければ即死、ヴィザに集中すればトリオン兵が警戒区域の外を破壊し尽くすの二つに一つを迫られた。

最終的には応援に駆けつけたレイジさんがヴィザを、小南が市街地に出ようとするトリオン兵を倒すと分断した。

「相手も我々の情報を幾つか握ったので、なにかしらの手をとりましたが……ふむ」
自分が足止めをされているのを自覚しても本気を出さないヴィザ。

千佳達との距離は大分離れており、この辺り一体には誰も居ないから本気を出しても問題無いのだが、敢えて出さない。

ヴィザは自分の役割と自分に向いている事や出来ることを理解している。自身の持つ黒トリガーは他の黒トリガーと比べて相手を倒すことに特化しており、誰かを捕まえるのには向いていない。

相手の本拠地を中心に、そこかしこにトリオン兵がおり、ラッドも居るので何処からでも金の雛鳥を拐える。ならば、自分は何をすべきか？それは優れた玄界のトリガー使いを、ボーダー隊員の撃退だ。

自惚れてはいない、もしかすると無自覚なだけで自惚れているかもしれない。慢心はない。もしかすると慢心しているかもしれない。

だが、老人になった今でもこうして現役バリバリだ。

生身の肉体での戦争でならばヴィザは足手まといでしかないが、トリガーを使えばトリオン体になれる。時が経つに連れて弱る老体でなく、何時までも若々しいトリオン体での戦争。ヴィザは老人と呼ばれる見た目と年齢になるまで戦い続けている、アフトクラトルの中でも超絶エリート。

今回襲撃してきたアフトラトルの面々で唯一角が無いのは、トリオン器官を拡張させる角を作る前から戦い抜いてきた証、なのかもしれない。

「応援は、無さそうですね」

優れたトリガー使いが、黒トリガーが自分を倒すべくやって来る。

国の存亡を賭けた大事な遠征で、ワクワクはしてはいけながついつい期待してしまっただけに落胆は大きく、目の前にあるワイヤーを杖の刃で斬る。

「この付近にある罫は、鋼線を作るトリガーと爆弾のようなトリガーを組み合わせ作り出した擬似的なブービートラップ。鋼線を作るトリガーも爆弾のトリガーも色々な応用方法がありそうですね」

玄界のトリガーを見るのは面白い。

レイジさんが仕掛けたスパイダーとメテオラによる擬似的なブービートラップを見て、良く出来ていると褒めるヴィザ。

「そろそろ本気をお見せいたしましょう……星の杖」

ボーダーのトリガーを観察している間も、建物越してハウンドを撃つレイジさん。

星の杖の刃に全て防がれてしまい、これ以上は特になにも仕掛けてこないと思ったヴィザは……本気を出した。

ヴィザの黒トリガー、星の杖はぎつくりと言えば、物凄い切れ味の刃を超高速で36

0度何処でも広範囲で動かせる。

ゆっくり見れば自身を中心にサークルのようなものが展開し、その上を刃が走っている。

「そこに居ましたか。探しましたよ」

「っ!!」

その刃で、ところ構わず辺り一体を切り刻む。

スパイダーの鋼線を、ビルの柱を、電柱を、ありとあらゆるものを切り刻み、ビルや柱は崩壊し、メテオラに衝撃が走り爆破、建物を壁として突撃銃のハウンドで足止めしていたレイジさんは姿を現す……いや、炙り出される。

「三雲の解析は当たっていた……」

普通ならばなにをした?と困惑するが、その前に壊れた住居や残ったビルを見て、斬られた事を理解するレイジさん。

事前に貴虎が高速の刃を広範囲で動かすことが出来る事を伝えられており、本気を目の当たりにし、覚悟を決める。ヴィザはもう本気になり、俺はもう倒されると悟った。

パワーアップする手は持つてはいるものの、相手をパワーダウンさせる手はなく、パイパーを入れていない自分に全方位からの攻撃は出来ない。

フルアームズ
「全武装!」

自分が最後にどうするべきか選んだレイジさんは全力を出す。

サンダーボルトのFAGガンダムが如く重装備をし、ヴィザを捉えようと、一斉砲撃。

両腕の銃、右肩の機関砲、ともかくにもありつたけの弾をヴィザに向けて撃つたのだが、それと同時に自分の上半身と下半身が分かれた。

「これだけの威力を出すには、相当のトリオン能力が必要なものです。

私でなくランバネイン殿と戦えば、もしかすると威力で勝利勝っていたかもしれませんが」

「っ!」

レイジさんのフルアームズの砲撃は、盾として何層にも重ねた星の杖の刃を一つだけ破壊しただけだった。

「これが国宝、星の杖」

黒トリガーとレプリカが教えてくれたが、使い手と相まって異常なまでの強さを発揮している。

積んだ経験も精神力も大人なレイジさんだがヴィザはそれを上回っている。

「三雲、助かった」

「おや?」

プスリと左足の膝になにかが刺さった。

何事かとヴィザは足元見ると、短刀と呼ぶべきかナイフと呼ぶべきか分からないサイズのブレードが左足の膝に刺さっていた。

『トリオン体、損傷。活動限界、緊急脱出！』

「これは一本取られましたね。盾にもなるブレードとは」

緊急脱出をしたレイジさんを見てヴィザはなにをされたか分かった。

斬られて緊急脱出の前に全武装で出したレイガストを一本掴み、掛け声を出さずにスラストでレイジを倒したと油断し刃を消したヴィザの足に飛ばした。

「足には刺さった……が、小さいか」

「レイジ：なにをしている！全武装はなんのためにある！」

緊急脱出をし、玉狛支部に飛ばされたレイジさんは陽太郎の怒りに耳を傾けながらも最後を思い出す。

貴虎に負けるぞと何度も何度も言われており、いざヴィザの本気を目の当たりにしたレイジさんは直ぐに貴虎が言ったもう一つの事を実行した。

腕や足などの部位を決めての自爆特効。全武装での一撃を囮にし、できれば杖を持つ腕を破壊しなかったが難しく、戦闘以外にも色々と出来るヒュースを撃退した今、狙うならば足だとトリオン体を真つ二つにされ活動限界となり緊急脱出するまでのほんの僅かな時間を使い足を狙ったのだが、ダメージしか与えられなかった。

できれば足を斬りたかったが、黒トリガー使いを相手にそれは贅沢。

「宇佐美、状況はどうなっている？」

出来るだけ時間を稼ごうとしたが、相手が本気を出してしまい呆気なくやられてしまったがまだ負けていない。

レイジさんは今できる事をしようと玉狛支部でオペレートしている宇佐美に今の状況を聞く。

「取りあえずの距離は取れました。」

レイジさんが相手にしていた人がグラスホッパーみたいな機動力をどうこうすつとりガーじゃないなら、走り続ければ追い付かれない……けど」

「どうした？」

「相手は門を開くラッドを使っているから、どれだけ距離を取っても直ぐに詰められるかも……」

「……」

「レイジ、おれが全武装を使っていたら！」

「陽太郎、しつこいよ」

クレームをつける陽太郎にチョップを入れる宇佐美。問答無用で黙らせる。

「たまごまは、最強なんだ……だから、絶対に負けないんだ……」

「確かに俺は負けた……だが、玉狛は負けてはいない」

自分の負けを素直に認め、まだ終わっていないと前向きなレイジさん。しかし、一つだけ心残りがあつた。

「三雲は何処にいる?」

貴虎の姿が見えない。

やられたのは分かっているが、それならば生身の肉体になつており何処かに居る筈なのに何処にもいなかった。色々と言きたいこともあるし、協力しなければ近界民を倒せない。なによりも今は生身でトリオン兵すらまともに倒せず、危険な状態のはずだ。

「それが……三雲くん、復活した」

「なに?」

肝心の貴虎はというと割とあっさり復活した……かの様に見える感じで修達の元に戻つてきた。

それを聞いて少しだけ疑問を持つレイジさん。別のトリガーを起動したと言われても、どうもピンと来なかつた。

「バカな、メロンが復活しただど!」

そんな貴虎の様子をトリオン兵のカメラ越しで見ていたハイレインは叫ぶ。

危険人物と捉えていた奴はやっぱり危険人物で、ヒュースを撃退した。ヒュースは千

佳を捕らえるのに必要で、撃退されたのは手痛い。

現在ヴィザはレイジさんのレイガストで左膝を負傷し、トリオンが漏出。その漏出が治るまで少しの間があり、その間に千佳達は逃げて、左膝のトリオン漏出が治ったとしても少しだけ機動力が落ちる。

そうなると追い掛けるのが難しく、そこでヒュースの出番。本来ならば千佳に黒い欠片でマーキングし、自分達をレールガンの弾の様に飛ばして追い付くのだが、ヒュースが撃退された為に出来ない。

修達がヒュースを連れていき、ヒュースの蝶の楯（起動前）の反応やトリオン兵で居場所を割り出せており、そこからラービットを送りつけたのだが、まさかの貴虎が復活。失敗したら置いてく気満々だが、割と重要な存在であるヒュース。もう叫ぶしかねえ

「落ち着いてください、隊長」

「っ、すまない。取り乱してしまった」

コイツは本当にやべー奴認定をされている貴虎。叫ぶハイレインをミラが落ち着かせると、次はどうするかと考える。

幸いにもヒュースを連れているので蝶の楯の反応で逆探知は可能。しかし、ラービットを襲来させても秒殺と来るので、トリオン兵でなくトリガー使いを向かわせなければならぬ。

「二度、ヴィザ殿を船に帰還させ左膝の修復の後に向かわせるのはどうでしょう？」
相討ちとはいえ最新鋭のトリガー使いであるヒュースを撃退したのは洒落にならない。ミラはヴィザを仕向ける事を提案するがハイレインは却下する。

「ヴィザ翁を仕向けるのは奴の思う壺だ。向かわせるならランバネインだ」

自分達にとっての切り札に近いヴィザを貴虎にぶつける作戦。悪くはない、しかし良くもない。

「あのメロンはまだ幾つもの手を残している。腰の方についている錠前を見る。ブドウとマンゴーとスイカに加えて、カプトムシのような錠前をつけている」

ヴィザ翁が足止めをくらうはまだ良い。だが、ヴィザ翁がやられてしまうという事態はあつてはならない。

攻守機動全てにおいて万能なヒュースが倒され相討ちならばそれで良かったものの、復活した貴虎。まだ底を見せておらず、ロックシールドホルダーについているロックシードを見て下手すればヴィザ翁を倒すかもしれないとネガティブに考えるが、それは当たっていた。

今、千佳達の所に向かえば貴虎はカプトアームズになりクロックアップで加速してヴィザを倒しに行く。

貴虎はヴィザが倒されたとなれば、ハイレインが引かざる終えないと考える事を知つ

ている。襲つて来た場合は全力を出して戦うと考えている。そしてそれをすれば最後に残るハイレインとミラ相手になにも出来ない可能性がある。

数名のボーダー隊員及び自身をワープと異なるライダーへの変身でトリオンが減っており、クロックアップをしたらどうなるか、高確率でトリオンが切れる。ボーダーのトリガーとは異なるトリガーの為に千佳のトリオンを借りる事も出来ない。

『ハイレイン殿、左膝のトリオン漏出が納まりました。金の雛鳥を追いかけますか？それとも、外に出ますか？』

「外か」

現在、絶賛フリーのヴィザ。

レイジさんを瞬殺出来る黒トリガー使いが市街地に出たとなれば太刀川さんや二宮、当真といった個人として強い者達総出で倒さなければボーダーの今後に関わる。

市街地に黒トリガー使いが出ただけでも驚異なので、ありと言えどもありだがぶっちゃけた話、それが一番危険な行為である。市街地に出て、思う存分に暴れまわり太刀川さんの様な強い人物を移動させる様な事になれば最後、通常攻撃の威力が1000t越えて1000t以下の威力の攻撃を簡単に受け止め時間を止めたり巻き戻したり出来る時間経過とともに10%ずつ攻撃力守備力が上がっていくあらゆるバグスターウィルスに對する抗体を持っているお母さんが登場してしまう。

光の速さで動き時間の概念を抜け出したり、自身の時を加速して独立した時間に存在したり、宇宙の力で時の概念を歪ませたりしない限りは基本的に勝てない……つまりアフトクラトルにとってクソゲーである。

「ヴィザ翁、玄界の兵を倒しつつ玄界の兵の本拠地を目指してくれ。メロンはランバネインに、雷の羽ならば足止めも可能で、上を奪えて動きを制限することが出来る」

『了解いたしました……おや?』

「なにかあったのか?」

『いえ、少々気になるものがあります……まあ、些細なことですのでお気になさらず』
間違った選択をせず、面倒な選択をしたハイレイイン。

千佳達に向かった先がボーダーの本部だと見抜き、千佳達を追い掛けるのでなく同じくゴールを目指す。そして万が一を想定する。本拠地へと向かえば有能な指揮官や優秀な兵と戦う恐れがある。

トリオン体を破壊されて緊急脱出すれば暫くは戦う事は出来ないことも分かっている。本部に向かう前に出来る限りの兵を倒しておく。

「もしランバネインを倒し、ヴィザ翁が足止めをされた場合は、私も出なければならぬ」

その上でハイレイインは更に最悪を考えた。そしてそれも間違つてはいない。ボー

ダーにはまだ、黒トリガー使いがいるのだから。

「黒トリガー使いと交戦中の木崎隊員が緊急脱出しました！木崎隊員が交戦中の黒トリガー使いを中心に住居が大きく破壊されています」

そして少しだけ時が遡り、ボーダー本部。

ラービットの出現、シフトの都合上で合流できない、県外に遠征にいつていると色々な不幸が重なり続けるもののアフトラトルに上手く応戦し続けていた。しかしアフトラトルのトリガー使いの出現により大きく逆転。

風間さんというボーダーの手練れが倒された。太刀川さんや小南がトリガー使いと戦おうとしようにも、C級を狙うトリオン兵が邪魔で、無視すればC級が拐われる恐れがあると動くに動けない状況だった。

『レイジ殿の子機の映像と兄殿の得た情報を照らし合わせた。星の杖は複数の刃を超高速で動かすことが出来る黒トリガーだ』

だからといって、なにもしていないわけじゃない。

貴虎が送った情報と貴虎が得た経験とボーダー隊員の記録を照らし合わせ、ヴィザの黒トリガーを解析する。

「レイジでもダメなのか……」

ヴィザの黒トリガーとレイジさんがやられたのを聞いて、どうすべきかと悩む本部

長。

本部長は太刀川さんの師匠でノーマルトリガー最強と言われるほどの実力を持っている……のだが、ヴィザ翁と相性が悪い。

複数の刃を超高速で動かすことが出来る星の杖。対して忍田本部長が動かせるのは一本の弧月のみ。6方向から同時に攻撃されれば高確率で負けるだろう。今の状況からして自分が動かなければならない時が来るのは分かっているのだが、その時が来て勝てるかどうか、弱気になつてはならないが慢心も出来ない。

「彼はどうしている？」

自分の事だけでなく周りも気にしなければならぬ管制室。

気掛かりなのは貴虎。貴虎についたちびレプリカが音声は拾つてはいるものの、貴虎自身が一方的に通信を拒んでいる。そしてそんな貴虎が何処よりも誰よりも早くにトリガー使いを撃退し、ついていたちびレプリカは砕け散った。

嫌われてはいるものの話し合いが通じて結果的には協力してくれているので喜ばしいと言えば喜ばしいのだが、自分達を拒んでいる姿をみて喜べず自らを犠牲にした貴虎が無事か心配をする。

『そのことだが、兄殿からの通信が入っている』

「なに？」

『逆転の一手を思い付いたそうさ。時間は問題ないだろうか？』

「……城戸司令」

「構わない。我々にも会話の内容を聞かせられるように」

一方的に拒み続けた男からの話し合いの場を逃すわけにはいかないと、指揮を一時城戸司令に託す本部長。

聞く準備が出来たとレプリカが判断するとレプリカは貴虎と通信を取る。

『念のためだ、他も探せ。千佳、分かるか？』

『えっと……あつちです』

『お前ら、いつてこい』

「こちら忍田……やっと、通信をしてくれたな」

通信が繋がり通話になったのだが、なにかを指示している貴虎。

なにをしているかは分からない。だが、声が聞けた事により少しだけ安心することが出来る。レプリカが一応の為にと拾える音声は拾っていて、ヒュースを倒すために撃たれた事を知っているがそれでもだ。

「三雲くん、君は……」

どうしてトリガーを持っているのか？

ボーダーはトリガーを開発してはいるものの、技術の独占はしていない。まあ、結果

的にはしているが。

トリガーは元々は近界民の生活を支えるものであり、ボーダーがトリガー1号を開発したとかトリオン器官を発見したとかはない。トリガーを貴虎が持つていても別におかしくはない。

だからといって色々と気にならないわけではない。

『その手の話をしたいのならば、通信を切るぞ』

その話をするのは今じゃない。

今まで通り嫌悪感を剥き出ししている貴虎は嫌悪感を込めた声で言うところ以上は聞かず、状況を聞いた。

「話は色々と伝わっている。大丈夫なのか？」

『大丈夫かどうかと聞かれれば、割と大丈夫ではない。』

とは言え、今ここで俺が離脱すればもっと大変な事になる……あのジジイはヤバイ
「君が送ってくれた映像の黒トリガー使いの老人だな。つい先ほど、木崎隊員がやられて緊急脱出をした」

『だろいな』

レイジさんの緊急脱出は想定内の貴虎。

「だろくなって、お前どうにかならんのか!!」

それを分かっていたのならばと声を上げる鬼怒田さん。

派閥がああだこうだあるものの、玉狛の強さはちゃんと評価しており、レイジさんが容易く倒された事はボーダーに不利な出来事だと理解している。

レイジさんが負けることを分かっていたのならばなにかできたのではないのかと聞くのだが、呆れさせてしまう。

『お前等、俺は手伝ってやってるだけだ。

死人とか拐われそうな奴とか居るから色々と頑張ってるが、やって良いんだったら修達を連れて市外に逃亡している』

あくまでも力を貸しているだけで、ボーダー隊員でもなんでもない貴虎は一線を引き。

少し前に入隊の書類は書いたが、それとこれとは話が別である。やって良いなら逃げている。己と己の大事なものの為にしか変身しない。貴虎はラブ&ピースの為の無償の正義は貰かない。

「三雲くん、君はあの黒トリガー使いを倒せるか？」

木崎隊員はボーダー隊員の中でも指折りの実力者だ。彼がやられた以上、並大抵の隊員は……それこそ熊谷隊員や時枝隊員では足止めも出来ない可能性がある」

あくまでも協力しているならそれで良いと今は置いといて、話を進める忍田本部長。

なんと言っても危険なヴィザ。レイジさんを倒せる以上はぶつけられる相手も限られており、そのぶつけられる相手も大半は足止めとしてで勝てる可能性は0に近い。

黒トリガーをぶつけようにも天羽は本気を出せば辺り一体を更地に、風刃は三輪の手にあり使いこなせるか怪しく、仮に迅が持ったとしても、風刃は斬撃の伝播による初見殺しの奇襲や心理戦等の考える戦いが売りで真正面からの戦闘となってしまうば手数の多い星の杖に負ける可能性がある。

藁にもすがる思いで貴虎になにかをないのか尋ねた。

『あの老人を倒す方法ならある』

「そうか、なら」

『だが、あるだけでしない』

倒してくれないかと頼もうとする前に貴虎は断る。できないでなく、しない。

やろうと思えば出来る。無理なことではなく可能な事だがしたくないということだった。

「あの黒トリガー使いの危険性は現場のお前が一番理解しているだろう！

お前の知り合いのボーダー隊員が束になっても敵わない可能性がある。できないならまだしも、しないは」

『そうじゃない……倒したとしても、まだ何人か残ってる。』

あのジジイに残り全部をぶつけければ倒せる可能性は結構高いが、問題はまだ出てきていないトリガー使いだ』

「まだ出てきていない、だと?」

貴虎の言葉に話を聞いていた城戸司令がピクリと眉を動かす。

現時点でボーダーが分かっているのはアフトラトルのトリガー使いはトリオン能力を拡張する角みたくないトリガーを付けており、自分達のトリガーよりも高性能な物を使っている。

一人は風間さんを倒した黒トリガー、一人はレイジさんを倒した黒トリガー、一人は現在B級合同と戦闘中のトリガー使い、一人は貴虎が我が身を犠牲に潰したヒュース。

現時点で手を焼いているのに、更に居るとなればボーダーは人員の動かし方一つで大敗する恐れがある。

「何故そう言いきれぬ?」

『ついさつき、修達の前後にラービットが出てきた。』

明らかに狙っているのと空を飛んでいるトリオン兵が常時何処かと通信をしている電波の様なものが見える。

黒い欠片を使う奴がマーキングする前に倒したが、飛んでるトリオン兵が相手の拠点の船に映像を送ってもらってそこから門を開く奴を使ってトリオン兵を送り込んで

……見つかつたか』

まだ人型が残っている理由について納得はした。まだ何名か人型が居ないので全力は出せないと言われれば一応の納得もできる。

「先程からC級になにをさせている？」

レプリカの通信機能が良いのか悪いのか、足音や戦闘の音とは別の音が聞こえており、管制室のモニターのレーダーに写っている修達が全くといって動いていない。

アフトラトルのトリガー使いは近くにはいないものの、トリオン兵を呼び出すラッドやモールモッドといったトリオン兵は多くいる。京介や貴虎が居るとはいえ、出来るだけ早く本部へと帰還して貰いたい。

『レプリカから聞いてないのか？逆転の一手が出来るかどうかの確認だ』

「逆転の一手、だど？」

そして話は本題へと移る。

貴虎は門から現れたラービットを倒し、門を開く機能を備えたラッドを見て苛立ち、撃退したヒュースを見て閃いた。

『防衛戦とはいえ、後手後手の状態でその上で相手が何枚も上手だ。』

そつちが上手く指揮して戦える人達を適材適所の位置に移動させたとしても、あつという間に引っくり返す事が出来る。

と言うよりは今、スカウトとか言うありがた迷惑な事をしにいつているA級がいて万全じゃない……だから、盤面を引っくり返すどころかぶっ壊すぐらいの事をしないと」

「そんな手が、あると言うのか」

『あるぞ』

貴虎の言っていることは確かだ。

A級の4位（緑川以外）と8位の部隊が不在で万全とは言えない。シフトの都合上で二宮隊は二宮だけが合流できておらず、大きな戦闘は出来ない。複数の黒トリガー使いがいる。

防衛戦なのだから後手に回るのは仕方ない……で、済ませれるほど甘くはない現実。今のじり貧後手後手の状況をどうやって逆転しろというのだ。

「それはいい」

『アフトラトルの船をぶっ壊しにいくに決まってるだろう』

アフトラトルの遠征艇をぶっ壊しにいく。

それは余りにもシンプルだった。

アフトラトルが地球に来るために乗っている船をぶっ壊す。そうすれば、ハイレイ

ン達はアフトクラトルに帰ることが出来なくなる。余りにもシンプルであり、それを聞いていた鬼怒田さんは呆れていた。

そんなことが出来ればこうやって頭を抱えたり後手後手に回らないで済む。

こちらの世界に来る近界民の船を破壊する手は最高の一手であるが誰も出来ない……普通ならばだ。

「っ、おいおい嘘だろ!？」

「迅、今まで何処に行ってたんだ!?!いや、それよりもお前の担当は別の区域じゃ……」
貴虎がアフトクラトルの船をぶっ壊す宣言と同時に迅の見える未来が大きく変動をした。

今まで見えた未来が消え去り、今まで見た未来よりも最低最悪の未来と今まで見た未来よりも最高最善の未来の2つの未来が見えた。

第66話

『そんなことが出来るなら、とつくの昔にやつとるわ!!』

閃いた逆転の一手。

それはアフトラトルの船を破壊することであり、残念な事に俺一人ではどうすることも出来ないことだ。

ボーダーの力が必要で要点をすつ飛ばしてなにやるかを言えば鬼怒田さんはキレル。当然と言えば当然だ。

『向こうの世界からやつて来る奴等は船に乗つとる。』

その船を破壊すれば、自分達の世界に帰ることが出来なくなる……じゃが、問題はその船が何処にあるかだ!』

やろうとしていることには反対せずに、やろうとしていることを無理だと御丁寧に説明してくれる鬼怒田さん。

俺の言っていることは無茶苦茶というか無理だと思うのが普通だ。門を開けばいきなり近界に辿り着くなんてことはなく、次元の狭間的な所に辿り着く、要するにキングダムハーツ的な感じだ。

俺達の世界の外には別の世界があるのでなく別の世界に行くことが出来るキングダムハーツ的な感じの世界の壁的なのがあり、この世界の壁がある付近の何処かにアフトラトルの船があり、探すのは無理。

そんなことが出来るのなら、近界民同士の戦争で船を真っ先にぶっ潰してやろうぜという戦法が当たり前になっており、ボーダーもその手を使っている。

「鬼怒田さん、血圧をあげるな。そんなもん、俺も知っている」

『つまり……あるのか？相手の船に向かう確かな方法が』

「ある……俺もついさっき見つけ、俺だけじゃ出来ないから連絡を入れた」

相手の船を見つけるのは俺の持っている転生特典でもまず無理だ。

俺の持っている転生特典は戦闘に特化していて、索敵に向いているフォーゼロックシールドは使用不可能。そもそもで次元の狭間的なのがどんな感じなのかも分かっている。

本来の道筋もとい原作でならアフトラトルはミラが開けた船内とこつちの世界に繋がる門に、修が起死回生の一手としてレプリカを投げ込んで船を強制的に帰還させてなんとか戦いを終わらせた。

船をどうにかすれば良いと俺は真っ先に考えたが、そもそもでどうやってアフトラトルの船に行くのかという点で詰んでしまい、今に至っている。当初の予定だと俺が物

凄くトリオンを持つてるとアピールしヒュースをボコつて、遊真と京介にヴィザを託すつもりだったんだが、色々と狂ってしまった。いや、本当にガバリまくっている。

「最後の念のための確認で聞いておきたいが……今、人型が暴れているな？」
相手の船へと向かう方法を知りたがる忍田さん。

答えを教える前に万が一を想定し、聞く。

『現在交戦中だが、それと船がどう繋がると言うんだ？』

「どうやってこつちの世界に現れた？」

『それは門を通つてだ』

「俺達が出会つた人型は俺達の目の前に現れた。」

俺達がいたのは警戒区域外の市街地。こんな時にボーダーの門誘導装置は故障か？

『そんなわけあるか！』

ワシの作つた門誘導装置は万全の状態、今日最初に門が開いた時も全て警戒区域。人型がお前達の前に現れたのは、中から門を開——まさか!!』

「そのまさかだ」

ヒュースとヴィザが危険とか、急いで向かわなければとか色々と考え事しており見落としてしまつていた。

「俺達にとつてこの上ない迷惑であるラッドが、船までの道を教えてくれる」

ヒュース、ヴィザ、エネドラ、ランバネインの4名はこちらの世界にやって来た。

ラッドが開いた門を通ってきた

余りにも目が向かなかったことで、アフトクラトルはラッドを使ってくることに特に違和感がなく、倒したヒュースや送り込まれたラービットを見なければ閃かなかった。

ラッドを使わずに従来通りに門を開いたとしよう。その場合は次元の狭間的なところにいる近界民が次元に穴を開け門を開こうとし、5年以上前ならトリオン能力が優秀な者の近くにできるが、今は鬼怒田さんの門誘導装置で三門市内の警戒区域の場所に出るようになっている。

ラッドを使って門を開く場合はラッドが内側から門を開いて、そこを通ってこつちの世界にやって来る。

外からでなくラッドというトリオン兵がいる内側から門を開くので、鬼怒田さんの門

誘導装置が如何に優れていてもお手上げだ。

ここで注目すべきはスタート地点とゴール地点、入口と出口である。

アフトクラトルの襲撃を受け、モールモッド等の雑魚を倒していくとラッドが門を開き、門を通ってトリオン兵（ラービット）やトリガー使いはこつちの世界にやって来た。「出口の反対は入口、入口の反対は出口。」

ラッドが開いた門からやってきたのならばラッドが開いた門から行くことが出来るはずだ」

ヒュースもヴィザも次元の狭間的なのでプカプカ浮いているわけではない。

船に乗っていてトリオン兵から送られてくる映像で色々と話し合ったりしている。そしてその二人はラッドが開いた門から現れた。

『兄殿、解析が済んだ。今我々が相手をしている敵の船とラッドが開く門は繋がっている』

こつちの世界に現れたアフトクラトルの面々は船の何処かにあるラッドが開いた門を通ってこつちの世界に現れたと考えるのが妥当だとなり、レプリカに聞いてみると船ごと乗り込まず、開いた門からトリガー使いが出てくる事は極々当たり前のことだと聞けた。

後はラッドが開いた門アフトクラトルの船へ直接繋がる一本道で内側を出口でなく

入口に、アフトラトルの船を出口として考えれば良い。

千佳のサイドエフェクトで何処かにラッドが居ないか探させ、手の空いている3バカに回収。レプリカに何処に通じているのかを念のため数体解析して貰うと予想通り、ラッドはアフトラトルの船と通じていた。

「忍田さん、レプリカからの通信が聞こえたか？」

『ああ、聞こえた。そして君の言いたいことややりたいことが分かった。』

君の考えている通り、相手の船さえどうにかすれば防衛をしている我々の勝利は確定だ……一つの問題を除けば』

「この期に及んで船が無いとかいう糞みたいな事を言うんじゃないぞ」

『そうじゃない、君にそんな嘘は通じないのは分かっている。』

ラッドの門を開く機能はボーダーのエンジンア達が解析済みで座標のデータもあるのならば、船に通じる門を開くことが出来る。船内を無差別に攻撃すれば船は破壊することが出来る。だが、問題は帰りだ。どうやって、こちらの世界に戻ってくるかだ。門を開き続けることが出来ない』

門からトリオン兵や人が出現すれば自動的に門は閉まる。

閉めているのでなく閉まる。次元に無理矢理穴を開けているのだから、世界の修正力だ四次元だどうのこうので元に戻るのは当然だ。ボーダーが開いたアフトラトルの

船の門を誰かが通ったら門が閉まって帰ることが出来なくなる。

「そこに爆弾を投げ込むとか出来ないか？」

『門の向こう側が操縦席とは限らない。なによりも船は頑丈だ』

一応の為にと聞いてみるが、無理か。

門の向こう側に爆弾を投げ込めれば色々は無視することが出来るのだが、それが出来ないか。

少しだけ期待をしていたので無理なことだとわかると残念な気持ちになるが無理なものは無理だとバツサリと諦めてロックピークルを手取る。

「なら、向こうからもう一度、門を開いてこっちの世界に帰ってくればいい」

『それこそ不可能だ。相手の船を破壊するんじゃないから、ラッドとの繋がりが切れる可能性が大きい』

「別の船で門を開く」

『それも無理だ！』

相手の船にワシ等の船を突撃させるのは色々は無理で、仮に出来たとして相手の船を破壊した際に逆に盗まれる可能性がある』

「誰がお前達の船だと言った？」

『なっ!?!……まさか、お前!?!』

「多分、これも船かなにかの一種だろうな」

俺はロツクビークルを、サクラハリケーンを投げてバイクに変型させる。

こいつは異世界への門のような物を開く機能が備わっている。そして俺の転生特典はこの世界に合った仕様となる。

ちびレプリカから管が伸びてバイクに刺さると解析がはじまり、直ぐに終わる。

『このバイクは、バイク兼船だ。ガソリンだけでなく、トリオンでも動かすことが出来る門を開くことが出来る』

レプリカの解析結果を聞いて、全てが揃ったと心の中でガッツポーズを取る。

門を開く装置、ラッドから手に入ったアフトクラトルの船への正確な位置、サクラハリケーンという船。

サクラハリケーンに乗って門に突入し、アフトクラトルの船へと出て無差別に船を攻撃。そしてサクラハリケーンで門を開いて、この世界に帰還。船を無くしたアフトクラトルは帰れなくなったことが分かれば、嫌でも白旗を上げるだろう。

それでもまだ完全な勝利までは程遠い。それが出来ると思えない。船内にはトリガーを起動しているミラとハイレインがいる。とにもかくにも、ハイレインとミラは危険だ。

ハイレインの攻撃は当たるだけで即死するも同然、ミラは門を開くことが出来る。こ

の二人が船に居る状態では、どう頑張っても船の破壊は不可能。

だから、ハイレインとミラを引きずり出す。自分達が出なければならぬという状況を作れば嫌でも出てこなければならず、その方法を知っている。今、表に出てきているトリガー使いをどうにかすれば良い。

ヒュースは俺が痛い目に遭いながらも倒した。ランバネインは米屋達が倒してくるから心配はなく、残り二人、黒トリガー使いのヴィザとエネドラ。

あのジジイは奇襲とかしないと倒せないが、エネドラは違う。エネドラに対して有効なアームズがあるので割と簡単にポコポコにすることが出来る。

エネドラとランバネインを倒せば残りはヴィザで、ヴィザを遊真やランバネインを倒して手の空いたボーダー隊員が時間稼ぎ。

他の地区で暴れているラービットは太刀川さんや影さんがバンバンと倒してくれるので、そうなるとハイレインとミラが出撃しなければならぬ。

船に居るのは生身のランバネインのみで、ぶん殴れば一撃で倒せる。

『だが、肝心のトリオンが空だ。ガソリンだけではバイクとしてしか使えない』

「エネルギーぐらい、本部に貯蔵しているだろう」

肝心のトリオンが空だと言われたが、慌てる心配は無い。

本部にいけば普段ぶっ倒しているトリオン兵をトリオンに戻して貯め込んでるトリ

オンがあるのを知っている。なんならボーダーの遠征艇にトリオンを貯蔵したり出来ることも知っている。

『ちよつと待て、それはどれぐらいで満タンになる!?』

慌たらしい声で叫ぶ鬼怒田さん。レプリカがどれぐらいかとデータを送ると、困った声を出す。

『貯蔵しているトリオンが無くなるとは言わんが、結構な量が必要だ。

ボーダーのよりは少ないが、それでも並のボーダー隊員数十名のトリオンが必要だ』

「あの、私のトリオンを使ってください！私のトリオンなら」

トリオン問題が出ると、千佳が挙手する。

自分の力を使い戦闘は出来ないが、それを使って戦うことは出来ると絶対に折れない目で自分のトリオンを使う事を言うてくるのだが

『千佳ちゃん、ごめんね。千佳ちゃんのトリオンでも足りないんだよ』

それでもまだ足りない。

千佳のトリオンでなくサクラハリケーンを満たすことは出来ない。

「ドラゴンボールの元気玉みたいに集めれないか？」

戦闘をしないメディア担当とか外務とかそういう人達は居るだろう」

『臨時でトリガーを使つとるから出来ん！と言うか、お前が本部襲撃してくると言った

から使つとるんじゃぞ!』

元氣玉よろしく暇なやつらから根刮集める事を提案するもそれも無理。

俺がついさつき言ったことが原因でトリオンを抜いて良いボーダー職員が一人も

……いや、何名かいるぞ。

「嵐山隊の嘯ま……木虎とかの緊急脱出をした奴等は? 体を破壊されただけで余つてるんじやないか?」

トリオン体を破壊され、緊急脱出をした奴等はトリオン体を破壊されたりして緊急脱出をした。

トリガーのトリオン体がどうのこうのの細かな部分は俺はよく分かっていないが、再構成するのに何時間も掛かる。トリオンの少ない修ですらトリオン体を作るだけでも数時間は掛かるのは知っている。

『木虎のトリオンはボーダーの中でもかなり低い……いや、待て。

千佳ちゃんのとりのオンとボーダーに貯蓄しているトリオンと緊急脱出をした奴等のトリオンからして、満タンにするには……いける、いけるぞ!!』

緊急脱出をした奴等の余ったトリオンを組み合わせるにより、いけるようで千佳のとりのオンと現時点で遠征艇に貯め混んでいるトリオン、それに加えて緊急脱出をしてトリオン体を作るのに数時間掛かるボーダー隊員からトリオンを回収すれば満タンに

し、尚且つボーダー本部の貯蔵しているトリオンを大幅に減らさずに済むことが判明した。

「三雲さん、後は」

「ああ」

俺達の話が纏まりつつあり、待つてくれていた京介はなにをすれば良いのか理解してくれている。

京介はなにがなんでも千佳や俺を送り届けて、近界民の船を破壊するまでの時間を稼ぐこと……よし。

「勝利の法則は、き」

『ストオオオオオッブ!!』

「まってない?」

別の仮面ライダーの決め台詞を言おうとするのだが、その前に別の通信が入った。

中村さん声で大声で叫ぶその声ははじめて聞くのだが、誰だかは知っており俺は決め台詞とポーズをやめる。

『危ない、危ない。なんとか間に合った』

「迅さん? どうしたんすか?」

『どうしたもこうしたもない。』

天羽に未来を色々と変えたり不安定にさせてる奴を知らないか聞くとまさか、メロンくんが出てくるとは思ってたなくて……レプリカ先生にメロンくんの顔写真を見せて貰って、やつと正確な未来が見えた』

まさかの人物の登場に驚く京介。

どうやら薄々誰かが裏で何かしていると気づいていたらしく天羽のところであつたと判明した。ただ、天羽は俺の顔写真を一切持つていないので、未来を見ることは出来なかつたようだ。

「兄さん、この声の人は」

「知っている……」

何だかんだで一度も会つたことの無い俺と迅。

修が説明をしてくれるが色々知っている。俺の占いを邪魔できる男、そして

「三雲さん、迅さんと接点ありましたっけ？」

『あるよ……四半年前に一度だけ、素顔は見えないけどほんの数秒だけ会つたことが』

「時折熊谷の尻を触っている男だ」

熊谷の尻に時折、男の電磁波が残留している時がある。その電磁波の正体は迅の電磁波で、なんでついているかは言うまでもない。

『違う！そこじゃない！』

確かに熊谷ちゃんの魅力的なおしりを触ったことはあるよ！けど』

「レプリカ、今の録音をしたな。言葉によるセクハラどころか現行犯レベルの行為を認めたぞー！」

『え、ちよ、待つて。』

なんか更に不吉な未来が見えたんだけど。トリオン体の衣装が「私はセクハラ魔のお尻大魔人です」のTシャツと短パンになって減給を』

『いい加減に話を本筋に戻せ』

迅のことをしらばっくれ、生駒隊のようなギャグ感満載な空気を出すと城戸さんに怒られた。

しかし、迅と数秒間だけ出会った時の事を語られなかったので良かったと迅がどうして待ったをかけたかを聞く。

『相手の船を破壊したら、この戦いはオレ達の勝ちで終わる。誰一人拐われることなく死ぬことなく終わるけど、それじゃダメなんだ』

『どういいうことだ？』

『船を破壊したら今、襲ってきている国が全戦力で進軍してくる未来が確定をする。』

県外スカウトに行っている部隊が帰ってきて、全員のシフトが上手い具合に噛み合ったとしても負ける。今でさえ手一杯で、メロンくんが加わったとしても勝てない』

迅のサイドエフェクトは未来を見ると言う点では俺のサイドエフェクトよりも遙かに優れており、俺には見えない未来を見ることが出来る。

相手の船を破壊することさえ出来れば良いと思っていたが迅はその未来に向かえば最悪を凌げるが、凌げる最悪が今であり、そこより先の未来を凌ぐことは出来なかつた未来が見えた。

「……じゃあ、別の方法を取ればいい。船を破壊する以外の事をする」

破壊が無理なら、別の手を使う。

『ああ、そうだ。船を破壊しなければいい』

『どういふことだ？』

今回襲撃してきているアフトラトルのハイレインはアフトラトルを統治する3人の領主の内の一人。

更に今回来ている黒トリガー使いは四人で、もし四人から黒トリガーを奪えば残った3人の領主やハイレインの領地の面々は全力で取り返しに来る。そうなると大変だから、やめる。

『相手の船を操作して強制帰還させるんです。レプリカ先生なら数秒あれば船をハッキング出来る』

原作では修はレプリカを偶然にも開いた相手の船の操縦部分に投げ込み、船をハッキリングして帰還させるようにした。

船が無くなってはどうにもならないとなったハイレインやミラは仕方なく船に戻り、そこでアフトラトルの襲撃は止んだ。それを擬似的に再現する……となると、ランバネインの撃退とハイレインとミラを外に出すのは必須だな。

『……迅、お前にはなにが視える?』

『忍田さんがバイクに乗って、レプリカ先生と一緒に門を潜る未来』

「貴虎さんじゃないんですか?」

『メロン君には残ってもらおう……メロンくん、今立ってるのもしんどじゃないの?』

「ツチ……余計な事をいうな」

本当に厄介だな、この男のサイドエフェクトは。

船を破壊した場合の未来が見えたのならば、俺の今の状態に気付かれる未来も存在している。いや、アフトラトルの襲撃が終われば嫌でも気付かれる未来が決まっちゃっている。

「迅さん、三雲さんが立ってるのもしんどいってどういう?」

『とにかくメロンくんが千佳ちゃんと船を届けて、準備万端になったら忍田さんがレプリカ先生を連れて門を開く。』

断片的な部分しか見えていないけれど、レプリカ先生が船を強制帰還させればその時点でオレ達の勝ちになるのだけは確かだ』

「不吉な事を言いやがって」

断片的な部分しか見えていないということは、その見えていない部分次第でこの未来には辿り着かない。

ジジイが本部に襲撃してくるかもしれない。計画に気付いたハイレインが俺を倒しに来るかもしれない。エネドラの襲撃で本部のトリオンを給油する装置が故障するかもしれない。考えられる不安要素は余りにも多く、それをどうにかするのが俺の仕事だ。

『……決まりだな』

俺の提案の穴を迅が埋め、修正した。

まだまだかなりのガバ要素になる穴はあるが、最低最悪の未来を回避することには成功し、城戸さんは承認する。

『これより敵の船へと乗り込む準備に入る。』

鬼怒田開発室長、エンジニアと共に緊急脱出をした隊員からトリオンを集めてレプリカから送られてきたデータから門を開く準備を。

沢村本部長補佐は隊員達に通達を、忍田本部長。君は万が一に備えて今の間にトリガー構成の変更を……エスクードを入れたまえ』

あ、その手があったか。

狭い船の中でエスクードを使えば壊す以外には絶対には越えられない壁となり、壊すとなれば威力の強い攻撃が必要だ。そして船の中では暴れることは出来ず、威力の強い攻撃なんて持った他だ。

船内で誰かが襲ってこれない様にできる。

『三雲くん、君は大至急雨取隊員を本部へと連れてきたまえ』

「大至急……一秒でも早くか？」

『一秒でも早くだ。何時本部が襲われるか分からない状況に加えて今から緊急脱出をしたボーダー隊員からトリオンを取る。』

そうなれば抜き取られた彼等は最低でも数時間はトリガーの使用は出来ない。もし、本部が襲われれば彼等だけが逃げ遅れ大ケガを負う可能性がある。なによりも君が持つ船がなければこの作戦は実行不可だ』

「……」

城戸さんの言っていることはなにも間違っておらず、俺と千佳は一秒でも早く本部へと行かなければならない。

それこそ夏目やババなC級を置いていってもだ……それが、どういう意味か分からない俺じゃない。

『雨取隊員や弟を連れて逃げる事ができるならば、三門市の外でなく本部へと連れていくことも可能のはずだ』

さつき言ったことが、ここで仇となる。

「……わかった」

『スイカ!』

「え、ちよ……デカすぎつすよ!?!」

残された時間とかよく分らないが、少なくとも逆転の一手が俺達には必要だ。

その一手を使わないということはより最悪な未来に向かう可能性があり後で色々と言われるのを覚悟してスイカロックシードを解錠し、スイカアームズを出す。

「お前達、離れていろ」

『ロック、オン!』

メロンロックシードを戦極ドライバーから外し、スイカロックシードを装填。

空中に浮いていたスイカアームズは真上からすっぽりと落ちてきて、俺はスイカに飲み込まれる。

「スイカが地面についたら、コンクリートが砕けた!?!大丈夫なんですか、メロンさん!」

「問題ない」

「あ、割と大丈夫そう」

スイカに飲み込まれた俺を夏目は心配するの頭部から顔をひよっこりと出して安心させる。

絵面がかなりシユールなのかクスリと笑う夏目。取りあえずはカッティングブレードでロックシードを切った。

『スイカアームズ！大玉・ピックパン！』

第67話

「ところでそれ、動けるんすか？」

「問題ない」

『ヨロイモード！』

スイカアームズへとアームズチェンジした貴虎。

スイカからひよつこりと頭を出しているだけで、このままではドングリコロコロ宜しく転がるのかと気になった夏目が聞くと大玉モードからヨロイモードへとチェンジ。ヨロイモードのスイカアームズを見たC級隊員はなにが襲って来たとしても勝てること喜ぶ。

『ジャイロモード！』

ヨロイモードの動作を確認した貴虎はスイカアームズの3つ目のモード、ジャイロモードへとモードチェンジ。

プロペラの音を鳴らし、ほんの十数cmだけ滞空し千佳が居る方向を向く。

「千佳、いくぞ」

「？」

貴虎の差しのべた手について理解していない千佳。

やっぱりかと貴虎は自分の口から今からどうなるのかを語る。

「作戦を実行するには、なによりも俺達が必要だ。

一秒でも早くボーダーの本部に帰らないとならない……俺と千佳は別のルートを使う」

二人は一秒でも早く向かわなければならぬ。

全員を連れて陸路を走っていくルートは道中にトリオン兵に襲われる事を考慮しても本部に辿り着くまでに余りにも時間が掛かる。住居をマリオの様に跳び移る三次元的な立体移動で一直線に向かおうにも、引き連れているのは訓練生のC級。全員が常に一定の速度を保ちつつ一直線で走ることは不可能で千佳と貴虎は別のルートを通る。

陸路がダメならば水路……とやりたいが、使えそうにない。となれば、残るは空路。

空にはトリオン兵がいるがバドと言うトリオン兵で、色つきのレーザービームですら秒殺できる貴虎にとって千佳を連れてジャイロモードで倒すのは造作でもなくなによりも早い。

「千佳を掴んでいくから最高速度を出せないが本部には数分で辿り着く」

ジャイロモードの飛行速度は200kmを越える。凄くちやちく言えばドローンの三倍の速度で飛び回ることが出来る。

千佳がいるので最高速度で向かうことは出来ないが、それでも歩いたり跳んだりして本部へ向かうよりも早く辿り着く。そして言わないが、千佳が居なくなればトリガー使いが自分達を襲ってくることは基本的に無い。トリガー使いはだ。

門を開くラッドが送り込んでくるラービット等のトリオン兵は別で、千佳を優先せず
に他のC級を狙う。

「京介……誰かと合流するまではお前一人だ」

千佳の離脱はメリットとデメリット、両方ある。

トリガー使いに襲われる可能性が減るのがメリットで、千佳のトリオンを使つての攻撃が出来なくなるのがデメリット。

A級をも倒すラービットが複数出ると京介一人ではどうにもならない。実力云々の話でなく、単純に数が足りない。

「俺だけ……修は」

誰かと会うまで一人で戦い抜かなければならないことを教えられると、数に数えられていない修を見る。

修の手にはレイガストが握られているのだが、シールドもブレードも出ていない。出せないと言った方が正しい。

「もう、無理だ」

千佳のトリオンを使用すべく臨時接続をした修のトリオン体には異常が起きた。

セツトしているトリガーが使えなくなり、修はシールド一つ出すことが出来ない。元より戦力として数えられるのか怪しいレベルの修。トリガーでの攻撃が出来ない以上は、京介一人で頑張るしかない。

『機能障害が起きています。この場所に治せる手段はなくトリオン体を一度破壊して再構成するのが一番手っ取り早く治せる』

天下の鬼怒田さんがいる本部やメガネ会長こと宇佐美がいる玉狛支部でならば機能障害を治せるがこの場所で治す術は無い。

「緊急脱出をするか？」

ジャイロモードのバルカン砲を向ける貴虎。

それで撃てば修のトリオン体は破壊され、玉狛支部へと緊急脱出をして終わる。

『兄殿、聞いてはいけない。撃つんだ』

戦えないと分かっている以上は撃つて楽にする。

修の心の強さと戦闘の弱さを遊真と共に見ていたレプリカは修を撃つように勧めるのだが撃とうとしない。

戦えないと分かっているのなら、撃たなければならぬ。戦うことができなくなつた修がラービットに捕まらない様にするには緊急脱出をするしかない。そんな事を分

からないほど貴虎はバカじゃない、なのに撃たない。

「僕は、このままいくよ」

レイガストを入れるホルスターに入れていたロストドライバーを取り出す修。

修が戦えないのは機能障害によってアステロイドやレイガストが使えなくなつたら。それならば何をすればいいか、別のトリガーを使えばいい。幸いと言うべきか、修の手元には別のトリガーが、ロストドライバーがある。

「つかない?」

ロストドライバーを腰に当てる修だが、ロストドライバーから紐が出ずに装着しない。

何度も何度も腰に当てるのだが一向に反応せず、どう言うことかと貴虎に聞こうとするまえに貴虎は答えた。

「今、お前はトリガーを使用している状態でそれは別のトリガーだぞ」

ボーダーのトリガーを使用している状態だから、ロストドライバーというトリガーを使えない。ボーダーのトリガーとサポート出来ても同時使用は不可能である。

『オサム、兄殿の持つトリガーは特殊だ。ボーダーのともアフトラトルとも違うもので、緊急脱出はできない。それを使えばどうなるかは私にもわからないが、君は此処からの戦闘には向いていない』

「僕は弱いよ」

ロストドライバーを使うことを推奨しないレプリカ。最終警告をするのだが、修は折れない。

「弱いし、運が悪かったり、貧乏くじを引いたりして、知らないことが多い。」

これを使ったら大変なことになるのは知っているけど、どう大変になるのかは僕も知らない。けど、だからってなにもやらない訳にはならないし、なにもやらなくて良い理由にもならない」

『オサム……』

「心配してくれてありがとう。」

危険だとしても僕が、そうしたいとそうすべきだと思ったから使うんだよ」

ここぞぞという時に逃げない為にも、自分がそうすべきだとそうしたいと思ったことをする修。

今がそのここぞぞという時。どれだけの危険があつたとしても、修はロストドライバーを使うだろう。

「それを使つたら最後、弾を撃つのもシールドを出すことも出来ないしお前は弱い。使えるものは全て使え」

トリガーを解除するまえに忠告する。

修はトリガーの機能障害が起きていて、ただでトリオン体はピンピンしており、それを生かすに越したことはない。

これからどんな奴と戦うかは分からないので、一度だけどんな攻撃を受けても大丈夫な体は役立つ。未知の相手ならば、あえて一度攻撃を受けて、どういう攻撃をしてくるか学習することが出来る。

「出穂ちゃん、コレを」

「コレって、メロンさんがチカ子に渡した物じゃ」

「今からトリオンが無くなる私を持つていても意味が無いよ。」

コレの使い方は知っているけど、コレでなにが出てくるかは分からない。けど、貴虎さんが渡してくれた物だから、きつと貴虎さんの代わりになつてくれると思うの」

「それ本当にいざというときに使えよ」

本部に辿り着けばトリオンをサクラハリケーンに注入し、本部で待機するだけで、そこからなにも出来ない。

この場を去る千佳も最後の置き土産として出穂に貴虎が渡したロックシードを渡し、使い方について説明をする。

※

城戸司令からアフトクラトルの船をハッキングする作戦を行うと、動ける部隊に通達された。

「空飛ぶスイカは敵でなく味方で、撃つんじゃないってメロンくんなんでもありだな」「オサムのおにいさんはメロンなのかスイカなのか、どっちなんだ?」

その通達を聞いて三三三の顔になる遊真。

空飛ぶスイカは敵でなく味方で撃つんじゃないとハッキリと言えばなに言ってるか分からないのだが、文字通り空飛ぶスイカになっている。未来視を利用して貴虎がスイカアームズになっている未来を見ている迅はなんでもありだと笑う。

「それでジンさん、おれたちはどうすれば良いんだ?」

空飛ぶスイカを撃つな以外にも本部に向かう修達のサポートもしろと通達が来ているのだが、何処もかしこも手一杯。

迅も遊真も確かな実力者であるから会話をする余裕があるのだが、そこかしこにトリオン兵がいる。そのトリオン兵を倒すことは二人にとって造作でもない事だが、倒す時間を別の事に使うべき、例えば修達の元に向かうとかと考える。

「オサム達のところに向かえるのなら、早く行きたいんだけど」

本音を言えば今すぐにオサム達のところに向かいたいのだが、向かうに向かえない遊

真。

単純に敵と間違われるからと折角の黒トリガーなんだから働けとラービット撃退をさせられている。

「数十秒だけ待つてくれよ」

急いで行きたいが、それが凶と出ることだけは避けたい。

迅の未来視で修達のところに向かうのは良いことなの視て予測してもらおうのだが、ここで1つのアクシデントがある。

「メロンくん関連が多すぎる」

今まで視えなかった貴虎が視えたことにより、細かく未来が視える様になった迅。

急いでありえる未来からなにが最悪でなにが最善か、確実に起きうる出来事等を頭の中で選り分けて処理をするのだが、嫌な未来が幾つも見えてしまう。

「まずいな……メガネくんとメロンくん、二人ともケガをする未来は確定だ」

「どうにかならないの?」

「怪我そのものの回避は無理だ。怪我の具合を下げる程度ぐらいしか出来ない」

作戦が成功し、ボードアの勝利で起きうる全ての未来で修と貴虎は怪我を負う。と言
うよりはだ

「メロンくんに関しては手遅れだ」

貴虎の方はもうアウトである。

『そうか、ジンには視えているのか』

「レプリカ、オサムのおにいさんが手遅れってどういうこと?」

『兄殿は生身の肉体に怪我を負っている』

「生身の肉体って、なんでだよ」

『チカのトリオンを用いて放ったオサムのアステロイドに撃たれた際に、兄殿はふき飛ばされた。』

ふき飛ばされた兄殿はトリガーが解除され、崩れてしまった住居の破片などがぶつかり生身の肉体に怪我を負っている。兄殿の安否を確認する際に血に染まった住居の破片を見つけた』

レプリカが貴虎を探した際に見つけた物、それは血がついた住居の破片だった。

見つけた当初は何処かに避難出来なかった人が居るのかと探してみるも何処にもおらず、状況からして生身の肉体に戻った貴虎の血だと判断。そしてその判断は少しの間違っており、殆ど当たっていた。

「大丈夫なのか?」

『分からない。しかし、ジンが見ている未来からしてこの戦いが終わるまでは無事な可能性がある』

「誰かにやられる未来は視えるけど、それ以外の未来は視えない。」

視えてないかもしれないけど、それでもそういう未来は視えないから可能性は低い……けど、現状より重症になる未来は多く視える。それを阻止することは難しいし、本人も覚悟の上で此処に来ているはずだ」

悪いが、貴虎関係は手は貸せない。

迅はスケベなおしり大魔人だが、非情な人間ではない。大怪我を負うのならば、助ける正義感はある。

それよりも危険な未来が幾つも見えておりそれを回避する為の仕込みを色々としてきたのだがもしかすると全て無駄になる可能性が浮上している。無駄になったとしても危険な未来を迎えるのだけは阻止しなければならぬ。

「一先ずは京介達が安全圏内に入るまでサポートをする。」

京介達がオレ達のサポート無しでも大丈夫になったら、人型を倒しに行く……まだ出てきていない人型も居るから、オレ達が足止めなりなんなりしないと」

「了解。レプリカ、頼んだぞ。お前が失敗すれば全てが終わりだ」

『ああ、行ってくる』

アフトラトルの船を強制帰還させる為に必要な鍵であるレプリカの本体は遊真達と別れる。

子機では出力がどうしても落ちる。一瞬で船を強制帰還させるには本体の力が必要であり、本体は全速力で本部へと向かう。

『できれば、星の杖の使い手とは戦わなければいいが』

それにより遊真が弱体化した。

レプリカのサポートを受けて戦っていた遊真はレプリカからのサポートをそこまで受けられなくなった。

それでも十分に強いのだが、やはりネックとなるのは星の杖である。

※

「千佳、大丈夫か？」

「は、はい」

ロックシードの使い方の説明を軽くして修達と別れを告げて飛行する貴虎と千佳。

本来は一人で使うスイカアームズを千佳がしがみつく形で二人搭乗しており、バランスを崩さない様に集中している……なにせ、コレがはじめてのジャイロモードによる飛行なのだから。

「下を見るな。目を瞑って、自分達に害意のあるものが近付いて来ないかを察知するんだ」

下を見てしまいブルツと怯える千佳を右手で抱き締めて安心させ、サイドエフェクトをレーザー代わりに使う。

数分、アクシデントさえ起きなければ数分で本部へと辿り着く。本部へと辿り着けばトリオンが抜き取られてトリオン体は解除される。そうなればハイレインの攻撃は効かず拐われる可能性も下がる。

「頼むから、来るなよ」

緊張の糸を滾らせて進む貴虎。

空に巨大なスイカが飛んでいるとあればアフトラトルはなんらかのアクションを起こす。ラービットは撃ち落とせる。イルガーは背中に乗ればスイカ双刃刀で乱切りにすることが出来る。しかし、人型だけは無理だ。

既に警戒区域内に入っている。ヴィザがミラのトリガーで船に帰還し、ハイレインと共に目の前に出現なんて事も普通にありえる。そうなったらそうなたでクロックアップという最終手段を使い、ヴィザとハイレインの両方を倒せるのだが現在スイカアームズのジャイロモードで空を飛んでおり、アームズチェンジをして千佳を守れるかどうか怪しいところ。

「つ、来ます！」

「門は……いや、コレは！」

貴虎が来るな来るなと強く念じるものの、来てしまう。

「はっはっは！空飛ぶスイカと聞いて、なんらかの比喩と思えば本当に空飛ぶスイカか！」

本部基地がある方向とは若干それた方向からやって来たランバネイン。

貴虎のスイカアームズを見て、大笑いをするのだが千佳が居ることに気付く。

「コレは運が良い！メガネ……メロン……スイカ……金の雛鳥とセットでいるとは！」
貴虎をぶっ倒せば、千佳を捕まえられる。

強者と戦えて金の雛鳥を捕まえられることはランバネインにとってこの上なく最高である。そして貴虎にとつては最悪でしかない。よりによってコイツかと焦っている。

本来ならばランバネインは本部付近の旧三門大学で米屋と出水と緑川の三バカとB級達が協力して倒し、それを知っている貴虎はランバネインは倒してくれると思つていた。

「玄界の兵との戦いから抜け出したかいがあつた！」

貴虎の思つていた事になんの間違いもない。

B級隊員達が居るところにランバネインは出て、茶野隊を軽くひねりB級隊員達を一

人で相手にし、尚且つ余裕を持っており、米屋や出水、緑川が参戦しても動じずに戦いを楽しんでた。そのままいけば原作通り普通に米屋達が勝つてた……のだが、貴虎の復活により急遽変更。ランバネインは貴虎を倒せとハイレインに命じられた。

「フルーツで呼ぼうとして悩んだらうから言っておく。この姿はアーミーロードライダー鎧武者・斬月だ！」
 「そうか。ならば、鎧武者・斬月！お前をここで倒し金の雛鳥をもらおう！」
 「っ！」

空を飛ぶことが出来るランバネインに対してボーダー側は空を飛ぶことは出来る隊員はいない。

その場にボーダーでもトップクラスの機動力を持つ緑川が居たが、跳ぶことは出来ても飛ぶことは出来ずに追跡が出来ない。

「千佳、全力でしがみつけ！」

ランバネインは米屋達との戦闘を抜け出し、自分に向かってきたと分かれば直ぐに逃げの一手に走る。

ランバネインを相手にする事を想定していないわけではなく万が一の時を想定し、ランバネインと対峙した際にどう戦うかは考えていたのだが、実行に移すことは出来ない。

ランバネインの使うトリガー、雷ゲリトドの羽は至ってシンプルで強力なトリガーだ。

腕から背中から銃からともかくにも威力が高く早く射程が長く曲げれる弾を連発

し、空も飛ぶことが出来る。ヴィザと同じくシンプルで強力なトリガーで、ある意味相手にしづらい。

「フォーゼが使えない以上は……」

スイカアームズは飛ぶことが可能だが、搭載されている武器がバルカン砲のみ。威力はあれども単調な攻撃しか出来ない。

フォーゼアームズならばネットやジャイアントフット等で飛んでいる相手を撃墜する手段を持っており、ロケットで飛ぶことが出来る。

ランバネインを相手にする際はフォーゼアームズでの戦闘を想定していたのだが、肝心のフォーゼロックシードは灰色に染まっており、使用不可だった。つまるところ要するにガバっているのである。

「そのスイカ、割らせて貰うぞ！ 鎧武者・斬月！」

逃げる貴虎に銃口を向けるランバネイン。

撃ち出された弾はスイカアームズに当たり、装甲を貫いていく。

「貴虎さん、このままだと！」

「分かっている」

装甲が貫かれ徐々にバランスが取れなくなり慌てる千佳。

このままだと撃墜されてしまうと何かしないといけないと貴虎に進言するが貴虎は

戦わずに逃げる。

「空を飛びながらでは狙いが定まりにくい、デカいを外すほどオレの腕は悪くはないぞー！」

そんな貴虎と付かず離れずの距離を保つランバネイン。

スイカアームズの装甲を確実に壊していくのだが壊れない。

「む……再生機能持ちか？」

それなりに当てているつもりだが、思ったよりも穴が少ない事に気付くランバネイン。

よくよく見ると撃った後がなくなっており、再生していることに気づく。スイカアームズはロツクシードの方がエネルギー切れをしない限りは壊されたとしても勝手に再生する機能がついている。

「ならば、再生出来ない程に粉々に砕く！」

スイカアームズを無視して本体を狙えば済む話だが、粉々に砕いてみせると豪快な性格が邪魔をするランバネイン。

「弾バカ、どこだあああああ!!」

ランバネインがスイカアームズを打ち砕く準備に入ると、貴虎は叫ぶ。

突如出した大声に少しだけ驚くが直ぐに冷静になり、下を見るランバネイン。

「……は、先程の!」

貴虎が方向を変えて、逃げた先は旧三門大学。

そこはつい先程までランバネインがB級合同と戦っていた場所であり、貴虎はその場に居るとサイドエフェクトで確信を持って叫んだ。

貴虎の叫びは通じたのか、下から弾が飛んでくる。

「一手、遅かったな」

「ああ、そうだな」

飛んできた弾は真っ直ぐしか飛ばず、簡単に避けるランバネイン。

貴虎に向けて一斉砲撃の準備は整い、弾が発射された。

「!」

「お前が気付くのに一手、遅れた」

発射と同時に、ランバネインの肩が破壊される。

ランバネインの肩もとい肩パッドには空を飛ぶのに必要な噴出口があり、その内の一つが破壊されて機動力を激減する。

「玄界の狙撃兵か。しかし、鎧武者・斬月に当てる弾は止まらん！」

「言っただろう。一手遅れていると」

『大玉モード！』

先に動いた者でなく旧三門大学に向かっている事に気付くか気付いていないかが勝負を分ける。

貴虎はランバネインの撃った弾が当たる直前にジャイロモードから大玉モードに変形。

「ギリギリを狙う、絶対に放すんじゃないぞ!!」

「うん！」

そのままスイカアームズを脱ぎ捨て、旧三門大学に落ちる貴虎と千佳。

十数階建てのマンションよりも遥かに高い位置から落下していく。

「スイカアームズはここで終わりか」

空を見上げれば、破壊されるスイカアームズ（大玉モード）

再生することはない、破片は地面に向かって落ちてくるので貴虎は戦極ドライバーか

らスイカロックシードを取り外すと、スイカロックシードは灰色に染まる。

「ちゃんと運転出来るか怪しいが乗る、ん？」

「え？」

スイカアームズはもう無理だと諦め、ダンデライナーを出して搭乗するのだが直ぐ近くにA級4位の草壁隊のエースである緑川が居た。

「よねやん先輩達に頼まれて助けに来ただけど……」

ジャンプ台であるグラスホッパーを巧みに扱い跳んで来た緑川。

落ちてくる貴虎達を颯爽とお姫様抱っこで抱えて救出……する筈だったのだが、その前に貴虎がダンデライナーに搭乗してしまい救出せずに済んだ。

向き合う貴虎と緑川。一先ずは旧三門大学まで降りていく。

「ナイス、緑川って、なんだそのSFチックなの!？」

三門大学まで降りていくと姿を現し、緑川を褒めようとする米屋。

褒めるよりも先に貴虎と千佳が乗るダンデライナーに目が向き、興奮をする。空飛ぶバイクはロマンだ。

「よねやん先輩、この人、空飛ぶバイク持つてるから助けに行かなくても良かったよ。顔を合わせた時、凄く気まずかったよ!」

「ワリー、ワリー。でもまあ、良いじゃんか。怪我が無いしよ」

少しだけかいた恥について抗議するが、簡単に流される緑川。

チラリとダンデライナーに視線が向いている。緑川、お前が今使っているトリガーもSFなんぞぞ。

「おれからのラブコールはどうだった？」

「助かった……出水」

米屋達が軽く言い争っていると、姿を現したイケメソ。出水。冗談を交えて貴虎の元に向かうとコツンと胸を手の甲で叩く。

「二月待ってって言われた時は色々と思っただけど、こんな物を隠してたら言いたくないわな。何処で手に入れたんだよ、空飛ぶバイクなんてポーターにも無いぞ」

「拾った」

「それって盗んだって言わないか？」

「随分前に言っただろう。盗んだバイクで走り出したことがあると」

貴虎は約一時間ぶりに米屋達と再会する。

第68話

「お前等普段から学校を欠席してたりするんだからこういう時に頑張らないでどうする？」

千佳のトリオンを抜いてサクラハリケーンに注入するのにどれだけの時間が掛かるか分からないので、出来るだけ早く本部に向かいたかったがランバネインが此方に向かってきたので足止めをくらいこのままでは計画が狂う可能性がある。

取りあえずは米屋達に文句を言っておく。戦っている相手が相手だけに殆ど八つ当たりに近いが、こういう時に頑張らないと米屋は将来が危うい。

「いや、良いところまでいってただけど急にどっかに行つちまつてさ。流石に空を飛ばれて逃げられちゃ、オレ達じゃどうしようもなんねえよ」

「じゃあ、今からどうにかしろ。狙いは俺と千佳だ」

「おう……つて、なんか雰囲気変わってねえか？」

「戦闘中だから、スイツチオンにしているだけだ」

米屋達に任せようにも明らかに俺と千佳を狙い襲ってきたランバネイン。

この辺りにいる人達と共闘して倒さなければ先に進むことは出来ず、一先ずはと動こ

うとするのだがその前にランバネインが仕掛ける。

「皆、来るよー！」

ランバネインが上空から弾を撃つ。

銃を使わずに出水の様にトリオンキューブを出して撃つてきており、弾道処理は特にされておらず適当に散らす形で撃つてきており下手に動けば蜂の巣。動かなくても蜂の巣。

緑川が声をかけると颯爽とその場を移動する米屋と出水。その姿は普段のバカ面からは思えない程にカッコいい。

「つて、三雲！それに玉狛のトリオン怪獣も」

「危ない!!」

そんな中、動かない俺と千佳。

動いていない事に気付いた出水は振り返るのだが、既に遅く弾の雨が降り注ぎ土砂煙を巻き起こす。

「おい、大丈夫か!!」

「割と大丈夫だ」

『メロンアームズ！天・下・御・免！』

攻撃してくる事は予測がついていたし、スイカアームズから別のアームズに変わるつ

もりだった。

メロンアームズにアームズチェンジをし、メロンデیفエンダーで砲撃を吸収しダンデライナーに乗っている俺を中心に電磁シールドを展開しており無傷である。

「アイツの砲撃、結構威力あるから緑川とかオレみたいにトリオン平均かそれ以下の奴だったら一瞬でぶっ壊せるのにヒビ一つ入ってねえのかよ」

「俺のこのメロンデیفエンダーは相手の物理攻撃とかエネルギー攻撃を吸収してシールドに変換する機能が備わっている」

「なにそれ!? いずみん先輩とか里見先輩に対して無敵じゃん!!」

メロンデیفエンダーを舐めるなよ。

メロンニキは基本的にこのアームズウェポンだけで複数の仮面ライダーをボコリまくってたんだぞ。

「驚いている場合じゃないぞ。ちびっこ」

「ちびっこじゃないよ、緑川だよ! というか、昔会ったよね?」

「話したことは無いからノーカウントだ……仕掛けないか」

砲撃後、狙撃手達からの狙撃もあり空を移動しながら此方を見てくるランバネイン。

弾を無駄撃ちしてトリオンを使えと思ったのだが、先程の砲撃の雨をメロンデیفエンダーで防がれたのを見て攻撃してこない。メロンデیفエンダーで攻撃を防がれた

事は予想外の様で驚いており、普通に攻撃しても意味は無いと思っっている。

「千佳、降りろ」

「はい」

「狙いはメロン先輩と雨取さんだから、逃げられないよね……」

取りあえずはダンデライナーを降りる。

「ん……あ、はい！」

「誰と通信している？」

「東さん、つて、知らないか。物凄いボーダー隊員で、秀次に色々教えてた人だよ。お前と通信したいって」

これからどうするかとなると米屋のヘッドホンに通信が入る。

これまたビックネームな人物からの通信で、現在通信が出来ない俺との会話を求めており、米屋はヘッドホンを外す。米屋、ヘッドホンとカチューシャの両方をつけているのか。

『「こちら、東。砲撃が降り注いだ様だが、大丈夫か？」』

「どうも、鎧武者・斬月もとい三雲。」

攻撃を防いでお陰で空を制したとしても倒せないと分からせたお陰で数分は時間を稼げたと思います。

多分、数十センチだけ飛ぶ低空飛行で動きながら攻撃してきます。そっちでなんとかならないですかどうぞ」

『話は本部長から聞いています。』

急いで本部基地に戻らないといけないのは分かるが、相手は明らかにお前と雨取を狙いに来ている。

相手の船に乗り込むことがバレれば対策をされる。こっちでなんとかしようにもシールドが固すぎて狙撃で倒すのは難しい』

東さんは強いボーダー隊員だが、技量による強さで強い隊員。

トリオンによる火力ゲージ等の強さは備えておらず、相手はトリオンを拡張する角を持つっており、決め手となる一撃を簡単に防いでしまう。

「弾系はトリオン能力モロに出ちやうからね……てことはオレかよねやん先輩が倒すの？」

「おい、おれも忘れんなよ」

『出水がサポートをして緑川か米屋のどつちかが決定打を与えるのが良いがさつきそれで逃げられたからな。三雲、お前はなにが出来る？』

「宇宙に行くのと時間を止める以外ならば大抵の事は出来る」

『あの人型を相手に有効なのはあるか？』

あ、信じていないなこの人は。

現状時間を止めたり宇宙に行くことも出来ないから、本当なのに。

「有効と言われても、空を飛んでる以上はな」

フォーゼアームズさえあればランバネインを倒せるが、それが無いと厳しい。

色々と理由があるが一番は空を飛んでいるという点だ。

「空を飛びながらの弾はズリーよな。」

「こっちは距離を取るために速度捨てたら避けられるから威力捨てねえといけねえからよ」

「それ言ったら、オレなんて攻撃届かねえぞ」

「オレもオレも」

「お前はグラスホッパーで距離を縮められるだろう！」

「タキオン粒子を全身に巡らせて時間流を自在に駆け抜ける様にして攻撃すれば、倒せる」

隣で攻撃が当たらない当てられない談義をする米屋達を無視し、一応は倒せる手段はあると述べる。

「タキオン粒子ってなに？」

「特殊相対性理論に矛盾することなく光速より速く動く仮想的な粒子」

「……つまり、とりまる先輩みたいに物凄く早く動けるってことだね！」
「いや、違うぞ」

クロツクアツプはアクセルフォームとかタイプフォームミユラとかの高速移動とは少し違う。

時間の流れとかそういうのを操っていて本人には普通に戦っている感覚でも回りから見ればマツハを越える速度で戦っている様に見える。

「とにかく、あれは最終手段です。今は使えない。」

色々ところち側でやってみますので、近距離と中距離以上の戦闘が出来る人物を二名ほど派遣して千佳の護衛をして欲しい。向こうはプロなんで、俺に固執してこない可能性がある」

『分かった、柿崎と荒船を向かわせる……それと、すまないな』

「……あなたは所詮、1ボーダー隊員だ。」

謝られてもなにも思わないし、俺自身の文句は本当に少しだけだ。謝るんだったら、ボーダーの基地をこの街に置くから三門市を出ていった人達に謝れ」

謝っている理由はなんとなく分かるがなにに対しての謝りなんか聞かない。

東さんの事だから分かつてはいるだろうが、少なくとも俺に謝るのは間違いだろう。

それに、東さんは今の時点では切り捨て可能な1ボーダー隊員だ。名誉はあれども地位

は無い。

「狙撃での撃破はほぼ不可能、出来ても噴出口の破壊とかで決定打となる一撃は無理。この辺りには割と狙撃手が居るが……出水達が頑張るしかなさそうだな」

色々と言われたが要点を纏めるとサポートするからそっちで頑張れと言うことで、どうすべきかと考える。

原作では米屋が低空飛行をするランバネインの上を取り、周りにいるボーダー隊員が米屋に何重ものシールドを貼って撃ち取らせた。

ダンデライナーで離陸する際に何名ものボーダー隊員の電磁波が見えたから、それをするとは可能だが、問題はそこまで誘うことが出来るかだ。ランバネインは警戒心を物凄く上げている。

ボーダーの狙撃手は変態揃いで誘導することが出来るだろうが……一人ずつを確実に倒されるとまずいな。

「緑川、さっきのジャンプ台」

「グラスホッパーだね」

「最大射程範囲と触れれば何処まで跳ぶ？踏み込み具合で変わるのか？」

「え、どうだろう……あんま考えたことないから分かんないよ」

「三雲、ここに居る奴等は全員感覚派だから諦めろ」

そうだったな。バカの集まりだったな。

「……相手にグラスホッパーをぶつけることが出来るか？」

「グラスホッパーを相手にぶつける？」

とりあえずはスツと思いついた作戦を緑川達に伝える。

「と言う感じだ。」

決め手となるのは米屋だが、やるにはお前がグラスホッパーを何処まで扱えるかが問題となっている。無理なら無理で別の手を考えるが」

「いや、やるよ」

鍵となる緑川は自信満々に頷く。

俺なら出来ると言う慢心、でなく俺がやらないといけないという気持ちを持って頷いている。

やるじゃなくて出来ると言ってほしかったが、それを言うのは贅沢すぎるか。

「すまない、遅れた……なんだこのSF染みたバイクは！なんだその姿は！」

「荒船、興奮するのは分かるが落ち着け」

作戦を伝えている内にやって来た荒船さんと柿崎さん。

荒船さんはダンデライナーやこの姿を見て興奮する。この人、SFとかアクション系なの大好きだったな。

「千佳の事を頼みます」

「ああ、任せろ……ついでに言うのはなんだが、この戦いが終わったらそれに」
「ダメです」

これを運転して良いのは俺だけだ。

自動操縦機能はあるが、基本的にバイクの免許を持ってないと乗りこなせない。

二人に千佳を任せてこの場から離れてもらおうと俺はダンデライナーに搭乗し、出水を後ろに乗せる。

「緑川、お前が失敗すれば終わりだから」

「うん……」

「出水、弾道処理をミスるなよ」

「誰にモノを言ってるんだよ。弾バカを舐めるなよ」

「そうか。じゃあ、いくか」

「え、オレは!？」

お前は知らない。

米屋を無視し、ダンデライナーで空を駆け抜けて突き進む。

「んじゃ、先ずは軽めの誘導弾!」

それと同時にハウンドを撃つ出水。

空を飛ぶことにより距離を詰める事に成功し、射程範囲を削り威力と速度に弾を振ることが出来、かなり早いハウンドを撃つのだが避けられる。

「そちらから来てくる、しかも弾を使う者とは、最高ではないか!!」

「ああ、そうだな!二宮さん居なくなつてから、こうしてバチバチやりあう事が出来なくておれも退屈だつたよ!!」

誘導弾を撃ち落とし、興奮するランバネイン。

出水もバチバチと撃ち合うのが久しぶりなのか、テンションを上げており、直ぐに次の弾を準備する。

「アステロイド バイパー通常弾十変化弾」

「また、大きいのを……弾道処理はまだするなよ!」

合成弾を作る出水だが、ランバネインも撃つてくるので移動しなければならない。

手元に弾を出している出水を乗せているから旋回したら最後、落としてしまう……つまりなりにが言いたいのかと言うとだ

「後ろ取られてんぞ!」

「最高時速85kmで、お前を落とさないうように動かしてるんだから文句を言うな!!」

後ろを取られてしまった。

旋回や急ブレーキによる逆転は出来るのだが、そうなれば出水が放り出される。

ランバネインの攻撃をダンデライナーがくれば確実に壊れるから、捨て身特効は無理。

「おい、どうすんだ！」

「撃つのに集中しろ」

メロンディフェンダーで防ごうにも、メロンディフェンダーに触れさせないと意味はない。

そうならばもうやれることが限られている。

「撃つのに集中して、やべえぞ」

「問題ない」

その辺は想定済みだ。

銃口を俺達に向け、弾を撃った。

「数発は外したが、この感覚、当たりはした。出来れば、万全の状態のお前と戦ってみたかったが残念だ」

俺達が距離を積めると言うことは相手も距離を積めるということ。

そこそこの近距離で撃った弾が何発か外したものの当たった感覚はあり笑うランバネイン。

「やっぱタメになるな。先輩達が教えてくれたことは。勝ったと思つたら隙だらけになる」

そんなランバネインの背後に、緑川が現れる。

勝つたと思つた相手ほど、隙だらけだと身をもつて教えられておりニヤリと笑みを浮かべるのだが

「残念だが、まだオレの勝ちではない」

「！」

「お前達を倒し、金の雛鳥を捕らえてはじめてオレの勝ちになる」

ランバネインは緑川がやって来るのを予測しており、銃口を向けて振り向く。

緑川のポジションは攻撃手、近距離での戦闘をメインとしており、空ではランバネインとの相性が悪く、一先ずは近付かなければならない。

かなり近くにいる緑川は即決即断の早打ちでも撃てるとランバネインは弾を撃つたのだが、緑川の前に何層にも重ねられたシールドが出現する。

「っ、周囲の人間がシールドを!？」

「ほら、やっぱり隙だらけでしょ?」

散らす程度の弾だけで大きく攻撃をしてこなかった下にいる来馬さんをはじめとするB級隊員達が二枚の盾を使った全防御^{フルガード}の盾を何層にも重ね、防いだ。

『ミックス！』

それと同時にランバネインにとって不吉な音が響く。

「まさか！」

「おおっと、余所見をしてて良いのか？」

音の正体を知ろうと音がする位置に振り向こうとするランバネイン。

その前に緑川が出したグラスホッパーを使い飛んできた米屋が襲い掛かる。

「周囲の人間が盾を貼っているが、一度に出せる量には限界がある！先ずはお前からだ！」

真つ先に倒せる相手を見抜き、米屋の方向を振り向こうとするランバネイン。

「と、思うじゃん？」

「これはっ!？」

振り向こうとしたその時、緑川が出したグラスホッパーに触れる。

緑川が今までグラスホッパーを使い三次元的な動きで戦っていたのを見ていたせいか、機動力を上げるジャンプ台と違って頭の中から勝手に自身を補助するもので攻撃系じゃないと勝手に思い込んでいたが、違う。

グラスホッパーは相手に踏ませる事により、相手を強制的に動かすことが出来るもので、自分以外にも使うことが出来る。純粋なトリオンの弾は弾けないが、トリオンを物

質化させたものならばなんでも弾ませれる。

「狙うなら、今だぞ」

当たった感覚はあり、倒したと確信していたが俺と出水は普通に生きている。

当たる前に戦極ドライバーのフェイスプレートを外してゲネシスコアを装着してメロンエナジーロックシードを装填し

『メロンアームズ！天・下・御・免！！ジンバーメロン！！ハハーアツ！！』

ジンバーメロンアームズにアームズチェンジ。

ジンバーレモンは攻撃力強化、ジンバーチェリーは速度強化、ジンバーピーチは聴力強化、そしてジンバーメロンは防御力強化。ダンデライナーに乗っている俺は球体型のバリアに包まれ、ランバネインの攻撃を完全に防ぎきった。

「強化変化弾！」

追撃の手は緩めない。

通常弾と変化弾を合わせた合成弾、強化変化弾^コを出水は撃つ。

「わりいな、そいつは曲がるんだ」

ボーダーで数少ないバイパーをリアルタイムで弾道処理出来る出水。撃った弾は強化変化弾。

攻めよりも守りを選び、シールドを展開して防ごうとするが弾はシールドに当たるこ

となく曲がり、ランバネインの肩の噴出口全てを貫く。

「おまけだ」

『メロンスカツシュ！ジンバームロンスカツシュ！』

念には念をだ。

ソニックアローを一振りし、米屋の真正面にメロンロックシールドとメロンエナジーロックシールドの断面が幾つものならせ、米屋が通ると持っている弧月（槍）が緑色に光る。

「こっちは部隊チームの上に何度も何度も誘っても来なかった奴が居るんだよ」

米屋の弧月（槍）はランバネインを貫いた。

第69話

「緑川、ジェットゴリラに追加のグラスホッパーだ！」

「え、なんで？」

「踏ませて上昇させれば空中で生身に戻り地面に落ちてボキつといく」

「ちよ、エグいよ!!」

「馬鹿をいえ。戦争はエグいものだ……ツチ」

米屋の弧月（槍）による……無双突の一撃に貫かれて落ちていったランバネイン。

地面に落ちると土煙やトリオン漏出の煙の際にでる様なものが出現し姿が見辛いのだが、生身の肉体に戻ってしまう。生身の肉体も傷付ければスゴく楽だったんだがな。

「出水、ちよつと任せる」

「任せるって、おれ運転出来ねえぞ！」

「このままは色々と厄介だ。」

出水にダンデライナーを任せて飛び降りて無双セイバーを抜く。

「まさか鎧武者・斬月を囷にする……いや、雷の羽の一撃を完全に防ぐことが出来るものがあるとは予想外だった」

「安心しろよ。お前の一撃を防ぐことが出来るのは三雲だ……いや、もしかしたら玉鉈のトリオン怪獣ならいけるかも」

「金の雛鳥か！確かに奴のトリオンで出来たシールドならば完全に防ぐことができー
ーっ！」

俺以外の人物にやられらことや攻撃を防がれたことに少しだけ放心状態のランバネイン。

敗けは敗けだと認めており、清々しい気持ちで米屋も俺達の勝ちだとドヤ顔をしながらも警戒はしており、そんな時、俺は無双セイバーの銃弾をランバネインに向かって撃った。

「敵と仲良く談笑してる暇があるなら、四肢を切れとは言わんが拘束ぐらいしろ」

「おまつ、なにやってんだよ!？」

「捕縛術の1つや2つ覚えておけ。もしくは手錠的なものを搭載しておけ、ボーダー」

「おい、大丈夫か!？」

撃たれたランバネインを心配する米屋。

「なに構わない。これは戦争だ、撃たれる覚悟は出来ている……が、中々のものを撃つてくれたな!」

米屋の心配は殆ど無駄であり、無傷に近いランバネイン。

自分の身に起きた出来事に気づき、強く俺を睨み大声を出すのだが、その程度で怯える筈もなく、米屋の肩に触れて電磁バリアを貼ると、左右から黒い小さな穴が開き、穴から刺のようなものが出て来て刺してくるのだが、事前に貼っていたバリアに守られる。

「退却よ、ランバネツ?!」

「よし、ヒット」

バリアに守られていると門のようなものが開き、黒い角の人型近界民、ミラが姿を現す。

取りあえずはもう一発と適当に撃つとミラの左手の薬指に命中して消し飛んだ。

「っ、このっ」

「やめておけ、モロに見えているぞ」

逆上し、俺を襲ってくるミラ。

黒い刺で攻撃しようとするのだが、俺には電磁波を見切るほどの視力がある。

空間に関与し、なにもないところからいきなり出現させるとなれば空間に漂う電磁波などが乱れを見せて、何処からどの方向に向かって攻撃してくるのかを瞬時に見抜く事が出来る。

「不意打ちをするどころか、不意打ちをされてしまうとはな!!」

その光景を笑うランバネイン。

「ミラ、お前では奴との相性が悪すぎる。引くぞ」

「っ!!」

当初の目的であるランバネインは門を潜り抜けて船に帰還することは出来た。

相性の悪い相手と戦うのは得策でなく、帰還する事が重要であり、戦うことをやめるミラは俺を強く睨み殺意を向ける。

「左手の薬指は婚約指輪を入れる場所。結婚は来世に任せたらいいんじゃないか、F U C K、YOU！」

「コロス……」

無双セイバーを握る中指を突き立てて、挑発するも乗ってこず門を閉じて消えるミラ。

指を破壊した程度だからトリオン切れは無く、武器を使った戦闘じゃないから弱体化は期待できそうにない。

「終わったな」

「ああ、終わった。じゃねえよ!!お前、なに撃ってんだ。相手は生身だぞ!」

「戦争紛いの事をしてるのに、人殺し云々を今さら問うのか?」

「そうじゃねえよ……いや、そうかもしんねえけどよ……ダチがそういうのしてるの

は見たくねえつつうかなんつつうか」

戦争なのは頭では理解しているものの心では理解しきれず、バカなので言葉で表現しきれない米屋。

爆発したりしそうだし、降りてくる緑川や出水が俺に対して驚いているので、撃った物を拾う。

「トリガーをぶっ壊しておいた。万が一のコンティニューはおきない」

撃つたのはランバネインでなくランバネインのトリガーである雷の羽の破片

起動前の雷の羽を壊しておけば万が一が起きたとしても、トリガーが使えないという不足の事態で終わる。

「お前、マジで色々な意味で恐ろしいな……」

「逆だ、逆。お前達が温いだけだ。」

前にも言った気がするが、お前達は世間を騙しているがやっつてゐることは戦争となんら変わらない。もう少しエグさをだな」

「オレ達にそういうのを求めないように上の人達苦労してるのに……てか、よねやん先輩が倒す必要あつたの？」

俺の言葉に呆れて諦め、別の話題に変える緑川。

ジンバーメロンアームズの俺を見て、米屋がランバネインを倒すのに意味があつたか

を聞いてくる。

「その姿、物凄いシールドを貼れるんでしょ？」

「だったらオレが後ろに乗って、距離を縮めて攻撃した方が良かったんじゃないの？」

「それを言うんだったら、おれが乗ってる時点で最初からその姿になつときやもつと楽だったんだよ。」

ガツチガチのシールドで攻撃を防げるんだったら、色々な合成弾作れて零距离変化炸裂弾とか色々と出来たぞ」

「まーまー、オレがスゴくかつこよく決めたからって嫉妬すんなよ」

「嫉妬してない／ねえ!!」

倒したのはオレでお前等は引き立て役だとドヤ顔をする米屋。

まあ、緑川や出水の言うとおりジンバーメロンアームズを使うんだたらやれることは沢山あり、もつと早くにぶつ倒す事が出来たかもしれない。

「お前達、良くやった」

「「東さん!」」

しかし倒したことには変わりなく、良くやったと誉めに来た東さん。

三バカは態度を直ぐに変える……ちゃんと向かい会ってみるのははじめてだが、この人の電磁波は半端ないな。

「だが、まずいな」

「まあ、最悪、あのジジイを倒すルート変更をすれば良い……どちらにせよ、人型を倒さないに残っている奴等は表に出ない」

勝ったことに喜び誉めるのだが、直ぐに大変なことになってしまったことに気付く東さん。

ミラが居ることを知っているので誘き出す方法も知っているので、最悪ジジイを倒せばどうにかなる。ただ、もう、本当に弾幕とかされると弱い。

「なんの話？」

イマイチ話が飲み込めない緑川。

「バカ、本部長からの話聞いてなかったのか？」

相手の船に乗り込んで、船を強制送還させる作戦だよ……あの黒角女、門みたいなのを開くことが出来て船に乗ったままだ。本部長が船に乗り込んでもそのまま強制送還されるかもしれねえ」

「よねやん先輩にバカって言われた!?!……それって、ヤバくないの?」

「槍バカにバカって言われるのはヤバいな」

「お前等、オレが傷つかないと思ってるかい?」

「じゃあ三学期の学年末テストはオレ達の手助け一切無しだな。三雲、手を貸すなよ」

「安心しろ、小佐野とか熊谷を教えるのに忙しい」

「おまつ、オレとの友情は何処に行ったんだよ!!」

「そんなもんはない。お前との間にあるのは限り有る情けと書いて有情だ」

バカバカ言われて、怒る米屋だがお前がバカなのは事実である。

文句があるんだったら、日曜日から土曜日までを英語で言えて書けるようになってからにしろ。小佐野とか影さんの成績残念組でもできることだぞ。

「あの黒トリガー使いの女のトリガーの詳細は不明だが、船と直接繋がる門を開けるのは確かだ。米屋の言うとおり門を開いて追いつ返される可能性がある」

「中止にした場合は相手を徹底的に倒して全滅させるか撤退させる以外はない。」

こっちの世界の戦争と違って天候に左右されるんだったら、雨でも雷でも雪でも40℃のサバンナでもできたんだがな」

中止にした方が良いんじゃないかとなるが、中止にしたとして、やることは相手を徹底的に殲滅するだけ大差かわりない。

「どちらにせよ、表に出ている人型を倒さないとにも変わらない。」

今出ている人型を倒せば向こうが何らかのアクションを取ってくる……勝てないと判断して撤退するのか、それとも更に強力な奴が出てくるのか」

確実に後者になるのは分かっている。

「ハイレインの卵の冠はトリガー使いにとって一撃くらうだけで即死するも同然の黒トリガー。回避以外の選択肢はなく、防衛不可避の一撃必殺に近い。」

「中止云々は置いて、もうここまで来たからには本部に千佳を連れていく」

「ああ、そうした方がいい……」

「東さん、難しい顔をしないでいいよ……要するに全員、ぶつ倒せば良いんでしょ？」

千佳を連れていくのは賛成だが、その後についてどうしたものかと考えて難しい顔をする東さん。

ハッキングして強制送還させる作戦はミラの存在により一瞬にして破綻して次の手を考えるが、そんなものが思い付くならば今こうして一体一体倒したりしている暇はない。

「一番、そいつが分かりやすいな」

緑川が言うことに納得するバカ^{*星}

「どつちにしろ、誰かが倒さねえとヤバいのは変わりねえ。」

残つてんのつてどつちも黒トリガーで、レイジさんと風間さんを倒したんだろ。撃ちがいがある」

「……そうだな」

3バカの言っていることには一理あり、倒すしか道は残されていない。東さんは首を

縦に振る。

「3人はこの後、どうするつもりなんだ？」

「C級の増援に向かいます。今、フリーなA級はおれ達だけなんで……メガネくんの事はおれに任せて、お前は本部に行ってくださいよ」

「余計な気遣いはしないでくれ」

「んだよ、素直じゃねえな」

修のことは心配で仕方ないが、そうするしか無かったと腹は括っているんだ。余計な気遣いは心が揺らいでしまう。

万が一の為にジョーカーメモリは渡している。

「ところで、コレが終われば出水と米屋はクビかなんかか？」

「お前、今それを言うか？」

「今言わないと、色々とややこしい」

柿崎さん達が千佳を連れてくるまで動けないので、取りあえずは聞いておく。

「二人がクビって、なにかしたの!？」

「色々と有ったんだよ、色々と……クビか奈良坂達巻き込みでのB級降格か」

「太刀川さんなら生駒さんとか村上さんと戦えるって大喜びしただけど、流石にそうなるとな。これ終わったら、周りに迷惑かけねえように隊を抜ける手続きしねえと」

「三雲、降格したらA級に戻るの手伝えよ」

「俺、色々頑張っているから今回の手柄でチャラにする」

米屋達をA級に戻すのは俺のケジメなのはわかっているが、そうなれば修と戦うことになる。

ランク戦で遠征を目指すとは分かっていなければ、無意識の内に手を抜いてしまう。現に修が入隊する時にも無意識の内に手を抜いてたところがあつた。

「一応の為にお前達の味方じゃなくてお前達と協力しないと倒せないから協力しているだけだからな。」

俺はあくまでもボーダーじゃなく修と遊真と千佳の味方だ。もしあのヤクザ顔のトップがこの前みたいなき事を指示したりしてみろ。SNSをはじめとするあの手この手を使い、ボーダーを炎上させる」

「せ、セコい」

バカを言うな。今の時代は暴力は暴力でも言葉による暴力を使う時代だ。

「よねやん先輩、この人、今此処で倒さないとヤバいんじゃないの?」

「かもしれないけど、それやったら市民に向かってトリガー使つてると同じになるから出来ねえよ」

こっちの世界の住人、様々である。

「とにかく、余り勘違いをするなよ。」

これから先色々あるだろうが、ボーダーを好きになることは出来ない。現に三門市を絶対に守らないといけないのに、警戒区域を越えてしまってる」

「それ無理でしょ」

「無理じゃない、やるんだ」

出水レベルの射手が何人いようと、たけのこレベルの狙撃主が何人いようと、北添さんレベルの銃手が何人居ようと三門市を守り切るのは、警戒区域の外に近界民を出さないのは不可能だろう。あくまでもボーダーは抑止力的存在にしかならないのは充分に理解しているが、それとこれとは話が別である。

ボーダーは三門市を使わせて貰っている立場だ。

「表沙汰にしてないだけで、ここを紛争地帯にしているのがボーダーだ。無理とか甘えたことを抜かすな」

「ま……そうだよな」

キツ目に言うのと反論せずに受け入れる出水。

無茶を言っているのは理解しているが、それをしなければならぬのが自分達だと分かっている、少しでも気まずそうな顔をし、頭をかく。

「お前の言うとおおり、この街を紛争地帯にしているのがボーダーだ。」

警戒区域から出さないって言ってるのに、警戒区域の外に出しちゃったのは無理とか出来ないじゃなくて、おれたちが悪い。もつと言えば、今回お前が活躍してるからおれ達の存在意義が問われる」

自分達がやらないといけないのに、全くの第三者が手柄を上げている。

これは由々しい事であり、このままだと大変なことになるなどボーダー上層部が胃炎になるのを想像していると、出水はビシッと俺に指をさす。

「だから、お前にカッコいいところを見せねえとなー」

「……普段がダサイとか言う自覚があったのか？」

「いや、絶対にねえだろ。千発百中だぞ」

「そつちじゃねえ!! つーか、千発百中はダサくねえだろ!」

「二宮さんだつて着てるし、ボーダーが公式グッズとして販売してて売上良いんだぞ!!」

「いや、それ主に買ってるのが日本行ったことないけど、日本語漢字COOL!! って言う海外の人達だからな」

「え、ホントなのそれ!？」

マジだ。

誕生日に出水から貰った千発百中Tシャツを見て、他に何色があるのか、製作陣営は

なんでこんなものを作ったのだろうかと思ひ、色々調べてたらなんかやたらと外国語のレビューが多かった。

「なんだつたら、千発百中が十分の一と気付いた人がおもしろい罵倒するレビューも書いてあつたぞ」

等身大嵐山フィギュアといい、色々と狂気に狂つてるぞ。ボーダーのグッズ製作陣。

「……とにかく、お前にカッコいいところを見せて、ボーダーが居てくれて良かったつてところを見せてやるし、教えて汚名返上してやるよ!」

「そもそもでこの街にボーダーがあつたから起きた出来事だから、無理!」
カッコつけてるのは良いが、どう頑張つてもボーダーの汚れは落ちない。

「……頑張つて、メガネくん達を助けてくるわ」

徹底的に叩きのめしたせいで、いじける出水。そんな事を言われても、事実を述べただけだ。

「三雲、もうちよつと優しさはないのか?」

「そんなものは無い……米屋」

「メガネボーイの事は任せとけよ」

「そうじゃない」

「ん?」

「3人が慢心して緊急脱出した嵐山隊の木虎と違って頼りになるのは分かっている。

ただ戦う相手が格上な事実は変わりない。二人倒した時点で撤退しないと残っている奴等がヤバイ……修にはとっておきの切り札を渡したが、出来れば使う時が来ない様に頑張ってくれ」

俺の考えが正しければ、修がとっておきの切り札になる可能性がある。

「柿崎^{ザキ}さん達だ。じゃあ、おれ達はC級のところに向かいます」

「ああ、助かったよ。今度なんかメシを奢らせてくれ」

柿崎さん達が千佳を連れて戻ってきたので、次の現場に向かう出水達。

東さんはお礼を良い、お礼がなにか良いかを聞いてくると3人はヨダレを垂らして同じものを言う。

「「焼肉で」」

金を持つているA級隊員とはいえ、焼肉は豪勢なメシである。

「お前もそれで良いか？」

「……私もなのか？」

まさか自分にも聞いてくるとは思わず、素に戻ってしまう。

「そうだが、焼肉は嫌か？」

「話の流れ的に、3バカに言ってると思って……」

「お前にも言ったんだよ。」

勝てたのはお前のお陰でもあるし、強制帰還の作戦を建てたのはお前だろ？このままじゃジリ貧なのは確かだ。礼ぐらいさせてくれよ」

誘われるとは思ってもみなかった。

予想外にもほどがある不意打ちを受けてしまうが奢ってくれるのならば奢って貰いたい……が。

「誘ってくれるのは嬉しいが、暫くは胃に重い物を食べられないので米屋達とで」

食べたくても食べられない。

「そうか」

理由を伝えると引いてくれた。

「お前……なんで、なんでそうなるんだ!!」

出水達がC級の増援に行くと同時に来た荒船さん達。

荒船さんはジンバーメロンアームズのこの姿をみて悶絶している。

「千佳、大丈夫だったか？」

「柿崎さん達が守ってくれました」

「そうか。柿崎さん、ありがとうございます」

もう荒船さんは無視する方向でいく。

「気にすんな、それよりも早いところ本部に行つてこい」

やっぱこの人はイイ人だな。荒船さんをガン無視してるけど。

出水が乗り捨てていったダンデライナーに乗り、千佳を後ろに乗せて本部へと向かう。

第70話

「ぎゃああ!!ヤバい、ヤバいつすよ!」

空から本部に向かう貴虎と千佳に対し、走って本部に向かう修達。

千佳が居なくなつた事により襲ってくるトリオン兵は激減……という、都合の良い展開にはならなかった。

アフトラトルとしてはなんとしても欲しい千佳。戦力を千佳に向けるのは当然だが、逃げていく先が本部なのは分かっており、ヴィザが向かっており、危険なのは貴虎だけとの認識。

手に入るならばC級も頂いておこうとハイレインはC級隊員を襲う手は休めない。

「大丈夫か?」

「あ、大丈夫つす!」

モールモッドに襲われる出穂を助ける京介。

修はトリガーが使えないので実質戦えるのは1人で、極限まで集中しC級隊員を守るのだが数が多い。

「エスクード!」

「え、うわあ!？」

並のボーダー隊員でならば倒せるトリオン兵もいるが、自分と修以外はC級。

使うトリガー一つ無駄に出来ず、京介は貴虎にやれと言われてやったカタパルトエスクードを応用し、襲われそうなC級隊員を飛ばし、モールモッドを斬る。

「つ、間に合わない……」

一体一体を倒すだけならば容易い。なんなら別の日に今と同じ数を相手にしろと言われても乗り切れる実力を持っている。ただ、一人も欠かすことなく進まなければならぬ。

如何なる実力者でも大勢を大勢から一人で守りながら戦うことは不可能で、逃げて逃げて逃げ続けるしか道はなく、限界が来ている。

「こうなったら、メロンさんのコレを」

「ダメだ。それは使うんじゃない」

ロックシードを取り出し、使おうとする出穂を止める京介。

「それはオレが落ちてからだ」

逃げの一手で無傷に近い京介。

自身の持つ玉拍トリガーであるガイストは何時でも使えるほどにトリオンは残っており、千佳を経由して託されたロックシードは使わせない。

「いや、でも」

「それにあるのは武器じゃない、なにが出るのかは分からない代物だ。なによりも、今は戦うときじゃない」

託されたロックシードの説明をぎっくりと聞いているも、それでもよく分からない。それを使えば代わりに戦ってくれる存在が現れるらしいが、今は逃げなければならず戦う時ではない

『後少し、後少しだ!』

「後少し、全員急いでくれ!!」

もう少し後少しでこの危険な状態を打破することが出来る。

追いかけてくるトリオン兵にエスクードでバリケードを作り、京介達は走り出した。「こんな時に、新型!」

走り出した矢先、ラービットに遭遇してしまう。

「烏丸先輩、空にも!」

「空、つ、二体もいるのか!」

修の呼び掛けで空を見上げると、飛んでいるラービットが2体。

目の前にいるラービットを合わせれば計3体のラービットと鉢合わせをってしまったことになる。

「つ、すみません。三雲さ」

「全員、走り抜けてくれ!!」

「修!?!」

今此処でC級を拐われるわけにはいかない。

京介はガイストを起動しようとするがその前に修が走り出し、ブレードもシールドも出していないレイガストを目に向かって投げつける。

「お前」

「兄さんは、こうなることを承知の上で行ったんです!!」

「!」

千佳を連れていき、飛び去った貴虎。

本当ならば残りたいが、そうすることよりも千佳を連れていくことを優先しなければならず苦渋の決断をした。

「僕も、こうなることを承知の上でここに残りました」

緊急脱出をした方が良いのに、しない。

戦うことも守ることも出来ない、そんな自分でも出来ることを探して自分なりの戦いを、囿になろうとする。

「つぐー!」

戦うことも守ることも出来ない修は起動前のレイガストを投げて、視線を誘導するも両腕に捕まる修。

ラービットの胴体の上半身部分がパカリと開くと、トリオン体の修はさながらカイジの描写でよく見るグニヤグニヤと波を打つかの様に揺れる。

「修！」

「強印 トリプル 三重!!」

胴体から肋骨つぽい触手が出てき、修に触れようとし終わりかと思つたその時、黒い流れ星が降り注ぎクレーターを作る。

「よう、平気か……メガネくん？」

黒い流星の正体、それは黒トリガーを起動した遊真。

空から降ってきた遊真はラービットを殴り、破壊した。

「メガネくんじゃない、三雲修だ……前にも似たようなことがあつたな」

「訓練生なのに修が外でトリガーを使ってバムスターに負けた時だな」

「嫌なことを思い出させないでくれ……」

「手、貸そうか？」

「頼む」

遊真の登場にホツとしたせいであつた尻餅から抜けられない修は遊真の手を握り起き

上がる。

「遊真、まだ上に」

「大丈夫だ、とりまる先輩」

黒トリガーを使った遊真という心強い援軍を得て心にゆとりを持った京介は上に残っているラービットを倒すのを頼むが、必要はなかった。飛んでいたラービットは破壊されて、すぐ近くに落ちてきた。

「いや〜危なかった。ホント、メガネくんはオレの事を踊らせてくれる」

「迅さん!」

「迅?」

「迅って、あの」

「フリーのA級で、太刀川さんのライバルでセクハラをしてた人!」

「最後はちよつと余計ダナー!!」

遊真に続き、迅もカッコよく登場した。

C級もまさかあの実力派エリート!!となるのだが、貴虎の残した迅のセクハラの遺恨は中々に消えない。

「事実じゃないですか」

事実を述べているだけで、消えるも糞もなにもない。

「でも、助かりました。流石つす、迅さん」

「うん、うん、そうだよな……実力派エリート、迅、ただいま参上！」

京介に礼を言われ、頼れるお兄さんポジションはまだ健在だと納得し人差し指と中指以外を折り曲げてビシツとカツコつける迅。

「空閑、どうしてここに？警戒区域の外に出るのは城戸司令に」

「ジンさんがこのままだとオサムが危ないから。現におまえ、捕まりそうだったろ」

「それはそうだけど……」

「なんかあつたらジンさんが責任を取ってくれるつて……多分」

そんな迅よりもどうして空閑がと驚く修。

黒トリガー遊真をボーダー隊員は見馴れておらず、敵と間違われる可能性があるのも警戒区域外に出ることを禁じられているが、迅が危険だというので向かったので迅に罪は擦り付ける。

「迅さん、大丈夫なんですか？」

京介は後で怒られないか大丈夫か聞く。

「もうこの辺にはオレ達しかいないし、今は非常事態だ」

いざとなれば城戸司令を言いくるめるものは此処には沢山あるとチラリと道端に放置されているヒュースを見ながら言う。大人は汚いものである。

迅と遊真の登場により、一気に逆転する修達。万能に近い二人がいれば怖いもの無しで、誰一人欠けることなく本部に向かうことは出来る。

「ところで、三雲さんの登場は予測してたんすか？」

大きな余裕が出来たので、移動しながら貴虎の登場を読んでいたのかと聞く京介。

迅はおでこに青筋を浮かべて、笑顔で答える。

「メロンくんの素顔を知ったのはついさつきで、オレの知らない誰かが助けに入る未来はちよこつとしか見えてなかったから、サイドエフエクトから大外れ……お陰で今日までやった色々なことが無駄になりそうになってる」

「大丈夫、なんですかそれ？」

「全然大丈夫じゃない」

今日までこの大規模侵攻に備えて色々とやっていたが、一瞬にしてパーだ。

なんだったら良い結果を出せる四五六賽を一か七しかない特殊賽に変えられたと
いって良いぐらい。

最高最善はあるにはあるが、同時に最低最悪もあり表裏一体と言って良いほどに隣接
していてよっしやと素直には喜べない。

「全く、一番面倒なのを置いてきやがつて……」

加えて、貴虎が残したものを後始末しなければならぬ。

「遊真、此処等が潮時だ」

後もう少しで本部に続くトリガーを使わなければ入れない隠し扉的なものがあるビルに辿り着くというところで迅は足を止める南西部に顔を向ける。

「潮時つて、後もう少しだけど」

「そこまでだったら京介だけでもいけるし、そこより先だったら何名かの隊員がいるからオレ達が居なくても問題ない」

「じゃあ、なにをすれば良いの?」

一発逆転の遠征挺の強制帰還をするためのピースが着実と本部に揃い始めている。

トリオンを持った千佳、相手の船への道標となるラッド、船をハッキングするレプリカ、貴虎の持つサクラハリケーン、忍田本部長という優れたトリガー使い。どれもコレも策を実行するには必要不可欠だが、それでもまだ何手か足りない。

迅の未来視にはハッキリと見える。今の状態でアフトクラトルが千佳を扱う方法があると、それをどうにかしなければ勝ったことにはならないと。

誰なのかは不確定だが誰かがまだ表に姿を現しておらず、その誰かも危険な存在で、一度でも攻撃を受ければ負ける一撃必殺の持ち主で、そいつを表に出さなければならぬ。

「レイジさんを倒した黒トリガー使いをどうにかする」

『レイジ殿ということはアフトラトルの国宝である星の杖を』

「出水達がメロンくんと普通の角持ちを倒す未来は見えた。

そうなると、残ったのは二人。風間さんを倒したのとレイジさんを倒した二人で、どっちも黒トリガー……この意味が分からないお前じゃないよな？」

そいつを表に出すためにも、残っているアフトラトルのトリガー使いを倒さなければならぬ。

そして残っているトリガー使いは黒トリガー使い。黒トリガーは並のトリガーでは再現できない能力に加えてトリオンを増大させる力を持っており、黒トリガー一っただけで戦力がひっくり返る。

迅が風刃を使い遊真が黒トリガーを使いコンビを組めばA級上位3部隊勝つと言っても良いぐらいの。

因みにだが、風刃、遊真の黒トリガー、天羽の黒トリガー、支部長とか本部長とかの役職があり普段は前線で戦わない人を含めたボーダーの総戦力と三雲家が戦った場合は、三雲家が余裕を残して勝つ。貴虎は斬月だけでノーマルトリガーの隊員をほぼ全て圧倒できる。というか、その気になればトリガー機能を停止出来る。

「黒トリガーを相手にするには黒トリガー……それは良いけど、二人いるんでしょ？」

「そっちの方は問題ない」

もう一人の方も絶賛フリーで、一人を倒してもう一人なんて無理だし距離的にも間に合わない可能性があるかと心配をする遊真だが心配はない。問題大有りだけど、心配はない。

「風間さんを倒した方はメロンくんが色々とやったお陰で、なんにも問題ない……オレのサイドエフェクトがそう言っている」

もう一人の黒トリガー使い、エネドラ。

風間さんはエネドラの不可視の攻撃を体内から受けて緊急脱出をし、同じ隊の歌川と菊地原は撤退を余儀無くされた。

白兵戦特化の風間隊の隊長である風間さんを倒し、撤退をさせるほどの強さを持つのだがそれでも迅のサイドエフェクトは問題ないと言っていた。

※

「上空より飛行物体と雨取隊員のトリオン反応接近！」

ジンバーメロンアームズのままダンデライナーに搭乗し、本部間近に迫る貴虎。

本部に設置されているカメラから管制室のモニターの映像に写し出され、それを見た根付さんはホッとする。

「人型近界民にやられた時はヒヤツとしましたが、逆に倒して此方に向かつてきてくれて良かったです。速度からして、どれぐらいでつきますか？」

「後、3分ほどで到着します」

「屋上に続く通路を開けて、信号を……彼ならば光を見れば気付くだろう」

忍田本部長がトリガーチップ交換の為に不在の為、指揮をする城戸司令。

貴虎がボーダーに入る道を作るように指示し、次を考える。

「ところで、彼をこの後どうしますか？」

それよりも更に後のことを根付さんは聞いた。

千佳を連れてサクラハリケーンを渡せば貴虎はもう用済みだ。

「我々が関与しない未知のトリガーを持ち、ボーダーを嫌悪する彼は今後、ボーダーにとって障害にしかありません。後で来て貰うとは言いましたが、出る杭は打たねばなりません」

根付さんは早いところ貴虎を封じ込めようとするように進言をする。

「彼をどうするかについては後々だ。今は近界民をどうにかすることを、特に君はこの後が大事だ」

今はアフトラトルをどうにかするかがなによりも重要で、終わった後はマスコミメディアの各種方面に会見を開いたり、被害総額を計算したりと色々としなければならな

い。

少なくとも今の状態で貴虎と戦えばロクなことにならず共闘した方が良いと判断した上で貴虎を後回しする。

『どうするかって、何様のつもりなのかしら?』

「!?!」

そしてその態度にキレル人がいる。誰かとは言うまでもない。

「何者だ?」

『通りすがりの主婦よ、覚えておかなくていいわ』

「通信反応は……子機レプリカからです」

突如として鳴り響く見知らぬ声の出所を直ぐに探るS村さん。

モニターの地図に映し出された場所は警戒区域外の市街地で、ちびレプリカを経由してボーダーと通信を取っている。

『それよりも、どうするつもりなんて何様なのかしら? 少なくとももやってることは四年半前の貴方達と似たようなことですよ?』

四年半前までは秘密の組織として活動していたボーダー。

兵器開発（トリガー開発）し、異世界に行つてたやべー組織で、四年半前に起きた大

規模な近界民の侵攻により姿を表に出した。貴虎がやっていることはその時のお前等と同じであると主張をする。

「あの時はそうかもしれないが、今は違う」

あの時は秘密の組織だが、今はちゃんとした組織だ。

「お前は、何者だ？」

声の主の正体を探る城戸司令。

貴虎の味方か何かかと推測をたてて、慎重になるのだがそこまで慎重になる必要はない。

『警戒心を剥き出しね、当然と言えば当然だけど。』

とにかく、私が言いたいのは貴虎の身柄を拘束なんて馬鹿な真似をしたら今すぐにもあんた等が上手く誤魔化してる事を全部マスコミとかにバラしてトリガーを国に渡すわ』

「そ、そんな事したらどうなるのか分かってるのかね！」

あくまでも異世界の侵略者という明確に見える悪を倒す組織、と言うのが建前のポーター。

もし隠している事実をバラせば、やっているのが戦争だと分かれば過激な国が宗教団体がなにをするのか分からず、ポーターにスパイをいれたり、あの手この手でトリガー

を奪いに来て、数百年も掛けて手に入れた平穏な一時を一瞬にして無くす。

『余計な事をしなければ良いだけの話よ。』

それと……戦争を仕掛ける近界民は最悪よ、退治しないと。話し合いの場を設けずに先に居たからと力付くでなんでもしようとする奴等の様にね』

「……」

「通信が切れました。此方側から取っていますが……」

ちびレプリカとの通信が取れない。

言うだけ言って消えた声の主は分からないまま、なんとも言えない空気に包まれる管制室。

「最後のは警告、か」

力づくで貴虎からトリガーを奪おうと思えば奪える。

貴虎と言えども人であり、常時トリガーを起動していられないので解除した隙を狙い、殴つて気絶させれば簡単に奪える。しかし、それは色々とモラルに欠けていたりし、それはするなどの警告を嫌味を交えて遠回しに言ってきた。

話し合いの場を設けずに手を出せば、力づくで奪おうとしようとするならば自分達が憎み敵視する近界民以下だと見なして潰すと。

『悪いが、この事に関してはおちゃんと話し合いをすべきだと言っておこう』

向こうにいるちびレプリカからも話し合いの場を設ける様に言われる。

「君の子機が今話して来た女性と一緒にいるようだが、いったい何者なんだね？」

女性としか分からない根付さんは聞く。

『それについてもだ。』

少なくとも、兄殿も含めて此方の世界の住人であり、ボーダーとは異なるトリガーを所持している。

それを力づくで奪うと言うのならばやっていることは強盗になんら変わりない。強奪をすれば、多くのものが見限るだろう……無論、私もユーマもその内の一人だ』

答えるつもりはなく、何度も何度も釘を刺していき通信を切った子機。

強奪をやれと言われればやる隊員は何人も居るだろうが、それを本当にやるという越えてはならない一線を越えることを意味する。近界民を相手ならば通じたが、少なくとも此方の世界の住人でありボーダーとは異なるトリガーを持っているので、通じない。

「……彼については後だ」

主導権を握っている証である、「どうするか」と言わない城戸司令。

ダンデライナーに搭乗した貴虎は本部の屋上にたどり着き、千佳と共にボーダーへと降り立った。

これまでにボーダーを嫌悪しても当然と言うことが色々とあり、ボーダーに入らずに

色々と言っていた貴虎。ボーダー本部内部に足を踏み入れ様としたその時だった。

『侵入警報！侵入警報！』

侵入警報が鳴り響く。

「基地本部から見識別のトリオン反応が！」

「彼のか？」

今まさにボーダーとは異なるトリガーを起動した状態で入ろうとしている貴虎がいる。

「いえ、違います。場所は、通気口からです！」

「通気口、門を開くトリオン兵かね!? まずいですよ、此処に大型のトリオン兵が出現したら門を開く装置が」

「違います！この反応は……人型です!!」

侵入してきた近界民の種類を言うと管制室の空気は凍った。

黒い欠片を磁力で操るヒュースは修達が、空を飛ぶジェットゴリラのランバネインは米屋達が倒した情報は本部には伝わっており、残っているのは二人。

「黒トリガーかね!？」

「カメラを切り替えます！」

即座にカメラを切り替えるS村さん。

部隊専属でなく沢山のオペレーターがいる通信室のすぐ近くが写し出されると黒い角をはやしたオカツパみたいなキューティクルヘアーの狂暴な男、エネドラがいた。

「あれは風間隊員を倒した近界民、まずいですよ。今いるその場は！」
直ぐ隣がオペレーター達が多数いる通信室。

そこを潰せば主に支部に所属している学業を優先しているボーダー隊員達との連携が取れなくなる。

『さあ、出て来やがれ猿ども！それとも、オレ様が叩き出してやろうか!!』

向こう側に通信室がある壁に近付くと、切れ目が走り崩壊していく壁。

崩壊した壁の瓦礫は前へと進んでいきオペレーターをしていた職員達を襲う。

『んだよ通信してる猿どもの蛸部屋かよ』

『に、逃げろお!!』

壊した壁の向こうの部屋が通信室だと分かるとつまらなそうな顔をするエネドラ。
襲われたと気付いたオペレーターは逃げ出す。

『おせえよ。やっぱ、猿は何処までいっても猿だな』

『いっほおっ!』

そんなオペレーターの内部からブレードを出すエネドラ。

オペレーターの男性は体から煙を出すとトリオン体から元の生身の肉体へと戻る。

「このままでは、オペレーター達が殺されてしまいます!!」

一人やられれば、その近くにいる人物を一人とチマチマと倒すエネドラ。

一度に纏めて倒すことも出来るのだがそれをせず、トリオン体から生身に戻り逃げ遅れた職員も襲わずに怯える姿を見て楽しんでる。

「城戸司令!」

楽しんでる内はまだ良い方、エネドラは何時でもその場にいるオペレーター達を殺すことが出来る。

幸いにも貴虎がやっておけと言っていたのでトリガーを起動しており、瓦礫に巻き込まれての怪我は無かったが、生殺与奪の権利を握られていると言っても過言ではない。

「彼はどうしている?」

「屋上から通信室には走ったとしても数分は」

「だったら、本部長を今、開発室に鬼怒田さんと一緒に居るはずです」

「トリガーチップを変更していてトリガーの使用が出来ません!」

襲撃してきたエネドラを撃退できそうな面々をあげるも、間に合わない。

『……ツチ、そろそろ悲鳴を聞くのも飽きてきたな。血に染めてやるか』

まともに戦える人物がその場におらず、逃げ惑う姿を見るだけで退屈になったエネドラ。

気紛れにオペレーター達を殺そうとしたその時だった、エネドラの体を2発の弾丸が貫いた。

『あア?』

「おお、彼は!」

エネドラを撃つたのは貴虎ではない。

リーゼントが特徴的なインテリヤンキーな外見の男、弓場拓磨。

『本部に侵入するとは良い度胸だな、人型ア!!』

彼の2丁拳銃が火を吹く。

7 1 話（番外編開校編）

某月某日

「よし、メガネボーイ！」

「あ、三雲先輩だ！」

ボーダー本部へと呼び出された修は迅バカの緑川と槍バカの米屋と遭遇する。

「メガネボーイがこの辺に居るのが珍しいな」

遭遇した米屋はこの辺で会うのが珍しいと感じる。

修が本部に来るときは書類の提出や遊真の付き添いや誰かに会いに行くぐらいで、ランク戦のブースや何処かの部隊の隊室なのだが、そのどちらでも無い場所で出会った。

「指定された部屋に來いと呼び出されまして、本部は基本的にランク戦でしか來ないの
で迷いました」

「つて、メガネボーイも呼び出されたのか？」

必要な書類を届けるとかそういう感じでなく呼び出しをくらったと場所を教えると
目を見開く米屋と緑川。

「オレ達も呼び出されたよ！」

「緑川達も……いつたい、なんだろう？」

「んく……取りあえず行ってみるか！」

交遊関係はそれなりではあるものの、特に関連性が浮かばないのでとりあえずは指定の場所に向かう3人。

指定された部屋の前に行くと、そこにはそこそこの数の隊員が居た。

「あれ、三雲くんも呼び出されたんだ」

「日浦さんも？」

部屋の前に結構な人だかりが出来ており、驚く三人に気付いたのは同じく呼び出された日浦。

指定された部屋の扉がまだ開いておらず、全員立ち往生していることを聞く。

「にしても、スゴい顔触れだね！オールスターって感じ」

緑川は立ち往生している面々を見て豪華だと感じる。

ボーダーのN.O. 1隊員の太刀川と攻撃手二位で個人三位の風間をはじめに、柿崎、弓場、熊谷、小荒井、別役、小佐野、仁礼、黒江、月見、帯島と早々たる顔触れ。

ポジションもランクも関係が無く狙撃手が別役だけなのは心許ないがそれを埋めるかのような面子が揃っている。

「三雲か、迅か、それとも東さんか。またなにか面白いことでもおっ始めるつもりみたい

だな」

集まった面々の法則性はよく分からないものの、かなりの人数がいる。

ランク戦とは異なる演習かなにかを誰かが企んでいるのか今から起こりうることを想像し、太刀川は心を踊らせる。

「米屋、準備が出来たぞ！」

「諏訪？」

まだかと待っていると思ふと扉のロックが解除される様な音が鳴ると、諏訪さんが入れと言ふ。

諏訪も呼び出されていたのかと風間さんは少し驚くのだが、それよりもどうして米屋を名指ししたのかと疑問に思う。

「諏訪さんからの指名だから、オレが一番乗りで!!」

よっしゃとワクワクしながら扉を開ける

「逃げんぞ! 緑川!」

と、同時に逃げ出す米屋。

「なんで逃げんの？」

「良いから、逃げるんだ!!」

突如として逃げ出す米屋に驚く一同。

なにを見たんだと改めて開いたドアの向こう側は……学校の教室だった。

「おーおー、マジで逃げやがったぞ」

逃げる米屋を見て、マジカーと教室から出てくる諏訪さん。

「諏訪、これはいつたいたいということだ？」

「んだよ、見て分かんねえのか？というか、見たことねえのか……抜き打ちテストだ」

教室から出てきた諏訪さんになにをするのか風間さんが聞いたその瞬間だった、一部のボーダー隊員は教室から逃げるべく、全てを一瞬の内に察した米屋の後を追うかのように走り出した。

「エスクード！」

「ぐヴェえ!？」

「と、とりまる先輩!？」

先頭を走る米屋の前に突如として出現したエスクード。

米屋は激突し倒れ、後ろを走っていた緑川は足を止める。

「知っているか、緑川……抜き打ちテストからは逃れられないんだ」

「何処の大魔王なの!？」

「商品券の半分をくれてやるから仲間になれって言われたから、魔王じゃない」

はいを押してしまった勇者の成れの果てである。

トリガーを起動した京介のエスクードに阻まれ逃げ道を無くすバカ達。

「諦めろ、わざわざ本部の隅っこを改造して作ったのはこの為になんだからよ」

「……はっ」

逃げ場は何処にも無いと教えられた太刀川さん。

冷や汗を垂らしながら教室に入るとそこには貴虎と忍田本部長と沢村さんが居た。

「おそーい！もう、チャイム鳴ってるぞー！」

「三雲、やっぱそれは無理あるわ」

「まあ、無理してテンション上げてますからね……はあ」

入ると同時に変なテンションで接するも、無理しており落ち込み哀愁を漂わせる貴虎。

なんかまずいことをしてしまったのかと17歳以下の年齢の隊員達は申し訳無い感情になる。

「貴虎くん、大丈夫なの？」

「貴虎くんじゃなくて、三雲主任だ。」

正直、大丈夫だがこれから大丈夫じゃなくなる……諏訪さんがネタバラシして米屋がもうなにもかも察していると思うから言うぞ。今から抜き打ちテストをする」

今回呼び出された理由、それは抜き打ちテストをすること。

諏訪にネタバレをされたのでそこまでは驚かないものの嫌そうな顔をするボーダー隊員はチラホラ。なんせ今は学校に行かなくて良いオフシーズン。勉強なんて忘れてランク戦に入り浸りたい遊びたい時期。

「嫌そうな顔をするな。私だって嫌なんだ……」

「じゃあ、なんでやるんだよ！」

あたし達はテストをしない、三雲はテストをさせない！ Win—Winじゃねえか！

「黙れ、仁礼、大元を正せばお前等が悪い。それと三雲じゃなくて三雲主任と呼べ」

「アタシ達が悪いって、カゲみたいなこととはしてねえぞ！」

影浦がやったことはせいぜい陰口叩いたC級と根付さんをボコる程度でそこまでの罪は無い。

「お前と米屋は留年しかけただろう」

暴行沙汰での罪はなくても、それ以外の罪は普通にある。

既に進級は確定しているものの、本当にギリギリのデッドエンドラインとも言うべきラインに立っているヒカリと米屋は危うく留年しかけたのである。

「とにかく、抜き打ちのテストをする……やっぱ、こう言うのは向いてないので諏訪さん、頼みます」

ヒカリを見て、更に落ち込み諏訪に託す。

「おお……まあ、三雲の言うように抜き打ちテストだ。

ボーダーの隊員は基本的に中高生で、シフトの都合上学校を早退や遅刻しねえとならねえ。大学なら授業を受けるか受けないか選べるが、中学高校はそうはいかねえ」

託された諏訪はどうして抜き打ちテストをするのか大まかな説明をする。

「どうしても授業の遅れが出て、成績が下がっちゃう。

これが中学ならまだ良いけど、高校ならば留年や退学も有り得ることだ」

「それは分かりますけど、なんで俺達まで？」

抜き打ちテストをする理由はなんとなく読めてきた柿崎だが、自分が呼び出された理由がよく分からない。

ボーダーに長い間いる彼は学校とボーダーを両立した人物なのだが、現在は大学生でありシフトとかは割とどうにでもなる。隣にいる弓場も同じくで、なんならば進学校出身だ。

「良い一例、悪い一例、普通な一例なのが必要なんだよ……よく見てみる、今現在六穎館通ってる奴、一人も居ねえだろ？六穎館組は塾行つてたり自分で勉強してたり出来るから呼んでねえ」

「星輪女学院（お嬢様校）に通ってる人達は普通に成績が良い。

模範となるボーダー隊員を出そうにも……木虎だと確実に凶に乗るし、小南パイセンだとカメラ回していると知れば猫を被るし、那須をこういう企画に参加させるのもあれで、別に今生徒の人を呼ばずに模範となる人を呼べば良いで終わった」

「そうだったの」

自分が呼び出された理由に納得をする月見さん。

基本的に成績良いので、模範となる人物が一人いてそれに選ばれたのかと少しだけ気分が良くなる。

「君達の成績は私達の方も概ね把握している。私は勉強が全てとも100点満点中99点だと0点と一緒だと言う考えを持つてはいない。だが、最低限の勉強は必要だとは思っている……特に慶、お前は遠征やらなんやらで大学に行けなくなる時が多い。ランク戦も良いが、勉強もしつかりするんだ！」

「え〜」

「露骨に嫌そうな顔をするんじゃない！」

遠征に行くときメディアに知られた際にマスコミとは別に大学の方から連絡が来たんだぞ!!レポート形式のテストや課題だけじゃ流石に卒業は出来ない!!」

因みにだが、本部長も模範となる大人としてテストに参加をします。

「てか、成績悪い奴を呼び出すならカゲはどうしたんだ!アイツも悪い方だぞ!」

「国近も居ないぞ」

「三年はもう切り捨てる形で行きます……後、受験やらなんやらで忙しいところは忙しい」

時期が時期だけに三年生に構っている暇なんぞ、何処にも無い。

「ついでに言うのと、日浦……私が体張って残留させてやったんだから赤点なんぞ叩き出せばどうなるか覚えておけよ」

「そこは弟さんの方じゃないんですか!？」

「修は六穎館狙える成績で下手な成績を叩き出せば、その時点で辞表を出さないといいないから問題ない」

元より自主的に勉強するタイプなので、特に問題はない。

敷いて言うならば相棒である遊真の残念さ（陽太郎と同じレベルの成績）がどう影響するか分からない。

「本当ならばめっちゃイ……時間差で呼び出してテストですと言いたかったが、色々と許可を取らないといけなくて出来なかった。あ、言い忘れたが既にカメラは回ってるぞ」

「カメラ!?!なんでカメラが回ってるの!?!」

「ランク戦みたいに記録して緑川みたいにバカの道を歩もうとしている隊員に見せて、自分は将来こんなものになってしまうのか、それともこの人達みたいになってしまうのか

と危機感とかを思わせるためだ」

容赦の無い一言に若干だが泣きそうになる緑川。

残念なことか、此処は教室。文句を言うにはともかくにも好成绩を叩き出さなければならず、それは緑川が苦手とすることである。

カメラが回つてることを伝えられると何名かの隊員は表情がしゃつきりとし、真剣な眼差しを持つ。しかしそれでもテストは受けたくない。

「い、今の時代はテストよりもコミュニケーション能力を重要視するって学校で言ってます！」

「成る程、別役くんは別の形式のテストが良いようだね」

「唐沢さん!？」

なんとか逃れようとするが、そんなことを想定していない貴虎ではない。

伊達にボーダーのトップレベルのバカを間近で見えておらず、勉強よりもコミュニケーション能力と言うやつ対策はある。

「ペーパーテストが苦手なら、実戦形式も、入国審査風の英語のテストと言うのもあるが、どうする?」

アメリカに来たという設定で、入国審査を受けるといふ海外旅行に行けば絶対にしななければならないやつをテストとして用意している。

「What is the purpose of your trip?」

「……イエス! イエス! イエス!」

「太一、違う、そうじゃない」

取りあえずイエスさえ言っておけば良い感じの風潮だが、違うそうじゃない。

唐沢さんがなにを言っているのか分かった京介はなんだか可哀想なものを見るような目で見てしまう。

「でも、アレだろう? 生駒から聞いたけど、海外って関西弁は割と通じるんだろ? 海外の人達も関西弁喋るって言うし」

※日本語Ⅱ 関西弁ではありません。

こういう時には本当に口が回る太刀川。何がなんでも逃げたいのだが、逃げ道なんて何処にも無い。

「もうこれ以上はぐだぐだになるから、やるぞ……にしても、なんだお前達のその格好は!」

「え、いや、僕達は呼び出されただけで……この格好じゃダメなんですか?」

「三雲先輩、そういうのじゃないです。テレビ的な感じのあれです」

「?」

自分達の服装をみるが、特に場違いでもなんでもない格好でありキレる諏訪さんに粗

相をしたのかと疑問を持つ修。

黒江はテレビの進行上で言わなければならないので言っているだけだと教えるのだが、イマイチなにを言っているかがよく分からない。めっちゃイケのパクリ？知らないです。

「今からテストなんだぞ？学生らしい格好をしやがれ！」

「この手の企画は諏訪さんは頼りになるな」

諏訪が呼ばれたのは司会進行役の為だけであり、成績優秀で模範となる隊員だからではない。この人、酒、タバコ、麻雀のトリプル役満である。因みにだが、東さんはこんな馬鹿げた企画にまで足を運ばせるわけには行かないと呼んでいない。結局のところ、身内のゴタゴタである。

「なんでアタシ達は休みの日も勉強しないといけないんだよ……学校の勉強なんて、社会に出ても全く役立たねえって！社会に出ても全く使えないものをやったってなんの意味もねえ！」

「そんな社会に出ても全く意味の無いことすら出来ない奴等は社会に出てなんの役に立つというんだ？」

「カゲのところじゃ就職して役に立ってやるよ！」

ええ？

ヒカリの発言に、教室内の空気は一瞬で静まり返る。

「ひ、ヒカリ、あんたなにを言ってるの?」

とんでもない事を口走ってるぞと顔を真っ赤にする熊谷。

「カゲのところに就職するって言ってるんだよ!」

カゲのところは英語も理科も全く必要なくてレジ打ちとかコミュニケーション能力とかが重要なんだ! バカなアタシでも出来る!」

「……そう」

自分でとんでもない事を口走ってる自覚ゼロ、それがアホ4号、ヒカリ。

「橘高さん、今のところ丸々放送でお願いしますね」

面白いものは残さなければならない。

この企画の撮影等に協力してくれていて現在、カメラ越しで映像にブレとか無いかを確認している王子隊のオペレーターである橘高に頼むとOKサインが出る。

「オレはボーダーに就職するから」

「じゃあ、私と同じぐらいの点数は取らないとダメよ」

社会の役に立たないという発言の穴を言葉の槍で突こうとする米屋だが、沢村さんのテストの点数と言う名のシールドに防がれる。

「米屋くん達がやろうとしていることは、私も通った道だからよく分かるわ」

沢村さんは太刀川さんや東さんと同時期にボーダーに入隊し、当時は恋する突撃攻撃手と言われておりトリオンの都合とか色々あり一線を退いた元戦闘員。

そして現在は本部長補佐官という冷静に考えればかなり良い地位に立っており、余り目立たないものの沢村さんは出来る女性である（忍田本部長へのアプローチは別である）

米屋達がボーダーに就職するとなると、沢村さんほどの働きを見せなければならぬ。
い。

「もう、諦めろ。諦めないのを諦めろ」

どんな手を使おうとも、どんな言葉を使っても無駄でしかない。

あらゆる事を想定した上でこの面子が呼び出されており、逃げようとするならば四方から言葉による攻撃が来る。

本部長補佐である沢村さんと呼んだのは、バカどもの逃げの一手を完全に封じるためである。

「トリガーを配るが、起動はしないでくれ」

ドアをロックし、逃げ場を無くすとトリガーが配られる。

ここにいるのはボーダー隊員で、トリガーを携帯しているが、戦闘用の正隊員用のトリガー。今、配られているトリガーは起動すれば学生服を着たトリオン体に変わるだけ

のものである。

「学生服か……何年ぶりだろうな？」

本部長は見た目若々しいが三十路過ぎのおっさんである。

「忍田さんの学生服姿とか似合わねえ」

「いや、お前が言つて良いことじゃねえだろ」

二十歳と言われても違和感しか無いぞ、太刀川。特にアゴヒゲが。

「でも、学生服だなんてなんか少し恥ずかしいわね」

「あ、その点に関しては大丈夫ですよ」

25で学生服はと少しだけ恥ずかしがる沢村さんだが、その辺の考慮はしている。

流石に25の婚期を逃すか逃さないかの瀬戸際の女性の学生服を見るのは心苦しい。どういふことだと頭には？を浮かべるもののは試しだとトリガーを起動する沢村さん。

「え、これって」

換装した自分の姿に驚く沢村さん。

セーラー服を着るのかと思いきや、紫色の矢絣柄の着物に青色の袴を着ていた。

「現役女子高生がいるので、ここは女学生にしました……冬島さんとか雷蔵さんが、トリオン体をコレにしようアレにしようとか言い出して、凄く気持ち悪かった。橘高さんが何処かから話を聞き付けて来なければ、今ごろはブ……あ、本部長も」

「トリガー、起動！」

沢村さんに続き忍田本部長もトリオン体に換装。

オリーブ色の学ランの上に黒色のインバネスコートを着ており、帽子も被っていた。

「大正ロマンか！」

「そういうことです」

「つーことで、席についてからトリガーを起動しろよ。」

あいうえお順で呼ぶから、順番に座ってけよ。この列は小佐野、帯島、柿崎、風間の順番だ！」

大正ロマンにご満悦な沢村さんと忍田本部長。

大体の流れや説明が出来たのであいうえお順で席に着かせるのだが

「諏訪、前が見えない。それと椅子を変えてくれ」

「あ、すみません」

若干ながら席順に悪意を感じる。

一番背の低い男を最後尾にし、その前に結構体格の良い男を置き、更にその前を女子中学生、一番前を女子高生と悪意を感じる。柿崎さんは謝らなくて良い。

「どうせテストかしねえから、良いんだよ」

「なにを言ってる？6時間後には珍回答がはじまるの难道？この席ではモニターが見え

ん」

「風間さん、今日はテストだけですから。珍回答は明日です」

「……そうか」

美味しいところを期待しているところ悪いが、それは明日である。

一番美味しい部分が無いと分かり、落ち込む風間さんはトリガーを起動すると短パン半袖で小学生がよく被っているイメーজのある黄色い帽子を被っていた。

「ツブ!?!」

「……おい」

「あ、雷蔵さんと冬島さんです」

「そうか」

小学生の格好をしても特に違和感の無い風間さん。

お腹を抱えて笑うのを抑えているのがバレバレな諏訪さんを睨み付けると、このままだと自分にも拳が降り注ぐだろうと察した貴虎は首謀者である二人を売り渡す。

因みにだが、その二人も裏方で爆笑している。

「つ、次は京介、熊谷、双葉、小荒井、沢村さんだ」

諏訪さんは笑いをなんとか抑え、次の列の隊員を座らせる。

風間さんがあんな姿になってしまったのでもしやと京介達は疑いの目をトリガーに

向ける。しかし、進行上は起動しなければならず、急かされる四人。安全圏内に居る沢村さんは四人に暖かな目を向ける。

「つて……案外普通なのね」

なにか恐ろしいものが待ち構えていると思っていたものの、いざ換装してみれば普通の制服。

普段はセーラー服だが、どちらかと言えばブレザータイプの制服でコレはコレで良いわねと熊谷が納得をしていると、ピンポンパンポンと放送が鳴る。

『テイルズオブゼスティリアのDLCの学生服、悪くないチョイスね』
「ゲームの方は糞でしたけど」

貴虎も制服に一枚絡んでおり、橘高さんにチョイスを褒められる。

「待って。これって、ゲームとか漫画に出てくる学校の学生服なの？」

「ああ……別に問題ないだろう」

着せられている服がまさかのアニメとかに出てくる制服だと知らされ、落ち込む熊谷。

とはいえ、普段はちよつとエッチい、なんかエッチい、小夜子特性の隊服なのでコレはコレでありなのかと思ってしまう。

「次は忍田本部長、太刀川、月見、ヒカリ、日浦だ」

「私のは大丈夫よね?」

「芋ジャージです」

「……………っ!!」

アニメの制服、小学生の格好と益々闇が深くなり月見さんは起動前に貴虎に確認を取ると芋ジャージだと教えられた。

話の流れ的にロクでもないものが入っているのは読めていたが、別の意味でロクでもなかった。変えてくれと言いたいが、変えたら変えたでロクでもないものが待ち構えていると踏んでおり、文句は言えずトリガーを起動する。

「まあ、そう落ち込むなって。芋ジャージだろうが、お前はお前なんだからさ」

「太刀川くん……………ッブ……………」

「すげえ、あの人、違和感ねえし動じてねえ」

ノースリーブタンクトップ(白)と短パン(水色と白のストライプ)だけの休日のおっさん姿を完璧に着こなす太刀川であった。

「最後に別役、三雲、緑川、弓場、米屋!!」

「今までの傾向からして、誰か一人はおかしなのを着ないといけない……………オレかよねやん先輩か」

「二人なのは決まってるんだ」

今までは面白いとかあのアニメの格好を！だったけど、ここに来てキツイのが出てきた。

今までの法則性をなんとか見切ろうとする緑川だが日頃の行いも考えれば自分と米屋が痛い目に遭うなど思い、トリガーを起動するのだが、帝光中学の制服だった。

「あ、俺も普通だ」

別役の方も普通、と言うかよう実の男子の制服だった。

「やっぱ男子の方はそう簡単に面白いのは来ねえって、マジかあ!？」

「よねやん先輩、それ卑怯だよ!!」

面白い男子の制服は無いだろうとメタいことを言う米屋。

何時も着ている学ランに換装するのだが、牛乳瓶底を彷彿とさせるガリ勉がつけている渦巻きメガネをつけており、全員を爆笑の渦に巻き込む。

「えくと、僕のコレは?」

「ハリーポッターだな……御丁寧に、額の傷まで再現してる」

米屋達に続き、修もトリガーを起動するとホグワーツ魔法魔術学校の制服（グリフィンドール）を着ており、額にはあの人がつけた稲妻みたいな傷があり違和感も特になく、米屋のガリ勉スタイルが余りにも面白すぎたので爆笑は起きない。

「最後はオレか」

最後を飾るのは弓場さん。

果たしていったいなにが出てくるのかと全員が見守る中、トリガーを起動した。

「なんだ？」

弓場さんがトリガーを起動すると白色の特攻服を着ており、腰に晒を巻いていた。

余りにも違和感がないその姿に誰も文句は言えず、人相が悪いことを本人も自覚はしており、こう言うのが来るのを読んでいた弓場さんは騒がず、上着の背に書かれている漢字を見てなんて書いてあるか疑問に思う。

「当て字だから……鏢アラス栖テロイ弓ト體ト韋ト弩か……」

特に騒がない弓場に逆に恐怖を感じる何名かの隊員。

この隊服を作ったのはテストを受けないトリガーを使い、魔法科第一校の制服に換装しようとしている貴虎であり、本人は違和感は無いと楽しんでいる。

「うーし、じゃあ先ずはルールについて説明するぞ」

全員の換装を終え、説明に入る。

今いるもしくはこれから入隊するボーダー隊員の模範となる人物と模範としてはいけないバカを決めるテストであり、この中からバカと模範生が決まる。

テストは国数英理社の五教科に加えて一般常識の6科目で、1つにつき50分、休憩時間10分の合計六時間のぶっ通し。トリオン体なので空腹の感覚や尿意は特にならない

ので安全である。

基本的に小学生から中学三年までの問題を出し、中学2年の緑川と帯島には習ってないところを考慮して60点を、黒江は120点を与えている。中学三年には優しさも思いやりも無い。

「モチベーションを上げるために満点を取れば三門市で使える商品券(三千元)を一科目につき、1枚あげます。模範生で600点満点を取ったらおまけに4枚つけます。

それともう一つ、模範にしていけないボーダー隊員が決まった場合はその隊員の肖像画と銅像を作りますので御理解の方をお願いします」

「そこまで岡村学院を再現しなくても良いだろう……それよか、三雲。

お前、さも当たり前のように司会者側に立ってるけど、お前の方はどうなんだ？まさか、酷い点数じゃねえだろうなア？」

「ここまでふざけているのだからとギロリと貴虎を睨む弓場さん。
「600点満点です」

文句の一つでも言いたいが、残念かな貴虎は東さんよりちよつと頭良いのである。

「そうか」

因みにだが諏訪さんは478点であり数学と理科が足を引っ張った。

「うーし、じゃあ先ずは国語からだ。ここで落としたり、日本人失格だぞ」

「国語か、ここで点数を稼がないとな……ん？」

不名誉あるバカ隊員だけには選ばれてたまるかと、取れるところで取ってやると覚悟を決める太刀川なのだがおかしなことに気付く。

「予習タイムは？」

本家の方には、ちよつとだけ勉強をする時間がある。

その時間で詰め込めるだけ詰め込んでやろうと企んでたのだが、予習タイムは無く国語のテストが始まろうとしている。

「んなもんねえよ」

「抜き打ちテストなんだからそんなもの、あるわけないだろ」

「ええつ、めっちゃイケだとちやんとやってるでしょ!？」

「緑川、言つたな。遂に言つたな。皆、ぼかして言つてるのにストレートにめっちゃイケと言つたな。」

本家とか岡村学院とかそういう感じにぼかして言え!真似してたりパクってたりする自覚はあるが、ストレートに言うんじゃない!

遂に言つてはならないことを言ってしまった緑川を貴虎は叱る。

そして予習タイムが無いことを知らされると口から魂のようなものを出すバカ達。

「終わつた……」

「テスト前の詰め込みは悪いとは言わんが付け焼き刃で、ところてん形式で頭から落ちる。普段からある程度は真面目に勉強さえしていれば、予習無しでも困ることはなにもない。なによりも出る問題は小中レベルだ、俺達が出来なくてどうする」

唯一の大学生（バカ代表）に厳しめの一言を言う風間さん。ド正論である。

「迅のやつ、こんなことが起きるならサイドエフェクトで教えてくれよ……」

「今回は迅は一切関係無いからな」

未来を知っていれば予習出来たと嘆く太刀川に、今回は全くと言って無関係だと教える。

迅は現在、修の代わりに防衛任務に出ており、千佳や遊真達の前でカッコいいところを見せてやろうとしている。

「迅さん関わってないの!?!こんな面白そうな企画なのに!」

参加する側からすれば堪ったものではないが、企画する側では最高なバカテスト。

迅ならばノリノリで参加し、珍回答見たさに変な問題を入れようとサイドエフェクトを使いまくるだろうが、今回は全くといって関与はしていない。

「関わるものにも、あいつ、大学生でも職員でもない無職だから最初から省いている」

「お前、ホント、迅と仲が悪いな」

諏訪さんは貴虎に呆れるが、無職には厳しい世の中である。

「迅は無職じゃないぞ。ボーダーに所属しているからフリーターだ」

太刀川さん、それは余計に質が悪い。

そんなこんなではじまるはバカ隊員と優等生隊員を決める防衛機関立諏訪学院の抜き打ちテスト！そのチャイムが鳴り響いた！

72話（番外編 国語編）

「……うん」

テストから数日後、答案用紙とにらめっこをする貴虎、諏訪、橘高さん。

「話は色々と聞いていたけれど、酷いわね」

テストの点数に結構、ドン引きし頭を悩ませている。

「バカだバカだとは言うけど、中学生レベルの問題だろ……テレビの方と違って俺達学生だっつーのに、やっぱ自習すつ飛ばしたのが悪かったか？」

「いや、自習を入れたらもつと酷い気がしますよ……」

本家みたいに撮れ高重視にしたり、自習時間にギャグを挟むことを余りせずに抜き打ちテストを行った結果、酷かった。

次回からは自習時間を与えるべきかと検討したりしなかったりと3人は頭を悩ませながら、○付けを行っていった。

※

「ん……修、結果が出たみたいだぞ」

テストを受けた数日後、玉狛支部に居る修と京介の元にボーダーから支給される携帯端末を経由して採点が終わったとの連絡が来た。

「思ったよりも、時間が掛かりましたね」

「まあ、10人以上の解答を○付けをしたり、珍解答を見つけ出したりして大変だからな」

テレビの様にはスムーズにはいかないものである。

学業には特に不安が無い二人は特に焦ることなく本部へと足を運ぶのだが、本部へと続く地下道に緑川がいた。

「緑川」

「つげえ!?!三雲先輩」

コソコソしている緑川に声をかけると嫌そうな顔をする。

テストの結果が発表されるというのに自分達と反対の方向を歩もうとしているその姿はまさに逃げようとしている。

「お願い、三雲先輩!とりまる先輩!見逃して!!」

「見逃してって、そんな」

「テストの答案が帰ってくるって考えると、胃がキリキリするんだよ……絶対、怒られる

点数だ」

ガクガクと震える緑川。

テストの点数に怯えるぐらいならば普段から真面目に勉強していれば良いだけの話。それが出来ないから今、こうしてテストから逃げようとしている。

『ピンポンパンポン、言い忘れたことがあります。逃げた場合は、全部の答案を公開します』

「……にやあああああ!!」

緑川達の逃亡を考えていないわけではない。

公開処刑されるのと更に酷い公開処刑をされるのとどちらが良いと、どちらにせよ地獄に突き落とす事を放送で流すと走っていく緑川。

本部へと辿り着くとなんの放送だろうとなにも知らない隊員達がざわめくのだが、直ぐに気にしないでください。後日通達がありますと放送が鳴り響く。

「あ、三雲くんは烏丸先輩……はあ」

「茜、会って早々にため息は失礼でしょ」

部屋に向かう道中、日浦と熊谷と遭遇した。

「だって、難しかったじゃないですか。今回のテスト」

「難しかったって、中学3年レベルまでのテストよ?」

成績が良いとは言えない熊谷だが、少なくとも今回のテストは学校のテストよりも楽だったと感じている。

二等辺三角形の面積の求め方とか国民の三大義務とか、諺や熟語の意味や、簡単な英文と本当に小学生から中学三年までの間に習うことばかりで、簡単だった。

しかし、簡単ではなかった日浦は頬を膨らませる。

「私、まだ中学三年です」

来年と言うか後少しで高校生の日浦だが、一応はまだ中学生である。

「三雲くん、テストは難しかったよね!!」

同じく中学3年生である修に意見を求める。

「最後の方と一般常識だけ難しかったけど、それ以外はなんの問題もなく書けたけど……」

「ガーン!」

遊真が転校してきた初日にやったりアクションと同じことをする日浦。

その姿を見て空閑もその内、呼ばれてしまうんじゃないかと危機感を少し覚えるのだが、事情を知っている貴虎は呼ばないのである。

「玉狛支部の隊員は基本的に成績優秀なんだから、逃げちゃダメよ」

尚、一番頭悪いのが林藤支部長で一番頭良いのが宇佐美だ（陽太郎と遊真は除く）

「なんか揉めてるわね」

教室前に辿り着くものの、なにやら揉めている。

「お前、なんでおれを呼ばなかつたんだよ！太刀川さんから全部聞いたぞ！」

「お前、バカじゃないから良いだろう」

「弾バカだよ！馬鹿野郎!!」

3 バカなのに成績は良いので一人ハブられた男、出水。

太刀川を経由し、テストの事を知った出水はハブられていたことに対して文句を言いに来たのだが、選ばれるのは基本的にはバカなので、選ばれないのは当然である。最終的には次回は出水も出演することで収まる。

「メロンくんさ」

「無職は帰れ」

サイドエフェクトで面白いことが起きていると気付いた迅はやって来たのだが、秒で追いつかれる。

自分がいれば、もっと面白いことになったのにどうして誘ってくれなかったのと言おうとするのだが貴虎は迅を最初から相手にしない。というか、その気になればDのメモリで迅に成り代われる。

「無職じゃない。実力派エリートだって。」

メロンくん、なんでこんな面白い企画に混ぜてくれないの？ サイドエフェクトでシフト調整とかして、面白い答えを書いてくれる人を選抜したのに」

「お前が無職で、模範とまらないボーダー隊員に決まってるからだろ。」

そんなんだから生駒さんに「じゅんじゅんと並んだら、双子とかじゃなくて引き立て役の踏み台やん」って、言われるんだ！」

「言つたな、生駒つちに本気でキレたことを言いやがったな!!」

全力で罵倒したり言い争ったりする迅と貴虎。

普段はどちらかと言えば冷静な二人は混ぜるな危険の組み合わせでありベストマッチはしない。

滅多なことでは見れない迅の姿に微笑ましく見守るのだが、奴がぶっこんだ。

「三雲、迅は無職じゃなくて自称実力派エリートフリーターだ」

「太刀川さん、間違つてないけど今、言わなくても良いよね!」

「ついでに付け加えると、セクハラ魔よ」

「熊谷ちゃんも……」

「ほら、とつとと帰れ……次回、呼んでやるから」

テストを解答する側として。

迅を追い返すと、教室に入る修達。机の上にはトリガーが置かれており、起動しろと

言う意味だと察した修はホグワーツの制服を纏う。

「全く……橘高さん、今のところ全面カットでお願いします」

「ワイプ中継じゃダメかしら？」

「ダメです」

割と面白いものが撮れたのにとしょんぼりする橘高さん。

因みにだが、彼女のポジションは佐野先生で、貴虎のポジションは矢部である。

「全員揃ったようだな！」

「待て、諏訪。なんだっ、その……金八先生は！」

修達が席についた数分後、諏訪が教室に入ってきたのだが何故か金八先生の格好をしており、御丁寧にカツラまでつけていた。

「すわさん、全然似合わなーい」

「うるせえ。オレも着たかねえけど、主任さんがどうしてもって言ったから仕方なくやってんだよ！」

仕方なくで付き合ってる諏訪さんはイケメンである。

生暖かい視線を向ける一同だが、お前等の格好も大概であることを忘れてはいけな
い。

「しっかし、まあ、アレだよな」

「諏訪さん、今先生なんで先生っぽく」

「おおっと、そうだった」

素のまま進行しようとしたので貴虎から止められる。

「……今回のテストの企画の話を聞いて、本家と違ってオレ達は学生だから赤点は無いんじゃないかって思ったんだよ」

「赤点があつたのかよ」

諏訪学院の赤点は平均点の半分以下である。

「先生な、こんな事でお前達を怒りたくないんだ」

「だったら怒らない方が良いと思いまー、ぬうおあ!？」

「黙れ……ツチ」

教師が割と言いそうな矛盾してることに挙手し、反発する太刀川。

そんな太刀川の額にチョークが命中し煙をあげる。

「やべえよ、金八先生とは程遠いよ」

やんくみともGTOとも異なるなんとも言えない教育者、諏訪さんにビビる米屋。

「すわさんは金八先生じゃなくて金髪先生だよ」

「誰が上手いことを言えつった。先生な、こんなことで本当に怒りたくないんだぞ！」

「諏訪サン、そんなに酷かったのか？」

「100点一人もいねえんだよ!!」

今回のこのテスト、小学生から中学三年までのレベルであり、試験を受けている受験生達は本家の方と異なり三十過ぎたおっさんとかでなく、学校に通っているボーダー隊員達。言わば、現役なのである。

殆どが普通校出身だが、大学生組の中に進学校出身の風間と弓場がいる。なんならばお嬢様校に月見も居るのだが、どの科目も満点一人も居ない。

「100点、一人も居ないんですか!?!」

衝撃のカミングアウトに驚く小荒井。

「ビックリすんな。採点してたオレ達もビックリしてんだからよ!」

岡村さんのところはもう勉強しない人達とかでしてるけど、オレ達勉強してる学生だぞ? 因みに、小荒井の国語の点数は62点だ」

「ちよ、なんでいきなりバラすんですか?」

「お前、難しい問題を飛ばして空欄にしてたから珍解答が無くて撮れ高0なんだ。なんだつたら、今が初台詞だ」

※作者の技量の問題である。

中学三年レベルまでの問題だから余裕だろうと思っていたちちゃんと勉強をしている組は、100点を一つも取れていないことにショックを受け、商品券が欲しかった京介

は落ち込む。修は少し残念そうにする。

「62点……62点ツスカ」

帯島は真剣に考える。

国語は日常的に使うもので、テストの問題も基本的な読み書きだった。故に習っていないところもスラスラと答えを書くことが出来た。

そしてバカを除けば一番頭の悪いとされる小荒井の国語の点数が62点、ならば小荒井よりも頭の悪い奴は、頭の良い奴は、どういう点数なのかと、考えてしまう。

「まあ、なんだかんだ言つて国語だからな。

漢字とか諺とか漫画とか新聞を見てたりしたら自然と身に付くもので、全科目で一番高い平均点だ。一番成績の良い点数は97点！月見だ！」

「あら、残念……何処で間違つてたのかしら」

「えくと……何処だ、三雲？」

「いや、私じゃなくて橘高さんの仕事ですよ」

矢部ポジの貴虎は基本的には野次を飛ばす仕事であり、テストのナレーション等が橘高さんである。

「ええつと、これね。【以下の諺と同じ意味を持つ諺を答えなさい。】【豚に真珠】、普通に考えれば猫に小判、犬に論語とかね」

「なんて書いてあるかしら？」

「おいおい、それをモニターで出すのがこの動画の醍醐味だぞ」

サラッと自分だけ逃れようとする月見さんだが、そんなに甘くはない。

「豚に真珠と同じ意味を持つ諺を答えなさい、月見の答ええ！」

『『暖簾に腕押し』』

「あゝ……これ、撮れ高無いですからカットしてください」

「ちよつと失礼じゃない？」

面白くないから仕方ない。

豚に真珠と暖簾に腕押しは意味が似ているには似ているものの、あくまでも似ているだけで同じ意味ではない。割とやりそうなミスなので、撮れ高らしい撮れ高は無い。

「因みにだけれど、沢村さんと本部長と柿崎さんも似たミスをしていたわ」

「間違つてたつて、オレ、なにを書いたか覚えてないんだけど？」

「後で返却される答案用紙を確認してください。あ、動画を視聴しているボーダー隊員達、この辺に出てるから」

撮れ高の無い答えに需要なんぞ何処にもない。ちよつとメタい編集の発言をする。

柿崎さん 糠に釘 沢村さん 豆腐にかすがい 忍田本部長 柳に風

国語の同じ意味を書く系の問題は全体的にかっこよく書こうとしたら失敗が多いよ

うだ。

「採点してたら、分かったけどもケアレスミスが割と多いな。」

国語の問題は文字をちゃんと書かないといけないし、熟語とか諺とか書かないといけないから仕方ねえっちゃ、仕方ねえ……って、思ってたんですけどね、先生は!!」

「まさか……」

バンツと教卓を叩く諏訪さんに全員の頭に不吉な数字が過る。

「安心しろよ……一桁代だ」

「一桁代って、諏訪サン、マジなのか?」

「大マジだよ。オレも橘高も三雲もドン引きしたわ!」

理系じゃない人は英語や数学が合わない。合わない人は合わず、努力しても限界がある。

そこで一桁代の点数はまだ理解することが出来るのだが、国語である。

「自分は一桁代じゃないって思うバカは挙手してくださいね。諏訪先生は、キレますから」

「いや、怒らないのが普通だろう」

貴虎にツツコミを入れながらも挙手する槍バカ。

いくらなんでも国語で一桁代は無いと太刀川、緑川、ヒカリ、小佐野も挙手する中、双

葉も挙手をする。

「黒江、なんでお前も手を上げている？」

「双葉です……分らない問題が多かったのだから」

「安心しろ。小佐野以外の挙手してる奴等が一番点を取ってる」

「よかった……」

今回最年少の中学一年の双葉。

中学3年までが出題されるこのテストは難しかったようだが、それでもバカ達よりは点数が上である。小佐野は割と良い点数だった。

「最年少の双葉よりも下だけでもそれでも一桁代じゃねえぞって人……おい！」

「全然、ぶれないな」

双葉よりも下と言われても動じない馬鹿達は手を下げない。

それで良いのかと貴虎は呆れているのだが、一桁は本当に恥ずかしいのである。

「さて、そんな中、バカどもとは関係の無いと私はセーフだと思ってる日浦!!」

「え!?!」

自分は大丈夫なゾーンと日浦は静観していたのだが、突如として諏訪先生に呼ばれて驚く。

「茜、あんたまさか!?!」

「無いです！それは絶対に無いです！全問埋めました！自己採点はしてませんが、50点は越えています！」

まさか茜がと一桁の数字が過る熊谷だが、全力で否定する日浦。

「安心して、68点よ」

その時、橘高から助け船を出された。

「俺、日浦より下なの？」

「書けないところを諦めて書かないのはダメよ……けど、それよりも」

パッとモニターに映し出される【豚に真珠】

「さつき、月見が間違えた豚に真珠。

豚に真珠だが、同じ意味を持つことわざを書く以外にも豚に真珠の意味を書けという

問題があつてだな……先ずは熊谷の解答だ」

「私はちゃんと書きましたよ！」

『熊谷友子の答え【値打ちのあるものを価値の分からない人に渡しても無駄なこと】」

「模範的な解答よ」

「よかった……は!?!」

モニターに映し出された自身の解答は模範的な解答であり、良かったとホツとするのも束の間、どうして自分の解答が先に出されたのか察する熊谷。

自然と日浦の方に顔が向いており、たまたま目線が貴虎と合うと貴虎は首を横に振る。

『【意外なところから意外なものが出てくる】……つぶ』

「なんで笑うんですか！」

「橘高副担任、笑っちゃダメです」

書いている内容が余りにも面白く、思わず吹き出してしまう橘高さん。

「これは柵からぼた餅と勘違いしたのか？」

日浦の解答の間違いを冷静に考察する風間さん。

柵からぼた餅は思いがけないところで幸福を手にする。意外なところから意外なものが出てくると言う意味と若干だけ似ているが異なっている。

「先生達も、3人で色々と話しました。」

最初は柵からぼた餅と間違えてしまったのかと、けど、三雲が気付きました。そしてレイジがやってくれました！」

トンつと教卓の上に一口カツが乗った皿を出す諏訪さん。

「日浦、食え!!!レイジ特製の一口カツだ！」

「これ、パワハラになりませんかよね？」

「ま、まあ、問題は無いと思うぞ」

箸で一口カツを掴み、日浦の元に歩み寄る諏訪さん。

なにも事情を知らない人から見ればかなりヤバイ絵面であり、通報される案件で大丈夫かと思わず本部長に確認を取るのだが、バラエティー馴れをしていないせいか少しだけ引いている。

「モグツ……あ、美味し、んん!？」

「日浦、あつちの方向にカメラは無いからな」

レイジさん特性の一口カツを食べて満足げな顔をするのだが、直ぐに異変に気付く。

貴虎はハンカチを取り出して、カメラで撮影が出来ない場所を指差すと日浦は移動し、口元をハンカチで抑える。

「三雲さん、なにを……」

「豚に真珠をさせた」

「あ、真珠が出てきました!」

食べた豚カツから出てきたのは、なんと真珠。

「先生達は必死に考えまして、最終的にはこの子は牡蠣と勘違いしてるんじゃないかと気付いたんです」

「あ、はい! そうなんです!」

貝から真珠が取れるって前々から知っていて、もしかしたら豚からも真珠が出てくる

んじゃないかって。ほら、貝から真珠が取れるって今時の人達なら当然じゃないですか。そこから意外なところから意外なものが出て」

「出てこないぞ」

「ついでに調べておいたが、貝殻の真珠は砂とかの異物混入で生まれるもんだったぞ。要するにこの答えは異物混入してますって言うてんだ!!」

異物混入ダメ、絶対！

昨今の食の事情的に絶対に許されなことを書いてしまう日浦、これは大きく減点しなければならぬ。

日浦の異物混入に教室内は爆笑の渦に包まれ、顔を真っ赤にする日浦。しかし、国語の問題は更なる爆弾を抱えている。

「けど、安心しろよ……もつとスゲエ、ミラクルが世の中にはあるんだからよ」

「ミラクル？」

なんのことだと頭を？を浮かべると、モニターに問題が写る。

【漢字の読み仮名を書け【炸裂弾】】

「え〜この問題はスゲエぞ。」

このクラスの3分の1の生徒が間違えて、全員が同じ間違えをしてる。因みに正しい答えがこれだ」

「三雲修の答え【さくれつだん】」

「もしかして」

冷や汗をたらりと一滴流す修。間違えた答えが過る。

「太刀川、風間、米屋、緑川、小佐野、仁礼、別役、忍田本部長の答え【メテオラ】」

「問題を見たときから誰かやらかすとは思ってたけど、バカはオールスターじゃねえか
!!」

ものの見事にやらかした面々に大笑いをする諏訪さん。心の底から間違えた面々を嘲笑っている。特にこういう時にしか煽る機会が無い風間さんに。

「風間、くーん！これは【メテオラ】じゃありません【さくれつだん】でーす！」

「……ボーター内ならそう読める」

苦し紛れの言い訳をする風間さん。

「ボーター限定で、社会では通じねえんだよ！」

「本部長、なんで間違えたんですか？」

「……素で間違えてしまった」

両手で顔を隠す本部長。さくれつだんと書けば良いものをメテオラと書くとは流石は本部長（煽り）。ボーターの大人として模範となっています（煽り）

「さて、こんな初歩的なミスを犯したがそれでも一桁代じゃないやつ……ホント、ブレね

えなお前等」

「そりゃ一桁はな」

「太刀川さん、どつから沸いてくるんですか、その自信は」

誰一人手を下げないバカ達。

炸裂弾をメテオラと読むミラクルを巻き起こしたのにめげない心はスゴいが、貴虎は醜く感じてしまう。

「だって、ほら国語だろ？」

「意味が分かりません」

「国語ってのは、日常でも使うことなんだ。

漫画読んだり報告書書いたり、メニューとかを見たりするのに使うもので、この中で最年長の俺が一番文字を読んだり見たり喋ったりしてるか一番国語力がある。つまり

この中では一番上だ」

うわ、スツゴいバカな理由。

「そんな太刀川さんよりも上だと思う人……よし、オチは分かっていた。仁礼、お前なんでも太刀川さんよりも上だと言い切れる？」

いい加減、一人ぐらいい手を下ろせよと叫びたくなるが我慢し、近くにいたヒカリに自信の理由を聞く。

「アタシにはコレがあるからな！」

自信の理由である鉛筆を机の上に置く。

鉛筆には1から6までの数字が書かれており、所謂鉛筆ころがしに使う鉛筆だった。

「ヒカリ、ズリいぞ！そんなの反則だ！」

「んだよ、お前も鉛筆貰ってたはずだろ！」

「諏訪先生、ヒカリ先輩にカンニングの容疑があります!!」

「おーし、お前達喋るんじゃねえ！口を閉じろ！」

ヒカリのコロコロ鉛筆を抗議する米屋と別役。

諏訪はどうしてそうなるとイラツとし、中指を立てて黙らせる。

「橘高さん、あそこはモザイク処理でいきますか」

「面白そうね」

諏訪先生の中指はモザイク処理されることになります。

「コロコロ鉛筆、その手があったか」

「バカ川さん、なに言ってるんですか？国語の問題は記述式の問題で、語群から選ぶ選択系の問題は無いですよ」

俺もその手を使えば良かったと後悔するバカ（太刀川）だが、国語の問題で鉛筆ころがしは余り使えない。

「で、結局、誰が一桁代なんですか？」

混沌とした空気の中、冷静に聞いてくる京介。

まだ他の科目が残っているのでこれ以上は国語で長引かせることは出来ないと言訪さんは判断し、一桁代の人物を発表する。

「別役太一、お前が一桁だ!!」

「ええっ!? なにかの間違いじゃないんですか!？」

「いや、間違いなのはお前の解答してる場所だ……ん?」

ドベを取ったのは別役。

成績だけを見れば順当なのだが、途中から書くところを間違えていた。そして答えも間違えていた。

どの部分を暴露してやろうかろ別役の答案用紙を諏訪さんは手に取るのだが、おかしな点に気付く。

「三雲、これ」

「あ、すいません」

「……いや、多分、オレも同じ事をすると思うわ」

「なにかあったんですか……もしかして、採点ミス!？」

採点ミスを喜ぶな、馬鹿野郎。

「別役、喜べ。お前の点数が9点から8点に繰り下げだ」

「あ……あの、編集でどうか誤魔化せないでしょうか？」

それガギの使いの出演者がなんかやろうとして、笑ってはいけなくて暴露されてたやつ。

「流石に一桁はちよつと……」

「こ、今先輩にだけは」

「安心しろ。雷蔵さんと冬島さんが不慮の事故で亡くなったから、裏方を手伝って貰って……今現在収録を見ている」

「ガーン……」

※雷蔵さんと冬島さんは不慮の事故（犯人は風間さん）により、この珍解答には不参加です。

「すわさん、太一のなにを間違えてたの？」

「ああ……これだ」

「別役太一の答え【千日一善】」

「……これってなにが正しい答えなんですか？」

問題の内容は、こうだ。□に入る漢字を書きなさいというシンプルな問題。

□日□善や、□果□報とか色々ある問題で、別役は間違えた。

「一日一善だ」

正しい答えを聞く別役になんとも言えない顔で答える諏訪さん。

「ああ、一だったんですね！」

「うん……」

「よねやん先輩、あながち間違いじゃないよね」

「言うな。多分、オレも○つけてたら間違える」

本物の悪、別役太一。

彼はもしかすると千日一善を素でやってしまっている男である。

「因みに、1000日は2年と270日だ」

「ついでに補足しておく、別役くんが書く場所を間違えていなかったら米屋くんがビリだったわよ」

「ぬうお！まさかのオレが二番目か！」

国語の珍回答の時点で充分な撮れ高は撮れているが、まだまだ続くぞ珍回答。
一先ずは諏訪さんから国語のテストが返却される。

「72点……よかったッス！」

良い点数で安心し、笑顔になっている帯島ちゃんはエモかったわ（橘高談）。

第73話

漢、弓場拓磨。

今のこの状況に様々な感情が入り交じり、怒りの感情を近界民に抱く。

「此処が何処だか分かってんだろうなア!!」

一つは言うまでもなく、三門市に襲撃したこと。

話をするならば筋を通すのならばちゃんと言葉を傾ける漢な彼だが、アフトラトルは問答無用でこの世界を襲ってきた。その怒りを込めた二丁のアステロイドの弾丸が一発ずつ、エネドラを撃ち抜いた。

「おいおい、こんなもんか?」

「ツチ……」

アステロイドに貫かれたエネドラは全くといって焦らない。それどころか慢心と余裕の笑みを浮かべ、弓場を見下す。

「風間隊の情報通りだな……」

二丁の拳銃から放たれる弾の射程は22m。

サブマシンガンは100mを越えて本物の拳銃は40〜50ぐらいなので、実弾の拳

銃より半分とぶぐらい。

それだけを聞けば結構な性能があるんだと思うが実際は違う。弓場の二丁拳銃の射程は短い。その気になれば40m先のものにも当てられるのだが、弓場は射程や弾数を削り、弾速や威力に振っている。

至近距離からの高速の高火力の早撃ちで弓場は「対一最強と呼ばれている（里見に）」
「（のの、準備は出来てるか？）」

そんな高火力の弾を真正面からぶつけても、全くといって効果は無い。

黒トリガー使いで、体を液体に変える能力を持ち、それ以外の能力も持っており風間さんはそれにやられた。

自身の一撃を当てても倒れない事に軽く舌打ちをし、挑発に苛立つのだが直ぐに次に移る。

『部屋の準備は出来てる。さっさとぶちこみな！』

オペレーター「藤丸ののに次の手の確認を取る。」

拳銃を使った弾系のトリガーは事前に威力や弾速を設定されており、撃てない。真正面からぶつければ並大抵のシールドをも貫く弓場の弾だが、そもそも当たっても意味が無い相手に弱かった。

「（アイツ等が戦ってんだ、俺だけ不甲斐ねえ姿を見せるわけにやいかねえ！）」

二つ目の怒りは、今こうして自分が此処にいることだ。

嵐山、柿崎、迅、生駒の19歳の男達は必死になって戦っている。それなのに自分は本部で敵が来るまで待機だ。

元弓場隊だった王子と現弓場隊の外岡の力を借り、彼等を置いて一人本部に戻った。C級が新型に狙われており、新型が予想以上の強さを秘めており、生半可のボーダー隊員ではどうにもならない。それなのに自分は待つているだけ、本部で待機している理由には頭で納得しているものの、心では納得出来ない。

「此処が何処だか分かってるかつつたな、猿山だろ？」
「それなら、テメエはゴキブリだろうが？」

だから、絶対に倒す。

最前線に立たなかつた者として、黒トリガー使いを倒す。

「その角が触角に見えるぜ」

「誰が、ゴキブリだあ!!」

弓場の割と軽めの悪口にキレルエネドラ。

トリオン体が波打ち、液状化したので距離を取ると立っていた場所がせりあがり、銃砲が出現。エネドラに向かって弾を撃った。

「つたく、猿は何処まで行っても猿だな」

その弾を驚くことなく避けることなく受けるエネドラ。

その様子を弓場はしつかりと観察をする。何処に弾を受けたのか、貫かれた体はどれぐらいの速度で戻るのか、この後に生かすべく観察をする。そして導く。

「猿芸も一個だけじゃつまらねえぞ?」

ある一定の距離を保ちながら銃を撃つ↓逃げる↓逃げた所から警備装置の銃を出して撃つを繰り返す。

「安心しろ、これで終わりだ」

二丁の拳銃から弾を撃つ。

「だから、効かねえんだよ!!」

体を液化化させるエネドラ。

なにか仕掛けて来るのかと思えば、ワンパターンばかりで飽きる。威勢ばかりの猿だと、弓場への評価を決めようとしたその時だった。

「うおら!!」

「なに!?!」

突如として目の前に現れた若い男、諏訪隊の日佐人に顔を殴られる。

「テメエ、どつから……いや、透明化のトリガーか!」

突如として現れた日佐人について驚くも、どうやって現れたかと直ぐに理解する。

ついさつきまで相手にしていた風間隊の十八番であるカメレオンによるステルス戦法と同じ方法で近付き、そのままぶん殴った。

「お、お前があんまりにもウヨウヨするからな。」

ゴキブリみたいに液体が飛び散って汚れるのもなんだしぶん殴ってやった」

よくよく聞けばおかしいことを言い、中指を突き立てる日佐人。

棒読みで挑発するために言っているのは明確なのだが、それが逆にエネドラを苛立たせる。

弧月で斬ることが出来たのに、奇襲することが出来たのに顔をぶん殴ることが出来たのに拳でぶん殴った。拳で戦闘をするスタイルでも、トリガーでも無いのにだ。

「ふざけんじゃねえ、この猿どもがああああ!!」

「弓場さん!」

「こつちだ!」

エネドラは冷静さを失った。

本部の基地は千佳やC級、緊急脱出をしてトリガーが使えないA級隊員を捕らえることが出来る謂わば宝箱だ。もし冷静な判断が出来れば誘き寄せられていることに気付く。弓場達を無視することが出来る。

今、ここでエネドラは逃げようと思えば引こうと思えば引ける。エネドラの持つ黒ト

リガー、泥の王は隙間さえあればあらゆる所から侵入が出来る。

「もう遊ぶのはしめえだ!!」

猿の相手をするのはもういい、ここからはただ蹂躪するだけだ。

「ぐ………」いつは、風間さんをやった……」

液体化していたエネドラを注意していた弓場の体が、突如として見えない刃に左腕を切り落とされる。

銃手の一番の要である腕を切り落とされるも、その目には諦めや失敗の感情は宿っておらず、やっと来たぞと笑みを浮かべる。

「外、じゃねえ……中、から………のの!!」

『あいよー!』

内部から体を刺し貫かれていた弓場は、力を振り絞りオペレーターに合図。それを聞いたのはオペレーター室でパソコンを操作すると弓場の貫かれた肉体は元に戻る。

「!?!」

再起不能な致命傷を与えた筈なのに、傷が一瞬にして治った事に驚くエネドラ。

「諏訪さん、堤さん、弓場さん、俺ごとお願いします!!」

「て、テメエ!!」

「よくやった、日佐人!!」

「オメーはやれば出来る子だつて信じてたぞ!!」

その隙を逃すことなくエネドラを羽織締めする日佐人。

自分ごと撃てと中に入り身を潜めたトリオンキユーブから復帰した諏訪さんと堤さんが姿を現し、シヨットガンを向ける。

「フルアタック×3だ!!」

弓場の二丁拳銃の元となったと言える諏訪のシヨットガンのフルアタック、弓場の2丁拳銃のフルアタック、堤のシヨットガンのフルアタック。

シールドで防ぐことが出来ない相手は蜂の巣になる!

「味方ごとなら行けるってか? あめえんだよ!」

筈だった。

エネドラは体の性状を変化させ、日佐人の羽織締めから抜け出し、弾が交差する地点に日佐人を置いた。

「大丈夫か?」

「大丈夫、です」

「……」

三人の弾は日佐人に命中した。

それなのに日佐人はなにもなかったかの様に立ち上がる。いや、本当になにもなかった

たかの様になつてゐる。

蜂の巣になつたのに元の無傷のトリオン体に戻つてゐる。弓場を内部から攻撃したのにトリガーが解除されるわけでもトリオンが漏れるわけでもない。

「ここを選んで正解だつたな、弓場あ!!」

弓場達がいる、エネドラが誘われた場所、そこは訓練室。

仮想戦闘モードというトリガーと機械を接続することによりトリオンを再現し、何度でもコンティニューのできる所謂、練習モードが出来る様になる場所。

そこに閉じ込め、仮想戦闘モードを起動すれば、あら、不思議。ボーダー隊員達はどれだけやられようと、一瞬でダメージを回復するチートを手に入れる。

相手は未知の黒トリガー使い。何枚も上手な相手で、ここでならばトリガーの解析をすることが出来る。近界民のトリガーの能力を徹底的に解析し、弱点を見つけて攻略する。それが無理ならば戦い続けて足止めをする。

仮想戦闘モードは思う存分に暴れることが出来て、相手を閉じ込めることが出来る最適の場所だつた。

「落ち着け、諏訪サン……のの、フィールドを変えろ」

倒すために相手を知るのが大事。

此処に来るまでに何発も弾に当たつてゐるエネドラだが、無傷も同然。固体を液体に

変える能力で攻撃を無力化している。打つ手無しに見えるが、無力化しているが無敵でない。何処か核となるトリオン供給器官と脳伝達神経があるはずだ。

『まずはこいつからだ』

住居が連なる訓練室が一面が銀世界な豪雪地帯に一転。

『仮想戦闘モードの部屋のギミックを変えるとは、考えたな』

それを自身の隊室で見っていた風間さんは感心をし、通信を入れる。

エネドラの黒トリガーは液体以外にもなれる。液体以外のなになれるかはなんとなくの検討はつくが、それが分かったとしてどうやって倒すかが問題だ。

「日佐人、此処だとカメレオンが使いたい放題だ！隠れて雪玉でもぶつけてろ！」

「え……あ、はい!!」

「ツチ、ちょこまかと鬱陶しい事をしやがって」

自分が閉じ込められた事に気付き、冷静さを取り戻すエネドラ。

諏訪が大声で日佐人に指示をしたのは何時でも奇襲することが出来ると頭の隅に置かせることにより、日佐人の奇襲も意識し諏訪達の攻撃にだけ集中することは出来なくなる。

「ま、所詮は猿が考えることだな」

普通ならばだ。

「ぐっ……どうなつてんだ、アイツの攻撃範囲！」

結構な広さを持つ訓練室に閉じ込めたのに、気付けば辺りは剣山を思わせるかの様に液化化したブレードの山。

日佐人がカメレオンで姿を隠していようが御構い無し。辺り一体を攻撃する力技で四人を倒す。そして仮想戦闘モードの機能で元に戻る。

「オレを凍らせようって魂胆だが、上手くいくと思つてんのか？泥の王は、液体と繋がることも出来るんだよ!!」

「そういう、ことか……」

若干溶けた雪と融合し、射程範囲を伸ばした。

泥の王の能力の一端を知る。

『次はどうする?』

最初の雪のフィールドで出鼻を挫かれた感はあるものの、大きな収穫を得た。

豪雪地帯を消した後、次の手をののしは聞いた。

「冷たいのが無理なら、暑いのはどうだ」

液体を伝つて射程範囲を伸ばしたりすることが出来るのならば、液体が無いところを用意する。

市街地へとフィールドが変化するのだが、季節外れの真夏の灼熱の日差しが弓場達を

照らす。

「これ、ホントに意味があんのか!？」

フィールドが切り替わる事に対してか、自分達の攻撃に対して言っているかは分からないが叫ぶ諏訪さん。

『奴が使っているのは種類はどうあれトリガーだ。』

何処かにトリオン供給器官と脳伝達神経があるはずだ。体の性状を変えることができるのと、今も何発かお前達の攻撃を気にせず受けているからして、自由自在に移動できる筈だ。諏訪、お前ならそれをどうにか出来る』

『すわさーん、ファイト。ついでだから別の見方が出来る様にしとくね』

「無茶、言いやがって……やってやるよ!」

何処かにある核を見つけないければなにもはじまらず、撃った弾が当たったところをマーキングするスタアメーカーをセットしている諏訪さん。黒トリガーで、攻撃は効かず、当たっても手応えがない。コンティニューし放題とはいえ、仮に核が見つかったとして、そこからどうやって倒すと心が折れそうになる途方も無い作業。

なんでお前が真つ先に落ちるんだよと色々と言ってくる風間さんに文句を言いつつも、やる気は満々。その姿を見た一同は、流石は諏訪さんだと思わせる。

実力だけならば上は何十人も居るのだが、度胸や男らしさを持っているので妙なカリ

スマを持ち合わせていた。

「かかって来いよ、ミスターブヴオオ!」

「す、諏訪さん!」

妙なカリスマを持ち合わせていると言っても、実力派エリートではない。

決め台詞を言おうとした瞬間、諏訪さんの口や腹からブレードが出現するなんと縮まらない事態に。

『おし、分かったぞ!』

だが、それが泥の王の攻略の鍵となる。

「(なにが分かった?)」

『サーモグラフィーで見たら黒トリガー使いから諏訪さんまでの間の空中におかしな熱源があった。』

そこの中の気温を40度に行っているのに40度以下のおかしな熱源で、諏訪さんの口や腹の中までおかしくなってやがる。どうやら、読みは当たったみたいだな』

『液体だけでなく気体にもなれるか』

目に見えない仕掛けで体内からブレードによる攻撃で倒された事に納得した風間さん。

戦っていた際には普通に呼吸をし、なんなら喋ってたので体内に入る隙は何処にでも

あった。

「おー！」

更に幸運が舞い降りる。

諏訪さんが撃った弾がエネドラに命中した際にガキンと音が鳴った。

『硬質化したトリオン反応、カバーされた部位を確認。そこが相手の核だよ、すわさん』

「ハツハア!!弱点発見だぜー！」

やつと見つけた相手の核となる部分。

そこを撃ち抜けば倒せると反応がマーキングされた部分を諏訪さんは撃ち抜いた。

「くつくつ……」

『硬質化の反応が増えた……ダメー偽装!』

撃ち抜いたものの、全く動揺しないどころか笑うエネドラ。

マーキングした場所以外にも硬質化された反応が多数出現。

「猿が知恵を振り絞るのは見んのは楽しいなあ。」

泥の王を解析する為にフィールドを弄くったり、トリオン攻撃のダメージ0にしたり

……死ぬまで猿知恵を振り絞って、キーキー叫びな!!」

体を気体化するエネドラ。

『室内全域にトリオン反応!』

「つ、させるか!!」

エネドラの目的はこの部屋から出ることだ!

『仮想戦闘モード、終了』

エネドラの気体が入口の操作盤に触れると、仮想戦闘モードが終了した。

「ツチ!!」

エネドラ攻略の糸口を掴む事が出来た。

硬化化したトリオンのどれかがトリオン供給器官と脳伝達神経と繋がっている。フィールドを砂漠の様な乾燥地帯にし、風向きを設定して、どれが本物かを見抜きスタアメーカーでマーキングし、誰かが本物を砕く寸前に仮想戦闘モードを解除すれば倒せていた。

「ま、暇潰しにはなったわ。死ね」

その前にエネドラに逃げられた。

黒トリガーの圧倒的な力がどれだけのものなのか、黒トリガーが一つあるだけで形勢逆転するとは言うが、これ程かと思いい知らされる。

「まだまだ!!」

だからと言って折れる男じゃない。

仮想戦闘モードが解除された事により元に戻った左腕は無くなり、残った右腕で銃を

手に取り、銃口を向ける。

「アイツ等が戦つてんのに、俺だけ先に落ちるわけにはいかねえ!!」

生駒が、嵐山が、柿崎が、迅が必死になって戦っている。

訓練生のC級が新型に襲われている。新型を倒せる隊員が少なく、人手がほしいのに自分は待機。

今、この場に居ない外岡も帯島も王子もトリオン兵と戦っている。行けるのならば自分達も行きたい。

人型の出現により不利となつているボーダー。逆転の一手として相手の船に殴り込みする手段を見つけ、その為にはC級のトリオンを借り受けなければならず、今、そのC級を連れてきている。

敵の狙いは連れてくるC級で、何がなんでも連れ去るつもりだ。

だったら、ここでこいつを倒さないと危険が及ぶ。俺達の希望が潰える!

弓場は引き金を引き、硬質化している相手の核を撃ち抜いた。

「残念、ハズレだ！」

撃ち抜いた核は、後から作り出した偽装^{ダミー}。本物ではなかった。

エネドラは液体化した体を広げ、液状のブレードを四方八方に突き立て、訓練室を、弓場のトリオン体を破壊する寸前に二本の角状となつてゐる鍰が特徴的な大きな片刃の長剣が突き刺さると液化化したブレードは気化し、消え去つた。

「消え、蒸発しただど!？」

なにがあつたのか気づき、ありえないと剣が飛んできた方向を見るエネドラ。

「どうやら間に……合わないようで、合つたようだな」

剣を投げた男は巨大な仮面ライダーアギトのマスク部分を被っている。

「お前は……」

たつた一度、去年のお正月に会つたことがある。

ボーダー隊員ではないがサイドエフェクトを持つており、それを使いこなすだけでな

く、早打ちのセンスを持っている、後輩達の友達ダチ

「三雲……」

「遊びは、終わりだ。人型近界民」

『ソイヤ!!』

ベルトのカツティングブレードを動かし、セットしているアギトロックシードをカット。

『アギトアームズ！目覚めよ、その魂！』

エネドラにとって天敵とも言えるアームズ、アーマードライダー鎧武者 斬月 アギトアームズへと変身した。

第74話

なんとか辿り着いたボーダー本部、と思いきや襲ってきていたエネドラ。

休む暇なく俺は千佳をエンジンニアの寺島雷蔵さんに預けて急いでエネドラ用にと使わずにいたアギトアームズに換装。

「予想していた通り、か」

俺の予想はハズレていなかった。

「やっつと、面白そうなのが来てくれたか！メガネメロン！」

最早、原型残ってないぞ。

俺の登場に笑みを浮かべてハイになるエネドラ。

放出されている電磁波が酒で酔っぱらってる過去の栄光にすがっている鬱陶しい中年よりもおかしく、脳がおかしいことになっている。このままだと大変な事になる。と
言うか、死相が見える。

「三雲くん、なのか？」

話はある程度は伝わっているとレプリカから聞いてはいるが、いざこの姿を見ると驚きを隠せない。

「俺は俺で、修や千佳を助ける為に此処に來ただけです。ボーダーや街の為に戦いには來てません」

あくまでも線引きを示す。

堤さんとは色々と付き合ひはあるものの、こればかりは譲るつもりは一切無い。

「弟とか玉狛のトリオン怪獣の為だろうが、構わねえよ。嵐山だつて街よりも家族優先だつて堂々と言つてんだから。三雲……つて、弟の方も居るんだつたな。とにかく、力、貸せ！」

「諏訪さん、だつたつて……コイツ、俺、一人でどうにかなりますよ」

俺の言つてる事を気にせず初対面なのに共闘しようと言つてくる器の大きさに驚きつつ、エネドラの対処について言う。

「三雲、あの黒い角は黒トリガーで性状を変える能力を持つてやがる。お前めえのそれがなにかは知らねえが、余裕ぶっこいてると足元を掬われる」

「弓場さん、余裕じゃないんですよ。じゃんけんなんですよ」

「じゃんけんだと?」

慢心とも言われる程に余裕ぶっこいてる事を注意されたが、裏を返せばそう思える程のなにかがあるからだ。

アフトラトルが襲撃してきた際の事を想定し、色々と考えた。新型の色付きのラー

ビットは特になにかしなくてもスペックのゴリ押しで通じる。故に考えなければならぬのは人型だ。

やられる前にやれ！のクロックアップしか浮かばなかったヴィザ翁とハイレイン、何処から出てくるか分かるからウォーターメロンガトリングなりなんなりでカウンターできるミラ、此方も同じ力や事をして倒せば良いランバネインとヒュースと色々と頭を悩ませて対策を考えた。

その中でも唯一頭を悩ませずに考えられたのがエネドラだ。

「アイツがグーなら、俺が今使っているのはパー。じゃんけんではグーは絶対にパーには勝てない……相性が良いんですよ」

ワールドトリガーは全員が同じ武器を使い創意工夫し戦うバトル物……の筈だ。

「悪いが、此処からは能力バトル物だ」

フレイムセイバーを出現させ、エネドラへと突撃する。

「三雲、そいつに斬る系の攻撃は効かねえ！」

止める諏訪さんを余所にフレイムセイバーで首を一閃。

ポトリとエネドラの首が落ちるのだが、エネドラはしめたと笑みを浮かべる。

「おいおい、アドバイスを聞いてやらねえのか？オレ様には効果が」

「ふん！」

「っがああ!？」

斬り落とされたエネドラの頭部にフレイムセイバーを一刺しからの胴体一閃。

今まで余裕ぶっていたエネドラから苦しむ声が聞こえ、直ぐに俺との距離を取った。

「て、めえ……さつきといい、今といい、オレを燃やしやがったな！」

「自分がなにをされたかやつと気付いたか」

エネドラは核となる部分を除けば液体になることが出来る。

ワンピースのロギア宜しく液体となった相手は斬っても斬っても攻撃は効かない。

「体を液体化させる能力はすさまじいが、割と簡単に攻略が出来る。一つ目は凍らせることだが、液体に不純物とか混ぜられていると何度で凍るか分からないからこの手は使えない。二つ目は更に不純物を混ぜる。小麦粉とかそういうのを混ぜて動きを鈍くしたりする。食堂辺りまで走ってけば小麦粉は手に入るが、そんな暇はないし効率が悪い。三つ目は燃やすこと……この姿ならそれが容易だ」

ゴゴオツと刀身に炎を纏うフレイムセイバー。

中二感満載だが、これを使うのには物凄く気を使わなければならない。いや、本当にボーダーを溶かしかねない。

「ふざけんな！そこの火で蒸発するほど、オレの体は柔かねえ！」

「悪いな、この剣は7000℃まで出すことが出来る」

「なん、だと……」

フレイムセイバーは7000℃出せる。

太陽の表面温度が6000℃ほどと言われているから、それ以上の温度を出せると言うことだ。

「三雲、7000℃って、基地を」

「今、こうしてカッコつけて炎を出せるぐらいの温度調整はしてます」

摂氏7000℃と聞き、別の心配をする弓場さん。

摂氏7000℃の刀身をぶん回したらどうなるか？刀身が放つ熱だけで周りの物が溶けるのは確かで、ボーダーの機材はドロドロに溶けてしまう。

出力の調整を間違えることはあつてはならず、こうしてカッコつけて刃に炎を纏わせられているのは物凄く難しい事だ。

『三雲く——』

「次は、気体だろう」

小佐野が周りにエネドラのトリオン反応が広がっていることを放送で知らそうとしてくるが、見えている。

フレイムセイバーを左手で持つと空いている右手にストームハルバードを出現させ、右手を振ると突風が巻き起こり、気体となっていたエネドラの一部は本体に向かって飛

ばされる。

「デメエ……」

プルプルと震えるエネドラ。

「因みに1つだけ良いことを教えてやる。伊達や酔狂でこの姿にはなっていない。この姿は毒ガスとか通さない様に出てくる」

体内に侵入さえ出来ればこつちのものだと希望を持たれては困る。

こいつは今、此処で徹底的に潰す。だから、希望を与えない。仮面ライダーに変身している時、毒ガスとか効かない。

そう、エネドラの対処法は悩むことはなにもなかった。

体を液体化するならばフレイムセイバーで燃やし尽くせば良い。

体を気体化するならばストームハルバードで吹き飛ばせば良い。

体の核となる部分を偽装するならばサイドエフェクトで本物を見つければ良い。

体の内部からガスブレードを広げて攻撃してくるならばガスを通さなければ良い。

エネドラはアギトアームズになるだけでどうにでもなる。

その答えが直ぐに出た。

「諏訪さん、堤さん、弓場さん……他は、まあ、いいか。カツコいいボーダー隊員つてのを見せてくれ。道は切り開くから」

俺との相性が最悪な事に気付くエネドラ。

そろそろ遊ぶのを止めて、確実などどめを刺すべく銃手の3人の支援を要請。
「やつと出番か。待たせ過ぎだぞ、こら」

「オレ達の出番、無いかと思つてたよ」

「見せてやるよ。カツコいいボーダー隊員つてのをな!!」

俺一人で大体どうにかしており見ているだけだった大人三人は生き生きする。

自分達が何をすればいいのか、することがなにか分かつて笑っている。

「……ぎげんな、ふぎげんなあああ!!オレは、オレ様は、黒トリガーなんだ!!猿に、わけのわからねえトリガーなんぞにやられるわけがねえ!!」

「わけのわからないからやられるんだよ……知っているか?未知は恐怖なんだ」

絶対的なまでに相性が悪いことを認めようとしないうエネドラ。

俺を倒そうと液状やガス状のブレードを向けてくるが、サイドエフエクトで何処から向かってくるか分かるので液体はフレイムセイバーで蒸発させ、ガスブレードはストームハルバードに吹き飛ばされていき、性状が変化出来ない核となる部分が段々と露呈していく。

「三雲、もう充分だ!!」

それを見た諏訪さんは俺に引くことを命ずる。

二丁の散弾銃を構えており、何時でも弾けると見せつける。

「じゃあ、カッコいいところを見せてくれよ」

『仮想戦闘モード、オフ』

徹底的に痛めつけておいたエネドラ。

仮想戦闘モードをオフにすると今まで五体満足だった弓場さんの左手は無くなる

……やられていたのか。

「これで終わりだ!」

堤さんがそういうと3人は引き金を引く。

散弾銃が回転式銃が強力な通常弾アステロイドをエネドラを貫き交差する……が、しかしエネドラは倒れない。

仮想戦闘モードがオフになると同時に今まで俺が破壊していった部分が修復されて咄嗟に核のダミーを作り上げた……。

「逃がすか」

戦極ドライバーのカツティングブレードを三回切る。

『トリニティフォーム！』

「はああああ」

足元に斬月のライダークレストを出現。

呼吸を整えて高くジャンプして、エネドラが逃げた先をサイドエフェクトで予測する。

「なんで、ここが」

「俺のサイドエフェクトがそう言っているんだ」

逃げた先に回り込まれた事を受け入れきれないエネドラ。

お前からは死相しか見えない……恨みらしい恨みは無いが、ここで倒されてもらう。

俺のライダーキックはエネドラの核を貫き、エネドラは元の姿に戻った。

「つて、最後までお前が良いところかよ」

自分達で倒したと思つた諏訪さんは少しだけ残念そうにする。

そんな諏訪さんに対して一言二言言つてみたいことはあるものの言っている暇は無い。エネドラを倒した瞬間からタイマーが切られている。

「つ……^{ミデン}玄界の猿ゴのときに」

黒トリガーである自分が倒された事を受け入れきれないものの冷静さは失つていないエネドラ。

死相が物凄く浮かんでおり、狙う瞬間は極々僅かだとロックシードホルダーに付けているウォーターメロンロックシードに手を伸ばしながら距離を詰める。

『ウォーターメロン!!』

「!」

「おい、待て三雲お!!」

「今はもう生身の肉体だ!!」

俺の行いに驚く諏訪さん、弓場さん、堤さん。

アギトアームズを解除しつつ、戦極ドライバーにウォーターメロンロックシードをセット。そのままカッティングブレードを引く。

『ウォーターメロンアームズ!! 乱れ玉、バ・バ・バ・バ・ン!!』

「そこだ!!」

ウオーターメロンアームズへと変身し、装備品であるウオーターメロンガトリングを撃つ。エネドラでなく、なにもない所に向けて……いや、なにもないと言うのは少しだけおかしいだろう。

「な!?!」

アフトクラトルの黒トリガー使いで門の様な物を開く事が出来る黒トリガー【窓の影】^{スビラスキア}の使い手であるミラが出現する場所を狙った。

「っ!!」

流石のミラも自分が出てくるところを予測して待ち構えられるのははじめてで、防御することは出来ず右腕を破壊し、足を撃ち抜く事に成功した。しかし、それと同時に激痛が走り今までのツケが回り出してきた。

まだだ。まだ、ここで終わるわけにはいかない。

「左手の……そこか!!」

原作ではミラはこの後、エネドラを殺して黒トリガーの泥の王^{ホルボロス}だけを回収していく。

その事を知っている俺は色々と考えた。別にエネドラに対してなにか特別な感情を持つてゐるわけではないので死のうが知ったことではない。ただ言えることは俺が相手だったから黒トリガーを相手に完封する事が出来た。つまりだ

「この機会を逃すわけにはいかない」

黒トリガーをぶっ壊す。

エネドラが装備している待機状態の見た目がなんとも気持ち悪い泥の王目掛けて無双セイバーの弾丸を撃ち、貫く。

「なんて事をしやがる!!」

「悪の根を断っているに過ぎない」

黒トリガーが脅威的なのは言うまでもない。

またアフトラトルが攻めてこないと言いきれないのなら、今の内に可能性を潰していく。

「ミラ、さっさと船——っ!!」

「!」

「予想外だったわ」

ミラにさっさと船に返すように言うエネドラだったが黒い棘の様なもの体が突き刺さった。

エネドラは何故と驚いた顔をするのだが直ぐに全てを察してしまう。エネドラはここで切り捨てられる存在だった

「まさか泥の王を破壊するだなんて……」

「ミ、ラ、てめえ……」

「エネドラ、貴方はもうおしまいなのよ。気づいているかしら、角の浸食が目まで届いているのを」

エネドラの左目が濁っている。

トリオン能力を拡張させる角の影響がモロに出てしまっているのだろう。やたらと凶暴なのはその為で……エネドラは不要な存在だと切り捨てられる。

「ふんー」

エネドラがここで殺される事は知っているので変に動揺はしない。

それよりもミラを倒せるかどうか無双セイバーの弾を撃つがミラは少しだけ体制が悪くなるがそれだけだった。

こちらに対して敵意を持っているのは電磁波で分かる……どう出てくる？いや、それよりも時間を稼ぐか

「つたく、国の一大事だつてのにくだらねえ内乱を起こして……そんなんじや他の奴等に先を越されるぞ」

「つ、何故それを知っている!？」

俺の挑発にミラは反応した。諏訪さん達はなにを言っているといった顔をしている。こういう時に内線が出来ないのは痛いな。

「さて、私はなんでも知っている情報通なんぞな」

ホントは原作知識だけでもとりあえずは警戒させておく。

既に警戒心は高い状態だったミラは俺に激しく敵意を向けてきて小窓を使ってくるのだがサイドエフェクトで空間の歪みの様なものを先読みして回避する。そんなやりとりをしている内にエネドラは血を流しながら倒れてしまう。ミラから受けた攻撃の当たりどころも悪い。心臓をやられたのならば手の施しようがない。

「つち……逃げたか」

俺に攻撃は通じない。目的である「泥の王」は俺の手により破壊されてしまったのでここに理由はない。

ミラは大窓を開けて自分の遠征艇に戻っていった……一応は撤退させているから俺達の勝ちになるが……まだ戦いは終わっていない。

「上に繋いでください、現在どうなっていますか?」

千佳とサクラハリケーンを持つてくることには成功した。後はトリオンをチャージしていいばい。

問題はそれまでにこちらがなにをしようとしているのかがバレないのとそれまでの間に時間を稼がないといけない

『雨取隊員からトリオンを抽出している。このまま行けば無事に敵地に乗り込む事が可

能だ』

「そうか……」

『君の弟やその仲間達も順調に本部に向かってやってきている……だが、コレで終わりではない』

「他のところになんて行くつもりは無い。俺は俺の私利私欲で動いているんだ……修達と合流をする」

ボーダーの本部的には他の地域に行ってほしいのだろうが、俺は街の為に戦っているんじゃない。家族の為に戦っているんだ。

ボーダーの本部に足を運ぶのははじめてだがサイドエフェクトで何処になにがあるのかは分かる。俺は修達が居る方向に向かって走ろうとするが倒れてしまう

「大丈夫か三雲くん！」

「まだ、大丈夫です……っ……」

ここまでアドレナリンを全開にして突っ切ってきたけれどもそろそろ俺の体に限界が来始めている。

仮面ライダーの変身アイテムと言う名のトリガーは強力な反面、絶対的なまでの欠点がある

「お、おい血まみれじゃねえか!？」

「これぐらいはかすり傷に過ぎませんよ」

それはトリオン体に換装しないこと。

アーマードランナー

鎧武者の名に相応しくトリオン体に換装するのでなくトリオンで出来た鎧に換装する。生身の肉体の上のだ。

修に千佳のトリオンを用いてアステロイドを撃つて貰った際に破壊された瓦礫に体をぶつけたりして大きな怪我を負っている。迅はこの事をサイドエフェクトで視て気付けていたんだろう。

「医務室に行けよ、脅威はもう去ってんだ。怪我が軽い内に治しとけ」

「諏訪さん悪いですけど、それは聞けない話ですよ……弟が待っているんです」

怪我を放つて置くことが出来ないのは百も承知だ。だが、それでも修達が心配なんだ。

エネドラとヒュースとランバネインを倒して残すところは黒トリガー使い3人は残っている。遊真に1人頼んだとしても残り二人は……俺の考えが正しければ修が変身すれば勝てる可能性があるぐらいだ。

「変身」

『メロンアームズ 天・下・御・免』

俺は傷ついた体に鞭を打ちながらも変身をした。

痛みで意識が飛びそうなのを気力1つで耐え抜いている。この程度の痛みなら千佳の悲しみより軽い……止める事が出来たのに止めなかった俺はクス野郎だ

「待ってろ、修」

俺は修の元に向かって走り出した。

第75話

「申し訳ありません【泥の王】^{ポルボロス}の回収に失敗してしまいました」

貴虎が修の元に向かっている一方その頃だ。

ミラはハイレインにエネドラを始末する事には成功したものの、代わりに黒トリガーである【泥の王】が破壊された事を報告する。

元々エネドラは時が来れば始末する予定であり【泥の王】は回収するつもりだったが予想外の一手をくらってしまった。ミラはハイレインの顔色を少し伺ってしまう。

「あのメロンにやられてしまったか」

「はい……」

「全く厄介なメロンだ」

本当に本当に厄介な事に貴虎が場を、盤面を滅茶苦茶にしている。

ボーダーの隊員達を連れ去ろうと計画したはいがこちらが向こうの戦力を読みに来てみると読んで、武器の統一等をされて情報を与えない。

今回はボーダーの隊員達を連れ去ろうとラービットを配置するもののおつさりと倒

されるどころかヒュースと相討ちに終わったかのように見せて復活するとんでもない荒業をしてきてランバネインを撃退、本当になにからなにまで邪魔しかされていない。

「ミラ、^{ミデン}玄界のトリガー使いの基地に窓は開けられないのか？金の雛鳥は現在、基地にいるのだろうか？」

ランバネインは意見を出す。金の雛鳥を捕らえさえすればどれだけの赤字を出しても全てがチャラになる。

千佳が貴虎が安全に運んでくれたのはトリオン兵を経由して見ている。エネドラに付けた発信機はまだ生きていますのでそこからボーダーの本部に乗り込み千佳の元に向かうのも1つの手である。

「いや、敵の基地に単身で乗り込むのは危険過ぎる」

しかしその案をハイレインは却下する。

エネドラを回収しに行こうとした際に貴虎が出てくる場所を当ててウオーターメロングトリングをぶつ放した。ミラの「窓の檻」もそこまで万能でなく、既にエネドラにつけた発信機はボーダー隊員達に回収されて警戒はされている。乗り込むのは得策ではない。

「ヴィザ翁が完全に浮いている……ヒュースはどうなっている？」

「布で顔を隠された状態で運ばれています」

「そうか……致し方あるまい、出るぞ」

「よろしいのですか!？」

「ここまで来てなに一つ成し遂げられない方が危険だ」

敵国の大将的存在であるハイレインは座っていた椅子から立った。

国宝を含めた黒トリガー複数に最新鋭の強化トリガー、更にはトリガー使い捕獲用のトリオン兵でトリガーの能力を備えたラービット、過剰過ぎる様に見えるほどの戦力を導入してたつた数名しか拉致出来なかつたのは洒落にならない。

「先ずはヴィザ翁を回収しろ……」

早速最後のプランをハイレインは作り上げる。

本来ならばヒュースが生きた状態だったのでヒュースのトリガーで修達との間合いを詰めるのだが、貴虎が真つ先にヒュースと相討ちになって落とした為に完全に浮いた駒になってしまっている。アフトラトル側での最強戦力をここに来て手札に戻す

「ギヤアアア!!」

「落ち着いて言っても無理か」

一方その頃の修達はボーダーの本部目指して走っていく。

しかし道中そこかしこにいるラッドが門を開いてモールモッド、酷い時は色付きのラービットが飛び出してきている。夏目はハイになっているのか大声を出して叫ぶ。

ボーダーに入って間もない訓練生であるC級に騒ぐな慌てるなど言うのが無茶な方である。

「ジンさん、まだなの？」

「もうちよつとだ、頑張ってくれ」

モールモツドを軽々と倒していく遊真は何時まで逃げるに徹していればいいのか尋ねる。

C級隊員達を連れていかなければ、少しでも気を抜いてしまえば拐われてしまう可能性がある。それこそぶつ倒さなければならないのだが、守らないといけないC級隊員をそっちのけで戦うのを迅が止めている。

「そろそろ……来た！」

「よう、メガネボーイ！」

「久しぶりだな！」

「迅さん、三雲先輩、応援に来たよ!!」

迅が声を出すと同時にトリオンキューブが飛んでくる。

ランバネインを倒したA級三馬鹿の米屋、出水、緑川の3人が増援として修達の元へとやってきた。迅は待っていましたと笑みを浮かび上げると遊真を見て頷く。遊真に好きな様にトリオン兵を倒していいとの合図がくだった。

「強印三重」
ブリストトリプル

今まで耐えてきた分の鬱憤を晴らすかの様に力いっぱいモールモッドをぶん殴る。

A級の増援により遊真を護衛から防衛に切り替える事が出来ている。このまま順調に行けばこの場にいるC級隊員達は拐われる事は無い……このまま順調に行くことが出来ればの話だが

「っー」

迅は見てしまう、これから起きる厄介な出来事を。騒動の渦の中心にいる修を思わず見てしまい、頭を回す。

これから起きる出来事にどうすれば対処できるか見える未来から逆算して覆す方法は無いかと思考を張り巡らされていると……空から光る燕が舞い降りる。

「全員それに触れるな!!」

突然現れた光る燕が具体的になんなのか分かっていないが触れるとどうなるのかサイドエフェクトで見えたので危険だと叫ぶ。

声を大きく荒げていても燕が急に何処かに行くわけでもない。迅はスコープピオンを燕に向かつて投げると燕は消え去ったが代わりにスコープピオンがトリオンキューブに変化をした。

「こいつは触れるだけで即死の攻撃だ。攻撃手志望の新人達、触るんじゃないぞ! 射手」
アタッカー シューター

と銃手は撃ち落とせるなら撃ち落として」

「ハイレイン殿の【卵の冠】の能力を一瞬にして見抜くとは……中々の眼力、ではなさそうですね」

「っ!!」

ラッドを經由して門が開かれた。今までに何度も起きた出来事なのでそこで驚くことはしないのだが、問題は門から出てきた人だった。

レイジを一瞬にして倒したアフトラトルの最高戦力、ヴィザがここに来てやってきた。ヴィザの顔を見ると迅のサイドエフェクトは能力を發揮し、これからなにが起きるのか……自分達が全滅してしまう未来を見てしまう。

「遊真、あの爺さんを頼めるか？」

「ちよつと無理っぽい……けど、そうしないとヤバいんでしょ」

全滅を回避する方法は唯一つだけあり、それを遊真に実行してもらおう。

遊真もヴィザを観察し、冷静に考える。この爺さんは強い、自分よりも遥か上の存在だと。まともに挑めば勝つことは不可能だ。

「メロンくんが居てくれたら、なんて都合がいいか」

限りなく可能性が低い未来にここで貴虎の登場がある。今こうして絶賛ピンチなのでそれは無い。

貴虎がいればヴィザ相手に初見殺しに近い必殺技で倒すことが出来たが、ここで都合良く現れるなんて事は無い。

「ブリスト ダブル
強印 二重」

「これは……通常のトリガーではありませんね」

地面を強く殴りつけて土砂を巻き上げる遊真。

遊真の使っているトリガーの出力が明らかに通常のトリガーでない事をヴィザは見抜き、次の手に移ろうとするがその前に自身の持っている杖にグルグルと鎖が巻き付いている事に気付く。土砂を巻き上げたのはこの為だったのかと気付くが既に遅かった。

「バウンド トリプル
弾印 三重」

鎖を掴んだ遊真は跳んでいく。

鎖に捕まっているヴィザは引つ張られてしまい、この場から去ってしまう

「これで最悪の未来は回避することが出来た」

ヴィザがここにいる人間は全員トリオン体でここは敵地だからと無差別に星の杖を暴れさせる未来は存在していた。

如何に未来予知が出来てもそれに反応する事が出来なければ意味はない。純粹な高火力で殴られると未来予知がチートでも回避は不可能……まあ、貴虎はサイドエフェクトありきだが避けることが出来るけども。

「あっちからか！」

遊真達がこの場から去っていくと出水は燕の出どころに気付く。近くのビルの屋上から出ているとハウンドを撃つのだが手応えが全然無い。

燕は相変わらず襲ってきており根本を叩かなければならないがその根本を見ることがすら出来ない。

「ほう、ランバネインを倒した玄界ミデンの兵達か」

「……迅さん、アイツが敵の大將で間違いないですか？」

ビルから飛び降り、周りに蜂や魚やらを泳がせながらハイレインはやってきた。

コイツが敵の親玉かどうかを烏丸は迅に確認を取った。迅はコイツを攻略すればこの大規模侵攻を終えることが出来ると領いて返事をした。

『ガイスト起動 緊急脱出まで残り172秒』

「京介、お前」

「誰かが相手にするしかないでしょう……俺が犠牲にもなりますので迅さんは攻略の手口を見つけてください」

ここに来て烏丸は温存していた玉狛トリガーのガイストを起動した。

ガイストとは一言で言えばパラメーターを操り1つの能力に特化するトリガーで、烏丸は素早さと弧月の切れ味を増した機動力スピードシフト特化にパラメータを切り替え、ハイレインを

攪乱する。蜂や魚にはまだ誰も触れてはいないが恐らくは同じ効果を持つている。蜂や魚達が移動する速度よりも更に早く動き、魚達の隙間を切り裂いた……が弧月が折れてしまった。

「【卵の冠】^{アレクトール}の速度を上回るか」

「つ、マントの下に」

「エスクード！」

マントの下にも蜂達が隠れており、烏丸の強化状態の弧月が届きはしなかった。

自身の黒トリガーよりも早い事を素直に称賛しつつも魚を別の方向に移動させるとそこから門が開いて烏丸の背後に小さな門が開くが、迅が烏丸の背後に壁^{エスクード}を生やして魚が命中するのを防いだ。

「今のを見抜いただと？」

殆ど初見殺しの攻撃を迅は防いだ。

今のならば誰でも仕留めれる自信がハイレインにはあつたのでその事を疑問に思い、迅を見つめる

「なるほど、そういうことか」

この侵攻の際に最初からずつと違和感を感じていた。誰かに誘導されている様な感じだった。

「迅が裏で手引しているのだと勘づいたハイレインは迅、目掛けて蜂達を飛ばす」
「迅さん!!」

「メガネくん……切り札を使うんだ!」

サイドエフェクトで視えてしまう。シールドを貼ろうが壁を出そうがハイレインの卵の冠は自分に命中してしまう事を

「くっそ、捌ききれねえ!」

米屋達にも魚や蜂が飛んでくる。

米屋は槍を振り回していくが槍もまたトリオンで構築されている物で問答無用でトリオンキューブに変化をしていき、最終的には自分の手元に触れてしまいウネウネと捻れていく

「っ、緊急脱出!」

「よねやん先輩!」

「大丈夫だ、緊急脱出したから生身の肉体に戻ってる。それよかあのワクワク水族館野郎だ」

米屋と迅の緊急脱出に動じる緑川。

出水は問題無いとフォローを入れながらもハイレインに向かって変化弾バイパーを飛ばし、極々僅かな隙間を狙ってみるものの当たらない。

「メガネくん、なにかあるんだろ!」

攻撃が当たらない事に若干の苛立ちをしながらも出水は冷静に状況を分析する。

緑川と烏丸もこのままいけば緊急脱出してしまう。そうならばここで戦える人物は修だけになり、迅は修に切り札を使ってくれと言っていた。ならばそれに便乗し、自分もそれに賭ける事に。

「メガネ先輩、今こそコレを使うべきですよ!」

「なにが出るかわからないけど、使ってくれ!」

『デイケイド!』

万が一の時間を想定して託されたロックシード……デイケイドロックシードを夏目は解錠した。

すると夏目の上空にジツパーの様なものが出現しジツパーが開くとピンク色もといマゼンタカラーの仮面ライダー、仮面ライダーデイケイドが現れた。

「トリオン兵を呼び出す道具だったのか!」

「ええつと、とりあえずアイツをボコボコにして!!」

出てきたデイケイドは夏目を見る。

指示を待っているので夏目は指示を出すとライドブツカーからカードを取り出してネオデイケイドライバーにカードを挿入する

『KAMENRIDE EX-AID MUTEKI GAMES』
「姿が、変わった」

『輝け流星の如く黄金の最強ゲーマー ハイパームテキエグゼイド』
「なんすかこの歌は……なんか金ピカつすけども行って来い！」

夏目が指示するとハイパームテキなデイクイドエグゼイドは走り出す。

ハイレインはデイクイドエグゼイドに警戒しつつも蜂を飛ばす……デイクイドエグゼイドは蜂に触れるが……トリオンキューブにはならなかった。

「なに!？」

相手がトリオン兵ならばトリオンで出来ているのならば卵の冠の効果は適用されるはず。

その定説はデイクイドエグゼイドには通じない。現在のデイクイドエグゼイドはあらゆる攻撃に対してムテキの耐性を得ているのだから。

ガシャコンキースラッシュャーを取り出してハイレインの右腕を切り落とした。

「よっしゃあーなんだかよくわからないけどこれでつてええ!？」

デイクイドエグゼイドがチートっぷりを発揮していると急に夏目の体がトリオン体から生身の肉体に戻った。

それと同時にデイクイドエグゼイドの姿が薄れていき、最終的には姿を消していった

「これは、トリオン切れか!？」

デイケイドロックシードは一応はトリガーという事になっている。動力はトリオンとなっている。

エネルギーを使い回し出来るインフィニティのウイザードならばまだしもハイパームテキなエグゼイドになるとそれはもうトリオンは限界を迎えてしまう。

「ああ、錠前が灰色に!」

夏目のトリオンが底をついたのでデイケイドロックシードは灰色に染まる。

錠前を開けたり閉めたりするが一切反応はしない。

「まさか【卵の冠】の攻撃が効かないトリオン兵が存在するとは……その錠前はいただく!」

「ぎゃあああ、つてあれ?」

「効いてねえ……まさか!」

ハイレインは夏目に向けて攻撃をするが一切のダメージを受けていない。出水はその光景を見て1つの結論に辿り着く

「トリオンにしか効かねえのか」

ハイレインの攻撃はトリオンにしか通じない……まあ、トリオン以外が通じるとは限らないのだが。

「このままではトリオン漏出過多になってしまいうな」

「回復も出来るのかよ……」

「出水先輩、すみません！もう限界です！」

ハイレインは落ちているトリオンキューブからトリオンを集束していく。すると切られた腕が段々と生えてきた。

それと同時に烏丸の活動時間に限界が来た。烏丸は最後の悪足掻きとも言うべきか銃撃戦特化の形態に切り替えて弾を撃つのだが、ハイレインの魚の壁を越えることは出来なかった。

「いよいよ、ヤベえな」

なんとか生き残ってはいるものの、勝ち筋の様なものが見えてこない。

増援もやってこないこの状況、本部ではアフトラトルの船に乗り込む計画を練っているがまだ間に合わない。

「足元を疎かにしていいのか」

「っ、しまっ！」

色々と思いを張り巡らせると足元にトカゲがやってきている事に気付かなかった。

膝の辺りまで一気に駆け抜けてくるトカゲは弾けて出水の足をトリオンキューブ化

させて出水のバランスを崩す

「くそ……三雲、悪い！」

目の前にいる友人の弟になんの力も貸せなかった事を出水は悔やみ緊急脱出をした。

「やはり脱出機能は強いな……アフトクラトルでも中々に見ないトリオン操作能力の使い手だったが、実に残念だ」

「やばい、もう……」

A級隊員達はこの場から全員緊急脱出してしまった。

夏目は絶体絶命のピンチに追い詰められてしまうが修は前に出て夏目を庇おうとしている

「メガネ先輩……」

夏目は知っている。修はもうまともに戦うことが出来ないのを。

千佳との緊急接続が原因でアステロイドを撃つことが出来ない。レイガストもまともにも振るう事が出来ない

「迅さんは僕に言っただ、切り札を使えって」

夏目も万が一を想定してロックシードを受け取っていたが、迅は夏目に対しては言っていない。

修の持っている切り札を使えと言っており、修は自分が持っている切り札を……ロス

トドライバーを取り出した。

『オサム。それはボーダーのトリガーではない、なにが出てくるのか分からない』

「分かっている……けど、兄さんが託してくれて迅さんが使えと言ってくれたんだ……この切り札に賭ける」

修はトリオン体から生身の肉体に戻る。すると今までは無反応だったロストドライバーは動き、修の腰にベルトを出現させて巻き付いた。

やっぱりコレもトリガーの一種なんだと改めて再認識し、修はジョーカーメモリを取り出した。

『ジョーカー!』

「変身」

『ジョーカー!』

ロストドライバーにジョーカーメモリを差し込みメモリを傾ける。

すると修の肉体は変質していき黒一色の仮面ライダー……仮面ライダージョーカーに変身をした

「凄い、体から力が湧いてくる」

『力が湧いてくる?』

ちびレプリカは修の発言にやや疑問を持つ。

修は溢れ出る力でハイレインに向かって走り出すのだがハイレインは油断をするこ
とはせず燕を修にぶつける……

「なにも起きないだど!？」

ここで仮面ライダーについて説明をしておかないといけないことがある。

仮面ライダーには肉體変化系と装着系の仮面ライダーの2つに分かれている。装着系はその名の通り、装着する仮面ライダー。現在貴虎が使っている戦極ドライバ―やゲネシスドライバ―で変身する鎧武系のライダーやドライプ系のライダーはトリオン体を構築するのでなくトリオンで出来た鎧に身を纏い、トリオンで出来た武器を持っている。じゃあロスドライバ―で、ガイアメモリで変身する仮面ライダーはなんなのか

……

「これならイケる!」

ガイアメモリで変身するのは……鎧を身に纏うタイプของライダーではない。そういう見た目の生物に変身する肉體変化系の仮面ライダーである。

修は新しくトリオン体に換装したのではなくそういう感じの見た目の生物に文字通り変身した……つまるところ、角つきのハイレイン達に近い存在になっている。

『ジョーカー! マキシマムドライブ!』

「ライダーパンチ」

マキシマムスロットに差し込むと左腕に力が収束する。ハイレイン目掛けて拳を振りかぶるとハイレインの体は貫かれた。

第76話

「トリオン注入開始、残り100秒でトリオンが満タンになります」

ハイレインが現れるほんの数分前の頃。

貴虎のサクラハリケーンにボーダーが貯蓄したトリオンと千佳のトリオンが注ぎ込まれていく。

「バイク型の船って………いっただいという構造してるんだ」

トリオンが注入されている様子を見て寺島雷蔵は呟く。

異世界の門を開く機能を宿しているサクラハリケーンだが明らかに船ではない。別の世界に移動するにしてもあまりにも小さな物だ。

「いったい誰がなんの為にどうやって作ったのか1人のエンジニアとして気になってしまう。」

「まだなのか？」

「後1分程待ってください」

サクラハリケーンに搭乗している忍田本部長。

何時でも発進する事が出来る様にご丁寧ヘルメットまで被っている。この状態で走れないわけではないのだが、門を開く事が出来ないただのバイクである。1秒でも早くこの騒動を終わらせなければならぬ為に先を急ぐがここで足止めをくらっている。「ラッドの用意も出来ました」

エンジニアの1人が門を開く準備が出来たという。

レプリカ子機のちびレプリカも直ぐ側に待機しており後はトリオンを注がれるのを待つだけとなった。

「さて、どうするか」

時計の針はそのまま遊真はヴィザと対峙する。

ヴィザを修達の元から引き剥がす事に成功したが問題はここからである。

「いやはや、困りましたね。このままでは雛鳥達を回収することが出来ないではありませんか」

「……あなた、つまんないウソをつくね」

「嘘ではないですよ……ここには障害物も生身の人間も居ない……星の杖」オルガノン

全力を出して戦うことが出来ると星の杖の機能をフルに使う。

サークルが展開されて無数のブレードがサークル状に乗ってグルリと動くのだがヴィザは直ぐに異変に気付く。星の杖のブレードの上に鉛弾が乗っている事を

「まさか、あの時に」

目くらましの段階で遊真はヴィザの星の杖に三輪のトリガーを経由して学習した鉛弾を撃ち込んだ。

手が早いとヴィザは感心すると新しいサークルを作り出してそのブレードと鉛弾の乗ったブレードを重ねることで鉛を切り落とす

「この程度じゃやっぱ無理か」

鉛弾を使つての妨害行為はいい動きだがヴィザを倒すまでには至らない。遊真はここで考える。どうするべきかを。

色々と手立てはあるのだがヴィザのトリガーは至ってシンプルな強力な黒トリガーで攻略方法が中々に見つからない。なによりもヴィザという使い手自身が脅威であり一手二手フェイクを入れたりしても直ぐに対処されてしまう

『ユーマ、慌てるな。こちらの勝利条件はほぼ満たしている』

「オサムのお兄さんが色々とやってくれてるんだろ……この爺さん、どっからでも出てくる」

今まで積み上げてきたものを行使してもヴィザには届かない。

ヴィザはこのままではトリオンキューブ化したC級達をさらえないと嘘をついている。ヴィザ自体がフェイクで別の目的が、ハイレインが出てくる。ラッドを経由すれば

ヴィザは何処からでも出てくる事が可能だ。足止めでなく撃退を目標としておこななければならぬ。

『落ち着けユーマ。焦っていても損じる……』

「レプリカ、オサム達の方はどうなっている？」

『A級の隊員達が増援にやってきてトリオン兵を一掃……！』

「なにかあったんだな……早いところ倒さないと」

遊真は勝負を仕掛けようとする。そして時計の針は元に戻り、仮面ライダージョーカーに変身した修に視点は切り替わる

「やった、のか？」

兄が使っていた時の様に見様見真似で使い勢いに身を任せ、友人の様に殴り貫いた。

人を殴り飛ばす経験は皆無に等しい修は手応えがあったのかどうか違和感を感じているがそこにはトリオン体が損傷して生身の肉体に戻ったハイレインが立っていた。ハイレインはありえないと言った顔をしている。

攻撃が当たるだけで即死に近い状態の「卵の冠」が全くと言って効果が発揮しなかった。生身の肉体がそういう感じの見た目の生物に変身しているので効かないのは当然である

「メガネ先輩、そいつを取り押さえましょう！」

状況がイマイチ理解できていない中で夏目は叫び、修の意識は現実に戻る。

生身になったハイレインを取り押さえる事で王手を掛けようとするのだがここで修の装備していたロストドライバーに電流が走り火花が散る

「ぐう、ああ!？」

修の肉体に謎の衝撃が走る。仮面ライダージョーカーに変身していた修は元の人間の肉体に変貌してしまう。

壊れかけだったロストドライバーは限界を迎えて遂には壊れてしまい修の変身が解けてしまった。

「……っ……まさかこれほどとは思いませんでした」

相討ちに終わったとハイレインは認識して素直に負けを認めた。

ミデン
玄界の進歩は凄まじいどころか逆にやられてしまう。僅かばかりの成果が出来ているがそれだけで終始翻弄されてばかりだった。

それもこれもメロンを身に纏ったメガネのせいであり、もっと別の作戦があった筈だろうと思いを張り巡らせている花びらの形の門が開きそこから忍田本部長が飛び出してきた。

「忍田本部長、どうしてここに!？」

「作戦が成功した!後1分で敵の船は帰還する」

「なんだと!？」

サクラハリケーンで門を潜り、ハイレイン達が乗ってきた遠征艇に乗り込みちびレプリカを用いて遠征艇にハッキングを仕掛けた。

この大規模な侵攻を終わらせる為の詰みの一手を相手にくらわせる事が出来たと修に報告するとハイレインは声を上げる。それと同時に門が開いてミラが現れる。

「申し訳ありません、遠征艇を襲撃され船を操作されました!」

「帰還を止める事は出来ないのか!？」

「ロックが掛かってこちらの操作を受け付けません。早く帰還を」

「ヒュースは当初の予定通りにいくぞ……覚えておけ、メロンの剣士」

ハイレインは急いでミラの開けた門を潜っていく。

ハイレインが通るとミラの開けた門は閉じてこことは別のところで戦っているヴィザの元に門が開き、ヴィザを回収する

「終わった、んですか?」

敵の船が元いた世界に帰還していった。今まで危機的な状況に追い詰められていただけありイマイチ実感が湧かない。忍田本部長は修の両肩に手を置いて頷く

「守りきったんだ」

今回襲ってきた神々の国であるアフトラトルからボーダーは三門市を守りきった。

複数の黒トリガーや未知の新型トリオン兵を相手にボーダーは戦い抜き、見事に防衛を果たした……多少の犠牲があるかないかで言えばあったのだが。

「三雲くん、後で君のそのトリガーについて色々話を」

「修は無関係だ」

修の持っているトリガーについて話し合いをしようとするのだが、その前に斬月に変身した貴虎がやってきた。

貴虎はサクラハリケーンに触れるとロックビークル状態に形状を変化させ、自身のロックシードのホルダーにセットする。

「兄さん……」

「情けない話だな。4年半じっくりと時間を掛けた結果がこのザマか。遊真達が居なければどうなっていた事やら」

貴虎は忍田本部長をあざ笑う。今回の一件で死者は出ていないが無関係な一般人の怪我人を出してしまっている。

街に防衛線を張っているのでこのレベルの大規模な侵攻を一般市民に被害が及ばない様にしろというのが無茶な話。だからこそ貴虎はあざ笑い、変身を解除する。

「……先ずは一言お礼を言わせて」

「そんなものはいらない……私は何処ぞの馬鹿が弟を撒き餌にしようとしていたからそ

れをどうにかしに來ただけだ」

頭を下げようとする忍田本部長だが貴虎は素直に礼は受け取らない。

あくまで今回戦ったのは修をあえて危険な目に合わせる事で最善の未来を向かわせようとしたバカこと迅をどうしようとしただけである。そうかと忍田本部長は頭を下げるのをやめた。

「君はどうしてトリガーを持っているんだ？」

「4年前のあの日、今のボーダーの本部がある場所に色々と用事があつて出掛けていた。そこで拾った……あんた達のトリガーとは全く異なる物で所有権は既に私達にある。サクラハリケーンもこのベルトも修の持つてるメモリも、なにかも私達のものだ」

だからコレは返してもらおうと修の壊れたロストドライバーとジョーカーメモリと夏目に託したディケイドロックシードを回収する。

悪意を持つて接してはいないが貴虎はボーダーに対して色々と嫌悪している。故にあまり好意的に接する事はしない。

「待ってくれ、その怪我で歩くのは危険だ。ここからボーダー本部は近い、せめてそこで応急処置を」

「安心してください、今の私には死相は一切見えない……私のサイドエフェクトがそう言っている……ああ、くそ、ホントに痛いな」

貴虎は涙目になりながらも足を引き摺って病院へと向かっていく。

ボーダーの施しは受けるつもりは無いという彼なりの反抗の1つなのだろう。

「兄さん……」

そんな兄の背中を修は追いかけなかった。兄弟ではあるが修と貴虎は既に道を違えているから、修には修の道が、貴虎には貴虎の道がある。

兄のボーダー嫌いをどうにかしたいという思いもあるにはあるがどうする事も出来ない自分に情けなさを感じるが忍田本部長は修の肩に手を置いた。

「君のお兄さんは本当によくやってくれた……ここからは私達ボーダーの番だ。君はもう戦えないが残っているC級達を本部に連れて行ってくれないか？」

「はい、分かりました」

ここからは防衛戦の後処理がはじまっていく。

「こちら忍田、敵の近界民ネイバーの撤退を確認。各地のトリオン兵を討伐しつつC級隊員の数について報告を頼む」

早速忍田本部長は各自どうなっているのかの確認を取る。

敵が帰還した事を伝えると一部の隊員達はホッとするがまだ完全に大規模な侵攻が終わったわけではない。

「こちら太刀川、南部。トリオン兵はあらかた片付けましたけど、C級の数合わない」

「こちら東、基地東部。トリオン兵残党は撃退したもののC級隊員の数が合わない。到着までに何名か扱われた」

各々から報告を受ける。やはりというべきか被害を0に抑える事が出来なかった。

今はその事について悲しんでいる場合ではない。残っているトリオン兵を1体残らず撃退する様に忍田本部長は指示をする。

「さあ、本部へ帰還しよう」

忍田本部長は修達を引き連れ、ボーダー本部へと帰還していく。

大規模侵攻の防衛に成功したのかイマイチ実感が湧いてこないが、防衛には成功したのである。

「……カッコつけすぎたか」

修達とは真逆の反対方向に歩いている貴虎は激痛に苦しまされる。

放出していたアドレナリンは切れて何時意識を失ってもおかしくはないギリギリの崖つぶちに立たされている。意識を失わないのは最早体力でなくボーダーに力を借らない意地の様なもので気力1つで動いているに近い

「オサムのお兄さん」

「遊真か……無事だった様でなによりだ」

本来であればヴィザに一度やられてしまう遊真だったが、貴虎のおかげかやられてし

まう事はなかった。

文字通り時間を稼ぐ事に成功しただけである。格上の相手に金星をいただく事は出来なかったものの足止めという立派な責務を遊真は果たした。その事について貴虎はよくやったと頭に手を置いた。遊真は少しだけ嬉しい気分になった。

「オサムのお兄さん、大丈夫なの？ そんな怪我していて」

「肋が逝っているが後遺症の残るタイプの怪我ではないさ。こういうのは名誉ある負傷だと思えばいい……まあ、予想外の怪我だが」

アイムドライダー
鎧 武者のシステム上、

生身の肉体を酷使してしまう。

ある程度の怪我は覚悟していたのだが、ここまでの大怪我になることは予想外としか言えない。

「名誉か……オサムのお兄さんには似合わない言葉だな」

「まあ、名誉で人の命は救う事は出来ないから……ノブレス・オブリージュなんて私にとつてくそくらえだ」

力のある者が戦わないといけけない犠牲にならないといけけない、そんなのはただの自己満足のエゴか弱者の理論だ。

「そんな事を言う割にはオサムのお兄さん、色々とグチグチボーダーに対して文句言ってるな」

「当たり前だろう。アレは自分達でやると決意した組織なんだ。だったら1から10までちゃんとしておかないといけないだろう」

「なるほど、そういう風にも考えられるか」

選んだのか選ばなかったのか、そこに大きな違いがある。

三雲貴虎という人物は道を選ばなかった人間だが選んだのならそれはそれで固い人である。

「じゃ、おれはまだ残っているトリオン兵をぶっ倒してくる」

「ああ、頼んだ。ここからはボーダーの領分で私には関係無い事だ」

こうして貴虎は去っていく。痛みで意識を失いそうになるが気力一つで持ち堪えてみせる。

「迅、これはお前が視えていた未来の中で何番目の未来だ？」

後は敗残兵を処理していくだけとなり城戸司令は迅に尋ねる。

視えていた未来の中でコレが何番目の未来なのかを

「そうですね……3番目ぐらいじゃないですかね」

「随分と曖昧だな」

「すみません。今まで見えていた未来を急に換えられてしまったんでオレ自身も驚いてるんですよ」

酷ければA級B級隊員が攫われるどころか一般市民に死者を出してしまう未来も存在したが、それはもう無くなった。

各地にボーダー隊員達を派遣させたおかげで被害は極力抑え込まれている……とはいえないでもない事もまた事実。もっと早くに貴虎に出会っていればもっと良い未来に辿り着けたかもしれないが貴虎自身が迅を嫌っている為に会うことは殆ど難しい。

「城戸さん、メガネくんをあんまり責めないでね……メロンくんが居たからここまで抑え込む事が出来たんだから」

修は貴虎がトリガーを持つている事をずっと知っていた。ボーダーにボーダー製でないトリガーを持つている事を報告しなければならぬ義務はないのだが、ボーダーという組織の事を考えれば言わなければならない事だっただろう。しかし修はその事を言わなかった。

言っていたらまた別の未来が存在していたのだが、そんなタラレバの話をしていたらキリがない。未来を視る力を持つている迅はその辺りは割り切っている。最悪の未来を回避する事が出来て良かったねで終わる。

「敵も大分減ってきたから、そろそろ救護の人とか出しちゃってよ」

貴虎の事は何れは話し合うが今はその時ではない。今はこの大規模な侵攻を納める為に動かなければならない。

トリオン体がハイレインにやられた為に現場に出て指揮を取る事が出来ない迅速だが何処に誰を配備するかは指示を送ることが出来る。迅は未来視のサイドエフェクトを思う存分に扱い最適の配置をする。

対近界民大規模侵攻三門市防衛戦 終結

民間人 死者0 重傷17名 軽傷43名

ボーダー 死者0 重傷2名 行方不明17名(全てC級隊員)

近界民 死者1名(近界民の手による) 捕虜1名

第77話

あの後三門市民病院に向かい、早速容態を見てもらった。

肋が折れていて更には足の方にヒビが入っていたりと色々危ない状態だった。幸いにも折れた骨が臓器に突き刺さっていた手術してどうかしないといけないレベルの怪我ではない……打撲とかが割と酷かったが。

ボーダーのトリガーには生身の人間にぶつかっても問題無い様に作られているから生身の肉体の上に撃つてこいと言った。修達にその事を伝えれば……いや、ダメだな。そんな事したら逆に戦極ドライバーやゲネシスドライバーを使わないでくれと言われてしまう。

「全く、無事に帰って来ないのは薄々勘づいていたけど血まみれになるなんて……相手を血祭りに上げた返り血にしておきなさいよ」

怪我の容態から数日間の入院が決まった。病院に向かうと母さんが先回りしており血塗れの私に一瞬だけ驚き、ビンタをお見舞いされた。

明らかに怪我人にする行いじゃないのだがそこは母さんだからとしか言いようがない。相手を血塗れにした返り血に染まってこいとか本当にヴァイオレンスな母である

……でもだからこそだろう。ホツとする事が出来るのは。

「おいーっす！三雲、怪我したらしいけど大丈夫か！」

そんな何気ない日常はあつという間に消え去ってしまふ。

何処からかというか十中八九修を経由して私が入院している事を聞いた米屋と出水と緑川、A級三馬鹿がやってきた。一応は私の心配をしてここに来てくれている……が、正直な話、顔をあまり合わせたくはない。あんな出来事があつたからな。

「あ、どうも三雲さんのお姉さん。俺は緑川と言います」

「あら上手ね……修と貴虎の母の三雲香澄よ」

「え、お母さん!？」

緑川は母さんに挨拶をすると恒例の行事が行われる。

緑川は私と母さんを何度も何度も見比べると出水に耳元で囁く

「DNAって濃いんだね」

容姿が手塚国光の為に通常よりも老けてみえる私に対して見た目が若々しい40過ぎのおばさんの母。

遺伝子が程よい感じで引き継がれており緑川はDNAの強さを感じる。DNAがなんなのか具体的には全く分かっていないけれども。

「うちの馬鹿息子が何時もに加えて今回世話になったわね……」

「……今回、ね」

お見舞いに来てくれた出水達に母さんは礼を言つて頭を下げる。

今回という単語に出水は引つかかる。母さんは分かつていてあえて言つたのだろう……なにも知らない系の母親にだけはなるつもりはない。それが母さんの意思だ。

「その容態じゃ焼肉は暫くは無理っぽいな」

「あの時言つただろう。私は焼肉に付き合うつもりはない、お前達だけで行つて楽しんでい」

入院は長引いているわけではないが打ち上げの焼肉に参加出来ない事を出水は残念がる。

私はあの時点で焼肉を食べる事が出来ないぐらいにボロボロになつていた。焼肉は楽しい時間だが私は行くつもりは無い。行けたとしても行かない。私はボーダーの間になつた覚えは一切無いんだ。

「……三輪はどうしている？」

出水達三馬鹿トリオがやってきてくれたのでふと気になつた。

三輪はどうしているのだろうか。今まで色々と隠していた事が今回になつて色々知られた。三輪はその事に対してどう思つているのだろうか。

「秀次の奴は来ねえ……お前が向こうからやってくるのを待つてるんだ。今回の件で

ショックを受けてたけどある程度は覚悟してた……オレが一番驚いてる。お前がトリガーを隠し持ってた事に」

「そうか……三輪には状況が落ち次第顔を出すことを伝えておいてくれ」

「あいよ……じゃあ、またな」

「ああ、また」

出水達は私のお見舞いをしたら帰っていった。

お見舞いの品はいいとこの羊羹だったが生憎な事に臓器にダメージを受けているのでそんなに食べる事は出来ない。母さんに代わりに食べてもらおう。食べ物系のお見舞いの品は当たり外れが激しい。けれど貰えるだけ嬉しい気分だ。

三輪は待つてくれているので何れは会いに行かないといけない……ポーターに行くのは本音を言えば嫌だが

「後、何人か来るな」

出水達が完全に去っていったが私のサイドエフェクトが言っている。ただ一番大事な人が来るのは最後……的中率は87%と言ったところか。

「三雲くん、怪我したって聞いたけど」

私の占いは的中した。

出水達が完全に去った後に熊谷が花束を持ってやってきた……

「すまない、花を入れる花瓶がもう」

「え、あ、ごめんなさい」

花を持ってきてくれたのは嬉しいことだが花を入れる花瓶は無い

正確に言えば花を入れる花瓶はあるにはあるのだが既に別の花が添えられており、置くところが何処にもない。熊谷は失敗したと焦るがそこは母さんがフオローをしてくれる。

「この花、家に飾っておくわ」

「あ、ありがとうございます……三雲くんのお母さん？」

「ええ、そうよ……間違われなかった事は久々ね」

「前に母さんだつて伝えたからな」

熊谷は若干だが疑心を抱いているが母さんは母さんだと頷く。

チラリと熊谷は花瓶に添えられている花に目をやる……この花の贈り人は……うん、まあ、言つたらめんどくさい事になるので言わないでおこう。それよりもなにか話題を……そうだな……

「日浦はどうなっている？」

「……ダメみたい」

一応は色々と言つたので日浦がどうなっているのか気になる。

サイドエフェクトを経由してボーダーを辞めさせられる未来を言い当てたが……熊谷は目線を合わせようとしていない。成果が乏しくない、それどころかダメだった可能性が高い。

「まあ、拉致被害者が出てしまったから当然と言えば当然か」

日浦家は今頃三門市から出ていく事が決まっている。今回C級隊員が攫われたのなら次は自分の娘が攫われるかもしれない。

ボーダーが上手いことそういう風を感じさせない見せない様になっているがやっていることは実際のところ戦争で、幾ら娘に才能があるとはいえ戦争に行かせるのは親として断固反対だろう。

「どうにかして茜を辞めさせない方法は無いのかしら？」

「ボーダー隊員でもなんでもない私によく相談出来るな」

「三雲くんをそれだけ信頼しているの……なにか出来る事は」

「二人暮らし出来るプランを練ってこい。学業の成績を維持しつつ高校卒業までにA級隊員になる、交渉のカードは幾らでもある……一度、家出みたいな事をしてボーダーの寮的などころに1日だけコッソリと泊まってみて強い意志を見せたりしてみろ」

日浦をどうにかしてボーダーに残すプランは幾つかある、成功するかどうかはまた別の話である。

とにかくやれることはやっておいた方がいい。それっぽいプランを一応は練ってみせる。熊谷は真剣な顔で聴いてくれており、このままいけばそのプランを実行するだろう。

「三雲くんは、ボーダーの人間、じゃないわよね？」

「私はトリガーを持っていて一般入だ」

「それ絶対に一般人じゃないわよ……とにかく茜と色々と話し合ってみるわ」

「やれることは色々とある、出来る限りの事をやるんだ。そうすれば自分の明日ぐらい変える事ができる」

なにもしない奴に最高の明日はやってこない。

私の言葉が力になったのか熊谷は立ち上がり病室を後にする……騒がしい連中だ。

「よお、メロンくん」

「帰れ」

「そう邪険にしないでくれよ」

「私はお前が生理的に無理なんだ」

熊谷が去った後にやってきたのは実力派エリートの名乗る無職だった。

コイツは相手にするだけ色々は無駄な存在なので邪険して何処かに行けと睨み返すのだが伊達に実力派エリートを名乗っていないので私が放つ威圧感には飲み込まれない

い

「貴方、なにをしに来たの？」

「メロンくんの今後について話し合いに来ました……久しぶりと言えいいのかも」

「久しぶりでもなんでもない、私はお前に会いたくはなかった」

「オレは会いたかったよ」

お前がどう思っているようが勝手だが私はお前を嫌っている。生理的にも受け付けられない人種だ。

迅は私の今後について色々と話し合いに来たと言ってはいる……選択肢を誤ったな。母さんは表情を少しだけ変えて迅を部屋から追い出した。

「貴方じゃ話にならないわ。もっと力と権力を持った奴が出てきなさい」

「待つてください。メロンくんはこのままだと」

「構わないわよ、それで」

迅には見えているのだろう、このままいけば厄介な事になるのを。ただ母さんも私もそれで構わないとしている。

ボーダーとバチバチやり合う関係性でも悪くはない……ロストドライバーが壊れて変身している私が必要な感じで今、全面戦争したらどうなるか……何故かは知らないけど母さん、バグールドライバーIIを装備してるんだよな。

「貴方が出しやばらないで。この子の未来はこの子が掴み取るのだから……ハッキリと邪魔よ」

母さんはバツサリと迅を切り捨てる。相変わらずこういうところは非情な人だ……まあ、迅が居て裏でコソコソするから口裏を合わせてくれと言う頼みは聞き入れないだろう。迅が未来視で色々と視えている様に私もサイドエフェクトで色々と視えている。不幸が自分に舞い降りてくる？笑わせるな、それぐらい自力でどうにかしてみせる。「それでコレ、どうするつもりなの？」

そう息巻いていると母さんは壊れたロストドライバーを取り出す。

お腹にロストドライバーを翳してみるもののベルトは巻かれる事は無い。電磁波から視える様にロストドライバーは完全に壊れてしまっている。戦極ドライバーもそうだが私にはエンジニアとしての技量は無い。サイドエフェクトでどの辺りが壊れているのか見抜く事は出来ても直し方までは分からない。戦極ドライバーやゲネシストライバーだけではボーダーと全面戦争を繰り広げるには難しい。

「ボーダーの人に直してもらおう……は無理だな」

そもそもでベルトをボーダーに差し出す事はしない。

ベルト一式の所有権は既に私にあるのだから私の物でボーダーに差し出す理由がそもそも無い。ボーダーのエンジニアが確実にロストドライバーを修理してくれると

いう保証は無いので一瞬だけ頭に過ぎるが直ぐに首を横に降る

「失礼します」

「入院したって聞いたんすけどホントだったんですね」

ロストドライバーをどうしようか悩んでいるとまたまたお見舞いにやってきてくれた人が来た。

千佳ちゃんとそのお友達の夏目で、お見舞いの品を受け取る。お見舞いの品はジュースなのでコレならば私でも食べる事が出来ると小さくガッツポーズを取った。

「君達が無事でなによりだよ。相手は化け物染みた強さを持っているから……ホントに良かった」

今更ながらホントに良かった事である。

原作通りならば千佳は危うく攫われかけたりするし、夏目も捕らえられかける。そして修は死にかける……それが私の肋骨と体の一部の怪我で納まったのだから今更ながら誇り高い。

「メロンさん、あの時はホントにありがとうございました。メロンさんがチカコに渡した錠前が無かったら今頃はどうなっていたのか」

「聞いた話だと途中でトリオン切れを起こして生身の肉体に戻ってしまったのだろ？すまないな、変な物を渡してしまって……それでどんな感じだったんだ？この錠前、ロツ

クシードからはなにが出てきた？」

「錠前に掘られてるピンク色のバーコードみたいなのが出てきて黄金のキラキラ光る奴に変身したっす」

「キラキラと光る黄金？」

「デイケイドロックシードを使えば恐らくはインベスの代わりにデイケイドが出てくると踏んだ。」

「キラキラと光る黄金……ということは仮面ライダーブレイドのキングフォームにでも変身したのか？」

「こう変な歌も流れて、歌の通りマジで無敵でしたよ！」

「歌に無敵だと？……一応の為に聞いておくがこの錠前から出てきた奴はどんなベルトを腰に巻いていた？」

「えっと……ピンク色でした！」

「ピンク色、か」

「このデイケイドロックシードを使って出てきたデイケイドは通常のデイケイドでなくネオデイケイドライバー装備のデイケイドだったのか。」

「私も知らない様々な隠し機能が備わっているらしいが、デイケイドロックシードで呼び出すデイケイドは通常の仮面ライダーデイケイドでなくジオウに出てくるネオデイ

ケイドライバーのデイケイドで平成一期だけでなく平成二期の仮面ライダーにも変身する事が……待てよ。

「千佳ちゃん、ちよつと試してみたい事があるんだけど力を貸してくれるか?」

「いったいなにをするんですか?」

「コレを使ってほしいんだ」

もしかしたらコレでロストドライバーを直せるかもしれない。

デイケイドロックシードを千佳ちゃんに渡して解錠すると空中にジツパーの様な物が出現し口を開くとそこからネオデイケイドドライバーを装備した仮面ライダーデイケイドが出てきた。

「えつと……どうすれば」

「コレを修理出来るかどうか聞いてくれ」

ロックシードから出てきたデイケイドにロストドライバーを見せる。するとデイケイドはベルトを開いてライドブッカーからカードを取り出してネオデイケイドドライバーにカードを装填。

『KAMEN RIDER DRIVE TYPE TECHNIC』

「あ、また別の姿に変身した!?!」

「デイケイドはなんでもありだからな……どうやら上手く行きそうだ」

仮面ライダーディケイドドライブもとい仮面ライダードライブ タイプテクニク クールな心を持つて変身する事が可能だディケイドにそんな制約は無い（多分） 業者を模した黄緑色のボディで特出すべき能力は機械に圧倒的なまでに強いことだ。はじめに目にした機械でも瞬時に構造が分かる。ロストドライバーも機械の一種であるならば解析する事が出来る筈だ。

ロストドライバーを託すと瞬時に解析しだして触手の様なものが出現してロストドライバーの壊れた所に触れていく。電磁波を経由して分かる。壊れていったロストドライバーが段々と直っていつている。

「ありがとう、君が教えてくれなかったらこの答えに辿り着く事が出来なかったよ」
「いやあ、それほどでも」

ロストドライバーの修理は放っておけば終わる。

それもこれも夏目と千佳ちゃんが一緒になって来てくれたおかげ……迅が裏で手引きしていない事を祈りたい。あの野郎に借りを作るのは本当に嫌だ………

「どうやらそう簡単には終わらない様だな」

「失礼する」

タイプテクニクがロストドライバーを修理している中で1人の男性が、風間蒼也が病室に入ってきた。

真剣な顔をしておりその手にはパソコンがある。

「……お前が三雲の兄か」

「ええ……はじめまして、それともお久しぶりのどちらでしょうね」

「……お久しぶりの方だ」

私の事を強く睨んでくる風間さん。母さんより圧を感じないので全くと言って怖くはない。

お久しぶりと言ってきているということは私が仮面ライダースカルである事を知っているのか。

「城戸司令がお前と話し合いがしたいそうで、病院からの外出許可が降りなかったのでパソコンを使った対談をしたい」

「……それはどういう目線でどういう立ち位置で言っている？」

今こんな状態なので病院から出れないのでパソコンを経由した対談をしたいのは分かった。だが問題はこういう立ち位置、どういう目線かだ。

「私を近界民か敵か、それとも偉そうにトリガーはボードアの物だと言って取り上げる上から目線なのか。私に対してどういうつもりで接して、対談するつもりだ？ 言っておくがこのトリガーに関して所有権はこちらにある物でボードアが管理しなければならぬ等と言ったくだらん理屈を並べに来たのならば対談に応じるつもりはない。さっ

さと帰れ」

ボーダーは私をどう捉えているのか、そこが問題だ。

私をボーダー以外でトリガーを持つている人間と認識してそのトリガーを奪ってこれと言いつもりなのか……原作から考えてボーダーは時と場合によつては強盗染みた真似をするだろう。もしガイアメモリと戦極ドライバーを奪いに来るのなら、寄越せというのならそれなりの対応をさせてもらおう。

「何故トリガーを持つているかも知るが5月の一件に関して話し合いがしたい」

風間さんはチラリと千佳ちゃんと夏目を見る。

この場に居てはならない人間なので何処かに行つてほしい

「すまないが席を外してくれないか？今から大事な話し合いをする」

風間さんはハッキリと千佳ちゃん達に言う。

威圧感が僅かだが伝わってきているのか二人はあつさりと言くと病室を出ていく

「貴女もこの場からお引き取りください」

「嫌よ」

母さんにも病室から出ていけと言うのだが母さんは出ていかない。

「この子のトリガーとこの子が5月にやった馬鹿な事についての話し合いでしょ？だつたら尚更な事、私が立ち合わないといけないわ」

「だが」

「それでも無理だと言うのなら最初からこの話は無かった事にするわよ。ボーダー以外にトリガーを持っている人間がいて関与する事が出来ない、それが一番ボーダーにとつて厄介な状況の筈よ……それとも実力を行使するかしら？　そういうやり方が好みなら私が相手になるわよ」

『仮面ライダークロニクル』

母さんは仮面ライダークロニクルガシャットを取り出して起動する……なんで使えるんだ。

いや、それよりも風間さんが固まっている。ここまで言い返されるのははじめてなんだろう。風間さんから念話の様な物の電波が飛び出しているの上層部に話をつけているのだろうか。

「……分かった。貴女を含めた上で話し合いに応じよう」

「そうですか……先に言っておきますけど、トリガーを超越せとかそういう話は一切応じるつもりはありません」

あくまでもコレは私の物だと主張する一線を敷いておく。

相手には交渉のプロだなんだと居るからなにが飛び出てくるかは分からない。場合によってはそもそもで交渉に応じないと言う手もある。

「その裏で隠れてる奴等も出てこい」

「見えているのか？」

「生憎、視力はいい方なんですよ」

病室の入口の前にヒツソリと待機している歌川と菊地原。

私が座っているベッドからは完全に死角になっているところに立っているが電磁波で丸見えだ。

「そういえば修と遊真はどうなっている？まさかここまでやったが騒動を起こしたからクビというわけではないだろうな」

「彼等については見れば分かる」

『はじめまして、三雲貴虎くん。私がボーダー総司令の城戸正宗だ』

これは……なるほど、厄介な事になっているな。

第78話

「何故君達がここに呼び出されたのか、理解しているか？」

貴虎にお見舞いの品を持って色々なボーダー隊員達がやってきている一方その頃の話。

修と遊真はボーダー本部に呼び出されて唐沢、根付、林藤、忍田、鬼怒田、城戸司令とボーダーの重役の面々の前に立たされている。

「兄の事ですか」

「ですかじゃない！それしかないだろう！あの時、スカルについてなにか知らないかと尋ねた時にお前、知ってて黙っていたな！」

「ちよつと待つてよ。あん時、スカルとか言うのを知っているかって聞いたのはおれでしょう。オサムには聞いてないし、教えないといけない義務があつたわけでもないでしょう」

「知っているのならば知っているとというのが人としての常識だろう!!」

あの時に尋ねたのは遊真であつて修に対しては言っていない。修が知っているわけ

がないだろうと勝手に断定していたのもあるが、知っているならばそれはそれで教えるのが常識であると鬼怒田室長はキレ気味に言う。

「で、おれ達とオサムのお兄さんをどうするつもりなの？」

「そう結論を話すのはまだだ……色々と知りたいことはある。三雲くん、どうして君のお兄さんがトリガーを持っていったんだ？」

ここに呼び出したのならそれ相応の処罰があるのだろうと結論を求めろが唐沢はまだ教えない。

既に処罰は決まっているのだからその前に修から色々と聞き出すつもりだ。全員の視線が修に向くと修は冷や汗を流した。何れはこうなる運命だったのを理解しているので呼吸を整える

「本人曰く拾ったそうです」

「拾ったとは随分とまた胡散臭い」

「僕は兄からそう聞いています……最初の大規模侵攻が起きたあの日、兄は用事で出掛けていて大規模侵攻に巻き込まれました。出先で拾ったトリガーを使ってなんとか家に帰る事が出来たんです」

「拾ったトリガーなのに使い方を熟知しているとは随分とまたおかしな話ですね」

「兄にはサイドエフェクトがあるのでその力のおかげで使い方が分かったんだと思いま

す」

実際のところは転生特典だがそこは言わないのは大人の約束である。

修はあくまでも自分の知っている事から推察して語る。

「サイドエフェクト……君のお兄さんはどんなサイドエフェクトを？」

「視力を強化するサイドエフェクトです」

「視力を強化したらトリガーの使い方が分かるなんておかしじやろう！」

「兄のサイドエフェクトは遠くの物が見えるだけじゃなく電磁波とか赤外線とかも見えらしくて、それを応用して色々と出来るんです。元々器用なのもあって、はじめて使う道具でもどうすれば使えるかとかも分かるんです」

どんなサイドエフェクトだと鬼怒田はキレ気味になるのだが直ぐに興奮を抑える。

貴虎のサイドエフェクトに対して一同は半信半疑になっている。証明するには本人がその力を発揮するところを見せつけるしかない。

「君のお兄さんはトリガーをボーダーに提出しようとはしなかったのか？」

「兄はボーダーが嫌いで、そもそもで拾ったトリガーはボーダーの物ではないと主張していました……ボーダーのトリガーや空閑のトリガーとは全く異なる物で、ボーダーの物じゃないですよね」

「確かに、そうだが」

忍田本部長は困る。

修の言うとおり貴虎の拾ったトリガーはボーダー製のトリガーではない。当時襲撃してきた国の物かもしれないし下手すれば全く違うところで作られたかもしれない。ボーダー嫌いの人間ならボーダーの物で無いのならば届ける義務は無い。ボーダーとは無関係なのだから。

ああ言えばこう言う、あの手この手で修は回避していく。責められて当然な事をして
いる自覚はあるが、そこで反省してしまえば今までの事を全て否定してしまうので逆に
堂々としている。

「オサムのお兄さん、なんかやらかしたんでしょ。その事については問い詰めないの？」
「それに関しては君の力を借りたい」

「おれの力？」

「今から三雲貴虎と対談をする」

「待つてください！兄は怪我をして病院から」

「今の時代、直接でなくとも顔を合わせる方法は幾らでもある」

そういうとパソコンを取り出す城戸司令。電源を起動させてカメラの様な物を設置
しており、テレビ電話による対談をすると教える。

それならば病院から出ることが出来ない兄と対談する事が出来ると少しだけホッと

するがそこで遊真が必要な理由がなんなのか気付く。貴虎から真実を聞き出す為に遊真の持つ嘘を見抜くサイドエフェクトの力を借りる為だろう。

「はじめまして、三雲貴虎くん。私がボーダー総司令の城戸正宗だ」

この後がどうなるのか予測出来ない修の内心はビクビクである。

パソコンの向こう側には貴虎が映し出されており、城戸司令は改めて自己紹介をする。

『改めて、私をはじめましてと言っておきます。三雲修の兄の三雲貴虎です。本日はお忙しい中で時間を作ってありがとうございます……それで私にはどういった御用でしょうか?』

貴虎も自己紹介で返すと早速本題に入る。

修はチラリと遊真を見つめる。嘘発見器がある中で貴虎はどうするつもりなのか、本当に冷や汗をかくしかない。

「君には幾つか尋ねたい事がある。出来れば君の母を退室させてもらいたいが」

『諦めてください。うちの母は大凡の事情を把握した上で見守る系の母になりたいんですよ。なんでしたら遊真が向こうの世界からやってきた人間なのも知ってますよ』

「……そうか」

そんな話は聞いていないと一同は思ったのだが、知っているのならばそれはそれで仕

方ない事である。

元々近界民Ⅱトリオン兵でなく人間だと気付いていたぐらいには地頭が賢い相手の親ならば気付かれても当然……正確に言えば、修が遊真を家に連れ帰って色々問ひ質した過程でバレたのだが。

「早速だが君に幾つか質問をしたい」

『私がトリガーをどうして持っているかとかですか？ならば1から説明しましょう、4年半前の大規模な侵攻の際に拾いました』

城戸司令は遊真に少しだけ視線を見せるが遊真は反応しない。嘘はついていないので話を進めようとするが貴虎が話を進める。

『修は拾ったトリガーをボーダーに届け出した方がいいのではないかと言いましたが、私は断りました。そもそもコレはボーダーの物ではないのとボーダーという組織を信用していないから、拾った私に所有権があると思ひましてね……まあ、そこで一悶着ありました』

「一悶着？」

『落とし物を拾ったのなら警察に届けるのが当然の事で、母さんは拾ったトリガーを警察に落とし物として届け出しました』

「ぼ、ボーダーでなく警察に届け出したのかね?!」

下手したらとんでもない事になっていたと根付は慌てる。

しかし結果としてそんな事にはならなかった。半年間待っていてもトリガーを引き取る人は現れる事はなく、拾ったトリガーの所有権は貴虎……は現時点でも未成年なので後々厄介になると困るといふ事で既に大人である母の香澄に移った。

「どうしてボーダーに届け出そうとしなかった？」

『馬鹿言っつてんじゃないわよ。近代兵器が一切通じないよく分からない化け物みたいなのを容易く倒す怪しい一団が現れてはいいそうですかと納得する事が出来ると思つてるの？』

よくわからない団体のよくわからない兵器を手にしたのならばその組織に対して疑問を抱くのは極々自然な事である。

ボーダー嫌いと事前に伝わっているのでそう言われればそうなのだがと一同は納得しかける。

『大体、コレは貴方達が作った物じゃないでしょう。ボーダーのロゴとケースに描かれてるロゴが全く一致しないわ』

母こと香澄はアタッシュケースを取り出した。

ボーダーのロゴとはまた違ったロゴがアタッシュケースには描かれており、明らかにボーダー製のトリガーではない。ここで問題になるのはならばそれを作った人達は何

処にいるのか。ロゴがあるという事は何らかの組織が居るかもしれない

『このロゴの企業や団体が存在してないか調べたりしたけど、全く出てこなかったわ』
そんな事は分かっているのか香澄は先に説明しておく。

メディア方面に強い根付と外務営業担当の唐沢もそんなロゴは見たことはない。そうなると考えられるのは襲撃してきた国の可能性が大いに高くなっていく。実際のところは転生特典なんだけども。

『一応はなんで私がトリガーを持つているか分かりましたよね？次は……スカル的一件ですよ。あの一件に関してはそうですね。私の持つているトリガーを売ってくれと頼まれたんです。適合するトリガーがあるのならば売る事になりましたけど適合するトリガーが一つも』

「ちよ、ちよつと待て！適合するという事はそれは通常のトリガーでなく黒^{ブラック}トリガーではないのか？」

『さあ、その辺りは私は分かりませんよ。私の持つているトリガーの一つは適合すれば物凄い力を発揮する物です……スカルはその能力の一部で骸骨人間に変身するトリガーです』

T2ガイアメモリがなんなのかと聞かれれば答えづらい。

トリガーの一種になっている事は分かっているのだがそれが黒トリガーなのかどう

かは話がまた別である。その辺りについては貴虎は理解していない。あくまでもそういうものの程度の認識である。

『一応は色々と言つて止めようとはした、向こうの世界もこちらの世界の様に色々な国があるかもしれないとかボーダーに頼るとか。だがあの人はそれでも首を縦に振ることとはしなかつた……私に厄介事を押し付けて向こうの世界に旅立つた。遊真と出会つてからよく分かる、あの人は本当に阿呆で愚かな事をした……向こうの世界は、国は幾つも存在していて千佳ちゃんをどうにかする方法は向こうには無いんだと』

最初からボーダーに頭を下げていればもつと未来は変わったかもしれない。

『スカルの一件に関しては後悔はあれども反省はしていない。そもそもでボーダーが千佳ちゃんを見つげ出す努力を怠つたのが悪い』

「貴様つ、あろうことかワシ達に責任を転嫁するつもりか!？」

『貴方達が敵とみなしている近界民ネイバーの目的は優秀なトリオン能力を持った人間だ。それを知つていてそれを基準にボーダーは隊員を選別している。外部スカウトもしているということからトリオン能力を測定する装置は持ち運びが出来るレベルの物だろう。ならば学校で行う身体測定のついでにトリオン能力も測定するべきだ……千佳ちゃんというボーダー側も見過ごすことが出来ないボーダーじゃない人間が現に居ただのから』

最初からもっとちゃんどやっていけば雨取麟児は向こうの世界に行く事はなかった。

誰が悪いかと言えば麟児だが、そう至る迄にはボーダーがもっと上手くやっていけば良かったのかもしれない。雨取千佳という一例があるのでもしもの話でなく現実味がより帯びている。探す努力を怠っていた事を逆に責められる。

『ボーダーが聞きたい事は私が何故トリガーを持っているのかとスカルの一件について。それを今、説明は終わった。私が何故トリガーを持っているか大凡の事は母が言ってくれたし、スカルの一件に一応話はした……それで私をどうするつもりだ?』

「……」

遊真はここに来て違和感を感じている。

貴虎が一応や大凡と言う言葉を使っているのを、堂々としているのは相変わらずではあるがそれでも微妙に違和感を感じている……まるで自分がここにいないのが見抜かれているかの様に感じる。そしてそれは当たっている。貴虎のサイドエフェクトを用いた占いで遊真は画面の見えない所にいると気付いている。

「結論から言わせてもらおう、君の所有しているトリガーは危険な代物だ。ボーダーで嚴重に管理させてもらいたい」

『そうですか……風間さん、すみませんが生身の肉体に戻ってくれませんか? ちよつとやっておきたい事があるんですよ』

持っているトリガーを寄越せと言われる事は貴虎の中では想定内である。

ならばとパソコンを持ってきた風間をトリオン体から生身の肉体に戻すと戦極ドライバーとメロンロックシードを渡し、お腹に戦極ドライバーを翳すとベルトが巻かれる。

『こう使うのか？』

『メロン』

施錠されていたメロンのロックシードを解錠し、戦極ドライバーにセットした。

『テケテンテンテンテンテンテンテンテン！ テンテンテンテンテンテン！ テンテンテンテンテンテン！ テンテンテンテンテンテン！ テンテンテンテンテン！』

『三雲なんだこの奇妙な音』

『バツカモくん！恥を知らない！』

ロックシードが一人手に切断面を見せると同時に……風間の頭上に金ダライが出現して風間の頭にぶつかった

『戦極ドライバーは最初に使用した人間にしか使えないわ！ネバくギブアップ！』

『とまあ、こんな感じだ』

『最初に使用した人物……君か』

『そういうこと』

未知のトリガーを回収出来たとしても誰かに使う事は出来ない。

貴虎の持つ戦極ドライバーは貴虎が一番最初に使ったので貴虎にしか使えない代物だ。

『こちらでも結論だけ言えば、戦極ドライバーも他のトリガーも渡すつもりは無い……例え渡したとしても今の貴方達だと宝の持ち腐れ、豚に真珠に等しい。ああ、先に言っておきます。どうか実力派エリートを経由して知っておいてください……もし力づくで戦極ドライバーやスカルメモリを回収しに来るならば……地下に眠っている馬鹿でかい物を含めたトリガーを破壊する』

「!!」

「地下に眠っている?」

貴虎は知っている。この三門市の地下には嘗てのボーダーの同盟国の母^{マザー}トリガーが眠っているのを。

それを踏まえた上でボーダーを脅す。力で来るのならばさらなる力で対抗する。その為に必要な物は貴虎は準備している。

「何故それを知っている?」

『私の知識の出どころは幾ら積み重ねようが答えるつもりはない……ここで風間隊を暴れさせるのならば、実に厄介な事に母さんがブチギレて暴れ回る。そうなるとホントに私

でも修でも止める事は出来ない、貴方の顔面を一発ぶん殴って納まるかどうか」

「……城戸さん、やり方を変えましょう」

母^{マザー}トリガーを知っているのは旧ボーダーの面々ぐらいでその事すら貴虎は知っている。

原作知識バンザイであり、強キャラ感を保ちつつ今起きている状況を語る。ここで風間隊が実力行使に及べば最後、ボーダーと三雲家はバチバチにやり合わなければならぬ。そうなればどちらが不利なのか、それは三雲家でなくボーダー側である。

ただでさえ大規模な侵攻が終わって記者会見の準備や仕込み等をしていて戦火の傷が残っている中での近界民でない人間との全面戦争は色々とまずい。ボーダー以外にトリガーを持っていて危険だからトリガーを回収して行つて来いと言われればこそ強盗の様な真似である。

「はじめまして、私は外務営業担当の唐沢だ。君はボーダーにトリガーを渡す事が出来ないと言うが君自身がボーダーに入る事は出来るかい？」

故に唐沢は別の案を出す。貴虎が敵でも味方でもない曖昧な存在から味方と呼びうる存在に変えようとする。

トリガーを渡す事が出来ない人間にボーダーに入れというのは無茶というものじゃないのかと根付や鬼怒田は驚愕する。

『私がボーダー嫌いを知っていて言っているんですか?』

「ボーダーは嫌いでも協力をしようとはしてくるだろう?」

ボーダーが嫌いだとしても、時と場合によってはそれこそ大規模な侵攻が起きれば躊躇いもなく力を貸す。

今回の一件で貴虎とは話し合いや交渉が通じないわけではない。故に貴虎を抱き込もうとする。

「有事の際に助つ人としてやって来る隊員としてボーダーに登録してくればいい」

『私の持っているトリガーを研究させてくれ等は一切無しならばそれでいい』

「私としてもそうしたいのだが、上がなんとも言えなくてね……」

『なら、応じない。また似たような事が起きれば今回みたいに勝手に動く……』

「それをやめてほしい、私は

君をボーダー以外でトリガーを持っている人間で交渉の相手として捉えている。互いに妥協し合おうじゃないか」

『妥協? 私のトリガーを寄越せと言っておいてか? それの何処が妥協だと言うんだ。そこから交渉のカードはなにが出せる?』

「……手強いな」

上手く貴虎を口説き落とそうと色々やってみせるが中々に上手く行かない。

話し合いに応じているのが幸いであるが、何時向こうが話し合いを完全に拒むかが分からない。

「君は先程、雨取千佳を見つけることが出来ないと言った、確かに私達の落ち度もある。トリオン能力を測定する装置を量産して学校の身体測定の際にトリオン能力も計測出来る様にするというのはどうだろうか？」

『それはこの街を戦場に変えている組織の義務であり妥協ではない。やっついて当然の事だ』

「なるほど……ならばコレではどうだろうか？君の弟と遊真遊真と雨取千佳に対する処遇だ。雨取千佳はともかく君の弟は君がスカルである事を知りながらも黙っていた。更には君が他にもトリオンを隠し持っている事をボーダーに伝えなかった」

『ボーダーに報告する義務は無い筈だ』

「確かにそれも一理あるが彼はそれを承知の上でボーダーという組織に所属している」
『修が居なければなにも始まらなかったと言っても過言ではない。修を今ここで切り捨てるのは勝手だが、それで採算性は取れているのか？』

「……確かに割には合わないな」

修の処遇について決める権限を放棄したとして修をクビにしてもリスクが大きい。

千佳も遊真も修が居るからといった点が大きい。特に遊真がこちらの世界に残って

いるのは修の事が危なかつしくて見てられないから力を貸しているところが大きい。

『修達に対して今回は一切お咎めなしにするなら……そうだな……コレを出すことならば出来る』

ヒマワリロックシードを取り出す貴虎。

ここに来てやっと食い付いてきてくれたと唐沢は内心ホツとするがまだ交渉は終わっていない。

『コレの研究だけにしてくれるならば、それ以上を要求しないに加えてさつき言っていたトリオン計測をしてくれるなら……ポーターに入ってもいい』

「だそですよ」

互いに落ち着くところにまで持つていく事が出来た。

これ以上は交渉していてもなにも引き出せないので唐沢は城戸司令に視線を向ける。

「いいだろう、そのトリガーと引き換えに今までの事は目を瞑ろう……」

『寛大な心、感謝します』

「あ、ウソついでる」

そんなこんなで貴虎はヒマワリロックシードを風間隊に渡す。

今までの事をお咎めなしにするのとヒマワリロックシードでは明らかに釣り合いが取れておらず、更には戦極ドライバー等の回収が一切出来ていない。明らかに貴虎に有

利な交渉である……貴虎は最初からここまで持つてくることを計算していた。内心でガッツポーズを取っているのを遊真に見抜かれたが、そこをボーダー上層部は気にしなかった。

第79話

約一週間、大規模な侵攻が起きてから一週間が経過した。あの交渉の後にボーダー隊員で私の知り合いの人達はやってきて怪我を心配してくれた。

自分で動いた結果、巻き起こった怪我の다가名目上は変な所に行ってしまったせいで怪我をしてしまった事になっている。1ミリも後悔の念は抱いていない。

「さっさと帰るわよ」

折れた肋骨は後、数日あれば元に戻る。

病院側からありえないぐらい驚異的な速度で肋骨や受けた傷が治っている。大方ガイアメモリが原因で生身の肉体の性能が向上していて通常よりも遥かに速い速度で治っていつている。退院しても問題はない様になったので病院を退院する事に。退院の付き添いには修と母さんが来てくれている。自分でやった事で怪我したのは情けない事だと母さんは主張する。まさにその通りである。

「兄さん、ホントによかったの？その……ヒマワリの錠前をボーダーに渡して」

病院を出る手続きを取っていると修は浮かない顔をしている。

私の持っているトリガーはいざという時の為の物でボーダーに渡して良いものじゃない。ボーダーを信用出来ないから持っていたと言つても過言ではない物だ。ボーダーに提出しても無駄無意味だと教えても向こうはああだこうだ言うのは目に見えていた。

「私がそんな愚かな男に見えるか？ヒマワリのロックシードは他のロックシードとは使用用途が異なっている。例えばボーダーのエンジニアが優れていたとしても再現出来たとしてもそれまでだ」

「そう、なんだ……」

「むしろ私にとつては儲けものだ。ボーダーに戦極ドライバーもロストドライバーも取り上げられる事はなかった。向こうが修をクビにすると言い出さずに最初から無かつた事にするので帳消しにして貰えて……」

「……兄さんに迷惑を掛けてばかりだね」

「ああ、全くだ……だからこそ早く成果を上げなければならぬ」

修は申し訳ない顔をしている。私としては私が原因でこうなっているので私の方が申し訳ない気持ちになっている。

互いに申し訳ないと思つているので成果を上げなければならぬ。例えば過去に攫われてしまった人達が帰還した際に社会復帰出来る様なプランを練るとか……やらな

ければならない問題は山積みだ。

「結局コレを使うことは無かったか」

ボーダーとの正面衝突が万が一起きた場合を想定して一応の準備はしていたがその時は来なかった。

もし仮にあの時ボーダーが実力を行使していればそれこそエターナルレクイエムで全てのトリガーを使えなくして諸悪の根源マザートリガーを破壊しに行っていた。それだけの力を無闇矢鱈と振らずに済んで良かったと思う。

「手続きは終わったわ、帰りましょう」

コレを使わずに済んで良かったと思っていると母さんが手続きを済ませて戻ってきた。

これで短いようで長かった入院生活にはおさらばする事が出来ると病院を出るとそこには外務営業担当の唐沢さんが立っていた。

「やあ、こうして直接向かい合うのははじめましてだね」

「なにかご用でしょうか？ヒマワリのロックシードは今から家に帰って直接持っていくのでもう少し待ってください」

「鬼怒田さんは早く持つてこいとカンカンになっているが……今回は違うんだ。君達に付いてきてほしいんだ」

「……記者会見に行けど?」

「そんな事も分かるのかい?」

「こんなのはサイドエフェクトが無くても冷静に考えたら誰でも分かること……」

「記者会見……確か、今からやるんですよね」

「ああ、そうだ……三雲くんのお母さん、彼等を借りてもよろしいでしょうか?」

「よろしいでしょうかしやないでしょう……私もその場に連れていきなさい」

母さんは相変わらず母さんであるか。

唐沢さんは母ならばそれを言うのかと予想していたのか分かりましたとすんなりと受け入れた。出来る男は本当に違うな。唐沢さんは既に車を用意しているのでそれに乗り、記者会見の場所へとやってきた。表には記者達が沢山スタンバイしており裏口から入ると既に記者会見は始まっており狐のおっさんもと根付が被害等の説明をしていた……さて、問題はここからである。

「唐沢さん、批難の的を修に集中させるつもりですか?」

根付は原作では修を利用してボーダーの株を落とさない様にしたが修を唐沢さんが連れてきて色々と逆転する。

しかしここでは違う。大きな被害が出る前に私が裏で工作してC級隊員に緊急脱出機能がついていない事がバレていない……トリオン体を全て修にして武器の統一と言

う荒業にまで出てきたんだ。アレだけやつてもまだ修に責任を背負わせて言い逃れするならば……ボーダーに出資している大手の企業の株を買収してボーダーへの出資を停止してやる。

「タダで帰ってくれるほどメディアは甘くはないんだ……ただ君がこの前言った様に私の中では採算性は取れないんだ。君の弟が起こした利益と損害では圧倒的なまでに利益の方が大きい……切り捨てるのには割に合わない」

「曲がりなりにも営業と外務担当のトップがそれでいいのか？」

「それは君にも言えることじゃないか、君ほどの男ならばボーダーに入隊せずに外部の協力者になるという道もあつた筈だ」

「そこそ買い被り過ぎだ……私は皆の思っている程に出来た人間じゃない、無償の正義や義務を貫く行為はしない主義だ……ただ、1つ約束を守つただけだ」

外部協力者になつても良かったが、それだと三輪との約束を破ることになる。

三輪はなにがなんでも私をボーダーに入れるつもりだった様で……そういえばアイツだけ一度もお見舞いに来ていなかったな。私とどう向き合うのか悩んでいるんだろ。ぶつちやけた話、私もどうやって向き合うのか悩んでいる。

「今回ボーダーの訓練生が主に狙われたそうですが、ボーダーのトリガーには緊急脱出機能が搭載されているはず。C級には搭載されていないのですか？」

「C級のトリガーは訓練用のトリガーで実戦を想定して作られておらん。緊急脱出機能の1つを備えるにも金と技術と労力が掛かるんだ。そんな事も分かんのか!」

「あのおっさん、ここが記者会見の場なの理解してるのかしら?」

偉いけど偉そうにしている場所ではない。それなのにやたらと態度のデカい狸のおっさん。母さんは呆れている…そろそろか。

「今回訓練生であるC級隊員が狙われたのはC級隊員には緊急脱出機能が搭載されていない事が近界民にバレてしまったからではないでしょうか? 訓練生は基本的にはポーター本部で訓練するとの事ですが」

「先のイレギュラー門ゲートの原因である近界民を駆除する際に見つかったと思われます。聞いた話によれば先のイレギュラー門の際に換装する肉体を統一させた眼鏡の少年がトリガーを起動して独断で近界民を撃退したとの事ですが、そこから漏れたのではないのですか?」

「その件はこちらでも把握しております。しかしそれが原因とは……」

「じゃあ他に心当たりがあるんですか!」

「訓練生はポーターの基地内ではかトリガーを使用してはいけないのですよね!」

「規則を破ったんじゃないんですか!」

「まだポーターに居るんですよね!」

「今回の事との関連性はともかく彼の行動は街を守る為の行為とボーダーでは認知しておりませう」

「なんだよアレ。オサムを悪者にするつもりか？」

「遊真、来ていたのか」

怒りの矛先をボーダーから修に転換している光景を見せられていると背後から遊真が現れた。

この記者会見を迅が裏で手引きして招いた客であり、修に怒りの矛先を向けている事に対して苛立っている。

「オサムとオサムのお兄さんが居なかったらもつと酷い事になってたかもしれないに」

「例えそうだとしてもマスコミははいそうですかと黙ってられない。余計な事を書かれるぐらいならば誰かをね」

「活躍した一個人を犠牲にした上で組織を運営するとは良い身分な事ね……修、帰るわよ」

「……僕は間違ってたのか？」

自分の行いが間違っていたのかと修は迷う。ズキズキと胸が傷んでいる。自分がやった行為で他人に迷惑を掛けてしまったのだから。

さて、どうするか……このまま修に記者会見の場に出てもらって色々と暴露して貰うのが良いが……癩に障るな。

「やれやれさつきまでオサムのお兄さんと一緒に病院に居たんだろう。頭の頑固さを治療してもらえば良かったのに」

「遊真、諦める。修の生真面目さは長所であり短所でもあるんだ……唐沢さん、わざわざ私達をここに連れてきて修の公開処刑を見せる為ですか？」

「いや……ヒーローにも反撃のチャンスを与えようと思つてね」

「……ならいつそのことヒーローショーでも行きましょうよ」

念には念をと持つててよかったゲネシスドライバーと戦極ドライバー。

私が裏で頑張ったのに修も頑張ったのに、組織の為ならばと平気で切り捨てるのは癩に障る。戦極ドライバーを装備すると母さんにゲネシスドライバーを投げた。

「どうすればいいの？」

「悪者が欲しいのならば幾らでも用意する事が出来る……このロックシードがあればな」

母さんはゲネシスドライバーを装備する。

私はイチゴのロックシードを母さんに託すとメロンのロックシードを取り出す。

『イチゴ！』

イチゴのロックシールドを解錠する。

するとイチゴの鎧……ではなくセイリユウインバスが実体化した状態で姿を現す。

「ちよ、ちよつと待ってくれ。流石にそれは」

「うちの息子を切り捨てるはおろか責任を背負わせようとしたのよ。当然の報いは受けてもらおうわ」

ヒーローに反撃の機会を与えるつもりなのだろうが、反撃の機会どころの騒ぎじゃない騒ぎを起こさせてもらおう。

セイリユウインバスは舞台裏から飛び出して行ってしまう

「な、なにかね君は！」

『グウアアア!!』

「母さん、ロックシールドは絶対に離さないで。手放すと制御が効かなくなるから」

突如として暴れ出すセイリユウインバス。

ボーダー側にとって不足の事態でありセイリユウインバスはよく見てみればマイクやカメラ等の機材のみを破壊しており、根付達を襲おうとはしていない。

「兄さん、なにやってるの!?!」

暴れ出すインバスに記者会見に来ていた記者達は逃げ惑う。

完全に脅威が去った筈なのに近界民と思わしき存在が現れたとなれば誰だって慌て

るだろう……そして私には見える、ボーダー側の手元にはトリガーが無いのを。トリガーが放つ独特の電磁波が一切見えない。

「変身」

『メロンアームズ 天・下・御・免』

記者会見の中で急に暴れる今まで見たこともない近界民、テレビは生放送で普通ならば放送休止になっているだろう。しかしテレビのカメラだけはセイリユウインベスに破壊させていないマスゴミにとってはある意味、1番美味しい展開でありカメラを持っている記者はパシヤリとセイリユウインベスの姿をカメラに納めている。

「大丈夫ですか!？」

「な、何故君がここにいるんだね!？」

「あんた達に言われた通り近界民^{ネイバー}の世界に送り込んだ無人探査機を回収したらなんかくつついて来たんですよ!」

「……まさか、君は!」

この状況下を一瞬にして全てひっくり返す方法は唯一つ、更なる騒ぎをこの場で巻き起こす事だ。

斬月に変身した私は無双セイバーを手にセイリユウインベスを攻撃していきセイリユウインベスを瀕死寸前まで追い詰める。

「これで終わりだ」

戦極ドライバーのカツティングブレードを一回倒す

『メロンスカツシュ!』

メロンディフェンダーを手裏剣の様に投擲してセイリュウインベスにぶつけるとセイリュウインベスは怯み、その隙を逃す事をせずに無双セイバーで斬りかかる……セイリュウインベスは苦しみ出すと最終的には自爆した。

「皆さん、無事ですか!」

「オサムのお兄さん、結構セコい事をするんだな」

明確に見える悪をヒーローが撃退をする。勧善懲悪な風に見せつけていた方がポーターとして利益になるのだろう。

爆破したセイリュウインベスは完全に消え去っており逃げ惑っていた記者達の足は止まり、視線の先には私がいる。斬月の姿はなにかと目立って仕方がない……だが、今日はそれが吉と出ている。

「皆様、申し訳ありません。この後ポーターから向こうの世界についての重大発表がある前にいざこざを起こしてしまつて」

「つ、君! さつさと下がちなさい!」

「私は一戦闘員なので詳しくは知りませんがこの後に重大発表があるのでそれまでお付

き合ってください」

ペコリと頭を下げると私は記者会見の舞台裏に戻る。それと同時に変身を解除して母とハイタッチをする。

修に怒りの矛先を向けさせようとしていたが今の一騒動でそんな事よりもさっきのはなんだやボーダーの重大発表とはなんなのかと意識が向いている。

「なんて事を……」

色々と企てていたプランを一瞬にして全て無に返すどころかボーダーの秘匿にしている事をバラさなければならぬ状況を作り上げた。

余計な事をしてと根付は私を睨んでくるので私は中指を突き立てて威嚇する。今からでもボーダーと全面戦争しても構わないんだぞ、私は。

「重大発表とはなんなんですか!」

「先程、近界民の世界に飛ばした無人探査機と仰っていましたか」
あんな騒ぎがあつたにも関わらずマスゴミどもはくらいつく。

修の事は既に眼中に無い様で先程の私が言っていた事はなんなのかと根付達に問い詰める。こんな事をされたら答えるしかないので城戸司令は近界民の世界に無人探査機を送り込んで、それを回収したらそこに近界民がくつついてきたと嘘をでっち上げ、更には今度は初の向こうの世界に遠征する事を言う……ホントは何度も何度も遠征し

ているんじゃないかと言ってやりたいがこれ以上事態を混乱させる訳にはいかないの
で断念する。

「ヒーローに反撃の機会を与えるつもりがヒーローショーを行うなんて……君達がやつ
たと知られれば大目玉を食らうぞ」

「その時はその時でボーダーと全面戦争でも繰り広げるさ」

「君が言うのと冗談に聞こえないんだが」

「冗談じゃないからだ」

別に今からでもボーダーに対してバチバチやりあつても構わないんだ。

その場合は今まで抑えていた真の力を発揮して、問答無用でボーダーをぶつ壊す。誰
が相手だろうと勝つ自身はある。

「オサムのお兄さん、オサム以上に無茶をするな」

「オサムのは後先考えずの無茶だが私のは後々の事を考えた上での行いだ……多少荒つ
ばいがな」

なにはともあれ修の事を全て一旦リセットすることが出来た。

自作自演にも程があるのだが、それを気付くことは難しい……今回の一件をどう片付
けるかは実に実に見ものである。他人事って本当に最高だ。

「そういえば唐沢さんに聞きたい事がありました」

「いきなり急だね」

「コレをボーダーに出資したいのですが、ボーダーの何処の部署に届ければいいのかイマイチよく分からなかつたんですよ」

隣児さんから貰ったお金を種にサイドエフェクトを思う存分に利用して作り上げた数千万円が入った通帳を取り出す。

通帳の中身を確認すると唐沢さんは表情こそ変えてはいないが驚きの電磁波を出しており、通帳を私に返した。

「ボーダーにはちよつと色々とやって貰いたい事があるのでボーダーに個人的に出資させてもらいます……足りないのならばもう少し金額を増やしますけど」

「君はいつたいたいどうやってこんな大金を手に入れたんだ」

「まあ、一言で言えば……サイドエフェクトを思う存分に利用したとだけは言っておきましょう」

子供が持つには明らかにおかしな額である大金だ。

宝くじでも当てたのかと思われるが宝くじなんて当てようと思えば何時でも当てる事が私には可能なんだ。スクラッチで数百万円とか余裕で稼ぐ事が出来る。

「ふう……君が1個人としてボーダーに出資してくれるのは分かった。だが今はそれについて話し合いをしている場合じゃない。君がこうして場を乱したからね……本当

に君は予測不能な事をしてくれる」

「多少の予想外の行為ぐらい目を瞑ってもらいたい……と言つてもまたああだこうだ言つてくるからーっただけ新しい情報を与えておきましょう」

あえてあの時に言わなかった事を今ここで教える。

切り札や万が一を想定して教えていない情報は多々あり、その中にーっ、ゲネシスドライバーについての情報を教える。その為には母さんからゲネシスドライバーを回収し唐沢さんの腰にベルトを装着させる。

「戦極ドライバーは最初に使用した私しか使う事は出来ない。だがゲネシスドライバーは誰にでも使うことが出来る代物だ」

ボーダーの上層部は私の持つているベルト一式を私にしか使えないと思ひ込ませている。

確かに一部のベルトやガイアメモリは私や修にしか使うことが出来ない代物だがゲネシスドライバーは誰にでも、それこそ全く訓練を積んでいない唐沢さんですら使用する事が出来る……まあ、デメリットは相変わらず生身の肉体の上に鎧を身に纏っている状態で即死攻撃を喰らえば本当に死んでしまうこととかあるが。

「そうか……だが分かったとしても君はこのベルトを渡すつもりは無いのだろうか？」

「当たり前じゃないですか」

戦極ドライバーもゲネシスドライバーも私の物だ。誰かに譲るつもりは一切無い。コレは私が貰った物なんだ……所有権は母さんにあるけど。唐沢さんからゲネシスドライバーを回収して、戦極ドライバーを外す。

「私は別にボーダーと真正面から全面戦争をしても構わないんだ……何処ぞの実力派エンジニアはその未来を見てしまっただけか私に対して脅威を感じて裏で色々と頑張っているみたいだが」

故に今回はコレだけにしておいておく。

本当ならばもっと暴れてやりたいし取材報道陣に色々とあれやこれやを暴露してきたいが、そうなるとボーダーの組織としての存在が危うくなってしまふ。嫌がらせはしたいがボーダーという組織が終わってしまえば本末転倒の事態になってしまう。

「つと、忘れるところでした。コレを渡さない」と

危ない危ない、危うくボーダーに提出しないとイケないヒマワリロックシードを渡さずびれた。

ヒマワリロックシードは複数あるので渡しても問題のない代物。栄養補給以外に使い道は存在していない(多分)唐沢さんにヒマワリロックシードを渡す事が出来て更には記者会見を滅茶苦茶にしてやったので気分がいい。目的の物を渡したので私は記者会見の場を後にする。母さんもこの場には用は無いので私の後をついてくる……コレ

で良かったのだろうかと言われれば答えづらいが良かった筈だ
「痛っ！」

そう思いたかったが世の中はそんなに甘くはなかった

第80話

「いや〜うん……メロンくん、大丈夫？」

「お前に気にされるほど柔には出来ていない」

記者会見が巻き起こった夜のこと。眠気もやってきたので寝ようとしたら家に向かつて石が投げ込まれた。幸いにも修の部屋でなく私の部屋に石が飛んできて家の窓が割れて頬にガラスの破片が飛んできたりした。修に怪我がなくて良かったと思うと同時に石を投げ込んだ馬鹿野郎にそれ相応の制裁を加えてやりたいとは思っている。

「あんな如何にもヤラセな事をやったら誰だつて怒るでしょ。忍田さんもカンカンだったよ、一般市民に怖い思いをさせるなつて」

「どの口がほざくと言っておけ。三門市という街を戦場に変えているんだ、記者達マスコミは基本的には日本人で日本の事しか書かない記者なら戦場カメラマンになつたつもりで居なければ死んでしまうよ」

「そんな米花町みたいな街じゃない、三門市は」

頬にガ―ゼをくつつつけて翌朝やつてきたのはボーダーの本部……ではなく玉狛支部

だ。

迅はここに私に来ることを分かっていたようですんなりと出迎えてくれており、私はその事については特には驚かない。この男はそういうものだと思認しているから。この街は本当にヴァイオレンスで危険なことが多い。

「迅さん、三雲くん、あつたよ」

出されたお茶を啜っているとノートパソコンを片手に宇佐美が現れる。

パソコンの画面を見せてくるので見つめると掲示板の様な所にアクセスされており……我が家こと三雲家と修に関する情報が載っていた。宇佐美はそれを見せていてあまりいい顔をしていない。勿論迅もいい顔をしていない

「すまなかつた」

「それはなにに對しての謝罪だ？」

頭を下げてきた迅に問う。

修を危険な目にあわせた事か、修をボーダーに入隊させたのに最後まで面倒を見なかつた事か、それとも今回の一件なのか。

「ボーダーが生き残る為に君達家族に迷惑を掛けてしまった」

「ボーダーが本当に謝らないといけないのは私じゃない……アイツや一般市民達だ。死者こそ出なかつたものの被害は被つた、どれだけ前回より良くても街を戦場に変えてい

る事実には変わりはない」

私は私の意思で色々やっているんだ。謝られる筋合いは何処にもない。自分の行いに後悔はなくてもないがそれでも自分の道を真っ直ぐと進んで生き抜くつもりだ。迅は私の思いが通じたのか下げていた頭を上げる。

「でもホントに酷いよね。三雲くんが居なかつたらもつと大変な事になってたかもしれないのに、家に石を投げるなんて」

「街を戦場に変えて怪我人を出したんだ。暴力に訴えたい気持ちも分かるさ……ただ怒りの矛先を向ける位置が間違っている。ぶん投げるのならそのグラサンに向かつてぶん投げるべきだ」

「いやいや、オレも必死になつて頑張つてたからね……それでどうするの？石を投げた奴を探すの？だつたら手伝うけど」

「お前の力が無くても、自力でどうにかする事が出来る」

家の窓ガラスを割つた石を机の上に置いた。

石から発する石を持つていた人間の極々僅かに残された電磁波から何処の誰が石を投げてきたのかが分かる。メガネを外して石に残存する電磁波を解析していると修と母さんと林藤支部長がやってくる。

「改めてはじめまして、何時もうちの修がお世話になっております。三雲修の兄の三雲

貴虎です」

「メロンくん、オレと態度が違いすぎない？」

私はハッキリとコイツが苦手なだけだ。

林藤支部長に頭を下げた挨拶をすると林藤支部長は座れよと椅子に座るように言うので椅子に座る

「まず今回の一件だが全面的にボーダーの不手際と俺は見ている。ラッドの駆除の際に全員のトリオン体を修のモデルにして攪乱する事をしたが逆にそれが修の知名度を上げてしまった。ボーダーに対して反感を抱いている奴等に好き勝手に書かれない為に裏工作したつてのにホントに申し訳ない」

「別に構いませんよ、記者会見の場を思いつきりぶち壊す事が出来たのでスッキリしてますし」

林藤支部長が頭を下げてきたが、この一件に対してはある程度は割り切っている。

石をぶん投げられた事に対しては本当に予想外だったが今までの事を考慮すれば多少は納得する……まあ、後で石をぶん投げた奴に対しては徹底的に潰すけども。

「や、アレはやっぱやりすぎだろう」

「後悔はしていません」

林藤支部長的にもインペスを暴れさせる事はやりすぎと見られている。だが私や母

は後悔はしていない。それだけムカついていたのだから。

「それでボーダー側としてはどの様な対処を取つてくださるのですか？」

ある程度は私が割り切つているとはいえボーダーが原因で事件は巻き起こつた。ならばある程度はボーダーに責任があり、個人情報等をさらけ出しているボーダー側はどの様にこの一件を始末してくれるのか……なにもしないと云うのは無いだろう。

「それなんだが、一旦修とおふくろさんを玉狛支部住まいにするつて事で話が纏まつた……ボーダーに家が知られているなら今度の公開遠征に修が行けば修に対する反感は減るのは確かだ。だったら暫くの間、玉狛支部に居候として居てもらつた方がなにかと効率がいい。元々学校が無い春休みの間だけ修を玉狛に泊まらせるプランもあつた事だし、それが少しだけ早まつたと思つてくれていい」

「妥当な落とし所だな……ただ一つを除いて。」

「修と母さんと言つていたが私はどうなるのですか？」

修と母さんの今後について教えてもらつた、何故か私だけ省かれてしまつている。

その事について問い詰めると林藤支部長は困つた様な顔をしており、額に手を置いた。

「いや、玉狛支部としては君の身柄も預かろうと思つてるんだ。だけどボーダーの上層部が、特に鬼怒田さんと根付さんがお前を危険視していな。玉狛支部に置いていたら

なにしないでかすか分からないから本部に部屋を用意するからそこに住めって言ってきたんだ」

「……要するにこれ以上は玉狛に戦力を増やさせないぞ、か……そんな事をしなくても私は玉狛でなく修の味方だというのに」

「メロンくんって結構ブラコンだよな」

「家族思いと言え」

ボーダーに黒トリガーを退ける事が出来るトリガーとトリガー使いが玉狛支部に居ると厄介なんだろう。

「1つの組織なのに色々と余計な派閥があるのはめんどくさい……いつそのこと全員締め上げるのもありなのかもしれないな。」

「ストップ、メロンくん、ホントに危ないことをしないでくれ」

「ただ考えただけだ、実行するつもりはない」

実際にボーダーの隊員を締め上げている未来が見えたのか迅は制止する。あくまでも考えたただけだ。

「悪いな。組織のいざこざに巻き込んでしまつて」

「構いませんよ……どうせ少ししたら私もそんな組織の一員になるんですから」

ボーダーに入隊する事は既に確定している、三輪との約束を守る為にも割と嫌なのだ

がボーダーという組織に入ってる。

この様子だと玉狛支部所属でなく本部所属扱いになるだろうがそれでも別に構わない。修の脅威にさええならなければ別ににも問題はない事だ。

「じゃあ、私は荷物を取ってくるわ……修、行くわよ」

「うん……その、兄さんも頑張ってるね」

「お前のその声援が私の力になる……さて、真面目な話をしましょうか」

修と母さんが玉狛支部を後にした。これでやっと真面目な話をすることが出来る。

YGGDRASILと書かれたアタッシュケースを机の上に置くと中からフォージェロックシードを取り出した。

「このロックシードに関して玉狛支部で調べてほしい、勿論タダでは言わない」

フォージェロックシードを林藤支部長に託すと林藤支部長は無言で見つめる。

「どういう風の吹き回しだ？ボーダー本部でお前の持っている錠前型のトリガーを研究しているだろう」

「私がボーダーに提出したのは戦闘に使える錠前ではない……ボーダー相手にくだらないミスを私が侵すとも思いましたか？アレは栄養補給をする為の道具だ」

ヒマワリロックシードは戦う為に使う道具じゃない。戦極ドライバーにセットする事でベルトを経由して栄養を摂取する事が出来るものだ。

「お前さん、何気に策士だな。鬼怒田さんが聞いたら卒倒するぞ」

「ヒマワリロックシードだけでも充分な価値はある……量産や開発する事が出来るかどうかはまた話は別だが」

アレはヘルヘイムの果実を機械化させた物でこの世界にはヘルヘイムは存在していない。

システムをコピーしてトリオン器官から栄養を供給するシステムが作れるぐらいだろうな。

「なんで今になってトリガーを提出するの？」

「……私は今の今までトリガーを起動しなかった、有事の際にのみ戦おうとしていた。持ち前の器用さで使いこなしているがそれでも限界があった」

大規模な侵攻の際に色々とプランを練っていた。ヒュースとヴィザをどうにかしないといけないと思っていた。

ヴィザは最悪遊真に任せる方針でとにかくヒュースの足止めもとい撃退をするプランを練っていた……その結果がNSマグネットによる磁力の無効化だったが結果としてNSマグネットはNマグネットとSマグネットとして出てきて周りの磁力を帯びた物を引っ張るだけに終わった。それだけでなくコズミックステイツ専用武器であるバリズンソードが出てこなかった。フォーゼアームズについて熟知していなかったんだ。

「おそらくこのトリガーには私の知らない隠し機能の様な物が備えられている。それがなんなのか確かめてほしい……ボーダー本部だと危険過ぎるだなんだと言われそうだな」

「危険もなにもメロンくんのトリガーつてボーダーのトリガーと根本的な部分から違うんでしょ」

「ああ、そうだ……だがそれでも私はこのトリガーを使わせてもらう。前みたいなハマをやらかさない為にもこのトリガーの隠し機能を熟知しておきたいんだ」

今更戦極ドライバーを手放せと言われても、はいそうですかと手放すつもりはない。

鎧を身に纏う装着型の仮面ライダーだが、使いこなせれば圧倒的な力になる……まあ、それよりもエターナルの力の方が圧倒的なまでに上なのだがな。

「なるほどな……今、うちのエンジニアは外部スカウトに行っている。鬼怒田さんの協力を得られないとなるとそいつに力を貸して貰わないといけないわけで……解析するのには時間がそれなりにかかるぞ？」

「構いません……なにも知らないよりはマシだ」

それで一度痛い目に遭っている。同じ失敗を繰り返さない為にも、あの日より強くなるしかない。

「分かった。お前のトリガーに関して玉狛支部で独自に調べさせてもらおう」

「では、報酬の方を」

「そんなもんいるかよ。ボーダーの人間に未知のトリガーの研究をしてくれって頼まれてるだけだ」

「……そうですか」

「三雲、無理に一線を敷こうとするんじゃない。お前も今度からボーダー隊員になるんだ。もつと俺達を頼ってくれて構わない」

「それはできない相談ですね……ボーダーという組織に色々と疑問を抱いている。はい、そうですか？ 変えられるほど立派な人間じゃない」

ボーダーを味方とは思えても仲間とは思いたくない、何処かで一線を敷いておかなければ気が緩んで不測の事態を起こしてしまう。

そういう一線は割と大事なんだ。でないとランク戦を一種のeスポーツ感覚で楽しもうとしてしまう自分がいる。それは非常にまずい……カッコいいお兄ちゃんが戦闘狂になってしまうのは色々とまずい。

「なにか分かった事があれば直ぐに教えてください……それと修をよろしくお願ひします。あいつは根が真面目ですが時にはとんでもない予想外な出来事を巻き起こすので上手く制御しておかないとなに仕出かすか分かりません」

「それメロンくんにも言える事だよ」

「私は自分でどうにか出来るから問題ないんだ」

「本部に行くんだろ？車に乗ってけよ」

「いえ、サクラハリケーンがあるので」

サクラハリケーンは鎧武の次のライダーの愛機と違って公道を走ってもなにも問題は無い。

迅は私の行為に呆れてはいるが断固として阻止するつもりは無い。林藤支部長には悪いがこのサクラハリケーンは私の物なのでどう使おうが勝手である。玉狛支部との交渉が済んだので私はサクラハリケーンに搭乗し、ボーダーの本部に入ることが出来る指定された入口にまで向かう。

「おいおい、公道をトリガーで走るなよ」

ボーダーの本部に入ることが出来る入口にまでやってくるとそこには米屋がいた。

サクラハリケーンに乗っている私に対して呆れているが私は気にする事なくサクラハリケーンをロックビークル状態に戻す。

「出迎え苦勞……お前だけか？」

「いんや、おれも居るぞ」

ウィーンとボーダーの本部に入ることが出来る通路の入口が開くとトリオン体に換装した出水がいた。

「裏口入隊だというのに随分と豪華な顔触れだな」

高校生A級隊員2人にボーダー本部を案内されるとは、ボーダーは暇なのか。

「まあ、おれも槍バカもお前が来てくれる事を待ち望んでたからな」

今回私がボーダーの本部に足を運んだのは……ボーダー隊員になる為の試験を受けるに来た。

そういうのは区役所とか区民会館とかの施設で行われる物で今日も本部以外で入隊試験が執り行われているが、それとは別に私だけ別に試験を受ける事になった。出水や米屋はそんな試験の付き添いみたいなもので2人はボーダー本部に私を案内してくれる。

大規模な侵攻の際にはエネドラをぶつ倒す為に全速力で走っていった為にボーダーの内部がどんな構造でどんな感じか見ることが出来なかったからな……まあ、そうは言っても今度からここでお世話になるからな。

「秀次、三雲の奴を連れてきたぞ」

開発室と思わしき場所に案内をされるとそこには三輪がいた

「まさかとは思うが」

「試験官は三輪がやることになった。三輪自身がやらせてくれつつ懇願してきてな……」

まあ、三輪ならば問題無く熟してくれれば上も判断したから問題無い」

「そうそう。別に難しいテストを受けろっていうわけじゃねえんだ」
「……」

今から行うのはボーダーに入隊する為に必要な試験だ。

試験と言ってもトリオン能力を計測するとか……ではなさそうだな……

「こうしてちゃんと顔を合わせるのは何日ぶりだ？」

三輪は無言でこちらを見つめている。

入院している間に知り合いのボーダー隊員や彼女が来たりしたが三輪だけはやってくる事が出来なかった。私がトリガーを隠し持っていた事に対してシヨックを受けていたのか……三輪は絶賛悩んでいると言ったところだな。

「何故トリガーを隠し持っていた？」

「その手の問答は既にボーダーの上層部と繰り広げた。落とし物を拾って警察に届け出た。半年以上持ち主が現れなかったから自動的に私の物になった……隠していた理由はボーダーが信用ならないからだ。こういう言い方はアレだが私がラッドを見つけて修に渡しておいたからどうにかなったわけで……そうでないと一般市民に死者という被害が出ていただろう。相手が少しでも手口を変えてきただけであたふたする組織に身は置けない。私が色々とボーダー嫌いなのは知っているだろう？」

トリガーを隠し持っていた理由なんて色々ある。そして三輪は私がボーダー嫌い

を知っている。理由は幾らでも見繕う事が出来るのでそれらしい言葉を並べてみると三輪は更に私に尋ねてきた

「その力があれば近界民ネイバーに対して復讐する事が出来た筈だ」

「お前は……酷く純粹だな」

「なに？」

「悪者と正義の味方が居ると思っているのか？大間違いだ……私達がやっているのは勸善懲惡のヒーロー劇じゃない、戦争という愚かな殺し合いだ」

憎しみから生まれる憎悪や行いから負の連鎖ははじまる、永遠にだ。

どれだけ綺麗に見繕っても私達のやっている事は戦争なんだ……姉を失ったのは戦争だったから仕方ないで受け入れろと言うのは酷だ。言葉は慎重に選ばなければならぬ。

「お前の様に復讐する力を求めた人もいれば戦争が、非日常が入ってこない平穏を求めている人だっているんだ。私のこの力は家族やお前の様に力を求める人間でなく力を求めている人間の為に振るう。そう決めているんだ」

「力を求めている人間だと……そんな奴がいるのか……」

「ああ、居るんだ。私の力の一部は万が一等を想定して彼女に脅威が差し迫った時とかの為に託している……復讐に走るなどは言わない、だが復讐する事を、強くなる事やノ

プレス・オブリージウの精神を他人にまで強要するな。向き合い方は人それぞれなんだ」

「……俺の復讐は間違いだと言いたいのか？」

「そんな事は言っていない……私はやろうと思えばボーダーに入隊するのでなく外部協力者の道もあった。だが、その道は選ばなかった。お前との約束を守る為に、お前の復讐の共犯者になる為に私はここまでやってきたんだ」

唐沢さんも困惑していた、私ならばもつと賢い選択があつたのだろうと。

ボーダーの隊員になるのではなく有事の際にボーダーに協力して力を貸す外部協力者の道もあった。その道の方が楽で私も後々有利に事を運ぶ事が出来る……それでもボーダーの協力者でなくボーダーの隊員になつたのは三輪との約束を守る為だ。

「お前が今以上に力を求めるといふのなら、お前に力を貸してやる……その為の手段も用意してある」

ゲネシスドライバーは誰にでも使う事が出来る……斬月・偽に変身する。まあ、三輪が嫌だというのならそれは仕方ないことだが。

私が協力者に、共犯者になつてくれる事に対して納得はしてくれたのか私を無言で見つめる事はやめて私に背を向ける。

「仲直りする事は出来たか？」

「お前は相変わらずだな」

米屋は私と三輪が喧嘩をしているといった認識をしている。

強ち間違いとはいい切れないのがなんとも言えないがそんな単純なものではない……いや、難しく考えれば偉くなったと勘違いをしてしまう事もある。もつと米屋の様にシンプルに考えた方がいい

「それで私のなにを試すつもりだ？ 言っておくが自前のトリガーを使つての戦闘はしないぞ、私のトリガーは強力な反面大きすぎるデメリットも背負っている。そもそもでボーダーのトリオン体を擬似的に再現出来る機械に接続出来るかどうかすら怪しい」

斬月やスカルはあくまでも有事の際に使うものであつて普段使いするものではない。

まあ、ガイアメモリの中にはとんでもない事が出来るメモリも存在している……だからこそ表舞台に曝け出してはいけない。特にダミーメモリとかホントに危ない使い道しかない。

「いきなり戦えとは言わない……基本的には普通の入隊試験と一緒に事をしてもらう。だが、お前にはサイドエフェクトがある……それを調べ上げる」

「そうか」

第81話

「手を出せ」

三輪が試験官を務める特例中のボーダー内部における入隊試験。

ゲームボーイみたいな機械を取り出し、そこから伸びるチューブの様な物を握らされる。コレがトリオンを計測する装置か。

「知識としてこんなものがあるのは知っていたが、コレは量産する事が可能な装置なのか？」

一応は気になっているこのゲームボーイみたいな見た目をしている装置。

私がボーダーに出資する条件としてこの装置の量産及び学校の身体計測でついでにトリオン能力の計測もしてくれと頼んである。ボーダー推薦とかいう謎の枠組を作れるぐらいに三門市にボーダーの力は浸透しているので出来ないわけではない。

「知らん」

「そうか」

三輪に尋ねてみるも三輪はそんな事は知らなかった。エンジニアでなく戦闘員の三

輪にそんな事を聞いたとしても致し方あるまい。

とりあえずはトリオンがどれくらいあるのか……レプリカで計測した際にはトリオン器官がおかしな事になっていと言われた。心当たりは普通にある……力の一部を彼女に譲渡しているから、それが原因だろう。

「測定が終わった」

「お、どうだった？ サイドエフェクト持つてるから最低でも7以上はあると思うけど……」

「コレは……」

「おいおい、嘘だろ？」

トリオン能力の測定を終えると三輪は答えるべきか躊躇う。

米屋はどれくらいあるのか機械を出水と一緒に覗き込むのだが固まった……測定不能というオチはつかないだろうな。

「いくらだ？」

ボーダー基準で私のトリオン能力は幾つか聞けば三輪はゆっくりと口を開く

「トリオン能力は……19だ」

「おれ以上ってか、二宮さん以上のトリオン能力じゃねえか！」

「サイドエフェクトがあるからトリオンは豊富なんだろうけど、まさかぶつちぎりでト

リオンを持つてるとはな」

レプリカが測定してくれた時と同じ数値を叩き出したか。

トリオン器官がおかしな事になっていと言わないのでボーダーのトリオンを計測する装置はそこまでの物なのかもしれない。私のトリオン能力の凄さに米屋は圧巻する……そしてここで問題が浮上する。

「お前、トリオン能力的に何処のポジションも出来るよな」

私のポジションについて米屋はどうするか考える。

既にボーダー入隊は決まっているのでここから体力測定だ一般教養によるテストなんて面倒な真似はしない。ボーダーに入隊したらどうするかだ。一応はC級からスタートする事になっている。おまけのポイントは一切無い……新月として活躍した部分はノーカンである。是非も無し

「んなの決まってるだろう、こんだけトリオンがあるんだ。贅沢に点も取れる射手が一番だろう」

「いや、コイツの運動神経は抜群で視力強化のサイドエフェクトを持つてる。攻撃手が一番だ」

「なに言ってるんだ！このトリオンを使わず攻撃手とか宝の持ち腐れだぞ」

「間を取って万能手ってのはどうだ？」

「おいそこ2人、なに勝手に言い合っている」

「なら銃手ガンナーと攻撃手アタッカーを混ぜ合わせた近距離メインの万能手かどうか？」

「秀次、ズリいぞ！自分と同じスタイルを取らせるつもりだろう!!」

三輪まで話に参加してくるか。

ポジションなんてぶっちゃけどうだっていい……なんて言ったのなら怒られる事は違いないだろうな。正直、どんなポジションでもこなせる自信はある……目指すのは全部のポジションが出来るオールラウンダーだ。完璧パーフェクト万能手オールラウンダーとはまた違う方向性の文字通りなんでも出来る系の男子を目指したいんだ。

「盛り上がってるところ悪いけど、そいつのサイドエフェクトも調べておかないと」

「あ、そうだった」

サイドエフェクトについて雷蔵さんが話題に出すと言い争っていた米屋はそうだったと思ひ出す。

私のサイドエフェクトは視力強化、サイドエフェクトのランクで言えば五感強化のCランクのサイドエフェクトだ。ただC級と呼ぶにはあまりにも強力過ぎる性能を持っている。

「……じゃ測定する事が出来ないから、あそこでやるぞ」

「あそこ……?」

それはいつたい何処の事だろうか、米屋に連れられて行くとそこはボーダーの狙撃手の訓練所だった。

「ここでどんな事をさせるつもりだ……なんとなくで何をするのかは予測することは出来るが、まさか狙撃を実際にやってみると言うんじゃないだろうか。」

「お、三雲じゃねえか」

「これはどうも当真さん」

「聞いたぞ、遂にボーダーに入るらしいな」

「ええ、まあ、色々とありまして……スポンサー出資者にもなりましたね」

No、1狙撃手の当真さんと遭遇する。私の事が具体的にどういいう感じに触れ回っているのか、遂にボーダーに入ると言ったところか。

まあ、それ自体は嘘でもなんでもない紛れもない事実……出資者になってボーダーに入れるとゴネた設定でも作ってみようか……いや、いいか。

「三雲、なにが見える？」

「なるほど、そういうことか」

遠くにあるものを視認させるには狙撃訓練所が1番か。メガネを外して近くの台に置くと、狙撃手達が必要になって撃っているのを見つめる。

真ん中にしか穴が空いていない物もあればキレイなスマイルマークに穴が空いてい

たりする……奈良坂たけのこと当真リセントが空けた風穴だろう。

「右から左斜下、右斜め上、ギリギリ右を掠めている、真ん中よりも少し下……そんなところか」

「おいおい、スコープ無しでそこまで見えるのかよ」

三輪達に質問される前に誰の的がどんな感じになっているのかを教える。

当真さんは狙撃銃のスコープを手にした的を覗き込むと私の言っている通りになっているので感服している。この程度の事ならば朝飯前……そう、朝飯前なんだ。

「米屋、その気になれば2 km以上先まで遠くを見ることが出来る。遠視の性能を試すのはそれまでにして他の部分をテストしてくれ」

数百m先のものぐらいならメガネをかけた状態でも見抜く事が出来る。

これからk m単位でなにかあるか見ると言われてもめんどろで遠視能力はこれで充分だ。最大で何処まであるのか計測しても時間は無駄だ。米屋にその事が伝わってくれたので狙撃手の訓練場を後にして再び開発室に戻った。

「それで今度はなにを調べる？」

「動体視力を調べさせてもらおう……ついてこい」

三輪についていくと真つ白でなにもない空間にやってきた。

このなにもない部屋はトリオンを用いることで擬似的にここではない何処かの別の

空間を再現する事が出来る……筈だったな。

「まさか戦闘をしろと言うんじゃないだろうな？まだボーダーのトリガーには馴れてないどころの話じゃないんだ、それは出来ない」

「違う……出水、起動しろ」

この部屋に入つてこなかった出水は外部から仕掛ける。

するとなにもない真つ白な部屋が急に豪華絢爛なカジノに切り替わり、無駄に大きなスロットが目に入った。

「前に聞いたけどお前、ルーレットとか滅茶苦茶得意らしいな」

「博打の類は大体得意だ。このサイドエフェクトを用いてそれはもう当てまくっている……ボーダーに出資する事が出来るぐらいにはな」

鍛えないと使い物にならないサイドエフェクトだが今や91%の的中率を誇る。

株とかFXとかやっていると本当に面白いぐらいに儲かるから本当にやめられない。金は天下の回りものだ。

「あのスロットの7を全部揃える事が出来るよな？」

「当然だ……試しに米屋が一回やってみてくれ」

「なんでだよ？」

「イカサマ防止、裏工作はされていないとの証明だ」

そんな事はされていないのは分かるが疑われるのは非常に心外だ。故に出来ることはやっておく。

米屋が無駄にデカイスロットを回すとスロットは高速で、それこそ絵柄が見えないんじゃないかと思える速度で回転する。

「普通のスロットよりも速いな」

「分かるのか？」

「ゲーセンのスロットやルーレットでお菓子とかを荒稼ぎしているからな」

アレは本当にお菓子代とかの節約になってホントにちようどいい。

米屋がスロットのドラムを止めていくのだが絵柄が全然合わず、失敗に終わった

「視力、いい方なんだけどな……すまん、失敗した」

「コレは元々お前の為にあるものじゃない……三雲」

「真打ち登場といこうか」

米屋の失敗を取り返してみせる。スロットを起動させるスイッチを押すとスロットは回り始める……時速60kmといったところだろう。

米屋の動体視力は中々のものだが流石に時速60kmの物を見切る目は持っていない。これをなにも無しで目押ししろと言うのが無茶な事だろう……ただそんな無茶を通すのが私のサイドエフェクトだ。

確かトリコのココは秒速1000〜1500mのルーレットを目押しする事が出来ていた。ならば時速60km程度の速度は屁でもない

「開発陣に言っておいてくれ……これぐらいなら殆ど止まって見ると」

文句一つ言えないビタ押しでスロットを止めた。

7の字が一直線、ストレートに並んでおりそれを見た米屋はマジかよ〜と言った顔をしている。この程度ならば余裕綽々だ。

「それで次はなにを試す？」

「そうだな……出水、電気を消してくれ」

三輪がそう注文すると部屋は真っ白な状態に戻り電気が消える。

「お前のサイドエフェクトは遠くの物を見たり、とてつもない動体視力を発揮している様だが本来は見えない物を見ることが出来る、そうだったな」

「ああ、赤外線や紫外線、電磁波などを視認出来る……勿論暗いところでも暗視が出来る。今、三輪は左手に拳銃を持っている」

「……明かりをつけろ」

暗い中でなにをしているのかなに持っているのか当てさせるつもりだった様で、私
が直ぐに答えたので三輪は中止にする。

暗くなっていた部屋に明かりが灯されると部屋から一旦出て開発室に戻る。

「他にはなにが出来る?」

「トランプを2セット用意してくれないか?」

三輪達が調べたい事を調べ終えたが、私の事だからまだなにか隠している事があるのではと尋ねる。

遠くの物を見る、時速60km程のスロットをビタ押しする、暗い部屋で暗視機能は一切使わずなにを持ってているのかを見抜いた。普通ならばコレで終わるが、まだ終わらない。出水にトランプを2セット持ってきて貰うとシャツフルし、開発室の空いているテーブルにカードを扇状に並べる。

「なにをするつもりなんだ?」

「コレとコレだな」

扇状に開いた2つのカードの束から2枚カードを引いて出水に渡す。

まさかと言った顔の出水はカードの絵柄を見ると固まった……私はが渡した2枚ともスペードのエースだった。

「次はコレとコレ、更にはコレとコレだな」

「全部一緒のカードだ……いったいどんな手品だよ」

「私は人間が本来見えない光が見ることが出来る、その中には電磁波も分類されている。トランプのカードが発する極僅かな電磁波を共感覚で形や色を付けて識別している

……そしてそれらの技術を応用する事により占いを行う事が出来る」

「てことは学園祭でやってた占いはサイドエフェクトを使った物なのか……滅茶苦茶贅沢じゃねえか」

「そこまでのものじゃない、外れる時は外れるさ。現にこの前の大規模な侵攻のあつた日の朝に修に死相が見えていたが、なんとか上手く乗り切る事が出来た」

私のサイドエフェクトは便利で万能であるが絶対でも全能でも無い、使い物にならない時だつてある。

とはいえ、そんな時は早々に来ない様に未来を調整している……迅が。私は数秒先なら見通す事が出来るが数手先は見通す事が出来ない……予測することは出来るがな。

「数km先まで遠くを見て時速約60kmのスロットをビタ押しで当てて、暗いところでもなにかあるのかを見抜く暗視能力に加えて本来は見えない電磁波を共感覚で彩り形を作つて擬似的な予知能力……コレだけやれてよく今までボーダーに入ろうと思わなかつたな」

その後も色々テストをして私のサイドエフェクトの性能を確かめる。

識別能力とか何処になにかあるのか見つけるといった本当にシンプルなものだったので割愛させてもらう。

私のサイドエフェクトからデータを取り上げた雷蔵さんは少しだけ呆れている。コ

レだけの力ならばもつと早くにボーダーに入隊してくれたら良かったのだと。

「すみませんね、ボーダーはそんなに好きじゃないですよ」

原作云々はさておき私はボーダーがあまり好きじゃない

どれだけ優れた才能を持っていたとしても入りたいたとも思わないし、自分の見つけたやりたい事でも無い……まあ、三輪の復讐に手を貸すことはやりたい事の1つだが。

「コレだけやれるんだつたら実戦でどんだけ出来る事か……よし、三雲のトリガー構成を決めるか。やっぱここは手堅く弧月かスコープオンで」

「だからトリオンに物を言わせた射手の弾トリガーだろう。C級はシールドとかないし
ハウンド
追尾弾でポコポコに」

「いや、ここは拳銃ハンドガンの通常弾アステロイドが1番だろう。三雲はトリオン能力だけでなく射撃の腕も確かだと聞く。弓場さんの様に威力に割り切った通常弾アステロイドならC級のランク戦ではまず負けない」

一通りの検査を終えたので私は訓練生用のC級トリガーを貰うことになるのだが、そこで出水達がモメる。

私のサイドエフェクトとトリオン能力ならばある程度、いや、かなり好き勝手自由なトリガー構成にする事が出来るのだろう。

「あんな感じでモメてるところなんてただレイガストはどうだ？君の弟も使ってるトリ

ガーだ」

「そうですね……」

ボーダー関連では修に余計な力を貸してはいけない。修が試行錯誤を繰り返したり人に頭を下げたりしなければ本当の意味で力にならない。

修と同じもしくは似たようなトリガー構成にして修の手本となる……それならばレイガストはありと言えればありよりのありだが……

「それ確かオプシオン機能前提のトリガーですよね？」

「つぐ、痛いところをついてくる」

レイガストは推進力を与えるスラストが必要なトリガーだ。弧月やスコープイオンの様に単体で戦える道具じゃない。

雷蔵さんもその事を薄々自覚している様で指摘されると困った様な顔をしている

「ああ、もう埒が明かねえ。三雲、お前が決めてくれよ！お前の初期装備をよー」

そんな中でもまだ言い争っていた出水達。私のトリガーを最終的には私に決めてくれと言いつつ……いざ決めろと言われてもな

「まだ正式な入隊日にまで時間はあるし、もう少しゆっくりと……悩むな。狙撃手とかもありかもしれない」

「あんだけ動けて狙撃手なんて勿体ねえ！百歩譲っても荒船さんみたいな二刀流だろう

が！」

「……………うくん……………参ったな」

ボーダーに入隊する事がいざ決まったのはいいが、具体的にどうしたいのか明確なビジョンが見えない。

勿論、修が安心して遠征する事が出来る様にこちらの世界を全力で防衛するつもりだが、ボーダー隊員としてこうなりたいという明確なビジョンは持っていない。

「敷いて言うならば……………ボーダー隊員のお手本になるようなトリガー構成をしたいな」

本当に敷いて言うならば、そうだ。ボーダーはトリガーを渡して後は自分のやり方で試行錯誤を繰り返してくれと若干だが投げやりなところがある。曲がりなりにも使っているのが軍事兵器なのにマニュアルもカリキュラムも一切存在しないというのは如何なものかと思う。

「つー事はレイジさんみたいな完璧万能手でも目指すのか？」

「いや……………それとはまた違う別のアプローチをしたい」

「そっか……………お前のサイドエフェクトとトリオン量なら好きに出来る、頑張れよつてな
に上手い感じに話を纏めようとしてんだよ！お前のトリガー構成を決めねえと」

「めんどろだから追尾弾の拳銃か通常弾の突撃銃でいい」

どっちか後で試してみても、じっくりと来る方を初期のトリガーにする。

攻撃手系のトリガーはどうせ器用に使いこなせるのが目に見えているんだ。

「銃手？^{ガンナー}確かにお前なら滅茶苦茶上手く出来そうだけど、それでいいのよ」

「B級に昇格すればトリガー構成は好きに出来る。だったら最短でB級に上がる事が出来ればそれでいい」

細かなトリガー構成はB級になってからでいい。

出水達はなにか言いたそうな顔をしていたのだが、B級に上がってから決めれば良いことだと深くは聞いてこない……ぶつちやけた話、戦極ドライバーで斬月に変身するのが1番しつくりと来るがそれは有事の際にのみだろう。

雷蔵さんに追尾弾の拳銃と通常弾の突撃銃のC級トリガーを後で用意してもらおう事になり、一先ずは入隊試験を終える……入隊が既に決まっているのに入隊試験とは改めておかしなものだ。

「はいが」

開発室を後にし、やってきたのはボーダーの主に外部スカウトを受けた隊員が住んでいる居住スペースの様な場所だ。

冷蔵庫、洗濯機、テレビ、エアコンと4種類の家電製品は完備されているとの事で服だけ持ってきてくれればそれでいいとのこと。

服はまだ取りに行っていないので後で取りに行くとして部屋がどれだけの広さなの

かを確認しておきたい……場合によつてはガイアメモリとかが入ったアタツシユケースを持ってこれる。

「……一人部屋としては充分な広さか」

8畳1kの一室で既にベットは完備されている。外部スカウト組はこんなところで生活しているのか……ちよつと妬いてしまう。

机とかも置かれていてコンセントもある……パソコンを持って来る事を考えればタコ足配線を買ってきた方がいいな。何処にどう物を置こうか考えているとインターホンが鳴った。まだ引越すらしいのに誰かとドアを開いた。

「お隣さんが引越してくるって聞いたんやけどホンマやつたんやな」

「……」

ゴーグルが特徴的なボーダーのお笑い芸人もといボーダー随一の旋空弧月の使い手である生駒達人がそこにはいた……ので無言でドアを閉めた。

私のサイドエフェクトが言っている、アレと関わりとおかしくなる……というよりは第三者が見て面白い事になる。

82話（番外編数学理科編）

「さあ、続いては数学だ」

国語のテストの解答用紙を一同に返却をされた。ある者は顔を青くしある者は安堵のため息を吐いており、ある者は悔しがっている。

本家と違い本業が学生のボーダー隊員である彼等は点が取れて当然、むしろ取れなくてどうすると言った感じである。司会進行役である諏訪は国語の話題を終わらせて次の課題、一般教養の数学に変える

「さつきも言った様に100点の奴は1人も存在しねえ……1位だと思ふ奴は挙手しろ」

国語の解答用紙を見ていた一同も顔色を変える。

国語では失態を犯したがここではそんなミスは犯していないと風間は挙手をする。月見も挙手する。弓場も挙手する。どちらかといえば勉強出来る組は当然の様に手を上げている。馬鹿は馬鹿な事を自覚している為に1位争いには乗ってこない

「数学の1位は……弓場、お前だ！」

「つしやあー……あ、失礼しました」

1位を取ったことに大きくガッツポーズを弓場は取った。思わずといったところか直ぐに冷静になり場を乱した事を謝罪する。

1位を取ることが出来たのだから喜びを嘯み締めてもいいことなので諏訪達司会進行役は特に咎める事はせずに進行を続ける。

「よし、じゃあビリじゃねえって奴等……ぶれねえな、お前等ホントに」

米屋達馬鹿代表は流石にビリにはなっていないと手を上げた。

さつきと似た感じの展開になっているがそこは是非も無し。ブレる事の無い米屋達に呆れつつ珍回答を探していく

「諏訪さん、コレにしましょう……台形の面積を求める問題」

「そうだな。先ずは軽く行くか、台形の面積を求める問題。先ずは柿崎の解答」

「台形の面積の求め方〔(上底+下底)×高さ÷2〕、正解」

「ま、初歩的な問題でほぼ全ての奴が正解していた……米屋!!」

「ええっ、オレすか!?!」

突如として名指しで呼ばれる米屋。

ちゃんと答えは書いていてあつていると主張する前にモニターは動いてしまう。

「台形の面積の求め方〔たて×黄÷4〕……つぶ」

「橘高さん、笑っちゃいけないですよ……つぶ」

米屋の珍回答に橘高も貴虎も思わず震える。

それだけこの問題の答えに笑うところしかないのだ。

「お前、どつからツツコミを入れればいい？」

「オレとしては渾身の出来なんすけど」

「何処がだ！」

諏訪は大声でツツコミを入れる。

縦という字が感じて書けないから平仮名で書いたことに、横と書きたかった筈なのだろうが木偏を入れる事を忘れて黄色の黄になってしまっている事に、台形もなんだかんだで四角形だから4で割る物だと思っていた事に。

たった1つの答えでここまでのツツコミを入れさせてくるのは流石の槍バカとしか言いようがない。

「じゃあ、次の問題は円周率だ。円周率を現すギリシャ文字を書けという超簡単な問題……小荒井の答え」

「円周率をギリシャ文字で現すと【元】……………」

「小荒井、面白味に欠ける解答は処理するのが困るぞ」

ミスを犯した小荒井だが、よくある初歩的なミス故に貴虎は苦言する。これでも充分

なケアレスミスなのだが珍回答とは言えず面白さに欠けている。真面目なテストの答が珍回答の公開処刑となっていては誰もツツコミを入れない。元と π を間違えるなんて面白くもなんともない解答なのだから。

「本物の珍回答を見せてやれ……別役太一の答え！」

「円周率をギリシャ文字で表すと【ENSYURITU】……ギリシャ文字で現せつつてんだらうが！」

「だからローマ字にしたじゃないですか」

「別役、ローマはイタリアでギリシャとは違う国だ」

「マジすか!？」

最早国すら違う、流石は本物の悪、一味も二味も違う。

貴虎が割と本気で呆れている中で諏訪は風間の模範的な解答である π を出して、その場を終わらせて次の問題に進む。

「次の問題は速度の問題で超サービス問題だ、時速60 kmを分速に変換する問題だ……沢村さんの答え」

「時速60 km \parallel 分速【1000 m】……模範的な解答ですね」

「まあ、冷静に考えれば60分^{1時間}で60 kmだから1分で1 kmって簡単にも程がある問題だな……そんな問題でもミスをした奴がいる。仁礼!!」

「アタシっすか……やべえ、なに書いたか自分でも思い出せねえ……」

自分でやった問題なのに全くといって記憶がない光。

なんて書いたのか必死になって思い出すよりも先に目の前のモニターが動く

「時速60km≡分速【36000000m】」

「え〜ちゃんとした時速計算すればこの乗り物はマツハ3ぐらいを出している、何処の世界にマツハの問題を求めるテストがあると言うんだ」

「うっ……ほら、そこはアレだよアレ……」

「アレとはいったいなんだ？」

「それはだ………すみませんでした」

貴虎に苦手意識を持っている光は貴虎に睨まれたが為に頭を下げてしまった。

頭を下げたからと言って急にテストの点数が良くなると言ったわけもなく光はオロオロと椅子に座ってしまふ。

「続いても時間の問題だ。1日が何分か答える問題……日浦！」

「ちや、ちゃんと答えを書きました！正解の筈です！」

「日浦茜の答え 1日≡【1440分】」

「問題のない面白みも欠けているが正解だ。一日は24時間、1時間は60分、24×60をすれば簡単に答えは出る……太刀川さん、そうですよね」

「お、おう。24時間だからな！」

貴虎に睨まれると冷や汗を流す。

奴もまたテストになにを書いたのか全然覚えていない勢の1人であり、もしかしたらと考えているとモニターに答えが映し出される

「太刀川さんの答え1日」【365, 4年に1回366分】

「それは年月の事だろうが！俺達が聞いているのは1日であつて一年がどんだけあんのか聞いているんじゃないよ！」

「あれ、おかしいな。テストの時に1年について書けつて書いてあつた気がするんだが」
「慶、見苦しい言い訳はするんじゃない！」

「忍田さん、すみません……ホントにすみません」

結構ガチめに本部長に太刀川は怒られる。

あまりにも初歩的な問題をミスしてばかりの連発であり、言われていないだけで他にも様々な珍回答を彼は残しているのだが言わないのが貴虎なりの優しさだったりする。

「6時間5分しかない1日とか絶対やだぞ。寝たら直ぐに次の日を迎えてるだから……4年に1回、366分つてなんの帳尻合わせだ！1分ぐらいで狂う程に地球は小さくねえぞ！」

「諏訪……お前」

「(こ)ぞとばかりに笑ってますね……」

司会進行役という美味しい役割を得た為に諏訪はゲラゲラと笑う。

諏訪は美味しい役を手に入れて頭に乗っている事を貴虎や風間は気付くがその事は深く言及しない。だって誰が見てもこんなの美味しい役に決まっている。例え他の隊員がやっていてもゲラゲラと笑うだろう。

「次は計算の問題だ……どれにする？」

「複雑な問題だと分かりづらいですし、コレなんてどうですか？」

「お、いいなそれ」

思う存分に笑い終えたので次に進行していく。

何処かに珍回答がないのかと諏訪は貴虎を呼び寄せて話し合い、橘高に問題を読んでもらおうとするのだがあえてここで制止して黒板に数式もとい問題を書いていく。

【 $4 + 6 \times 3 - 2$ 】さあ、この問題を……緑川、答えてみる」

「三雲さんさ、幾らなんでもオレを馬鹿にしすぎ……28」

「そんなんだからバカにされるんだよ」

「ええっ、違うの!？」

幾らなんでもそりゃ外しはしないという問題を緑川は見事に外した。

その事に黒江は大きいため息を吐いて正しい答えを教えようとする。

「駿、○がついていない限りは掛け算と割り算は先に終わらせておくものなのよ……答
えは20ですよね」

「ああ、正解だ……初歩的な事だ、緑川、×」

不正解の人間には厳しくいく。それが社会の構図なのだから。

他にも色々珍回答があり発表される度に諏訪達司会進行役は震えて笑う。人の面
白い解答でとにかく馬鹿笑いをする。制裁を加えてやろうかと思えるぐらいには馬鹿
笑いが続きやつと納まると次の問題が出てくる。

「さあ、次の問題ですが九九の7の段を書けという超サービス問題……忍田本部長、

7、1が」

「7だ」

「風間さん7、2」

「14」

「帯島、7、3」

「21つす！」

「黒江、7、4」

「28です」

「緑川、7、5」

「35だよ」

「修、7、6」

「えっと、42」

「太刀川さん、7、7」

「48!」

「え」

「え」

「別役、7、8」

「56」

「小佐野、7、9」

「63だよ」

貴虎が適当に当てて九九の7の段を言わせる。

ただ1人間違いなく答える事が出来ており、ただ1人だけ間違えた男がいる。間違えた男は手を広げて指を降り7の段の確認をし始める。

そんな事をしなくてもたった今、貴虎が隊員達と一緒に答え合わせをしたのだが、段々と太刀川の顔色は悪くなつていく。

「太刀川さん、7、7?」

「……48だ」

「はい、モニター作動!」

「 $7 \times 1 \parallel 7$, $7 \times 2 \parallel 14$, $7 \times 3 \parallel 21$, $7 \times 4 \parallel 28$, $7 \times 5 \parallel 35$, $7 \times 6 \parallel 42$, $7 \times 7 \parallel 48$, $7 \times 8 \parallel 55$, $7 \times 9 \parallel 63$ 」……なんで?」

橘高は疑問に思った。途中で7の段を間違えており、そのまま間違えると思いきや9のところの間違いを訂正した。普通ならば「あれこれ、間違いなんじゃ」と疑問を抱くのに全くといって疑問を抱かない。どうしてだろう。馬鹿にしか分からない謎である。そんなこんなで数学は終わりを迎えて次の科目である理科がやってくる。

「理科のテストは平均点がいい方だ……ただ某本家の方でも馬鹿がやたらと理科の成績が良かったりするわけで、あんまり良い話じゃない。理科のテストに自信があるという人達……おっと、意外と多いぞ」

理科のテストはそんなに悪くはない。

成績が残念な方達もそれなりに自信があるらしく数学の時と打って変わってか、手上げる人が多い。貴虎はこの中に1位は居ないが2位、3位を居ることを知っているがバカよりも点数が低いという不名誉な事態を避ける為にあえて言わない。イケメソである。

「じゃあ、まずはこの問題。光合成に必要な物は光と水とホニヤラ○だという問題……熊谷、お

前だけ不正解だ」

「えっ……えっ!?!」

「おいおい、マジかよ。クマだけ不正解とかありえるのか?」

「意外とこういう事つてあるんですよ。橘高さん」

「熊谷の答え　光合成に必要な物は光と水と【日光】である……」

「ケアレスマミスだな」

問題の答えが映し出されると熊谷はしまったという顔をする。

いきなりの五教科のテストを受けさせられれば1問ぐらいはケアレスマミスをする。貴虎は熊谷の側に寄り肩をポンと叩くと首を横に振った。ドンマイとしか言いようがない。

確実に点を取ることが出来る問題をうっかりミスで落としてしまった事に軽くショックを受けているがショックしている場合でなく司会は進行していく。

「……これ」

「どうかしました?」

「正解にしているのかしら?合つてるといえば合っているのだけれど」

「あゝ………太刀川さん、米屋、緑川、起立」

「な、なんだよ。問題の答えはCO2であつてるだろう」

橘高がテストの解答に違和感を感じた。その事を貴虎に報告すると貴虎の目の色は変わり、太刀川、米屋、緑川の3名を立たせる。

3人とも答えはちゃんと書いてあり、正解だと主張をするのだが貴虎の目は厳しい。「CO₂と書かずに正式名称で書いてみる」

「え……」

「んだよ、それくらい簡単だよ」

この3名共にこの問題の答えをCO₂と書いてある。

別に答えとしてはなにも間違っていない。光合成に必要なのは光と水とCO₂なのだから……ただし、それがホントに皆の知っているCO₂ならばだ。米屋は前に出て黒板に文字を書いていく

「【二酸化酸素】だろう」

「はい、アウト!!」

ドヤ顔で米屋は答えるが諏訪は黒板消しで米屋の書いた答えを消していく。

それと同時に太刀川や緑川が冷や汗を流している。米屋の書いた答えが間違っているのならばいったいなにが正しい答えなのだろうかと必死になって頭の中を探すが答えに辿り着かない、だってバカなもの。

「CO₂＝二酸化炭素です……一応は答えはあっているけど、間違った覚え方をしてた

ので○から△に変更しますね」

「そんな、稼ぎどころを奪うだなんて……酷いぞ、三雲!!」

なんとでもいえ、普通は二酸化炭素を二酸化酸素と間違える事はしないんだ。

米屋達の答案用紙に△マークが刻まれると一同は次の問題に進む。

「え……おい、コレ下ネタだけど大丈夫なのか?」

「いいんじゃないですか? 思春期真っ只中の学生らしい答えになってますし……橘高さんが嫌でしたら飛ばしますけど」

「いいえ、別にいいわよ。この程度で恥ずかしがる程、初心じゃないわ」

次の問題の解答を見て3人で話し合う。

次の問題の内容とは花粉がめしべの柱頭についている事を○ホニヤラという理科の問題の中

でも初歩的な問題なのだがこの答えに色々問題がある。

「花粉がめしべの柱頭についている事をなんと言うか、この問題の答えは……三雲の答え」

「花粉がめしべの柱頭についている事を【受粉】」

「まあ、修なら答える事が出来て当然の問題だ……仁礼!」

「アタシかよ……なんて書いたっけな」

「花粉がめしべの柱頭についている事を【セックス】という」

「あながち間違いと言えないけどもお前、お前、よくこんな解答を書いたな」

R 指定ド直球ドストレートの問題の答えに貴虎は呆れる。

「受粉までの過程を書けと言っているんじゃないんだ。受粉した事を書けって言ってるんだ……思春期とかそういうのが気になるのが分からなくもないけれども、保健体育のテストでもなんでもないのでセックスって答えは出てこねえよ。百歩譲って人工授粉とかだからな」

なんでこんな問題でこんなミスが起こりうるのか、やはりそういう感じの事が気になるお年頃というもの。

他にも様々なバ解答が映し出され、教室内に爆笑の渦を巻き起こしていく。

「じゃ、理科のトップは……沢村さんですね」

ある程度の笑いの撮れ高を取ることが出来たのでテストの順位を発表していく。

理科の科目の1位は沢村であった。沢村は小さくガッツポーズを取っており、ボーダー隊員達の前で示しがつくことが出来た。コレで馬鹿ではボーダー社員になる事は出来ないぞと証明される。

「理科のビリは……緑川、お前だ。黒江と接戦を繰り広げていたがギリギリお前の方が点数が足りない」

「そ、そんなあ」

理科の科目のビリは緑川だった。

第83話

「ちよ、ちよつ。なんで無言で閉めるんや!」

「すみません、ちよつと気分が悪くなったんですよ」

「大丈夫か、医務室にまで案内したるで」

「大丈夫です。直ぐに収まったので」

無言でドアを閉めると全力で開けに来た生駒さん。お隣さんが生駒さんとか呪われているのか幸運なのかどちらかは分からないが色々と混沌としている事だけは確かだろう。ビツクリ人間というか古典的な面白い人でなかが飛び出してくるか分からないコミカルな人……どちらかといえば苦手なタイプの人だ。いや、生駒さんは悪くない。コレは私自身が個人的に苦手としていただけで私が悪い。

「お久しぶりですと言った方がよろしいでしょうか?」

「せやな。ドラえもんモノマネをした奴って印象が強いわ」

昨年のボーダー主催のイベントで生駒さんとは会っている。ちゃんと話し合うのはコレがはじめてなので頭を下げる。

さて……どうしたのか……とりあえず家に帰って洋服の荷造りでもしておかないといけないな。

「ありがとうな」

「なんの話ですか？」

「隠岐達から聞いたわ、うちの部隊が合流出来たん自分のおかげなんやろ？ あん時まともにも動けへんかったら今以上に被害がデカくなつてたかもしれへん」

「……」

お礼を言われるのはなんだかムズ痒いな、私としては部隊が合流すればそれで動ける駒が増えると認識していたが礼を言われるとは思ひもしなかった……いや、待て……

「感謝をしてくれるならその前に拉致被害者を出さないでほしいですね」

「俺んところは結構頑張つて……水上達も必死になつて頑張つてキューブ化されたC級助けたんや」

「1人でも被害を出せば意味はない……つと、生駒さんを責めても仕方ない。責めるのならば……いや、もう既に終わったことか」

ボーターが記者会見という後始末まで終わらせたんだ。今更大規模侵攻であれができたこれのできたと根掘り葉掘り掘り下げてはいけない。

未来へはもう進み出している。ならば、出来る限りの最善の未来を掴み取る為に努力

し精進を怠らないでおく……………。

「……………私はなにをすればいいんだろうか……………」

今の今まで大規模侵攻について考えていた。いざそれが終わり、次に向かうことが出ていない。次という目標が出来ていない。

元々将来になにがしたいとかの夢を持っているわけではないのだから致し方がない事かもしれないが……………暇になってしまっているな。母さんからボーダーでは修に力を貸してはいけないうとまで言われている。修が本当の意味で成長するには私が助言したりしてはならない……………私は修に甘やかしてしまおう自信がある。

「どしたん、めつちや表情変わつとらんけど浮かない顔やで」

「表情が動かないのは親の遺伝です。少しだけ暇な時間が出来ただけで、そんなに気にする事じゃないです……………多分」

「多分って随分と曖昧やなあ」

ボーダーに出資する事は正式に決まった、トリオン能力を身体測定と同時に調べる事になるだろう。

ならばどうするか。私が自分ですべきと思ったことをすればいいんだろうか……………

「こういう時は一箇所に留まっててもしやあないわ。空気切り替える為にも場所、移すか。ボーダー内を案内したるわ」

「そうですね」

このままだとこの部屋に引きこもってしまう。パソコン一つで株に手を出して金を増やしてしまうだろう。

今のボーダーに必要なのは金ではない……いや、金も必要な物なのだが。生駒さんの言っている事にも一理あるので居住スペースを後にしボーダーの中を案内してもらう。

「ここがランク戦を行うブースで、今日も今日とて皆が腕を競い合つとる」
「イコさん、なにしははってるんですか」

ブースに案内してもらおうと水上先輩と遭遇した。

「三雲にボーダーを案内しとるんや」

「水上先輩、どうも」

「おおっ……なんや随分と珍しいところで会うな。自分、ボーダー嫌いやなかつたっけ？」

「嫌いな事には変わりませんよ……ただ世の中には好き嫌いで仕分け出来るほど甘くはないですし感情的にもならないんですよ」

何処まで行こうが私のボーダー嫌いは変わりはない。ボーダーという組織を大きくしたというのにちゃんとしていないのだから。

だからといってグチグチと文句を言い続けるだけでは意味がない。そろそろこちら

からアクションを仕掛けなければならない。ボーダーがちゃんとした組織にする為にも。

「大人やな」

「まさか、グチグチと文句をたれこぼす駄目な男ですよ私は……結局のところまだなにも成し得ていない」

ボーダーに対する不満があるのならばボーダーに直接介入して変えればいい……それを今までしなかつたんだ。

水上先輩は大人だと認識しているが母さんから見れば私はまだまだケツの青い子供なんだろう。

「ランク戦、しとくか？」

「入隊は決まりましたがトリガーがまだ支給されてないです」

仮に支給されていてもC級のトリガーで出力が低かったりするし、一個の装備だけになつてしまっている。

流石に手練のボーダー隊員を相手にC級の貧弱な装備で戦うのは厳しいな。

「せや、礼言うわ。隠岐をイコさんのところに連れてつてくれて、お陰で生駒隊として大規模侵攻で活躍する事が出来たわ」

「……その事なんですけど隠岐から具体的にどんな感じか聞いていますか？」

「三雲が送ってくれたって言ってたけど、詳細は伏せられとる……言うなと口止めされとるし、なんとなくて予想がつくわ」

流星はIQ高そうなブロッコリー、私がトリガーを隠し持っているのを薄々察している。

ランク戦が出来ないし目ぼしい対戦カードが配られているわけでもないのでランク戦を行えるブースを後にし、次に向かったのは狙撃訓練所。

そこではボーダー隊員達が狙撃の訓練をしており、ここではメガネは外していた方が良く私のサイドエフェクトが言っているのでメガネを外しておく。

「あ、メロンさんじゃないっすか!」

「ストップ!ストップ!」

夏目出穂がそこで狙撃の訓練をしていたのだが私の存在に気付き喜々として近付いてくる。

色々と危ない事を言ってきているので口を閉じさせる。

「私のあのメロンは一応は極秘扱いで上から喋るなどなっている……いいな?」

「す、すんませんっす……でも、あん時の印象が強すぎて。メロンをあそこまでカッコよく着こなせているのはもう凄すぎるっすよ」

「言うな照れるだろう」

斬月のメロンエナジーアームズやメロンアームズの事を言っているのだろうが、恥ずかしい。

確かにメロンをあそこまで着こなせる人は居ないだろうが……恥ずかしくてむず痒い。

「この、この色情魔があ!!」

「生駒さん、どうしたんですか?」

夏目と仲良く談笑していると生駒さんはプルプルと震えて怒りを顕にする。

怒っている理由に心当たりは特になく、なに対しても怒っているのか疑問に思っていると横で水上先輩が呆れていた……いや、ホントになんでだ。

「なに素知らぬ顔で年下の女の子にあだ名で呼んでもらうとんねん!」

「それだけ初回の会合にインパクトがあったんです……なにか勘違いしているかもしれませんが、私には」

「隠岐と一緒にモテへんとか言いつつ滅茶苦茶モテてるパターンやろ」

「うくん、強ち間違いとは言われへんな」

「水上先輩、見捨てないでください」

モテたいという欲望から来る嫉妬の炎を生駒さんは燃やす。

私がそこそこモテている事を水上先輩は知っているのでどうしたものかと悩んでい

る。そこは普通に助け舟を出してくれるだけで助かるんだが……仕方ない。

「生駒さん」

「なんや！イコさん、滅茶苦茶にブンブンなんやで！こうなったら話、全然聞かなくなるんや」

「その割には滅茶苦茶意識してはるやないですか」

「……そんなにモテモテになつても結局のところは一人しか選べないんですよ。わーきやー言われてもホントに大事なのは如何にして一人の女性を愛し貫くかだと私は思っています」

「ぬうおあ！目が、目があ！！イケメンビームを放つてきおつた」

「まあ、言うてる事には間違いないやろうけど……イケメンの自慢話にしか聞こえへんで」

「っは！せや、モテてる男やからそんな事を言えんねんで！！」

「つち、話がまた元に戻つてしまつたか。生駒さんを煽てる方法は今のでなんとなく分かつてきた、水上先輩が余計な事を言わなければそれでチャラになつていたが……ツツコミ役のこの人が居ないと色々大変なので是非も無し。」

「メロンさん、このゴーグルの人は誰ですか？」

「ボーダーでも指折りの攻撃手、剣の達人と書いて生駒達人と呼ぶボーダーの頼れる先

輩だ」

「……そう！俺こそがボーダーの旋空弧月の使い手の生駒達人、気軽にイコさんと呼んでや」

「手のひら返し早いなあ、オレは水上敏志、イコさんところの部隊の1人で射手やつとる」

生駒さんを盛り上げる形で自己紹介すると生駒さんはそれに便乗してきた。

ホントに乗せやすい人だなと思いつつもサイドエフェクトを用いて未来を占う……ふむ……

「皆さん、これから少しだけ時間が空いていたりしますか？」

「夕方から防衛任務やから、それまでは暇や」

「オレも夕方までなんか用事があるとかは無いで」

「アタシもちよつと息抜きをしたいんで手が空くつすよ」

生駒さん、水上先輩、夏目の3人は時間を作るか……3人を巻き込むか否か……

まあ、言い出したのは私だしある程度は責任を取らないといけない。今から行う行為に多少の罪悪感を抱きながらも私は3人を連れて歩く

「こうしてちゃんと顔を合わせるのは久しぶりだな」

「三雲、さん……」

「え、なんなん。三雲、ボーダーの狙撃手の女の子に毒牙にかけとるん？」
「イコさん、今からシリアスになると思うんで黙っといてください」

ちやんと向かい合って顔を合わせるのとはそれなりに久しぶりの日浦茜。

生駒さんはバカな事を口走っているのを水上先輩は叱りつけると今までの明るい空気が一変して不穏な空気が醸し出す。

「私から切り出した方がいいか？」

「つ……………う……………どうあわああああ!!」

私から言うべきだったのかもしれない、日浦は大きく涙を流し声を上げる。

周りで狙撃訓練をしていた人達は急に何事だと慌てているのでとりあえずは日浦の肩に手を置いた。

「ここではなんだ、場所を移すぞ……………生駒さん、水上先輩、夏目、悪いですけどちよつと話に付き合ってください」

「ええで」

「なんや重い話になりそうやな」

「私で力になれるならいいっすけど……………」

3人から許可を頂いたので狙撃場を後にし、飲食スペースにやってくる。

連れてきたのは私なので飲み物代金は出すと5人分の飲み物を購入し、空いている適

当な席に座る。

「ほんで、なんで泣いとったん？」

緑茶を飲み一息つくと、水上先輩から話を切り出す。

日浦はグスグスと涙を流しつつも呼吸を整えて何故泣いていたのかを教えてくれる

「三門市から引つ越す事が決まったんです……三雲さんの言うとおりにしました」

「メロンさんの言うとおりに？」

「去年、高校の学園祭で三雲さんに占つて貰ったんです。そしたら私に不吉な相が浮かんで……三雲さんの占いどおりになって」

「三雲、お前占いなんか出来たねんな」

「まあ、色々と裏技を使いましたけども……私の占い通り災害が起きて、常識や法律に負けてしまったか」

「……はい」

目を真つ赤にしながら日浦は頷く。

私が裏で活躍したおかげで死人こそ出なかったものの、重症者や拉致被害者（C級）が出てしまった。常識的に考えればこんな街に住みたくないし、こんな組織に自分の子供を置いておけない。

「どの辺りまで引つ越すんだ？」

「電車で2時間ぐらいの距離のところ……私、何度も何度も引つ越したくないって、でももう決まった事だから変える事は出来ないって」

「……別に引つ越してもいいんじゃないのか？この前の一件で危うく死人が出るところだったんだ。なら、安全なここではない何処か遠いところに避難しても、電車で2時間は中々に遠いが決して会えないわけじゃないんだらう」

「嫌です、私、那須隊の皆と離れたくありません!!お母さん達は大人になってからもう一度って言つてましたけど大人になったらトリオン器官が成長しなくなつて……どうあぁあ!!」

しまった、言葉を間違えてしまった。常識的に考えれば戦場に娘を立たせたくない日浦の両親が正しい。潔く諦めて第二の人生を謳歌すればいいと勧めようとするが日浦はそれが嫌で涙を流す……

「生駒さん達は今回の一件でなにか親達から言われたりしましたか？」

くだらない同情は却つて悲劇を生んでしまう。私の一言で日浦を大号泣にまで追詰めてしまったのだが、そこは仕方がないことだ。

ここでついてきてもらった3人に意見を求める。

「まあ、当然と言えば当然の反応としか言いようがないわ」

ポリポリと頭を掻きながら水上先輩は冷静に答えてくれる。

「根付さんとか嵐山隊が色々頑張つて勸善懲悪の組織になる様にイメージを与えとるけども、やつてることは戦争で三門市の一部地域は戦線の最前線と言うてもおかしい。この街から出ていけばボーダーの意見も無いわけじゃないし、日浦のオカン達は当然の行動や、なんも間違いない」

「水上、もうちよい言葉を選べや」

「イコさん、それはあきませんよ……三雲は率直な意見を求めてるんや。オレに仮に息子や娘が居て今回の一件が起きたらボーダー辞めて引つ越そうて言いますよ」

意外とドライな事を言う水上先輩。日浦は涙目になってるので生駒さんは水上先輩を咎めるが、今欲しいのは綺麗な言葉じゃない。汚くて醜い現実だ。本当に欲しい物が分かってるからこの3人についてきてもらつたんだ。

綺麗な事ではなく厳しい言葉を送つて欲しいと言うと生駒さんは目を閉じて真剣に考える。

「やっぱ戦争はアカンつて、こんな可愛い子を戦わせるなんてボーダーは酷い組織や」

「生駒さん、真面目に……いや、コレが素なのか」

ウンウンと頷きながら生駒さんは意見を出してくれる。

そんな酷い組織からスカウトを受けてやってきた人が生駒さんや水上先輩なのだろうが、それを言つてしまえばおしまいだ。

「夏目は？」

「私は……心配されましたけど、それでもボーダーにいたいと言ったらそれ以上はなにも言つてきませんでした」

割と放任主義なところはあつた。水上先輩、生駒さん、夏目の意見が出揃う。

「私、まだボーダーにいたいんです！三雲さん、占いでボーダーに残ることが出来る未来を当てるのが出来ませんか！」

私の占いに頼つてくる日浦。

メガネは既に外しているので日浦から放たれる極々僅かな電磁波から日浦の未来を読み取る……私のサイドエフェクトは迅のサイドエフェクトと違って数秒先は読めるが数手先を予想することはできても読み取る事は出来ない。

日浦がボーダーに残留出来る未来はなくてもないが……これは、厳しいな。

「三雲のところはどうなんや？なんか言つてこなかったん？」

3人の意見等が出終えたので水上先輩は聞いてくる。

「母さんが危険だから止めておきなさいと言いつつも本当にやりたい事ならば好きにしなさいとは言つてもらつています、弟はホントにやりたい事だからあんな事があつてもボーダーを辞める道は選んでません」

我が家は我が家で色々とアグレッシブだ。私の事も母さんはああだこうだ言つてき

ていない、むしろ頑張れと応援してくれている。

「日浦、どうしてもボーダーに残りたいなら残っても大丈夫だと親に安心させないといけない」

「ボーダーの事が家で話題に出ると大丈夫な組織だって何度も何度も説明しました」

「それじゃ足りないんだ……お前自身が雑魚である事には変わりはないんだ」

「おおつ、ハッキリと言っておつた」

今回は厳し目についておかないと大変なのでハッキリという

「奈良坂や当真さんの様なトップクラスの腕前を持っているわけではない、謂わば代えが何時でも聞くレベルのボーダー隊員だ。ボーダー側が辞めないでほしいと言わせる程の魅力も価値もお前には無い。お前が辞めてもお前と同じぐらいの腕の狙撃手はどうにかフオローするだろう」

「うっ……」

「そこで涙を流すな、現実と事実を受け入れろ……今回攫われたC級隊員は今頃どうなっているんだろうな。お前はと思う？」

「……それは……」

「拐われてきた奴隷として馬車馬の如く扱き使われてるかもしれない……次はお前かもしれない、それでもお前はこの道を歩むつもりか？こう言ってはなんだがお前はボー

ダーの活動を部活動の一種かなにかの認識に近い形で捉えている。水上先輩が言った様にボーダーは戦争を起こして未来視のサイドエフェクトというチートを用いた上でもこの前被害者を出した。この先、やっていくのならばその辺りの認識を変えなければ話は進まない」

ボーダーのランク戦は人によつては最高の e スポーツだ。

太刀川さん、米屋、緑川は恐らくだがランク戦をゲーム感覚で勤しんでるところがある。それが悪いかと言われれば彼奴等は A 級隊員という結果を残しているのだからとも言えないところだ。日浦にも似たような事は言える……ボーダーがそういう風に見せない様になっているがランク戦はゲームでなく軍事演習の一種だと私は認識している。

「私に言われたからじゃない、自分の意志で本当にボーダーに残りたいと思つていたらば……目指すしかないな」

「A 級に、ですか？」

「A 級になれば流石にボーダーも辞めなくてくれと言つてくるだろうし、なによりも親を安心させる事が出来る。私の占いでは A 級に昇格すればああだこうだ言ってくる可能性が減る」

「替えの効かないボーダー隊員になれば、ちよつとやそつとで辞めさせようとはしない。」

「親に交渉する際に高校卒業までのボーダーのA級隊員になれなかったらキツパリとボーダーを諦めて普通の生活を送ると言って……そうだな。次のランク戦で今のランクングよりも上位に食い込まなければこの話は最初から無かった事にしていいと言え
ばいい」

最初に無理難題を押し付けて、それは無理ならばコレでどうだと妥協をする。妥協した内容こそ本来の交渉のカード、最初から言えば無理だと思われてしまいが、それよりも無理難題を出すことでそれならばいいと妥協させる交渉術、ドア・イン・ザ・フェイス・テクニクだったか。

「今より上位に……」

「フアイトやでー！」

「イコさん、応援する人は構いませんけど那須隊が今より上位になるって事は最低でもB級中位からB級上位にならなアカンって事で生駒隊とぶつかり合う事になるんです
よ」

「だからどうしたんや、必死になってボーダーに残ろうとしてんねんで。敵とか味方とかそんな関係無いわ」

やだ、生駒さん滅茶苦茶イケメン

「でも現実的な話、那須隊B級上位に食い込めるん？中位から上位に繰り上がる事は出

来ても上位の中じゃカモになるんが目に見えとるで」

「それは……ど、どうしよう……」

那須隊は弱いとは言わないが特段強いというわけではないB級中位の部隊。

危険視すべきはリアルタイムで弾道処理が出来る那須で後はどうにかこうにか出来る、A級の精鋭なら倒せる相手だ……

「日浦、最後の確認だ……お前はボーダーに残留したいんだな？その道は下手すれば生と死の境界線を跨ぐ事になる。危険でしかない道で、明日は我が身の道だ。それ等全てを覚悟した上で那須隊に、ボーダーに残りたいんだな？」

「……はい」

返事をした日浦から発せられる電磁波は覚悟を決めたものだった。

認識としてはまだ部活動の一種なのかもしれないが、それでも日浦が本当にやりたい事だと思っている……

「決まりだな、早速親に交渉してこい……A級になると言うんだ」

「はい……あのっ」

「なんだ？」

「なんでここまでしてくれるんですか？同情、とかじゃないですよね」

占いで分かっているからと言って助言をしてくる事に日浦は疑問に持つ。

どうして自分にここまで力を貸してくれるのか、冷たく強く見放す選択肢もあったのにどうして手を差し伸べるのかを。

「私は……いや、俺は弟達と共に歩む道を選ばなかった、嫌な事から逃げ出す道を選んだダメな奴だ。それでも、そんな奴でも誰かの行く手を阻む壁を越える為の踏み台になることはできる。信じれる友や家族と共に歩むことも誰かの見本となることも選ばなかった俺の……ノブレス・オブリージユだ」

なにをやっているんだ、私は。大分らしくない事を口走っている……呉島貴虎の様な高尚な人間じゃないんだ。

しかしコレでまた目標の様なものが出来たな。那須隊を上位にまで食い込ませると言う目標が……まあ、修達の敵になってしまふのならば手を抜くが。

第84話

日浦は早速、両親に交渉しに行った。

私のサイドエフェクトでは78%の確率で成功すると言っている……絶対とは言えないのがなんとも情けない。

「まったく、私はなにをしているのやら」

ノブレス・オブリージユだなんだとカッコつけたのはいいが場合によつては修達の敵となりうる可能性も秘めている。

修に力を貸す事を母さんから禁じられているが修以外には力を貸してもいい事になっている……修に早いうちにワイヤー戦法を教えたいが、そうすれば修の成長の妨げになる。血となり力となり肉とならなければ意味はない

「あんな事言うたんはいいいけど大丈夫なん？上を目指すにしてもランク戦まで一週間切ってんねんで、たった数日で上位に食い込む戦術とかパワーアップ出来るんか？」

「……無理ですわね」

大見得を切ったのはいいけれども、那須隊が急にパワーアップするなんてまず無理だ

ろう。

1日、2日でパワーアップをするなんてそんな都合の良い手段はない。新しいトリガーをセットしての新戦術とか無理だろう。確立された個の力があってこそ、連携は作戦、戦術は生きる……残念ながら熊谷と日浦はまだ成長途中だ。逆に言えば伸びしろとも捉えられるが、綺麗な言葉で見繕うのはやめる。

「まあ、やれるだけの事はやっておきますよ……貴重な時間を割いていただきありがとうございます」

「ええって、悩める子に道を示すんも先輩の役目やからな！」

生駒さん達に相談に乗ってもらえて良かった。夏目も息抜きになったようだしホントになによりだ……って

「こんな事をやっている場合じゃなかった」

元々、ボーダーの寮に引越す為にやってきたというのに何故に人生相談に乗っているんだ。

本来の目的を思い出すと来た道に戻るどころか家に帰って引越しの荷造りを行う。色々と完備されているから衣服だけでいい……だが、トリガーは念の為に持っていた方がいい。何故かは分からないが母さんがバグルドライバーⅡを持っているので3つ目は使うことは出来ないが

「よう、メロンくん」

「おい、どうやって住所を知った」

トリガーが入ったアタツシケースを両手に持ち家を出ると実力派エリートが待ち構えていた。

我が家の住所を教えた覚えは一切無いというのにすまし顔でぼんち揚げをバリバリと食べている姿はイラツと来る。向こうに敵対の意志はないのは知っているが……受け付ける事が出来ないのはちゃんとしていないからだろうか。

「熊谷ちゃん達に力を貸すんだってな。下手したらメガネくんの敵になるのに、危険な道を選んだね」

「私がそうすべきだと思ったからだ」

私の流儀を、私のノブレス・オブリージュを貫いた。ただそれだけだ。別に誰かに褒められたいわけでも勲章が欲しいわけでもない。

「私からコレを強奪するというのはならば、本気で叩きのめし地下に眠っているバカデカイトリガーを破壊するぞ」

「それはホントに勘弁してほしい。メロンくん、マジでぶっ壊す事が出来るんだもん」

エターナルのライドウォッチとはある人物に託しているが今すぐに取り戻す事だつて出来るんだ

「迅は限りなく可能性は低いけれど母トリガーが破壊されてしまう未来を読み取っている様でやめてほしいと頼み込む。やめてほしいならばくだらない詮索はやめてほしい。」

「メロンくんが持っているトリガーが気にならないと言えば嘘になるけどコレばかりはメロンくんを信用しておくよ」

「それでわざわざ我が家までなんの用だ？」

「もう一回、玉狛支部に来てくれないか？隠し持つてるトリガーを騙し取るなんて真似はしないからさ」

迅から発する電磁波から嘘は言っていない。

正直な話、T2ガイアメモリを自分の手が届くところに置いていないと不安しか過ぎらないのだが……どちらにせよもう一度玉狛支部に足を運ぶつもりだったからちやうどいいか。

「分かった……だが、念の為に戦極ドライバーを付けさせてもらおう」

「疑り深いな、メロンくんは」

戦極ドライバーを取り出し、ヒマワリロックシードをベルトにセットする。

こうすることで生きていく上で必要な栄養がヒマワリロックシードを経由して伝わってくる。食事を取る手間が省ける。今日はこの後色々バタバタする確率が97

%だと出ている。

「その錠前、まだ持ってたんだ……こんなところで変身しないでくれよ」

「ヒマワリロックシードは栄養補給の為に存在している、戦闘用のロックシードとはまた違う使用用途だ」

「メロンくん、ご飯はちゃんと食べたほうがいい」

「ぼんち揚げをバリバリと食べている男がなにを言っている」

互いに軽口を叩き合いながらもボーダーの玉狛支部に向かう。

ヒマワリロックシードを経由して栄養を摂取する事が出来る……栄養が空になったヒマワリロックシードは放置していたら勝手にエネルギーが集まっていったって、半日もあれば栄養が満タンになる便利な優れ物だ。ボーダーはそのメカニズムを説明……は無理だろうな。ヒマワリロックシード自体は栄養の塊で、それを摂取する為の道具が戦極ドライバーで戦極ドライバーの方を研究しないと栄養摂取のメカニズムは説明できない。

「よう、待ってたぞ。新しい部屋はどうだった？」

再び玉狛支部に舞い戻ると林藤支部長は歓迎してくれる。その手にはフォーゼのロックシードが握られている。

「分解したりしないんですね」

「代えの利かない貴重なトリガーだ、早々にバラせるか。スキヤンして内部構造を確かめてからだ」

「そうですか……それで、わざわざ私に改まって何用ですか？」

既に色々と事を終えているので今更話し合う事はないと思うのだがフォーゼロックシードを懐にしまうと林藤支部長はボーダーのトリガーを私に差し出した。

「既に知ってるかもしれないがあの記者会見のおかげかボーダーに入隊したいという子達が生れて1月、5月、9月のボーダー入隊が毎月切り替わる。最短でお前がボーダー隊員になるのは2月22日の土曜日だ……それまでC級のトリガーを与えられないが、お前の実力は既に知っている。このままなにもしないで正式な入隊日までダラダラ時間を過ぐすよりもボーダーのトリガーに馴れておいた方がいいだろう」

「話が上手すぎですね、なにか裏があるんじゃないですか？」

「……メロンの鎧を他人に与えないでほしい」

「与えるものにも戦極ドライバーは私にしか使用できない物ですよ。なんでしたら使ってみますか？」

バカモンロックシードに変わって上からタライが落ちてくるぞ。

「そつちじゃない……お前はトリガーの様なもの大きく分けて3つ、細かくすれば4つ持っている。大規模侵攻の際に修達の前で変身した戦極ドライバーじゃない方のあ

のトリガーはお前以外でも使用可能な物、違うか？」

「ええ、使おうと思えば修でも使うことが出来る代物ですよ」

隠し立てしても迅が居るので嘘をついても仕方がないことなので正直に答える。

「お前のトリガーはトリオン体を構築するんじゃないことなで生身の肉体の上に鎧を纏った状態だ。お前は上手く使いこなす事が出来ているだろうが他の奴等はそう簡単に使いこなす事が出来ない」

「未知の武器を使いこなせというのが無茶なものですよ」

「メロンくん、秀次をそのトリガー使用者に推薦するつもりだろ？下手したら大怪我をする未来も見えてるんだ……トリガーを渡すから秀次達にベルトを使わせないでほしい」

三輪にゲネシスドライバーを推薦しようと思っていたが、それはダメな事か。

「なにもお前に使うなって言っているわけじゃない、有事の際にはボーダーのトリガーを使わずに自前のトリガーを使って構わない。その辺りに関してはこっちで全責任を請け負う。お前は入隊前にボーダーのトリガー馴れて、他のボーダー隊員達は怪我をしない。どっちも万々歳な話だろう」

「……それは上から許可が降りていることですか？上の人達がなにも知らないというオチが待ち受けているのなら、その話はお受けする事は出来ません」

玉狛の独断でやっている事ならばこの話は無かった事にしてもらう。

例え危険な道だろうと三輪は力を求める。ならばゲネシスドライバーの装着者に私は推薦する。

「上にはメロンくんをこのまま放置だと面倒な事になるから先にトリガーを与えておく事にして話は通してる」

「随分と事が上手く運びますね」

「アフトラトルの黒トリガーを撃退したのはお前の功績だ。その戦功があれば自動的にB級に上げれる」

上手い、話が上手すぎる……私にボーダーのトリガーを今のうちに馴れさせておいてベルトを使わせない事が目的だろうか。

例えどんな状況でも私はボーダーのトリガーよりも戦極ドライバーを使う。そちらの方が性に合っている。出力もそっちの方が上だしな……狙いはまだなにかあるな。私をボーダーに縛り付けるのが目的だろうか。

「無論、正式な入隊式は受けてもらう……お前も迅と同じで裏で暗躍するつもりだろうか？」

「人聞きの悪いことを言わないでもらいたい……私は自分ですべきだと思っただけからやっているだけで誰かの為になんて高尚な人間じゃない。優れた人間だからと言って真っ

先に犠牲になるつもりなんて毛頭ない」

「……お前、本当に修の兄貴だな」

修は後先考えていない、私は色々と考えて行動している。その辺りを履き違えてもらつては困る。

迅速には迅速の狙いがあつた上で私にトリガーを渡してくる。正式な入隊日まで時間があつた、その時間まで暇を持って余しては腕は腐つてしまう。

「メロンくんには足りないのはとにかく経験だ。センスがあるのは認めるけど今までトリガーを隠して使わなかつた分積み上げてきたものがない。それをサイドエフェクトとセンスで誤魔化してるけど、これから先その誤魔化しが通用しないとんでもない相手が出てこないとも言えない。現にアフトラトルの敵を相手にモタツイてたでしょ」

「ふう………分かつた。そこを突かれるとなにも言えない………ボーダーのトリガーはありがたく使わせてもらおう………ただだからといって私の持つているトリガーを渡す事は出来ない」

「いいよ。仮に使えても生身の肉体なのには変わりないんだろう」

コレはそう、致し方なく受け取る………そう認識しよう。

ボーダーの正式入隊日にはまだ割と時間があつて、トリガーが使えない以上はその間に出来る事は少ない。アドバイスを遅れる程、私は優れたボーダー隊員じゃない、現場

で動くことは出来ても指揮する事は出来ない。

「とはいえ入隊日にはC級隊員として出させてもらおう……あまりズルをし続けるとなにも知らない連中にズルダイカサマだ鼻唄だなんだと言われかねんからな」

「メロンくん、真面目だね……じゃ、早速トリガーのセットを」

「いや、その前にトリオン体を改造してもらいたい。ジャージの様な見た目は嫌だ、ノーネクタイのスーツの様な物にして素顔を隠したいから覆面を被っている状態にしてもらう」

トリガーをセットする事に取り掛かろうとするがその前にやっておかなければならない事は多々ある。

特に顔が割れるのは色々とまずい。ただでさえ修の一件で修の素顔がボーダー中に知られているというんだ。ボーダーに所属している人達は公式HPで名前が載っていたりするし、素顔の1つでも隠しておかないとやっていられん。

「メロンくん、意外と形から拘るな」

「何事も見た目は大事だ」

「いや覆面をつけたスーツ姿の隊員の見た目は……いや、うん、よそう」

なにか言いたいことがあるようだが、私はなにも気にしないぞ。なんだったらドリフのコントに出てくる白鳥の格好でもいいぐらいだ。

林藤支部長に手伝ってもらいトリオン体を改造してもらい、早速どのトリガーをセットするのかを考える。私のトリオン能力とサイドエフェクトからなんでも出来ると三輪達は言っている。

「まあ、コレでいいか」

とりあえずのトリガーセットをする。トリガーチップは何時でも交換可能なのでコレで無理ならば別のトリガー構成にすればいい。

「トリガー、起動」

トリガーを手にし、トリガーを起動する。生身の肉体からトリオンで出来た肉体に換装されていく……生身の肉体となんら変わらない感覚だな。

サイドエフェクトは……無事に発揮されている。ただ生身の肉体から発せられる微弱な電磁波とは異なる電磁波を発している……コレは結構厳しいが、なんとかなるだろう。

「じゃ、やろうかメロンくん」

トリガーを使つての初戦闘の相手は迅速だ、仮想訓練が出来る部屋に入るとトリガーを機械に繋げて仮想訓練モードに入る。

さて、とりあえずは搦手で行つてみるか

「^{ハウンド}変化弾」

「つちよ、それ出来るのか!？」

レイガストを構えつつ、トリオンキューブを出現させて3×3×3の27分割して弾道を処理して迅に向かつて飛ばす。

変化弾は迅を大きく反る形で飛んでいくが途中でグインと曲がり四方八方から迅目掛けて飛んでいく。迅はサイドエフェクトでこの事を予見しているのか身体全体を包む固定シールドを二重に重ねて貼る。

「危ない、危ない……事前の情報とサイドエフェクトが無かったらやられてたよ」

「良かったな、サイドエフェクトに足もとを救われて」

「まさか水上と同じ技を使えるとは思わなかった……メロンくん器用だね」

嘘つきプロツコリーこと水上先輩と同じく言っている弾と違う弾を撃つボーダーでしか通じない高等技術を私は使える。

この手の技術ならば知識に入っているだけのもので十分に使いこなせる……と言っても未来視のサイドエフェクトを持つている迅を相手にフェイクだなんだと一部の小手先の技は通じない。

「どうした攻めてこないのか?」

「そつちこそ攻めないの?」

故に慎重になって攻め入らなければならない。

レイガストは火縄甜瓜DJ銃よりも軽いから簡単に振り回す事が出来る。ただ重いという事実に変わりなく素早い奇襲を仕掛ける事が出来るスコープピオンの使い手である迅を相手にするには……堂々と真正面から攻めるのは死相が浮かび上がってくる。

それと同時に迅にも見えているのだろう。下手に攻めるとカウンターでやられている未来が、迅のサイドエフェクトは数手先まで見据える事が出来るが数秒先は見えても対処しきれない。対して私のサイドエフェクトは数秒先ならば見通す事が出来て反応する事が出来る。

「じゃあこっちからいかせてもらう」

試合の泥沼化は待ったなしの中で先に動いたのは迅だった私の直ぐ目の前にエスクードを出現させて私の視界を阻む

普通ならばコレで一手遅れるだろう。その一手が有れば迅は並大抵のボーダー隊員ならば倒すことが出来る……だが今回の相手は並大抵相手じゃない。迅が攻めてくるのは見えたので後退しようとするが後ろにまでエスクードが生えていた。

「貰った」

エスクードを飛び越えて私に斬りかかろうとする迅

後退しようとして後ろにエスクードがある事に気付かなかったので動きに一手遅れを生じたが思考は止めない。動きが一手遅れていてこのままだとスコープピオンの斬撃

をくろう。ここから出来る手立ては一つしかない

「シールド」

「っ！」

シールドを腕を振るう迅の手元に出現させる。

シールドに行く手を阻まれ、私を切り裂く事が出来なかった迅が今度は一手、遅れを生む

「スラスター、ON」

その遅れた一手で潰しにかかる。

レイガストを片手で持ちスラスターを起動させて推進力を増して斬りにかかる……

ダメだな

「エスフード」

「っち」

地面からエスフードを出現させてカタパルト形式で私を押し出してスラスターを起動したレイガストの進路を変える。

私のサイドエフェクトで成功する確率が十数%だったので成功する事には期待していません。直ぐに思考を切り替えて次の一手を考えようとするがその前に迅が果敢に攻めてくる

「攻めは死に直結するぞ」

「死中に活路を求めらるってね……って、ヤバイ」

下手に攻めればカウンターの様なものをくらうのが分かった上で迅は斬りかかる

私は寸でのところで避けたりレイガストで受け流したりして……今だ!!

「スラスター、起動!」

迅の振るうスコピオンに対してレイガストを十手の形状に変化させる。

十手の間にスコピオンを挟み混んでそのままスラスターを起動させて手放すとスコピオンを叩き折る事に成功した。

ここで次に使う手は1つ、弓場さんと同じく弾速と威力に能力を降っている通常弾の

アステロイド

拳銃だ。早速腰につけているホルスターから拳銃を引き抜こうとすると手元に違和感を感じる。

「悪いな、お前の手を使わせてもらったぞ」

「手癖が悪いな、実力派エリート」

拳銃があるホルスター付近にシールドを展開させやがった。

私の手元にシールドを出現させて進路を妨害する技術を真似し、私から攻撃の一手を奪い、妨害した。たった一度見せるだけで真似をするとは戦闘の経験値が違う……だからといって負けていい理由は何処にもない。通常弾が無理ならば変化弾が残っている

「^{バイパー}変化弾」

迅を相手にフェイクを入れても無駄なのでめんどろなイカサマはしない。

トリオンキューブを6×6×6の216分割をして弾道の処理をしようとするのだが、ここで限界が来る。私のサイドエフェクトだと一度に大量の情報が視界から入る。そのせいで変化弾の弾道処理が上手く行えない……リアルタイムの弾道処理でなく事前に設定してある弾道に設定を切り替えて飛ばす。

「メロンくん、そんな付け焼き刃な攻撃じゃオレには届かないよ」

「……つち」

迅の片腕をレイガストのスラスターでもぎとることに成功したが、そこまでだ。

リアルタイムでの弾道処理が出来ていたのならばまだどうにかする事が出来たが、ボーダーのトリガーでの戦闘の経験値を積み上げていないのでそれが出来ない……いや、そもそもで変化弾の弾道処理が頭に追いついていない感じか。

迅の腕をもぐ事に成功したが既にレイガストは手元になく、当たらない変化弾を撃つてしまつてトリガーが使えない……詰みだ。トリオン体で殴り合う事も足掻く事も出来なくはないが、ここは素直に負ける……今はまだ無茶をするつもりはない。

「メロンくんホントに強いな。サイドエフェクトをメロンくんが持っているから強いって言うよりはメロンくんがサイドエフェクトを持っているから強いって感じだよ」

「私のサイドエフェクトはそんな生易しいものじゃない……使いこなすまで一苦勞した」

具体的に言えばお金が減ったり増えたりした。

「試合を終わらせるのに10分以上掛かったのはホントに久々だ……オレのサイドエフェクトとメロンくんのサイドエフェクトは相性が最悪みたいだな」

「それはどうだろうな。私のサイドエフェクトはまだまだ可能性を秘めている……積み上げた物があればお前に勝つことが出来る。それが分かっただけでも戦った成果はあった」

「経験値を積んだらオレに勝てるって？ 大分、大きく出たなメロンくん……もう一戦やるか？」

「いや、結構だ。その前にやっておきたい事がある」

迅との勝負はいい経験になった……今の時点で充分に強いと言えるが、私にはまだ先がある事を知れてよかった。

仮想訓練室から出ていき、アタッシュケースに手を触れる

「おっと、そのトリガーを使つての戦闘は出来ないぞ」

「私のトリガーは戦う以外にも色々使える……迅、お前は村上先輩を知っているな？」

「知ってるよ……っ!？」

見えたか、私がやろうとしている事を……ならば躊躇う必要は何処にもない。

「強くなる為ならば多少の裏技は使わせてもらおう」

『ダメー！』

一瞬にしてボーダーのトップクラスの實力者にならせてもらおう。

第85話

「トリガー、起動」

ダミーメモリを使ったちよつとした裏技を使った翌日の1月30日、学校が終われば早速ボーダー本部の自分の部屋に帰つて部屋に置いてあるトリガーを起動させる。一応はボーダーの内部なのでトリガーを使つても怒られる事はない。

「誰、アレ？」

「スーツを着てるって事は二宮隊なんじゃないの？」

ランク戦が行えるブース、ではなく狙撃手の訓練場にやってきた。

昨日は裏技を使つて一気にレベルアップを測つたのだが、狙撃手としての戦いは一切していない。未来視のサイドエフェクト持ちに不意打ちに近い狙撃で撃ち落とすのはほぼ不可能、集団で連携を取つた上で詰みの状態にしないと迅を撃ち落とせない。

私が目指している理想の自分は完璧^{パーフェクトオルラウンダー}万能手とはまた違う、文字通りなんでも出来るボーダー隊員だ。視力に関するサイドエフェクトも持っているので狙撃に生かさなければならぬ。

「あ、イーグレットを取り出したぞ」

拳銃系の武器は持ち前の器用さで使いこなす事が出来ている。だが、狙撃銃はまだまともに使った事はない

1番シンプルな構造をしているトリオンが多ければ多いほど狙撃の距離が増す狙撃銃イーグレットを構築し、構えるがスコープに目は通さない。

的は300m先にある……こうすればいいか？

「あ、当てた……って、掠っただけかよ」

300m先にある的にイーグレットの弾は命中した……が、ど真ん中とはいかずちよつと端っこを掠るぐらゐの形だった。

今ので掠るぐらゐの形ならば……もうちよつと左に逸れてもなにも問題は無いな。1回目の弾で弾道がどうなっているのかを見極めたのもう一度撃ってみると今度はド真ん中に命中した。300mの狙撃は特に問題無し、ならば次はと今度は500m先に的が出現するので照準を目の力だけで合わせ撃ってみるが、今度は真ん中から僅かに逸れて右斜下に穴が空く。

「ご、500m先をスコープ無しで当てやがったぞ」

またまたどれくらいなのか分かったので軌道を修正すると真ん中に当たる。

今度は750m先に的が出現する。ここから当てるのは至難の技だろうが、大分馴れ

て来たので今度はイケる。イーグレットを構えて引き金を引くとど真ん中に命中する。そこからはもう完璧にど真ん中を狙う事が出来るので今度は何処でも好きなところを当てられる様に特訓をしようと思つたと一旦的をリセットし、新しい的を出した後に漢字の月の形になるようにイーグレットで撃ち抜き成功させる。

「誰なんだよ、あのマスク」

綺麗な月の字を描き終えると周りからの視線に気付く。

マスクをつけたカジジュアルなスーツ男なんて目立つて仕方がない……コレも私の策略の内の一つ、派手に目立ちすぎるのも如何なものかというかめんどいな事になるだけだが仕方ない事だ……この場には来ていないのか？ 目当ての人物がこの場には来ておらず、来る可能性が結構低いので狙撃手の訓練所を後にし、ランク戦が行えるブースにまでやってきた。

100人以上は居るブースなので目立つことは早々に無い……と思いたいが、近くにいる人達は誰だアイツといった顔でこちらを見てくる……昨日は迅にポロポロにやられてしまったが相手が悪かった筈だ。時間はまだ余っているので適当な個室の中に入り、誰か手頃な相手は居ないかと探す。

「お、ちようどいいのが居るな」

弧月で8000点以上取っているマスタークラスで尚且10000pt越えじゃな

い、自分の実力を試すのにちようどいいカモ発見

ランク戦を申し込むとあっさりと承諾してもらう。因みにだが私の点数は弧月に4000ptが振られている……弧月セットしていないが。

「……………!？」

仮想空間に転送されると……A級6位、加古隊の若きエースとも言うべき最年少A級隊員の黒江双葉と向き合う。

流石にランク戦の相手がスーツを着たマスクマンなので驚いているが直ぐに冷静になって弧月を構えるのでこちらもレイガストを構える。

「韋駄天」

黒江がそう呟くと同時にピカチュウのボルテッカーを連想させるかの様に黒江はバチバチと光り出す。

韋駄天、その名に恥じない高速移動の攻撃だ……ただ相手が私であったからその素早さは命取りだ。クロックアップと違って感覚までは早くならない、射手系の弾の様にリアルタイムでどう動くか動作処理して高速で動く感じのトリガーの筈だ。

「——えっ」

高速で突撃してくるが私にはゆっくりと動いているかの様にも見える。

一步、後退して体を反らして黒江の弧月の斬る攻撃を回避すると同時にレイガストを

ブレードモードに変更、ナイフぐらいの大きさのブレードに変換して黒江の首を撥ねた。

「意外と多く貰えるな」

レイガストでのポイントが元々低いのと黒江が高得点だったが為に勝利した私には多くのポイントが入った。

ポイント移動で死なない訓練……こりやあ米屋や太刀川さんがゲーム感覚で楽しむのも無理はない。ただ私は楽しむとはしない、流石に生き死にを左右する為の訓練をゲーム感覚で楽しむことは出来ない

『もう一度、勝負してください』

A級の精鋭を倒せて気分がいい中で通信が入った。先程倒した黒江からもう一度再戦を臨んでいる。

私としては他のボーダー隊員と戦って自分が今どれくらいの位置に居るのかを確認したいところだが無視すると背後に控えているファントムばあもとい加古さんがなんかしてきそう。チャーハンに巻き込まれるのは嫌なので3本先取勝負なら受けると返事をすればそれで構わないと勝負に応じる。

『ランク戦 3本勝負 1本目開始』

「っ」

次は負けない、おそらくはそう言おうとしたのだろう。だがそれよりも先に私は動いた。

具体的に言えば、ホルスターにセットされている拳銃アステロイドを抜いて撃った。力の一部を別のところに隠していて本来のトリオン能力ではないがそれでもトリオン能力は19、威力と速度に割り切った弾は一瞬にして黒江を撃ち抜いた。

『リンク戦 2本目 開始』

1本目が終わっても次がある。

気を取り直したのかそれとも私の事を強者と認識してくれたのか黒江は真剣な顔になつており、私に向かつて韋駄天を使つてくるので先程と同じ様に避けつつレイガストで今度は胴体を刎ねる。

『リンク戦 最終戦 開始』

「……」

自慢の韋駄天は完璧に見切られている筈なのに、懲りずに黒江は韋駄天を使つてくる。

韋駄天が通じない事に焦りを感じていると同時に現実を受け入れようとしていない感じだな。若いのでなんでも出来ると勘違いしてしまつて自分の決め手が全く通じないなんてありえない認めたくないといったところだろう。若さ故に欠点を認めたくない

いのだろう。

「韋駄天——っ!？」

ただ毎度毎度カウンターを狙うのも芸が無いもの。韋駄天がどんな感じのトリガーなのか、どういう動きをするか手に取るかの様に分かる。

黒江が突っ込んでくるその先に足元にシールドを展開すると黒江は盛大なままでにずっこけるのでその隙を逃さず、レイガストをスラスターで推進力を増した状態で投げて黒江の頭を貫いた。

『……もう一度お願いします』

「次があると思うな。コレは本番を想定した訓練の筈」

携帯端末の音声を使って返事をする。コレならば私だと気付かない……謎のマスクマンとして登録されている……悪くないな、謎のマスクマンとしてボーダー内の実力者として伝わればそれで御の字だ。

黒江というA級隊員を倒せたので今度は目標を低くし、5000pt辺りを狙ってみるのだが、サイドエフェクトが1人のスコアピオン使いが危険だと発している……危険な道は後々歩まされるんだ、ならば喜んで歩もう

「あゝ?」

5000点台のスコアピオン使いに対戦を申し込むと対戦相手は影先輩だった。

私の占いはホントによく当たるな、この人はポイント詐欺の代表格みたいな人で……
要注意人物だ。

「てめえ、なに考えてやがる」

影先輩のサイドエフェクトは感情受信体質、向けられている感情が分かるサイドエフェクトだ。

それ故に奇襲や狙撃などは通じず何処を狙って攻撃してくるのかを見抜かれる……
なので心の中を空っぽにする。結界師で言うところの無想状態に意識を切り替えると
影先輩は警戒心を強める

「おら、どうしたさっさと掛かってこいよ!!」

影先輩がそういうのでレイガストを両手で構えて斬りかかる。影先輩は1本のスコピーオンで弾くともう1本のスコピーオンで斬りかかるがシールドを手元に展開して攻撃の妨害をする。シールドで妨害された事に影先輩は驚くのだが視線で感情を受信してしまうので直ぐに頭を切り替えていき、私に向かって動きを邪魔されていない方のスコピーオンで攻撃してくるので私はレイガストのブレードの形状を変えてS字フックの形に切り替え、影先輩のスコピーオンに引つ掛けてスラスターを起動する。

「っ、てめえ……」

スコピーオンを叩き折ると同時に切り裂く事も出来るS字フックブレード

耐久力が高いレイガストならではの攻撃でレイガスト人口が圧倒的なまでに低いのと製作者の意図通りに使われていない為に流石の影先輩も未知なのか影先輩は私を強く睨みつける

『おい、もう一回だ。もう一回勝負しろ』

影先輩を倒し個室内に戻ると影先輩から通信が入った。

他の人とも戦いたいけれども、影先輩と戦うのもいい経験になるので承諾し再び個人ランク戦を行う事に

「さっきみてえにはやらせねえよ」

今度はガンガンと攻めてくる影先輩。

コレが影先輩のスタイルかと飛んでくる剣撃を寸でのところで避けまくる。サイドエフェクトのおかげで動きが手に取る様に分かる、影先輩の攻撃を簡単に回避する事が出来る……ただ守ついても何時かは破られる。攻めに転じる……今回はそうだな、この手を使おう

「当たるかよ、そんなもん」

攻撃の間を見つけてはレイガストを振るう。

心の中を空っぽにする技術はまだまだ未熟、心の中を見透かされているかの様に影先輩は私の狙っているところに攻撃を回避するのだが甘い

「つなー・テメエ……」

影先輩もレイガストの振りを寸でのところで避ける……影先輩ほどの実力者ならばそれも可能だ。

故に視線のフェイクを入れる。レイガストのブレードを予め短めにして一撃を入れ、更に追撃を入れる際にブレードを伸ばしておき寸でのところでの回避を不可能とする……理屈では簡単だろうが実際にやるのは難しく特に先の仕込みであるレイガストの短めのブレードでレイガストの長さはこんな物だという印象を与えるのも難しい、特に影先輩の様な機動力のある人には難しい、強化視覚のサイドエフェクトを持っているからギリギリ出来る様な技術だ。

『もう一回だー！』

個室内に転送されると影先輩から通信が入る……もう一戦、悪くはない。悪くはないのだけれど本来の目的を忘れてはいけない。

私のサイドエフェクトがそろそろだろうと告げているので影先輩には申し訳ないのだが個室内から出る。既に私の事なんて忘れ去っているかの様な空気が流れている……うん、悪くはない

「茜、大丈夫かしら……」

ランク戦のブースを後にし自販機が置かれている場所にやってくると熊谷がスポド

リを購入していた。

日浦の事を心配しておりスポドリのキャップを開けて、飲んでいると視界に私が入ったのか驚いて蒸せて吹き出した

「なにをやっているんだ熊谷」

「ゴホッ、ゴホッ……ええつと……」

「私だ、三雲だ」

「三雲くん、なの？……なにその格好」

「悪くないだろう」

携帯端末を使用して熊谷と会話をする。

私のこの奇妙奇天烈な姿に流石の熊谷も困惑するしかない……道を歩いている人達もなんだアイツといった目で私を見つめている……だが、後悔はしない。この姿の方がなにかと効率がいいんだ。

「【それで日浦の方はどうなった？狙撃手の訓練所に足を運んでると思ったが姿を見なかったんだ】」

「くまちゃん、誰その人？」

日浦の事を尋ねるとトリオン体に換装している那須と鉢合わせする。

やはりというか怪しい人物を見るような視線を私に向けてくる。ここはちゃんと状

況を説明したほうが

「おいゴルア!! テメエ、何処に逃げやがった! 勝ち逃げしてんじゃねえぞ」

良いだろうと思つたが余計な邪魔が入りそうだ。

「か、影浦先輩」

若干キレ気味の影先輩に那須は一步引いてしまう。

「んだテメエ、女のところに行つてたのか?」

「【また明日】」

「ああ、勝ち逃げするつもりか!」

「【明日、ちゃんとしたトリガーにしてくる。今日は那須隊に用事があるから】……だか

らお願いします」

「その声……オメエ、何時の間にボーダーに入隊したんだ」

「【内緒です】」

「つち、しゃあねえな。明日まで待つてやるからさっさと要件片付けろ」

影先輩はそういうと渋々ランク戦のブースへと戻つていった。なんだかんだ言つても優しくして男前だな、影先輩は。

とりあえず影先輩が去つていったので話を進める事が出来る

「三雲くん、どうしてそんな格好をしているの?」

「トリガーを支給されたから思う存分にエキサイティングした結果、こうなった」
「エキサイティングしすぎじゃないかしら？」

「私の事は気にしないでくれ……それよりも日浦の一件はどうなっている？ 狙撃手の訓練所で会えるかと思つたが会えなかつたんだが」

「茜ちゃんはもうすぐ来るわ……ほら、噂をすればなんとやらよ」

噂をしているとホントに日浦がやつてきた……のだが、あんまりいい顔はしていない。

パーツと明るい笑顔を見せて場の空気を盛り上げてほしいのだが……まさか良い結果にならなかつたのだろうか。

「えっと」

「茜ちゃん、三雲くんよ」

「あの後、交渉が上手く行つたのかどうかの確認に来た」

よくわからない謎のマスクマンが居るので上手く喋れない日浦。

那須が私だと教えてあげると私は端末で音声を流し、どうなつたかの確認を取る

「交渉は上手く行きました……今期が今までで一番の順位じゃなかつたら即座にポーターを辞めるって、それだけじゃなくてポーターが原因で成績が落ちても辞めるって色々と交渉してなんとか認めてもらう事が出来ました」

「また随分とハードルを上げたな」

学校の成績を落としたらボーダー辞めるって、修と同じ条件じゃないか。

日浦の成績って真ん中よりもちょっと下で……決して悪くはないが良くもない成績じゃなかったか？

「ボーダー推薦を使わずに三門第一高校に入学してみせます！」

まあ、そこは頑張れとしか言いようがない。

米屋とか仁礼とか小佐野みたいな成績残念な人達と一緒にグループに入っても私は一切責任を負わない。残りたいという意思を持ったのは日浦で交渉のカードとして成績維持を取ったのだから……遊真の一件もあるし、貴重なボーダー推薦の枠を潰すわけにはいかない。まあ、余程の馬鹿じゃなければ合格する事が出来るだろう。

「それで上に上がる算段はついているのか？」

今まではバカをやっているフリをしていた戒めを込めて声を発する。

那須隊はコレからA級を目指さなければならぬ、今期はなんとしてでも前期以前のシーズンで、今までのシーズンで最も点を取って上位に食い込まないといけない。しかし昨日、水上先輩が言ったように1日2日でパワーアップを果たす方法も一気に上位を駆け抜ける戦術があるわけでもない。

「それは……」

「無いんだろう、確実に上位に上がる算段が」

原作知識で知っているのだが那須隊は上位入りを果たす……がしかし、それはあくまでも原作知識の上での話だ。

もしかすると上位入りを焦って欲張ってしまい点を取れるところで点を取れなくなってしまう可能性もありうる事だ。故に確実にコレならば上位の人とバチバチにやり合えると言える物がない

「……私が、私がマスタークラスにまで上り詰めて安定した強さを保てる事が出来たら上に行くだけじゃなく上位に安定して居ること出来る筈よ」

「それはつまり今、この部隊でお荷物なのは自分だと認めるんだな？」

「三雲くん、言い過ぎだわ！」

「いいのよ、玲。こればかりはどうしようもない事実、マスタークラスに安定して居られない中途半端な実力なんだから」

手の甲に写し出されるポイントを熊谷は見せてくる。

7792、決して悪くはないポイントだがマスタークラスと呼ばれる8000ポイントのラインを越える事は出来ていない。B級上位には元A級のマスタークラスしかない二宮隊とポイント詐欺の影先輩がいる元A級の影浦隊に、ボーダーで数少ない万超えの攻撃手である生駒さん率いる生駒隊お笑い部隊、連携をすれば下手なA級よりも強く優れた指

導者がいる東隊とB級上位陣は安定して強い。

「さっき影浦先輩が勝ち逃げするなって言ってたけど」

「なに、ちよつと試しにバトルをして勝っただけだ」

「影浦先輩を相手に勝利したんですか!？」

「結構、手強かったが迅よりはやりやすい相手だ……それで熊谷、お前はこれからどうしたい? どういつた道を進むつもりだ?」

このチームを引つ張っていつてるのは那須でエースも那須、作戦の要も那須だ。

修のところほどとは言わないが、那須に頼り切りのワンマンチームに近いところがある……

「玲にばかり負担を掛けてられないわ。どうかしてマスタークラスを安定して入る事が出来るぐらいに強く……」

「強くなりたいと言うのなら、力を貸してやる……ただあまり口外する事が出来ないやり方になる。故に聞こう、悪魔と相乗りする勇氣はあるか?」

相乗りする勇氣があるのなら、きっと熊谷は強くなる事が出来るだろう……多分

第86話

「着いたぞ」

「ここつて……」

「玉狛支部よね」

悪魔と相乗りする勇氣があるのなら強くなる方法があると熊谷に勧めると熊谷は強くなる為ならばどんな事でもすると覺悟を決めた。

本気には本気で返す、日浦達も強くなるのならどんな事でもしてみせるとの覺悟を決めたので場所をボーダー本部から玉狛支部に移動した。

早速玉狛支部の中に入るとちびっ子S級もといバカ王子の林藤陽太郎が相棒で怪獸カビバラこと雷神丸に乗っていた

「む、モテモテだな、ハーレムというやつか」

「違う」

那須隊を引き連れている私を見て感想を言う。ハーレムとか日本の一夫一妻制度の日本では許されることじゃない。愛する女性は一人にして置かなければならない。陽

太郎がニヤニヤと笑みを浮かべているので私は否定する。

「陽太郎くん、違うわ……1人だけを除いて」

「ちよ、ちよつと玲！なに言ってるのよ!!」

「那須、そういう悪ふざけはそこまでしておけ……それで林藤支部長辺りは居るか？」

「林藤支部長は居ないけど代わりにオレ達が居るよ」

「……つち」

「舌打ちとか酷くないか!?!」

林藤支部長辺りが居てくれたのならば話がスムーズに進んでいくのだが生憎な事に迅がいた。

出来れば会いたくない、会うとロクな事にならない相手だと私のサイドエフェクトが言っている。

「迅、誰か来た……お前は」

「どうも、こうしてちゃんと面と向かって話し合うのは始めてじゃないですかね」

迅の相手をしたくないと思っていると筋肉ゴリラもといボーダーで唯一の完璧万能手で1人で1部隊としてカウントされる実力者、木崎レイジさんが現れる。最後に会ったのは大規模侵攻で、その際にゴタツイていたからちゃんと向かい合って話すのはコレがはじめてだ。

「今日はなにをしに来たんだ？」

「熊谷達を鍛えにやってきた」

「ねえ、三雲くん。玉狛支部に来たのつてレイジさんや迅さんとランク戦をしろつて事なの？」

玉狛第一の面々はそのトリガーが特殊が故にランク戦を行う事が出来ない

しかし、その強さだけはボーダー随一と言つては過言ではない物で手っ取り早く強くなる為ならば強い人と戦うのが一番だ。熊谷は勝てるかしらと少しだけ心配をしているので首を横に振る。

「本部でやると目敏いたぬきが五月蠅くて仕方がない……玉狛支部だと騒がれる事なくどうか出来るから場所を借りに来ただけだ」

「迅さん達とランク戦をしないならいったいなにを……」

「まあ、そこは色々……修達は？」

「メガネくんはランク戦のデータ集め、遊真はB級に昇格する為にランク戦、千佳ちゃん
は狙撃手の訓練に行つてるよ」

「……入れ違いになつたのか」

出来れば修達も関わらせたいが……無理ならば無理で致し方ない。

空いている訓練室を使わせてもらう許可を迅から貰つたので早速訓練室を借り、熊谷

達那須隊の面々はトリガーを起動してトリオン体に換装する。なにもない真つ白な部屋でトリオン体に換装している那須隊の3人はこちらを見てくるので私は持つてきたアタッシュケースを開いた

「迅、お前にはなにが見える？」

「メロンくんがメロンを纏うけどそれ以降が何故かはわからないけど見えない」

「なるほど、それは面白い事になっているな」

迅にも予知する事が出来ない出来事が今から巻き起こる。

『メロンエナジー！』

「え、メロン!？」

「変身」

『ロック、オン！ソーダ……メロンエナジーアームズ!!』

ゲネシスドライバーを取り出し、腰に装備。

メロンエナジーロックシードを取り出してゲネシスコアに装填し、レバーを引いて仮面ライダー斬月・真へと変身を果たした。

「そんなものもあるの!？」

「そんなものも?」

私がボーダー製のトリガーとは異なるトリガーを持つている熊谷は声を上げる。

言い方が独特だった為に那須は反応を示し、日浦は目を輝かせている。

「だからメロンさんなんですね!!」

「正式名称は鎧アイマードライダー武者 斬月・真だ」

もつと細かく言えば仮面ライダー斬月・真だ。

私が迅にメロンくんと呼ばれる理由を知って日浦が納得を示す横で那須は疑問を
持ったのか聞いてくる

「黒トリガーなの?」

「ボーダー製のトリガーとは異なるトリガーを隠し持っていたとだけ言っておこう」

「那須ちゃん、日浦ちゃん、これ一応はシークレットだから内緒にね」

超が付くほどの機密事項ではないのだけれど、一応は秘密にしておかないといけ
ない。

私としては既に色々なところで出沒しているので別に秘密にしておかなくてもいい
と思っているが、そこは組織なので機密を守らないといけない。持っているソニクア
ローを置いて、ここからどうすべきかを考える。

「この姿の三雲くんとバトルするのね」

「いや、戦わない……今日するのは戦闘力を上げる訓練じゃなくメンタル、精神を鍛える
訓練をする」

この状態の私は生身の肉体に鎧を纏っている状態に等しい。

熊谷達のトリガーで斬られると冗談抜きで生身の肉体にダメージを受けてしまう。有事の際にしか使わないのはその為でもある。

「精神を鍛える？」

「知つての通りボーダーの隊員は中高生が殆どだ。トリオン器官の都合上そうなっている。私もそうだがまだまだ青二才の子供で精神が未熟でちよつとした事でも動じてしまう、焦ってしまう可能性もある……特に上に上がろうとガッツイた結果逆にミスを犯すとかいう場面もありうる」

那須達は私みたいな人生二回目と違って花も恥らう乙女な女子高生。

精神の面ではまだまだ子供なところもあつたりする。仲間意識が強かつたりするのは良いことだがそれで状況判断能力が遅れを取つては話にならない。

「精神を鍛えるのは分かつたけど、どうやって鍛えるの？ バンジージャンプでもするかしら」

「そこを悩んでいるところだ……圧倒的な力で叩きのめすのもありだが、今回はコレにする……迅、ゲネシスドライバーと訓練室は繋がっているか？」

「ああ、問題無く繋がってるよ」

「そうか……ならば、コレで決まりだ」

『ディケイド!』

ディケイドロックシードを取り出して、解錠。

頭上にジッパーが出現して開くと中からマゼンタ色のバーコードウオリアー、最強と名高い仮面ライダーディケイドが姿を現す。

「このピンク色のと戦えばいいの?」

「戦ったところで瞬殺されてしまう。ディケイドで戦わせるのはもうそれはただのイジメだ」

「このピンク色、そんなに強いんですか!?!」

「強いぞ」

夏目から聞いた情報だけでもハイパームテキゲームマーに変身できる。

私の召喚したディケイドが装備しているベルト、ネオディケイドライバーで平成二期以降の仮面ライダーにもカメンライド出来る。まともによりあえば使用者がトリオン切れにならない限りは絶対に負けないと言っても過言ではないオーマジオウの次に最強だ。

「今からお前達はなにが起きようが動じてはいけない。動じてしまったら迅が一回お尻を擦る」

「はあ!?!」

「つちよ、メロンくんなに勝手な事を言ってるの？確かに熊谷ちゃんのお尻には魅力を感じるけどもそんな堂々とするわけないじゃん。サイドエフエクトで怒られないタイミングで触ってるんだよ」

おい、こいつどうしようもないクズだな。

迅がポロリととんでもない事を言うとな須達からゴミを見る様な目で見られるのだが、コレばかりは日頃の行いが悪いのでなんとも言えない。

「大体お尻の何処がいいんだ……大きなおっぱいだろう普通」

「熊谷ちゃんはそっちの方も魅力があるけどオレは断然お尻」

「変化弾」

「ぬうお!？」

「ぎゃあああ!!」

くだらない猥談をかましているとな須から制裁を受ける。

ボーダーの弾は流れ弾対策として生身の肉体に当たっても問題無い様に出来ているがトリオンで出来ている鎧の上に命中して衝撃が走るので地味に痛い。

「迅さんも三雲くんもなにを言い争ってるのよ!!」

「そうよ……くまちゃんの良いところは体じゃないわ。活発で明るい性格もいいところなのよ」

「玲!？」

変なところで乗っかかってきた那須に熊谷はどうしてこうなるのと言った顔をする。

それもこれもこの場に居合わせていた迅が悪い。迅が居なければセクハラなんてしなかったのだから。

「このピンク色の人型トリオン兵が私達に精神攻撃をしてくるんですね」

「まあ、平たく言えばそうだな……ということではチェンジだ」

デイケイドの特徴は、デイケイドに在らず。

デイケイドはライドブツカーから仮面ライダーのカードを取り出すとネオデイケイドライダーに装填する。

『KAMEN RIDE BUILD KUMA TEREVI』

「お、姿が変わった」

『ハチミツハイビジョン!クマテレビ!』

呼び出したデイケイドはデイケイドビルドクマテレビフォームに変身した。このフォーム、てれびくんにしか出てこなかったフォームだが……まあ、なんとかなるだろう。突っ立ってても仕方がない事で精神修行の一環だという事もあるので全員で座禅を組んで一列に並ぶ。

「右が熊で左がテレビってなんだか歪な形ね」

「まあ、2つで1つだからな」

那須はビルドの変わった見た目を気にするが、仮面ライダーにはもつとカラフルなのも居るわけで気にしていたらキリがない。

因みにだがここでこのトリガーを使っているのはボーダー上層部に内緒な話だが、玉狛支部はちやっかりとデータを収集している。まあ、ゲネシスドライバーにもデータ解析機能とか付いているので取られてもなにも問題は無い。

「あ、テレビが動き出しました」

座禅を組んで全員が集中して意識が高まっている頃、クマテレビの左側のテレビが動き出す

ザザーと砂嵐の様なものが流れており、徐々に徐々に乱れている映像が整うと……私が見たことがあった……何故に私なのだろうか、いや、待て。この状況の私、何処かで見ることがあるぞ。

『うーっす！誕生日おめでとう、コレ、おれからの誕生日プレゼントな』

そう、確か誕生日の日にコレと似たような出来事が起こった。

出水から誕生日プレゼントを貰ってどんな物なのかを確認すると固まっている。

『十分の1か……』

「っふ……」

「熊谷、精神を乱すな」

出水から貰ったプレゼントの中身を確認するとボーダー公式グッズである【千発百中】Tシャツだった

意味を知れば深いものなんだと認識する事が出来る。当然、私は出水の【千発百中】の意味を知っているのだがこの時は困惑していた。

『ボーダーもよくこんな物を公式グッズとして販売しているな。無理にデザインをしなくていい分作るのが楽なのかもしれないが、こんなの買う奴が居るんだろうか……ちよつと気になるな』

出水の【千発百中】Tシャツに狂気を感じていた私はノートパソコンを起動する。

見るのは当然ボーダーの公式HP……ではなく大手の通販サイトでボーダーのグッズのレビューを確認する。

『なんかやたらと外国語のレビューが多いな……え〜つと、【日本語が書かれたシャツを探しているのが見つかりました】【クールな日本語が書かれていて最高です】………日本に行ったこと無いけども日本に憧れてる日本語が好き外国人が買ってるのか!』

「クスッ……」

「那須、動じるな」

「無理よ、だってだって……面白いじゃない」

プルプルと震える那須は笑っている。

出水の「千発百中」Tシャツに関する真実を知れば誰だって爆笑の渦に飲み込まれるだろう。表情を変えないように必死になって頑張ってるけど日浦と熊谷もプルプルと震えている

「あのシャツそんな感じの需要があつたのか」

唯一笑つてもいい迅は爆笑している。出水の「千発百中」シャツの実態を視力ゲラゲラと笑っている。

「砂嵐つと別の映像が流れ出たぞ」

『はあ、モテたいわ』

出水の「千発百中」Tシャツの熱が冷める前にテレビの映像が切り替わる。

今度は生駒さんが映し出されており、何時も通りの愚痴を零しているのだが問題はその愚痴を零す相手が迅だという事だ。クマテレビの能力がどんなものなのかはイマイチ理解していないが、コレは恐らくだが実際に起きた出来事が映し出されている。

「メロンくんストップ、カメラ止めて」

「断る。熊谷達の精神を鍛える修行なんだ……動じない事が大事なんだ、お前も笑つていられる立場に何時までも居れると思つたら大間違いだ」

この後、なにが起きるのか知っている迅はテレビを止める様に言うが止める必要はない。自分だけ美味しい思いをすんじやねえ。

『モテたいモテたいって言うけど、モテまくったら嵐山みたいに忙しくなるんだぞ』

『ええやん。ボーダーの顔になって皆が俺の事をワーキヤー言ってくるんやろ？俺もいつペンワーキヤー言われたい。皆の人気者になりたいんや』

『じゃあオレと一緒に暗躍するか？一緒にボーダーを影で支えていこうぜ』

『いや……迅は嵐山の低位互換みたいなもんやろうが。人気者とは若干違うやろ。見た目が似てる以外同じなところはないやろ』

『むかつ！』

意外とキツイ毒を吐いた生駒さん。

迅もムカツと来たのか言い争うのだがそこに柿崎さんが止めに入った。

『お前等な、公共の場で騒ぎを起こすんじやない』

『だって生駒つちが』

『だってじゃない！第一なにで騒いでたんだよ』

『生駒つちがモテたい言い出したのがはじまりだよ、な』

『せや。どうやったら嵐山みたいにモテモテになれるか迅に相談しとつてん』

「やめて、もうこれ以上先は止めてくれ!!」

「いいや、止めない。面白い展開が待っている!!」

『柿崎さん』

『照屋か、ちよつと待つててくれ。今この2人を叱りつけてるところだから』

『いえ、時間が空いていれば何時でも大丈夫ですよ』

言い争っている生駒さんと迅を止めに入つた柿崎さんに声を掛ける照屋。

迅と生駒さんの一件を終わらせてからで大丈夫と言うと照屋は柿崎さんの側に立つて見守るのだが生駒さんが震える

『こんの裏切り者がああああ!!』

『お前、すまし顔でなににしてるんだよ』

『はあ? お前等、なにに対してキレてるんだよ』

『被告人、なにに関してキレてたんだ?』

プルプルと震える那須隊を前に被告人もとい迅が生駒さんと共になにに対してキレているのか尋ねる。

迅は恥ずかしがつて顔を両手で覆い隠している……恥ずかしがらずにカッコつけずに嘘偽りなく答えろ、実力派エリート

「柿崎が1番のリア充だつて嫉妬しました……」

「男の嫉妬は女の嫉妬以上に醜いぞ……事実なのは確かだが」

柿崎さんを待つている照屋、マジで女房感溢れている。

嵐山さんはボーダーの顔だが、真の意味でリア充なのは柿崎さん。これボーダーの中じゃ地味に有名な事実……まあ、私はまだボーダー隊員ではないが。

「お前等、動じるなど言っているのに笑いすぎだぞ」

それはさておき、熊谷達を注意する。

精神を鍛える修行でながあつても笑つたりしない、平静を保たなければならぬこの修行で熊谷達は大声では笑っていないが、小さくプルプルと震えたりして笑つてしまっている。

「あんなの見せられたら笑うしかないじゃないですか!」

「そうよ、笑うななんて言う方が無茶だわ!」

笑つてしまった日浦と那須は異議を唱える。

確かに迅と生駒さんのやり取りは面白いと言える。笑うなという方が無茶だが、与えられた無理難題を越えてこそその修行である。

デイケイドビルド　クマテレビのテレビ画面は再び砂嵐が巻き起こると今度は諏訪さんが映し出された。

『はい、カンパニー!』

「コレは……飲み会だな」

諏訪さんがビールジョッキを片手に音頭を取る。

なんの集まりかと思えばレイジさん、寺島さん、風間さんの21歳組十堤さんの飲み会だった。

『プハア、酒が飲めるボーダー隊員が順調に増えてきてなによりだ』

『堤、防衛任務仕事明けの一杯は最高だろう』

『はい、一仕事した感があります』

ゴクゴクとジョッキに入ったビールを飲み干していく5人。

満足したのかメニュー表を開いておつまみを何にするのかを話し合うのだがここで堤さんが動く

『すみません、日本酒を頼んでいいですか？』

『おう、頼め頼め。今日は俺らの奢りだからじゃんじゃん高い物を頼みやがれ』

『じゃあ、大吟醸を……ここ結構お酒のレパートリーが多いんですね……ビール以外の新規を開拓してみようかな』

『ならばルシアンコークはどうだ？ウオツカのコーラ割りで飲みやすいぞ』

『そうですね……カルーアミルクにしてみます！』

寺島さんのオススメを選ばずにカルーアミルクを頼む堤さん。

『早く酒が飲める奴等、増えねえかな。東さんとか冬島のおっさんだと年長者の引率者

になつちまつて酒が一緒に飲めねえ』

『コレばかりは待つしかない……それまでボーダーに残留しておけよ』

『わあつてるよ……すみませ〜ん、生一杯』

酒が進むに進んでいく諏訪さん。

色々と愚痴つたり馬鹿笑いしていると注文してたおつまみとお酒が運ばれてきて、画面は堤さんと諏訪さんとレイジさんが映し出される。

『コレがカルーアミルク……』

『レイジがゆりさんに飲んでもらいたい酒No. 1に君臨する』

『諏訪!!』

『ミルクティーみたいで飲みやすいですね』

『それもゆりさんに言ってみてもらいたいんだとよ』

『諏訪ア!!』

『ゴホお!?』

『今のはお前が悪い』

レイジさんの顔を真っ赤にさせて拳骨を叩き落された諏訪さん。

寺島さんはルシアンコークを飲みながら冷静な判断を下す……恋愛関係を無理に弄る諏訪さんが悪いな。

『ゆりさんに飲んでもらいたいって言うけど、あの人結構酒豪だぞ』

『それはそれでいいんだ!』

「ストップ、メロンくんストップ……これ以上はホントにマズい。レイジさんにバレルと蜂の巣にされる」

考える事の出来る筋肉ことレイジさんの痴態を晒しに晒しまくっている。

改めて思うのだがなにを見せられているんだろう、私達は……笑ってはいけない状態な事だけは分かる

「流石に他人はマズいな、チャンネルを切り替えろ」

これ以上レイジさんの痴態を晒しものにするわけにはいかない……面白かったけども。

『おはようございます、那須さん!』

「今度は小南ちゃん?」

ザザーと砂嵐が流れてチャンネルが切り替わると今度は小南が映し出された。

学生服を着ていて那須に挨拶をしている事はお嬢様学校だ……お嬢様学校で猫を被っている小南を見せつけられるが、那須にとつては日常茶飯事な光景なので一切動じない。熊谷達も猫を被ってるのか知ってるのか、そうなんだと平常心を保っている……迅は横で爆笑している。普段がアホの子だけあってか、偽りのお嬢様はさぞ面白かる

う。

「メロンくん、もっと他にないの？」

小南の爆笑必須のお嬢様姿を見て笑うに笑い、満足した迅は次を要求する。

次となると烏丸に騙された小南シリーズになっていくので面白味に欠けてしまう。

「なんかスゴいの出ろ」

本来の目的である那須隊のメンタルを鍛える事を忘れ、面白いものが出てくる様に
デイケイドロックシードに念じる。

思いが伝わったのかデイケイドビルド クマテレビのテレビ画面がザザーと砂嵐が
流れると私が映し出された………どういふ状況だ。私の中で他人から見ると面白い状況な
んて早々に無いぞ

『これはどうだろう？』

ダミ声の女性っぽいモザイクまみれのなにかに私は声を掛けられる……………

『どうだろうってメイド服じゃないか』

『おかえりなさいませ、ご主人様。なんて言ってみたりして』

『冗談は止してくれ。私はお前のメイド姿を見たくない』

『何故なんだ？』

『メイドというのは従者の一種だ………私と^{ヒーロー}は主従関係か？メイドの格好は嬉しい

が、違うだろう』

『……貴虎』

モザイク処理と音声処理が掛かっている上での一連のやり取りを4人に見せつけられる……

「さ、次に行くか」

「え、つちよ、メロンくん!!今の映像はなんなの!!」

「お前の想像通りのものだ。未来視のサイドエフェクトを持っているんだろう、この程度の事でいちいち動じるな」

流れた映像を見て何事も無かったかの様に話を進めていこうとすると迅から説明を求められる。

なにを見せつけられたかといえそうとしか言いようがない……そう、別になんてこととはない日常の一コマだ。

「三雲くん、ホントに居たのね」

「疑っていたのか？生憎だが妄想でも二次元でもなんでもなく居るんだ……」

「どんな人が確かめたいからモザイク処理をどうにかしてくれないかしら」

「そういう感じのノリになるから言わないようにしてるんだ。はい、今のは見なかった事にしろ」

那須がぐぐつと来ているので適当にあしらう。

「み、三雲くん、あんな事を平然と言えるの!？」

「なんだ？酒でも飲んでると言いたげだな……素面だ」

素で言っている……

「アレは完全に私のプライベートだから忘れておけ、見なかった事にしろ……お前等動じるなど言っているのに精神が揺れ動きすぎだ」

「三雲さん、なんであんな事を言ったのに真顔で居られるんですか!？」

顔を真っ赤にして日浦は聞いてくる

「何故って……日常茶飯事だからな」

別にアレぐらいは何時もやっている事で、顔を真っ赤にさせることではない。

「アレが日常茶飯事……メロンくん、今のをモザイク処理無しで」

「やらん!」

こういう感じのノリになるから言わないようにしてるんだ。

迅はウキウキで聞いてくるので断るのだが那須隊の面々も続きを見たそうにしていく。コレではメンタルを鍛える訓練にはならないのでデイケイドロックシードを使った訓練は中止になった

第87話

「中止、中止だ」

デイケイドロックシードで呼び出したデイケイドが色々と余計な事をしたので中止にする。

迅のグラサンを叩き割ってやりたい気持ちを抑えて変身を解除し、デイケイドロックシードを施錠する。

「日浦、分かっていると思うがくれぐれもこの事は外部に漏らさないでくれ……特に米屋には言うな」

多分、アイツに言えば絶対にロクな事にならない。

なにがなんでも秘密にしておきたいので日浦に口封じをしておく……いや、ホントにな。分かりましたと日浦は頷いたのでそれ以上は深く言わず、この後どうするか

「メロンくん、修行した方がいいんじゃないの？」

「訓練はちゃんとしている」

「いやいや、オレから見ればまだまだだよ。メロンくん、トリオン体を使いこなす事が出

来てない感じだ」

なにかが見えたのか私にトリオン体を使いこなす修行を勧めてくる迅。

なにかが見えたのか吐かせたいところだが言っている事に一理なくもない。仮面ライダー系は基本的には生身の肉体だからトリオン体とは大きく異なっていて未だに馴れていないところはなくもない。

「トリオン体に馴れるとは言うが何をしろと言うんだ？まさかランク戦でもしろと？言っておくがお前とやれば試合が泥沼化してしまう……やるつもりはないぞ」

「お前とバチバチやり合いたいけど、今はいい……そうだな、トリオン体を使ってスポーツをしたらどうだ？」

「ボウリングかビリヤードかダーツか……」

「そういうラウンドワンでありそうなじやなくてもつと健康的な……テニスとかどうかな？」

こいつ、私がテニスをやればどうなるのか分かった上で言ってきているな。

しかしトリオン体を使ってスポーツか……

「修も参加させて良いのなら、やる」

「お、いいね……那須ちゃん達もメロンくんがトリオン体に馴れるの手伝った方が良いでしょう……オレのサイドエフェクトがそう言っている」

じゃあねと呑気に訓練室を出ていく迅。

あの呑気な顔が若干だが腹立つがここは迅に乗るのが吉だと私のサイドエフェクトが言っている。とりあえず私も訓練室を出ていきB級のランク戦のデータを集める修の元に向かう

「修、少し息抜きをしないか？」

修はパソコンの画面とにらめっこしている。息詰まっているというわけではなさそうだが、根を詰めすぎている。

ポンと修の肩に手を置くと修はビクツとしたが直ぐに私だと気付きホツとしている

「兄さん……もう少しだけ」

「お前はそう言うのと延々と見続けるだろう、ランク戦下位なんて遊真一人でどうこう出来る世界だ……少しだけ私と付き合ってくれ」

もう少しだけランク戦のデータを観戦したいと修は言うが修のもう少しは最低でも1, 2時間以上かかる。

流星にそんなに待っているわけはいかないので修の首根っこを掴んでトリガーを片手に訓練室に戻ると何時の間にかやら真っ白でなにもない空間からテニスコートに切り替わっていた。

「連れてきた」

「えっと……」

「はじめまして、三雲くんの弟ね。私は那須玲、よろしくね」

急にこんな場所に連れられて戸惑ってしまふ修に那須が挨拶をし、状況を説明する。

と言つても訓練の一貫とか難しい説明は抜きで今からトリオン体を使つてテニスをする事を教える。

「修、聞けば最近ランク戦に向けてデータを集めるのに集中してばかりで部屋に引きこもりっぱなしじゃないか。たまには身体を動かさないと不健康だ……テニスをやろう」
用意されたラケットを手にとって修に渡す。

根を詰めすぎている事に関して自覚はあつたのか、修は反発する事はなくラケットを受け取つた。

「じゃあ、私が審判をします！」

人数的にシングルスをするわけにはいかない。誰か一人が溢れるがダブルスをしようとなり日浦が審判をすると挙手した。

ならばやることは一つだと修とジャンケンをして余裕で勝利し、那須と熊谷にもジャンケンしてもらい那須が熊谷に負けた。負けた者は負けた者同士で、勝つた者は勝つた者同士でペアを組むこととなり、私は熊谷とペアを組むことに

「気難しいルールは無しで、どちらが時間内に多く点を取れるかで勝負しよう……熊谷、

油断せずに行こう」

「ええ……ああ見えて玲、トリオン体を用いた運動滅茶苦茶得意なのよね」

「なに……私もテニスは得意な方でな、一球入魂!!」

今回は勝つとか負けるとかを気にしない、私がトリオン体に馴れる為の訓練だ。

テニスボールを高くトスしてサーブを打ち込むとボールは相手のコートに向かって飛んでいく

「もらっ……!?!」

貰ったと那須がボールにくらいつき打ち返そうとするがボールは弾む事はなく回転しながらバツクした。

零式サーブ……何時もなら肘に負担がかかるので打たない様になっているのだが今は生身の肉体でなくトリオン体だ。体に架かる負荷を一切気にすることなくテニスをプレイする事が出来る。

「あの、兄さんはあれでも運動神経が抜群でして」

「知ってるわ、去年見てたもの」

去年のボードアの公式イベントを見ていたので私の運動神経の良さを那須は知っている

開幕早々の零式サーブに那須は悔しがる……最近、色々あったがこういう楽しい事

があるのを忘れかけていたな。那須にボールを投げてもらい、受け取ると早速サーブの構えを取り今度は普通のサーブを打ち込む。

「ふっー」

修は間合いを見つめてサーブを打ち返す……修のトリオン体を上手く扱い熟しているかどうか些か心配だったが……コレは丁度いいかもしれない

「熊谷、任せた」

「分かったわ」

修が打ち返した珠を熊谷が打ち返す

サーブミスエースにもリターンエースにもならない純粹なテニスのラリーが始まるのだが既に私は別の事を考えていた。テニスコートの大きさは約24mで修のポジションは射手……修自身はまだまだ弱いし、コレはいい練習になるだろうな。

熊谷が打ち返したボールをすぐさま那須が打ち返し、偶然にもボールは私の方に向かったので私はボールを打ち返すとコートのセンターライン手前にまで引き下がる。

「熊谷、少しだけ時間をくれ」

「え、なにをするつもりなの？」

大事な大事な特訓だろうが、ほんのごく僅かでもいいので時間がほしい。

打ち返したボールを那須が打ち返すとボールは急激な回転をして私の手元にまで引

き寄せられていく。

「それ正月の時に柿崎さんにやってた技」

「三雲ゾーン……いや、至高のゾーンアルティメットと言っておくか」

私もただただなにもしていないなかつたわけじゃない。

普通に打ち返すと三雲ファントムの要領でボールがコートの外に行く。コートの外に行くのならば敢えてコートの外に出すボールを打ち込みコートの中にボールを入れようとするのならばボールを手元に引き寄せる事が出来る三雲ゾーンが発動する。

ボールを追い出す回転とボールを引き寄せる回転、2つの表裏一体の回転を作り出す……三雲ゾーンとファントムの合せ技、至高のゾーン……生身の肉体ではまだ打つ事が出来ないが、今回はトリオン体だ。

「那須先輩、気をつけてください！油断するとアウトにさせられます」

「ええ、だったらドロップショットよ！」

無理に攻めても手元に引き寄せられるかアウトにさせられるかのどちらかだと修に言われたので手を変える。

ドロップショットでも至高のゾーンは効果を発揮する。私の手元に引き寄せられるかの様にボールは回転をするがその前に熊谷が現れてボールを打ち返した

「2人とも、コレをダブルスだって忘れてないかしら？」

私にばかり集中していて熊谷の存在をすっかりと忘れていた修と那須。

しまったといった表情を浮かべており、点を取られると今度は那須のサーブの番となり、私は綺麗に打ち返すとラリーが始まる。

至高のゾーンがある限りは余程の事が無ければ点を取り零す事はない……故に勝負を決めに行かず、修と那須を引き離し、修をとにかく走らせる。

「どうした修、もつと状況をよく見て打ち返せ！動きながらも思考を止めるんじゃない！一対一で余計な邪魔が入らないならまだしも一度でもミスすれば終わりのラリーだ、気を抜くな」

「わかっ、てるよ」

「トリオン体は生身の肉体よりも遥かに運動神経は高くスタミナ切れの概念は無いに等しい。疲れを感じているならそれは体を上手く使いこなせていないんだ。烏丸のガイストの様にトリオン体のパラメーターを弄るならまだしも基本的にはトリオン体での運動能力に差が出ることはない」

右に走らせ左に走らせ息を荒くする修。

トリオン体なので気持ち的には疲れるだけで本当の意味で疲労困憊になるわけがない。修がボーダーに入ってまだそんなに時間が経過していないので体の動きがぎこちないのは仕方ない事だが、これからの事を考えれば仕方ないで済ませてはいけない。

「見つける、修。自分が動きやすいフォームを。イメージしろ、手にはレイガストを、打ったボールはアステロイドだ」と

修のトリオン能力はたったの2、トリオン豊富じゃないと出来ないであろう射手をしている。

性格的には合っているのだろうが能力がそれに見合っていない。修のトリオン能力だとテニススコートの端から端までアステロイドが飛ばせるかどうかも怪しいレベルだ

「兄さん、まさか」

「油断せずにいけと言っている」

修は私の言いたい事に気付きだしている。私から言える事は油断せずにいけだ。

私の言葉が修に届いたのか修は真剣な顔になりボールを打ち返してくるのでこちらも打ち返してラリーを行い、勝負を決めに前に出てドロップショットを決めに行く。修は前に走ってくるが間に合わず、ボールは弾むことなくバックスピンを……零式ドロップだ。

「はあ……まだ全然届かないや」

「兄という生き物は常に弟の先を行っているものだ……そう簡単に勝たせる程、私は甘くはない」

何度かラリーを交わしていて精神的に疲れたので一旦休憩を取る。

修は結局一度も私に勝つことは出来ず改めて私との間にある実力差を感じ取る

「……なあ、修」

「なに兄さん？」

「今からボーダーをぶつ壊すからこんな危険な事はやめないか？」

「……兄さん、つまんない嘘をつくんだね」

「嘘じゃない、その気になれば俺はボーダーを潰すことが出来る……ホントだぞ」

冗談でこんな事を言うわけがない。俺は本音を言えば原作云々はさておいて修にこんな危険な道を歩ませたくない。

攫われた人をただ助けるだけじゃなくホントの意味で助ける、社会復帰の道は私も色々を用意しておかないといけないが……辛い道でしかない。

「お前が本当にやりたいと思つてやつている事だ。ならお前の新しい一步を踏み出す為の踏み台にはなつてやる……ただ、忘れないでほしいんだ、もつと別の道が存在している事に」

平和的な道は、安心安全な道は存在している。だが今から修や千佳ちゃんが歩んでいく道はそんな道じゃない、危険な道だ。

二人にとつての柱の様な存在になることは拒否して遊真に押し付けたクズ野郎がなにを言つても心には響かないかもしれない。でもそれでも分かっているほしい、何気な

い日常がある事を、それは大金を積んでも得ることが出来ない道だという事を。

「うん……忘れないよ、今日みたいな楽しい日があった事を」

なんだか今から自爆特攻を仕掛ける様な雰囲気醸し出しているが、そんな事は無いぞ。

修にはこの何気ない日常の味を覚えてほしい……いや、修だけじゃない、千佳ちゃんや遊真にもこんな楽しい事があると伝えたい、そして守りたい……誰かの為じゃない、自分の為には戦いたい……自分の為には戦うとか仮面ライダーらしくないな。

「そういうえばコレを受け取るつもりはないか？」

修は修の道を歩んでいるのでこれ以上は余計な事をしてはいけないのだが、それでもお兄ちゃんという生き物は甘やかしてしまおう。

ジョーカーメモリを取り出し修の手に置くと修はジッとジョーカーメモリを見つめる。

「コレは兄さんの物だよ」

「だが私には使いこなす事が出来ていない……修に適合しているメモリだ」

「……コレを使えば僕はS級になっちゃう。僕達が目指しているのはA級なんだ」

「そうか……必要になった時は言ってくれ。ロストドライバーなら何時でも貸し出す事は出来る」

「ボーダーには貸し出さないんだよね」
「もちろんだ」

ボーダーにガイアメモリを貸し出したらなにをするか分からない。

そもそもガイアメモリはトリオン体を生み出すのでなくそういう感じの見た目の生物に変化させる物で、ロストドライバーの様なベルトを通さずに使うと強い中毒性の様なものに襲われる可能性がある。人体構造を作り変える代物で……貸し出すと角トリガーの様な物を作り上げるかもしれないな。

「三雲くん」

「……あ、私か」

修に伝えたい事を伝えたと熊谷が声を掛けてきた。

私も修も三雲なのでどちらに對して声を掛けてきているのか一瞬だけ頭が真っ白になって分からなくなったが、私に對して視線を送ってきているので私に對して言っているのだと反応を示す。

「ややこしいわね、同じ苗字だと」

「だったら修の事を名前と呼んでくれ、私は下の名前で呼ばれるのは好みじゃない」

「……三雲くんの下の名前ってなんだったかしら？」

基本的には三雲呼びなので下の名前を思い出す事が那須は出来ない。

まあ、彼女を除けば両親と千佳ちゃんしか下の名前で呼んでこないのが当然と言えば当然だろう。

「じゃあ、修くん……勝負しましょう」

「あ、はい。よろしくお願ひします」

那須は修を指名してきてテニスコートに入る修。仲良くテニスをしていてなにより……！

「ど、どうしたのそんなに目をクワつと開いて」

「気にするな、ちよつと些細な事だから……那須の奴、楽しんでるな」

「ええ、トリオン体を使って運動する事が大好きだからね」

仲良くラリーを交わしている那須と修……親密度が上がっている。千佳ちゃん程じゃないが着実に親密度が上がっている。

那須が修と楽しくラリーを交わしている際に那須から発せられる電磁波が、オーラが修に対して好意的だよ。

「修那須……いや、駄目だ。修には千佳ちゃんがいるんだ」

「三雲くん、なに言ってるの!？」

「熊谷、那須をよく見てみる……物凄く楽しんでるぞ」

「そりゃ楽しいからでしょう」

「いいや、違う。那須から出てる電磁波が楽しんでるだけのものじゃない……私のサイドエフェクトがそう言っている」

「三雲くん、そんな事まで分かるんだ……」

「十年以上もかけて特訓したからな」

他人の頭の中までわかるようになるにはそれ相応の訓練が必要だ。

そういえばトリガーの技術を用いれば聴覚支援だけでなく視覚支援も出来ると聞いたことがある……私の見ている物を那須や修達に見せて、パワーアップ……いや、駄目だな。見えているものが色々と気持ち悪くて酔ってしまう。

「三雲さん、さっきの弾まないドロップショットの打ち方を教えてください!!」

色々と考えていると日浦がラケットを手に私に零式ドロップの打ち方を教わりにやってきた。

那須が修に好意的なのはややどころかかなり気になる事だが今はこの時を楽しむ事にしておく……修×那須かあ……悪くはないんだが千佳ちゃんの事を知っているから応援しづらい。

第88話

2月1日（土曜日）今日からボーダーのB級のランク戦が開幕する。

まだ正式なボーダーの隊員ではない私には今のところは関係の無い話である……そう、関係の無い話なんだ。

「さあ、はじまりましたB級ランク戦実況は私こと武富桜子です！」

「解説はツインスナイプ見たでおなじみの佐鳥賢と」

「謎のマスクマンMがお送りいたします」

なんでこうなつたんだろう。

影先輩との約束を果たす為にトリガー構成を現状出す事が出来る本気モードに切り替えているとなんかスカウトもとい解説を頼まれた。今日からランク戦が始まるから実況と解説担当の人が居るのは分かっている。だが、それをこんな怪しさ全開のマスクマンに頼むか普通。

「佐鳥、何故に私を誘った？そして武富、よく採用したな」

隣に座っている謎のマスクマンは誰だとざわめいている。そりやそうだろう、胡散臭

さが半端じゃない。

解説と一緒にやりましょうと誘ってきた佐鳥にちよつとだけ問い詰めるとサムズ・アツプした

「またまた、晴れ舞台を豪華な席で見れるんですよ！」

「誰がそんなサポートしてくれといった。玉狛辺りで見ている……全く余計な事をしてくれたな」

「口ではそんな事を言ってるけどなんだかんだでノツてきてくれるじゃないですか……」

一緒に頑張つて解説しましょう」

「佐鳥先輩の推薦なので名解説を期待しています！」

ハードルを上げてくるな。

なんだかんだ言いつつもここまでやってきた以上は解説をするしかないのだが……戦術系に関しては素人同然な私に何処まで出来るか。最悪佐鳥に丸投げすればいいが、コレも経験。色々とやっておくに越したことはない。

「以上が部隊でのランク戦の仕組みです」

武富が横でランク戦のシステムに関して説明した。

上位にはポイントを振られているとか下位、中位、上位があるとかボーダーに入つて間もない隊員も居るので丁寧に1から教える。修達がコレから目指すのは単独でB級

2位以上のランクだ……現時点では不可能に近いな。

「マスクマンさん、注目すべき部隊は何処でしょうか？」

「身内最前にもなりますが玉狛第二ですね。下位でモタついている吉里隊や間宮隊とは違い……これ以上は悪口になるので止めときましよう。新規の部隊なのでどんな感じの手でやってくるのか謎で、事前に何処まで情報を手に入れる事が出来ているのか……」

解説らしい解説を頼まれたので身内最前をしておく。答えを直ぐに言ってしまったりすれば悪口に繋がるので下手に口に出さない。

フィールドが決定されて各隊どういった作戦で行くのか試行錯誤している間にランク戦を見学している人達が増えてきた。

「意外と辛口なんですね」

「仕方ない、なにせ前回の大規模侵攻でC級、攫われる、B級、チームで合流しなくちゃ動けない、A級、敵の近界民にやられるのトリプル役満でボーダーを辞めたり、辞めてほしいと言っている親御さんが出たりと色々あるんです……強くないとやってけないですよ」

キツイ物言いをしている自覚はあるがあんな事があつた後だ。何処かで誰かが憎まれ役の釘を打っておかないといけない。

広報担当の佐鳥にとっては大イオレンスな発言はヒヤヒヤものだろうがこれぐらいい誰かが言っておかないと、誰かが最後の蓋を閉じる役目を果たさないといけない。

「実況解説が重要なのは分かりますが一応言っておきます。ランク戦をeスポーツ感覚で楽しまないでくださいね、最高の遊びかもしれないですけど一応は軍事演習の一環」

「ストップストップ、硬すぎですよみく——Mさん」

「お前達が緩いところが多いんだ……と、言いたいことを言っている内に試合が開始されました。武富オペレーター、この展開をどう見ますか？」

危うく本名をバラすところだった佐鳥を横に武富に話を回す。

既に試合は開始されて修と千佳ちゃんがバググワームを起動しており他の部隊はリーダーに写っている……粗が見えるな。誰かが撒き餌になってとかそういうのじゃなく大した実力も無いのに迎え撃つ気である。

見知った顔を相手だから勝つ自信や算段がついている……のならば、もうちよつとバググワームを上手い具合に使ってフェイクを入れたり色々やっているな。

「そうですね。唯一狙撃手が居る玉狛第二の動きがやや気になるところ」

「玉狛第二の射撃はそりゃあもうスゴいんですよ！あつという間の驚きを与えてくれますよ」

「おおっと、そういう言っている内に玉狛第二の空閑隊員が吉里隊と遭遇って、ああ!!」

「悪手ですね」

一箇所に固まっている吉里隊の元に遊真が飛び込んだ。

銃手が居るのにも関わらずなにか特にアクションを起こさずに素早く移動する遊真になにも出来ずに首をスパンと切られて緊急脱出。あまりにも呆気なく遊真が吉里隊を全滅させた。

「今のは吉里隊が悪いですね。吉里隊は遊真隊員が一回止まると思っていました。が遊真隊員は止まらずにノンストップで攻撃に入った……遊真隊員はかなりの実力者です。一手待つなんてしたらどうぞ殺してくださいと言ってみるみたいなもの」

「玉狛の空閑って」

「緑川とやりあった」

「勝ったって聞いたぞ」

「歴代最速を叩き出したとか」

遊真が目立つ。一瞬の内にB級下位とはいえ部隊を全滅させて色々と噂に尾ヒレがついているのだから当然か。

間宮隊も一箇所に固まっているが相手はあの遊真だと警戒心を強めて動くことをしない。

「間宮隊動こうとはしていません……コレは待ちですかね？」

「そうですね。間宮隊には追尾弾の3人連続のフルアタックのハウンドストームがあります。恐らくは空閑隊員を釣ろうとして住居の裏に隠れています……ただ」

「ただ？」

「玉狛第二にはそれも悪手、おおっと！出た、出たぞお!!」

住居の裏にバググワームを起動せずに遊真を釣る為に居るので何処に居るのが丸分かりだ。

千佳ちゃんがアイビスを構えて狙撃……狙撃なのか？ビームをぶつ放して間宮隊が隠れている住居をぶつ壊す。

「な、な、なんじゃこりやああああ!!アイビスか、アイビスなのか!!アイビスでこんな威力が出るのかあ!!」

「手元の資料に寄りますと千佳隊員のトリオン能力は38とぶつ壊れです……いやあ、この前砲撃で狙撃場に穴を開けたのは見えましたけども、ホントに威力がおかしいですね……ただ、コレだと何処に潜んでいるのか丸分かりですから撃つのは慎重にならないと」

「おおっと、吹き飛んでいる間宮隊を空閑隊員が一掃したぞー!」

展開が一気に動いていく、というか詰む。千佳ちゃんのアイビスに吹き飛ばされた間宮隊の面々を遊真が刈り取り、緊急脱出。

マツプには修達玉狛第二しか居なくなり試合が終了した。

「し、試合終了うううう!!強い、強いぞ玉狛第二!生存点を含めて8点を得ました!今の試合を振り返ってみて如何だったでしょうか?」

「まあ、そうですね。根本的に駒の質が違いすぎたと言ったところですね。雑にやってもB級中位を安定して狙える強さを秘めている部隊で、動きが洗練されて無駄の無い遊真隊員が強かったのと千佳隊員のトリオン能力がぶつ壊れ性能だったわけですし」

「振り返ってみれば、玉狛第二ヤバいですよ」

「しかし、隊長である三雲隊員は転送位置の影響もあつてか特に目立った動きをしていませんでしたが」

「あく三雲隊員は雑魚ですからね。B級下位の隊員とタイマンでまともに勝てない可能性もあります……まあ、下位ならば遊真隊員と千佳隊員におんぶにだっこで良いと思います……ただ本気で上を目指すならば即座に落とさないとヤバい駒にならないといけませんね」

「と、言いますと?」

「そこは秘密です……とにかく隊員の質が違いすぎましたね。三雲隊員はJOKERになる素質はあるんですけども……まあ、それは成長に期待をしておきましょう」

これ以上言えば修の成長を妨げる可能性があるので言わない。とにかく玉狛第二が

凄く強かったとの印象が生まれた。

今回は新規だから注目をされていなかったが次からはそうはいかない。中位からはちゃんと動くことが出来る人達がいる。中にはマスタークラスも居るわけで中々に強いのである。

「この一戦で暫定12位にまでのし上がった玉狛第二！次回からは中位となり対戦カードは荒船隊と諏訪隊！」

「次は駒の質だけでどうこう出来る相手じゃないです。作戦を練ったり色々としなないといけないですね……まあ、今回はやや有利になっていて選ぶ権利も考える時間も初見だという事もあるのでなんとかなるでしょう」

修ならばなんだかんだで上手くやるだろう。

玉狛第二の次の対戦カードが決まり、試合の振り返りも完全に終わったので徐々に徐々にランク戦を観戦するブースから人が離れていく。

「こんな感じで良かったか？」

解説も実況もやるのははじめてなので、なにが正解なのか分からない。

「辛口なコメントも色々とありましたけど良かったですよ。また解説をお願いしたいぐらいです」

「無茶を言わないでくれ。私は戦術に関しては無茶人同然だ……今回は戦術よりも駒の質

で大きく差が開いていたから上手く噛み合っただけでも、中位、上位で解説が出来るほど経験値は積んでない」

私の唯一の弱点は経験値不足なんだ。

実況やら解説やら一番向いていない……未来視のサイドエフェクトなんて無いし経験不足だ。まあ、それを今から積み上げていくけども。

「いやいや、Mさん素質ありますよ。ズバツと言うところとか……またお願いしますね」
「勘弁してくれ……じゃ、私はここで失礼させてもらおう」

武富は私の事を気に入ってくれた様だが私、そんなに上手く出来ないので遠慮させてもらおう。

解説も終わったのでこの場を後にして向かうは個人戦が出来るブース。

「よお、待ってたぜ」

「影先輩、ランク戦あつたんじやないんですか？」

「んなもんとつくに終わらせたわ。約束通り本気でバトルしろ」

「はいはい、分かりましたよ」

昨日、本気のトリガー構成で挑むと影先輩と約束をしたのでその約束を果たす。

この人、ランク戦を喧嘩かなにかだと勘違いをしている……まあ、なんだかんだで強くて頼りになるから問題は無いけども。ブースの中に入って影先輩と通信を取ってラ

ンク戦を行うと仮想空間に転送される

『リンク戦一本勝負開始』

機械的なアナウンスが流れると直ぐ様、スコープオンを構える。

影先輩がどういふ感じの戦闘スタイルなのかはなんとなく読めている。素早くて怒涛の攻めと呼べる攻撃をしてくる。守りでカウンターを狙おうにもサイドエフェクトがあるので不意を上手く突くことが出来ない。

「どうしたこんなもんか!!」

今回は戦いに集中していい、余計な事に思考を割かなくていい。

影先輩のサイドエフェクトに引つかからない様に心の中を空っぽにしてスコープオンを手にして突きを入れるが影先輩は当然の如く躲してくる。影先輩ならそれぐらいは容易い事だ。

「もらっ——!!」

至近距離からの突きを回避して逆にカウンターで攻めに掛かる影先輩だがこの展開は想定内だ。

俺との間にグラスホッパーを展開して突撃する影先輩にぶつけることで影先輩を弾くのだがその間にスコープオンを再構成、S字の形に切り替えるとグラスホッパーに弾き飛ばされた影先輩に刃の部分が刺さりトリオン供給器官を破壊した。

「もう一回だ」

「嫌です」

「あア!!勝ち逃げは許さねえぞ!!」

「仕方ないですね」

影先輩との戦いは終わりを迎えたかと思えば影先輩は再戦を望む。

私としてはこの一本を如何にして濃密に過ごすかが重要であり、勝つか負けるかのバチバチやり合うクロスゲームを楽しむつもりは無い……近界民の事さえ無ければ、ゲームとして楽しむ事が出来るがそれだとゆるい。私がちやんとしてないと後々痛い目に遭う。

『ソロランク戦2本目、開始』

「いくぜ」

影先輩のワガママに付き合いつつも経験値を積んでいく。

克蘭チブレード
枝 刃でスコープオン一本を二刀流に見せかけて影先輩の怒涛の攻めを回避する

……私にトリコのココ並の視力と言う名のサイドエフェクトがあつて良かったと思う。そうじゃなきや影先輩の怒涛の攻めを受け流す事は出来ない。

「逃げるが勝ち!」

「デメエ、逃げてんじゃねえよ!!」

怒涛の攻めを受け流す事は出来ても影先輩にはサイドエフェクトがあるのでカウンターが上手く決められない。

回避し続けるのにも何時かは限界が来てしまうのでグラスホッパーを使って堂々と逃亡をすると影先輩はスコープオンを2本繋げる事で射程範囲を伸ばすマンティスを使ってくるがマンティスの刃が触れるよりも先にグラスホッパーで跳んで逃亡に成功する……と言っても今回のトリガー構成にレーダーに写らないバグワームを入れていないので影先輩は標準機能として装備されているレーダーを頼りに普通に追い掛けてくる。

「スラストー、起^{オン}動」

「レイガストー……つ、フェイクか!」

一手のフェイクを入れるのに言葉というのは本当に便利だ。

昨日、レイガストを使って戦ったおかげか影先輩は私はレイガストも使えるという認識を持っている。だが、残念な事に本日のトリガー構成にはレイガストは搭載されていない。近距離戦はスコープオンメインでやる……コレでいい、影先輩相手に一手妨害のフェイクさえ出来ればそれでいい。

スラストー起動と言った際にスコープオンを投擲した。スコープオンは影先輩には当たらない、最初から当てるつもりも無い。逃げるのと同時に仕掛けた置き弾の炸裂^{メテオラ}弾

に突き刺して爆発させて影先輩を飲み込んだ。

影先輩のサイドエフェクトは何処を狙ってくるのかなんとなくで分かる物だからこういう搦手を使わなければ落とす事が出来ない。この人、サイドエフェクトを持っているから強いとかじゃなくてナチュラルに強い。

「もう一本だ！」

「ええ、まだやるんですか？」

「当たり前だろう。とつとと入れや！」

影先輩は燃えてきているのか再戦を望む。

楽しくなってきたているのは何よりな事だけでも……うくん……まあ、他人にまで強要する事はイケないことか。

『ソロランク戦3本目、開始』

「ふっ！」

試合開始の合図と共にスコープオンを一個作り出して影先輩目掛けて投げる。

影先輩には感情を受信するサイドエフェクトがあるので当然何処を狙っているのか丸分かりだ。投げるのは胴体のヘソよりもちよつと上の部分、私ならば確実に当てる事が出来る。そして影先輩ならそれを上手く対処する。胴体を狙っているので回避するのは難しい、弾くのがベストだと影先輩はスコープオンを右手に出して、飛んでくるス

コピーオンを弾いて逸らすがこの時点で既に私の作戦は始まっている。

「影先輩が作り出したんですね」

「てん、めえ……」

スコピーオンを投げると同時にもう片方にセットしてあるスコピーオンを起動、飛ばしたスコピーオンに向けて伸ばす。

影先輩が弾いた方向にスコピーオンの伸ばす軌道を変えて弾かれたスコピーオンと伸ばしたスコピーオンをくつつけてマンティスを作り上げて更に刃を伸ばし影先輩の首元に突き刺した。

「飛ばして空中にあるスコピーオンにスコピーオンをセットして詰みの一手に持つていく、空中マンティス……遊真達には無理か」

私の動体視力と判断力があるからこそ成り立つ空中マンティス。他の人が出来るかと言われればNOだろう。

「次だ」

「またですか」

再戦を要望してくる影先輩キリよく終わるように5本にしようと残り2戦もバトルをして影先輩から勝利をもぎとる。

この人、ナチュラルに強いからホントに油断ならないけどもまだまだ私の手札は残つ

ているので初見殺しの技を使う。次は通用しないのが恐ろしい。

「さて、ちよつと一息つくか」

影先輩と5戦やって5勝と順調に白星を上げることが出来たが相手が相手だけに色々と気を使う。

ちよつと疲れたので個室から出て飲み物を買いに自販機がある場所に向かう。

「あー」

飲み物が売っている自販機に辿り着くとそこには黒江がいた。

謎のマスクマンと遭遇すると声を上げるが私は気にする事なくメロンソーダを購入する。

「あの、またランク戦をお願いしてもいいですか？」

「ああ、構わない……ただちよつと一服させてくれ」

影先輩相手に神経を尖らせていたので結構疲れている。

メロンソーダの蓋を開けてグイッと飲むのだがトリオン体で飲んでるせいかな満足感や満腹感を感じない。

「おい、コラア！ たった5本やっただけで音を上げてんじゃねえぞ!!」

「影先輩、もう充分でしょう」

一息ついているとカンカンにキレている影先輩がやってきた。

5本もランク戦をやったというのにまだやりたいたいとご要望の様だが今日はこれ以上は影先輩とやるつもりはない。

「影浦先輩、次は私の番です」

「とまあ、こんな感じなのでまた明日、別のトリガー構成で行きますので」

黒江が居てくれて良かったというべきか、次に戦う相手が居ると言えば幾らでも引いてくれる……

「その次が開いてるだろう」

なんて上手くいくわけないか。

メロンソーダを一気に飲んで呼吸を整えてランク戦を行うブースに戻り、個室に入つて黒江が居る部屋番にランク戦を申し込む。

『ソロランク戦1本勝負、開始』

市街地の一本道、ランク戦が開始されると同時にグラスホッパーを展開して後退して黒江と距離を取る。

当然の様に黒江は追い掛けてくるがグラスホッパー分間が開くので、その隙にとトリオンキューブを展開する。

「炸裂弾」

「っ!？」

黒江は動作に無駄こそあれども立ち止まる事はしない。影先輩には使えない手も使える。

水上先輩がよく使う言っている弾と違う弾を撃つ技を使うと黒江はシールドを展開する。私と結構なトリオン能力の差があるのでシールドはパリンとあっさりと砕かれる……が、爆発の衝撃は避けたか。

「詰みだ」

手裏剣の形にしたスコープオンをぶん投げる。

黒江は避ける事は出来ない判断したのか狐月で弾こうとするがアウト。スコープオンにはさつき出したメテオラの一部をくつつけている。衝撃を与えれば即座にボカシだと黒江は狐月で弾くとメテオラが発動して爆発を起こしてトリオン体が破壊されて試合終了。個室に転送される

「もう一回お願いします」

「ふう……昨日なんて言ったのか忘れたつと、いけないいけない」

再戦を望む黒江だが私は再戦をするつもりは無い。他人にまで心情を強要したらいけない。ペースは人それぞれだ。

再戦を望む黒江に再戦をするつもりは無いと言いい個室を出ると影先輩が居た。

「終わったみたいだな」

「今日はもうやりませんからね」

「この後、なにかあるのか？」

「無いですけど……影先輩とはもう充分に戦ったと思いますよ」

「たった5回で充分なわけねえだろう」

「まだまだバトルをしたいと言いたげな影先輩……言った方が良いべきか」

「どうして私と再戦をしてくれないんですか!!」

私の流儀を教えようかと悩んでいると黒江もやってきた。

再戦をしてくれない事に対して不満を漏らしている。怒っていると電磁波からも分かる……

「このチビよりも俺の方が先だろうが」

「二人共ちよつと……」

取り敢えずここで騒ぎを起こしてしまえば周りに迷惑が掛かってしまう。

話し合いが出来る場所にまで移動をしようとするとう東さんと偶然に遭遇する。謎のマスクマンが居るとなると悪目立ちしてしまう。東さんは私の事をジツと見つめている。誰だコイツと言った感じの視線を向けている。

「誰なんだ、お前？」

「ストレートに聞いてきますね」

「その声は……三雲、だったか？」

冬島さんと声がそっくりだが、私だと東さんは気付く。

「揉めてるみたいだが、何かあったのか？」

「ちよつと、再戦を望んでるのを断つてるところです……」

「なんで1回しか戦ってくれないんですか!!」

ブンブンと怒っている黒江……

「別にもう二度と戦わないわけじゃない。明日になったら普通に戦う……1回だけだが」

「1回だけ……なにか考えがあるのか？」

「……意識を落とさない為ですよ」

第89話

「意識を落とさない為？」

私が影先輩や黒江との再戦を拒む理由は色々とある。その内の一つは意識を落とさない為だ

「東さんはボーダーでもベテランで年長者ですよね……なら、ぶっちゃけて聞きます。ランク戦を一種のeスポーツかなにかだと思って楽しんで遊んでいるボーダー隊員はどれぐらいいると思いますか？」

東さんがここに居てくれたのはある意味ありがたかった。

他の太刀川さんや迅には聞くに聞けない……と言うよりはあの二人はランク戦を一種のeスポーツとして捉えているフシがある。まあ、迅はオン・オフ出来てそうだけど、太刀川さんがなあ……

「意外と難しい事を聞くな……」

「答えづらいかもしれないですけど、だからこそなんですよ。私はこの前の大規模侵攻の現場にいた……そして三輪との約束を果たす為に、復讐の共犯者になる為にボーダーに

入ったんですよ」

ボーダーの協力者になる道だつて有つたが、その道を選ばなかつた。全ては三輪の復讐の共犯者になる為だ。

だから不要な感情は取つ払つておかないといけない。例えばランク戦をeスポーツ感覚に走らない様にするとか。

「太刀川さんや迅辺りはランク戦をゲームの一種、eスポーツ感覚で楽しんできるところがあります。ランク戦というのは実戦を想定し色々と試行錯誤を繰り返し様々な戦略や戦術を生み出す場所である。私は……油断しているとゲーム感覚に走ってしまう自分が居るんですよ」

「だから一本だけにしていいのか？ランク戦は実戦を想定して色々と出来る場所でもある。一回だけと誓約をつけるのは勿体無い気もするが」

「確かに東さんの言うことにも一理あります。ただ、私はこの前の大規模侵攻の現場に居て色々と動いていました。一度やられれば即死に繋がる危険な道を綱渡りしているもので……私はコンティニューが出来ないんです」

今現在、ボーダーからトリガーを支給されているが有事の際には躊躇いなくベルトを使う。

戦極ドライバーにもロストドライバーにもバグルドライバーIIにも緊急脱出機能は

付いていない、それどころかトリオン体を構成しておらず敗北は死に直結する。

「トリオン体が破壊されて新たにトリオン体を再構築するのに誰がどれだけの時間を費やすかは知らない。だが、これだけはハッキリと言える。私は東さんの様な優れた指揮能力を持っているわけでもオペレーターのようにバックアップを出来るわけでもない、現場に立つて戦う事しか出来ない……倒された時点で影先輩達は今日はもう戦えない。倒してでもだ」

「なるほど……確かにコレが実戦だったら影浦達は今日はもう戦えないな」

「それに加えて1本をより大事にしたいんです。ここぞという時に絶対に勝ち星を上げる……例えるならばそう、大相撲の横綱の様に」

「大相撲の横綱？」

「どつちかが潰れるまで戦いが終わらないのがソロのランク戦です。コレは相撲と同じで勝敗が付かないといけない試合で、力士は1日の内の約一分あるかないかの1本に全てを注ぎ込みます。10本勝負とかすると先に2本取られたけども後で本気を出して8本取れて結果的には勝ったからという考えになると甘えた考えになってしまいます……私達は防衛隊員、たった1度のミスも許されません。相手が未知の相手だろうとも初見だろうともミスを犯せば責任追及される……だからこそ心を緩めたらいけない。テニスなら野球ならサッカーならバスケットなら挽回のチャンスはあるがコレはホントの殺

し合い、異世界との戦争なんだ、一本も落としてはいけないと」

私は修の様な折れない強靱な心を持つているわけではない、皆が思っているほどに高潔な人間じゃない。

だから油断をすると自惚れる、慢心をする。ランク戦をやり続ければ楽しい一種のeスポーツという認識をしてしまう。迅や遊真はゲームとしてのランク戦と実戦は違うものだという認識を取っているだろうが……太刀川さんは怪しいな。強いやつとバトルしてえとハッキリと言ってるからなあのは。

「黒江、お前がもしミスをしてそれを部隊の誰かがフォローしてくれたらどう思う？自分のミスをフォローしてくれてホツとするか？それとも……自分の失敗に対して憎悪の念を燃やすか？」

私は後者、憎悪の念を燃やす。気にしない事も1つの取り柄なのかもしれないが憎悪の念を燃やしておかないといけない。

三輪の共犯者となる為には絶対で安定したミスや失態を犯さない実力者にならなければならぬ。だから一本に集中する。

「未知の相手だから、格上だから、相性が悪いから、負けた理由は幾らでも取り見繕う事は出来る。でも、負けは負けだ、負けたんだと認めるしか道はない……ソコのランク戦で1回でも負けるとその日はもうトリオン体を破壊されて動けなくなつた、使い物にな

らない状態になったと戦わないつもりだ……だが、その代わりに1本を極限まで研ぎ澄ませる。そうすることで本番に強くなり技のキレも増す……筈だと私は思っている」

「最後の最後で個人的主観ですか!？」

「当たり前だろう。コレはあくまでも私の流儀だ、私のやり方だ。修の様に動きがぎこちない隊員は何百回のトライ&エラーを繰り返した方が良い。ここはやり直しが聞く挑戦する事が出来る場所でもある……ただ、それだと絶対に心の何処かで慢心をする、自惚れる。そして影先輩みたいに普通に強い人に負ける、残念な事にそれが現実なんだ」

世の中割と理不尽である。

1本に集中し、1本を極限まで研ぎ澄ます、例えそれが初見の相手だとしても初見殺しの技を持っていたとしても叩き潰す、どうにかして対応する。私のサイドエフェクトは視力を強化するもので本来見えない電磁波も見ることが出来る代物だ、便利過ぎるものなんだ。それを持っているの敗退は流石にダメだろう。

「というわけで私は極力同じ人とは対戦しません。1日1本を貫いていこうと思ってるんですよ」

「……マスクマンさんの考えは分かりました。ですが、もう1本だけお願いします」

「話、聞いてたか？」

私の考えに黒江は納得をしてくれた様だがそれでもまだ戦ってくれと頼んでくる。

既に黒江から1本を取ることが出来ているので今日はもう戦うつもりは無いのだが

「1本だけでいいです。負けてももう1本なんて言いません」

「黒江もこう言ってる事だし、1本ぐらい受けてやれよ」

「はあ……分かりました。1回だけだからな」

東さんも私のやり方を理解した上でもう1本と言ってきている。

1本に集中する為に何百回のトライ&エラーを捨てている、何百回のトライ&エラーも決して悪いことじゃない。

「次は俺だからな」

ちやつかりと自分も予約を入れないでくださいよ、影先輩。

面白い考えをするなど東さんはついでだからとソロランク戦を見学していつてくれる……そんなに面白いものが見れないだろう

『ソロランク戦1本勝負、開始』

「韋駄天」

「見切った!!」

ピカチュウのボルテッカーの様にバチバチと体を光らせる黒江。

韋駄天は高速で動いて攻撃するトリガーだが射手の弾道処理の様に事前に動きを設

定している……故に単調、何処からどう飛んでくるのかみえるのでグラスホッパーを展開すると案の定グラスホッパーに触れて弾かれる

「お前のターン、終わり!!」

グラスホッパーに弾かれて飛ばされた黒江を追い掛ける。

突如として起きた反射の為に体制を立て直す事が出来ず、私の伸ばしたスコピオンに刈り取られる。

「コレで下手に韋駄天は撃つてこない……問題は次か」

相手も学習してくるので油断ならない。黒江は次からは無闇矢鱈と韋駄天を使ってくることはない。小回りが利いた立体的な動きをしてくるのかもしれない……が、サイドエフェクトがあるので見抜けなくもない。まだ黒江自身も底を見せていないのでどうなることやら。

「コレで今日はホントにラストですからね」

黒江が終わると影先輩に対戦相手は変わる。既に5本もやって、これ以上はやるつもりはない。それでも強請ってくるのでコレを本日のラストとする。

「じゃあ、いかせてもらいますよ」

影先輩は冗談抜きで強いから油断はしない……勝つたり負けたりを繰り返しているとこごとという時に勝てなくなる可能性も無きにしもあらず。

今までは一手妨害やフェイクを入れたりしたのだが、今度は真正面から堂々と攻め込むと影先輩は笑みを浮かび上がる……ランク戦が楽しいという感情の電磁波オラが溢れ出ている……誰だったか、ボーダーはアマゾネスの巣窟みたいなものだと言っていたが正にそうだろうな。

「どうした、そんなもんじゃねえだろう!!」

つと、余計な事に思考を割くのはやめよう。ボーダーが戦闘民族なのは今に始まったことではないんだ。

影先輩にどうやって一撃を入れようかと考えていると閃いたので攻撃を当てる部分に視線を送ると影先輩のサイドエフェクトは当然の様に反応する。影先輩のサイドエフェクト、ホントにこういう事には便利だな。影先輩に突きを入れるも普通に回避される。

「もらっ!」

「てませんよ」

「つちい、チマチマとやりやがって」

突きを回避した影先輩は腕を振り被るが腕の移動先にシールドを展開して妨害する。

影先輩はスコープオンを触手の様に操るからこの技に頼りきりなのはいけない……

狐月を持っている人には効果は絶大なんだがな。

「1, 2」

「っ」

「……3!」

「!!」

よし、上手く行つたぞ。

斬りかかると同時にスコープオンの形状を徐々に徐々に変化をさせる……スコープオンの基本的な能力を応用しただけなので技名は特に無い。攻撃が何処から来るのは分かっているけどもどの様にやってくるのかは分からない影先輩はスコープオンの形状変化に付いていく事は出来ず、最初に振りかぶったスコープオンよりもほんの少しだけ長いスコープオンに首を斬られる。脳伝達神経が損傷で私の勝ちである。

「おい」

「もうやりませんからね」

「違う……また明日、首洗って待ってるよ」

「1本だけですから……行つたか」

影先輩は約束を守ってくれた。明日はまだ戦っていないので普通に戦う。

ボーダーの上位陣は中々にやる……ただ、何時かは迅とぶつかり合わないといけない……本気の迅を相手に勝たなきゃいけない。私のサイドエフェクトが予知している

「お前、戦い馴れているな」

「まさか、ボーダーからトリガー支給されて一月も経ってないですよ……経験不足にも程がある」

私の戦いを見てくれた東さんは素直に褒めてくれる。

1つ1つの動きに無駄が無くて洗練されている様に見えるが、まだまだだ。まだ1対1だから上手く出来ているだけで多対一や多対多、一対多の戦闘経験を積んでいない。経験を一気に得る裏技はあるから一気にレベルアップは可能だろう。

「経験不足でそこまで出来るのか……確か強化視力のサイドエフェクトを持っているんだっとな」

「ええ……影先輩とそれなりにやれたので近距離戦は大体どうにかなりそうです」

影先輩とやりあって白星を上げることが出来ている。迅とは色々と相性がある……アイツの未来視のサイドエフェクトを撃ち破るには私自身のパワーアップが必要だ。その為にはなるべく強い人と戦って勝ち星を上げなければ。

「お前はコレからどうするつもりなんだ？何処かの部隊チームに入るのか？」

「自分で蒔いた種を自分で回収するつもりです……ただ、やらなくちゃいけない事が徐々に徐々に見えてきました」

「と……と……」

「ボーダーの訓練方法が疊毒形式なので、どうにかしないと……マニュアルの1つでも作らないと危ないですね」

私達が色々やった結果、ボーダーは毎月隊員を入隊させる事になった。

スポンサーも隊員になりたいという子も増えてくれば今までの様にトリガーを渡して後は自力でどうにかして形式はマズい。トリガーを渡して貰っている身で言うのはワガママなのだろうが、マニュアル本の1つでも用意しとけないといけない。

米屋みたいな典型的な右脳タイプならば自力で上に上がれるが修みたいな左脳タイプで自主的に勉強出来るタイプならばコレを取り敢えずは見てくれと言うようなマニュアルの1つでも用意していれば格段と隊員の質が上がる……筈だ。

「マニュアルか……確かにボーダーのトリガーを渡して、後は自力で師匠を見つけ出すか独学でやってくださいは酷なところもある。実際に実戦で動ける人間を間引かないといけないが……上を目指すんじゃないかと上に上げるか、面白そうだな」

「面白くないですよ。試行錯誤で色々な手を作り出させるのは良いですけど、肝心な基礎的な指導の部分を東さんぐらしかやってない現状……ボーダー、貴方が居なくなったら大変な事になりますよ」

「ハハッ、それだけ頼りにされているわけだ……マニュアル、試作品が出来たら見せてくれ。添付や削除しないといけない部分があるのかチェックするよ」

「いいんですか？こんなド素人に任せてしまつて」

「そのド素人を一人前にする物を今から作るんだろう」

おっと、これは一本取られてしまったな。

マニユアル作りは大事だが今すぐに必要なものじゃないのでじっくりと時間をとりたいが、あまり難しい物を作っても意味は無い。

「雷蔵さんにカメラとかないか聞くか」

第90話

「で、コレを使えばセットする事が出来る」

「すみません、わざわざ忙しい中、時間を作っていただいて」

「いや、いいよ。最終的に俺が得する事だからさ」

トリガー開発室に足を運んだ。

トリガーを使う為の基礎、基本的な教科書の様な物を作るための撮影の機材的なのは無いのか聞きに来たついでにトリガーチップの交換をやりに来た。影先輩と黒江と散々バトルしたのでスコープオンは取り敢えずはある程度は使いこなせる。まだまだ練習が必要かもしれないがそこは裏技を用いて即座に使いこなせる様になる。いや、ホントにガイアメモリ様様である。

「基礎的な部分のマニュアルを作るなら先に攻撃手アタッカーの分を作った方がいいんじゃないか？」

「攻撃手はもう充分なまでに揃ってますし、体を動かす事が得意な人が勝手に伸ばしてくれま……まあ、と言っても基礎的な部分のマニュアルは作りますが」

「レイガストを頼んだ。今回の新人もレイガストを選んだのは良いけども使いづらいからと投げ出す軟弱者ばかりで」

レイガストを作った身としてはなんとしても覇権を手にしたい雷蔵さん。

しかし言い方が悪いかもしれないがレイガストで出来ること大体スコープオンでも出来るんだよな。スコープオンのノウハウをレイガストのシステムの一部に注ぎ込んで……レイガストで出来ることとスコープオンで出来ない事を割り出さないと出来ないな。

「まあ、レイガスト使いは雪丸とやら木崎さんに任せておきましょう」

「彼奴等、製作者の想定を上回る別の使い方をしてて真似する事が出来ないんだよ！レイジはグーパンに使うし雪丸はスラスター改造するわ……お前の弟だけが希望なんだ」「コレが最後の希望って奴ですか」

ヒースイフード、ボーザバビュードゴーが頭の中で流れたが気にしないでおこう。

何時の間にか雷蔵さんの希望になっている修……コレもまた修の人徳による代物だろう。劉備並の人誑しだな。

「じゃあ、失礼します……今度なにか差し入れますね」

「コーラと映画がいいな」

「炭酸水とクラフトコーラ持ってきます。映画もオススメのをレンタルしてきますね」

「じゃあ、また明日」

雷蔵さんとの会話は色々弾むな。

あの人、エンジンアチーフで色々忙しい身にも関わらず、私の相手をしてくれる……ホントに感謝してもしきれない。

「トリガー起動」

トリオン体はノーネクタイスーツで覆面を被った不審者感満載のトリオン体に換装する。

さつきと違うトリガー構成になっているのを一応は確認しつつ狙撃手が訓練している場所へと向かい、イーグレットを取り出して訓練を開始する。訓練と言っても普通の当て……サイドエフェクトがあるのでわざわざスコープを通さなくてもいい。

「狙撃に関しては難しいな」

マニュアル作りをするとは言った以上は全トリガーをある程度は使い熟せないといけない。

イーグレットで簡単にポンポンと的のだ真ん中に当てているがサイドエフェクトの恩恵があるから出来る芸当で常人にやれと言っても不可能だろう。普通の人が出る芸を身に着けないといけない……さて、どうしたものか。

「スコープを通さなくて500m先を狙撃か……サイドエフェクトの恩恵が強いな」

「奈良坂か」

どうしたものかと悩んでいると狙撃手の王子こと奈良坂が声をかけてきた。

「三輪から色々聞いている……狙撃に関して師匠にはならなくてもいいみたいだな」

「誰かから教わるのは多分向いてない、自分でトライ&エラーした方がいい……特にサイドエフェクトが厄介すぎる」

見たくないものまで見えてしまうのが私のサイドエフェクトの欠点でもある。

光の波が見えてるせいで弾道が見えてしまう……悪いわけではないのだが、如何せん非日常に足を運んだばかりなので馴れない。

「だったら、戦闘狂を紹介してやる……噂をすれば来たな」

「うーっすートリガー支給されたんだってな」

バシツと肩を叩いてくるのは米屋だった。トリガーを支給されたと何処かで噂を聞いたので嬉しそうにやってきた。

「タイムミングが悪いな」

「ん、どういうことだ？」

「あく……取り敢えず一本だけやるぞ」

「おう……いやあ、サイドエフェクト持ちの奴とバトルするのスゲえ楽しみだわ」

米屋は引き受けた。奈良坂から米屋を貰っていき、舞い戻ってきたランク戦を行う

ブース。

早速個室に入ってソロランク戦を行うのだがここで米屋はあることに気付いた。

「お前、メインのトリガーがアステロイドじゃねえか。弧月は、スコープイオンは、レイガストはどうした？」

「だからタイミングが悪いと言ったんだ……ついさっきまで近距離戦メインのトリガー構成だったんだ」

「あちゃ〜タイミングが悪かったな……けどまあ、それを承知の上で挑んできたってことは隠し玉の1つや2つ、持ち込んでるって事だよな！」

さて、それはどうだろうか。

取り敢えず10本やろうかと言ってくるのだが1本勝負が私の心情なので1本だけにしてくれと強請る。10本勝負だとしても気が緩んでしまうからいけない。

「オレが勝ったら残り9本やってもらうからな」

「【分かった】」

『ソロランク戦1本勝負開始』

狙うのは一瞬でいい。私にはトリコのココ並の視力とS K E T D A N C Eのボツスン並の器用さがある。

槍を構えた米屋は突撃してくるので私は右足のホルスターにセットされた拳銃を素

早く引き抜き、即座に発砲すると米屋のトリオン体はあっさりと貫かれた。

「三雲、マジか。弓場さんと同じ要領でトリオン割り切ってるのかよ」

個室内に転送された米屋はやられたと呟く。

私が現在メインでセットしているトリガーは拳銃の通常弾だ。アステロイド弓場さんは弾数を減らし射程を22mまでにし弾速と威力に残りの能力を割り切った拳銃の通常弾を使っている。今回はそれを真似した……と言っても私の方がフルパワーじゃなくてもトリオン能力が桁違いにあるので威力も弾速も射程も半端じゃない。

「【約束は守ってもらう。今日は一本だけだ】」

「わあつたよ……つと、来たか」

あ、なんか嫌な予感がする。個室を出てみると案の定というべきかA級三馬鹿の残り2名、緑川と出水が居た。

米屋が飛び降りていくが私は追い掛けない。私とランク戦をするなら掛かってこい、何時でも相手になってやる。取り敢えずポイントが6000〜7000までの格下を狩っていると通信が入る。

「どういうわけかしんねえけど、一本しかやらねえならそれでいい……勝負だ」

「【了解】」

『ソロランク戦1本勝負、開始』

「そして終了」

「つ、弓場さんと同じタイプかよ!!」

試合開始のブザーが鳴り響くと同時にホルスターから拳銃を抜いて引き金を引く。

ボーダーの個人ランク戦は部隊でのランク戦と違い正面向き合う位置に転送されるので、よいいドンと同時に拳銃を抜いて構えて引き金を引く作業をするだけでほぼ勝てる。

「ソロランク戦でそれはキツイだろう」

「勝負の世界にキツイも汚いも存在しない。負ける奴が弱くて悪い」

向かい合ってよいいドンの勝負ならば、出水が分が悪い。

弾を出して、分割して、弾道処理をして、飛ばしての4つの動作を滑らかにスラスラと出来る出水でもよいいドンの早撃ちには敵わない。

「弓場さんと同じなら、よいいドンの早撃ちに敵わないなあ……ランダムに転送されるルールでやらない?」

「【いいぞ、ただし1本勝負だ】」

よいいドンの勝負での早撃ちには分が悪いと感じた緑川はランダム転送を提案する。

普通にやっても早撃ちだけで終わってしまうので味気無いと感じていたところだ。

色々とやっておかないと損だ……それでも1人に対して1本勝負だが。

『ソロランク戦一本勝負、開始』

一本、この一本は落とせない……いや、そもそも落としていい一本なんて何処にも存在しない。

影先輩の時と同様に心の中を空っぽにしつつリーダーを展開する。割と直ぐ近くに緑川は居るが……奴はボーダーでもトップレベルの機動力を持っている。この程度の間合いなら一瞬で詰めてくる。

「見つけ!!」

どちらかが倒れるまで終わらない時間無制限の一本勝負なのでバググワームは互いに使わない。というか仮に使ったとしても私には電磁波等の常人には見えない光を見ることが出来るので何処に潜んでいるのかが分かってしまう。バググワームもスイッチボックスでのトラップも狙撃も基本的には通用しない。ワイヤーも当然効かない。

緑川はグラスホッパーを展開して、飛んでこようとするので突撃銃アサルトライフルを取り出し迎え撃つ。というか連射する。緑川は当然撃つてくるのを警戒しているので途中、右に曲がったりする様にグラスホッパーの向きを変えたりしているのだが何処に向かうのが丸分かりだ

「うわっ!?!」

グラスホッパーが展開されている位置の前に突如として壁が、エスクードが生える。

突然の事に緑川は驚くが、そこは伊達にA級隊員ではない。エスクードを踏み台にして私との間合いを詰めようとするので私は更にエスクードを展開して緑川の四方を囲むと撃った弾が弧を描き綺麗に緑川の頭上を狙い撃ちにする。

「通常弾じゃなくて追尾弾なの!？」
アステロイド

「通常弾は拳銃しか使っていない」
アステロイド

私のクイツクドロウと通常弾に目が向きがちだったが通常弾だけが私の弾じゃない。

上から襲ってくる事は分かっていたので頭上にシールドを展開して攻撃を防ぎ切る緑川だったがシールドはボロボロだった……私を転生させてくれた仏、今日ほどトリオン能力が多くて良かったと思う日はないぞ。

緑川は高くジャンプしつつシールドを展開する。グラスホッパーで飛ばうと思えば飛べたが、私の追尾弾の威力を見てフルガードに変えたか……だが、私の手札はまだ残っている。

「直角につ、変化弾!？」
バイパー

シールドに向かって飛んでいった弾がシールドにぶつかる前に直角に曲がる。

こんな事もあるうかと変化弾も搭載している。拳銃の通常弾に突撃銃の追尾弾と変化弾が今回の目玉だ。シールドの間隙を撃ち抜かれた緑川はコレでダウン、戦闘不能に陥りソロランク戦は終了となる。

「がああああ!!後もうちよつといけたのに」

「【いやいや、普通に私の勝ちだからな】」

「もう一本!もう一本やろうよメロン先輩!!」

「【私は一人に対して一日一本勝負しかしない主義だ……明日は別のトリガー構成にしてくるから首を洗って待ってろ】」

そしてメロン先輩が定着なんだな……まあ、弟がメガネさんだからメロンさんとは語呂も丁度いいから良しとするか

「ええ、もつともつとやろうよ!あ、どうせだつたらあのメロンの鎧かスイカを纏つて来てよ!」

「【アレは有事の際にしか使わない代物だ。というよりはアレは生身の肉体の上に鎧を身に纏っている、トリオン体を擬似的に再現している戦闘訓練のシステムと繋げる事は出来なくもないが、生身の肉体である事には変わりはない。怪我をするのはごめんだ……なにより斬月に変身すれば弱い者いじめになつてしまう】」

斬月及び斬月・真、それにスカルにエターナルにさえなれば確実に勝てる。

特にエターナルはヤバイ。問答無用でボーダーのトリガーを使用出来ない様にすることが出来る危険な代物だ……まあ、何処かで訓練はしないといけないがそれをするのは本部じゃなくて玉狛支部でだ。

「私と戦いたかったらまた明日に挑んでこい。1日1本勝負なら幾らでもやってやる」

「ほう、それは良い話を聞いた」

「！」

おっと、こりや口走ったな。

後ろに風間さんが居ることに気付かずに米屋達に挑発していると風間さんがやる気を出していた。

「何時かのリベンジをさせてもらおう」

「緑川の時と同じルールでいいですね？」

「ああ、それで構わない」

よいいドンの勝負ならば確実にこちらが勝てるので多少のハンデは必要である。

早速個室に入って風間さんのスコアピオンアタックと思わしきものを発見する……10000超えの攻撃手、ボードアタック総合3位の男のポイント半端じゃないな。

『ソロランク戦1本勝負開始』

ランク戦が開始されると同時にリーダーを展開する。

どちらかが倒れるまで終わらない1本勝負……なのだがリーダーには風間さんは写らない。バググワームを起動している……原作の遊真の様にバググワームを起動しつ

つ颯爽と私の首を狙いに来るつもりなのだろうか？

「あつちか」

取り敢えずその手は私には通用しない。微弱な電磁波の流れから風間さんが何処に居るのが分かる。

向こうはどう思っている？カメレオンが通じないのは前回のスカルの一戦で分かっている筈だ。バッグワームを使用しての奇襲は……出来れば御の字といったところか。

「エスカード」

炸裂弾は今回搭載していないので炙り出しは出来ない。

だったら動きを制限するシンブルな壁が必要だと十字路に立ち、四方からエスカード壁を生やす……レーザーには風間さんが写っていないがサイドエフェクトが何処に居るのか教えてくれる。なら、ちよつとやってみるかといーグレットを取り出してエスカードを起動してカタパルトエスカード、射出！

「そこだな」

空中を飛んで風間さんが何処に居るのか見つけると直ぐに狙撃する……コレもサイドエフェクトが無ければ出来ない芸当だろう。

不意をついた一撃だが流石はトップクラスの使い手、バッグワームを解除しつつシールドを展開し、私の狙撃を防いで走ってくるが行く手はエスカードの壁が邪魔をしてジ

グザクにしか走れない。

ゆっくりとゆっくりと落ちていく私はイーグレットを消して直ぐに拳銃を取り出して飛んでくる風間さんを撃ち抜いた。

「結構な無茶をしたな」

空中でクイツクドロウなんて変態じみた事を何時の間にか出来るようになっていた。

コレもまたサイドエフェクトと手先の器用さによるチートだろう……チートに頼りまくりだが、コレしか私には道が無いので仕方ない事だ。

「コレがお前の本気なのか？」

「まだ手探りでやっているところがありますのでなんとも言えないですね」

今のスタイルが自分にとって最高のスタイルなのかは今の自分にも分からない。

狐月を使っていないので本来のスタイルとは違う。銃手ガンナーとしても最適なスタイルかどうか不明である。

「スカルとして戦えるか？」

「アレは有事の際にしか使わないので諦めてください」

「ただ戦いたいんだ。私の方がデッドオアアライブになるので私は戦うことはないぞ。」

「1本だけの勝負だと言っていたので風間さんはそれ以上はなにも言わずに去っ

ていく。クールな大人だな……身長160cm以下だけど

「お前、滅茶苦茶引き出しがあるな……風間さんに勝つちまうとか既に100000越えの銃手ガンナーじゃねえか？」

風間さんに勝てるとは思っていなかったのか米屋は称賛する。

「たった1本取れたただけだ。ここで図に乗ってしまうのは良くない……褒めないでくれ」

「硬いなあ、もうちよつと楽しんでこうぜ」

「私は遊ぶためにボーダーに入ったんじゃない」

気を張り詰めているかと聞かれればそうかもしれないがこれぐらいやっておかないと、油断すると気が緩む。

米屋も出水も緑川もボコボコにしたのでどうしようかと悩んでいるとリーゼントインテリヤンキーもとい弓場さんがやってきた

「おい、俺とランク戦をしろ」

「1本勝負だったらいいですよ」

「お、面白い対戦カードが組まれたぞ」

弓場さんが挑んでくるとは思ってもみなかったがコレはこれで都合だ。

個室に入り、10000点を超えているアステロイドを選択すると市街地に転送され

る。

『ソロランク戦1本勝負、開始』

と同時に私も弓場さんもホルスターから拳銃を引き抜いた。

シールドを展開しても間に合わないのはお互いに理解している。必要なのは早撃ちの技術……私の早打ちは0，13秒ぐらいの筈だ。のび太くんにはギリ勝てないけども他の名ガンマン達よりは早く撃つことが出来る

「あ……」

「っ、どつちだ!!」

お互い目にも止まらぬ速さでクイックドロウして、通常弾でお互いを撃ち抜いた。

どちらもトリオン体が破壊されてしまい、どつちが先に倒したのか機械に判定を委ねる

「……俺の負けか……」

機械判定の結果、私の方が僅かに早く弓場さんを撃ち抜く事が出来た。

弓場さんは負けを認める。1本勝負と約束していたのでそれ以上はなにも言っていない

「その腕、何処で身につけた？」

「……さて、私自身も驚いているんですよ。私にここまで銃の腕があるとは思っていま

せんでした」

「その声は……オメエ……」

「私が何者なのかはくれぐれも内密に……秘密の方がなにかと盛り上がります」

私は謎のマスクマンの方がいいんだ……その方がカッコいいからな。

「もう一本、ダメか？」

「さっきの勝負は殆ど引き分けに近い、いや、継続戦の事を考慮すれば私は敗北した。敗北した以上はトリオン体が回復するまで1日待たないといけない。申し訳ないですが今日はもうランク戦をしません」

引き分けに近い判定勝ちは負けみたいなものだ。

負けた以上はグチグチと言ってランク戦をやっている場合じゃない。負けたんだ……仮面ライダーに変身する事さえ出来れば忍田本部長ですら簡単に倒すことが出来たんだがな。

第91話

「よし、準備出来たな」

米屋達と軽くソロランク戦を終えたので本来の目的であるマニュアル作りをしようと思う。

ソロランク戦の記録は自動的に保存されるのでその技術を応用し、音声も拾える様になっている。

「さあ、はじまりましたよく分かると思うボーダーのトリガー講座。今回は攻撃手系のトリガーに関して色々と説明をしていきます」

「おい、まだか？」

「まだだ……え、ボーダーの攻撃手アタッカーのトリガーは大きく分けて3つあります。1つは弧月、シンブルな刀に近いトリガーで剣に関して自信がある人にオススメです。2つ目はスコープオン、切れ味抜群で重さは皆無に近く自由に剣の形状を変える事が出来る代物で素早い戦闘をする人にはオススメです。3つ目はレイガスト、ブレードとして切れ味はやや欠けますがその分頑丈に出来ていてシールドに変形させる事も可能です。防御

を主体にした人にオススメかもしれないです」

「最後、曖昧だな」

「仕方がないだろう。私はまだどれも極めていないのだから……本日はA級の三輪隊の攻撃手の米屋陽介と共に色々やっていきたいと思います」
アタッカー

今回は攻撃手系のトリガーに関する講義になっているので専門家を呼んだ。

本音を言えば風間さん辺りを呼びたかったが本人が断ってきた「俺もまだまだ未熟なのが分かった」つと言ってきた。首を縦に振ってくれると思っただけにちよつとシヨックだが、滅気ずに米屋に代理を頼んだ。

「では、先ず弧月について。弧月は一言で言えば刀で、純粹な剣の腕に自信がある方にオススメです……ですが、専用のオブショントリガーを付ける事で必殺技も生まれます……実際にやってみましょう」

「お、待ってました」

米屋を相手に実戦的な動画を撮影する。

弧月を起動して鞆に納めた状態で仮想訓練室で米屋と対峙する。米屋は弧月（槍）を構えた。

「弧月には専用のオブショントリガーが2つあります。1つは」

「コラあ！余所見してんじゃねえぞ」

説明中に槍で突いてくる米屋。

一応の説明は大事なのだが、ここは後で副音声を入れる事でカバーをする事が出来る。余所見をしている事に関して米屋は怒っているので弧月で捌く。上手い具合に弾く。

「熊谷以上に上手いな」

「そりゃあイメージトレーニングしまくってたからな」

米屋の弧月（槍）には射程を伸ばす旋空以外にも幻踊が搭載されている。

米屋以外にもう一人誰かが搭載していたが誰かは忘れた。幻踊は刃の形状を少しだけ変える事が出来るオプシヨントリガーだ。故に米屋の槍をギリギリのところまで回避するのは悪手、穂先の形状を変化して槍の刃を当てに来る。

「どうしたどうした！守ってばかりじゃオレには届かねえぞ」

「攻めに転じてても良いが、弧月の守りの動画を回収してるところだ」

「だったらさっさと終わらせて攻めてみるよ」

「ああ、そうさせてもらう」

一歩、前に踏み込む。

米屋の使っている武器は槍、間合いを詰められれば戦いにくくなる

「槍の間合いを詰めればイけると思うじゃん？」

等と言うのは甘えた考えである。米屋の槍は如意棒程とは言わないが縮小する事が出来る。

縮小した槍で突いて来るのは見えているのでこちらもオプシヨントリガーである幻踊を起動して十手の形に形状を変えて槍の棒の部分を挟み込みdの字の形状に変化させて挟み込む。

「やばっ」

「もらった」

腕を引つ張り、米屋から槍を奪い取る。

米屋は槍を死守しようとするが私の引つ張る力の方が強くてバランスを崩したので幻踊弧月を解除し更に一步踏み込んで米屋の胴体を袈裟斬りする。

「かあく幻踊弧月の使い方上手いな！」

「えく今のがあんまり搭載されていない幻踊弧月の使い方です……ぶっちゃけた話、スコーピオンでもレイガストでも出来ません」

「おいおい、そこは上手い具合にフォローを入れてやれよ」

「いや、どうしろと？少なくともレイガストで同じことを出来るんだぞ」

スコーピオンは耐久性の問題で無理矢理破壊する事が出来るかもしれないが頑丈が売りの防御的なレイガストだと壊れる事なく出来る。

刃の形状をある程度は自由に変える事が出来るレイガストと好きな形状に変化出来るスコープオンがあるから幻踊は正直需要が少ない。現に米屋ともう1人しか幻踊を入れていない。

「幻踊は攻撃しつつ刃の形状を変化させますので判断力と決断力も大事で、扱いは結構難しいところ……では、もう1つのオブショントリガーについて説明いたします。米屋、私と10〜15m程、距離を開けてくれ」

幻踊についての説明はテロップか何か入れておけばいいだろう。

今度のもう1つの大人気オブショントリガー、京介と三輪以外はほぼ搭載されている旋空弧月について説明する。

「旋空弧月」

「つちよ、バトル無しで斬るんじゃねえよ!」

「弧月使いの殆どが搭載しているオブション旋空。能力は至ってシンプルで約1秒の間弧月のブレードを伸ばす機能です。今の様に米屋が素の弧月の射程範囲内だけで見えている、後もうちよつと近付けば攻撃を当てる事が出来るかもという距離、具体的に言えば5〜18mぐらいの距離で使うのがオススメで空中に移動している人も斬ることが出来ます」

「旋空のお返しをくらわせてやるぜ!!」

「旋空弧月の射程は踏み込み有りで約22mですが射程は弄る事が出来ます。ボーダー随一の旋空弧月使いは0、2秒で40mの旋空弧月を撃つことが出来ます。詳しい事はログがありますのでそちらで確認をお願いします」

バトル無しで旋空弧月を撃ってきた事に対しては米屋は怒り、槍での旋空弧月を撃ってきたのだが回避する。

弧月に関する説明はコレでいいだろう。剣の持ち方とかそういうのは後で説明する動画を別撮りをしておけばいいか。

「次はスコープピオンです。スコープピオンは切れ味は弧月と同等で形状を好きな様に変化させる事が出来ます。例えばブーメランの形に変化をさせて投擲する事が出来ます」

と言いつつ米屋に向かって投擲する。

「うおつ、危ねえな！」

「それと体の何処からでも出すことが出来ます、この技術は枝クラッチフレッド 刃と呼ばれる技の一種です……スコープピオンにはオプシヨントリガーはありませんが自由度の高いトリガーです。本人の発想力次第で色々な技が生まれます。例えば足にスコープピオンを展開して地面を貫いて突き刺すもぐら足モルクローや二本のスコープピオンを接続する事で通常よりも射程範囲を伸ばすマンティス、他にも幾つか存在していますがそこは自分で試行錯誤を、今言った2つの技術に関してはこちらのログがありますので参考にしてください」

スコープピオンの特徴は自由度が高いところ、本人の技術次第で色々な化け方がする。発想力が高い隊員ほどスコープピオンは化ける……そういう点では遊真は優れている。スコープピオンをスピード感溢れる武器だと思っっている隊員とは大きく異なっている。

「では、最後にレイガストについて説明をします……米屋隊員、お願いします」

「お、やるか」

スコープピオンに関しては参考資料が多々あるので細かな説明よりも記録を実際に見せた方が早い。

最後にレイガストについて説明をする為にレイガストを起動して米屋と対峙する……さて、レイガストでの戦闘は何処までイけるのやら。ウォーターメロンガトリングより軽いが……どうしたものか。

「レイガストは攻撃手系のトリガーの中で最も重いです。ですが、決して振り回す事は出来なくも無いです……が、無理に振り回す事をしなくてもいいです」

「つちい、硬えな!!」

「レイガストにはシールドモードとブレードモードの二種類のモードがあります。シールドモードで間合いを詰めてブレードモードで攻めるとというのが製作者の意図らしいですがコレが意外と難しいです」

米屋の槍捌きをレイガストのシールドモードで防ぐ。

素早い攻撃だがサイドエフェクトで何処から攻撃がやってくるのか見えているのでなんとか対処する事は出来る。このトリガー、扱いが難しいが……決して使えないトリガーじゃない。

「シールドモードのシールドですが現在の縦に長い長方形の形以外にも好きに形状を変化させる事が出来ます……例えばこんな風に」

「っ!!」

槍で攻めてくる米屋は槍を横薙ぎに振るうのでレイガストのシールドに凹みを作る。

米屋の槍は見事に凹みの中に入ったので凹ませている部分を無くして米屋の槍を動かせない様にする

「スラストター、^{オン}起動」

それと同時にレイガストのオプショントリガーで推進力を与えて加速するスラストターを起動する。

米屋はスラストターを起動したレイガストに引っ張られてしまい、私は直ぐにシールドモードからブレードモードに形状を変化させて米屋を切り裂いた。

「レイガストのシールドはスコープオン程ではありませんが程度は好きに形状を変化させる事が出来ます。シールドで耐えて間合いを詰めたりして隙を狙ってブレードに変化させて攻撃するのが有りかもしれません……あくまでも参考にするだけでお願

いします」

「……もういいか？」

「ダメだ……と言つてもやるんだろ？」

「当たり前だろう。フル装備してる奴を早々に相手に出来るかよ」

「ずつと説明をする為に米屋は少しだけ手加減をしてくれている。一部本気でやってきている時もあったが……まあ、許容範囲内だ。」

米屋は動画の説明を終えたのでウズウズしている。

「10本だけだからな」

「おう！ 弧月10本、レイガスト10本、スコープオン10本の30本勝負な」

「この野郎……」

動画撮影の手伝いの条件として米屋と本気のバトルをしなければならない。10本だけと限定した矢先、30本に追加してきやがる……勝ち方を指定してくるな……いや、コレもまたいい経験になるのだろう。

弧月を取り出し、右手に装備。レイガストを手に取りシールドモードでガンダムスタイルもとい片手剣のスタイルを取る。

「いいねえ……村上先輩と同じスタイルか」

「盾と刀を持った戦闘形態が私の基本スタイル……もつとも使っている武器が無双セイ

バーじゃないし盾がメロンディフェンダーではないからやや勝手が異なるが……まあ、なんとかなるだろう」

弧月が無双セイバーじゃないのが本当に痛いからこそは仕方ない事だ。上に無双セイバーをトリガーで再現してくれと言っても時間がかかるだろう。ここからは説明とかをするのでなく真剣に10本を、各種攻撃系を10本、合計30本を取らなければならぬ。

米屋は槍で突いてくるのでレイガストのシールドモードで防ぐが米屋もそれを読んではか幻踊弧月で穂先の形状を変えてL字して腕を狙いに来るので体を反らして幻踊弧月を回避する。

「中々の槍さばき……だが、残念だな」

「なにがだよ?」

「槍の攻撃が動作から大体読める」

「マジで!?!」

「手の上で滑らせるか腕を引くかしないと突くことが出来ない、普通の槍だ……普通の槍の突きは見破りやすい」

「普通の槍ってなんだよ。槍にレパトリリーがあるのか?」

「その辺は自分で調べろ……旋空弧月」

無駄話はこのままでだと突きの旋空弧月を決める。

「ぬうお!!」

「先ずは弧月1本……残り29本、弧月9本」

先がまだまだ長いが決して出来ないわけじゃない。

レイガストを?の形にブレードを変化させて投擲する。米屋は当然反応するが直ぐに違和感に気付く。

「二段構えかよ!」

レイガストを空中で投擲し、途中でスコープオンを起動してスコープオンを投擲する。

戦闘中なので動く物に目が行きがちになるのでそれを利用してもらった。飛んでくるレイガストを対処しようとしている中でレイガストが突如として刃が消えて第二の矢であるブーメラン型のスコープオンに米屋は引っかけた

「スコープオンで1本、残り28本スコープオン9本」

さて……次はレイガストで決めるか。レイガストを拾って構えると再戦のブザーが鳴り響く。

米屋の武器は弧月（槍）一本のみ……トリオン能力が低いのでシールドでの防戦は向いていない。持ち前の運動神経である程度は回避する事が出来る……なら、一手奪うし

かない。

「幻踊弧月ロック、スラスター起動」

米屋は突きを撃ってくるので、幻踊弧月を使い槍の動きをロック。そのままブレード形状を変化させたレイガストをスラスターで推進力を増して斬りかかる。

「残り27本、レイガスト9本」

「んにやろう。冗談半分で言ったのにマジでやりやがつて……」

「望んでいたんだろう、この勝負を」

「当たり前だろう！」

それからはバシバシと米屋を切り裂く。

レイガストで、弧月で、スコープピオンで、真正面から堂々と斬ったりする時もあればフェイクを入れたり妨害策を入れて一手開けてから攻撃を入れたりして27本、残り弧月1本、レイガスト1本、スコープピオン1本まで持つていく……無論、こちらは1本も取られてない。

「クツソ、マジでヤベえな」

私に強化視覚のサイドエフェクトがあるのは重々承知の上で米屋は挑んでいるが脅威を感じている。

不意を突こうにも全ての動作を見切られている。幻踊弧月の不意打ちは当然の様に

回避する事が出来ている。持ち前の運動神経も同等どころかそれ以上の私を前に發揮する事が出来ていない。

「旋空弧月」

斜め上に斬り上げる旋空弧月を撃ってくる。当然の様にその動きは見切っている……なので、米屋の腕の行く先にシールドを展開して旋空弧月を無理矢理中断させてレイガストを構えてスラストを起動して間合いを詰めながら斬り込む。

「レイガスト10本完了、残り2本」

「まだ1本も取れてねえ……まだ終わらせたくねえわ」

米屋にとって私との30本勝負は至福の刻なのだろうが、至福の刻は何時か消え去るから至福の刻なんだ。

「旋空弧月」

「ナメン、やべ!!」

弧月を鞘に納めて、居合の要領で旋空弧月を撃つ……と見せかけてブーメラン状のスコピオンを投擲する。

旋空弧月が来ると思っていた米屋は回避しようとするのだが回避しようとした先にスコピオンが飛んでくるのでシールドを展開してスコピオンを防ぎ、今度はホントだぞと無言の旋空弧月を決める。

「弧月10本、完了……残りはスコープオンだ。どう来ると思う？」

ラストはスコープオンで決めると予告する。

スコープオンは自由度が高い武器でもう一本スコープオンをセットしていれば色々出来た……というか今更ながら尖ったトリガー構成をしたものだ。コレでぶん回す事が出来ている自分のセンスが恐ろしく感じる……私の素の力か、それとも転生特典として貰ったもののおかげか、どちらかは分からないが……まあ、どっちでもいいか。

「ふっ!!」

最後の一本がはじまるとスコープオンを出して振り被るが米屋は軽々と避ける。

流石はA級というべきかこの短時間の間で私の動きに慣れてきた……まあ、トリックキーな1手を加えたりして29本も取られれば嫌でも動きを見抜く事が出来るだろう。

米屋の手札は分かっている。ある程度は縮小することができる槍、旋空、幻踊の3つでシールドは私のスコープオンでも充分に破壊する事が出来る代物だ。

「っー」

米屋は今、なにを考えているのだろうか。

腕を振ってスコープオンで斬りかかるのだがスコープオンの長さを少しだけ変えている。コレで避ける事が出来ると寸でのところを米屋ならば見切る事が出来るだろうから、それを逆に利用して斬りかかる度にスコープオンの長さを変えている。米屋の首

を取ることは出来ないが米屋の体に当たる……が致命傷にはならない。

「完全に回避しねえとダメか」

私の長さを地味に変更しているスコープピオンのタネに気付いた米屋は更に一步深く回避する。

スコープピオンをもう少し長くしても問題は無いのだが、それをすれば更に米屋は引くのに集中して攻撃を当てるのが難しくなる……が、私にはサイドエフェクトがあるので米屋に攻撃を当てる事が出来る。

「戦闘系のトリガーじゃないオプシヨンのトリガーを搭載していたのなら色々と出来たが、これが限界か」

「シールドをそういう風に使うか、普通!!」

「空中に出して防御するだけじゃ芸が無い……なによりトリオン貧者がトリオン能力が高い相手をする際に使える手だ」

斬り込むと米屋は避けるので移動先にシールドを展開して妨害する。

シールドを防御にしか使っていない、シールドで妨害をするという発想に至っていない米屋は声を上げるがコレで詰みだと米屋に迫りスコープピオンで胴体を切り裂くと一本取れた。

「弧月10本、レイガスト10本、スコープピオン10本、合計30本完了だ……ふう……」

流石に疲れたな」

ここまで1人の相手に連戦するのははじめてだ。

1人1日1本勝負にしているせいか余計に神経を張り詰めている。

「なに言ってるんだよ。太刀川さんとか平気で50本挑んできたりするぞ」

「あの人、単位や成績を犠牲にしてボウダーの頂点に立つてるって噂は本当なんだな」

この程度の事で音を上げているのは情けないと言いたげだがコレでも結構頑張っている方だ。

方には行っていないがマスタークラスでエースと呼ぶに相応しい実力を持っている米屋相手に1本も取られずに30本（レイガスト10本弧月10本スコープオン10本）取るのは神経を張り詰める。

「今度こそ今日はおしまいだ。これ以上やってたら私のメンタルが保たない」

「心のスタミナ増やした方がいいぜ」

「お前がガリガリと削ってくるからこうなってるんだろうが……お前は強いんだから連勝するのが難しいんだ」

「んな事を言ってる割には1本も落とされてねえじゃねえか!!」

「当たり前だろう。1本でも落とすとした時点で私は死んだも同然なんだ……たった1本でも落とせない、例えそれが訓練だとしても」

偉そうな事を散々言っているんだ、それ相応の実力と成果を示さなければならぬ。訓練だからとゲーム感覚になってる奴には負けたくない……ゲーム感覚になってる奴等、無駄に強いけど。

「私はやることがあるから今日はもうここでお開きだ……明日は1本だけ勝負してやる」

「おう。明日は色々とおブシヨントリガー付けて勝負しようぜ」

明日も戦うと約束を交わすと米屋は訓練室から出ていった……………

「完全に去ったか」

米屋は仮想訓練室から出ていった。

監視の目はあるものの一応は1人になることが出来ると生身の肉体に戻り、ロストドライブを取り出す

『ダミー』

「変身……からの更に変身」

ダミーのメモリを使い、ダミードーパントの姿に変身して村上先輩の姿に変身をす
る。

米屋相手に実戦的な経験を色々と得たからそれを反復させておかなければならない。その為には村上先輩の強化睡眠記憶を利用する……米屋相手にして結構疲れたので1

5分という短い眠りだが割とあっさりと眠りにつくことが出来た。

第92話

2月2日（日曜日）本日は休みの日だが私には休みはない。

まだ正式にボーダーの隊員になっていないので防衛任務に出ることは無いのだがやらなければならない事は多々ある。例えばマニュアル作りとか

「昨日の記録ログを参考に副音声で解説を加える……ゆっくり実況のと同じ要領でいいか」

昨日、米屋を相手に30本勝負をしたのでその時の動画を参考に出来ないものかと思考する。

東さんに提出するトリガーの基礎学的なマニュアルは下手な物を出せば高確率でボツになると私のサイドエフェクトが言っている。ちゃんとした物を作り上げなければと昨日の記録ログを確認しつつここは使える使えないの仕分けをしていると部屋の呼び鈴が鳴るので誰だと出てみると米屋と出水だった。

「三雲、ランク戦やろうぜ！」

「そんな磯野、野球やろうぜのノリで言ってくるんじゃない」

部屋で引きこもっていて色々やっているのと2人がランク戦に誘ってくる。

「中島的な感じで米屋は言ってくるのでツツコミを入れつつトリガーを手にして起動してトリオン体に換装する。」

「昨日もそうだが怪しき満載だな」

「ほっとけ」

謎のマスクマンに扮装している私に対して呆れる出水だが出水のセンスも大概である。

トリガー構成は昨日の剣闘形態から色々と変えており、昨日とは違うぞと言えば米屋はワクワクする。

「一本だけだからな」

「お前、ホントにそれでいいのか？何回も繰り返したりすることで分かる事もあるんだぞ？」

「確かにそのメリットは有るのは認めるが、それをすると気が緩む。オン・オフの切り替えはそこまで上手くないんだ、私は」

ボーダーの戦闘訓練は何回でも繰り返し返すことが出来て色々試行錯誤が出来る。

1日1人1本なんて誓約をしていけば試行錯誤の末に見えてくるものが見えてこなかったりする可能性があるが私はそれを承知の上でこのスタイルを取っている。でないと気が緩んでしまうから。

「マジでやる時は自分の事を私じゃなくて俺って言ってるのに……固いな」
「まあ、妙なところに拘りがあるのが三雲らしいっちゃらしいけどな」

もう少し楽しんでも良いんじゃないのかと米屋は困るがそこが私らしいと出水は頷く。私らしいってなんだろうと少しだけ疑問を抱くがそこはあまり気にしない方がよさそうだ。米屋との真剣勝負、今回のトリガー構成でどうやって勝とうかと考えながら歩いていると太刀川さんに遭遇する。

「……誰だ？」

この姿で会うのははじめてなので太刀川さんは首を傾げる。

出水はこういう感じの展開になる事が分かっていたので素顔の方が良いんじゃないのかと言いたげな顔をし、私の事を教えようとするのだが私は出水の口を塞ぐ

「【謎のマスクメロンマンとでも言っておきましょうか】」

「ほう、謎のマスクメロンだと？ 出水、お前俺に内緒でなにか面白そうな事をやろうとしてるな」

「いや、別に隠してるわけじゃ……なんで話をややこしくするんだよ」

「【そっちの方が面白いし……後に色々と役立つ】」

謎のマスクメロンマンがボーダーには居るというのを印象づける事が出来ればそれはもう御の字だ。

迅のサイドエフェクト程とは言わないが未来視は出来なくもない。なんだったら迅から迅の記憶を読み取ってダミーのメモリを使って迅に化ける事が出来る。

「今からコイツと一本勝負するところなんですよ」

「お、いいね。俺も後で勝負してくれよ」

「[一本だけならいいですよ]」

今から米屋と一本勝負をする事を教えると嬉しそうに私との対戦を太刀川さんは予約する。

一本だけが勝負する約束を取り付ける事が出来た……ボードアのトップに立つ実力者の腕前が気になるところだがその前に米屋との対戦を果たす。何時も通りブースに来て個室に入って9000台の弧月使いを選択、一日しか経過していないがもう馴れたものだ。

『ソロランク戦一本勝負、開始』

「今回は弧月か」

ソロランク戦が開始と共にトリガーを起動する。

鞘に納刀している弧月を見て米屋は笑みを浮かびあげるのだが今回は弧月だけじゃないとエスクードを起動して3つの方向に囲む。

「昨日みたいにかいねえぞ」

昨日、私は突きでの旋空弧月を米屋にお見舞いした。

エスクードのバリケードで一方だけ開けてそこを旋空弧月の突きで来ると思っているのだろうが、今回は違う。米屋は望むところだと敢えて開けている真正面を突き進んでくるので黒色の拳銃を構えるとシールドを展開しつつ突撃をしてくる。

「惜しいな」

「ぬうおあ?」

私の撃った弾はシールドに当たった、正確に言えばシールドを通過した。

シールドには一切のヒビは入らず黒い弾は通過していき米屋にぶつかると六角形の重しが出現し、米屋は体制を崩したので弧月を鞘から抜いて米屋の首を狩った。

「あく畜生、鉛レッドパレット弾か。完全に油断してたわ」

米屋に撃ったのは通常弾アステロイドではなく通常弾+鉛レッドパレット弾である。

エスクードで3方を囲み一箇所のみ出口を作り真正面から突撃をさせつつ、拳銃で撃ち抜く。米屋みたいな強い奴には鉛弾を、普通の相手には威力高めの通常弾を。奇門遁甲の陣……的なのだな。

「いいじゃん、お前!」

今の1本を見ていた太刀川さんは興奮する。面白い対戦相手が見つかったのだと子供の様にはしゃいでいる。

早速、俺ともやろうぜと10本勝負を申し込んでくるので却下。1本勝負だけと釘を刺す。

「なんで1本なんだよ、もつともつとやろうぜ！」

「【申し訳ありませんがコレばかりはポリシーなものでして】」

1本勝負な事に太刀川さんは不満を漏らす、こればかりは譲れない。

一応ポリシーを語ると渋々納得というか俺が勝つたら追加でもう1本など無茶な要求してくるのだが、最初から私には勝つしか道は無いのでこの道を行かせてもらう。

『ソロランク戦1本勝負開始』

「よしっと、早速来たか」

試合開始と同時に太刀川さんの三方をエスクードで囲む。

先程の米屋との戦いで使った手でこの後どうなるのか分かっている太刀川さんは下手に突撃してこず、一歩足を前に出して踏み込む

「旋空弧月……ギリ届かないか」

太刀川さんが旋空弧月を撃ってくるのだが私にはギリギリ届かない。が、エスクードのバリエードを破壊する事は出来ている。

太刀川さんはグラスホッパーを起動して勢いをつけて私の元まで飛んでくるのでエスクードを地面から生やすが太刀川さんはズバズバと切って破壊してくる。

「どうした！妨害だけじゃ俺を倒すことは出来ねえぞ」

妨害札として持っているのはエスカードと鉛弾……そしてシールドである。

太刀川さんは私が銃を撃つことが出来ない程に間合いを詰めて斬りかかるが私は弧月を鞘から引き抜いて防ぐ

「もう一手あるぞ」

太刀川さんは弧月二刀流で今防いでいる弧月は一本だけでもう片方の手が空いている。太刀川さんはもう一本の弧月に手を向かわせようとするので弧月付近にシールドを貼って妨害する。

このシールドを貼って行き先を妨害する技は中々に使える。相手の動作を完璧に見抜いてジャストなタイミングで貼らないといけない中々にシビアな技だが強烈な技だ
「んにやろう、結構セコい手を使いやがって」

もう一本の弧月が抜くことが出来ないと分かれば太刀川さんは一本の弧月で攻めに掛かるのだがエスカードを背後から出現させて太刀川さんを突き飛ばし体制を崩し、バツサリと太刀川さんの首を奪った。

「おい、なんだ今の！エスカードで物理的に邪魔するとかマジか!!」

1本勝負が終わり、個室内に転送されると太刀川さんが通話してきた。

早速記録^{ログ}を確認して自分がなにをされたのか確認した後嬉しそうに笑っている。

「もう一本！もう一本だ！」

「やです」

「ケチくさい事言うなよ。後で餅を奢ってやるからさ」

「【餅で動くと思ったら大間違いです】」

もつと戦いたいと言うのだが太刀川さんから一本を取るのには割とキツイ。

初見殺しのところがあつたから勝ち星を取ることが出来た……と思う。太刀川さん、実際に対峙してみてよく分かるが滅茶苦茶強い。斬月だったら確実に勝てるんだがな。

「【大体こんなところで油売って大丈夫なんですか？レポートとか】」

「お前、それ言うのは無しだろうが」

あ、やっぱりあるんだ。

レポートをそつちのけでランク戦をやっていると噂な太刀川さん。案の定レポートを隠している……

「【上の人に真面目に大学に通うつもりのある人にボーダー推薦の枠を使うべきだと言つとかないと】」

嵐山さんの様な爽やか系のイケメンになれとは言わない。日夜鍛錬を積んでいる風間さん程固くなれとも言わない。でもある程度は示しをつけておかないといけない。ボーダー推薦という謎の枠を使用して三門大学に裏口入学したんだからせめて大学生

としてちゃんとしている。ランク戦をeスポーツ感覚でやってる事に関しては責めたりはしないからさ。

「もう一本だ！もう一本やったら真面目にレポートに取り組むからよ！一本やらせてくれよ」

いや、言い方。

欲求不満な太刀川さん。どうやって切り抜けよう……堂々と無視を決め込めばいいか。

「その一本はお預けだ」

「つげえ！風間さん!!」

おい、言い方。

風間さんが太刀川さんの居る個室に乗り込んだそうで、太刀川さんは大層驚いていた。

「太刀川、進級が関わっているレポートは早目に終わらせておけと忍田本部長が何時も言っているだろう」

「いや、提出期限までまだもうちよつとあるじゃん」

「そうやってズルズルとやっていて何時も提出期限ギリギリに痛い目に遭っているだろう。周りに居る奴の迷惑と示しがつかん」

「もう一本！もう一本だけやらせてくれ!!」

「ダメだ……そいつは一日一本しか相手をしない流儀だ」

「鬼！悪魔！風間さん!!」

「ほう、俺は妖怪の類と言いたいようだな」

小学生の間違いだと思う。とにかくもう一本と駄々をこねる太刀川さんを風間さんは引つ張っていった。

取り敢えず一難を去る事が出来たので個室から出ると人だかりの様なものが出来ていた。

「【どういう状況?】」

何故か出来ている人集り。

事情を米屋に聞きに行けばそこには諏訪さん、来馬さん、荒船先輩、柿崎さんと言ったB級の中位の隊長達が居た。B級の中位の隊長だけでなく小荒井、奥寺、若村等も居る。

「お前、マジでやってる太刀川から一本取るとかやるな」

「【割とギリギリの勝負でしたよ】」

今の試合を見てくれていたのか諏訪さんは褒めてくれる。しかし割と初見殺しが多かったので次からは色々キツそうだ。まあ、でもまだこちらも使っていない技が幾つ

か存在しているのでどうかなる……筈だ。

「君、見たところ何処かの部隊チームに所属していない様に見えるけど……」

「絶賛フリーですよ」

恐る恐る聞いてくる来馬さん。

私は何処の部隊チームにも所属していない事を教えると目の色が変わる。諏訪さんも柿崎さんも目の色が変わる。

「もし良かったらなんだけど、鈴鳴うら第一ち」

「待て、来馬！先に目をつけたのはオレの方だ。お前、諏訪隊うらちに来ないか？」

「……困りましたね」

部隊に入らないかとスカウトをされるとは思ってもみななかった。

現在私はトリガーを支給されてはいるもののボーダーに正式に入隊しているわけではないので何処かの部隊に入る事は出来ない。仮に入る事が出来たとしても自分で撒いた種を回収するべく那須隊に入っているだろう。

「一つ、聞きたい事がある」

誘ってくる人達が居る中で荒船先輩が口を開き尋ねてくる。

「お前は狙撃訓練所にも居て、米屋を相手に拳銃を、太刀川さんを相手に弧月を使っていた……お前、もしかして完璧パーフェクトオールラウンダー万能手を目指しているのか？」

近距離、中距離、遠距離の全距離で戦うことが出来るポジションを目指している荒船先輩。

もしかすると気になっている様だが私は違うと首を横に振る。

「自分は一通りのトリガーを使える様に励んでいるだけで完璧万能手パーフェクトオールラウンダーを目指していません。確かに自分のトリオン能力等を考慮すれば出来なくもないですが、私はなんでも出来るを目指したいです」

「なんでも出来るは完璧万能手パーフェクトオールラウンダーを含んでいるんじゃないのか？」

「ボーダーのトリガーは枠が8個でバッグワームとシールド2枚が必須みたいなもので実質5枠しかありません。シールドを1枚にしても6枠、自分は玉狛支部の烏丸の方イストの様に近距離特化、中距離特化、遠距離特化と色々なスタイルを取りたいんです」

完璧万能手は目指そうと思えば目指せるだろう。特に狙撃関係は嫌でも見ることが出来る。だが、私が目指しているポジションは役割はそうじゃない。その部隊チームにとつて本当に必要なポジションに……太刀川隊ならば中近距離の万能手か狙撃手兼トラップパーとか。

必要に応じて変幻自在に色を変えるカメレオンの様な隊員を私は目指す。時にはエース、時にはフォロー上手な補佐官、時には牽制の狙撃手と色々と化ける様にした

い。

「なるほどな……お前、荒船隊うしふねに來ないか？俺は完璧パーフェクトオールラウンダー万能手を指しててな、色々と意見を交流したい」

「荒船、セコい真似してるんじゃないやねえぞ!!」

上手い具合に私を取り込もうとしてくる荒船先輩。

確かに意見の交流をするためには部隊に所属するのが手っ取り早いが諏訪さんはそうはさせまいと止めに入る……いやあ、最初から全部断るつもりだから見ていて滑稽だな。

「自分をスカウトしようとしているのは分かりましたが、自分は今のところは何処かの部隊に入るつもりはありません」

「そう、なのか？なにか代わりの目標があるのか？」

「まあ、一応は……些細な事なのであまり気にしないでください」

柿崎さん達は真剣に上を目指そうとしていて上を目指すには私の力が必要だと判断したのでだろう。

必死になって上を目指そうとしているならばそれでいい。私は下で燻っている滞っている人を上に上げる事をしたい。そうすることで全体的に組織として一段階上になることができる。

「しかしアレですね。自分を見て称賛してくれるのは嬉しいですけど、何故に新しい隊員を入れようと思ったのですか？」

ここで思った素朴な疑問をぶつける。強くなるために新しい隊員を導入するのは1つの手だが、それだと現状ではどうすることも出来ない、お手上げに近い状態だと言っているも同然だ。もつともつと自分達の中にある可能性の引き出しを探したりするものじゃないか。

その辺りについて聞いてみると何故か黙ってしまう。自分達じゃ上を目指す事は出来ない、そう自覚している……というわけではなさそうだな。

「……この前の大規模侵攻でよ、思い知ったんだ」

「思い知った？」

「スゲえ助っ人が来てくれたから人型の近界民ネイバーをぶつ倒す事が出来た。オレ達が数年掛けたのはなんだってぐらいそいつは強くて……黒トリガーすらも圧倒していた。オレ達の数年間を一瞬にして消し去るぐらいに凄かった」

……そのスゲえ助っ人とやらは私の事だろうな。

ボーダーが数年掛けて用意した隊員達が活躍こそすれども敵の首魁の首をまともに取っていない。対して私はヒュースを相討ちで落として、ランバネインを撃ち落とし、エネドラを相手に完封をした。

ボーダーの人間でない奴がボーダーよりも大活躍してしまえばB級の隊員達は色々と思うだろう。自分達の数年間は何だったんだとか。死者こそ出なかったが、市民に怪我をさせた。だからこそ上に上がって強くなければならないと諏訪さん達は必死になっているんだろう。

「こんだけ色々と準備してた筈なのに外部の協力者を得てはじめて人型を倒すことが出来た……家族の為に体張ってたそいつに負けないぐらいに強くてしつかりとしてなきやならねえって思い知らされたんだよ」

……さて、どうすべきか。ここでトリガーを解除して素知らぬ顔で戻るのも一つの手だ。

諏訪さん達も色々と悩んだりしているが元の姿に戻れば色々台無しになる……どうやってこの場を切り抜けるか……いや、違うか。多分だが迅の奴はこの状況を見て私にトリガーを持たせたりしたのでだろう。なにせ一般人に怪我人が出てC級隊員が拐われてしまったのだから。何処かで意識を改革していた方がいい……私の事をカンフル剤として利用しようという魂胆だろう。

「あまり上ばかり気にしすぎていたらそれこそ絵に描いた餅ですよ」

ここにいる面々は中位にいる、上位にいるけど安定していない等の面子だ。

奥寺と小荒井とかは違うけども大体はそんな感じで焦る気持ちは分からなくもない

が、あんまり上げばかり見ていると足を救われる。一歩ずつ前に進んでいかないといけない。

「私には私のやらなければならない事があるので今のところは何処かの部隊チームに所属する事は考えていません。皆さんが必死になって上を目指しているのは分かりました。が申し訳ありません」

ペコリと頭を下げる。申し訳ないがここにいる人達の部隊チームに入ろうとは思わない。

仮に入ったとしても……おんぶにだっこに近い状態になる可能性が高かったりする。

「とはいえ、このまま普通に返すのも忍びないのでアドバイスを送りましょう」

「アドバイス？」

「……諏訪さんはこのままで大丈夫です。決断をする大人の立場と目線を持っていけば上手くなります」

「お、おう」

「来馬さんは村上先輩との連携を取りましょう。あのガンダムスタイルもといシールドを上手くいかしてフルアタックとか」

「フルアタック、そういう手もあるか」

「柿崎さん、周りがイエスマンばかりで慕ってくれるのはいいですが、時には決断してしっかりと手綱を握らないといけないメンツと組むかもしれません……ガツンと行く

時を見せてください」

「ガツンとか……」

「小荒井、奥寺はもう少しで開花しそう。でも、油断してはいけない。1日でももない化け方をする奴が中には居るから」

「そんな奴、居るのか!？」

私に出来るのはほんの少し先の未来を当てるぐらいだ。

「若村……お前は取り敢えず口だけの人間になるのは止めろ。妬む暇があるならば使いにくい使える駒を上手く扱う方法の1つでも考えろ。いざ決断や判断が必要で責任を取らないといけなくなつた時にチキつてしまう」

「なっ……」

取り敢えずはこれぐらいだろうか。

言いたいことを言っておいてそれがどういう感じに転んでいくのかは私には分からない。色々とやっておいて原作通りに事が運ぶかもしれない……私というイレギュラーな存在が居るから世界というのは案外いい加減に出来ている。

「【では、私はランク戦をしますのです】」

「ちよつと待て、俺と勝負してくれ」

「【いいですよ。ただし1本だけですけど】」

言うことを言い終えたのでこの場を去ろうとしたが荒船先輩が勝負してくれというので受ける。

結果？弧月を振る腕をシールドで妨害した隙に拳銃の通常弾で撃ち抜いて勝ったとだけ言っておこう。

第93話

「なるほど、マニュアルを作っているのか」

荒船先輩と一戦やった後に意見を交換し合う。

私がないでトリガーをコロコロと変えているのか、自分にピツタシのトリガー構成を探している……ではなく、戦闘経験が無い素人に具体的にはどういう感じに使うのかという説明、つまりはマニュアルを作っている事を教える

「【ボーダー内でのトリガーに関する認識の誤差等を統一する事で全体的なレベルアップを狙っています】」

「確かにトリガーに関する認識が人によつてはまちまちだ。C級からB級に上がった際に講習を受けるのを提案しておくか」

「【それ有りですね。スラスターや旋空なんかのオプショントリガーとかの講習をしてあげばやれる事が広がります】」

荒船先輩とは意外と意見が噛み合う。

完璧万能手を目指している荒船先輩とどんなポジションでも熟せる様にマニュアル

を作っている私とは何処かで道が違ってしまいが、だからこそ意見を交流させて新しい可能性を探す。完璧万能手なら出来ないが万能手や1つのポジション特化のスタイルなら噛み合うものがあるだろう。

「【今のところ米屋との30本勝負の動画の記録ロダがありますので、それをベースにゆっくり実況風に解説していく形です】」

「ゆっくり実況?」

「【音声合成ソフトで実況と解説を行うんです。米屋との30本勝負の記録を見ますか?】」

「ああ、見せてくれ」

まだなにも編集する事が出来ていない米屋との30本勝負を見せる。すると荒船先輩は固まった。

「お前、全部で10本、しかも1本も落とさなかったのか?」

「【ええ……1本でも負けたらその時点で自分は使い物になりません。自分には東さん程の指揮能力は持っていない、現場で戦わないと役立たない】」

だから1本でも落としたらその時点で使い物にならなくなるクズだ。

三輪に復讐の共犯者になると約束したし、ヌルい事をやっていたら三輪に失礼だ。

「そういう考えもあるか……」

「まあ、他人にまで強要するつもりは無いです……けど、出来る限り1人1本に拘っていきたいです」

私の考えに一理あると荒船先輩は納得をする。

あくまでも私の考えなので他人にまで1日1人1本にしろは言わない……まあ、私は1本しかやらないと言うけども。

「つと、言っている側から来ましたか」

今日の分を回収しに影先輩がやってきた。

クイツと親指でランク戦を行える個室を指差した。

「おい、今日もやるぞ」

「1本だけですよ」

「カゲ……お前、クイツを知っているのか？」

馴れた様に私に勝負を挑んでくる影先輩。

私に対して一切ツツコミもなにも言っていないので影先輩は私の正体云々を知っているのかと少しだけ意外そうにしている。

「クイツが何処の誰だろうが関係ねえ……面白い奴かそうじゃねえかだ。チマチマとめんどくせえルールを掲げやがってるから、テメエの首を奪つてもう1本って言わせてやるよ」

「おお、怖い……じゃ、何時も通り一本で」

影先輩、口ではなんだかんだ言いつつも私とのソロランク戦を楽しんでいる。

まあ、他人にまでeスポーツ感覚で楽しむんじゃねえぞと強要するつもりは無いのでそこはなにも言わないでおく。それよりも如何にして影先輩を倒すか、迅と比べれば倒しやすい相手だが、それでもこの人マジで強い。



「いやあ、大勝利だったね」

貴虎が影浦と真剣な一本勝負をしている一方その頃。

ボーダーの玉狛支部では昨日のランク戦の健闘を称えていた。宇佐美は大勝利だったとウンウンと頷いている。

「当たり前じゃない！私達の弟子よ！コレぐらいは出来て当然よ」

我が事のように小南は胸を張る。

「ええ、そうね。この結果は当然の結果ね……問題はこれからよ、これから」

紅茶をゆつくりと飲みながら母こと香澄は冷静に状況を判断する。

B級ランク戦下位で快勝を見せた遊真達玉狛第二だが、見るべき者が見れば当然の結果だと判断される。なにせマスタークラス8.00点以上の実力者である遊真と規格外のトリオンを有している千佳がいるのだから。

「修、ここからが貴方の仕事よ」

下位を突破する事が出来るのは当然だ。

だが、中位には個人ソロランク上位だったりするボーダー隊員が居たり、上位に至っては全員がマスタークラスの実力を持ったチームもいる。使える駒は有している。故にここからが修の隊長としての腕の見せどころだ。

「次の対戦相手は荒船隊と諏訪隊だね」

「荒船隊は」

「待て、京介。アドバイスはするな」

宇佐美が次の対戦相手を告げると烏丸がチームの特色を教えようとす。

しかしそれでは修達が育たない。調べてどういうチームなのか考える事もまたランク戦の重要な経験値になる。レイジはそれ以上は言うなど烏丸に口止めをする。烏丸もそれが修達の為になる事だからとそれ以上は深く言わなかった。

「まあ、大丈夫よ。諏訪隊も荒船隊もそこそこだから」

「ほうほう……じゃあB級上位は？」

「……まあまあね」

「A級は？」

「……まあ、ちよつとはやるんじゃないかしら」

何処までも負けず嫌いな戦闘民族BORDERな小南は遊真の質問を個人的見解で答える。

小南センパイがそういうのならばそれはもう強いのだろうと小南の負けず嫌いを知っている遊真はB級も悔れないと認識を改める。

「諏訪隊と荒船隊の記録ログを見て作戦を考えます」

ランク戦はその対戦カードの中で最もランクが低いチームにマップ選択権が得られる。

今回、ランクが最も低いのは玉狛第二、修達のチームだ。修は地の利を得ようとするべくこれから諏訪隊と荒船隊のデータを纏めに入る。

「修」

「なに？」

「分かっているとと思うけれど、貴虎に頼ったらダメよ。あの子、貴方には物凄く甘いから答えを直ぐに教えようとするから」

「分かっているよ」

「あいつ、ランク戦をアドバイスする事が出来るの？ 戦闘経験も殆ど皆無な素人でしょう」

貴虎の力は借りるなど釘を刺す母であるが、小南は貴虎の力を疑う。

戦闘経験は不足で大規模侵攻では黒トリガーを撃退したりしているものの戦術等に關しては素人に近い。なにか具体的なアドバイスを送ることが出来るとはとても思えない。

「あの子は多分、答えを知っているわ。この先、どうすればいいのかを。修がどういう具合に成長していけばいいのかを……あの子からアドバイスを受けるなって言っている手前、こんな事を言うのは矛盾してるけど……目を閉じて想像してみなさい」

「？」

「貴方達は走り出した時も歩幅も走る速度も皆バラバラのゴールの無いマラソンをしているわ。先頭付近を小南ちゃん達玉狛第一が走っていると空閑くんが物凄い勢いで先に走っていた人達をごぼう抜きしていつてるわ」

「ふむふむ……それで？」

「修と千佳ちゃんはどうかやって先頭を走っている人達に追いつくのかを考えなさい。歩幅を上げるか走る速度を上げるのか……先頭を取らないと遠征部隊に入る事なんて夢のまた夢でしょ……私から言うことが出来るアドバイスはコレぐらいね」

「アドバイス、なの？」

具体的に何処をどうしろとは母は言っていないので小南は首を傾げる。

ゴールの無いマラソンで先に走っている人達をどうやって抜くのか、歩幅を上げるのか、それとも走る速度を上げるのか……

「アドバイスよ。ゴールが無い道のりで自分にだけしか通る事が出来ない近道なんかも存在している。その道を見つけて走ることと先頭を走っている人に追いつくこともくらいつくことも出来るわ……これ以上は流石に言えないわよ……ただ、空閑くんだけで勝ち抜けるほどB級のランク戦が甘くないならば、正道じゃない近道、裏道、回り道を見つけてその道を無事に走ることが出来ればB級のランク戦を勝ち抜く事が出来るわ……少し言い過ぎたわね。とにかく皆走っているから自分のペースでチンタラ走っていたら追いつくことが出来ないわよ」

具体的に何をしろとは母は言わないが大きなヒントは与えている。

なんだかんだと貴虎に言っているがやっぱり我が子というのは可愛いもの、つついアドバイスをしてしまう。ランク戦をしている息子の晴れ舞台をついつい口出したくなってしまう。

「皆、走っていて、自分のペースじゃ追いつかない……ふむ……」

「空閑くんは難しい事は考えなくていいわ。のびのびとランク戦を楽しみなさい……考

えないといけないのは修、それと千佳ちゃんだから」

既にマスタークラスの實力を持つている遊真はのびのびとランク戦をしておけばそれでいい。

今のところそれで上上がる事が出来るので問題は他の2人、修と千佳。この二人が如何にして動くかどうか。そこで直面する問題が1つだけ出てくる。その問題は今のところは浮き彫りになっていないがコレから上位を、A級になる為にB級2位以上を指していく上では無視して通る事が出来ない問題が浮上していく。

「……千佳は人が撃てない……」

膨大なまでのトリオンと狙撃手向きの性格をしている千佳だが、唯一の弱点とも言うべきか人を撃つことが出来ないと言う致命的な弱点がある。

修も遊真も宇佐美もその事に關しては深く責めたりはしない。何処にでもいる女子中学生に死なないとはいえ狙撃銃で人を撃ち殺せというのが無茶な話。一応トリオン兵や的当て等では着実と腕を高めているのだが人を撃つことが出来ないので宝の持ち腐れ状態だ。

修もその事を理解しているのか思わずボソリと呟くと千佳はビックリと反応する。

「修、貴方がリーダーなのよ。リーダーとしてしつかりとしたところを見せてやりなさい。千佳ちゃんは……どうにかしなさい」

下手なアドバイスは送れないので適当に誤魔化す。

人を撃つことが出来ないのならば最初から撃たない戦術を会得するのもまた一つの手ではあるが、それを言うのはフェアではないと言葉を飲み込んだ。

「……僕がしつかりとしない」と

修は自覚している。

規格外のトリオンを有する千佳や近界で多くの戦闘経験を積み上げている遊真と違つて自分が何段階も劣つていることを。千佳が人を撃てるようになれば化ける、そうなると自身が完全にお荷物になってしまう。既に遊真におんぶにだっこ状態なのも薄々自覚している……母である香澄からの言葉でより責任を、プレッシャーを感じてしまう。

「オサム」

「ダメよ」

プレッシャーを感じている修に大丈夫だと言おうとする遊真を香澄は止める。

ヤバかったら自分がかすると言おうとするが実際にどうにかする事が出来ない、ボーダー隊員達の層も中々に分厚いものだ。おんぶにだっこで上に上がったとしてもそれではいざ近界に遠征に行ってもロクな結果にはならない。

「オサムのお母さん、手厳しいな」

「修の事をホントに思っているのなら……それ相応にプレッシャーを与えておかないと。知ってるかしら？トマトを美味しく育てるには贅沢させるんじやなくて程よくストレスを与えるのが大事な事を」

「ほうほう……オサム、隊長としての勤めはお前に任せた。おれはおれのすべきことをやってくるよ」

修には修のやるべきことがあると修に託した遊真はボーダー本部を目指す。

兎にも角にも遊真はボーダーのトリガーに馴れて使いこなせる様にならない。その為には実戦あるのみ、何度でも繰り返して戦うことが出来るランク戦は遊真にとって最高の遊び場所だ。

「僕の前を……フィールドの時点で地の利を得ないと。宇佐美先輩、訓練室をマップと同じ様に出来ませんか？」

「勿論出来るよ！荒野だろうが砂嵐だろうが台風だろうがなんでも出来るからドンドン注文してね!!」

「ありがとうございます」

「ううん、これぐらいオペレーターなら皆やってる事だよ」

修も宇佐美と共に作戦を練りにいく。

流石は私の弟子達ねと小南は誇らしげになっている中で千佳は冷や汗をかいていた。

「……………」

遊真はボーダーのトリガーに馴れる為に実戦経験を積み、ボーダー本部に向かった。修は次の対戦相手を調べ、対策を練りに行った。

千佳はどうすればいいのかわからなかった。訓練をしないといけないのは分かっているけれど、人を撃つことが出来ない自分が狙撃手の訓練をずっと行っても意味は無いんじゃないのかと自分の努力に疑いを持ち始める。

「頑張らないと……………」

フラフラと歩き、トリガーを起動してトリオン体に換装した千佳は訓練室に向かった。

「ちよ、ちよつと大丈夫なの？レイジさん、なにかアドバイスかなにか無いの!？」

明らかに悪い状態の千佳を心配する小南。なにか言いたいがあるに言えればいいのか分からない。

レイジに助けを求めるがレイジもどうアドバイスを送ろうか悩んでいた。千佳だけ置いてけぼりのこの状態、打破するには人が撃てるようになればだが、それが出来ないのが現時点での問題だ。

「ダメよ」

なにかいいアドバイスがないかとレイジは考えていると香澄から待ったの手が掛

かった。

チラリと遊真達がこの場に居ない事を確認すると紅茶を飲んで目を細める。香澄からプレッシャーが放たれており、レイジ達は今度はなにを言ってくるんだと身構えている。

「今の千佳ちゃんに必要な事は守破離よ」

「守破離、ですか？」

香澄の言っている事をイマイチ理解する事が出来ていない烏丸、そもそもで守破離とはなんだと頭に？を浮かび上げる。

「茶道や剣道の用語よ。【守】は師や流派の教え、型、技を忠実に守り、確実に身につける段階。【破】は他の師や流派の教えについても考え、良いものを取り入れ、心技を発展させる段階。【離】は一つの流派から離れ、独自の新しいものを生み出し確立させる段階……千佳ちゃんは真面目で辛抱強い子だからレイジくんの教えである【守】を忠実に守っているわ……でも、それだとその辺の狙撃手となんにも変わりはないもの。そろそろ何処かで【破】の段階に……千佳ちゃんだから出来る戦い方を模索しておかないと」

「千佳だから出来る戦いって、なにがあるの？」

「さあ、知らないわよっ？」

あくまでも千佳はレイジの教え以外の十二かを見つけ出さないといけない。

それがなんなのかは香澄は分からない。けれどそれは確かに存在しているのを知っている。

「そんなまた無責任な」

「そうかしら？ 少なくとも千佳ちゃんには誰にも負ける事は無いオンリーワンの武器を持つているわ。守破離の破と離をする為の土台はしっかりと出来ているし……後はキツカケが必要なだけよ」

千佳が具体的にどういう風に伸びていくのかは香澄は知らない。ただ少なくとも何かしらの他の人には真似が出来ないオンリーワンの成長をする事が出来ると読んでいる。

「香澄さん……貴方、何者なんですか」

千佳達が今後ぶつかっていく壁についての確に当てている香澄に対して驚くしかない。

ボーダーの人間ではないのに既にベテランの隊員以上の風格を醸し出している。

「ただの主婦よ。お騒がせな2人の息子を抱えたね……」

お前の様な主婦が何処にいる。

レイジ達はツツコミを入れたくなかったが言葉を飲み込んだ。それだけ修と貴虎の親である香澄から放たれる謎の威圧感からツツコミを入れるに入れれない。

「大丈夫よ、あの子達ならきつと強くなるわ。自分達が何をすればいいのか、正しいレールに乗ることさえすれば愚直に前に進む事が出来る。3人ともなんだかんだ言つて勤勉なんだから」

私達の息子はなんだかんだと言つても強くて優しくて頼もしいと母は信じている。

紅茶を飲み干した香澄は次の紅茶を入れる。

「ホントに危ないと思つたらきつと貴虎が上手い具合にフォローしてくれるわ……あの子はあの子で忙しそうで意図的に修達に会わない様になっているみたいだけれど」

最終的には貴虎がなんとか上手くやってくれと丸投げする。

まあ、原作知識などもある貴虎にまかせておけばバツチりなのだが、貴虎も貴虎で色々ややこしくする。千佳達が本当の意味で成長する為には程よくストレスを与えないといけない。特に千佳は限界ギリギリになれば撃つことが出来ると千佳を精神的に追い詰める可能性が高い。それが確実に強くなる方法だと知っているから。

「まあ、それでもアドバイスを送りたいのなら送ればいいわ。ただ修も千佳ちゃんも色々な意味で尖つた性能をしているから普通のアドバイスじゃ凡百の隊員達と同じ事になつてしまうわ」

他の人には真似できない、真似しないオンリーワンな武器を見つけるしかない

確立された個の力があつてこそ連携は生きる。修達が確立された個の力を手に入れ

れば……玉狛第二は化ける可能性が高い。

それを既に理解している香澄は何者かと聞かれれば二児の母親で、大凡の事情を知った上で息子達を応援する母親なのである。

第94話（I F）

「……ダメです、出ません」

迅に対して電話を掛けようとしているS村さん。

迅が居なければ話が進まないのだから何とかして出てほしいのだが肝心の迅が電話に出てくれない。トゥルルと着信音が鳴り響いているので繋がる事は出来ている。しかし出てこない。

「最上さんはココに居るって、ちよっと待って」

一方その頃の迅はと言うと遊真が頼りにやってきた最上さんについて教える。

最上さんは既に死んでいる、正確には黒トリガーになったというべきなのだがさつきから電話が鳴っているの。割と大事な話なのでここは電源をオフ……そう、コレこそが運命の分かれ目であった。ここで迅はサイドエフェクトの読み逃しをしてしまった。

「ダメです、電源をオフにしています」

今の今まで通話できる状態にまでなっていたのだが、携帯の電源をオフにした事により連絡が完全に取れなくなった。

ボーダーが支給している携帯端末から通話を試みるものの連絡を取る事が出来なかった。

「迅の奴、いったいなにを……まさか!!」

鬼怒田は迅との連絡が取れない理由を考える。

何時もの様に裏で暗躍している、暗躍を趣味だと豪語する男がまたなんか暗躍している。今の状況下で暗躍しているとすれば考えられる事は唯一つだ。

「迅の奴、近界民^{ネイバ}を匿っているな!!」

「林藤支部長、これはいったいどういう事ですかね?」

ダンとテールを叩いてはキレル鬼怒田室長。根付室長もコレはいったいどういうことかとの場に居合わせた林藤支部長を問い詰めるのだが林藤支部長もなんの事かさっぱりである。

「迅の事だからなんか考えがあると思う」

「近界民を匿うのが考えだと!笑わせるな!」

「城戸司令、コレはもう黒です。直ちに三輪隊を突撃させるべきですよ」

「……三輪隊に通達、三雲修と接触をして近界民との繋がりを調べろ」

黒であるならば監視の目は止めにする。

トリガーを経由して三輪隊の面々に通達をすると三輪と米屋は酷く動揺していた。

「三雲の弟が黒だと……だったらどうしてきつき三雲が出てきたんだ？」

ついきつき監視はいくらなんでもやりすぎていると注意を受けたばかりの三輪と米屋。

どうしても疑いを持つことは出来ないのだが上からの命令という事もあるのでトリガーを起動してトリオン体に換装し、三雲家のインターホンを鳴らした。強行突破でいっと上から言われているが三雲家は蓮乃辺市と三門市の境界線上にある為に好き勝手に暴れてしまうと色々と問題がある。何よりも強行突破と言って他人の家に土足で踏み込む様な育ちはしていない。

『はい、誰ですか？』

「ボーダーの三輪と言います。三雲修はいらっしゃいますか？」

『いえ、居ないわ。用事があるなら後で連絡を取って伝えておくけれど……』

「三雲修がいない？」

朝からずっと三雲家を監視している三輪達。

修達が出掛けたりしたのならば追跡する事もしている。修が家に居ない事に対して三輪と米屋は当然の様に疑いを持つ。

「いやいや、そりゃ嘘だろう。メガネボーイが家から出てないのは見てるってやべ」

修は家にずっと居るのを見ていた米屋はポロツと監視していた事を零す。

思わず口から出てしまい言つてはいけない事を言つてしまったと両手で口を塞ぐと不穏な空気が流れ出る。三雲修を監視していた、ストーキングまがいの行為をしていたと自らで自白してしまい、どうするべきかと悩んでいるとガチャつと向こうからドアが開いた。

「貴方達、色々と好き勝手にやつてるけどなんでもやつていいんじゃないのよ。今回は見逃してあげるからさつさと本部に帰りなさい」

出てきたのは母こと香澄であつた。

米屋達が家と修を監視していた事について深く責めるつもりはない、今回は目を瞑ると優しさを見せるのだが三輪隊は止まらなかつた。

「すみませんが中に入らせていただきます」

「ダメに決まつてるでしょうが」

三輪は家の中に入ろうとするが母は止めに入る。

しかし残念かな米屋と三輪は現在トリオン体、常人の何倍も優れた運動性能を持っており無理矢理力づくで家に押し入る事に成功する

「三雲修！お前に用事がある！ここに居るのは分かっている、直ちに姿を見せ——」

「人んちでなにをやってるんだ!!」

土足で武装し人の家に入り込んで脅してくる三輪に対して貴虎はドロップキック

クを顔面に叩き込んだ。

トリオン体の三輪にとつてはノーダメージなのだ。顔面にフィードバック的なダメージはあり若干だが涙目になる。

「お前、さつき色々と注意しただろう。なに強行突破しに来てるんだ!!」

ついさつき監視している事に対して色々と注意をした筈なのに逆に土足どころか武装して家に入り込んで来た三輪にキレル。

三輪は申し訳無さそうにするのだがここでオレもぶん殴られるんじゃないかと心配していた米屋が違和感を感じ、違和感の正体に気付く。

「秀次、メガネボーイ達の靴が無いぞ」

本来ならばあるはずであろう修達の靴が何処にもない。

靴箱に隠しているんじゃないかとなるがその考えには至らず三輪は貴虎を鋭い目つきで睨みつける

「三雲、お前の弟は何処だ！何処に消えた！」

「……お前に教えるつもりは無い」

それはもう答えを言っているんじゃないかと思うが、貴虎は三輪の質問に対して答えない。

コレはもう黒でしかないと三輪は殺意を滾らせてズカズカと土足で三雲家に乗り込

む。

「お前等、やっていいことと悪い事の区別も付かないのか!!強盗まがいのことをしてるんだぞ」

米屋と三輪を抑えようとする貴虎だが流石に変身せずにトリオン体の2人を止める事は出来なかつた。

ズカズカと土足で踏み込む2人は貴虎の部屋やトリガー反応がある修の部屋に足を踏み入れるが何処にも居なかつた。そりやそうだ、既に四塚市に修達は逃走する事に成功しているのだから。

「どういう事だ!お前の弟や、この家に入っていった白チビと女はどうした!!」

「お前に言う義理は無い。というかボーダー、こんな事をやっていいと思ってるのか!!」
修達は何処に行つたのか問い詰める三輪だが貴虎はボーダーのやっている事を問い詰める。

互いに睨み合い牽制する状態が続いており三輪は拳銃を貴虎に向けた。

「言え!お前の弟は何処に行つたのか!この家に入っていった2人についても教えろ!」

「ちよつと、幾らなんでも度が過ぎてるわよ……貴方達は民間組織でそういった強制力とか白白させる尋問とかやっていい立場じゃない筈よ」

三輪の行き過ぎた行為に見守っていた母も遂に文句を言う。

あくまでもボーダーは民間組織であり国家運営の組織ではない。民間組織である以上はやっていいことと悪いことがあり、現在三輪がやっていることはいけないことだ。ボーダーの弾系のトリガーは流れ弾防止対策として生身の人間に当たるとちよつと痛かったなど言うぐらいのダメージを受けるだけなので一応は三輪は配慮している。

「メガネボーイに近界民ネイバーとの繋がりがある疑いがあるんすよ」

人様の家でドンパチするのはいけない事だと熱くなっている三輪を横に冷静に事態に対処する米屋。

「……で？」

「でって、いや、その」

「だからどうしたと言わんばかりの威圧感を与える母に米屋は思わず一步引いてしま
う。」

「だからどうしたの？修が近界民ネイバーと繋がりがあつて損をするのは貴方達だけど、その何が問題なのよ？修の友達である事には変わりないわ」

「母さん、それ言っちゃってるよ」

「あら、そうね」

修が近界民と繋がりがあつてをポロツと零す。

その事で三輪の逆鱗に触れ三輪は怒りを爆発させる。

「コイツまでグルだったのか!!」

「コイツって……お前等、ホントにいい加減にしろよ。民間組織なら大人しく」

「悪いがお前達も身柄を拘束させてもらおう!!陽介!」

「それは越えてはいけない一線よ……それでもやるつもりなの?」

「近界民を匿う奴は誰であろうと裏切り者だ!!」

越えてはいけない一線を既に色々と越しているがそれでもまだ我慢する母であったが三輪は乱心だ。

発砲したり弧月でそこかしこ切らないだけまだマシな方ではあるが三輪は母を拘束しようとするので貴虎に視線を向ける。

「いいわよ、そっちがその気ならこっちにも考えがあるわ……貴虎」

「はあ……結局、こういう感じの展開になるか」

『メロンエナジー』

よろしい、ならば戦争だ。

母はやるならば徹底的にやれと視線で訴えるので今まで黙っていた貴虎はめんどろな事になったと大きいため息を吐きつつもゲネシスドライバーとメロンエナジーロックスードを取り出す

「つ、トリガーだと!？」

「そういう事だ……お前達は選択を誤った」

『ロック、オン』

「変身」

『ソーダー……メロンエナジーアームズ』

メロンエナジーロックシードをベルトに装填し、レバーを引いて貴虎は斬月・真メロンエナジーアームズへと変身をする。

「おいおい、嘘だろ!？」

流石の米屋もこの展開には驚きを隠せない。仲のいい友人がトリガーを持っていたのだから驚くなという方が無茶である。

貴虎はソニックアローを手にすると米屋も戦闘態勢に入る。貴虎はソニックアローの弦を引いて矢を放つのだが米屋はシールドで防ぐ

「ちよつと家で暴れないで……貴虎、遊んでないでさっさと終わらせなさい」

「だそうだ。ゲネシスドライバーでA級相手に何処までイケるのか試してみたかったが仕方が無い」

家で暴れると母が本気でキレそうなので貴虎は遊びは一切しない。

ゲネシスドライバーからメロンエナジーロックシードを取り外し、ソニックアローに

装填するとソニックアローの刃が輝き出すのでコレはなにか来ると米屋は予測するのだが貴虎は一瞬の内に米屋との間を詰めてソニックアローで切り裂く

「陽介!!」

「余所見をしている暇はあるのか?」

『メロンエナジー』

ソニックアローの矢を穿ち三輪のトリオン体を破壊する。

米屋と三輪、両名共にトリオン体が破壊されてしまい緊急脱出でボーダーの本部に転送される。

「A級がどれほどのものかと思ったがこの程度の雑魚だったか」

※貴虎が異常なまでに強いだけである。

米屋と三輪を退けた貴虎だったが母である香澄にスリッパで叩かれる。何事かと思っていると家の柱をトントンと叩いており、よくよく見れば家の柱が傷付いていた。

「家を傷つけるんじゃない」

「文句があるなら三輪達に言ってくれ」

「そうね……ボーダーに色々と言いたいし、さっきの子達に連絡は取れないかしら?」

「ちよつと待って」

そう言うのと変身を解除する貴虎。スマホを取り出して比較的話し合いが通じそうな米屋の電話番号を教えると母は早速家にある固定電話で米屋の携帯に電話をかけた。

『はい、もしもし』

「貴方、よくもやってくれたわね。おかげで家の柱に傷がついちやつたじゃない。どうしてくれるのよ」

『どうええ!?!』

何処の誰からの電話か分からずに恐る恐る電話に出た米屋は吹き出す。

まさかつい先程まで対峙していた母から連絡があるとは思っても見なかった。

「もう貴方じゃ話にならないからさっさと上の偉い人を出しなさい」

『え、いや、あの』

「いいから、私は上を出せと言ってるのよ……早くしなさい」

『は、はい……』

電話越しから伝わる母の威圧感から米屋は電話を上層部に繋げる。既に話は色々と大事になっており、城戸司令が母の電話に出た。

「貴方達、何様のつもりよ。民間の組織なんだからやっていいことと悪い事の区別くらいつくはずでしょう。なに人様の家の前で張り込んでるのよ。探偵気取りのつもりかしら?」

『貴方達の家に無理矢理上がり込んだ件に関してはこちら側の不手際だ、申し訳ない……だが、三雲修は黒であった事には変わりはない。近界民は排除しなければならぬ』

「修の友達が近界民の世界からやって来た人間だと犯罪なの？ 話さなければならぬ義務でもあるの？ 貴方達は近界民の世界とこちらの世界の入国を管理して異世界と貿易でもしているの？ こっちの世界に向こうから来るのは自由の筈よ」

『近界民関連はボーダーが全面的に権限をもっていて、三雲修はボーダー隊員なので報告しなければならぬ義務がある』

「報告していたのならどうするつもりだったの？」

『……排除するつもりだ。近界民は敵である』

「そう、修の友達を守るのは修のすべきことよ」

「今もそう、自分がするべき事だからと兩取千佳がどうして近界民を引き寄せるのか調べている。」

「友達を守ることは友達のすべき事である。修は遊真とボーダーを天秤に掛けて遊真を報告せずに監視しようとしている。悪い近界民だったら通報するつもりであり、今のところは害意は無い。」

『そちらにいる三雲修の兄が未知のトリガーを使用したと報告が上がっている……そち

らは近界民なのか？」

「そんなわけがあるはずないでしょう。仮に近界民だとしてもあんた達が公の場で活動する前の先住民なんだから横からあだこうだ口出しする権利は無いわ」

『ならば何故トリガーを持つている？』

「大規模な侵攻があつたあの日、貴虎が拾つて歸つてきたのよ」

『拾つただと？何故ボーダーに提出しなかつた？』

「笑わせるんじゃないわよ。貴方達のロゴとトリガーが入っていたケースのロゴは全然違つていたわ。第一、落とし物を拾つたのなら警察に届けるのが常識でしょう。警察に届けて半年以上持ち主が現れなかつたから貴虎の物になつてゐるわ」

だから貴方達に取り上げる権利は何処にもない、力づくで来るのならばそれ相応の対応をさせてもらうと釘を刺す。

『半年程前にスカルと名乗るトリガー使いが現れた。アレは』

「ちよつと待ちなさい。話が段々とズレて行つてゐるわ。貴方達は今すぐ家にやつてきて謝罪と傷ついた家の修繕費を支払いなさい」

『スカルについてなにか知つてゐるのならば答えてもらいたい』

「いや、先にお前が謝罪に来て家の修繕費用とかそういうの払い終えてからよ。人が下手に出てるからつて調子に乗らないで」

スカルについて教えろ、それよりも家の修繕費用と謝罪を入れろと互いに譲り合う事はしない。

トリガーを隠し持っていたので今の今まで見つからなかったスカルの線があるがそれよりも謝罪と修繕費用を寄越せと母は要求する。互いに譲り合う事はしないのでそのやり取りだけで10分ぐらい経過する。

「……母さん、ちよつと」

『メロンエナジー！ソーダ……メロンエナジーアームズ』

ここにきて再び変身する貴虎。

ソニックアローを手にし、家の外に出るとジャンプし、家の屋根の上に乗った。

「全く、くだらない時間稼ぎだな」

『メロンエナジースカッシュュ！』

『ロック、オン！メロン！』

ゲネシスドライブのレバーを引き、メロンロックシードをソニックアローに装填する。

ソニックアローの弦を引いてエネルギーを溜めるとソニックアローは真っ赤に染まったので貴虎は矢を発射すると巨大なメロンの形をしたエネルギーの塊が出現し、それが弾けて拡散すると2つの方向に向かって無数の矢が飛んでいく

「つ、ここから50 m以上はあるぞ」

貴虎が撃った矢は手頃な場所で狙撃準備をしていた奈良坂と古寺に命中した。

50 m以上先に居る彼等をなんてことは無く撃ち倒す。サイドエフエクトがあるの
で何処に居るのか丸わかりである。奈良坂と古寺は反撃する事すら出来ずに緊急脱出
してしまう。

「話し合いの場を設ける事もせずに貴虎に銃を向けるなんて、殺してやろうかしら？」

「物騒な事は言わないでくれ……狙撃手を何人連れてこようが私にはサイドエフエクト
で何処から狙ってくるのか丸分かりだ。潔くボーダー本部から我が家にまでやってき
て謝罪の一言と傷ついた家の修繕費用や慰謝料を見積もりしろ」

「……もういい、もういいわ」

貴虎が誰が来ようが問題無いと脅すのだがここに来て母の堪忍袋の緒が切れる。

貴虎の部屋に向かいゲネシスドライバーが入っていたケースでもT2ガイアメモリ
が入っていたケースでもない3つ目のアタッシュケースを取り出した。

「え、つちよ、母さん？」

「先に仕掛けてきたのはそっちの方よ。私達は話し合いに応じるつもりなのに話し合い
の場を設ける事すらしらないなんて……堪忍袋の緒が切れたわ」

腰にバグヴァイザーIIををセットする母。

なんで当たり前の如くトリガーを使いこなしているのか貴虎は疑問を持つのだが母ならばと何処かで納得している自分がいる。

「修に電話するか」

どうしようか困っていた貴虎は若干だけど現実逃避をする。

そういえば修はこの事は知らないだろうと修の携帯に電話を欠けるのだが修は出ない様にしており、代わりに千佳の携帯に電話をかけた。

「もしもし?」

『あゝ修はそこにいるか?』

「居ますけど……修くん、貴虎さんから電話だよ」

「兄さんから?」

『すまない、修……しくじった、修が遊真と、近界民と繋がりがあつた事がバレてしまった』
「なっ!?! どうして」

『そんなの私が聞きたいぐらいだ。とにかくそこから家に帰ってきて……え、ちよつと母さんなにサクラハリケーンを……ああ、はいはい、分かりました、分かりましたよ!』
「こうなつたら地獄の底まで付き合うよ!!」

「兄さん、兄さん、なにが起きてるの?」

『今からボーダー本部にカチコミに行くわ』

「……えっ」

「うわ、やっぱ!!読み逃してた!!」

ここに来て、迅のサイドエフェクトが発揮される。

予知のサイドエフェクトでボーダー本部が壊滅寸前に追い詰められる未来が見えた。どうにかして回避する未来は無いのかと視て見るがどうあがいても絶望的で、いい歳した大人が正座させられている未来が多く見える。

『すまない、修……ちよつとボーダー本部にカチコミに行ってくるから蓮乃辺市に行つてアイツから時計を貰ってきてくれ』

「ちよつとちよつと、メガネくんのお兄さん!ボーダー本部に襲撃は止めてくんない?」
『そつちが好き勝手にやってきたんでしようが。目には目を歯には歯を、そつちがその気なら迎え撃つわ』

迅が行かないでくれと制止するがそんなもので止められるほど甘くはない。

迅達は急いで三門市に戻らなければならないのだが三門市までの距離は大分ありタクシーを使つても辿り着くのになれなりに時間がかかる。どうあがいても絶望である。

『じゃ、後の説明頼んだぞ』

「ちよ、ちよつと……切れてる」

「と、とにかく急いで三門市に、ボーダー本部に戻るぞメガネくん!千佳ちゃん達も一緒

に来てくれ！」

「わ、分かりました」

「オサムのおにいさんとおかあさん、カチコミと言っていたが……なににいったんだ？」

『私のデータによるとカチコミとは襲撃の事だ……兄殿達は大丈夫なのだろうか？』

「いや、兄さんよりボーダー本部が大変な事に……」

「ヤバいな、完全に読み逃しちゃったよ」

そんなこんなで修達は全速力で三門市へと戻っていく。

第95話（I F 続）

「ここを越えれば本当に一線を越えてしまう……いいの？」

サクラハリケーンを二人乗りで向かったのはボーダー本部……がある警戒区域だ。警戒区域手前のバリケードの前に私と母さんは立っている。

ここを越えてしまえば越えてはならない一線を越えてしまい後戻りはもう出来ない。まだ話し合いが通じる段階だが母さんは警戒区域で立ち入り禁止のバリケードを平然とした顔で越えていった。

「貴虎、ボーダーは上手い具合に勧善懲悪の正義の味方をしているかもしれないけれど、その実態は戦争をしている民間の軍隊の様なものなのよ」

「まあ、確かにそうだけど……」

「でもね、世の中にはやっつけていいことと悪いことがあるのよ。越えてはいけない一線を越えてしまったのは私達だけじゃない、向こうもよ」

ボーダーは近界民のあれやこれや色々々と権限を持つているが探偵まがいの張り込みをしていいとは限らない。

今回は見逃してやると私が再三口を酸っぱくして言ったのにも関わらず三輪達は武装した状態で我が家へ乗り込んで来た。武装していないのならばトリガーを起動する前にボコボコにする事が出来たのだが、流石にそんなに甘くはないか。

「それに貴方、口ではなんだかんだ言いながらもついてきているじゃない」
「まあ、それを言われればそうなんだけど……」

母さんは一人でもボーダー本部にカチコミをするつもりだ。

その事に関して私はなんだかんだと言いつつも止めようとはしない。それどころか逆に母さんを加勢しに来ている。

「さ、上の偉いさんに会って話をつけるわよ」

警戒区域の向こう側に母さんは足を運ぶ。

私もゲネシスドライバー、ではなく戦極ドライバーをセットし警戒区域内に足を踏み入れる……分かっていた事だが警戒区域内は廃墟が多い。当たり前的事だがボーダーは三門市を戦場に変えている……だから■■■■も泣かせた……許す許さないの問題じゃないか。

「あら、手厚い歓迎ね」

「……？」

ボーダーの本部付近に辿り着くと二宮隊がいた。

まさか私達を歓迎してくれるとは思ってもいないので母さんは嫌味の一言を言うのだが嫌味が二ノさんに通じていない。

「こちら二宮、一般人が紛れ込んでいます」

「……まあ、そうなるよな」

修に三輪隊が付いている事は一応はトップシークレットの事だ。

二宮隊と親交が深い訳では無い、なんだつたらコレが初対面だったりするので当然と言えば当然の反応を示す。

「貴方、ボーダーの隊員よね？あの極道顔もとい城戸司令に繋げてくれないかしら？貴方達が一向に謝罪に來ないからこっちがカチコミに來たつて」

「カチコミにだと？……おい、氷見どうなっている？」

『ちよつと待つてください。今、上の方に確認を取つてみます』

「……貴方じゃ話にならなさそうね。悪いけれど、退いてくれるかしら？」

「待て！ここからは一般人の立ち入りは禁止だ」

上に伝わっていないなさそうなので母さんは先へと進もうとする。

しかし当然というべきか二ノさんはこれ以上先には進ませないと肩を掴んでくるので母さんは手で弾いた。

「先に手を出してきたのはそっちの方よ……貴虎、やりなさい」

「え……流れる的に母さんじゃないの?」

仮面ライダークロニクルのガシヤットを手に持っていて何時でも変身可能な母さん。

話の流れ的に母さんがここで仮面ライダークロニクルを起動して変身するんじゃないのかと思ったが、母さんは私に押し付けてくる……仕方無いか。

『カブト!』

「っ、トリガーだ?!」

カブトロックシードを起動し頭上にカブトの顔を出現させる。

私達の事をただの一般人だと思っていた二ノさんは驚いたようだが既に遅い。戦極ドライバーにカブトロックシードを装填する。

「変身」

『ソイヤツ!!カブトアームズ!天の道、マイウエイ!』

「……なんだそれは?」

『二宮さん、連絡がきました。その二人は近界民との繋がりがああるそうで、取り押さえろとの事です』

「……辻や犬飼も合流するように言ってくれ」

『了解しました』

「どうやら話は終わったようね。それでボーダーの本部に案内をしてくれるのかしら

「？」

「悪いがお前達をここで野放しにするわけにはいかない。即刻取り押さえさせてもらう」

「はあ……あくまでも自分達が正当だと主張し、謝罪の一言すら無いのね」

母さんの逆鱗の上でタップダンスをするボーダーの上層部。

最初から謝ったりすればそれで済む話なのにどうしてこうも話をややこしくするのだろうか。いや、ほんとに母さんに喧嘩を売るのはまずい。

「貴虎、ボーダーは4年間備えてきたわ。近界民に襲来があっても対処する事が出来るように……全部を無駄にしてやりなさい」

「了解……そういうことだ。貴方に恨みは無いがここで倒させてもらう」

そう言うと戦極ドライバーのカッティングブレードを2回切り倒す。

『クロックアップ』

「っ、ア」

「遅い」

私になにかを仕掛けにやってくるのでニノさんはアステロイドを出そうとしたが遅い。

クロックアップは超高速で移動する事が出来るだけでなく思考をも加速させる、独立

した時間の中を動き出す事が出来る……通常の何百倍の速度で動き出す事が出来る……クロックアップが高速移動かそうでないかはライダー好きにとつて話が変わるけれども、とにかくニノさんから見て尋常ではない速さでニノさんの首をカブトクナイガンで切り倒した

『脳伝達神経損傷、緊急脱出』

「貴虎、残り2人もお願い」

「任された」

二宮隊の残り2人も間もなくこちらに向かつてやってくる。

母さんは残りの敵も排除する様に言ってくるのでやってきた辻と犬飼さんをクロックアップで問答無用に撃ち倒す。

「ボーダーの精鋭と言っても所詮はこの程度か」

カブトクロックシードを用いてクロックアップを使っているのだから負ける方が逆におかしい。

ボーダーの精鋭中の精鋭がこの程度の実力だと呆れていると突撃銃の弾が飛んでくるので回避するとそこには香取隊の若村と香取がいた。

「出たわね、人型近界民^{ネイバー}」

キツと強く私達の事を睨んでくる香取。

「葉子、分かっていると思うが先走りするんじゃないぞ」

「言われなくても分かっているわよ」

今にでも襲いかかって来そうな雰囲気を持つ香取を若村が宥める。

近界民は敵だという視線を向けている……そういえば香取は1度目の大規模侵攻で被害を受けた住人だったな。ならば、近界民を憎むのは当然の事だが

「私達は近界民じゃない。極々普通の三門市民だ」

「その声は……三雲なのか？」

一応は間違っているので訂正を入れる。

私や母さんは近界民じゃない、遊真は向こうの世界からやってきた人間であって敵じゃない。

「上層部にくだらない真似はするんじゃない、今すぐに謝罪に来てと言ってくれ」

「はあ？なんであたしがそんな事をしないとイケないのよ」

「はあ……よりによって面倒なのが出てきたな」

そう言いつつカッティングブレードを3回倒す

『ライダーキック』

「ライダーキック」

「っ!？」

「私達と対話している間に間合いを詰めて不意打ちを企んでいたみたいだが私にはカメラオンは通用しないぞ」

カメラオンで透明になり近付いていた三浦をライダーキックで蹴り飛ばす。

トリオン体を粉々に粉碎された三浦は緊急脱出をしまい、流れ星の様にボーダー本部に戻っていく

「貴方達下つ端には用は無いわ。早いところ上の人達を連れてきなさい」

「……誰が下つ端よ」

「B級なのがその証拠だろう……もういい、話し合いはするつもりは無いのならそれで構わない」

『クロックアップ』

「っー」

再びクロックアップで自らの時間を加速させ、高速移動で若村と香取の首を跳ねる。

うくん、わかっていた事だけでもカブトのクロックアップはチートだな。こつちもクロックアップするかそれ並みの速度で動けないと対抗する事は……いや、そういうえばカブトの第1話で天道総司、弾幕を張ってクロックアップしてきているワームを対処する事が出来ていたな。

「全く、さつきから全然話が通じないわね」

人の事をあろうことか人型近界民扱いしてきた事に流石に母さんもご立腹だ。

取りあえず上層部の人達は母さんの拳骨は免れる事は出来ないだろうと思っ
ていると加古さんと黒江が現れる。

「貴方達が近界民？」

「違うわ。息子が向こうの世界からやってきた子と繋がりがあるからと疑いがあるから
ボーダーがストーリーカーまがいの事をしていたからクレームにやってきた極々普通の三
門市民よ」

「……………どういふことですか？」

「私が聞きたいぐらいだ。大方、上がこつちがカチコミに来たと知って逆に捕らえよう
としているんだろが……………悪いんですが加古さん、私達は上層部に用事があるのでそこ
を退いてくれませんか？」

「その声は……………貴方、トリガーを持っていたのね」

「ええ……………やるというのならばこちらも」

「待ちなさい」

戦極ドライバーのカツティングブレードに手を寄せると母さんから待ったが掛かっ
た。

なんだと振り向くと手には仮面ライダークロニクルが握られており、母さんはガ

シャツのスイッチを起動した。

『仮面ライダークロニクル』

「貴方ばかりにやらせないわ……今度は私が潰す」

そう言うのと仮面ライダークロニクルガシャットを手放す母さん。

仮面ライダークロニクルガシャットは地面に落ちる事は無く、空中を舞いバグルドレイバーIIに装填される……あくあ、知らない。私、知らない。母さんをここまで怒らせたボーダーが悪い。

「変身」

『バグルアップ！天を掴み取れライダー！刻めクロニクル！今こそ時は極まれり!!』

「うわあ……うわあ……」

何故出来るかどうかは知らないけれども、母さんは仮面ライダークロノスに変身した。

エグゼイド系の中でもかなりのチート性能を誇っている……ポーズが本当に厄介だ。

「母さん、そこかしこに罠が仕掛けられているから気をつけて」

「問題無いわ」

特殊^ト工作^{ラッ}兵^バと思わしき人物が加古隊付近の色々なところに罠を仕掛けている。

強制的に位置を変える物もあれば爆弾もある。私にはサイドエフェクトがあるので

何処に罾が仕掛けてあるのかが丸わかりだが母さんには何処にあるのかが分からない……が、関係の無い事だった。

『ポーズ』

母さんはバグドライバーⅡのAボタンとBボタンを同時に押した。

すると母さんは一瞬の内に、いや、目に見える事なくその場から消え去ってしまい気付けば加古さんと黒江の背後にいた

「っ!?!」

「嘘!?!」

黒江と加古さんは背中を大きくバツサリと斬られていた。

警戒は怠っていないのに急に背中をバツサリと斬られてしまった事に驚きを隠せないが、トリオン体の活動は限界を迎えてしまい緊急脱出してしまう。

「コレは中々に使えるわね」

「一応は私の物なんだが……ホントになんて使えるんだ」

私ですら変身する事が出来ないクロノスにさも当たり前前の如く母さんは変身をしている。

全くなんでもありなのは分かっていた事だが、ここまで行く度過ぎていくぞと戦極ドライバーにセットしているロックシードをカブトからデイケイドに変える

『ソイヤット！ディケイドアームズ、破壊者・オン・ザ・ロード！』

「なんや見たことのない奴が来とるな」

「イコさん、油断したらあきませんよ」

ディケイドアームズに変身すると今度は生駒隊のイコさんと水上先輩がやってきた。

まだディケイドアームズの勝手が分からないのでここは母さんに任せると母さんはポーズで時間を止めて生駒隊の2人を撃墜する。

「なるほど、ディケイドロックシードにはこんな機能も搭載されているのか」

ライドブツカーを手にし、開くと中には仮面ライダーのカードが入っていた。

ディケイドといえばあらゆるライダーに変身する事が出来る仮面ライダー、ディケイドアームズはそれに近い事が出来るライドブツカーからカードを1枚取り出して戦極ドライバーに翳すとディケイドロックシードが変化を果たす

「変身」

『ウィザードアームズ！キラキラ、インファイニティ!!』

「実に面白いな」

私のトリガーには隠された機能が幾つか搭載されていると私を転生させた仏は言っていたがディケイドロックシードにはカメンライドもどきの機能が搭載されているとは思ってもみなかった。中々に良い機能が搭載されているな。

「うおつと!!」

「つちい、避けられちまったか」

「諏訪、前に出過ぎるな。向こうはなにをしてくるのか分からない」

ウイザードアームズ（インフィニティ）を堪能していると弾丸が飛んできたので回避する。

今度はいったい誰かと思えば諏訪さんとレイジさん……いや、玉狛第一と諏訪隊の面々と言った方が良さだろうな。

「待ってくれ。私達はカチコミに来たには来たが、貴方達隊員に喧嘩を売りに来たわけじゃない」

「その声、お前、三雲なのか!？」

この人達ならば話し合いは通じるだろう。

アックスカリバーを出さずに話し合いを求めるとどうして私がこの場に居るのかを大層諏訪さんは驚いた。

「なんでお前こんな事をしてるんだよ」

「ボーダー、というか三輪と米屋が人の家に張り込みをしたり、トリガーを起動して武装した状態で家の中に土足で踏み込んできたり奈良坂達が狙撃銃向けて狙撃のスタンバイしてたり色々やってきたんだ」

「はあ? どういうことだ。オレ達は人型の近界民が出たから倒してこいって言われたんだぞ」

「……どうやら俺達とお前達の間で色々と誤解があるようだな」

聞いていた話と全然違うとなる諏訪。

レイジさんは情報伝達の何処かで間違いが起きている事に気付いたので上層部に連絡を取るのだが上層部も上層部で慌てており、連絡が上手く伝わらない。

「上からはトリガー使いの撃退及び捕縛を命じられているが……」

「言つとくけどやるなら構わないわよ。既にこつちには被害が被っているのだから責任は取ってもらわないと……私達を止めたいのなら自宅の修繕費に慰謝料、そして謝罪の言葉を持つてきなさい」

伝わっている情報に対して語弊があつた様でどうするべきかと悩むレイジさん。

母さんは中指を突き立てて軽く挑発するが流石は大人というべきか挑発には乗つてこない。

「ボス、どうなってるの? 人型が出てきたんじゃないの?」

『人型っていうか、トリガーを持った一般人が出てきたんだ。鬼怒田さん達は速攻取り押さえろって言ってるけども……加古隊はやられるし二宮隊もやられてるし、そいつら滅茶苦茶強いぞ』

どうすべきかと小南・パイセンは上の判断を求める。

上からは即刻取り押さえると命令が出ているのだが比はどちらかといえば三雲家にある。

「ボーダー隊員だからって何でもやっていいと思つたら大間違いよ」

「……大凡の事情は分かりました。ボーダーの上層部と話し合いがしたいのなら一度ボーダーの本部に足を、案内します」

「案内は不要よ。むしろあんた達が来なさいって上に伝えて……来ないのなら強行突破させてもらうわ」

京介が母さんをボーダーの本部内に案内をしてくれるそうだが、母さんは拒否する。

ボーダーの上層部が悪いのだからボーダーの上層部が出てくるのが筋だと母さんは主張する。

「それは……出来ないことです」

「なら強行突破させてもらうわ」

「待て待て待て、流石にそれは」

「だったら今すぐにボーダーの上層部を連れてきなさい……出来るの？」

「それは……出来ないけどよ……」

「なら話は終わりよ」

『ポーズ』

母の主張は通らない、ボーダーの上層部はここにはやってくる事は出来ない。

話にならないと母さんはバグルドライバーIIのAボタンとBボタンを同時に押した。すると周りの時間全てが止まった

「……ん？」

絶対無敵のポーズなのだが時間が止まっていると言う感覚に襲われる。

どういうことだ？クロノスの時を止めるポーズはクロノスかハイパームテキ、ゴッドマキシマムマイティX何れかじゃないと攻略出来ない筈だが母さんが一歩ずつレイジさん達に向かって見えているのが見える……あ、そうか。

「ウィザードのインフィニティスタイルは時間を操る事が出来たんだ」

時を止める能力だが独立した時間を持つている奴に対してはクロノスのポーズは効かないようだ。

母さんがバグルドライバーIIを手に持ちチェンソーの部分でレイジさん達の首を切り落とした。

『リ・スタート』

「っ!？」

「どうなってんだ、こりゃあ」

玉狛第一の面々と諏訪隊が全滅をした。なにが起きたのか分からないまま全滅をしてしまった。

「さて、貴虎、ぶっ倒しなさい」

「来い、ドラゴン!!」

そんなこんなでボーダー本部の壁に辿り着いた。

ボーダー隊員達が出てくるかもしれないので再三の注意を払う光のドラゴンを出現させアックスカリバーを取り出す。

「さあ、シヨータイムだ」

「なにカッコつけてるのよ」

少しぐらいカッコつけてもいいじゃないか。

アックスカリバーの剣でボーダー本部の外壁を破壊してボーダー本部に乗り込むのだが、そこには橘高さんと藤丸さんがいた。

「だ、誰なの？」

「何処にでもいる三門市民兼蓮乃辺市民だ」

「いや、何処が何処にでもいるんだよ!!」

「まあ、そう言われればそうなんですけどね……さて、そろそろか」

橘高さんと藤丸さんにツツコミを入れられつつも先を見据える。

すると警報音が鳴り響いた。

『緊急警報！緊急警報！侵入者発見！侵入者発見!!』

「侵入者つて、貴方達の事なの!?!」

「まあ、そうなるわね……私達の目的は別にあるからさっさと退きなさい」

警報音が鳴り響き、ボーダーに騒動が巻き起こるのだが遅い。

私のサイドエフェクトがボーダー上層部が何処に居るのかを教えてくれるので私の先導の元、ボーダー上層部が居る会議室に向かおうとするのだがそこにボーダー上位陣が立ち塞がる。

「そこまでだ!」

「なにカッコつけて出てきてるのよ」

ノーマルトリガー最強の男こと忍田本部長を筆頭に、影先輩、村上さん、弓場さん、緑川とやや攻撃手に偏っているが近距離特化の人達が現れる。

「なんで私達がここに来たのか理解しているの?」

「その一件に関してはコチラも不備があった。だからといってこのままボーダーの上層部に殴り込みに行かれても困る……これ以上先に進むというのなら」

『ポーズ』

「あ、鬼だ」

話をしている最中に母さんはポーズを使う。

ボードー内部の時間は止まってしまい、唯一動けるのは私と母さんだけだった。

「仕方ないか」

もう既にどちらかがくたばるまで戦うしか道は無い。

カッティングブレードを3回切り倒してアックススカリバーをアックスモードにしブンブンと振り回すとアックススカリバーは徐々に徐々に大きくなっていく

『シャイニングストライク!!』

「さあ、ファイナーレだ」

巨大化したアックススカリバーを横に薙ぎ払うと影先輩、村上さん、弓場さん、緑川達を一掃する。

『クリティカルクルセイド』

母さんもバグドドライバーIIを用いて回し蹴りをくらわせる。

忍田本部長のトリオン体は粉々に破壊されてしまう。

『リ・スタート』

「っ!」

「ああ!?!」

「なんだと!？」

「嘘でしょ!？」

「どうなつてやがる!？」

忍田本部長、影先輩、村上さん、緑川、弓場さんの順に声を上げる。

トリオン体は綺麗に破壊されて緊急脱出……といつても脱出先はここ、ボーダーの本部だからな。

「何人たりとも私達の歩みは止めさせないわ」

「母さん、行くよ」

現時点で居るボーダーの上位陣は大体倒せている。

この場に居ない奴等に関しては知らないがとにかくコレで後はボーダーの上層部を叩きただけだとボーダーの上層部が居るであろう方向に向かって歩き出すとゲートが閉鎖される。しかしそんなものはなんの障害にもならないと母さんがゲートを殴り飛ばし、ボーダーの上層部が集う会議室に足を運び入れる。

「見つけたわ……よくも人様の家を傷つけてくれたわね」

「な、ななな、忍田本部長達はなにをしている!？」

「彼等なら息子が全て撃ち倒したわ……ねえ、今どんな気持ちかしら? 4年もの間、準備をしてきたのにたった2人の人間にボコボコにされていて……さぞ悔しいでしょうね」

慌てふためく狸のおっさんと狐のおっさん。

母さんは今までの努力を全て水の泡にしたとあざ笑いバグルドライバーIIを腕に装着する。

「……カチューシャの子と銃を向けた子が居ないわね。貴虎、探してきなさい」
「ああ……こうなったら米屋達にも責任を取ってもらわないとな」

何時でも上層部をぶっ飛ばせる準備をし終えたので私は母さんから離れる。

米屋と三輪を探しに三輪隊の隊室に向かうと生身の肉体の三輪達がそこにはいた。

「よお、さつきぶりだな」

「三雲……お前はいつたい何者なんだ？」

「私は私だ……とにかくお前達にも色々と責任がある。来てもらうぞ」

三輪と米屋の首根っこを掴んで上層部の居る会議室に乗り込んだ。

会議室ではいい歳した大人達が正座になって座っており、母さんは相変わらずクロノスのままだった。

「連れてきた」

「あら、ちょうど良いタイミングね……正座しなさい」

「はい……」

「うおお……怖え……」

三輪と米屋は観念したのか正座をしてボーダーの上層部とともに一列に並ぶ。

母さんはいとうと城戸司令が座っていたであろう席に座って足をくんだ。

「それで謝罪の一言は？」

「そ、その一件に対しては我々——へふう!？」

「その件って、他の事については謝罪する必要はないのかしら？」

「申し訳ありません——っ」

「なにについて謝ってるの？」

根付さんに鬼怒田さんに母さんはビンタを叩き込んだ。

流石にクロノスの状態でぶつ叩くと首をモゲかねないが流石にその辺りの手加減は

出来ているので問題は無かった。

「お前の姉ちゃん、怖すぎるだろう……」

平気な顔で上層部にビンタを叩き込む母を見て米屋は怯える。

「米屋、姉じゃなくて母さんだ。40過ぎのオバんだ」

「うっそだろ、おい!？」

そんなこんなでボーダーの上層部を締め上げる事に成功した。

5分ぐらいした後には修達は戻ってきたのだが既に色々と終わった後で迅もどうすることも出来なかった。

第96話

「今から名前呼ぶから呼ばれた奴は受け取りに来いよ」

2月3日（月曜日） 高校3年や中学3年生は卒業のシーズンを迎えるこの頃だ。

まだ高校生2年生の私には卒業だの就職だの話は早い……大学には一応は行くつもりでいる。考古学関係を勉強したいのでそっち系の大学を探す……異世界の存在が発覚したから考古学系の学校、地味に倍率が高くなっているが……まあ、なんとかなるだろう。

「出水」

「はい」

今日の授業が終わりを告げるのだが何時もとは違うイベントが発生する。

プリントを渡すから呼ばれた奴はプリントを取りに来てと授業終わりのホームルームで告げられる。あいうえお順で呼ばれるので出水がプリントを受け取りに行くのが出水は受け取ったプリントを見てあまりいい顔をしない。

「米屋」

「はいっす……っげえ!!」

「えー今、呼ばれたメンツがなんなのか薄々分かっている連中は分かるかもしれないけど、今、呼ばれたのはボーダーに所属している面々だ。皆も知つての通り防衛任務で学校を休む事が多々ある。今まではなあなあで済ませて来たけども今年から1、2年には特別課題を与える事にした。月末までに出してくればいいレポート形式の課題でパソコンを使つてもいいウイキとかをコピーしたらアウトな課題だ」

「なんで今頃になつて出すんですか! 去年も一昨年もこんな出なかつたじゃないっすか!!」

「ボーダー推薦の枠を疑問視する声が学校やボーダーから出てきた。ボーダーと提携している所謂進学校は自主的に勉強する事が出来るタイプの間が多く学校の成績を高く維持している。だが、ウチみたいな普通校は自主的に勉強する事が出来ない、勉強そのものが苦手な連中が居る。ボーダー隊員として優秀だから学業を見逃してとなあなあでボーダー推薦枠を使つて進学したのは良いけどもレポートの提出が遅れてたりレポートがダメだったりと大学側で色々とあつたんだ」

「太刀川さんだな」

「絶対、太刀川さんだ」

レポート形式の課題で問題を起こしてるならあの人しか居ないと米屋と出水は口に

する。

しかし口にしたからと言ってなにかが変わるわけではない。レポート形式の課題を出されてしまった。

「毎月の頭にレポート形式の課題を出すから、月末までに出してくれればそれでいい」

「え、じゃあ来月もやるんすか!？」

「ああ。だが、安心しろ米屋。3年生になったらこのレポート形式の課題は無しになる。

3年生になったら就職だ進学だ色々忙しくなるからな」

「だったら学年末のこんな時期に出さずに来年から出してくれてもいいじゃないっすか！」

「いや、お前みたいな自主的に勉強出来ない、しない奴が変にボーダー推薦枠を使って進学出来ない様にする為にこのレポート形式の課題が大事なんだよ。適当な内容だったりウイキを丸コピしたり平仮名で字数を稼いだりする奴にはボーダー推薦枠を使わせない様にする為の措置だ」

「くそ、太刀川さんめ」

「パソコンを使つていいんだ。いちいち手書きで清書しなくていいんだ。月の頭から開始して月末に提出すればそれだけでいいんだ……大分、学校側も妥協した方なんだぞ」

なんだったらそれ専用に使き打ちテストを用意しても良かったんだと先生は言う。

まあ、言っている事に間違いは無いよな。ボーダーライフが忙しすぎて学校の成績を落としたというのは洒落にならない。

「なんでよりによって学年末テストがある時期に出すんすか」

「なんでもボーダーの新しいスポンサーがボーダーの学業面を心配したそうだ……まあ、今の今までが緩かったから、諦めろ」

大事な進級が掛かったテストが間もなく待ち受けてる。

常に留年と隣り合わせな米屋にとつては死活問題、ただでさえ一夜漬けみたいなもので勉強してるところでん形式で頭からスコンと落として行っている。覚える単語だけでも多いのに更には自力で色々やらなければならぬレポート形式の課題が出されたとなるとそれはもう大変だろう。

成績が中の上の出水もテストに加えてレポート形式の課題を出されてしまっている。のでどうしたものかと困っている。

「月末にまでに提出すればいいから、学年末テストが終わった後にレポートに取り掛かればいい。時間は沢山あるんだから少しぐらいレポートに時間を注ぎ込め」

「……………うす……………」

元気がないな、米屋。苦手な勉強の課題を出されてしまったのだから仕方がないといえ仕方がない事だ。

ボーダーに所属している面々に課題が行き届いたので帰りの挨拶をして解散する
「なんでお前は呼ばれてねえんだよ」

このままボーダー本部に直帰する私は米屋達と一緒に帰る事になる。

米屋はボーダー隊員に課題が出された筈なのに私に対しては出されていないと愚痴を零す

「まだ正確にはなっていないからな」

ボーダーからトリガーを頂いては居るものの、正式にボーダーの隊員にはなっていない。
い。

公式のサイトに正隊員は名前が載るけども、まだ私はC級ですら無いので名前は載っていない。故に今回の課題から免れた。

「来月の課題は受けないといけないがな」

今月の課題から免れたが来月のレポート形式の課題は出さなければならぬ。

来月にはボーダーの正隊員として活動をする……三輪の復讐の共犯者になるんだ、生半可な気持ちじゃないと学校の成績も維持しておかないと。成績を落としてしまえば母さんが悲しんでしまう。

「だあーっ！レポートどうしよう、なにから始めればいいんだ」

「レポートも良いけども学年末テストも忘れるなよ。お前、赤点を叩き出したら補習だ

「けで済まない可能性が高いんだから」

米屋の成績はホントに酷い、CO₂を二酸化酸素だと勘違いするぐらいに成績は酷い。

レポート形式の課題は学校の成績にも内申点にも繋がらない、ボーダー推薦枠が欲しい人が真面目にやらないといけない課題だ……大学の進学はどうあがいても絶望的な米屋は課題よりも学年末テストを乗り越えないといけない。

「よおし、気晴らしにランク戦をやんぞ！」

「お前はなにを言い出すんだ、気晴らしのランク戦は勉強に行き詰まった時にするもので開幕早々にするものじゃない」

「ランク戦はやってくれるんだな」

そんなこんなでボーダー本部の私の部屋に辿り着いた。

米屋は帰ってきたのならばバトるかトリガーを起動させるがそんな暇は今のところはない。気晴らしのランク戦は米屋が勉強や課題に行き詰まった時にするものだ。

「課題はパソコンを使って印刷してもいい緩めのレポート形式の課題だから後回しだ。学年末テストの方を優先するぞ」

「じゃあ、やる気を起こさせる為にランク戦を」

「一本じゃなくて5本ぐらいやってやるから我慢しろ」

「言ったな！約束しろよ、今日は一本だけじゃなくて5本勝負だ」

「はいはい、分かった分かったから……取り敢えずテスト対策をするぞ」

取り敢えず私の部屋は色々置いてあるので別のところで勉強をする。

制服から私服に着替えた後にトリガーを起動して謎のマスクメロンマンになるとボーダーの勉強が出来そうなスペースに向かう

「上手い具合に槍バカを制御出来てるな……さてと、おれはレポート形式の課題の方を消化して」

「いずみん先輩！」

米屋の勉強を見ようとしていると緑川が飛び出してきた。

急に声をかけられたので出水はビックツとしているのだが緑川だと分かる直ぐになんだよお前かよといった顔をする。

「どうしたんだ？」

「今日、学校に行ったらさレポート形式の課題を出されたんだよ。でも、レポート形式の課題なんてやったことないしどうすればいいのか分かんなくてさ。いずみん先輩、太刀川さんのレポートを手伝った事あるよね？どうすればいいのか分かんないんだよ」

「おお……お前もか」

緑川の方もレポート形式の課題を出されている。

これ、裏で私が出させるように指示していたと告げるとプチギレるだろう。一部のボーダー隊員にとつてふざけんじゃねえの死活問題だ。でも、そういう感じのフオローをしておかないと後々痛い目を見る。

「学年末テスト前なのにいきなり過ぎるよね。なんで急に今になってこんな事を言い出したんだろう」

「ボーダーのスポンサーが学業関連のアレコレを心配したり、ボーダー推薦枠を使って入学したのに真面目に授業受けてねえとか色々と問題になってるらしいぞ」

「……もしかして太刀川さんが原因なの？」

「かもしれない……おれ達もレポート形式の課題を出されちまつてるんだよ」

「嘘お?」

自分達だけじゃない事を知って、軽くシヨックを受ける緑川。

他人のレポート形式の課題を心配している暇は何処にもない。出水はレポート形式の課題を手伝う事は出来ないと言葉を帰らせた。

「やっぱいきなり過ぎてるよな」

学年末テストが近い、志望校の受験が近いなど色々と勉強シーズンが被っている。

そんな中でレポート形式の課題を出されてしまったらそれはもう大変だろう。現になんでレポート形式の課題をしないとイケないんだと愚痴を零してるのが聞こえる。

いきなりの事過ぎていると出水も愚痴を零す。

「【学業とボーダーの両立って難しいものだな。ボーダーって上に行けば行くほどアホが多いって都市伝説まであるらしいし】」

「それフィクション、当真さんと太刀川さんが原因でアホが多いと思われがちだけどボーダーの上はちゃんと勉強出来る人は出来るからな」

でも、トップはDANGERをダンガーと読み間違える残念な人だろう……何処かでめちやイケ形式のテストでも受けさせるか。

「問1、日本の時代を旧石器時代から現在まで述べよ」

「えくと……旧石器時代の前だったら分かるんだけどな」

「なんだ？神話とか分かるのか？」

「いやいや、アレだよ。全てはビッグバンから始まったんだろう」

「お前、どつから始めようとしてるんだ。百歩譲っても神沼矛盾だろう」

「かみぬまのほこ？」

何だそれと首を傾げるんじゃない。大体ビッグバンで世界創成したつてのは歴史的に合ってるかどうかすら怪しいんだぞ。

米屋に旧石器時代よりも後の時代を、縄文、弥生、飛鳥、奈良、平安と歴史の年号を暗記させる。世界史とか地歴公民は大体覚えておけば赤点を回避することが出来る

「1192じゃなく1185作ろうに変わっているからな」

「あくダメだ。頭が痛くなってきた。ちよつと小腹も空いてきたし売店でなんか食おうぜ」

年号暗記に苦しむ米屋は音を上げる。ランク戦をしようぜと誘ってこないだけまだマシなのかもしれない。

そういえばオヤツを頂いていなかったなとなにかグミ的な物を購入しようと売店に向かうと米屋が財布を出した。

「勉強見てくれるお礼に奢ってやるよ」

「じゃあ、このメロン味のグミを……米屋はどうするんだ？」

「オレはアメリカンドッグ、いや、アメリカンドッグスを2つだ」

「……何故に複数形？」

「え、アメリカンドッグ2つ以上の時ドッグスって付けねえ？」

「つけるわけ無いだろう……むしろなんでつけるんだ？」

「馬鹿野郎、最後にズとかスとかついていた方が知性的でカッコイイだろう」

「バカはお前だ、2個以上だから成立はしてるがカッコいいカッコ悪いで付けるものじゃない……因みにトリガーが2つ以上ある時は？」

「トリガーズ」

「正気か、お前」

馬鹿なのは前から知っていたけども、ここまで来ると狂っている様に見えるぞ。

いや、戦闘狂だからどちらかと言えば狂っているのは分かっているが……グミ美味しい

「ああ、ダメだ！学年末テストだけじゃなくてレポート形式の課題も終わらせないといけないとなると全然ペンが進まねえ」

軽く小腹を埋めると米屋が音を上げる。

学年末テストの対策をしているがコレが終わってもまだレポート形式の課題がある。まだまだ先が長い、と言うか長過ぎる。まあ、無くても米屋はペンを全然動かそうとしないけれど……ボーダーの訓練とかはすんなりと理解するのに厄介な相手である

「おい、聞いたか！進学校の六穎館組はレポート形式の課題を出されてないんだってよ」「ぬうあにいい!？」

ペンを取り出してテスト対策をしていると出水が慌てた様子で報告に来る。

六穎館、進学校組は自主的に勉強する事が出来るタイプで学力が元から高いんだからレポート形式の課題は必要じゃない

「オレ達がテストに苦しんでるつてのに古寺のやつ!!」

「他人を妬む暇があるならさっさとテスト対策を終わらせてレポート形式の課題に取り

組むんだ」

ウガアと怒る米屋を冷静に宥める。

他人は他人、自分は自分と割り切ってレポート形式の課題を……ん？なんか急に静かになつたぞ

「そうだ……普通校組は全員同じ課題を出されてるんだ。だったら誰かのを写せばそれで済む!!」

「いや、ウイキをコピーするんじゃないと釘を刺されたんだぞ。レポートをコピーしたらおんなじだろう」

「だったら、レポートを奪うしかねえ!!」

コイツはいったいなにを言っているんだ。

米屋から放たれる電磁波は変な方向に狂いだしており、米屋は弧月（槍）を構えてリンク戦が行えるブースに向かうとそこには太刀川さんがいた。

「太刀川さん、ちょうどいいところに居てくれた」

「ん？どうした、リンク戦は出来ないぞ……レポートが溜まつてな。進級が掛かってるレポートなんだが何処から手を付けなければいいのか」

「だったら誰かのを奪いましょうよ……オレ達にレポート形式の課題を出したんなら、それをまるっと利用しようぜ！」

「米屋お前……名案じゃないか！」

あくまた話がややこしくなってきたな。

太刀川さんはレポート形式の課題をカツアゲする事に賛成し、そうと決まればと何処かに同学年の人は居ないかと探し出している。このままだとホントにカツアゲしかない。

「太刀川さん、レポート形式の課題は自分でやるものつすよ！」

出水が至極まともな事を言う。

「それが間に合わないからこうしてるんだろぅが!!」

「いや、だからダメですつて！」

「邪魔だ、出水！お前が邪魔をするというのなら俺はお前を斬り倒して屍を超えていく！」

「例え誰が出てこようがオレ達のレポート形式の課題の回収は終わらねえ！」

「【無駄にデカイ口を叩いてるんじゃないやねえよ】」

「1人で終わりそうにないからデカイ口を叩いてるんだよ！」

「2人でも終わらないからこうしてるんじゃないやねえか!!」

……ダメだ、この二人レポート形式の課題が原因でバーサーカーになっちまってる。

レポートが彼等をバーサーカーに……私は、俺は友人や人生の先輩なんて事をしてし

まった……いや、太刀川さんは関係無いか。

「出水、2人がレポート形式の課題をカツアゲする前に2人を叩きのめすぞ」

「今日のトリガー構成、マスタークラス以上の攻撃手アタッカーに対応してるのか？」

「【問題無い……勝負だ、ダンガーたちえかわ、ライスピア】」

「三雲オ、オレが勝つたらオレ達のレポートを手伝ええ！」

亡者と化した米屋と太刀川さんに俺と出水は挑む。

こんな事をやっている暇は無いのだが2人を止めないと更にレポート形式の課題をカツアゲする馬鹿が増えてしまう。凶戦士と化したバカ二人を相手に丸一日消費するとは思わなかった。

第97話

2月4日（火曜日）

「三雲、ランク戦しようぜ！」

昨日の暴走は何だったんだろうと言いたくなるのだが気にする事なく米屋は私にランク戦を挑みに来る。

「悪い、今日は別件で用事があってランク戦は出来ない」

何時もならばランク戦を行うブースに向かうのだが今日は出来ない。

学校終わりに告げておけばいいのだが色々忙しくて言う事は出来なかったのだから今
言う

「別件で用事？」

断られるとは思ひもしなかった米屋は私の用事について疑問に思う。

何処かの部隊に所属しているわけでもない、かと言って防衛任務があるわけでもない。そんな私が用事があるとなれば疑問の1つや2つ持つてもおかしくはない。

「……そのケース……」

「この一件に関わっていいのは極々少数の人間のみだ……悪いがお前でも関わらせる事は出来ない」

私の両手に握られているアタッシュケースに米屋は目が向いた。

このケースが何なのかは米屋は知らないが、それが関連していると目を向けているが今回は米屋でも参加させるわけにはいかない。米屋に関係無いとキツパリと言えばボーダーの本部を出てバイクを、サクラハリケーンを走らせて玉狛支部に向かった。

「いらつしやい、そろそろ来る頃だと思ってたよ」

「ふう……お前しかいないのか？」

玉狛支部に向かうとそこには迅が居た。他の面々は学校とか色々とおあるのだろうか、迅は無職のエリートなので玉狛支部に当然の様に居る。

コイツは生理的に受け付けないので先に言っておくと迅は特に気にする事は無く玉狛支部の中に入れてもらう。

「む、おさむのあにか」

お子様S級ことバカ王子もとい林藤陽太郎はカピバラ（仮）である雷神丸に乗っていた。

「なにしにきたんだ？」

「色々調べたい事がある。ボーダー本部でやっても良かったがタヌキのおっさんが喧

しいし、太刀川さんや米屋辺りがまた暴走しそうでな」

「あくメロンくん、本部で実験は止めといたほうがいいよ。太刀川さんとか風間さんに絡まれる未来が見えてる」

「予知のチートを持っていてる男もこの通りだ……母さんは居ないのか？」

「おぼさんは買い物に出てるよ。今居るのはオレと陽太郎とボスト」

「ただいま」

「小南だけだ」

「……一番必要じゃない奴が来てしまったな」

出来れば宇佐美やレイジさんとかの知的なタイプの人間が来てくれれば良かったが、向こうにも向こうの事情という物がある。

「修の兄貴じゃない、なにしに来たの？」

「私……いや、俺のトリガーについて色々と詳細を調べに来たんだ。ボーダーの本部でやつても良かったがそれだと色々と五月蠅いんでな」

「へえ……じゃあ、私も付き合ってあげるわ！」

「いや、結構だ」

「なんでよ!?!」

案の定、話に絡んでくる小南パイセン。

今回は小南パイセンの力は必要じゃない、というかホントにいらんないんだ。

「今回、俺はなにが出来てなにが出来ないのかを確認する為にやってきた。トリガー使いを戦うわけじゃない……いや、戦えないんだ」

「どういふことよ？」

「コレが答えだ」

2つのアタッシュケースを小南パイセンの前に置いた。

開けろと言っているんだと認識した小南パイセンはアタッシュケースを開くと驚いた顔をした。

「ボーダーのトリガーとは根底から違うトリガーだ……いや、そもそもでトリガーですら無いかもしれない」

『スカル!!』

「変身」

『スカル!!』

ロストドライバーを腰に巻きつけるとスカルのガイアメモリを装填してロストドライバーを傾け、久しぶりにスカルに変身をする。

「!」

「話には聞いてたけど……25本も黒トリガーみたいなものを持っているのね」

「小南、違うぞ。コレはトリガーである事すら怪しい物だ」

Eを除いたT2ガイアメモリを見つめる小南パイセン。

適合するメモリがあれば引き合うが小南パイセンと相性の良い適合するガイアメモリはどれでもない……早々に適合するメモリが見つかる筈が無いか。

「おいおい、マジかよ」

「ああ、マジだ」

「ちよつと、なに2人しか分からない会話をしてるのよ？なにがマジなのよ」

「……今のメロンくんにオレのサイドエフェクトがうんともすんとも言わないんだ」

「だろうな」

「はあ!?!?どういうことよ」

無敵に近い予知のサイドエフェクトを持っている迅だがそのサイドエフェクトが今の俺に対して全くと言って発動しない。

「このUSBメモリのトリガーはガイアメモリ、様々な概念が詰め込まれたメモリだ。今、俺が使用しているメモリは骸骨の記憶が宿っているスカルメモリ……小南、骸骨は漢字で書くとなんと読む?」

「骸骨?……骸骨は骸骨で他に読み方は無いわよ」

「なら、聞こう。骸骨はなんの骨だ?」

「なんの骨って……そりや死んでる人の骨よ」

「そうだ。骸むくろの骨と書いて骸骨がいこつと読む。骸骨の記憶が宿るスカルメモリを用いて変身している間は擬似的に死んでいて……迅の未来視のサイドエフェクトを無効化する」

迅のサイドエフェクトを無効化する理由を教えたと開いた口が塞がらない小南パイセン。

そりやそうだろう。迅のサイドエフェクトは防ぎようがないチートみたいなものだろう。防ぐ術は無い筈なのに目の前に存在しているとあらば驚くしかない。

「オレのサイドエフェクトだけじゃなく多分、影浦の感情受信体質も効かないと思うぞ」
「ああ、避難所でスカルに変身した時に影先輩に絡まれた。なにも感じなくなっってしまったと言われて一悶着あった……自己強化系のサイドエフェクト以外の、相手が居て発揮するタイプのサイドエフェクトはスカルに変身している間は無効化される」

「サイドエフェクトを無効化するトリガーとかチートじゃない!!」

「ああ、そうだな……だが、コレはトリガーと呼んでいい代物かどうかは話が別だ」

「トリガーじゃないならなんだって言うのよ?」

「生体兵器だ」

そう言うのとロストドライバーからスカルメモリを抜き取り元の生身の肉体に戻る。

「ガイアメモリは黒トリガーブラックとノーマルトリガーと大きく異なっている……そもそも

でトリオン体を構築しない」

「え、じゃあさっきの姿は」

「そういう感じの見た目をした生物に変身している……生身の肉体を別の姿に変えている。アフトクラトルの角^{ホーン}トリガーが1番近いな」

ガイアメモリでの変身は装着系の仮面ライダーでなく肉体変化系の仮面ライダー、生身の肉体を変化させて骸骨人間に文字通り変身している。

「大丈夫なの？あんだ、さっき骸骨人間になってたんでしよう。生身の肉体を切り替えて……なんか反動的なものは」

「あるぞ」

「なっ……なんでそんな危険な物を使っているのよ!!あんだ、馬鹿なの？死んじやつたらどうするの!」

「骸骨は死んでいる……第一、そのデメリットを無くす為にこのベルトが存在しているんだ」

ガイアメモリ単体で変身しようと思えば変身できる。

T2ガイアメモリは生体コネクタが無くてもドーパントに変身する事が出来るがその分毒素の様な物が回る。

「このベルトはメモリの毒素を限りなく取り除いて本当に必要な成分のみを抽出してい

る……だがそれでも使い続ければ生身の肉体に異変が、超常的な力を使いこなせるハイドープと呼ばれる存在に成りかける」

「危ないじゃない……それ、修達は知っているの？」

「……そもそもで修に適合しているメモリは一つだけだ。仮にハイドープ化してもなんら影響は無い……」

ガイアメモリに関する受講はコレぐらいでいいのだろうか。

生身の肉体を、人体構造を弄くつてトリオン兵やトリガー使いと戦える様になっている事を教えると小南は危険だから使うなという。危険だから使うなと言うのならトリガーそのものが危険だ。そもそもでポードがやっている事自体が戦争みたいなもので危険でしかない。

「そういえばEのメモリだけは無いみたいだけど」

「Eのガイアメモリは危険過ぎる代物でお前達に見せる訳にはいかない……ポードと敵対した際に躊躇いなく使う」

ロストドライバーとスカルメモリをアタッチケースに戻していると小南パイセンはEのメモリだけが無い事に気付く。

Eのメモリ、エターナルメモリは危険過ぎる。仮にエターナルメモリが原因でハイドープ化してしまえば……どうなるのだろう。サイドエフェクトを無効化するサイド

エフェクトとか手に入れたりするのだろうか。

「ガイアメモリの機能の調査も大事だが今回はこっちの方を重点的に調べたい」

ガイアメモリが入っているアタッシュケースを閉じ、もう一つのアタッシュケースを取り出す。

「こっちはあんたが前に使ってたやつね」

「戦極ドライブとゲネシスドライブだ……そろそろ実験をしたいし一室借りたい」

「……それもまたなんか物騒な能力とかデメリットがあるとか言うんじゃないでしょうね」

「トリオン体を構築せずにトリオンで出来た鎧を身に纏って戦う」

「危ないじゃない!!メモリといいベルトといい、いったい誰なのよこんな物騒な物を作ってるの!!」

何処の誰が作っているかと言われれば……何処の誰なんだろう。

一応は転生特典で拾った物だが、コレが何処で作られたかと問われれば答えづらい。仏様のな存在が作り出したのか、それとも持ってきたのか、非常に謎である。

「このトリガーもどきが何処の誰が作ったのかは関係無い、俺が何時何処で使うのかが問題だ。このトリガーもどきには俺の知らない隠し機能が幾つか搭載されている。その隠し機能がなんなのか、それを知るために今日、玉狛支部に足を運んだ」

フオーゼロックシードでマグネットキャノンが出なかった事やバリズンソードが出なかった理由が知りたい。

一室を貸してもらおうと戦極ドライバーを腰にセットし、メロンのロックシードを手に掛けるが途中で手を止める。メロンのロックシードは実際に使ってみて分かったのが隠し機能の様な物は搭載されていなかった。

隠し機能と言って思い当たる機能は搭載されていなさそうだ……搭載されているのならば他のロックシード、レジェンドライダーロックシードだ。

「これか」

『ディケイド！』

フオーゼロックシードは手元に無く、アギトロックシードは一度使った。

カプトロックシードとディケイドロックシード、隠し機能が搭載されているならば恐らくはディケイドロックシードだ。

『ロック、オン！ソイヤ！ディケイドアームズ、破壊者オン・ザ・ロード！』

「なに、それ？」

「知らないから調べているんだ……といふかなに普通に乗り込んできているんだ」

ディケイドアームズに変身していると小南パイセンが訓練室に入ってきた。

別に戦闘をするわけではないので入ってきてても構わないのだが……なにか厄介な事

が起きなければいいのだが。

「武器は普通にライドブツカーか」

「デイケイドアームズの武器を確認する。デイケイドの武器は剣にも銃にもなるカードケースことライドブツカーだ。」

なにか隠し機能は無いのかと調べているとライドブツカーが開くことに気付きライドブツカーを開いてみるとカメンライドに用いるであろうカードがズラリと入っていた……デイケイドアームズはデイケイドの力を使う事が出来る。デイケイドの力といえばあらゆる仮面ライダーに変身をする事が出来る能力……

「コレにしてみるか」

試しにライドブツカーからカードを1枚抜き取り、戦極ドライバに翳す。するとデイケイドロックシードが光り輝き別のロックシードに、ウィザード（インフィニティ）ロックシードに変化していた。

『ウィザードアームズ！キラキラインフィニティ』

「……なるほど」

「なにが成る程なのよ。説明しなさいよ」

「デイケイドロックシードの能力が少しだけ分かったんだ」

「デイケイドロックシードはドライバまでの仮面ライダーのロックシードにカメンラ

イドする事が出来る。

通常よりも多くトリオンを食うがドライブまでの仮面ライダーにカメンライド出来る能力は超強力、特にウィザードのインフィニティースタイルを使う事が出来るのは大きい。

「迅、見てるんだろう！なんでもいいから強いのを出してくれ！」

この光景を迅は何処かで見ている。声を上げるとトリオン兵と疑似的に戦えるシステムが起動して……ラビットが出てきた。

「つて、それはやりすぎじゃないの!？」

モールモッドかバムスター辺りが出てくると思っていた小南パイセン。

トリガー使いを捕縛するのを想定して作られたラビット……この世界線ではレプリカが破壊されていないからレプリカのデータを元にラビットを擬似的に再現したといったところだろうか。

「来い、ドラゴン」

ウィザードのインフィニティースタイルと同じ事が出来るのならば色々出来る筈だ。

アックスカリバーを取り出してカリバーモードにして……自らの時間を加速させる事で高速で移動する。ラビットは私の事をターゲットにしていたが反応する事が出

来ずにアックスカリバーに切り裂かれる。

「……………ふむ……………大体こんな感じか」

アックスカリバーで見えるも無惨に切り裂かれたラービットを踏み台にする。

デイケイドロックシードの隠し機能、カメンライドの機能は理解する事が出来た……トリオン消費が激しいから使い時が悩みどころだが、インフイニテリースタイルならば何時でも使う事が出来る……インフイニテリースタイルはチートだ。

「中々にやるわね……………一回で良いから勝負を」

「俺に大怪我を負わせたいのならばいいぞ」

「……………そうだったわ」

なんだろうな、女子ボーダー隊員って見た目だけは可憐だけでも中身はアマゾネスの戦士が多いんだよな。

小南パイセンは戦いたそうな顔をしているけれども俺が生身の肉体の上に鎧を身に纏っているのを知っているので無理強いをすることはしない。流石に生身の肉体を傷つける訳にはいかないとモラルは守ってくれる。

「俺じゃないのならば戦わせる事は出来るぞ」

『デイケイド！』

変身を解除し、デイケイドロックシードを起動する。

すると門の様な物が開かれて上からデイケイドが舞い降りる。

「おく、面白そうな事をしてるな」

「つて、おい！なんでここにいるんだ！」

ボリボリとぼんち揚げを食べながらやってきたのは迅だった。

訓練室の外で色々とこの部屋のシステムを弄っている筈なのに何をしてるんだ

「ボスに任せてきた。オレがこつちに来た方が面白い事が起きるつてサイドエフェクトが言ってるんだ……そのピンク色のと戦うんだろ？」

「迅、こいつは私の獲物よ」

俺もといデイケイド獲物扱いか。

小南パイセンが倒されたら次はオレなど迅は拳手するとネオデイケイドライダーを装備したデイケイドはカードを取り出してデイケイドライダーにカードを装填する。

『KAMEN RIDE WIZARD INFINITY STYLE』

「！、さっきの」

『ヒースイフード！ボーズバビュードゴー！』

「……なに今の音声？」

「細かいことは気にするな」

ウィザード、インフィニティースタイルにデイケイドはカメンライドした。

変身時の音声を小南パイセンは気にするが戦うのには面白い相手である事に変わりはないと言えは纏っている電磁波オムニラが変わる。ボードアの頂点であると自称しているだけの強さがあるのだろうか……ただ相手が悪すぎる

『インフィニティ！』

アックスカリバーを取り出したデイケイドウィザードのベルトから音声がなる。するとデイケイドウィザードは高速で小南パイセンの元に向かい小南パイセンを切り裂いた。

「っ、とりまるのガイストよりも早い!!」

「小南パイセン、それは物凄く早く動いているんじゃない。自分の時間を加速させて高速で移動してるんだ」

「時間操作なんて、チートの代名詞じゃない!っこの!!」

ボードアの何度でも繰り返し戦う事が出来るシステムのおかげで直ぐに小南パイセンは復活する。

デイケイドウィザードに隙ありと双月を振るうのだがデイケイドウィザードは避ける事はせずに双月の一撃を受け止めた

「っ、硬い」

『ターン、オン!』

双月の一撃が通らないと小南パイセンは気付くが遅く、デイケイドウィザードはアックスカリバーをカリバーモードからアックスモードに切り替え、アックスカリバーを振り下ろした。

「小南、代われ。お前、2回もやられたんだ次はオレの番だ」

「嫌よ！まだコイツとの勝負は終わってないわ!!」

「オレにも少しは楽しませろよ」

まだ負けてないと主張する小南パイセンだがデイケイドウィザードに2回も負けているのも事実。

迅も未知の敵を相手にバトルをしたいとウキウキしている。デイケイドウィザードはこの状況をどうかしようと考えると1枚のカードを取り出し俺と迅を一行に並べた。

『KAMEN RIDE CROSSIZ BUILD』

「え、ちよ」

『Are YOU READY』

「ダメです!」

『ラビット!ドラゴン!Be The One! クローズビルド!イエイ!

イエエーイ!』

「……………ん？なにこれ？」

「おい、なんでこうなった」

小南。パイセンと迅の言い争いの末に迅と融合しクローズビルドに変身してしまった。
「ちよつともしかしてコレ、メロンちゃんと融合しちゃったの!？」

「黙れ、迅！俺もなんでこうなっているのか聞きたいぐらいだ……………なんだコレは。なんか変なのが視界に流れてきたぞ」

ラビット側が迅、ドラゴン側が俺で2人で1人の仮面ライダーになってしまった。

何故にこのタイミングでクローズビルドに変身なのかは不明だが、それよりも視界に何かが流れてきた。コレは……………未来か

「小南から物凄いオーラっぽいのが見えてる。え、つちよ、なにこれ？オレのサイドエフェクト、おかしくなったの？」

「恐らくは俺とお前が融合した事によって互いのサイドエフェクトが混じり合ったんだろう」

「コレ、元に戻るの？さつきから変な光の波が見えて気持ち悪いんだけど」

「ワイプ画面みたいに未来が見えて気色悪い……………ロックシードは、あつた!!」

『ロック、オフ』

足元に落ちていたロックシードを回収し施錠をすると元の姿に戻る

「アレがメロンくんのサイドエフェクト……メロンくん、よく今まで平静を保てたな」
「そっちこそあんな風に未来が見えて、気が狂わないのか？」

偶然だが重なり合った俺と迅のサイドエフェクト。

互いに今まで見る事が出来なかった物を見る事が出来て不快感を感じてしまう。
未来視のサイドエフェクトはあんな風に見えるのか……気が狂うな。

「小南、オレちよつと抜けるわ」

「すまないが俺も抜けさせてもらおう」

互いになんとも言えない気持ちの悪い感覚に襲われた。

お互い厄介なサイドエフェクトを抱えてしまっている……迅の奴は何時もあんなのを見ていた……いや、迅も俺が何時もあんなのを見ていたと気持ち悪がっているだろうな。

第98話

「ふう……気持ちが悪いな」

クローズビルドに変身するのはあまりにも予想外の出来事だった。

なんかめんどろな事が巻き起こると思っていたけども、まさか迅と融合してサイドエフェクトも融合するとは思いもしなかった。たまたま近くに居た小南パイセンの未来が複数見えるだけでなく、その未来から複数の電磁波が見えた。

「だいじょうぶか、ジューズならあるぞ」

「ああ、頂こう」

訓練室から出て一息つく。バカ王子もとい陽太郎からジューズをいただき、ゆつくりと飲んで気持ちと呼吸を整える。

迅のサイドエフェクト、中々に厄介な代物だ。オン・オフ利かないタイプのサイドエフェクトで……カゲさんならもつとキツイ、いや、そもそもでカゲさんとクローズビルドになれるかどうか怪しい。

「ただいま……あら、貴虎じゃない。もうホームシックになっちゃったの?」

「違うよ、母さん。今は一人暮らしを楽しんでるし、此処には実験でやってきた」

ジュースを飲んで一息ついた後にやってきたのは母さん。

両手にはスーパーのビニール袋がぶら下がっておりつい先程まで買い物に出掛けていたと迅が言っていた事を思い出す。

「その実験で一悶着あつて今はちよつと休憩している」

「そう……夕飯は食べてくの？」

「いや、ボーダー本部で食べるよ」

母さんの味が恋しいなんて言うほどに母さんと長い間別れている訳じゃない。

折角の一人暮らしなんだから思う存分に楽しんでおかないと……ただまあ、あんまり羽目を外しすぎると修に取つての汚点になりかねないからな。

「貴虎……お兄ちゃんはどうなのよ？」

「……は？」

母さんが何かを考えていると思つていと意外な言葉が出てきた。

「貴方は修が生まれたら立派なお兄ちゃんになろうとして中学受験までして、その上で必死になっている。今も修の手本になろうとしているけど、修は貴方が思つているほど子供じゃないわ」

「なにを言い出すかと思えば、それぐらいは知ってる」

修は何時の間にか大きく成長しているんだ。

兄ちゃん、兄ちゃんと呼んで背中を必死になつて追いかけて来たあの頃とはもう違う。既に自我と自己の両方を持つていて自分の道を進もうとしている。私や母さんの手からはとつくの昔に離れていつている。

「知つていても分かつていないから言つているのよ。知つていても貴方は無意識に修寄りの人間になつてしまふ……悪いとは言わないけど、ブラコンも大概にしておいた方がいいわよ。修にお節介焼きし過ぎだつて何時か嫌われるわ」

「……そうか」

この先、修がどういう形で強くなればいいのか原作知識等があるので分かっている。上手い具合に修をそこまで誘導する事が出来たらばと思つていたがそれがお節介な事でありしなくてもいい事だと母さんは釘を刺す。

「修がボーダーに入る為の条件として貴方の力を借りないのが条件の1つに入っているわ。修が頼ろうとしなくても貴方が力を貸そうとしたら本末転倒よ」

「それは分かっている……けど、このままただまっすぐに前に進んでいても意味はない」
修達が進んでいる道を例えるならばゴールが無いマラソンだ。

先頭には小南パイセン達を始めとするA級の面々が走つており、修はビリに近いところを走っている。遊真もビリからスタートだったがあつという間に先頭に向かつて

いつている。修は歩幅を上げるのか走る速度を上げるのか、それとも遠回りに見える近道を走るので状況が大きく変わる。

「それが分かっていて黙りなさい……今は修が試行錯誤あれこれ繰り返す時間よ……ヒントは私が既に出してやるわ」

「……分かったよ」

修にスパイダー戦法があるとか色々と言えばあつさり理解する事が出来るだろうが修が本当の意味で成長するかどうか、成長する道を勝手に作ってそこを通れば後は自動的にパワーアップをするぞと道を舗装して用意したら修が喜ぶか喜ばないかと言え
ば……喜ばないだろうな。

「それに問題は修じゃない、いえ、修は放っておいてもなんとか答えに辿り着くわ。問題は」

「千佳ちゃんか」

修の場合は何んだかんだと主人公補正と言う名の幸運で現状を突破する事は出来る。

母さん目線で問題があるとするならばそれは千佳ちゃんだ。千佳ちゃんは人を撃つ事が出来ない。今はまだ露見していないが何れはバレる。

「あの子は守破離で言う破と離の段階に向かおうとしている。千佳ちゃんらしさを見つける事が今後の課題よ」

「……人が撃てない事に関しては何も責めないのか……」

「当たり前じゃない、死なないとはいえ人に銃を向けて撃てる方が頭がおかしいのよ。千佳ちゃんみたいな反応が普通……多分だけどランク戦を一種のeスポーツ感覚で楽しんでる子も居るわよ。ハッキリ言って狂ってるわ」

緑川とか米屋とか太刀川さんがその一例……強さは本物なので文句を言う事は出来ない。

千佳ちゃんが自分だけの道を見つける事が出来るかどうか、そこが玉狛第二の今後の課題である。千佳ちゃんは……なんでもありだからな。

「さて……帰るか」

ロックシードの隠された機能は分かった。ガイアメモリも無闇に使うとハイドープ化する可能性があるので使うに使えない。というか多分ハイドープに片足突っ込んでるだろうな。肋とか折れた骨が数日で元に戻っているのはハイドープに片足突っ込んだ影響だろう。

ロックシードとガイアメモリをアタッシュケースに仕舞って玉狛支部を後にし、ポーター本部に帰る。今日は元から無理だとランク戦をする意思は無いと示していたので米屋達に絡まれる事は無く、1日を無事に平穩に過ごす事が出来た。

2月5日（水曜日）

「おーっし、今日はランク戦を受けてもらおうぞ！」

「いや、それよりも来週テストだぞ？」

何時もの日常が終わると非日常がやって来る。

米屋は待つてましたと言わんばかりの笑みを浮かべあげるのが遊んでいる暇はあるのだろうか？来週からテスト期間に入るし、更には今月からレポート形式の課題が残っている。

「細かい事は気にすんじゃねえよ！」

「槍バカ、お前はホントに洒落にならない」

学年末テストなんて知ったことじゃねえと主張する米屋。

出水は今回の期末で赤点を取ったら洒落にならないのを知っているので意識を現実に戻す。

「レポートの方はどうなんだ？」

「そつちに関しては問題ねえよ……太刀川さんのを何回か手伝ってるからやり方がわかる」

悲しい悲鳴だな。

レポート形式の課題は大丈夫なのかと出水は大丈夫らしいが米屋は視線を合わせようとしなない。

「お前、進級が懸かっているんだからそれは洒落にならない……留年はまずい」
「ぬうおお……お知恵をお貸しください三雲様」

「まあ……今回も貸してやるが今回が最後になる可能性が高いぞ。私もコレからボードーの一員になって防衛任務を理由に学校を休むから……」

成績が酷く下がるとは言うつもりは無い。コレでも自主的に勉強が出来る方だと自覚している。成績が下がらないように自主的に勉強はしておくつもりだ。だが、万が一とかがある。修もボードー云々で成績が下がったら母さんに強制的にボードーを辞めさせられる……中学3年でボードー推薦とかいう謎の枠を使って三門第一高校に進学するから暫くはテストとは無関係な世界の住人になるだろうが。

「ランク戦は見ていいよな？」

「そこは好きにしろ……私は勉強しておくから終わったら来い」

「おいおい、いいのか？ 弟が頑張っているんだぞ」

ボードーの本部に足を運ぶと米屋はウズウズとしている。

米屋は今日行われるB級ランク戦を見に行きたいと言ってくるので後で勉強をするならば見てもいいと許可を出して見に行かせる。

「玉狛第二は雑にやったらB級中位で安定する実力を持っている」

米屋は修の事を気にしてくれるがそれこそ大きなお世話だ。

玉狛第二は雑にやっても中位に安定して残ることが出来る部隊だ。原作知識もあるので下手な介入はせずに見守るのが吉と私のサイドエフェクトが言っている。

「雑にやったら、ね……じゃあ、真面目にやったらどうなんだ？」

「B級の上位と中位の間をエレベーターの様に行き来する……今の玉狛第二はシンプルに強いカードが遊真だけだ。遊真が落ちればその時点で詰む……遊真もその辺のところは自覚しているから絶対に落ちない絶対的なエースになろうと頑張っている」

本人的にはランク戦をeスポーツ感覚で楽しんでいるのだが、まあ、なんだかんだで勝利という結果を残しているから文句は言えない。

遊真の場合は伸び伸びとやってたら勝手に成長するから心配は要らない。

「お前、弟相手に結構辛口なんだな」

「逆だ、むしろ正当な評価を下しているんだ。下手に過剰に持ち上げれば痛い目を見る……見るなら見てこい」

「あ、おれは防衛任務あつから今日はここまでな」

米屋はランク戦を見に、出水は防衛任務があるので分かれた。

私はランク戦には興味は無いので部屋に引きこもって勉強……と行きたいところだが、部屋に引きこもって勉強するよりもボーダーの飲食が出来る休憩のスペースを使って勉強をしていたら良いことが起きるとサイドエフェクトが言ってくるので休憩のス

ペースで勉強をする。

「やあ、勉強熱心だね……弟の舞台を見に行かないのかい？」

勉強をしていると唐沢さんがやって来た。

案の定と言うべきか弟の晴れ舞台を見に行かない事を気にしているのだから手い具合になんとかやるのを信じているので見に行かない事を伝える。

「そういえばなんですけど、ボーダーの学力向上に関してはどうなっていますか？」

「ああ、その事なんだが学習塾との契約が上手く行った。来年辺りから本格的に始動する事が出来る」

防衛任務を理由に学校を休むボーダー隊員、学校側も補習などで上手く誤魔化しているが限界と限度と言うものがある。

米屋とか別役みたいに学業が残念にも程がある隊員とかにボーダー推薦の枠を使われたら真面目に勉強をしている人に対して色々失礼だ。

「学校の授業が遅れる代わりに学習塾が課題を出す形式に変わる。高校生までのボーダー隊員は学力テストの結果次第で課題を出すか出さないかを決める」

「そうですね……因みにですがその課題の結果が酷いけどボーダー隊員としては優秀な人だったらボーダー推薦の枠を使うとかはやりませんよね？」

「それは……ボーダーを理由に学業が疎かになる事は少しだけ致し方ない事だと私は思

う。誰も彼もが君や嵐山くんの様に文武両道を貫く事が出来るとは限らない」

何事にも例外があると唐沢さんは馬鹿に推薦枠を使う事に關して言ってくる。

太刀川さんと言う悲劇を生み出し、今後は遊真で色々と悲鳴を上げる未来はサイドエフエクトを使わなくても見える。

「何時かはボーダーが過去に拉致された人を救うと私は思っている。そうなったら受け皿を準備しておかないといけない……ボーダー隊員の学力向上のため学習塾と提携させるだけじゃない。連れ去られた子達が帰ることが出来た際に元の道に戻りたいのなら戻らせる事が出来る様にしておかなければ」

「耳の痛い話だな、ボーダーは過去に何度も遠征している。その度に色々と成果を出してはいるものの過去に連れ去られた人を取り戻した一例は無い。今度の遠征は攫われたC級隊員を助けに行くのであつて過去に襲撃してきた国を調べる事ではない」

「ええ、全く残念な事ですよ……だから受け皿が無い。仮にあつたとしても貴方達にとって都合のいい存在になる。それだけはあつてはならない事だ……ボーダーに一般教養を指導する人にある人を推薦しておきますのでなにとぞよろしく願います」

布石は打てる内に打つておく。

千佳ちゃんが友達を連れ戻した際に、隣児さんが帰ってきた際に果たさなければならぬ役割を用意しておく。帰ってきてボーダーにとって都合のいい存在になるのは困

る。

「報酬は既に充分過ぎるほど頂いている。少なくともこの数千万円はボーダーにとって破格の出資額だ」

「ある人から貰った種火を元に売買ゲームで倍増させた……元々この為に使うと決めていた事なのでお礼を言われる事じゃありませんよ」

ボーダー側からすれば数千万円は破格の出資だろうが、全ては帰ってきた子達や隣児さんの為だ。お礼を言われる筋合いは無い。

唐沢さんに帰ってきた人達が元のルールに戻れる様になればそれでいいと意思を示すと唐沢さんは去っていった。

「三雲か？」

「三輪か……テスト前の勉強中だ。ボーダー云々は一旦置いといてくれ」

唐沢さんが去って数分後に三輪がやって来た。米屋が今頃ランク戦を観戦しているのでランク戦に興味は無いのか見に行っていない。

私が素の状態で此処に居るのを意外そうな顔をしているのでテスト前の勉強をしている事を教える。

「陽介は？」

「B級ランク戦を観戦している………終わり次第、こっちに来るようには言ってる」

米屋がこの場に居ないのでランク戦を観戦している事を教えると「はあ」とため息を吐いた。

赤点ギリギリどころか赤点も普通にある米屋は呑気にランク戦を観戦している場合じゃない、来週のテストに備えて勉強をしないといけない。一応はこつちに来いと言っているのだから後で来るだろう。

「ランク戦はしないのか？」

「テスト前だ……まあ、米屋が息抜きに一発やろうと言ってくるからそこぐらいで後は普通にテスト前の勉強をしておく……ソロランク戦をしたいのか？」

「いや……俺も一緒に勉強をする。学年末テストの課題は何処からだったか？」

「国語はここからで、数学は……」

三輪もテスト前だから一緒に勉強をしてくれる。

「そういうえば三雲、お前はどうかやって上を目指すつもりなんだ？」

「上か……その辺りはまだ未定だな」

一緒に勉強をしているのだが黙々とやっていると言いき詰まってしまう。

三輪が行き詰まらない様にと話題として出したのは私が今後どうやって上を目指すのか、打算がついているのかどうか聞いてきた。

「あの時の国は何処の国なのかまだ判明していない。だがコレから人型の近界民は沢山

やってくる……あの時の国が何処の国なのか判明するのは時間の問題だ。俺は復讐を果たす……お前は俺の復讐の共犯者になるんだろう。だったらちんたらやってないで上を目指せ。少なくともお前は色々と恵まれているんだ」

「……私が隊長？……ガラじゃないな」

上を目指さないと遠征に行くことは出来ない。

三輪の復讐の共犯者になる事は出来ないのは非常にマズいこと……と言えどもまだまだ時間はある。オペレーターを見つけたりしないといけない。

「それを言うなら太刀川さん達もだ。俺だって隊長に相応しい顔じゃない。嵐山隊の様に外受けがいいわけでも東さんの様に優れた指揮能力を持つているわけでもない」

「第一、オペレーターがな……彼女にオペレーターになってと言うわけにはいかない」
特に迅には見られたくない。

アイツはボーダーがこの街にやって来たせいで色々と悲惨な目に遇っている。迅が要らぬお節介を焼いてしまえばそれこそ激怒する……いや、そもそも私がボーダーに入った事自体怒っている。

「私がーから部隊チムムを作って上に上がるのはありかなしかで言えばなしだ。自分で言うのもなんだが私は扱いづらい……サイドエフェクトがあるせいでオペレーターの指示とかほぼ要らない」

数km先は余裕で遠視出来るし、サイドエフェクトで電磁波等が見えるのでリーダーに映らないのかもほぼ無意味だ。

オペレーターは飾りだけのオペレーターになる……まあ、私一人で勝てるほど流石に部隊でのランク戦は甘くない筈だ。

「となると太刀川隊か……二宮隊」

「ああ、二宮隊は無理だ。私が色々とやらかして二宮隊は向こうからNGをくらう」

遠征に行くことが出来る僅かな可能性を持っていて尚且つ城戸派な部隊を上げるのだが二宮隊は無理だ。

上にスカル云々が私だとバレたが二宮隊にその話を通じているかどうか……仮に知らなくても私は言ってしまうのだろう。となると……太刀川隊がベストだろうが太刀川隊にはお荷物が居るので無理とか言われそうな雰囲気醸し出しているんだな。

「お前、二宮さんになにをしたんだ……」

「私も色々と裏で暗躍している、聞いてもはいそうですかと答える事は出来ない」

スカル云々は言っただけはいけない事なので言わない。

三輪は察してくれてそれ以上は深くは追求してこない。

「三雲、ランク戦しよ……げえ!?!秀次!?!」

「陽介、テスト前に随分と呑気なものだな……」

「トリガー起動」

自分のポジションやスタイルを見つける事は出来たのかと色々と話し合っているとランク戦が終わったのか人が流れ込む。

米屋は私を見つけると早速ランク戦を挑んでくるのだが三輪が隣に居るのでシェーのポーズを取る。古臭いが今の米屋にはピツタシのポーズだな。とりあえず今から人が多く増えるのでトリガーを起動して謎のマスクマンになつておく。

「みく——っ、マスクマン、ランク戦をやるうぜ！さっきのランク戦を見たらオレもバトリたくなつちまつた」

「【私は1日1本主義だ……今日の1本を今ここで消費していいのか?】」

「……細かいことは気にすんなよ」

「【いや、細かくはない。私の流儀みたいなものだから、コレばかりは譲れない】」

1日1本にすることで技のキレや即座の判断能力を高めている。

何度も繰り返し返す事が出来るのは良いかもしれないが実戦では失敗が許されない。実戦を想定して1度のミスも許される事は無い……油断するとランク戦をeスポーツ感覚に走る自分が居るのを自覚しているから制限しておかないと。

「次のランク戦は遠距離、中距離、近距離の三拍子が全員揃つた三つ巴な混戦で……村上先輩が出てくる。白チビは悪くはないが村上先輩にはサイドエフェクトがあるからな、

どう化けるのか見ものだけ」

「那須隊と玉狛第二と鈴鳴第一か……玉狛第二にステージ選択権は無い。此処からは自分の素の実力が言う」

そして確立された個の力を玉狛第二で持っているのは現状遊真だけか。

私が余計な事をしなくても雑にやつても玉狛第二は中位を安定して狙う事が出来る……さて、どうしたものか。

第99話

2月6日、木曜日。

テスト前なので色々詰め込んでいる。普段から勉強しているので赤点は無いと思う方が一等があるので入念に抜かりなく勉強はしておく。

「起立、気を付け。礼……さようなら」

テスト前なので色々授業は纏めに入っている。

部活動は当然無しでボーダーも防衛任務のシフトを入れない様に上手い具合にフォローをしている。例えばテスト期間をズラすとか。去年はバレンタインの後に学年末テストをやったが今年は前倒しをしてバレンタイン前に学年末テストがある。ボーダーも一応は学生生活を考慮している。

今日も授業を終えて帰りの挨拶をしたのでさっさと帰る。部屋でテスト前の勉強もしておきたいが、それよりもボーダーに貸し与えられている部屋に帰った後にトリガーを起動して例の謎のマスクマンに換装する。

「今日はお出でくんだな」

ボーダーのソロランク戦を行うブースに向かうとカゲさんと鉢合わせする。

昨日はソロランク戦をするつもりは無く素の状態でボーダーの休憩スペースでテスト前の勉強をしていた。今日は普通にソロランク戦をするつもりだ。ただあんまりやり過ぎるとランク戦を遊びだと思ってしまう自分が居るので何事も程良くだ。

「やるぞ、隣の個室に入れ」

「了解です」

勉強も大事だがボーダーのトリガーに馴れるのも大事な事である。

カゲさんに絡まれたので早速ランク戦を受ける事に。私のポイントはカゲさん同様に少ないので部屋番号を覚えておかないと全く見知らぬ誰かに当たる可能性がある。

「今日はレイガストか……とろとろやってんならぶつ飛ばすぞ」

「まあ……お手柔らかに」

今日のメインのトリガーはレイガスト……カゲさん相手だと射手はまず相手にならない。自身の技量の問題もあるがカゲさんは機動力が高い。

動きに迷いが無いのもあって、弾を出してから弾道処理するのにどうしても一手必要になる。カゲさんにとってその一手はどうぞ殺してと言わんばかりのものである。

『ソロランク戦1本勝負、開始』

「じゃ、先ずは軽く」

「っ!!」

カゲさんが飛び出して来るのはサイドエフェクトで予測する事が出来る。

どの様な形で飛び出してくるのか見えているのでシールドを飛んだ先に出現させて邪魔をするとスコープオンを伸ばしてくる。コレはスコープオンを組み合わせることで通常の倍の射程になるスコープオン＋スコープオンの合せ技、マンティスだ。

攻撃が来るのは分かるのでレイガストをシールドモードに切り替える。それと同時にカゲさんの進行を邪魔したシールドを消す。

「(こ)りや厳しい」

一歩も間違いは犯してはならない。一手でも間違えれば負けてしまう。負けは死に直面している私にとって負けることは許されない。

マンティスをレイガストのシールドモードで防ぐとカゲさんは聞こえるレベルで舌打ちをしてくる。コレで倒されたら洒落にならない。

「スラスト^オ起動」

カゲさんの手が終わったのだと判断したのでレイガストのシールド突撃で突っ込んでいく。

カゲさんは少しだけ驚いた電磁波を出すのだが直ぐに冷静になりシールド突撃を迎え撃とうとするのだがそのせいで足元への意識が疎かになってしまう。カゲさんは一

歩後退しようとするので後退先にグラスホッパーを展開、更には頭上にも展開して例えるならばバスケのボールのドリブルの様に上下に激しく揺らされてそのままシールドの突撃を受けてしまい間合いを詰められてしまう。

「掴んだ！」

カゲさんの肩をシールドモードで包み込んだ。

カゲさんが使っているトリガーはスコープピオンなので何処か特定の部位を破壊しても変なところから攻撃が飛んでくる可能性がある。油断はならないともう一度、スラストを起動してレイガストを手放すとカゲさんはレイガストのスラストに引つ張られていく。

「アステロイド」

此処からは余計な事はしなくていい、シンプルなトリオンの暴力に走ればいい。

アステロイドを作り出し大きく分轄して威力に数値を割り切ったアステロイドを飛ばすとカゲさんはシールドを展開する。私のトリオン能力は千佳ちゃんに劣るとはいえかなりどころか滅茶苦茶優秀、真の力を発揮すればそれはもうとてつもないものだろう。

カゲさんはシールドを出して防ごうとするがあっさりと私のアステロイドがパリンと割ってカゲさんを貫いた。

「くそっ……ちまちまかと思えば力技かよ」

カゲさんは個室内に転送された。私も無事に勝利を決めたので個室内に戻る

「……………ふう……………カゲさんは強いな」

勝ち星を得ることは出来たものの油断は出来ない相手だ。

カゲさんは直ぐに学習する。村上さん程とは言わないが直ぐにさつきやった手段が通じない可能性がある。そもそもで感情受信体質があるので飛んでくると分かっても避ける事や防ぐことが出来ない系の攻撃をしなければ……………トリオンによるゴリ押しは自身の戦闘スタイルにするのは良いとしても参考にしてくださいとは言いがたい。

「もう一本、いいか？」

「え〜」

「一本だけでいいんだよ。今度お好み焼き奢ってやるからよ」

「【分かりました】」

私ってつくづく甘い人間だな。カゲさんはもう一本要求するので承諾すると再びラック戦を行う。

市街地と思わしき仮想空間に転送されたのでレイガストを取り出すとカゲさんは早速飛びかかってくる。イケイケドンドンな戦法……………嫌いじゃねえけども真似するのは難しいな。カゲさんは既に確立された個の力を持っている。カゲさんだから好き勝手

に出来ている感じがあるな。

「逃げる！」

「逃げんじゃねえ！」

堂々と戦闘をするだけでは芸が無い。カゲさんに背を向けてグラスホッパーを展開してカゲさんと大きな間合いを取る。

カゲさんのトリガー構成の中にグラスホッパーは無い、追いかける事は出来ても追い付くことは不可能だ。マンティスがあるので間合いは20m以上開いていないと意味はない。

「このタイミングで、スラスター起動！」

一本道に出る事に成功した。

照準をカゲさんに合わせてレイガストをブレードモードに変化させブレードをV字の形に変形させ、スラスターで推進力を与えて投擲する。

感情受信体質があるカゲさんは強化視覚を持っている私が何処目掛けて投げたのか分かるので直ぐにシールドを展開しつつ回避する。ただ普通に回避しているならばアステロイドを使って狙い撃ちをすればいいだけだがシールドを出しつつの回避だから、当てづらい。

「全く、強いな」

グサリとレイガストはカゲさんに刺さる事はなく地面に突き刺さった。

シールドを展開していたカゲさんはもう大丈夫だと判断したのか全速力で此方に向かいつつスコープオンを構えてくるのでアステロイドを展開する。カゲさんの表情が乏しくない。私がアステロイドを当てに行かないのに気付いているが避けなければ当たるぞとさつきとは逆の細かな弾を撃つておく。カゲさんは避けながら突っ込んでくる。

「スラスト^{オン}起動」

突っ込んで来るならばそれはそれで対処する事は出来る。

レイガストを一旦消してもう一度手元に出してナイフほどの大きさにブレードの形を変化させてカゲさんに突っ込みカゲさんを切り裂いた。

「……………」

二本目もなんとか取ることが出来た。

自身のサイドエフェクトに頼っているところがややあるのでマニュアル作りには向いていないと思いつつランク戦を行う個室内から出る。

「よお、見ないから部屋で引きこもって勉強してると思ってたわ」

個室を出てソファアや椅子があるスペースに向かうと米屋がいた。

紙パツクのジュースを片手に面白いものがあるなどランク戦を見ていた。

「米屋先輩、この人は？」

「おお、そういやお前はこの姿だとはじめて会うな。三雲だ」

「【謎のマスクマンだ、決して三雲とは呼ばないでくれ】」

三輪の部隊で唯一の年下である古寺と遭遇する。

古寺とは面識はあるもののボーダーの本部で会うのは初なので米屋が軽く紹介してくれるのだが一応は謎のマスクマンと言う設定で通しておきたい。

「【それでなにを見ていたんだ？】」

何時もならばランク戦をして燃えているところだろうがランク戦をしていない。

面白い試合でも見ていた観戦モードに入っており「アレ見ろよ」というので指をさした先に写っているモニターには遊真と緑川が居た。成る程、2人はランク戦をしてバチバチと盛り上がっているのか。

「あくダメだ。やればやるほど遊真先輩との差を感じるよ」

「ふっ、緑川も成長してきているな」

「よお、見ていたぜ。中々に悪くない勝負だったぜ」

遊真と緑川の戦いは終わり、個室から出てくる。

勝敗は21対9、10本やって3本だけ緑川が勝っている……実際のところは違うのだが、大体勝率が3割、A級のエース相手に勝ち越ししているので遊真は桁違いに強い。

ランク戦を観戦していた人達も緑川相手に7勝とかマジかよと言った視線を向けている。

「つて、ああ!?!」

「どうした緑川?」

「マスクマンが居るじゃん!なんで?!」

「つむ……誰だ?」

「謎のマスクマンだよ。基本的に1本しか相手してくれないけど滅茶苦茶強い奴が居るって噂になってるって双葉から聞いたよ!!」

ホントに居たんだと視線を向けてくる緑川。

遊真はジツと私の事を見つめてくる……此処で私だと言えばそれで終わるが謎のスクマンという設定を押し通しておきたいので余計な事は言わない様にして置く。

「【どんな感じの噂になってるんだ?】」

「A級やマスタークラス相手にバチバチにやりあえる謎のマスクマンでちよつとした話題になっているぞ」

ボーダーって暇な組織なの?今ランク戦の真っ只中だったのに、よくわからない謎のマスクマンに夢中って……まあ、いいか。

「空閑、此処に居たのか」

「お、修。もう用事は終わったのか？」

「うん。終わったよ」

この後どうしようかと考えていると修がやって来た。

用事でやって来ていたらしく、その用事が終わったので遊真を迎えに来た、そんな感じなんだろう。

「白チビ中々にやるぜ。緑川相手に勝ち越した」

「緑川も筋は悪くないぞ」

「そう、か……」

「緑川を相手に遊真は勝ち越す事が出来ている。だったら次のランク戦も安心して……なんて甘えた事を考えていると手痛い目に遭うぞ」

「……なにやってるの？」

お、流石に修は気付くか。

緑川相手に勝率7割の勝ち越しをしているのでホツとしている反面、このままで大丈夫なのだろうかと心配している。上手く行き過ぎている時ほど大丈夫かどうかの疑う心を持ってしまう……まあ、それぐらいに慎重派なのはいいことだ。本番で万が一が起こつても対処する事が出来ないとか割と冗談抜きで洒落にならない。

「私も私なりに出来る事を探しているんだ。ただ普通にボーダー隊員をやっているも

代えが利く駒の1つじゃ意味が無い」

「だからマスクマンになってるんだね……」

私がマスクマンになっている事に関して微妙な顔をしている修。

もつと他に色々あるだろうと言いたげだが普通にやったとしても意味はない。

「緑川、ちょうど良いところに居てくれた」

「あ、村上先輩！」

「お、来たか」

「？」

とりあえずランク戦を挑むべきかと考えていると村上さんがやって来る。

緑川が居たのでちょうど良かったと言う……視線の先には遊真が居る。

「次のランク戦、スコープピオン使いが相手だからお前で予習しておきたいんだが」

「いやあ……ついさつきポイントを搾り取られたばかりなんで勘弁してください」

「えっと、この人は？」

「ん？メガネボーイは初対面か。この人は村上先輩……鈴鳴第一のエースで攻撃手4位のボーダーで7人しかいない10000点を超えている攻撃手の1人だ」

村上さんと初対面なので米屋に説明を求めると修は驚く。

攻撃手4位、カゲさんを考慮してもボーダーの攻撃手の中で5本の指に入ると言っ

もいい実力者……持っているサイドエフェクトも中々にチートなものだ。

「鈴鳴第一といえれば次の対戦相手か」

「そういうことだ。マスタークラス並のスコアピオン使いが出てきたって聞いたから、予習をおきたいんだが……ダメか？」

「ダメです。これ以上ポイントを搾り取られるとガクンとします」

「じゃあさ、おれと勝負しようよ。10本勝負」

「空閑……」

「大丈夫だって、オサム。おれに任せとけ」

今ここで戦うのは手の内を曝け出すのも同然だ。

相手に手の内を曝け出すのは危険な行為だが遊真は大丈夫だと村上さんに10本勝負を提案するのだが村上さんは5本を終えたら15分の休憩を挟んでいいかどうか尋ねてそれでいいと遊真は承諾する。

「空閑が勝ち越してる」

ランク戦を外から見物する。

遊真が上手く村上さんから勝ち星を得て4対1と上手く勝ち越している。修は4位を相手に上手く戦える事が出来ている、コレならば次のランク戦も安心して戦える……というのは心の贅肉、隙である。

「まあ、見とけよメガネボーイ。村上先輩の本領はここからだ」
此処から15分の休憩に入る。

たった15分でなに出るのかと修は考えている。流石にサイドエフェクトを持つているという答えには辿り着かず、あつという間に15分が過ぎてランク戦が再開され……遊真は1本も取れず結果は6対4で村上さんが勝ち越して10本勝負は村上さんの勝ちに終わった。

「村上先輩は強化睡眠のサイドエフェクトの持ち主だ。1回寝て起きれば学習した事が100%反映される……5本の勝負で白チビの戦闘を学習して後の5本を勝ち越した。白チビは強えのは認めるけど、それだけで上に行くことは先ず無理だぜメガネボーイ」
ボーダーの先輩としてアドバイスを送る米屋。

村上さんと遊真が出てきて遊真は修に「すまん。負けた」と軽く平謝りをする……ホントならば勝てなくもない場面があったが手の内を全て晒すわけにはいかないから一部手を抜いていた……のを修は気付いていないだろうな。

「マスクマン、お前とも勝負してみたかった」

「私は1人に対して基本的には1日1本しか勝負しませんので学習は出来ませんよ？」

ランク戦を多くこなして睡眠学習をする村上さんに対して私は1本に極限にまで注

ぎ込む、謂わば相反するスタイルだ。

確かにランク戦を多くこなしていけば成長する事は出来るが……それだと意識が緩くなる自分が居ると自覚している。

「だったらオレ達とやった後に村上先輩がランク戦をすればいいんじゃないやねえか？」

今日やれば明日にならないとやるつもりは無いと意思を示すと米屋が提案してくる。

オレ達と言うことは他にもと緑川や遊真に視線を向けるとやる気満々だった。まあ、それでいいのなら構わないと意思を示すと早速米屋とソロランク戦をし、軽く一本もぎ取り続いて緑川、遊真と一本ずつもぎ取っていく。

「流石は兄さんだ……空閑や緑川、それに米屋先輩を相手に一步も引けを取ってない」

「[こんなところで負けたらいけないんでな]」

遊真達を相手に当然の如く勝利する私に流石だと言ってくる……もつと言ってもいいんだぞ、修。

若干天狗になっているところはあるものの、兄として褒められるのは決して悪い気分じゃない。むしろ良い気分だ。

「成る程、これは一筋縄じゃいかないな」

村上さんは私の戦いをしっかりと見た……そして15分間眠りについた。

村上さんはコレで異常なまでにパワーアップをしてくる。強化視覚のサイドエフェ

クトを持っている身としては羨ましい。いや、確かに私のサイドエフェクトは便利で色々と出来るが強化睡眠は万能型のサイドエフェクトだ。ダメージメモリでありがたく利用させてもらっている。

『ソロランク戦1本勝負、開始』

仮想空間に転送される。

さてと、米屋はともかく緑川と空閑はスピーディな戦闘スタイルだ。対して村上さんは……ガンダムスタイルだ。とりあえずレイガストをシールドモードにしてアステロイドを出現させる。

「アステロイド」

散らす様に撃つ事は出来るのだがとりあえずアステロイドを撃つ。

威力に割り振ったアステロイド、私の目測が正しければこの距離でこの弾速でこの威力が一番最適な筈だ。村上さんはレイガストを構えてシールドモードに変形し、シールドで防ぐのだがレイガストのシールドにヒビが入る。

これはまずいと感じた村上さんは直ぐに前に出て私を倒しに行く。ちんたらやっているとアステロイドの波にやられてしまう。私はレイガストをシールドモードからブレードモードに切り替える。

「それは見ていない……が、雪丸レベルじゃないなら対処する事が」

ブレードモードでの戦闘はそんなに見せていない。村上さんが対応する事は出来ないが村上さんには今まで積み上げてきたものがある。

村上さんは弧月を降ってくるのでレイガストで受け止めてレイガストのブレードをdの形に変形させて弧月の動きを封じると村上さんはレイガストをブレードモードに切り替える

「スラストー、お!?!」

スラストーの勢いに身を任せて斬りかかろうとする村上さんだがそれも見えている。

腕の部分にシールドを展開してスラストーの進行を妨害する。スラストーの起動自体は成功しているのでも村上さんは変な体制になりバランスを崩してしまい、当然その隙を私は逃さない。d字に固定していたレイガストのブレードを元の修が使っている形に変化させてバランスを崩している村上さん目掛けて突っ込む

「スラストー起動^{オン}」

ダメ押しとスラストーを起動して推進力を増す。

村上さんは綺麗にバツサリと斬られ、このソロランク戦は私の勝ちに終わった。

「もう一本、ダメか?」

「ダメです。基本的に1日1本にしておきたいので」

油断すると気が緩むので連戦はしない。次があると思ってしまう気が緩む。村上

さんのワン・モアプリーズを断る。

ソロランク戦を行う事が出来る個室を出て修に顔を合わせる。

「テクニックを極めるところこういう事も出来るようになるぞ」

「……スゴいな、兄さんは」

「ふつ、もつと褒めてもいいんだぞ……と言いたいが、サイドエフェクトの恩恵があつたから出来る技やトリオン能力に身を任せてやっている部分もあるから手本にはならないな」

普通の隊員が真似出来るような技術なんかを開発しないといけない。

サイドエフェクトやトリオン能力によるゴリ押しは手本にはならない……困ったものだ。

第100話

「綱さんに負けたあ!？」

貴虎がボーダーで無双を繰り広げたその日の夜のこと。

玉狛支部に戻った遊真は師匠である小南に村上と戦い6：4で負けた事を報告した。

「ちよつと、大丈夫なの？あんな負けちゃったら上に上がるの難しいじゃない」

「いや……まだこつちも手札は残してるし、向こうも全力じゃなかったから勝負はこれからだよこれから」

遊真は負けてしまったけれども後悔はしていない。

まだ本気じゃなかった、本気で勝ちを取りに行けば勝てる場面が幾つかあったのだが無理にガッツイテ勝利を得ても学習されて対処される。そう判断したので遊真はまだイケると僅かばかりだが余裕を持っている。

「オサムのお兄さんともバトルしたぞ。1本しかやってくれないから本気でやったけど勝てなかった」

「修の兄貴とも戦ったのね、って負けたの!？」

「ボーダー支給のトリガーで戦って負けた……なんというかオサムのお兄さん、不気味

だった」

「不気味？」

「なんか全部分かってるみたいだった。奇襲を仕掛けてみてもフェイクを入れても全部対処された」

「まあ……兄さんだからね」

強化視覚のサイドエフェクトを持つている貴虎に素早い攻撃やフェイントは殆ど無意味に近い。

何処から攻撃してくるのか、重心の上手い動かし方など色々で見抜く目を貴虎は持つており、兄ならば出来なくもないと修は納得している。

「メロンくんは色々ズルしてるからな……下手したら鋼よりも成長速度が早いぞ」
「ズルってアイツが持つてるトリガーは基本的には使わない様にしてるでしょ？」

「うくん……コレは言うべきことじゃないから教えられないから……悪いな、小南」

貴虎がやっているチート染みた裏技に関して色々知っている迅はなんとも言えない微妙な顔をしている。

流石に貴虎が村上の姿になり強化睡眠のサイドエフェクトを再現して物凄い速さで成長して行っているとは言えない。貴虎の持つDのトリガーはそれほどまでに凄まじく危険性を孕んでいるとんでもないトリガーだから表に出すわけにはいかない。

「それでどうするの修?」

頼みの綱とも言うべき遊真が勝つことが出来ない相手が出てきた。

作戦を練ろうにも今回のランク戦のステージ選択権は修達玉狛第二ではなく那須隊が持っている。此処からは素の実力や完成されたり確立された個の力を持っているボーダー隊員が多く犇めく。玉狛第二の使えるカードは現状遊真と千佳の大砲のみ。

「……僕が点を取れる様になれば……」

「……それがホントに正しいと思ってるの?」

「え?」

自分が遊真の様に点を取ることが出来れば遊真や千佳にかかる負担を軽減する事が出来る。

今以上に強くなるしか道はないのだと考えるのだが母はそれでいいのかと疑問を投げかける。

「ランク戦はスポーツじゃないけど、チーム競技のスポーツは確立された個の力があつてこそ上に上がる事が出来るもの。修がやろうとしている事は基本的な性能を上げるだけで修が修らしい修の色を持っていないわ」

強くなるのは良いことだ。だがただ強くなるのなら意味は無い。

修の持つ修だけの個性を發揮しなければならぬ。母はそれに気付いている

「僕らしさってなんだろう……」

「さあ？ 少なくとも修は全てを試したわけじゃないわ。気付いていないだけで強力なコンボになるトリガー構成があつたりするんじゃないかしら」

「かしらってそんなまた無責任な」

「でも、オサムのお母さんが言ってる事にも一理ある。オサムらしさを何処かで発揮しないとその辺の雑魚兵がちよつと強くなるだけで……ハッキリと言えば足手まといだ」
何かあるのかは分からないけれどもきつと修らしい戦闘スタイルが存在している。

遊真や母はそれを見つける事が今後の課題といい、迅もウンウンと頷いている。迅が否定しないと言うことは自分が気付いていないだけで自分にしか出来ない戦闘スタイルが存在しているのだろう。

「まあ、点を取れるようになる事は決して悪いことじゃない。点を取ることが出来る射手ならアテがある。話は通しておくから色々教わってこい」
シューター

その一方で点を取ることが出来ればという話を忘れない。

烏丸は携帯を取り出し元チームメイトである出水に連絡を取り、修の事を任せたいと出水相手にアポを取る。

「えっと、太刀川隊の隊室は」

翌日2月7日（金曜日）

修はボーダー本部に足を運び入れ太刀川隊の隊室を向かおうとするのだが道に迷ってしまう。ボーダー本部は無駄に広すぎるせいか馴れていない人にとっては迷路に近い物。

「その君、ここぞなにをしてるんだい？」

何処だったかと思っていると太刀川隊の隊服を着た1人の男性が現れる。

「太刀川隊の隊室を探しているんですけど」

「ほう？太刀川隊になんの用だね？言っておくが1、B級の隊員を相手にしているほど暇じゃないんだ」

「え、烏丸先輩が出水先輩に話は通してあるって」

「烏丸、烏丸だど!?あんな顔だけの貧乏人の紹介で来たと言うのか!!」

烏丸の名前を出すと露骨に嫌な顔をしている。

この人は太刀川隊の隊服を着ているけれども誰なんだろうと考えていると出水が現れ、男に向かつてとび蹴りをくらわせる。

「人のお客さんを勝手に帰らせようとしてんじゃねえぞ、唯我!!」

「い、出水先輩!こんなのを相手にしなくてもいいじゃないですか」

「アホか!お前の相手をするよりメガネくんの相手をしておいた方が何万倍も有益に時間を使える。むしろ邪魔だ、お前は」

「ひ、酷い！人権侵害だ！弁護士を用意してくれ！」

「るせえ、親の七光りが……悪いな、メガネくん」

「えつと……この人は？」

「唯我尊、うちのお荷物だ」

「酷い！僕だつて太刀川隊の一員なんですよ！」

「いや、お荷物だろう」

「なんだなんだ。お客さんが来たのか？」

出水と唯我が言い争っているとどら焼きを口にほうばっている太刀川が現れる。

唯我は自分の事をお荷物だと言ってくる出水に対して抗議をしているのだが太刀川は説明する。太刀川隊のエンブレムは3つの刀に三日月が書かれている。

「三日月は国近で1つ目の太刀は俺の弧月、2つ目の太刀は出水、そして3つ目は……俺のもう一本の弧月だ」

「ガーン!!」

「お前はこの隊のエンブレムに関わっていない……お荷物である事には変わりはないんだ」

「そ、そんなあ……」

「それよりもお客さんが来てるんだから饗さないよ。唯我、ジュース買ってこい」

「ジューズってあんな人工甘味料塗れの物を買うんですか？」

「あ、コレつまらないんですが」

「おいしいトコのどら焼きじゃん。悪いな」

とりあえず太刀川達と顔を合わせる事が出来て無事に隊室に案内してもらえらる。

修は手土産として持って持ってきたどら焼きを太刀川に渡し、太刀川隊の隊室に案内してもららう。

「こうしてメガネくんとちゃんと向かい合うのは……あの時以来だな」

「そうですね……今日はわざわざ時間を作っていただきありがとうございます」

「いいっていいって、お前の兄貴には色々世話になつてるし悩める射手シューターに道を示すのも先輩の役目だ……で、なにに対して相談しに来たんだ？」

「実は……」

修は話す。

遊真に頼り切った状態でなんとかB級中位にまで向かう事が出来たが此処に来て頼りにしている遊真が勝つことが出来ない壁にぶち当たった。

B級中位でモタツイている暇は何処にもない。なんとかする為には自分で点を取ることが出来る様になりたいのだと出水に事情を話した。

「うーん、点を取りたいって気持ちには分かるけども難しいぞ？」

「そうなんですか？」

「射手はトリオン能力が物を言うところもあるし、何より連携とか難しい。点を取るこ
とが出来るとは、二宮さんと加古さんとおれぐらいで後は点を取りに行つて取
るつてよりも漁夫の利を得る感じに点を取りに行つてる感じだ」

純粹に点を取ることが出来る射手は難しいと出水は語る。

射手のトップ3ぐらいが点を取る事が出来るぐらいで普通の射手は点を取るのが難
しい、漁夫の利に近い形で点を取ることが出来ている。

「トリオン能力、ですか」

「そもそもで銃手や射手はある程度はトリオン能力を持つてなくちゃやってられないポ
ジションだ。中には例外も居るには居るけどもそういう奴に限つて射手一筋じゃな
かったり変な技能スキルを持つて……メガネくんは射手に振り切つた感じのトリガー構成
じゃないんだろ？」

「はい。レイガストをメインにアステロイドを使つて戦つています」

「あく……となると難しいな。射手としてのテクニクを教える事は出来るけど、ボ
ダーの上位陣でレイガスト＋射手系のトリガー構成をしてる奴は見た覚えがないな。
そもそもでレイガスト自体、雪丸とレイジさんぐらいしか使わないし、二人共想定外の
使い方するし」

修のスタイルの手本になるような人物は残念ながら居ない。

仮に居たとしてもマスタークラスに到達していない凡庸なトリガー使いであり、修の求めているパワーアップをするのが難しい。そもそもで攻撃手と射手を組み合わせた近距離中距離主体の万能手に修は近いのだが、手本となる人が何処にもいない。ボーダーのランク戦を行う部隊に入っている隊員の中でも修は中々に無いトリガー構成をしている。

「僕のトリオン能力的にトリガーのフル構成は無理だと思います」

「メガネくん、トリオン能力どれくらいなの？」

「1から10段階で言えば2です」

「……よく、ボーダーの入隊試験通ったな」

裏で迅が口を聞いてくれたからボーダーに入隊する事が出来たとは言い難い。

ともあれ修のトリオン能力がたったの2、オペレーターの人よりも下手すりや少ない絶望的な数値である。テクニクや技能^{スキル}でカバー云々の話ではない。どうしたものかと出水は悩む。射手としてのテクニクを教える事は出来るが、修と同じトリオン能力でそれを再現する事が出来るかと聞かれればそれは否である。

「お前の兄貴に頼るってのは……無しか」

「はい。ボーダー関連では基本的には兄さんに頼らない方針なので」

似たような戦闘スタイルが出来るであろう貴虎の事を思い出すが、貴虎に頼ることが出来るのならその時点で自分に相談を持ち掛ける事はしない。相談を持ち掛けられて引き受けた身としては丸投げするつもりも無いのでどうしたものかと考える。

「メガネくん、今ポイントどれくらいだ？」

「レイガストもアステロイドも4000点台です」

「あゝ……うっし、決めたぞ。メガネくん、唯我とバトル」

「な、なんですとぅ?!」

「今のメガネくんに必要なのは基礎的な土台だ。空閑におんぶにだっこ状態が嫌ならとにかくソロランク戦をこなしてある程度の実力にまで持っていくしかねえ。唯我はA級最弱どころかB級の中でも弱い方に部類されると言ってもいい。メガネくんの相手にちようどいい」

「そんな！僕をレベルアップの素材みたいに言わないでください！僕もれっきとした太刀川隊の一員なんですよ！」

「だつたらその姿を見せて来いや！」

唯我は出水に蹴られ、隊室を後にする。

隊室を出て次に向かったのは仮想訓練を行える一室、ボーダー本部には何処にでもある一室で住宅街を再現し早速唯我と修は対決をする

「ハーツハツハツハ！ どうやら僕と三雲くんじゃ力の差がありすぎた様だね」

「いや、普通に負けてんじゃねえか」

対決の結果、修は唯我に負けた。

1回だけじゃない、10回以上戦ってなんとか勝ち星を上げる事こそ出来たものの、トータルで換算すれば唯我に軍配が上がっている。修の素の実力はB級の下から数えて直ぐに近いので普通のA級の隊員ならば負けることはありえない。それほどまでに三雲修というボーダー隊員は弱い。

「メガネくん、唯我は基本的に暇だから何時でも来いよ。相手になってやる……出来ればさっさと強くなって凶に乗ってるアイツを引きずり降ろしてくれ」

「は、はい」

「ハツハツハ！ もう一戦どうだい三雲くん！」

「……兄貴の方を召喚した方が良さそうか？」

大分調子に乗っている唯我にお灸を据える意味合いを込めて兄を召喚するべきかと悩む。

原作を知っている貴虎は少しだけ時計の針が速く進んでいる事に薄々気付いており、唯我と対面すれば完膚無きまで叩きのめす可能性はあるにはあるのだが本日貴虎はボーダーのランク戦を行うブースに足を運んでいない。テスト前の勉強もある程度は

出来ているのでやっていない。では、何をしているかと言えば

「……違うな」

宝くじ売り場にやってきていた。

最大100万円を当てる事が出来るスクラッチの宝くじに挑戦しており、サイドエフェクトをなんの躊躇いもなく発揮して何処に当たりのくじがあるのか探していた。

隣児から貰った種火は売買取ムで数千万円に変化させた。それを唐沢に提出したので種火になる金が殆どない。大規模侵攻での報奨的なのは貴虎はボーダー隊員ではないので貰っていない。

「あ、これください」

色々と探りに探つて遂に見つけ出した当たりくじ。

貴虎数百円支払いスクラッチくじを購入すると見事100万円を当てる事が出来た。早速近くの銀行に向かつて100万円を受け取り、売買取ムに使っている銀行口座に振り込んだ。

「ボーダーの学力向上は学習塾と提携する事でなんとかなる。過去に攫われた人を連れ戻す事に成功した際の社会復帰の土台作りは着実に出来ている……後は連れ戻すだけ」
貴虎は本音を言えば修に色々と答えを教えたい。修が修らしさを出すことに出来る戦い方を原作知識等で知っているから。

しかしただ普通に答えを教えても意味はない。修の血となり肉となる方法で修のスタイルを身に着けておかなければならぬのを知っているから。

「ん、出水からか……もしもし」

『よう、今何処にいるんだ？』

「銀行で色々やってている。レポート形式の課題は手伝わないぞ、アレは自分でやってこそ意味がある」

『いや、そつちは大丈夫だ……お前の弟が、メガネくんがやって来たよ』

「……そうか」

「ここにきて貴虎は時計の針が速く進んでいる事を知る。しかし時計の針が速く進んでいる事は決して悪いことではないので驚きはしない。

『随分とあっさりとしてるな』

「修は他人にものを教わった方がいい段階だからな。どうだ？」

『クソ弱えよ。うちの部隊のお荷物相手に勝ち越す事すら出来なかつた』

「そこまでののか……」

『けどまあ、考え方を変えれば伸び代はまだまだあるって事だ。唯我の野郎と交換したいぐらいだ』

「修は修の部隊を率いているんだ、引き抜くなんて真似はするんじゃない」

『馬鹿、冗談だよ冗談……けどまあ、1日2日でパワーアップをする事が出来るかどうかで言えば無理だ。1年じっくりと時間を掛ければA級隊員とやり合う事が出来るようになる』

「そうか……やっぱりどうあがいても無理か」

『ああ、無理だな。トリオン能力が低いけども運動神経抜群とかそういう感じの隊員じゃねえし、マジでなんで入隊する事が出来たかどうか謎だ』

「何処その実力派エリートによる裏口だ……裏口の手を引いたのなら最後まで責任を持つのが筋だと思う」

『やっぱ迅さんか』

修がボーダーに入隊する事が出来たのも玉狛支部に所属する事が出来たのも全ては迅が裏で暗躍しているからだ。

裏で暗躍しているんだから責任を取って一人前になるまで面倒を見ると言う思いは貴虎は持っているが迅は迅で何かと忙しい身で修の面倒を見きれない。貴虎はそれを分かっているのだが一応の責任はあるんだぞと愚痴を零す。

『……お前は見えてるのか？』

「なにがだ？昔、言ったが私は未来は見えていないぞ」

『違いよ……メガネくんは壁にぶち当たってる。時間を掛ければ解決する問題とそうで

ない問題がある。今からB級上位陣とバチバチやり合うのなら普通じゃない手段を見つけないといけねえ……お前、分かっただろ。メガネくんがこれからどうすればいいのかを』

「……結論だけ言えば分かっただけはいる。ただ私が教えたら意味はない……今は試行錯誤を繰り返す時間だ……だがまあ、私はお兄ちゃんだ。つつい弟を甘やかしてしまおうからアドバイスだけを送ってやってほしい」

『結局のところ手を貸すのかよ』

「弟がそれだけ可愛いという事だ……末っ子には分かるまい」

口ではあまり言わないがブラコンの度合いは嵐山とタメを貼れる程に強い貴虎である。

『で、メガネくんが上とやり合うにはどうしたらいいんだ?』

「修はトリオン能力の都合上、トリガーの枠を全て使う事が出来ない……攻撃系のトリガーでなく補助系のトリガーに鍵がある」

『補助系って、エスクードとかのことか?アレは結構トリオンを食うからメガネくんに向いてないぞ』

「だろうな……だが、トリオンが少量でも問題無いトリガーがある筈だ……それと修には勝つことでなく負けない方法を教えてやってくれ」

『勝つじゃなくて負けない方法？どういう意味だ？』

「私から言えるアドバイスはこの2つだけだ。この2つが上手く噛み合えばB級の上位陣とバチバチやり合う事が出来る……修はきっかけを与えて揉まれば伸びる。問題は別にある」

『トリオン怪獣のことか……人が』

「撃とうと思えば撃てるよ千佳ちゃんは……ただまだ覚悟が決まっていないだけだ」

『そう、なのか？』

「言つとくが千佳ちゃんが普通でお前等が異常なだけだからな……まあ、とにかく言うべき事はそれとなく伝えておいてくれ。補助系のトリガーに鍵がある。具体的に言えばスパイダー」

『それ具体的じゃなくて答えだろ』

第101話

私は色々頑張った。具体的に言えば大規模侵攻をなんとか原作よりも被害を少なくした。

しかし拉致被害者が出てしまった……が、それはC級隊員だ。ボーダーに入っているのならばこうなることも覚悟しておけよと思いつつも今回の1番の功労者を……成果であるレプリカをジッと見つめている。

「こんなところになんの用事だ？」

本日は2月8日（土曜日）今日は修達は那須隊と鈴鳴第一とのランク戦が行われる。

修は出水に色々アドバイスを貰い唯我というちよいどいいサンドバッグを見つけた。出水にスパイダーを修が使えばいいとのアドバイスを送っている……ホントならばマンツーマンレッスンしてやりたいが母さんにバレるとなに言われるか分かったものじゃないからな。

『兄殿、ユーマ達のランク戦を見に行かないのか？』

「見に行かない」

『弟の大事な戦いなのだが、いいのか？』

「そうだな……修はまだギリギリ越える事が出来るラインに立っている。遊真に依存した状態だ。私は今後修がどういう立ち回りをすればいいのかを知っている……だから修に極力干渉をしない。私は身内に対してはとことん甘い人間だ。直ぐに答えを教えようとしてしまつて答えに至る段階をすつ飛ばしてしまう……それはいけないことだ」

答えに至る段階をすつ飛ばしている。考える事を止めてしまえば人は弱くなる。

考える事を、試行錯誤を繰り返す段階に修はいる。答えは知つていても言わない。言つてはならない。

「修達のランク戦を見てしまえば最後、私は余計な事を口走つてしまう……答えだけ教えても血にも肉にもならない」

故に修のランク戦を応援はしても真剣に見ない。最初のランク戦で解説を佐鳥に頼まれてよくわかつた。

修に色々とアドバイスを送つてしまう。答えだけを教えてしまう。それだと意味はないのを100も承知している。

「そういうレプリカはどうなんだ？ 保護者として遊真達になにか言うことはあるのか？」

『私の口から語れる事は少ない。少なくともユーマは今の様にのびのびとやっておけばなにも問題はない。今玉狛第二の抱えている一番の問題は……チカだ』

「千佳ちゃんはなにも悪くはない、当然の事だ」

『だが、これからの事を考えれば人を撃つ事が出来るようにならないといけない。トリオン兵を撃つことは出来ても人を撃つ事が出来ないのならば遠征に選ばれない可能性が高い』

「いや……そうだな……」

『?』

千佳ちゃんが居れば遠征艇を大きくする事が出来る。

次の世界に行くために補充チャージしなければならぬトリオンの回復時間を大幅に減らす事が出来るのでむしろ逆、千佳ちゃんを遠征に連れて行った方がいい。原作知識等で色々知っているのだがあまりベラベラと語るのも良くない事なので言わないでおく。

『兄殿は先程からパソコンと向き合っているがなにをしているのだ?』

「株とかFX……頭金を手に入れる事が出来たからな、もう一発大きな金を用意しておく。修達の目的が果たされた時、元の道筋に戻れる様に土台をしっかりとさせておきたい」

とにかく今は金が必要だ。サイドエフェクトを思う存分に利用させてもらい、株やF

X等で種火の100万円を大きくしている。

その気になれば宝くじを当てる事が出来るがあんまりやりすぎると余計なのに狙われたりする。宝くじは禁断のアイテムだ……早く18になって競馬とかの博打が出来るようになればそれでいいんだがな。

『兄殿、それは私でもする事は出来るだろうか?』

「どうしたんだ、急に」

『ユーゴが残した蓄えが沢山あるとはいえ何時かは底を尽きる。今の内にユーマが自由に生きる事が出来るぐらいには蓄えておきたいと……ユーマの今の収入源はトリオン兵の討伐のみだ』

「成る程……だが、株はある程度纏まった種火が必要だ。持っているのか?」

『この前の大規模侵攻の戦功で100万程ある。それで足りるだろうか?』

「充分だ……じゃあ、そうだな」

サイドエフェクトを用いてとりあえず手堅いところから行くか。



「もうすぐ始まりますよ」

レプリカの本体が貴虎と接触しに行っている一方その頃の玉狛支部。

間もなく修達玉狛第二がランク戦を行うのでリビングに茶と菓子を用意される。

「いよいよここからってところかしら？」

今まで遊真に依存した勝ち方やフィールドを選ぶ事が出来るなど玉狛第二にとつて有利な戦いだった。

しかし今回、ラウンド3からは違う。フィールドを選ぶ事が出来ず更には遊真が勝てない可能性を秘めた鈴鳴第一の村上鋼がいる。今までの様に思うようにいかない。ここからが本番だと小南は呟く。

「つて、あれ？多くない？」

ランク戦を行われるのでそれを観戦すべく茶と菓子が用意されてるのだが茶の数が多いことに小南は気付く。

「小南先輩、知らないんですか？三雲さんのお父さんも観戦するんですよ」

「え、そうなの!？」

茶の数が多いことに気付くと烏丸は息を吐くかの様に嘘を付く。

「あの人はこんなヴァイオレンスな光景は見ないわ……烏丸くん、冗談も良いけど大概にしなさいよ」

「す、すみません」

母から放たれる庄に烏丸は屈する。

小南も騙したなーと叫びたがっているが母の無言の圧力になにも言うことは出来ない。

「それで誰が来るの？貴虎は来ないから……迅くん？」

「いや、違いますよ」

「1つだけ多いティーカップを気にする。」

この場に居ないのはレイジと迅でレイジは防衛任務中なので迅のカップかと思つたが迅は今回のランク戦の解説を担当しているのでこの場には居ない。

「連れてきたぞ」

「……」

では誰かという話になる。

お子様S級隊員こと林藤陽太郎は最後の人を……貴虎と相討ちになる形で脱落し、その後置いてけぼりをくらつたヒュースを連れてきた。

ヒュースを見た小南はギョツとした顔をし、すぐ近くに居る玉狛の支部長こと林藤支部長の顔を見る。

「ちよつとボス、大丈夫なの？」

「トリガーは取り上げている。暴ればお前等なら抑えられるだろう？」

「確かに出来るけどそうじゃなくて、おばさんが」

「私は大丈夫よ。大凡の事情を知った上で見守る系の母親だから」

母こと香澄が居る場所で重要人物であるヒュースがいる事を気にする。

しかし母である香澄はライトノベルとかでよくある主人公の事情を何も知らない系の親ではなく大凡の事情を把握した上で息子達を見守る系のお母さんなので問題はな
いと主張する。

「仮にトリガーを手に暴れたとしても私なら止めることは可能よ」

「……マジに聞こえるわ」

トリガーとは無関係そうな主婦である香澄。

しかし何故だろうか、母はヒュースが蝶の楯を手にしたとしても絶対に負ける事は無い
雰囲気醸し出している……実際のところ、仮にヒュースが陽太郎から蝶の楯を手に
したとしても勝てない。諸事情で貴虎が使えない最後のベルトを香澄は使いこなす事
が出来るので先ず負ける事は無い。

「ふん、こんな女程度にやられるほどオレは雑魚じゃない」

「その女から生まれた息子に負けたのは何処の誰よ……それと目上の相手には敬語を使
いなさい。貴方の倍以上は生きているのよ」

「なん、だと……」

倍以上生きているという事実には驚愕するヒュース。

それもその筈、二十歳ぐらいの姉と言われてもおかしくないぐらい母である香澄は若々しい。ヒュースは倍以上ということとはと計算するのだが、貴虎のせいで50はあるんじゃないかと思ってしまう。貴虎の容姿は手塚国光なので余計に老け顔なので17と言つても信じるのは難しい。

「お、そろそろはじまるぞ」

ヒュースが香澄の年齢に関して色々と考察しているとランク戦ラウンド3が始まる。

フィールドは台風の市街地、橋が掛かっておりどう動くのか見ものでそこからは原作通りに駒が動く。時計の針がほんの少し早く進んでいるのは修だけだ。修は貧弱であり多少マシになったとしても中位で安定しているボーダー隊員を相手に出来ない。倒れない様に粘る事は出来ている。

「あのメガネは弱いな」

「ええ、弱いわね」

修が1番弱いと感じているヒュース。香澄は修が弱いと言われても否定はしない。事実、弱いからだから。

弱いという事を修自身が自覚しているので母は否定しない。修は弱いからといってなにもしない男ではない。上手く遊真や千佳を使い……遊真は村上と一騎討ちをし、勝利を納めて原作通りの結果になった。

「……危ないわね」

原作通りの結果になり玉狛第二に4点が入った。結果的に勝利することが出来たものの運が良かったと母は見ている。

次から相手にするのは格上の相手だ。今回の様なギリギリのところでの勝利を納めてるのならば上位ではカモにされる。

「ふん、随分と原始的な訓練だな」

「実戦が一番の訓練なのよ……捕虜のくせに生意気言ってるんじゃないわよ」

ヒュースがランク戦を見た感想を呟くと呆れる小南。

「あのメロンはどうした？アイツが居るならばもつと上手く立ち回る事が出来るだろう」

「貴虎はボーダーに所属しているけど何処かのチームに入っているわけじゃないわ……それよりも貴方、今後どうするつもりなのよ？」

貴虎がこの場にはいない事を教えると話題はヒュースに切り替わる。

置いてけぼりをくらったヒュースだがヒュースは船が強制送還されたので置いて行かれたと思っっている。実際のところは国の連中に切り離されたのだがその事にはまだ気付いていない。

「このまま捕虜を続けるつもりなの？」

「……アフトラトルに関する情報は教えるつもりは一切無い」

「ならアフトラトルじゃない情報を教えることは出来るんでしょう。それを上手く使わないと永遠に故郷に帰る事は出来ないわよ」

例えコンプライアンスの概念を無視した拷問を受けようともヒュースはアフトラトルに関する情報を吐くつもりはない。

逆を言えばアフトラトルでない情報ならば吐くことが出来る。そこを上手く扱わなければヒュースは帰る事は出来ないと言はう。

「……問題無い……どうにかする」

ヒュースは知っている。

もう少しすればアフトラトルに従属している国が此方に近付いてくるのを。その時にボーダーから脱走すればいいと淡々とその日が来るのを待っている。母の言うことにも一応は一理あると納得はしかけている。

「ま……ボーダーを超えてはならない線を超えなければ私からはなにも言わないわ」
既に色々と言ってるじやんとその場にいた玉狛の面々は思ったけれども言わなかった。

今日も修は無事に勝利を収める事が出来たので修の好物であるクリームコロッケでも作ってあげようかと母は呑気に考える。



「今日はコレぐらいにしておこう。あまりガツツイても後で税金がかかってややこしくなってしまう」

『強化視覚のサイドエフェクトで、たった数時間で30万の利益を叩き出すとは兄殿にはいつたいなが見えているのだ?』

「色々と見えているからな……コレばかりは死ぬ気で努力したとしか言えない」

トリコのココと同じ超視覚を持つているがそれを自在に使いこなす事が出来るのは努力したからだ。今回は上手く成功しているがこのサイドエフェクトを持つて転生した際には転生させた仏を本気で恨んでしまった。見たくはない物を嫌でも見える。大規模侵攻の数日前から不吉な相や死相がそこかしこに見えてベルトもなにもなかったのを見捨てる事になってしまった自分の弱さを悔やんだ事もある……まあ、その結果今の彼女と出会う事が出来たのだが……転生して間もない頃はホントに辛かった。私が転生者でなかったら発狂していただろう。

『兄殿、ユーマ達のランク戦が終わったようだ』

「結果は?」

『ユーマが鈴鳴のエースを倒し、4点の勝利を収めてB級上位に入った』
「……そうか」

修は射手として点を取れるようになればいいなど出水に頭を下げに行つた結果、唯我というサンドバッグを手に入れた。

原作よりも強くなつており、聞いた話だと風間さんから1勝もぎ取つたりしている。逆境に追い詰められた際の伸び代は原作よりも大きいのだろうか……修から放たれるオーラが微弱だが強まつた程度、1が5から7辺りに進化させた程度。10や100には敵わない。

『褒めに行かないか?』

「そうだな……余計な事を口走りそうだが、弟の頑張りを労うのはお兄ちゃんの務めだ」
とりあえずお疲れ様だとスポドリと甘い物を用意しておかないといけないので売店でスポドリとアルフォートを購入する。

レプリカ（本体）に誘導されて修達が居る場所に向かえば修と遊真と千佳ちゃんと宇佐美の玉狛第二の面々がいた。

『兄殿が労ってくれるそうだ』

「試合は見ていなかったが結果は聞いた。大物喰いおめでとう、遊真」

先ずは今回のランク戦の立役者を褒めておかなければならない。

玉狛第二は修のチームだが要はなんと云っても遊真である。村上さんが強化睡眠記憶でパワーアップを果たしているにも関わらず遊真はそれを打ち破った。運が良かった等もあるのだろうが勝てた事に関しては変わりはない。

「じゃいあんと……なんだそれ？」

「格下の相手が格上の相手に勝つことが出来たという意味だ。村上さんは中々に強力なサイドエフェクトを持っているからな……ホントによくやった。コレで玉狛第二には実質10000点超えの攻撃手アタッカーが居るといふ事になる」

「ふふつ、頼りにしてくれて構わんぞ」

「ああ、修はお前の事を信頼している……私はなる事を拒んだがお前は千佳ちゃんや修にとつての柱になっている」

「柱？」

「ああ。例えどんな時でも折れずに支えとなる柱だ……」

隣児さんになにかがあつた時に柱になってくれと頼まれていたが私は拒んだ。

遊真ならば修や千佳ちゃんにとつての柱になる事が出来ている……他人に託すのは無責任かもしれないが遊真ならばと私は信じている。

「さて、とりあえず差し入れを渡しておこう」

「お、ありがとう！」

「なに、礼を言うのは私の方だ。流石にオペレーターまでは出来ないからな……オペレーターがその辺の奴だったら使い物にならない可能性もある。A級経験者がオペレーターである事は嬉しい限りだ」

「またまた上手い事を言っちゃって」

宇佐美が居てくれた事はとにかく幸運だったと言うべきか。宇佐美は褒め上手だと照れるが私は事実を述べたまでだ。

ともあれ修のチームは上位に来た……原作知識等があるとはいえここまでホントに良くやったと思う。我が弟ながら誇らしい。

「次はいよいよB級上位戦だ。此処からはマスタークラスは当然の事、なんらかの武器で10000点超えている人がチームにいると考慮しておかなければならない……さて、ここで問題だ」

「問題？」

「1つしかない10と1つしかない100、どちらがより大きな数字だ？」

「そりゃあ……1000だろ？」

「1つの100と1つの10だどう見ても100の方が大きい……1が10になるよりも10が100になった方がより大きな数字になる」

「……なに当たり前の事を言ってるの？」

遊真は極々普通の事を意味深に大層に語っている私に対して首を傾げる。

確かにそうだ。私が言っている事はそれこそ陽太郎でも簡単に分かる事だろう。だから修には気付いてほしい、素の実力を上げるだけなのが今すべき事ではないと。

「つと、これ以上この場に居れば余計な事を言ってしまう。修、1を10にするぐらいなら10を100にしろ。そっちの方が何かと効率がいい」

「……………どういう意味だろう……………」

ホントに身内に対してはとことん甘い人間だと痛感する。

これ以上この場に居れば答えまで言ってしまういそうなので修にスポドリとアルフオートを渡してこの場を去る。

『兄殿、大丈夫か?』

「……………あのままあの場に居れば答えを教えてしまいそうだから逃げた」

ちびレプリカが着いてきたのでとりあえず逃げたことを認める。

逃げたことに關してはちびレプリカは深くは責めない。答えを教えてしまうのはいけない事だからと認識してくれているからだろう。

「あ、三雲くん」

修達から逃げた先に熊谷が、というか那須隊の面々がいた。

熊谷は私の事に気付き、那須隊の面々は私を認識しオペレーターの志岐はビックリと反

応して那須を盾にする。

「小夜ちゃん大丈夫よ。三雲くんは危険じゃないわ」

「またそんな人を問題児みたいに言わないでくれ……まあ……当然の結果だったな」

絶対的とは言い切れないがエースと言うに相応しい実力者の村上さん鈴鳴第一と遊真玉拍第二がいるのでどうしても那須隊は劣ってしまう。

「っ……どうすればいいかしら？」

毒を吐いている私に対してなにか言い返そうとする素振りは見せるが那須は言葉を飲み込んだ。

実際2つのチームと那須隊は劣っていると認識をしており、酷な現実を受け入れてアドバイスを聞き入れようとする。

「エースで頭でリーダーであるお前に負担がかかりすぎているから他が素の実力を高める……と言っても村上さんの様なサイドエフェクトがない限りは1日2日で強くなるのは不可能だろうな」

「……茜ちゃんに残された時間は少ないわ」

「……日浦の両親の反応は当然と言えば当然だ。A級は負ける、C級攫われるとなれば明日は我が子の可能性もあるんだからな」

そう考えると我が家は寛容的だ。

母さんは危険だからやめておきなさいと言っている反面でホントにやりたくないことならばやりなさいと認めてくれている。

「どうすれば……どうすれば……」

那須が頑張っても限界がある、というか那須隊は現時点で那須に負荷が掛かりすぎている。玉狛第二と同じ壁にぶつかっている。

那須は焦っている……原作通りならば今回はランク戦は8回のみ。原作通りに行けば那須隊は上位に入ることには出来るが入ったことが出来たとしてもカモにされる未来が待ち構えている。A級に高卒までに上がれるかどうか……難しいな

「ふう……私もとことん甘い人間、いや、違うか」

那須隊がこんなに頑張っている原因は元を正せば私にある。

私がサイドエフェクトと原作知識で余計な事を言ってしまったから……だったらその責任を取らなければならない。

「お前等、暇そうでスポーツやってくれそうなコネを持っているか？」

「え、どうしたんですか急に」

「1日2日でパワーアップを果たすのは殆ど無理に等しい……が、似たような事は出来なくもない……多分だが」

やったことはないが持ち前の器用さとサイドエフェクトがあれば理論上は出来る筈

だ。

「ホントならばこういう事をすれば後で悲鳴を上げて泣き言を言うんだが……まあ……責任は果たさなければならぬからな。修達にすらやっていない事を特別サービスでやってやる」

第102話（英語社会編）

「よおし、じゃあ次は英語だ」

バカを決めるテストはまだまだ続く。

次の課題である英語に移り変わる。学校のテストならばヒアリングの問題等もあるのだが、このめっちゃイケ風のテストにそんなのは存在しない。

普通の記述式のテストのみであり語群なんてのは以ての外、コロコロ鉛筆でクリアされる可能性も配慮している。

「英語はな……英語は悲しいことに90点台1人も居ねえんだわ」

「マジすか!?!」

答案用紙を確認する諏訪。

誠に残念な事に今回のテスト、国数英理社一般常識の6科目、どの科目1つも1人も100点を取ることは出来ていない。それどころか酷い奴は一桁代の点数を叩き出している。真面目に勉強している奴等はちゃんとした結果を残しているのにコイツ等はと若干苛立ちつつも頭を冷静に切り替える。

「英語の1位は……風間、お前だ!!」

「おめでとうございます。1位です」

「……何処を間違えていた?」

1位という結果を聞いてもあまり風間は喜ばない。

貴虎が拍手を送るのだが普通校の中学生程度の問題、余裕で満点を取ることが出来ると思っただけに少しだけショックを隠せない。

何処をどう間違えていたのか、最後の最後に詰めた貴虎に何処を間違えたのかを尋ねるので貴虎は風間の答案用紙を返した。

「……オレもまだまだの様だな」

「日本の英語は暗記しとけば赤点だけは回避する事が出来たのとヒアリングの問題とか無かったから仕方ない事です」

「だがお前は満点を取ったのだろうか?」

「まあ、そうですけど……」

「ならば年齢や通っている学校の違いを言い訳にする訳にはいかない」

硬いなこの人は。貴虎はそう思った。

それはそうとしてテストの珍回答発表に移る。

「じゃあ問二の問題、昔話を英語で書け……緑川の答え」

「[E n s y e n t o S t o r y] ……まあ、直訳すれば間違いいではないにはないけども……」

「ええ、違うの!？」

「違うに決まってるだろうが。何処見てエンシエントストーリーになるんだ。o l d t a l eだ……ついでに黒江の答えも」

「[l o n g l o n g a g o] ……惜しいわね」

「昔つて単語には辿り着いてるけども聞いてるのは昔話だからな。コレだとずっと昔だけの意味になる」

「そうなんですか……」

「まあ、英語初めて1年ぐらいだから仕方ない事だ……と言いたいが太刀川!!」

「やべ……何書いたか覚えてねえ……」

D A N G E Rをダンガーと読み間違えるヤバい大学生、今回のバカ代表の大学生の1人として披露されている。

英語が自分でも自覚するぐらいには苦手な太刀川は答えになにを書いたのかすらまともに覚えておらず、トリオン体にも関わらず冷や汗をかいている。

「H e y t h e r e , t h i s i s n o t a s m o k i n g r o o m .
P l e a s e d o n ' t s m o k e ……先ずは三雲の答え」

「ここは喫煙室じゃありません。喫煙室で吸ってください」……模範的な答えね」
「続いて太刀川さんの答え」

「ハイ！この部屋には横綱がない、横綱を出してくれ！相撲を取らせろ」っ……」

「おい、おい！もう一度文をよく見やがれ！何処に横綱がいる!!」

「だってだって……スモウキングじゃん」

苦し紛れの言い訳をする太刀川。

スモウキングをタバコだと気付かないどころかスモウキング、相撲取りの頂点である横綱だと勘違いをする間抜けっぷり。

「スモウキングはコレタバコであって相撲の王様じゃねえ！つか横綱も相撲の王様じゃねえぞ！アレは神様な存在だ!!」

「太刀川さん、酷いとの噂はなにかとお聞きになっていましたがここまでですか……」

あまりの内容に笑うしかない美味しい思いをしている諏訪に対して貴虎はドン引きしている。

貴虎だけじゃない。師匠である忍田や風間、弓場もそりやねえよと言った顔をしている。

「太刀川さん、そりやねえだろう。スモウキングをスモウキングって」

「そういう米屋もなんだかんだで問題間違えてるからな。アルファベットを全部書けで

しを書き忘れてるからな」

「ぬうおあ、マジかあ!？」

「おいおいおい、米屋しつかりしろよ。ダラしねえな」

此処では言えないだけで珍回答は兎にも角にも多い。

そんな中でどの珍回答を発表してやろうかと諏訪は生徒達の答案に目を通していくと違和感に気付く。

「なあ、三雲、じゃなかった。貴虎主任、コレってPの方は要らねえよな?」

「三雲でいいですよ……あ……確かに要らないですね」

「……緑川、米屋、仁礼、別役、日浦、起立」

「な、なんすか今度は!!」

ただでさえ赤点だというのに悲惨な事になっている。

別役は冷や汗をダラダラとかいており貴虎は橘高に立たせた5人の答案用紙を提出する。

「コレは……こつち側のミスでいいのかしら?」

「いやいやいや、ダメですよ。流石にコレは見逃す事は出来ません」

「な、なあ。さつきからなんの話をしてるんだよ?」

「よし……小佐野、帯島、消しゴムを英語で書いてみる」

「すわさん、幾らなんでもナメすぎでしょ。イレイザーだね」

「Eraserでいいですか？」

「おう。お前等正解だ」

消しゴムという単語を英単語で答えろという問題だ。

小佐野と帯島はそれぐらいならば初歩的な事だと簡単に答える。

「アタシもイレイザーって書いたぞ！覚えてる！」

問題の解答に関して仁礼は覚えている。ハッキリとEraserと書いたことを覚えていたのだが貴虎が眉に皺を寄せる。

ジツと現在席を立たされている面々を見ており大きく「はあ」とため息を吐いたら橘高に合図を送る。

「緑川、仁礼、米屋、日浦、別役の答え〔plastic Eraser〕」

「え〜……答えるには間違いではないです。消しゴムはゴムと言っているけどもプラスチック製品のもありますが……皆さんなんでプラスチックの単語が出てきたんでしょうか？」

「えつと……」

答え自体に間違いはない。プラスチック製の消しゴムは確かに存在している。

しかしそんなのを何故にこのメンツが知っているのかという話になり、なんで知って

るかど貴虎は問い掛けると別役は目を逸らす。

「……犯人はコイツだ!!」

「おまつ、人の筆箱を漁るんじゃねえよ!!」

「馬鹿野郎、支給品でボーダー所有の物なんだからいいんだ」

仁礼に突撃する貴虎。

仁礼は必死になつてとある物を死守しようとするのだが貴虎の方が素のスペックが圧倒的に高く、仁礼は筆箱を奪い取られてしまい……支給品の筆箱の中に入っていた消しゴムを取り出す。

「……お前等、カンニングしたな」

「ギ、ギクリ」

消しゴムは何処にでもある近所の百均やコンビニで購入できる極々普通の消しゴムだ。

MONOと書かれている消しゴムであり……PLASTIC ERASERとの表記されている。

「茜、あんたまさか!!」

「ど、どうああああ!!す、すみません!悪気は無かったです!無かったですけど消しゴムに書いてあったからつい!」

「犯人は皆似たような事を言う……5人全員10点減点だ」

「ええ、そりゃ無いよ！問題を作った側に今回の責任があるでしょう」

「口答えをするな！」

不備が生まれた原因は出題者側にあると緑川は主張するがカンニングをした事実には変わりはない。

貴虎は5人を問答無用で10点減点する。

「そんな、ただでさえ0点に近いのに10点も減らされたら」

「大丈夫だ別役……0点の人は普通にいる」

「ええ、誰ですかそいつ！」

「……………太刀川さん」

「慶、お前そこまでだったのか!？」

「異議あり！間違えたり答えが分からなかったりした問題は多かつたけども全部埋める事は出来たんだ！米屋達が10点減点されても俺はプラスチックで書かずに普通にイレイザーって書いたの覚えてるぞ。0点はない」

尚、太刀川は消しゴムを見てEraserだと分かった勢だが万が一バレても回避出来る様にPlastic書かなかつた勢である。

0点はいくらなんでもおかしいと主張する。おバカキャラはなんとしてでも回避し

なければならぬ。答案用紙を返して貰うと問題の？印が多く目立つのだが幾つかは答える事が出来ている。自分の何処が0点なんだと言いたげな顔をする。

「太刀川、テストをする上で忘れちゃいけない事はなんだ？言ってみろ」

「そりゃあ……書き間違いとか書く位置がズレてないかとかじゃないですか？」

「まあ、そうだな……お前、このテストを受ける際に最初になにを書いた？」

「なにつてそりゃあ名……あ、やべ」

「気付いてももう手遅れです」

太刀川は此処で自分が0点である理由に気付いた。

なかが間違っているのか一部の隊員は理解出来ないので橘高がモニターに繋がっているカメラに答案用紙のコピーを映す

「【T A C H E K A W A K】……お前の名前は何だ？」

「……太刀川慶です……」

「太刀川さん、別に名前は日本語でも良いんですよ」

太刀川は自分の名前を英語で書こうとした。本人的にはローマ字のノリで書いたのだがその結果タチエカワケーが生まれた。

ボーダーに太刀川慶という人間は所属しているがタチエカワケーという人間は所属していない。初歩も初歩、自分の名前を普通に間違ってしまった。名前を間違え

は問答無用だと切り捨てられる。それがこのテストの現実^{リアル}である。

「というわけで英語のテストの1位は風間さん、ビリは0点の名前書き忘れのタチエカワケーさんです」

「ヤベえ、ヤベえぞ……」

このままでA級1位ではなくバカの1位を取りそうな勢いのタチエカワケーさん。

0点を取ったことによりビリレースを一気に駆け抜けていつている。なんとしても汚名返上しなければならぬのだがテストはこの昔に終えており、現在は珍回答が発表される場であり汚名返上は不可能に等しい。

「じゃあ、最後に社会のテスト……1位は月見、お前で94点だ」

「94点、残念ね」

「ケアレスマイスで得点を間違えた感じですね……えく……せめてこの問題は全員正解して欲しかった」

「どの問題だ？」

「【今から約4年半前に三門市に現れた近界民を倒した組織の現在の正式名称を書け】……別役、タチエカワさん、米屋、仁礼、小佐野、黒江、緑川、柿崎さん、月見さん、風間さんミスです。境界防衛機関BORDERが答えでボーダーだけでは三角です」

絶対に答える事が出来そうなところでのまさかのケアレスマイス。

ボーダーの事を基本的にはボーダーと呼ぶので誰も正式名称で呼ばなかったりする。ボーダーで定着しているのになにも言えない。

「さ、気を取り直して……古代より存在している貴族制度、その爵位を高い階級から順番に書いていけとの問題だ」

「仁礼光の答え【公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵】……正解よ」

「ま、あたしにかかりやコレぐらいなんてことねえよ」

「日頃から漫画で知識を得ているから……まあでも後上ーつあたりするんだが、それに関しては今回は見逃してやる」

大公に関しては知らない人も多いので今回は目を瞑る。

少しでも正解しておかなければならない仁礼は小さくガッツポーズを取った。

「戦国時代に関する問題だ。長篠の戦いで織田・徳川の連合軍は新兵器の？を使って武田勝頼を破りました……先ずは小佐野からだ」

「ふ、ズバリ拳銃だよ」

「惜しい、余計なの入ってる」

「え、違うの？」

「合ってるけど余計なの入れてしまってる」

拳が無ければ正解に辿り着いたのに実に残念な回答、小佐野は三角である。

「さあ、仁礼。新兵器の何を使って武田に勝利した」

「刀」

「いや、戦国時代より前から存在してるわ!!」

「緑川、何を使った？」

「えっと、弓?」

「だから戦国時代より前から存在しているわ! お前等アレか。戦国時代より前は石で殴り合いする原始的な戦争をイメージしてるのか!」

諏訪のツツコミが火を吹く。

原始的な生活を繰り返していたのはかなり前の話であり戦国時代には既に存在している。

「米屋、言ってやれ。新兵器はなにかって」

「おう、槍だ!」

「それも昔から存在している……別役、言ってやれ。新兵器の名前を」

「はい! ロケットランチャーですよね」

「お前、時代の先取りにも程があるだろう。この時代でロケランの量産に成功したら二週間ぐらいで天下とれるぞ!」

貴虎のツツコミも火を吹いた。

それだけ別役太一の書いた答えが酷かったのだ。ロケットランチャーがある戦国時代……圧倒的なまでに混沌としている。タイムスリップものでも早々に出てこないぞロケットランチャー。

「タチエカワ、答えを言つてやれ！」

「火縄銃だろ？」

「そうだ。鉄砲、銃、火縄銃が正解だ。おサノは拳銃つて言ったがこの時活躍したのは銃であつて拳銃じゃねえ。ケアレスミスだからな」

「うゝすわさん、厳しい」

「キビしかねえよ、常識だろこんなもん。次の問題は……明智光秀は織田信長を討つて権力を得たが直ぐに滅ぼされた為に三日なんぢやち？と呼ばれている」

「橘高さん、どうぞ」

「緑川、米屋、別役、仁礼の答え【坊主】」

「やると思ったよ！お前等それしか出てこないと思つてたよ！タチエカワさんの答え！」

「タチエカワケーの答え【天下】……丸です」

ここにきて英語の0点が嘘の様に巻き返してくるタチエカワ。

戦国時代に関する問題をサラリと答えており他のアホどもとは違うんだと一線を見

せつけてドヤ顔になる。

「タチエカワさん、いい点を取れたのはいいですけど代わりに友人を失いましたよ」

「太刀川さん、見損なつたぜ」

「もうちよつと面白いのを期待してたのに」

「なに普通に答えてんだよ……」

「こう、捻りが無いっすよ！」

米屋、緑川、仁礼、別役の順にタチエカワは蔑まれる。

「俺、問題に正解したよな？」

バカはバカ同士で仲良くしなければならぬ謎の連帯感が生まれていた。

第103話

2月9日(日曜日)ランク戦がお休みになるので次のランク戦ラウンド4は2月15日(土曜日)に執り行われる。

約一週間ほど間が開くのだがその間に特訓をしよう……とはなりにくい。なにせ明日から学年末テストが行われる。呑気に特訓なんてしてられない。大学も進級が掛かった試験とかしているんだらうか。

「さて、メンツは揃ったみたいですね」

色々と大事な時期なのだが今日やることと言えば……スポーツである。

那須がよくやっているトリオン体を用いての運動をする事となつた……主催してこんな事を言うのもなんだがよく参加しようとしたな。

「柿崎さん、照屋、巴はまだ分かるんだが……何故に風間さんも参加しているんですか？」

「歌川の代理だ」

スポーツをしてくれる相手を呼んでこいと那須隊に命じた。その結果呼び出された

のは柿崎隊（オペレーターの宇井を除く）の面々と……何故か風間さんがやってきた。何故に風間さんが参加しているのか聞けば本来来る予定だった歌川が16歳組の勉強会に急遽付き合わされる事になったらしい。

「なにやら面白い事をしようとしているな……」

「別に面白くもなんとも無いですよ……志岐」

「は、ははは、はひ」

「人数的に4 vs 4でやりたい。申し訳無いが得点係になつてくれないか」

「わ、わかりかした」

男性に馴れていない男が苦手の志岐は拳動不審になる。

それと同時にホツとしている。今からスポーツを行うので運動能力に自信が無い志岐にとつて点数係をするのはある意味ラッキーだったりする。

得点のボードを出して柿崎隊＋風間さんと那須隊＋私とでチーム分けをする。

「それで、何をするの？」

「見てわからないのか？ バスケをするんだ」

現在ボーダーの一室を借りてバスケのコートに作り替えてもらっている。

那須は今から何をするのか聞いてくる。ここまで来てサッカーやテニスをするなんて言う筈がないだろう。

「バスケット……バスケットがパワーアップとどう繋がるの？」

「口で説明するのは簡単だが実際にやってみるのは難しい……まあ、余計な事を考えるな。今回は気楽にバスケットを楽しんでくれればそれでいい」

「ふざけないで！ 私は真剣にやってるのにただ単にバスケットをするなんて……今は遊んでいる暇はないわ」

「なら真面目にバスケットをやるうとしてくれ……口で説明するのは簡単だが実際にやるのははじめてなんだ。恐らくは出来る筈だ」

バスケットとランク戦がどう繋がっているのかパワーアップを果たすのにどう意味をしているのか那須は説明を求め

口で説明をするのは簡単だがそれが出来ないから実践形式で教えようとしている……ぶつつけ本番だから難しいがなんとかなるだろう。

「志岐、ジャンプボールを頼む。男女混合だからジャンプボールは女子……熊谷、頼んだぞ」

「ええ……」

極々普通にバスケットをする。コレにいったいなんの意味があるのか熊谷は分からずに疑ってしまう。

志岐は女性サイズのバスケットボールを手にし熊谷と照屋は向かい合い、志岐はボー

ルを高く投げた。

「てい、TIPOFF!」

「あ!」

「貰いました!」

ジャンプボールの競り合いの結果、熊谷は負けた。

照屋がボールを掴むと柿崎さんにそのままパスをして柿崎さんはドリブルをする。

「さて……まずはボール奪取といくか」

何をするにしてもボールがなければ話にならない。

柿崎さんと向かい合い頭のスイッチを切り替える。今は真剣にバスケットに取り組んでいる……全てはアレの為に。

「っ、風間さ」

「遅い!」

私を抜くのは難しいと判断した柿崎さんは風間さんにパスを出そうとする。

数秒先の未来ならば迅よりも正確に見通す事が出来る絶対の視覚を持つている私にはほんの僅かな予備動作^{モーション}で何をするか分かる。パスを出そうとした柿崎さんからボールを弾いてボールをフリーにすると日浦がボールをキャッチした。

「パスだ!」

巴が日浦の元に向かう。

ドリブルで抜くのが難しいのだから此処はパス一択だと柿崎さんのマークを振り払う日浦にパスをしてもらいボールを受け取った。

「そうはさせん」

「残念だが、既に術中にはまっているぞ」

「っ！」

日浦からパスを受け取ると読んでいたのか風間さんがスムーズに対処してきた。

俺はドリブルをして動きを誘導し、アングルブレイクを引き起こして風間さんに尻もちを付かせて風間さんを抜いた。

「ホッ！」

風間さんを抜いたので普通にシュートを決める。

ハズれる事は無いと私のサイドエフェクトが言っているのでゴールに背を向け、ディフェンスの体制に入る。シュートはゴールの中に入っていく、巴がコートの外に出てボールを手にした。

「大分温まってきたな」

時間とか得点とかこの試合は特に制限していない。

パスの先を読む事が出来るのだが風間さんは俺を警戒しており、マークに付いてス

テイルを狙わせない。

「一本取るぞー！」

普通だ……本当に何処にでもある普通のバスケットを俺達はやっている。

風間さんが執拗にマークしてきているので此処は抜かずに那須隊に任せてみようと思ったが柿崎さんがレイアップシュートを決めて今度は私達の番となり熊谷からパスを受け取った……トリオン体とはいえ体は順調に温まっている。那須達もなんでバスケットをしているんだという疑問を頭の隅に置き始めている。

「さて……やるか」

ランク戦もバスケットも一瞬、刹那の時を生きている。常にリアルタイムで次を予測しないといけない。

俺をマークしている風間さんを抜いてシュート……と見せかけてワンバウンドのパスを那須にした。

「ナイス……？」

那須はパスを受け取るとそのままシュートを決める。

生身の肉体はアレだがトリオン体を用いての運動は中々にセンスがあるなど感じていると那須は違和感を感じている。その違和感こそ俺が今回バスケットをしようと言った理由だ。

「熊谷」

ボールを奪い無理をすれば自らで点を取ることが出来るが無理をせずに熊谷にパスをする。

「いいタイミングよ！」

「だろうな」

熊谷はナイスとボールを受け取るとレイアップシュートを決める。

サイドエフェクトと持ち前の器用さで理論上は出来ると思っていたが上手い具合に出来ている。

「……三雲のパスを受けてから動きが良くなっている」

違和感の正体に風間さんは気付いた。

私が投げたパスを受け取ると熊谷達は見事にシュートやドリブルによる突破に成功している。動きが良くなっている。

「……なにかしら。今、最高にノッてるわ……」

「ああ、そうだ。お前達にはノッてもらってる」

「どういう意味なの？」

「俺は完璧なパスを出した。速度、軌道、タイミングが全てにおいて完璧なパスだ。普通のナイスパスだと思っただけでもなにかしらのズレがありそのズレを受け取る側が補正

している。俺の完璧なパスは完璧なリズムを刻む。完璧なリズムとはその選手にとって最高の状態と言つても過言ではない……今が1番ノッているのだろう」

俺がやったことは黒子のバスケの赤司が出した完璧なパスだ。

数秒先の未来を読み取る超視覚のサイドエフェクトとスケツトダンスのボツスン並の器用さが合わされば……なんとか赤司の究極のパスを使う事が出来る。

「ランク戦はフィールドや転送位置、状況によつてコンディションが大きく変わる。俺はバスケという種目でだが那須達の持つポテンシャルを90%まで引き出した……完璧なパスは完璧なリズムを刻み完璧なコンディションを引き出し……ゾーンと呼ばれる領域に限りなく近い状態に足を踏み入れる事が出来る」

那須達を一気にパワーアップさせる方法は殆ど無いに等しい。

流石に1日2日で格段とパワーアップをさせる方法や新しい作戦は思い浮かばない……作戦云々に關しては素人も同然だから仕方がない。故に……この完璧なパスを出した。現時点で那須達が出すことが出来る90%の状態を引き出した。

「今、滅茶苦茶ノッているだろう。そのノッている状態がゾーンを除いて引き出すことが出来る最高の状態だ……その感覚をランク戦でも出すことが出来れば格上に対して勝利する事が出来る筈だ」

常に100%の力を發揮する事が出来る人間は早々にいない。

俺はやろうと思えば意図的にゾーンに入る事が出来るのだが普通の人間には無理なものである。故にこの完璧なリズムを刻む事が出来るパスを出してゾーン状態に近い形に叩き込んだ。

「コレが私達が現時点で出すことが出来る最高のコンディション……」

「成る程……今の限界を越えるのでなく限界ギリギリのコンディションを感覚で味合わせる……普通じゃ出来ない事だな」

「ええ、というわけでチーム交代だ。柿崎さん達にも手伝ってもらったお礼として90%の感覚を味わってください」

「……いいのか？」

「ええ。現段階で引き出すことが出来る最高のコンディションを味わっておけば……なにかと便利です」

そんなこんなでチームを入れ替える。

風間さんを入れ替わる形で柿崎さんのチームに加わると今度は柿崎さん達に完璧なパスを送り柿崎さん達の90%前後のコンディションを引き出した。

「この感覚……悪くはないな」

最後に風間さんも90%の状態を引き出した。

風間さんをはじめでの経験なのかハイになっている。この状態を何時でも引き出す

事が出来るようになれば上位陣とバチバチにやりあうことが出来る。

「ごめんなさい。疑ってしまつて」

当初はなんの為にバスケットをやるのか分かっていなかった那須は謝る。

「いや、説明しない俺も悪い……なにせ口で説明するのは簡単だが実際にやるのははじめてな上に高難易度なんだ」

サイドエフェクトが無ければ絶対にすることは出来なかった。

無理ならば別のプランも一応は考えていたのだが、そのプランが考えていただけで済んだのでそれでいい。

柿崎隊の面々も風間さんも中々に味わう事が出来ない貴重な体験をする事が出来たのだとお礼を言い、とりあえずバスケットによる特訓は上手く行つた。

「最高のコンディションを維持するのは難しい事だが感覚を忘れるな」

バスケットを終えて今度はランク戦に移り変わる。

トリオン体に換装し、熊谷と1本勝負をして見事に1本をもぎ取る……

「違う、こうじゃない……もう一本いかしら？」

「1発で成功させないといけないからダメだ……ミスったか」

90%前後のゾーン状態を除く最高のコンディションを熊谷は味わつた。その結果、今出している力があの時の力じゃないと実感する。

ゾーン状態に近い形の90%の状態、なんとしてでももう一度その領域に足を踏み入れないと行けないと思って焦っておりその焦りからか逆にコンディションを悪くしてしまっている。

熊谷はもう一度私との再戦を望むのだが私は基本的には1日1本だ、負ければ次が無いと思ってもらわないといけない。1発で90%のコンディションを叩き出せない熊谷が悪い……が、90%の状態を感覚で掴ませた私にも悪いところがある。もう一度あの状態をと欲張っている……教えるべきではなかったのかもしれない。

「90%の力を出した状態を教える事は出来たが、パワーアップをしたわけじゃない。本来自分が出すことが出来る力を出せるようになっただけ……故に格上過ぎる相手と戦えば素のスペックや性能差で負ける」

「格上過ぎる相手……村上先輩とかね」

「B級上位陣はマスタークラスは当然の如く居るからな。上に上がっていく以上は避けては通れない道だ……どうする？」

「……私が」

「頑張っている上でこの結果だろう」

那須隊のお荷物にならない様に熊谷は頑張らなければならないのだが頑張っていてこの結果だ。

キツイ物言いかもしれないが那須隊は停滞してしまっている。時間を掛ければどうにかなるのだがその時間はもう残されていない。それこそ1日2日でパワーアップを果たさなければならぬが流石にそんなに都合のいい方法は存在しない。

「……なにかあるの？」

「あるかないかで言えばあるにはあるが……ポリシーを捨てる覚悟を決めておかなければならないぞ」

どうにかして今期のランク戦、今まで以上の成績を叩き出さなければならぬ。

B級中位に定着している現状を打破するには……今のところ思いつくだけでは1つしかない。

「ポリシー……」

「最後に決める権利を持っているのは那須、お前だ。ポリシーを捨てるならば確実にボーダー上位に食い込む事が出来る方法を教えてやる」

その方法を選ぶのか選ばないのかは那須次第だ。

那須に今のところ思いつく那須隊を上位に食い込ませる方法を告げると那須は真剣に悩んだ。実行に移すのは簡単だろうがポリシーに反する。ガールズチームという制約を付けているかどうかは別だがな。

「……少し考えさせて」

貴虎がトリガー構成を弄っている間にエネドラッドと修達は遭遇した。

エネドラッドからアフトラトルの母トリガーの寿命が来ているとの説明があったその日の夜のこと。

「修くん、千佳ちゃん、お客さんが来てるよ」

「お客さん？」

玉狛支部に帰った修達だがお客が来ている事を宇佐美から告げられる。

自分達にお客だなんて誰なんだろうと首を傾げているととりあえず会ってみようとなり、支部のリビングに向かえばB級1位の部隊、二宮隊の隊長にして個人総合2位射手として1位の男、二宮が座っていた。

「座れよ、三雲」

「あ、はい……」

自分達になんの用事なんだろうかと気になっていると椅子に座ってくれと言われる。椅子に座ると二宮は一枚の写真を取り出した。

「この女の名前は鳩原未来……元うちの狙撃手だ……雨取麟児と言えば分かるだろう？」

二宮は語る。鳩原がトリガーを横流しして一般人に渡したのを。

鳩原が晒されたと思っておりその候補として千佳の兄である雨取麟児についてなに

か知っていないのか尋ねる。

「その一件なら僕の兄が深く関わっています」

「……なに？」

「僕の兄は当時、向こうの世界に向かおうとした麟児さんを説得しようとして失敗に終わりました。麟児さん達を見送ったと言ってます」

「お前の兄はなんと云っている!？」

「あ、あの……その件に関しては僕も詳しい事は知らないです」

あくまでも麟児を含めた数名の人間が向こうの世界に勝手に行くのを手伝った事を知っているだけで何処の誰かは知らない。なんだったら鳩原未来の情報を知ったのはつい先程である。

「お前の兄とアポは取れるか？」

「取れるとは思いますが……教えるつもりはないです。僕等が遠征に向かう際には色々教えてくれるんですが……」

「お前達が遠征だと？それこそ絵に描いた餅だな。本気で遠征部隊を目指したければその白チビを何処かのA級の部隊に入れる。人が撃てない狙撃手に戦術を多少齧った雑魚がチームメイトだと中位停滞が関の山だ」

手掛かりを手に入れたのでこの場にはもう用事は無いと席を立ち二宮は去っていく

た。

聞きたい事は互いに色々であったのだがそれこそ遠征に選ばれなければ絵に描いた餅も同然だ。

「オサムのおにいさん、なんにも教えてくれないんだな」

「時が来たら教えてくれる……今の僕達が情報を知ったとしても、余計な重圧になってしまおう」

むしろ情報を手に入れる為に頑張ろうとモチベーションを高める。

「……人が撃てない……」

千佳はボソリと呟く。自身が人を撃つことが出来ないというのを見抜かれてしまっている。

上に行く為にはどうすればいいのか……千佳は答えを知る為に動いた。

第104話

「ふうく……終わった」

「今日はな」

2月10日（月曜日）三門第一高校は三学期の学年末テストを受けている。

と言っても最上級生3年は1月半ばで受けさせられており、3年は受験や就職やらで何かと忙しい。

「やめろよ、そういうことを言うんじゃない」

まだ明日にもテストが控えている事を言えば米屋は嫌がる。

冗談抜きで赤点を取ると進級に関わってくるので意識を現実に取り戻させておく。ホントに赤点だけは洒落にならない。友人に留年が居るのはあまりいい顔が出来ない……一度本気で見捨てたらエライ目にあつたからな。

「明日もテストだから一夜漬けをするぞ」

「うえええ……ランク戦は？」

「しない。息抜きは無しだ」

米屋にテストの問題全部埋める事が出来たかどうか確認したが無理だった。

選択式の問題で点数をなんとか稼ぐことが出来ていればいいのだが……最悪補習の可能性も考慮しておかなければならない。補習で足りるか……色々と緩いんだよな、三門第一高校は。

「今ここで我慢しとけば来年が楽になるだろ」

「今日が楽しくないのに楽な明日を迎える事が出来ると思うか？オレは思わないね」

「そんな格言や名言っぽく言っても意味はない」

勉強をすることを勧める出水。米屋は勉強したくないオーラを出している。

A級三バカの中でも成績がどちらかと言えば良い方……なんでこいつだけバカじゃないんだと言う意見も飛び交っているとかいないとか。とにかく進級に関わっているのでボーダーも防衛任務を入れない様にしてかれている。

「昼は……適当にするか」

一旦家に帰る米屋に出水。私服に着替えてからボーダーにやってくるのだろう。

昼飯をボーダーで食べるか自分で作って食べるか考えた結果、自分で作って食べようと部屋に向かうと私服に着替える。

「明日は数学に世界史、情報……焼き飯にするか」

エプロンはめんどくさいので着ない。

米は朝に炊いているので卵と人参と刻みネギと豚肉を入れて。パッツと炒き飯を作りインスタントの味噌汁（あさげ）を入れる。一人暮らしではインスタントの味噌汁は役立つな。特にこんなテスト期間中自室で昼飯を食うことになるからな。

「数学と世界史は基礎的などころだけ叩き込むとして……」

米屋にこの後テスト前の一夜漬けをしておかなければならない。

どの辺りを詰め込めばいいのかテスト前に渡されたプリントを確認する。このプリントから大体似たような問題を出してくる。三門第一高校はボーダー隊員になにかと緩いのである。

「……ん、珍しいな」

焼き飯を食べ終えてこの後にする事を念密に練っているとボーダー支給の携帯端末から電話が入った。

米屋達とはこの後に勉強をするので米屋達からは連絡はこない。じゃあ誰かと言われれば……珍しい相手である。

「もしもし」

『あのっ……時間、空いてますか？』

「今は学校がテスト期間中だからぶっちゃけた話、時間は空いていない……が、無理に時間を作る事は出来る。そっちは大丈夫なのか？今の時期は殆どテスト期間の筈だ」

『あ、はい。大丈夫です。今週からテストですけど苦手な教科は先に終わったから』
「なら来ればいい……ただ私にだけ相談するのは不可能と思ってくれ。私にも私の用事があるんだ」

『はい……友達も連れてきていいですか？』

「好きにすればいい。私は厳しい事を言うから覚悟はしておくんだ」

そう言うのと通話が切れた。そろそろ壁にぶつかる頃なのは分かっている……答えを知りたがるのも無理はない。私を頼ろうとしてくれたのは嬉しい限りだ。

「……来たか」

「おう、やってきた……数学がちんぷんかんぷんだからな」

「数学は解き方さえ身に着けていけば後はどうにでもなる」

「その解き方が分からねえからこうしてるんじやねえか」

電話を終えて十数分後、米屋と出水がやってきた。

「数学がマズいと米屋は主張するが数学なんて中学の応用に過ぎない。基礎さえしっかりしておけばどうにでもなる。その基礎が米屋は出来ていない。今から基礎をしっかり作り上げる時間は無いので公式の暗記だけに集中させる。」

「高3と中3は受験や就活で大変だよな。メガネボーイはどうなんだ？」

「修はボーダー推薦を使って三門第一高校に入学する……遊真もだ」

「いいのか?」

ボーダー推薦枠に関して疑問を抱いている事を出水は知っている。

出水は実の弟がその枠を使って進学することに些か異議は無いのかと聞いてくるので首を横に振る。

「修はボーダーの事に集中したいんだ。真面目にやつても三門第一に入学できるからボーダー推薦枠を使っても文句は無い……ただ」

「ただ?」

「遊真がボーダー推薦枠を使えば後で悲鳴を上げるのが目に見えている」

遊真の一般教養がヤバイ。どれくらいヤバいかと言えば自分の名前を漢字で書くことが出来ないぐらいにヤバイ。

向こうの世界の住人だからとかは言い訳にしかない。後で修が悲鳴を上げる未来が待ち構えているがそればかりは頑張れとしか言いようがない。修の成績は遊真の勉強の進み具合によって決まるだろう。

「……つと、この後客人が来るからな」

「お客って誰が来るんだ?」

「来れば分かる……勉強と同時進行で行う。出来れば2人の意見も欲しいところだが……まあ、無理なら無理で諦めるとする」

「誰が来るんだ？」

「お前は一夜漬けに集中しろ」

誰が来るのかを気にする出水と米屋。

出水に関してはともかく米屋はホントに勉強に集中しておかないといけないので勉強に集中する事を告げればインターホンが鳴った。誰が来たのかは言うまでもない

「待ってたよ……千佳ちゃん。それに夏目ちゃん」

「あの、ちゃんはやめてほしいッス」

「おっと、それは失礼」

電話の相手は千佳ちゃんだ。

千佳ちゃんは友達である夏目を連れて部屋にやってきたのでとりあえずと上がって
もらう

「槍の先輩と弾の先輩が居るじゃないっすか。大丈夫なの、チカ子？」

「勉強会だ。時期が時期だけにな……そっちは大丈夫なのか？」

「うっ……」

「……1人ぐらい増えても問題は無いぞ」

「よ、よろしくお願ひします。メロンさん」

メロンさんか……まあ、弟がメガネ先輩orメガネさんなので仕方がない事だろう。

とりあえず人数分のコップが無いので紙コップを取り出してお茶を入れ、布団の上に腰掛ける。

「米屋と出水はこの課題をやっておいてくれ……と言いたいが一応は意見が欲しいからな」

「ほうほう、オレに意見がほしいのか？ だったら今度のレポートを手伝って」

「いや、やっぱいいか」

「お願いします。レポート形式の課題、どつから手を付けていいのか分かりやしません！！」

米屋が相談に乗る代わりにレポート形式の課題を手伝ってくれと頼み込む。

それは米屋自身がやらなければならない事なので手伝うわけにはいかない。米屋を無視して進めようとしたが米屋は綺麗に土下座をしてくる……パソコンを使っていいタイプのレポート形式の課題だから余裕でこなせる筈だろう。

「相談の内容は大凡の予測はつくが……千佳ちゃんの口から語ってくれ」

「はい……その、人が撃つことが出来なくて……このままだと修くんや遊真くんの足手まといになります。なんとかしたいんです」

「なんとか、ね……」

また随分と曖昧な事だ……まあ、千佳ちゃんの口から人を撃ちたいと言われるよりは

幾ばくかはマシンだろう。

千佳ちゃんは壁にぶち当たった……修とはまた違う感じの壁にぶち当たっており、どうにかしたいと考えている。

「ああ、やっぱ撃つことが出来ねえのか」

「やっぱりって気付いてたんすか？」

持ちかけた相談内容に米屋は特に驚きはしない。

冷静に試合を観察すれば千佳ちゃんが砲撃を撃って点を取れる場面は幾つかあった。一般教養は残念だが戦いに関してはプロフェッショナルな米屋はちゃんと試合を見ており、千佳ちゃんが人を撃てない事に気付いている。

「まあ、見る奴が見りや分かることだからな……前にも人を撃つ事が出来ない人がいたし」

「そうなんすか。その人はどう戦ってたんですか？」

「アイビスとイーグレットを上手く使い分けて武器破壊してたぜ」

恐らくは鳩原未来に関する事だろう。武器破壊に特化したボーダー隊員……千佳ちゃんはそれにならなくても問題は無い。

千佳ちゃんの相談内容に出水達は参ったなと言う顔をする。なにせ出水達はそんな事で悩んだ事は一切無い、近界民なら容赦無く倒す事が出来るように訓練されている。

「……で、千佳ちゃんはどうしたいんだ？どうにかしたいと言うが具体性に欠けていますぞ」

「それは……………」

千佳ちゃんは今行き滞っている。

修も時期にワイヤー戦法に辿り着く、と言うよりは答えを出水に教えている。出水はそれとなく教えるつもりだ。そうなれば確立された個になる。どうにかしたいという気持ちは伝わってきているがそれだけで具体性に欠けている。

「修くんや遊真くんに追いつきたいです」

「だから具体性に欠けている。人を撃つて点を取れるようになりたいなら当真さんに頭を下げに行く。千佳ちゃんは人を撃てるようになりたいのか？」

「……………」

「千佳ちゃんは真面目にやっていて狙撃手スナイパーとして着実に強くなっている。けど肝心な事が、トリオン兵を撃つことが出来ても人を撃つことが出来ない。千佳ちゃんの目当てである遠征先は戦場だ。トリオン兵がワラワラといるがトリガー使いも沢山いる。そんな中で人を撃つことが出来ないと言うのはハッキリと言えば邪魔でしかない」

「お前、マジでバツサリいくな」

言わない優しさもあれば言う優しさもある。

出水は私がハッキリと言うことを意外そうな顔をしている。修に甘いから千佳ちゃんにも甘いと思つたら大間違いだ。

「人を撃つことが出来ればそれで万事解決……と、思うだろ？」

「……え？」

「確かに人を撃てる様になればそれに越したことはない。しかしボーダーには凄腕狙撃手スナイパーは何人もいる。千佳ちゃんが歩いている道は狙撃手志望の子が歩いている道と同じ道だ……じゃあ、千佳ちゃんの道を探そう」

「私の道……守破離ですか？」

「ああ、その通りだ。このまま毎日努力しても千佳ちゃんは普通の狙撃手としての腕を磨いているに過ぎない。千佳ちゃんらしさを磨かないといけない。部隊で足手まといになりたくないのなら確立された個の力を持つていなければならぬ。確立された個の力とはなにか？それは他の腕自慢達を相手にしても負ける事は無いと言えるような武器を持つていことだ……千佳ちゃんがコレだけは他の人に負けないぞと言える武器はなんだと思う？」

千佳ちゃんは基礎はしつかりとしている、しつかりやっている。

しかしそれでは普通の狙撃手と変わらない。100発100中の狙撃手を目指すならばそれでいいだろうが……ハッキリと言えば勿体無い。

「私の負けない武器……」

「まあ、そりゃあアレしかねえよか」

「ああ。羨ましい限りだよ」

千佳ちゃんの武器と言われれば1つしかない。

出水も米屋も直ぐにその答えに辿り着く。千佳ちゃんは少しだけ俯いており夏目はポンと手を叩く

「あるじゃん。チカ子がA級の人達に絶対に負けない武器が」

「……トリオン能力、ですか？」

「正解だ、千佳ちゃんは誰にも負けないトリオン能力を持っている。トリオン能力に関してはぶつちぎりの1位と言っても過言ではない」

「で、でも私、人を撃つことが出来ないんです。運動神経がいいわけでもないから遊真くんみたいに戦うことは出来ないですし」

「なにも点を取る事が出来るのがチームに貢献する事じゃない。団体競技のスポーツでも一緒だ。足が速いシュートが上手いデیفエンスが粘り強いと色々ある……千佳ちゃんも点を取りたいと思ってるなら人を撃つことが出来る方法を伝授する事が出来るけど千佳ちゃんは修達の役に立ちたいんだろう」

「そう、ですけど……だったらどうすればいいんですか？」

「千佳ちゃんの武器は圧倒的なトリオン能力だ。じゃあそれはどんな武器だつて話になる……出水、千佳ちゃんの誰にも負けない武器であるトリオン能力はどんな武器だ？」

「そりや圧倒的なまでの火力だろう。槍バカもそうだけどトリオン能力の都合上フル構成が出来ない奴だつているんだ。おれと同じトリガー構成にしたらとんでもない化け物射手シューターの誕生だぜ」

「だが千佳ちゃんは人を撃てない。撃とうとしない……人が撃てないならながある？」

「そりやあ……色々あるんじゃないやねえの？ なにもボーダーのトリガーは攻撃だけじゃない、スタアメーカーとかダミービーコンとかエスクードとか色々相手攻撃しないだけであるんだから」

「そう……色々あるんだ」

出水なら直ぐに答えに至ると思つたが流石にそっち系にまで知恵は回らないか。

ともかく千佳ちゃんの武器は誰にも負けないトリオン能力でそれを生かした戦いこそ千佳ちゃんの確立された個の力だ。

「答えを言つてしまふのは簡単だからヒントだけ与えておく、千佳ちゃんは今まで使つた事が無いトリガーを使つてみればいい。千佳ちゃんは現実的には不可能なトリガー構成を可能とする誰にも負けないトリオン能力を持っている。理論上は可能なトリ

ガー構成を全てやってみればいい。他の隊員は無理でも千佳ちゃんは可能な筈だ」

答えを言えばそれで全て終わるだろうが流石に答えを教えるわけにはいかない。

理論上は可能だがトリオン云々で不可能なトリガー構成を千佳ちゃんは可能とし、千佳ちゃんはそのがどんなものなのか自覚していない。

「それでも壁があると感じるなら人を撃てる様にならない……千佳ちゃんは撃ちたくないだけで撃とうと思えば撃てる人だ」

「!？」

「いやいやいや、撃てるんだつたら今頃こんな事になつてねえだろう」

「撃てるよ、千佳ちゃんは。ただきつかけの様なものが必要なだけで……そうだな……」

コレは教えていいことなのだろうか？千佳ちゃんは人を撃とうと思えば撃てる。よ
うはきつかけが必要なんだ。米屋は無いと言っているがきつかけがあればいいんだ。
時計の針は既に少しかけ早く回っている。修は唯我をサンドバッグにし、遊真はノビノ
ビとランク戦をしている。後は千佳ちゃんだけ。理論上は出来るトリガー構成をやつ
ていけばその内鉛レッドバレット弾に辿り着く。仮に辿り着かなくても絵馬が答えを教えてくれる
だろう……。

「千佳ちゃんは追い詰められないと人を撃つことが出来ない。他人が傷つくぐらいなら
自分を傷付けて回避する……自己犠牲は弱者の自己満足だ」

「メロンさん、なに言ってるんすか？」

「撃とうと思えばお前は撃つことが出来る……ただ撃つたらなにを言われるか分からないから怯えているんだよトリオン化モンスターけ物」

「それは……」

「修達は撃たなくていいと言っているが本心としてホツとしている自分とどうにかしたいと思っっている自分、2つの自分がある筈だ。撃ちたくないと思っっているならあえて言っつてやる。撃とうとするのかこの化け物が」

「っ!!」

「おい、いくらなんでも言いすぎだろう!」

「……そうだな」

私とした事が余計な事まで口走ってしまっているな。

千佳ちゃんの人が撃つことが出来ないという悩みを真正面から受け止めようと思っ
ているがなんだかおかしいな方向に向かってしまっている。出水に言い過ぎだと言われ
たので少しだけ反省する。

「……あの、貴虎さん」

「なんだ？」

「私、撃とうと思えば撃てるんですか？」

「ああ……でも、心の何処かで撃ちたくないと思ってる。その理由は分かっているだろう？」

「……………」

千佳ちゃん自身が撃ちたくないと思ってる。

撃ちたくない撃ちたいのはその人の自由かもしれないがコレから上を目指していくのならば人を撃てる様にならないといけない。

「さっき酷い事を言ってしまった御詫びと言ってはなんだが……あるサブトリガーと千佳ちゃんの相性はバツチリだ。ボウダーの中でも使っている奴が1人ぐらいだ。それと人を撃たないと撃ちたくないなら潔く諦めてイーグレットを抜いて別のトリガーを入れる事を勧める……1から100になるのが難しい事ならば10を100にする方法を取ればいい」

「……本当になんでもお見通しなんですわね」

「いやいや、私は何処ぞのセクハラエリートと違って未来は見えない……占う事は出来るがな」

これから上に行くならば確立された個の力を、自分のスタイルを見つけ出さないと行けない。

千佳ちゃんも修もそうだがきつかけが必要なんだ。私のサイドエフェクトもきつ

けが有れば後は化ける事が出来ると出ている。

「ここで勉強していくか？それとも特訓していくか？」

「えつと……勉強の方をお願いします」

「ん……意外だな。今すぐにでも色々試してみると思ったのだが」

「確かに色々やりたいですけど……勉強の方も頑張らないといけないんです。何時か友達を連れ帰った時に勉強を教えることが出来るほどに賢くなっておきたいんです」

「勤勉だな……何処かの誰かも見習って欲しいぐらいだ」

「言われてるぜ、何処かの誰かさん」

「いやいやいや、オレはほら、こうして勉強会に連行されてるじゃん」

連行されなかつたら最初から自主的に勉強する気がない人間がなにを言っている。

千佳ちゃんと夏目も加わり勉強会が行われる。米屋が圧倒的なまでにアホなせいで千佳ちゃんと夏目が賢く見える……千佳ちゃんは平均的で夏目は平均よりちよつと下なぐらい。2人ともボーダー推薦で三門第一高校に入ってくるとか言わないよな……。

第105話

さてさて、修達は自分が出来る事を見つけようとしている。

遊真はのびのびとランク戦を行いボーダーのトリガーに馴れていつている。千佳は自分が人を撃てないでなく撃ちたくないと言う事を貴虎が教えた。千佳はこれから自分だから出来るトリガーの組み合わせを試行錯誤する時間だ。修は唯我をサンドバッグとし、戦いそのものに馴れる。スパイダーに関しては出水がそれとなく教えるつもりでいる。原作よりも時計の針が速く進んでいる……様に見えた。

「おい、アレって例の」

「ああ、マスクマンだ」

謎のマスクマンに換装した私は狙撃手の訓練所にやって来た。

何をしに来たかと言われれば当然狙撃手としての訓練を積みこいて来た。忘れてはいけないが私は初心者である一定の実力にまで持っていくマニュアルの様な物を作ろうと思っている。トリガーを渡して後は自力で頑張ってねは余りにも酷というもの。

「よお、今日はランク戦をしねえのか？」

「今はテスト期間中なので程よくやっておきたいんで……流石に遊んでられません」
当真さんが私に気付いて声をかけてくる。

ここ数日は見ていなかったのか珍しそうなものを見る目で聞いてくるので今日はランク戦をするつもりはないと意志を示す。テスト期間中なので遊んでいる暇は何処にもない。カゲさんとかそんなの関係無しにランク戦を挑んできそうだけでも。

「大変だねえ、後輩は」

「そういう貴方こそ来年から色々悲鳴を上げたりするんじゃないんですか？」
「バカを言え。流石にレポートぐらいいちちゃんとやるよ」

オペレーターが怖いからとかいうオチなのかもしれない。

とりあえず狙撃手の訓練を行う。と言っても的当てだけの簡単な訓練だ。サイドエフェクトがあるのでスコープを除いて的を絞る事をしなくていい。近距離戦闘も中々だが中距離、遠距離もこのサイドエフェクトは色々力になってくれる。

「はあ……」

狙撃の訓練をしていると隣の台にいる佐鳥が大きなため息を吐いている。

困っていると言う電磁波^{オーラ}が出ており、なにに対して困っているのか……気にならないと言えは嘘になるが他人の心配が出来るのは自分の事がしっかりと出来る。

「なにため息吐いてんだよ？嵐山さんの隣に立つて酷い目にあつたのか？」

「いやいやいや、あの地獄の様な思いは二度としたくないって違いますよ！」

当真さんが佐鳥に話しかける。

元気が無いが本人が困っているんじゃないやなくてどうにかしたいと思っっている感じの悩
みつぽい。そして佐鳥、嵐山さんの隣に立つたら色々辛い目に遭うぞ。具体的に言え
ば嵐山ファンがワーキヤー言つて、なんだ佐鳥じゃんという3枚目の芸人扱いを受ける
……いや、発言からして既に受けているか。

「ちよつと木虎の事で困ってるんですよ」

「木虎のこと？あいつが困るって烏丸ぐらいしか思い浮かばねえけど」

「それがこの前の大規模侵攻で緊急脱出ベイルアウトした事を気にしてるんですよ」

間に私を挟んで話し合う当真さんと佐鳥。

話題はこの前の大規模な侵攻、木虎はラービット相手に緊急脱出をさせられた。相手
が悪かったとしか言いようがないが前線に立っている奴が負けてしまったのは精神的
に来るものがあるだろう。

「聞いた話だと東さんの至近距離のアイビスが効かねえ程に頑丈だったそうじゃねえ
か。トリガー使いを捕獲する為に作られてたつて話だし1人だと無理あるだろ」

「俺もそう言ったんすよ。でも、太刀川さんとか村上先輩とかはそれより強い色付きの

を倒したりしてたしなによりあの場でA級の自分が落ちるのは全体の士気に関わる事だつて頑固でして」

「……そのトリオン兵のデータはあるのか？あるんだつたら再現してもう一回、再戦させりやいいだろう」

「いや……それだと意味が無いって言ってるんですよ」

「なんでだ？」

「来る相手が分かつてなくても初見の相手でも勝つてこそそのA級だつて……一本でも落とせばA級以前にボーダーの意識に関わるって」

「めんどくせえな、おい」

だが言っている事に関しては一理あると思う。

A級なんだから初見の相手だろうと黒トリガーだろうとなんとかしないとイケない。エリートを自称しているのと自尊心やプライドが高い人間ならば尚更だろう。

「とつきーも普通のA級でも難しいからつてフォローを入れてくれるけど……なんかいいアドバイス、ないですかね？」

「狙撃の事ならともかく、そういうのはちよつとな……三雲、お前ならなんとか出来るんじゃないかねのか？」

「【また随分と滅茶苦茶な事を……】」

「でも、見てらんないんですよ。木虎がピリピリしてるんで三雲さんの弟さんに射手としてのテクニクを教えることが出来ないって嵐山さん困ってたし」

「【待て……どういふことだ？】」

「とつきーにとりまるから電話が来て弟さんに銃手や射手のテクニクを教えて欲しいって頼まれたんですけど木虎がピリピリしてるから隊室に呼び出せないって」

「【……おう……】」

木虎の鼻つ柱が折れていない為に厄介なバタフライエフェクトが起きた。

一応は出水に答えはスパイダーだと教えてはいるのだが原作通りに覚えてくれるに越したことはない。下手な原作介入で余計な事になってしまった。巡り巡ったツケが今頃になってやって来た。

「なんかいい案はないですかね？」

「【……そうだな】」

木虎は鼻つ柱を折られて立ち直ろうと必死になっている。それ自体はいいことだ。だが、周りに心配されている程に鬼気迫っている。

ここらでなにかきっかけの様なものを与えないと周りにも被害が被る可能性が高い。というか修がスパイダーに関して教えを受けない可能性が出てきている。

「【内密にしてくれるのならば力を貸してもいいぞ】」

「ほ、ホントですか!？」

「【成功する保証は何処にも無いし、もしかしたら鼻っ柱を根本から叩き折る可能性がかなりリスクーだが……それでもやるか?】」

「……あ、嵐山さんと相談していいですか?」

「【好きにしろ】」

あくまでも浮かんだ案で即興だ。失敗する可能性は高い。成功したら天狗になる可能性も高い。

佐鳥は早速嵐山さんに連絡を取ると隊室で事務処理をしているとの事なので来てくださいと佐鳥に連れられて嵐山隊の隊室にやって来た。

「話は聞いているよ。木虎を元気づける方法があるんだね?」

嵐山隊に入ると嵐山さんが出迎えてくれる。

お茶を出してくれたので1杯頂きつつ嵐山さんと対話する。

「【元気づける方法かどうかは分かりませんが、今から変化させるのならば出来ますよ】
「そうか。ならそれを」

「【ただそれがいい目になるのか悪い目になるのかは分からない。コレばかりは木虎次第……私の占いでは72%の確率でいい方向に向かわない。ただ変化はすると云って
くる】」

「そんな事も分かるのか!？」

「【サイドエフェクトの応用です……で、どうしますか?】」

別にやらないのならそれはそれでいい。しかし停滞してしまっているのも事実だ。

木虎がここから変わる事が出来るかどうか、ラービット相手に折られた鼻つ柱と今後どうやって向き合っていくのかが大事な事である。

「……具体的にはなにをするつもりなんだ?」

「【別に特別な事はしませんよ。ただトリオン兵と戦ってもらうだけです……ただし、ちよつと特別なトリオン兵ですけど】」

具体性を求めているので答える。

一昨日の那須隊のバスケみたいな特別な事はしない。純粹にバトルをしてもらう……それに打ち勝つ事が出来たのならば木虎は慢心に近い自信を取り戻す事が出来るようになるかもしれない。

「……よし、頼んだよ。三雲くん」

「【謎のマスクマンなので出来れば名前前で呼ぶのはやめてほしいんですが……】」

「す、すまない。マスクマンくん」

それもそれで困るんだがな。

とにかく木虎に自信をつけて貰う事にしたので私は早速自分の部屋に戻りゲネシス

ドライバーを手にし仮想訓練を行う訓練室に向かった。

『メロンエナジー！ロック、オン！』

「変身」

『ソーダー……メロンエナジーアームズ！』

久しぶりに斬月・真に変身した。

ボーダーのトリガーであれこれやっているがやっぱりと言うかゲネシスドライバーの方が私には合っているな。トリオン体じゃなくてトリオンで出来た鎧を身に纏っているのがなんともしっくりと来ている。

「木虎、連れてきました」

「なんなんですか急に」

「なに、ちよつとした実験だ」

時枝が木虎を連れてきた。

急に呼び出された木虎は若干だが不機嫌そうになっており嵐山さんが実験に付き合つて貰うという体で今から戦ってもらおうという事になり……私と向き合う。

「この夕張メロンと戦うんですか？」

「残念だが私と戦うんじゃない。戦うのはコイツだ」

『ディケイド！』

私と戦うと思っっている木虎だが生憎な事に斬月・真は生身の肉体に鎧を纏っていると同じだ。

戦うことは不可能に近い……まあ、木虎クラスならば完成されたゲネシスドライバーと斬月・真の前には無力に等しいが流石に傷害沙汰は洒落にならない。

「今回はこいつと戦って勝つ……初見の相手だがA級のエースならばどうにでもなるだろう？」

「当然です。こんなピンク色のバーコードの人型トリオン兵なんて1分もあれば蹴散らす事が出来ます」

「随分と大きく出たものだな……じゃ、カメンライドで」

「ディケイドはネオディケイドライバーにカードを挿入する。」

流石に無いとは思いますがクロースビルドになりたくないのである程度の距離を取っておく。

『KAMENRIDE EX-AID MUTEKI GAMES』

「え」

『輝け流星の如く！黄金の最強ゲーマー！ハイパームテキ！エグゼイド！』

「悪趣味な見た目ね」

「ノーノーノー！コレは幾らなんでもダメだ！」

なんでも良いので強いのに変身しろと思っっているとまさかのムテキゲーマーに変身した。

流石にムテキゲーマーはいかん。この部屋、トリオンを消費しない仮想訓練室だから私が解除しない限り半永久的に戦い続ける。

「コレだと流石に弱い者いじめになっってしまう」

「……なんですって?」

他のライダーにカメンライドしてもらおうとすると木虎がピクリと反応する。

木虎から放たれるオーラが明らかに不機嫌そうになっており、私の事を強く睨んでくる。

「このトリオン兵に私が勝てないと言うんですか!」

「まあ、そうだな……ぶっちゃけ誰が相手でも勝つことは不可能だ」

ハイパームテキに勝つ方法は存在しない。あつてもせいぜいこつちもハイパームテキを使うかネビュラガスののをまき散らすかだ

木虎では勝つことが出来ない。迅だろうが太刀川さんだろうが東さんだろうが絶対に勝つことは出来ない。ハイパームテキはそういう存在だ。

「……いいじゃない。このまま続行してください」

「いや、だから……はあ。もう好きにすればいい」

なにを言っても動こうとはしない木虎。

こうなつてしまつた以上はやらせるしかないハイパームテキと戦わせる……いや、違ふか。一方的なりんちになる。

「っ、早い」

「身長・217cm、体重119kg、パンチ力128t、キック力128t、ジャンプ力128m、走力100m0、128秒……圧倒的なまでのハイスペックを持つているがハイパームテキの売りはそこじゃない」

「ハのー」

ハイパームテキの売りは歴代のライダーの中でも群を抜いて高いスペックじゃない。ありとあらゆる攻撃に対して無敵の耐性を得ている事だ。

ガシャコンキースラッシュャーを取り出したので木虎は一旦距離を取ろうとするのだがハイパームテキがあまりにも素早いので一瞬で間合いを詰められる。スパイダーを使って自分の得意な陣形を作り出そうとするがそれよりも早くガシャコンキースラッシュャーで切り落とし更には間合いを詰めて木虎の頭をガツシリと掴んで顔面を蹴り上げて木虎を空に飛ばす

『FINAL ATTACK RIDE EEE、EXTRAID』

それは一瞬だった。

ハイパームテキゲーマーのエグゼイドは姿を消した……かと思えば木虎の背後に立っており木虎は地面に倒れた。するとどうだろうか。【HIT】の文字が無数に木虎から出現して木虎のトリオン体は粉々に砕け散った……が、此処は訓練室なのであつという間に復活する。

「これだと一方的なイジメと変わらない。別のにする」

そう言うとき、エグゼイドは元のデイクイドの姿に戻る。

木虎を相手にちようどいい仮面ライダーなんて居たつけと考えつつも仮面ライダーのカードを確認する。ムゲン魂、ジーニアス、トライドロン……どれも木虎単体で相手をするのは難しいものだ。

『KAMENRIDE WIZARD FRAME DORAGON』

他にも色々あるけどこれならばいけるだろうとカードをベルトに装填した

『ボーボーボーボー！』

仮面ライダーウィザード フレイムドラゴン。

基本スペックもそこまで高くないしチート過ぎる能力も持っていない。コレならばいけるだろう……私はそう思っていたのだが世の中そんなに甘くなかった。

『DORAGOTIMER、SET. UP』

「え、ちよ、それはアカンって」

「デイケイドウィザード（フレイムドラゴン）はドラゴタイマーを取り出し起動した。ウィザードソードガンを片手に木虎に斬りかかるのだが木虎は軽快に避けた……が、詰んだ」

『ウオータードラゴン！』

背後からデイケイドウィザード（ウオータードラゴン）が出現して木虎の背中をバツサリと斬り裂いた。

木虎はなんでも言った顔をしているがウィザードの魔法は何でもありに近いので仕方がないと見守っているとドラゴタイマーの針は進んでいく

『ハリケーンドラゴン！』

緑色のウィザード、ハリケーンドラゴンが出てくる

『ランドドラゴン！』

最後と黄色いウィザード、ランドドラゴンも出てくる。

1人の人間に対して4人のデイケイドウィザード……ここから更にエグい事が出来るのだがそれはただのイジメになるのでやらない。

『ファイナルタイム！オールドラゴン、プリーズ！』

4人のデイケイドウィザードに四方に囲まれる木虎。

ここからウィザードソードガンで撃たれたら一溜まりもないのだがデイケイドウィ

ザードは手を緩めない。フレイムドラゴン以外のワイザードがフレイムドラゴンのワイザードに集結し、ドラゴンの翼を尻尾を爪を頭を生やして空高く飛翔し急降下。木虎の下に潜り込んだと思えば木虎を蹴り上げて天井にまで叩きつける。

「……………」までなのか……………」

仮面ライダーの力がチートなのは前々から分かっていた。

いざボーダーのA級隊員と戦わせてみればここまでの大差を開くとは思っていなかった。見守っていた嵐山さんはあまりの力の差に開いた口が塞がらないのだろう。

「仕上げだ」

『K A M E N R I D E G A I M K I W A M I A M R S』

互角の勝負を繰り広げられないならば圧倒的なまでに力を見せつけるのみだ。

コレで木虎がどうなるかは私は知らない。吹っ切れるかもしれないし折れて終わるかもしれない……………だが、私の知ったことではない。

『極アームズ 大・大・大・大、大將軍！』

最後だと手を緩めはしない。

ディケイド鎧武 極アームズに変身すると大橙丸を取り出して木虎に迫る。空を飛んだり圧倒的なまでのスペックで戦ったりと色々なのを相手にしてきて馴れてきたのか木虎はワイヤーを張るのだがディケイド鎧武は切り裂いていき

『キウイ激輪 イチゴクナイ パインアイアン レモンレイピア シャインライチソード マンゴーパニツシャー ドリノコ ギガドリノコ』

極アームズの売りと言ってもいい無数のアームズウエポンを出現させて何処かの英雄王を思わせるかの様な攻撃をした。

いきなり出現して飛んでくるアームズウエポンに木虎はシールドを展開して防ごうとするのだがキウイ激輪が砕き、イチゴクナイをはじめとする武器が飛んでいき木虎に命中した……。

「……までだな」

結果だけを見れば木虎はただただデイケイドに圧倒されていた。

デイケイドがオーマジオウに続くチートライダーであるから当然と言えば当然だろう。むしろ途中で泣き言を言ったり投げ出さなかっただけマシだろう。

「木虎、お前は天才に見えるだけの秀才に過ぎない。本当の天才は別にいる……お前は確かに強いし努力もして成果を上げているが……所詮は秀才止まりだ」

ロックシードをオフにしてデイケイドを消して変身を解除する。

木虎に対して厳しい事を言う。決して木虎は天才じゃない。天才に近い秀才であり、一言で言えば綺麗に纏まっているだけに過ぎない。

「自分はA級だからとかそんな事を思っているならば本物には勝てない。世の中には常

軌を逸脱した化け物染みた存在が多々いる」

プライドが高いのは別に構わないが世界の広さというものは知っておかなければならない。

少なくとも私は世の中にはほとんどでもないヤバい奴とかが居るのを知っている。

「……嵐山さん、私に出来る事はここまでです。フォローを入れるのか厳しい言葉を投げかけるのは貴方の勝手です」

やれることはやっておいた。未知の敵を相手に何処までやれるのかをやってみてその結果木虎はボコボコにされた。

此処からはチームのリーダーとしてフォローするのかどうか知らないが嵐山隊の面々がどうにかしておかなければならない。私はこの場を去っていった。

「木虎……」

ボコボコにされた木虎に対して嵐山さんは寄り添う。

なにか上手い事を言いたいのだが今の木虎に対してなにを言ってもマイナスにしかない事を嵐山さんは気付いている。次があると言ってもその次がもしかしたら来ない可能性だってある。下手な励ましは傷口に塩を塗るのも同然だ。相手が悪かったなんて言葉は甘えである。

第106話

「トリガーチップ交換に来ました」

「そこにあるから好きにしてくれ」

今日も今日とてトリガー構成を弄りにやって来た。

最早馴れたものだ。雷蔵さんはトリガーチップが置いてあるので好きにしろと言う。コロコロとトリガー構成を変えている事に関して1度トリガーを極めた方がいいんじゃないのかと言われたが私は全部出来る様になりたい。

「雷蔵さん、スイッチボックスのトリガーチップってどれですか？」

「今度はトラッパーを指すつもりなのか？」

そこにあるトリガーチップが全てではない。欲しいトリガーチップことスイッチボックスのトリガーチップを要求すると雷蔵さんは奇異の目を向ける。全部のポジションをすることが出来る隊員を目指すのであって完璧万能手は目指していない。全てのトリガーを8000点、つまりはマスタークラス並の腕前を持っている様になりた

いのである。

「私は全部が出来る様になりたいだけです。それでスイッチボックスのトリガーチップは？」

「スイッチボックスのトリガーチップはコレだぜ」

「あ、冬島さん」

スイッチボックスのトリガーチップを差し出してくれるのはA級2位の冬島隊の隊長で数少ないトラッパーの1人である冬島さんだった。

とりあえずトリガーをパカッと分解してスイッチボックスのトリガーチップをトリガーに嵌め込む。

「何時ぞやは勝手に名前を使って申し訳ありませんでした」

冬島さんとはコレがある意味初対面なので一応は謝っておく。

私も冬島さんも置鮎ボイスで使えるからと嘘の通信を取ってしまった。その事に関する謝罪をしていなかったなと頭を下げる。

「いいって、結果的には死人を出さずに済んだんだからな。それよりもスイッチボックスを使うのか？」

「はい……トラッパーは未知に近いですが、使いこなせる事が出来れば化ける事が出来るかと思ひまして」

「まあ、部隊を組んでる奴等でトラッパーって3人ぐらいだから……折角だし伝授し

てやろうか?」

「いえ、申し訳ないですが自分で試行錯誤を繰り返したいので……スイッチボックスを入れて他のポジションをこなせるかの実験もしてみたいんです」

「トラッパーは何処に居るのか分からない様にさせないといけないからサブトリガーがバググワームタグになっちゃうから可能性を探すのは難しいぞ。トリオンも結構食うし」

「大丈夫ですよ。トリオンならかなりあるので」

「そうか……まあ、トラッパーの戦術のレパートリーを増やす事が出来ればそれでいいけどよ」

トラッパーはなにかと特殊なポジションである。

A級8位の部隊にあるスポッター観測者とかいう高性能レーダーを持った相手を見つける事に特化した戦闘をしないポジションも存在していたりする……なんでもありである。

「失礼します……あ……」

「なんだ修か」

トリガーチップを交換しつつ色々やっていると言っていると修がやって来る。

ここに来たという事はトリガー構成を弄りにやって来たという事なのだろう……。

「修、順調か?」

「少しずつだけど前に進むことが出来るよ」

「少しずつか……他の人達も一歩ずつ前に進んでいる。普通にやっても意味はない」

「うん。だから普通じゃない方法を探そうと思ってるんだ。千佳もトリガー構成を変えたりしてるし僕もトリガー構成を少し変えてみようかなって」

「試してみるのはいいいことだ。だが……お前のトリオン能力だとトリガーフル構成は不可能だし、火力で誤魔化すなんて芸当は出来ない。テクニックで乗り切るしか無いが……そのテクニックを会得する時間は少ない」

次のランク戦まで時間が残っていない。

次のランク戦で力を発揮出来なくても名誉挽回する事は出来るだろうが、次のランク戦で発揮する事が出来るに越したことは無い。

「うん。だからサブトリガーで色々とやってみようかなって」

「……それは誰かからアドバイスを受けたからか？」

「出水先輩が勝つだけがランク戦じゃないって教えてくれて、倒されない様に粘る方法と妨害工作とかを教えてくれて……今からそれを試そうと思うんだ」

「……そのトリガーはスパイダーだな」

「……兄さんはなんでもお見通しなんだね」

「15年もお兄ちゃんをやっていたら色々分かるものだ」

良かったぞとホツとするべきか、修は通常よりも早くにスパイダーの存在に気付いた。

これならば次のランク戦は期待する事が出来るなど安心しつつ雷蔵さんに代わってトリガーチップを入れる。

「仲良いな、お前等」

「兄弟ですから」

仲の良さは嵐山さんのところより上だと自負している。2人で声を合わせて冬島さんに返事をする。冬島さんはプツと笑う。

おかしなところがあつたのだろうか？……まあ、いいか。

「ん？熊谷からか」

トリガーの調整を終えた頃にボーダー支給の携帯端末から電話が入る。

こんな時になんの用事なんだろうと電話に出てみる。

「もしもし」

『あ、三雲くん。今いいかしら？』

「少しぐらいなら問題無いが……なにかあつたのか？」

黒子のバスケの赤司が出せる究極のパスを受けて現段階で出せる最高のパフォーマンスを出すことが出来る。

その時の感覚を覚えてしまったのでその時の感覚をもう一度と思って逆にパフォーマンスを乱してしまっている……いや、それは無さそうだな。

『この前言っていた話を受けようと思うんだけど……小夜が固まっちゃって』

「それは私に相談してどうにかする事が出来る案件なのか？」

『いや、まあ……私としては三雲くんの力を借りたいけどこのままだと……なにか良い方法はないかって』

「……女装？」

『玲も同じ事を言ってたわ……流石にやってくれって』

「それはそれで面白そうだからいいぞ」

『え、嘘!?!』

「ちようどトリガー開発室に居るからトリオン体を弄る事が出来る。トリオン体で女装をすればいい」

『いや、そこまで体を張らなくても別にいいんだけど』

「雷蔵さん、トリオン体を使って女装したいんですけどトリオン体を弄くつてくれませんか？」

そうと決まれば女装するしかない。熊谷が色々と言っているのだが気にする事なく電話を切ると雷蔵さんに話を持ち掛ける。

雷蔵さんはコイツはいつたいなにを言っているのだろうと言う顔をしている。確かに女装する事はオカマやおネエでないと思われない発想だが、こうでもしないとまともに対話をする事は出来ないのである。

「兄さん、なに言ってるの?」

「男性が苦手なオペレーターがいてな、このままだとまともにコミュニケーションを取ることが出来ないらしい」

「で?」

「トリオン体を女性に改造して貰おうと思つてな……ここならば自由に弄り放題だ」

奇妙なものを見る目で修も接してくるので何をするのか教える。

「トリオン体の改造……実際の身長より10cm程大きくしたり出来ますか?」

「出来ない事はないけども、実際の肉体との違和感があるから上手く動かすにはそこそこの訓練がいるよ」

トリオン能力をどうにかする方法は無いので、トリオン体を弄くつてみようと思つてみる修。

残念な事にトリオン体を下手に弄つたら生身の肉体との差異で違和感を感じて使いこなすにはそれ相応の訓練が必要だと言われて断念する。訓練が不要だったら身長約180cmの修が見ることが出来たのか……私より大きな修は無しだな。

「修、次の対戦相手の二宮隊だが女性に対して免疫が無い隊員が居るらしいぞ」
「……僕にも女装しろって言うの？」

さあ、そんな事は言っていないよ。

とりあえず修からトリガーを借りて雷蔵さんに渡すと無言のサムズアップをした。任せると言っており、目にも止まらぬ速さで修の女装バージョンのトリオン体をチューンナップする。

「出来たぞ……元が良いからそこまで弄らなくてもいい」

「修は中性的で母さんに似ているからな」

「……………」

修は色々と言いたいことがあるという顔とやるしかないのかという諦めの顔をする。

ここで駄々を捏ねてもなにも変わらない。トリガーを起動して貰えば修の胸は大きくなり身長が5cm程小さくなり、ショートボブの髪型に……

「元と対して変わらないな」

修はトリガーを起動して女体化した。

元の顔が中性的なので髪型を少しだけ弄り胸を盛って背を少しだけ縮ませた……修が修くんじゃなくて修ちゃんの世界線か……乙女ゲーの主人公だな。悪役令嬢的なのも居るし爽やか系のイケメンもモツサリとしたイケメンも謎のイケメンもいて可愛い

女の子の幼馴染もいる……乙女ゲーの主人公だ。

「私はこんな感じで頼みます」

容姿が手塚国光なので安易な女体化は出来ない。

こういう感じの見た目にしてくれと紙に書くと雷蔵さんは任せると目にも止まらぬ速さで仕上げしてくれる……頼んでおいてなんだけどもこの人、疲れてるんだろうか。深夜テンションでモノを言っているからな……。

「お前の性癖欲望通りに仕上げた」

「よし、トリガー、オン！」

確実にハイになってしまっている。しかしそんなのは関係無いとトリガーを起動する。すると目線が5cm程低くなる。

私の身長が181cmでマイナス5cmだから175cmぐらい……女性基準で言えば物凄く背が高い。

「ふむ……まあ、こんな感じだろうか」

鏡を見て呟く。雷蔵さんに頼んだ通りの仕上げになっている。

声の方もどうかしたいが流石に声帯を弄るのには時間が掛かる。修は梶裕貴ボイスなのでギリギリ女装はイケる筈だが私は置鮎龍太郎ボイス、ゴリゴリの男の子で声も男だ……。

「む……もうちよつと大きいのが良かったんだがな」

「馬鹿を言え、ヒンニュー教の教えも受けてるんだ……藤丸ののより一つカップが下なだけで充分デカいんだぞ」

とりあえず女になったらやることとして胸を揉んでみる。

修以上の巨乳になってるので堪能しようと思っただが……なんか違う。モノホンのおっぱいを揉んだ事があるので違いが分かる。なんかシリコンみたいなのが埋め込まれている感じがする。

「冬島さん、どうすか？」

「え、えええ!?お、俺に振るのか？」

雷蔵さん的には渾身の出来である修ちゃん。

冬島さんに評価を頂いてもらおうとするのだが冬島さんは修に視線を合わせようとしない。このおっさん、JKに対して耐性を持ち合わせていないからJKになった修をマトモに直視する事が出来ていない。

「冬島さん、感想をお願いします」

「いや、まあ……に、似合ってるよ」

「直視して答えるんだ！修の女装が似合っているか直視するんだ!!」

「……に、似合っているんじゃないですかね……」

視線を合わせろ、ヒゲ。

とりあえず修の女装はJKに対して耐性を持たない冬島さんに対して効果を発揮している。コレならば二宮隊の辻にも通用するんじゃないかと思つているとトリガー開発室に出水がやって来た。

「メガネくん、中々来ないからどうしたつて、ええ!？」

「い、出水先輩……」

「メガネくんの股間のレイガストがオフになつた……嘘でしょ!？」

「あ、あの……変、ですよね」

「い、いや、変じゃねえ……似合つてるぜ」

ここで修を褒めるとは出水はホモじゃないかな。

モジモジと赤らめている修を出水は直視する事が出来ていない。それだけ修の女装のクオリティが半端じゃないということだ。とりあえず他の反応も見てみたいので修を引き連れてソロランク戦が行われるブースを指す。

「さて……ソロランク戦をするか」

「え……反応を楽しむんじゃないやなかつたの?」

「何事もなければそれはそれでよし……」

「あ、三雲先ば……い?」

ソロランク戦を行うブースに立ち寄れば早速引つかかった男がいた。

草壁隊の緑川だ。手を上げて三雲先輩と声を掛けようとするのだが修の股間のレイガストがブレードモードからシールドモードに変化しており、胸もそこそこ大きいのでアレ？つと首を傾げる。

「三雲先輩だよね？」

「ああ……」

「なんか縮んでる。てか、女の子になってないですか!？」

「……色々とあつたんだ。色々と」

「話せば長くなるから簡単に言えば二宮隊対策だ」

「……ああ、辻先輩か……って、冬島さん……じゃないよね」

息を吐くかの様に嘘を付くと緑川は察した。辻の女性に対する耐性はそこまでののか。

今度は隣に立っている私に気付く声からして冬島さんを頭に浮かべるのだがヒゲのむさつ苦しいおっさんがこんな美少女の訳ないかと否定して誰なんだろうと首を傾げる。

「私が誰かなんて気にしなくてもいい。それよりも他に誰か居ないかな？修の女装をどう反応するかみてみたいんだ」

「……オレ、この三雲先輩ならイケる」

「止めとけ。おちんちん付いてるんだぞ」

「その見た目でおちんちんとか言わないでよ……」

ホモの道は修羅の道だ。この修がイケると緑川は言うがトリオン体だからおっぱいがあるわけで、本来は中性的な顔の修である。忘れちゃいけない、この修にはおちんちんがついている。可憐な見た目になっている私がおちんちんと言っているのを緑川は気にするがそれを言えば私にだっておちんちん付いている。

「む……オサム!？」

「あ、遊真先輩！」

修の股間のトリガーがオフになっており生えていると緑川に言っていると二人目のターゲットもとい遊真が引つかかった。

まずいとところを見られたと修は視線を外すのだが遊真がジツと見つめており視線を合わせない様に必死になっている。

「なんでオサムが女に……」

「私がやった……予想以上に似合っており私も若干引いている」

（ここまでハマるとは思いもしなかったよ（すつとぼけ）

ジツと修を見つめている遊真は修の両手を握ると遊真は口を開いた。

「修、結婚しよう！」

「なあっ!?なにを言っているんだ！」

「冗談だよ、冗談……………アリだな、メガネちゃん」

「良かったな、修。高評価の嵐だぞ」

「そ、そんな事を言われても全然嬉しくないよ！」

やはり修には女装のセンスがある。

第107話

2月14日（金曜日）この日がなんの日かと聞かれればそう、男子待望のバレンタインデーである。

「おお、スゴい事になってるな」

今日でテストが最後だ。米屋は詰め込むだけ詰め込んで貰っているので補習を受けるルートかそれともそのまま進級なのかは分からない。

本気で占えばどちらの未来に傾くのが分かるのだが、そこまでしてやる義理と云うものは何処にも無い。学校に登校して下駄箱の前に立つとすぐ近くの1年生の下駄箱にコレでもかとチョコが置いてあった。

「三雲さん、袋かなにか持ってないですか？」

チョコの受け取り主は京介だ。流星はもつさりとしたイケメンだと思っていると京介は私の存在に気付く。

「テスト期間だからそんなのは持ってきていない……荷物運びなら手伝ってもいいぞ」「いや、そこまでしなくてもいいですよ……それよりも三雲さんも大変な事になるん

じゃないですか？」

「いやいや、私はそんなにモテモテじゃないからな」

「……そうすか？」

京介や嵐山さんとモテ力は違う……嵐山さんのモテ力は異次元過ぎるからな、度が過ぎるシスコンブラコンだけど。

京介は私が大量にチョコを貰っていないのを不思議そうにしている。ラブレターは読まずに捨てる、バレンタインデーのチョコは一切食べないと色々やって好感度がやや下がりなんだ。大体、私みたいな偏屈な人間を好きになる人間は早々にいない。

「それにな、京介……どれだけ周りからチョコを貰ってもホントに欲しい人から貰えなきや負けも同然なんだ」

「……深いッスね」

深いぞ……そして愛は重いぞ。京介はチョコを袋に入れていたので手伝う事にし、持ってきていた紙袋に入れた。

京介は相変わらずのモテ具合……修もこれぐらいモテるメガネだったらいいんだがな。

「よお、バレンタインデーのチョコは貰えたのか？あ、母親とか従姉妹からののはノーかな」

教室に向かうと米屋が紙パックのフルーツ牛乳を飲んでいた。

私が登校してきた事に気付いた米屋は本日の話題であるバレンタインデーのチョコに関して言ってくる。

「米屋、バレンタインデーだからって浮かれるな。今日がテスト最終日だから油断せずに気を引き締めてだな」

「堅えよ。もうちよつと気を楽にしようぜ」

「ふう……今のところは0個だ」

「なんだかんだで悪ノリしてくれるお前大好きだぜ」

男にモテても仕方がない事だな。

米屋はチョココレートを貰う事が出来たのかどうか聞いてくるので答える……ついでだからとチョココレートを貰えたかどうか聞いてみる。

「月見さん、オペレーターの人からチョコを貰うことが出来るからとりあえずは1個、ああ、葉もくれるから2個になるな」

「お前、さつき従姉妹はノーカンと言ってなかったか?」

「どつちにしろ1個は貰える事には変わりはない」

「……1つ、言っ正しいか?」

「なんだ?」

「部隊チームを組んでる人は基本的にはオペレーターがいる。オペレーターは女性が主で、部隊チームを組んでるボーダー隊員はオペレーターの人からとりあえずチヨコを一つ貰えるんじゃないのか？」

「……それもそうだな。オペレーター云々無しでチヨコを貰えりやそれに越したことはねえんだけだよ」

「大体米屋、親愛じゃなくて性愛のチヨコを貰ったとしてどうするつもりなんだ？」

チヨコが欲しいだなんだの言っているが親愛のチヨコならまだしも異性としてのチヨコを渡されたらどうするんだ？

「いや……オレにはランク戦って大事なものがあるからな。恋人はまだいいや」

それならばモテたいだのチヨコが欲しいだの色々と言ってるんじゃない。

モテつつもオレにはボーダー一筋だと言う男らしさを見せたいのだろうか？

「おーっす、おはよう」

「おう、来たか……チヨコは貰えたか？」

「テストの後に貰える」

米屋とチヨコ云々の話をしていると出水がやって来た。

やはりなんと言っても話題はバレンタインデーである。チヨコを貰う事が出来たのかどうか尋ねてみると出水はサラッと受け流す。

「この後に貰えるって？」

「柚宇さんが今先輩と一緒にフォンデュシヨコラ？とか言うのを作ってるんだ。後で部隊の皆で食べようってなってるな」

「おっ……今先輩と合作ならめっちゃ美味そうなフォンデュシヨコラが出てきそうだな」

「多分、出水が言っているのはフォンデュシヨコラじゃなくてフォンダンシヨコラの事だろう。」

「フォンデュシヨコラならばチヨコレートフォンデュの事を表しているから……チヨコレートフォンデュのチヨコはカウントしていいのだろうか？」

「っと、チヨコを貰えるのが確定しているからって浮かれるなよ。今日を乗り越えないと進級できないんだから」

「分かっているって……で、どの辺だっけ？」

「現文の……」

チヨコ云々で浮かれている米屋達の意識を現実に戻す。

米屋に最後の詰め込みをする。この詰め込みが赤点回避の鍵になるからここで手を抜いてはいけない。1時間目の現文のテストのここを押さえておけば問題無いであろうところを教える。

「ふう〜……や〜……つと、終わった」

2時間、3時間と時間が過ぎて全てのテストを終えた。

米屋はこれまでの地獄の様な詰め込みからオサラバする事が出来ると両手を上げてバンザイする。

「忘れちゃいけないが赤点があれば補習だぞ」

本当にデッドオアライブのギリギリのところを綱渡りをしている米屋。

来年は卒業が掛かっており、ボーダー推薦という謎の枠を使って進学するのなら私は一般入試で別の大学に入るつもりだ。三門大学にボーダー推薦とかで入れればトリガー研究室とかいう謎の部署に配属されると言う噂があるし、私が勉強したい神智学が勉強出来ない。

「レポート形式の課題はどうなってるんだ？」

ついでだからと私が居ることで発生したレポート形式の課題について尋ねると米屋はポンツと私の肩に手を置いた。

「折角、テストが終わったんだぜ。パーツとやろう、パーツと……餃子の王将奢るぞ」

「槍バカ、お前……」

この様子だと全くと言って手を付けていないな。パソコンを使ってもいいタイプのレポートなのでギリギリまで或いは出水のをコピペしたりするつもりなのだろうか。

まあ、今月と来月頑張れば3年生に進級してレポート形式の課題をしなくてもいいからコレは見捨てても問題無い案件だろう。

「悪いが今日は用事がある、遊んでいられない」

「あく……あんま根を詰めすぎるんじゃないやねえぞ？」

「別にそんな大層な事じゃない……」

「メガネくん弟も似たような事を言ってる……やっぱり兄弟なんだな」

出水と米屋はテストが終わったのでパーツとしたい。その気持ちが分からないと言えは嘘になるが自分の気持ちを制御出来ないといけない。

昼飯は何処か外で食べようぜと2人で話し合いをしているのでそれを無視して下駄箱に向かうと熊谷と鉢合わせする。

「み、三雲くん！その、コレ……」

「……悪いが受け取るつもりは無いぞ」

熊谷はチョココレートを私に差し出してきた。

去年と似たような状況になっているのでチョコを受け取るつもりは無いと熊谷を横に上履きから靴に履き替える。

「那須隊の皆で作ったの。三雲くんにお礼をしたいって」

「私は別に礼を言われる為にやっているんじゃない。自分がそうすべきだと思っている

からやった事だ」

那須隊からお礼を含めてのチョコだろうが受け取るわけにはいかないんだ。

自分で撒いた種だから自分で回収している……無視する事が出来なかつた私はなんだかんだで甘い人間である。那須隊の皆からなんて聞けば泣く人達が居るだろうが私にも私の事情があるので受け取らない。



「おいーつす、チョコくれ」

「はいよー！チョコー丁！」

学年末テストを終えて数時間後。

昼は豪勢にしようと餃子の王将で飯を食った米屋はチョコを貰いに玉狛支部にやって来た。宇佐美は米屋が来る事を予測していたのでチョコチップクッキーを渡す。

「今年はレイジさんとおばさんと一緒に作ったから自信作だよ」

「おお！つて、おばさんつて？」

「私のことよ」

「……あ、どうも」

チョコチップクッキーを貰って舞い上がる米屋だが友達のお母さんからのチョコだ

と分かればなんとも言えない顔をしている。

相変わらず若いけどこの人、40過ぎのおばさんなんだよなと早速米屋はチョコチップクッキーを食べる。市販のよりも美味しいなと頷く。

「三雲くんはどうしたの？おばさん、チョコチップクッキーを用意してるんだけど」
「それが用事があるからって昼飯も一緒に食ってくれねえんだよ」

フォンダンシヨコラをいただきに行っている出水はともかく貴虎が来ていない事を若干だが不思議がる宇佐美。

今日は付き合いが悪いと言っていると玉狛第二の面々がやって来る。

「よー、メガネボーイ！」

「あ、どうも……今日はどういった御用で？」

「バレンタインだからな。チョコを貰いに来たんだ……メガネボーイはチョコを貰う事が出来たか？あ、親チョコはノーカンな」

「一応は貰いました」

「学校で配ってる奴がいたんだよな」

親愛のチョコだがチョコである事には変わりはない。

遊真が美味いと市販のチョコレートを頂いていると宇佐美が私からだよと修達にチョコレートをプレゼントする。

「バレンタインデー、中々に良い催しだな」

「本当はお菓子メーカーがでっち上げたって兄さんが言ってたっけ」

「どちらにせよこんな美味しい物が貰えるのは良いことですな」

「空閑、貰うのはいいがお返しはちゃんとしなさいといけないぞ。来月の14日はホワイトデーで返さなさいといけないんだ」

「期待してるわよ」

ホワイトデーは大変だなと修は少しだけ冷や汗をかいた。

「チカからはないのか？」

「えっと……腕に自信が無いからちよつと変わった物にしようかなって」

「ほうほう、変わったものですか」

なんだろうとワクワクしていると千佳は冷蔵庫を開く。

冷蔵庫のトレイに乗せているチョコをかけたフルーツの盛り合わせを出した。

「チョコフォンデュにしようかなって思ったけど、チョコフォンデュの機械が高くて……」

「ありがとう、千佳」

「フルーツチョコ、ありがとうたく頂くよ」

チョコに浸されたフルーツを遊真達は頂いた。

バレンタインデーは甘くて美味しいなど遊真はしみじみ頷いている。

「しっかし、三雲の奴はノリが悪いよな。テスト明けなんだからパーツとしてやろうと飯を奢ってやるって言ったのに、付き合い悪いぜ」

「仕方がない事ですよ。今日はバレンタインデーなんですから」

「バレンタインデーならもうちよつと浮かれるだろう」

「いや、ですからバレンタインデーのデートを真剣に楽しもうとしてるんですよ」

「……え、ごめん。お前、今なんつったの?」

ピタリと固まる米屋。修から言われた事に対して脳の処理が追いついていない。

聞き間違いかなにかだと思つた米屋はもう一度修になんて言つたのかを聞き返す。

「兄さんは今日のデートを楽しもうとしてるんですよ」

「……待つた! あいつ、彼女居るのか!」

デートをする相手が居る事に米屋は驚く。米屋だけじゃない、宇佐美も驚いた顔をしている。

そういえば誰にも言っていないなと思いつつも修は貴虎に彼女が居る事を教える。

「なんだよーすけませんはい、知らなかったのか?」

「貴虎さんは彼女が居ますよ?」

貴虎に彼女が居ることを遊真と千佳は普通に知っている。

もしかして知らないのオレだけなの？となるのだが宇佐美が知らないのを知って少しだけホツとする。

「三雲の奴、彼女が居たのかよ……熊谷とか小佐野とかと一年の頃にいい感じの雰囲気醸し出してたし」

「貴虎の彼女は中学の頃からよ」

2人の内のどちらかかと想像する米屋だが母は違うと言う。

貴虎に彼女が出来たのは中学の頃でありボーダーの隊員とは一切無関係である。

「三雲の奴を口説き落としたりって相当だぞ……どんな彼女なんだ？」

「ただいまー」

話題は当然と言えば当然なのだが貴虎に切り替わる。

チヨコを貰えてハッピーとか浮かれていたのが嘘になるぐらいに真剣な顔で貴虎の彼女について聞いてくる。すると小南が学校から玉狛支部に直帰してくる。

「米屋じゃない。チヨコを貰いに来たの？全く、仕方がないわね」

「んなの今はどうだっついていいんだよ！三雲の奴に彼女が居たんだよ」

「な、なんですって!?!」

修はこの時、デートに行つたと言うのは間違つてしまったと気付く。

口が軽そうな米屋と騙されてうっかり喋りそうな小南に兄である貴虎に彼女が居る

ことを知られてしまえばもう遅いのである。

「ど、どんな人なの？」

案の定と言うべきか、小南は貴虎の彼女がどんな人物なのか尋ねてくる。

修は言っている事なのだろうかと考える。こういう感じの悪ノリに近い展開を貴虎は恐れてなにも伝えていない。

「どんな人……人ね……綺麗系の女性よ。才色兼美でどうして貴虎を選んだのか謎なくらいにしつかりとした子よ」

「彼女とか居なさそうな雰囲気醸し出してるのに意外としつかり、いえ、ちゃっかりとしてるのね」

母からどんな女性なのか聞くと意外そうな顔をしている。

何処となく小南もソワソワしている。ボーダーの女性隊員はアマゾネスの巣窟みたいなものだが、やっぱり心は乙女である。恋愛に関して初心なところもあり、恋話には敏感である。

「どんな容姿なんだ？」

「……雪みたいで綺麗な人？」

「いや、そういう抽象的な感じじゃなくて写真とかないのか？」

抽象的な形で貴虎の彼女について修は答える。

しかし米屋はそんな抽象的なものでなく具体的な容姿について尋ねる。写真の一枚でも無いのかと聞けば修は普段遣いのケータイを取り出して何処かに画像があったかなと探す。

「あ、ありました」

「見せて!」「見せろ!」

「あっ!?!」

なんとか貴虎の彼女の写真を見つける事が出来たのだが小南と米屋が詰め寄る。すると修は手を滑らせてしまい足元に携帯を落としてしまう。

隣りからの大事なメールがある携帯なので壊すわけにはいかないと直ぐに拾うと小南と米屋は修を間に挟んで携帯を覗き込む。

「すみません。今の衝撃で画像が見れなくなっちゃいました」

「そんな事あるのか!?!」

「他の写真も全滅です……修理に出したら直るかな」

「いい機会だからスマホにしなさいよ。コレからガラケーは使い物にならないわよ」

大事な思い出もいいけども機能性も大事な事であると母は言う。修の携帯はともかく貴虎の彼女に関する写真を見ることが出来ない。

貴虎の彼女がどんな女性なのか、ここまで来たら顔を知らりたいのが思春期真っ只中な

小南と米屋である。

「どういふ感じに出会ったの?」

顔写真が無理ならばと馴れ初めについて尋ねる。

一方的な告白かそれともラブラブな波動を出しているのか、他人の事だからか逆に物凄く気になってしまふ。しかしそれがいけなかった。世の中には触れてはいけない禁断の部分もあり、修や千佳は困った顔をしている。

「……覚悟は出来てるの?」

「え?」

「あの娘の過去は重いわ。貴虎に依存しても当然なぐらいには重いよ。貴虎の彼女がどんな人物なのか気になるのは勝手だけれどそういう悪ノリで聞いていい領域と聞いたらダメ、触れない事自体が正しい事だつてあるのよ」

母は知っている。あの日、戦極ドライバーと共に彼女を連れ帰つて来たのを。

そこから大恋愛とストーキングに発展する色々と言いたい話があるのを。小南達も聞いちやいけない事を聞いているんじゃないのかと思わず考えてしまふ。実際のところは色々と言つて重たい女になってしまうのだが、それを聞く勇気が大事なのである。

「どんな人なのかしら……修、兄貴に連絡取れないの?」

「取ることは出来ませんが、ボーダーに対していい顔をしないので会うことは不可能で

す

貴虎以上にボーダーに対して色々と思うことがある貴虎の彼女。色々と重たい女だ。

絶世の美女である事には変わりはないのだがそれに関してはさておき、どうにかして貴虎の彼女に会ってみたいと言う欲求を満たしたい。

「修、兄貴に連絡取ることが出来るでしょ！今何処に居るのか割り出す事が出来ないの？」

「多分、蓮乃辺市で映画を見に行っていると思いますよ。映画を見に行く時には決まっています」

ベラベラと語ってしまう修。

何処に貴虎が居るのか分かっていればやることは唯一つだと小南と米屋は領いて玉狛支部を後にする。

「あのつ、ホントにそういうのは良くないと思いますよ！」

「一目だけ見るだけなんだから別にいいでしょう」

「そうそう。別にちよっかい掛けるわけじゃねえんだからよ」

修も小南と米屋を追い掛けて蓮乃辺市に向かう。

この辺りで言う映画館といえばここしかないと大型のショッピングモールにつくと早速映画館に向かう……のだが貴虎の姿は何処にも見当たらない。

「修、なんの映画を見に行くって言ったの？」

「映画を見に行くとしか聞いていませんので、なんの映画なのかは……」

「こうなったら最終手段だ。三雲の奴に電話をするぞ！」

貴虎に電話をしたらそれこそ厄介な事だと逃げられるんじゃないだろうか？

修はそう考えたのだが、それ以上言っても米屋は止まりそうにないので電話をかけるのだが貴虎は出てこない。

「映画上映中ですから、携帯の電源を切つてると思います」

「そこは普通、マナーモードじゃないの……なんだか大いなる意志が三雲の彼女に会わせない様にしているみたいね」

「今上映中の映画はつと……ああ、くそ。最低でも1時間は上映してる」

「1時間も……ちよつとその辺のコインゲームが出来るゲーセンで時間潰して来ようかしら」

既にチケットは完売しており、映画館の中に入ることはできない。

小南はどうやって1時間を潰すのかを考えていると警報音が鳴り響く

「なに？なに？今度はいつたいなにが起きたってのよ！」

「火事でも起きたっていいのか!？」

何事かと警報音が鳴り響き周りにいる一同とざわめく。

警報音の正体は実は迷惑系 You Tuber 的なのが警報音が鳴るベルを押しただけで火事とか何処かが崩れたといった災害の様な事は起きてはいない。が、その事にまだ気付いていないので一同は避難する。

「あ、兄さんだ！」

「え、どこどこ？」

「あそこにありますよ」

「あそこって……ダメだ、人混みが多すぎて見えねえ！」

警報音が鳴り響くのでそれに従い避難をする修達。

映画館内から多くの観客達が出ていく中で修は貴虎と貴虎の彼女を見つけるのだが小南と米屋は何処に2人が居るのが見当たらない。

「くそ、迷惑系 You Tuber め……」

警報音の正体は迷惑系 You Tuber で火事とか一切起きていなかった。

米屋達は貴虎を完全に見失ってしまった。

「折角だし、なにか食べましょう」

完全に見失い何処にいるのか分からないので半ば諦めモードに入る小南。

折角大型のショッピングモールにやってきたのならばなにか食べて帰ろうかと考えてこのショッピングモールでしか売ってないアイスクリーム屋に向かうと貴虎を発見

する。

「いたあ!!」

「ばっ、声が大きいで!」

見失った貴虎を発見した小南は貴虎を指差す。

幸いにも貴虎は小南達の存在に気付いていないのだがここで米屋があることに気付く。

「あいつ、一人だな」

貴虎は一人でアイスクリーム屋に並んでいる。

彼女は一緒なんじゃないのかと思っているとフードコートの座席に修は視線を向ける。

「あ、居ましたよ」

「え、どこどこ?」

「ほら、あそこに」

「だから何処に居るのよ!」

修は無事に彼女を見つけ出す事が出来たのだが小南はまだ認識していない。

顔すらまともには知らないのだから無理もないのだが、ここで米屋は名案を閃く。

「三雲の奴がアイス買ってくるなら三雲を着けとけば分かる筈だ」

「あ、それもそうね」

貴虎を見張つていれば何れは貴虎の彼女に会うことが出来るともつともらしい答えを出す。

幸いにも貴虎が並んでいるのはアイスクリームの店、選べば商品があつさりと出てくる。映画館で1時間待たなければならぬ事を考えればアイスクリーム屋でアイスを買う時間ぐらいだろうという事も無い。数分後、貴虎はアイスクリーム屋でアイスを2つ購入する。

「つく、絶妙に影になつて見えないわね」

貴虎を認識することはなんとか出来るものの、貴虎の彼女が他のお客と重なつて絶妙に見る事が出来ない。

貴虎にちよつかいをかければ最後、厄介な未来が待ち構えているので下手に近づく事は出来ない……がなんとかして彼女を見たい2人は日頃トリオン体で鍛えた隠密行動で気配を消しながら貴虎に近付こうとするのだがベビーカーと軽く接触してしまう。

「ううう、ああああ!!」

「ああ、やつと眠つたのに!」

「す、すんません!!」

ベビーカーと接触したショックでベビーカーの上で眠っていた赤ん坊が目覚めて泣

き出す。

母親と思わしき人物はガラガラを取り出して鳴らすのだが中々に泣き止もうとはしない。

「ほ、ほくら、カチューシャを取ったらイケメンだぞ〜」

「それ効果あるの？ベロベロバーでしょ、普通は」

カチューシャを外してイケメソになる米屋。

なんとかして泣いている赤ちゃんを泣き止ませると良かったと2人はホツとして、貴虎に接近をしようとするのだが既に貴虎は居なくなっていた。

「2人が赤ん坊を泣き止ませてる間に移動しましたよ」

「メガネボーイ、分かっているなら追い掛けてくれよ！」

「何処に行ったの!？」

「あの……ホントにこういうこと良くないと思いますよ」

「だって気になるじゃない。彼奴が選んだ彼女がどんな奴なのか!」

悪ノリで顔を見せると言ってくる小南達を良くないことだと指摘する修だが気になっってしまうものは仕方が無い事だ。

なんとかかして顔の1つでも揉んでやろうと修が最後に見た貴虎の情報を元に探すと貴虎を発見するのだが突風が吹き荒れる。

「なんなの！アイツの彼女を私達に会わせない大いなる意志でも存在しているの！」
「くそ、吹き荒れるゴミが絶妙な位置で三雲達が見えねえ！」

突風に負けじと立ち向かう小南と米屋。

すると1台の黒塗りのベンツが目の前に止まる。

「おう、やっと見つけたぞ」

「へ？」

如何にもヤクザ風な男が黒塗りのベンツから降りてきたと思えば小南と米屋と修を囲む。

なんなのと思っていると三人はグルグル巻きにされて黒塗りのベンツの中に叩き込まれる。

「ボス、例の3人組を……え、人違い？」

「ムー！ムー！」

私達になんの用事なのよと叫ぶ小南。

ジロリとヤクザ風な男に睨まれても動じることにはせずに口につけられたガムテープは剥がされた。

「すまねえな。人違いだ……詫びと言ってはなんだが受け取りな」

ヤクザ風な男から2万円ずつもらう修達。

一体何だと言うんだと言いたかつたがベンツから追い出されるとベンツはさっさと去っていった

「いったい、どんな奴なんだ三雲の彼女って……」

「もう諦めましょう……会うなって言ってるのよ……」

結局米屋と小南は貴虎の彼女を一目も見ることが出来ずに終わった。

尚、この後貴虎は彼女とともに好み焼き屋「かげうら」に向かいたまたま店の手伝いをしていた影浦と遭遇するのだが、既に諦めてしまった2人には関係のない話である。

第108話

2月15日（日曜日）修達はここまで原作通りに事が進んでいきB級上位に食い込む事に成功した。

原作通りに事が進んでいくのならば此処で1度上位の壁に阻まれる。遊真1人だけではボーダーのランク戦を勝ち抜き事が出来ないと証明される……が、とある転生者もとい貴虎がほんの僅かながら時計の針を進ませている。

「どうかな？」

ラウンド4のB級上位戦がある為にボーダーの本部に足を運んでいる玉狛第二。千佳は貴虎から色々と言われた結果、幾つかの答えを導き出す事に成功した。

現状ではとある人物しか使っていないサブトリガーが鍵だと示された千佳は一先ずはチームを組んでるB級A級のデータを洗い浚い調べた。

その結果、三輪のみが鉛弾を使っており千佳は鉛弾を入れて色々と試行錯誤を繰り返した。その結果、ライトニング+鉛弾のコンビを見つけ出す事に成功した。的に向かつて鉛弾のライトニングを撃つとガコンと六角形の円柱型の鉛が出現する。

「なるほど、こういうのもあるのか」

基本的には遠距離から狙撃して相手を撃ち倒すのが狙撃手でサポートをする事は無い、というよりはサポート出来ることが少ない。

過去にとある人物が武器のみを狙撃して破壊していたりしたが、残念な事に千佳の現段階の技量ではそれをするのは不可能である。というかアイビスで撃つた場合は武器どころか武器を持つてる人ごと撃ち抜いてしまう。

「オサムのワイヤー戦法もあるし、チカの黒いライトニングは初見じゃ防ぎようが無いから今回もイケそうだな」

「えっと、それなんだけどね遊真くん、修くん……私、人を撃とうと思えば撃てると思うの」

「む？人が撃てないから、こうして色々と試行錯誤してるんだろ？」

人を撃つことが出来るならば膨大なトリオン能力に物を言わせて相手を潰す事が出来る。

しかし千佳は人を撃つことが出来ず、修達はその事に関して深く踏み込まない。人を撃つことが出来る方がハッキリと言えば異常なのである。人を撃つことが出来るのなら最初からあだこうだと色々として試行錯誤を繰り返さずにトリオン能力に物を言わせた戦法を取った方が色々といひ。テクニクよりも火力のゴリ押しだけで勝てるほ

ど千佳はトリオン能力に恵まれている。

「貴虎さんが私は撃ちたくないから撃たないって言われたの……色々と考えてみて、私は心の何処かで撃ちたくないって思ってる自分と遊真くん達が限界ギリギリにまで追い詰められたりすれば迷わず発砲する自分が居るって気付いたんだ。撃つたらなにを言われるか分からなくて怖いって思ってたけど、怖いのは皆一緒なんだって最近思い出して……」

現在はランク戦という命の保証がある軍事訓練の一環だが、全ては近界民に対して色々と備える為の訓練だ。

遊真や緑川のようにランク戦をeスポーツ感覚で遊んでいる者も居れば近界民に対して復讐をしようと躍起になっているものもいれば自衛の手段としてボーダーに入隊している人も居る。

「だからね……撃つよ」

「千佳……」

ボーダーに入隊したいと言った時と同じぐらいには覚悟を決めている千佳。

数日の間でこれほどまでに変化があったのは貴虎の影響だなと修は気付くのだが口にしらない。とにかく今は自分達がやるべき事をやるんだと気持ち新たにする玉狛第二であった。

「お、こつちで見るんだな」

一方の貴虎はと言うとランク戦を観戦すべく観客席座っていた。

出水は玉狛支部で見ると思っていたので少しだけ意外そうにしている。

「私は玉狛支部の人間じゃないからな、その辺りは勘違いしないでくれ」

修達の味方ではあるが近界民の味方かと聞かれれば答えはノーである。貴虎はそれはそれ、これはこれと線引きはしている。

「でもなんだかんだで今回は見に来てるんだな」

「まあ、色々と言ったからな」

最初の解説はともかくとしてラウンド2と3は見ようとする素振りしか見せなかった。

今回は千佳や修達に色々と言ったのでそれがどの様な結果になっているのか気にならないかといえば嘘になる。

「メガネくんはスパイダーで戦う方法があるって事に気付いた。唯我との実戦でスパイダーでワイヤー陣を貼ることが出来たから……今回は成功するだろうな」

「今回はか？」

「ああ、今回はだ。ボーダーの訓練は死なないから直ぐに学習する事が出来る。村上先輩程じゃないが数日ありや対策の1つや2つ用意する事が出来るだろう」

ボーダーの死なない実戦形式のランク戦は割とバカにする事は出来ない。1回目は成功した戦法でも2回目以降からは対策の1つや2つ用意されている。

「因みに出水的にはワイヤー陣をどう突破する?」

「メテオラで焼き尽くす……そう考えりや今回の相手は悪いな」

ボーダーで2番目のトリオン能力を持っている二宮隊の二宮、適当だが威力のあるメテオラをぶっぱする影浦隊の北添がいる。

どちらもメテオラを標準装備としており、もしかしたらワイヤー陣をメテオラで焼き払うといった可能性も無いことも無い……が、それは限りなく低い可能性である。

「まあ、玉狛第二には後幾つか新戦法が存在しているから問題はない無いだらう」

「つてことはあのトリオン怪獣がなんか見つけたのか?」

「私のサイドエフェクトでは見つける可能性が90%を超えているし、仮に見つけ出す事が出来なくても千佳ちゃんを撃つことが出来る。きっかけになる火種は与えたんだからな」

見る人が見れば雨取千佳は人を撃つことが出来ないと判断する。

故に今回限りだが雨取千佳は人を撃つことが出来ないと思い狙撃に対する警戒心を僅かながら弱める。それこそが悪手、千佳が撃つアイピスは基本的には防げない、回避するしか道は無いものである。

「遅れて申し訳ありません！」

そうこうしている内に観客席に大勢のC級やB級がやって来る。

もうすぐランク戦が開幕するのに中々に実況者が来ないなど思っているやっつきたのは嵐山隊の綾辻だった。嵐山隊の事務処理の仕事が忙しく、時間ギリギリのところ間で間に合ったといったところだ。

「B級ランク戦夜の上位戦、実況は私、嵐山隊の綾辻です。解説は風間隊の隊長の風間さん、加古隊の隊長の加古さんにお越しに頂きました」

「どうも。あ、風間さん、綾辻ちゃん、1日遅れだけどバレンタインのチョコを上げるわね」

「やった」

「頂こう……今回のマップは市街地Bだそうだな」

「はい。高い建物と低い建物があり射線が中々に通りにくいところ。今回マップを選んだ東隊は射撃を警戒したのでしょうか？」

「奥寺くんか小荒井くんが選んだのよ。地形戦を活かすのはいいけども味方の射線まで塞いじやうのは東さんらしくないし、この前の那須隊と鈴鳴第一と玉狛第二の天候で妨害する策なんて博打に近いから東さんは選ばないわ」

試合が間もなく開始されるので今回のマップについて語り合う3人。

今回は市街地Bで台風の目となる玉狛第二等が居るのでどうなるのかと語り合っている内に二宮隊、影浦隊、東隊、玉狛第二がマップ内に転送される

「お、おおっと！」

「雪だな」

「なんと豪雪地帯です！」

市街地Bにはこれでもかと思える雪が積もっていた。

マップ選択権があるチームはマップの天候も指定する事が出来て今回は東隊の小荒井がラウンド3の那須隊の中位戦を見て、面白そうだと豪雪地帯に天候を変えた。

「うっひゃあ、歩きにくい」

二宮隊の犬飼は一般道路を歩くのだが、上手く歩けない。雪が片栗粉の様に柔らかくなっており移動するのに一苦労である。

「積もっている雪は30cm程でトリオン体ならば動くことは出来なくもないですけど、一苦労な感じですね」

「コレは絶対に東さんじゃないわ。小荒井くん辺りが弄ったのよ」

「……………」

ここまでは大体は原作通りである。

原作通りであるが異なる部分も存在しており、玉狛第二の全員がバッグワームを起動

しているということ。

「転送位置は大体均等にバラけてるな……メガネくん達は合流する?」

本気でA級を目指している修達はなんとしてでも多くの点を取って1位または2位にならないければならない。

ガッツイて前線に出るのかと思ったがフィールドがフィールドだけに動きづらい。

「見事なまでにバラけていて玉狛第二、東隊、絵馬隊員がバツグワームを使用……東隊、奥寺隊員と小荒井隊員は合流を果たそうとしています。玉狛第二の三雲隊長と空閑隊員も合流が目当てです」

「ふむ……三雲自体が腕を上げて空閑のサポートに出た、というわけではなさそうだな」
余計な事はせずには自分の得意なフィールドを作り上げに行こうとする玉狛第二。
各々が各々の動きをしている中で二宮隊の動きだけがやや遅かった。

「二宮くん、困惑してるわね。こんなの東さんの作戦じゃないのに色々と考えちゃって」
「相手を知り尽くしているというのも考えものだな」

二宮は考える。東隊はどうやってこのフィールドの利を活かすつもりなのかを。小荒井と奥寺にグラスホッパーを持たせて機動力での勝負に走るのかと考える。考えるのだがその間に動いた男がいた。

「うわ、出た。ゾエの適当炸裂弾、これはウザい」

影浦隊の北添が二丁のメテオラを使いレーダーを頼りにメテオラをぶっ放した。

レーダーを頼りにしているものの割と適当なので二宮隊の誰にも当たる事は無かった。

「おい、誰も当たってねえじゃねえか！」

「いやいや、レーダー頼りなんでこんなもんっしょって、うわあ!？」

仁礼に命中しなかった事をツッコまれる北添。

コレが限界なのよと言いたげな顔をしているとアステロイドが飛んできた。

「やっぱー！一番近くに居たの二宮さんだった！ユズル、ヘルプ・ミー！」

一番近くに居たのが二宮隊の二宮だった。

適当炸裂弾から何処から飛んできたのか予測してアステロイドを撃つのだが北添は間一髪で避ける……が、既に二宮の標的に捕らえられていた。これはまずいと絵馬にSOSを頼むと近くに潜んでいた絵馬はイーグレットを構えて撃つのだが二宮はシールドを展開して防いだ。

「ごめんゾエさん。オレの手に負えない……イーグレットじゃ割れない」

「ヤバいやババ！二宮さんに目をつけられた！」

「なるべく粘りやがれ！」

標的に捉えられた北添は距離を取ろうとするのだがタイマン最強と呼ぶに相応しい

二宮相手に生き残るのは難しい。仁礼は死ぬことを前提に粘れと言ってくる。

「つち、空閑の野郎何処に居やがる?」

二宮が北添をターゲットにすると影浦は一番面白そうな相手である遊真を探そうとする。

「あ、新しい反応が出たぞ!」

「つつーことはそれが空閑か!」

「つて、消えた!?!」

マツプに新たな反応が浮かび上がったと思えば消えた……のだが一定の距離が開いた後に再びレーダーに反応が映る。

「東さんがダミービーコンを使った……じゃなさそうですね」

レーダーに新たな反応が映ったり消えたりとしており東が装備している偽の反応が写るダミービーコンと二宮隊の辻は考えるのだがダミービーコンならばもつと反応があるとダミービーコンじゃないと考える。

「恐らくは玉狛だ……」

「倒しに行きますか?」

「玉狛の空閑は村上を倒した実績がある。2人で挑め。東隊と遭遇しても深追いはするなよ、二人が挑んでくるということは東さんの準備が出来ているということだ」

「了解」

オペレーターターの処理を邪魔しようとバググワーム起動したりオフにしている。

オペレーターターの処理を邪魔する事に成功して更には指揮官の指揮を妨害する事に成功している。この状況でこんな事をやるのは玉狛だと判断した二宮は犬飼と辻にリーダーに映っている場所に向かわせる。

「お、止まった」

消えては映りを繰り返していた反応が止まった。

コレは玉狛の誰かだが修と遊真のどちらかなのだろうかと犬飼は考える。修ならば自分一人で対処する事が出来るが、遊真だった場合負ける可能性が高い。こんな事をしているという事は案外遊真と修、両方が潜んでいる可能性も高い。

「辻ちゃん、後どれくらいかかりそう?」

「一分は掛かります」

遊真は単独で倒すことは出来ない。犬飼は冷静にそう判断している。

辻と合流してから動くべきかと考えていると頭上からアステロイドが振ってくる。

「おっと……」

直ぐ近くの住居の屋根の上に乗っていたのは修だった。

犬飼はシールドを展開して修のアステロイドを防ぐと自身の突撃銃アサルトライフルのアステロイド

を乱射しようとするのだが修は撤退する。

「運が悪かったね」

何時ものフィールドならばまだ逃げる事が出来たかもしれないが今回は残念な事に雪が積もっている。

歩き辛いフィールドで撤退をするのは一苦勞で、修の実力からして完全に逃亡するのは不可能……犬飼は突撃銃を持って突撃したその瞬間だった

「テレポート」

「っ!？」

修のシールドモードのレイガストに向けてアステロイドを撃とうとした犬飼だったが突如として修を見失った。

「コレは」

なにが起きたのかと思考が一瞬だけ停止したその瞬間、遊真が背後から現れて犬飼の首を切り裂いた。

「あく………それもあるにはあったか」

犬飼が突如として消えたと思えば遊真の近くに立っていた。遊真は犬飼を切り裂いた。

一連の動作だけ見れば簡単かもしれないがなにが起きたのかが分からないと観客席

に座っているB級やC級はざわめく中で貴虎はなにが起きたのか気付く。

「コレは……スイッチボックスでしょうか？」

瞬間移動する事が出来るトリガーはあるにはあるが、強制的にとなれば1つしかない。

綾辻は特殊工作兵トラッパが主に使用するスイッチボックスかと口にする。

「多分そうね、スイッチボックスの中にあるテレポートの罠を使っただってところかしら」
加古もコレはスイッチボックスの中にあるテレポートの罠を使っただと推察する。

「スイッチボックスはトラッパ専用のトリガーで、バッグワームタグと併用しますの
でかなりのトリオンを消費するものですが」

「……雨取にスイッチボックスを持たせたな。面白い事をする」

「雨取隊員にですか？」

「アイツの武器は圧倒的なまでのトリオンだ。理論上は可能でもトリオン能力の都合上
で組み合わせる事が出来ないトリガーの組み合わせが出来る」

「ということは雨取隊員は狙撃手スナイパーから特殊工作兵トラッパに？」

「いや、どうやら罠も張れる狙撃手の様だ」

冷静に状況を分析する風間。なにが起きたのか周りは分かかった。

「すみません、落とされました。三雲くんと空閑くんの両方が居て……多分スイッチ

ボックスを使っています」

「スイッチボックスだと?」

「雨取ちゃんのとりにオン能力ならもて余す事は無いと思いますよ」

落とされた犬飼は直ぐにオペレーターのところまで向かいなにか起こったのかを教える。

此処に来ての予想外のスイッチボックス、二宮は玉狛第二は自分の得意なフィールドに誘い込んで戦う戦法を見つけ出したのかと考える。

「氷見、レーダーの性能をスイッチボックスの罾が見えるレベルにまで高めろ」

「了解」

自分の得意な陣形に持つていくがスイッチボックスの罾はレーダーに映らないわけでもない。

多少トリオンを消費するがスイッチボックスの罾は危険なので玉狛第二が居る場所に向かっている辻のレーダーの性能を上げさせる。

「よう、空閑!!」

「お、かげうら先輩」

辻が向かっている中で先に影浦が遊真の元に辿り着く。

面白い玩具を見つけた子供の様に影浦は笑みを浮かびあげてスコープオンを構える

と遊真に向かって突撃してくる……が、影浦は引つかかる。修が展開し雪と同化していたワイヤーに

「っ!？」

「オサムワイヤーは視線を感じないからな、タイマンも悪くはないけれども悪いね、かげうら先輩。タイマンはソロランク戦でやろうよ」

ワイヤーに引つかかって一行動不能になる影浦を遊真は逃さない。

スパツとスコーピオンで胴体を斬り込むと影浦のトリオン体は限界を迎え、緊急脱出した。

「誰かが緊急脱出ベイルアウトした……氷見さん、誰か分かる？」

「状況からして影浦先輩だけ……こんなに簡単に落ちるものなの？」

緊急脱出の流れ星を見て辻は一旦足を止めた。

玉狛第二が自分達にとつて有利なフィールドの中で戦法をすとしてもあまりにも早すぎる。まだなにかあるのかと警戒心を高める。

「スイッチボックスの罠地帯を突破すればメガネくんの用意したワイヤー陣……下手に踏み込まない様にしてもスイッチボックスのレポートで強制転移させられる……蟻地獄かよ」

「自分の得意なフィールドでのタイマン……全体で強くなるのでなくエースを絶対に勝

たせる負けない様にする、か……」

結果的には玉狛第二の戦法に辿り着いた事を喜ぶべきか魔改造し過ぎじゃないのかと困惑すべきなのか、貴虎は困る。

第109話

ランク戦をラウンド4は続く。

二宮は北添をターゲットに捉え、辻は立ち止まる。

「コレは……」

「嘘でしょ、なによこの量は」

そこかしこにトラップが仕掛けられていた。

特殊工作兵トラッパとの戦闘経験がある二宮隊の辻だが、トラッパの冬島達が仕掛けている罠と度合いが違いすぎる。

「こんな事が出来るのは……玉狛だけ」

罠の数が圧倒的なまでに多い。突破する事は出来なくもないが罠のある地帯に入れば最後、遊真と戦闘をしなければならぬ。

遊真の相手はマス8000スターク000ラス点題えの辻でも難しい。確実に倒す事が出来ると言う保証は何処にも無い。むしろ負ける可能性の方が高い。

「中々にインパクトある蟻地獄地帯を作り上げたなメガネくんは」

「いや……この作戦、マジで1回ぐらいしか使えない。と言うよりは極力使わない

方向でなければならぬぞ」

「ん？待ちの戦法だが悪くはねえだろ」

「そうじゃない……玉狛第二の目当ては遠征だ。罾と分かっているとどこにあえて踏み込む馬鹿は早々に居ないんだぞ」

「あゝポイントか」

外側をスイッチボックスの罾で埋め尽くし、内側にはワイヤー陣を張る。

玉狛第二にとつて有利なフィールドを作り上げてその上で戦うという一種の答えに至ったのだが、この戦法はデメリットが無いわけでも無い。が、今のところは発現していないので貴虎も出水も深くは語らない。

「レーダーに新しく映ったのは玉狛第二ですかね？」

一方その頃現場の東隊。小荒井はレーダーに新しく映った部隊は何処かかと、玉狛第二だと予測する。

「玉狛第二がこの時点で現れたって事はなにかあるのか？」

奥寺は修が仕掛けたレーダーに映っては消えてを繰り返した意味を考える。

オペレーターや指揮官の情報処理能力や指揮を邪魔しようという嫌がらせという手段の1つを取った。

「あ、そうか。空閑か。三雲が居るか居ないか揺さぶりをかけて空閑の事を頭から消す

……空閑は機動力が高くて隙をついた不意打ちも何回か見てる」

遊真の事を頭から消すために修が妨害をしたのかと小荒井は1つの答えに至る

「ならどうして今はリーダーに映っている？1回限りの戦法を使ってきたのか？」

「それは……」

その答えに対して東は疑問を投げかける。

上位陣を相手に1回でも効果がある、1回しか使えないが有効打になる戦術で挑んできたのか？B級上位陣の中には10000点を越える隊員が居る。遊真が確実に倒す事が出来ると言えない可能性もある。なんだつたら奥寺と小荒井のコンビネーションは下手なA級隊員やマスタークラスを倒すぐらいには強い。

「東さん、誰かは分かりませんがテレポートした痕跡が残っています」

「だそうだ……玉狛第二も空閑だけに頼って上に上がる事が出来ないというのは分かっている。なにかしらの新しい戦術の1つや2つ用意している」

東隊のオペレーターの人見が誰かは分からないが急にテレポートした痕跡が残っていることを教える。

東は何かがあるただけ伝えて2人がどう考えるのかを見守る。なにかしらの戦術を使ってきている事は予想出来るが、下手な事は言わない。それが今の東隊の方針である。

「玉狛第二が今の時点で使える戦術……」

10000点越えと言ってもいい攻撃手に規格外のトリオンを有する狙撃手、後は雑魚の確実に倒す事が出来るメガネ。

鈴鳴第一の様にエースにおんぶに抱っこ……だと、上では限界があるのだと分かっているのだからしらの戦術を使って来ているのだが小荒井は何があるのか浮かばない。

「待ち構えてるのだけは確かだ」

浮かばないが何かがあるとだけは分かる。

「なら、行くか？」

「………行きます！」

「確実に何かが待ち構えているんだぞ？」

「でも、行かないとポイントを稼ぐことが出来ないです。空閑が潜んでいるって言うのはもう分かったんで油断はしません！」

色々と悩んだ結果、小荒井は玉狛第二の元に向かうことを決める。

罠が仕掛けられている、相手の得意なフィールドに挑むのは愚策……だが、此处でなにもしないというわけにはいかないのもまた事実である。

「分かった。玉狛第二を狙うぞ」

自分ならば止めるが後任育成の東隊である為に小荒井の意志を尊重する東。

何かが待ち構えている事だけは確かだ。テレポートした痕跡が残っていることからスイッチボックスが使われていると東は推察する。トラップはただでさえ数が少なく、2人とも実戦経験が少ない。急拵えのスイッチボックスなのか今まで潜めていた刃なのか、東はどちらにせよ罠が待ち構えている事を頭の隅に入れて慎重になりつつも2人のサポートに向かう。

「玉狛第二は動こうとはしないですね」

一方の実況席、全てが見える中で綾辻は遊真達が移動しない事に気づく。

「スパイダーによるワイヤー陣に辺りを埋め尽くすスイッチボックスの罠、コレは完全に待ちの戦術だ」

「そうね。自分の得意なバトルフィールドを用意してそこに問答無用で叩き込む……初見じゃ回避するのは難しいかも。スパイダーもスイッチボックスもどっちも使ってる子が少ない希少な物だから」

「どうにかするならば遠距離からの攻撃……」

「二宮くんがメテオラを搭載してるから、それを使って一掃するのが一番よね……でも、肝心の二宮くんは北添くんを標的にしてるわね。罠が仕掛けられているって分かっているから辻くんも下手に玉狛第二のスパイダーとスイッチボックスの陣営に入る事が出来ないし……あら？」

「おおっと！小荒井隊員と奥寺隊員、辻隊員に遭遇した！」

玉狛第二を狙いにやって来た小荒井奥寺のコンビと辻が遭遇する。

「三雲じゃない……けど、辻先輩なら！」

レーダー頼りにやって来た結果、鉢合わせした。

修じやない事に奥寺は少々戸惑うのだが、1人しか居ないのであるならば2人で協力すれば倒す事が出来る。小荒井と内線を取って倒しに行くことを伝えると2人は動き出す。

「これは……マズい」

目の前には自分を確実に倒す事が出来る可能性を秘めている小荒井奥寺コンビ、直ぐ近くにはスイッチボックスで仕掛けられたテレポートの罠の数々。逃げに転じようとすれば確実にスイッチボックスの罠に嵌ってしまう。

「っ」

今の自分に出来る最善の手を辻は考える。

考えた結果、混戦に持ち込む為に奥寺と小荒井から距離を取り……スイッチボックスの罠が仕掛けられている地雷地帯とも言わべき場所に足を踏み入れた。トリオン反応から罠が仕掛けられている事は分かるが具体的にはどんな罠なのかは分からない。地雷の様な攻撃系の罠が仕掛けられている可能性も高い。

「アステロイド！」

「っ、三雲！！」

混戦の中で現れたのは修だった。

威力重視のアステロイドを散らしながら3人に目掛けて撃つのだが3人共シールドを展開して修の撃ったアステロイドを防ぎつつ動く。この中で最も弱い修を倒しに向かうのだが、辻も小荒井も奥寺も同じ事を考えており3人共修を狙いに向かったので修は撤退をすると辻は足を止める。これ以上はマズいと小荒井と奥寺に気付かれない様にその場から立ち止まると……罠が作動した。

「えっ!？」

隣に居た筈の奥寺が突如として消えてしまった。

突然の出来事に驚いた小荒井は一瞬だけ思考が停止してしまい、修はすかさずシールドモードのレイガストをブレードモードに切り替えた

「スラスター起動！」

「っ!？」

レイガスト専用のオプシヨントリガーのスラスターを用いて推進力を得たレイガストで斬りかかる……が、小荒井の左腕を持っていく事しか出来なかった。

「利き手じゃないなら……」

利き腕じゃないのならばまだ戦えると修の振るうレイガストとぶつかる小荒井。

トリオン漏出の事と奥寺が急に居なくなつた事を考慮すればチンタラと時間を掛けていては負けに繋がってしまう。なんとしてでもと修を倒しに掛かるのだが修はレイガストをシールドモードに切り替えて防戦に徹すると一つの緊急脱出の流れ星が見える。

「奥寺」

『玉狛の空閑が落としたみたいだよ……リーダーの性能を高めてみたんだけど、その辺りスイッチボックスの罠だらけよ!』

「スイッチボックス!?!」

人見から情報を貰つた小荒井は驚く。

スイッチボックスを使ってくるだなんて予想する事は出来なかつた。相手の戦術のレベルを想定して自分達も戦術を使うと東から色々と言われていたのだが、その想定を玉狛第二は軽く上回つた。

「東隊も気付いた……が、既に詰みに近いな」

スイッチボックスの罠を見つけるためにリーダーの性能が高められたとモニターに映し出される。

風間は奥寺は既に倒されて小荒井は腕を一本やられてスイッチボックスの罠地帯に

居る。

「修の奴、そつち系の道を選ぶか……まあ、そつちの方が今はいいか」

「そつち系？」

「相手を倒さない倒せない代わりにしぶとく粘り強く生き残る戦い方だ。修のスペックではB級上位陣を相手に勝ち星をもぎ取れる可能性は殆ど無い。ぶつ倒すのに時間が掛かる生き汚さを見せてくれる」

「なるほど……メガネくんは倒してくれって言ってるみたい弱い駒だけど、逆にそれを利用して時間稼ぎに使うのか」

「だが……そろそろ限界だな」

小荒井を相手に修は粘ろうとするが徐々に徐々にレイガストにヒビが入る。

このままでは小荒井に倒されるのも時間の問題……そう思っていると修は撃ち抜かれた。

「おおっと、コレは絵馬隊員のイーグレット!!」

玉狛第二の出現前から姿を潜め、玉狛第二が現れたので狙いやすい位置に向かっていった絵馬ユズルが修を撃った。

小荒井を相手に防戦一方で、レイガストにヒビが入っていたので上手く撃ち抜く事が出来て絵馬の、影浦隊のポイントに入る。

「ゾエさん、空閑先輩が居るところに向かつてメテオラを撃てる？空閑先輩が居るところ罨だらけだよ」

「カゲがやられたのもそのせいか……」

遊真が居る場所が遊真達にとって得意なフィールドで罨だらけだと気付く絵馬。

仕掛けられている罨は一掃するしかないとメテオラを装備している北添に適当なメテオラを撃たせる

『おいおい、当たってねえじゃねえか！』

「空閑くんに当てるのは難しいっしょ。それよりも罨はどうなの？」

「壊すことには成功したよ」

玉狛第二にとって有利なフィールドを北添のメテオラで破壊する事が出来た。

コレで狙いやすくなつたのだが既に近距離戦を担当する隊長の影浦は落とされてしまっている。ここからどう動くか、影浦がいるのならば影浦を遊真にぶつける事が出来るが既に影浦はいない。

「よっしや、罨がぶつ壊れた！」

一方の小荒井は北添がぶつ放したメテオラのお陰で罨が破壊された事を喜ぶ。

ワイヤー陣という罨があった事には気付いていないのだが一先ずはこれでどうにかする事が出来る……そう思った瞬間、辻が襲い掛かってきた。

「おおっと！三つ巴になった!!」

辻の攻撃に驚きつつも対処していると今度は遊真が姿を現した。

「ここに來ての三つ巴、手負いの小荒井隊員はやや不利といったところ」

「……」

此処で風間は思う。

遊真がバググワームを装備して奇襲を仕掛ける事も出来たのにどうして仕掛けなかったのかを。なにか裏があるのかと深読みする。

ここで千佳の大砲を撃つという手段もあつたのに撃とうとしない。まさか撃つことが出来ないのかと風間の脳裏には鳩原が過る。

「確かに小荒井くんが不利だわ……小荒井くんだけだとね」

2人に狙われる小荒井は先程の修の様に防戦に入る。

修と違いレイガストを持っておらず片腕のみとなつていたのでシールドで防戦で、時間の経過と共にボロが出る……のだが、加古は知っている。

「っ!?!」

「最初の狙撃手スナイパーの東さんは2人のサポートに入っているわ」

白色のアイビスを持った東が辻を撃ち抜いた。

混戦に持ち込めば敵の数が増えるだけでなく相手を撃ち抜く隙も大きく生まれる。

東は辻を撃ち抜いた。

「玉狛第二は雨取隊員、空閑隊員、東隊は東さんに小荒井隊員、影浦隊は絵馬隊員に北添隊員、二宮隊は二宮隊員のみとなりました」

何処の部隊も1人は落とされている。

混戦が続く中で動いたのは遊真vs小荒井だった。東が狙撃の射程範囲に居ると分かった以上は下手にグラスホッパーを踏んで飛んで移動する事は出来ない……が、小荒井は虫の息に近い

「チカ、イケるか？」

「うん。何時でも撃てるよ」

なんと少しでもポイントを多く稼ぎたい玉狛第二は小荒井を倒しに行く。

手負いの小荒井に攻めるがグラスホッパー等は使わない。1本のスコープピオンのみで戦い如何にも東を警戒していると見せる。

「くそっ」

東さんが居るのが分かっているから何時でもシールドを出せる様になっている。小荒井はそう思っていた。

修に左腕をモガれたので右手でだけで戦わなければならないのだが、遊真は余力を残して戦っている事に気付く。分かっている事だが遊真はマスタークラスのラインを既

に超えているし手負いじゃなくても倒せない可能性も秘めている。遊真の余力を残した姿に小荒井は少しだけ苛立つが、冷静さは保っている。

「っ!？」

が、それでもその狙撃を防ぐ事は出来なかった。

黒色の弾が飛んできたと思えばシールドを出して咄嗟に防ぐのだが黒色の弾はシールドを素通りして小荒井に命中すると小荒井は鉛弾をくらっていた。

「ナイス、チカ」

「くっそ……」

何が起こったのか少しだけ分からないが自分が倒された事は分かった小荒井は悔しがりながらも緊急脱出をする。

隊室のベッドの上に転送された小荒井は悔しい気持ちを一旦置いておいて直ぐにオペレーターの人見の元に向かう

「東さん、鉛レットバレット弾です。狙撃で鉛弾が撃たれました！」

小荒井は今の時点で分かる情報を伝える。

「コレは……黒いライトニング、ですか？」

「みたいね」

「……雨取を生かした戦法を見つけてきたな」

手負いの小荒井を普通にライトニングで撃ち抜けばよかつたんじゃないか？と風間は考えたが言わないでおく。

千佳は人を撃つことが出来ない、そう思っている……実際のところは撃つことが出来るには出来るのだが今のところ覚悟が出来ていないので割と怪しいところ。

「おいおい、黒いライトニングって聞いてねえぞ！」

「言つてないからな……修、ミスったな。時間を掛ければ小荒井を倒せると言うのに千佳に黒いライトニングを撃たせて……ここまで点数を稼いだのなら、無理にガツツカなくても……は無理か」

黒いライトニングはまだ隠し玉として持っていた方が良かったのにここで出した事に関して文句を言う貴虎。

遠征を目指している以上は1ポイントでも多く取りたい玉狛第二的には確実にポイントを取った方がいいので黒いライトニングを披露した。

「かげうら先輩にいぬかい先輩、おくでら先輩にこあらい先輩……しおりちゃん、後誰が残ってる？」

『二宮隊は二宮さんが、東隊は東さんが……後は分からないけど影浦隊の絵馬くんと北添さんが残つてると思うよ』

「オサム、どうする？」

既に自分達にとって得意なバトルフィールドは破壊された。

スパイダー＋スイッチボックスの蟻地獄からスイッチボックスの地雷地帯にフィールドを変える事は出来なくもないが、修という撒き餌が居ない上にメテオラ使いが残っている。

「雨取ちゃん、やつと出てきたね」

黒いライトニングを使った為にバググワームを解除した千佳。

北添はレーダーを頼りにメテオラをぶつ放すのだが、一部のメテオラが空中で破壊される。

「嘘、狙撃!?!」

千佳の近くに東が潜んでいた。その為に爆撃を回避しようとした東がライトニングで飛んでくるメテオラ目掛けて狙撃で破壊した。

これはまずいと思っていると東が動いた。イーグレットを出現させてメテオラを撃ってきた北添目掛けて狙撃した

「!?!」

「二宮さん!?!」

イーグレットの弾は北添に当たる事は無かった。

二宮がシールドを展開して防いだ。

「貪欲」

その光景を見て、加古は笑っていた。

「俺の点だ」
ポイント

「ですよー」

自分が倒す相手だから守った。ここまで得点無しだった二宮隊は北添を倒すことで
1ポイント獲得する。

北添は二宮のアステロイドに貫かれるが倒されるのが分かっているので死ぬの前提
で最後の悪足掻きとも言えるメテオラを数発東達が居る方向に向けて放った。

「シールドー」

「おおっと!!」

北添のメテオラによる爆撃が遊真達を襲う。

千佳は直ぐ様シールドを展開して防ぎ遊真もシールドを2枚展開して防ぐが少しだ
けダメージをくらう……が、致命傷にはならなかった。

「……これ以上は無理か……」

なんとかして点を多く取っておきたい玉狛第二だが此処で無理だと修は判断を下す。

残っているのは東と二宮の探すのも難しければ落とすのも難しい2人に加えて絵馬
も居る

「千佳、空閑、下手に動くな。多分東さんも二宮さんも絵馬も時間内に見つけ出す事は出来ない」

兄ならば、何処に隠れているのかいとも簡単に見つけ出す事が出来るのだが自分は兄では無いので出来ない事だ。

修は取り敢えずは上出来だとポイントを見つめる。

「先程までの嵐の様な戦いから一転、誰も動かなくなりましたね」

「ええ、試合はもう終わりよ。東さんは撤退モードで二宮くんはそれに気付いてい絵馬くんも空閑くん達も見つける事が出来ないから攻めてこないわ」

誰一人まともに攻めようとしなない状態が成り立った。

見ている側としては退屈かもしれないが、全部隊妥当な判断をしている。

「このままですと時間がアレなので総評を先にしましょう」

「そうね……玉狛第二が面白い事をしていたわね、狙撃手にスイッチボックスを持たせるなんて普通は出来ない事をしていたわ」

「三雲が撒き餌になり点を取りに来た隊員を罠に近付けて強制テレポート、空閑がスパイダーで出来たワイヤー陣のテレポート先において自分が最も戦いやすいフィールドで迎え撃つ……悪くはない戦法だ……ただ幾つか欠点はある」

「と、言いますと？」

「そこを考えるのが全隊員の宿題だ。自分で考えてみる」

「あら、厳しい……最後の黒いライトニングにも驚かされたわね。雨取ちゃんの能力をフルに發揮してる、そんな感じだったわ」

「他の部隊が真似をすることは？」

「不可能だな。規格外のトリオンを持つ雨取だからこそスイッチボックスを持った上での狙撃手が出来る。スパイダーによるワイヤー陣も空閑の様な小回りの効く機動力が高い隊員が居てこそはじめて生きる」

だから決して真似はせずに自分に合うスタイルを見つけろと風間は釘を刺す

「結局、撃たなかつたな」

「撃てないという印象を与えるのならこれでいい……ランク戦はまだまだ続くんだ。上位陣相手に格差をつけての勝利は難しい……一先ずは良くやった……なんて言ったら甘やかしそうだな」

千佳が最後まで人を撃たなかつた事を気にする出水。

これでまた千佳は人を撃つことが出来ないというイメージを与える事が出来たのでそれはそれでいいことだ。ランク戦まだ続くのでここで千佳が人を撃つことが出来るかと判明すれば色々対策をされたりするだろう。

「玉狛第二の勝利です。快進撃が止まらない玉狛第二！本日の試合が全て終了し暫定順位が変動！玉狛第二は5位にランクアップ！東隊は9位にダウン。二宮隊、影浦隊は変わらず。東隊の代わりに上位に食い込んだのは鈴鳴第一……今後が期待されます」

第110話

「……つち……」

見たいものは見れたし、部屋に戻ろうとすると二宮隊が待ち構えていた

インターホンを鳴らしている。1回鳴らしたが反応が無くて十数秒後に鳴らし……ニノさんが聞こえるレベルの舌打ちをしてメンヘラ彼女の如くインターホンを連打している。

「その内来るだろうなどは思っていました、早いですね」

「お前が三雲の兄か」

「ええ……なにしに来たのかは大凡の見当は付きますのでとりあえずは中に……出来ればなんですが代表者が1人で聞いてください。この人数を相手にするのは精神的にキまず」

「……辻、犬飼、氷見」

二宮隊と話し合いはシンプルに疲れる。誰か1人が代表者として出てきて欲しいことを言えばニノさんが代表者として出てくる。

二ノさんを部屋に通してとりあえずはお茶の1つでも出そうかと思つたが自前のジンジャーエールを飲んでゐる。

「それで、要件は？」

一息つくことが出来たので、要件を聞く。万が一が起きた場合が怖いので、念には念を入れる。

要件を聞いたら二ノさんは不機嫌になつた。自分がここに来た理由は大凡の見当がついているのに知らないフリをしているのだと思つてるんだろが、私は余計な事を言わなかつたり万が一を想定して聞いているだけに過ぎない。

「この女について知つてゐるだろう……知つてゐる事を全て話せ」

鳩原未来の写真を出した二ノさん。

「……雨取麟児がトリガーを横流ししてもらつた人、そう聞いています。ただ、どの様な形で交渉してトリガーを手に入れたか等は聞いてないです。私が知つてゐるのは雨取麟児がトリガーを横流しされた後に私がトリガーを持つてゐる事を知つてそれを売つてくれと言われた。でも、雨取麟児に適合して使えるトリガーは1つも無かつた。雨取麟児からは残された妹を代わりに頼むと言われたが私は断つた」

私は答えられる範囲で答えを述べる。

鳩原未来について知つてゐることは麟児さんがトリガーを横流ししてもらつた人

……私にトリガーを売ってくれと頼んだ時には既に鳩原未来の買収を済ませている。他の協力者も名前や顔を覚えており前途多難な旅になるが死相はあの段階では見えなかった。

「そして密航する馬鹿どもをぶん殴ってボーダーを邪魔した……他の協力者が誰なのかは知っています。でも、どうしてその人達が向こうに行きたかったのか、その辺に関しては興味はあれども聞くに聞けなかった。私は深く関与すればボーダーにトリガーを隠し持っている事をバラすと脅されていた身だ。鱗児さんも俺をあえて出すことでボーダーを攪乱しようと企んでいた」

その結果、ボーダーは探すのに手間取った。

近界民がこちらの世界に来ていたのでなくこちらの世界の住人が妨害していたのだと答えに至らなかった。

そのことをニノさんに言えばニノさんは強く睨み怒りの電磁波を出している。

「他の密航者に関するデータは恐らく貴方達が握っている情報と大差ない、もしかしたらそっちの方が上の可能性も高い。私を我が身可愛さに密航を食い止めなかったクズ野郎だと思いたければ思ってくれても構わない……ただ」

「ただ？」

「向こうはどういう認識をしていたのか……」

「…………鳩原は遠征選抜試験に受かった。だが、上層部が遠征行きを認めなかった。雨取鱒児が誑かした、それが事実だ」

「確かにそうです…………でも、地獄への片道切符なのを理解していたのか？そもそもどうして自分が遠征行きの切符を手に入れられなかったのか…………貴方はその意味を理解していますか？」

「……………なにが言いたい」

怒っている電磁波が少しだけ収まった…………が怒っているのは分かる。

二ノさんは遠征行きの切符を手に入れたがボーダーがそれを無効にした。その事に關して二ノさんは不満を抱いていた。仏頂面で傲慢に近い性格があり天然ボケをかますが仲間思いなところはちゃんとあるわけで、鳩原さんを遠征に行かせたいという思いはあっただろう。だからこそ、意味を理解しているのか？私はそこを疑問に抱いている。

「鳩原さんは人が撃てないから遠征部隊から落とされた…………この事に関しては妥当な判断だった。ただまあ、上層部もそういう事を言わないのも悪いと言うべきか」

「鳩原が落ちたのが妥当だと…………確かに奴は人は撃てない。だが、それ以外を除けば充分に戦える。もし戦うことが出来ない云々を言い出すのならオペレーターが居る時点で同じだ。オペレーターが一人分多くても二宮隊は問題無く戦っていた」

「はあ……………それが限界ですか？」

「なに？」

鳩原未来が人を撃てないから落とされたのは妥当な判断との意見に対してそれならばオペレーターはどうなんだという。

確かに戦うことも出来るオペレーターは居ない。途中からオペレーターに転向した系の女性は割と多いのだが私はそこまでしか考えに至れていないのに呆れている。この人ならばもう少し情報等から色々と推察することが出来るのだと思っていたんだがな。

「……………言いたいことがあるならばハッキリと言え」

「まず、その鳩原さんは何故遠征に行きたいんですか？太刀川さんの様に強い相手とバトルしたい？風間さんの様にボーダーを成長させたり色々良い未来に繋がるために？」

「最初の侵攻で拐われた弟を助ける為だ。その為にボーダーに入隊した」

「でも、人は撃てない……………私の弟が所属している玉狛支部は近界民ネイバーに関して友好的な派閥です。だからまあ、向こうに関してそこそこ私も知っています……………思想は異なるかもしれないですけども、私がボーダー上層部ならば落とします」

「人が撃てないからか……………それならば何故」

「特殊^ト工作^{ラッ}兵^バやオペレーターは何故許されるとか言い出すんですけど………何れはぶち当たる壁について考えたりしてますか？」

「ぶち当たる壁？」

他のポジションの奴の中には直接的に敵を撃つたり斬つたりしないのに、何故遠征を認められると言おうとする二ノさん。

私はその手の議論をしたいのではなく、私個人の意見ともしかしたら上層部はこう考えていた、つまりは何れはぶち当たる壁について聞いてみる。何れはぶち当たる壁について二ノさんは分かっている。

「鳩原さんの家族が拐われた。だから、連れて帰りたいと思っている。別にこういう考えの隊員は沢山いる。鳩原さんもその例に漏れないです……それをする為には4年半前に襲ってきた国を見つけないといけない。だが、未だに見つけられていない。俺の情報に確かならば近界民の世界はこちらの世界の地球と星座の關係に近い。特定の時期にだけ星と言う名の国が近付いて来たりして襲撃をしている。もしかしたらボーダーは知っているけども隠している説もあつたりしますが、そこは今すべき話じゃない……二ノさん、仮に鳩原さんの遠征を認められて近界民の何処かの国に行った際になにを見せられると思いますか？」

「……………」

「戦争を見せられる……俺の情報が高かならば向こうの世界は資源を求めての戦争を色々な国が行っている。こちらの世界は搾取するのに都合のいい世界だった。ただでさえトリオン体の肉体を撃てないのに人がホントに殺される姿を鳩原さんに見せることが出来ますか？」

コレは原作の話の内容から出した一つの結論だ。

遊真の話が高かならば向こうの世界は資源を求めての戦争を多く行っている。トリオンと言う安定して作ることが出来ないエネルギーが不足している問題を多く抱えている。

「まあ、ここまではまだいいですよ……ポーター側が4年半前に襲ってきた国を特定した。どうしますか？」

「どうするもなにも、その国に遠征に行くに決まっているだろう」

「その国に辿り着いた……なにをする？ 貴方はその秀でたトリオン能力に物を言わせてメテオラで市街地を焼き払いますか？」

「……………」

「ポーター側が4年半前に襲ってきた国を特定してそこに辿り着くまでの航路を導き出したとして、そこからどうする？ 貴方のトリオンでメテオラで市街地を焼き払う？ それじゃあ近界民とやってる事は同じだ……だからと言って拐った人達を返せと言っても

意味は無い……結論だけ言えば何処かの段階で話し合いでなく武力を行使しな
きやいけない。時と場合によつてはホントに人を殺さないといけない……貴方は人を
殺せますか？鳩原さんに対して人を殺せと言えますか？鳩原さんにお前は人を殺さな
くていい、でも俺達人が人を殺すのは仕方がないことだと言えますか？」

4年半前に襲つてきた国を特定した場合は何処かの段階でその国と戦争をしなけれ
ばならない。

ボーダー側はトリオン兵をあまり作つておらず、優秀なトリガー使いが多いからある
程度はどうかになる……なんて考えは甘いだろう。

何処かの段階で誰かが武力行使しなければならぬ。鳩原さんはそれが出来ない人
で……場合によつては人を殺さなきゃいけない。

風間隊がエネドラの死体を見て動揺せずに死体に発信機があるんじゃないかと探し
てる感じから死体を見るのは馴れてるのが予測出来る。

「……………その国に対して交渉して」

「ボーダーには近界民憎しな派閥が多い。その憎しみは正当な物だ。話し合いで解決す
る、和平や不可侵条約の道を辿り連れ去られた人達を返してもらう……政治的な話なら
ばそこが妥当な判断ではあるがそれは三輪に対して復讐をするなど言っているも当然
の事だ」

「一」

「貴方は嘗て三輪と一緒に部隊だった。だったら、三輪の近界民に対する憎悪を知っている。そしてそれは正当な物だと判断を下している。そんな三輪に和平や不可侵条約の道を辿り連れ去られた人達を返して貰うから姉さんの敵討ちは諦めてくれ……………」
貴方はそれを言えますか？」

ボーダーの中には近界民に対する憎悪を原動力に動いている人もいる。

その憎悪を利用しているのにも関わらず、いざその時が来たら自分達の方が鉾を納めて仲良くしましょう、互いに不可侵条約を結びましょう？そんなの誰もが納得することが出来ない答えだ。

「近界民と仲良くしよう派閥の玉狛支部目線でも4年半前に襲ってきた国は敵だと認定している筈でしょう。近界民に対する憎悪を原動力に成り上がった人を、三輪を貴方は知っている。まあ、近界民だから殺す思想は行き過ぎだと思いが平和な日本に軍事的な侵攻をしてきたのだけは事実です……………」向こうの世界に遠征する上では人間を殺す殺さない問題が、暴力で物事を解決しなければいけない事が何れはぶち当たる、鳩原さんはそうなった場合はどうするか？少なくともトリオンで出来た体を撃てないのならば話にならない……………」因みにですが私は4年半前に襲ってきた国を特定出来て航路が出来たのならはその国の重役とその重役の血を継いでいる人達と実行部隊を一人足ら

ず一族全員を皆殺しにします。生まれて間もない赤ん坊だろうが迷いなく生まれたことが罪だと言って殺して……日本というかボーダーの植民地の1つにしてほしいと願ってます」

何れはぶち当たるその時が来た場合、貴方は平穩なハトを望めるのか？それとも過激なタカを望むのか？

少なくとも遠征は何処かの段階で武力行使しなきゃいけず、その際の戦力としてカウント出来ない奴は不要な存在だ。何処かの段階で武力行使しなきゃいけない、それを避ける方法は何処にも存在していない。そんな事が出来たのならば最初から向こうの世界がこちらの世界に対して何かしらの和平や同盟の提案のコンタクトや幕末のペリーの黒船来航みたいにとりガーという力を見せつけて自分達にとって有利に事が運ぶ交渉の1つや2つしている筈だ。

「武力行使は何処かの段階で絶対に必要で、場合によっては人を殺さなきゃいけない。自分以外の仲間が人を殺すのを容認しろと言えるのならば、それを受け入れてくれると思っているのならば遠征に連れて行かなかつた事をどうぞ責めてください」

私がそう言えば二ノさんから出ている怒りの電磁波オウマッが弱まっていく。

三輪の憎しみは正当だから復讐に関してはそれでいいと思っている。弟を助けたいと言う鳩原さんの思いに応えたいと思っている。

1番の最適解は当時と現段階の国の上層部や重役を、実行部隊を一族含めて皆殺しにして国を乗っ取る。もしくは国を形成している母トリガー^{マザー}を破壊する。その国の人達全員に死んでくれと言ひ殺す。

向こうの世界に国が幾つ存在しているのか一切わからないならば母トリガー^{マザー}を1個ずつ破壊するよりも何処かの国を占拠し植民地化し表向きには友好的な近界民が和平を結びに来たのだと世間を騙すのが1番だろう。

「ボーダーの大人は漫画に出てくる大人と違つて無能じゃない、有能な大人です……メディア対策室が上手い具合に異世界からの侵略者と戦つていると言う設定にしています。言い方を変えれば異世界からの軍事的な侵攻を受けると言う事にもなる。この前の大規模侵攻でボーダーに居たら危険だと認識した人も居てボーダーをやめた、やめさせた、三門市から出ていく、そういう人もいる。鳩原さんもその口じゃないんですか？」

「……………邪魔をした……………」

「いえ……………ですが、何れはぶち当たる壁があつてそれがなにか？それだけは理解してください」

二ノさんから怒りの電磁波が消えどうすればいいのかという悩みの電磁波が見える。私の言う当時襲つてきた近界民を皆殺しにする。その上で拐われた人を返してもら

うのが妥当な所だろうが、二ノさんは鳩原さんに人を撃てない狙撃手なんて使い物にならない！と突っぱねずに平然と受け入れて自身の部隊に入れている。だから、人を殺すことを撃つことを強要する事は出来ないししたくはないだろう。しかし逆に弟分と言うか三輪の存在も認知している。三輪の近界民に対する憎悪は正当な物だと認識をしていて復讐に關してああだこうだ言わない。

ボーダー上層部の真意は不明だが人が撃てない以上は自衛の手段が無いのと同じだと言つて鳩原さんを落とした。鳩原さんを人殺しにさせたくないのか鳩原さんは人殺しになる覚悟が無いのか、何処かの段階で人として壊れていく可能性は大きい。

この問題は何れは修達にもぶつかる問題だ。三輪の復讐の共犯者になると約束を交わしたので修や千佳に嫌われる可能性があつたとしても、三輪の復讐は成し遂げるつもりだ。

「追い詰めたのは二ノさんかボーダー上層部か人が撃てないのに戦おうとした自分か………」

劍や銃を手を取れる、使用できる権利は手に入れたが行使しなければならぬ義務は無かつた。

鳩原さんは自らの意思で銃を手を取つた。そして人が撃てなかつた。ならば潔く諦める……ボーダーの中には諦めてエンジニア、諦めてオペレーターが割と居る。草壁隊

の草壁、エンジンアチーフの雷蔵さんがその例だろう。だが、鳩原さんはそれが出来なかった。色々な思いがあるだろうが、その結果が密航で越えてはいけない線を越えてしまっている。

俺も越えてはならない線を越えてしまった……後戻りしたいか、そんな思いは僅かだけある……でも、時計の針は巻き戻せない。巻き戻しちやいけない。例え巻き戻しても同じ時間を刻むわけじゃない。だから前に進むしかない、進める道を増やすしかない。「世界を蝕む悪意……世界を蝕もうとする理………私の手には知恵の実は無い。だが、やれることだけはやるか」

第11話

「おまえたち、よくやった！おれは先輩として鼻が高い！」

「まあ、あんた達なら楽勝よね！」

貴虎が二宮に人を殺せる云々を言ってから少し時間が経過した頃、玉狛第二は玉狛支部に戻った。

B級ランク戦上位戦を無事に勝利する事が出来たことを陽太郎と小南は我が事のように喜んでゐる。2人共観戦中はホラー映画の様に後ろに人が居るとかそこに行けばいいのとか言つてたりするのだが、それを知っている面々は言わない。

「なにを言つてるの？問題は次よ、次」

我が事の如く喜ぶ2人に水を差したのは母こと香澄だった。

この人は声に出さなかつたものの、2人と同じことを思つていたりする口なのだが割と冷静な方だ。だからこそ、問題は次にある。

「1回目はビギナーズブック、次からが本番……相手に手の内を知られていても勝てるのがプロよ」

今回の玉狛第二は初見殺しな戦法を多く取っていた。

ワイヤー陣、千佳の鉛弾ライトニング、スイッチボックス……まだ本部の人達は千佳が撃てないと考えたり理解しているのだが実際のところは撃てる。最後の一線を越えるのが中々に難しいところ。仮にここで貴虎が介入していい場合は二宮に言った様に何処かの段階で武力行使しなきゃいけないことを言わせて実際に人を撃たせたりして心をへし折り再起不能になるか強靱な心を手に入れるかのどちらかの道を歩ませているのだが、当人は干渉するなど言われているので直接的に干渉はしない。

「千佳がホントは人を撃てるって分かって修のワイヤー陣に遊真に……私ならあんた達に勝てるけどもB級上位となら互角に渡り合えてるわ！」

「次も期待しているぞー！」

「……………」

小南達はB級上位ならば勝てるかと確信している。

2回目以降、玉狛第二と対戦する場合はワイヤー陣やトラップに気をつけて、メテオラは常備しておかなきゃいけないという考えが流行る可能性はある。実際問題、この戦法は強い。修が撒き餌になりワイヤー陣を展開し千佳がトラップを仕掛けて遊真が仕留める、蟻地獄の様な戦法だ。B級上位とならば互角に渡り合える……その認識自体は間違いではないがと修は考え、屋上に居る迅の元に向かった。

「迅さん……………玉狛第二に入ってください」

「……………どうしてその結論に至ったのかな？」

屋上に自身が現れてもあまり驚かない迅。

来ることは視えていたのならハッキリと言おうと迅に玉狛第二に入って欲しい事を伝えた。迅はその事について驚かない。どうしてその結論に至ったのか、その事に關して修に聞いてみた。

「今の玉狛第二はビギナーズラックで勝ち進んでいるものです。対策されていなかったから勝ってた勝ち星が多いです」

「初見殺しは言い訳に過ぎないよ……………オレみたいに色々と視える人ならばともかく、1回しか使えない戦法は1回しか使えないと思わせる。そうすることで頭からその戦術は無いと否定させて行動を制限させて裏をかいて実はもう1回使えるかもしれないって事に出来るよ」

今までの勝ち星を修は自身なりに解釈し換算した結果、ビギナーズラックで取れた白星だと認識した。

初見殺しの戦術ばかりで勝っていた、特にB級上位戦の千佳のスイッチボックス、鉛弾、ワイヤー陣に關しては初見殺しである。それをどうすればいいのかという問いかけに關してボーダー隊員は直ぐに答えを出す。玉狛第二に挑むならばメテオラで焼き払

うは想定しなければならぬ。

初見殺しは言い訳に過ぎない、未来視というチートがあるならばともかくボーダー隊員に出来ることはあらゆる事の予測だ。少なくとも仲間内で戦っているので1%でも可能性があるならば想定しておかなければならぬ。迅はそのたった1%の未来を視ているので初見殺しは言い訳に過ぎない。

「B級上位と渡り合える未来は視えてる……そう言ったら？」

「それじゃダメなんです。僕達はB級上位じゃなくてA級と戦えるレベルにならないといけない」

B級上位と戦えているだけで立派だと言うが修の目的は遠征だ。

遠征部隊に選ばれる最低条件としてA級にならなければならぬと認識している、その認識自体は間違いではない。

「僕達玉狛第二は1人1芸を組み合わせた……千佳のトリオン、空閑の戦闘力、僕の弱さ、それを利用して勝てました。きっとB級上位と渡り合えますが……A級と比較すればあまりにも地力が違いすぎる」

「それをどうにかするのが戦術……でも、それで今こうしているか」

「空閑依存なのは前と変わらない、いえ、前以上に空閑依存で……蟻地獄を突破されれば、蟻地獄展開前に空閑が倒されればその時点で詰みです」

一つの秀でた能力を武器に変えて戦術に組み込んだ。その結果、上手い具合にフィツトした。

しかし、一人一人の能力だけで見ればA級と渡り合える事が出来るのは遊真だけと言う事実だ。物凄い絶対的なまでのエースが居ない部隊も存在している。そういうのは戦術や連携で色々をやっており、B級上位には普通に居る。そしてそんな連中よりも上なのがA級だ。

玉狛第二の目的である遠征関係は戦闘能力云々が物を言うところがある。貴虎は言っていないが、修も何処かの段階で戦わなきゃいけない事を認識している。そうなる」と戦術的にも遊真一人にかかる負担が多すぎる。

「メガネくんが遊真におんぶにだっこはダメだつて色々頑張ってるのは知ってるよ」
「地道なコツコツとした訓練でないと得られない力もあります。でも、僕達には……空閑には時間が限られている。一日でも早く行かないといけない、裏技として見つけたこの戦術も結局のところは空閑に依存しています。千佳のトリオン任せの戦術はボーダー上層部は恐らくですが技術でなくトリオンによるゴリ押しと認定してあまり良い認識をしてくれない………A級の人達は唯我先輩を除けば全員前線に出て戦える、そんな人が今の玉狛第二に欲しい……」

結局のところは空閑依存の戦術である。型に嵌まればA級も危うい戦術だが言い方

を変えれば型に嵌まらなければA級なら楽勝でもある。

最後に物を言う地方の部分に関して玉狛第二は低い。千佳が人を撃てるならばトリオン能力に身を任せた追尾機能とかの細かな設定を弄っていないハウンドのゴリ押しでいけばいいが、そんな戦術は上はいい評価をくださない。トリオンゴリ押しゲーはやってはいけない、テクニクを選ばなければならない。

「焦るな……とは言えないよな……千佳ちゃんの友達やお兄さんがどうなっているのか？メロンくんは千佳ちゃんに対して最悪なパターンを言っている。千佳ちゃんもそれに関して腹を括ってそれでもと前に進んでる。メロンくんもメロンくんでも色々覚悟を決めている、秀次の復讐の共犯者になろうとしている……その時がまだ視えていないけども何時かはやって来る。そしてどう動くか」

少なくともボーダー隊員の中には近界民憎しが多い。その人達に我慢してくださいと言うわけにもいかない。

でも、何処かの段階で話し合いはしないとイケない。だが、何処ぞのメロンは躊躇いなく上層部及び一族を皆殺しにしてからの圧政を企んでいる。あのメロンは割と物騒な考えをしている。

「ごめん、メガネくん……君をボーダーに入れたのはオレが裏で手引きしたからだ。だから、最後までめんどろを見るのが筋だろう……でも、今は無理なんだ。いや、確か

に頑張ればメロンくん大体を押しつけることが出来るけどもメロンくんの腹は思ったより黒いからなあ……メロンくんが完全にこっち側だったら即決で玉狛第二に入ることが出来るんだけども」

「なんか、すみません。うちの兄が」

「いや、いいんだよ。メロンくん頼んだら頼んだで10倍になって返ってくるから」

「やろうと思えば貴虎は迅の代理を務める事が出来る。そういう事が出来るガイアメモリを持っていて」

「ただし、ハトかタカかで言えばハトにする為に汚れ役を担うタカな人間の為に下手に任せれば痛い目に遭うのが分かっている。迅としては力になってやりたいという思いはあるが、心の何処かで貴虎を完全に信用や信頼出来ない部分がある。味方であるが仲間とは言いがたい絶妙なまでに微妙な関係性を築き上げている。」

「メロンくんとはその内やるとして……先を急がなくてもいいって言える方法はある」「どういう意味ですか？」

「こういうことを言うのは嫌だけど、備える時間が増やせる。少なくとも次の遠征は拐われた友達を助けるんじゃないやなくてアフトラトルに向かうことになっている。そういう様に遠征の航路も徐々に徐々に作られていくから千佳ちゃんの友だちを探するのは難しい………んで、遊真の体を治す方法がある」

「!?」

遊真の体はトリオン体だ、生身の肉体はハマヤらかして死にかけの状態である。

遊真の父である有吾が黒トリガーになることによつて延命しているだけに過ぎず徐々に徐々に寿命を迎えようとしている。

「ど、どうしてそれを空閑に言わないんですか!？」

「それがわかつたのがつい最近なのと……………治す過程でミスつたり遊真の肉体が先に限界を迎えて死んでしまう未来が多く視えるんだ」

「それは……………サイドエフェクトで一番いい未来を導くことが出来ないんですか?」

「そうしたいんだけど……………問題はその方法なんだ……………メロンくんが遊真を治す方法つて言うか物を持つてる」

ホントに可能性として限りなく低いのだが黒髪の遊真が迅には視えている。

それ以外に遊真の肉体が黒トリガーから出てしまひ治療が間に合わなかつた、正しい治療が出来なかつた等で死んでしまう未来が多く視えている。その過程で鍵を握るのは兄である貴虎だ。

「メガネくん、メロンくんからUSBメモリみたいなトリガーみたいなものを受け取ってるんでしょ?」

「はい……………万が一を備えて持っています」

『ジョーカー!』

修はジョーカーメモリを迅に見せる。

「メロンくんはそのトリガーを使いたがらない。いや、そもそもそれがトリガーだと言う認識そのものが間違いだ。それは生身の肉体を別の生物に改造する生体兵器の様な物でもある………使い続けられれば、何かしらの後遺症が生まれる。メロンくんはそれが嫌だからそのトリガーを使わない。そしてメロンくんは自分の持っている物を1から10まで全てを理解しているわけじゃない」

「………兄さんの持つT2ガイアメモリのどれかに、空閑を治す事が出来る物があるんですか?」

「傷が完全に治っている遊真が視えるけど、メロンくんがスカルになった時に使ってるベルトが装着されてる。メモリを使って治療した。そう認識して間違いはないと思う……でも、問題はそれがなにか?メガネくんのジョーカーメモリ、メロンくんが意図的に隠しているEのメモリ、そして実際に使ったスカルメモリ以外の23個の中から選ばなきゃいけない。オレのサイドエフェクトは複数の未来が視えるけど全ての未来が視えるわけじゃない……遊真が完全に治るまでの過程が視えない」

未来は常に何時だって不規則に動いている。23個のメモリの中に遊真を確実に治す事が出来るメモリは存在している筈だ。

だが、問題はそのメモリがなんなのか？23個全てを試した未来が視えればいいのだがそこまで都合のいいサイドエフェクトじゃない。

修のジョーカーメモリで治せるならば修は即座に実行するだろう。死んでいる状態になるので未来が視えなくなるスカルは無いだろう。意図的に隠しているEのメモリは万が一を備えてボーダーと対峙した際に使うつもりだとも聞いている。

「残りのメモリはA、B、C、D、F、G、H、I、K、L、M、N、O、P、
クイーン、ロケット、トリガー、ユニコーン、ウァイオレンス、ウエザー、エクストリーム、イエスタデイ、ゾーン、Y、Z………」

すけども言われてピンと来るものが無いですね……」

ジョーカーと言えば切り札という意味だ。

修はある種の切り札だ。何をしでかすか分からないという意味合いでも切り札であり、修の人間性が色々な人を動かすことが出来て未来をいい方向に向かわせている。ジョーカーのメモリは修に相応しい物だと迅や貴虎は認識している。

ガイアメモリの名前を聞いてそこから何が連想できるのか？少なくともジョーカーメモリは適合者の精神力次第で幾らでもパワーアップする事が出来るというそこそこ狂った性能をしている。ジョーカーと言う単語からそれは連想することは不可能であり、他のガイアメモリもそれに通じている。

「メロンくんならなにか知ってるかもしれないけど……うくん……」

「迅さんが聞きにくいなら僕の方から聞きましようか？」

「いや、明日にでも聞く機会はあるんだ。ただ、メロンくんがあんまりいい顔をしてない……なんのデメリットもなく完全に治癒する事が不可能だからだと思う」

ハイドープ化する可能性もあるし、生身の肉体を治すので何処かの過程で人体構造を弄くる、というかそもそもでガイアメモリそのものが人体構造を弄くる道具である。遊真の人体構造の何処かを弄って治す。遊真が受けている傷はそのレベルの大怪我だ。

貴虎はシンプルに原作開始前にボーダーに見つかりたくなかったのと、使いすぎることで生身の肉体に異常を起こしてハイドープ化する事を恐れてガイアメモリをおおうとしない。自分自身が使わないのに他人に無理に使わせたくない。修が力を求めており、自分自身が力を貸せば本当の意味で修の成長に繋がらない、でもせめての思いで修にジョーカーメモリを託している。

「一応は明日、メガネくんから聞いてくれないか？」

「明日、聞く機会があるんじゃないんですか？」

「メロンくんから視える未来が枝分かれしまくってるんだ、オレから干渉して未来を変動させたりするのが難しくてな……後、向こうも向こうでホントの意味で心を開いてない。確かな情報を教えてくれない可能性が高い」

万が一に備えて想定してEのガイアメモリだけを意図的に隠している。

迅はボーダーや皆にとって都合のいい未来になるならば時には色々な反則技を使ったりするわけだが、貴虎が機密にしている事を利用してなければならなかったりで何処かの段階で貴虎とぶつかり合わなくてはいけないのだと判断している。それは物凄く近い未来……貴虎との真剣勝負、死ぬことだけは無いのだが絶対に勝たなければならぬ危険な勝負が待ち構えている。それに勝たなければ、貴虎、いや、三輪達を止める事が出来なくなってしまう。

「分かりました。明日、聞いてみます」

「悪いね、メガネくんにはばかり負担をかけて……ああ、そうそう。強い隊員ならメロンくんやオレ以外にも心当たりはある……ただ、可能性としては五分五分ぐらいだ……けど、成功すれば玉狛第二に足りないピースが埋まる。A級とも戦えるようになるよ」

ただし、それが成功すればの話だが。間もなく未来が動く、大きいか小さいかは分からないが変動していく事だけは確定だ。

修は迅のスカウトに失敗したが落ち込みはしない。確かに空閑が落ちればその時点で詰みに近い。自身が連携できるほどに強いわけでもないが、全てのカードを使い切ったわけではない。

遊真を治す事が出来る方法に心当たりがある……そういえば、遊真が怪我をしてるとかの話をしたことがあったか？と思ひ出そうとする。

「^{お前}迅を誘うとは、大胆と言うかなんというか」

「風間さんが皆に宿題を出したからですよ」

翌日のボーダー本部を歩く迅と風間。

昨日の出来事を教えれば大胆過ぎるにも程があると呆れつつも面白いことを考えると少しだけ笑みを浮かべている。

「多方面に技を会得するのでなく一芸にだけ特化させる、一点突破の部隊だ。聞こえはいいがその一点突破が通じなければ負ける」

「でも、冬島隊はそれでA級2位ですよ。如何にして効率良く相手を狙撃して逃げる戦略の部隊でA級になってます。バランスのいい嵐山隊や草壁隊よりも上に居ます。選択肢としては間違いじゃないですよ」

「だが、太刀川隊には負けている……最後に物を言う基礎能力が玉狛第二には欠けている。タネが分かった手品ならば意識していなくても無意識にタネや仕掛けを見る。そこを上手く利用する戦術をしようにも実際の戦闘で相手を確実に倒せるのが空閑だけだ。空閑をフェイクに誰かが動くが出来ない以上はA級の壁は越えられない」

「いや〜手厳しい……基礎的な部分はなあ……メロンくんの裏技がメガネくんも出来れば楽なんだけども」

「……まだなにかあるのか、あいつは」

サラリと語る貴虎の裏技、それを知れば色々と反則だろうと大抵の人は言うだろう。

なにせ理論上は迅だろうがヴィザだろうがハイレインだろうが忍田本部長だろうが再現する事が出来るのだから。

「弟の指揮で動く迅……もしくはボーダーのトリガーに慣れた兄か……どちらにせよ見てみたいと言う野次馬な思いはあるな」

「ハツハツハ、それは何れという事で……なにせ実力派エリートなものですから、多忙なんですよ」

迅は会議室の入口を開く鍵に手を翳す。

手を翳せば、ドアが開かれて忍田本部長、城戸司令、沢村、東、嵐山、太刀川、冬島、レプリカ……そして貴虎だ。

「全員揃ったようだな……では、緊急防衛会議を始めようでしょう」

第112話

「何故に私を呼んだのですか」

サラリと会議が行われる事を忍田本部長が言っているが待ったをかける。

「君はサイドエフェクトを応用して未来を予測する事が出来ると聞いている。その力を貸してほしい」

「……」

まだ正規のボーダー隊員になっていないんだがな。

忍田本部長は私を呼び出したのは私のサイドエフェクトを使いたいからと言っているのだが、私のは外れる時は外れるんだ。

「ボーダーの捕虜の黒トリガー使いのエネドラに近い内に侵攻が予測されると言われている……レプリカ顧問」

『現在近付いている国は3つあるがその内の2つがアフトラルの従属国家だ』

「従属国家……手下ってわけか」

「特別迎撃体制に入りたいのだが……エネドラ曰く仕掛けてくるのは確かだが、なにを

してくるかが読めないそうだ」

「それは……迅を頼ればいいんじゃないんですか？」

この前の国の傘下の国が襲ってくる可能性がある。

可能性があるのならば迅に視てもらえばいいのだと嵐山さんは迅を見るのだが迅は困った顔をしている。

「二応は街をぶらついたり本部をぶらついたりしてますけども……何時もの防衛任務を行っている人数以上の数で戦っている、その中にはメロンくんも居る……戦うことだけは確定してる。けど、目的が見えない。街をぶらついたりけども被害があるわけでもないしボーダーをぶらついたりけどもボーダーに大きな被害が見えなかった」

「情報源カニ野郎のふかし……っていう説もあるのか？」

「いや、主要部隊が戦っている未来が視えてるから戦うことだけは確定だけど相手の目が分からないんです」

エネドラの偽情報かどうか考える冬島さん。迅は大勢の部隊が戦っている未来が視えているので襲撃が無いと言う事だけは無い。

相手の狙いが街か？ボーダー隊員か？ボーダーの技術なのか？それとも捕虜の口封じなのか？それが分からなければ防衛体制を取ることが出来ない。

「戦う」とは確定か………今回のこの一件、極秘裏に行う」

「世間が五月蠅くなるから最初から無かったことにする……そんなところか」

城戸司令が今回は極秘裏に行うつもりだと言う。嵐山さん達は驚くのでなにを意味しているのか教える

普段から異世界からの侵攻が起きているのに、もしかしたら自分達の身に火の粉が降りかかる可能性があれば騒ぐ……まあ、ボーダーが街を借りているという認識があるだけマシか。ボーダーが優秀なのか街の人が馬鹿なのか、それは分からないことだ。

城戸司令は公開遠征の日程をズラされたり市民の不安を煽るような真似はしたくないのだと言い切るのだが既にこの街を危険に晒しているのだからどの口が言うんだろ
うか。

「貴虎……お前のサイドエフェクトでどうなるのか視てくれないか？」

「三輪、何度も何度も言っているが私は未来を視る事は出来ない。未来を占っているだけに過ぎない。例えばそう、もし仮に今からドアが開いて誰かが入ってくるのだと言うのなら迅ならば誰が入ってくるか分かるが私のサイドエフェクトだと誰かが入ってくるのだとしかわからないんだ……答えを知りたいならば迅が1番だ」

「その迅がこんな状態だから頼んでいるんだ……お前の占いを信賴している。答えを見るのは迅のサイドエフェクトで充分だが、答えを考えるのにはお前の方が最適だ」

「……………はあ……………まあ、あまり期待はしないでくれ」

三輪は私を信頼しているから占つてくれと言ってくる。まだ91%、トリコのココの正解率にまで至っておらず外れる時は外れる。

幸いと言うべきか原作知識があるのでそれらしい事を言えば納得はしてくれ……が、いきなり答えを言うとは普通に疑われるだろう。

「まず、ボーダー隊員達から死相の様なものは見えない。誰かが死ぬとかは無い。街の人達にもそれは言える事で迅のサイドエフェクト通りならば市街地を破壊する等の作戦は無い」

私はタロットカードを取り出した。

前に太刀川さん達を占った時に使ったインチキカードでサイドエフェクト云々を頼りまくっているが、このタロットカード自体は本物の占いで使われる物だ。カードを適当にシャッフルした後に扇状に並べて選んだら良いと私のサイドエフェクトが言っているカードを2枚選んだ。

「戦車の逆位置と愚者の正位置か………今回の一件は極力極秘裏に処理をする、その考えを迅が無理と言わないから極秘裏に処理をする事が出来るレベルの出来事………だが、ただ単に襲撃してくると言うオチが無い。何時も以上に人を増員して戦うと言うのなら妥当なところか」

『兄殿、我々はそれらのカードの意味を知らない。思考するのならば我々にも情報を教

えてほしい』

「戦車の逆位置の意味合いは計画の挫折、恋愛などの敗北、他人の権利を無視する、暴力論争訴訟敗北……コレはなんの対応もしなければ相手側の目的が達成されるのを意味している」

「ボーダーが負ける、ということなのかい？」

嵐山さんの問い掛けに首を横に振る。

「いえ、向こう側には何かしらの勝利条件がある。その勝利条件を目指して向こう側は戦う……その勝利条件は愚者の正位置と戦車の逆位置、戦車の逆位置の計画の挫折が関与している。私の知る限り今ボーダーが計画している計画は遠征計画、愚者の正位置の意味合いの中には旅を意味する部分がある。旅の計画を挫折させる、それが向こう側の狙いです」

なんの対応もしなければボーダーは負ける。ボーダー隊員が戦闘不能で負けるのではなく、相手側が勝利条件を満たして勝利をする。

戦車の逆位置の計画の挫折、なんの計画か？それは愚者の正位置の旅の計画の挫折、それが意味するのは遠征計画の挫折だろう。

『旅の計画の挫折……アフトクラトルの従属国家、ということから考えてアフトクラトルに向かわせない様にする』』

私の言葉で旅の挫折がなにを意味するのかを考える一同。

向こうの狙いはアフトラトルに近付けさせないようにすることだとレプリカが言え、ばカードを2枚抜いた。

「皇帝の正位置、権力。支配力。一家の家長や一族の長を意味している。そして節制の正位置、業務上での成功を意味する。かなり偉い上からの命令で相手の旅を挫折させて業務上での成功をする。アフトラトルのリーダー的な存在がこつちがアフトラトルに来て欲しくないからそうならない様にしろと上から命じる。前の大規模侵攻の様な市街地に被害を与える系の場合はその国が恨まれる可能性があるのでアフトラトルが納得する業務上での成功をする……人を狙うのでなく技術を狙うのでもない……失敗を意味するカードは他にもあるが戦車のカードが出てきた。戦車とは乗り物と言う意味合いでもある。旅をする上で必要な戦車、つまり乗り物の破壊……敵の狙いは遠征艇ですね」

原作知識をそれとなく利用しつつも、答えを言うとき空気が固まった。

おかしなところがあつたか、それとも答えを言い過ぎて逆に怪しまれてしまったのか……どつちかは分からないがこの場にいる人達は決して馬鹿じゃない。自分ならばどうするのか？そもそも今回の襲撃は迅の予知よりもエネドラの襲撃予告のおかげで分かっているところが多い。

「遠征艇か……他にはなにか分からないのか？」

「信じるんですか？」

「ありえないと断言出来て否定する事が出来る可能性じゃない……極端な話、間違いならば迅が補正してくれる、なにか一つの道標を持つていた方が話は纏まりやすい」

「なるほど」

東さんは私の話を信じる前提で行動を起こす。何かしらの道標無く対策をあれこれやったとしても意味は無い。

何かしらの道標を作りそこに向かう様にしておく。プランAをそれとしておき、他にプランB、プランCを作っておく……一応の中での確認か。

「他に必要な情報は？」

「敵の狙いが遠征艇だとして敵はどう攻めてくる？ボーダーの基地を堂々と表立って襲つて来るわけあるまい」

タロットカードを束に戻し、遠征艇狙いを前提にして忍田本部長は話を進める。

敵の攻め方はどうか？遠征艇狙いならばボーダーの基地に突撃しなければならぬ。「隠者の逆位置、隠蔽と欺き。月の正位置、隠れた敵、中傷……ただ純粹にトリガー使いを送り込んで遠征艇にまで到達できる可能性は0、トリオン兵を送り込んでそのどきくさに紛れて基地に侵入する……月の正位置のカードは嘘や予想外の敵も意味する。

迅の見えないところ視れなかった部分で予想外の出来事が起きる。恐らくコレは私にも言えること。私の予測と迅の予知から考える事が出来なかった部分が出てくる可能性が高い」

私という異分子が生まれたことによるバタフライエフェクトかなにかが生まれている。

極端な話、アフトクラトルのトリガー使いならば倒すことが可能だ。だからそれがなんなのか？どのカードを選べばいいのか……この2枚か。

「……塔の逆位置と法王の逆位置……あゝ……あゝ……あゝ……あゝ……あゝ……あゝ……コレは……月の正位置はスキヤンダルを意味して……あゝ……ヤバいな……」

『兄殿』

「分かっている……私と迅が気付かないなにかが起きる。それを解決する事は出来るには出来る。それ自体は難しい事ではないが問題はそれを知られる。ボーダーが極秘裏に今回の一件を処理しようとしているけども、気付かれる可能性がある」

私というイレギュラーが居ることでも生まれた嫌な世界線が見える。

レプリカが自分だけ分かるんじゃないやなくて他の人達に分かるように言えと言われたので結論だけ言う。

「迅の予知と私の予測を掻い潜り、今回の一件を極秘裏に処理しようとしているボーダーだが気付かれる可能性がある。」

「市街地に被害が及ぶと？」

「いえ、違います……市街地に被害が及ばない、でも大きく戦っているなと気付かれる可能性があります。考えられるのは戦闘でなく爆撃系のトリオン兵で爆撃して何時もよりも派手な戦闘になっているな……と私は想定しますが、その想定を上回るなにかが出てくる。それを倒すこと自体は可能ですけども、それを隠すことが出来るかどうかはまた別でバレルる可能性がとても大きい」

事件を解決するのは簡単だが、事件の後処理が大変になっている。

城戸司令が市街地に被害が来るのか聞いてくるが、市街地には被害は来ない。市街地に被害が来ないのに、敵の狙いは原作通りの遠征艇なのに、極秘裏に処理しようとしているのにバレルる可能性がとても大きい。

「それを未然に防ぐ手立てはないのか」

「そもそもそれがなんなのか分かっていないんですよ、なにかが起きるのは確かでもなにか起きるのか？少なくとも私の中では読めない予想外の出来事が起きる、それだけは確かです……太刀川さん、なにか起きると思います？」

「市街地に被害が及ぶことが無いのか……爆撃型のトリオン兵だったら出てきてもお

かしくないし誤魔化しは色々効く……」

私の考えが変な方向に凝り固まっている可能性がある。

柔軟な発想が何時の間にか無くなっている可能性もあるのだと太刀川さんに意見を求めるのだが、太刀川さんも思い浮かばない。

とりあえずはと出したタロットカードを戻してシャツフルしもう一度カードを選ぶべきかと考える。私がどれだけ予測しても予想外の一手が打たれる。市街地に被害が及ぶことがない、それだけは確かで予想外の一手にはならない。

「運命の輪の逆位置と月の正位置………運命の輪の逆位置はつかの間のチャンスや幸運の後にはやってくる突然の不幸、月の正位置は未知の世界へ飛び込む、欺く、欺かれる………その敵はもう来てもおかしくはないのならば、もう来ている可能性がありません」

「!?!」

「ああ、別にスパイ潜入しているとかじやなくて単純に情報収集をしている。遠征艇の破壊が1番のチャンス、例えばシフトが変わった時とかどの時間帯を狙うのかとか雑魚敵を送って、こっちの戦力を確認する。トリオン兵の中にリーダーに映らないタイプの小さなトリオン兵を入れている、去年のイレギュラー門と同じ手口を使ってきて監視して情報収集をしている。こっちをどうやって襲撃するかの算段をつけている」

既にガロプラはやってきているが、まだ襲撃はしてこない。

単純にガロプラがどう動くか悩んでいるかも知るし、こちらに対して情報をあまり知らない。攫う事に成功したC級達はC級でボーダーのトリガー性能云々は解析に回せばいいが誰がどう強いのか等の情報は無いに等しい。原作知識的にも既にガロプラは来ている筈なんだ。

『トリオン兵を送り込みどさくさに紛れてボーダーの基地に侵入し、遠征艇に向かう……コレをパターンAとしよう』

「その場合は表でトリオン兵を操って誘導する近界民、中で攪乱する近界民、遠征艇を破壊する近界民の3組が生まれるとして……大勢のトリオン兵との戦闘を想定するならば近接戦よりも銃撃戦が行われるな……」

「遠征艇を破壊しに来るのはトリガー使い……一番最強のカードをぶつけていいならばぶつきますけども……その辺のシフト調整は私の管轄外です」

東さんがとりあえず予測出来る3つの近界民を出して行われる戦闘内容を思い浮かべる。

トリガー使いとの戦闘を想定するのが妥当なところであり、一番最強のカードをぶつけていいならばぶつける……どれだけ頑張っても向こうのトリガーには既に緊急脱出機能が搭載されている。確実に相手を仕留めることが出来ても捕縛する事は不可能だ。

「1番最強のカード……お前じゃないのか？」

1番最強のカードをぶつけることを案の1つとして出すのだが無理な感じだ。

風間さんが1番の最強カードは私自身じゃないのかと聞いてくるのだが残念ながら最強のカードは私ではない。

「何故そうなったか不明ですが、とにかく色々と危ないのが……まあ、ぶつける事が出来ないのならばそれはそれで構いませんよ。私も無理強いはさせたくないですし」

流石に出てくださいと言うのも気が引ける相手だ……向こうは出ると言えば出るんだらうが、戦ってほしくない。

本音を言えば、それは本来は私の物の筈がなにかの手違いで渡ってしまった。私自身が最強のカードになるにはもう少し待たなければならぬ。普通に変身するならばいいんだが、バグルドライバーツヴァイを用いての変身の場合はまだ時間が掛かる。

「パターンAを想定しての戦闘をするとして………メロンくん」

「なんだ？」

「メロンで戦うつもりだよね？」

「ああ……ボードアのトリガーは使うつもりは無い………迅」

「なんだ？」

「その防衛任務は修が出るか？」

「出る可能性が高いよ……」

「なら、遠慮なくガイアメモリを使わせる。ボードアのトリガーでの戦闘は自身で戦って点を取るのではなく妨害や補助に向かっている。最後に物を言う基礎的な部分が修には欠けている。1日2日で強くなる方法がなかったからの手段を用いているから仕方ないが……遊真にもトリガーを使わせればいい。玉豹のトリガーならば問題は無いだろう?」

「戦力的な問題とするならば遊真に玉豹のトリガーを使わせるのは問題は無いとは思いますが……どうしますか?」

玉豹のトリガー、それが意味するのは遊真は黒トリガーを使っているのかどうかだ。

黒トリガーを戦闘に参入させる事が出来るのは大きい、今回は前回と違って遊真の事をボードア隊員として認識している。だから間違って撃たれる可能性は低く、今ならばまだボードアに登録しているトリガーの1つだと認識させる時間がある。

「……………三雲修隊員、空閑隊員の玉豹のトリガーの使用を許可する」

「私は勝手に使わせてもらいますよ……命も賭ける事が出来ないのに戦うなんて馬鹿な真似は出来ませんから」

城戸司令が修のガイアメモリと遊真の黒トリガーの使用許可をした。

私に関してはなにも言っていない。まだ私が正式な隊員じゃないから、もしくは私が

なにを言っても制御下に置くことが不可能だからかのどちらかだろう。

「……仮にパターンAの場合、多方面でなく一つに攻めてきて隊員達の足止めに来る可能性が高い」

「でしようね……前回と同じ規模ならばもう詰んでますから」

「忍田本部長は直接現場に出て指揮をする事が出来ない、ボーダー基地内部で指揮を取る……その為に君に一つ頼みたい事がある」

「頼みたいこと？」

「君が現場でボーダー隊員達へ指示を出してくれ」

「……冗談も大概にしてください。今回は有事の際の緊急対策会議、指揮能力に優れた東さんが居るじゃないですか。指揮能力や戦術に関してはボーダー隊員よりも劣っていると自覚していますよ」

忍田本部長の代理と言うか、直接的に現場に出て指揮をする現場担当の指揮官を務めてくれと城戸司令が言ってくる。

私に指揮能力や戦術は無い。大体は私が地力で解決することが出来ることなどがあ
るが、他人に頼つたり軍団を動かしての戦闘経験は皆無だ。

「いや、メロンくん……現場に出て指揮をした方がいいよ」

「……私は前線で戦いたいんだが」

「戦うなどは言つてないよ。メロンくんはメガネくん達が向こうに行つて居る間にこつちを守ろうかかつて考へてるんだろ？ 次の公開遠征は忍田さんが船長でこつちの世界に居なくなる。その間に忍田さんの代理をメロンくんは務める事が出来るけども、それはホントに忍田さんの代理であつてメロンくんの力じゃない。メロンくんなら高度な戦術や指揮が取れる筈だ」

私ならば出来るかと信頼というか断言してくる迅。

そのことに關して誰かが異論を言うのかと思つたのだが、誰も異議も異論も唱へてこない。

「東さんじゃダメなのか？」

「俺でも構わないが……指揮を出来る人間は増えてほしいとは思つて居る。こういう事を言うのは酷なんだが、指揮能力が高い奴は大抵は俺の弟子でな。俺の考へが染み込んで。トリオン能力や戦闘スタイルの都合上、全員が同じ方向性に考へを持つて居るわけじゃないんだが、自分で考へて動ける奴は少ないんだ……お前の弟はその辺は自力でどうにかして居るが」

指導能力でなく指揮能力や戦術に關して出来る人間が一人でも増えてほしいと考へて居る東さん。

東さんの弟子じゃない人での事ならば尚更必要な人材だろうが……普通に困るな

……。

「日中は何事もない様に過ごさないといけないから場合によっては動けない可能性が高い。何処にも所属していないなら何時でも動けるだろうか？」

「まあ………そうですけど」

「大丈夫だ。基本的には考えて動ける隊長が揃いでお前にかかる負荷は少ない」

それならば尚更、私の存在は不要じゃないのか？

断れば確実にボーダーのトリガーを使って戦えと言ってくるし、どうせ射撃戦になるのが目に見えている。

「まあ、期待を裏切るのだけは言っておきますよ」

コレが後に主任になるきつかけとは思わなかった

第113話

「以上で緊急対策会議を終える」

パターンA以外にパターンB、パターンCについても会議した。

パターンAが最も起きる可能性として高いものだがパターンCまでは予測出来る。バタフライエフェクト云々を言うのならば、予測していた方がいい。城戸司令が会議を終える事を伝える。

「よっし、本部の防衛準備だな……今回は変なメロンがちゃんとしたメロンとして参戦か」

「その説は申し訳ないことをしてしまいました」

「いやいや、気にしてねえから」

会議が終わっても仕事はあるのだと冬島さんは嬉しい悲鳴をあげながら私に視線を向ける。

前回は私が余計な事を言ったりしてゴタゴタになったのでその件を改めて謝るが本人的には軽いノリで言っているんだろうが、悪いことをした自覚はある。

「貴虎、いいのか？ボーダーのトリガーで戦わなくて」

「別にボーダーのトリガーでも出来なくもないが、アーマードライダー鎧武者の方が楽なんだ……本当に戦っているんだと自覚しやすいしな」

ボーダーのトリガーでの戦闘は楽しいと思えなくもないが、ダメなんだ。

変な風を意識を持つていく……もつとも、それだからこそ出来る至れる領域があるんだがな……どうも天衣無縫の極みとは相性が悪い。

「三輪、最近顔色良くなって来たな。三雲の奴が来てくれたからか？」

「……………」

三輪の顔色がここ最近良くなっていることを太刀川さんが指摘すれば三輪は無言になる。

変なところに気付きやがるなと太刀川さんに対して若干だがめんどくさいなと思っ
ているなコレは。

「秀次、こうやって顔を合わせるのも久々だな。元気にやってたか？」

「東さん……まあ、それなりです」

「また今度飯食いに行こう……お前も一緒にな」

「いや……割と忙しいんで……」

「気を使わなくていい、俺の奢りだし焼肉だ」

「……………FXとか株とかで割と忙しいんですよ……………ボーダーに出資する側の人間になつておく……………あの日が来る前に色々と備えておきたいんですよ」

東さんが俺も一緒に焼肉に誘つてくれるが、私は丁寧にお断りする。

理由は色々であるのだが純粋にFXや株とかで忙しい時は忙しいんだ……………その時が来た時に備えておいてお金を稼いでおかなければならない。それが出来るのは私だけだ。迅はギリいけるだろうが風間さんや東さんはボーダーに出資するレベルの金額の金を手に入れる事は難しいだろう。トリガー技術云々を売れば巨万の富を得るだろうが、その辺は慎重にしないといけない。少なくともボーダーの使っているトリガーは兵器としての側面が強いトリガーなんだから。

「投資家なのか」

「そうなりますね……………ボーダーに資金提供をする、そうすることで修達に出来ないことをする」

修達が過去に連れ去られた人達を連れて帰る事が出来るのを信じている。だからこそ、金を稼いでおかなければならない。

外資系の株とかFXとか色々と手を出している。サイドエフェクトをとことん使いまくつっているから数千万円の利益を叩き出した。今年から税金とか親の扶養から抜け出さないとややこしいとか色々とあるからな。

「確かにそれは俺達じゃ絶対に出来ないな……金でどうするつもりだ？」

「些細な事を頼み込むだけですよ、トリガー技術に魅力を感じないと言えば嘘になりますけどもそこまでいけばもうエンジニアの世界になりますし。私の今のところの進路は隣の蓮乃辺市にある大学の考古学コースで、考古学に関して学びたいとは思ってます」

私の進路は既に決めているんだ。三門大学でなく隣の市である蓮乃辺市の考古学コースがある大学で……意外と倍率は高い。

将来の進路について言えば三輪は驚いた顔をする……そういえば進路云々は言ったことなかったような……

「三門大学じゃないのか？」

「三門大学に入れば強制的にトリガー開発室行きだと話は聞いている」

「いや、ボーダー推薦組は強制だがお前の学力なら一般入試でいけるんじゃない」

「私は考古学に興味があるんだ……なに、三輪の復讐の共犯者になる約束は果たすさ」

三輪は私も三門大学に進学するものだど認識していたが、そうじゃないぞ。

トリガー開発室行きは普通に嫌なのを言えば一般入試ならばそれは無いと言う……太刀川さんという一例が生まれて私が色々と言ったからボーダー推薦枠が少しだけ厳しくなるだろうから米屋は……ボーダー就職に納まりそうだな。

「考古学か……お前はそっち系か」

「私はオカルト方面は存在は信じるけども必要な時以外は信仰はしないタイプでしてね……もしかしたら草薙剣、八咫鏡、八尺瓊勾玉なんかはトリガーだったんじゃないか説が知りたいんですよ。もし仮に藤原秀郷が持っていたと言う伝説の宝が現代にまで残っていたら、遠征が凄まじい事になる」

戦史関係を学んでいる東さんはそっち系を学びたいのかと納得する。

私はもしかしたらがあるし、Fateからそっち系を好きになっちゃった口だ……ジャンルの言えばUMAじゃなくてオカルト、伝承や伝説なんかについて知りたいとは思っている。

「なんだそれは？」

「実在してない可能性が高いから淡い期待は抱かせない……因みにだが北欧の伝承の中にはドラえもんのひみつ道具の1つであるグルメテーブル掛けみたいなのが存在するぞ」

「……………」

三輪が私を胡散臭いものを見るような目で見てきている。

フィクションとノンフィクションの境界線が曖昧になっている人だと思ってるんじゃないか？言っておくがホントにあるんだからな。

東さんは手に入れることが出来たらいいなと子供を相手にするような対応をした……実在していたら、どうなるんだろうな。

『兄殿、これからどうするつもりだ？ 私はユーマの元に向かおうと思うのだが』

「……私も一緒に行くか……」

解散！ということで解散していくA級隊長達。

私はこれからどうしようかと考えているとレプリカが声をかけてきた。これからどうするつもりか？……遠征艇を見せてもらえば遠征艇狙いが確実かどうかを見切るこゝとが出来るのだが、遠征艇を狙われる発言はあるし原作ではなんやかんやで無事に守り抜いている。

私の予測と迅の予知の外から何かしらの攻撃を受けると占いに似た以上は対応する手立てが無い。予測しても理外のところから狙われるわけだ。

「敵は多数のトリオン兵で攪乱してボーダー基地に忍び込んで遠征艇を狙う可能性が高い。遠征艇を破壊する担当の近界民を倒すのでなく、大多数のトリオン兵を倒す際に現場で指揮しろと言ってきて……全く……」

東さん居るからいいじゃないか。ボーダー隊員、普段はバカでも戦闘限定で考えて動くことが出来る人多いから要らないだろう。

『兄殿はキド司令に毒を吐いていたな』

「まあ、ある種の疫病神だからな」

『それに関してだがボーダーはむしろ頑張っているのでは？遅かれ早かれ大規模な侵攻はあった筈だ、真に誰が悪いかとなれば襲ってきている国だ』

「レプリカ、正義と悪で認識してない。迷惑か迷惑じゃないかで認識しているんだ」
敵国が襲撃してきているから、こんな事になっている。それについて対応策を取るこ
とが出来ているボーダーはむしろレプリカは考えている。

私はその辺の認識がそもそも間違いだと思っている。

「そもそもで近界民は子供向けのアニメや漫画でよくある子どもでも分かる明確に見える悪が世界を支配して思いのままに操ろう！酒池肉林を楽しもう！って考えじゃない。資源の奪い合いでの戦争をしている。確かにボーダーが居なければ搾取される側、搾取されるままになっていた……ホントの意味で悪いのは近界民と思えなくもないが向こうも向こうで自分の国が生き残る為にやっている事で生きるか死ぬかの生存競争だ」
子供向けのアニメ、それこそプリキュアでよくある感じの敵ならば圧倒的に気が楽だろう。

だが、敵は自分の国が滅びないようにしている。自分の国が豊かになるようにしている。それは間違いなのか？

「生きるか死ぬかの生存競争で、為政者はあらゆる手を尽くす……その方法は間違いか

どうかは分からないんだ」

『それは正しいという標が無いからか?』

「……なんて言えばいいのだろうか……この国には戦国時代と呼ばれる時代があった。北海道と沖繩以外で武将達が争い天下統一を目論んだりしてて、多くの血が流れた。沢山の戦争が起きた。その結果がこの現代の日本だ。レプリカ、お前は遊真と向こうの世界を色々と見たんだろ? 過去に大量の血が流れて生まれた屍の上に成り立っている日本はお前から見てどんな国だ?」

『……豊かで平穏とも取れるな』

「そこに至るまでに大量の血が流れてしまった。戦国時代と幕末と呼ばれた時代がそうだ……私達はなにを犠牲にしてなにを選ぶのか、それを決める事が出来る立ち位置に居るだけに過ぎない。何かを得るために何かを犠牲にしなきゃいけない、希望の代価に犠牲を強いる世界は間違っているなら……それはこの世界のルールそのものが間違いとも言える」

人は一人で生きていけない、なんて言葉をよく聞くがこういう風にも捉えられる。

一人で生きていけない、何故ならば多くの屍の上に犠牲の上に人は生きているのだから。自覚していないだけで決して一人では生きていないんだと。

「戦争に正義と悪は無い、食うか食われるかの生存競争だ……それでも明確にコイツは

『資源の奪い合いでの戦争が行われていて、こちらの世界でも戦場は何処かで確実に生まれる。それが偶然にも日本の三門市だった……兄殿はそう割り切ることが出来るのか』

「出来ていた、だったな……あの日までは」

私の原作知識は徐々に徐々に更新されていく物だ。

元いた世界線でワールドトリガーの原作が進めば自動的に流れてくる非常に厄介なものだが、そこは別にいいんだ。

『あの日は……』

「そこを聞かないでほしい……って、言っても修に聞けば溢してくれる。オフレコ、他には言わないでくれるか？」

『内容による』

「じゃあ、その内容を説明する前に……レプリカ、お前にはトリオン反応のレーダーが搭載されているか？」

『搭載されているが……』

「縦に範囲を広めてくれ……地下にバカでかいエネルギー反応がある」

『……む……む……』

レプリカに縦に範囲を広めてもらえばヒットしたんだろう。地下に眠っているバカ

でかいエネルギー反応を。

それについてレプリカはなんなのか考えているだろうが、私はそこに関して少しだけ触れておく。

「ボーダーは嘗ては秘密の組織だった。その頃にも基地が存在していた。それが玉狛支部だ……この三門市と言う街は人の数が30万人も越えない日本という国を代表する街でもなんでもない街なんだ。秘密の組織がなんやかんやでそのエネルギー源をこちらの世界に三門市に持ち込んだ。ボーダーはそのエネルギー源を利用して大幅に進歩した……私はそこで一つの仮説を立てた」

『……それはいい……』

「……博多、横浜、仙台、いや、ロサンゼルスやニューヨークなんかもある。都会指数が高い、人が多い街は三門市よりも上の街は地球という括りでは100以上ある。そんな中で都会指数が低い三門市を狙った。大規模な侵攻をすればメディアにバレるのだけは確実だ、だったら人が多いところを狙うのは極々普通な事だ。だが、何故か三門市と言う日本の中でもマイナーな街が狙われた。何故か三門市には向こうの世界と色々と交流している秘密の組織、ボーダーの基地があった。ボーダーの出来るエンジニアこと鬼怒田さんは秘密の組織じゃなくなつたボーダーにスカウトされた後に世界中で開かれている門を誘導する装置を作り上げた……私はそのエネルギー源をこちらの世界に

三門市に持ち込んでしまったから、そのエネルギーに反応して門を開いて三門市に現れたと考えている」

もつとも、この世界はワールドトリガーと言う漫画の世界に限りなく似ている世界だからご都合主義の一言で済ませる事が出来るがな。

だがまあ感情によりパワーアップするというよくあるご都合主義的な展開は基本的には無い……修や私と言うイレギュラーが居るが基本的にはご都合主義は無いのがワールドトリガーだと思っている。

もしかしたら地下に眠っている母^{マザー}トリガーのエネルギーに反応してこちらの世界の三門市に現れた可能性はある。

「それでもまあ、割り切ろうと思えば割り切ることは出来る……私自身にそれで直接的な被害があったかと言えば無かった。修が拐われたわけでもない、母さんや父さんが殺されたわけでもない、家を粉々に破壊されたわけでもない。私自身は思うところはあれども割り切ることは出来る」

『その言い方だと、兄殿以外に割り切ることが出来なかったとなるが』

「ああ、そうだ……女の話しよう。その女は才色兼美な女だった、自主的に勉強する事が出来るタイプだった……家庭に恵まれているかどうか？金持ちの家に生まれたわけではないが年収200万ぐらいで貯金がまともに出来ない貧乏な家に生まれたわけで

もない。私立の学校に通っても問題無い経済レベルの家庭に生まれた……小学生時代に馬が合う友達が出来た。塾は異なるが通っており、同じ志望校を選び中学受験をし、友達も含めて見事に合格をした」

『その女性……』

「その女はある時悩みを持った、女の悩みの定番である体重だ。結論から言つて女の体は成長期により女らしくなった。胸が大きくなったことで体重が増加したのだが女は太つてしまったのだと勘違いした。だから運動をしようと思つたのだが女は………そして偶然にもその日、異世界からの侵略者が現れた。突如の事で理解が追いつかないのだが、目の前に広がる光景から女は死を察した。恐怖に怯えた………だが、偶然だ。本当に偶然だった。メロンの鎧を手に入れたバカが偶然にもその女を助けた。メロンの鎧を手に入れたバカは状況から見て大勢の人を助ける事は不可能だと判断した。手に入れた力を完全に理解しているわけでもなかった。先ずは己が生き残る道を探した。とりあえず現場から逃げるかと乗つていたバイクの後ろに女を乗せて家に逃げた。そして母親に無免許運転と女を連れた事を怒られた。特に無免許運転に關しては物凄く怒られた」

「前世でもバイクの運転方法を知らないからサイドエフェクトと感覚だけで運転していた。

あの時の運転は確実に間違つた運転だつたなとバイクの免許を取つてからよく分かることだ。

「女が助かつたのは本当に偶然だつた。偶然だつたが助かつた、女はメロンの鎧を手に入れたバカにお礼を言つた。メロンの鎧を手に入れたバカは偶然な事だからと言つてとりあえずは家族の安否確認等をした方がいいことを言つた。女の両親は無事に生きていた。メロンの鎧を手に入れたバカは『地震や台風にあつたと思つて割り切るんだ』と愚かな事を言つた。平穩な日本が異世界からの侵攻を受けていると言われれば、危険なのは誰でも分かることだが憎悪を抱くのか割り切る事のどちらかしかない。女は人が死んだ、人が拐われた等の沢山の訃報を聞いた。他と比較すれば自分達は無事に生き残る事が出来た。被害らしい被害と言えば買ったばかりの家が壊された事だろう……だから、メロンの鎧を手に入れたバカの言う通り地震や台風にあつたのと同じなのだ」と割り切ろうとした……だが、絶望は始まつたばかりだつた」

あいつにとつてはこれこそが絶望への序章だつた。

「異世界からの侵略者を撃墜した謎の組織が表立つて組織を大きくすると言ひ出し、街に軍事拠点の意味合いでの基地を置くことになつた。その基地はとも大きい基地だつた。だから、その基地を作るために女達が住んでいる土地を明け渡してくれ、勿論その土地の定価の倍の価格で買い取るのだと言ひこちらの世界にこつそりとやつてき

ている異世界からの侵略者を本格的に撃墜する為に頼むと組織は頭を下げた。当然、反対の声だらけだった。この街がどうして戦場にならなければならぬのかと色々と思見が飛び交っていたが政府が謎の組織を政府公認の民間の境界防衛機関として認めた。立ち退き反対だなんだと言っても国が認めたので異論や異議を唱えても不可能であり、基地を作るのに必要な土地は買い取られた。無論、そこで色々とふっかけて定価の3倍ぐらいで買い取らせる上手い奴も居た……殆どは戦場が隣にあるから格安で提供される住宅に住んでいるが、一部は街から出ていき新天地に向かった」

その際にも新天地探して金が動いた云々は聞いているが実際のところはどうかだろうか。

「女の母親は戦争が隣にある街になんて住んでられないという極々常識的な事を言った。新天地探しを考えたが、女の父親に問題があった。女の父親は街の役人だった。街の考えとしてその組織を受け入れる方針であり、女の父親は新たに出来る街の役所と境界防衛機関を繋ぐ部署の人間になる様に命じられた。女の母親は戦争をしている組織に加担するのか？こんな街に居たら私達は死んでしまう！と極々常識的な事を言った。しかし女の父親は仕事だからとなり……言い争いの日々が生まれた。そんな苦しい状況の中で女の通っている学校が再開した。女の友達は全員死んでいない、誰かが拐われた等は無かった。女はそれだけで救われた気分になったがしかし、一同は言った。自分

達はこの街から出ていくのだと……戦争が行われている街に住んでなんかいられないと全員が別々の街に去っていく事を伝えた。そして女の母親は女の父親に夫に対してこれ以上は話し合いが出来ないのだと緑の紙を、離婚届を突きつけた。家も物理的に崩壊した。家庭も崩壊した。友達関係も崩壊した。絶望の底に叩きつけられた彼女だったがメロンの鎧を手に入れたバカの顔が過った。詳しい事をなにか知っているかもしれないのだと話をしにいき、メロンの鎧を手に入れたバカはどうすればいいのか悩んだ。境界防衛機関を潰す方法は知っている、その為の力もある……だが、境界防衛機関が境界防衛機関として無ければ世の中は更に大きく混沌な世界になる……メロンの鎧を手に入れたバカは自分の理外の外に居る人間を見た。女が失った友達を取り戻すのも、家を直すのも、家庭を平穩にするのも無理だ……世界の為に犠牲になってくれ、ハツキリとそう言った」

『言ったのか……その様な事を……』

「ああ、その男が如何にしてバカで愚かなのは分かるだろう？その女はメロンの鎧を手に入れたバカを恨んでストーキングした。女は異世界からの侵略者のせいで軽度だがパニック障害PTSDを持ってしまった。キツカケがあればフラッシュバックで思い出して発作が起きる、メロンの鎧を手に入れたバカは発作が起きた女に対して治そうとは言わずに一緒に居ると言い切った……そして自分が知らない考えようとしていない愚かさをはじ

めて知り人を信じるのでなく疑う事の大事さを学んだ……その内の考えの1つとして、近界民を極東の島国のマイナーな土地に呼び寄せる原因を作ったのは秘密の組織だった頃の境界防衛機関じゃないのか？秘密の組織だった頃の境界防衛機関は向こうの世界の住人に対して色々とコンタクトを取っていた、だったらトリガー技術の凄まじさを利用して日本と言う国と交渉に何故及ばなかったのか？……今更掘り起こしても、意味が無いことが頭に多数過る……メロンの鎧を手に入れたバカの個人の見聞だけ言えば割り切ろうと思えば割り切ることが出来る。でも、色々な事を視る事が出来る眼を持っているのに視えてなかった世界があるんだとなって……バカな男だ」

母トリガーを持つてきたから三門市で大規模な侵攻が起きたのか？と聞きたいが、聞いたらどうなるか自分でも分からない。

もしそうじゃなかったらそれはそれで不運だと思う、運が無かったとしか言えないがもしそうだったら世界の為にほんの少しの犠牲になった。

「メロンの鎧を手に入れたバカは家族や世界を蝕む悪意とは戦える、だが世界の理とは戦うことが出来ない。世界を滅ぼすには世界を1から作れないといけない……その力だけは無い……答だ」

『最後は曖昧だな』

「少なくとも1から10まで全てを理解していないからな……まあ、私の発言はくだら

ない私怨によるものだ」と軽く受け流す程度の認識で構わない。多くの命を救うために少量の犠牲は仕方がない、いちいち意見を聞いていたらキリが無いのだと毒舌の1つだと流す……向こうはその道を選んだんだ……自分から変わる変身が苦手なんだな」

だから仮面ライダー斬月が合っているのだろうな。

「つと、無駄話が過ぎたな……この事に関しては」

『最初から聞かなかつた、だろう……あまり人に話していい話でない事だ。私のデータにもしまわないでおく』

「助かる」

悲しい過去があるから云々の話はあまり好きではないからな。

レプリカは胸の内だけにだけ入れておくことを伝えてくれれば、トリガー開発室前に居る修と遊真に出会う。

「そつちも色々とおつたみたいだな」

「うん……兄さんも忙しいね」

「まあ、そうなるのを覚悟の上で動いているからな」

「オサムのお兄さん、スゴく有能ですからなあ……」

「最初にバカをやらかしたかな……で、B級上位戦を確実に勝てる所謂安定した強さを手に入れる方法は見つかったか？」

「微妙なところだ……なにせ近界民だからな」

「近界民云々よりも敵とかが関係してるんじゃないのか？まあ、そういう側面を見せていないがボーダーは軍隊だからある程度は合理的に動くだろうが」

「……」

近界民関係はあんまり意味ない事を言えば遊真が一瞬だけ固まる。

……
なんだと気になったが、遊真から見えるのは死相だから読み取りづらくて読めない

「兄さん、兄さんの持つてるガイアメモリで傷を治す事が出来る物はあるかな」

「ああ、あるぞ」

第114話

「あるの?」

「ああ、あるぞ」

修は貴虎に怪我を治すトリガーがないのかを聞いた。

その結果、返ってきた答えはある……貴虎は別に隠すことではないが何故そんな事を聞いてきたのか?と考えるのだが、直ぐ隣に遊真がいる。

自身の持つているトリガーはただ戦うだけの道具ではないのだと分かり、もしかして聞いたのだと深く考えていない。この男、身内に対してはとことん甘いのである。

「あらゆる傷病、毒なんかも治す事が出来る……私も過去に何度か使用した事がある、効力は確かだろう」

何故に聞いてきたのか深く問い詰めるところだが、答えを知っているからと答えだけを教える。

傷を治す事が出来るトリガーを持つていた、貴虎はその事を知っていたのだと少しだけ場所を移してボーダー隊員達が飲食しているラウンジで遊真の肉体が死にかけの事

を教えた。無論、他の人には聞かれないようにだ。

「空閑の傷を治したいんだ……そのトリガー、使えないかな」

「……………そうだな……………話を聞いた感じと私の考え通りならば、傷は治るには治る。だが、修の認識している治ると私の認識している治るとは異なることは確かだが。私の認識している治るで治るだろう」

「……………どういう意味？」

「仮に転んでしまつて肘を怪我したとして、その怪我が治ると言われたらどういうイメージだ？」

「傷口が塞がるけど……………もしかして……………」

「ああ、そのもしかしてだ」

「2人だけで納得しないでほしいな、一応はおれの事なんだけど」

貴虎の発言から貴虎が認識している治ると自身の認識している治るは異なるのだと修は理解した。

遊真の意味が分かっているないので2人だけで理解せずに教えてくれと言ってくる。

「遊真の致命傷な傷は治せる……………だが、それは傷口を塞ぐという意味合いで切断された腕や潰された目玉などをトカゲの尻尾の様に生やすという意味合いではない。修の認識している治るは遊真の肉体が五体満足になつていというイメージだが、私のイメー

ジは傷は塞がったが損傷した部位はそのまま、そんな認識だ」

「むっ……………それは困るな……………」

遊真は自分自身が受けた傷をハッキリと覚えている。

目玉やお腹が潰されたりしており、その傷を治す事が出来ても復活する事は出来ない。千佳と修の力になると決めたので邪魔になるのだけはいけない事だ。

「兄さん」

「なんだ？」

「……………迅さんから聞いたんだ。空閑を治す手段があるって」

「……………あのクソグラサンめ……………空閑を完全な意味で世に言う五体満足で治す方法はある」

迅から遊真を治す方法を貴虎が知っている事を教えられたことを伝えれば貴虎は軽く苛つく。

頼れるお兄ちゃんは私なんだと思いなながらも答える。もつとも聞かれていなくても答えていたのだが。

「ただ、高確率で失敗する……………遊真の肉体が治療の負荷に耐え切れずに死ぬ可能性が高い」

『兄殿、いったいなにをするつもりだ？』

「ガイアメモリを使う」

「それは分かっているよ。でも、なんのメモリを使うの？」

「……GとUのメモリを使う」

「ほおほお……GとUってなに？」

「Gはジーン、Uはユニコーンだよ」

『何故その2つのメモリで治せるのだ？』

あまり言いたくない事だが聞かれた限りは答えるしかない。

GのガイアメモリとUのガイアメモリ、この2つのガイアメモリを同時に使うことで遊真の体を治すことが出来る。しかしその過程で掛かる遊真の肉体への負荷で遊真が死ぬ可能性が物凄く高い。だから、貴虎はそれを嫌がっている。本当ならば教えるべきことではないのだが、万が一等を想定しておいて言っていた方がいいと若干だが楽天的だった。レプリカは何故その2つのメモリで治すことが出来るのか問い質す。

「レプリカはユニコーンを知っているか？」

『む……すまないが知らない』

「修は？」

「確か……頭に角が生えた馬だったよね……ユニコーンが怪我を治すのに関係しているの？」

「ああ、関係している。ユニコーンの角にはあらゆる傷病を治したり毒を解毒する力がある。ユニコーンメモリにはその力が秘められていて、私は昔、ヘマをやらかして治療するのが難しすぎるとある病気の原因のウイルスを除去して病気を治した」

ユニコーンの角は傷病を治す逸話が沢山残っている。ユニコーンだけでなく鹿やサルの角が薬の原材料になるなどと言われている。

Uのガイアメモリであるユニコーンのガイアメモリは攻撃に使えば一角獣の角のエネルギーを纏った拳で殴るのだが、病気や怪我を治療する割と万能なガイアメモリだ。

貴虎がどんな感じなんだろうと試しに仮面ライダークロニクルを起動した際にバグスターウイルスの抗体を宿していなかったのでバグスターウイルスに感染し、ゲーム病になった。ゲーム病を治す方法は感染したバグスターウイルスを倒す……エグゼイド本編後には専用の特効薬が生まれていたが、貴虎はその特効薬の作り方など知らない。バグスターウイルスを直接物理的に生物的に倒すしか治す方法は無いのだが……倒すと言う概念が無いバグスターウイルスに感染した為に倒すことが出来ず一か八かの賭けでユニコーンメモリで治した。

「それを使えば遊真の傷は治る……五体満足ではないがな」

『ではGがユーマの損傷した部位を治せると?……ジーンとはどういう意味だ?』

「遺伝子、という意味だ……ジーンメモリは遺伝子操作をする事が出来るメモリなんだ

が、このメモリは色々凶悪なメモリで正直な話、私も扱いに困っている部分もある……このガイアメモリを応用すればその辺の人間を遺伝子組み換えで千佳ちゃんレベルのトリオン器官に改造することが出来る筈だ」

「……………マジ？」

「トリオン器官が目に見えないだけでちゃんと遺伝子として存在している器官だった場合だがな。言っておくがコレだけは絶対に言うな、でなければボーダー隊員全員が黒トリガー並の出力でのアステロイドの雨が降り注ぐ」

トリオン器官を自由自在に弄くる事が可能と言われれば、それは誰しもが求める悪魔の道具だろう。

ただトリオン器官が成長しているな、そう認識する事が不可能なので出来ない。トリオンを測定する装置を使ってトリオン器官が成長している等を確認させつつ遺伝子进行操作するのだが物凄く難しい事だ。トリオンは指紋の様に人によって異なる物で雨取千佳並のトリオン器官だが、雨取千佳と同じトリオンではない。その人のトリオン性質のままトリオン器官のみが雨取千佳並に発達すると割と高度な事が出来る。

「修の遺伝子を弄って男から女に、更に細かな遺伝子を弄くれば小南と同じ顔、血液、指紋等に作り変える事が出来る」

『……………それは、人間が持っているいい力なのか？』

「コレは人間の持つている力ではない、この地球と言う惑星ガイアが記録しているメモリに過ぎない……この星に記録されている事象や現象を引き起こすこと等が出来る。だから、ガイアメモリなんだ」

明らかに人間が持つていい力の領分を越えているのだとレプリカは認識した。

少なくともコレは人間でなく地球という星が持つている力であり人間が持つている力とは領分が異なる。神の領域……と言いたいところだが、ガイアメモリの中にはギリシャの神様であるゼウスの力が宿つているガイアメモリもあるので神の領域すらも越えている。

『凄まじいものだな……』

「話がズレたから戻すぞ……ジーンのメモリを使って遊真の遺伝子を操作して欠損した臓器を蘇生させユニコーンのメモリで傷を治す……コレは同時にやらなければならぬ事だ。出来なくもない事だが、遊真の生身の肉体に負荷を与えなければならぬ。修実は実際にメモリを使ったことがあるから分かると思うが、1つのメモリの力を引き出すマキシマムドライブで結構負荷がかかる。2つのメモリを同時に使うツインマキシマムドライブは使えば確実に気絶する」

「……兄さん、全部同時に使えるんじゃないやなかったっけ？」

「シンプルに私が異常だから出来る芸当だ、意識を失うレベルで肉体に負荷を掛けなけ

ればならない……遊真の生身の肉体を回復させるのにガイアメモリを使う以上は肉体そのものに何らかの負荷を与えなければならない、肉体に負荷をかけないと言う道は無い」

トリガーやスカルに変身してスカルマグナムかトリガーマグナムにユニコーン、マキシマムドライブのスロットにジーンのメモリを導入して回復する回復弾を撃つことが出来るには出来る。その場合は変身者に負荷は掛かるが治療される側の遊真に掛かる負荷は圧倒的に少ないが、生身の肉体の遺伝子構造を弄つての治療なのでかなりの負荷がかかり、死にかけの生身の肉体では耐えられないと貴虎のサイドエフェクトは言っている。

「迅が遊真が治っている未来が視えているらしいが限りなく低い可能性の筈だ、少なくとも私はオススメは出来ない。私のサイドエフェクトでは死ぬ未来が殆どだ」

『なんとかしてユーマの肉体に負荷を与えずに治すことは出来ないだろうか?』
「遊真の肉体への負荷0はそもそも遊真の肉体へと干渉しないのと同義だから諦めてくれ」

どうにかして遊真の肉体を治したいレプリカだが、遊真の肉体への負荷0は色々不可能である。それこそ奇跡を願わなければならない。

修も遊真が死ぬ確率が圧倒的なまでに高い、しかし遊真が元の肉体に戻っている世界

線が存在しているという事は可能性が0ではないと証明しているも同然であり貴虎自身がガイアメモリ等を熟知しているわけでもない。もしかすれば本人が知らない考えていない抜け道があるんじゃないかとは考える。

「……………」

「どうしたの？」

「いや、テーブルの下になにかがあるなど」

他に聞きたいことなどはないのかを聞こうとする貴虎だが、ふと不思議な電磁波がテーブルの下から見えた。

何事だと思えばテーブルの下に一枚の紙が落ちていた。この席に座った際にはこんな物は無かった、それなのに何故か落ちてあつた。

その辺に落ちている紙とは異なる電磁波を出しているので貴虎は紙を拾えば文字が書かれている事に気付く。

「シャシャミヨフエンウミヨシユエシエフシユイジエブリヨメジヨエファンフィ。オジヨボリヤデエエジエシヨボリヤカデヨウンシユイガウ。ミヤジュジャミヤシエメフェロエボリヤフオエミヤファファンバリヤウ。コジヨデエジヨジエロシエメファデユシヨンジヨカメジジヨファデエムフェンブリヨガ。ゴシユダシユロロジヨデユデヨ……………」

「……………何処の国の言語？」

文字を読み上げる貴虎。

遊真は聞いても全くと言ってピンと来ていないのだが貴虎は差出人に心当たりがある。それは自身をワールドトリガーの世界に転生させた存在である。手紙の文字をゆつくりと頭の中で翻訳していき、貴虎はふと後ろを振り向いた。後ろには壁があり壁の上には植物が生えているのだが……………その中にヘルヘイムの果実が一つだけ実っていた。貴虎は直ぐに戦極ドライバーを取り出し、ヘルヘイムの果実をもぎ取った。すると果実の部分以外の草が消滅し……………手に取ったヘルヘイムの果実はドングリロツクシードに成り代わった。

「……………なにがどうあつてドングリか……………まあ、いい……………」

貴虎はドングリロツクシードをポケットに入れた。戦極ドライバーを外した。

突如のことだったのであまり理解する事が出来なかったのだが、貴虎の事だから兄だからなに出てもおかしくはないと聞くのを躊躇った。

「とにかくランク戦を頑張れ……………因みにだが、私は千佳ちゃんを利用した互乗起爆札ボンバーマンという作戦が浮かんだぞ」

説明しよう！互乗起爆札とは雨取千佳のぶつ壊れたトリオン能力で威力に極振りしたメテオラを設置する作戦である！

威力に極振りしたメテオラの爆発範囲を事前に把握しておき、その爆発範囲のギリギリのところにまた威力極振りのメテオラを設置する、そうすることで爆発の衝撃で新たな陣が設置されているところ以外の地形を滅ぼすと言うランク戦でしかやつちやいけないう卑劣な戦術である!! 雨取千佳が人を撃たずに敵を倒す方法はないのか等を貴虎なりに考えた作戦の1つなのだが、初期段階では威力に極振りしたメテオラをそこかしこに設置して、多分反応することが出来ない千佳の最速のライトニングで撃ち抜いて爆発させる作戦だったが、修の蟻地獄を見て蟻地獄以外を全て滅ぼすと言う卑劣な発想を生み出したのである。

※

「全員揃ったな、これより作戦会議をはじめろ」

ここは何処かと聞かれれば近界民と地球の間を繋ぐ次元の狭間的なところにあるガトリンの遠征艇だ。

この遠征艇の今回の船長もとい隊長であるガトリンが今回の遠征に来たメンツが全員揃ったのだと確認が取れたので会議をはじめろ。

ガトリンはアフトラトルからミデン玄界の足止めをしると言われている事を伝えるのだが、その真意はミデン玄界の人間に恨まれてこいとの裏を読んでいた。

「上からの情報だが……コイツを特に用心しろと言われている」

「コレは……玄界の果実？」

上からの情報を教える中で、仮面ライダー斬月 スイカアームズが映し出される。

ウエン・ソーがこの世界独特の果実なのかと気にするが違うのだと映し出されたスイカアームズは映像に切り替わり動き出す。

「ミデン玄界の兵だけ……黒トリガー？」

「いや……トリオン体でなくトリオンで出来た鎧を身に纏っている」

「はあ!?! トリオン体じゃないって何時の時代の戦いッスか?」

用心しろと言われているので黒トリガーだと連想するコスケロ。

ガトリンはトリオン体にすらなっていない、トリオンで出来た鎧を身に纏っている事を伝えればレギンデッツは声を上げる。トリオンで出来た肉体で戦うのが当たり前なのに、トリオンで出来た鎧を身に纏っている。ホントにトリガーが生まれて間もない時代の産物かよと呆れている。

「何処が要注意人物なんですか?」

ヨミがどの辺が要注意人物なのかをガトリンに聞いたがガトリンは数秒だけ無言に

なつて返事をする。

「詳しい詳細は知らない……単独で角付のトリガー使いを倒す事が出来るレベルだと聞いている」

「胡散臭いですね」

「だが、アフトラトルがなにも無いのにコイツを要注意人物だと言うわけがない……なにかはあるのだろうか」

「角付の野郎、なんか隠してるんじゃないのか？」

どの辺が要注意なのか、そのことに関して聞かされていない。

アフトラトルからは角付のトリガー使いを単独で倒す事が出来るレベルのトリガー使いだと聞いていることを伝えればラタリコフは疑う。しかしまあ、なにもないならばこんな事を言つてこない。なにかがあるのだけは確実だが、そのなにかが分かっていない。レギンデッツがアフトラトル側が分かつているのに開示していない情報があるんじゃないかと考える。

「なにかがあると想定して対応策はあるのですか？」

「アフトラトルが果実専用のトリオン兵を開発した……1体だけだが」

ヨミは対応策についてガトリンに聞けばモニターに1つの点が映る。

「1体だけ……単独でアフトラトルの強化トリガー使いを撃墜出来るのにたった1体

だけで充分なのですか？最低でもラービットクラスでなければ」

「だからこそ一體だけに注ぎ込んだ、果実男を倒すのでなく足止めする為のトリオン兵だ……あまりにも偏った性能をしているらしく、ギリギリまで追い詰められない限りは使うなど言われている」

「……果実男対策のトリオン兵なのにギリギリまで追い詰められない限りは使うな……」

果実男を危険視している。今回の任務は撃墜でなく足止めでありアフトラトル的にはこちらの目がガロプラに向いてくれるようにしてる。

果実男を対策しての専用のトリオン兵を作り上げたとも言っているのにそれはギリギリまで追い詰められない限りは使うな……色々と矛盾していたりおかしかったりする。

「いきなりの導入はダメなんですか？」

コスケロはその導入のタイミングを最初から出来ないのかを聞く。

「本当に果実男を対策して作り上げた専用の偏った性能のトリオン兵だった場合、他の玄界の兵が連携を取って撃墜される可能性がある。果実男が出てきて向こうが大胆な防衛から攻めに転じてきた時、その時に奴を足止めしておけばいい……俺達の目的は特定の敵の撃墜ではなく、玄界の足止めだ」

なにか裏があるのだと感じているが、万が一には使えと言われているアフトラトル側から唯一渡されたトリオン兵だ。

使わずに任務を失敗したとは言えない。何処かのタイミングで使っておく。向こうは万が一事が起きたら使えと言うのだから、その時に使えばいい。

「果実男専用のトリオン兵……」

ラタリコフは与えられたトリオン兵がなんなのかを考えるが直ぐにやめる。

果実男、仮面ライダー斬月の情報があまりにも少なすぎる。アフトラトル側が情報制限しておりガロプラに伝えてない事はそこそこあるのだろうが、あまりにも情報が少なすぎる。戦っている映像の1つでもあれば作戦を考える事が出来るのだが戦っている映像が無い。

結論から言って……ハイレインは読んでいる。ガロプラは小国だが優秀な兵士が多い。こちらの世界を足止めしろと言われた場合、自分達に恨みや怒りを買われと言っているのだと理解するのだと理解している。その上でガロプラの遠征部隊はアフトラトル側が納得する事が出来る事をしてくれる……が、が……ハイレインという男は万が一を想定しておくタイプである。

対果実男もとい仮面ライダー斬月専用のトリオン兵と言うのは嘘である……ハイレインがこちらの世界にガロプラを憎んでもらえるように入れた内側からの刺客であつ

た。

第115話

「……絶妙なまでに残念だったな」

「全員がメテオラ常備は分かっていたことだったんだけどね……」

修達玉狛第二は上位に残留した。原作とは異なる展開になっており上手く行くのかと思っただが、流星にそう都合良くいかなかった。

王子隊、二宮隊、香取隊と戦ったのだがトリガー枠に空きがある面々は全員がメテオラを装備してきて焼き払われた。蟻地獄は嵌まる前に位置を特定してメテオラで徹底的に焼き払う。基本的には相手が来なければ攻められないカウンター型の戦術であり、自らで攻めてくるタイプの戦術じゃない。

修自身も蟻地獄の弱点は分かっているのだが修自身が戦うことが出来るという事が1日2日で出来ることではない……結果として言えば負けたには負けたが、大差を開いての敗北ではない。香取隊が点を取れなかったので確実に香取隊が中位に降格で今日の夜に行われる弓場隊、柿崎隊、漆間隊の三つ巴で弓場隊が勝ち上位に上がってくるだろう。

「作戦に限界は無い、千佳ちゃんというカードをどうやって捌くかだ。10%でも力は力だ、もしかしたらそうするかもとフェイクをかけるだけで120%ある。今度からは玉狛第二対策にメテオラを持つと、基本的にはシールド2枚とバググワームでトリガー枠が3つ固定で残り5つが自分の個性が光る。相手の手の内が分からないならば相手に行動をさせる。その行動をこちらの思いのままにする。立派な戦術と言うか腹の読み合いだ」

しようもない事でも1%でも効果があるならば試せばいい。

例えば戦闘中に何かしらの暗号を叫ぶ。意味は分からないがなにかの作戦の指示かと誤認させる。アメフトの世界とかでもある技だ。

腹の読み合い探り合いに関しては修はあまり向いていないタイプの人間だが、向いていないだけであって決して出来ないわけではない。

「貴虎、余計な事を言うのはそこまでよ」

ボーダー関係で力を貸すなど言われているのだが色々アドバイスを送っていることを母さんは指摘してくる。

緊急時に仮面ライダージョーカーになるのとかは認めているのだが、ランク戦関係でアドバイスを送りまくるのはよくない事だ。修が本当の意味で成長するには私の力は何処かで邪魔になる。

〔2〕

〔3〕

〔4〕

〔5〕

〔6〕

「「ダウト！」」

ランク戦の反省会が終わり、出た結論としてはもう1人B級上位陣以上と互角に戦える前衛が欲しいという。

他の面々もB級上位陣と互角に戦える前衛が居れば戦えるのだと判断を下しており、そのもう1人が分かかっていない。

「むきやああああ!! やっぱりズルいわよ! そこ3人!」

本部襲撃があるので出かけずに本部に待機しているのだが暇なのでトランプで遊んでいる。

太刀川さん、私、母さん、小南バイセン、迅、遊真の6名で遊んでおりダウトで勝負しているのだが小南バイセンが異議を申し立てた。

「持っている力を思う存分に使ってなが悪い」

「コナミ先輩、諦めてくれ」

「いや〜……答えを知っちゃってるからさ」

嘘を見抜くサイドエフェクトを持つている遊真！

ありえる未来を断片的だが視る事が出来る迅！

電磁波を共感覚で形に捉えてカードを見抜く私！

この3名を相手にして偽のカードを出さなければいけない……不可能である。

「違うゲームにするわ！そうね……ジジ抜きにしましょう！」

「いいのか、小南？」

「ええ、ジジ抜きなら絶対に負けないわ！だってどれがジジなのか分からないもの！」

ババ抜きだと色々と顔に出してしまうのは流石に自覚している小南パイセン。

トランプを回収してシャッフルを行いカードをランダムに1枚を抜いた。そのカー

ドがなんなのか分からない様にしよう一度カードをシャッフルする。

「太刀川さん、小南、迅、遊真、母さん、私、私、母さん、遊真、迅、小南、太刀川さん、

太刀川さあ!？」

「え!？」

「そういうの無しよ」

くそ……ダメか。シャッフルしているところを母さんに止められた。

何事なのかと思っている小南パイセン、母さんは私の分のトランプをめくれば10が

2枚揃っていた。

「油断も隙もないわね」

「メロンくんさ、ジジ抜きでそれは無いでしょう」

「リアルジョジョをはじめて見たぞ……」

上手い具合に自分の手札が切れるようにカードを弄っていたのだが、母さんに見抜かれた。

私ならば息を吐くようにイカサマをするのだと信じているから、手に取った。迅はこんな所でジジ抜きでイカサマをしても意味は無いと呆れている。トランプを配るのは平等を保つために小南パイセンが配ることになった。

「間に居る時点で小南ちゃん、詰んでるわよね」

小南パイセンのカードを引くのが私、小南パイセンがカードを引く相手は迅。

間に挟まれている時点で詰んでいる。私はどのカードを引けばいいのか分かるし迅はなにがジジなのかを知っている。もう完全に小南パイセンは詰んでいる。

「うう……」

「大富豪にする？7並べにする？」

小南パイセンが敗北して割と涙目になっている。

母さんが他の勝負で遊ぶのかと聞いてくる。

「ところでなんで三雲兄弟の親が居るんだ？」

「太刀川さん、会議の際に言いましたよね。私の予測と迅の予知の範囲外からの攻撃があると。予測しても無理ならば、持っているカードで純粹に1番強いカードを真正面からぶつける。それが私の出した結論です」

「……ということは、おばさん強いのか？」

「さあ？戦えるけども戦ったことはないからよくわからないわ……でも、今日の夜ぐらいに襲撃があるのは確かよ」

「え、なんでそう言い切れるの？」

「コレを使って予知したのよ」

母さんはバインダーを取り出した。バインダーをパカッと開くと中には仮面ライダーエグゼイドで出てくるエナジーアイテムが入っていた。

エナジーアイテムが入っているバインダーでありなんだコレはと見る太刀川さん達、答えを私は知っているので答える。

「ゲームでよくある手に入れたら一時的だがパワーが増すとか素早さが増すとかパワーアップアイテム、その内の1つに一時的だが予知能力を手に入れる予知のアイテムがある」

「メロンくん、オレの存在意義を堂々と無くしに来るね……そんなのあるんだったらな

んで使わないんだ?」

「予知と電磁波認識からの未来予測の処理が出来ないしコレを使えるの私と母さんだけなんだ。やろうと思えば太刀川さん達にも使えるようになるんだが、その過程で高確率で死ぬんだ」

「だからあんたの持つてるトリガー、危険過ぎるでしょ!!」

体内にバグスターウイルスやバグスターウイルスの抗原とか抗体とかを宿していないとエナジーアイテムは使えない。

太刀川さん達にも抗体を作ることが出来るか出来ないかと言えば仮面ライダークロニクルを使えば出来るには出来るのだがその過程でバグスターウイルスと戦わないといけない。ユニコーンのガイアメモリならばバグスターウイルスそのものを除去する事が出来るがその場合だと抗体を作ることが出来ないんだ。

「三雲の奴が持つてるトリガーは3つ、1つは弟に託しもう1つは母親に託し1つは自分の物が……なんで1番強いのを持つていないんだ?」

「……いや、私もそこが謎なんですよ」

T2ガイアメモリはともかく、バグドライダーIIはバグスターウイルスの抗体が無いと使えない。

私を転生させた奴はその件に関しては理解しているのだが、なにかの拍子で母さんに

バグスターウイルスに対する完全なる抗体を手にした。

何処の過程で間違えたかは分からないが何故か母さんにバグスターウイルスの完全なる抗体を宿している。

「まあ、理論上は誰でも使える反則級なトリガーだからな」

「ほお……じゃあ、俺でも使えるのか」

「ええ、条件を満たせば使えますよ……ガシャットロフィーを13個集めれば」

面白い話を聞いたのだと太刀川さんは興味を抱く。

私は12個のガシャットロフィーを見せる、なんだコレはと太刀川さんと小南パイセンは手にするがそれ自体はなんの変哲もない物だ。

「仮面ライダークロニクルのデータに入っている13体の敵を倒す。そうすることで使用可能になる形態があつて、マイティアクシオンX、タドルクエスト、バンバンシューティング、爆走バイク、ゲキツツロボッツ、ドレミファビート、ジェットコンバット、ギリギリチャンバラ、シヤカリキスポーツ、ドラゴナイトハンターZ、パーフェクトノックアウト……そこまでは攻略できたけど最後の1体が倒せなかった」

「最後って13体じゃないの？」

「パーフェクトノックアウトが2つだったのが1つになったから、1つだけでも2つ分

のカウントだ……最後に残ったのだけが倒す事が出来なかったんだ」

語った数と持っているガシヤットロフィーの数が合わないことを指摘する遊真。

パーフェクトノックアウトは2つ分にカウントされており、倒すことに成功しているのだが……最後に残ったのだけが倒せなかった。倒す手段が分からなかったのでユニコーンのガイアメモリを使って無理矢理治療した。

「お前を苦戦させる程の敵か……面白そうだな」

「太刀川さんじゃ天地をひっくり返しても絶対に倒せない相手、色々な意味で相性が悪すぎる……」

「特定の攻撃か核を攻撃しなきゃ攻撃効かない系ってこと？なんかゲームみたいね」

「みたいじゃなくてゲームなんだ。最後の最後に残ったゲームが、ガシヤットロフィーがあまりにも厄介なものなんだ。」

それさえ倒せば私もバグルドライバーツヴァイを使つての仮面ライダークロノスに変身する事が出来るはずだ……多分、今の段階で使えば血を吐きながらの数分間だけ変身を可能とするが私自身がバグスターウィルスに犯され何時もの何分の1かに弱体化していてクロノスのスペックに頼り切った戦闘スタイルになる。

「っ……………」

「遊真、修と千佳ちゃんを呼んできてくれ」

「了解」

「お、敵が来たのか？」

最後のバグスターウイルスをどうすれば倒すことが出来るのか分からない。

私自身に感染させて私自身が倒さなければならぬ都合上、ナルシストじゃないと倒すことが出来ないんだ。

最後のバグスターウイルスについて説明をしようとしたが、迅が反応した。それはつまり敵がやって来たのだと遊真に修達を呼んでくる様に伝えた。

「忍田さん、一応はパターンAで……」

「分かった、予定通りの人員を配置する」

パターンA、本部防衛系だ。規模が小さいというのだけは確かであろうが、私と迅の想定外の攻撃を受ける。

こういう時は原作知識が厄介だなと思いつつもボーダーの屋上に移動して北東を見る。北東側に大きな空間の歪が見えた。門が開く前兆で、暫くすれば巨大な門が開いた。

「……………読み通りか」

今のところは私のサイドエフェクトと原作知識通りに事が運んでいる。

北東側に巨大な門が開かれており、そこから多数のトリオン兵が送られて来ている。

どうしたものかと考えていればボーダーの狙撃手達が屋上に転送された。

「三雲さん、先回りしてたんですか？」

「迅の直ぐ側に居たんだ……余裕で倒せるが数が多いな」

佐鳥が先に私が居たことに驚く。佐鳥でなく今回出動のメンツは大体驚くが迅と一緒だと言えれば納得する。

それよりも敵を確認する。人型のトリオン兵だが、この場にいるメンツならば余裕で倒すことが出来るトリオン兵だが。中にトリオン兵に化けたトリガー使いが居るな。アレをどうやって倒すか、そこがミソになるが……不吉な相は出ていないが占いでは私の予測を上回るなにかが起きる……となると、原作通りに事を運ばせる？……………どうしたものか……………

「兄さん」

「来たか……千佳ちゃんだけが先に転送されて少しだけ心配だったが、大丈夫そうだな」
遊真と修も屋上にやって来た。

修はトリオン体に換装しておらずその手にはジョーカーメモリが握られている。私
はそれを確認した後修にロストドライバーを渡せばロストドライバーを装着する。

『ジョーカー！』

「皆さん、今から僕達は玉狛のトリガーを使いますので間違えて撃たないてください」

ジョーカーメモ리를 로스트 드라이버에 裝填する前に修は警告をしておく。

この言葉をどれだけ信じるのか？玉狛のトリガーという事になっているトリガーみたいなものを使うのが正確な情報だろうが、一応はそういう事になっている。修はジョーカーメモ리를 로스트 드라이버に 裝填して 로스트 드라이버を 傾けた。

『ジョーカー！』

ジョーカーメモ리가 音声を 鳴らせば 修の 顔に 紋様が 浮かび 上がり、修は 仮面 ライダー ジョーカーに 変身した。

前回私がそこそこ 暴れまわったから 斬月は それなりに 知られているが 修が ジョーカーになるところを見るのは はじめて な人達 だらけで 驚く。

特に 荒船さんが 目を 輝かせて いる。今から 戦いが 始まるのだと 言うのに 変なところ で 興奮 しない でほしい と思いつつ も 北東 を 見る。

「……トリオン兵の中に 見た目を トリオン兵 に している トリガー 使い が 隠れている…… 見分け 難い が 早急 に 始末 させて もらう」

『ゲネシスドライバー！』

遠くのものを見て 占う など を して いない ので どれ が 正確 な トリガー 使い が 化けた トリオン兵 なのか は 読めない。

至近距離ならば 確実に 分かって 仕留める ことが 出来る のだが…… 流石 に 400m 以

上あつて更には遮蔽物があるから完全に見切る事は出来ない。

仕方がないなとゲネシスドライバーを起動して腰に装着した。

『メロンエナジー！ロック、オン』

「変身」

『ソーダ……メロンエナジーアームズ』

開幕は斬月・真でいく。

メロンエナジーロックシードを起動すれば空中にジツパーが出現してジツパーが開けばメロンエナジーアームズが出現する。

斬月・真の全身タイツを身に纏いメロンエナジーアームズを被り頭部も装甲に身を纏えば仮面ライダー斬月・真 メロンエナジーアームズに変身する。

「……おれだけなんか浮いてるな」

「いや、空閑が正しいんだ。僕達が変わってるだけで」

遊真も自前の黒トリガーを起動するのだが仮面ライダージョーカーと仮面ライダー斬月・真と比較してインパクトが薄いことを気にする。

修は自分達の方が異常で、遊真の黒トリガー換装が正しい答え……そもそも修はそういう感じの見た目の生物になっていて、私はトリオンで出来た鎧を身に纏っているから方向性が違う。

『兄殿、オサム、2人は通信が出来ないので私が代わりにやろう』

「助かる……早速だが、ここから狙撃しても問題は無いか？」

『その為に狙撃手達を転送したのだが』

「言質は取った」

『創世弓ソニックアロー』

通信が出来ないのでレプリカがちびレプリカを生み出して本部と通話が出来るようにしてくれた。

ここから狙撃しても問題は無いのかどうかを一応は聞いておけば忍田本部長は狙撃の許可をくれたのでソニックアローを出現させて左手で持ちイチゴロックシードを取り出し、イチゴロックシードをソニックアローに装填して構える。

『イチゴチャージ！』

「……まだか」

「おいおいおい、俺達の仕事を奪いに来たのかよ」

イチゴロックシードをソニックアローに装填した状態でソニックアローの矢を放つた。

ソニックアローの矢は空中で巨大なイチゴの形になった後にエネルギーの矢として無数に降り注ぐ。こちらに向かってくるトリオン兵を一度に大量に撃墜する。それを

見てトリオン兵を狙撃するために出て来たのに出番を奪った事を当真さんはツツコミを入れる。

「文句があるならば敵に言ってください……最も、この完成されたゲネシスドライバーの前ではあの程度の雑兵は取るに足らない……修、俺は今ここで矢を放った。狙撃手が居るのだとアピールをしている……敵がこの基地を狙いに来ているならば邪魔な狙撃手を狙いに来る。それ用のトリオン兵を何かしらの形で送りつけてくる。レイジさんと荒船さんを除けば近接戦闘は出来ない……任せても構わないか？」

「……うん、任せてよ」

任せても構わないかどうかの確認をすれば嬉しそうにする修。

なんだかんだ私のことが大好きだなど思いながらもダンデライナーを出して遊真と一緒に乗って地上に降り立つ。

『出来ればだが、先程のイチゴの射撃はやめてほしい』

「だから言質を取ったんだがな……まあ、アレは一回だけで最初に敵の出鼻を挫く為に使ったものだがな」

敵の予想を一回上回る事が出来るのならば、それでいい。相手が自分よりも強い、そう思わせるだけでも十二分な武器になる。

最もその様な真似をしなくても、今回はボーダーの方が上手なんだがな。

「遊真、三輪の鉛レッドバレット弾は使えるか？」

「出来るけど……おれが直接倒せるよ？」

「今回は前回とは異なり質よりも量で攻めてきている、そうならば数で対抗するのがベストだ。送り込まれているトリオン兵にシールド機能が搭載されている確率が高い。今回は近距離の殴り合いでなく銃撃戦がメインになる」

遊真に確認を行えば、それを使わなくても今回の敵は余裕で倒せると言う。

だが、今回の敵は質よりも量で攻めてきていて勝ち方が特殊だ。遊真一人が絶対に落ちない駒になっていたとしても意味は無い。

「俺を信用しろとは言わない、俺は修とは違うダメな奴だから……でも、一応は現場での戦闘を任されている」

「わかった……オサムのお兄さんを信じるよ」

『……向こうの動きが止まったぞ』

「そりや出鼻を挫いたからな……ちようどいい、ベルトを変えるか」

斬月・真が悪いというわけではないが、今回は相手が何かをしてくるのだけは確定だ。

予想の範囲外を越える事が出てくるのならば純粋に強いゲネシスドライバーの斬月・真でなく戦極ドライバーの斬月にする。

ゲネシスドライバーを腰から外せば生身の肉体に戻ることはなくメロンエナジー部

分が無くなり、戦極ドライバーを装着すれば頭の部分や白タイトの部分の部分が少しだけ変化する。

『メロン！ロツクオン！』

「変身」

『ソイヤツ！メロンアームズ！天下御免！』